
なのは + 『風纏うヒーロー（志望）』

黒影翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なのは+『風纏うヒーロー（志望）』

【Nコード】

N3059K

【作者名】

黒影翼

【あらすじ】

オリジナル主人公がとらハ3の面々に武術を習いながら、なのは達を手伝う話です。とらハ3のメンバーが普通に存在していながら士郎が生きているという状態です。なのは勢以外のとらハメンバーは話にメインで関わってくる事はあまりありませんが、主人公はそれなりに関係を持っています。StrikerS入りました。

プロローグ〈闇の中の少年（前書き）

初投稿になります。

主人公の出生等の事情で所々暗くなってしまいましたが、出来るだけ明るく楽しく進めていきたいと思えます。

よろしく願います。

プロローグ 闇の中の少年

プロローグ

とある施設の中、辺りは倒れ付した者の姿で覆われていた。

数はどう見ても数十人、入り口から内部まで全て数えれば100を越えるかも知れない程の人の姿があった。

血に濡れた床から察するに、倒れるものの中には死人もいる…否、死人の方が多いのだろう。

そんな中で、たった一人無傷で立つ女性の姿がある。

彼女は両の剣：小太刀を鞘に納め、意識を研ぎ澄ます。女性は、未だ動く強い殺気が感じられなかった為、軽く息を吐いた。

「これで大体片付いたな…っ！！」

報告に戻ろうとした刹那、得体の知れない感覚…殺気ですらない『何か』を感じてその場を飛びのいた。

女性の髪が数本舞い、先刻まで女性がいた場所には両手に短剣を逆手で持った少年の姿があった。

『何だ…コレは？』

それが少年を見た女性の感想だった。

どう見ても10に届かない少年は、殺気も放たず気配も微弱なまま、女性の首を正確に狙った一閃を放ったのだ。

異常なほどの殺気と共にと言うならば話はわかる。だが、殺す者が

殺気も無いままに必殺の一撃を放ってきたのだ。女性にとってそれが一番の脅威であった。

氷のように冷めた視線を女性に向け、少年は短剣を持って女性と対峙する。

「君は……」

「殺す。」

少年は地を駆ける。女性はその動きに驚愕した。

ここで倒した誰より速く動き、誰より鋭い剣閃を振るう。女性が今まで出会った中で数えても、かなりの強者だろうその少年を止めるには、女性もあまり加減を考慮する事が出来なかった。

「気が引けるが……仕方ない。少し眠ってもらおうよ。」
故に女性は構える。ほぼ『必殺』とも呼べる奥義の構え。

4

御神流・裏

奥義乃参『射抜』

女性……御神美沙斗がモノクロの世界の中で放った突きは、少年の肩を貫いてその身体を吹き飛ばした。

壁に激突して血の跡を残しながらその身体を沈めていく少年。だが、少年の瞳にはそれでも力が残っていた。

「殺さない……殺される。」

「えっ？」

「死んだら何も出来ない……何も……」

最後まで立ち上がるうとする意思を見せたまま、少年は意識を失った。

美沙斗は少年を置いて、人の気配の感じられない最後の部屋を開く。他と同じで殺風景な部屋だった。血の跡が残った檻のような部屋と、散乱した書類が残っている。美沙斗は書類の一枚を手にして……握り潰した。

「……………下衆が。」

美沙斗が握り潰した書類には、

『被験体15は完全な気配の隠蔽を伴った暗殺術を習得、以後、被験体15を完成させる為、残りの被験体の処分も兼ねた実践訓練を行うこととする。』
と書かれていた。

これは、日の当たる世界に戻る事を許され、救い手を目指すと決めた少年の物語。

プロローグ〈闇の中の少年（後書き）

∴ 明るくとか言っておきながらスタートからこんなで済みません。
なのは勢が登場してからは基本的に明るくいきたいと思っ
てます。
シリアス1〜2割位で。
所々で、ステータス等の情報を入れていきたいと思います。

第一話・妹は魔法少女。どうする俺？（前書き）

プロローグと違い、主人公視点です。

基本は主人公視点で行きたいと思います。

プロローグから経緯も無いまま無印に入っています。過去回想の形で所々昔の話を出して行こうと思っています。

第一話・妹は魔法少女。どうする俺？

第一話・妹は魔法少女。どうする俺？

「うん…」

俺こと高町速人は悩んでいた。それと言うのも我がお兄様、人外でいいんじゃない？の高町恭也からの提案が原因だった。

『御神の剣を修めて見る気は無いか？』

提案自体は嬉しかった。それに俺は自身の出生を鑑みて、力を身に着ける事を止めるつもりは無かった。だけど…門外不出の裏の実践剣術。そんなものを習うとなれば、少なくとも途中で投げける事は出来ない。面倒とかそんなふざけた事を言う訳じゃないんだが、ここを離れられない。今更、柄でもない遠慮をする気は無いが、どこか遠く離れる事になってしまえばもはやそれは裏切りに等しい。…まあ、実践訓練とか言って筋トレや模擬戦に付き合ってる時点で片足突っ込んでる気がするが…

「まあ、もう少し考えてみるか。」

全力でヘタレ思考してみた。いや、うん。逃げたとか言っな。夜の鍛錬を終えて帰ろうとしていた所で…

『誰か…』

助けを呼ぶ声がした。…少し遠くから衝撃音が聞こえる。超能力者か何か知らんが、助けてって言われたら助けない訳には行かないよな。

「衝撃音が大きいな…騒ぎになりそうだし早めに片付けないと…」
全速力で駆ける。って言うか、これ人のレベルじゃないな、少なくとも兵器の類を使用してないとこの威力にはならない。そんな事を考えながら走っていると…

文章で形容してはいけなさそうな姿の小学生女子を見た。

夜中とは言え小学生のほうが変質者！？と驚いてみたはいいが、それも一瞬の事で次の瞬間には終わっていた。コスプレ？真っ白な服に赤いリボン。しかも何か見た事ある後姿で…

「とりあえず面白いから携帯携帯。」

「にや！？」

俺が携帯電話を取り出してコスプレ少女を写真に収めると、シャッター音に気づいた少女が振り返る。

「あ、危ないですよ！逃げてください！！」

「速人お兄ちゃん！？」

肩の小動物とコスプレ少女に同時に声をかけられる。うん、動物が喋ったとかコスプレ変質者少女の正体が妹だったとか、驚く事は山ほどあるんだが…

「とりあえずいろいろ置いとこう。…後ろの黒いのってお前らの友達？」

「違います！！！！」

息が合った返答が帰ってくると同時、黒い獣が襲いかかってきた。

俺は妹…なのはを抱えて跳躍する。ちよつとまずいかなーと、苦し紛れに思ってみたら…

「何で胸触るの！！！！」

なのはは手にしている杖で後頭部をぶつ叩いてきた。

「い、痛いぞなのは！俺も兄さんも姉さんもお前をそんな風に育てた覚えはないぞ！！」

「なのはも速人お兄ちゃんがこんな事すると思っただけでして！！！！」

「不可抗力だ妹よ！！」

俺は鍛錬に使っていた小太刀を抜く。ええい、非人間クラスならいっつも試合やってるけど、非人間を相手にするのは初めてだつての！！

「ちよーつときついかな…まあ、お兄ちゃんに任せなさい！！！！」

待ちでいてもしょうがない、全力で止めに行く。突進してきた黒い獣に左手に仕込んだ鋼線を放つ。獣を絡めとった鋼線はその身体に食い込んでいくが…

「やっぱ…塀ぶつ壊すような体当たりかます奴捕まえられる筋力はないよなー。」

空中に吹っ飛んだ俺は、鋼線を手繰り寄せて背中から切りかかった。逆手に構えた小太刀を全力で振り下ろす。手ごたえが妙だったので着地から連続で斬りつけて突きを放った。動きが止まっていた黒い塊は、そのまま霧散するように消えていった。

「しかも実体系じゃなかったのかよ、よかったあ…刀効いて。」
本当に倒せてよかった。効かなかったら幽霊よろしく黒いもやに包まれて呪われたりしてたのだろうか？怖えー…真人間に何とかできるのは実体までですよ？旦那。

と、消えていった黒い塊の中央に青い宝石があった。俺はそれを手に取ろうとして…

「あ、待つてください！なのは、レイジングハートを。」

「え…あ、うん。」

小動物に制されて、なのはが杖の先端を向けると、青い宝石は杖に吸い込まれていった。…なるほど、なのはのほうも本物だったのか。コスプレなんて思って悪かったかな？

「とりあえず離れるぞ。さすがにコレ説明できないしな。」

「へ？あ…」

俺が指差したほうに目を向け呆然とするなのは。そりゃそうだ。だって何処もかしこもクレーターだらけなんだもん。そりゃ呆然とするわ。

「と、とりあえず…ごめんなさーい！！」

謝罪しながら超低速で走り去るなのは。礼儀正しくて何よりダウン。まあ、町の人には悪いが、ここは俺も退散しよう。事情聴取は具合が悪いしな。

家に着いたら、事情聴取の方がマシなんじゃないかと思うようなお兄様の姿があった。

…助けてお姉様！！

念じて向けた視線は、交わる事すらなくあっさり逸らされた。姉さんの薄情者！！

なのは何でも拾ったフェレットの様子が気になって飛び出したのだとか。頭に聞こえてきていた声の事を考えると、それを聞いて飛び出したらあらビックリ魔法少女になっちゃったって感じだろう。

ちなみに、俺はいつもの訓練から帰る際になのはと鉢合わせただけなのでお咎め無し。
やったね！

なのはに羨ましそうな視線を向けられたが、夜中の修行は武者の特権だ。諦める。

気持ちよくさわやかな笑顔を残して、反省させられているのはをおいて、なのはの部屋に向かった。しばらくベットに顔から倒れこんで休む。…さすがに鍛錬後にあんな化物相手にするのは辛い。常識が音を立てて崩れていく。…気がしたけど、まあうちのメンバー

が常識なんて言うだけ無駄なんだろうな。

「…速人お兄ちゃん？どうしてなのはの部屋でベッドにうつ伏せているの？」

「あ、なのは。お説教終わったのか。さすがの兄さんもなのはには甘いなあ。」

せつかく妹が戻ったと言うのにうつ伏せている訳にもいかないので身体を起こしてベッドを背に座る。

「ごまかさないで欲しいの。何で？」

「まあまあ…そう怒るな。生きるか生きるかの死闘を繰り広げて疲れてるんだって。」

さすがにベッドを使われて少々立腹らしいなのは。でも勘弁して欲しい。正直左腕なんか急激に引つ張られたせいか痛くて痛くて…

「あ、あの…回復魔法使いましうか？」

「え、マジ？頼んでいい？」

小動物…ユーノに回復魔法をかけて貰うと、疲れと痛みがゆっくりと引いていった。あっさり全快した身体に感心しつつ、礼を言うておく。

「むー…」

が、肝心の妹君の機嫌はさっぱり回復していませんでした。だろうね！

「はい、分かりましたごめんなさいなのは様。お願いですからご機嫌を治して下さいませ。」

全力で平謝りすると、なのはもようやく許しをくれた。機嫌は若干悪かったが。

「で、なのはの部屋に来てた理由だけど…あんな恥ずかしい格好で何やってたの？」

「にゃ！？は、恥ずかしいってひどい！ー！」

即刻怒りをあおってしまったようだ。い、いかん。弄りやすいからつい…

「いや、格好は良かったんだウン。ヒロインバンザイ！」

「今更信用できないのー!!」

「そうじゃなくて!いくら変身って言ってもいちいち路上で脱ぐのは教育上良くないと思うんです。はい!」

俺が必死に弁解する。と、なのはははピタリと固まってしまった。

「な、あ、アレが見えたんですか!?!」

「ま、一瞬だったけどしつかり。あと敬語じゃなくてもいいぞユーノ。」

なのはが固まってる間にユーノから聞いたが、どうやら来ている服から変身後: バリアジャケットとか言うのを来た姿になるまでに一瞬あるらしい。普通視認できないらようだが、どうやら普段から『当たったら死ぬよねコレ』って言う真剣で化物お兄様と訓練していたおかげで見られたようだ。

「: ちえ、黙っておけばずっと見れたのに。」

「お!・に!・い!・ちや!・ん!」

「おお!? 立ち直ったのか!?!」

と、なのはは俺の背後に回りこみ後ろから首に手をかける。

「なのはは! そーゆーのは! いけないと! 思うんだけど!」

「わ、分かったから首: 首を絞め:」

意識が遠のいて目を閉じそうになった所でようやく開放された。: 将来とんでもない鬼になつたりしないよね? お兄ちゃん心配ですよー。

「: で、本題に戻る訳だけど、アレ何? キミ誰? 俺誰?」

「とりあえず: 貴方は速人さんですね。」

俺のボケは突っ込みを受ける事も無く淡々と返された。ああ、芸人気質な知り合いが惜しい!! 兄さんは人をからかうのが趣味だから俺と相性はいいが:

方向性がそれた思考を整える。で、ジュエルシードについての説明を受けた。

曰く、スクライア一族と言う遺跡発掘集団が見つけたらしい。
曰く、航行中にトラブってこの世界に21個のジュエルシードを落
としてしまったらしい。
曰く、ジュエルシードは願いに反応して強大な力を発揮するらしい。
曰く、その危険物を回収する為に単身乗り込んできて返り討ちにあ
つたらしい。

…泣かせる話だなあ。って言うかそんな男気発揮するのがこんな子
供って…俺や兄さんじゃないんだからそんな寂しい話無いだろ。

「よしよしユーノ、後は俺に任せとけ。コレでも俺は勇者パーティ
ーの盗賊ぐらゐの戦闘力がある!!」

「速人お兄ちゃん、それは力弱くて打たれ弱いから正直どうかと思
うの…」

グサリと胸に突き刺さる一言を返してくれた妹。酷い…頑張つて黒
いのやつつけたじゃん俺…

「ってアレ?ユーノ、さっきの黒い化物は思念体って言ってたよな
?何で剣で斬れたんだ?」

除霊の技とかはあるらしいが使い方分からないし、魔法も使えない
俺がどうにかできた事がおかしい。が、ユーノは軽く頷くと…

『貴方にも魔法を使う才能があるからだと思います。この声が聞こ
えるでしょう?』

「あ、この声…って事はお前の声だったのか。…そう言うのって見
ただけで分かるのか?」

だとしたら…嫌だ。リーダー身体にくっつけて動いてるようなもの
だ。俺の技意味無いじゃん!と、思っていたがユーノは首を振っ
て否定した。

「速人さんは…」

「あ、そっぴや速人でいいぞ。敬語もいらね。」

いきなり言われたユーノは口ごもるが、脳内で練習したのかすぐに
順応してくれた。

「速人は剣を振った時に魔力を放出してたんだ。それが利いたんだと思う。」

「そっか…俺魔法使えるのか…魔法怪盗ハヤト三世、狙った獲物は逃がさない！！なあって言ってみたりして。」

「お兄ちゃん、また関係ない事考えてるでしょ。」

「お前はエスパーか!？」

「なのはに睨まれて萎縮する俺。…ってまで！兄の威厳が無いぞ！！慌ててふんぞり返って主導権をとりにかかる。」

「とにかくだ、そうなるかと残りを探さなきゃならない訳だからどうやって探すかだよな。」

「見つける度におうちとか道路とか壊しちゃ皆の迷惑になっちゃうしね。」

「考慮事項をわざわざ挙げてくれるなのは。優しい子で何よりだ。」

「あ、あの…そこまでしていただく訳にはいきません。僕の責任ですから僕がブツ!!」

何か言いかけてたフェレット（と言う種類らしい）ユーノの顔面にてこピンをかましてやった。鼻の辺りを押さえて転げまわるユーノ。すばらしいリアクション！とか思ってたら後頭部に平手打ちをかまされた。

「ユーノ君いじめない!!」

「じゃあなのははユーノ一人旅賛成派？」

「違うけど…言えはいいと思う。物凄い痛そうだよ。」

「ようやっとの思いで動きを止めて痛みを堪えているらしいユーノ。」

「…サイズ差補正つえー。」

「ワリ、一応加減はしたんだが。」

「い…いや…大丈夫…」

俺はまだ悶えているユーノを摘み上げて、目線を合わせる。

「デコピン一発で身悶える宿無し文無し異世界野生小動物をたつた一匹放置して、世界崩壊引き起こしかねない代物のある町でボケーっとしてられる訳ないだろ？事が片付くまで俺がキツチリ守ってや

るよ。」

「あ…ありがとう…」

笑顔で告げると嬉しかったのかそれなりに明るい声が返ってくる。うむ、喜んでくれて何よりだ。

「私も手伝つよ!!」

と…ある意味予想通りの返答をしてくれる妹君。こーなると頑固だからねえ…うちの妹は。

「エー…」

「何で嫌そうな呟きを漏らすの!？」

俺の声から滲み出る不満を感じ取ったなのはが講義してくる。とは言え実際不満な訳ですよ。俺は一応念押しのためにいい例題を探す。

…身近にいたな、素晴らしく分かり易いのが。

「なのは、お前分かってるのか?運動音痴で小学生の一般人が、魔法が使えるからって戦闘に出る。それは…」

「…それは?」

わざわざ念押しのために言葉を区切ると、なのはは軽くのどを鳴らす。

「万能包丁を手に入れたからって理由で嬉々として『料理に走る姉さん』と同じ位危険だと言う事を。」

「うっ!」

たとえばバツチリ理解できたのか、なのはは思いつき顔を顰めた。姉さんの作る料理は歯噛みしながら吐き気を堪えてようやく飲み込める代物だからな、死なないだけマシだが、危険には変わらない。

「で、でも…」

「ま、レイジングハートの持ち主はお前だし、俺の後ろについてきて石を拾う位はいい。後はまあ…やりたかったら試合で俺に一発当ててみな。それまで前は却下。」

「…うん。」

不満たらたら顔で承諾するのは。俺としては単純にやりたいと言ってくれば手伝えるんだが…同じ家にいながら御神の鍛錬をしてない以上、戦闘が好きな訳じゃないだろう。だったら責任感とか義務感とか、そんなものが先立ってるだけだ。

それじゃ、なのは自身の幸せとは違う。

「フー訳だから、俺が前衛、対象の撃破。なのはが封印…って感じでもいいな？後は町への被害を何とか止めたいんだが…」

「僕が結界を張るよ。その中の戦いは周囲に被害が出ない。」

「そか、んじゃ…」

そんな感じで明日からの行動指針を決めた後、俺は部屋へ戻った。

魔法少女…か。丁度俺の方も夢を叶えるチャンスかもな。

俺の夢、それはバッドエンドをぶち壊せるようなヒーローになる事。俺と同じ人目に晒すべきでない力を使いながら俺を救ってくれて、大切な誰かを守るために戦える御神の人達のように、あんな場所で身に着けた力でも誰かの為に使えるならそれほど素晴らしい事はない。

だから…やってやる。この騒動を何事もなく乗り切って、なのはやユーノが笑顔で騒動の終わりを迎えられるよう全力で。

第一話・妹は魔法少女。どうする俺？（後書き）

人物紹介

高町速人

年齢：なのはのいつこ上。

服装：黒一色のズボンに白一色の服。スポーツシューズに鋼線を仕込んだ黒手袋。

趣味：日曜朝の男子向けアニメ、RPGゲーム。

学校：なのはとは別の一般的学校。

装備：小太刀2刀、五指鋼線手袋2つ。

戦闘スタイル：我流＋見て盗んだ御神の剣技＋格闘技を魔力強化しながら行使

魔力ランク：A

第二話・心配なのはお互い様？（前書き）

神社です。場所が場所なんで知ってる人は知ってる方がちょっと出ます。

第二話・心配なのはお互い様？

第二話・心配なのはお互い様？

早朝訓練の時間がやってきた。互いに木刀を手にして斬りあう俺と姉さん。兄さんは、大怪我で剣士として全力を振るえなくなった父さんの代わりに姉さんの鍛錬を見ているようで、御神の剣士としては鍛錬していない俺は、おまけのような形で打ち合っていた。

「ふっ！」

「はっ！」

二刀の木刀が火花を散らす。…俺と美由紀姉さんの練習の場合、コレは比喻なんだけど、恭也兄さんや赤星先輩あたりが本気で打ち合ったら木刀焦げるんだよな。一回、本気で火がついてびびった事がある。

と、余計な事を考える暇もなく、姉さんが『貫』を放つ。凄い腕だとは思うけど、俺相手にコレは失敗だ！

「っ！！！」

回避、防御をすり抜ける『貫』。確かに実践では便利なんだが、俺は特別見切りが上手い。…って言うか、俺って食らったらアウトな子供だし、そう簡単に食らえないんだよな。

突き出された腕を取って投げた。摘んだかな？…とか思ってたら左肩に衝撃が走った。

「そこまでだな。」

受身を取った姉さんが立ち上がった所で、兄さんの制止の声がした。俺は打たれた左肩を抑える。…投げた際に打ち込まれたらしい。空中でよくそんな真似ができたもんだ。

「美由紀、お前の負けだ。」

「えーっ？」

姉さんが不満の声を上げる。が、兄さんは目もくれずに俺を睨んできた。

「斬れば終わりだったものをどうして投げる？」

「や、格闘戦の修練もかねて。使う機会が無いと練習も出来ないしっい…。」

「油断して勝てる相手に負けていては話にならない。」

十分理解している。が、本番で『あ、失敗した』とか言えない以上、練習の内いろいろな試しておきたかっただけなのだが…兄さん的にはNGらしい。で、打ち込んだ筈なのに敗北判定貰った姉さんとは言つと…

「お前はそもそも防御を抜く筈の『貫』を、かわされる所か捕まってる時点で話にならない。」

「あう…すみません…。」

バツサリと冷たいお叱りを受けていた。自覚はあつたらしくしょんぼりとしてしまう姉さん。可愛いなあ…って、失礼か。

と、余裕にいられるのはそこまでだった。

「次は俺とやるぞ。」

「へっ？ちよ…マジ？」

愛弟子相手に練習とか言つて加減したのが癪に障ったのか、いつもの2割増しボコボコにされました。

ジュエルシード思念体のほうが数倍ラクだこんちくしょう（泣）

鍛錬しようが学校は普通にある訳で…

全身痣だらけで口の端まで切れていたからだろうか？会う奴会う奴驚いてこつちを見る。…兄さん容赦なさ過ぎ。

「お前さあ…どっか相談したほうが良くないかそれ？この間ニユースでやってたぞ？ドメスティックバイオレンスって。」

「平気だ。」

隣の席に座る生徒に話しかけられたが一蹴した。家の事があんまり知れても良くないし、ニユースの家庭内暴力と一緒にされても困る。少し血の味がするが美味しい食事を片手に学校生活なんて、少し前の俺からすれば考える事すら出来ない生活なんだ。感謝感激する事はあっても訴えるなんてありえない。

…とは言えまあ、一般の方々の反応から察するに、間違いなく異常なんだろうが。

そして、退屈な学校生活が始まる。…今まではそうだったが、今日は事情が違った。

どーでもいい授業中に魔力の扱いを覚える。

魔力を使用しなければ、思念体へのダメージは無い。当面魔法は多用する気も無いが、空を飛べる相手もいる事を考えると対策は考えなければならぬ。授業を聞き流しながら魔力を操作する。魔法の資質が無いものは気づかないし別にダダ漏れでも関係ないが、敵が魔導師の場合はコレをまったく感じさせないレベルまで抑えなければ

ばならない。

「難しいな……」

何しろ、今まで一度だって扱った事が無いものだ。そんなものの操作に集中して……

「お前わかんねーの？」

いきなり話しかけられた俺は魔力の操作を止め、黒板の分数を見た。

チヨイ待て、誰が分数ぐらい判らないって？

小学校で俺が解けない問題なんて国語の読書感想位だったの。

「ちよつと難しかったかな？」

「は、はい……すみません……」

作戦、地形の理解などの関係上、当の昔に専門分野まで済ませてある数学。その基礎の基礎のレベルの問題に対して難しい発言。とは言え、そんな訳ないと言い切ってしまうえば授業無視してたのは明白。俺は周囲に笑われながら俯くしかなかった。

「くそー偉い目にあつた……」

人目に漏れない所まで来た俺は、いつもの鍛錬を始める。中国武術と空手のあわせ技である。流す、捌く技術のために中国武術を、打つ、蹴るの為に空手をそれぞれ教わり、技を鍛えている。

何故この二つなのかと言うと、ちよつと兄さんを敬愛している二人が兄さんの高校で、暇を見て教われるよう頼んだからだ。教えてくれている二人には不義理なようで悪いが、何を修めると言う事にこだわりは無いので、出来るならいい所だけ掻つ攫つて上手く併用していきたかった。一回、併用実験のつもりで空手の方の先生に、関節をきめながら密着状態での急所への乱打を使ったら、『俺じゃなか

「つたら死んでた」と怒られた。人に見られて困る木刀や小太刀を持ち歩いていないと練習できない技と違い、昏間でも出来るので重宝する。

「ふ…っ!!」

やわらかく投げた中身入りのスチール缶を空中で蹴る。大きく凹んだ缶は中身を撒き散らしながら壁に激突した。…『徹』や『貫』は技術だから剣以外でも使えていい。欲を言えばもうちょっと力が欲しい所だけど、それは魔法で何とかできるだろう。正確な魔法の使い方はユーノ大先生に聞かないと分からないので、今は型の訓練に精を出そう。

「…っで、何で、俺のいない所で巻き込まれてるんだあっ!!」

ユーノに念話で報告を受けた俺は、全力で現地に向かって突っ走っていた。何でも、犬を連れていた人が神社にいて、その犬がジユエルシードを発動させたらしい。おまけになのはがさつさと向かったとか。

「ああもうつ!世の中上手いかねー!!」

なのは単体で神社にいる事もそうだが、神社には『本物』の巫女さんがいる。兄さんと同じ学校だし、変に気づかれたら魔法の事がばれる。なのはだってまだ戦闘超初心者だし、とっとと現地に行かないと!!

「なのは!!」

神社に着いた俺が見たのは、明らかにサイズのおかしい犬を障壁で防いでいるなのはの姿だった。アレは、取り込まれてるんだよ…な?

願いで動くと言うなら一番確実なのは、犬の息の根を止める事だが…

「兄さんには甘いと怒られそうだが…なのはの前だし何とか無傷で確保してみるか。」

俺はなのはの横をすり抜けると、左手から鋼線を放つ。兄さん達の使うそれと同じ素材だが、計五本をそれぞれの指を使用して動かす。網状にして対象を捕縛して、ユーノから教わっておいた『魔力による強化』を使う。質量兵器の使用禁止と言う規則のせいか、あまり使われないらしい物質の強化。ついでに身体能力も上げてはいるが…

「このサイズの化物を…いつまでも捕まえとくのは辛いかっ！」
かなり強固な鋼線に、超人的な身体能力を持つてしても、抑えきるのは至難の業だった。が、俺が捕らえただけで十分だったのか、障壁を解いたなのははレイジングハートを構えていた。

「なのは！今の内に封印を！」

「うん！！」

ユーノ指揮下の元放たれたなのはの封印魔法によって、どうにか犬は元に戻ってくれた。

「ふー…どうにかなったな。」

「速人お兄ちゃん、ちよつとお話があるんだけど…」

一息吐いてなのはに呼ばれる。振り向くと、何かマジモードの妹の姿があった。相談ならいくらでも乗るんだが、いかんせん場所（いつ人が通るか判らん神社）と状況（魔法少女&帯刀少年）が悪すぎる。

「家でな。誰が聞いてるか分かったもんじゃな」

「くうん？」

いきなりゲームオーバーかいつ！見つかんの速すぎるわ！！

聞きなれた声に視線を移すと、そこには狐の姿があった。足音が聞こえて、狐を追ってきたらしい巫女さんの姿が見える。

ああ…なんで一番見つかったはずの巫女さんに…ってモノホンの能力者だししょうがないか。

「速人君になのはちゃん？二人ともどうしたんですか？それにその人は…」

倒れている女性を見る巫女：神咲さん。本物の霊払いと傷の治癒が出来るとか聞いている。彼女と犬の事は神咲さんに任せたい。問題はこの事をどうやって口止めしようか…と、狐の久遠がユーノをじつと見つめていた。ああ、コレでも不思議系狐だもんな、ユーノがただの小動物じゃない事を察したか。

「ユーちゃん！？あ、えと、その…」

ユーノと久遠を見比べて慌てるのは。まあ気持ちは分かる。久遠の事情はなのも知ってる事だし、気づかれたらどうしようと思ってるんだろう。

妹よ、気持ちはわかるがすでに手遅れだ。久遠はたぶん話しかける前から察してる。

「えっと…仮装趣味にはまったのはに付き合って真剣持って出てきてちょっと技見せてたんですよ。兄さん達はこういう事絶対しないから。」

「にや！？あ、え、あ、はい！か、可愛いですか？」

俺の咄嗟の言い訳に戸惑いながら合わせてくれるのは。

よし！ポケと突っ込みを散々日常で繰り返した経験が役に立った！！

「は、はあ…」

「けど、こんな物持って出歩いてたから驚いちゃったらしくて…気が立って襲い掛かってきた犬を振り返り討ちにして寝かせた所です。」

つて倒れた犬を指差してみれば…子犬じゃん！ダウト！！やつちやつた俺！？

「ら、乱暴はよくないですよ。」

神咲さんに怒られて頭を下げる。セーフ！聡い人じゃなくて本当助かった！

俺は神咲さんにちょっと近づいて、耳元に顔を寄せる。

「…兄さん達には黙っててもらえませんか？後生ですから。」

「分かりました。でも、危ないもので遊ぶのは良くないですよ。」
ちよつと怒られたけど承諾してくれた神咲さん。良かった。後は…

「くうん…」

俺を見つめてくる久遠への説明だな。取り合えずその場は神咲さんに任せて俺たちは帰路についた。久遠には夜にでも話せばいいだろう。

家まで戻って夕食を終え、なのはの部屋に集まる。と、神社で話の途中だったことを思い出した。

「そついや話があるとか言ってたな？」

なのはが話しやすいように振ってやると、暗い顔を見せながらも話をしてくれた。

「…なのはは速人お兄ちゃんのほうが危ないと思うの。」

真剣な目で訴えかけてくるなのは。

ありゃ？俺舐められてる？

「お兄ちゃんは恭也お兄ちゃんとかと訓練してる位だし強いのは知ってるよ？でもレイジングハートみたいなデバイスが無いからバリアジャケットもないし、身体を強く出来ても危ないよ。」
暗い表情の癒えないなのは。

あー…なるほど。生身である巨大犬の攻撃かわして普通の武器で力

比べたから心配してるのか。

「はっはっは…こんにやろうー!」

「にゃあああつ!？」

俺は盛大に笑ってなのはの頭を引っ掴んで揺さぶった。涙目になるのは。相変わらず可愛いもんだなあ。

「お前それ兄さん達に言えるか？弱いから引っ込んでるって。」

「う…」

なのはも真剣での訓練はともかく、それ以外の出鱈目な戦闘能力を知っている。自分が魔法を使えるからと言う理由だけであるの兄さん達を下に見るのはまず無理だろう。

俺は元からそんな兄さん達とやりあえるくらいの腕はある。そこに強化魔法があるんだから心配される義理は無い。

「心配すんなって。」

「でも…」

不安が抜けないなのは。一回父さんが大怪我してるし、心配するのは分かるんだが…

「…うし、そんなに心配なら明日試合やってみるか？」

「へ？」

ちょうど、なのはが本格的に前に出るのは俺に一撃当てたらって事にもなってる事だし、ここらでお兄様のスーパーな戦闘能力を見せてやろう。

「結界張って中で試合やろう。俺の全力って奴を見せてやるよ。いか？ユーノ。」

「あ、うん。」

ユーノの承諾を得てなのはを見る。なのはは少し躊躇ってから頷いた。

第二話・心配なのはお互い様？（後書き）

評価、登録ありがとうございます！

ちよつとだけ関わってくる可能性があるのとら八知らない人の為に簡易解説。

神咲 那美

神社にいる巫女さん。

霊力を使用する、幽霊が被える本職で、回復能力も持つ。

本編中で恭也と忍の嘘話にアツサリだまされていたので、今回主人公はそれで切り抜けさせました。

久遠

妖狐。300歳位らしい。

狐デフォで、子供型や大人型（耳&尻尾付き）に変身できる。

雷を操る事が出来て、本気だとかなり強い。

第三話・天才魔法少女 対 元天才暗殺者（前書き）

魔法使用の対人初戦闘（試合）です。

第三話・天才魔法少女 対 元天才暗殺者

第三話・天才魔法少女 対 元天才暗殺者

「…よ。」
夜の訓練に出た俺の元に、久遠が現れた。一瞬の間を置いて、久遠は子供の姿に変化した。

さすが妖狐。瞬間変身能力は相変わらずか。

つたない言葉遣いで会話する久遠。いつも可愛いんだが、今回ちょっとまじめな雰囲気を見せる。

「あのイタチ…動物じゃない。」

予想通り、感じていたらしい。とは言えその場で神咲さんにはらさなかつたあたりは空気読んでくれたんだろう。

「そうだな、魔法生物って奴みたいで俺たちと話す事も出来るんだ。」

久遠に正体を知ってる事を告げると、ちょっと安心したように微笑んだ。

「と言う訳で、あんまり心配するな。ちょっと事件に関わってるけど戦ってるのはもっぱら俺だし。」

俺がついてるんだから安心してくれるだろう。と、思ってたんだ…
うん。

「速人：大丈夫？」

思いっきり心配された。

あ、あれ？俺ひよつとして頼りない？なのはにも心配されるし…ま、まあ未だにヒーロー大好きな小学生男子なんて信用無いのも判らんでもないけど、それにしたって強いのに…

「あ、あのな？俺も修行積んでるんですけど？」

「でも恭也より弱い。」

「ぐっ！」

それを言われるとちよつとどうにも返答できない。確かに魔法強化使えるけど、ネタが割れた状態で真正面から戦い合ったら強化使っても勝てる自信が…

と、ちよつと凹んでいると、久遠が俺の眼前に近づいてきていた。

「久遠も手伝う。」

「あ…！」

久遠から笑顔で手伝いを持ちかけられた。申し出自体は嬉しかった。だが、ジュエルシードは願いに反応して取り付く性質を持つてる。

もし、この町最強と言っても過言じゃない久遠がそんなもんに取り込まれたら…

子犬 犬獣

久遠（想定不能）

ウン無理、勝てない。絶対無理。改造コード並。

ここはジュエルシードに絶対に近づかないようにして貰うべきだろう。

「ちよつと…まずい。」

「そう…なの？」

悲しそうな久遠。なのはの友達だし、手伝えないのが心苦しいのだろう。だけど勘弁してもらおうしかない。

そうだな、一応少しだけ頼んでおこう。何にも知らずにジュエルシードに近づかれても困るし、思念体とかに巻き込まれてなのはに万が一の事があっても嫌だし。

「青い石に近づかない、なのはが本当に危険な時に助けてくれる。」

その二つだけ頼んでもいいか？」

「青い石？判った。」

笑顔で返事をしてくれた久遠。大変物分りのいい久遠に俺はその時は安心していた。

…後からどんな事になるかも知らずに。

で、翌日放課後。

「…デイバインシューター！！」

二つの光弾が迫ってくる。俺はそれを一振りで切り裂いた。

「どしたー？終わりかー？」

「っ…レイジングハート！！」

『デイバインバスター』

光の砲撃が迫ってくる。…やっばいな、こりゃ。魔法でもないと対処できない訳だ。

昨日の約束通り、俺となのはは森の中に来て、ユーノに張ってもらった結果の中で試合をやっていた。とはいえ空中からの射撃系攻撃の連打は正直きつい。…飛行に射撃って、いつの間に習得してやがったこんな技。

魔力弾は問題ないにしてもこんな広範囲を網羅する砲撃を地上を走るだけでよけられる筈も無い。

普通なら。

魔力強化を施した状態の身体能力で、遠めの位置にある木に鋼線を巻きつけ、引つ張ると同時に跳ぶ。一気にその場を離れた俺は、自分のもといいた場所が光に包まれるのを見ていた。あぶねー…確かに当たったらずいわありや。

集中力には自信のある(ってか無かったら家のメンツと修行は無理)俺でさえ、未だに魔力の扱い微妙なのに、補助つきとは言えあんな魔法ポンポンぶつ放すってどんだけ魔法の才能あるんだアイツ？

とは言えそこは戦闘経験の差。砲撃終わりまで油断しきってるのは向かって全力で跳躍。なのはに近づいた俺は、そのまま鋼線で足を絡めとった。

「え？なっ!？」

鋼線を引き寄せる事で一気に距離を詰める。そのまま斬りかかろうとしたが、

「プロテクション!」

なのはの声と共に桜色の光の壁が出現した。防御も自在か、恐れ入るな。だけど…

『徹』に盾の意味はない。

「せ……りやあつ……！」

魔力強化、その他諸々全力で『徹』を放つ。プロテクション越しに突き抜けた衝撃は、プロテクションを発生させているレイジングハート本体に伝わり……

「あつ……！」

大した握力も無いのははレイジングハートを取り落とした。

……アレ？

Q：デバイスとは？

A：魔法を使う際の補助として用いる道具である。

「お前、レイジングハート無しで飛べる？」

「え？あ……」

まっさかさまに落ちていくレイジングハート。当然のようになのはの浮遊魔法も切れて……

「にやあああああつ……！」

「あつはつは……！やべええええつ……！」

互いに落ちていく俺達。いやコレは考えてなかったわ！

高さ的には全力跳躍＋約鋼線の長さ。重量は＋なのは分。ちよつと…結構まずい。

取り合えずなのはの身体を抱え、まだ振るっていない右の鋼線を…

空一面の雲。…何処にかけると？

「上に何も無いのにどうしろってんだああっ！！」

ギリギリで木に絡ませてぶら下がるしかない。右腕は間違いなくいられるだろうが、なのはがただじゃすまない以上やるしか…

「つとあ？」

下を見れば、何か緑色の魔方陣があつて…やわらかく受け止められた。魔方陣の発生元を見れば、ユーノの姿があつた。

「ビックリしたよ二人とも…」

我等が救世主、魔法の大先生ユーノ様。こんな魔法もあるんだな、助かってよかった。

「いや、助かった。」

「はーっ…はーっ…」

余裕で答える俺の腕の中でなのはは息を切らして青ざめていた。…まあ、あんな高さからノーロープバンジーやらされて平気なわけねーよな。

「大丈夫か？」

「う、うん…」

なのはを立たせて傍にあるレイジングハートを拾って渡す。

「これでわかつたろ？俺のが強い！」

「む…でもギリギリだったじゃない。」

何気に負けず嫌いのなのはは納得いかないと言った表情で俺を見る。…むう、地上戦なら砲撃だろうがなんだろうが余裕なんだが、空か

ら打たれ放題って言うのはちょっときついな。

「ま、空とか遠いところがきついのは実感した。と言う訳でなのはそつちを頼む。地上の前衛は俺がやる。」

「あ、うん！」

担当を割り振られたのが嬉しかったのか、満面の笑みを見せるのは。さすがに空中にいて負けた事で俺の実力も信用してくれたのか、特に心配しているそぶりも無い。

「前衛、後衛攻撃、後衛サポート、案外いいメンバーかもな。」

言いながらユーノに視線をやると。忘れてなかったんだ…と呟きながら若干感動していた。そっぴやユーノの手伝いでジユエルシード集めてるのに、小動物だからって空気扱いし過ぎたか？

悪いユーノ、知らん技術におっかなびっくりで俺等も結構いっぱいいっぱいなんだ。

第三話・天才魔法少女 対 元天才暗殺者（後書き）

次回フェイト登場させます。

ここまででは原作でも派手な事してなかったから、ここからは戦闘も派手に出来るかと思えます。

…描写能力が追いつけば（汗）

第四話・なのはのお友達『前編』(前書き)

今回なのは視点が入ります。

第四話・なのはのお友達『前編』

第四話・なのはのお友達『前編』

ジュエルシードを集めながら、魔法の鍛錬をするなのは。デバイスを持ってない上に魔法より体術修行のほうが長い俺とは、あつという間に差が開いてしまった。

リベンジとばかりに再戦を挑まれ、空中から撃たれ放題。アッサリ敗北。

さすがに卑怯と感じたのか室内で勝負して勝利…虚しい。魔法鍛錬に精を出したからか、ユーノがまったく気づかなかった少年の持つジュエルシードに気づく（俺がスって回収）。

何と言うか、凄い成長ぶりである。

「ずりい。」

「えっ?」

俺の呟きに、困惑した声を返すなのは。あまりにいきなりなので無理も無いが、ちょっと拗ねてみる。

「俺、人生〃訓練期間って位なんだぜ?それが実戦一週間位の魔法少女に制空権抑えられた位で手も足も出ないって…」

「いや、ほぼ生身で空中にいる魔導師相手に攻撃仕掛けて打ち落と

す速人の方が異常なんだからね？完全な身体強化のみで跳躍補助も飛行系も高速移動系も使っていないのに。」

「なのも速人お兄ちゃんの方が異常だと思う。室内だと勝てる気しないし…。」

呆れたいのはこっちだと言うのに何故かダブルで呆れられた。何で！？

「空中にいる相手が面倒か…うし、ちょっとやってみるか。」

滞空対策でも考える事にしよう。膳は急げと立ち上がり…

「あ、あの…今日すずかちゃんのお家に…」

「行って来い行って来い。友達と遊んだってバチ当たらないだろ。」

「ユーノ、何かあったらなのはを頼むぞ。」

俺はさつさと部屋を飛び出した。鳥を打ち落としたい所だけど…逮捕されるな間違いなく。となれば方法は一つしかない。

一階に下りて兄さんを捕まえる。

「あ、兄さん。ちょっとお願いがあるんだけど…」

「何だ？」

「空飛んでくれない？」

お前が飛べと庭でブン投げられた。いくら人外の兄さんでも無理だったらしい。

対空戦の訓練がしたいと事情を説明したら、姉さんが空中に的を投げる役を引き受けてくれた。

うっし、絶対に何とかしてみせる！！

せつかくの協力を無駄にしない為にも何かしら習得しようと思心に決めた。

S i d e 〉 高町なのは

私は速人お兄ちゃんが去った部屋でさっきまでの話を振り返り、溜息を吐かざるをえなかった。

「速人お兄ちゃん酷いよね、ずるいだなんて。」

浮遊魔法で空中から一方的に攻撃してたにも拘らず飛べない筈のお兄ちゃんにジャンプ攻撃で敗北。

もう少し高度を維持するように心掛けながら射撃を放ち続けて辛うじて勝利。

室内で、壁や天井を蹴って跳んでくるお兄ちゃんを追いきれず、逃げる事も出来ずに完封負け。

コレが、一応魔法を使える私と、運動能力を上げられるだけのお兄ちゃんとの戦績。

ちよっと…と言うかかなり人間止めちゃってると思う。

「速人には正直魔導師の事情を良く知ってる僕の方が驚かされるよ。陸戦って言うて空を飛ばない魔導師もいるんだけど、あの様子だと強化すらない生身でもそういう魔導師と戦えそうだ。普通に考えたら質量兵器でも使わないと勝てない筈なんだけどね。」

ユーノ君にとっては、速人お兄ちゃん的能力は兵器と同じみたい。ちなみに質量兵器って言うのは、地球にある銃や爆弾、ミサイルみたいなもののユーノ君達の住んでる『管理世界』での呼び方らしい。「でも、速人お兄ちゃんは恭もお兄ちゃんには試合で勝ったの見た事無いよ？それと、お父さんが前に言ってたけど、『本物の御神の剣士は完全武装の一部隊にだって負けない』って。」
それが本当なら速人お兄ちゃんはまだ普通なのかもしれない。そう思ってたんだけど…

「は…ははは…なのはには悪いけど、ちよっと人間かどうか疑っちゃうかも…」

ユーノ君は震えだしてしまった。初めて魔法に出会った時はとってもビックリしたけど、魔法が常識のユーノ君にはむしろお兄ちゃん達のほうがおかしいみたい。

今度ユーノちゃんの変身とか見せてあげよう、きっと本気でビックリすると思う。

「なのは、そろそろ準備はいいか？」

「あ、はい！」

お兄ちゃんに呼ばれて、私はユーノ君と一緒に部屋を出た。

元々お兄ちゃんが忍さんと会う約束をしていて、久しぶりと言う事で忍さんの妹のすずかちゃんに、アリサちゃんともども、遊ぼうと誘われたのが今日のお出かけ。くーちゃんまで来られるみたいで、アリサちゃんが連れてくる予定になっている。

ジュエルシード探しにかかりつきりだったし、せつかく休みの日に一緒できる都合がよかったのだからと言う事で今日は遊ぼうと言う事になった。

はずだったんだけど、バスに乗った今日この時点では、この後あんな事になるなんて予想もしていなかった。

「で、ブラコンのなのはここ最近どーしてあたし達を放置で速人へばりついてるの！？今日こそ話してもらおうんだから！！」

半分怒って半分ニヤニヤしてるアリサちゃんに詰め寄られた私は、

その場に置かれたノートのタイトルを見て、今回呼ばれた訳についてそこではじめて知った。

『第一回、高町なのは熱愛発覚！友情より愛情なのか裁判！』

ノートには、殴り書きしたかのようにそう書かれていた。

ただからかわれてるだけなら怒った所だけど、あんまり遊べなくなった事を心配されてた上、お兄ちゃんと一緒にいるのを優先してる事がバレてる以上、後ろ暗いのは私の方で。当然、魔法の事を話す訳にも行かなくて。しかもアリサちゃんは納得が出来るまで話を詰めたがるタイプ。

高町なのは、魔法に関わって以来最大のピンチ。

口が軽い速人お兄ちゃんがいてくれればと思っちゃった私は、本当にブラコンなのかとしばらく自分を疑う羽目になった。

以下、ちょっと見せたくない軽い口喧嘩になっちゃいました。

「いろいろあって遊べなかったのはごめんなさい。だけどこれはあんまりなの！お兄ちゃんと熱愛って何!？」

「熱愛は熱愛でしょ!？男の子と女の子が四六時中ベッタリしながらイチャイチャウチャウチャしてる事よ!」

「仲がいいのはいい事なんじゃないかな…」

「誤解なのすずかちゃん！速人お兄ちゃんはなのはが下手だったり失敗すると大笑いするんだから！」

「それもそうね、バカっぽいし恭也さんと比べると超子供で頼りないし。」

「ア、アリサちゃん酷い！子供なのはしょうがないと思うの！それに恭也お兄ちゃんもだって稽古でいい勝負するんだから！」

「ふ、釣りにかかったわねなのは！こんなちよつとの言葉に反応して庇いだすなんてやっぱり熱愛がブラコンじゃない！」

「あ…ちつ、違うもん！」

「速人君、口調が軽いから誤解されるけど、お勉強以外では結構やさしくて頼りになるもんね。」

「す、すずかちゃんまで誤解してるー！！」

「なのは、正直に言えば楽になるわよ。兄妹だから遠慮してるって言うなら心配要らないし。」

「確かお姉ちゃんも美由紀さんと恭也さん争奪戦をやったって言うてたよ？」

「にゃ！？ホントなのすずかちゃん！」

「食いつく位興味あるんじゃない！素直になりなさいなのは！馬鹿にしないし手伝ってあげるから！！」

「って違うよ！本当に今のは違うのーっ！！」

「皆様、忍お嬢様と恭也様から伝言です、『今のお話をこれ以上続けたり外の人に漏らしたりしたら覚悟しておくように。』だそうです。」

静かに現れたノエルさんによる死刑宣告一步手前の伝言で、ようやく不毛な言い争いは終わりを迎えてくれた。

それにしても恭也お兄ちゃん…わざわざ口止めするって事は本当の事なのでしょうか？

大騒ぎが終わったところで、ジュエルシートの反応があった。

『なのは、ジュエルシートだ！すぐ近く！…！』

『う、うん！判ってるけどでも…』

一緒にいるのに急に抜けられない。どうしようかと考えていたら、ユーノ君が走って行ってしまった。

あ、そうか！

「ユーノ君！ごめん、ちょっと連れて来るね！」

「手伝うわよ？」

「大丈夫！」

ユーノ君を追いかけるフリをして、その場を抜け出した。今回は助かったんだけど、速人お兄ちゃんと一緒にいるとこんな事ばかり慣れていくようでちょっと複雑なの。

『結界を張る。そうすれば外部から隔離されるからそこで変身を！』

お決まりになった手順。世界の色が変な風に歪んでいって、結界に入ったところで私は変身した。

ジュエルシードは…と、反応を探してみると…

探すまでも無いとつても大きなネコさんがいた。

「コレって…暴走？」

「いや、大きくなりたいって願いが正しくかなえられたんだと思う。」

ちよつと気が抜けてしまった。

とは言え、ジュエルシード自体は危ないものに代わりはないし、こんなに大きくてもまずかちゃん困っちゃう。何しろ木より大きいんだから。

「と、とりあえず封印しちゃうね。」

私はそう言っつてレイジングハートを構えて…

ネコさんに金色の光が突き刺さるのを見た。

苦しそうに倒れるネコさん。私は慌てて光が飛んできた方向に視線を移す。

そこにはとても綺麗な女の子が飛んでいた。

少し寂しそうな目で、黒い杖を振り上げる女の子。私は慌ててネコ

さんと女の子の間まで飛んで行って、放たれた光の弾を防ぐ。

「同系統の魔導師…ロストロギアの探索者か。」

見た目と同じく、綺麗で悲しげな声が私の耳に響いた。

第四話・なのはのお友達『前編』（後書き）

前編後編になったお陰で本当に出てきただけになってしまいました、すみません。やり取りが変わっているのは、修行の結果サツカー少年のジュエルシードの回収が簡単に済んだため落ち込んではいない上に速人が一緒だとアリサたちに知れているからです。

第五話・なのは的お友達『後編』(前書き)

後編です。

フェイトに対しての方針が決まります。

第五話・なのは的お友達『後編』

第五話・なのは的お友達『後編』

射撃を防いだ私に対して、女の子は黒い杖を構えて物凄いスピードで近付いて来た。

手に持つ杖から金色の刃が飛び出して、鎌の形を描いていた。

振り下ろされる一撃を何とか避ける。

「見切られた？」

女の子は鎌を避けた私を警戒する。お兄ちゃんと試合やったお陰で大きな鎌が見やすく感じる。後は攻撃するだけ…

攻撃？この子に？

「何で急にこんな！？」

「答えても多分意味はない。」

襲いかかって来たけど少し暗い顔をしているのは、きっと優しいからだろう。気付いてしまうと攻撃なんて出来なかった。

戦わないといけないのは判るけど、初めて会った上に、優しそうな彼女に攻撃魔法なんて撃てなかった。

「ジュエルシールドはユーノ君のなの！勝手に持ってつたら泥棒だよ！」

「それでも必要なんだ。」

雷のような音を立てながら飛んで来る速くて強い攻撃。空中で避けるのはあまり経験がないから、防御ばかりになっちゃう。

「意味がないのが多分なら、話してみよ！お手伝い出来るかもしれない！」

「必要ない！」

振るった鎌から放たれる刃は、防御ごと私を弾き飛ばした。

この子強い……

「じゃあ……」

子猫の声に視線を逸らすと、何かが飛んで来るのが視界の端に映って……

回避し損ねて腕に直撃した。

「あぁっ！！」

レイジングハートを手にした腕から全身に痺れが広がる。魔法を維持できなくて空を飛べなくなって墜ちてしまった。

「なのは！」

ユ一ノ君の魔法に受け止められた私は女の子を探す。飛べなくなつた私を横目にネコさんに向かって飛んでいってしまった。

止めようと思つて身体を起こしても、上手く動かない。

私がかがいているうちにジュエルシールドは回収されてしまつた。

「じゅめんね…」

と、寂しそうな声で言い残して女の子は飛び去つて

「雷っ！……！」

「あああああああつ！……！」

空が割れたような轟音と共に放たれた雷が、女の子を打ち抜いた。

「なのは！大丈夫！？」

言いながら現れたのは大人モードのクーちゃんだった。どうやら今のはクーちゃんの雷だったみたい。

クーちゃんの攻撃には非殺傷設定なんてない。

私は最悪の事態に顔から血が引いていくのを感じていた。

「フェイトオオツ！！」

女の人の声がして、オレンジ色の犬さんの背中に女の子が収まる。犬さんはこつちを睨んで飛んでいく。

「危ない青い石を、なのはを撃つてぬすむなんてゆるさない！！」
「待つてクーちゃ」

「久遠ストオップ！！頼む悪かったマジで止まってくれええっ！！」
「！」

クーちゃんを止めようと悲鳴に近い声を張り上げた瞬間、この場に居ないはずのお兄ちゃんの声がした。

S I D E O U T

昼になって、家に誰も居ないからという理由で料理に手を出した姉

さん。

俺は嫌な予感を感じて全身全霊を込めて逃げ出した。

格闘の師匠の所に行ってもいいが、十中八九用事だろう。二人揃ってなきゃ漫才が見られないし、折角ならちゃんとアポ取って教えて貰いたい。

体力強化にもなるしと、走って忍さん家に行く事にした。

もう少し…そう思った所でジュエルシードの反応を感じる。普段からボロクソ言われてる姉さんが料理に手を出した事といい、間違いなく何かヤバい事がある。

結界に入った俺は、見知らぬ女の子が雷撃に撃たれるのを見た。

なのはもユーノも雷撃なんて使えないし、二人は地面にいた。見た所外傷はない。で、傍らに本気モードの久遠の姿があつて、ちょっと苦しそうなのは。

なんか久遠様は逃げようとする黒い娘と犬に向かって放電準備を始める。

食らったら…あの子死ぬんじゃないか？

もう既に意識は失ってる黒い娘は同じ雷撃受けたらアウトだろう。

「危ない青い石を、なのはを撃つてぬすむなんてゆるさない!!」
久遠のセリフが俺の耳に届く。

久遠がジュエルシードの事を知ってるのって…俺のせいじゃん!!

「久遠ストップ!!頼む悪かったマジで止まってくれええっ!!」
「！」

全力で叫んだ結果、何とか久遠は止まってくれました。

「……………お兄ちゃんにクーちゃん、反省した？」

「「いめん…………」」

俺と久遠は、物凄いい怒りのなのはに、森の中で正座させられていた（久遠は子供形態）。
途中で庇おうとしたユーノは、まったく折れないなのはに、ついに諦めて俺たちを申し訳なさそうに見つめていた。

罪状は、俺が久遠と話したことをなのはに教えていなかった事に始まり、一緒に探すと言ってるのに守らせようとしたこと、久遠が非常時とは言え誰にも言わずに人様に対して本気を出した事など、徹底的に詰められた。

私はブラコンじゃないんだからそこまで気を配るのはやめて欲しいとまで言われる始末。

や、俺だってなのはだからって訳じゃなく、一番危ない家族だから気を使ってるだけなんだぞ？母さんは父さんがベツタリ付いてるし、兄さんも姉さんも俺と同等以上だし、何より全員事件に首突っ込んでるわけじゃない。

なんて、余計な反論したせいで説教が更に伸びた。

久遠が恨めしげに俺を見て、しょんぼりと俯いてしまったのをみて、今回はさすがに俺が悪かったと反省した。

その後、ブラコン云々の原因がわかったので格ゲーでアリサを処刑した。

ヒーロー目指す俺にとって熱いゲームは教本の一つだからな、負けられないぜ。

その後、帰路についたんだが…

『なのは、考え事か？』

『えっ？』

バスの中、兄さんがいる為念話で話しかけた。

『なんでもないよ。』

『判った。何があつたんだ？』

『え？いやだから』

『判つたから。あの子の事か？』

こいつのなんでもないなんて誰が信用するか。特にこんな状況では。

カマをかけてみたら当たりだったらしく、表情が動いた。

『…何も聞けなかったし、ジュエルシード取られちゃった。』

『気にすんなつて、お前の戦闘訓練の期間考えたら三流にだって勝てないのは普通だ。』

ましておそらく相手は一流だろう。でなければ正体不明の世界で一人二人で動くなんて事はしない筈だ。

『違つの一！』

『何が？』

『近づいた後はお兄ちゃんより遅かつたし、ちゃんと見えてはいたの。だけど、攻撃できなくって…』

合点がいった。全うにやってきたある程度良心のある人間なら、あ

からさまに兵器と判るもので人を撃つなんて行為が簡単に出来るはずがない。

『私が真面目にやってれば、少しは違ったのかなって思うと…』

『バカアホマヌケ。武器なんて振り回すのが当たり前にならないほうがいいに決まってるんだろ。』

『ムツ…ヒーロー何て言ってるお兄ちゃんにだけは言われたくないの。』

むくれたなのはの反応に、普通に聞いたら当然かと苦笑する。

『なのは、やりやすくするんだったら決めておけ。それでずいぶん違う。』

『決める？』

『たとえばあの娘に対して。戦わないでどこまで言っても話し続けるのか、徹底的にぶっ飛ばしてひっ捕らえた後今日みたいに恐ろしいお説教かますのか。』

『にゃ…ちよつと怒り過ぎたのは反省してるからもう言わないで欲しいの…』

スイッチが入ると容赦がなくなるらしく、元に戻って落ち着いてから振り返って反省する。

その可愛い仕草を十分堪能してから（シスコン言っな）俺は続けた。

『アリスん時はノリで飛び込んだから何にもまとまっていなかったけど、久遠の所に通いつめ

てた時は根気いるだろうにキチンと続けてたろ？』

『うん。』

『なのはにとつて、あの娘が泥棒なのか、敵なのか、ネコ愛好家なのかストーカーなのか…』

『後の二つはまったく関係ないけど…私はそれすら教えてもらえてない。』

『じゃあ二択だな、それを聞きたいか聞きたくないか。決めちまえばあの娘の意思に関係なくストーカーかますだろお前は。』

『す、ストーカーって酷い!!』

酷い…確かにそうかもしれないが、俺は客観的に見たら否定できないんだ妹よ。怯えてびくびくしている子の所に雨の日も風の日も足蹴無く通い続けて。久遠がなついてくれなかったらお前は逮捕されてもおおかしくないぞ？

『でも…そうだよ、まずはあの娘の話を聞いてみたい、あの娘の事が知りたい。』

決まったようで安心と同時に同情した。彼女はこれからこの海鳴を離れるまで延々とストーカーに追われる事になるだろう、なのはが友達認定されるまで。

と、そこまでは良かったんだ。次の一言が無ければ。

『ユーノ君、それでいいかな？ジュエルシードユーノ君のものなのに悪いけど…』

…… やっちゃった(笑)ごめんユーノ、マジで忘れてたわ。

俺はユーノに謝罪しつつ、一つの懸念事項を思う。

…… 死んで無いよな彼女？

第五話・なのは的お友達『後編』(後書き)

フェイトファンの方すみません…

無事ではあるんで安心してください。(自分でネタバレかい！)

第六話・これからのための昔話（前書き）

今回は殆どがフェイト視点です。

第六話・これからのための昔話

第六話・これからのための昔話

S i d e 〱 フェイト 〱 テスタロッサ

私は、昨日のダメージを抱えたまま、町を歩いていた。

昨日の雷は、私が本気でも一撃だけで出せる威力じゃなかった。準備時間の長い連射だったらあるにはあるけど、あの攻撃はどこから来たかも判らないうちに気を失ってしまったし、現状心許ない。

アルフがいてくれなかったら、今頃もう捕まっていただろう。

「駄目だな、こんなんじゃ…母さんが待ってるんだ、頑張らないと…」

本格的な搜索は、今はアルフのほうにお願いして、私は慣らしと近辺の搜索のため、町を歩いていた。

昨日起きてすぐは、攻撃が雷だったのが災いしてか、身体が痺れてまともに動かなかった。

回復魔法と慣らしによって普通に動くようにはなっただけど、全力で動いて弊害が無いとは言い切れない。

今日一日様子を見るようにとアルフに散々念を押されて町を歩いているのだけど…

「やっぱり、普通に探したほうがいいかな…」

どう考えても街中を歩いているだけじゃ発見なんて無い。

…そうだね、魔法行使が普通に出来るかも慣らしに思う。

アルフに申し訳ないのでちょっとだけ言い訳を考えながら人垣を外れるために歩き出

いきなり、本当に唐突に男の子に手をつかまれた。

当然、振りほどこうかと思っただけど…

「っ…よかつ…」

何故かその子は泣いていた。

「え？え！？」

意味が分からなかった。町を歩いていたらいきなり見知らぬ男の子に手を捕まれて、何故か泣かれたのだ。状況を説明出来る人がいるなら教えて欲しい。

周囲の人の暖かいようなむず痒いような視線が痛い。

「あ、あの…場所を変えて」

「そ、それもそうだな！！」

私はいきなり男の子に抱えられる。

絵本のお姫様のように。

分からない、何にもサツパリ分からない。

「とりあえずこっちだ！！」

「え？え！？」

男の子に連れられて、人の少ない海岸まで来てしまった。

逃げるべきだったのだろうけど、なんだか温かさに当てられた私はそのまま海岸まで呆然としていた。

「すみませんでしたあっ！！！」

「ええ！？」

海岸につくなり、男の子は地面に頭を叩き付けて土下座して来た。

一体この子は何者なのか？

男の子だからと言っても凄い運動能力だし、それが無くても…変だった、変過ぎた。

「あの…落ち着いて聞いて欲しいんだけど…」

男の子はとてもバツが悪そうに言葉を紡ぐ。

「昨日の雷俺のミスが原因なんです！！」

瞬間…思考が停止して…

「っ!!」

バルディツシユを手に身構えた。

迂闊だった。彼が敵だったなんて…

倒してすぐにでも逃げないと思う私の前で、男の子はブンブン手を振る。

「いや違う聞いてくれ！お願いだから!!」

必死な男の子の額から、血が流れていた。

…少なくとも敵意が無い事は分かった、これが敵なら馬鹿過ぎる。

「…手短にお願います。」

時間がある訳では無いが、私は彼の話を書くことにした。
現地調査の一環だと自分に言い聞かせて。

妹さんをジュエルシードから守らせるつもりで話をした特殊能力者が、非殺傷設定も無いのに私に攻撃して、自分が魔導師の話をして無かったのが原因で死なせかけた…と、謝りに来たらしい。

「…あの、白い娘を襲ったのは事実だし、私が犯罪者なのは分かってるでしょう？何で謝ったりするんですか？」

不思議でしょうが無かった私の目の前で、男の子は若干暗いまま答える。

「だって…喧嘩で死人出したらダメだろ。普通に考えて。」
呆れと怒りが同時に湧く。奪いに来た私のセリフじゃないが、危険なロストロギアを巡った攻防を喧嘩扱いするなんて、どれだけ軽いのか。

「そう思っなら妹さんを引かせて下さい。アレは危険なんです。軽い気持ちで触れていい物じゃ」

「わりい無理だ。あの馬鹿マジになると人の話聞きやしないからな。今回の騒動だって俺が引き受けるって言ったのに、完全に無視。」
彼は両手を上げて息を吐く。
ちよつとあの子に頭に来た。心配してくれる家族がいるのに無視して戦いに出るなんて…

「あの…貴方は生粋の魔術師なんですか？ロストロギアを引き受けるなんて…」

あくまで情報を聞き出すため、だから躊躇う事無くその質問をして

「いや、俺は元暗殺者。犯罪歴って言うなら俺のほぅがとんでもなく上だな。」

聞かなければ良かったと、本気で後悔した。

「本当にさ、人なんて簡単に死ぬんだよ。俺はそれを良く知ってる。多分…君達魔導師より。だからさ、本当焦ったんだぜ？非殺傷設定なんて便利なもんはこの世界には無いし、本当に生きててくれて良かった。」

「あ、貴方は…自分で？」

人を殺していたのか？聞こうとして、声にならなかった。

「…殺さなきゃ殺される、世界はそう出来てるって、ずっとそれだけ教えられてきた。実際、俺と一緒にいた子供たちは毎日のように殺しあつて、その数を減らしていった。俺はそんな事を当たり前に思ってた馬鹿野郎だったから、ここに来るまで、気づく事も出来なかった。」

「何に…ですか？」

「たまたま救われてる俺みたいに、俺が奪っていった子たちにも、幸せな世界が生きていればあつたのかもしれないって、そんな簡単な事だよ。」

重かった、今の私が聞くには、あまりに重すぎた。多分、綺麗で幸せな聖人君子が言ったとしても、綺麗としか伝わらなくて、重さに気づくことは無かっただろう。

「今の話で暗い顔ができる君なら信用できる。きっと君は一線を越えない。」

「あ…」

言いながら頭を撫でる手。

私は気づいてしまった。

ジュエルシードは、一個でもまともに暴走させてしまえばそれこそ冗談にならない被害を引き起こす。

私が出てる事は彼より重いのではないだろうか？と。

「ちょっと待ってて。」

私の頭を優しく撫でた彼は、そう言って何処かへ行ってしまう。

少しの間をおいて、彼は袋を抱えて戻ってくる。

「ホイ。」

魚の形をした妙なものを渡され、扱いに困っていると、同じものを取り出した彼はそれを食べた。

「…はむ。」

私も真似して齧って見る。あつたかくて甘い味が広がっていった。

「えい。」
「っ!？」

突然何かが光って驚くと、彼は携帯電話を持っていた。

「それじゃまた！」
「あっ……」

彼は止める間も無く去って行ってしまった、魚のお菓子の入った袋を置いて。

「フェイト、どうしたのさ?こんな所で。」
「あ、アルフ。コレ食べる?」

私は袋から魚のお菓子を取り出してアルフに渡す。一口かじったアルフは、気に入ったのかそのままガツガツと食べ始めた。

…ジュエルシードを集めよう。母さんに渡さなきゃならないし、この管理外世界の人達を魔導師の事情に巻き込む訳にも行かない。私は彼とその妹さんの姿を思い浮かべ、改めて意志を固めた。

S I D E O U T

俺は彼女…フェイトの前でたい焼きに喰らい付いている女性を見ながら息を吐いた。

別の気配が近づいてきてたから逃げたけどどうやら正解だったみたい

いだな。

「一線…か、当に越えてるのは俺の方なのにな。」

何しろ暗殺者だ。非合法の非合法の裏…って位には全うな人生捨ててる。

「あー止めよう、考えると気分が滅入る。」

コレが俺の結論だった。考えて昔話が変わってくれるならそれほど楽なことは無い。だけど、そんなはずも無い。だったら昔の事で悩むより、これから先を変える事に全力を尽くすべきだ。

「とりあえずは、我が妹にこの写真を自慢するだけ自慢しますか。」

たい焼きを加えてはにかんでいるフェイトの横顔が写った携帯を眺めながら、俺は笑っていた。

第六話・これからのための昔話（後書き）

謝罪&たい焼きがやりたくて出来たシーンです。
自分で言ってるってなんとという暴露話だ…

第七話・剣に懸ける思い（前書き）

戦闘前の部分で区切りました。

第七話・剣に懸ける思い

第七話・剣に懸ける思い

「ふふふ…温泉といえば覗き！生涯で今この時ほど気配の完全遮断が出来る事を喜ばしく思った事は無いっ！！」

「死にたいようだな愚弟よ。」

思ったまま口にして、親愛なるお兄様と大乱闘する羽目になった。

「こちとら格闘訓練も積んでんだ！刀無しで勝てると思うなよ！！」

「大した自信だが、俺を相手にする理由には足りん。」

徹、貫を併用した拳や蹴りがすつ飛んでくる。俺は柔で捌き、剛で迎え撃った。

俺たちは今、温泉に来ていた。高町家ご一行と忍さん達、それから格闘の師匠の二人と共に。格闘の師匠はややスタイルに難はあるが現役高校生、忍さんや姉さんまでいる桃源郷がすぐ隣にあるんだ、負ける訳にはいかない！！

「俺の桃源郷はこの柵の向こうなんだ！負けられるかあああっ！！」

「…その執念は訓練で出せこの阿呆が。」

結論として、互角の戦いを繰り広げた結果、我等が父上様の一撃によつて終わりを告げました。

で、おとなしく風呂から上がった訳ですが…

「最っ低！」

「駄目だよ速人君？」

俺の魂の叫びが届いていたらしく、正座でアリサ、すずか両名によるお説教と相成った。

「くそっ…だがしかし俺は諦めないぞ！必ずやいつの日にか」

「今すぐ諦めなさいこのヘンタイ！！！」

立ち上がるうとする俺の頭を押さえつけるアリサ。

くそー…漢のロマンのわからない奴等め…

二人に解放された俺は、痺れた足をさすって部屋を出る。と…

凜猛な殺気を感じた。

あまり長い間ではなかったが、敵意をむき出しにした何かがいる。と、なのは達の気配から離れる一つの気配に、俺は覚えがあった。

そして俺の前に姿を見せたのは、フェイトと共にいた女性だった。

「こんばんわおねーさん。」

「ああ、こんばんわ。」

普通にしていればいい人らしい。久遠がいた時には、俺は目に入っていなかったのか、まったく気づかない。

『今ここで殺気をまくな、殺されるぞ。』

「っ！」

俺が送った念話に反応した彼女は、俺を警戒して身構えた。

『だから殺気を放つな！事情を知らない達人がいるんだ、予防で殺されたらアンタだって困るだろう！兄さん達が本気で来たら魔法使った位でアンタのこと守りきるなんて無理だからな！！』

『…アンタ、あたしを守るってまた大きく出るじゃないのさ。』

一応殺気を警戒心レベルまで落としてくれる。…まあ、コレ位なら大丈夫か。

『とりあえずは…だ、この町にいるんだろ？事件にも乗らずに消さ

れたくなかったらジュエルシード以外では品行方正でいてくれ。判るだろ？揉めず騒がず大人しく…だ。」

「なんだいそりゃ？普通の人間に殺される訳無いだろう？」

「異常な化物なんだ。敵に回して死なずにすむとすれば、空を飛ぶ位か。」

…魔導師の身を案じて念を押さなきゃならない鉄の固まり持つてるだけの人間って、やっぱりおかしすぎるんじゃないだろうか？
内心で軽く呆れていると、彼女のほうから念話が飛んできた。

「子供はおうちでいい子にしてな、邪魔すると怪我じゃすまないよ？」

「俺がただの子供に見えるなら…アンタも家で大人しくしておいたほうがいい。怪我じゃすまないぞ？」

向こうは挑発のつもりなんだろう。だが、俺の方は警告のつもりだ。ジュエルシード集めに参加するほうが、今この場で殺気を纏っていることよりはるかにマシだ。

何か、既に離れた位置に妙な気配があるし、十中八九飛針か何か準備してるだろう。

「とにかくだ、ジュエルシード見つかるまでは大人しくしてくれ。」

『ま、いいさね。邪魔するならその時はその時だ。』

警戒心全開のお姉さんと別れて…

「出てきなつて、気配遮断は俺のほづが上だぜ兄さん。」

「気づかれていたか、さすがだな。」

刀を下げた兄さんが姿を現した。

抜刀術でもかまされた日には気が付いたら胴が二つに分かれてました。何てシャレにならない位グロい展開になりかねない。

とりあえず去ってくれてよかった、うん。

「知り合いか？」

「まあちよつとな。安心してくれ、何も無く終わらせる。」

どうせなのはに何かあつて、何かやってる事位気づかれてるだろうからそれだけ言う。

伝えることは伝えたと戻ろうとした俺を、兄さんは珍しく真面目に俺を呼び止めた。

「速人、一つだけ心して聞いておけ。」

殺気も怒気もない、ただ真剣な兄さんの声。こんな声は、正直殆ど聞かない。

絶対に忘れないよう意識を整え兄さんの言葉を待つ。

「御神の剣は守るための物だ。…大切と思えるものを守って、必ず戻って来い。」

それが、俺に御神流を薦めた理由だと、その時初めて気が付いた。

血を浴びて、命を絶ち、誇ることも無く。

そんなものにわざわざ人生を費やす理由…

俺がヒーローになりたいと言っことを

俺が持つ…いくつもの死を積み上げて持ってしまった力を、誰かの幸せの為に使いたいと言う願い事を知っていたから、兄さんは俺に力をくれようとしていたんだ。

「ああ、必ず守る。」

俺は自身の持てるありったけの意思と共に誓いを立てた。

兄さんは静かに笑みを漏らして、部屋へと戻っていった。

第七話・剣に懸ける思い（後書き）

ちなみに、速人的には温泉覗きは『イベント』で『ロマン』です。実際単にヘンタイさんだったら完全気配遮断を利用すればなんでも出来ますから。

なので、きつちりお嬢様方にお説教受ける部分まで受けてます。

ま、それでもヒーローのする事じゃないですけど（笑）。

第八話・いざ尋常に勝負！（前書き）

温泉での戦闘です。

若干展開に変化が？

第八話・いざ尋常に勝負！

第八話・いざ尋常に勝負！

夜になって、ジュエルシードの反応を感知して外にでる俺となのは魔法が発動しているところを見ると、フェイトがもう片付けてくれたのだろう。

現地に着くと、予想通りジュエルシードを手にしたフェイトの姿があった。

「よっ、順調みたいだな。」

「貴方は…やっぱり来たんですね。」

少し驚いた後悲しげに目を伏せるフェイト。と、なのはは俺とフェイトを見比べてきよろきよろとしている。

「あ、そついや見せてなかったっけ。ほらコレ。上手い具合に撮れてるだろ。」

「あ…え？」

俺は携帯電話を取り出してなのはに向ける。待ち受け画面にドアップで写ったフェイトの姿があった。たい焼きにハムツと囓り付いてる愛くるしい表情の写真である。

「あ、あの…」

「ちょっとアンタ、いったい何してくれたいんだい!!」

察しが付いたらしいフェイトは赤くなって俯いてしまい、それを見た女性が怒る。

何と言っか喧嘩っ早いなあのおねーさん。

「あ、アンタも見る？結構上手いタイミングで撮れたと思うんだけど。」

「いったい何の…ブツ!!」

俺が画面をフェイト達の方に向けると、フェイトはますます赤くなっつて、おねーさんは思いつきり噴出していた。

「フェ、フェイト！何でこいつがこんなの持ってるのさ!!」

「え、えつと…ごめん…この間のお菓子は彼から貰ったもので…」

「お兄ちゃん!?なのは一言あっても良かったんじゃないかと思うの…」

全員が全員バタバタと慌てふためく中…

「そ、そうですね！彼女はジュエルシードを盗んでいったんですよ!?!」

ユーノの一言で、空気が戻った。

ここは、ノリを替えたユーノを責めるべきか、シリアスな空気に戻してくれたのを感謝するべきか…

そんなどうでもいい事を考えていると、おねーさんが頭を乱暴にかき乱す。

「まあ良いけどさあ…アタシ親切に言ったよね？いい子にしてないとガブツと行くよって…！」

宣言すると同時、変身するおねーさん。何か犬になった。

「おお、変身魔法って奴か？」

「ちょっと違うね、アタシはこの子の使い魔さ。主人の魔力によって存在して、その全てをかけて主人を守り抜く！」

なるほど、人型の方が偽者って訳か。

納得していると、犬さんはフェイトの前に出る。

「フェイト、こいつらはアタシに任せて先に」

「悪いがそういう訳にも行かないな。」

俺は単独で前が出る。

いつ飛び掛ってくるかも判らない犬さんに対して、俺はただまっすぐ立っ。

「フェイト、前に話したと思うが…頑張れ。」

「お、お兄ちゃん！？ここはなのはを応援してくれるんじゃないの

!？」

「お前はいいーの！言わなくても頑張った結果相手をへし折るスタンズぶっ通すんだから。」

応援を所望するのを一蹴して、ユーノに視線を移す。

瞬間、犬さんが飛び掛ってきた。

おそらく俺の攻撃なんか意にも介していないだろう。このまま俺ことなのは達を吹っ飛ばそうとする勢いだ。

全身を強化する、量的には彼女の十分の一程度の力しかないだろう。だがそれで十二分。技は力を制す為にある。

身をかわしながら全力で『徹』を一閃。

「が…っ!？」

犬さんは防御がまるで役に立たない一撃を受けて、森の中に吹っ飛んでいった。

「アルフー!!」

フェイトが叫ぶ中、俺はユーノを掴んでアルフと言っらしい犬さんを追う。

「ユーノ、お前はこっち。万一犬さんにやりすぎたら治療してもらわなきゃならない。」

「い、いやでも!」

「なのはは決めた。邪魔は無用だぜ？男の子なら判るだろ？」

渋るユーノを引つ張って、俺はその場を離れた。
行く先は当然森に消えたアルフの元。

「ユーノ、空となのはの方に逃がさないようにだけ頼む。」

「そ、そうは言うけど…」

「だーいじょうぶだって、地面にさえいてくれりゃ、相手が人外だ
ろうと負けねーよ。」

渋るユーノをおいて離れさせる。視線を移すと、少し苦しそうなアルフの姿があった。

「やってくれんじやないのさ。」

「パワーはある、魔法行使も上手いのかもしれない。だが…下手だな。」

「舐めんじや…ないよー!!」

飛び掛ってくるのに合わせて潜り抜けて腕を打つ。とは言え、『徹』じゃないとまったく効き目が無い。峰打ちじゃ無ければダメージはあるんだろうが…そりゃ怪我させるからな。

「この…っ！ざけんじやないよー!!」

近接戦が不利と判断したのか、宙に浮いて口から光弾を放ってくるアルフ。

っち、こうなると面倒だなおい！

内心で舌打ちしながら放たれた光弾を切り裂く。と、しばらくそうしているとアルフはニヤリと意地の悪い笑みを浮かべた。

「アンタ飛べないんだねえ？」

「まあ普通の人間だからな！」

機嫌よさそうだったアルフだが、自信満々に言い切った俺の台詞が許せなかったのか、途端に顔を歪める。

「アンタが普通の人間なら、ドラゴンもロストロギアも全部普通だよ。そんな程度の魔力で強化だけでアタシとやりあうなんてさ。」

言われて思う。そう言えば、俺の魔力量ってどれ位なんだろうか？とてりあえずなのはより段違いに低いような気はしてるんだが…あとでユーノに聞いてみるか。

「けど…あつちには勝負あつたみたいだね。」

アルフが笑って見上げた空には、砲撃魔法を放った態勢のなのはに上空から突っ込んでいくフェイトの姿があった。

その姿に気づいたのはだが、その状態からできる事はもう少ない。

詰んだかな。

俺は何の気なしにそう思って…

「「「つあrjjgbあえrnfkなsdfじなえr!!!」」」

頭と頭で激突して、声にならない悲鳴を上げる二人の姿を見た。

旗から見てたら微笑ましくも見える光景。

だが、何をしたのかわかっていた俺は自分の頬が引きつるのを感じていた。

「あの馬鹿…たしかに出来なくは無いけど練習もなしでやるか普通？」

なのはがなにをしたのか？

物凄い単純な話だが、なのははフェイトが鎌を振ろうとした瞬間…

前に、フェイトに向かって飛翔したのだ。

「…たまた…やっぱり見てただけじゃ上手く出来ないや。」

「…無茶するね、君。」

ある程度近づかれたら防御魔法を展開する上、近接攻撃自体がそこまで多くない魔導師にとっては理解できない回避方だろう。

接近する事による回避なんて。

とは言え難度は高い。いきなりで成功する訳も無い。

考えればわかるとは思うが、理屈がわかったからと言って出来る事じゃないし、魔法のように事前に組んでおいて使うなんて事ができる技術じゃない。

飛べるようになったらばっかのアイツが空中であんな真似するなんて、教習所を卒業できただけのようなペーパーが高速4輪ドリフトかますようなもんだ。

「あつぶねーな馬鹿…そこまで本気か。」

「ち…飛べないってんなら相手にするだけ時間の無駄だね！」

言いつつ反転し、フェイトの援護に向かおうとするアルフ。

新技を試すときかな？

俺は拾った石を持った手を腰に構え…

回転をかけながら投擲した。

「あつっ！！な、なんだい今のは！！！」

尻尾に石の直撃を受けたアルフは驚き俺に視線を移す。
そうそうそれでいいんだよ、人の喧嘩に割って入るもんじゃないぜ。

「さっきから飛べない飛べないうるせーっての！こちとら無力な人間なんだ、飛ぶ鳥を落とす位出来なきゃ…守るなんてご大層な事言えるかよー！」

さっきの一撃は加減した。それを教えてやるために全力の一投を放つ。
障壁を張って防いだアルフはそれなりに驚いてくれたようだった。

投弾丸『スローバレット』

投擲時に回転をかけることで直進による空気抵抗の減衰、貫通力の上昇をはかる。姉さんの練習で思いついたもので、既にスチール缶くらいなら魔力強化無しで風穴を開けられる。

歯軋りをしたアルフは、再び俺に向かって来た。

Side〜フエイトII テスタロツサ

目の前の娘は、本当に強い娘だった。

別に戦闘技術が優れている訳じゃない、魔力が多いけど、ただそれだけ。

けど強いのはそんな事じゃなくて、彼女そのものの強さ。

振り下ろされる鎌に対して向かって来る。発想自体は多分さつきから戦ってる速人のものだろう。でも、それで攻略できるからって普通そんな恐い事は出来ない。練習しているのなら、頭同士がぶつかるとなんて馬鹿な事にもならないし、何かしら攻撃手段もあったはず。

つまり彼女は…練習も何もなしに、見つけた活路に躊躇いなく踏み込んだ。

それだけじゃない、私が本気で倒しにかかっていると言っのに、彼女から嫌な気持ち向けられて来ない。

『話し合いで解決できるって事無い？』

そう言った時そのままの目で私を見ている。
襲い掛かったのに、恐い筈なのに…

このまま事情を話せば受け入れてすらくれそうな…

「だから…」

「えっ？」

だから許せなかった。心配してくれる家族の前でこんな、怖くて危ない事を、頼まれてもいないのにやり通すとか勝手に決めてるこの娘が…

「…帰れ!!!」

本気で行く。

「アークセイバー!!!」

「っ!!」

『プロテクション』

飛来する刃を防ぐ彼女。アレは足止め用、だから十分!!

「サングースマツシャー!!」

「あ…くっ!!」

初手で放った砲撃魔法。防御魔法を展開している彼女に対しての追撃。直撃したのを確認した所で私は高速移動を行う。

予想通り防ぎきられていた。でも…

「っ!!」

背後を取った私は、彼女の首に鎌の刃をかけた。

『プットアウト』

「え、レイジングハート!？」

と、彼女のデバイスからジュエルシードが一つ吐き出される。だけど、それよりも驚いている彼女のほうに聞きたかった。このまま斬られるつもりなのか。

ジュエルシードを回収した私は、そのまま降りて行って速人達に視線を向ける。

アルフをあしらっている速人は、私に気づいて剣をしまった。

「アンタ、どういっつもりだい？」

「あれ？言わなかったか？俺は二人つきりにしてやりたかっただけ

だ。終わったなら別に後は。」

速人は私にかかってくるつもりは無いみたいだった。かなり本気で行ってしまったから、もう余力はあまり無い。彼らのサポート役の子も含めてかかってこられたら今の私じゃ正直逃げ切れるかも怪しい。

「速人！アレは危険なものなんだ！使用目的も明かさずに管理外世界で人に攻撃を仕掛けるのが平気な人たちに」

「分かっているけど悪いユーノ。友達だし、なのはとの約束もあるからちよつと止められない。」

屈託も無く、彼はそう言った。友達…と。

「…私は繰り返すよ？」

「知ってる。その代わりなのはが強くなってく。いつまでもつかないか？」

楽しそうに笑う速人。私はいたたまれなくなつて…

「行こうアルフ…」

「了解。…ふんっ！」

アルフと一緒にその場を離れた。

S I D E O U T

第八話・いざ尋常に勝負！（後書き）

と言う訳で、戦闘無駄に長くしてみました。

話の方針として、便利道具を使ってるものほどそれ以外が疎かになっっている為、魔法を行使する者は、技量で武芸者になわないう方針で進めていきます。

で、今回の解説です。

投弾丸：スローバレット。

呼び方はカタカナのほうで。で、まあやってることは銃弾風投擲です。回転加えてまっすぐ貫通力もたせようってだけの投擲です。

速人は、現段階では全身の力を上手く使って投げないと威力が出ないため、モーション的には滅茶苦茶判りやすい上、単発です。

第九話・敗北の後に

第九話・敗北の後に

「イヤー派手に負けたな。さすがプロ。一筋縄じゃいかないな。」
「どうして…」

ユーノが少し悲しそうに尋ねて来る。…裏切ったように思われても仕方ないか。

「ユーノ、お前がわざわざ単独でこっちに来たのは何でだ？他の知り合いだって山ほどいただろうに。」

「それは…僕のミスなのに巻き込むのは…それに僕はなのはやあの子には負けるけどそれなりに魔法の使い手だし、僕が何とかしないと…って。」

「確実性を捕るなら、人をかき集めた上で来るべきだったし、合理性を捕るならこんなもん発動しようがこの世界で問題になるだけだ。本物の犯罪者が出張らないよう入念な準備に回るべきだった。違うか？」

俺の指摘にユーノは頷いた。まあ事実何とかしようって何とかならず、事情を知らない人間を戦闘に巻き込んだって思ってるんだし当然か。

「けど、お前は自分で何とかするためにここに来た。それはどういう事か…」

「僕が失敗したのは今更だけど自覚してむっ!？」

落ち込んでしまったユーノの顔を摘む。サイズ差のお陰でやっぱり惨い。

別に責める気はまったく無いしな。落ち込んでもらっても困る。

「矜持って奴さ。お前はその辺考える前に思ったんだろ?この事態の責任を取らないとって。自分限定でしか効果を持たない迷惑極まりないもので、俺のそれがフェイトを逃がすって選択になった訳だ。俺だって分かっちゃいるぜ?危険な事位。」

「矜持…」

ユーノは深く考え込むような仕草を見せる。…うーん、そんな難しい話じゃないんだけどな。

「ユーノ、お前今回の件について何もやらなくていいよって凄腕の魔導師に言われたらどうする?ラッキーって帰って研究に勤しむか?」

「そんな訳ない!」

「そんな感じ。難しい事じゃない。ま、管理局だったか?に罪状問われたら俺に脅された事にしとけ。俺のが強いし違和感ないだろ。」

俺はそう言っただけでユーノを降ろした。

で、こっちはともかく…

「おーい、馬鹿妹。」

いつもなら、打てば返ってくる筈の返事も無いのは。

「ごめん…負けてジュエルシード奪われちゃった…」

何か、申し訳なく思ってるらしい。結構真面目に落ち込んでる。

「アホかお前は。向こうは一流お前は三流なんだ、当然だって言うただろ？」

今回ののは殆ど当然に近い結果だ。むしろ健闘した方だろう。だが、なのはは返事を返すことも無く先に戻っていつてしまった。

あー本気で頑固で何気に負けず嫌いだからなああの馬鹿。俺は頭を掻き乱しながらなのはに続いて部屋に戻った。

Side 高町なのは

速人お兄ちゃんが言っている事は判る。魔法を知ってまだ日も浅い私があともな結果を望む事はむしろ贅沢に入るんだろう。誰だって知って一月も経たない物で、元からその道で頑張ってる人を超えるなんて無理がある。

だけど、私は自分でジュエルシード集めを頑張るって決めた。ユーノ君のお手伝い、この町の皆を巻き込まない為に。なのに負けた上にジュエルシードを持って行かれた。

だから、自分が弱い事に対する言い訳なんて認められない。

あの娘ともあまり話せなかったし、私はもつと頑張らないといけ
ない。

そんな事を考え続けていたからだろうか…私は話しかけていたアリ
サちゃんに気づく事が出来なかった。

上の空で散々無視したのだろう。アリサちゃんは本気で怒っている。
私がまともに返事をする間も無く、アリサちゃんは去って行ってし
まった。

すずかちゃんに慰められたけど、今のは完全に私が悪い。

アリサちゃんを追って行くすずかちゃん。魔法にまったく関係のな
い二人まで私の悩み事に巻き込んで心配かけるなんて…本当に何や
ってるんだらう…私は…

家に着くと、速人お兄ちゃんが家の前に立っていた。

「あ…お兄ちゃ」

パンツ

そんな乾いた音がして、頬を叩かれたと気づいたときには私は地面に座り込んでいた。

叩かれた。

その事そのものが、頬の痛みよりも痛かった。

「お前な…思い悩むのは自体は非常に結構だが、友達放置ってどうなんだ？」

お兄ちゃんは怒っていた。

アリサちゃんあたりから連絡が来たみたい。速人お兄ちゃんなら私の事を知ってると思っただろう。

「ごめんなさい…」

その事に関しては素直に謝るほか無い私は謝って…

お兄ちゃんに掴み上げられた。

「大方昨日から、自分は失敗したとか真剣にやらないとか…そんな事はっか考えてたんだろうけどな…」

ビックリした。私はそんなにわかりやすいのかと思った。すぐに顔に出るような性格はしてないと思うんだけど…

「そうやってお前一人で悩んで考えて決めた事が、まともな答えになる筈ないだろ。」

「…でも、これは私の」

「それでも、未熟な馬鹿一人が至った結論なんてろくでもない物だつて事位知ってるだろうが!!」

襟元を捕まれたまま壁に押し付けられた。少し苦しかったけど言えなかった。

お兄ちゃんのほうが辛そうだったから。

お兄ちゃんは…家に来るまでは一人で、殺さなきゃ殺されるっつてずっと思つてて…

それが原因で、野良犬さんを斬り殺した事があつた。

お兄ちゃんが来たばかりで、お兄ちゃんとも呼んでいなかった頃。

私が大きめの犬に追いかけられているのを見たお兄ちゃんは…

ポケットからカッターナイフを取り出して、何の迷いも無く犬さんの首に突き刺した。

大丈夫？って私に優しく優しい声で…血に濡れた身体で声をかけてきたお兄ちゃんが…

とつても怖かった。

次の日、お兄ちゃんに怖がらせてごめんと本当にビックリするほど真剣に謝られ…

そんな昔の事を思い出して、目の前のお兄ちゃんを見た。怒っていると言うよりは、むしろ悲しそうなお兄ちゃん。

「結論自体は、誰から何聞いたって決めるのはお前なんだ。だってら友達と話したり、俺や兄さん達に何かあってもいいだろ！！」
「け、けど…」

魔法のことは誰にも話せない。それは分かっている筈なのに、お兄ちゃんは今私を掴む力を強める。

「いい加減に気づけよ…そんな顔して『大丈夫』って言われて何も出来ない事が、一番皆苦しむんだって。」

何かに祈るかのようなお兄ちゃんの声に、私は何も返す事が出来なかった。

「魔法の事が話せないなら、事情があつて話せない事で悩んでる事だけでも伝えたらいい。フェイトが立派な戦闘者だから自分が甘い駄目だ何て思ってるのかもしれないけど、お前は練習とか真面目にやってるし、びくびく怯えて出てる訳でもない。心を硬く冷たくするのが甘えの無い強さだ何て、俺は絶対認めないからな!!!」

お兄ちゃんは、私と違って甘くない世界で過ごしてきた、そこであつた悲しい事を否定する為にヒーローになろうとしてる。子供っぽくて、我侭な部分もあるかっこいいヒーローに。

その子供っぽさはきつと、努力とか、全力とか言う事とは関係なくて…

「…お兄ちゃん。私、強くなりたい。ジュエルシードこれ以上捕られるのも嫌だし、あの娘からなんの話も聞けないままじゃ嫌だ。」

まっすぐに言うと、それまで怒っていたお兄ちゃんは私を放してくれて、頭を撫でてくれた。

「そういう事を言ってくれるだけで十分だ。自分で決めるのはいいが、少しは手伝わせる。」

お兄ちゃんはそう言って笑う。

思えば、お兄ちゃんは初めからやろうと思えば自力であの娘達を何とかできた気がする。それでも私に任せてくれた。きっと、私が彼女と話したいと言ったからその機会を作る為にわざわざ時間稼ぎに徹してくれたんだろう。

初めから…私一人の事じゃなかった。

悩むことも迷う事も無い。私は決めただ、話を聞きたいって。だったら、考え込むよりする事がある。

「でも、アリサとすずかにお前なりに言える事全部言ってからな。」
「う…うん。」

気まづかったけど…友達だから。

きっと物凄く簡単な話で、私だってアリサちゃんやすずかちゃんが一人で落ち込んでいるのを見ていただけなんて出来ない。

だったら何も言わずにはいられない。魔法の事は話せなくても、私の気持ちはちゃんと話すべきだ。

話せない部分についてはかして素直に思ってた事を話して修行をする事を伝えたら、アリサちゃんのお家から『子供用栄養ドリンク』一月分、すずかちゃんのお家から『救急セット』が届けられた。

手書きの手紙が添えられたそれは、なんだかとっても暖かかった。

S
I
D
E

O
U
T

第九話・敗北の後に（後書き）

喧嘩のタイミングは早くなっています。

第十話・甘いからって弱いとは限らない

第十話・甘いからって弱いとは限らない

なのはと修行をしながら数日がたった。

一応程度には身に着けてみたけど、どうにも心もとない対空攻撃手段。

普通に魔導師がでてきたとなるとちよつと俺も地上限定戦力やつてる訳にもいかない。

となると、空を飛べるようにならなきゃ…

と、そこまで考えて、自分の考えが間違っていた事に気が付いた。

『ユーノ、お前攻撃以外ならいろいろできるんだよな?』

『え?ま、まあ情報の検索とか、防御・補助とかが得意かな。』

『よし、ちよつと頼みがある。』

俺が計画を伝えると、ユーノからは呆れたような驚いたような反応が返ってきた。

で、街中で大きな魔力の反応があつて現場に向かう。
ユーノが手早く結界を展開してくれたお陰で騒ぎにはならなかった
ようだ。ありがたい友だ。

「フェイト、とりあえず封印でいいな？」

現地にいたフェイトに向かって声をかける。と、人型のアルフに睨
まれた。いいじゃん別に…どうせ封印までは勝負もなにも無いんだ
し。

「あ、はい。」

「フェイトお!?!」

と、同意だつたらしく返事を返してくれたフェイト。ちょっと悲し
そうなアルフが哀れだった。

「んじやなのは、きっちり合わせろよ。」

「お兄ちゃんは封印には関わらないんだからそれはどうかと思うの。
」

せっかく先導したと言つのに、なのはからキツイ一言を返される。
ひっでえ…お兄様は傷つきましたよ…

封印魔法の打ち合いが終了して、ジュエルシールドが残される。

「さてと…ユーノ、頼むぜ！」

「判つた、任せるよ速人。」

ユーノが俺の肩に来る。俺はユーノをつまみあげ…胸ポケットにし
まった。

「俺様新形態！フェレットデバイス装備モード！」

空気が凍った。

なんだいなんだい！コレでも知恵を振り絞って考えた戦闘形態なんだぞ！！

「アンタさあ、馬鹿にしてんのかい？」

アルフから呆れたような声が返ってくる。フェイトとなのははなんか困ったような人を見る顔をした。

く、くそー…この状態の俺の実力を見てから後悔しても遅いんだからな！！

「へっ…そんな事言ってられるのも今のうちだぜ！！ユーノ、バトルフィールド展開！！」

「了解。行くよ！！」

俺のポケットに納まったユーノが魔法を発動させる。

瞬間、アルフを囲うようにいくつもの魔法陣が展開された。

「…なんだいこりゃ？ 防御魔法でもないし、攻撃の気配もない。いったいコレが何だって言うのさ。」

「コレは…足場？っアルフ！！」

フェイトは気づいたらしいが遅い。俺は魔法陣に向かって飛び込んで…

アルフの上を取った。

「なっ…」

「そりゃ！」

上空からの打ち下ろし。アルフは回避するが、俺は地面に落ちる事無く魔法陣に着地。そこから更にアルフに飛び掛った。

スクライアー族がやってたのが遺跡発掘だって聞いて、更にユーノが補助のスペシャリストだって言う事から導いた結論。

足場形成の魔法陣を空中に多数展開してもらっての空中格闘戦。

飛行する必要など無い、俺の本領は…地を駆けて敵を切り裂くこと！！斬らないけど。

「くっ…けど垂直のコレは」

「あ、壁走りくらいなら出来るんだぜ？」

と、俺はほぼ横向きの状態で駆ける。

アルフは引きつった顔で俺の走っている魔法陣をぶっ叩く。防御でもなんでもない魔法陣は簡単に砕けるが…

そんな事は予測済み！

「余計な事してるとアツサリ落とすぜ！！」

「つく！」

『徹』の一撃を肩口に叩き込んで地面に向かってぶつとばす。

俺はなのはとフェイトに少しだけ視線を移して、アルフを引き離す事に専念した。

「アンタねえ！一体何なのさ！敵かと思えばアタシ達を逃がしてみたり、遊んでんのかい！？」

俺がふざけている様に見えるのか、怒りを隠さないアルフ。って言うか、単にフェイトの邪魔をする奴が全員気に入らないだけか。

「まあ俺としてはアンタが大人しくしてくれらんだったら何もしなくてもいいんだけどな。けど、ご主人様ってんじゃ放置も出来な

「いだろ？」

「当たり前だ！よくわかってんじゃないのさ！！」

空中に逃げられないと判断したアルフは、俺に向かって突進を図る。振りぬかれた拳を片手で逸らし…

「寸掌。」

カウンターで、踏み込みからの掌打を叩き込む。鳩尾にもろに入つたアルフはそのまますつ飛んでいって地面を転がった。

「ユーノ、大丈夫か？」

「う、うん。攻撃したり防いだりって訳じゃないからそこまで極端には魔力を消費しないから。」

そうは言うが、数も多いし疲れない事は無いだろう。行動不能まで持ち込みたいが、そこまでするのは二人に悪いしな。

と、起き上がったアルフが若干苦しそうに鳩尾を押さえたまま俺を睨む。

「くっ…何だつて素手であんな威力が出るんだい？」

「アンタが強かったんじゃないのか？」

素直に返したが、なぜか不思議がられた。

どうやら、カウンターって現象さえ知らなかったらしい。狙って出来ないにしてもそりゃ無いだろ…

「俺はアンタを止めておくことが目的だし、こうしてのんびりしていてもいいんだけど、どうする？」

「当然…こんな程度で止まってらんないね!!」

犬型に変身するアルフ。

なるほど、さっきまでの対人格闘は使えないか。

「けどなにもわからないままぶつかり合つのは……私、嫌だつ!!」

少し離れた場所からなのは声が届く。…ちゃんと話せてるみたいだな、なら邪魔させるわけには行かない!

「投弾丸『スローバレット』!!」

「ちっ…んのっ!」

俺が放った投擲物を回避したアルフはそのまま突撃してくる。

『防御はいらない、任せろ!!』

ダッシュで接近して、スライディング。通りざまに尻尾を掴む。

「何すんだい!」

「対戦相手のやる事に文句を言うなんて…一流のやる事だぜ!!」

後ろ足の脛にあたる部分に峰打ち。痛みを堪えて離れるアルフ。あんまり距離を放すとなのはの方にいかれるからな、距離をつめない
と…

「…これが…私の理由!!」

と、なのはの叫びが届く。少し二人の方に視線を移せば、フェイト

は躊躇いを見せていた。自分が犯罪を犯していることも、俺達がいる世界で暴れていることも理解してるだろうし、フェイトを責める気も無いなのは魂の叫びは効くだろう。

「っ…わたしは…」

どうやら話してくれそうだ。無駄にならなくて何より…

「フェイト!!言わなくていい!!」

アルフが、言いかけたフェイトを止めた。
それだけなら…俺もまだ大人しくしてられたんだ。

「優しくしてくれる人たちに甘えてぬくぬくと暮らしているがきんちよになんて何も教えなくていい!!!!」

こんな…ふざけた事言わなければ。

「が…い、糸？」

俺は、左手の鋼線をアルフの首に巻きつけた。

…甘くて何が悪い。

何の意味もない現実とやらの中で諦めと妥協で死体を積み重ねた日々。

それを終わらせてくれたのは、敵だった俺を殺さずに済ませてくれた戦士としては甘いとしか言いようの無い選択だった。

血に塗れた俺に幸せや優しさの意味を教えてくれた人達…

なのはだっけ紛れも無く、その中の一人なんだ。

それを…よりによって主人が犯罪者になろうとしてるのを手伝ってのような馬鹿に侮辱されて大人しくしてられるか！

「こんの馬鹿ヤロー…お前主様の忠実な僕なんじゃないのか？話そうとしたのを何でお前が止めてんだよ。」

「私は…フェイトの僕さ！だからその目的をなすために余計な事を止めたまで…」

引きちぎろうとするアルフ。だが、元々かなりの強度があるこれは、切断でもしなければ切れる物じゃない。

「フェイトの為に意に沿わないことが出来るなら…そもそも犯罪者

になる前に止めやがれ！！このくそつたれが！！！！」

俺は鋼線を引き寄せながら跳躍してアルフの首に『徹』の峰打ちを叩き込む。

グラリとアルフの体が傾いた。

巻き付いた鋼線を切り離し、前足の脛を左右の刀で…斬り付ける。かなりの強度がある筈だが、さすがに刃を直接受ければ怪我をするらしく、血を流して前のめりに崩れ落ちる。

「あ、アルフ！！」

「ぐっ…まだまだ…」

フェイトがアルフを心配して、アルフがありつたけ憎悪を込めて俺を睨んでくるのはいいんだが…

「お、お兄ちゃん！！ワザと怪我させるのは駄目だよ！！」

「そ、そうだよ速人！捕らえただけで充分だったじゃないか！！」

我が妹と装備中のフェレット様からまでお説教と相成りました。

「あ、あれ？俺味方なし？」

さすがにちょっと泣きたかった。って言うかなのは！今ボロクソ言われてたのお前じゃん！！何それ酷い！！

「ち…っ!!」

と、アルフが魔力弾を、俺の前の地面に着弾させる。
砂埃が舞い上がり視界が奪われる。

「今だフェイト!!」

…いやアルフさん？俺はジュエルシールドに手を出す気はないんっすけど？

物凄く切羽詰ったアルフの声に反応したフェイトが、ジュエルシールドに向かう。なのはも負けずに飛び出して…

ジュエルシールドに二人のデバイスが接触して、あたりを光が包み込んだ。

辺りの光が収まったとき、光り輝く…明らかにやばい状態のジュエルシールドがあった。

「っち、魔力で押さえ込めばいいんだっただな!!」

俺は全力で発動中のジュエルシールドに近づき、ジュエルシールドを握

りこんだ。

「な…アイツなんて無茶を…」

「くそつたれ…ユーノ、手伝ってくれ！一人はちょっとキツイ！」
「わ、判った！！」

ユーノが魔力を上乗せしてくれる。が…一向に光が収まらない。

何か意識までやばくなってきた。こりやまずい…か？

と、俺の手の上に何かが重ねられる。暖かいそれから送られてくる魔力が、ジュエルシードを抑え込んだ。

「な、何とかなった…大丈夫ですか？」

光が収まって余裕が出来た俺は、自分の手を包み込んでいる人が、フェイトだったことに気が付いた。

「あ…フェイトか…サンキュー。」

握り込んだ手が上手く離れてくれない。よく見れば、何と言っかズ

タズタに手が裂けていた。

神経やってたら、握るだけの刀はともかく、指鋼線は操れなくなるかも…

俺はそつと手を離して、ジュエルシードを乗せた手をフェイトに差し出した。

「いいよなユーノ、今回俺らだけじゃ死んでたし。」

「…矜持…でしょ。」

それだけ言っただけ黙るユーノ。嬉しさ半分申し訳なさ半分感じる。

「あ、あの…」

「フェイト、貰えるってんならさっさと貰ってこつよ！」

俺の手を見て躊躇うフェイトを急かすアルフ。

フェイトは俺の手から恐る恐るジュエルシードを取る。

「…貴方の…名前は？」

「あ、そついや名乗ってなかったか。俺は高町速人、なのはの一個上の天才お兄様だ。」

笑顔で名乗る。

フェイトは俯いて去ろうとする。

「フェイトちゃん…！」

そんなフェイトを呼び止めるなのは。フェイトは首だけ返して、なのはを見る。

なのはは振り返ったフェイトに向かってお辞儀する。

「お兄ちゃんを助けてくれてありがとう。」

フェイトは何も答えず、そのまま去っていった。

「つたく、照れるぞ妹よ。」

「速人、あんまり無茶しないでくれよ。ジュエルシードのせいで速人に何かあつたら僕トラウマになっちゃうよ。」

大丈夫大丈夫。兄さんとの訓練よりきつい事なんかそうそう無いんだから。

と、そこまで行って俺は自分の声が聞こえてきてない事に気が付いた。

「お、お兄ちゃん？」

「あ…わり、ちょっと無理みたい…」

俺は意識が遠のいていくのを感じながら…

「お兄ちゃん!!」

なのはの声を最後に意識を手放した。

第十話・甘いからって弱いとは限らない（後書き）

飛行魔法もあるので少し悩んだけど、遺跡発掘となればこの手のものは使う機会があると思ってやっっちゃいました。

第十一話・新たなる魔導師（前書き）

PV100000...!?!?!ありがとうございます!

第十一話・新たなる魔導師

第十一話・新たなる魔導師

その後、俺はユーノの治療を受けて、なのはに運び込まれたらしい。

手の怪我は魔法による治療で見かけ上はほぼ塞がって、内部のダメージ自体もそんなに長くかかるものじゃなかった。

…にしてもなのは、射撃ばっかやってた筈なのにいつのまにデバイス無しの身体強化なんて出来るようになってやがった？

なんて…聞く余裕はありませんでした（笑）

「速人お兄ちゃん…なのははとっても怒っています。」

でしょうね！敬語になってますし、目が据わってますよ？

具体的に状況を説明するなら、回復した俺は「よく寝たー」って感じで部屋を出て、ユーノとなのはに昨日の事情を聞こうとなのはの部屋に来て…

正座させられましたよええ即行で。

「…心配したんだよ？」

「ワリ。でもまあアレ暴走してたらどの道この町ぶっ飛んでたし、ずいぶん被害少なくなって良かったなー…じゃ駄目？」

「駄目なの！！！」

あ、やっぱり？正直今回ノリで突っ込んだ感も否めない上、魔力量に定評があるなのは助けをすぐに借りようとしなかったのも減点対象だろうし、何より兄さんに帰って来いって言われてたのに、妹に担ぎこまれちゃ…

「本当に心配したんだから…お兄ちゃん…あんまり魔力もないし…何かあつたらつて…っ…」

泣きながら何気に酷い事を言ってくれるのは。でも、泣かれちゃ突っ込めないよな。

「速人、ごめん…僕ももう少し力があれば…」

「気にすんな、何とかなつたんだし。」

うなだれるユーノに微笑みかけて…

「気にするの…!」

「ハイ…」

泣きながらの妹君に思いつきり怒られました。はあ…なのはに自分の無茶をやめてくれって言うのは無駄なのにねえ…

S i d e 〱 フェイト 〱 テスタロツサ

現状の報告に時の庭園に帰った私を待っていたのは、怒った母さんと…

見知らぬ女の子だった。

「…何のつもり？」

「意味が無い体力の消耗です、フェイトにとっても貴方にとってもこんなことしてる暇があるなら回復なり研究なりに費やして下さい。」

縛られた私に振るわれる鞭を止めた女の子は、静かにそう言った。

「ジュエルシードを早く集めたいのでしょうか？ だったらこんな時間も惜しいはず。余計な事をして願いが叶わなければそれこそ無駄でしょう。」

母さんは少し考えるようにした後、私の戒めを解いてくれた。

「そうね、確かに時間は惜しい。早く行きなさいフェイト、今度は母さんを失望させないで。」

「ハイ……」

開放されたものの、私は素直に喜べなかった。

結局、母さんの願いには届いてなかったし、いきなり私の前に割って入ってきた彼女について何も知らないから。

「自己紹介が遅れました。私はリライブ、ジュエルシード探索の為にプレシアに雇われた流れの魔導師です。貴女のサポートをします。」

「…… 必要ない。」

私は彼女を置いて戻ろうとする。と…背中から彼女の溜息が聞こえて…

「そうやって、また期待を裏切る結果を持つてくる気ですか？」
「っ！」

私は彼女の言葉に振り返る。私と殆ど変わらない年に見えるその娘は、肩を落として呆れていた。

「私はプレシアに雇われた身です。貴女が無茶をしようとする結果がでなかるうと関係はありませんが、プレシアからそれなりの給金を貰っている私に何もさせない気ですか？」

「それは…」
母さんがわざわざお金を払って雇った人。つまり彼女は母さんの判断でいる。

私が言っている事のほうが我侷なのだろう。

と、リライヴは私の傍まで近づいて、私の両手をとる。

癒しの魔力が流れてきて、速人の封印を手伝った時に出来た傷が癒えて行つた。

彼女は綺麗に笑う。

「大丈夫ですよ、私はあくまでサポートです。ジュエルシード収集

の功績はあくまで貴女のもです。貴女が全力で戦えるようにするだけですから、プレシアを喜ばせるのも貴女の力ですよ。」
「う……」

見透かした様な、それでも否定できないリライヴの言葉。
悪い人じゃないのだからうけど、何か嫌だった。

S i d e 〱 クロノ〱 ハラウオン

ロストロギアがらみの事件が起こっている第97管理外世界、地球。

∴ ロストロギアが絡む事件は、欲に塗れた人間の陰謀にしる、無力な人間が手にした事による事故にしる、無条件発動にしる、その強大な力のせいでもろくな事にならない。

「今から気張ってて現地についてダウンしたらまずいんじゃないの？」

「問題ない、相手がロストロギアなんだ。緊張している訳じゃないし、気を張る分には張り過ぎと言う事はない。」

「一人、気張り過ぎな子が居るけどね。」

艦長の言葉に、この場に居るべき役一名がない事に気づく。…ま
ったく、またかアイツは。

「ちょっと行つてきます。」

「クロノ君も大変だ。」

僕はエイミイの言葉を否定する事も出来ずに、僕は訓練所に向かっ
た。

ロストロギア絡みで現地に魔導師まで居るといふ状況だったため戦
力を貰えないか依頼した結果、僕らが受け取った『厄介者』。

彼は、周りの事を一切気にする事無く訓練場でそのデバイスを振り
回していた。

一つ一つの動作が綺麗で、かなりの重さがある攻撃。

細く長い槍状になったデバイスの先端のみが、黒い光を帯びていた。

ミッドチルダ式デバイスを使用しているくせに完全近接戦という異
端スタイル。

何気ない一振り一振りが、AA程度の魔導師の防御魔法なら、防御
魔法を切り裂き、デバイスを断ち切り、バリアジャケットをパージ

させるといふ馬鹿げた威力。

魔力の全てを先端の一端に折りたたむ事で絶対的な破壊力を得て、立ちふさがる全てを貫く集束刃の使い手。

僕でも遠距離戦に徹しなければ勝つ事が出来ない実力を持つ。

人の気分などまるで考えない任務遂行人。

「いい加減に温存してくれないか？いざと言うときに消耗していは話にならない。」

彼はデバイスを振るう手を止めて僕にまっすぐに向かい合う。

「管理局は慢性的な人手不足。それで今の事件に当たる余裕が出来たとしても今後のためになるかは別問題です。私としては魔力や身体能力の成長の早い現段階で温存などという真似はあまりしたくは無いのですが？」

「本当に相変わらずだね、フレア。」

彼：フレア＝ライトは僕が引く気が無い事を察して、デバイスを待機状態に戻す。

彼は僕と同期で、訓練時代を共に過ごした仲だった。

「君の力はかなり頼りにしているんだ、肝心なところで疲れていてもらっては困る。」

「執務官ともあるう方が随分弱気ですね？」

「こういう台詞を嫌味でもなんでもなく平気で言うため、誰彼問わず扱いに困られている。」

「そういう意味での厄介払いなのだが、戦力としてはかなり頼りになる。」

「用心して過ぎる事はない、ロストロギアが関わっているんだから。」

「それだけではありません。今回我等が行くのは魔法を持たぬ管理外世界。ロストロギアの様な異物に対する対抗手段が無いはずです。必ずや無辜の民を守らねば。」

「どこまでも守る事に真摯な姿勢を見せるフレア。」

「こつこつ所も相変わらずなようだった。」

「地球に下りる時は近い…」

S I D E O U T

第十一話・新たなる魔導師（後書き）

とりあえずこれ以上オリキャラをぽんぽんと出す予定はありません。今回はフレア^{II}ライトについての解説を。

クロノと同期。と言う理由で今回戦力として放り込まれた。

次元世界の平和を守る事、犯罪者を捕らえる事、無力な罪の無い人を守る事に徹底してこだわる完全近接戦闘スタイルの武装局員。

近接戦闘最強と言われているが、あくまで異常な攻撃力のお陰で現段階では武術的な技能は身につけてない。

魔力光は黒。

デバイスは槍『グレイブ』。棒状に長く、先端に小さな刃が付いたものです。

第十二話・過去の罪と今の未熟を体現した『力』（前書き）

ちよつと無双入ってます。

第十二話・過去の罪と今の未熟を体現した『力』

第十二話・過去の罪と今の未熟を体現した『力』

「レイジングハート、大丈夫？」

『問題ありません。』

ジュエルシードに衝突したときに破損していたレイジングハートは、完全に修復されていた。

自動修復機能とか言うのがあつたらしい、まったく便利なものだ。

「よかつたよかつた。誰かさんの扱いが荒くて半壊したときはどうしようかと」

言つてる途中でなのはに睨まれる。

瞳が語つていた。『速人お兄ちゃんの台詞じゃないの！』と。

念話ですらない、妹がいつの間にやら見につけていた特殊技能（笑）

に驚きつつ、先日の無茶でまだ睨まれてる俺にはなのはに逆らう権力がない事を自覚した。

少し疲労していることもあって、ここ最近よくお世話になっているアレを使うことにした。

「疲れたときにはこの一本ってね。」

「にははは…結構助かってるよね。はい、ユーノ君も。」

「ありがとう。」

アリスが送ってくれた栄養ドリンクを煽る俺達（ユーノよく持てるな）。

飲みきってビンを片付けた所で、ジュエルシードの反応があった。

「レイジングハート、封印の時にくたばっちゃっても困るから俺がたた」

「じー…」

「イツシヨニガンバロウナ！ミンナ！」

俺の意見はなのはの視線によってつぶされることが確定した。

「速人…立場弱すぎるよ…」

ユーノが何故か呆れたように溜息を漏らしていた。うるさいユーノ、お前が逆らってみろ。

暴走した木の元には、既にフェイトの姿があった。
どうやらバリアに苦戦させられているらしい。

「バリア越しにダメージを与えるのは出来るけど、物理ダメージな
上バリアは破壊できないしなあ……」

「じゃあお兄ちゃんは下がってて、私とフェイトちゃんできるとかす
る。」

フェイトが既に協力者になってるあたりはさすがな順応力だ。ま、
俺らの命の恩人だしな。

「デイベインバスター！」

「サンダースマッシュャー！」

…真人間にはキツイ光の柱が二つ激突し、あっけなく木は沈黙した。

俺ここで戦ってるんだなあ…と、若干自身の境遇を微妙に悲しみつ
つ、俺はアルフに視線を移した。

何か今回アルフはフェイトの傍を自らはなれていた。…少しはタイ
マン認めてもらえたのかな？

「フェイトちゃんや、お兄ちゃんに比べてきつと甘いって言われて
も仕方ないんだと思う。でも、それでも私はフェイトちゃんに話が
聞きたいの。だから……」

レイジングハートを構えるのは。

「ただ甘ったれた訳じゃない、それを認めてもらえたら…私がフェイトちゃんに勝てたら、お話聞かせてくれる？」

それなりに修行も積んできた。だけど一流と渡り合うには圧倒的に期間が足りなさ過ぎる。フェイトのほうもそれを判っているのか、静かにデバイスを構えた。

「…別にいいよ、私にはもう負けてる暇は無いから。その代わりに女が負けたならジュエルシードを置いて二度と現れないで。」

フェイトの要求に対して、なのはの方も何の躊躇いもなく頷いた。つたく、勝てる保証も後の考えもないだろうに、よくそんな事に頷けたもんだ。

二人の間に緊迫した空気が流れ…

互いが駆けた。

いきなり接近戦かよ！

と、内心愕然とした瞬間…

「ストップだ！ここでの戦闘は危険すぎる！」

二人の間に、一人の人影が出現した。

「時空管理局執務官、クロノ＝ハラオウンだ…詳しい事情を聞かせてもらおうか？」

ぶつかろうとしたのはとフェイトの間に、クロノと名乗った黒い服の男が割って入る。

フェイトの一撃をデバイスで、なのはに至っては素手で止める。

「フェイト！撤退するよ！！」

アルフが攻撃を仕掛け、その隙に離れるフェイト。

だが…アルフは閃光のような高速の一撃を受けて地面に叩き付けられる。

「時空管理局、フレア＝ライト三等空尉だ。」

「く…っ…！！」

倒されたアルフを横目にジュエルシールドに飛び掛かるフェイト。だが、ジュエルシールドに届く前にクロノの放った閃光に背中を撃たれた。

フェイトのバリアジャケットが破け、外傷が出来ていた。

「っお前ら！何やって」

「止まって貰おう。正当な魔導師でないとはいえ加減は出来ん。」

そう言って俺に槍のようなデバイスの先端を向けるフレア。

フェイトはジュエルシードを諦め飛び上がり

アルフもその後につき

なのはの悲鳴に視線を移し

拘束されたなのはと、フェイトにデバイスを向けるクロノを見て…

完全にキレた

心拍数が落ちる

殺気も敵意も感情全てが落ちていく

冷えきったまま身体に何かを流し込んだように力が満ちていく

暗殺者として完成した俺のみに許された力

完全気配遮断

一手目 アルフに視線を移して何かをしようとしていたフレアに接近、耳の裏に刀の柄で『徹』を叩き込んで三半規管を麻痺させる。

二手目 フレアの後頭部を掌打で打ち抜く。

前のめりに倒れるフレア。戦闘不能と判断。次 対象は人質を拘束中。

対象から音声が発せられるが、詠唱の類いでは無いため放置。

接近にあたり、弾膜を張られたため地面に倒れるように回避。地面に手を付け、そこから更に加速。

三手目 投弾丸。デバイスを握る手に直撃。骨が碎ける音とデバイスを取り落とした事を確認。

四手目 溜めをともなった正拳突き『吼破』。その要領で刀を突き出す銃刺突『ガンブレード』。対象の肩を貫き木に縫い止めた。

五手目 もう一刀を抜き、対象の首に添える。

「私はこの地を守る者です。今現在彼等には児童への傷害罪と拉致監禁未遂の容疑がかかっています。任意同行していただけない場合」

殺すと言つ意を伝えようとして…

ふと聞こえた、甲高い音声に視線を移す。

大粒の涙を零す少女の姿が見えて…

馬鹿か…俺は！！

自分の額に全力で拳を叩き付けた。

鈍い音がしたのを確認して、深呼吸。

心拍数が戻るにつれて、冷え切った感情も戻って来る。
今すべきは脅迫じゃ無い。こっちの要求と方針を伝えて、向こうが
どうするのか聞くこと。

それに…守らにゃならん妹を泣かせてどうする…!!

俺はクロノの首に突き付けた刀をしまい

「任意同行していただけない場合、高町家による私情満載の裁判により『ネエサンノリヨウリ』と言う劇薬を死ぬ程投与されまーす。住民票もパスポートも無い時空管理局の代表さん、ジュエルシードを全部ちゃんと持って帰りたかつたらキッチンと降りて来て下さいね。」

いつもの笑みに戻して空に向かってそう言った。

第十二話・過去の罪と今の未熟を体现した『力』（後書き）

やりすぎですね（笑）。

完全気配遮断の設定他・感情的なものをなくすことで敵意や殺気をなくし、生命的なものを抑える（心拍数など）事で存在そのものを希薄に感じさせる。その状態で躊躇い無く敵対するものに対処することが出来る。

便利なものの、敵と認識したものに対しての対処が事務的になるため、殺人も顔色一つ変えずに行ってしまうので、その辺りの制御が利かない内は使用しないよう心掛けているが、今回は無理でした。ちなみに、脳内麻薬の操作等によって身体能力の調整も若干可能ですが、引き上げすぎるとしばらくして後遺症が出ます。

第十三話・今後について

第十三話・今後について

S i d e 〱 フレア=ライト

一瞬だった。何も出来なかったと言っていい。
近接戦特化の空戦A A +、それが私を示す称号だ。接近戦のみという条件下ならばオーバーSとすら渡り合えるだけの自信があった。

だが…何も分からないまま倒された。

衝撃を感じた瞬間身体が傾き、自由が利かなくなった。

そのままもう一撃何かを受けて、私は意識を失った。

気がついた私は、降りて来ていたリンディ艦長に事情を聞き、耳を疑った。

まず、私が倒れてすぐにクロノ執務官も倒され重傷を負ったという。その後、私達を倒した者がこの世界の法律機関に縁のある者で、私

達が逮捕されるのを避けるため、また、クロノ執務官の治療もあって、数名でアースラを降りて来たという。

管理外世界とのいざこざはよくある話だ、ロストロギアが関わる上、この世界で法律違反ともなれば慎重にならざるを得ない。

そこまでは…良かったのだ。

問題なのは、私達を倒した者が魔力を一切行使していなかった事と…

その少年が…クロノ執務官についてで倒された未熟極まりない素人魔導師に、砂地に足を折り畳んで説教されている事だった。

管理局にも一握りしかない実力を持つクロノ執務官と私が、あんな子供に魔力行使もなのまま片付けられた等という馬鹿げた現実は、今の私には到底受け入れられそうになかった。

SIDE OUT

とりあえず我が妹君の怒りが収まってくれたので、管理局の人達との交渉に入る。

この要求、向こうさんにはルール違反には違いなし結構な無茶なはずだが、ここが管理外世界なのとさっきクロノ達がやったこつちでの犯罪について使って上手いこと進めるしかない。

「えー…まず事前に言っておくと、俺自身別に皆さんがジュエルシードを回収してってくれるのには何の文句もありません、はい。」

アレだけボロクソに暴れておいて今更と言えば今更な発言ではある。

「君はふざけているのか！人に重傷を負わせておいて！！大体この世界の法の事を言うのであれば君だって銃刀法違反だろう！！」

そりゃそうだ。と、怒鳴りかかって来たクロノに対して思う。

一応こつちの世界の法律についても把握してたのか。まあ相手が子供だったからこんな事態になるとは思わなかったんだろう。ふ…相手が悪かったなクロノ。

それにしてもさすが俺。クロノの肩の傷は急所はキレイに外せたよ
うで、ほとんど治療に問題は無かったようだ。
無事で何より。と思つて笑いかけたのだが…

めっちゃ睨まれました。

うう…怒ってるよなあやっぱ…石当てた指は骨が砕けてたらしいか
ら魔法でもアツサリ治るって訳にはいかないらしい。

「詫びるべきはこちらでしょう。呼び鈴も鳴らさず家に入って来ら
れてはどんな番犬でも怒ります。」

と、フレアって奴がフォローして…くれたのかと思つたが、俺を視
界に入れる事もなくリンデイさんとやらに視線を移している所を見
ると、完全に事務的な意見なのだろう。

「まあその話は彼の話が終わってからにしましょう？フレア空尉。」
「了解しました。」

リンデイさんは微笑んでいる。組織のトップなりに油断は無いみた
いだが、それを除けば優しい人みたいだ。普通の堅物ならこの状況
で笑えねえ。

「で、えつとですね？話を続けますと…俺としては許せなかったの
はフェイトとアルフに行った攻撃です。アレ物理的なダメージあり
ましたよね？」

何しろジャケットが吹っ飛んだだけで無く傷が出来ていた。なのは拘束しておいてアレはないだろう。非殺傷設定ならば与えるダメージが魔力になるし、魔力が減るなら魔法行使もし辛くなるのは当然。捕らえ方としてはそちらが妥当だと思う。

「手加減はした！それにジュエルシードの強奪を計ったんだぞ！？当然」

「クロノ執務官、今は彼の話聞きましよう。」

リンデイさんは大人だからか、油断無い視線を俺に向けたままあくまで静かに続きを促す。

「恐らく貴方達のとこの法だと大罪何でしょうけど、こつちでは単に青いキレイな石を拾い集めてるだけで怒られる事はありません。保れどどこか未成年にそう言う罪状はまともに対応されません。保護者が責任を負って、子供の方は必要なら常識を学習したりする程度です。間違っても外傷を受けるような類いの攻撃をされる罪状じやありません。」

そこで一旦言葉を区切る。三人を見回すが、特に言う事も無いようだ。

「加えてフェイトは俺とこの世界の命の恩人です。アレを処理すべき貴方達の対応遅れで大惨事になる所だったと言うのに、それを抑えてくれた協力者を逮捕するなんて言うなら、素直にジュエルシードを渡す訳にはいきません。」

「何だと！！」

クロノが怒りをあらわにする。俺は両手を前に出して落ち着くように言う。

俺は別に恨み云々でこんなこと言ってる訳じゃない。

「こんな物管理してるなら分かると思うけど、信用出来ない人に預ける訳には行きません。で、現状命の恩人で友達のフェイトの方が、友達を撃つて妹を拘束した貴方達より信用出来る。それだけの話だから別に悪用の心配はしなくていいですよ。」

言っでは見るが、向こうの立場を考えると無理があるだろう。そう考えていたが…

「まあそうね、今あるジュエルシードについては預かっておいて貰いましょう。」

「艦長!？」

組織のトップが、アッサリとそう言った。

俺は自分でジュエルシードを渡せないとか言っておきながらずっこけた。

「あ、あのお…自分で言っというてなんですけど、それでいいんですか?」

「よくは無いわよ?だから信用してもらって早く預けてもらわないとね。」

微笑むリンディさん。んな馬鹿な…むしろ疑わしいわ!

「フェイトさんの方は難しいわね。私達の方で住民登録されていれ

ば私達の方で裁判をしなければならぬわ。こちらの出身なのはほぼ間違いないでしょうし。」

「あの娘がそんなものから逃げる訳ありませんよ。だから散々逮捕するなどは言ったものの、捕まる事自体はしょうがないと思っす。」

アレだけ庇っておいてそりゃないだろうと言うように掌を返した俺の対応に、リンディさんも驚いていた。だけど、俺が頼みたいのはそんな事じゃない。

「俺は別で知り合って仲良くなったけど、なのはがまだフェイトに認めて貰ってない上、聞くことも話す事も何も出来てない。その辺をこっちのやり方でやらせて欲しいんです。」

「また難しい注文ね…逮捕方法を制限するなんて。」

渋い顔をするリンディさん。それは当然予測していた。だから…

「難しいことは無いですよ。単に『現地の住民の協力の元仲良く事件を片付ける』か、『俺を敵に回して、管理外世界の住民と戦いながら事件を片付ける』かを決めて欲しいだけです。俺は一つも嘘付いてませんから、管理局としての冷静な判断でいいですよ。」

途中予想外の展開はあったが、ようは話をここに持っていくための説明でしかない。

俺の締めくくりに、クロノは言葉を失って呆然としていた。

正直、リンディさんを引きずり降ろしてまでやりたかったのは、脅迫でもなんでもない。

こっちの言葉向こうがほいほい呑めない事位は判っている。

だから、俺の望み、行動指針を伝えて、協力するか敵対するかを決めたかっただけ。

まあ、なのは流に言うなら、『何も判らないままぶつかり合うのは嫌だ』って所だ。

何しろ、フェイトとなのはに話す機会を作るのは俺の『決定事項』だ。向こうがどうしようがそこは変わらない。

それに捕まるのはしょうがないって言ったって、俺としては出来る限り上手いことってほしいのには違いない。部外者の横槍で怪我させるなんてもってのほかだ。

単に管理すべき危険物のために来たなら別に一緒に行動しても問題ないはずだし、逆に犯罪者と問答無用にフェイトを捌くために来たなら、敵対してでも守り抜く。

後はリンディさんの決定次第なんだが…

「クロノ執務官とフレア三等空尉の罪状の取り消しと引き換えでいいかしら?」

「艦長!」

承諾すると思っていなかったのか、クロノがリンディさんに向かって叫ぶ。

「クロノ執務官、そもそも我々が彼に負けなければこんなややこしい事態にはならなかったのだ、現状や艦長の決定に文句があるのなら貴方だけ出頭しますか？」

「ぐ…」

フレアの静かな指摘に齒噛みしながら俯くクロノ。自分で仕向けていてなんだが哀れだなあ…

「なのははフェイトと話したいんだろ？ だったら現状維持だな。」

「あ、うん…」

今の話がよくわかっていないのか、フェイトと話すという点だけに反応して頷くなのは。ま、こんな会話についてわかる必要なんてまったく無いからいいんだが。

「で、ユーノはどうするんだ？」

ユーノについてだ。元々ジュエルシードが危険物だから回収しに来たユーノにとってフェイトの件はまったく関係ない。

「僕は二人と一緒に居るよ。ジュエルシードを管理局預かりにしない間は監督役もいるだろうし、何より僕でよければ二人の力になりたいからね。」

そう言つてユーノは微笑んだ。：ありがたい話だ。

「フェイトさんについて貴方達は自身の判断で動く、それでいいのよね？」

「あ、ハイ。十分です。」

正直ジュエルシードについては安全確実に持つていってもらえたらそれで十分だ。回収について手伝つのも元々この世界に落ちてきたものから町を守るってだけの話。

話が上手すぎて怖いくらいなのだが…

「ジュエルシードの回収を手伝っていただくにあたって私達と行動を共にして欲しいのだけど、明日からしばらく私達の艦に来れるかしらっ。」

「そう言つ事なら家の人に許可とつて来ます。」

正直望む展開になっている以上、文句は無かった。

Side↳リンディ⇨ハラウオン

彼らが去つてアースラに戻った後、私はクロノに詰め寄られていた。

「アレでは脅迫に屈したようではありませんか！彼らが増徴したらどうするんです！」

クロノの言いたいことはわかる。彼らは子供だったし、何もかも上手いこと行った事によってこの先何か下手な事にならないかを危惧しているのだろう。

けど…

「それは無いわね。少なくともあの速人という子に限っては。」

勘に過ぎない。そう言われては否定する言葉は無かったものの、確信に近いものがあった。

「ワザと軽めに話してみたけど、彼むしろ不思議がついていたもの。それに…貴方とフレアはただの子供に倒される魔導師なのかしら？」
「それは…ありえませんが。」

断言するクロノ。頼もしい息子に育ってくれて何よりね、本当。

「魔法の無い…非殺傷設定の無い世界で刃物を扱って組織の厳しさについて知っている。クロノ、貴方もさっき言っていた通り、この世界で彼は銃刀法違反って言う法律違反に当たるわよね。あの年では働けないはずだし。『普通なら』。」

「それは…」

クロノは答えに行き着いたのか言葉を詰まらせる。

どうしようもなくなれば町事焼き払う引き金を引く私達でも、あれほど何の躊躇いも無く刃を振るう子供なんて見た事が無い。ましてや正気のまま冷静になど。

それが当たり前になるような環境に居なければ、たとえどれだけ強くてもあんな事は出来ない。

「私達だって慈善事業と言う訳ではないけれど…彼には戦って欲しくないものね、いろいろな意味で。」

彼を敵に回して事態を収めようと思った場合、この町ごとでも彼を消す必要すらでてくるだろう。

何しろ正面から当たった場合クロノとフレアですら相手にならない事が判明しているのだ、正直どうしようもない。

その上、ジュエルシードを搜索していたのが二人と言うだけで、彼があの時魔力を行使していなかった以上、もっと腕の立つ大人が居てもおかしくないのだ。

選択を誤れば彼以上の腕の集団がひしめく中でそれを敵に回しつつジュエルシードの搜索をしなければならなくなる。

それに比べたらちょっと融通利かせたほうがはるかにマシと言うものだ。私達は町を滅ぼしに来たのではないし、殺し合いに来たので

もないのだから。

それに何より…

個人的には、自身の額から血を流すほどの力で拳を叩きつけてまで止めた刃を、友人の為に状況次第では私達とすら戦うと宣言した彼にもう一度振るわせる気にはならなかった。

S I D E O U T

第十三話・今後について（後書き）

ちよつと無理があるかという気もしますが、容赦お願いします（汗）。

子供の幼稚な要求がすんなり通つたことを不思議がる速人と裏まで想定した上で安全策をとつたリンディの考え違いでした。

組織は無いですけど、二人に下手な事したらフェイトを瞬殺（死んでないけど）した妖狐（久遠）と単純な剣では桁違いに強いKYOYAの異名を持つ御神の剣士等を敵に回す以上充分正しい選択かと思いません。

第十四話・暖かい声を背に事件の終わりへ

第十四話・暖かい声を背に事件の終わりへ

「と言う訳で事情も説明出来ないんだけどしばらく家を空けたいんだ。学校も休む事になるけどいいかな!？」

「いいぞ。」

いくらなんでも無理がないかと思われた俺の話は父、士郎にアッサリと承諾された。

「は、早っ!何で!？」

「…速人、温泉である場に俺が現れた時点でとうに気付かれてる事くらい分かっているだろ。」

あ、そりゃそうか。

母さんは兎も角として、兄さんが察してる事に父さんが気付かない訳がない。兄さんは静かに続ける。

「重ねて聞くが…手伝える事はないんだな?で、重要な事なんだろうっ?」

「ああ。」

迷いも憂いもなく頷く。

「ならば俺から言う事は一つだけだ、なのはを守れ。」
「シスコン。」

兄さんの隣りに座っていた姉さんが、余計な事を口にしたせいで頭を鷲掴みにされていた。…兄さん握力80あるからな…ありや地獄だろう。

「私としては心配だけど、土郎さんの妻だものね。こういう時は無事に帰って来るのを待ってるわ。」

「サンキュー、母さん。あ、後…」

と、父さんに視線を移す。これだけはちゃんと云うとかなきゃならない。

「日曜朝の特撮とアニメの録画お願い。」

俺は最大限真剣に頼んだのに、爆笑された。あんまりだ…

S i d e 高町なのは

「って訳でしばらく学校おやすみしなくちゃいけないの。ノートとかお願いしてもいいかな？」

「当たり前でしょ。」

何の迷いもなく即答してくれるアリサちゃん。

「それよりも事情が聞きたいんだけどね私は。」

「それは…」

魔法の事を下手に話せない以上出来ない相談だった。

「分かってるわよ！企業機密って奴なんでしょ？」

私が口ごもったのを察してくれたからか、すぐにそう言って許してくれた。

お家の人のお仕事もあってか、こういう事に私よりずっと理解があるアリサちゃん。

元気に答えてくれるアリサちゃんの声に救われた気分だった。

「ちゃんと帰ってくればそれでいいわ。」

「うんっ！」

アリサちゃんのお話が終わって、すぐにすずかちゃんに電話をかける。

「あ、すずかちゃん。あのね、実は…」

事情のお話中…

「で、しばらく学校いけなくなっちゃうからお電話したの。」

「そっか…さみしくなっちゃうね。」

すずかちゃんから少し暗い声が届く。私は目一杯元気だと伝えるように明るくなるよう意識する。

「大丈夫！頑張って全部終わらせて来るから！」

「うん…気をつけてね。」

すずかちゃんともお話が終わって一息吐く。

「…でもそっか、あんまり長い間一緒にいられないのも嫌だよな。」
帰って来るように言ってたアリサちゃんと、さみしくなると言ってくれたすずかちゃん。

本当に頑張って早く戻ろう。友達がいなくなっちゃうのは…きつと
凄く嫌だ。

「あ、くーちゃんにも連絡しないと！えっと那美さんは…」

S I D E O U T

常駐する羽目になると、砥石と予備の鋼線をタンマリ渡された。

凄え嬉しかったけど…

「あの…行って来ます。」

なのはがそう言った時の兄さんの目が語っていた。

『下手うつたらぶつ殺す』と。

感づいてはいたんだろうけど、なのはが関係者だと知ってから対応が尋常じゃなく恐ろしい。

つたく、姉さんには怒ってたけど完全にシスコンじゃねーか。

「んじゃ行ってきまーす!!」

「二人共気をつけてね!」

ピクニックにでも行くような軽いノリで俺は家を出た。戻る気満々だしこういう方がいいだろう。

そう…思ってたのにねえ…

「久遠も手伝う!!」

「にゃ!くーちゃん!？」

公園に行く途中、子供フォームの久遠に止められた。

「あ、あのねくーちゃん、今回はお手伝いは…」

「なのはは友達、迷惑かけるのは嫌だ。」

言いかけたなのはの言葉を封じる久遠。珍しくマジだな…と不思議に思っていたが…

「でも!やたみたいになくなっちゃうのはもっと嫌だ!なのはに怒られてもダメ!絶対手伝う!!」

「あ…」

すぐに分かった、当たり前だ。

久遠の能力に夢移しという他人の夢や過去を見せる能力があるのだが、それで俺は久遠の過去を見ていた。

笑顔で久遠の元を去った久遠の恋人の青年が…

村人に殺されている姿を。

だからって同行させるわけには行かない。何とか安心させてやろうと俺はいつも通り笑う。

「久遠、俺がついてるから大丈夫」

「速人なのはにかついでもらってた！！！」

一蹴されました（笑）

暴走止めた時か…見てたんっすね久遠さん。

こりゃ無理だ。何より訳が訳だけにあまり止めたくない。連れてくしかないかな…

俺はあきらめて、久遠を連れて行こうと

「いい加減にしないで！みっともない！！！」

言おうとした所で、知った声にそれを止めた。

「あ、アリサちゃん！？さすがちゃんまで！」

声の方に目をやれば、アリサがずかずかと久遠に向かって歩いて行く。ずかひはアリサの後から続いて来ていた。なのはの友人勢揃いだった。

アリサは何をするのかと思えば…

久遠の頭をひっぱたいた。

「アンタね！行きたいのが自分だけだと思ってるの！？」

「だって危ない！！！」

「分かってるわよ！けどなのはが帰って来るって言ったんだから信じなさいよ！こういう時背中押して笑顔で見送るのも友達のとめでしょ！！！」

捲し立てるアリサ。…目の前で誰かに死なれた事がないとこういうのは分らんからなあ。とは言え気持ちのいい姉御肌だ。

「…ま、そーゆー訳だから。ノートはちゃんと取っといたげるから安心して行ってきなさい。」

アリサがなのはに笑顔を向けて

「久遠ちゃん、大丈夫だよ。なのはちゃんは約束守ってくれるから。」

「
すずかが久遠をなだめ

「うん。ちゃんと戻って来るから待ってて。」

なのはが三人に誓う。

幸せそうで何よりだ。

と、なのは達を見ながら満足していたのだが…

「で、後ろで偉そうに頷いてる自称ヒーローは見送りに来る友達もいない訳？」

アリサが何か可哀想な人を見る目で俺を見ていた。

こゝ、こいつ…痛い所を…

「せめて見習いと言え！大体お前らだつて見送りに来たんじゃないやなくて久遠の大声聞いて駆け付けた口だろうが。遅刻するぞ？」

俺の台詞に今更心配になったのか、なのはが二人を心配そうに見る。

「そうなの？」

「あ、うん。もうそろそろ行かないと。」
「わかってるわよ！休む奴には言われたくないわ！！」

そりゃそうだ。

アリサのもつともな言葉に俺達は口ごもるほか無い。二人は学校へ向かって駆け出し、一度振り返ると手を振ってそのまま学校へ向かっていった。

つたく、登校中に人がいい奴ら。

「久遠、お前の事とかあんまり知られないほうがいいんだ。ひよつとしたら面倒な事になるしな。興味本位で来た奴にいろいろ調べられるような事になったら面倒だ。」

「…わかった、ちゃんと帰ってきてね？」

「うん、約束する。」

小指を絡ませるのはと久遠。ほのぼのとした光景なんだが…

久遠がブチギレたら被害は都市単位…早めに止められなかったらもっと大きくなる可能性すらある。

なのは、約束守れよ？世界が滅ぶか否かはお前の生死にかかってい
る。

公園まで来ると、しばらくして念話が届く。

『今から転送するけど、周囲に人は居ないわね？』

『問題ないっすよ。目視できる範囲にはおそらく誰もいません。』

変な気配は感じないし、こっちを見てる人も居ない。おおよそ直線500メートル位の範囲には感じている奴は居ないだろう。

「…ねえ速人、そういう台詞って当たり前に言っているものじゃないと思うんだけど？」

「何でだ？狙撃主の腕によっては直線一キロ把握できたって普通に打ち抜かれる可能性があるからな。関係ない人間はともかく、敵とこっちを意図的に見てる奴だったらわかんなかったらガードなんてつけないだろ。」

不思議がるユーノだが、それ位できないと…っつか出来ても相手によっては十二分にやばい。

「魔法行使してないし…君本当に人間？」

ひっでえなユーノ。自分はフェレットのクセに。

転送されながら、俺はそう思っていた。

「とりあえず君達の紹介と今後の説明をしようと思うんだが…君はいい加減に元に戻ってもいいんじゃないか？」

迎えてくれたクロノが、ユーノを見ながらそう言っ…

「そうだね、もう魔力も十分だし…なのはの家ではフェレットで居ないといけなかったからすっかり忘れてたよ。」

苦笑するようにそう言ったユーノは光に包まれ…人間の姿になった。

「この姿を見せるのも久しぶり…っ!!」

俺はユーノの胸倉を掴んでいた。

「な、君は何をしてるんだ！」

「お、お兄ちゃん!? 驚いたのは判るけど」

「え? お、驚いたって…僕始めて会ったときはこの姿じゃなかった?」

三人の声が聞こえるが、俺はそれらについて考える余裕は無かった。

「は、速人…何を…」

知らず力がこもってきてきているらしく、ユーノから苦しそうな声がする。

「お前っ…お前は…っ!!」

だが駄目だ。自制が利かない。

俺は思いのままありつたけの力を込めて叫ぶ。

「フェレットなのをいい事になのはと風呂に入ったりしてやがったのかあっ!!」

空気が凍った後、なのはが真っ赤になってユーノを見る。

ユ一ノは、現状を理解して慌てて弁解に走った。

「え…あ…ちつ…違う！そ、そりや何言っただって言い訳にしかないけどでも狙ってやった訳じゃ」

「ふざけるなあつ！！俺が！温泉で覗きに走ろうとした『だけ』で覗けなかったのにお前は忍さんや姉さんの胸に抱えられてやがったのか！？晶さんやレンさんの裸までしつかり眺めて記憶してやがったのか！？俺は何にもいい事なかったのに正座で説教喰らったんだぞ貴様あつ！！」

「ちよ、ちよつと！本気で怒ってるのはわかったけど言ってる事は人として駄目すぎるよ速人！！」

「貴様が言うかあつ！桃源郷を単独で占拠しやがってえつ！！」

「お兄ちゃん。」

冷めた声に目を向ければ、ものすつごく怒ってらっしやる妹が居た。

な、なんだいなんだい！漢のロマンなんてどうせ女にゃわからないんだいっ！！

ふと、もう一人の男クロノを見れば、額を押さえて頭痛でも堪えるように俯いていた。

あ、そっぴや艦の中だっけ？悪い事したな。

「…その淫獣の刑罰は後で考えておくから、艦内で不穏な叫びはやめてくれ。」

「あ、はい。サーセンっした。」

「ちょ！刑罰!?!」

「ユーノ君は私が無理やり連れ込んでたんだし…お兄ちゃんと違って悪くないの。」

そんな会話をしながら俺達はリンディさんの下へ向かった。クロノすまん、だが漢として許せないものがあつたんだ。

なのはのお陰でかなり落ち着いたが。クロノが促したから歩いてるものの、殺気に近い怒りを纏うのはどうかと思いますよ？

Side〜リライヴ

「時空管理局を敵に回してまでジュエルシードを集める…か。凄い娘だな。」

サポート役として怪我を治した後食べやすい食事を食べさせると、殆ど休まずに二人とも飛び出してしまった。

魔力を受け渡したりもしたけど、疲れてない訳が無いのに…

「お母さんの願い…か。」

過去を思い出して首を振る。今は自分の事はいい。

「…貴女ここで何をしてるの!？」

「依頼主の真意を知りたかっただけです、別に何もしませんよ。」

私は部屋に来たプレシアと向かい合う。私の背中には、ポッドに入られた状態で浮かんでいる少女の姿があった。

S I D E
O U T

第十四話・暖かい声を背に事件の終わりへ（後書き）

速人が叫んでいる初登場の名前は格闘の師匠二人です。

話に出て来てないのでそれ以上の説明はしません。∴ いいよね？

第十五話・判明した新事実と初めての魔力技

第十五話・判明した新事実と初めての魔力技

今後の方針として、アースラからジュエルシードの搜索を行って、必要しだいで転移魔法で現地に下りる。

基本的にリンディさんとクロノの指示を守って行動して欲しいと言
う願いは、俺は特に問題なく頷いた。俺もなのはも部隊の指揮なん
てやった事ないし効率のいい行動方針なんて決められる訳も無い。

その辺を取り決めた後俺となのは…

魔法の才能検証と言うことでいろいろ検査をやった。

指示された通りに魔法を扱っていくなのは。クロノはそんなのは
を見ながら感嘆の声を漏らす。

「放出系が凄いな、空間認識もかなりのものだ。こんな短期間で複
数の誘導弾を制御するなんて。」

「そうなのか？弾も遅いし砲撃なんてわかりやすくてろくに当たら
ないと思うんだが…」

クロノはなののはについてコメントしている間は普通だったのに、俺の言葉を聞いて眉を顰める。

「遅いって…確かに防げないものじゃないが決して遅くは」

「あ…クロノ、速人については人間の常識を当てないほうがいいよ。」

クロノの声を遮る様に、傍らで結界（アースラを破壊しないため）を維持するユーノが、溜息と共にそう漏らした。

「何だよ…真人間相手ならともかく魔法使いに人外扱いされたくないぞ。淫獣。」

「だから違っつて！大体速人に言われたく」

「兄さんとアリサに告げ口してやる。」

抗議の声を漏らすユーノだったが、俺の死刑宣告に縋り付いて謝ってきた。そりゃそうだ。あの二人敵に回すだけで真つ当な死に方はさせてもらえないだろう。

「なのは、もう少し出来るか？」

「あ、うん。大丈夫。」

クロノからの頼みを笑顔で受けるなのは。砲撃を多めに使ったとは言え、まだまだ普段の訓練時間より遥かに少ない。

「速人、君の戦闘能力が見たい。君達がいつもやっている訓練をそのまま見せてくれ。」

「了解。んじゃ行きますか。」

指名があつたので、俺はさっさと前に出る。地面に直径3メートル程の円を描いて、準備完了。

円内部で回避、迎撃を行う俺に対してシューターが当てられるか、俺が円の外にできればなのは勝ち。なのはが根負けするか制限した時間が過ぎれば俺の勝ち。

ちなみに、足を止めた状態で敗北して以来この条件でやっているが、無敗だったりする。

「さてなのは。いつも通りだそう。くれぐれもあんまりにも当たらないからって砲撃魔法ぶつ放すのは止めるように。」

「そんな事しないよ！」

怒りながらシューターを生成するのは。

そりゃそうか、年甲斐も無いお行儀星人だもんなコイツ。

円の中に入った俺に向かって、幾つかのシューターが生み出され、すっ飛んできた。

俺は二刀を抜いて、それを迎え撃った。

シューターを切断、回避する。

こんな程度の数じゃ当たらない。ま、一時期は足を固定した状態でやってた位だからそれに比べたら成長してるか。

「ちょ、ちょっと待て！今彼背後から飛んできた魔力弾を切断しなかつたか！？」

「速人は動いてない物相手なら見て無くても攻撃を当てられるんだ。森位なら目隠したままで歩けるみたいだし。」

「そんな馬鹿な……」

こういう感覚的な部分は魔導師特有のマルチタスクとか言うのをや

つてたら一生身につかないだろう。修行したって身につくかどうかは稀みたいだし。特殊能力でなく技術だから、誰でも身につける事は出来るんだろうが…

山奥で何時間でも動かずに瞑想を続けるだけの集中力とかそんな類のものが居るし、誰でも言うには苦行過ぎるんだろうな。

「もういい、よくわかった。十分だ。」

クロノから静止が入るが…

「ちょ、もうちょっと待って！絶対一撃当てるから！！」

「連敗記録更新するもんなあ？頑張れ魔法少女。」

超が付くほど頑固なのははそれを断って、俺に一撃を当てるために制御できる限界数5個のシューターを生成し…

俺に向かって同時に放った。

数が増えれば増えるだけ、一つに裂けるリソースは少なくなる。つまり…フェイントも何も無く俺に向かって突っ込んでくるだけの5個。

俺は位置関係を読んで二閃を以って全てを切り払った。

「何で飛んでくる魔力弾を一振りで複数斬り払えるんだ？」

「僕に聞かないでよ…僕だって常識人だから速人のデタラメさは理解不能なんだから。」

「さつきから聞いてればお前らなあ…魔力弾だから魔力無しじゃ斬れないかも知れないけど、兄さんならこんなもん二桁きたって凌げるからな。俺だって常識的真人間だ！」

何か物凄く呆れられたので怒鳴り返したが…

「それは無い。」

取り合ってすらもらえなかった。クスン、いじけてやる。

と、クロノは何かを思い出したように呟く。

「そう言えば、君は気が付いていないのか？」

「何が？」

さっぱり判らない事を言われて首をかしげる。

「変換資質さ。」

クロノは言いながらフェイトの映像を映し出す。

レイジングハートが持ってたデータ（から、久遠等バラしたくない部分を引いたもの）だが、クロノはフェイトが生成した魔力弾を指す。

「彼女は雷の変換資質を持っている。こういえば判りやすいか？ようは魔力行使の際に特定の力に変換させる能力のことさ。魔法でも

同じ事が出来なくは無いが、適正が高いほど特に意識する事無く変換後の力を行使する事が出来る。」

なるほど。やる事なす事雷撃だったのはフェイトの特性だったのか。つてあれ？

「俺こんなもん持ってたか？」

「殆どの魔力を強化にしか行使していない君は気づいてないようだが、剣を振るう最に放たれていた魔力が砂塵を巻き起こしていた。あまり聞かないが君は『風』の変換資質持ちのようだ。」

魔法関係ならば大した観察眼らしい。はー…たまに衝撃波ちつくな物が出るなとは思ってたけど、漫画でよくある力を放出した際の衝撃波だと思ってスルーしてた。

「それじゃ、俺は意識して魔力を操れば風を操作できるのか？」

「そうなるな。風を付加させて飛行や弾道制御を行う事も可能だろう。」

クロノの答えに俺は頬が緩むのを抑える事ができなかった。…いきなり何もかも上手い事行くほど簡単なものじゃないんだろうが…魔法として扱うには術式とか言うのを構成しなきゃならないようだが、単純な放出までなら…

魔力を刀に集中させる。そのままの形で放出させるようなイメージでいいだろう。

俺が抜き放った剣閃は…

離れた位置にあった木を切断した。

メキメキと嫌な音を立てて倒れていく木を眺めた後、俺は刀を握り締めて飛び上がった。

「うおつしゃーっ！！見ろ！『遠当て』だぞ『遠当て』！！凄えっ！！剣士の夢だよなあ…くーっ…早速技名考えないと！！」

本物の達人なら遠くの蠟燭を消す位なら出来るようだが、ここまで露骨な剣閃による遠距離攻撃はファンタジー限定の産物だ。そして、俺的にはまさに夢にまで見たような必殺技だ。

「お、お兄ちゃん…そんなにはしゃが無いで…恥ずかしいの…」
「馬鹿野郎！コレがはしゃがずにいられるかあっ！！」

苦笑するのには向けて笑みを隠さずに言い切る。

「…彼、僕が話すまで変換資質について知らなかったんだよな？」
「そーだよ…まあ魔力運用については術式前の基礎中の基礎ばかり練習してたけどね…」

人が喜んでいると言うのに他の男二人は超テンションが低かった。

S i d e フレア＝ライト

高町速人が見せた能力は、驚く他無かった。

一つは先刻の遠距離斬撃の速度。あの速さ異常だった。

攻撃力はそこまで高いようではなかったが、誘導弾程度なら簡単に切断できる。

…アレは、それなりに発動が早くないと防御魔法の展開が間に合わないだろう。

しかも、デバイス無しで思いつきで使った技だ、修練を積んでデバイスを手に入ればかなり厄介な技となるだろう。

だがそちらはいい、Sランククラスとは言え速度のある攻撃ならば出来るものはいる。

もう一つは…理解できない奴の戦闘技術。

いくら私でも、いや、おそらく魔導師と言うカテゴリに属す者にはおおよそ理解不可能な現象だろう。

事実、クロノ執務官もレアスキルと称する以外に理解不可能なようだ。

背後からの魔力弾を切断し、二刀で五発の魔力弾を尻いだ。五回斬った訳でもなく。

一つの軌道に複数の的を収めただけ。理屈はわかる。だが、直線でもなんでもない誘導弾の軌道に一闪を合わせると言う概念が理解できなかつた。

魔導師ならば普通はシールドで防ぐ。

強力な防御能力は前衛の必須能力で、間違っても前に出て回避する等と言う発想にはならない。

だが、理由にはすぐに思い至つた。

魔法が無いのだ。

念じただけで出て来るような強固な盾も、重量に関係なく簡単な攻撃なら防ぎきる服も、瞬間移動も飛行手段もない。

そんな中、質量兵器は存在している世界の裏と関わりがある鉄の塊を持っただけの生身の人間。

故に、彼らが戦うのならば、当たらず戦うしかない。
反応は研ぎ澄まされ、剣閃は磨かれていったのだろう。

おそらくは…銃等の火気にすら対応できるほどに。

魔導師からすれば異常だ。質量兵器はものによっては魔導師すら危険なものも幾つもある。

それと生身で渡り合えるなどと話した所で誰も信じないだろう、この光景を見るまでは。

趣味すら考えた事もなかった私は、初めて知りたいと思った。

書籍や理論に残せない『何か』、理解不能な力の原理と…

そんなものを習得している年端も行かない少年の事を。

S I D E O U T

第十五話・判明した新事実と初めての魔力技（後書き）

主人公、単体戦闘では最強と化してますが、利便性においては魔法を駆使できるクロノ達のほうが遥かに上です。範囲攻撃も無いので複数の雑魚を早く倒すとかにいたっては最下位近いです。魔法じゃなくて魔力技なのは、術式組んで魔法の形にして扱ってないためです。

第十六話・今この時この場所に居る理由。

第十六話・今この時この場所に居る理由。

アースラに来てから、なのははクロノやフレアに指導の元、魔法技術の修練に精を出していた。

どうにも修行と言うには不足な感じの為、なのはは若干不満げだったが、魔法に関して先輩のクロノ執務官の指導だ。聞かない訳にも行かない。

ま、なのはが見てきた兄さん達の訓練は、何人か壊れるかもしれない領域ギリギリを突っ走って抜けた奴だけが辿り着く場所だからな。普通の人間なら故障を危惧してあそこまでやらない。

そう考えるとクロノに任せておいた方がいいだろう。

それはいいんだが…

「…そろそろ聞きたいんだが、何でお前俺に張り付いてるわけ？」

ちなみに、俺は今魔法に関しての基礎知識の本を読んでいるだけだ。何も面白い事をしている訳じゃない。

「興味があるだけだ。」

そう言っつて俺を見続ける男…フレア。

何だコイツは？…俺危険！？

「お、お前アレですか？女の人より男のほうが好きだったりする人？」

「何の話だ？」

俺の言葉に首を傾げるフレア。何の冗談でもなく本気で言っているらしい。

…こ、コイツ俺より年上なんだよな、本気で言ってるのかソレ？

「え、えつと…恋人とかいらっしやいますか？」

思わず敬語になってしまふ。って言うか、本読んでるだけの男を遠

目から見続けてくる他人の男ですよ？不気味に思っただけ無理ないだろう。

「色事に興味は無い。私は力を手に入れなければならないからな。」

一蹴だった。何の躊躇いも無い。何と言うか事務的な反応ばかりかだな……

だが、何となくつけてきた理由がわかった。ようは俺様の天才的戦闘能力に惹かれたって所か。

「模擬戦でもやればいいのか？」

「事件に対処するために来ているのに非殺傷の利かないお前と直接的な模擬戦をやる訳にも行くまい。ましてお前とてバリアジャケットすら生成できない身だろう？」

どうやら戦闘能力目当てなのは間違いないようだ。とは言え模擬戦が望みでもないならなんで俺に張り付けているんだ？

「じゃあ何で張り付けてるんだよ。試合する気もないんだろ？」

「お前の能力は魔導師の理解の及ばない部分にある。ならば戦闘とは関係ない部分にそのヒントがあってもおかしくはない。ソレを探すためだ。」

言いたい事はわかった。だが、だからと言って四六時中張り付けているのも困る。

「……判った。事件が片付いた後なら模擬戦でもなんでも付き合ってる。なんだったらどんな修行やってるとかだっただけ説明する。だから」

「頼むからストーカーは止めてくれ。」
「む…」

犯罪者呼ばわりされて顔を顰めるフレア。
ようやく離れてくれる気になったのか、部屋の外へ向かい…出入り口で振り返る。

「無理強いはしない。アレだけの技術だ、秘匿されるべき物なのだから?」

「修行法知ったからってできるかよ。」

ニヤリと笑って言うてやると、フレアは笑みを返してきた。

あ、コイツ自信あるんだな。ちょっと楽しみになったかも。

S i d e 〱 フ ェ イ ト 〱 テ ス タ ロ ッ サ

時空管理局が来てから、仕方ないのかもしれないけど町のジュエルシードは殆ど手がつけられなかった。あの白い娘や速人も管理局と行動しているし、リライヴのお陰で消耗した状態での搜索はしなくてすんだけど、それでも難しいことに変わりはない。

「海上への魔力流の打ち込みによる強制発動ね。その後に時空管理局まで相手にする気?」

「難しいのは分かっている…それでも、やらないと。母さんが待っている。」

私はバルディッシュを握り締めて言う。

「アンタも手伝えないのかい？」

「ダメだよアルフ。リライヴはサポートで、依頼を受けてきてくれるだけなんだから管理局の人に見つけさせる訳には行かない。」

リライヴの魔法の腕は、回復魔法で既に十二分に理解していた。正直手伝ってもらえればいいのだけど…

「ごめん、管理局に見つかる訳にもいかないから。プレシアからはフェイトのサポート以外に頼まれている事もあるし。」

「大丈夫、ありがとう。」

食事を取る間も惜しんでいた私に手早く食べられるものを用意したりとかなり細かくサポートしてくれているリライヴ。彼女には本当に頭が上がらない。

「まあ…管理局の方に友達がいるなら何とかなるかもしれないね。」
「…そんなのじゃ…ないよ。」

あの娘も速人もジュエルシードを集めるに当たっては敵対組織。だから友達なんかにはきつとなれない。

S I D E O U T

魔力の変換について感覚を掴んで、何とか風翔斬『ウィンドスラッシュャー』を物にした。

溜め無しで放つてもそれなりに距離の大木を切断する位の力はある。

何より…速い。

抜刀で使う事が前提のためか、滅茶苦茶速い。振りぬいたら着弾してるって位に。

なのはも新技の開発に勤しんでいるようだし、今この戦力ぶっ飛んでるなあ…

とか考えていると、ジュエルシード発動の連絡が入った。

リンディさん達の下へ向かうと、モニターに六つの竜巻と戦うフェイトの姿があった。

「うわまずいな、あの数はいくらフェイトでも無理だ。急いで出る必要は無い。」

俺が転送ポートへ走ろうとした瞬間、クロノがそう切り替えた。

「彼女は自滅する。そのタイミングで残っているジュエルシードを回収すればいい。」

「そんな…!」

「こんな危険な状況に踏み込ませる訳には行きません。話をする時間を用意するから」

「ふざけんな。」

俺はクロノの言葉を切り捨てた。：ジュエルシードの威力については十二分に承知している。そのせいで死に掛けたんだから。だけど、それでも…今ここで戦ってるあの娘を見捨てるのは違うだろ。

俺達がここにいるのは、フェイトと話すためなんだから。

俺は叩きのめしてでも転送させようと思って…

『二人は僕が送る、魔法陣に入って。』

ユーノから、念話が届いた。

『ユーノ君！？』

『なのはと速人は僕を助けてくれた。今度は僕がそれに答える番だ、僕だって大切な友達の力になりたいんだ！』

ユーノの声と共に、転送魔法陣が展開される。

クロノとリンディが驚いたらしく目を見開いた。

さっすがユーノ！サポートの天才！

俺はなのはの手を引き魔法陣に飛び込む。

「なっ…待」

「邪魔はさせない!!」

ユーノがクロノと俺達の間に入る。くーっ、いいとこ持ってたきゃがっつて!

「あ、あのっ!ごめんなさ」

「いいの!フェイトについては俺達で対処するって約束なんだから!サンキューユーノ!」

俺はユーノに対して礼を言って、光に飲み込まれた。

Side ヽユーノ〃スクライア

…元々あっちの住人の二人はともかく、僕はコレ確実に重罪なんだからうな。

そう分かっていながらも、何処かすっきりした気持ちが浮かんできているのがわかった。

きつと、コレが『矜持』って言う物なんだろう。

確かに傍迷惑極まりない。明らかに正しい判断を気持ち一つで切り捨ててるんだから。

でも、折れなかった。

怒りと悲しみに染まった速人の声も

たった一人でロストロギアと戦う彼女も

ソレを悲痛な目で眺めるのはも

正しいの一言で切り捨てるのを、どうしても許せなかった。

だからこの後罪人の判定を受けてもきつと後悔はしない。

そう覚悟を決めて対峙して…

「失礼ながら進言すると、私も出撃するべきだと思います。」

予想外の所から、助けが入った。

「フレア！？君までそんな甘い事を」

「犯罪者がどうなるうが知った事ではありません。」

クロノの言葉をいつも通り静かな口調で切り捨てるフレア。

彼からは出会ってからずっと、まったく感情を感じたことが無く、はつきり言ってクロノよりも怖かった。

だから、とてもまつすくな瞳のままデバイスを握りしめた彼をとて
も意外に感じた。

「我々は、ロストログアを保守管理し次元犯罪者を拘束、罪なき世
界を守る為の機関です。魔法を知らない者の住まう管理外世界で起
動しているロストログアを、犯罪者を捕らえるのが楽だから放置す
る？我々は此所に何をしに来たのですか！！」

アースラの人達ですら、感情を見せた彼が意外だったのだろう。他
のメンバーも啞然としていた。

「非情な手段は必要でしょう。ですが、それで切り捨てられるべき
は我等戦うと決めた者の命です。これでは犯罪者を捕らえるために
ロストログアを使用しているのと何も変わらない！！」

少しだけ間があって、リンディさんがその口を開いた。

「ユーノさん、フレアと共に現地に向かってもらえるかしら？」

言いながらリンディさんはモニターを指す。

「飛べない事も忘れて自信満々で飛び込んだ彼の救出をお願いします。」

モニターには、ジュエルシードが巻き起こした竜巻から逃げようと海を泳いでいる速人の姿があった。

…なんか台無しだよ速人、いろいろと。

S I D E O U T

第十六話・今この時この場所に居る理由。(後書き)

何かフレア大活躍になってしまった…

彼には今回のような方向性で局内外で突っ込みを入れてもらおうと思ってます。

第十七話・尊くも交わらない想い

第十七話・尊くも交わらない想い

俺は泳いで竜巻から逃げていた。

何しろ水中の生き物でもないのにやたら激しくなっている流れに振り回されているんだ、たまったもんじゃない。

どうにか落ちる前になのはに刀を受け取ってもらえたのは幸いだっただな。海に落ちたらさびて使えない。

「なーんて…言ってる場合じゃないよなコレ!!」

いくら身体能力を強化できたところで渦の中を泳ぐには人間は不向き過ぎる。大体強化したって、超人ってレベルがせいぜいだ。人外なステータスが得られる訳でもない以上こんな渦を強化だけで泳ぐのは無理がある。

竜巻が方向を変えて、俺を飲み込もうとする。

逃げ切れない…っ!?

黒い閃光が、荒れ狂う竜巻を切り裂いた。

渦が弱まったので何とか抜ける。ソレと同時に、緑色の鎖が伸びてきた。

「まったく速人は無茶すぎだよ！あんなに迷わず飛び込んでおいて外でたらコレ!？」

俺は鎖に捕まって一気に引っ張る。海中から飛び出して、ユーノが展開してくれた魔法陣の上に着地する。

「っとサンキュー。後でこの魔法教えてくれよユーノ。」

「死にかけてたって言うのに随分余裕あるね。」

「一瞬や二瞬死にかけたからって怯えるような根性じゃあの家で修行出来ないんだよ!!」

自信満々に言い切つてやると、ユーノは頬を引きつらせた。…そりゃそうだ。フレアの奴も魔導師には理解不能って言ってたし、話を聞けば聞くだけ恐ろしいものなんだろうな。

「とにかく今回は下がって。ただの竜巻相手じゃ少し斬つてもしようがないし、フレアみたいに派手に破壊する事も出来ないだろ。」

「む…」

言われて目の前の現象を見る。…うん、無理だ。斬っても意味なさそうだし、アレに有効な程の魔法の扱いなんて覚えてない。

「しょうがないな、今回無事に済ませれば我が妹の裸を堂々と見ていた件についてはチャラにしてやるう。」

「うぐっ…でもソレって温泉の件は…」

「当然『別』だ！桃源郷に単独突撃した罪は海より深い！」

肩を落としたユーノは俺を置いて竜巻に向かっていった。

ま、いくらジュエルシードって言ったって、あのメンバーなら大丈夫だろう。アルフがフレアとやりあわないかだけは心配だが…

折角の協力第一歩だ、ここは妹に譲ってあげますか。

S i d e } フ ェ イ ト 〓 テ ス タ ロ ッ ツ ヶ

いきなり転送されてきた白い娘と速人。

アルフが警戒して二人を見るが、二人のほうはそれ所ではなかった。

速人が一直線に海に向かって落ちていったのだ。

助けに行こうとして、高速移動魔法すら使えない状態なのに気づく。

と、速人が持っていた刀をバリアジャケットの後ろに差し込んだ白い娘が私の目の前に来ていた。

「分け合おう、ジュエルシード。きつちり二人で半分こ！」

『ディバイドエナジー』

そう言った彼女は私に魔力を送ってきた。

一気に身体に力が戻ってくるのを感じながら、私は動揺を抑える事ができなかった。

『まあ…管理局の方に友達がいるなら何とかなるかもしれないね。』

リライヴの言葉が一瞬蘇って、私は目を閉じる。

違う…そんな筈が無い。速人だって彼女に全て任せるって、彼女のために私を見逃してくれてるだけで、私の手伝いをしてるわけじゃない。彼女と違ってずっと戦ってるのにこんな事を…

「速人お兄ちゃん!!」

と、白い娘の声がして視線を移すと、今にも竜巻に追いつかれそうになっている速人の姿があった。

デバイスを構えた瞬間黒い光が竜巻を切り裂く。

光の先には、初めて管理局が現れた時に一撃でアルフを叩き落した槍使いが現れた。

「やっぱり管理局……」

彼はデバイスを手にしたまま白い娘に近づいていく。

私とアルフは警戒を強めたが、横目に見ただけで私達に手を出す気配が無い。

「私の砲撃系は殆ど使い物にならない。フェイト・テストロツサと協力するといつのであれば彼女と共に封印を。時間稼ぎは引き受けよう、いい使い魔。」

それどころか、管理局員のはずの彼はアルフに共闘を持ちかけた。アルフは歯軋りしながら彼を睨みつける。

「誰が管理局なんかと」

「私も犯罪者など信用していない、だから勝手に三つ抑える。私もそうする。」

そう言つて彼は竜巻に向かって飛翔した。光る槍の先端を振るう事で一撃でジュエルシードの発生させている竜巻を叩き斬る。

だが、大本に影響が無い以上しばらくすると再び竜巻が出来る。彼はソレをひたすらに繰り返していた。私達に目もくれず。

「フレアさんだつていつまでも続けられるかわからない、だから一緒に。ね？」

白い娘が私に微笑みかけてくれる。…どの道、今はジュエルシードの封印が先。

「…アルフ、お願い。」

「あー…しょうがないね！やってやるうじゃないか！！」

アルフは頭を掻いた後、竜巻を鎖で拘束した。

黒い光を放つ槍を振るっていたフレアという人は、私達の準備が出来たを確認してその場を離れる。

タイミングを合わせて放った封印の魔法は、全てのジュエルシードを封印した。

その数は六つ。

白い娘はそのうち三つを手繰り寄せた。

本当に…渡す気なの？

彼女といい速人といい、何でこんな事をするのか分からなかった。危険である事は分かっているはずなのに、私にジュエルシードを渡す。

悩んでいた私への返答は、物凄く簡単なものだった。

「友達に…なりたいたんだ。」

目の前の白い少女はそう言って手を差し延べた。

いきなり力を振るった相手に

犯罪者として認識されているはずの人に

今尚敵としてここにいる筈の私に

私はその手を取りかけて…

「ああああああつ!!」

紫色の雷撃が、私の身体を打ち抜いた。

薄れゆく意識の中、私に向かって何かを叫ぶ白い少女の声があった。

S I D E O U T

「フェイト!!」

いきなり雷撃に撃たれるフェイト。

っ!! 一体何処のどいつだこんなざけた事を!!

アルフがジュエルシードを取りに行くが、割って入ったクロノが半分回収していた。

アルフは残りのジュエルシードを持ってフェイトと共に何処かへ消えて行った。

クロノが半分回収したのはたまたまだろうが、約束守らせたのは感謝しないとな。

…さて、と。後はアースラで喧嘩タイムかな。

キレかけてたとはいえ俺が出たのは完全なアホだったしな、なにしろ飛べないんだから。交渉云々抜きにしても目茶苦茶怒られそうだ。

「済まなかった。」

そう思ってたんだが、アースラに戻るなりフレアにいきなり謝罪された。

「犯罪者を楽に捕らえる為にお前の世界で発動しているジュエルシードを放置した。これは許されるべき罪状ではない。」

あ、そういうばそうだな。穿った見方をすればそうなるだろう。

「あ、あの…そんな事ないです…勝手に動いちゃったのは私達の方ですし…」

なのは自分が悪いと思っているのか、フレアを止めようとするがアツサリと首を横に振るフレア。

「仮にその部分を咎めるとして、この世界を舞台にして危険物を放置した事には変わりはない。本当に」

「局員である貴方がそう言う謝罪を勝手にしないで欲しいんだけど。」

言いながら現れたのは、怒った様子のリンディさんだった。

ま、そうだよな。戦力だって限りがあるんだし、いつ何が起こるか

分からない以上最善策を取らなきゃならない。指揮官なら怒るのも当然だ。

分かるがそれは向こうの事情、俺は特に謝るつもりはない。

…だって次があっても同じ事する奴の謝罪なんて意味ないし（笑）。

「…冷静さを欠いてあんな危険な場所に行って何かあったらどうする気だったんですか。」

リンディさんの静かな声。なのはが申し訳なさそうに俯く。

「ごめんなさむっ!？」

「謝るなって。お前次フェイトがピンチだったら止められて放置できるか？出来ないんだったら謝罪のフリだけされても困るだろ。」

なのはの謝罪の言葉を後ろから抱きかかえるようにして止める。

「そうね、それに関しては元々貴方達に任せるといふ契約がある。でもね…」

リンディさんはなのはを除けて…

俺の頬を引っぱたいた。

あんまり痛くは無いから驚いたただけだった。何でパー？

「…えーと、軍隊式ならグーなんじゃないんすか？」

呆けてそんな事を聞いてしまった。リンディさんはそれが首を横に振った後俺をまっすぐ見る。

「コレは別の話です！無茶をして貴方に何かあつたら家族が悲しむでしょう！！」

ちよつと意外。戦艦の中で長やつてる人にそんな事で怒られるとは思ってなかった。

だけど、無茶つて言うなら既に色々しなきゃならないと決まってる。

何しろ夢がヒーローだ。夢物語にしか存在しないようなものに成るうと思つたら常識に従つて動いてすむ訳が無い

「心配してくれてありがとうリンディさん。空飛べないの忘れてた事は反省します。」

「貴方は…」

俺に続けて何か言おうとしたリンディさん。俺はそれを聞かずに訓練室に向かった。

ユーノに床の作り方を教えて貰わないと拙いし…

これ以上聞いていると一から十まで話さなきゃいけなくなりそうだったから。

S i d e 〱 プレシア 〱 テスタロッサ

襲い掛かってきたアルフが逃げ出したと伝え、あの人形にジュエルシールドを催促してアリシアの元に戻ると、そこには雇った傭兵の姿があった。

「また貴女…ここには軽々しく立ち寄って欲しくないのだけど。」

「そう言わない。貴女と話すのならばここが一番いいだけ。ここでは下手に戦えないでしょ？」

彼女…リライヴは静かにそう言った。忌々しい…だが実際アリシアに下手にダメージを与える訳にも行かない以上、ここでは戦えない。

「大体貴女あの人形の補助ばかりでちつとも出ないじゃない。」

「管理局が来るのは当然。となればかなりのジュエルシールドを奪われるのも仕方ない。けどそれじゃ困るでしょ？」

それは確かにそうだ。アレがいくらかなりの腕とは言え、管理局を敵に回して必要数のジュエルシールドを回収できる訳が無い。

ただど、ジュエルシールドが無ければアリシアが…

「だから、私が奇襲をかける。存在が知られてないほうがやりやすいし、ましてや実力なんてもっと知られる訳には行かない。」

目の前の小娘が言った言葉を理解し損ねた。

非戦闘員の私はもちろん、A A Aクラスのあの人形ですら太刀打ちできない戦力に向かって単独で奇襲をかけると言ったのだ。理解出来る筈が無い。

敵の戦力は管理局員の内エース級が二人、民間協力者のほうもA A以上。

これだけの戦力があれば、一国と戦争すら出来る。

それを、十前後のこの小娘が一人で相手にすると言ったのだ。

「正気？」

「それはプレシアには言われたくない。でも、アリシア助けるんでしょ？」

「ええ、そうよ。」

それは変わらない答え。アルハザードへ行き、アリシアを救う。でも、この小娘にはまったく関係ない。管理局に手配されるだけで何の意味もない。

「どういづつもり？」

「依頼者から請けた仕事を完遂するつもりだよ。ジュエルシードを持ってくる、必ず。だから、貴女は無駄に体力使ってないで休んで。アルフ逃がしちゃったから面倒になったんだし大人しくしてて。」

涼しげに私を手伝うというこの小娘のせいで、嫌でも理解させられてしまう。

自分が異常な事をしていると。

この小娘を雇ったのは単純に戦力の増強のためだ。使えなければ葬れば良いと思っていたし、敵に回る奴らの数を考えれば人形一人では心もとない。

だから雇った。

犯罪者の手伝いも引き受けるような人間は何かしら一癖も二癖もあるような連中ばかりでこの庭園に近づける気さえ起きなかったのだが、小娘で戦力になるのなら丁度いい。そう思っていたのだが…

この小娘は、隠していたはずのアリシアを私に気づかせずに見つけて、私の話を鵜呑みにしたうえで手伝っている。

「どの道貴女の体でジュエルシードを奪うのは無理。だから任せて。」

澄んだ瞳でそう言っただけの彼女に、私は言いよつた無言の苦しさを感じていた。

S I D E O U T

第十七話・尊くも交わらない想い（後書き）

何かに熱中してる人が自分より異常にテンションの高い人を見て冷めるといったことがあると思うんですが、プレシアさんにはそんな感じでちょっとだけ正気に戻ってもらおうかと思ってます。

第十八話・海上の決戦から終わりの始まり

第十八話・海上の決戦から終わりの始まり

一時帰宅ということ、なのは家に戻った。：え？俺？

魔法の修行をするって事で一人でアースラ残ったぜ。

何しろ勉強する気も無ければ鋼線の予備もあるし、アリサに言われた通り、学校にまともな友人はいない。

休み時間と放課後に修行してる俺が、遊び盛りの小学生の中で友達何て出来るわきゃ無いのだ。

まあ兄さんや格闘の師匠とはかなり仲いいし、それほど気にしてない。先日ポカやったばかりの魔法の扱いに時間を裂くって言うのはそこまで悪い事じゃないと思うし。

そんなわけで、俺は魔法陣の上を歩いているのだが…

「むう…近接戦闘が極められない訳だ…」

魔法の制御自体は出来るのだが、そっちに意識を裂かざるをえないため、貫のような高度な集中力がある技がまともに使えそうも無いのだ。

その上、俺が展開している魔法陣は1個。

数作る事は出来るが、作る事に意識を裂けば裂くだけ当然技なんて使えない。3つも作れば徹すら出来ないし、5つも作ればそもそも動き回れない。

平気で二桁近い魔法陣を展開してくれたユーノってやっぱり凄いな…

やっぱりデバイス欲しいかも…って言うか魔力以外全部デバイス任せにしたい。

魔導師が聞いたらふざけるなと怒鳴られそうな事を思いつつ、何とか魔法を行使しながら出来る限り身体を動かしてみる。

と、そんな事をしていたら通信が入った。

なんでもアルフがアリサに飼われていたらしい。後で笑ってやる。

なんて考えていられる余裕は無かった。

アルフは、フェイトに虐待を加えているプレシアに戦いを挑んで返り討ちにあって逃げ出したと言うのだ。オマケにフェイトのほうはそんなプレシアが笑えるようにとジュエルシードを集めるといってお願いをかなえる為に単身で戦っていたという事らしい。

フェイトの芯の強さと優しさに感心しつつ、俺は違和感を感じていた。

母親云々抜きにしても、自分の都合のいいように動いてくれる人間をわざわざ消耗させるなんてよっぽどの何かがないといけない筈。悪人だって、言い方は悪くなるが、体よく使うためにもっと餌っぽいものを撒くだろう。

それが、徹底的にフェイトをいたぶってる？

単なる馬鹿ならそんなんでも判るけどとんでもなく優秀な研究者だったらしいし、現状アルフに逃げられてこうしてばれている事を考えると、方針としては間抜けにしか見えない。やっぱり何かフェイトそのものに恨みがある？

…フェイトを産んだせいで夫に逃げられたとか？

何か昼ドラなノリになりそうだったから考えるのを止めた。フェイトを救った上で事情を聞けばいい。まだプレシアの事を何も知らないんだ、犯罪者に成り下がってまで叶えたい願いが尊いものだった。このまま御用はあまりにもつたいないし、願いが叶ったらそれをダシにフェイトに謝らせるのもアリだ。

なんにしても、なるだけ上手い事終わらせないと。ヒーローになる気なら。

「で、どうするんですか？俺的にはこのタイミングが妥当かと思うんですけど？」

かねてより決まっていた、なのはとフェイトの一騎討ち。他にジュエルシールドも無い以上このタイミングで動いておかないと回収されたジュエルシールドだけでも使われたらまずいことになるらしいし、俺達が渡すそぶりを見せなければ引きこもって使ってしまう可能性がある。

だから、こっちのジュエルシールドで釣る。そういう作戦だった。

なのはとフェイトの決着がどうであれ、管理局的には転移時に本拠地を暴くことで仕事を済ませることが出来るし、俺達はフェイトについて任せてもらったただだからフェイトと決着つけられればOK。互いに理想的な作戦だ。

「明日にでも作戦を決行しよう、速人、君の力も借りていいんだろ？」

「そりゃ当然、フェイトが無事なら問題なし。管理局の優秀な魔導師さん二名を生け捕りにしたヒーローの実力、存分に頼りにしてくれよ。」

俺は胸を張って自信満々に答えた。が、クロノは肩を落とす。

「だったら今日位ゆっくり休んでくれ。訓練とは言えやりすぎは良くない。」

俺は首を傾げた。今日はまだ始めて6時間位しか経ってないんだけどな…

そして、決戦の日…

被害が出ないようにと海で行う事になった決戦。なのはとフェイトを戦わせると決まってるから、なんだかんだ言ってる管理局の人達もなのはを鍛えてくれたし、かなりいい勝負が出来るだろう。

ジュエルシードの反応でこっちの位置を教えていると、フェイトが姿を現した。

…戦績は二敗。そんな相手にラスト一戦になるともなれば緊張しているかとも思ったが、なのははまったく動揺を見せなかった。

さすが、と感心していたんだが…

「始めよう！最初で最後の本気の勝負！！」

我が妹は何か聞き捨てなら無い言葉を吐いてくれました。

「二回も派手に負けといてそりやずるくない？」

レイジングハートを構える我が妹の暴言をたしなめる。

緊迫した空気が緩み、なのはは派手にずっこけた。

「そ、そうじゃないの！今回だけ勝つ気で戦うの！！今まではお話しただけだったから！！」

「あーいるいる。負けといて『今のは試合用の全力だ。』とか言う奴。見苦しいぞー。」

「アンタやめなよ！話が進まないじゃないか！！」

必死に否定して来るのはは楽しかったのだが、アルフに止められた。

ま、試合だしな。緊張感あったって程々でいい。

仕切り直しとばかりに構えたなのは。フェイトは表情を変えない。

「いくよ、フェイトちゃん!!」

宣言するなり、なのはは飛び立って行って…

桜色と金色の光が交錯した。

誘導弾をメインに攻めるのはに対して、フェイトは直射弾を使用する。

フェイトの放つ弾は高速だが、それだけで対処できる程なのはは甘くない。なにしろ執務官様の指導に従って魔法戦を鍛えてたんだ。速いだけの弾でどうにかなる筈がない。

よって、フェイトは接近戦を仕掛ける。

御得意の超高速移動魔法で接近したフェイトは、鎌を振りかぶって…

なのははそのタイミングで近付いた。

「何度も同じ手に!!」

「あぐっ…」

が、フェイトは接近して来たなのはの腹に向かって膝を叩き込んだ。それなりに考えてたんだろうが、バリアジャケットがある上急所も関係なしに放った攻撃で止まる訳がない。

対してなのはには、この時の為に用意しておいた対策がある。

『いいかなのは、ハッキリ言ってお前には格闘戦の才能は塵の1か
けらも無い。一般人を10とするならお前は0.01くらいか。』

『にゃ！？ひ、酷い…』

『だが近接戦闘が出来ない訳じゃない。その為の便利道具だ。』

『え？』

『いいか、よく聞け。近付いたらな、触るだけでいい。』

なのははフェイトの胸に手をおく。：そう、踏み込みとか打ち込み
の姿勢とか、そんな永い習練が必要な物などいきなりで使える訳が
ない。

だから素人なら…

「『デイベインバスター…』」

「っ！？」

『首尾よく触れたら…後はぶっ放せ!!』

撃つだけでいい砲撃の方が余程強い。

「『インパルス』!!」

姿勢も射程も関係ない。ただ当たりたい相手に向けて撃てば、元が砲撃だけに回避も難しく、姿勢も何も撃つものさえ当たればダメージが入る。

最初ただダイバインバスターで試して自分もダメージを受け失敗。その後、発動を早くし自分へのダメージを減らし距離を離せるように調整した、なのはの近接砲撃魔法。

練習について近距離戦をやってくれたクロノが見事に一撃で伸びたのは記憶に新しい。

だが…フェイトは無事だった。

高速移動で離脱したのか…

完全には避けられなかったらしくバリジャケットの所々が裂けている。自分で教えといてなんだが恐くなつたな、なのはも。

「フェイト…大丈夫なんだろうね？」

「なのははデバイス本体での攻撃はしないからな。直撃しても死なない。気を失つたら溺れる前に拾えば大丈夫だろ。…痛いけど。」
距離が開いた以上かなりなのはが優勢だろう。なにしろ砲撃は出力、魔力弾は誘導性で負けてるんだから。

そう思つてたんだが、なのはが金色の輪に拘束された。

バインドか！フェイトもできたんだな。

「ま、まずいよ…！」

アルフが慌て出し、なのはを取り囲むように魔法陣が点滅する。

フェイトの最大奥義って所か。

「なのは！今」

「ストップだ。」

「速人!？」

飛び出そうとしたユーノを止める。

「敵との殺し合いなら止めにも入るが、これは違う。なのはかフェイトが投げないうちは邪魔すんな。」

「けどアレはホントにまずいんだよ!意地はってあの娘に何かあったらどうする気だい!！」

非殺傷設定だって完全に万能じゃない事は知っている。まして変換資質で発生しているものそのものは完全な現象だ。魔力攻撃そのものはともかく変換後の雷にそんな都合のいい設定は効かない。

『速人お兄ちゃん、ありがとう。』

『いーから集中しろ、相当やばいぞソレ。』

なのはからの礼に念話を返した瞬間…

「ファイア!！」

フェイトの声と共に、雨のような光弾が降り注いだ。

…うん、大見得切ってみたけどこりゃ酷い。

四方を100人位に囲まれてグレネードランチャーでも乱射されればこんな感じになるだろうか？魔力弾が次から次に着弾し、あっという間になのはの姿は魔力の残滓に隠れて見えなくなる。

普通なら、コレで終わりだろう。

だが、あいにくとあの高町家の子供が普通な訳が無い。

なのはは浮かんでいた。ズタボロのバリアジャケットに今にも閉じそうな瞳を意思だけで開いて。

ま、無事なら絶対意識は落ちないとは思ったけどな。何しろ休み丸一日使った無茶な訓練にもギリギリついてきた位だ。スポーツ的にはオーバーワークはよろしくないが、コレには別の意味がある。

限界ギリギリ、限界越えの状態でも投げない力を身に着ける。

「デイバイン…バスター！！」

お返しとばかりに放たれたなのはの砲撃魔法。

回避型のはずのフェイトだが、ソレを真正面から受け止めて耐え切る。

あ、凄え。持ちこたえた。

母親の為…か、意地って凄いな。こりゃ判らなくなった…

とか思ってた俺は、どうやらなのはの馬鹿さ加減を舐めすぎていたようです。

上空に上がったなのはの前に、巨大な魔力の塊が出来ていた。

って言うか、現在進行形で巨大化していた。

ちょっと待てなのは、ソレを人間相手に撃つ気か？

何て言うかもコレ、ただでさえ人間相手だったら凶悪な砲撃のデ
イバインバスターを軽く数倍上回ってそうなんですけど…

フェイトは呆然として逃げようとして…バインドにかかっていた。

これはもう苛めだろう。いや、虐待？

非殺傷設定、確かに万能じゃないようだ。死なないから何やっても
いいなんて勘違いもいい所だ、間違ってもコレは友達に撃つ技じゃ
ない。

「これが私の全力全開！スターライト…ブレイカーッ…!!」

これは後で叱っておこう。そう思った瞬間、フェイトの姿が巨大な光の柱に飲み込まれた。

光が収まってフェイトを抱えるのはに、覚えての床形成を使用して近づく。

「あ、お兄ちゃんにあっ!?!」

俺はなのはの頭を鞘で殴った。さすがに痛いのか頭を抑える。フェイトは力をなくして俺が形成している魔法陣にへたり込んだ。

「馬鹿かお前は!アレが仮にも友達になりたい奴にやる技か!?!」
「で、でも全力でやるって」

「お前、死ななきゃ何やってもいいなんて思ってたらレイジングハート取り上げるからな!物凄い嫌だとは思っけど、相手が死ななきゃ強い人間は何やってもいいんだろ!?!」

「そ、それは…」

口ごもるなのは。…ま、フェイトも休ませなきゃならないしコレ位でいいだろう。

「死ななくたってまずい事がある事ぐらい、俺がクロノに重傷負わせた時に十分理解してるだろ？だからちゃんと考えてくれ。」
「っ！う、うん…ごめんなさい…」

魔力を持つてるからって言う理由で手伝いを始めた上、自分より強い相手ばっかだったから、加減なんて知らないんだろう。おまけに非殺傷設定の事もある。

反省してくれたならよしとする

雷の前兆を感じた。

俺はなのはとフェイトを庇うように跳躍し、雷撃の直撃を受けた。

第十八話・海上の決戦から終わりの始まり（後書き）

格闘技とかの場合打ち込み方から踏み込みから綺麗にできなきゃ威力が出ないのに対して、撃って当たれば撃ち方は関係ない砲撃が使えるなら近距離砲撃ってありだと思って作っちゃいました。掌から撃てる⇨手首曲げるだけで全方向カバー。反動があるからそこまで都合よくはいかないとは思いますが、結構便利な使い方ではないかと。

第十九話・絶体絶命の大ピンチなの！？（前書き）

今回のタイトルは、オリジナル主人公が眠ってるためなのは風味で。

第十九話・絶体絶命の大ピンチなの!?

第十九話・絶体絶命の大ピンチなの!?

Side 高町なのは

折角フェイトちゃんを止められたと思ったのも束の間、私とフェイトちゃんを落雷から庇ったお兄ちゃんは、そのまま海に落ちていった。
気を取られたのは一瞬。ユーノ君が助けに向かったのを見た私は、お兄ちゃんが作った足場が消えるのを感じてフェイトちゃんを抱える。

その瞬間、何か強い魔力を感じて視線を移す。

「スパイラルバスター!!!」

「ぐあああつー!!」

爆音と共に、吹き飛んで行くフレアさんの姿が見えた。

気がつけば、フェイトちゃんのジュエルシールドがなかった。

「執務官が出て来ててくれればよかったんだけど、贅沢言っても仕方無いか。」

「アンタはっ!!」

アルフさんが、聞き覚えのない声の主に向かって怒鳴る。

アルフさんが怒鳴った方向に、見慣れない女の子の姿があった。彼女は：何て言うか、白かった。靴もロングスカートもシャツも手袋も短い杖の形をしたデバイスも。

ただデバイスの核部分と、首にかかった首輪だけが淡い桜色をしていた。

「リライブ、流れの魔導師。プレシア…テストロツサの命によりジユエルシードを貰いに来た。」

彼女がそう言うと同時に、結界が展開される。

何の躊躇いも無い声。フェイトちゃんとも違う、完全に迷いの無い澄んだ声。

「ふざけんじゃないよ！騙してたんだね！！」

アルフさんが拳を握って突撃する。彼女はそれを…滑るように避けた。

クロノくんともフレアさんともフェイトちゃんとも違う、魔導師の動きじゃない。

魔法近接戦闘じゃなくて、格闘技術。お兄ちゃんと違って動きは硬い気がするけど、それでも形は出来ていた。

「ぐ…あつ…」

「フェイトが消耗してる以上魔力ダメージ何て与えたら消えかねないから、悪いけど普通に刺させて貰った。」

アルフさんのお腹から血が流れていた。

彼女を見れば杖になっていた筈のデバイスは、短い剣の形になって血に濡れていた。

アルフさんは、ユーノ君の方に蹴り飛ばされる。
そして…

彼女は、私の前に来た。

私はレイジングハートを構える。こんな、やっとフェイトちゃんに認めてもらえたって言うのに、その証でもあるジュエルシードをいきなり来た娘にとられるなんて納得できない。

彼女はそんな私を見て首を横に振る。

「…別に死なせるつもりは無い。君も消耗したまま倒せる程私が弱くない事は分かった筈。それでもやるって言うなら、海に落ちた人達の救助は諦めた方がいい。」

「あ…っ！！」

もう1分はたった筈だった。結界に囲まれてる以上アースラの人はい来れない。

ユーノ君は、お兄ちゃんとアルフさんを回復の魔法陣に入れて海にいた。

まだフレアさんが上がって無い。

「ジュエルシードをくれれば今すぐ結界を解いてここを去る。くれないなら貴女とフェイトも海に叩き落とした上で貴女のデバイスごと貰って行く。私はどっちでもいい。どうする？」

脅されて、大事なジュエルシードを渡す訳にはいかない。けど、私が無理言ったらフレアさんとフェイトちゃんが…

『プットアウト』

「レイジンググハート!!!」

いつかのように、けど今回は全てのジュエルシードを出すレイジンググハート。

彼女はすぐにその全てを回収した。

「賢明だね、無理しても被害が増えるだけ。いい子と一緒に良かったね君。」

私に向かって涼しげな笑みを見せた彼女は、結界を解いて私から離れた。

悔しかったけど、傍には疲れきったフェイトちゃんもいるし、アッサリ負けてユーノ君の負担を増やす訳にも行かない。

「逃がす訳にはいかない。」
いきなり聞こえた声に空を見れば、クロノ君がそこにいた。

クロノ君は私より全然強いけど、何とか出来るかな…

「逃がさないって言えないのは、勝ち目が無いの分かってるからでしょ。私の推定ランクどれくらいだった？」

「どれだけ強くても、逃がす訳にはいかない。」

クロノ君は静かにS2Uを構える。彼女はそんなクロノ君を見ながら微笑んだ。

可愛くて優しい娘だと、アルフさんが刺されたのに何故かそう思った。

けど、だから余計に納得できない。こんな事するなんて…

「そういうのは嫌いじゃない。でも…そんなに暇でもないしこれで失礼させて貰うね。」

彼女は何かを投げた。そして…

目の前が光でいっぱいになった。

離れた位置にいる私も目がチカチカする。

光が治まったら、もうそこに彼女の姿は無かった。

クロノ君は爆弾だと思って展開した防御魔法越しに眼を眩ませられただけだったから、特に眼に以上も無かったみたいだった。雷の直撃を受けたお兄ちゃんと、刺されて大怪我を負ったアルフさん、海に落とされたときに頭をぶつけて怪我をしたフレアさんが医務室で手当てを受けて眠っていた。ユーノ君はサポートが上手だから回復を手伝っている。

私は、フェイトちゃんの手を引いてクロノ君とブリッジに向かっていった。

「くっ…まさかああも簡単に…」

クロノ君が悔しそうにしていた。

執務官って凄い職業で、クロノ君はそれになるだけの凄い実力を積んでいる。だから、お兄ちゃんや犯罪者の彼女に好きにやられっ放しで悔しいんだろう。

私も…悔しかった。

折角フェイトちゃんと全力で戦って、私の勝ちだって認めて貰えたのに、その為にかけてたジュエルシードを脅されて取られて逃げら

れたんだ。悔しくない訳がなかった。

ブリッジに着くと、エイミーさんとリンディさんが難しい顔をしてさっきの映像を見ていた。

「転移先は割り出せてるけど…」

「これだけ強いんですもの、余裕なんでしょう。」

私に付いて来る沈んだ表情のままのフェイトちゃん。

無理もない。さっきの戦闘で私もクタクタだし、お兄ちゃんの言う通りやり過ぎの魔力ダメージを受けた上、アルフさんが怪我してジュエルシードを奪われちゃったんだ。

私はフェイトちゃんと繋いだ手に力を込めて、リンディさんを見た。

「あの…リライヴちゃんどれくらい強いんですか？」

私は気になって聞いてみる。リンディさんはうかない表情のまま答えてくれた。

「今分かってる情報だけで空戦S+。クロノの二回りは強い計算ね。」

ランクの方はよく分からなかったけど、クロノ君より全然強いって説明で、リライヴちゃんが物凄く強い事だけは分かった。

「プレシアは研究者だけどアルフさんに重傷を負わせる程の実力で次元跳躍攻撃まで使いこなす魔導師。二人がいる本拠地への突入じゃ正直クロノ一人じゃ荷が重いわね…」

「あ、あのっ！私も行きますっ！！」

私は気付けばそう言っていた。

「駄目よ。なのはさんはあんな戦いしたばかりじゃない。それに相手は今度は殺人もためらわないのよ？勝手に行かせちゃったら私達が速人さんに怒られちゃうし。」

「魔力は少し休めば大丈夫です！このまま何かあっているんな人が傷つく事になったら嫌なんです！お手伝いさせて下さい！！」

私は言い切ってからお辞儀した。もちろん無理はあると思う、けどもし何もしないで家族や友達がいる私の町まで無くなっちゃったら、耐えられない。

「…だ、そうだからクロノ、一人で出撃するのはやめておきなさい。」

リンディさんは今にも飛び出しそうなクロノ君に声を掛けた。

クロノ君は、私の前まで歩いて来る。

「すまないなのは、力を貸して貰えるか？」

少しだけ辛そうに私に手を差し出してくれるクロノ君。私はその手をとって頷く。

「うん！任せて！頑張るから！！」

私は出来るだけ元気を見せるようにそう言って…

「母さん…」

「にゃ！？あ、あの…その…」

プレシアさんの為にジュエルシードを集めていたフェイトちゃんが側にいる事を思い出した。

私がフェイトちゃんとクロノ君を交互に見て慌てているとリンディさんは息を吐く。

「フェイトさんにこの会話を聞かせておくのも忍びないわね、鍵と監視は必要になるけれど客室へ案内」

『無事で何よりね、フェイト。』

リンディさんが言い終わる前に、いきなり、モニターに情報で見せてもらっていた女の人の顔が映った。

「か、母さん…」

『ふふふ…あはははははははははは！貴女はよくやったわ！！何に使うかも知らないジュエルシードをせっせと集めてくれて。オマケに餌とも知らずにその魔導師を消耗させてくれたお陰でアツサリ必要相当数のジュエルシードが手に入ったわ！！』

フェイトちゃんのお母さんである筈のその人は、フェイトちゃんを餌って言った。

しかも、こんなに震えているフェイトちゃんを見ながらとっても楽しそうに笑っている。

『お礼にいい事を教えてあげるわフェイト、私がジュエルシードを

望んだ目的よ。貴女も知りたいでしょう?』

プレシアさん話す中、画面が切り替わってポッドに浮かんだ…

フェイトちゃんと瓜二つの女の子の姿が映った。

『この娘はね、私の娘アリシアなの。』

「え…」

『本当はアリシアを蘇らせようと思ったのだけど、記憶まであげたのに貴女は出来損ないの人形だった。どうやったってアリシアにはなれない。だから私はアリシアを取り戻すためにアルハザードへ向かう。そのためにジュエルシードが必要だったのよ。』

フェイトちゃんの震えが強くなる。

「アルハザードって…貴女本気で言ってるの!?!」

『そうよ。それだけのクローンまで作れるこの私が、何のアテも無く適当な事を言う訳無いでしょう? ああ、まだ言っただけでなかったわね…』

「やめて…」

もう判っている。でもあまりにも酷い現実で、一番聞きたくない筈のフェイトちゃんがここにいる。なのに…

『フェイト、貴女がアリシアのクローン、出来損ないの人形よ。この私が全力をつぎ込んだにも拘らず失敗作に成り下がった貴女が大嫌いで仕方なかったのだけど、今回だけは本当に感謝するわ。これでアリシアが蘇る。良いように踊ってくれてありがとうフェイト。』

「あ……」

突然、フェイトちゃんから伝わって来ていた震えが消えて…

フェイトちゃんは瞳の光を失って倒れこんだ。

S i d e ～ リライヴ

言うだけ言ったと確認したところで私は管理局に向かって飛ばしていた映像を切った。

「…コレでよかったのかしら？」

「充分、ありがとうプレシア。」

私の目の前には、さっきまでのわざとらしい笑みを抑えた氷のような瞳を見せる魔導師がいた。

わざわざ管理局に向かって通信を飛ばしてまでやりたかったこと、それは…

フェイトが使われていただけだという記録を明確に管理局に残すこと。

ジュエルシードを受け渡す前にプレシアに頼んだ演技。

ストレス発散でもなんでも良いから、限りなく悪役を演じてフェイトの無罪の材料にする事。

「別に良いわ、貴女の言う事も当たってはいるのだし。」

私がプレシアに伝えたことは二つだけ。

一つは、プレシアは、フェイトを嫌っているのではなく、アリシアが蘇らなかった事実そのものを見せ付けられるのが嫌だったという事。

そしてもう一つは、アリシアとアルハザードに行くのであれば、他の人間は別に関係ないのだから、だったらフェイトだって幸せなほうが良いだろうという事。

後者は納得してくれたかどうかはわからないが、やる事が殆どストレス発散に近い暴言を吐き散らすことなると、ジュエルシードを確実に私から受け取ることが一番重要という事で、今回この演技を引き受けてくれた。

「さてと…じゃあジュエルシードを渡すけど、その前に…」

「ぐっ！？こ、コレは…」

私はプレシアにスタン効果のある魔法を放つ。私が裏切ったと思っただのか、プレシアの表情が歪む。

私は首を横に振ってその考えを否定した。

「ちゃんと渡すから安心して。ただ、今渡したらその身体で発動しようとするでしょ？だからその前に…」

ぐらついて地面に横たわったプレシアを取り囲むように五つのジュエルシードを配置する。

「我は願う、際限なき癒しの力を。」

五つのジュエルシードが綺麗に発動し、プレシアを囲う癒しの魔法陣が形成された。

「こ、コレは…」

「私がまだ未熟だから、回復の願いは制御できても病魔を取り除くって制御は出来ないの。間違っって病気に犯されている部位そのもの

とかが取り除かれちゃったら即死だし。」

光に包まれながらプレシアはゆっくりと意識を失った。

瞬間的な治療は、むしろ悪影響を及ぼす。睡眠時間の確保もかねて30分ほどこうしていて貰おうと思って、完全回復まで多少の猶予を作った。

プレシア、体調悪いくせに私まで疑ってたからまったく眠らなかつたし…

後は、回復したプレシアがジュエルシードを制御してアルハザードへ行く事ができれば…

「それまでは、誰もここまで通さない。」

私は眠るプレシアの前に残りのジュエルシードを置いて入り口に向かった。

S I D E O U T

第十九話・絶体絶命の大ピンチなの！？（後書き）

Q：なんでここまで強いオリジナルが敵なのか？

A：なのは勢が強すぎるため（笑）

リライヴの情報は、戦闘に入ったら書こうかと思っています。

第二十話・最終決戦、悲しい願いを終わらせるためになの

第二十話・最終決戦、悲しい願いを終わらせるためになの

私とクロノ君は、二人でプレシアさんがいる時の庭園に乗り込んだ。転移先から少し先に結界が張ってあった。

「リライヴだろうな。迂回路もないようだ、行くしかないか。」

周囲を見渡したクロノ君が私を見る。

私はレイジングハートを握る手に力を込めて頷いた。

止めないといけない。フェイトちゃんを傷つけて、いろんな人を巻き込もうとしているプレシアさんも、プレシアさんを手伝って誰かを傷つけることを躊躇わないリライヴちゃんも。

私とクロノ君は意を決して結界に入った。

広間の中央に、リライヴちゃんは静かに立っていた。

私達に気づいたリライヴちゃんは、驚くこともなく私達を見る。

「執務官に…白い娘か。」

「なのは！高町なのは！！って言うよりリライヴちゃんのほうが真っ白だと思っのー！」

白いのとか言うリライヴちゃん。私は名前を名乗ったけど、完全に目に入ってない。

お話ししようと思ったんだけど、クロノ君が私の前に出てデバイスを構えた。

「遺失物無断使用、犯罪幫助等の容疑で拘束させて貰う。」

「そう、大変だね執務官も。」

「そう思っならこんな事始めからやらないでくれ。」

リライヴちゃんはクロノ君の言葉をまるで気にしていない。

話すだけじゃダメかもしれないけど、だからって話もしないうちから攻撃なんて出来ない。

「通してリライヴちゃん！このままだといろんな人に迷惑かかったやうー！」

「迷惑どころかいくつか世界が消える。」

私達の言葉を聞いたリライヴちゃんは、本当に綺麗に笑った。なんでここで笑えるのか、そう思って…

「世界が消えてもいいくらいに大事なんだね、アリシアっで。」

根っこから、大事にしているものが違うことに気が付いた。

見ていて寂しくなるような、優しい笑顔でそう呟くリライヴちゃん。
クロノ君は、手を固く握り締めて叫んだ。

「過去を無かった事になど出来はしない！一人の身勝手に世界を危機に陥れて良いものか！！」

クロノ君の力強い声に、リライヴちゃんは笑顔を無くして目を細める。

「管理局の決定なら良いみたいだけどね。危険だと判断すれば一人殺すのに星の無関係な人達ごと消すでしょ？」

「それはっ！！」

クロノ君は、否定の言葉を告げようとしたけど何も言わなくなる。
私は一歩前に出た。

「そう言うことが悪いって思うなら…人がやってるからって理由で危険な事したらダメだよ！！」

「そう言うのって、貴方が決めるの？それに私は別にダメな事するのに抵抗ないんだけど。」

リライヴちゃんは、まったく取り合ってくれない。

ダメな事に抵抗がないって…

「別に良い子になってもしょうがないし、そういう役は貴方達がやってくれるでしょ？」

「そういう問題じゃ」

「それとも君も悪い子？私と話してたら執務官が困るよ？」

言われて私はクロノ君を見る。

捕まえに来たはずなのに、時間も無いのにこんな事してたら確かに困る筈……

私が言葉に詰まっていると、クロノ君は首を左右に振ってリライブちゃんの言葉を否定した。

「少なくともなのはは犯罪者に悪い子呼ばわりされるような事はしてないさ。」

「そう？なら何より。初めて出来たフェイトの友達が悪い子じゃちょっと心配だし。」

今も多くの人を危険に巻き込む事件を手伝っているのにフェイトちゃんを気遣うような事を言うリライブちゃん。

「こんな事しておいて心配も何もないよ！！何でいろんな人に迷惑かかるような事をするの！？」

「話す意味はないよ。」

「だから！そういう事を決め付けないために言葉があるんだよ！何にも理解しあうことも無いままこんなことするなんて！！」

目が、絶対に悪い人のソレじゃない。まったく曇ってないし物凄く強い力を感じる。

だから、何も話してくれないのが悲しかった。

リライヴちゃんは首を振る。

「そもそも、理解して欲しいと思ってないの。貴方達に理解されてもむしろ困る。だから貴方達からの評価が犯罪者でも悪者でも別にいい。もし話し合うとしたら一つだけ。」

静かに、何でもない事のように続けるリライヴちゃん。

「私はプレシアの護衛。貴方達の目的がプレシアの妨害、拘束以外なら…話し合いの余地はある。けど、執務官は捕らえに来た、君はその手伝い。違う?」

違わない。けど何で寂しそうに言うのか。

「我儘ばかり言って理解も求めないで人を傷つけるなんてダメだよ!」

「君のそういう所は嫌いじゃないよ。でもそれは、私がダメで我儘なだけ。ここを退く理由にはならない。」

何も聞いてくれない。クロノ君がデバイスに魔力を集中する。

「…なのは、力を貸してくれ。僕一人じゃ正直辛い。」
『ブレイズキャノン』

クロノ君が砲撃を放った。リライヴちゃんはそれを躲す。いつ次元震が発生するかも分からないから今は…

「捕まえるよ、リライヴちゃん。」

「出来るのなら、いいよ。」

戦う事にした。リライヴちゃんはきつと、フェイトちゃんと違って何があっても止まらない気がしたから。

「アクセルシューター!!」

数発のシューターを放つ。それぞれが弧を描いて飛んでいき…

何の前触れも無く掻き消えた。

『プロテクション』

「え? きゃあっ!!」

レイジングハートがプロテクションを張って、その理由も分からないままプロテクションを破壊されて吹き飛んだ。

「っやはり無色の魔力光!? もはや稀少技能だぞそれは!!」

「そう? まあ見にくいのは便利だと思うけど。」

クロノ君は捕捉出来ているらしく、揺らめくように映る何かを避けている。

確かに何か時々ゆらゆらと揺れているようには見えるけど、とてもじゃないけど避けられそうにはなかった。

「レイジングハート: 私見えないから、防御は任せていい?」

『分かりました、ご武運を。』

レイジングハートと返事に感謝しつつ、私はシューターを精製する。

「クロノ君！今援護する！！」

「無駄！！」

私が放ったシューターは、何故か途中でかき消される。

『彼女は先程から一つの魔力弾を操作しています。ただしその一つが、固く強く速い。魔力消費も一発を操作し続けている為ほとんどありません。』

びっくりする他なかった。だってシューター一つで私とクロノ君止めてるなんて言うんだから。クロノ君も攻め手に回ろうとはしているものの、上手く近付けない。…砲撃魔法を当てるしかない。

「デイベイン…」

「クイツクバスター！！」

私の声に反応して砲撃魔法を撃つて来るリライヴちゃん。けど、私はチャージに入っていない。目の前が渦みたいに大きく歪んで見えただからよくわかった。本当に無色の魔力なんだ…

『フラッシュムーヴ』

迫って来る砲撃を高速移動で躲し、移動先でチャージに入る。

「フエイント！？」

「ブレイクインパルス！！」

私を狙って砲撃を放った事で出来た隙に接近したクロノ君が、零距离で攻撃を放つ。態勢を崩しながらも凌いだリライヴちゃんに照準

を合わせ…

「デイバイン…バスターツ！」

「くっ！！」

全力の砲撃を放つ。シールドを展開したリライヴちゃんは…吹き飛ばされた。

後は拘束すればと、そう思ったんだけど…

「やはり強い…ステインガー！！」

吹き飛んだリライヴちゃんに追撃を放つクロノ君。

「何で！？」

追撃なんてと思ったんだけど、リライヴちゃんは体勢を立て直していた。

…無傷！？

「自分から吹き飛ばされたんだ！シールドは抜けてないからダメージは無い！！魔導師なら普通考えないぞこんな事…」

「受けとめたらバインドで詰み…でしょ？執務官。」

クロノ君の攻撃を、透明の…見える程度に形成された剣を振るって掻き消すリライヴちゃん。リライヴちゃんの技に、クロノ君は悔しそうに顔を歪めた。

「雑多な犯罪者が身に付けられる技量じゃない、一体どれだけ習練を積んだんだ。」

「え？依頼以外の空き時間全部だよ。いちいち覚えてない。」

それがどうかしたのかと言った風なりライヴちゃん。なんか、どこかで見えた事あると思ったら…

恭也お兄ちゃんに似てるんだ。

怪我したお父さんに代わって剣を継ぐって決めたお兄ちゃんは、忍さんに会うまで剣しか見てないように鍛え続けてた。

それと似てるんだ、目的がハッキリしていて、多分人の評価は関係無くて…

御神の剣は人に見せる物じゃない

あれだけ剣士として頑張っているのにそんな事を言う恭也お兄ちゃん達。

きつとリライヴちゃんにもあるんだろう、人に見せるための物じゃない、それでも大事な物が。

「呆れたな…馬鹿だろう君は。」

「悪かったね！」

肩を落としたクロノ君にちよつと怒ったように返すリライヴちゃん。

「さて…と、引く気は無いみたいだから決めさせて貰うね。」

『バーストモード』

リライヴちゃんのデバイスが、宣言した瞬間…その身体が澄んだ光に包まれた。

光が煌いて、リライヴちゃんはフェイトちゃんですら普通に動いていたら全く追いつけないような速さでクロノ君に接近する。

クロノ君はそんなリライヴちゃんの軌道と、垂直になるように横移動する。

あんな速くちゃ方向転換は急には出来ない。

狙いをつけてるクロノ君に習うようにシューターを精製しようとして…

「が、っ!?!?」

クロノ君が、デバイスごと斬られた。

速過ぎて私には何が起こったかもよく分からなかった。

だって、まったく速度も落ちないまま横に飛ぶなんて思っても見なかったから。

「こ、こんな…馬鹿な…」

「スパイラルバスター!!」

答える事なく放たれた砲撃は、クロノ君を飲み込んで壁に大きな穴を作る。

リライヴちゃんは、私一人じゃどうにもならないくらいに強い。

諦めたら…いろんな世界が危ない。

だから私はレイジングハートを構える。

私の様子に気付いたリライヴちゃんは微笑んで…

金色の魔力弾を回避した。

「…母さんに会いに来た、伝えたい事があるから。」

「フェイトはプレシアのストレスになりそうだから通す訳には行かない。」

「リライヴちゃんは会いに来ただけのフェイトちゃんすら拒む。」

「落ち込むかと思ったフェイトちゃんは、少しだけ俯いて…私を見る。」

「…手伝ってくれるかな？」

「うんっ！！！！」

何か色々胸がいつぱいになっちゃった私は、目が熱くなるのを感じながら全力で頷いた。

S I D E O U T

第二十話・最終決戦、悲しい願いを終わらせるためになの（後書き）

リライヴの解説です。

魔力光、無色。ペットボトルとか水とかの感じだと思ってもらえれば。シューターサイズで高速で飛び回られると見え辛いけど見えな
いわけじゃないって感じです。

バーストモード。全身に魔力を纏わせ、纏った魔力をそのまま推進
力や攻撃力、防御力として使用する。直線的にならざるをえないも
の、直角に近い方向転換も出来る。ただ、魔力消費が異様に多い。

第二十一話・最終決戦、自分自身を始めるために

第二十一話・最終決戦、自分自身を始めるために

Side〜フイト!! テスタロッサ

目の前が真っ暗になった。何の力も入らなくなった。

私自身の持っている何もかもが偽者で、私がいるだけで母さんは憎かったんだ。

大切なのはアリシアで私じゃない。私はただの失敗作。

ああ…でも、もういいのかもしれない。

リライヴは物凄く強かった、きっと母さんを守り通すだろう。後は母さんは自分の願いをかなえて幸せになれる。

だったら…もういいのかな…

私は考えることも止めようとして…

『フェイト…聞いてたよアタシも。』

アルフから念話が届いた。

『アタシさ、ずっと引つかかかってるんだ、速人の奴に言われた言葉がさ。フェイトの為に沿わないことが出来るなら…そもそも犯罪者になる前に止めやがれ！！って奴。こんな事になる前に止めてれば、もっとフェイトが悲しまなくて済んだかもしれないってね。』

『そんな事…』

ないと言い返すだけの力もなかった。今の私が何か言った所で説得力なんて何も無い。

『アタシはフェイトに幸せになって欲しい。フェイトはどうしたい？』

私が…どうしたいか…

『あの鬼婆と一緒にいたいのか、なのはに返事を返したいのか、それとも別の何かなのか判らないけど…それでフェイトが幸せになれるなら、アタシは全力でフェイトの願いを叶えてみせる。』

…母さんの願いを叶えたかった。でも、願いを叶えたことで母さんはいなくなってしまう。それがどうしようもなく辛くて悲しい。

私は母さんにとって必要のない人形。

だから私にとって母さんは…

「必要ない…わけないよ…っ！！」

だから頑張れたんだ、母さんが喜ぶ顔がみたくて。なのに今、母さんがいなくなるうとしていて…

ジュエルシードが使われれば、中に行つたあの娘も無事じゃすまないだろう。

まだ、止めたいとか、邪魔したいとかそんな事はかけらも考えられない私が母さんに会って何がどうなるかも判らないけれど、このままここにいて母さんもあの娘もいなくなつて…

それを、心から、よかつたなんて言える訳がない。

『アルフ、私行くよ。』

『アタシも…って言いたいけど、今行つても邪魔になりそうだね…』

アルフから悔しげな念話が届くけど、私はソレを否定する。

『どうでもいいって思ってたけど…そうじゃない。まだ、無くしたくない物があるから。だから、私が自分で行かなきゃいけないんだ。』

私は起き上がって傍にあったバルディッシュを手取る。

「もう少し…一緒に頑張ってくれる？」

『イエス、サー』

迷いなく答えてくれたバルディッシュと共に、眠っていた部屋を出て時の庭園へと向かった。

展開されている結界に入ると、クロノ執務官が吹き飛ばされるのが見えた。

残った白い娘に向かうリライブに射撃魔法を放つ。

そして…今に至る。

白い娘の声を聞いて、リライブは肩を落とした。

「折角スーパーエースが片付いたと思ったら、エース級が二人か。」

「私負けないよ、強いから。」

バルディッシュを構えて真っ直ぐ向き合う。…あの娘は完全に後衛型。相当な実力者のリライヴと接近戦なんて出来る訳がない。

『私が前に出る。タイミングは念話で合わせて砲撃を。』

『うん!』

念話で軽く打ち合わせて、私は飛び出した。

「アークセイバー!!」

鎌の一閃にて雷刃を飛ばす。

「ソニックセイバー!!」

私の放った刃は、リライヴの放った見えない魔力刃に一瞬で切り裂かれた。ギリギリ回避するが、リライヴは私に接近して来た。

スピードは互角、パワーは大差。どう考えても勝ち目はない。

…一人なら。

「デイバインバスター!!」

「っち!」

私とリライヴの間に放たれた砲撃は、リライヴの追撃を止める。上空に向かった私はすぐさま魔法陣を展開。

「サンダーレイジ!!」

雷が降り注ぐ。直撃なら少しくらいは効いた筈。

雷撃が治まった先には無傷のリライヴの姿があった。

「防ぐのは回避が下手みたいであんまり好きじゃないんだけど、本当強いね、二人とも。」

私の考えは甘かったらしい。

それにしても執務官を倒した後に一人がかりの攻撃を受けてまだ無傷なんて…

「っ!バインド!?!」

余裕を見せていたリライブが、桜色のバインドに拘束されていた。何と言うか、あの娘は全く容赦がない。

「当たらないなら…無理やりにも当てる!!」

『デイベイン…』

「冗談…キツいつて!!」

かなりの早さでバインドを解いたリライブだったが…

「『バスター!!』」

彼女の砲撃魔法の方が早く、リライブは桜色の砲撃を受け止めた。こんな絶好のチャンス…もう無い!!

「サンダー…スマッシュャー!!」

「いつ!?!」

丁度反対の位置まで来て放った砲撃魔法は、挟み込むような形でリライブに突き刺さった。

両手のシールドで、二本の砲撃を受け止めるリライブ。

何て出鱈目…でもここで仕留め切る!!

「はあああああっ!!！」

「届いて!!！」

私達は更に出力を引き上げる。

これで終わらせる!!!!

「スパイラル…バスター!!!!」

「な!?!」

「そんな!!！」

砲撃魔法を当たるか当たらないかと言った超至近距離で防いでいたにもかかわらず、防御魔法を解除したりライヴは…

私達に向かって同時に砲撃魔法を放ち、私達が放っていた砲撃魔法を貫いたのだ。

私は何とか回避に成功するが、あの娘の方は飲み込まれてしまう。

「たたた…何とかなったね。」

と…ここ最近聞き慣れた声と共に、シールドに包まれた彼女の姿が見えた。

あの一瞬であんな威力の砲撃を防ぐなんて…

改めて彼女の力に驚かされて…

『にはは…あんなの一瞬で避けるなんて凄いねフェイトちゃん。』

彼女からの念話が、私が思ってた事と同じ様な驚き方で、少し恥ずかしくなった。

「ふーっ…まさか今のも二人共墜ちないなんて。」

言いながら、無傷のリライヴが息を吐いた。

表情から一切の疲れが読み取れず、規則正しい呼吸をしている。魔力の消耗は分からないが、消耗していれば意識が重くなる筈。

…本当に…人間か？

何を意識するでも無くそう思ってしまった。
私達の息はとうに上がっている。全力を注ぎ込んだ砲撃のせいだろ
う。

「シューティングスターツ!!!」

と…リライヴから雨のように魔力弾が放たれた。
いくら速くても避け切れない。

「バルディツシュ!!!」

『ディフェンサー』

私は防御魔法を展開して雨のような弾丸を防ぐ。

魔力弾は、障壁に命中するなり涼風のように消えた。

こんな威力の無い攻撃で何を…

「フェイトは兎も角彼女はもう限界みたいだね!!!」

私が防いでいる間に身を翻して彼女に向かって飛びリライヴ。

つ…時間稼ぎ!?

「あ…っ!フ、フラッシュムー」

「遅い!!」

白い娘は逃げられずに魔力剣によって腕を斬られる。反応が悪かったけど…私が来る前から戦っていたんだから無理も無い。

魔力ダメージだが、斬られる痛みと魔力が抜けて行く苦しさを味わう事になる。

その身体を傾けた白い娘は胸のリボンを掴まれて、私に向かって投げられた。

「アクセル!!」

「あああああぁあつ!!!!」

魔法によって急加速させられる。

…受け止められるか!?

「く…うつ!!」

受け止めたが、そのまま壁に叩き付けられる。

けど何とか止め

「はい残念。」

目の前に、剣を振りかぶったりライヴの姿があった。

白い娘を抱えたまま壁にめり込んだ身体が上手く動かない。

こんな…こんな所で…母さんにも会えて無いのに…っ！！！！

振り降ろされた剣は…

私の横に逸れた。

「な…っ…！！！！」

リライブは私から視線を外す。

その視線の先に

「ヒーローは美味しい所でやって来る!!! ってな!」

真紅のマントをたなびかせた速人が剣を抜き放って立っていた。

S I D E
O U T

第二十一話・最終決戦、自分自身を始めるために（後書き）

速人復活しました。このまま頑張って続けます。

スパイラルバスター。先端に向かって渦を巻いて放たれる魔力砲撃。同等の魔力消費なら貫通力がある分撃ち合いに強い。

ソニックセイバー。剣から魔力刃を放つ。ホントそれだけ。

第二十二話・最終決戦、悲劇を幸福に作り変えるために！

第二十二話・最終決戦、悲劇を幸福に作り変えるために！

医務室で、俺はゆっくり身体を起こす。

神経系へのダメージは、傷が治った魔力が回復したじゃ済まないよ
うで、そこら中が痛むが、動けない程じゃない。

「そんな身体で一体何をやる気だ？」

「お前に言われたくねー。」

結構な重傷だったはずのフレアは、デバイスを手に起き上がって
いた。

「アレだけのジュエルシードを魔導師の犯罪者に奪われた上に、私
達に奇襲をかけた彼女は現段階の推定で既に魔導師ランクでオーバ
ーSが確定している。こんな状況で出ない訳にはいかないだろう。」

「よく言うよ、こんな状況じゃなくなつて出たくせに。」

当たりだったのか普段は動かない表情を歪めるフレア。

雷撃を受けた刀は使い物にならなくなっている。素手と鋼線のみか
…空中にいる相手には心許無いが仕方無い。

「お前は何故戦っている？」

「へ？な、なんだよ？話なんてしてる暇」

「答える。」

いつもマジなフレアだが、今は少し様子が違う気がした。

「俺の技が…お前らを倒した時の俺が、人殺しの為の技を振るっていたのは分かってるな？」

「ああ。」

「俺はあの技で…あの技を身に着ける為人を殺した。殺さなきゃ殺されると施設の人間の指導の元で。そう言う意味じゃフェイトのやつてた事なんて悪事どころか尊くすら感じるよ。家族の為に戦ってたんだから。」

フェイトは強いと思う。無情な真実にボロボロになってもちゃんと立ち上がっていった。未だに現実を否定して夢物語にしがみついている俺とは大違いだ。

「罪滅ぼしか？」

フレアの問い掛けに少し考えて、俺は首を横に振った。

「いや、よく分かんないけど違う気がする。」

「何？」

「だって、もしそうなら、フェイト一人の為にこの世界を危機に晒しかねない喧嘩を売るのはおかし過ぎるだろ。」

俺は独断で、世界を守る組織に喧嘩を売ったんだ。それで誰かのことを考えてるとは言えないだろう。

結局結論は一つで…

「ヒーローって言うて伝わるか？」

「…英雄だな。讃えられるべき存在だ。」

予想通りと言うべきか、随分大人な返答だった。違うと分かっているのか、なりたいたのかとか聞いて来る事もない。

「もっと俗っぽいのだよ、俺みたいな子供が喜びそう。世界の平和と皆の笑顔を守って見せる、カッコいい主人公の事さ。」

「確かに言い方から考えまで低俗だな。そうそう上手くいくならば世界など平和ばかりだ。」

だろうな、この野郎人の夢だと思って好き放題言いやがって…

「俺はソレになりたいんだ。」

「正気か？」

真顔で聞き返された。

「あーそーですよおかしいですよ！分かってんだよ無理だから散々他の子を殺しながら生きて来たんだから！！！けど仕方無いって言いながらそうやって折り合いつけてやるのは俺はもうゴメンなんだ

「！！だからヒーローになる！ヒーローでなきゃ駄目なんだ！！！」
必要も無いのにベラベラ喋った拳句癩癩まで起こしてしまった。

分かってる、無理がある事くらい。

そこから目を背けて意地はってるだけだって分かってる。

そして…滅多に感情をのせないこいつが言つと、その事実を突き付けられてるようで耐えられなかったって事も分かってる。

何やってんだ俺…と、軽く頭を押さえていると…

「強い訳だ。」

予想外の返答が帰ってきた。

「へっ？」

フレアはポケットから小さな箱を取り出す。

そして箱を開けると中にあったネックレスを取り出した。

おもむろにそれを突き出して来る。

「あの一…だから俺そう言う趣味は…」

ストーカーの次はプレゼント？と、目の前の堅物の神経を疑い…

「デバイスだ。」

続けられた言葉に、思考が停止した。

「刀だったか？その形状のインテリジェントデバイスなど誰も使えん、お前が持つておけ。」

「おいおい！こんなもん勝手に渡していいのかよ！！」

インテリジェントデバイスと言った。デバイスにしたって量産品もあるにはあるが、インテリジェントデバイスは特注なら目が飛び出る程の額がする筈だ。そんなもん勝手に渡していい訳が

「俺が買ったものだ、別に問題はないだろう。」

「は…あっ！？」

さっぱり訳が分からない。こいつがここまでする理由が特に。

「秘匿されるべきお前の持つ力の訳を見せてもらえるのだろう？そ

の代金だとも思えばいい。」

コイツの真意はわからない。けど…
少なくとも、向けられているものが悪意じゃなく、期待だと言う事はわかった。

だから、俺はそのデバイスを受け取る。

「名称を登録してバリアジャケットを生成しろ、それが済み次第出るぞ。」

剣を逸らした俺に視線を移す真っ白な服装の少女。

あの娘がリライブか…

「驚いた…あのプレシアの雷撃を受けて生きてるなんて。」

「生まれつきしぶといんでな、こうして見事完全復活！」

俺は自信満々に胸を張る。

にしても…仕事人だな。驚いたとか言いながら焦りも殆どないし、俺のほう見ながらフェイトとなのはまで警戒してる。

魔導師の中の『本物』って所か、そりゃクロノ達が勝てない訳だ。

一般人の趣味を最低ランクと考えると、次が競技選手や警察官、その上に特殊部隊。

位置的な強さで言うとこんな感じだろう。例外もあるにはあるが、大体こんな感じと考えると、クロノみたいなのは特殊部隊辺りだ。

『本物』は更にその上…お仕事に力を使うような部隊やら何やらをたった一人で殲滅したりする事すら出来るようなある種の極めた者。そりゃまあ、いくら強いつたってあの歳じゃ限度もあるだろうが、殆どの魔導師が管理局員として決められた仕事をこなしている中、書類提出やら任務やらの期間指示に従って動かなきゃならない局員と違っていくらでも修行する事が出来るリライブは、本当にいくらでも修行してここまで鍛えたんだろう。

「フェイト、なのは、ここは俺に任せてフレアと一緒に先に行つてジュエルシード拾って来い。こいつの相手は俺がする。」

「な…む、無茶だよ速人！彼女は」

「いーから任せろつて。俺を誰だと思ってるんだ？天下無敵のスーパーヒーロー高町速人様だぜ！！」

立てた親指で自分をさしてこの上なく偉そうに言ってる。と、リ

ライブは目を細めた。

「言うね、私だって無敵なんて台詞は言わないよ?」

「言うのは自由だからな。」

や、まあたしかに細かいところまで言うと言つと兄さん達には勝てないだろうし。

そう言うと、リライブは目を大きく開けて笑い出した。

「ははっ…君、面白いね。」

「おいおい、コレでも俺戦闘に来ただけど?」

楽しそうに笑うリライブに苦笑する俺。何かバトる雰囲気じゃないなコレ…

と、フェイトが高速移動魔法を使って俺の元まで来た。抱えられているのははちょっと疲れ気味のようだ。

「どーするなのは?休んどくか?」

「う、ううん。フェイトちゃんと一緒に行く。さすがにもうリライブちゃんと戦えるとはいえないけど、ジュエルシードに何かあったらお手伝い位はできるから。」

なのはは疲れを見せたまま、それでも笑顔で答えを返す。予想通りの返答ありがとうなのは、この頑固娘め。

「結界を破壊する、付いて来い。」

「あ、はい。」

フレアが先へ進む道を覆っている結界の壁に向かう。

リライブはそれを止めなかった。

「あれ？いいのか？」

「オーバースぐらいの破壊力がないと壊せないようには出来てる、手負い三人で全員AAA〜AAAがせいぜいのメンバーじゃ壊せないよ。」

「どうやら通す気で放って置いた訳じゃないらしい。となれば…やるしかないか。」

「さて、初陣と行きますか。行くぜ『ナギハ』！！」
『了解しましたマスター、貴方の道は私が造ります。』

俺は空に浮かぶりライブに向かって全力で駆け出した。

第二十二話・最終決戦、悲劇を幸福に作り変えるために！（後書き）

二連続で戦闘だったのに途切れちゃいました（汗）
次回で決着つけようかと思ってます。

第二十三話・これが俺の全力だ！！

第二十三話・これが俺の全力だ！！

俺は文字通りリライヴに向かって駆け出した…空中にいるリライヴにむかって。

「な…」

驚くりライヴ。そりゃそうだろう。何しろ人間が空を階段でもあるみたいに突っ走ってるんだから。

その正体は、踏み込むたびに足の裏に小さく展開されてる魔法陣。

制御の全てをナギハに任せてタイミングだけ指示しながら最小魔力での最小範囲魔法陣構成。
範囲を絞ったお陰で、魔力消費が少ない、相手に破壊されないなど利点が多い。

俺が自力でこんな細かい間隔で魔法行使など出来る訳もなく、これ

は高性能なインテリジェントデバイスであるナギ八のお陰だ。

「接近戦に付き合う理由はない。」

飛行することで俺から距離をとったりライブは、魔力弾を放ってきた。

うわ、見づらい。

しかもかなり速く鋭く動く。なのはと違って多段じゃなく一発の威力を上げる事に専念したんだろう。

斬れるか？

威力も上がってるだろうから斬れるか判らない。だが、避け続ける訳には行かない以上斬るしかない。

一閃。

それで、魔力弾はアッサリと切断できた。

「あ、斬れた。」

『いくら彼女が強力な魔導師でも、魔力弾一つで壊れるほどデバイスはやわではありません。多少のダメージは魔力を頂ければ修復できる程度ならいくらでもどうぞ。』

「そりゃ頼もしい限りだ。」

俺は一気にリライブに近づく。が、リライブは同じだけ距離を離す。

「剣閃が速い…殆ど見えないなんて…」

「おーい…そんな逃げ回られると切なくなるんだが…」

俺が必死に追いかけているというのに一定の距離を常に離し続ける
リライブ。

「そんな事言ってもわざわざ近づく理由がない。」

「魔力節約しないともうもたないんじゃない？」

「む…」

顔を顰めるリライブ。ま、予想も何もコレまでの連戦を考えれば持
たないのも当然だろう。実際、砲撃撃ってこないし。

「それに…結界ももう壊れるしな。」

「え…っ!？」

少し驚いた後、黒い光が見えた。

光に視線を移せば、デバイスを結界に向けて突き出したフレアの姿
があった。

デバイスの先端と結界が触れ合った瞬間、結界は派手な音を立てて
碎け散った。

一個だけジュエルシールドが落ちている。…アレ制御できるのかコイ
ツ? 凄いな…

と、驚きつつリライヴの様子を見てみると、結界が破壊されたのが意外だったのか本気で驚いていた。

「あの突きだけで結界を…っ！そうか、私の剣と同じ…」

「おーおー驚いてる。フレアの奴も凄いな、槍の長さで貫ける相手なら強度は関係ないとか言うだけある。」

フレアに視線を移していたリライヴだったが、俺の声を聞いて視線を戻す。

「なんで今攻撃してこなかったの？」

「闇討ちなんか誰がするか、俺はヒーローだぜ？」

ナギハを鞘に納めた俺は、堂々とふんり返る。

リライヴは思いっきり肩を落とした。

「呆れた…」

「ムカツ！敵を目の前に余所見くれやがった奴に言われたくないわ
！！」

「何をしている。」

瞬間、リライヴのいた場所を黒い光が薙払った。

「お前までこっち来てどーすんだよ！！」

「当然彼女を討つ。」

フレアは言うなりデバイスをリライヴに向ける。

「二人いてもコンビネーションなんか組めないだろうが！！」

「挟撃して近接戦闘に持ち込むだけだ。お前はもちろん、私もオーバースが相手だろうが…」

そこまで言っただけでフレアの姿が消えた。高速移動魔法を使用したらしい。

その姿は、リライヴの背後に移っていた。

「近接戦闘で負ける事はない。」

フレアの振るう槍の先端とリライヴの持つ透明な剣がぶつかりあう。どちらも壊れる事無く魔力光が舞った。

「私の一閃で切断出来んか。なるほど、大した密度だ。」

「驚いたのはこっちだよ。大した魔力値じゃないと思ってたら槍の先端に集中させて私の剣と打ち合うなんて。」

喋りながら、一撃一撃が必殺になりそうな大振りをぶつけ合う二人。

「ナギハ、アレお前が受けたら？」

『すみませんマスター、一瞬も拮抗する事なく破壊されると思うので受けるのは…』

…どんな威力の攻撃振り回してんだアイツら。形勢不利と見たのか距離を取るリライヴ。

もつとも、俺の前にいる訳ですが。

「よ。」

「っ、はっ!!」

後ろから声を掛けると、迷う事もなく背後の俺に向かって一閃。首辺りに向かって来た一閃を右の柄で打ち上げる。

魔力刃だっという心配はあったが、側面なら鋭さが無いのは剣と同じらしい。

剣を空振りしたリライヴは、俺の目の前で両腕を開いた無防備な態勢になる。

「な…」

「せっ!!」

驚くリライヴを無視して左で突きを放つ。

狙いは右肩!!

綺麗に吸い込まれた突きは…

リライヴを吹き飛ばした。

なんだ今の感触？途中壁に阻まれたような…

『フィールド系防御魔法です。バリアジャケットと違いますが、身を覆う防御魔法ですね。』

「はあ…何でもありかよオイ。」

魔導師つてのは予想以上に厄介な代物らしい。…じゃあ何か？ただでさえ斬撃の効果が薄いバリアジャケットの上に更に正体不明の壁着込めるのか？

理不尽だ…

「くっ…まさかダメージを受けるなんて…」

と、聞こえた声に目をやれば、リライヴのジャケットが少し切れてほんの少しだが赤く染まっていた。

なるほど、身に纏う分盾より防御能力が低いのか。

「驚いた、君名前は？」

どうやら俺に興味を持ったらしいリライヴ。聞かれたからには答えようじゃないか…！

「高町速人！彼女はいないぜ！」

折角笑顔で答えたのに、リライヴは何故か暗い表情を見せる

「それお誘い？なら遠慮するね。男の人あんまり好きじゃないから。」

リライヴは何かそんなカミングアウトをしてくれました。

なんだなんだお前ら…！フレアと言いいリライヴと言いい、どうしてこっう変わった奴ばっか…！

『奴に決められそなたは技はあるか？』

唐突にフレアから念話が届く。

『ある。けど…』

下手したら死にかねない。

『管理局の必修科目で応急処置ぐらいなら出来る。加えてお前の剣ならば綺麗に切断される為治療は容易だ。即死しなければどうにでもなる。』

俺の心配を察したフレアから問題ないと念話が入る。

にしても…こいつが人に投げるなんて、余程デタラメな相手なんだからライヴって。

『うし、任せろ。』

俺は両の刀を納めた。

「どついつつもり？」

「俺の必殺技。とは言え近付いてくれなきゃしょうもないからフレアよろしく。」

「念話で話したものをバラすな馬鹿者が!!」

フレアが全力で接近を試みる。

ほっといたらリライヴはあの厄介極まりない誘導弾を撃つだろう。

「投弾丸『スローバレット』!!」

「石!? 速っ…」

風の力を使って加速させた高速弾。付加させているのが風だからかスピードが空気に下げられる事があまり無いらしくかなりの速さで中距離を捕らえる事が出来る。

簡単に避けられたが、その間で十二分。

リライヴと接近戦を始めたフレア。

一撃ごとにシャレにならない衝撃音が響く。

砲撃クラスの魔力を槍の先端のみに集中させたフレアとソレと打ち合えるだけの魔力剣を形成して振るうリライヴ。見てるだけならお粗末もいい武器の振り合いなんだが、それが一発でも武器で受けたりなんかしたら紙くずみたいに武器ごと切り捨てられるなんて馬鹿げた威力ともなると見た目に壮観だ。

大振りばっかなだけで型自体は綺麗だしな。

と、溜めの姿勢に入ったフレアから、魔法発動の気配を感じる。

自分で近接戦のみって言うてたくせに集束刃を振るう以外にいったい何を…

「はあああつ！！」

突きの姿勢に入ったフレアは…

「乾坤一擲！アブソリュートランサー！！！」

自分の腕ごと砲撃魔法で放った。

「っ！！！」

大慌てで斜線を外れて離れるリライヴ。

直後、空気が破裂する音がした。

…どんな突きだオイ。砲撃魔法を突きのための推進力にして先端に向かって放つなんて。

ともあれ今がチャンスだ、避けたりライヴは俺と距離が近くなっている。

「行くぜりライヴ！受けて見やがれ！！」

「何を！武器をしまったままです！！」

りライヴは俺に接近しながら剣を振りかぶる。普通に考えたら誰が見てもこの状況で俺が勝つ術はないだろう。

故に其れは業と呼ばれる。

振り下ろしの一撃を、左逆手で放った一閃を以ってずらす。

振りぬいた態勢は…右の一閃を放つ為の力と成る。

我流・逆手二連抜刀術

聖十字『クリスクロス』

腰から『縦』に放たれた剣閃は、先の『横』の一閃と相まって十字となる。

一方で初手の一撃を逸らされたリライヴは…『縦』の剣閃を防ぐ術を持たない。

刹那、見えない光を身に纏ったりライヴは縦の剣閃によって吹き飛んだ。

第二十三話・これが俺の全力だ！！（後書き）

オリジナルだけになってしまった！先に行ったメンバーの事もやるんで待っていてください（汗）

今回の戦闘では速人は本気（暗殺者としての力を使わずに）です。

実際問題、速人のほうが剣の腕が上でも、武器が打ち合ったらそれだけで壊れるって言うのはかなりのハンデなので、実戦経験者相手だとたとえ魔導師でも結構厳しいです。

で、今回の技、聖十字について。

左右どっちが始動でもOK、横から下までならどの角度からでも攻撃可能。

コレだけ聞くと便利ですが、実際には判断やタイミングをミスした場合とても危険なので、貫レベルの事が出来る感覚がないとカウンターでなんて使えません。

第二十四話・一つの終わりがやってきて…

第二十四話・一つの終わりがやってきて…

逆手抜刀術の直撃。いくら防御魔法があったからってさっきの突きが通る程度なら致命傷の筈…

吹き飛んだリライヴは、空中で回転して体勢を立て直した。

うっそお…ちょっと待とうよリライヴちゃん。これでも俺の奥義なんですけど。

直撃しておいてソレはないんじゃない？

「く…っ…今…何が…」

縦に裂けた胸元を握り締め、呻くリライヴ。よく見れば何か淡い光を帯びて傷が急速に治っていた。

この状況で回復魔法使用してるんですかリライヴさん？

魔法行使は結構集中力を使う。明らかに重傷の筈なのに飛行と併用して回復魔法を使う何て…

おそらくは、この手の状況に何度かあった事があるのだろう。最悪、自分で傷を作って倒れる前に治療するような修行とかすらしてるかもしれない。

「何がって俺が聞きたいよ…なんで回復魔法使えるのさその状況で。」

「回復するなって言うの？随分酷いんだね。」

「や、そついう事じゃなくて…」

なんて、呑気な話をしていると…

「まったく…君は何をやっているんだ、相手は重罪人だぞ？」

瓦礫の中から、クロノが姿を現した。

「無事でしたかクロノ執務官。」

「なんとかな、非殺傷設定なのに壁にぶつかった衝撃だけでこの有

様だ。」

クロノ自身が言う通り、その身体はスタボロだった。

頭から血が流れているし、左腕がだらりと下がっている所を見ると、骨折か腕を動かすだけで激痛が走るような状態になっているのだろう。

「あまり加減できなかったから…」

「そこを反省するのか君は…」

申し訳なさそうに俯くリライブに呆れるクロノ。

まあ執務官云々言った所で現状でリライブを止めるだけの力がない事がわかつているのだろう。あまり片意地を張った状態じゃない。

「で、どうする？続けるのか？」

「私の仕事は時間稼ぎ、ジュエルシードが発動するまでのね。だから当然。放置したらこんな強力な犯罪者に逃げられる以上動けないでしょ？」

こいつ、自分で強力とか言い切った。

まあ実際、クロノ、なのは、フェイトを倒した後に俺とフレアの二人相手に接近戦やらされてまだ戦闘可能なんだから強力としか言いようがないが。

「ったく…どうして俺の周りってこう女の子らしくない女の子ばかりなのやら…」

「む…悪かったね。」

仕方なく俺は逆手に持っていたナギハを普通に持ち替えて構える。

戦闘を続けて鋼線で括って捕らえるしかないか…と、覚悟を決めたところだ…

庭園が揺れた。

S i d e 〉 高町なのは

私とフェイトちゃんがその場所に着いたとき、プレシアさんは魔法陣の中でゆっくりと起き上がった。

「まったく、使えない傭兵ね。アレだけ大見得を切ってよりによってこの人形を通すなんて。」

「リライヴは通してくれませんでした、無理やり押し通ったんです。」

「それで、今更来て何の用？」

ジュエルシードは全てプレシアさんの手にあった。どうして今まで何にも無かったのかは判らないけど、まったく疲れた様子のないプレシアさん相手に消耗しきった私達がジュエルシードを止められる

のか…

それに、フェイトちゃんはどうするつもりなんだろうか…

「私は貴女の娘じゃないのかもしれませんが。でも…貴女は私の母さんなんです！だから、貴女には必要のない私かもしれないけど、私には貴女が必要です！だから！これ以上罪を重ねて欲しくない、何よりいなくなつて欲しくない！傍にいて欲しい！！」

フェイトちゃんの素直な気持ちなんだろう。私だつて家族には傍にいて欲しい。

いなかつたら…物凄く寂しい。

だけど…

「あはははは！笑わせないで！ジュエルシードが必要数揃っているのに私が人形遊びに付き合う理由なんてないわ！そんな事もわからないの！？」

「フェイトちゃんは人形なんかじゃ」

耐え切れず叫びかけた私の前に手が伸ばされた。

フェイトちゃんからの無言の静止だった。

そうだ、まだフェイトちゃんがお話してる最中なんだ、だから私は我慢するしかない。

「母さん、ジュエルシードの力でアリシアを蘇らせて、その後の事を考えていますか？」

「…どういう事？」

「優れた科学や魔法を持っていたのにアルハザードは失われたんです。どんな秘術があるかはわからないけど、きっと人間が生きてい

ける場所じゃない。仮に蘇ったアリシアと戻って来れたとしても、今度は魔法も使えないアリシアを連れて管理局と交戦する事になる。母さんはそれでいいんですか？」

いい筈がなかった。

プレシアさんはアリシアちゃんに幸せになつて欲しい筈だから。

「それでも私は取り戻す。」

プレシアさんはポッドに近付いて、優しくその手を当てる。

「…何もしてあげられなかったのよ、側にいてあげる事すら出来なかった。全てが終わって漸く一緒にいてあげる事が出来る、静かに幸せに暮らす事が出来る。」

そこまで言つてプレシアさんは私達を睨み付けた。

「その最後の最後で！よりもよつて私自身の手で何一つ罪のないアリシアが死んだのよ！？これを私が取り戻さないなら一体誰がどうするって言うの！！」

プレシアさんの悲しい声といっしょに、ジュエルシードが輝いた。

庭園が揺れる。

させる訳にはいかないとデバイスを構え…

プレシアさんの顔が驚きに染まった。

S I D E O U T

ジュエルシードの発動を感知した時は焦ったが、俺達が来た入り口のほうから強力な魔力を感じた瞬間揺れが収まった。

『次元震は私達が抑えています！』

『これ以上やらせないよババア！！』

庭園全域に念話が届く。リンデイさんとアルフの声だった。

ほお…遠隔地からでも出来るんだな。

『なのは！速人！！こっちは僕達に任せて皆を連れて脱出を！！』

『あ、ユーノ！畜生このいいトコ取り星人め！！リンデイさん差し置いて締めやがって！！』

『そ、そんな事言ってる場合じゃないでしょ！！』

素晴らしいサポートだったので思わず念話を送ってしまった。

管理局が来てから美味しいとこばかり持ってくようになりやがった。

いや、人型になってからか？

「く…まさかあれだけのジュエルシードを遠隔地から抑え込むなんて…」

と、リライヴは傷付いた身体を無視してプレシアの元へ飛ぶ。

あ、逃がすか!!

「追うぞ局員二名!!」

「民間人の君が仕切るな!!」

怪我を負っているにもかかわらず速いリライブの後を追って、俺達は広間を飛び出した。

Side〜フェイトII テスタロッサ

次元震は抑え込まれた。もう次元断層なんて出来る状態じゃない。

「母さん…もうやめて…管理局の事とかは私が何とかするから…お願い…」

「その子一人に勝てない貴女に何が出来るのよ。私は行くわ、アルハザードへ!!」

私の言葉を聞いてくれない母さん。そして…途端に揺れが増した。

『庭園から高出力反応!これは…魔導炉!?!』

通信士さんの声がして、庭園の動力もロストログアだった事を思い出す。

納まりつつあった筈の揺れが酷くなる。

このままじゃ次元断層が…

「母さん!!!」

「私はこの為だけに全てをかけた!必ずアリシアを取…り…」

言葉に詰まる母さん。

その目が見開かれていて…

桜色の光が目端に映った。

私は恐る恐る振り向く。そこには…

冗談みたいに巨大化した桜色の魔力の塊があった。

「発動してたジュエルシードの魔力にあのリライヴちゃんの魔力。さすがに私とフェイトちゃんだけの魔力量より全然凄いね。大丈夫、レイジングハート？」

『行けます、私とマスターなら。例えそれがどんな障害であろうとも。』

「な…何を…」

母さんが震える。私も震えが止まらなかった。下手をすれば、この場で一番危険なのはコレなのではないかと、ただの一撃の魔法相手に、そんな事すら思うようなサイズだったから。

「私だってかかっているんだ…危機すら知らない家族が、友達が…！まだ聞けてない答えを聞く機会だっこのままじゃなくなっちゃうんだ…！！」

『発射準備完了。コールをお願いします、マスター。』

彼女が狙うのは壁。

その先にある魔導炉。

「全力全開…スターライトブレイカーッ！！！！」

私を打ち抜いた巨大で澱みのない光の柱が、壁を貫いて行った。

『魔導炉の反応…完全消滅しました。』

夢でも見てるような通信士さんの声が聞こえる。でも変には思わなかった。だって完全消滅なのだ。爆発とか破壊じゃない、消滅なのだ。

放った彼女は、衝撃に耐え切れなかったのかへたり込んでいた。彼女のデバイスは形こそとどめていたが、フレームは歪んで所々ひび割れていた。

「プレシアさんがアリシアちゃんを大切に思っているのは分かります。でも…自分のためだからってたくさんの人を傷つけられたら、誰よりもアリシアちゃんが悲しむと思います。」

「何よ…他人の貴女が私達の何を知っていると」

「知りません！アリシアちゃんが家族が人を傷つけて喜ぶかどうかなんてよく知ってるのはプレシアさんだけじゃないですか！！」

母さんがビクリと震えて止まった。

「折角…フェイトちゃんが…アリシアちゃんの持っていたものを残して産まれて来てくれたのに…アリシアちゃんは自分の妹を打ち捨てて喜んでくれるんですか？」

「い…もう…と？」

彼女の言葉に、私は涙が流れ落ちるのを止められなかった。

それは、私がアリシアになれなくても家族でいられる言葉だったから。

きっとそれが、私の…フェイト…テストロッサの唯一望んだ居場所だったから。

よろめいた母さんがアリシアのいるポッドに背を預け…

「…だから、どうだって言うのよ。」

母さんは、ジュエルシードの力を使って床を砕く。

虚数空間が広がっていた。

中では魔法行使が一切出来ない、落ちたら奈落の底まで真っ逆さま。

その穴に…母さんとアリシアのポッドが落ちていった。

「母さん!!」

私は手を伸ばしたが届かない。母さんが落ちていった…

風が吹いた。

「死なせるかあっ!!」

その人影は…何の迷いもなく虚数空間に飛び込んだ。

S I D E
O U T

第二十四話・一つの終わりがやってきて…（後書き）

ヒーローがいてそう簡単に死なせません。

無印完結まであと少し…ペース頑張って維持します。

第二十五話・全てを救う為に

第二十五話・全てを救う為に

「く…そつたれがあつ…！」

俺は落ちて行くプレシアの体とアリシアのポッドに左の鋼線を、崩れなさそうな突起に右の鋼線を巻き付ける。

この鋼線、強度は一本でも人をぶら下げられるくらいにあるから問題ないが…

魔力の働かない空間の生身の俺にはポッドと大人一人ぶら下げて耐えられる身体じゃない。

「ぎ…つきしょうつ…！」

「お兄ちゃん…！」

「速人！？」

なのはとフェイトの声が聞こえる。そっだ、この二人に見せられるか…

目の前で誰かを失う様なんて！！！！

「あ…貴方を…」

「死なせるかよっ…こんなところで終わらせるかよっ…」

両腕に全力を込める。絶対投げるものか！

「死んだら終わりなんだよ！天国だなんだとか言ったって死んだら終わりなんだ何もないんだ！！何も知らないくせに！！一つ二つ泣いて知ったフリが精々なくせに！！無理でも無茶でもやってやる！！」

悲鳴をあげる身体は無視。ただひたすらに意識の全てを集中させて耐える。

「俺は…ヒーローだあああっ！！！！」

叫んだ次の瞬間…

鋼線を絡めた突起が崩れた。

当然俺の体も落ちて…

「この愚か者が！！！」

滅多に叫ばない奴の叫びを聞いた。

S i d e ～ フレア＝ライト

強いと思ったのだ。

現実を知りながら、夢破れる事があっても尚『全てを救う』事を諦めない。そういう意味だと思ったから。

だから、間違っても自殺行為を嬉々としてやるという意味ではない
と思っていた。

だから迷わず虚数空間に飛び込んだのを見て、少し落胆した。

間違いなく死ぬ。

私はそれを確信して、せめて後を追う者が出ないようにと、穴の側にいたフェイト「テストロッサを確保しよう」と近付いて…

糸が瓦礫に絡み付くのが見えた。

あろう事か、奴はプレシア「テストロッサどころかアリシア」テストロッサの遺体が入ったポッドまでもぶら下げて虚数空間に浮かんでいた。

そんな状況で、奴はまだその言葉を口にした。

ヒーローと。

目が生きていた。
声が生きていた。
絶対絶命の状況で震えも怯えもなかった。

『なんだお前？この程度で諦めるのか情けない奴だなあ……』

そんな幻聴が聞こえ……

気付けば落ちていく鋼線を手に絡めていた。

擦れた皮膚が裂けて尚鋼線が食い込んで来る。痛みを無視した私はグレイブを床に突き立てて堪える。

「この愚か者が……！」

私は柄でもなく叫んでいた。

……調子が狂う、この馬鹿が来てから妙な毒でも吸ったかのように頭がおかしい。

ぶら下がっている馬鹿は私を不思議そうに見る。

「お前……馬鹿か？仮にも局員さんがする事じゃないだろ。」

幻聴と真逆の事を常識でも説くかの様に言い切った。

精神的なナニカがもう限界だった。

「貴様が言うな！そのデバイスとて幾らしたと思っている！！」

「この状況で金の話か！？世知辛い世の中だなオイ！！」

「誰がそんな話をするものか！勝手に死ぬなど言ってるんだ！！！」

言い合いつつ力を込めるが、徐々に身体に力が入らなくなって来る。

ダメか…いや、この馬鹿より先に折れる訳にはいかん！！！！

渾身の力を込め、手の骨が軋むのを感じながら身体を引き

背中から、何かに抱え込まれた。

S i d e } フ ェ イ ト 〓 テ ス タ ロ ッ サ

速人が母さんを助ける為に命をかけてくれた。そんな速人を助ける為に槍を持った人はその力をふり絞っている。

…見てる場合じゃない、私は槍を持つ人を背中から抱え込んで後ろに向かつて飛行魔法を行使する。虚数空間の外にいる私は完全に魔法が使える、だから役に立てる。

けど、重くて全然飛べない。

魔力がもうあまり残っていない事もあってかこれだけやっても引っ張られていく気がする。

そんな状態の私の腰に、左右から違う腕が触れた。

S i d e 〉 高町なのは

私は威力を上げ過ぎたスターライトブレイカーの反動か、腕が変な方向に曲がっていた。足も歩くだけで痛い。けど…もう少しなのにお兄ちゃんが帰れなくなっちゃうなんて嫌だったから私は頑張って近付いて…

向かい側にクロノ君がいた。

「僕としては賭けみたいなのは好きじゃないんだが…そうも言っ
てられないからね。」

「ありがとうクロノ君。」

フェイトちゃんの腰に手を回した私達は、全力で背中を倒した。

S i d e 〉 リライヴ

目の前で、馬鹿みたいな光景が広がっていた。

犯罪者を助ける為に民間人が命をかけて、それを罵倒しながら局員と犯罪者のフェイトが力を合わせていた。

怒ったり必死になったりはしていた。けど…

ためらっている人は一人だっていなかった。

全ての人が救いに全力をかける、暖かい光景だった。

呆けているわけには行かない、敵である速人がこの光景を命がけで作りに出したと言っつのに。

私は長杖の形に変化させたデバイス、『イノセンス』を構える。

「その管理局員!!」

私はさっきまで槍を振るっていた、先頭にいる管理局員に呼びかける。

向こうは砲撃準備に入っている私に気づいた。

「吹き飛ばす！救う気があるなら何があってもその系放すな！！」

「く…ちっ！さっさとやれ！！」

向こうから承諾が返ってきた。何か執務官辺りが騒がしいけど無視。アレだけの人数で持ち上がらない以上私もフルパワーで行くしかない。

「ストレート…バスター！！」

私が放った砲撃は、管理局員に直撃する。

そして、その身体を飲み込まずに押し去っていった。

魔法の設定を変えての砲撃だが、物理的な影響を及ぼす以上非殺傷には出来ない。

調整に失敗していれば固まっている皆を死なせてしまう。

けれど、私に不安はなかった。

それが出来るだけの修練は積んでいる！！

局員は吹き飛んで、やがて速人が姿を現し…

プレシアとアリシアのポッドが戻ってきた所で砲撃魔法は終わった。

…自分でやっておいてなんだが、吹き飛ばされた皆は死屍累々と置かれた感じがした。崩壊も続いているこの場にこれ以上おいては置けない。

私は転移魔法を展開する。

彼らの全てを庭園の入り口へ…

「リライブ…」

と、光に包まれた速人から声がかげられた。何を言うのかと思っていたが…

「サンキュー！」

お礼を言って彼は光の中に消えていった。

「…とことん変な奴。」

転送が終わり、私は庭園が崩壊していくのを眺めていた。
互いに無事なら、またあってもいいかもしれない。こんな事を思う
人は初めてだった。

S I D E O U T

第二十五話・全てを救う為に（後書き）

ストレートバスターについて。

ようはただの直射砲撃魔法。今回は押すための力として利用しました。

第二十六話・最後の一手、たとえそれが欠片ほどの可能性だとしても…

第二十六話・最後の一手、たとえそれが欠片ほどの可能性だとしても…

「いやぁー見事に全員ボロボロだな！はっはっは！！」

「誰のせいだっ！！」

医務室には、突入した全員がボロ雑巾のように横たわっていた。

フェイトだけが唯一、ほぼ無傷だったため、拘留されていた部屋に戻っていた。

俺は両腕が筋やら筋肉やらが切れていて、なのはは砲撃を支えきれなかった腕を骨折。

クロノは瓦礫に埋まった際に体の節々を擦っていて、フレアは鋼線を絡めていた右手が砕けていた。

「まったく君は！今回の無茶でどれだけの」
「プレシアさんが助かって、アリシアちゃんを回収できた。」

怒鳴りかかってくるクロノに対して俺はまっすぐに答えた。
「気負いは何もない、怒り返すこともない。」

クロノが言いたい事が正しいことを俺は十分知っている。

勝手な行動や無茶は被害を拡大する。

だから普通はこんな十回やったら九回失敗しそうな無茶はやらない。

だけど俺は何一つ恥じる事はない。

この時の為に身に着けた力で、何も失う事もなく一つの事件を終わらせる事が出来たのだから。

「クロノ執務官、その馬鹿には何を言っても無駄です、諦めてください。」

「フレ…ア？」

そんなクロノをたしなめたのは、溜息を吐いたフレアだった。

絶対に言わななさそうな暴言を吐くフレアに、クロノは驚いているようだった。

俺もビツクリだ。真面目な局員のイメージしかなかったコイツがある時俺を真っ先に助けた事も今明らかに悪い口調をさらけ出している事も。

「私はナギハを渡す代わりに個人的に彼の話を聞きましたから。クロノ執務官がそのあたりについて知りたければ自分で聞いてください。私から話す事はありません。」

「フレア！君はそれでいいと」

「悪かるうと変えられない物は仕方ありません。それに私はたとえそれが世界の危機であつても不義を働くつもりはありません。その事は誰より貴方がご存知でしょう？」

どうやらフレアから話すつもりは無い様だった。別に俺としては技法などを探られなければ知れても構わないが、お仕事で聞かれてホイホイ答えるような内容でもないのは確かだ。技の特性上何をしてたかなんてバレバレだろうがそれでも話すことじゃない。

「クロノだつてまさかプレシアさん死んでた方が良かったなんて言わないだろ？」

「ソレはっ……」

口ごもるクロノ。うんうん、職務はどうあれ優しい奴なんだよな。融通が利かないって言ったってフレアよりよっぽどマシだし。リンディさん、あんたの息子はいい子に育ったんだなあ……

とか、年下の癖に若干偉ぶってみる。

「安心しなつてクロノ。俺だつて敷地内じゃなかったらこんな無茶やらないから。それともまさか俺の力が借りたかつたりする訳？」

「そんな事はない。」

「だろ？だつたら別に俺が何だろうとこの話はコレで終わり。」

クロノ自身、コレ以上俺に言う事も無いのかそこで話は終わった。

俺は今回の事件を振り返る。

味方側に犠牲者はなく、フェイトとアルフはもちろん、敵だったプレシアさんも救った。リライブに助けられたのが格好付かなかったが、まだ犠牲者はいない事だし及第点だな。

後やる事は一つ…

「お、おい何処へ」

「ちょっとリンディさんに急ぎの話があるから。それじゃ。」

ソレを片付けるために俺は医務室を出た。

包帯でグルグル巻きの両腕を抱えて歩き回る。

しばらくしてあっけなく見つかった俺は、散々どやされた後にリンディさんの前にいた。

「頼みがあるんだ、リンディさん。」

「そうみたいね、全く…大問題を起こした自覚を」

「あるって！初めからあつてやつてるんだから！！」

何一つ迷い無く言った俺に疲れた様に肩を落とすリンディさん。

詳しい事情までは言っていないが、ヒーローになろうとしている事は

バれている為それ以上何か言っ
て来ることはなかった。
諦めたとも言っ。

まあ、事件も済んだことだし何より俺が管理局の人間じゃないから
だろう。

「それで、頼みと言うのは？」

リンディさんは、俺が言葉をのんだ事でそれなりに真剣な用件だと
察してくれたのか居住まいを正し…

続いた俺の言葉にとてつもなく驚いた。

Side 高町なのは

クロノ君の話だと、フェイトちゃんの事は無罪に近い判決を取れる
が、プレシアさんはどうにもならないと言っ事だっ。

一応お兄ちゃんがフェイトちゃんに、裁判が嫌なら俺が守ってやる
って…両腕に包帯を巻いた状態で言っただけ、フェイトちゃんはち
やんと裁判を受けて戻ってきたいと言っ。

お兄ちゃんは自分の事みたいに喜んで、ほらみる逃げなかつたじゃ

ないか！ってクロノ君達に自慢げに話していて…それはよかったんだけど…

フェイトちゃんがちゃんと管理局の人の言う事を聞くって決めたから、逮捕扱いになったせいで話せなくなっちゃって…

「はあ…」

「悩みごと？なのは。」

「にゃ！？」

ユーノ君が様子を見に来てくれたみたいで、溜息を聞かれて心配された。

「いろいろあったからね、皆大怪我だったし。なのはは大丈夫？」

「え、あ、うん。綺麗に折れてたからかえって良かったんだって。」

後遺症…みたいな心配も今の所無いって聞いた。

だからそう答えたんだけど…ユーノ君はガツクリと肩を落とした。

「速人から聞いてはいたけど…本当にこんな状況でも大丈夫って言うんだね。」

「え、えっと…」

お兄ちゃんは人の事をどう言ってるのか一度知りたかった。

でもユーノ君の私を心配してくれている様子を見るとそんな事も言えなくて…

「そう言えば速人はまた歩き回ってるのか…全く、無茶が過ぎるよ。」

速人お兄ちゃんは無茶ばかりする。

わがままで、きつとリンディさん達に一番迷惑をかけたと思う。

でも…そうしないとプレシアさんはここにいない。

良くない事は良くない事、わがままはわがまま、命は命…

「何が…良かったのかな？」

「考え事？」

聞いてくれたユーノ君に頷く。

「お兄ちゃんは命令違反とか危険な事とか一杯してて、プレシアさんと変わらなくて。でもそれでフェイトちゃんと話せて、プレシアさん助かって…」

「何が良かったのか？」

確認するように聞いて来たユーノ君に頷き返す。

とても難しい事でとても簡単な事。

つまり、わがまま言うのも死んじゃうのを放って置くのもどっちも悪いんだ。

だからこそ、両方なんて出来なくて…

「なのはどつなの？良かった悪かったじゃなくて。」

「えっ？」

ユ一ノ君に聞かれた事に、私は答えられなかった。

「えっと…プレシアさんとかフェイトちゃんが無事なのが嬉しくて…
…沢山迷惑かけた上に無茶ばかりするお兄ちゃんが心配で…」

アレ？と思い返しながら気づく。

何だ、ようは私は…私だけ皆無事でまだ不満なんだ。

私はなんだか急に恥ずかしくなって俯いてしまった。

S i d e 〱 リンディ 〱 ハラウオン

今回の事件では本当に色々と驚かされた。

いきなり執務官とA A +の空戦魔導師がたった一人の魔法行使をしない人間に倒された。

めったに見ないフレアの強い激昂を受ける羽目になった。

オーバースで無色などという魔力を振り回す魔導師が現れた。

虚数空間に落ちた人間を拾って帰ってくる人間がいた。

大半にあの速人という少年が関わっているのだから末恐ろしい。

止めがさっきの台詞である。

「アリシアポッドごと海鳴に降ろしてくれない？治せるかもしれないからな。」

私は本気で信じられなかった。

死んだと判断された人間が蘇る…いや、治せるという事も。

自分自身ですら『かもしれない』という程度の可能性のために命を懸けた彼の選択も。

S
I
D
E

O
U
T

第二十六話・最後の一手、たとえそれが欠片ほどの可能性だとしても…（後書き

かなり無理があるんですが…ご容赦ください（汗

あと、プレシアの病についてはまだ話題に出てないだけなので治ってはいけません。

第二十七話・出来る全てを最後まで

第二十七話・出来る全てを最後まで

見かけだけ怪我が治り、俺は神社に降りてきていた。

訳は単純、アリシアを神咲さんに診て貰う為である。

これは俺も自信がない賭けだった。けど、可能性がある以上あの場でアリシアを見殺しにする訳にはいかなかった。

記憶転写と言うが、記憶が残っていなければそんな事は出来ない筈。血が通っていてもそれなりの速度で崩壊している脳は、普通死亡判定を受けてしばらく放っておけばそれだけで使い物にならなくなる。

命が抜け落ちたと称していたが、要はその部分を専門家に診て貰おうという事だ。

これで魂にあたる部分が感知できなかつたりしたら確定。残っていてもなんかしら異常があって目が覚めないだけなら何とか治療しても

らおつと言つ腹だ。

何しろ神咲さんはヒーリング能力まで持つてる本物の巫女さんだ。無事であれば魂の治療も出来るかも…

「ま、それにもしどうしようもなかったとしても無駄にはならないしな。」

墓参りに次元断層に行く訳にも行かないだろう。もし本当にどうしようもなければその時は…

ちよつと暗い方に考えが流れていってしまったが、まだ決まっていんだ。

俺は覚悟を決めて神咲さんを待った。

しばらくして、狐状態の久遠が姿を表した。

「久遠待って…あれ？速人君。戻ってたんですか？」

久遠に続いて姿を見せてくれた神咲さん。

…よし、何はともあれ神咲さんの力を借りられなければ始まらない。人にホイホイ見せたい力でもなければ便利屋でもないんだ。全力で頼み込むのが筋だろう。そもそも協力してもらえないなら諦めるしかないし…

俺は覚悟を決めて全力で頭を下げた。

「神咲さん…一生のお願いがあります！付き合ってください！！」

「え、えええええっ!？」

なんか物凄く驚かれた。くっ…やっぱりそうそう人様に振舞うものじゃないのか…

いや、断られた訳じゃない！

「驚くのも無理はないと思うけど頼むよ神咲さん！神咲さんしかいないんだ!!」

「え！そ、そんな事いきなり言われても…その…」

やっぱり困るか…知らん人に力を見せる事になるんだもん…管理局の人達には何一つ教える気はないが、下手に探れたりしても面倒だし。

でも、まだアリシアを見ても貰えてないのに下がる訳には行かない

!!

「お願いします神咲さん！俺にできる事だったら何でもしますだから」

「何を全力で間違えてるのお兄ちゃん！！！」

再び頭を下げた俺は、後頭部をぶっ叩かれた。

「っ…なのは？何で下りて…いやそうじゃなくて…いきなり後頭部強打は無いんじゃないか？」

「だ、だっていきなり告白しだすんだもん！」

抗議した俺に返ってきたのは、見に覚えの無い言葉だった。

告白？俺が？神咲さんに？

…いいかも知れな…って違う！何でそんな話になって…

「速人…那美に何に付き合っただけなの？」

久遠さんから冷静な一言がいただけました。ああ、そついやまった
く言っただけだったな。あつはつは！

なのはには久遠と戯れてもらおう事にして来た森の奥、そこにアリシ
アの姿があった。

見張りにフレアが降りて来ていたが、どうやら何かする気はないよ
うだ。

「彼女なんだけど…どうかな？」

「えーっと…ちょっと待って下さい。」

ポッドの前まで行くと、神咲さんは真剣にアリシアを見て目を伏せ
た。

ダメ…なのか？

「結論だけ言えば、彼女はまだ死んではいません。」
「本当！？」

驚喜乱舞する勢いだった。もし治せるならプレシアさんも喜ぶだろう。

「ただ…酷く歪んでいます。物凄く酷い目や怖い目にあつた人がこんな風になるんですけど…」
「何とかならないかな？神咲さん。」

神咲さんは少しだけ目を閉じて…フレアを見た。

「彼女に直接触れたいんですけど…」
「ポッドから出せば彼女は保ちません。それでも何かするのであれば一度きりになりますか？」
「やります、やらせて下さい。」
「神咲さん…」

感動で頭がどうにかなりそうだった。
ここまで上手くいくとは思ひもしなかったから。

「許可を取る、少し待て。」
言いつつフレアは音声通信を行う。何をするかあまり見せたくない事を分かっているのか気遣いが良かった。

許可が出たからかポッドに近付くフレア。

正直開けば分だって保たないだろう。治せるのか…

ポッドが開き

アリシアの身体が横たえられ

神咲さんの両手が重ねられ

綺麗な力を感じた。

ソレと知らないものですら何かあると感じられる程強力な力が治ま
り…

アリシアがピクリと動いた。

「は…はは…やった…やったよ神咲さん!!」

「まさか本当に治るとは…」

「違います。」

喜ぶ俺に水をさす様な神咲さんの声が届く。

どう言う事だ？

「機能してなかった身体は治しましたが…歪んで傷ついている魂にあたる部分はそのままで。だからこのままだと起きる事はないと思います。」

話しながら立ち上がる神咲さん。けど様子がおかしい。

「これから時間をかけて…治療して見ようと…思い…」

フラリとその身体が揺れる。倒れると思った俺は急いでお姫様抱っこの形で抱え…

激痛が両腕を襲った。

そーいや怪我治って無かったや。

「へ…へへ…ヒーローともあろう者が…この程度で女性を地面に放り捨てるとても」

「意地を張ってないでかせ馬鹿者。」

堪えていると、フレアが俺の腕の中で眠る神咲さんをさらって

「何を考えている？」

「エスパーかお前は！！」

ちよつと妄想しただけにもかかわらず睨まれた。普段からそんなに察しがいいならデリカシー0の台詞を言うな、ったく…と、裸で横たわるアリシアに目が移る。

「ナギハ、マントだけとか出せるか？」

『了解しました。』

言うなり俺の話も聞かずにマントがアリシアの身体にかかっていた。

「察しいいなオイ。」

『マスターの狙い通りに魔法陣を展開しなければならぬので、マスターの行動方針を常に分析していますから。』

なるほど頑張ってるのか。はじめっから苦労かけたからな。何しろ

初戦があのリライヴだ。

俺は思い返しながらアリシアを抱えあげる。
痛い痛い痛い痛い…

「無理をするな、いくら彼女が子供でも」
「ポッドさえ返せばいいんだろ？アリシアは治った事だけ記録して置いていってくれ。」

それに目は覚ましていないが息は吹き返したのだ。こんな森に放置する訳にもいかない。

なのはと久遠が待つ神社まで戻り、二人を神社に寝かせて簡単に手紙を書いた俺はそれを置いて神社を出た。

完治するまで帰れないから、兄さん達には内緒にしておいて貰わないと…

「プレシアさんの容体が急変した!？」

アースラに戻った俺達は、気まずそうなクロノにそう告げられた。

…元々病にかかっていたらしい。

あの時、時の庭園に散っていたジュエルシード（幾つかフレアとクロノが回収していた。ぬ抜け目がない奴らだ。）によって、一時的に体調が回復していたが、病そのものが治っていなかったため限界が来たらしいと言う事だった。

「くそっ！！！」

俺は一も二も無く駆け出した。

「あ、待て！民間人の面会は許可」

クロノの声は完全に無視して俺はただ真っ直ぐにプレシアさんの元へ走った。

見張りを押し退けて飛び込む。

「プレシアさん！！」

「ふん…暇なのね貴方。わざわざ罪人の所へ…ごふっ！」

くぐもった声で咳き込んだプレシアさんは、血の塊を吐き出した。

「どうにもならないんですか!？」

「出来れば等の昔に治しているわ、私を誰だと思って…ぐっ…」

口元を押さえるプレシアさん。指の隙間から血が流れてきていた。

くっ…何か手は…そうだ！

「君は人の話を」

「クロノ！プレシアさんの患部とか分からないか！？俺が一撃で切り離すから速攻であのポッドに放り込めば何とか」

クロノに殴り飛ばされた。

「冷静になれ、僕の拳なんか受けてる時点で今の君には何も出来ない。それに彼女はもう手遅れなんだ。」

「っ…ざけるよ！生きてるじゃないか！死に体だろうが何だろうが今ここで生きてるだろう！！どうせこのまま放っておいて手遅れになるんだったら賭けでも何でもやらせろよ！世界を巻き込む訳でもないって言うのに！！」

俺の声を聞いたクロノが胸倉を掴みあげる。

「冷静さをなくして腕もまともに動かせない君が！いったい何をどう切り離すと言うんだ！」

「だったらお前は治せんのかよ！アリシアだって治せたんだ！何でもとまで言わないけど、諦めなければ出来る事だってあるんだよ！！」

クロノが目を見開いて俺を放す。

「…どうせ治ると思っただけだったんだろ？だから諦めたら終わりなんだ。」

社員が仕事だから取捨選択が必要なのはわかるけど、今ある技術を使うだけの事を止められる理由なんてない。

「何…ですって？」

唐突に聞こえてきた、見知らぬ人の声に目を向ければ、何か憑き物が落ちたかのように表情が変わったプレシアさんがいた。

「アリシアが蘇ったって…本当なの？」

「治ったって言ったぞ俺は。まだ死んでなかったってだけだよ。ちよつと都合悪い状態で目は覚ましてないけどポッドから出た状態で自立呼吸まで戻った。」

その意味をかみ締めるように、病すら忘れて固まっていたプレシアさんは…

「あ…はは…あははははははははっ！…！」

涙を流しながら天井を見て笑い出した。

「私は…いつもそうだ…いつも遅すぎた…またなの？折角全てが戻ってくるのにまた…」

「だから諦めるなって言ってるんだ！クロノ！患部は」

「全身なんだ！…！」

両手を硬く握り締めたクロノが俯いた状態で叫んだ。

「彼女はアリシアが倒れた時の事故現場そのものにいた！オマケに療養もせずにフェイトを生み出す為の研究に全精力を注いだせいでもう……」

「な……」

分かった。クロノが何故俺を止めようとしたのか。つまりこの事実を言わずに済ませて自分が言わなかったせいでと抱え込むつもりだったんだ。

この馬鹿……っ！舐めやがって！

「だったら別の方法を考えるまでだ！絶対諦め」

「もういいわ坊や。」

澄んだ声だった。

「貴方が言う通り死ねば全てが終わる。アリシアにはもう戸籍も残っていない以上管理局の言いなりになる理由はない。後は管理外界でも暮らせば犯罪者の娘という事実そのものも終わる。」

「それでいいのかよ！いいわけないだろ！！悪いと思ってるんらちやんと謝ればいい！死んだらそんな事さえ出来ないんだぞ！！」

答えはなかった。

プレシアさんは天井を見たまま視線を動かさない。

「嗚呼……思えば本当腹立たしい人形だったわ……」

フェイトの事だろう。こんな状況でまだそんな事を……

「私から時間を奪って寿命を奪って……奪ってばかりじゃない。その上……私からアリシアを救う役目すら奪っていった。」

気のせいかもしれない。けど、俺にはそれが…フェイトへの感謝の言葉に聞こえた。

「二人に…伝えてくれるかしら？」

「馬鹿！自分で」

「速人！！」

怒鳴り返そうとした俺の肩をクロノの手が掴む。力の籠ったその手は震えていた。

「貴女達に犯罪者の娘など似合わない、幸せに生きなさいと…」

その言葉を最期に瞳を閉じたプレシアさんは、そのまま動かなくなっ
つて…

「それこそ自分で伝えてやれよ！この…馬鹿野郎がああっ！…！」

ありったけの力を込めた拳を床に叩きつけて俺は絶叫した。

第二十七話・出来る全てを最後まで（後書き）

と言う訳でちょっと…だいぶ無理がある話になっちゃいました（汗）
次回で無印の最終話になる筈…です。

第一部最終話・その後のそれぞれ

第一部最終話・その後のそれぞれ

S i d e 〱 クロノ 〱 ハラウオン

高町なのはと高町速人の両名は、怪我が完治し自分達の住む家へと帰っていった。

何故かユーノ 〱 スクライアも彼らの元に残ると言い出したが、なのはと速人も承諾しているようだったのでそのまま同行させた。

フェイト 〱 テスタロッサは母、プレシア 〱 テスタロッサの最期を聞くと崩れ落ちて泣きはらしてしまっただが、今では裁判のための準備をしている。

なのはは彼女の処遇についてとても心配していた。使用目的さえ聞かされていないジュエルシードを母親の為だけで集められるような優しい娘だ、出来る限り罪状を軽くするために全力で裁判に挑まなければならない。

フレア 〱 ライトは、職務を済ませるとアースラから度々姿を消していた。遊び人でもない筈なのだが。

そして僕は…

「はあああつー!」

訓練をしていた。

さすがに休息時間を削ってとまでは言わないが、仕事のいくつかは母さんがエイミィに肩代わりしてもらって訓練時間に当てている。

今回リライブと衝突する事になって力不足は実感していたため、訓練の強化はするつもりだったのだが…

仕事を引き受けてもらってまでやっているには別の訳があった。

プレシアが息を引き取った後、どれだけそうしていたのか速人がゆっくりと立ち上がった。

こういう事はよくある、悲しい事だが受け入れて進まなければなら
ない。

「速人、今回のような事件で犠牲者が一人で済むなんていう事はむ
しろ稀なんだ。刻なのは分かっているがあまり気に」

僕は最後まで言うことができなかった。

出会った時に見た、凍りついた瞳がそこにあつたから。

「クロノ、よく覚えておけ。死んだら終わりなんだ。」

そんな事は分かっている。そう言おうと思ったのだが、何一つ言い
返す事が出来ない。

「在った筈の先、未来が丸ごと消えてなくなるんだ。何の力もなく、
何を生み出す事もなく、何を感じる事も何を思う事も何を知る事も
ない。」

そこまで来て、ようやく相違点に気づいた。

彼はさつきから、自分の気持ちについて何も語っていない。

「それがどういう事なのか、絶対に足りない頭で考えておけ。」

「な、何……」

「足りる筈がないんだ、自分の未来だって分からない人間が、人の
先の価値など分かる筈がないんだ、ましてや勝手に決めていい筈も

無い。」

僕は真つ直ぐに見据えてくる彼に何を返す事も出来なかった。

「仕方ないとか気にするなどは、重さすら分らない人の未来を奪ったのが、守れなかった守るものの責任だつて十分噛み締めてから吐くんだな。」

速人はそれだけ言つて、大きく息を吐く。

顔を上げたとき、彼の瞳は元に戻っていた。

「さて…と、折角フェイトに向けての伝言なんてすばらしい物が聞けたんだ。リンディさんに許可とつてフェイトに伝えないとな。」

あつけなく、本当に何もかも終わったかのように、さっきまでの激情が演技であつたかのように、速人はそう言つて部屋を出て行った。

本当に、事件があつて何事もなく済む事はそうそうない。だから、悲しみを引きずらずに切り替えられる能力が必要になってくる。

速人はそれが出来ないから、ああも取り乱しているのだと思つていた。でも事實は違つた。

彼はその気になれば：顔色一つ変えずに数を数えるように死体を積んでいく事ができる。

だから、考えるのだろう。

僕達が考えずに耐えている事を、誰より深く誰より大事に。

「ステインガー！！」

管理局員として、執務官として、きっと事件が起きて力が足りないと判断すれば、切り捨てなければならぬものが必ず出てくる。それはもはや必然だつた。

ならば：力が足りていればいい。

全てを救える程に足りる事などありえない。だが、だからこそ少し

でも、救える自分になるう。

そう決めて、僕は構えたデバイスに魔力を込めた。

Side ヽユーノ スクライア

なのは達の家に戻る事を許された僕は、速人の部屋に回収された。

僕は男なわけだしそれは無理もない話で、決して残念ではない。うん。

「さーてつと、それじゃ訓練行ってくるわ。部屋のもんは壊さなきゃ自由に使ってもいいが、人型で見つかるなよ？」

「ちょ、ちょっと待って速人。戻ったばかりでもう訓練!？」

僕が止めようとするのにも拘らず、速人は頷く。

「魔導師とかアルフとか皆近接戦下手だったからなあ…兄さんとか姉さんと試合しておかないとそのうち技が適当になりそうで怖い。」

「だ、だからって今日位」

言いかけた所で、部屋の扉がノックされる。

速人が扉を開くと、そこにはなのはの姿があった。

何をしにきたのかと様子を伺っていると…

「お兄ちゃん、練習したいからユーノ君に手伝ってもらっていい？」

と、何か速人と同じ事言い出しました。

「お、いーぞ。ただユーノは付き合いいいからあんまり無茶させるなよ？馬鹿魔力。」

「も、もうそのフレーズ忘れて欲しいの！」

「発案者はクロノだぜ？俺無罪！」

速人はそう言って楽しそうに部屋を出た。残ったのはが僕を肩に乗せる。

「絶対お兄ちゃんにシューターで一撃入れる！ユーノ君、付き合い合っ
てね！！」

「ぼ、僕はともかく二人とも怪我」

「もう大丈夫！行くよ、レイジンググハート！」

『問題ありません、行きましようマイマスター。』

何と云うか、誰も彼もが熱血だった。

僕はなのはの砲撃魔法を思い出す。

…は、はは…訓練なんて付き合ってたら死ぬんじゃないかな？僕…

Side〜フエイトII テスタロッサ

裁判に向けての準備を進める中、地球を離れる事になって…

その前に、地球の人達の話す時間を用意してもらえる事になった。

「えっと…コレで大丈夫かな？」
「バツチリだよフェイト。」

アルフに確認すると、笑みを浮かべて褒めてくれた。
けど、あんまりダメって言われないからちょっと不安…
服を用意してもらって着替えたのはいいけど、見た目が気になって
仕方がない。

初めて友達になると言ってくれた白い少女。

敵だった筈の母さんとアリシアの為に命まで賭けてくれて、奇跡ま
で残してくれた男の子。

そんな二人との再会になるんだ、気にならない筈がない。

「しばらく会えなくなっちゃうからね、ちゃんと伝える事は伝えな
いとね。」

「そうだね、返事も…まだしてなかったから。」

もう答えは決まっている。もし叶うのなら…

Side 高町なのは

友達になりたいと返してくれたフェイトちゃんと名前を呼び合って
抱き合う。

やっぱり、こんなにすぐお別れになっちゃうのは寂しいから…

本当に色々悲しい事があって、大変な事があって。

それでもフェイトちゃんと友達になる事ができた。きっとソレは凄く幸せな事なんだろう。

交換したリボンを握り締めて、レイジングハートを見る。

きっかけは、ユーノ君との出会いから。

ジュエルシードを集めて、フェイトちゃんと戦って…

いろいろな人と出会って、今日からまだ元の…ちょっとだけ変わった一日が続く。

話せないまま逃げちゃったりライブちゃんの事は結局わからないままだし、何より私は魔法が好きになった。

今度があった時に、悲しい事から少しでも皆を守れるように。

「よしっ！行こうユーノ君！！」

「へ？行くってまさか訓練！？いい加減休んだら」

「大丈夫大丈夫！フェイトちゃんと友達になれたし、こんな気分いいのに休んでられないの！！」

私はレイジングハートと一緒に強くなろうと決めた。

S I D E O U T

夜の闇の中、俺は兄さんと真剣で斬り合っていた。

今まで御神の実践訓練に半端に関わるのは拙いところは遠慮していた。

けどそんな事は言っていられない、今回救えなかった以上今までと同じではいけないんだ。

だから、御神の剣士になると決めた訳でもないのに訓練についてきている。

「お前は護る為に生涯剣を振るうのだから？ならば気にするな、腕を磨くだけなら他流試合と変わらん。」

そう言って兄さんは承諾してくれた。

斬り合いを繰り返し、首にまですっ飛んでくる貫を冷や汗を流しながらかわす。

徹を互いに打ち合わせて、派手な衝撃音を残して一度距離を離れた。

「貫が甘くなっている。」

「腕のいい相手がいなかったんだよ!!」

言いつつ俺は刀を納める。

真剣で…鞘つきの剣で斬り合った事が無かったが故に見せていない奥義。

それを放つと決め…

兄さんも刀を鞘に納めていた。

「行くぜ！我流奥義、聖十字『クリスクロス』!!」

刹那、互いに全力の剣閃が交錯した。

しばらくして、俺は自分が倒れている事に気が付いた。

「逆手での二連抜刀とはな、だがまだ甘い。」
「でしょうね、抜刀術込みの四連攻撃かましてくれるとは思いませんでしたよ。」

まだまだ弱い。

今の兄さんですらなれないヒーローに俺がいつ届くのかなんて分かんなかったが…

諦めてたまるか。

誓って見上げた空は闇に包まれていた。

第一部最終話・その後のそれぞれ（後書き）

と言う訳で無印完結です。

A・S以降ですが、幕間として少し話を挟んだ後、繋げたいと思います。

あと、A・S編投稿はちょっとだけ遅くなると思います。

投げるつもりはないので楽しんでくれている方は少しだけ待っててください。

幕間・フレアの修行、業を得る為に

幕間・フレアの修行、業を得る為に

S i d e 〱 クロノ〱ハラウオン

地球にいる間、度々アースラを離れていたフレアだったが、訓練室でも様子がおかしかった。

いつもならば、目を見張るほどに魔力を集束させた槍状のデバイスを振るっている筈のフレアだったが、今振っているのは強度を感じさせない木の棒だった。

しかも木の棒に対しての強化もありません。

自分はしっかり強化されているためかなりの力がある。あんな状態で木の棒なんて振るえば振っただけで折れるだろう。

そんな棒を二、三度振り回し…

床に当たった棒はアッサリと砕けた。

何をやっているんだ…何も知らなかった僕は、その時そう思っていた。

S i d e フレア＝ライト

私は折れた棒を手にして齒噛みする。

「くっ…なんて無様な…コレが今の私の技量だと言う事なのか…」

地球にいた頃の事を思い出す。

人目を避けた森の中、空間にそぐわない音が響いていた。しばらくして、音が消える。

「はい俺の勝ちー。」

そう言っただけで私の眼前の少年、高町速人は笑みを漏らした。

事件が終わり、私は数度目になる速人との試合を終えていた。ルールは飛行なしの地上戦なのだが、未だ全敗だった。

それだけならばよかった。

私自身何か理解できない事があるのだとは思っていた以上、それが分からないままならば負けるのは必然だった。

だが…武器がデバイスから鉄の刀に変わり、それでも折る事ができずに敗北し…

たった今、木の刀相手にデバイスと魔力強化を使用して打ち負けた事についてはまったく納得がいかなかった。

「何がどうなっている？」

「んー、まあ本読んで型の練習とかすればそれなりにはなると思うんだが…」

「お前はそうしていないのだろうか？ならばお前自身から聞かせて貰いたい。」

確かに武器の形状は変わっていない。だがこんな玩具で打ち合えるほどデバイスも私の一閃もやわではない。

私はその事について疑問を持っていると、速人は持参していた袋から長い木の棒を二本取り出した。

そのうちの一本を私に向けて差し出す。

「んじゃコイツで打ち合ってみようぜ。」

「何？」

どう見ても、強化状態の一振りですぐ折れそうだった。下手をすれば魔力強化をした状態で握っただけでヒビが入るかもしれない。

そこまで考え、理解した。

つまり強化に頼らない何かを掴むための訓練なのだ。

何しろ速人自身も最近魔法を知った初心者だ、この戦闘能力は魔法以外が大本になっている。

私はそれを受け取り、慎重に構え…

「あれ？強化しないのか？」

出鼻を挫かれた。

「こんな物身体強化した状態で振るえる訳が」

「そう思う？そりゃ！」

刹那、見えないほどの速度で棒が振り下ろされた。

私は飛びのいてそれをかわす。明らかに強化状態で振るわれた一撃だった。

奴にできるというのなら、人間が出来ない事ではない筈だ。

同じように振り上げ…

「はあっ！」

振り下ろした瞬間…私の握る棒が握り手を残して四つに折れた。

「そりゃそれじゃ折れるよな…ほいっと！」

折れた棒を握り締めている間に構えを変えた速人が、突きを放つてくる。

私は今バリアジャケットを展開している。

金属製ですらまともに入った所で並の人間ではダメージにならない。木の棒など効く筈が無い。

その突きを受けるまではそう思っていた。

「が…っ!？」

ジャケットを抜けてダメージがまともに入った。意味が分からない、強度的にそんな現象が起こる筈が無い。

「あー… やっぱ折れたか、ちょっと曲がってたもんな…」

折れた棒を手にそんな事を呟く速人。

幸いダメージといってもそこまで酷いものではなかったので痛みをこらえて速人に近づく。

「何故だ？その棒、どう考えてもバリアジャケットを抜くだけのダメージを与える強度があるとは思えない。」

疑問で頭を抱えていた私への回答は、酷くアツサリとしたものだった。

た。

「綺麗に真っ直ぐ回転をつけてやれば割と行くぞ。まあそれが難しいんだが。」

そんな簡単な事な筈が無い。と思っていた私は、何本持つてきていたのか更に棒を渡される。

「これ突いてみな。」

そう言つて速人は、木にぶら下げられたこの世界の通貨を指す。

私と通貨と速人が一直線に並んでいる、このまま突けば真っ直ぐ飛んだ通貨が速人に当たるだろう。私は何の躊躇いも無く突きを放ち…

通貨は、速人を外れて飛んでいった。

「そういう事だ。見た目に真っ直ぐ突けるように見えるし的には当たってるから分からないんだろ？それに腕だけで突いてもしょうがない。全身を連動させて全ての力を上手く使わないとな。」
「全身？腕で振るっている槍の威力を足で上げるといふのか？」

意味がさっぱり理解できないが、言っている以上速人は出来ているのだろう。

「ちなみに、ちゃんと出来てるならこういつ事も出来るようになる。」

言いながら速人は青竹を取り出し、細い糸を使って青竹を木にぶら下げた。

そして、私のデバイス、グレイブを手取る。

「ふっ！！」

短い呼気と共に一閃。ぶら下がった青竹は二つに切れて地面に落ちた。

…私には無理だ。

同じことをやったとしても間違いなく糸の方が切れて青竹には傷がつくだけだろう。

「止まってるもの相手なんだしこれ位は」

「出来て当たり前だ。」

と…背後から声が出た。

「あ、あれ！？兄さん！？姉さんまで！何でここに？」

「鍛錬だよ。妙な物音がしたから来てみたんだ。友達…って言うには大きいよね？」

振り向いた先にいたのは男性と女性だった。
少し拙かった。

速人の家族は一般人だと聞いているが、私はまだバリアジャケットを展開している。

質素なものとは言え普通の服装には見えないだろう。

「あ、コイツはフレアって言うんだ。異国から最近の日本文化に触れてきてるんだけど、そろそろ帰るっていうから土産話にちょっと色々見せてやるうかと思って。ホラあつただろ？ チャレンジ番組とか。」

こちらの世界の事は常識しか知らないが、どうやらそれで納得してくれたらしい。二人は名乗ってくれたので、私も名乗り返した。
：
下手な事は言わない方がいいので様子を眺める。

「それじゃちょっと私もやってみていいかな？」

「：静止物相手にしくじる様なら罰も考えなければな。」

「う：プレッシャーかけないでよ恭ちゃん：」

少し困ったように顔を歪めた女性：高町美由紀さんは、手にした刀をぶら下げた青竹に向けて振るう。

速人と同じく、竹は二つに切れて落ちた。

彼女は一般人だ、つまり魔法強化無しでも出来る事になる。私はその事実には戦慄を覚え、同時に速人がまだ子供でこれだけの技量を誇っていた事を思い知った。

速人が振るったのは私のデバイスだ。刀ならば強化無しでも出来たのかもしれないが：

とにかく、そうなるよこの場にいる全員の攻撃が、少なくともバリ
アジャケットを通る事になる。…強化無しで。

それだけでも十分に驚きだったのだが…

「兄さん…出来るよねえ？」

「恭ちゃんもやるよね？罰とか言っておいてやらないとか無いよね
？」

速人と美由紀さんに催促された男性、高町恭也さんは腰に納めたま
まの刀に手をかけ…

一閃した。

剣閃は見えなかった。

それだけならば速人の全力と同程度なのだが…

ぶら下げられた竹は、揺れる事さえ無く切断された部分から下だけ
がゆっくりと落ちた。

速人と美由紀さんは恨めしげに恭也さんを見ている。当の恭也さん
は刀を納めると視線を意にも介さず…

「まだまだだな、精進しろ。」

「はあ…分かつてるけど先は長いなあ…」

速人に遅くならないよう言い残した二人は、話しながら去っていった。

残された速人は面白くなさそうに斬れた竹を見つめている。

「ふ…」

「お前には笑われる理由がねえよこのド下手クソが!!」

「いや、お前とて弱いわけではない、それは私とクロノ執務官が保障しよう。」

そう…速人として私とクロノ執務官を単騎で破った天才なのだ。にも拘らず、魔法を使わない人間の成した現象に苦汁を舐めている。

世界は広い…

「速人、この世界の武芸の書籍を読ませてくれ。」

「ん？実戦はいいのか？」

「精進する事にする、今の私にお前達の技を理解するのは早い。」

私の答えに、速人は楽しそうな笑みを見せた。

無断で管理外世界の物を持ち出す訳にも行かないので、残りの日数はそれらの書籍の情報を頭に叩き込んだ。

そして今も頼んで用意してもらった木の棒…棍を振るう。

じきにアースラを離れ部隊に戻らなければならない、そうならば任務と魔導師の訓練に付き合わされて試せるものも試せなくなる。それまでに…何かしらの形にしなければ…

S i d e 〱 クロノ 〱 ハラウオン

今日はフレアが自分の隊に戻る時だったのだが、未だに訓練室にいるようだった。

呼びに行こうと訓練室に向かう。と、汗をかいたフレアが姿を現した。

「すみませんクロノ執務官。訓練室の片付けが出来ていないので後始末をお願いしたいのですが……」

「僕を小間使いか、まったく……」

アースラを去るフレア。僕としても鍛錬を始めつもりだったから丁度いい。

訓練室に向かい、いつもフレアがいた場所に向かう。

「な……」

僕はその光景に言葉を失った。

僕の目の前には、フレアが最近振るっていた木の棒が鉄板に突き刺さっている光景があった。

S
I
D
E

O
U
T

幕間・フレアの修行、業を得る為に（後書き）

度々アースラを離れていたフレアの動向についてです。

ちなみに速人がグレイブを綺麗に振るえたのは格闘鍛錬の方で棍も使う師匠がいるからです。

幕間・なのは、近接戦について考える

幕間・なのは、近接戦について考える

Side↳高町なのは

「うーん…」

『どうしましたマスター？』

魔法の鍛錬を終えて家に戻る途中、私は考え込んでいた。

「接近戦も覚えた方がいいのかなあ…って。」

『人には向き不向きがあります、マスターは誘導弾制御と砲撃、戦術を強化するべきかと。』

私の考えはレイジングハートからもバツサリと切られた。

う、うう…運動音痴なのは分かってるの。

「そうなんだけど…この間、リライヴちゃんに詰め寄られた時だつて真っ先に高速移動選んだけど何も出来ないうちに終わっちゃったし。」

お兄ちゃんのアイデアで覚えたデイバインバスター・インパルスも

結局手を構えられなきゃ意味がない。速人お兄ちゃんはもちろん、フレアさんモリライヴちゃんも私が手を向けたり魔法発動しようと思ってる間に2、3回は斬れると思う。

で、そんなによけられる訳がないし、フレアさんの槍はプロテクションでも防げなかった。

おなじだけの魔力を使って手のひら位まで小さく強力な防御に変えたら壊れなかったけど、あんな速さで振るわれる剣とか槍とか手のひらサイズの防御で受け止められる気がしない。

「だから、そのまま戦うって訳じゃなくても離れ方とかあると思うし、基本的な事は出来た方がいいのかなあ……って。」

『そこまで言うのであれば速人に相談してはどうですか？』

接近戦ならお兄ちゃん。

魔法の事も知ってるし、これほど都合のいい相談相手もいないのは確かなんだけど……

「戻ってきてから速人お兄ちゃん忙しそうだからあんまり迷惑かけたくないの。」

『そうですね。』

レイジングハートはそれだけで黙ってしまった。

見た目にまったく普段と変わらないようなお兄ちゃんの違和感、プレシアさんの事があってからだ。

お兄ちゃんはずっとヒーローって言うのを目指してて、恭也お兄ちゃんとかと違って、下手したらアリサちゃんやすずかちゃんより子供っぽいんじゃないかか思ったりする事もあったんだけど……

それが思い違いだって、お兄ちゃんが本当の本当に本気でテレビに

映ってるようなヒーローを目指してるんだって、今回の事件で分かっってしまった。

だから、プレシアさんがあんな形で死んじゃったのが誰より許せないんだと思う。

きつと今まで以上に厳しい訓練をしている筈の速人お兄ちゃん。私はそんなお兄ちゃんの時間をあまり奪いたくなかった。

「だから、自分で考えてみようかなって。」

言った瞬間、後ろから両肩をつかまれた。

「にゃ!!?」

『マスター！応せ…速人？』

「思うのは結構だけど、アツサリ背後取られる半人前のド素人魔導師が一人で近接戦修行なんて無理じゃないか？」

本当にいきなりだったから誘拐か何かと思ってパニックになってしまったけど、振り向いてみれば速人お兄ちゃんの姿があった。

「は、速人お兄ちゃん」

「そんなに考えるっていうんなら、今度の日曜俺に付き合おうがいい。晶さんとレンさんが二人揃って鍛錬付き合ってくれる事になってるから。」

笑いながらお兄ちゃんは私を追い越して去っていった。

「…レイジングハートも分からなかったの？」

『申し訳ありませんマスター、人がいるような違和感は感知できま

せんでした。』

レイジングハートが謝ってきたけど、私はむしろお兄ちゃんの間離れした偉業に呆然と立ち尽くしていた。

日曜、晶ちゃんとレンちゃんが家に来た。

自由に使える道場がある所はそうないから、家はそういう意味では重宝してるみたいなの。

「いやぁお師匠すみません、道場お借りしますね。」

「師匠たちだって鍛錬あるのにごめんなさい。」

レンちゃんと晶ちゃんが師匠こと、恭也お兄ちゃんに頭を下げる。

「ああ、こつちこそ速人が済まないな。貴重な休みを。」

「む、俺だつてちゃんと二人の足手まといにならない自信があるから訓練頼んでんだからな、大体そりゃ俺が言う事で兄さんが言う事じゃないだろ。」

「ほう、お前にそれだけの礼儀があるのか？」

恭也お兄ちゃんに見下ろされた速人お兄ちゃんが引きつった笑みを浮かべる。

「やー、速人君はないなあ…この間もウチの料理バカバカがついとつたし。」

「俺は遠慮してくれない方が好きなんですけどね。片付けとかだと

雑だけど買出しは俺と同じ位の荷物持ちしてくれていますし。」
「だそうだが？」

速人お兄ちゃんは苦笑しながら後ずさる。

クロノくんとかユーノ君だったら物凄く上手く捌くのに恭もお兄ちゃんには形無しだなあ。

ここでちょっと紹介。

間延びした喋り方をしているのがレンちゃん。

お家の中国拳法を使う天才。

というのも、努力してないとかそういう訳じゃなくて、つい最近まで病気で調子が悪くて長い時間の運動は禁止されてたの。なのに、恭もお兄ちゃんでもビックリする位に上手なの。

もう一人の、女の子なのに俺って言うてる娘が晶ちゃん。

空手をやっててスポーツが男の子顔負けな位に得意。

自分でも何で男の子に生まれなかったんだろうとか不思議がる位で男の子と間違われても何にも思わないみたい。

でも、コレはレンちゃんもだけど料理がとっても上手なの。

仲のいい友達もいて明るくて、二人ともとってもいい人なんだけど…

「まあこのおサルとちごて元気なだけで粗暴やない分楽しませてもらってます。」

「誰がサルだてめえ…毎回毎回飽きない奴だな！」

…この二人、喧嘩ばかりしてるの。

「二人とも、続きは道場でやってくれ。後、愚弟はともかくなのはは忘れないで連れて行ってやってくれ。」

「ちょ！俺の訓練兼ねてるのにそれ酷くない!？」

頭が上がらないまま、速人お兄ちゃんは睨み合う二人の後に続いて道場に入っていく。私は慌てて皆の後を追った。

で、訓練に入ったんだけど…

「はっ！せいっ!!!」

「ち…つくそ!」

ビックリした。何しろ武器を持ってないとはいってもあの速人お兄ちゃんがおされているのだから。

今晶ちゃんと速人お兄ちゃんが試合しているんだけど、お兄ちゃんは晶ちゃんの攻撃を避けているだけで攻撃できていないみたいだった。

…なんで『みたい』なのか？

ついていけないから。

さすがに、最近フェイトちゃんとかとも戦ったし、一つ一つが見えないなんて事はないんだけど…

二人が何をしてるのかまったく追い切れない。

ただ晶ちゃんの方から手足が振るわれて、お兄ちゃんは直撃にならないようにさばいているのだけは分かった。

お兄ちゃんが振るった蹴りをちよつと下がってかわした晶ちゃんは…得意技の構えを取っていた。

「吼破・改！」

「っ！！！」

物凄い足音が響いて…お兄ちゃんは壁にぶつかっていた。

自分から飛んでダメージを減らしたみたい。さすがだなあ…と感心していたんだけど…

「冗談でしょ？この威力…」

「俺だつていつまでも同じままじゃないからな。」

お兄ちゃんは顔を歪めていて、よく見たら防御したみたい腕に拳の痕がついていた。

お兄ちゃんが自分から後ろに飛んだのは間違いなく分かった。それでもあんなダメージ…

「おーいおサル、速人君まだ子供なんやから壊すなよー！」

「馬鹿言うな！手なんて抜いたらこつちがやられんだよー！！！」

晶ちゃんが体制の整っていないお兄ちゃんに向かって攻めかかって…

クロンと、お兄ちゃんの手が円を描いたと思ったら晶ちゃんの態勢

が崩れていた。

「回し受け!?!」

「俺の勝ちですよね? 晶さん!」

態勢の崩れた晶ちゃんの目の前に、お兄ちゃんの拳が止められていた。

「あはははは! なんやとうとう空手だけでも負けるようになったんか!」

「う、うるせえっ!! ちくしょー!」

本気で悔しそうな晶ちゃん。でも空手だけでってどついう事なんだろう?

気になって隣で笑っているレンちゃんに聞いてみる。

「ん? ああ。速人君は始めっから木刀二本つこたらおサルにもウチにも勝てたんや。ちよう驚いたけどな。まさかこんなちっこいのウチ等負かすなんて思わへんから。」

速人お兄ちゃんは一体どれだけ強いのかとちよつと疑問に思う。

「おーし、ならウチとやるか。腕は大丈夫か?」

「ちゃんと下がったし兄さんの木刀直撃するよりは大丈夫ですよ!」

「あー…お師匠美由紀ちゃんはともかく速人君にまで加減無しか!」

笑顔で言い切ったお兄ちゃんだったが、レンちゃんも晶ちゃんも苦笑いしていた。

晶ちゃんが私の横に座って、お兄ちゃんとレンちゃんの試合が始ま

った。

「美由紀ちゃんから聞いたよ。なのちゃん、最近頑張ってるんだってな。」

「え、あ…うん。」

晶ちゃんに声をかけられて答えを返す。

「一生懸命なのはいいけど、心配してたぞ？体壊さないように…って俺が言っても説得力無いか？」

「う、ううん。そんな事ない。」

言われてる事ももつともだった。事件が終わってから、たまに恭也お兄ちゃん達より早い時間に魔法の訓練してる事もあったから。

晶ちゃんとお話している間に、お兄ちゃんとレンちゃんは派手に手足を交わしていた。

「せりやあっ！」

「甘い甘い！」

お兄ちゃんが掌を突き出した腕をレンちゃんにつかまれていた。

そして、どうやったのか分からないけどレンちゃんがちょっと手を動かして…

「だあああっ！！」

お兄ちゃんは一回転して床に倒れた。腕を掴んだままのレンちゃんは、そのまま腕を固めていく。

「はっはっは！ウチの技は柔の技や！形だけ覚えて力技ってのはちよう甘いな！」

「いぎぎぎぎ…！」

腕を抱えられたお兄ちゃんは、物凄く痛そうに床を叩いていた。

レ、レンちゃん強い…

「くそー…俺とやった後だからあんな簡単に行くだけだったの…速人の奴簡単に負けやがって…」

「にやはは…」

自分が負けた晶ちゃんは、レンちゃんがお兄ちゃんをいい様にしてるのが嫌みたい。

この後も、気迫十分なお兄ちゃんと晶ちゃん。のほほんとしたレンちゃんのよく分からないレベルの練習が続いた。

夕方になって道場を後にする三人を見送った私は、少し考える。

…今日見たのが私に身に付くのか？

答えは限りなくNOだった。お兄ちゃんの言う通り、かけらも身に

付く気がしなかった。

「や、やっぱり魔法で何とかする方向で考えよう……」

私は頭垂れて、ちょっと思いつきで真似事に走ろうとしていた自分を恥ずかしく思いながら食卓に向かった。

S I D E O U T

幕間・なのは、近接戦について考える（後書き）

速人も魔法鍛錬はしていますが、趣向が違い、『いかに魔力を感知させないようにするか』という点において進めています。

で、今回ようやく出てきた格闘の師匠二人の解説を。

レンちゃんこと鳳蓮飛「フオウレンフェイ」。

誕生日プレゼントにお爺さんから鎖鎌が送られてくるようなお家の娘（笑）

中国拳法についてはなのは説明どおりの腕前。

晶ちゃんこと城島晶。

空手で大会上位入賞の腕前だが、レンを含めて搦め手を使ってくる相手に弱い傾向のある俺っ娘。

訓練の末に恭也に勝利する事もある。ビックリだ。

で、二人とも料理上手で喧嘩するほど仲がいいといった感じ。

が、晶がレンによって数メートル吹っ飛ばされたりしている辺りは喧嘩で済むレベルじゃない。しかもノリで。喰らった晶も死ぬどころか怪我すらない。

…こんな二人ですら一応一般人。御神の剣士っていったい（汗）

第二部開始前・遠き日に誓った叶わぬ願い

第二部開始前・遠き日に誓った叶わぬ願い

全てが上手く行くななんて事はそうそうない。

そんな事は始めからよく知っていた。

だからこそ、俺はこの街に来た時も、殺す事を躊躇わなかった。

危険が少なかった故に、少ないながらも存在する危険に付いてははつきりと感じ取る事が出来た。

たとえば、月村忍、月村すずか。

兄さんの恋人（この時は候補）となのはの友達。

彼女達が、『夜の一族』という特殊な種族である事を知った。

そして、それ故に狙われている事も。

だから…

俺は単独で敵を殲滅した。

彼らは銃やらなにやら持っていたが、俺の敵ではなかった。片っ端から斬裂いて、証拠品を押収し、逃げ惑う連中を捕縛していた。

殺すための力を持つものは、それを陽に当たる世界に誇示する事無くその力を陽だまりに住む人を護る為に。

俺はそう思っていた。

俺が行った殺戮劇についてはアツサリ父さんの耳に入ったらしく、呼び出されて殴られた。

父さんは、俺が冗談でこの力を振るったと思ったみたいだった。

だから、考えを伝えた時、父さんは表情を歪めたものの、それ以上俺に何も言わなかった。

そんな、どうしようもない連中を片付けながら日常をゆっくり静かに過ごしていた。

なのはに襲い掛かった犬を殺した時も、何の躊躇いもなかった。

救えた。それだけで良かった筈だった。

だけど…

「…どひしてっ？」

涙を流しながら、切り裂かれた犬の死骸を抱え俺を怒るでもなく見つめるなのはの瞳に…

これは違つと、身体の奥底で何か告げた。

ゆっくりと考える、間違いはない筈だった考えと、今ここにいる自分自身。

すぐに答えは出た。

俺の言う正解が全てなら…

俺はあの時、『敵』として死んでいた。

けど俺はここにいて、日常を過ごす事ができている。

今更ながらに思い知った。

俺が奪っていたのは、ひよっとしたらこんな日常を送れた可能性のあった命で、可能性そのものなのだ。

名前や記録は残っているのかもしれない。でも…

今俺が感じている幸せな時間も死者は得られない。
今俺が止めたい少女の涙を止める事も出来ない。

このままでは駄目なのだ。きっと、このままでは変わらない。

仕方ないと殺し続けていた頃と何も変わらない。

いい方法など何もなかった。ソレは当然で、現実はそう甘くない。仕方ない事はどうしてもついて回る以上、現実に生きる俺に殺して護ると言う正解以外は無かった。

何気なく目をやったモニターに映る物語。

ここまで上手く出来るならどれだけいいか…

出来ないって誰がどうやって確認した？

ふと、そう思ってしまった。

今分かっている正解は選べない。

ならばそもそも、正解を考え出す事が間違いなのではないのか？

全てを救う。

出来ない世迷いごとだからこそ切り捨ててきた言葉。

物語が終わり、次回予告が流れる。

ヒーロー…現実にはそれがいないから全てが上手く救われないとい

うのなら…

俺がそれになればいい。

全てを救えるヒーローになる。それが俺のつたない願い事。

だから…

「今度こそ、全てを護り抜いてみせる。」

満天の星空の元、俺は誰に告げるでもなく拳を握り締めた。

第二部開始前・遠き日に誓った叶わぬ願い（後書き）

という訳で第二部開始…前です。

断片は出ていた過去話なのでいつ出してもよかったです。主人公的な心機一転という事で事件前にやっておく事にしました。

第一話・出会いと再会

第一話・出会いと再会

S i d e 〱 クロノ〱 ハラウオン

「地球は久しぶりだな、出来れば何も無い時に来たかったが…」

「仕方無いよ、事件がいつ起きるかは私達が決めてる訳じゃないから。」

僕とフェイトとアルフは三人揃ってモニターを眺めていた。

魔導師連続襲撃事件。

最近頻繁に起こっている事件であり、同一犯の可能性が高い。

「AAクラスですら何も出来ずに敗れる程の相手だからな、なのは達が心配か？」

フェイトは小さく頷く。

無理もない…初めて出来た友達が事件に巻き込まれるかも知れないんだ。

まして今回の事件、魔力を集める事が目的の様で、襲われた魔導師は魔力を奪われている。

なのはの魔力量は驚異的だ、狙われる可能性が高い。

「大丈夫だつて、一回とはいえフェイトに勝っちゃうような娘なんだ。それにヒーロー君もいる事だしね。」

「速人…」

と…アルフが口にした言葉を耳にしたフェイトが頬を染める。

「…前にも言ったと思うが、彼の女性への対応は褒められたものじゃない。人の気持ちに水を注す趣味はないが」

「そ、そういうのじゃないよ。速人が良くない事言つてたのは分かってるし。」

以前、似たような反応をしていたので少し心配になった僕は、フェレットもどき相手に掴み掛かって叫んでいた会話ログを聞かせた。

アルフとフェイトは揃っていい反応を見せていなかったたので安心していったのだが…

「ただ…アリシアと、短い間だけど母さんを救ってくれたのは間違いないく速人だから…」

「僕としてはその辺の無茶も真似て貰いたくないんだが…」

というか、本音を言うならそちらの気持ちの方が強い。だが、だからと言って放っておけばよかったなどと言う事も到底出来ず、曖昧な忠告しか出来ずにいる。

それに…

「クロノも気になってるから訓練時間増やしてるんでしょ？アレからクロノに渡される仕事が増えたってリンディさん言ってたよ。」

「別に…彼は関係ないさ。」

こんな凶星をフェイトに突かれるようじゃ、速人を気にするなと言った所で説得力が無かった。

書類仕事は権限があれば僕じゃなくても誰でも出来るが、前線には誰でも出ると言う訳にも行かない。だから、とても申し訳無かったが母さんやエイミィを頼っている。

とは言え、それを認めれば速人の無茶の株が上がってしまう。だから誤魔化す事にした。

「それよりもリライヴの方が問題だ。正直な話、今彼女に絡まれたら僕じゃどうしようもない。他の部隊から人を借りてもいいが、時間稼ぎも出来ないようじゃ応援を呼ぶ事すら出来ないからね。」

「アイツは何だったんだろうね？あの鬼ば…プレシアを手伝ってたみたいだけど、管理局のデータにも無いんだろう？」

フェイトに落ち込まれて慌てて呼び方を変えるアルフがおかしかったが、笑い事でもない。

管理局が把握していない強力な魔導師。となれば秘密裏に『造られていた』可能性すらある。あの年齢では誰かに騙されていたり洗脳を受けていたとしても分からないだろう。

「けど、最後は私達を助けてくれたよ？」

「彼女は自分で言っていたからな、依頼主を守ると。わざわざ助け

た速人を信用したと言った所だろう。」

それに、怪我こそ負わされたとは言え、彼女はほぼ非殺傷設定で戦っていたし、刺したアルフの怪我也、致命傷には程遠いものだった。彼女は誰かを進んで傷付ける気は無いのだろう。確証は無いので樂觀は出来ないが…

「まー何にしてもなのはと速人には借りがあるんだ。模擬戦でもキツチり返してやろうかね。」

拳を鳴らして笑うアルフ。前回の事件のときは速人にいいようにあしらわれていた様だし少し苛立ちもあるのだろう。

「ア、アルフ…乱暴は…」

「そうかい？友達と模擬戦なんて楽しそうだと思うけど…」

宥めようとしたフェイトだったが、アルフに楽しそうと言われて情景を想像したのか頭を悩ませていた。

…友達について少し考えて貰わないと、会う度模擬戦やられてもなのは達が大変だろう。

Side 高町なのは

私はいきなり結界の中にいた。

突然現れた女の子が、ハンマーを振り抜いて来る。

互角に戦えていたんだけど、突然その娘の魔力が強くなって…吹き飛ばされた。

「ぶち抜けえええっ！！！」

その子が叫んでプロテクションが破れ…

女の子はその場でグルグルと回った。

彼女は私に向かって進まない身体を慌てて止める。

「な…んだよこれはあっ！！！」

「はいはい、迷子か？ならお家送ってやるから事情を話してみろよ。」

聞き慣れた声に視線を移せば、左手の鋼線を使って女の子の身体を絡めとった速人お兄ちゃんの姿があった。

S I D E O U T

なのはがもろバレだったから分かっていた。何も対策をしていないと魔力の反応は相手に見抜かれると。

だから、俺はあの事件以来魔力反応の隠蔽を目的に修行を重ねてきた。

どうやら上手くいったらしく、彼女はまるで俺に気づく様子が無かった。

「なんだテメエは！結界に魔力反応はコイツだけだったぞ！？」
「へー、結界展開した魔導師と間違えたんじゃないかって、お前が展開したんだな。」

俺の言葉を聞いて苦虫を噛み潰した様な顔をする赤い服の女の子。
ま、この状況でそんな事考える方が珍しいし誤解じゃなく狙って襲撃して来たって事が分かった所で何の意味もないわけだが。

「で、取りあえず何が目当てか教えてくれるとうれしいんだが。まさか雇われの殺し屋か何かか？」
「…殺したりしねーよ。」

物凄く機嫌悪そうな声でそう言う女の子。
だよなあ…殺しに来たにしちゃいろいろお粗末だし。

「となると誘拐か人質か…何にしても覚えがありすぎて困るな。」
「にゃ！？私いきなり襲いかかられる覚えは無いよ！」

なのはは全力で否定する。

哀しいかな妹よ、御神の剣士は裏の世界で恨まれまくりなんだよ。

何しろ俺が暗殺者として出来る全力で行ったとしても正面からじゃ負けるんだ、その人間離れた戦闘能力を同業者は目茶苦茶疎ましがってるだろう。

だが、魔導師が御神の剣士に用があるとは思えない。となると別件か？

「まあいいや。ここで目的教えてくれたら今は取りあえず放してや」

そこまで言っつて、俺はその場を飛び退いた。

刹那、ビルが斜めにずれた。

「なのは！ビルを出ろ！！」

「う、うん！！」

今の一撃で鋼線が斬られた。それはいい。

問題なのは…

今の一撃が無色だった事だ。

「今ので倒れてくれるとやりやすかったんだけど…警沢言っつてられ

ないか。」

今の間に逃れた赤い女の子は、白い少女の横にいた。

「俺達なかなか縁に恵まれてるみたいだな、リライヴ。」

白い少女…リライヴは、何の悪意も見せない澄んだ笑顔で微笑んだ。

さてどうするか…俺は内心ちょっと焦っていた。

赤い女の子はいい。パワーは凄いが大振りのみって言う典型的な狙い目だ。武器がハンマーだけになおさら。

だが…問題はリライヴだ。

一応風の高速移動魔法は身に着けたが、速さがフェイトどころかなのはのそれより遅い。旋回性能はいいがアレじゃリライヴが高速移動使ったらアッサリ逃げられる。

まあ魔法そのものの訓練はあんまりやってないから当然だがな！！

…と、とにかくこんな状況じゃあのリライブ相手に中、遠距離戦をやる羽目になる。

無理だな。

なのは一人じゃ接近「ゲームオーバー」だし。なんて、ちょっと考えていると…

「お兄ちゃん！私にリライブちゃんと一対一でやらせて！！何でこんなことしてるのか聞きたいの！！」

…なんてすつとぼけたこと言い出した。

「馬鹿かお前は！一対一も何もあるか！お前みたいな運動音痴がリライブとやり合える訳ないだろ！百歩譲ってあっちの赤い娘にしとけ！」

「お兄ちゃん接近戦しか出来ないじゃない！魔法戦なら私だって！！」

俺はなのはと睨み合う。リライブの相手をなのは一人にやらせる訳にはいかない。

「俺にすら勝った事なくせに！お前にアイツの相手は無理だ！！」
「私アレからずっと魔法戦の訓練してたんだから！リライブちゃんにだって簡単には負けないよ！！」

互いに不毛な言い合いをして…

「テメエら…あたしを舐めんじゃねええつ！！」

赤い服の娘が力一杯に叫んでいた。

見れば、ハンマーを振りかぶった状態でジタバタともがいていた。透明の輪が見える。リライブがバインドをかけたのだろう。

あー…そうだなうん。舐めてる様に聞こえなくもないセリフばっかだ。

でもすまん赤い娘よ。その真つ白な娘は多対一でやっとどうにかなる規格外なんだ。

「落ち着いてヴィータ。白い娘はともかく速人相手に一人で突っ込んだら拙い。」

「なのは！高町なのは！！それに絶対リライブちゃんの方が白いと思うの！！」

なのはがブンブンと腕を振り回しながらリライブに抗議していた。

何と言うかグダグダだった。

誰か来ないと收拾つかないかなとか思ってたら…

紫色の光と金色の光が舞い降りた。

「礼を言っぞ、リライヴ。よくヴィータを止めてくれた。」
「なのは！速人！大丈夫！？」

双方の増援だった。

どっというタイミングなんだか…

第一話・出会いと再会（後書き）

A・S 編始めました。

…と言っても、登場人物が増えたので流れるには大筋以外はずれていく予定です。ご容赦ください（汗）

都合があり更新ペースが週一になりそうなので、その前に連続投稿しておこうと思います。

第二話・戦闘開始！

第二話・戦闘開始！

しばらくして、戦力全てが出そろっていた。こっちはクロノとユーノとアルフが増えて、向こうには犬耳筋骨隆々男が増えていた。こう言うと変態にしか聞こえないが顔は整っている。

数的には圧倒的に上だが…

「ここは引き分けにして逃がして貰えない？」

と…リライヴがそんな事を言い出した。

「貴様何を」

「勝つだけなら出来るけど…こっちが一人二人捕まるか、向こうに死人が出る。どっちも嫌と言えば嫌でしょ？」

ポニーテールのお姉さんが目を細めたが、リライヴの意見には同意らしい。

「クロノ達は仕事だからともかく俺はまだどっちの事情も聞いて無いし引き分けなら別にいいけど？」

「君は何を勝手な」

「おいおい、俺の協力が前提になってるのは勝手じゃないのか？仕事してるお前まで止まれとは言わないって。」

クロノは表情を歪めた。無理もない、仮に俺抜きで突っ込んでもリライヴ一人にすら勝てる保証がない。何の害もなかったし、俺としてはそれでよかったんだが…

「魔導師襲撃事件の犯人一行様でも見逃すのかい？ヒーローさんはさあ。」

「む…」

アルフが聞き捨てならない事を言った。

確かにこんな事件をあちこちで起こしているって言うなら放置する訳にもいかない。

「…しょうがない！話聞かなきゃ止めるも手伝うも無いしな。」

俺は臨戦態勢を取る。

他の面子は全員既に警戒状態だった。まったく喧嘩っ早い奴ばっかだな。

こうして、合戦に近い戦いが始まった。

Side シグナム

私は戦端が開かれると共に、一人を目指して飛び出した。

狙いはリライヴとやたらと話していた少年。

リライヴの戦闘能力は私とヴィータが同時でかかってどうにか出来る程だ。そんな彼女が警戒心を抱いている少年。しかも、リライヴから念話で『絶対に接近戦に応じるな』とまで送られてきた。

魔力値は並の魔導師よりは高いもののこのメンバーの中では限りなく低い。

一対一での戦いをもっとも得意とする古代ベルカの騎士にして、烈火の将たる私がそんな相手に接近戦で引けるものか！

「はあぁっ!!」

振り下ろしの一撃。少年はそれを下がってかわす。かまわずその軌道を追うように突きを繰り返した。

少年はそれも回避する。反応はかなりいいようだ。

「はぁー…空中だつて言うのに随分一つ一つの動作が綺麗だな。」

「世辞はいらん、だが…加減の必要は無いようだな。」

私はカートリッジをロードする。炎がレヴァンティンを包み込んだ。

「変換資質炎つて訳か。物静かだと思つてたら随分と闘争心強い人みたいで。」

少年は言いながら…武器を納めた。

何を…と言い掛けて、飲み込んだ。

自身も忘れるほどに積み込んだ戦闘経験が告げている、アレは危険だ。

…元より襲撃者は我々、引く理由などかけらもない！！

「紫電一閃！！」

避けられぬタイミングで防げぬ一撃を放つ。それで全ては終わる。

だから…

『馬鹿！防御！！』

リライブから飛んできた念話の意味を理解するのが一瞬遅れた。

振り下ろした剣に衝撃を感じる。デバイスで受けたとしても断ち切れる筈だったが、その衝撃は妙だった。

結論から言えば、私の必殺の一撃は空を切った。

その意味を理解する間も無くフィールド防御魔法、パンツァーガイストを展開する。

「ぐっ…」

私は吹き飛ばされて距離を取っていた。騎士甲冑が斜めに裂けていた。

『このバトル馬鹿！接近するなって言ったのに！』

念話が入ってリライヴの様子を伺う。

彼女の方は黒衣の魔導師と金髪の魔導師、白い魔導師の三人を相手に互角の戦いを演じていた。

そんな状況で私の様子まで確認して念話を送ってきたのか…

軽く畏怖を覚えたが、今はそれ所ではない。

先の一撃を放った少年は生半可な相手ではない、と改めて向き合おうとして…

「なあナギ八、俺奥義使ってるんだぜ？絶対理不尽だよな全身防御魔法って…」

『問題ありません、マスターの腕前であれば誰が相手でも引けは取りません。』

少年は、デバイスを手に落ち込んでいた。

…紫電一閃を無傷で捌いておきながら落ち込まれては、私の立つ瀬がない。

「お前…名は？」

「へ？…高町速人。」

疑問符と共に名前を返してくる。

「ヴォルケンリッター、烈火の将シグナム。速人、お前の名は忘れまい。だが…」

私はレヴァンティンを構えなおす。

…殺さずに等と言う容赦は出来ん、彼はこの小さな魔力でそれだけの戦士だ。

「お前を殺さずにとは保障できん。」

「あーなるほど…このタイミングで名前聞く訳がいまいち分かんなかったんだがそう言う事か…」

構えなおした私の前で居心地悪そうにする速人。

「何か問題があるのか？」

「いや、剣士として名乗ったんなら悪いことしたかなって。俺の剣って…」

刹那、小さく動いた右腕に咄嗟に下がる。目の前を、光る糸が通っていった。

「こつこつ訳で、名乗り上げる騎士さんにはちょっと悪かった。」

なるほど、邪道という訳か。だが…

「気にするな、似たようなものだ。」

シユランゲフォルムを展開する。途端にその形状を鞭のような連結刃に変えるレヴァンティン。速人は少し驚きを見せ…

「そう言う事ね!」

臆す事もなく向かって来た。

S I D E O U T

S i d e 高町なのは

アルフさんが犬耳を生やした青い人と戦って、ユーノ君がヴィータ
つて娘を引き離してくれた。

お兄ちゃんは、剣士さんに戦いを挑まれていた。

だから…

「スナイプショット!」

「アークセイバー!」

私とフェイトちゃんとクロノ君の三人で、リライヴちゃんと戦って
いた。

「デイバイン…バスターツ!」

「ちっ…」

私の放った砲撃はリライヴちゃんを捉えきれず空をきる。

やっぱり強い。それも前よりも数段。

三人で攻撃してるのにリライヴちゃんはまだ防御もしてない。

魔力が高いただけじゃなくて飛行制御…ううん、戦闘そのものが上手いんだ。

「って言うか何でフェイトとなのはのコンビネーションがクロノとフェイトのコンビネーションより上手いの？」

「それは僕も聞きたいものだ。さっきから下手をすればフェイトに当たっているぞ。」

クロノ君が言う通り、私はフェイトちゃんの身体に隠す様に誘導弾を撃つたり砲撃を放つたりしている。

言われてみればちょっと危ないのかもしれないが、今の今まで全然考えになかった。

「なのはならここに撃つかなって思ったらそこから攻撃が来るよ？」

「私もフェイトちゃんがこう動くかなって思ったら避けてくれるよ？」

フェイトちゃんも私と同じだったみたい。クロノ君は呆れているけど、私は仲良くなれたみたいでちょっと嬉しかった。

それに…

「リライヴちゃんやっとなのはの名前呼んでくれたね。」

フェイトちゃんとの始まりでもある友達になる第一歩。

名前を呼ぶ事。

思わずかも知れないけど、一歩前進した気がして気分がいい。

当のリライヴちゃんは恥ずかしそうにした後、片手杖の形になっていたデバイスを、短剣の形にして、透明な剣を作る。

気分がよかったから、リライヴちゃんが何か言っても気にせずいられると思って…

「行くよ！フェイト！クロノ！速人のオマケ！！」

一瞬で怒った。

Side 〱 フェイト 〱 テスタロッサ

あの言い方は許せないと思う。私もアリシアのお人形って言われた時物凄く悲しかったから。

だから、シヨックを受けたのはが傷つかない様にとリライヴとなのはの間に入る。

リライブを睨み付けるが、彼女の方は涼しい顔をしている。
絶対一回叩く。心の中でそう決めて…

「フェイトちゃんちょっとどいて。」

背中が震えた。

恐る恐る振り返る。

なのはは目を閉じていた。ただ、こめかみの辺りがピクピクと震えていた。

「な、なのは？冷静に…」

「なのはは…」

なのはは静かに言葉を紡ぐ。

「なのははブラコンじゃないの！…！」

意味が分からない叫びと共に、なのはの周囲に誘導弾が生成されていく。

「お、落ち着いてなのは！誰もそんな事言っていないよ！？」

「だって！リライブちゃんなのはと速人お兄ちゃん一纏めにした！」

！」

リライブの方も呆然としていた。

私もさすがになのはがここまで怒る理由が分からない。

「確かになのはと速人お兄ちゃんは結構ずっと一緒にいるけど！魔法知っててお話できるのお兄ちゃんとユーノ君しかいなかったからだし！何でそれでお兄ちゃんと恋人扱いになるの！皆して！！」

なんとなく分かってきた。要は周りにいる人にずっと速人という事をからかわれていたのだろう。溜まってたところに同じ様な事をやりにもよって魔法戦の最中にまで言われて限界だったんだ。

「えーと…何と云うか…ゴメン。ノリだったからそこまで深い意味はなかったんだけど…」

リライブはちょっと引いて謝った。

なのはは答えない。そのまま誘導弾の数が増えて…

ってちょっと待って！？いつの間にか10個超えてるよ！？

「絶対当てる絶対当てる絶対当てる絶対当てる…」

「う、うわ…さすがに驚いたな、こんな数使えるようになってたなんて。」

警戒するリライブ。なのははそれらの誘導弾を放って…

四方八方に飛んでいってしまった。

それらは速度も軌道もばらばらに飛んでいった。見送ったリライヴは息を吐く。

「なんだ、制御できるわけじゃないのか、ビックリし……」

リライヴの言葉が止まる。

速度も軌道もばらばらに四方八方に飛んでいった十数個の魔力弾が停止していた。

リライヴは前後左右上下関係無しに魔力弾に囲まれていた。

私はなんとなく次の展開が予測できた。

「あ、酷」

「いつけえええつ!!!」

リライヴの言葉を飲み込むのは合図と共に、全方位から魔力弾がリライヴ目掛けて飛来した。

しかも着弾時に炸裂効果が付加されていた。魔力ダメージとは言え直撃ならかなり痛いだろう。

そう言えば、アルフがなのはと速人を相手に模擬戦やりたいたと言っただけ。

「や、やめて置くように薦めよう…かな…」

瞬く間に魔力の残滓に包まれたリライヴを見ながら、私はそんな事を考えていた。

S I D E O U T

第二話・戦闘開始！（後書き）

速人は上手いがパワー不足。

シューター制御、数は出力関係ないと思って改修前の現段階から十数個制御させてみました。

第三話・魔力蒐集

第三話・魔力蒐集

S i d e 〱 クロノ 〱 ハラウオン

さすがに呆れた。

明らかに誘導弾で制御していい数じゃない。しかも攻撃方法が惨い。おそらく速人や彼女に勝つために試行錯誤した結果なんだろうが…

「まったく…一人で私に防御魔法使わせるなんて。」

直撃しておいて防御魔法の展開だけで無傷で済ませたりライブにも呆れるしかなかった。

「はあ…はあ…」

「さすがに敵しそつだな。」

なのはは肩で息をしていた。

最後の攻撃もそうだが、最初から全力だった以上仕方がない。僕とフェイトも實際息が切れるほどではないが、疲れを隠しきれる程余裕はなかった。

「だ、大丈夫…お兄ちゃんと訓練するともっとクタクタになるまでやるから。」

「それが嫌だから下がってくれ。と、言いたい所なんだが…一つ頼めるか？」

このまま戦っていては間違いなく僕たちは全滅する。彼女達の狙いが分からないがそれはまずい。

「結界を破壊できるか？そうすればこれ以上戦闘続行出来ない筈だ。」

こっちから捕らえにかかった割にこの有様というのは少し情けない部分もあったが、これ以上戦闘を続けるだけの力は僕達にはない。

「スターライトブレイカーなら…けど、リライブちゃんが…」

許してはくれないだろう。そんな事は想定している。

「十秒だったね、フェイトがリライブに切りかかると同時に離れて準備をしてくれ。」

僕はフェイトをアイコンタクトをとる。フェイトは頷いてくれた。

瞬間、フェイトが飛翔する。

「接近戦？」

フェイトの一閃。リライブは真っ向から切り結んで…

バルディッシュが切断された。

「甘いね！」

そのままリライブは流れるように蹴りを放つ。

「はあああっ！」

「何？っ！！」

変換資質を利用した雷撃。魔法行使も何もなく純粹に雷撃と化した魔力を放つフェイト。

バリアジャケットがあるからたいした害にはならないものの、痺れ位は通ったはずだ。

とは言え止まらなかった蹴りを喰らったフェイトは脇腹を押さえて離脱する。

「捨て身でこの程度じゃ…っ！！」

「ステインガーブレイド…エクスキュージョンシフト…！」

雨のように降り注ぐ刃。

雷撃の痺れが残っている今なら避ける事は出来ない筈。

何とかスターライトブレイカーの発射までも保たせて…

「シューティングスター！」

「なにっ!？」

リライヴは、こっちがフェイトに稼いでもらった時間で準備した無数の刃と同じ位の量の魔力弾を放ってきた。

ぶつかり合った攻撃は相殺されていく。威力まで互角か!？

切断されたバルディッシュを修復したフェイトが間髪いれずに砲撃準備に入る。

「サンダースマッシュャー!!」

フェイトの砲撃魔法が直進する。魔法の終わりの完璧なタイミングに向かって行った砲撃は…

「スパイラルバスター!!」

リライヴの砲撃によって撃ちぬかれた。

僕とフェイトが準備時間まで使用して放った連携攻撃を初見で一人で捌くなんて…

でもコレで…

間に合ったと思って視線を移すと…

「あいにくこっちの狙い通り、どうするクロノ執務官？」

胸から腕を生やしたなのはの姿があった。

S I D E O U T

なのはの胸から、腕が生えていた。

その状態のまま、集束砲撃を撃とうとするなのは。

ここまでやるのか？こいつらは…

「はあっ！！」

なのはの様子を伺っていた俺に向かって迫るシゲナム。

…上等だ。

スイッチを切り換える。ココロが冷えきって行く。

一手目 擦れ違う様に背後を取る。

二手目 左の『徹』にて背中を切り裂く。

三手目 模倣、『吼破』。

対象が吹き飛んだのを確認後、高町なのはを貫く腕を対象に切り換える。

風翔斬『ウィンドスラッシャー』。

腕が引き抜かれたため回避された。

…限界だ!!!

「なのはあああつ!!」

俺は『元に戻って』高速移動魔法を使用する。

事件以来修行してきて、俺は全力を自分の意思で少しだけ制御できるようになって来ていた。

とは言え、長時間続ければ本当に気持ちいが凍って戻って来れなくなるし、そもそも脳内麻薬の操作や心拍数の低下なんて長時間続けたら死ぬ。

今だって身体が痛いしな。

『ウィンドムーブ。』

フェイトやなのはより若干遅いが緩急制動が滑らかに行える。森や室内でも止まる事なく使える高速移動魔法。

…に、練習すればなるとナギハは言っていた。

減速の行程をシャットダウンしてなのは元へ飛ぶ。

…普通こんな事をすればタダでは済まない。だが、俺は幸い『床作り』に慣れている。

まるで地面があるかの様に魔法で作った床を滑りなのは側に着地する。

直後、放たれたスターライトブレイカーが結界を打ち砕いた。

なのはの身体が揺れる。

っの馬鹿！身体を貫かれた後にあんな負担のかかる魔法を撃つなんて！！

俺は慌ててなのはの身体を抱きかかえる。

「なのはっ！しっかりしろ？」

身体を見て気付く。

傷が無い。

そういえば光る玉みたいなのが見えていたが…つまり殺傷目的かと思っていたそれは勘違いだった。

血の気が引いた。

あ、やば…さつきまで『腕の一本や二本位…』とか考えてた。よくよく考えたら魔法攻撃なら死なないように調整できる。それにアルフが言ってた通り連続襲撃事件で…連続殺人事件でないのなら…

シグナムにやり過ぎたと謝ろうと思ったが、既に全員いなくなっていた。

倒れたなのはをアースラに運んでもらって、診断してもらった。その後、全員でブリッジに集まったのだが…

「魔力蒐集？」

聞きなれない単語を聞かされた。

ユーノが頷く。

「ここ最近の襲撃事件では共通して魔力が抜き出されている。なのはもどうやらその被害を受けたみたいだ。」

「なるほどな…」

皆相当強そうなお魔法使い』だったもんなあ…並の奴じゃ相手にならないだろう。

まあ俺には関係のない話だが。どれだけ攻撃力が高くても大振りなんて当たらない訳だし。

「けどごめんなさいね速人さん。リライブに対処するだけの戦力がなくて…」

「いやいや、アイツは本物だからしょうがないですよ。仕事でやってるクロノとかじゃ、勤務やら規定やらがあるからどうしたって限界が出る。リライブにはそれがありませんからね。」

リンディさんの謝罪に返した俺の答えにクロノが表情を歪める。

ま、自力で犯罪者に対処できないと宣告されたようなもんだし当然か。

「そんじゃ、久しぶりに共同戦線と」

「それは出来ない、君を事件に関わらせる訳には行かない。」

乗り気で手伝いを宣言しようとしたところでクロノから静止の声が入る。

フェイトとユーノは驚いていたが、俺としては納得していた。

おそらく、前回の事件で問題見だったから管理局としては事件に関わらせる気が起きないのだろう。

「そんな…クロノ…」

「速人がいるいないはいいけどさあ…三対一でまだ本気出さなかったりライブ含めて五人、アタシ達だけで相手にするのかい？」

「フレアを呼ぶ、それで何とかするさ。」

何とかなる訳がない。

クロノ自身それくらい理解してるだろうに…

まあ、局員さんの対応って言うなら俺は別に無理に手伝わせるとい
う気はない。こっちはこっちで動く。

「高町速人さん、協力していただいてもいいかしら？」

「艦長!？」

「落ち着きなさいクロノ。」

リンディさんからの申し出に異議を唱えるクロノ。

ま、とは言えこの状況じゃ無理もないと思うけどな。

「OK。俺としても野放しにしておくのは気が進まないしな。」

「ありがとう。正直彼女相手に現状いくら戦力があっても足りない
くらいなのよ。」

だろうな、と思った。

ただでさえ前回の事件ではリライヴの方が数段上だったというのに、
そのリライヴの方が修行時間長いのだから仕方ない。
クロノが頭痛を堪えるように頭を抑えている。

「そう心配すんなって。誰か死にそうにでもなきゃあこまで無茶は

しないから。そうならないように魔導師のお前がバインドとか非殺傷で頑張ればいいのさ。」

「簡単に言ってくれるな君は……」

諦めたように呟いたクロノは、何処かすがすがしいような表情を浮かべていた。

「それならば、ただ捕らえるだけという訳にも行かないだろう。」

クロノは言いつつ、あの場で姿を見なかった緑色の服を着た女性を映し出す。

エイミイさん、いい仕事してますね（笑）

と、ちよつとずれた感想を抱きながら映像を見てみると、クロノは女性の持つ本を指す。

「第一級搜索指定ロストログア閻の書。おそらく今回の事件の元凶だ。」

俺は折れるつもりはない、今度こそ全てを護りきってみせる。

示された書物を見ながら俺は静かに手を握り締めた。

第三話・魔力蒐集（後書き）

速人の修行の成果その2。全力の制御。

と言っても、辛うじて殺さないようにする事と持続時間を調整できる事の二点のみで、容赦は殆どないです。しかも短時間。

今回速人はなのはが殺されかけた…と思ったため使用しました。

前回フェイトに威力がないと称されたシューティングスターがステインガープレイド・エクスキューションシフトと打ち合えているのは、前は魔力消費を抑えるため攻撃力を下げただけで、本気で放れば攻撃力はちゃんとあります。

第四話・守護騎士と白い少女

第四話・守護騎士と白い少女

S i d e 〱 ヴィータ

「ヴィータの馬鹿、ヴィータの馬鹿、シグナムのバトルマニア。」

蒐集から戻って来て、あたしはリライブに怒られていた。

「まあまあリライブちゃん、あの娘の魔力も蒐集出来た訳だし」
「それが問題なの!!」

リライブが宥めようとするシャマルを怒る。けど、あたしは聞き逃
せない一言があった。

「魔力を集めねーとはやてが危ないのに、蒐集したらまずいってど
ういう事だ!!」

リライブはアイツらと知り合いみたいだった。もし敵に回すのが嫌とか言う理由なら今ここで…

シグナムもあたしと同じ考えらしく、レヴァンティンを握る手に力が籠る。

リライブはそんなあたし達を見た後、溜息を吐いた。

「蒐集は一人から一回しか出来ない。つまりこれからはからは魔力を奪えない。けど…あの娘にそれは関係ない。何回倒しても向かって来るし、死なせる訳にもいかないでしょ？」

「そりゃ…」

あたしは答えを返せなかった。

はやての為に何も悪くねえ娘を殺したって知れば、はやてはきつと一番苦しむ。

「だから、蒐集が終盤になってから奪った方がよかったの。仮に途中で気付かれてもその時に蒐集すればよかった訳だし。」

言い返す事が出来なかった。これからあの魔導師が追って来る。勝てない訳じゃねえけど、アレに追われながら蒐集するとなると面倒なのは確かだった。

「シグナムも！速人と接近戦やるなってアレだけ言ったのに！！」
「…済まない。」

勝てたのならともかく、一人だけ惨敗だったシグナムは素直に謝った。

「速人との接近戦はただ速く強く鋭いだけじゃ駄目、次は私が速人とやるから。」

言いながら腕を抱えるリライヴ。…コイツが悩むほどてこずる相手なのか？

リライヴとの出会いは、蒐集の最中の事だった…

無人世界で、やたらと高い魔力を感知したアタシは、すぐその場所へ向かった。

透明な剣を振り回している子供の姿があった。

…魔導の才能に歳は関係ねえ。時間がねえ以上、のんびりとやって

る暇はなかった。

「魔導師？…いや、ベルカ式って事は騎士ってやつか。何の用事？」
「テメーの魔力を貰いに来た、それだけだ！！」

突撃するアタシに対してその子供は剣を振るった。

魔力で整形している実体もない武器で、アタシと打ち合おうって…

「舐めんじゃ…ねえっ！！」

打ち合わせた武器から閃光がほとばしる。

拮抗した！？剣でアタシのアイゼンと！？

打ち合いの重さで拮抗するなんて、シグナムでも無理な芸当だ。鋭さはともかく、重さで負けるわけがない。

それだけでも驚きだったんだけど…

「ふーん…ヒビで済んじやったか。」

「なっ…アイゼン！？」

打ち合った箇所がひび割れていた。

こんな…嘘だ…拮抗所か打ち負けるなんて…

ベルカの騎士が、魔導師に接近戦で負けるなんて…っ！

「あつてたまるかあああっ！！」

再びアイゼンを振り上げて、カートリッジを…

「ソニックセイバー!!!」

透明の閃光が、アタシの体を通り抜けた。

「あ…」

アタシはその子供相手に何も出来ずに崩れ落ちた。

しばらくして、アタシは目を覚ました。倒れた場所と同じ所で、捕まっているわけでもなく、体調に異変もない。しかもご丁寧に布までかけられていた。どうやら気絶だけさせて放置したらしい。

少しの罪悪感とかなりの悔しさがあった。

アタシから襲い掛かったのに、昏倒させるだけでこんな気遣いまでされた事が、悔しくて申し訳なかった。

それから数日後…

「ただいまー。あれ?この靴…」

「あ、ヴィータ。お客さんきとるよ。」

見覚えのない靴にはやての客という言葉に、なんとなく嫌な予感を感じて家に入る。

「あ、お邪魔してるね。」

「なっ…」

そこには、呑気に窓を磨いているこの間の白い少女の姿があった。

アタシとシグナムは、少女につれられて近所の公園に来ていた。

「さてと…なんで主に仕えるべき守護騎士の貴女達がはやての目を盗んで人様を襲っているのか…聞いていいかな？」

「な…」

アタシは呆然として硬直していた。いつの間にごうやって調べたんだこいつ…

「…答える気はない、逃がすわけにも行かなくなった。」

シグナムは待機状態のレヴァンティンを手に取り握り締める。
アタシもアイゼンを握り…

少女は面倒そうに肩を落とした。

「あのさ、密告とか考えてたらいちいち連れ出さないとかわない？

それに、仮に二人がかりで私を倒せても、私がしばらく何もしなかつたら管理局に連絡が行くような仕掛けが会つたらどうするの。自動メール送信的なものとか、市販品ですらあるくらいなのに。」

「む……」

「て、てめえ……」

アイゼンを握り締めて震えるアタシの横で、シグナムは静かにレヴアンティンから手を離した。

「そういう事、とりあえず話を聞いてね。」

「……何が望みだ。」

シグナムの問いは、闇の書が狙いの輩なのかどうか。アタシ達に自分から関わってくる以上ほぼ間違いないけど、闇の書の力は主しか使えない事を知らない可能性もある。

だったら、願いが叶えられない以上諦めてもらえる可能性だってある。

もしアタシ達を脅迫するなら最悪はやてに害が行かなきゃ多少手を貸すしかない。

歯噛みしながらその言葉を待つ。

「私の望みは、貴方達の目的と知識の確認。それから相談。拒否したら敵に回っちゃうかもね。」

だが、そいつの口から飛び出したのは自分の願いなんてまったく関係ない台詞だった。

「…あいにくだが、それは出来ん相談だ。」
「そう？それじゃあ…」

と、いきなり転移魔法を使って逃げる少女。アタシとシグナムはすぐに転移先を特定して後を追った。

ついたのは広い無人世界。

「私はリライヴ、流れの魔導師。名乗りたくないなら別にいいからかかって来ればいいよ。」

少女は、アタシ達二人がつくのを待っていて、ただ静かにそう言った。

アタシ一人に一回勝ったからって舐めやがって…

騎士として誇りを傷つけられたアタシとシグナムは、躊躇う事もなく全力でかかっていった。

しばらくして、アタシとシグナムはデバイスを破壊されて地面に転がっていた。

「馬鹿な……」

「ちつきしょう……」

少女：リライヴは肩で息をしていたものの、無傷で平然と空から降りてくる。

「参ったな、カートリッジシステムって便利だね。存在は知ってたけど、バーストモードまで使う羽目になるなんて思わなかった。」

言いながら透明の刀身を展開していた短剣の形のデバイスを待機状態に戻すリライヴ。

アタシ達の前に降りて来たリライヴは、何を思ったのかアイゼンとレヴァンティンを奪い取った。

取り返そうとするが魔力ダメージを受けすぎて体に力が入らない。

「な、何やって……」

「まあ待ってて、修理するから。」

そう言ってリライヴはアタシ達ごと別の場所へ転移した。

返されたアイゼンは、展開しても支障がなく、むしろ調子がよかった。

レヴァンティンも同じなようで、シグナムが複雑な表情で自分の武

器を見つめている。

「さてと…これで私が管理局側について敵に回った結果が判明した訳だし、そろそろ話してくれてもいいんじゃないかな？」

「く…っ…」

住所が割れていて、たった一人でアタシとシグナム二人を相手に余裕があるようなコイツが敵に回ったら何も出来ない。

アタシとシグナムは一瞬考えて、話す事にした。

はやてが闇の書の主である事、そのせいで負荷がかかって足が動かない事、症状が進行している事…

このままでは、はやてが死んでしまうこと。

そして、闇の書の主として覚醒してもらって症状の回復か進行停止を目的としている事。

リライブはそれを聞いて殆ど驚かずに頷いていた。

「なるほどね。一つ確認なんだけど、今現在闇の書が願いを主ごと破滅に導く事で叶えている事は知ってる？」

「何!？」

「どーいう事だよ!？」

いきなりリライブが言ったことに驚きが隠せなかった。

そんなアタシ達を見たリライブはやっぱりといった感じで息を吐いていた。

「闇の書が完成して権限を手に入れた後に、はやてが何かを願ったからそれが主と周囲の破滅と共に叶えられる。つまり、はやては下手に何も考えられないような状態で生きていかなきゃならなくなる。」
「そ、そんな…嘘だろ？」

それじゃあ仮にはやてを救っても何にもならない。リライヴは腕を組んでアタシ達を見据える。

「はやてが権限を得て、病状が回復したら闇の書含めて管理局に行つて貰う。あそこなら少なくとも発動していない闇の書ははやてが死なずに封印する方法位はあるだろうし。」

「主が救えれば、犯した罪は償うつもりだ、それは構わないだろう…」

シグナムは俯いてそう言った。それはつまり、アタシ達とはやてが離れ離れになる事…

けど仕方がない。はやてが死んじまったら何にもならない。

「ま、そんなにめげないで。向こうは安全管理が目的な訳だし、上手く対処する方法があれば古代ベルカの騎士四人が管理局に加わってくれるともなれば上手い事問題点だけ解決してくれると思うし。」

リライヴは言いながらアタシ達の前まで来た。

何を言い出すのかと思つたら…

「さて、とりあえず魔力蒐集からかな？急ぎでしょ？」

そう言つて、自分の身体を指差した。

「な…に？」

「別に一時的なものだし、治るんだつたら献血と一緒にだからね。さっさと魔力集めてさっさとはやてを治してあげよう。」

そう言つて、アレだけの實力があるくせに魔力蒐集に何の抵抗も見せないで、リライヴはその身を差し出した。

それが、アタシ達とコイツの出会いだった。

以降、魔力枯渇から回復したリライヴはアタシ達に蒐集した魔力を届けに来たり、そのままはやてと遊んだりしている。

そんな訳で、リライヴの實力は身をもつて知っている。だから速人って奴がそこまで警戒する相手だつて言うのが分からなかった。

確かにシグナム負けたみてーだし強いのは強いんだろうけど…

「何だヴィータ、何か言いたそうだな？」

「べっつにー…」

顔を逸らしてシグナムの問いかけを流す。

「…とりあえず皆は速人の事を覚えておくといいよ、きっと今頃何もかも上手くいく方法を探してくれてる筈だから。」

それがどういう意味なのか、今のアタシにはまだ分からなかった。

ただ…

わざわざ管理局と分けて名指して呼んだ奴だという事は覚えておく
うと思った。

S I D E O U T

「つくしゅん!!」

「風邪かい速人？君が戦えないと戦力が激減するんだから気をつけてくれよ。」

「大方リライヴ達が俺の天才的技巧をどう攻略するか話し合ってるんだろ。はっはっは！」

大威張りで胸を張った俺に対して、ユーノは苦笑を漏らした。

「それにしても折角の再会がまた事件だ何て…」

おそらく医務室に向かったフェイトとなのはの事だろう。

「ま、いいんじゃないのか？刺激的なほうが忘れないだろうし。」

「は、速人…ちょっと不謹慎じゃないのか？どんな事になるのか」

「ハッピーエンドさ。決まってるだろ？この俺がここにいるんだぜ？」

『それ以外はない』。その意思をはっきりと込めて告げる。

「他の誰かが言ったらただの励まし聞こえないけど、君が言つと本当に叶うって気がしてくるよ。」

「当然だな、俺は嘘にする気が無いんだから。」

俺の宣誓に、ユーノは笑みを返してくれた。

第四話・守護騎士と白い少女（後書き）

登場人数の関係で場面遷移が激しい（汗）

ちなみにリライヴは簡単な家事、デバイスの修理、調整が出来ます。

一人で犯罪者やってるので大変なんです色々。

第五話・海鳴へのお引越し

第五話・海鳴へのお引越し

今回は、ジュエルシード搜索の時のように町を離れる事はなく、襲われたなのはや俺の警護もあつてか…って言うか多分リンディさんの『粹な計らい』って奴で、リンディさん達が俺達の家近所対策本部と称して住む事になった。

当然というべきか、フェイトもそこに住む事になるらしい。

それどころか転入手続きまでとっていたらしく、なのはと同じ聖祥に通う手続きをしたらしい。

…囑託とは言え管理局の魔導師なのにいいのかそれ？

と、思ったりもしなくもなかったが、リンディさんが根回しして出来たのだから細かい事はいいだろう。

何はともあれ、俺は今までどおりの訓練と…

「近所の調査…かな？父さん達には言えないけど…」

何しろ魔法がらみだ。

それに、保護者同伴のヒーローってのもちょっと情けないしな。

「アースラには呼ばれた時に行けばいい、今は…」

現状の調査が最優先だろう。

方法は山ほどあるが、あのリライヴが協力してるとなると長い時間をかけたなら何も出来ないまま闇の書が完成する可能性がある。

急がなきゃな…

あ、あとフェイト歓迎用にプレゼントも用意しないとな。

歓迎って言うだけならクロノ達もそうだが、あつちは仕事仲間フェイトは友達だ。特別扱いしてもバチは当たらないだろう。

…言ってしまうば、切実な問題として小遣いそんなにないんだ。

すまんねクロノ、リンディさん。手伝いはきつちりするからそれで勘弁してくれ。

S i d e 〱 フェイト 〱 テスタロッサ

リンディさんが準備してくれて、なのはと学校に通う事が出来るようになった。

制服とか手続きとか、いろいろやってくれたリンディさんには本当に頭が下がる。

養子にとか言う話があったけど、今はまだ迷っています。

で、その帰り道…

私はジンジャに連れて来られた。
神様を祭る神聖な場所なんだとか。

「クーちゃんいるー？」

なのはが何かを呼ぶ。
すると…

トテトテと可愛い足取りで、狐が姿を見せた。
可愛い…と、そう思って見ていたんだけど…

「っ！？」

私を見るなり固まって動かなくなってしまった。
…何だろっこの驚き方？

「くーちゃん、フェイトちゃんはなのはと友達になったの。だから
…ね？」

なのはが優しく言っと、恐る恐るなのはの元へ来る狐。

「ごめんねフェイトちゃん。この子を紹介したくって来たんだ。私
の友達で久遠ちゃん。」

私も自己紹介しよう。そう思って…

ボン！

と、面白い音がしたと思ったら小さな女の子がいた。

「え？えっ？」

「前の雷、久遠がやったの…ごめんなさい…」

言いながら謝って来る女の子。久遠って…アレ!? 狐じゃ…

「くーちゃん変身出来るんだ。凄いでしょ。」

「そ、そっか…」

私もさすがにビックリした。魔力反応も無しにこんなキレイに変わって見せるなんて。

「お兄ちゃんが、管理局の人に話すなって言うんだけど、フェイトちゃんはいいかなって。」

「そうなの? でも何でだろう…」

少し不思議だったけど、突然顔を歪める久遠。

「変わった力が知られると…良くない事があるから…」

「あ…」

ちょっとだけ分かった。

アリシアが息を吹き返した方法といい、この世界には珍しい力がある。

管理局としては監視、確保したい力だし、管理局以外でも、外の世界の人に知られたらあまりいい事は無いだろう。

「そうだね、速人の言う通りだ。クロノ達には黙っておくよ。私はフェイト…テストアロツサ。よろしく、久遠。」

「よろしく、フェイト。」

私と久遠はそれぞれ手を差し出して握りあった。少しその感触を確かめてから互いに手を離す。

可愛い娘だな…

仲良くなれそう良かった。

ふと、軽快な足音が階段を登って来ているのに気付く。

「あれ？なのちゃん。珍しい娘と一緒にだな。おっ、狐もいたか。」

と、足音が途切れ、現れた青い髪の男の子がなのはに笑いかける。
なのはの住んでるところだからだと思うけど、知り合いが多いんだ
なあ…

「あ、晶ちゃん。訓練？」

「おう！俺ももつと鍛えないとな。速人の奴に負けっぱなしじゃ師匠として格好つかないし。」

あの速人の師匠だつて言うその人に、私は驚きを隠せなかった。

「あ、あの…なのは、彼は？」

思った以上に興奮していたのか、私は上手く喋れなかった。

だからなのか、なのはと彼は苦笑いする。

少し恥ずかしかつたけど、速人の師匠だという彼の事が気になっていたのでまだ平気だった。

「えっと…なのはの友達で速人お兄ちゃんの空手のお師匠さんの、城島晶ちゃん。ちなみに女子高生なんだ。」

「あ、そうなん…ええっ!？」

サラリと言ったなのはに、私は思いつき驚いてしまった。

男の子だと思つてたその子は、女の人だったみたい。

「あの…ごめんなさい。」

「気にすんなって。俺も何で男に生まれなかったのかと思ってるくらいだから。」

謝る私に物凄くサツパリとした答えを返してくれる晶さん。

そこまで気にしないのも問題ある気がするけど…

でもきつと、これが彼女らしさなんだろう。

「えつと…晶さんは速人の師匠って言ってたけど…」

「お、そこで食いついたのか。速人の奴随分可愛い娘に好かれたな。」

「え!?!?そ、そういうのじゃないです!?!」

驚いてつい思いつきり否定してしまう。別に速人と一緒にいるのが嫌って訳じゃないけど…何かちょっと恥ずかしい。

「わりい、話がそれたな。速人の師匠って言ってもアイツより強い訳じゃなくて、剣術を使うアイツに格闘技を教える師匠なんだ。」

「格闘…剣とは違うんですか?」

魔法戦では近接戦を格闘戦と言う事もある。それと違うと言う事は、アルフがやるような素手での戦いの事だろう。

それくらいは分かるけど…あの速人が武器の有無に戸惑うとは思えない。わざわざ別の人を師事する必要があるのだろうか?

そう思っ出て来た疑問なんだけど…

「そりゃ違つと思っけど…」

少し難しそうな晶さん。…ひょっとして物凄く当たり前の質問しちゃって困らせてるのだろうか?

「晶ちゃん、サンドバッグ叩くんでしょ。見せて貰っていいかな？」
「あ、お願いします。」

実際に見せて貰えれば分かりやすいし嬉しい。
そう思った私は、なのはに同意して頷く。

「オツケー。飽きるまで見てっつていいよ。」

気持ちのいい笑顔で許してくれた晶さんは、そのまま森の奥に進んでいった。

静かな…静かな筈の森の中。私の目の前でリズムよく激しい音が鳴り響いていた。

左右、左足。

キレイに連続で続く。それも左足が当たった時に至っては鈍い音を立てて袋が浮き上がった。

魔力で身体を強化しないと…いや、強化しても同じ事が出来るか分からない。

しばらく見ていて気付く。弱くて速い攻撃を挟んで強く重い一撃が

放たれている。

恐らくは、連繋や牽制。

魔法戦であれば誘導弾等の射撃、バインドによる拘束等の後に砲撃を放つような感じなのだろう。

そして、魔法と違い全てが近距離の為『繋ぎ』が恐ろしく速い。

…魔導師が速人に接近戦で勝てない訳だ。

魔法は発動が速いものや、速度が速いものはあるけど、基本的に名称を呼ばなければ使用出来ないし、その必要が無いものでも術式の構成時間は絶対に必要になってくる。

晶さんなら…その間に、何回殴れるだろう？

そう言えば、リライブもシューターを毎回生成せずに、放ったシューターや展開した魔力刃を維持して戦闘している。

魔法が下手な訳じゃないのにどうしてあんな戦い方をするのか疑問に思っていたが、あれなら制御こそ必要なものの、毎回術式を構成し魔法を発動させる手間が無い。

やがて、手を止めた晶さんはサンドバッグから離れ、一息吐いた。呼吸が乱れていない、体力も凄いいんだ。

「ふう…どうだった？」

「凄く参考になりました、ありがとうございます。」
「そっか、そりゃ良かった。」

凄く綺麗に笑いかけてくれる晶さん。

私も今のままじゃ駄目だ、速さを生かすなら、大鎌を振るうだけじゃきつと速人には届かない。
魔法戦じゃない、純粋な戦いに強くないと。

その夜、普段のなのはは早朝訓練の為に眠る時間。私もちょっと早いと思っただけど眠ろうとして…

窓の外に、速人と恭也さんと美由紀さんの姿を見つけた。

…晶さんの事があって少し気になる。

私は悪いと思いつながらコツソリ部屋を出て速人の後を追った。

神社に着いて、森に入っていく三人。見失わない様に後をつけて…

「うっら〜め〜し〜や〜…」

「え…ひっ…！」

低い声が聞こえて肩を柔らかく捕まれた。

そ…そんな訳無いよね…オバケだなんて…
恐る恐る振り返った私は…

「コラ。」

「痛っ！あ、速人！？」

おでこを指で弾かれて頭を押さえた。

犯人はいつの間にか後ろに回っていた速人だった。視線を戻すと恭也さんと美由紀さんが立っている。

…きつと最初からバレていたんだ、速人は見なくても相手の位置が感じられるみたいだし。

「その…ごめんなさい…」

「御家族が心配しているだろう、こんな時間に出歩かない方がいい。」

「学校だつてあるんだしね。速人、送つていつてあげなよ。」

言われた速人は少し顔を歪める。持ち物を見れば、ナギハを装備した状態で糸の出る手袋をつけていた。

バリアジャケットを展開していない以外はいつもと変わらない完全装備。つまり本気の速人がそこにいた。

これから訓練をするつもりだったみたい。

私は自分がその邪魔になってしまうのを避けたくて慌てて手をふつて否定する。

「そ、そんな！一人で」

「女の子を一人夜道に放り出すのはヒーローの仕事じゃないな。分かった。」

一人で帰ろうとする私を押し止どめて速人は苦笑してそう言った。

「…けど一戦だけ付き合ってくれよ。勘鈍らせたくないんだ。フェイトもそれ位の間待っててくれるだろ？」

「あ…うん。」

速人を待つてる名目なら何も言われずに速人の訓練を見る事が出来る。

そう思った私は反射的に頷いた。

「ふう…いいだろう、一戦だな。」

「サンキュー！んじゃやるっか。」

「私達は少し離れてよう。」

私は美由紀さんに手を引かれて少し離れた。

構える速人と恭也さん。

…緊張感が違った。

速人が一言も喋らずに見合っている。

リライヴ相手ですら語りかけていたのに…

「は…!!」

速人の声と共に剣閃が交わった。

甲高い音が響く。

速くて鋭くて…怖い。

身体が震えないように手に力を込める。

速人が少しタメを作った様に見える…

雷の様な音が響き渡った。

今のが…生身で剣を打ち合わせて出る音？

二人は驚くでもなく打ち合いを続けている。

恭也さんの一閃。

防御の態勢に入っていた筈の速人の肩が裂けた。

そこで初めて自覚する。

非殺傷設定なんてないのに、この二人こんな速度で生身で斬り合っているの！？

握る手に震えが走るのを、止める事ができなかった。

二人の斬り合いは、怪我をきっかけに『加速』する。

と、速人はいきなり後方に倒れこむように跳躍し、何かを投げた。

アレは…空中にいるアルフに使った投擲。

恭也さんはそれを一閃で切り払った。

かなりの速度があるのにあんなに簡単に…

と、思っていたがそれだけではなかった。

恭也さんから何か小さなものが投げられる。

針のようなそれを辛うじてかわした速人だったけど、少しだけ姿勢が崩れる。

とは言え距離はあるから詰められる前に対処できるだろう。

瞬間、速人の首筋に恭也さんの刀が添えられていた。

「虎切…」

「勝負あつたな。接近戦でつまつたからといってろくな攻撃手段のない遠距離戦を挑むのは間違ひにも程がある。」

「あーはいはい！つたく…これでもスチール缶に穴あける位には強い投擲だつてのに攻撃手段がないですかそうですか！」

速人は悔しそうにナギハをしまう。

アレだけの距離をどうやって詰めたのだろうか？

目の前で見ていた筈なのに、魔法も使つてない筈なのにまったく分
からなかった。

肩からの出血も大して気にせず、速人は私の元に来る。

「それじゃ帰るか、サンキューな兄さん。」

「ああ。」

私の手を取つて、速人は歩き出す。

ちよつと戸惑つたけど、私はその手を軽く握り返した。

しばらく無言の時間が続く帰り道、速人が唐突に口を開いた。

「さて、少しは参考になつたか？」

「え……」

速人の言葉に今更ながらに気づかされる。私が気にかけていた速人の戦いを、わざわざ見せてくれたのだ。

だから、私をわざわざ待たせて戦ったんだ。

「あの…ありがとう速人…」

「ん？気にすんなって。女の子一人歩かせるわけには行かないだろ。」

「そうじゃなくて、わざわざ戦ってくれて」

「アレは俺の修行だって。」

どうやらお礼も言わせてくれないみたいだ。

速人は涼しげに微笑んだまま。静かに私の手を引いて歩く。

こつこつ姿を見ると、さっきまでの戦いなんてまったく想像出来ない。

やがて、マンシヨンの前に着く。

速人はそこで私の手を離すと、帰ろうとして振り返った。

「あ、そうだフェイト。つけてくるのはコレっきりにしとけよ。あんまりやると色々調べられるからな。」

「え……」

速人はそれだけ言って帰ってしまった。

調べられるって…管理局が用意した状況にそうそう不備なんてある

はずが…

「あ。」

ふと、速人に勝った恭也さんの戦いを思い出す。

…常識で考えるのはやめておこう、うん。

S I D E O U T

「やれやれ…まさかつけられるほど興味があったとは…」

フェイトを送った後、俺は帰り道で嘆息していた。

俺の我侭っぽく見せる対処はしたもの、兄さんには間違いなくフェイトが何の目的で来たか気づかされてる。

って言うか多分姉さんでも気づいたんじゃないだろうか？それ位兄さんの戦いは分かりやすかった。

首狙いの鋼糸も無かったし、普段なら多用してくる貫も一回しかまともに使ってこなかった。しかもフェイトに見やすい位置で。

そんな制限まであってあの力量。

はつきり言って剣技的な意味合いでは俺は本気だった。

フェイトの手前、殺人技と急所攻撃は多用しなかったが、それだけだ。

だって言うのに、兄さんの方はフェイトとの位置関係を把握しながら見せるもの見せないものを選びながら戦ってやがった。

「くそー…美沙斗さんは兄さんより強いんだよな…」

一度戦っているのを見たことがあるが、とんでもない技量だった。何しろ筋力では兄さんより遥かに劣る筈なのに殆ど打ち負けないんだから。

実践訓練を始めて半年、事件に入ってしまったのにまだまだ先は長いようだった。

Side 高町恭也

俺は美由紀の首に突きつけた刀を下げて鞘に収める。

「ここまでだ、まだまだだな。」

「うう…速人より長持ちしないなんて…」

俺に負ける事はともかく、速人に劣る事が情けないと思っているのか俯く美由紀。

「精進しろ。」

「はい…」

答える美由紀だったが、おそらく真意は分かっていないだろう。

速人は俺との修行で一度たりとも『本気』を出していない。

速人自身からすれば、俺に習っているのは剣技だからなのだろう。アイツが習得している暗殺技…全ての話を聞いた訳ではないが、コシだけ共に生活していれば分からない方がおかしい。

気配探知と気配遮断。

この二つが常人…どころか御神の剣士より上手い。あれだけ自由自在に扱えるならば戦闘の真最中に姿をくらます事すらできるだろう。

完成した御神の剣士が武装中隊を正面から打ち倒せるのならば…全力の速人は武装中隊に気づかれる事なく打ち倒す事が出来る。

それを見抜けず速人より劣るなどと勘違いも甚だしい感想を抱いている事に対しての『精進しろ。』なのだが…

「でも、悔しがつてるだろうね速人も。恭ちゃん加減してるのに何も出来なかったんだし。」

この愚妹がそれに気づくのはまだまだ先のようだった。

同時に、速人の加減にはまるで気づかないくせに俺の狙いは完全にばれている辺りは俺の未熟なのだろう。

「見せてよかったの？なののは荒事の友達とは言っても…」

「今の所なのを護るならばまわりに強くなってもらうしかないからな。」

俺がそう言つと横目で見てくる美由紀。

「その妹愛を傍にいる愛弟子にも向けて欲しいかなあ…なんて。」

「速人より強くなれば考えてやろう。」

「うう…恭ちゃん容赦ないよ…」

実際美由紀もやりたい事はある筈だが、音も上げずによくついてきている。だが、褒めると調子に乗るのでこれ位でいいだろう。

速人…なのを頼む。

少し日常からずれた位置で荒事に関わっている妹の無事を祈りつつ、

護る事に妥協しない弟に全てを託し、夜空を見上げた。

S I D E
O U T

第五話・海鳴へのお引越し（後書き）

完全気配遮断は正面に向かい合っていないければ恭也ですら対処できません。

こんなもの勘で避けた美沙斗さんって一体…（汗）

虎切

高速、高射程の抜刀術。

高速はともかく、小太刀で高射程って…凄い技もあったもんだ。

第六話・難局を乗り切る為の全ての手札

第六話・難局を乗り切る為の全ての手札

「え、ええっ！カートリッジシステムを付ける！？」

メンテナンスルームから悲鳴じみた声が聞こえ、顔を出す。

エイミーさんが、機材に入った二機のデバイスと話していたらしい。

ちょっと興味があったので入ってみた。

「カートリッジシステムってアレか？騎士達の使ってた。」

確か薬莢が飛び出して魔力が上がる奴だ。

俺には関係ないが魔導師：特に馬鹿魔力のなのはは強力な魔法を使えるようになれば頼もしいだろう。

あ、関係ないで思い出した。

「ナギハ、まさかお前はそんな事言い出してないよな？」

『愚問ですマスター、子供の玩具と剣士の武器たる私を一緒にしな

いで下さい。』

カートリッジシステムなんてあった所でほぼ間違いなく使わない。だから望み通りの回答だったんだ。

…二機の神経を逆撫でするような事を言わなければ。

『訂正しなさい。マスターは優秀な魔導師ですし私はそんなマスターのパートナーです。』

『同意する。』

レイジングハートとバルディッシュは割とマジで怒っていた。口調が変わらないから分かり辛い間違いないだろう。溶液？が揺れている。

『大体貴方のマスターは魔導師としては未熟以下で、剣士としては恭也に劣る程度では無いですか。』

「ちよっ…レイジングハート！ストップ！！」

対抗心に火がついたのか、レイジングハートが反撃に出た。

どこで知った情報か知らないが、このままじゃ局のテリトリーでいらん事まで喋りそうで慌ててしまう。

『マスター！恥じる事はありません！むしろ年齢を鑑みれば貴方が恭也様と魔法無しで渡り合えるのは素晴らしい事です…！』

「いや恥じてないけどさ！お願いだからここで喋るなっの…！」

『『あ…』』

人間味を感じる眩きを綺麗に揃って返してくれるナギハとレイジングハート。

『未熟なのはナギハとレイジングハートのようですね。』

バルディッシュの眩きには心底同意だった。ナギハはともかく、レイジングハートも熱くなりやすいたちではあるようだし、はあ…

「お兄さんって速人君より強いんだ、へえー…でも魔法使ったら勝てるんだし、リライブちゃん含めて負け無しだから速人君は未熟じゃないと思うけど。」

…魔法使ったら勝てる…か？

ちよっと思ひ浮かべて見る。兄さんに勝って刀を掲げている自分…

ダメだ、何故か魔法使っても勝てる気がしない。

笑みを向けてくれるエイミーさんに俺は苦笑を返す。

「リライブとは対でやって無いけど…サンキューエイミーさん。ちなみに…」

「詳しく調べたりはしないから大丈夫だと思うよ。それに、調べるなら速人君の事を調べるだろうし。」

焦る俺に対して、エイミーさんは笑いながらそう返してくれた。

全く…隠してる相手に気を使われるなんて情けないにも程がある。

とはいえ、ここは素直に感謝しておこう。俺だって話せるものなら一から十まで話したいが、普通に考えて『裏』の話は一応『表』に位置する警察組織な上、他の世界の住民の彼らに話さないほうがいい。

それにしても、強化かあ…

「レイジングハートとバルディッシュだけ強化されるって事は、魔法系はまた差が開くなあ…」

「あ、でもナギハからも強化の提案はあるんだよ。」

しみじみと呟いた俺に対して、エイミーさんから驚きの新事実が発覚する。

むう…ナギハよ、魔法を強化したり変形したりって言うのは正直いらないんだからな。

たしかになのはやフェイトだけ強くなるのは尺だが半端な強化なんて…

『魔法発動の為の処理を出来る限り私が行える様にAIと処理速度の強化を提案しました。…貴方は貴方の強さを高めて下さい、私はそれを全力で手伝います。』

「ナギハツ!!」

理解良過ぎる相棒に、俺は思わず感動してしまった。

こりゃ俺ももつと鍛えないとな。とりあえずは…

兄さんの影を越えよう、うん。

S i d e 〱 フレア 〱 ライト

魔導師連続襲撃事件：闇の書事件。

クロノ執務官から入った協力要請を見ながら、私は深く息を吐いた。

半年か…

久しく合う事のなかった海鳴の剣士。今回の事件にも彼らが協力しているらしい。少女の方も魔導師としてかなりの腕に成長しているようだ。

そして…おそらく速人も。

業を納める中で嫌でも実感する事があった。
地面が欲しい。

腕で振るっているはずの武器なものにも拘らず、足捌きで威力、精度を調整できる。

そんな技術は速人と会うまで知らなかった。おまけに空中ではふわふわとし姿勢制御になるため足場を使って出来る事が上手くないかない。

速人はそれを知っていて、飛行魔法ではなく地面の生成を選んだのだろう。

そして、剣はともかく魔法は素人のはずの速人は、『慣れないまま』リライヴを倒すだけの剣技を振るっていたのだろう。

デバイス任せにしても、あつたばかりの新品じゃ経験値が少なすぎる。

それが…更に洗練されているはず。

合間を縫って訓練でも申し込んでみるのもいいかもしれない。今の私ならそうそう遅れは取らないだろう。

「…は!!」

突き出した木の棒が、甲高い音を立てて鉄板を突き破る。

ベルカの騎士が相手のようだが…彼らは魔導師のクロスレンジと体技が異なるものである事を理解しているだろうか？

「いい機会かも…知れないな。」

私が納めたものがどこまで通用するのか、少し興味がわく。まったく、仕事だというのにこの調子ではいかな。

私は身支度を整え、寮を出る。

ロストロギアと魔導師の犯罪者。
早めに解決しよう。でなくては無辜の民が巻き込まれるだけでなく…

無茶をする馬鹿がいるからな。

S I D E O U T

「はぁー…これ全部あいつらが事件起こしていった世界か。」

クロノに呼び出された俺は嘆息しながらモニターを見ていた。
モニターには、最近の事件で魔力が奪われた何かしらがある世界が
羅列されている。

「リライヴの奴が協力してるんじゃ、もう完成しててもおかしくないぞ?」

「そつだ、彼女達が行動している間に早急に捕らえる必要がある。」
事が事だけに武装隊に協力要請したらしく、何かどう見ても弱いのが鍛錬に勤しんでる。

とはいえ、基本的な事からやってる分、なのはより精度が若干よさそうにも見えなくはない。って言うか、専門家が半年前から始めた

小学生に負けていいのか？

「…君はどう見る？」

「何が？」

「本局武装隊さ。彼らも管理局の訓練を受けてる専門家なんだが…」
「クロノは優秀だったのはよく分かったよ。」

俺の答えに苦笑するクロノ。喜んでいいやら悲しんでいいやらって所だろう。

「まあいいんじゃないの？どうせリライブとやり合えるのは『本物』だけなんだし、何よりなのはともかく俺は魔法からつきしだからな。その関係の心配がないだけで十分だ。ただ…」

「ただ？」

「フレアは？」

アイツはかなりの戦力だ。他の所で嫌われてるならぜひ呼んで欲しい所だ。

今の所直接的にリライブに勝ってる部分があるのは、俺とフレアの接近戦だけだからな。

「それが、闇の書とリライブの事が分かった時点で協力要請を出して、次の日には通ったんだが…未だに姿を見せないんだ。」

「アイツが？嘘だろ？」

俺が受けた印象は、管理局の職務に忠実な市民の盾だ。間違っても指名された仕事に顔を出さないような奴じゃないと思うんだが…

「クロノくん、メールが来てるよ、そのフレアから。」

「読んでくれ。」

「はいはい。えーっと…クロノ執務官、お疲れ様です。依頼があった任務の経過報告ですが、現在事件の関係者と思われる人物を捕捉しました。」

「なっ!?!」

「…映像データは気づかれる恐れがあるので送れませんが、赤い服の少女です。現在交戦中の生物との戦闘が終了し次第捕獲に入ります。だって…」

「馬鹿かアイツは!!!!」

クロノはアースラ内という事も忘れて叫んでいた。
いや、予測の斜め上を軽く行ってくれたな。

「まあ大丈夫だつて。今のアイツなら今回の事件の連中で負けるのはリライヴくらいだ。」

「君はベルカの騎士を甘く見すぎだ!いくらフレアが接近戦が得意といってもAA+がせいぜいだぞ!?!対一戦闘でならオーバースの判定がついているベルカの騎士相手に幾らなんでも」

「増援がこなきゃ大丈夫だ、手伝いにいける準備だけしておこうぜ。」

焦るクロノと違い俺には確信があった。

あの少女の戦い方は…強固な防御を誇る魔導師は討てても、武芸者に当てる事は出来ない。

そして…

あのくそ真面目で融通も何もない馬鹿社員が、俺が教えた業の存在を放置しているとは、到底思えない。

…ひょっとしたらクロノに勝てるようになってたりして。

そうだったら面白そうだと思いつつ、俺は来るべき戦闘に向けての準備を始めた。

第六話・難局を乗り切る為の全ての手札（後書き）

次回の更新が一週間後に出来るかわからなくなりました。
週のどこか（ってどこだよ）のタイミングで更新したいと思っています。
ます。

第七話・黒き断罪の槍

第七話・黒き断罪の槍

S i d e 〉 ヴ ィ ー タ

必要なページ数ももうそれほどねえ。

あと少しではやては助かるんだ、管理局の手が出る前に…

「やはり辺境にいたか。管理局の目を避けて辺境の無人世界を狙うとは思っていたが、予測通りだったな。」

「ち…っ!!」

聞こえて来た声に振り返る。そこには一人の局員が立っていた。

A A …得意なものがあったてもA A + っところか、どうにでもなる。

「おらあああっ!!」

アイゼンを振りかぶって突撃。目の前の男は全く動かない。

距離に入っても全く動かないそいつに向かってアイゼンを振り抜いて…

デバイス同士の衝突音が響き渡る。

そいつは手にした長めのデバイスを縦にして、アイゼンのハンマー部分より内側に入ってアタシの一撃を受け止めていた。

と…喉元に棒状のデバイスの先端が突き付けられる。

「が…っ！！！」

そのまま喉を突かれた。

吹っ飛ばされたアタシは咳き込むのを堪えて距離を取った。

「ゲホツ…ゴホツ…」

「騒ぐ事はない、喋れる程度には加減しておいた。」

アタシは咳を堪えて目の前の男を睨み付けた。

「そこまで嫌ならおとなしくするといい、どうせ君達に罪はない。」

「な……どういふ事だよ！！！」

男の台詞が理解できなかった。

自慢出来る事じゃねえが、アタシ達は相当暴れた。正直許されるとは思っていない。

どういふ事なのか聞こうとしたその時…

男が静かに笑みを見せた。

「プログラムは物だ、使い方を誤った使用者に全責任が行くだけで君達には何も無い。」

アタシは一瞬でキレた。

S i d e ~ フ レ ア = ラ イ ト

「ぶざけんなあああああつ!!!!!!!!」

喉を攻撃した直後とは思えない怒号が響き渡った。

なるほど…クロノの見解通り今回の主は余程好かれている様だな。葉莢が飛び出し魔力が上がり、ハンマーがドリル状に変形する。

クロスレンジが得意なベルカの騎士だ、苦戦は免れないだろう…

速人と出会っていないければ。

振るわれる力の直撃を避ける。それは防御魔法を発動する訳でも、距離を取る訳でもない。

例えば…身体の向きを変える。

例えば…武器を屋根変わりに軌道を逸らす。

例えば…振るわれた瞬間距離を詰め、武器そのものを振らせない。

どれもこれも、魔導師には必要が無く、学習で身に着く計算式と違

い経験値が必要だ。それも、一撃でも受けたら致命傷になりそうな領域で。

嚙った程度の今の私ではそこまで綺麗には成せない。だが：

「つきしょおおっ！当たり前やがれえっ！！」

兎戯相手ならば私とて成す事が出来る。

：魔法に触れる者にとって、前衛とは強固な防御魔法とそれを崩す強固な攻撃のぶつけ合いだ。だから彼女が振るう兎戯は、魔導師の中でならむしろ優秀な域だろう。

速人に接近戦で勝てない訳だ、兎戯対業では結果は見えている。

「今の主に餌付けでもして貰ったのか？所詮闇の書を使う魔導師の一人だ、そこまで張り切る必要」

「何にもしてねえよっ！アタシ達が勝手にやってんだ！それがどうしてアタシ達の罪じゃねえんだ！」

なるほど、闇の書の力目当ての行動ではないのか。

「理由は先に述べた通りだ、大体これだけ派手に暴れ回っているのに止める気も無い魔導師など罪人以外の」

「魔導師じゃねえんだよ！！何にも知らねえのに止めようねーだろうが！！！」

全力で攻撃を仕掛けて来る赤い少女。

だが、威力が上がった所で余計に雑になっては意味が無い。

増幅されていた魔力が落ちて来た所で、再び葉莢が飛び出す。

「…ああ、一つ忠告しておこう。」

私はグレイブの先端に黒い魔力を送り込む。

「最大攻撃力も十分…私の得意分野だ。」

織り連ねた魔力は、やがて先端の一点のみに無双の力が宿る。

「うおらああああっ！！！！」

全力で振るわれる一撃。私は今日初めて突きの態勢を取る。

払い捌くには槍としてではなく棒として振るった方が無駄無く綺麗で手数が多い。

故にこの突きは…捌く業ではなく必殺の一撃。

「ラケーテン…ハンマーツ！！！！」

「乾坤一擲…アブソリュートランサー！！」

ドリル状のハンマーヘッドと、槍の先端が激突する。

衝撃で互いに弾かれた。

「重さでは敵わんか。」

「そんなっ…嘘だろ…」

態勢を立て直した私の前で、同じく態勢を立て直した少女が、ひび割れた自身のデバイスを見て驚愕の声を上げる。

砲撃魔法は推進力を得るためのもので芯となる破壊力は先端のみに集束されている圧縮魔力。

ただその一点のみならば負ける事はない。

しかし…上手く行くものだな。

私の事を、無愛想で感情が見えないと誰もが評するから、ならば嘘にも気付かれないのではないかと考えて見た。

結果は予想通り。見事に挑発にかかってくれた。

さすがに主の名前までは漏らさなかったがお陰でかなりの事が分かった。

この状況で虚偽を言える程冷静なら、大した詐欺師だが…あいにくこの少女は詐欺師には見えない。

…多少非道な手といえはそうかもしれないが、何より重要なのは無辜の民の安全。犯罪者に虚偽を伝える事など何の躊躇いもない。主にしても、本当に何も知らないのであればロストログシアに巻き込まれた無辜の民に過ぎない、必ず護らねば。

「く…つきしょおおっ!!」

彼女は尚もデバイスを握り私に向かって来る。

闘志は十二分、流石はベルカの騎士と言った所か。私も全力の一撃だったが故にどうにか打ち合いに勝ったが、カートリッジを使われればただの一閃では話にならないだろう。

業に触れていなければ敗れていたのは私だろうな、馬鹿な奴だがあの域の業を振るう速人には少しばかり称賛を送らせて貰おう。

迫り来る少女に対してグレイブを構え…

「ぐっ！」

「全く…逃げられそうにないからって玉砕覚悟なんてやめてよヴィー
ータ。」

透明の剣を展開したりライブが、少女をバインドで拘束していた。

「フレア…だっけ？久しぶり。」

「犯罪者相手に話す事はない。」

「ま、そうだね。私も管理局員と話す事は無いよ。」

軽口を叩きあつたが、実際問題としてかなり厳しい状況だ。

彼女が本気で遠距離から攻撃を続けて来たら、私では対処しきれない
だろう。

何しろクロノ相手ですら遠距離に徹されたら勝つ事が難しいのだ、
全てにおいてクロノより二回りは強い彼女相手に一人で勝てる見込
みは薄いだろう。

さらに、手負いとは言え先の少女も残っている。

「帰っていいよヴィータ、彼一人なら私でも十分カタがつく。」

「一人じゃなかったらどーすんだよ。こいつだって潜んでたんだし
まだいないとも」

少女がいい終わる前に、転移魔法陣が展開された。

ミッド式の魔法陣。恐らくこちら側の増援だろう。

単独で待ち伏せしていたのに増援を頼るのは少々情けない話だが、
リライブ相手ではそれも仕方ない。

魔法陣から人影が現れ…

「スーパーヒーロー高町速人！満を持しての登場だあっ！！！」
「は、恥ずかしいからやめてっば！！！」

やたらとテンションの高い声と、少し緩い少女の声がした。
やれやれ…相変わらずだな、いい事なのか悪い事なのか…

S I D E O U T

第七話・黒き断罪の槍（後書き）

今回、誠実なはずのフレアに嘘をつかせるかどうかで悩んだんですが、犯罪者に気を使わず情けも容赦もないという点を優先するためこんなたちの悪い奴に…
悪役にしか見えないよ公務員さん（汗）

第八話・折れない心、届かない心

第八話・折れない心、届かない心

どっかの馬鹿が一人で格好つけにいったと聞いて、俺となのはは慌てて増援に向かった。

…ま、騎士は接近戦ばっかみたいだし、あんまり気にはして無かったんだけどな。

予想通り無事だったフレアだったが、何かリライヴまでその場に入った。

「リライヴちゃん！今度こそお話聞かせて貰うから！！」

なのはは宣言と共にレイジングハートをリライヴに向ける。

リライヴは呆れた様に目を細め肩を落とした。

「言ってる事とやってる事が違うと思う。」

「全くだ、少しはリライヴを見習え。戦闘に容赦は無いが殴って言う事聞かせようなんてした事無いぞ。」

「お、お兄ちゃんはどうちの味方なの!？」

俺はリライブに続く様に肩を落とす。なのはは俺に向かい抗議して来るが、残念ながら味方はいない。

「和平の使者は槍を持たない。」

「えっ?」

いつもの機嫌悪そうな目でなのはを見るヴィータ。

なのはのほうはいきなり言われた台詞の意味が分からないのか目を白黒させている。

「武器を持って話し合いに来る奴はいねえって意味だよ!寝言は構えてるもん見て言えバーカ!！」

「ば、馬鹿!？」

「いい事言うじゃんヴィータ。こいつ殴って文句言えば解決すると思ってる節があるからさあ…前例がそんなんばっかだからかも知れないけどどうにも」

「だから!お兄ちゃんはどっちの味方なの!！」

腕を振って抗議して来るなのは。両サイドの髪が一緒に上下に揺れて小動物のようだ。

思わず頭を撫で…

「何をやっているお前達は。」

「あ。」

「にゃ！？あ、わわっ！！！」

フレアから冷めた声がして手を止めると、恥ずかしかったのか赤くなったのはが俺から少し離れた。

リライブを見ればこちらを見て苦笑している。

さすがにこの状況でやるこっちゃなかったな、うん。

「仲がいいのはいいけど、そろそろ始めない？」

言いながらデバイスを構えるリライブ。
敵との問答は無用か、らしい対応だ。

「OK、それじゃ」

「リライブちゃんと一対一！止めないでねお兄ちゃん！！」

ナギハを抜こうとせずにつこけた。

こ、コイツは…このリライブ相手にまだそんな事言ってるのか…

リライブは静かに、少し瞳を細める。

「相手に認められるには、自分の全てを以て認めて貰うしか無く、
保護者の速人が手伝っては話など聞かせて貰えない。」

「えっ…あ、うん。」

リライブの静かな言葉に頷くのは。

こいつ…まさかとは思ったがこのリライブ相手にまでそんな事考えてやがったか。

「一途で綺麗な気持ちは嫌いじゃない。けど…私は貴女がなんであ
れ別にいいの。話なんてする気は無いよ、例え貴女が私に勝ったか
らって。それとも、拷問にでもかける？」

「そっ…そんな事っ！！」

「力付くで無理やり出来る事は壁を壊す事だけ。それでいいと思ってる君に話す事は無いよ。」

折れないとは思ってたけど、本当に俺達と変わらない年の人間の思考じゃないな。

なのはリライブの宣告に少しだけ俯いて…決意を固めた瞳をリライブに向けた。

「壁を壊す事しかできないなら…リライブちゃんの拒絶を打ち壊してみせる。私は絶対に諦めないから！」

真っ直ぐな瞳で言い切るなのは。

あー…だめだ、こりゃ言っても聞かんわ。

リライブは少し驚きを見せて、微笑む。

「速人も大変だね。」

「だから！なんでなのはに言葉を返してくれないの!？」

「ゴメンゴメン、さっきから君の言葉を聞くたびに複雑そうな表情を浮かべてるからさ。」

リライブはそういつて笑う。

顔に出ていたんだろうか？だとしたら俺の戦闘方法的には致命的だなあ…ポーカーフェイスポーカーフェイス…

「…フレアさん、私と一緒にリライヴちゃんと戦ってくれないませんか？」

「へっ？」

「何？」

折角取り繕おうとしたのに、整える間も無くなのはがそんな事を言い出した。

反抗期？あ、目から汗が…

S i d e 〱 高町なのは

分かったた、リライヴちゃんが一人で戦える相手じゃないなんて。それでも、皆でよってたかって困んで何もさせないように戦ってたあの状況で、誰かと話すなんて間違ってる。そう思ったから一対一で戦いたかったんだけど…

どうやら、そういう問題でさえないようだった。

きっとリライヴちゃんは何を言っても話してくれないだろう。何し

る自分の事を話すかどうかを躊躇うと言うより、話そのものをする気が無いみたいだから。

そしてもう一つ…速人お兄ちゃん。

きつとなのはが『助けて』って言わなくても助けてくれるだろう。けど、そんなお兄ちゃんに頼っていたら、きつと何も出来なくなる。手伝うと決めて今ここにいる。我俣を通すのもお兄ちゃんに抱えられっぱなしなのもやめないと。

だから、フレアさんと一緒に戦う。

「私の方はかまわない、赤い少女も子供とは言えベルカの騎士、止める者は必要だろう。」

「子供じゃねー！！！」

フレアさんが承諾してくれて、後はお兄ちゃんだけ。

お兄ちゃんは少しだけ考え込むようにした後…笑みを返してくれた。

「…しょうがないか、そこまでやりたきや思いつきりやって来い！」
「うん！！！」

きつと、私が戦う事を認めてくれてるわけじゃなくて、いざとなったら何とかすればいいって考えて許可してくれたんだと思う。だから、とりあえずお兄ちゃんから卒業するためにも…

心配かけないように勝ってみせる……！

「それじゃ……行ってみようか。」

静かに告げるリライヴちゃんに向かってフレアさんが飛び出して、戦闘が始まった。

「ふっ……！」

リライヴちゃんの透明な剣を『流す』フレアさん。その動作からそのまま攻撃に繋がった一閃に辛うじて反応したリライヴちゃんは紙一重でフレアさんの一閃を避ける。

「アクセルシューター……シュート……！」

「っ……嫌なタイミングで撃つね。」

眩きながらも私のシューターはリライヴちゃんの放った見えないシューターに打ち消される。

リライヴちゃんはあるを残したまま戦うから魔法発動としての感知が殆ど利かない。

対処に思い悩んでいた私だったけど……

フレアさんが何も無い空間を薙ぐと、リライヴちゃんが眉を顰めた。

シューターを壊したのかな？だとしたら凄い。殆ど見えない上に私やフェイトちゃんの射撃より速いのに。

「なるほどね：半年間速人の真似事したんだ。」

「そこまで分かっているなら諦める、接近戦で私に勝つ事は不可能だ。」

「遠距離なら勝てそうだけど？」

リライヴちゃんは言いながら私を見て笑う。

なのはだつて毎日魔法戦の訓練して来たのに：ちょっと怒ったかも。

「デイバインバスター!!!」

「そんな馬鹿正直な砲撃じゃ」

「バーストツ!!!」

直線上に放たれた砲撃を避けたリライヴちゃんだったが、爆発した魔力に飲み込まれた。

デイバインバスターバースト。放った砲撃の魔力を爆発力に変えて周囲の敵を巻き込むバリエーション。躲されても魔力ダメージを与えられるように考えた技。

たとえ防御魔法で防ぎきられたとしても、外すよりは余程いい。

展開した防御魔法を消したりリライヴちゃんは、冷めた目で私を見て来た。

「：清々しいくらいにためらい無く、えげつない攻撃するよね君は。」

「にゃ！？ひ、酷い！全部避けたり防いだりするから頑張つて当てようとしているだけなのに！！お兄ちゃんだつてこれ初めてで完全回避したし！-!」

リライヴちゃんに溜息を吐かれて言い返す。
私の言葉を聞くと、リライヴちゃんはお兄ちゃんを横目で見て苦笑
いする。

「和んでいる場合か!?!」

「あ!?!ごめんなさい!?!」

と、フレアさんが怒声を放つと共にリライヴちゃんに黒い光を放つ
槍を振るう。

二、三回斬り結んだ後、リライヴちゃんはフレアさんの槍を離れて
回避する。

「っ…やり辛い、それが『武芸』って奴だね。」

「芸ではないがな、知っているのか?」

「市販の本に速人がやってるようなレベルまで載ってるかは分から
ないけど、触りくらいなら読んだよ。これは真面目に習得した方が
いいかもね。」

クロスレンジはフレアさんの方が有利みたい。

なら…やっぱり距離を離さないようにするしかない。

「足止めします!?!」

「任せる。」

静かにそれ一言だけ残してリライヴちゃんに向かうフレアさん。
私は複数のシューターを精製して、リライヴちゃんに向かって放つ
た。

S I D E O U T

第八話・折れない心、届かない心（後書き）

展開だいぶ変わってますが：人が増えてそのままって言うのもどうかと思うので出来ればご容赦を（汗

デイベインバスターバースト

放った砲撃の魔力を爆発させ、速人のような紙一重避けをしたものを巻き込むために考えた追加攻撃。

ちなみに、速人は爆発の瞬間にあわせて跳躍＋風による姿勢制御にて完全回避してます。

それにしても、なのはの攻撃に爆発系が増えている。

…砲『爆』撃魔導師：本編より物騒な気が…

第九話・出会いがくれた強さ

第九話・出会いがくれた強さ

S i d e 〱 シグナム

「やられたな…この結界、容易には破壊出来んぞ。」

「うむ…」

私とザフィーラは管理局によって展開された結界に囚われていた。かなりの人数で展開されているそれは、破る事も抜ける事も容易ではなさそうだった。

それに…

「貴方達を拘束します。」

「そう言う訳でね、おとなしくして貰うよ。」

目の前に浮かぶ魔導師とその使い魔は、間違いなく強敵だ。

負ける訳にはいかない戦い故に一切の加減は出来ない。最悪…

「クロノ、あの人達と一対一で戦わせてくれないかな。」

「フエイト？」

物騒な思考をせざるを得なかった私の前で魔導師は確かに言った。

一対一と。

「わかった、僕はリライブを警戒しておく。無茶はしないでくれよ。」

「ありがとうクロノ。」

黒衣の魔導師が結界を離れ、後に残ったのは金色の髪をなびかせた少女と彼女の使い魔のみ。

魔導師としての実力に年齢や容姿など関係はない。とは言え、近年の弛んだ騎士の中には男ですら実力者に怯えるような軟弱者がいると言っのに…

彼女は強い、それが良く理解出来た。

しかしだからと言って負けてやる訳にもいかない。

「ザフィーラ、使い魔を頼めるか？」

「ああ。」

向かい合う私と少女。

全く、主にはつくづく感謝せねばならんな。我ら守護騎士に幸福を授けてくれただけでなく…

幾多の強者と巡り合う機会をくれたのだから。

次の瞬間、私は少女と激突した。

S i d e } フェイト II テスタロッサ

斬り結んで分かった事がある。

一つ カートリッジシステム云々を除いても彼女の方が強い事。
一つ 彼女が魔導師とは違う戦いをする騎士である事

一つ それでも晶さんや速人のような技術を持っていない事

「はあああっ！！！」

「はあっ！！！」

バルディッシュを一閃。打ち合わさった衝撃に耐え切れず私の体が押し返される。

「フォトンランサー…ファイア！！」

「はっ！！」

逆らわずに下がったの射撃魔法は、一閃の刃に消された。

やっぱり、線と化する事で威力を高めた刃には、普通の射撃じゃ通じない。

「なら…速さしかない。」

元々それでいくしかない。だから…やる！！

『ソニックムーヴ。』

バルディッシュを振れないような態勢になりつつ彼女の『前』に移動する。

「血迷ったか!!」

彼女が剣を振れば当たる距離。だから…振らない筈が無い。

それが狙い!!

「ふっ!!」

「っ!!」

短く息を吐いて間合いを詰めながら左手を突き出す。顔に当たって視界を防げた。

振り上げた彼女の腕の間に腕を伸ばす形になっているため、彼女は振り上げた剣を振り下ろす事が出来ない。

ここだ!!!

「はあっ!!」

私はバルディッシュから伸びる魔力刃を振り抜いた。

素早い攻撃から必殺の一撃へ。

まだ晶さんのように綺麗にはいかないけど、知ってるだけでも全然

違う。

「おおおっ！！」

「あぐっ…」

けれど、彼女が咄嗟に放った蹴りで吹き飛ばされてしまった。

やはり、そう簡単にはいかないか。

けど掠めたみたいでバリアジャケットが裂けていた。

…手応えはあった、ちゃんと練習しよう。

「私は烈火の将、シグナム。お前の名は？」

「時空管理局嘱託魔導師、フェイト＝テストロッサ。」

名を聞かれて答えを返す。

なのはと交した友達の始まりとは違う、嬉しいような重いような気持ちを感じる。

多分…名前を聞くだけの価値がある敵だと認めてくれたと言う事。

ここから先に加減はない筈、もっと集中しないと。

少しの間を置いて、私と彼女…シグナムは再び斬り結んだ。

S i d e 〉 アルフ

アタシは目の前の守護獣を名乗る馬鹿と殴り合いを繰り返していた。

「あんたさあつ！こんな事してて本気でいいと思ってるのかい！？」
「善行でない事など百も承知している！それでも主の為に成さねばならぬ事があるのだ！！」

信じられないほど固い防御。あの鬼婆ですらこんなに強くなかった。けど…

「はっ…主のためにねえ…各地で暴れまわるようなやばい事望む奴って事かい？」

「主は蒐集活動の事を知らんだ！コレはわれらの独断だ！」

話を聞けば聞くほど…アタシがこいつに負ける気はしなくなってきた。

「お前とて主を持つ身ならば分かるだろう！主のために、何を置いてでも成さねばならぬ事が」

「っざけんじゃないよ…！！！！！」

喋っているそいつの横っ面に拳を叩き込む。

意外そうに目を開く男。

やっぱりこいつに負ける気はしない。

「アンタさあ…自分で言ったよね？主は蒐集活動の事を知らないってさ。それって要するに、『知ったら止める』って事だろ？どこが主の望みなんだい？」

「主命に背いてでも主のために成さねばならぬ事が」「それが犯罪かい！！このなまくら犬が！！！」

拳を二、三撃ち合わせた所で蹴りが飛んでくる。頬を直撃したそれはアタシを思いつきり吹っ飛ばした。

とてつもなく重い一撃。意識が根っこから吹き飛ばされそうになつて…

Side〜フエイト〓テストタロツサ

「ハア…ッ…！」

「おおおっ…！！」

横薙ぎに振るった大剣と打ち下ろされた彼女の剣が大きな音を立てて衝突する。

手に走る痺れを無視して距離を取り直す。

私がヒットアンドアウェイ、シグナムがそれに対応する。さっきからこの繰り返しだった。

埒が明かない。

けど、私には彼女を無理やり破るような力はないし、牽制の射撃は全くと言っていいほど通じない。

このまま続けていたらきつと戦闘経験の豊富な彼女の方が有利になる。

「レヴァンティン！」

『シユランゲフォルム。』

考えている私の前で、シグナムはレヴァンティンの形状を変化させた。

あれは…あの速人でさえ接近するのに手間取った蛇剣！？

「死にたくなければ、上手く避けてみる！」

複雑怪奇な軌道を描いて迫ってくる剣。

思いつきり距離を取る事に集中すれば逃げられない事はないけれど、私が彼女を捕らえに来ているのに背を向けて逃げるなんて何の意味もない。

離れたところでアルフが一人残されるだけになってしまう。

…破れなきゃ彼女には勝てない。だったら…逃げずに立ち向かうしかない。

間違いなく完全に避けるのは無理だろう。だけど…

私に幸せをくれた二人を思い出す。
フェイトに未来をくれた馬鹿兄妹を思い出す。

幸せに過ごして来た素人だったはずなのに曇る事もない瞳で私に向かい続けてきてくれた最初の友達、なのは。
どう考えても明らかに魔法技術で上回ってるフェイトに対して怯える事もなく立ち向かってきた妹、なのは。

誰もが諦める程絶望的な状況から母さんとアリシアまで救い出すために命を賭けた私の家族の恩人、速人。
どう考えたってやるはずのない虚数空間への飛び込みなんて馬鹿な真似を当たり前のようにして見せた兄、速人。

あの二人が…いつ諦めた？

「はあああああつ！！！！」

「つりやあああああつ！！！！」

直撃以外は全て無視して全速力でシグナムへ向かう。
揺れる頭を無視して全力で拳を握り馬鹿犬へ向かう。

「こんな所で死ねない！自分のことに溺れて何も見えなかった私を救ってくれた友達のためにも！救われない事を誰より悲しむ優しい人のためにも！！」

「正攻法がまかり通らないって初めから諦めてるだけの癖に！何が

主のためにだ！犯罪者に成り下がったアンタらを見て喜べって主に
言うつもりかい！！」

体の節々が切り裂かれて血が流れるのが分かる。けど…速人はこの
程度の事なら訓練ですら止まらなかった！
振るった拳が尋常じゃない強度のシールドに遮られる。だからって
…飛べないくせにアタシを捌ききった奴だっているのにこんな程度
！！

「貴女達を止めてみせる！！」
「寝ぼけんなこの馬鹿犬が！！」

私の剣が…
あたしの拳が…

眼前の守護者を吹き飛ばした。

第九話・出会いがくれた強さ（後書き）

二人同時パート。

ちよっと無理があるなーと思いつつ、別々の場所で同じものを思い浮かべらって言うのをやりたくてやってみました。

けどやっぱり無理があるように感じるので今後も使うかは不明。

第十話・新たな『敵』

第十話・新たな『敵』

Side〜リンディ!!ハラウオン

「うわぁ…かなり怪我してるよ、フェイトちゃん大丈夫かなあ？」
「戻ってきたら無茶をしないように言わないと駄目かしらね。」

モニターに映る傷だらけの姿に少し溜息が漏れる。
あまり無茶な事はしないで欲しいのだけれど、見たところ顔や頭を避けている。

急所を避けての突撃、文句なしでAAAの判定を受けた彼女ですら賭けのような真似をしなければならぬ相手と言う事。

ほぼ単独で局員まで襲う実力は伊達ではないってところかしらね…

「エイミィ、フレア空尉の方はどうなってるかしら？」

「順調ですね。なのはちゃんとフレア空尉が組んでリライヴちゃんと戦ってますけど、近接戦闘でフレア空尉がわずかに上回っていて

片手間の遠距離戦じゃないのはちゃんについて行くのがやっとみたい
です。ただ…」

なのはさん達の方は順調かと思われたのだけれど、続きの言葉を濁
すエイミー。

あの速人さんに何かあったのかしら？とてもそうは思えないのだけ
ど…

「速人君が…ちょっとポリシーに反するみたいで…」

言いながらエイミーが指したモニターには、一定距離を維持する感
じで赤い少女を追う速人さんの姿があった。

「…優しすぎるのも考え物ね。」

私は溜息を吐き、エイミーは苦笑する。

けれど、コレが彼の戦いだと知っている私達は、誰一人それを咎め
る事ができなかった。

S i d e 〱 シヤマル

「どつしどつ…このままじゃ二人が…」

闇の書を手にしたまま遠巻きに様子を伺っているけど…

ただでさえ多人数に囲まれているのに、中の二人相手にさえ互角の戦いを強いられる。このままじゃいくら二人でも…

「結界を破れば…けど…」

手元の闇の書を見る。この力を使えば結界くらい間違いなく破る事が出来る。

だけど…それはページの消費を意味する。

リライヴちゃんの協力もあって後少して完成するのに…

「やはりいたな、闇の書本体にサポート役。」

「っ！あっ！！！」

いきなり声を掛けられ青いバインドによって拘束される。

しまった！戦線を離れた黒い魔導師の事を忘れていた！

「抵抗しなければこれ以上何もしない、おとなしくっ！！！」

言いかけた黒い魔導師が唐突に飛び退く。

何が起こったのかもよく分からない内に私のバインドが砕かれた。動けるようになって周囲を見渡すと、仮面をつけた男が側にいた。彼が私のバインドを？でも何のために…

「使え。」

「えっ？」

「減ったページはまた増やせばいい。仲間が捕まってからでは遅いだろう。」

彼は闇の書を指していた。

何故知っているのかは分からないが、彼の言う通りだ。

さっき一撃当たってから、二人とも押されて来ている。

「させるか!!」

「お前の相手は私だ。」

「く…っ！」

黒い魔導師の足止めをしてきている間に私は闇の書を開く。

「ごめんなさい皆、闇の書の力…使います!!」

S I D E
O U T

しかしアイツ絶対方向性間違えてるよな…敵とは言えやる事が惨過ぎる。

俺はなのはの様子を見ながらそんな事を考えていた。

「てめえ…余所見してんじゃねえよ！」

鉄球を打ち放って来るヴィータ。俺はそれをなのは達を見たまま切り払う。

「そんな事言ってもさあ…さっきから思いっきり逃げ回ってばっかじゃん。賢いと言えば賢いけど、やる気は削げる。」

「だったら…そこ動くなあっ！！！」

ひたすらに鉄球を撃って来るヴィータ。

タイミングをはかってそれらを切り払いつつ近付いてみる。

俺との距離が詰まる前にヴィータは全力で距離をとる。

さっきからずっとこの調子だ。騎士として悔しいだろうに…余程俺と接近戦やりたくないんだな。

「OKわかった、そこまで近付くのが嫌ならその戦い方によってやろう。」

「なんだと？」

遠距離戦が出来ないと思っていたらしく驚くヴィータ。

ま、確かに出来るって程じゃないが…

『プットアウト』

「サンキューナギハ。」

ナギハから放り出された束を受けとる。

飛針の束。

戦闘中に使うには何処かに仕込んでおくのが普通なんだけど、デバイスって便利だよなあ。

「投弾丸『スローバレット』。」

変換資質、風を使い加速させた投擲技。

空気抵抗のほぼ全てを殺した上で回転により貫通力を増している。

俺が投げ放ったソレは、寸分変わらずヴィータの被る帽子の兎に突き刺さった。

一応バリアジャケットも抜けるんだな、よしよし。

「て、てめえ…なんで今アタシを狙わなかった!？」

俺が結果に満足していると、ヴィータが怒っていた。

「いや、痛いだろ?当たったら。」

「は…あ!?!馬鹿にしてんのか!?!」

「そんな事無いって。」

「どうやら舐められたとか思ったらしい。」

「別に馬鹿にしてる気は無いんだけどなあ…」

「何で追って来る割にこんな」

「話が聞ければOKだからさ、俺としては。もしお前達が悪事大好きな犯罪者ならサクツと片付けるところだが、訳アリだろ？」

俺の言葉に苦い表情を浮かべるヴィータ。

「悪意が無い事くらいは分かってくれてるんだろ？」

「とはいえ…ヒーローとしては罪も無い人を襲って回るのをはいと言いつ訳にはいかないんだがな。」

「だったら本気で来いよ、逃がしたらまた」

「小さい女の子に怪我させる趣味もないんだなこれが。で、困ってる。」

両手を上げて力なく笑う俺に、ヴィータは相変わらず不機嫌そうな表情で俺を睨み付けている。

「魔力が必要なんだろ？ やってもいいが、目的くらい話せないか？」

俺の言葉に目を見開くヴィータ。

「管理局側にいる人間に言われるセリフじゃねえもんな。」

「少しは話を聞いてくれそうかなと思った。」

「が…」

『構うな速人！ ある程度の話は聞いてある！』

フレアから意外な念話が入る。

『は？お前が話を？』

『今回の主は魔導に関わっていない一般人、しかも彼女達が事件を起こしている事を知らないらしい。四人も見知らぬ住人が増えた一般人が何の足跡もなく暮らせる筈がない、すぐにでも発見出来るだろう。』

妙だ。

こんな話をペラペラしてくれる程警戒が解けていたとは思えない。ましてこのフレア、状況にもよるが敵は基本容赦なく撃墜、捕縛するタイプ。

そんなフレアが…話？

『お前…何した？』

『虚偽を混ぜた挑発をして話を引きずり出したただけだ。』

思ったとおりと言うか思った以上にぶっ飛んだ回答が帰ってきた。

「ただだ。じゃねえだろこの大馬鹿！！！」

予想を一回り上回る馬鹿な発言に思わず怒鳴っていた。
俺の声に振り向くのはトリライヴ。
フレアもリライヴを警戒しつつ俺に視線を移す。

「っだあっ!」

完全に余所見をしたと思ったらしいヴィータが鉄球を撃って来る。
俺はそれに視線を移し…

『マスター!やめ』

ナギハの声に答えずその一撃を受けた。

即頭部の骨がひび割れたのが感触で分かる。裂けた傷口から血が溢れ出して来た。

幾らバリアジャケット装備とは言え直撃はまずかつたらしい。

「お兄ちゃん!!?」

「な、何で避けねえんだよ!?!」

撃ったヴィータすら声が震えていた。あー…結構ヤバい見た目なん

だろうな。

「フレアに騙されたんだってな？わるいなヴィータ…」

「な…につ？アタシが？」

「どっちが大馬鹿だ！それでワザワザ受けたのか！？」

フレアの声がする。ち…視界が危うくなって来たか。

フレアの考えは分かる。アイツは間違っても人を騙して喜ぶ人間じゃない。

事件を終わらせて、犯罪者をためらいなく捕らえる。

それはアイツの言う無辜の民を守るだけでなく、犯罪者の罪状を極限まで軽くした上でその願いを早急に知る事が出来る、アイツにとって唯一の方法。

しかもアイツは自分への悪印象は気にもしてない。だからそんな事したんだろうが…

「やっぱダメだよそりゃ…多くの命を救えたって怒りと疑心暗鬼を抱えたままじゃダメだろ。だから…」

言い終わる前に、俺の胸から腕が生えていた。

新手…認識したところで抗う力も無く、俺は意識を手放した。

S i d e 高町なのは

「速人お兄ちゃん!?!」

突然現れた仮面をつけた男の人にリンカーコアを抜き出され魔力を奪われるお兄ちゃん。

お兄ちゃんの馬鹿!意地張ってあんな意味ない怪我してなかったら気付けた筈なのに!

「奪え、闇の書を完成させるのだろう?」

「させない!?!」

お兄ちゃんの魔力を持ったままヴィータちゃんに近付こうとする仮面の人に、レイジングハートを構え…

「魔力ダメージや衝撃だけでも…死ぬぞ?」

「あつ…」

頭から凄い量の血を流すお兄ちゃんを盾にされ何も出来なくなる。完全に意識を失ってる…

「う…うあああああつ!?!?!」

ヴィータちゃんは何かを振り切るように叫ぶと、お兄ちゃんの魔力を奪って転移魔法を使う。

それを確認した仮面の方は、お兄ちゃんを私の方に投げ放って転移してしまった。先に転移を始めたヴィータちゃんがまだ残ってるのに…

「ヴィータ！私はアイツを追う！このタイミングで闇の書に近づく奴がまともな筈がない！！」

言い終わる前にリライヴちゃんの足下に魔法陣が展開する。お兄ちゃんを抱えた私は何も出来ずに二人が消えるのを見送って…

リライヴちゃんが消えた後を、フレアさんの一閃が凪いだ。

S i d e 〱 リライヴ

「追って来たか。」

「当たり前、逃がす訳ないよ。」

さすがに素直に帰る訳もなく、無人世界を二、三転移したところで追いついた。

仮面の男は静かに私を見据える。

「それなりに出来るみたいだけど、逃げられると思っつ？」

私の言葉を聞いて鼻で笑う男。

「犯罪者を捕らえに来るか、管理局気取りだな。」

「冗談、あなたと一緒にしないで貰える？」

息を呑む男。ふん…半分勘で言っただけで見たけどどうやら当たりみたいだ。

「隠せると思った？闇の書について知っていて、物凄くいいタイミングで奇襲かけて来て、おまけに外部の人間が調査してるような気配もない。こんな事全部出来るの局長くらいでしょ？」

「…やはり、野放しには出来んようだな。」

静かに構える男。

人様を守るべき管理局員が奇襲で魔力を奪うとはまた随分笑えない事をする。

そっちがその気なら、こっちだって容赦はしない。

「野放しにする気が無いのはこっちの方だ、お前達みたいなもの為に、あの娘の笑顔は絶対に奪わせない！！」

私はいつも通り魔力によって剣を形成し、眼前の男に斬りかかった。

一閃。

振り下ろしたそれを避けた男は、蹴りを繰り出して来る。

私はそれを咄嗟に構えた剣で防ぐ。

けど…抑えきれずにそのまま吹き飛ばされた。

つち…さすがに出来る…

とはいえ、避ける腕はともかく、私を吹き飛ばすような高い出力なんて簡単に生み出せる訳が無い。

「強化か、全く面倒な…けど、こんな程度じゃ私は負けないよ。」
勝てる。

修行で鍛えた下地のおかげもあるが、速人達との戦闘経験が生きている。
何を使っているか知らないけど、今の私はパワー負けしたくらいでこの程度の奴に負けない。

男が急接近して来る。私は迎え撃つ為に構え…

リングバインドによって拘束された。

ロングレンジバインド!?しまったこいつら始めから

「っざけるなあっ!?!?!」

視界に映るかも微妙な距離の癖にやたらと強力なバインドを破った瞬間…

「が…っ!？」

男の拳が私のお腹に突き刺さった。

俯いた私は後頭部を強打され地面に叩き付けられた。

目の前が真っ暗で意識も点滅するようにチカチカとしている気がする。

耳からは断片しか聞き取れない会話が聞こえて来て、意識がゆっくり遠のいて行く。

…やっぱり無理があったのだろう。一人一人の力で敵対するには、組織はあまりに強過ぎる。未熟なまま焦って飛び出して来て自惚れもいい力を振るい続けた結果がこの有様。情けないにも程がある。

相手は局員とは言え犯罪者、ただで済む訳も無い。

私はきつと死

『死なせるかあっ!!』

走馬灯のように一瞬だけ、チラリと速人の声が聞こえた気がした。

彼は…アリシアを救って見せて、プレシアさえ救おうと足掻いた。
どう考えたって無謀でしかない虚数空間への飛び込みなんて言う曲
芸に近い真似までして。

『全て』何て救うつもりは毛頭ない。だけど…自分の願いを『終わ
った』何て思ってしまったら、一体誰が叶えてくれるって言うんだ？

少なくとも…

彼は諦めなかった。

「は…あっ…!!」

私はダメージを無視して立ち上がる。
気絶は後だ、寝たければいつでも寝られる。だから今は…

「驚いたな、下手に動けば死ぬだけだぞ？」

強固なバインドが立ち上がった私を包む。

上等だ…

「バースト…モード…!!」

全身からの魔力放出によってバインドを吹き飛ばす。

そのまま近場にいた仮面の男を切り裂く。

必殺とも言える魔力ダメージを受けアツサリ昏倒したそいつは光に包まれ…

変身魔法が解ける。

よくよく考えれば仮面をつけるだけよりはるかに魔導師らしい変装方法だ。

「ちっ!!」

仕掛けて来たもう一人…強化した物理破壊攻撃で私を強打した方。

「はあああっ!!」

一閃。

直撃コースだった私の剣は、銀色のカードから広がる防御壁に防がれた。

なるほど、アレが力の源か。けど…関係ない！

「燕返し！！！」

「な！ぐあっ！！！」

打ち下ろしを防いだ仮面に『下から』もう一閃。股からアツサリ通過した一閃は強化分ごと根こそぎ魔力を奪い取った。

燕返し、どうあっても一撃目を避ける燕を切り裂く為の剣。

歴史書じゃ打ち方までのってなかったけど、分かった所で一朝一夕じゃどうにもならない。

けど、全身に纏った魔力を推進力に変える事が出来るバーストモードなら、『無理やり望む方向に身体を動かせば』使う事が出来る。

もつとも…望まない方向へ振り回される身体への負荷を無視すればの話だが。

「ケホツ…コホツ…こ、これは…まずい…」

吐血が治まらない、視界がブレる。

治療して休みたい所だけど、ここにいたらあの変身仮面を探しに来た局員に捕まる。

転移魔法が先…なのに…

どんどん消えて行く意識に引きずられて、魔法を使ったかどうかも分からないまま意識を失った。

S I D E O U T

第十話・新たな『敵』（後書き）

燕返して（汗）

リリースはまだ業は見ただけでまったく使えないので、本編にある
とおりバーストモードを使った力技です。
身体にかかる負荷も大きいし常用は多分しないかと…

第十一話・二人の戦線離脱

第十一話・二人の戦線離脱

S i d e 〱 クロノ 〱 ハラウオン

速人が自分から攻撃を受けて倒れた事、結界に補足した二人を逃がしてしまった事、あのフレアが人を騙した事。嫌な事続きでさすがに頭を抱えなくなった。

しかしそうも言っていない。

闇の書は絶対に発動させてはならないのだから。

「…では、敵とはいえ虚偽を以て相対した理由を教えて貰おうかしら？」

静かな…少し怒りの混じった母さんの声。ただでさえ闇の書には因縁があるのに前段階で上手くいっていた配置が何の成果もなかったのだ。

冷静なあたりは流石だが、ストレスは溜まっているだろうな…

「情報を引き出す為です、それ以外に理由はありません。」

「反省もしてないようね……」

母さんは額を押さえて俯いた。無理も無い、付き合いの長い僕も信じられない事態なんだから。

彼は無茶苦茶こそするが、違反…特に悪事をして平気な顔をしている人間じゃない。

「闇の書が相手だからか？君が気にする事じゃないだろう。」

思い当たる原因としてはこれくらいだ。

前回の闇の書事件で僕は父 クライド「ハラウオンを失っている。

彼はその時の僕を知っているし、幾度も助けられた。

だから無理して情報を集めようとしたのかと考えたのだが…

「自殺で難を逃れた者へ気を使うつもりなど私には無い。」

「何だと……」

返って来たあまりに冷たい反応に怒りを隠しきれなくなって来た。

話の雲行きが怪しくなってきた事を感じ取ったのかなのはとフェイトがフレアに視線を向ける。

怒るというよりは悲しげな二人を見たフレアは、珍しく大きな溜息を吐いた。

「…そうだな、確かにいつもより気負いがあつた事は認めよう。だが理由はクライド元提督が戦死したからではない。」

「どつという事かしら？」

母さんがあくまで怒りを隠したまま続きを促す。フレアは一拍置いて続きを話し始めた。

「問題なのは前回の闇の書事件の終わらせ方です。発動してしまった闇の書に対して何も出来なかった管理局の対応は、浸食されたクラウディアをクライド元提督ごと消滅させるという対応でした。」
「そんな…」

なのはが悲しげに呟いて俯く。

彼女は強く優しいが、犠牲を伴う戦いを顔色一つ変えずに出来るような人間じゃない。

フェイトは表情を曇らせたものの何も言わずに続きを待っている。

「彼は局員だからいい。ですが、仮に発動を止める事が出来ずに地球で発動した場合…管理局は地球ごとでも闇の書を消滅させます。」

…僕は馬鹿だった。彼が何を心配して無茶をすかなど分かり切っている事だった。

『力無き無辜の民を危険なロストロギアと凶悪な犯罪者から守る。』

これが彼の行動理念。

それ以外を無視して、たとえ自身の評価が露と消えようが一向に構

わない。

「何がどうなるうともその結末だけは許しはしない、絶対に。」

力強い宣誓をする彼に、返す言葉も無いまま少しの間をおいて会議は終了した。

S I D E
O U T

目が覚めたら…

「お兄ちゃん。」

「速人…」

二人の少女に非難の視線を向けられていた。

感情を押し殺した本気のお怒りモードなのはと涙を滲ませて嬉しそうな怒っているような視線を向けて来るフェイト。

ちよっ…何この状況！？背中が寒くて胸が痛いんですけど！？

「あー…おはよう?」

「あ、おはよう速人。」

「おはよう。じゃないの!!」

挨拶を交わして流そうかと思ったんだが、妹様の逆鱗に触れてしまったらしい。

なのはの声にはっとしたフェイトもすぐに表情を険しいものにする。

むう…流させてはくれないか。

「遊びに来てるんじゃないんだよ!? どうして避けられる攻撃を受けるの!!」

「そりやお前…フレアが何したか聞いてる?」

「聞いた!けど怪我したって何の解決にもならないよ!死んじやっ
てたかもしれないんだよ!」

激しく正論な上、涙を堪えて怒鳴りかかって来る。

うん罪悪感酷い。

まったく、我ながらよくこんな心配かけたもんだ。

涙ながらに詰め寄って来るなのはの肩を抱き寄せる。

「にゃ！？わわ…」

「悪かったな、心配かけて…」

なのはにヤクザの指詰めとか昔の切腹の話をしたって理解出来ないだろうし、うまく通じたって怒るに決まってる。だったら心配かけた分、ちゃんと安心させてやらないとな。

俺はなのはの頭をゆっくり撫で

ようとしてこっちを見て来るフェイトの視線に気がついた。

なんだ？ちょっと悲しそうだけど…

「あ、あのねお兄ちゃん、なのははそろそろこつこつなのは…」

「そか？まあとにかく悪かったな。」

抱えたなのはから焦ったように窘められる。

むう…やっぱり女の子的にはあんまり男子にひつつかれたくないもんなんだろうか？

「んじゃフェイトは？」

「え、えっ!？」

物凄く驚かれた。

兄さんと違って無骨じゃ無いからそこまで引かれるとは思って無かったが…ちよつとシヨック。

「嫌なら無理にとは言わ」

「そんな事ないよ!」

言いかけた俺の言葉を力一杯否定した後ハツとして俯くフェイト。

あ、なるほど。照れてたのか。

気にする事はないと言おうとした矢先、部屋の扉が開く。

「…君が女の子を好きなのは分かったから、現状を把握するとかそういう方向に頭を働かせてくれないか？」

「ク、クロノ君!？」

「ごめんなさい…説明しなきゃいけなかったのに…」

注意されたのは俺なのに二人して驚かなくてもいいだろうに。

「詳しい話は後で聞こうと思ってたんだよ、取りあえず主力がいるって事は闇の書はまだ覚醒してないんだろ？」

「ああ。じゃあ手短かに君の現状を話そう。」

君のという前置きに違和感を感じた俺をよそに、クロノは続く一言

を告げる。

「君には本局の医療施設に行つて貰う。」

「はい？」

クロノの告げた宣告に、俺は思いつきり首を傾げた。

S i d e ー リライヴ

ぼんやりと瞳を開くと、おぼろげに白い天井が目に入った。
何で寝てるのか思い出せない。一人で世界を飛び回つて初めての経
験だった。

「う…くっ…」

ゆっくり身体を起こそうとしたが、全身に走る激痛にそれを諦める。
何があつたかを思い出して…

目を見開いた。

さすがに急に跳ね起きても激痛が走るだけなのは目に見えているので、とりあえず首だけ動かして周囲の様子を確認する。

輸血されている上点滴を打たれているが、身体に毒素のような痺れじみたものは感じない。

「あら、気が付いたのね。でもまだ寝ていた方がいいわ。」

と、扉から入ってきた銀色の長い髪をなびかせた少女に声をかけられる。

白衣を着ている所を見るとどうやら医者らしいが…この年齢で？正気？

「貴女は？」

「貴女の担当医のフィリス」矢沢よ。それよりも寝ていないと。」

目の前の女性にはまったく害意がない。それはハッキリと分かった。だがここがどこでどういう状況なのか位は分からないとこのまま眠るわけには行かない。

最悪身体がボロボロだろうが強行脱出しないと。

「ある程度分らないと安心できない…」

「うーん…そう言われると困っちゃうんだけど…」

彼女が医者ならば、患者が安心出来るようにしてくれる筈…信用しすぎるのもどうかと思うが、現状では出来る事など殆どない。

「でも仕方ないわね。森の中で血だらけで倒れているんですもの、物凄く大変な状況だったのね。ただ、話したらちゃんと寝てくださいいな。」

「すみません…」

森の中という事は少なくともそれなりに広い範囲が草原だったあの無人世界とは違う。

良かった…転移は成功していたみたいだ。

「ここは海鳴市、海鳴大学病院。貴女はこの近くの森で倒れていたのよ。」

「海鳴…ですか…分かりました、ありがとうございます。」

私は言いつつ瞳を閉じる。

朦朧とする中転移したのがよりによって皆揃ってるこの町だ何て…

あまりに馬鹿な行動だと思うが、意識のない状態で来たいと思えるような場所が出来た事が、なんだか少しだけ嬉しかった。

少しだけ休もう。ダメージが酷すぎるせいか魔力の回復もいまひとつだし、何よりも少しこの町で眠りたい。

久々に心から感じられた安らぎに促され、私はゆっくりと意識を失っていった。

S I D E O U T

「ダメージを受けた箇所が頭と言う事もあってね、本格的な検査を受けた方がいいと言う事だ。ちなみにこれは今のアースラクルーの総意ととって貰って構わない。」

クロノは言いながらなのはとフェイトも指す。

二人は深く頷いた。

あ、裏切りやがった。まあ気持ちは分かるんだが…

「おいおい、それじゃ事件に対応出来ないだろ。」

「いい加減にリライブだって捕らえて見せるさ。君は気にしないでゆっくり休んでくれ。」

再びクロノの言葉に頷くのはとフェイト。

むう…どの道このまま転移されたら俺に抵抗手段はない。…転移魔法は習得した方が良さそうだな。

「分かったよ、闇の書は頼んだぜ。」

「ああ、任せてくれ。」

クロノは気持ちよく返事を返してくれた。

やれやれ、あの時はああするしかないと思ったけど、怪我したら怪我したで不便なもんだな。

「僕からの話はそれだけだ。本局につくまでまだ時間はある、二人はそれまで話でもしているといい。」

クロノはそこまで告げると病室を出た。

「つたく…大方『大人しくしてろ』って事なんだろうが当然そんな気もないしどうするかな。」

ふと、そこまで考えて一向に話しかけてくる気配のない二人に気づく。

「どした？」

「…お兄ちゃん…怒ってる？」

遠慮がちに聞いてくるなのは。そっか、コイツは俺の方針がなんなのか昔から知ってるもんな。外したはいいが気にしてはくれてるのか。

「馬鹿だなあ、俺が困らされる事なら怒った事ないだろ？大体怒っ

てたら取り消してくれるようにでも頼んでくれるのか？」
「それは…ゴメン。」

即決で俺の要求を否定してくれるのは。

ふ、予想通りだこん畜生！！

悲しい事にいつも通りだ。

「だろ？ だったら気にするな。」

「うん。」

「んでフェイトは何で黙りこくってるのさ？」

「えっと…」

少しの間をおいて、フェイトは俺を真っ直ぐに見る。

何か強い意思を感じさせる目だ。何で今そんな目をしなきゃならぬ
いかは分らんが。

「速人が戻ってくる場所は、ちゃんと護るから。」

フェイトはそれだけ言つと一礼して部屋を出た。
何か雰囲気違つたな？

「何かあったのか？」

「フレアさんの話のときにちょっと…怖い事言われて。」

怖い事ねえ…真剣振り回す殺人剣使いの家にいてあの面子の修行風景とかも知ってるのに怖いって言うんだからそれなりの大事だろう。

「何があった？」

「闇の書が地球で発動したら、地球ごと消しちゃうかもしれないって…」

あ…って言うかそうなるだろうな。なるほど、そりゃ怖い話だ。

「リンディさん達は何も言わなかったけど…」

「もちろん必要最小限の被害になるようにはすると思っが…いざとなれば地球ごとでも撃つだろうな。」

俺の言葉に俯くのは。うすうすは嘘でない事を感じていたんだろう。

「大丈夫だ。」

「えっ？」

「そうならないためにお前や皆が頑張る。違うか？」

「あ…うん。」

少しだけ表情に明るさを取り戻すなのは。

うむ、折角なんだし元気でいてもらいたいもんだな。我が妹君には。

…兄さんに殺されたくないし。

「なに、検査が終わればこの天下無敵のスーパーヒーローが舞い戻る訳だからな、何も心配要らないさ。」

「そついう事自分で言うから不安なの。」

いつも通りに戻ってくれたのはを確認したところで、本局についてた。

検査入院か、自業自得とはいえ面倒だなまったく…

第十一話・二人の戦線離脱（後書き）

今回はちよつと出てきたフィリスさんについて。

フィリス〃矢沢

恭也等の担当をしてくれる先生。

見た目が子供っぽくて中身も子供っぽい。

夜勤を怖がって恭也についてもらったりしてた。

超能力（作中では遺伝子病）者で、同系の担当医もしている。

第十二話・予期せぬ遭遇

第十二話・予期せぬ遭遇

「さて…と。」

本局医療施設の豪華なベッドに身を預けて今後の予定を考える。

無抵抗でこの場所まで来たのには訳がある。

さすがにこのまま黙って戦線離脱する気も無い。

「気分はどうだい？速人君。」

「さすがに技術力が違いますね、これだけ身体に負担が来ないベッドは初めてですよ。」

俺は部屋に入って来たオジサンに笑顔で答える。

ギル＝グレアムさん。

クロノの親父さんと親友だったらしい彼は、人柄の良さそうな笑みを浮かべて笑う。

「確かに。市販品にはそこまで桁外れな差は無いが、動力源や最高峰の技術に関しては舌を巻くよ。車が水で走ると聞いたら地球の技術者はひっくり返るだろうね。」

「全くです。そっぴや猫姉妹さんは？」

前あつた時に使い魔とか言っていた二人がいない。

てつきりいつも着いてるもんかと思っていたが、グラムさんは少しだけ暗い表情を見せる。

何かあつたのか？

「ああ、二人なら療養中だよ。」

「療養中？何かあつたんですか？」

「少し襲われてね…君は二人より自分の心配をした方がいいんじゃないのかい？頭を怪我したというのに。」

返す言葉もない。全く以てその通りだ。

ま、検査結果も良好だし、迎えがくれればすぐにでも参戦出来るんだが。

「今後の事は聞いているかね？」

「いえ、検査結果も問題なかった事だし戻ろうかと。」

「自力では戻れないだろう。アースラが来るまでは私が君の身柄を預かるうと思っている。同郷の身だ、気にする事はない。」

誘ってくれるとはありがたい。事件からあまり離れ過ぎて知らぬ

間に何もかも終わっちゃってたら情けないにも程があるからな。

「それじゃ厄介になりますね。」

断る理由もない申し出だったので、素直に受けてついて行く事にした。

S i d e 〉 高町なのは

お兄ちゃんの検査結果の連絡があって、特に問題なかったみたい。取りあえずこれで一安心。

闇の書についてはユーノ君が無限書庫って所で調べているみたいで、幾つか分かった情報が届いた。

本当は夜天の書って言う名前だったって言う事、悪いプログラムを組み込まれたせいで災いをばらまくようになった事。

守護騎士プログラム…って言って、書と主を守るプログラムが彼女達…ヴィータちゃんやシグナムさんの正体である事。

前の戦い以来彼女達を追いきれていない上、お兄ちゃんやクロノ君を襲った仮面の人の事も全く分かっていない。

大変な時なんだけど…

そこはそれ。皆といえる時はやっぱり普通の小学生に戻ろうと思いません。

「八神はやてちゃんかあ。」

私達…私とフェイトちゃんとアリサちゃんとすずかちゃんの四人は、すずかちゃんが図書館で知り合ったって言うお友達、八神はやてちゃんの御見舞いに向かっていた。

「うん。読書とゲームが趣味で私もお姉ちゃんとも遊べたんだ。

お姉ちゃんとゲームで張り合える人は珍しいからちよつとびっくりしたよ。」

「そんなに上手なの？」

「ジャンルによるけどなのはと同じ位にね。」

アリサちゃんがちよつと悔しそうに私を見る。ゲームでは私の方がアリサちゃんよりちよつと上手。その代わりって言うとちよつと変だけど、運動はちよつとも出来ないんだからおあいこだと思う。

はやてちゃんの病室についての私達は、互いに自己紹介をする。

はやてちゃんは思っていたよりは元気に話してくれた。入院生活って…一人ってやっぱり寂しいから、早く治るといいな。

「ごめんな、折角来てくれたんにこんなんで。」

「病気で病院にいるんだから当然でしょ？遊ぶのなんて治ってからでいいじゃない。」

「あはは、そりゃそうや。」

笑い会う私達。あまり大騒ぎする訳にはいかないけど、楽しく過ごせるならそのほうがいい。

「折角やから外の話が聞きたいとか思ったんやけど…何か珍事件とかない？」

「珍事件？」

はやてちゃんの要望に首を傾げる私。当のはやてちゃんは笑みを見せて頷く。

「折角やから面白い話を聞きたいやん。あかん？」

「事件って言う程面白いお話はあんまりないかも…？」

魔法関係の事を伏せると普通の事しかしてない気がしたんだけど…

何かアリサちゃんにじっと見られていた。

えっと…何と言うか…嫌な予感？

「アリサ、何でなのはをじっと見てるの？」

「あ、フェ、フェイトちゃん…」

やぶへびになりそうだったから触れなかったのに、フェイトちゃん

が聞いてしまった。
アリサちゃんは腕を組んで難しそうな顔をする。

「そうね、折角だからはやてにも聞いておきましょうか。なのはが正常かどうか。」

「にゃ！？せ、正常って…」

随分と酷い言い様。そう思った時点で止めておくべきだったんだと思う。

「自分のお兄さんと同じ女の子相手にイチャイチャしてるのってどうおも」

「だからそれは違うって何回言ったらいいの!？」

元々速人お兄ちゃんとの事で色々言われてたのに、最近フェイトちゃんとの事まで言われるようになって来ている。

普段はアリサちゃんは他の子が色々言うのから庇ってくれるんだけど…

「恋愛話でしかも禁断ネタかあ…ええもんもつとるやんなのはちゃん。」

「あ、ち、違うんだってば。」

「アタシもただ騒ぐだけの野次馬なら止めてあげるけどね、正直アタシが違うつて言っても説得力ないのよ。すずかはどう?」

「え?えつと…ゴメンなのはちゃん…」

「ええつ!?!」

すずかちゃんにまでフォローを断られた。

そ、そんなに変な事してない筈なのに…

「だって体育よ？体育の授業よ？ただそれだけをあんなドラマに変えるようなバカップルっぷり素じゃ出来ないわよ普通。」

「あっ……」

「う……」

私とフェイトちゃんは揃ってその時の事を思い出して俯く。

「どんな感じやったん？」

「『なのは私が守るから。』『フェイトちゃん……』って。正直そのまんま劇でやっても良かったわよあれは。」

アリスちゃんが大げさにやっている筈だけれど、台詞が変わらないせいで物凄く恥ずかしい事してた気分になる。

「いやいいのよ？仲いいのも趣味がずれてるのも。ただなのはが『普通』だと思ってナチュラルにやっちゃってるのがちょっとどうかと思うのよアタシは！」

そう言われると私が悪い気がしてくる。

実際に変にからかう人からはかなり庇ってもらってたりするし、私が悪いのかな？

そんな事を考えてフェイトちゃんを見る。

バッチリ目が合った。

慌てて俯く私達。

うう…ひよっとしてこういうのも突っ込まれる原因なの？

「おお、相思相愛やな。」

「は、はやて…」

「新婚さんみたいになっとなるよ。ま、私はそう言っんもアリや思っけど。」

はやてちゃんにまで微笑ましいと言うか生暖かい笑みを向けられる。うう…やっぱりアリサちゃんの言うとおり自重しないとダメなのかも。

「まったく…いつもこんな調子じゃからかわれてもしょうがないでしょ。」

「アリサちゃん最近なのはちゃん取られてばかりだから拗ねてるんだよね。」

「んなつ!?!」

すずかちゃんが笑いながら告げた言葉に空気が凍る。

え、えーと…

「なんや、なのはちゃん取り合って三角四角関係か。思った以上に地雷やったんやなこの話題。」

「なななな…」

「でもまあ随分楽しい話聞かせて貰たわ。」

何かこの話題に関しては色々と私が原因のようで、これからも避けられないみたい。

私はあたふたと否定するアリサちゃんを見ながら、この話題でから

かわれるのは仕方ないのかもしれないとちょっとだけ諦めかけていた。

あの後、私とフェイトちゃんは、はやてちゃんの病室に残ったすずかちゃん、アリサちゃんと別れた。

私とフェイトちゃんは並んで病院を歩く。

「本当に良くなるといいね、はやて。」

「そうなった時に楽しく過ごせるように、私達も頑張らないと…だね。」

すずかちゃん、アリサちゃんと分かれたのは、魔法関係の知り合いな上目が覚めたらどうなるかも決まっていらないアリシアちゃんに会いに行くから。

病院でも秘密みたいでフィリス先生とじゃないと会いに行けないって速人お兄ちゃんが言ってた。

だからフィリス先生を探しているんだけど…

「あ、なのは、あの方は？長い銀髪だけど。」

あつた事のないフェイトちゃんにフィリス先生を探してもらう為の特徴。患者さんと話しているみたいで、ちょっとお話するのがまずいかなと思い、近くの椅子に腰掛ける事にした。
私達が来ていた事には気付いていたのか振り返るフィリス先生。

けど、それ所じゃなかった。

リライヴちゃんがいた。

フィリス先生が振り返って見えるようになった先にいる、フィリス先生とお話していたのがリライヴちゃんだった。

「あら？なのはちゃん。…どうしたの？」

「えっ？あ、その…」

フィリス先生に話しかけられてもどうすればいいのか分からない。捕まえようと思ってた人が病院で患者さんになってるんだから。

「知り合いなんです。と言っても、外で時々バツタリあってるだけなので入院しているのが意外だったんでしよう。」

「あ、そうなの。」

「私がここにいるのは知らなかった筈だから先生に用があったんじゃないですか？」

人事のようにサラリと流すリライヴちゃん。何であんなに冷静なんだろう…

「アリシアちゃんに会いたいですけど…」

「分かった、準備してくるからちよつと待っててね。」

そう言うとフィリス先生は部屋を出て行ってしまった。残されたのは私とフェイトちゃんと…リライヴちゃん。

良く見ると酷い状態だった。点滴と輸血を同時に受けていて、顔色も悪い。

「捕まえる？」
「それは…」

絶対に体調がいいとは言えない筈なのにいつも通りに涼しげな顔をしようとするリライヴちゃん。
あまりに酷い状態、捕まえる何て状態じゃない。

「時空管理局囑託魔導師、フェイト!! テスタロッサ。貴女を拘束し」
「だ、ダメだよ! あっ…」

私は思わず止めてしまって俯く。

お仕事ならフェイトちゃんの方が普通なんだよね。

リライヴちゃんは私達を見ながら一息吐いて苦笑いする。

「まあどっちでもいいけど、捕らえるなら結界展開してからの方がいいかな。」
「う…」

確かに正しいリライヴちゃん言葉に表情を歪めるフェイトちゃん。
リライヴちゃん、こんな状況でも余裕あるなあ。

「…分かった、今は何もしない。」
「ありがとうフェイト。お礼に言う程いい情報じゃないけど少し伝えておきたい事がある。」

と、意外にもリライヴちゃんから話かけてくれた。
それだけ重要な事だと思って真剣に耳を傾けて…

「お待たせ、面会の許可を…ってもう！また無理してる！！」
「あ、これはその…」

戻って来たフィリス先生に、話していただけで無茶って言われるリライヴちゃん。

はやてちゃんと同じ入院患者でも話していただけで身体を起こしてすらいないのにここまで言われるなんて…

「あの…リライヴちゃんどれくらい酷いんですか？」

「具体的なお話はご家族以外に出来ないんだけど…」

そう言われればそうだろう。いきなりじゃ人の病気のお話なんて聞ける筈がない。

「問題ないですよ、自分で話すより楽です。」

「またそんな事…もう…」

リライヴちゃんの許可が出たからフィリス先生は少し真剣な表情を私達に向ける。

「頭とお腹を怪我しててね、手術までしたの。ご飯も食べられない状態だから点滴を打ってるのに…話したら傷が開いちゃいますよ？」

想像していたよりとっても酷い状態みたい。

リライヴちゃんが怪我をしてたって言う事は、あの仮面の人にやられたんだろう。

『フィリス先生がいるんじゃないから念話で伝えるね。』

と、リライヴちゃんから念話が届く。フェイトちゃんにアイコンタクトを取ると小さく頷いてくれた。

表向きは眠ったフリをするリライヴちゃん。

私達はアリシアちゃんの部屋へ案内されながら念話を聞いた。

『まずあの仮面男だけど、変身魔法を使ってる。』

『変身魔法!?!』

仮面で顔を隠していたから気をとられていた。素顔を考えてばかりで変身魔法を使ってるなんて思いもしなかった。

『性別もアテにならないと思う。元の姿はハッキリ覚えておけるだけの余裕がなかった。ごめん。』

『無理もないよそんな怪我じゃ...』

『そうだよ、無事でよかった。』

心配そうなフェイトちゃんに同意する。

あんな怪我で追跡を振り切ってこの世界に飛んできたんだ、そんな状態で周囲の事まで把握しきれぬわけがない。

『それで、アイツら始めから二人いる。同じ姿に変身してるけどロングレンジとクロスレンジで得意分野が全く別。』

『二人...そっかそれで...』

フェイトちゃんのいた所でクロノ君と戦ってかなりの速さで私達の所に現れたから、物凄い腕の魔導師なのかって考えてたけど、それならわかる。

そこまではよかったんだけど...

『それと…アイツら多分管理局員だ。』
『えっ?』

何を言っているのか分からなかった。
だってそう言う犯罪者を止める為に頑張ってるのに、局員さんがその犯罪者だって言うんだから。

『そんな事…』
『私が信じられないなら仕方無い、一応敵だし。けど執務官やフレアなら察してくれるかもね。』

意外にも真面目な二人を指してそう言うリライブちゃん。二人を疑ってる訳ないし…どっちにしてもリライブちゃんがいた事は報告しなきゃ行けないからその時に言おう。

そう考えていたんだけど…

『さてと…それじゃ私はこれで失礼するね。』
『あ、うん。ゆっくり休んで え?』

一瞬意味が分からなかった。
けど次の瞬間に転移魔法の反応を感じ その意味を悟った。

「なっ…」

「嘘っ!?!」

「どうしたの二人共?」

「え、あ、その…」

フィリス先生がいる中揃って反応してしまつて不思議がられる。結局どうする事も出来ないまま、アリシアちゃんの様子を見て、戻つた時にはリライヴちゃんの姿が綺麗に消えていた。

Side〜リライヴ

『大丈夫でしょうかマスター？』

「何にも問題なし。…回復魔法使えばだけどね。」

二、三回の転移の後、私はそれなりの準備をしてある隠れ家に着く。奇襲喰らうわけにも行かないから大抵は使い捨てだけど、今回はさすがに少し休めないと厳しい。

『それにしても話してよかつたのですか？』

「問題ないよ、なのはとフェイトは純な娘だし、局内に悪い人がいるって確定すればちゃんと止めてくれる。あの執務官達だつて闇の書狙いで行動するとは思えないしね。それに…」

『高町速人に伝わるからでしょう?』

私が自分で言おうとしていた事をデバイスに、よりによって若干呆れ気味に告げられと勝手に恥ずかしくなる。

「あ、あのね、他意はないんだからね? 私が男の人が嫌いなのは知ってるでしょ?」

『他意がない方はそういう事は自分で言わないと思えますが?』
「むう……」

反論を出来ずに固まっていると、イノセントから続きを告げられる。

『ですが無理もありません、彼は貴女の願いを貴女より高い位置で叶えようとしているようですから。』

「本当に……笑っちゃうよね。その気になれば彼ら全部だって敵に回せる私だってやらないような無茶を平気でやるんだもん。」

私は言いながら持続型の回復魔法陣を展開する。

無色の光に包まれた私は、あの二人組に負けかけた時に思い出した彼の姿をもう一度思い返す。

はやてを……守護騎士をお願い。

神様でもなんでもないただの人のはずなのに、彼に祈らずにはいられなかった。

S I D E O U T

第十二話・予期せぬ遭遇（後書き）

戦線離脱した位置が位置だけに速人が何も出来ない（汗
とりあえず、『主人公なのにないつの間にか消え…』とかはないので
安心してください。

第十三話・暗躍する者達

第十三話・暗躍する者達

グラムさんに借りた一室で管理世界の雑誌などを読みながら本当にノンビリ過ごし、しばらくして…

「へえ…それじゃアイツそんな状態でどっか逃げたのか。」

連絡と言つ事で通信を繋いで来たアースラのメンバーに話を聞いていた。

海鳴大学病院で手術を受けたリライヴが転移魔法で逃走したらしい。どんな無茶しやがるんだアイツは…

『全く…せめて僕らに知らせてくれていれば捕らえられたんだが…』
「野暮な事言うなよ。点滴打ってる人間に砲撃や拘束かけられるよ
うな奴のが人としてどうかと思うぞ?」

『速人君らしいね。』

『笑い事じゃないエイミィ。あのリライヴを捕らえられたならどれだけの問題が片付いたか』

「はいはい終わり終わり！それよりもっと重要な話があんだろ?」

あんな規格外に事ある事に敵対されてちゃ管理局としては文句の一つも言いたいの分かるが、ヒーロー目指す俺に言う愚痴じゃないだろうに。

それよりもあのリライブがわざわざなのは達に話して行った事の方が気になる。

クロノも状況を考えたのか咳払い一つで表情を落ち着かせる。

『僕と君を襲った仮面の男が変身魔法を行使している二人組らしい。』

「へえ…それでお前の時と俺の時と戦闘方法違ったんだな。」

『感付いていたのか？…何でそこで笑う。』

クロノの質問が少しおかしくて笑ってしまう。

武芸…業を納めた者であれば、大概『見ただけで』相手の実力が分かる。

飛んでる上に俺が見たのは映像だったから断定は出来なかったが、違和感くらいならあった。

そんな当たり前が、魔導師のエースには常識外れなのがついおかしくなった訳だが…

『大した交戦記録も無い上に戦闘方法が全く別物だったんだぞ！？ クロスレンジやロングレンジ同士なら違いも見られるが、君の様なレアスキルは持って無い僕に分かる筈ないだろう！』

色々あってストレス溜まってただろうクロノの導火線に火がついたらしい。

クロノ、馬鹿にしたわけじゃないから落ち着いてくれ。って言うか稀少技能扱いなのな、気配探知とかって。

「あー分かってる分かってるって。カルシウム足りてるのか？」

「速人君、それは身長にも関係して来ちゃうから触れないであげてくれるかな？」

「君まで速人に合わせないでくれ！」

エイミィさんまで言わなくてもいい事をさらりと言う。

うわぁ公務回線の無駄遣い。

クロノはフレアより融通が利くがいっぱいいっぱいだからなあ…
まあ無理ないか、両親公務員で幼少期から魔法の練習じゃ…

…幼少期から魔法の練習？

はっ！まずい、なのはが！！

『なのはちゃん達に伝言とかある？』

「くれぐれもふざけて気を抜いてだらける様に言っておいてくれ！

！全力で！！！！」

『は？ええ？』

無表情＋非殺傷設定で『貴方を逮捕します』とか言ってるなのはの姿を垣間見た俺は体裁も何もかも捨ててモニターが切れるまで訴え続けた。

真面目とか努力とかの意味を一般人から大分かけ離れて…ある意味究極系で身に着けてるあのアホならやりかねん…

なのは、家みたいに小学生から修業してるのって稀な一家なんだぞ？

自分で言わなきゃしょうがないが祈らざるを得なかった。

S i d e くクロノハラウオン

「エイミィ…」

「ごめんねクロノ君。出来ればそんな怨めしげに見ないでくれると嬉しいんだけど…」

苦笑して手を合わせて来るエイミィ相手に僕は俯いて溜息を吐く。
速人といいフレアといい…ロストログアだけで精一杯なんだからこれ以上余計な心労を増やさないで欲しいが…無理だろうな。

「でも良かったの？あの事伝えなくて。」

「本局への通信で言う話じゃないだろう。」

「そうだけど…速人君その本局にいるんだよ？」

僕はあえて仮面の男の正体が管理局員である可能性があると言う話をしなかった。

エイミィの心配も分からなくはない。

彼は僕とフレアをまとめて倒すなんて真似をしたんだ。

僕は執務管だしフレアもクロスレンジ限定ならSランク相当の実力者。

そんな僕らを一人で破ったなんて知っている人間なら絶対に止めにかかる。

それに速人は魔法はほとんど使えない。

畏にでもかけられたら脱出する術はないだろう。

「問題ないさ。」

「問題ないって…どうして？」

「それが魔法でも質量兵器でも、扱うのも戦うのも人間だ。彼なら
そう簡単に負けないだろう。」

そこまで言っただけでエイミーが僕を見て微笑んでいる事に気がつく。

「なんだかんだで信用してるね。」

「…腕だけだ。中身はなのはより子供だ。」

「それは言ってる。」

笑みを浮かべるエイミーに対して僕はプレシアが亡くなった時の速
人の眼を思いだす。

喜怒哀楽全てが抜け落ちたような瞳。

組織に準拠する為に感情を殺して来た結果感情が薄くなった人間は
何度か見た事があるが、彼等はまだ人間だった。

速人の眼からは、何も感じられなかった。

デバイスの音声ですらインテリジェントデバイスなら少しは伝わる意思もあると言うのに、人の死を前に何一つ感情が無かった。

あの速人を倒せと言われたら、リライヴの相手より渋るかもしれない。
だから…恐らく心配は無いだろう。

認めるのが嫌で子供と評したが、さすがにそれは訂正しなければならぬかもしれないな。

僕はそんな事を考えながら、無人世界を監視するモニターを眺めていた。

S I D E O U T

「おつす、仕事中悪いなユーノ。」
「いや、大丈夫。」

魔法陣を複数展開したユーノが際限無く広がる本の山の中に浮いている。

はあ〜…「こつこついう事は無理だからなあ俺には。いくら戦闘出来ても魔導師に化物呼ばわりされるのはやっぱりごめんかも…」

「それで、どうしたの？わざわざ来るなんて。」

特別用がある事は見透かされていたらしい。

まあ人の仕事中に遊びに来る訳もないか。

「いやさ、闇の書と夜天の書の情報を片っ端からデータで欲しいんだけど…」

「夜天の書？聞いてると思うけどあまり記録は残ってないよ？」

ユーノが言う通り、夜天の書の方は当の昔に闇の書と化していた為、あまり明確な情報が残っていない。

「分かってるって。ただ全部見てる暇がないからって理由ではしよつた部分とかある筈だろ？後はまだ見つかってない情報。」

「それもやれって言うのか？全く…無茶ばっかり」

「温泉…」

「サーイエツサー！早急に調べあげます！…！」

ゴネてるユーノに眩きを漏らすと、弾かれた様に背筋を伸ばして敬礼する。

つてかどこで覚えたんだそれ？

「冗談はともかく頼むユーノ。それが今回全部救う鍵になりそうなんだ。」

「どつこついう事？」

俺はまだ誰にも話していない自分の考えを告げ…ユーノの悲鳴に近い叫びが響き渡った。

「た、確かに可能かもしれないけど…凄い事思い付くよね速人。」
「で、どうだ？いけそうだろ。」

ユーノは少し考え込んで、手元の書物を指す。

「どれくらい闇に浸食されてるか分からないけど、それ次第ではこっちの方が無難だと思う。」

「えっと何々…管制人格？」

「読めるの!？」

「解読はこっちの必須技術だからな、学校での睡眠時間に魔法世界の言語について睡眠学習で教わった。」

本当はモールスやら組織別の暗号通信の理解なんだが、まあ外国語だって似た様なもんだ。

「速人、君本当に何者？」

そっぴや、ちゃんと説明したのはフェイトとフレアだけだったけ？
誇れるような事でもないし進んで言いたい話でもないが。

「フェイトには話したし、機会があったら話すさ。で、これがどう

したって？」

「主がこっちに働きかける方が確実だと思う。…まあこれは闇の書が覚醒してないといけないし、主がこっちの言う事を聞いてくれるって言う前提が必要だけど。」

ユーノのセリフにニヤリと笑う。

闇の書覚醒させようなんてまた大胆発言を。

「いーけないんだーいけないんだー、クローノーにー言っつてやるー。」

「君だつて充分酷いくせに何言っつてるんだよ！それに僕はやれなんて一言も言っつてないぞ！！」

学校で他の奴が使つてた馬鹿歌抜つて見たが割と真面目に怒鳴られた。

やれやれ、こういう部分は同年代の奴と同じだな。

「はは、そう怒るなつて。ユーノが優等生っぽくない事考えたのが嬉しくてさ。」

「全く…クローノと一緒にしないでくれ。」

クローノが聞いたなら怒りそうな会話だ。

アイツはいっぱいっぴいだからストレス溜めない為にも黙つてやろう。

「でもそうか…覚醒しちまってくればその方が早いかな。」

「ただ、何度も言っつけど主が耳を貸してくれないと何の意味も無いんだけどね。」

「お前は今回の主が悪人だと思うのか？」

ユーノも守護騎士の独断行動である事は承知済みの筈。やけに心配しているので聞いて見ると、ユーノは軽く笑って俺を見る。

「慎重になっただけさ。全員無事に救えないと誰かさんが無茶するからね。」

迷いなく無限書庫に来た事といいやけに張り切ってると思ったら、どうやら俺が心配されていたらしい。

俺の事情を知らない筈なのにな…サンキュ、ユーノ。

「なに、無敵のスーパーヒーローとその他大勢のサポート役がいるんだ、うまく行かない訳ないさ。」

「またそう言う事を…だからなのはが無茶するんだよ。この前だつて…」

ユーノの時間が許す少しの間雑談を交わした後、俺は再びグラムさんに借りている部屋に戻り…

闇の書が覚醒したとの報を受けた。

…マジかよ。

第十三話・暗躍する者達（後書き）

次回は少し戻って闇の書覚醒部になります。

…色々飛ばしてるなあ（汗）

第十四話・闇の書の覚醒、終局は悲劇と共に

第十四話・闇の書の覚醒、終局は悲劇と共に

リライヴちゃんの事をすぐに言わなかったからクロノ君にちょっとだけ怒られて、何もない時間が続く。

蒐集は続いているみたいで時々魔力を失った生き物が見つかったけど…リライヴちゃん怪我してるし凄く慎重になってるみたい。

「前回片付けられなかったのが痛いな…」

「君が言う事じゃないだろうフレア。」

前回…つまりお兄ちゃんが入院する事になったあの日。

完全に捕まえられたのはあの日だけで、局長さんが張り込んでいるけど上手く逃げられてる。

「速人はまだ迎えに行かないの？」

フェイトちゃんの質問に、クロノ君は頷く事で答える。

怪我はもう大丈夫だって聞いているけど、まだ戻って来てない。

この間みたいな無茶をしたら困るからだけど、仲間外れみたいでちよっとだけ嫌な感じ。

「どちらにしろ彼は女性相手にまともに戦えないようだからね、今回みたいな怪我をされるくらいならおとなしくして貰った方がいい。」

速人お兄ちゃんはあんまり人を倒すような事をしたがらないだけなんだけど…なんか女の人に優しいと勘違いされてるみたい。

どっちにしても守護騎士さん達とは戦えないんだけど。

「所在が発覚すれば忙しくなる、なのはとフェイトはそれまではゆつくりしていてくれ。」

「ありがとうクロノ君。」

「ありがとうクロノ。」

私とフェイトちゃんにお礼を言われたクロノ君は少しだけ顔を逸らす。

「前衛の君達には戦闘時に万全でいて欲しいだけだ。他意はない。」

「照れてるね。」

「そうだね。」

「やめてくれ二人共…」

少し困った様に額を抑えるクロノ君が、なんだか新鮮で楽しかった。

折角羽を伸ばせる時間を貰ったから、という事で、急になるけどはやてちゃんのお見舞いに行く事にした。

こういう機会がいつあるかなんて分からないし、出来るだけ会っておきたいから。

「でも良かったまた来れて。」

「はやてちゃん元気だといいけど。」

先導しているすずかちゃんが扉を開いて…

「あ、お邪魔します。シャマルさん、シグナムさん、ヴィータちゃん。」

「え…」

はやてちゃんに寄り添う三人の姿に硬直した。

思いつきり動揺しちゃったけどはやてちゃんに怪しまれる訳にはいかないから何とか取り繕ったんだけど、ヴィータちゃんが物凄い形相で睨んで来るからあんまり意味がなかった。

「こらヴィータ！睨んだらあかんよ。」

「睨んでねーです。」

「にやはは…」

誤魔化すのにどうにか苦笑するしかなかった。

けどいつまでもこうしている訳にもいかないし…

「あの…シグナムさん、シャマルさん、ヴィータちゃん…少しお話しませんか？」

「いいだろう…」

私達は機会を待ってはやてちゃん達の元を離れ、屋上に向かった。

「…闇の書を覚醒させようとしていたのははやてちゃんの病気を治す為ですか？」

「ええ、そうよ。」

今更隠す事でもないから静かに答えてくれるシヤマルさん。

フエイトちゃんが進み出て質問を切り出す。

「闇の書は今願いを叶えようとする主ごと破壊をもたらすのは…」「リライヴから聞いた。話だけならば兎も角闇の書の事件の記録と被害規模まで載ったデータを見せられれば信じない訳にもいかない。」

「ならどうしてっ!!！」

訳が分からなくて叫ぶ。だって守護騎士の皆がはやてちゃんの事を死なせていいなんて思ってる筈が無いから。

「はやての病気は闇の書が原因なんだよ、魔力を蒐集したがってる闇の書を放置し続けてっから。蒐集してはやてが闇の書の主になったら、別に使わなくなっって治るか少なくとも死ななくて済むんだ。」

「主はやての友人であるお前達を討ちたくは無い、主の病が治まれば罪は償うつもりもある。出来るなら後僅か…おとなしくしておいてはくれないか？」

したくも無い筈の悪行を傷付いてまで繰り返して、はやてちゃんを守ろうとしているのが本当によく分かった。

とっても大事に…それこそきつと、もし本当に危険な事があつたらきつとこの二人は命懸けでもはやてちゃんを守り抜く。

それが本当によく分かったから…

本気で怒った。

S i d e } フェイト || テスタロッサ

私は迷っていた。

騎士まで名乗る彼女達、私達が管理局に何も言わずに無かった事
すればきつと二人ははやてが治った後に出頭してくれる。

それだけじゃない、病院で治療出来ない上に日に日に容体が悪化しているらしい

はやてが治るかどうかがかかっているんだ。

無理やり闇の書から引き剥がす方法も分からないし、管理局は発動したらクロノのお父さんごとでも撃つ。

人を襲っているとはいえ後遺症が残っている事例も無いし、このまま見逃すべきなんじゃないのか…

そんな考えに引き摺られてしまっていると、なのはが質問を投げ掛けた。

「はやてちゃんと一緒に管理局に来てくれる気はないですか？魔力を蒐集されていない人もいますからきつと闇の書の完成に必要な魔力はあります。」

名案だと思った。少し休めば治るしそれなら私はすぐにでも魔力を蒐集される気はある。何しろはやての命がかかっているんだから。

「お前達は兎も角、管理局が闇の書の完成を許可するとは思えん。」
「あ…」

でもダメだった。シグナムの言う通り、管理局が闇の書を完成させる訳が無い。

どうしよう…どうすればいいんだろう…

何も思い付かないまま考え込んでいると…

「わかりました。じゃあ少しおとなしくしてて下さい、はやてちゃんには私達が治します。」

なのはがそう言ってレイジングハートを手に取った。

…最初は分からなかった。なんでなのはがそんな事を躊躇いもなく言うのか。

ただ…一つだけ分かった事がある。

なのはは怒ってた。本当に物凄く。

「っざけんな…ふざけんなあああっ!!…はやてが元気になるんだ…必死に頑張ってきたんだ…もう後ちょっとなんだから…邪魔すんなあぁっ!!」

展開されるブースター付ハンマー。
ヴィータによって振るわれたソレはなのはが展開した防御魔法に直撃する。

カートリッジロード所がまだ起動していないレイジングハート。
そんな状態で張った防御魔法がいつまでも保つ筈が無い。そう思っていたら…

防御魔法がハンマーを受けている箇所を残して小さくなっていく。
フレアさんやリライヴが攻撃に使っている魔力集束による魔法強化だった。

「生きてれば…何でもいいの？」

「何だと？」

「家族が知らない所で人を傷付けるのも、ソレが原因で捕まって独りぼっちになるのも辛いし、何より…」

いつまでたつても破れない防御に距離を取るヴィータ。

なのはは上げていた腕を降ろしてレイジングハートを展開する。

「全部終わった後に自分の為だったって知って、『無事でよかった』って笑顔を向けられるのを見ていただけしか出来ないのがどれだけ辛いかわかってるの？」

何でなのはが怒っていたかがそこでようやく分かった。

速人が傍にいるから。

いつでもなのはの事を気にかけていただろうし、無茶な事も当たり前みたいにやってた筈だ。

と言うよりも今現在もその無茶が原因で病院にいる。

速人は多分気にもしていないんだろうけど、見ている方はそうも行かない。

なのはは、きつとずっと見ているほうだったんだ。

「…分かっているのかと聞くならば、お前達とて自身の主が死に行く様を間近で見ていると言う事がどういいう事かなど知らないだろう。所詮言葉を交わした所で無為と言う事が…」

「そんな事ありません。」

私はバルディッシュを展開する。

…私の時だつてそうだった。

敵だから意味がないって、結局戦うって言ってた私が今ここにいる。今すぐに届くかどうかは分からないけれど…届いて受け入れて貰えるかは分からないけれど…

それでも、伝える事に意味がないはずがない。

「貴女達を止めて、はやても助けて見せます。信じられないなら…想いも力も、いくらでも届くまで見せるまでです。私もそうして助けられた身ですから。」
「フエイトちゃん…」

なのはを横目にして頷く。

後はこの言葉を嘘にしないために戦うだけ。

「管理局にはやてちゃんの事を伝えられる訳には行かないわ、二人とも、お願いね。」

「ああ…もはや後には引けん、全力で行くぞ!!」

「後ちよつとではやてが治るんだ…ぜってえに負けねえ!!」

ヴィータとシグナムがデバイスを構える。

…今までとは違う、多分余力とか非殺傷とか他の事を考えない文字通りの全力。

はやての事を私達が知ってしまったから逃がす気が無いんだろう。

「少なくともこのままじゃ絶対にはやてちゃんが傷つくだけだから…全力で止めるから!」

「行きます!」

きっと戦うべき人達じゃないけれど、それでも今は負けられない。今賭けられる自身の全てを賭けてでもこの戦いに勝ってみせる。

私はそう誓って地を駆けた。

S i d e 高町なのは

私はヴィータちゃんと戦っていた。

始めて襲われた時以来、リライヴちゃんと戦ってばかりであまり強さを知らなかったけど…本当に強い。

『プロテクション・パスワード。』

「く…うつ!」

振るわれる一撃をカートリッジで強化した障壁で受け止める。

こうでもしないと止めきれないし、さっき一回だけやった魔力集束は物凄く難しい。

それに受けてから小さくしてたら間に合わない可能性があるし、小さくしたら受けられないかもしれない。

「ゴメンねヴィータちゃん。」

「あ?」

「リライヴちゃんといたときに、軽く見ちゃってたから。強いやヴィータちゃん。」

私の言葉に顔を逸らすヴィータちゃん。

「アイツと比べられたらしょーがねーよ。時間稼ぎのつもりか？」

「…そうだね、まだ戦闘中だもんね。けど、もう一っだけいいかな？」

私はレイジングハートを一度だけ降ろす。ヴィータちゃんも止まってくれた。

「私、高町なのは。私立聖祥大学付属小学校の小学三年生。友達になつてくれる気になったら…ちゃんと名前で呼んでくれると嬉しいかな。」

「…ねえよ。」

「あるよ。ちゃんと皆生きて終わるから…終わらせて見せるから！」

私はレイジングハートを構える。

これ以上は今はいい。

「アクセルシューター！シュート！！」

私は十数個のシューターを放つ。ヴィータちゃんはそれを前にして…

ハンマーを一閃して数個を弾き飛ばした後突撃してきた。

「なっ…」

「もう引いてる余裕はねえんだ！相打ちでアタシのアイゼンより威

力が高いか試して見やがれえっ!!」

咄嗟に防御魔法を展開するが、シューターの制御をしながらヴィー
タちゃんの一撃を防ぎきれぬ盾なんて張れない。

障壁が威力を殺している間にシューターを叩き込む!!

残りのシューターが殺到して…

ヴィータちゃんの背後で爆発したのが見えたと同時に吹き飛ばされ
ていた。

Side〜フエイト!! テスタロッサ

私はシグナムと何度か斬り結んで分かっていた。

普通にやってたんじゃ絶対に敵わない。

彼女は強い、本物の騎士だ。普通に戦っていたら負ける。なら…

「バルディッシュ、全開で行くよ。」

『イエス・サー。ソニックフォーム、ステインガーブレードモード。』

私は今ある全力を出す事にする。

「装甲をさらに薄くしたか…緩い攻撃でも当たれば死ぬぞ?それに

その剣は…」

私はシグナムが言うとおり、機能のすべてを速度に集中させたフォーム、ソニックフォームに換装して、二刀剣を持っていた。

移動の速さと攻撃の速さ、二つの速さに特化させる為に生まれたこの形態。

晶さんや速人の訓練を見ていなければ思いつかなかったと思うけど…

「貴女は強いから…勝つためには、全力が必要ですから。」

そう…全力。

当たれば死ぬとは言っけれど、元の防御力だっただったたら『負ける』。

だったら何の変わりもない。

私は負けられないし、負けるわけには行かない。

何よりも…そんな元々たいした能力でもなかった部分を保身のために補った所で、彼女には届かない。

「お前といい速人といい…こんな出会い方でなければ本当に心躍る戦いを見せてくれるものばかりだった…だが！我等は」

「止まらないんですよ、知っています。私もそうでしたから。」

私だっけそうだった。

いつも辛くて、それしか方法がないと思っで、犯罪にまで手を染めて。

そんな事をしなくなっで全てかなえて見せた人がいる。

だから…

「だから…『止め』ます。はやての悲劇も貴女達の涙も。これはそのため力ですから。」

私は構え、シグナムと向き合う。

すれ違いざまに一撃を叩き込む、それしか方法はない。そうになると通常機動で攻撃を仕掛けなければいけないが…

ソニックフォームなら抜ける。

「はあああつー!!」

経験、自力で上回る彼女相手に下手な小細工が通用するはずがない。

速度を生かした突撃に全てをかけて…

「だが…甘い!!」

それでもただの突撃はシグナムに完全に見切られた。

タイミングを合わせて剣が振り下ろされ…

すれ違った後、私は膝を折った。

Side 高町なのは

「く…くっそお…なんて威力だよ…っ！」

「ヴィータちゃんこそ…っ！バリアを爆発させたのにここまでダメージ受けるなんて…」

かなりのシューターを直撃したヴィータちゃんと、障壁を抜かれる前に爆発させた私では、若干私の方が余裕があった。

もつとも、それでも止まらなかったから直撃を受けてバリアジャケットのリボンが吹き飛んじやつたけど。

「まだ…ついてきてくれないよね？」

「あ、当たり前だ…」

「なら…やろっ、最後まで。」

私は胸を押さえていた手を離して構える。

ヴィータちゃんは歯を食いしばってデバイスを振り上げ…

私の身体が青いリングに包まれた。

Side〜フェイトIIテストロツサ

「私の…勝ちです。」

私は切り裂かれたする右腕を押さえ振り返る。

そこには同じように崩れ落ちているシグナムの姿があった。

すれ違いにタイミングを合わせられるとは思っていた。けど、二撃は振れない筈。

だから、一刀を盾に剣閃を逸らしてもう一刀で魔力ダメージを叩き込んだ。

確かに腕の出血は酷いけれど、それでも大幅に魔力を消耗したシグナムと違ってまだ動ける。

「く…っ、この程度の魔力ダメージで…」

「分かってます。完全に勝敗が決まるまで…止まれませんよね。」

出血はあるけど動く。私は改めて二刀を構えて…

バインドによって拘束された。

S i d e ー ヴ ィ ー タ

いきなり高町なのはが拘束されて、周囲を見渡す。

あたし達の上空に、仮面の男が無数のカードを持って浮いていた。

「てめえっ…！リライブをどうしやがった…！」

アイツがやばいって言ったのと、このタイミングで割って入ってきた事。どう考えても危険としか思えなかったアタシは、拘束されている高町なのは放っておいて仮面ヤローの撃墜に向かった。

「貴様…っ!!」

シグナムも同じだったのか飛んでくる。

いくらこいつが強かったってバインド制御しながらあたしら二人を相手に…

「だめっ！仮面の人は一人じゃないの!!」

高町なのはが叫んで…シグナムが吹っ飛ばされた。

「シ、シグナム!! てめえっ!!」

「消耗している今のお前達が我々に敵う筈もないだろう。」

アタシが振るったアイゼンはアッサリつかまれて、逆に捕まってしまうた。

「く…っそおっ!!」

「呪われたロストロギアの守護騎士…貴様らなど存在自体が『害悪』なんだよ。」

アタシはそのまま地面に叩きつけられ、シャマルとシグナムの悲鳴を聞いた所で…

消えた。

S i d e 〉高町なのは

はやてちゃんが主だった事に驚いて、ヴィータちゃんとの戦いに全力を注いでいたせいで、一番気をつけなきゃいけない人達に捕まってしまった。

「なのは…破れる?」

「ちよつとダメージ受けた胸を縛られて…痛くてあんまり集中できない…」

「私も肩に…簡単なバインドならともかくこれじゃ…」

さつきからずつとズキズキと痛みが邪魔して上手く集中できない。それでも徐々に解いてはいるけれど、私とフェイトちゃんをまとめようとしていた水晶の結界みたいなのがとても丈夫な上私たち自身にも複数のバインドがかけられている。

闇の書にヴィータちゃんたちが吸い込まれてしまった後、駆けつけたザフィーラさんも吸い込まれて…

通信は届かないし、私達が何とかしないとイケないんだけど…

「「っ!」!」

そうしているうちに、変化していくはやてちゃんの姿が見えて…
変身後に巨大な球体を作り出した。

「まずい…今あんなの撃たれたら…」

さすがにダメかもしれない。そう思ったその時…

「……ジュエルシードに闇の書の主、つくづく面倒に見舞われやすいなこの町は。」

私達を拘束していた結界が一撃で砕け散った。

バインドまで正確に切り裂かれている、こんな高等技術を高威力で繰り出せるのは…

「現状を教える。あれが闇の書の主と言うのなら下手に傷つけることもできん。」

「えっ？」

想像通り、黒い光を纏った槍を持つフレアさんがそこにいた。
でも、あのフレアさんが闇の書の主を下手に傷つけられないって…

「赤い騎士から聞いた情報を信じるならばロストロギアに取り込まれただけの一般人だ。我々の救出、保護対象であって殲滅対象ではない。」

「あ…は、はいっ!!！」

フレアさんは確かにちょっと酷い事も躊躇いなくするけれど、最初から言っている通り『無辜の民』と言うものにはとてもやさしい。

仮面の人が管理局員だって聞いた上、ヴィータちゃんをだましたからちよつと悪い人だと思っっちゃったけど、やっぱりフレアさんはフレアさんだった。

心から信じてなかった自分をちよつとだけ反省させて、はやてちゃんの変化した闇の書さんに向かい合った。

S I D E O U T

第十四話・闇の書の覚醒、終局は悲劇と共に（後書き）

今回は「二刀剣早いよ!？」なフェイトのスタイルについて。

ステインガーブレード

特に細工のない二刀魔力剣。今までの魔導師勢が大振り繰り返した結果速人にあしらわれ続けたことについてフェイトなりに調べた結果「とりあえず手数が問題」と言う事で形成したモード。

後の世界とかぶる剣なのは、単純に使い勝手考えてです。

鎌二本を増やしても多分相当な技量がないと邪魔になるだけですし…

二刀流がちゃんとできるかは置いておいてとりあえず左右で振るだけなら問題なく出来るかと。

第十五話・動き出した運命、悲劇で終わらせないために

第十五話・動き出した運命、悲劇で終わらせないために

「はあ！？何の冗談だよそれ！！」

「僕がわざわざ君に冗談で通信を入れると思うのか？」

クロノ静かな返答に確かにないなと内心で思う。

「それにしたって何でまたそんな急に！？」

「月村すずかだったか？彼女の友人の見舞いに行ったら」

「はやての見舞い！？アイツら知り合いだったのかよ！！」

確かにすずか経由で伝わる可能性もあったとは言え、たまたま知り合いつて…

こうなるといつまでもここでノンビリしている訳にはいかない。ユ一ノに頼んですぐにでも現地に飛んで貰おう。

とりあえず持つものだけ持って出ようとしたところで、クロノが一言も喋らないまま通信をつないでいる事に気づく。

「…ところで君は、何故名前も出していない友人の事を知っているんだ？」

「へっ？」

そんなクロノに突然質問を持ち掛けられ思い返す。

…あー…確かにまだ名前は言っていないなあ。

「おい…君はまさか…」

「あははははー…じゃっ！…！」

クロノの表情が険しくなってきたので俺は通信をぶった切って部屋を出て…

グレアムさんに会った。

「何故だ？何故闇の書の主に気付いていながら報告しなかった？」

今の会話を聞いていたらしいグレアムさんがそう問いかけてくる。さすがにとちつたな。ま、もう黙ってる意味もなくなっちまったが。

クロノが感づいて、グレアムさんが言うとおりに、俺は早い段階ではやての事を発見していた。

この世界にいるならば海鳴近辺にいるだろうと言つ事で搜索を始め
たんだが…

本当アツサリ見つかった。

というのも、あんな目立ついでたちの四人が、隠れているわけでも
なく普通に私生活を送っていたのだ。

家も尾行する必要もなく終了、アツサリ発見できた。

目的も肝心のはやてが『原因不明の病気』にかかっているなんて情
報のお陰でアツサリ予測できたし、肝心の守護騎士も公園で集合し
て成果をおおっぴらに語り合うなんて面白い真似してたから状況が
知りやすかった。

気配遮断って便利だな、うん。

「こつちの準備がまだだったから…な。」

訝しげに俺を見るグレアムさんは、少し間をおいて肩を落とす。

「闇の書の情報を明かしていなかった君が今回の事件に関わるのは
許可出来ない。残念だがもう少しおとなしく」

「芝居はもういいよ、はやての足長おじさん。」

グレアムさんはピタリと硬直する。

あの変な家族構成で生活が普通に成り立っている事が不思議だった
から調べてみたが、特に名前を隠す事もなく資金を送るなんてこれ
またわかりやすいことをしていたお陰で探りやすかった。

…実は守護騎士がいないときに不法侵入もしてたりする。

誓って言うが泥棒や盗撮、盗聴の類は一切してない。資金源調べのためにちょこつと郵便、通帳関係の情報探ただけだ。

当然そんな事は言うわけもなく、俺は笑みを向けて続けた。

「魔法世界に来たせいで忘れたのか？地球の特殊部隊は優秀なんだから、俺みたいにな。」

「…ならば尚更何故私を止めなかった？」

苦い表情を向けるグラムさん。

ま、そりゃそうか。いってみれば泳がされてた訳だしな。

「言ったろ？準備があっただけだ。すぐ止めたら下手したら物扱いでヴィータ達が消されてたかもしれないからな。だから少し情報集まるまで待つて準備してたのさ。」

「…君は…本気で言っているのか？」

「何を？」

やってた事そのまま説明しただけなのに物凄く驚かれる。

「彼女達は闇の書のプログラムのぞ？彼女を救うだけならまだしも」「はやて」と闇の書葬ろうとしてたグラムさんには理解不能か。」

その眼を更に陰らせるグラムさん。勘だったかやっば当たりか。

そうでないならさっさと闇の書の事はやてに話して受け取る事だつて出来たはずだ。

はやてだつて守護騎士と会わなきゃ『世界的規模の危険物です』っ

て言えば渡しただろう。

「今のは別に知ってた訳じゃないさ。勘だよ勘。」

「…何故君はそんなにも落ち着いている。」

「怒られると思ってた？」

ま、単純にはやての生死で考えたら間違いなくキレる場面なんだろうが…

「闇の書の完全な暴走まで放置して『しょうがない』って感じで海鳴ごと消滅させられるくらいなら、アンタの方がよっぽどまともだからな。管理局ならやるだろ？」

俺はグレアムさんの脇を通り外へ向かう。

「ただ…一つだけ足りなかったとすれば…」

少し離れた所で振り返る。グレアムさんは気になるのか俺に視線を向けていた。

俺は自分の胸に向けて親指を立てて自信満々に言い切る。

「俺みたいないヒーローがいるとハッピーエンド確定って法則を知らなかった事かな。」

「は…？」

呆然とするグレアムさんをおいて、俺は無限書庫へ向かう。
長話してる場合じゃない、急いでいかなきゃな。

「はやてに詫びないとまずいだろ！？クロノには黙っといてやるか

ら自由に動けるうちにクリスマスプレゼントでも買っときな!!」
言う事は全部言った俺は廊下だって事も無視して駆け出した。
ユーノは俺の準備が整うまでは闇の書、夜天の書の調査の名目で残
つてくれているはず、あいつに頼まないと俺転移できないし。

Side フレアライト

異常な攻撃範囲に飲み込まれた町並みは一瞬にして消し飛んだ。
結界内からこんな化け物を出す訳にはいかない、何人死ぬか分かっ
た物じゃない。

「我は闇の書…我が力は…主の願いをそのままに。」

「はやてちゃんがこんな事願う筈無い!!」

なのはが悲鳴に近い声で叫ぶ。

…彼女やフェイトは悪性プログラムと化した守護騎士の心配をする
ような少女だ、アレも止められると思っっているのだろう。

守護騎士達が夜天の書という真名を使っっていないかった時点で既にプ
ログラムは壊れていると分かり切っているのに。

見ているだけならば微笑ましい光景だが、子供の話し相手にするに
は壊れたロストロギアなど危険過ぎる。

「我が主は」

「相手にするな、アレは悪性プログラムに冒された危険物だ。無限転生する以上最良の手は確保、封印だがお前達の友人の無事を優先するなら書を完全破壊してでも」

「ダメツ!!!」

それこそ力一杯と言った様子で叫ぶのは。

ダメも何もない、アレが地上で暴走などすれば今度こそこの星は終わりだ。

私は幾分か目を細て彼女を見る。

「寝ぼけるな民間人、アレは一般人が処遇に口出ししていい物ではない。」

「はやてちゃんと一緒にいられるようにするって約束したんです！」

時によってはあの速人以上に意志を曲げない彼女に説得は時間の無駄。

これ以上何か言うようならば彼女の身の安全を優先するため気絶させてでも帰すべきか、そう考えたところで…

「それに、ヴィータちゃん達が病気でおかしくさせられてただけならヴィータちゃん達だってフレアさんの言ってる『むこのたみ』さんじゃないですか!!」

「な…」

絶句した。

確かに改変の際に組み込まれたプログラムをウイルスと考えるのであれば、病気というのは適切だ。

後はあの守護騎士を人と判断するか否か…

情報を引き出す為に騙したものの、元々は彼女達を捕らえて裁こうとしていたのだ。

法にかけるといふ時点で既に人扱いしているのに今更…

「この馬鹿兄妹が揃いも揃って同じような事を…」

私は歯がみして八神はやてを取り込んだ闇の書の意志に目を向ける。病に冒されただけの無辜の民…か

「暴走までは待たん！手があるならそれまでに何とかしろ！！」

「あ…はいつ！！！！」

私は笑顔で頷いたのはを確認して、再び闇の書に向かって飛翔した。

Side 高町なのは

フレアさんが闇の書さんに向かう中、私とフェイトちゃんはお互いの状態を確認していた。

「フェイトちゃん、腕の怪我は大丈夫？」

「何もしなければ大丈夫だけど…動かすと血が出るかな。」

フェイトちゃんの腕の怪我は動かせるみただけで結構痛そうな深い傷だった。

「なのはは？胸…」

「私は大丈夫、血も出てないし。」

笑顔で言うとフェイトちゃんが少し暗い顔をする。

「なのは。」

「……えーっと……砲撃を撃つと多分負荷が来るかな……でもまだしばらくは大丈夫。」

元気を見せてもかえって心配されるだけみたいなので、正直に全部言った。

フェイトちゃんは少しだけ微笑んで頷いてくれる。

「フレアさんは……」

様子を伺ってみると、フレアさんは身体や書への直撃を避けて槍を振るっていた。

でも、単純に振るっただけの一撃だとあのフレアさんの槍でも闇の所さんは防ぎきってしまう。

「時間稼ぎ……してくれてるみたいだけど、どうする？なのは。」

「とりあえず、魔力ダメージで止める……かな？」

互いに頷きあったところで、見慣れた姿が近づいてくるのが見えた。

「アルフ！」

「またせたねフェイト！あれが闇の書の意思って奴かい？」

私が頷くと、アルフさんは戦闘を見て苦い顔をした。

「アイツの槍でも破れない防御かい？さすがになのはと速人の魔力を吸って完成しないだけの事はあるよ。」

「それと多分……リライヴちゃんも。」

考えただけで怖くなってくる。
けど、ここで逃げてる場合じゃない。

「フェイト…怪我は大丈夫なのかい？」

「ユーノが来たら治して貰う。それまでは…もたせて見せる。」

フェイトちゃんの宣言に少しだけ心配そうに頷いたアルフさん。

これ以上ただ話しているわけにも行かない、私達は戦っているフレアさんの下に飛んだ。

「アルフ！」

「了解！縛れ！！」

アルフさんのバインドが、闇の書さんを縛る。

けど、単なる一重のバインドがいつまでも効いてくれるとは思えない。

私とフェイトちゃんはすぐさま砲撃準備に入る。

「どうする気だ？」

「とりあえず…魔力ダメージで行動不能にします！！」

「優しいのか乱暴なのか分からんな、お前は。」

フレアさんのコメントが胸に刺さったけど、とりあえず気にしている場合じゃないから砲撃魔法を放つ。

フェイトちゃんと挟み込む形での砲撃。けど…

「絶て。」

アッサリ防がれた。

リライヴちゃんでも出来た事だからこれ位は予想してたけど…

「っ…」

胸の痛みを顔を顰める。

長い間続いたらまずいかも…そう思ったところで闇の書さんの周囲に小さな刃物が展開される。

まずい…そう思ったところで

「スタツブバスター!!!」

闇の書さんが黒い光に飲み込まれた。爆発を起こして私達の砲撃も通る。

「フレアさん、砲撃できたんですね。」

「申し訳程度だ、本命のお前達の攻撃がかわされては意味がない。」

フレアさんの言葉に慌てて闇の書さんを探す。と、いつの間にか更に上空に飛んでいた。

その周りに、幾つもの魔力弾が…

「っ！皆！私の後ろに隠れて!!!」

フェイトちゃんとアルフさんが急いで私の背後に回る。私はすぐに防御魔法を展開して…

フレアさんが私の前にいた。

「降り注げ…シューティングスター。」

それはリライブちゃんを使う、準備時間も殆どない流星のように魔力弾を降り注がせる魔法だった。

わざと前に出たフレアさんなら何か考えがあるはず。そう思って私は防御魔法を展開する。

と、フレアさんは何もしないで槍の真ん中を持って…

「はあああああっ！…！」

雨のように降り注ぐ魔力弾を槍で打ち消し始めた。

かなりの数が消されて、私の障壁には殆ど当たらなかったのだけど…

「っっっ」

やっぱり胸が痛んだ。

これはちよっとまずいのかもしれない。

きつとフレアさんはそれに気づいていて前に出てくれたのだろう。

やがて、魔力弾の雨が収まると、さすがに肩で息をしているフレアさんがいた。

左肩と右足に直撃していたみたいで、バリアジャケットが壊れていた。

「ち…さすがにあの数は無理があったか。」

「す、すみません…」
「気にするな民間人。」

…どうやら、私がまだ協力者だから無理を押し護ってくれたみたい。

少し複雑な気分だけど、自力じゃきつと防ぎきれなかった以上文句は言えない。

と…闇の書さんが翳した手に、魔力の光が集まっていく。

これって…スターライトブレイカー!?

「アルフ！フレアさんをつれて逃げて！私はなのはを…！」

「了解…！」

「え？えっ？」

フェイトちゃんが焦ったように私の身体を抱えて飛ぶ。

さすがに速いフェイトちゃんだけあって、あっというまに離れていく。

「ちょ…フェイトちゃん…こんなに離れなくても…」

「至近で喰らったら、防御の上からでも墜とされる！それになのは今ダメージが…っ…」

と、唐突に少しぐらついたフェイトちゃん。それと同時に速度が少しだけ落ちる。

フェイトちゃんだって血が止められてないんだ…そろそろ危ないのかもしれない。

『一般市民がいます。』
「な……」

こんな状況で、バルディツシユからとんでもない事が伝えられた。
防げる私達ですら危ないのなら、普通の人が受けたら塵一つ残らず
消し飛んじゃう……

「フェイトちゃん、大丈夫!？」

「大丈夫、この辺りで防ぐしかないけどなのは……」

「何とかする!！」

防ぐのは私の分野だから本当に何とかするしかない。
私達は反応のあった辺りに来て……

「アリサちゃん!すずかちゃん!？」

二人の姿を見つけた。

私はフェイトちゃんと一緒に二人の前に降りる。
民間人って……どうして二人がこんなところに……

って考えてる場合じゃない!!

迫りつつある光に向かって防御魔法を展開しようとして振り返り……

胸に激痛が走った。

「っ…あ」

「ちよつと！どうしたのよ二人とも！！」

アリスちゃんの言った二人に疑問を覚えてフェイトちゃんを見ると、フェイトちゃんも座り込んでいた。

長い間血が止められなかったから限界だったんだ！！

防御魔法を展開する間も無く光が迫ってきて…

「つと！間一髪！！」

目の前に強固な緑色の防御壁を展開する、ユーノ君が現れた。

「ごめんなのは遅くなった！けど最強の助っ人を連れてきたから！」
「最強の助っ人って…」

やがて光が収まったところで一つの小さな人影が空から闇の書の意思に向かっていく。

『待たせたな皆！高町速人、ここに見参！！』

念話から、聞きなれた声が聞こえてきて…私は息を吐いて肩を落と
した。

…本当にもう、遅いよお兄ちゃん。

S I D E
O U T

第十五話・動き出した運命、悲劇で終わらせないために（後書き）

実は裏で調べまわってた速人。

かなり主人公っぽくないですが、元は暗殺者なので…

ちなみにユーノ君には美味しいところ取り要因になってもらおうかと。

スタップバスター：

突きの動作で砲撃を放つ。

速射で貫通力も高いがそれは砲撃の練習をつんでいればの話。

あくまで近接戦がメインのフレアはオマケ程度に使用する。

第十六話・優しい願いの元に

第十六話・優しい願いの元に

空から一直線に降りて来た俺は闇の書の意味とやらに斬りつけるが、片手間に展開された障壁にあっさり防がれた。

「…無駄だ。」

「そうか。」

俺の魔力がなのは達に比べて格段に低いから侮っているのだろう。事実、ほぼ相手にしていないような感じだった。

二刀を以って連続で斬り付けるが、障壁はまったく揺るがない。

「穿て、ブラッディダガー。」

赤い苦無が幾つも出現し、一気に俺に迫る。

お返しをしてやろうと片手間に切り裂こうとして…

爆発した。

「だから無駄だと」

「何が無駄だった？」

爆煙の中、俺はほぼ無傷で立っていた。

「何……」

「爆風って位だから『風』だろ？俺の変換資質だし、どっかの馬鹿妹が人を爆殺しようとしてくるから、流す方法を覚えたんだよ。」

もつとも、熱まではそうは行かないため少し熱い。

バリアジャケットで軽減されるダメージで十分な程度の熱量だが。

「それに、言っただけでなかったがな……」

再度刀を振りかぶり、闇の書は防御魔法を展開する。

「ぐっ……な……に？」

障壁を抜けていないはずの手が訴えた痛みに顔を顰めた闇の書は、表情を歪めて俺を見た。

徹。

たとえどんな強力な障壁だろうが、この一撃は必ず相手に徹る。

「俺はどんな魔導師にも負けないんだぜ。」

ダメージを徹した俺を障害と見たのか、初めて真っ直ぐ俺を見る闇の書。

…確か管制人格だったか？そいつにはやてが上手い事指示出せればよかつたんだよな？

「おーい、八神はやて、聞こえるか？俺は高町速人、なのはの兄でヒーローだ。」

「ソニックセイバー。」

語りかける俺に向かって魔力の斬撃が飛んで来る。

俺の魔力も入ってるから同質のウィンドスラッシャーだって使えるはずなのにあくまでリライヴの方使うかコイツ。

ちよつと腹立つたけど、魔法がメインの生活してないわけだし、変換資質の事もあるからしょうがないだろうと流す事にする。

「取り込まれちまつたもんはしょうがないけど、今がチャンスなんだ。折角だから起きて管制人格とやらにちゃんとした願い事を言うてやれ。」

「主は騎士達を奪ったこの世界が悪い夢である事を願った、だから私はそれを叶えるだけ。」

直射砲撃がすつ飛んでくるがよく回避しているため簡単に避けられる。

「願いを叶えるのが生きがいでけど、下手にウイルスプログラムに逆らえば速効暴走。今のお前が願いを叶えるには何かしら破壊に結び付けなきゃならない。まったく、けなげな話だが…病気は治さないと根本的解決にならないぜ？」

「ぐ…黙れ…私は道具だ…」

管制人格とやらが揺らいだせいか景色が少し歪む。拒否すればするだけ暴走が早まるか…さすがにプログラムの身で組み込まれたプロ

グラムに逆らうのは無理か。

となればやっぱり主様に頼むほかないな。

「はやて、そんな無茶は言わない。戦えなんてこれっぽっちも言わない。ただちよつと願い事を言うだけでいい。それだけで十分だ。なんてつたつて…クリスマスなんだからな。」

展開される無数の魔力弾。

リライヴの魔法か、対策考えておいてよかったな。

俺は発射される前に接近して、幾つかの魔力弾を切り裂いて闇の書の腕を左手で掴む。

全てが放たれる系統の射撃である以上、密着していればどれだけあつても一発も当たらない。

それに、この距離なら防御魔法も展開できないだろう。

「クリスマスプレゼントはきつちり届けてやる、だから…ちよつとは楽しい願い事でも願ってくれ!!」

寸掌を叩き込んでよろめいた所に足払い。

地面がないとは言え上下の感覚が変わるからよろめかすには十分効果がある。

「疾風…吼破っ!!」

模倣した吼破に風を付加することで全力で相手を吹き飛ばすために使える拳。

きつちり頭に打ったから飛行魔法を制御しようにもバランスが取れ

るまで時間がかかるだろう…
と、思ってたが、割とアツサリ立ち直ってしまった。

うーん、バリアジャケットってずるいなあ、俺も着てるけど。

S i d e 〱 月村すずか

よく分からない、けどきつと強い力を持った光から知らない男の子が護ってくれた。

なのはちゃんは何処か苦しそうで、フェイトちゃんは右腕が血で真っ赤に染まっていた。

「とりあえず回復する。ただ、流した血まではさすがに…」

「大丈夫、出血が止まってくれれば」

「フェイトちゃん！無茶したらダメだよ！」

男の子がなのはちゃんとフェイトちゃんに向かって何かを呟くと、二人が緑色の光の中に納まった。

「僕は二人を安全なところへ連れて行く、二人ともちゃんと回復するまで動かないですよ？」

「分かってる、ありがとうユーノ君。」

なのはちゃんは聞きなれたフェレットさんの名前で男の子を呼ぶ。
…久遠ちゃんみたいだな子なんだろうか？

それに…二人ともあの光を放った人に向かうんだろうか？

「じゃあ二人とも、危ないから動かないで」

「あ、あのっ！待ってください！！」

私は思わず叫んで男の人を止めて二人に駆け寄る。

「ちょ、ちょつとすずか！」

「あ、危ないよ！！」

光の中の二人に近づく。

暖かい光だった。

「だ、ダメだつてば！本当に危ない」

「二人とも…その危ない所に行くんだよね？」

私の言葉に頷くフェイトちゃん。

…顔色が悪い、やっぱり血を流しすぎたんだ。

どんな事が出来るのか知らないけど、きっと危険なんだろう。

…分かってる、みだりに明かしちゃいけない事だつて言うのは。

だけど二人だつて不思議な力で私とアリサちゃんを助けてようとしてくれて、今また危険なところへ行こうとしている。

このまま何もしないなんて…出来るはずがなかった。

「なのはちゃん…お願いがあるんだけど、しばらくの間この中の様子を誰にも見せないように…出来る？外の二人にも。」

「え、えっと…できるけど…」

「お願いできないかな？」

私はなのはちゃんを真っ直ぐ見る。

少し戸惑っていたなのはちゃんだけど、少しして桜色の光に包まれて、外の様子が見えなくなった。

「あの…すずかちゃん、本当に危ないから」

「分かってる、だから…二人には無茶して欲しくない。」

「すずか、お願いだから素直に避難」

私は困ったように見つめてくるフェイトちゃんに近づく。

そして抱きつくようにして腕を回して…

首筋に噛み付いた。

「な…」

「すずかちゃん!？」

さすがに驚く二人。だけど私はそのまま離さずに、血を送り込む。

…何の補給もしないままやったんじゃないやぶらぶらする。けど、これから危険な所へ行こうとしてる二人と違って私は休むだけでいい。

だから、ひたすら血を送り続ける。

「す、すずか…何を…」

まだ全快になった感じがしない。どれだけの血を流したんだろう…
私はもう限界なのに…

「っ…ぷはっ！こ、これで…どう？」

「え？あ…調子が良くなってる？」

「えっ！？」

フェイトちゃんが手を握ったり開いたりして自分の状態を確認している。

どうやら良くなったみたい。良かった…

「す、すずかちゃん！？」

「あ、ご、ゴメン…ちょっと無茶しちゃった…」

私は立っていられずに座り込む。

「すずか…その…」

「二人とも…行くんだよね？私はこの後安全な所に行くだけだから…」

辛かったけどできるだけ笑顔を見せる。

「頑張つて、ちゃんと無事に帰ってきてね。」

「…ゴメンすずか…ありがとう…」

フェイトちゃんからお礼を言われて、桜色の壁が消えていく。

「いったい何が…って！どうしたのよすずか！…」

「あはは…ゴメン、なんでもない。」

言ったものの立てない私はフェイトちゃんに抱えられてアリサちゃんの傍に連れて行かれる。

「ユーノ、二人をお願い。」

「あ、うん。それじゃあ二人とも、動かないでね。」

男の子の作った光に包み込まれて、私達はなのはちゃん達の前から姿を消した。

S i d e 〱 フェイト 〱 テスタロッサ

二人が去った場所で、私は思いつきり拳を握る。

さすがが私やなのはに隠し事をしてた。それはいい。誰にだってそんな事一つや二つあるし、私なんか魔導師でクローンだ。

問題なのは、首筋に噛み付くなんて事をして、秘密がばれることも覚悟して、それでも疲れていた私に力をくれたことだ。

仲良くなったさすがとアリサだけど、私だってクローンだって話すとなれば、きつと物凄く躊躇うし怖い。

あんな…まるで吸血鬼みたいな真似までして、きつと不安だってあった筈なのに…

そんな力を立てなくなるまで使ってくれた。しかも、私達に何一つ

聞かないで。

なんだか本当にありがたくて、申し訳なくて、助けに来たはずなのに
防御魔法すら使えないまま倒れた癖に、そんな秘密を明かさせて
しまった自分が悔しくて…

「はやく…助けよう、絶対に。」

「…うん。」

私は誓って飛んだ。

絶対に助ける…助けてみせる…!

S I D E O U T

「デアボリックエミッション。」

闇の書の宣言と共に黒い球体が巨大化していく。

…マジか？あんな回避できねーし、防ぐにしたらって俺の魔力じゃ…

「速人お兄ちゃん！」

「速人！大丈夫！？」

と、タイミングいい所でなのはとフェイトの声がしたが…

この距離じゃ間に合わない。

『マスター、障壁を！必ず耐え切って見せます！！』

「きついけど…しょうがないか！！」

仕方ない、あまり得意じゃないが防ぐしかないか。

そう思つて手を翳した時…

「さすがの速人も完全全包围のエネルギー攻撃を技術で捌くのは無理みたいだね。」

そんな声と共に、俺の目の前に純白の衣装を身に纏った少女が現れた。

周囲を飲み込む闇は見えない障壁に完全に遮られた。

「リライヴちゃん！」

魔法が終わった瞬間になのはの音が飛んでくる。見れば複雑な表情をしていた。

無理も無いか、怪我してるのに逃げるわ犯罪者で敵なのに俺を庇うわで、立場がこころ変わるから心配していいのか怒っていいのかわからないんだろう。

だが…

「遅れてごめん速人、とりあえずはやたと守護騎士が救出できるまでは協力したいんだけど、捕まえる？」

「だから！呼んでるのに無視しないで欲しいの！！」

当のリライブはなのはそっちのけで俺に話しかける。

対してスルーされたなのはは今度こそ完全に怒って叫ぶ。

このやり取り変わらないなあ…

「相変わらずだねなのは。で、管理局としてはどうするの？」

「この状況でお前と闇の書敵に回すようなアホなら俺もお前についてやるよ。ま、事件が終わってお前がいたら多分次の標的になると思うが。」

「そうだね、少なくとも今は闇の書を。」

再三の質問に呆れるように答える俺。フェイトも同意して頷いてくれた。

なのはは少しだけ不満そうにリライブを見ている。

「…とりあえず今は闇の書さんが先だから。」

無茶して逃げたり相手にしなかったりとことん相性悪いみたいだからなあ。

とは言え承諾してくれたなのはに、リライブも笑みを返す。

「ありがとうなのは、お礼に情報伝えておくとね…」

言いつつなのはを指差して、闇の書に向かってその指を移す。

「なのはの蒐集で増えたのは大体30ページ、総ページ数666だから簡単に考えるとなのはの20倍は強いわけだね。」

「「え？」」

呆然と闇の書を見るのはとフエイト。
うっわぁ聞きたくねえ数字。

「じゃ、がんばろうか。」

にこりと微笑んだりライブ。ったく楽しそうに言い切りやがって、
絶対確信犯だなコイツ。

とはいえ、そんな数字が分かってるにも拘らず何一つ気負う様子のないリライブが味方についてくれるのは頼もしかった。

色々あるとは言え、今回も事件解決のために皆が集いつつある、さ
ぁ…反撃開始だ。

悲劇は俺が打ち砕く！！

第十六話・優しい願いの元へ（後書き）

特に言及されてたわけじゃないけど泣きながら破壊を願いにして暴れまわってたのは改変に逆らったら即暴走する事になるからだと思つたので、そういう前提で話を進めました。

戦闘能力は単純に20倍って事はまず無いと思いますが、こうして考えると原作でなのはさんとんでもない方と一対一でやってたんだなあ…

第十七話・悲しみとの戦い

第十七話・悲しみとの戦い

S i d e 〱 クロノ 〱 ハラウオン

僕はなのはたちの戦闘を遠巻きに見ていた仮面の男：リーゼアリアとリーゼロツテの変身魔法を解除しつつ捕らえて、本局に戻っていた。

「リーゼ達の行動は貴方の指示ですね…グレアム提督。」

「違うクロノ！」

「アタシ達の独断だ、父様には関係ない。」

「ロツテ、アリア、いいんだ。」

僕の言葉を否定するリーゼ達を何かを諦めたように止めるグレアム提督。

「彼にも知られていたくらいだ、クロノだってあらかた掴んでいるんだろう？」

「やはり速人は知っていたんですね…」

「な…」

「父様、それは本当なのですか？」

先刻僕が捕らえて連れて来たりーゼ達はその事実を知らなかった。知っていて、止めずに一緒にいたなんて…何のつもりだまったく…

「聡い君の事だ、大体の察しはついているだろう？」

「転生機能を持つ闇の書を封印するには、主ごと封印する必要がある…八神はやてが罪人になる前に封印を実行しなければならぬ。そう言う事ですね。」

提督は静かに頷く。

父さんが死んでしまったことを今も悔やんでくれている提督が、闇の書の封印方法が分かっている僕や母さんに相談しないはずが無い…それが違法でもなければ。

だから、逆にこの結論に簡単にたどりつけてしまった。

「クロノ、今からでも遅くない、私達を解放して。」

「違法だと分かっているのにみすみす自由にする訳には行かない。」

「アンタの父さんだってそんな決まりのせいで死んだって言うのに！そんなに決まりが大事なのか！！このまま暴走して何もしなかつたら星ごと撃ち抜く破目になる事位わかってるんだろ！アタシ達が何もしてなくなつて、こんな悲劇がずっと続くだけだ！アンタはそれでもいいの!？」

身を乗り出したロツテの叫びに、前の僕は返す答えを持っていないかった。

…十中八九そうなる筈で、それが許される訳ない。

そう…十中『八九』。

「アンタまさか、全部上手くいく可能性に賭けるなんて」

「ああ。」

「ふざけ」

叫ぼうとしたロツテを手を上げて制する提督。

「彼：高町速人の影響かい？」

「そうですね。」

僕が言った事が意外だったのか、提督は少しの驚きと共に肩を落とす。

彼の事だ、提督にも自信満々に告げたんだろう。

「まさか君がヒーローに憧れるとは思っていなかったが」

「そんな理由じゃありませんよ。」

予想通りヒーローと名乗って行ったらしい。

だけど僕はそれを否定する。

別に違法、違反、無理、無茶、作戦行動無視、単独行動と上げればキリが無いデタラメで、犯罪者まで救おうとする馬鹿の真似をする気は無い。

ただ…一つだけ残っている言葉がある。

「『自分の未来だって分からない人間が、人の先の価値など分かる筈がないんだ、ましてや勝手に決めていい筈も無い。』だから彼は全てを救おうとしているそうです。僕はそれを聞いてから少し考え

ました。その言葉は正しくても、僕達が彼の無茶をなぞる訳には行かない。ならどうするか…」

少しの間を置いて、僕は自分が出した答えを告げる。

「その為の裁きの基準が法です。僕達個人が勝手に裁く訳にはいかない人を切り捨てる許可が出る最終ライン。その後がどんなに危険であると予想したところで、個人で勝手に裁く訳には行かない。今八神はやてを裁く訳には…封印する訳には行かないなら、救うしかない。」

「世界がそんなに優しいなら、クライド君だって死んだりしてない！！！！」

僕の言葉が続くほどにその表情を険しいものに変えていたロツテが、力いっぱいソファを叩いて叫んだ。それだつて痛いほどに知っている。だけ…

「それを受け入れるなら、優しくない世界にいた父さんは『死んで当然だつた』事になる。」

「っ！！！」

「悪いが僕はそう思えない。折角裁きのラインを超えない所にいる人を、むざむざ封じて悲劇や犠牲を認めるくらいなら…変えられない過去を背負つて今を戦い、未来を変える。」

そう締めくくった時、グラム提督が何かに気づいたように僕の間を見つめた。

「ただの子供が言う台詞に何故あも心を打たれたのかと思っただが…眼が本物だつたからか。」

それはきつと速人の事だろう。

僕の目を見て納得するのは彼に似ていると思われたようで心外だが、少なくとも彼はただの子供じゃない。

「アリア、デュランダルを。」

「父様…」

「氷結の杖デュランダル。今の私が君に託せる唯一の力だ。」

提督の手から差し出されたカードを受け取る。

「デュランダル、確かに受け取りました。」

「ああ、それと…すまないが少し頼まれてくれないか？」

受け取ったカードを手に頭を下げた僕に提督は…

「速人君からのアドバイスでね、詫びるならクリスマスプレゼントを用意しておけと言われているんだ。しばらくここを出られないだろうし、通販カタログを貰えないか？」

そんな二三ずれた事を言ってくれた。

彼はどこまでふざければ気が済むんだまったく、提督にまでそんな軽口を言っていくなんて。そう少しだけ憤って…

はやてが無事に救えなければ意味がない事に気が付いた。

つまり、悲劇が予定された未来を変えられると信じて待ってくれると言う事。

「分かりました、ではこれで。」

託されたデバイスを手に見せられた表情はきつと自然な笑顔だったろう。

鏡も見ていないが僕はなんとなくそう確信していた。

S I D E O U T

「はああああっ!!」

リライブの一閃は闇の書の障壁に食い止められた。

嘘だろ…アイツが破れない障壁なんて…

仮にあいつの言うとおりまんまなのは20倍の魔力持ちでも魔力を超高密度で集束させたアイツの剣なら斬れない訳が無い。

なのはの砲撃と同じ魔力消費ですら、事刃の一点だけに関しては数百倍の強度が出せる筈。

…アイツが全快じゃない？

「く…さすがにかなりの強度だね…ん？」

俺は闇の書から距離を取って傍に来たリライブに近づいて…

「えい。」

思いつきり抱きついた。

「つつ！！？な、何でいきなり抱きつくの！？離れてよ！！」

割と本気ですぐもがきだしたので離れる。

男が嫌いとか言ってたけど、どうやら筋金入りみたいだな。

「せ、戦闘中に何してるのお兄ちゃん！！」

「そっだよ速人！そ、そんなに女の子が欲しいの！？」

「うん、二人が普段どういう目で見てるのかよく分かった。」

なのはとフェイトの二人の視線が結構痛かったが、今はそんな事を言ってる場合じゃない。

「リライヴお前、怪我完治しないまま来たな？」

「…まいったな、さすが速人。」

「「えっ？」」

俺の指摘に困ったように苦笑を浮かべるリライヴ。

なのはとフェイトは揃って仲のいい驚き方をする。

あれだけ普段から顔に出さない奴が思いっきり表情歪めたからな。
一瞬とは言え。

「下がってる、俺が前に出る。」

俺はそれだけ言って闇の書に向かって突っ込んだ。

剣が通らなくてもあいつなら遠距離だって出来る。

だったら俺は徹をちらつかせてしめはなのは達に任せればいい。

「はっ！…！」

俺が振り下ろした一閃は障壁に命中し…

爆発した。

「な…んだとっ…!？」

これは…確かなのはが使うバリアバースト？

吹き飛ばされてろくに体制も整えられないまま砲撃が迫ってきて…

桜色の障壁が目の前に展開された。

「私だつて…ちゃんと役に立てるから!!！」

「なのは…！」

砲撃を防ぎきつたなのはがシューターを放つ。

多方向から迫るそれらに対して全方位防御を張る闇の書。

「スパイラルバスター!!！」

「く…！」

リライヴが放った砲撃が防御を貫いて闇の書を吹き飛ばした。

全方位で防御力が低かったのか。

「はあああああっ!!！」

速度自慢のフェイトが吹き飛ばされた闇の書に追撃をかける。

ハーケンフォームのバルディッシュを振り上げて、一閃。

「く…っ!!！」

鎌は体制を立て直した闇の書の障壁に遮られる。
闇の書が赤いクナイを作り、撃ちはなった。

「風翔斬『ウインドスラッシュャー』!!」

抜き放った俺の剣閃が、フェイトに着弾する前のクナイを切り払った。

フェイトはその隙に再び距離を取る。

間一髪ってどこか。

「怪我を確かめて前に出たのはいいけど、焦りすぎじゃない？ヒーローさん。」

「む…確かにちよつと焦ったかも…」

実際問題として、魔導師としては皆俺より桁違いに上の連中な訳で、徹一本で戦うわけにも行かないし、攻めに出過ぎるわけにも行かないか。

何よりはやてを起こすのが目的出しな、今の所。

「闇の書さん、ちよつと質問なんだが後どれ位保つ？」

「黙れと言っている…」

「あんまり時間なさそうだな。」

話しかけてみたが思っていたより苦しげな反応が返ってきた。
むう…あんまり時間はかけてられないか？

「あの、何の話？」

事態についていけないらしいのはが俺に疑問を投げかける。
あ、ユーノ説明できてないのか、時間もなししょうがないが。

「彼女の自我で行動できる時間さ。それを過ぎたら後はただの破壊者になる。」

「自我つて…それがあんならなんでこんな真似を!!」

フェイトが闇の書に向かって怒鳴る。

何かあったのか？普段はもう少し落ち着いてた様な気がするが…

「我は闇の書…ただの道具だ、主の願いを叶えるだけの…」

「願いを叶えるだけ!? そんな悲しい顔でただの道具だ何て誰も信じないよ!!」

あー…無理すると拒絶反応が起きて暴走するからなんだろうが…
聞かないだろうなあウチの妹。普段から無茶する前提で行動してるから、人並みつてのわかってないだろうし。

「このっ…駄々っ子!!」

瞬間、フェイトが飛び出した。

今まで見たことも無い速度、おそらく話にあつた強化時に追加したソニックフォームとか言う奴だろう。

持っているのがいつの間にか二本の剣になっている。

「すずかははやての親友なんだぞ!」

だが、いくら速くても突っ込んで切りかかる一撃は丸見え。
闇の書は振り下ろされた一撃を簡単に防ぐ。

熱くなりすぎだアイツ…そう思った瞬間…

「それを危険に巻き込んでおいて何が!!」

「何？」

闇の書の背後にフェイトの姿があった。

速い…当たった瞬間に一気に高速移動で回り込みやがった。

背後からのフェイトの一撃は辛うじて間に合った闇の書の障壁に防がれる。

だが、フェイトは更にそこからもう一度背後を取って…

大剣を振り上げていた。

「『はやての願いを叶える』だ！ふざけるな!!」

文句なしの高速コンビネーション。オマケに最後が強打。

焦りすぎかと思ったが格ゲーもビックリの前後からの連続攻撃。

これなら通じるか、そう思ったが…

大剣を『開いた』書で防がれた。

…なんか嫌な予感がした。

感じた瞬間に俺は空を駆け…追い抜いていくリライブの影を見た。

「させるかっ!!」

開いた書を無理やり閉じようとするように横から蹴りかかるリライヴ。だが、わずかに下げられた書の見開きをフェイトと同じように叩く事になる。

一方、先に攻撃を仕掛けていたフェイトは光になって書に吸い込まれていく。

「まったく、お前まで同じ事やってどうすんだよ。」

危険な感じはしないから吸い込まれても無事だろうが、今リライヴに抜けられるのは痛い。

俺は消える前にリライヴの手を掴む。

「あっ!ば、馬鹿!!」

「へっ?」

リライヴのらしくない焦った声に自分の身体を見れば、彼女と同じ光が俺の身体を取り巻いていた。

…魔法だもんな、物理的に引っ張り上げるのとは訳が違ったって事か。

「えっと…悪いのは!しばらく一人でよろしく!!」

「お…お兄ちゃんの馬鹿あああっ!!!!」

なのはの悲痛な叫び。

まあ…推定とはいえ二十倍だもんなあ戦力差。

そんな場違いだろう感想を抱きつつ、俺の意識は暗転した。

第十七話・悲しみとの戦い（後書き）

グレアムさんやら猫姉妹が非情だって話が良くありますが、敵討ちで一般人巻き込むなら美沙斗さんもやってたし割とある程度の話かと。

原作レベルで上手くいくのって稀ですからねえ…

クロノの話の方向性が変わったのは速人の影響です。

第十八話・夢の中で『幻想』（前書き）

先週、環境の都合で投稿できませんでした。
なので今回は二話投稿しようと思います。

第十八話・夢の中で『幻想』

第十八話・夢の中で『幻想』

「ここは…」

見た事もない程発展した世界の中、小さなドーム場の家の中にいた。

えっと…確か俺はリライヴの手を掴んで一緒に光になって…

「あら、速人君いらっしやい。いつも娘が世話になってるわね。」

「へっ？あ、はい…」

と、いきなり知らないお姉さんに話しかけられ訳も分からず身構えて…

「悪夢がでしゃばるな！！！」

怒声が聞こえて来た瞬間お姉さんの上半身が消し飛んだ。
かなり生々しいスプラッターだなオイ…

今の声は…リライヴ？

「お、おいおい！いくらなんでもこれはいきなり過ぎないか？ここがお前の記憶とかだったらどうすんだよ？破壊はまずいだろ。」

「それはない、私にはあんな奴の笑顔なんか記憶にない。」

吐き捨てるように言うリライヴ。うつわぁこりゃ相当怒ってるなあ…

「それにしたって落ち着けて。なんか見て欲しくない物があるなら見ないから。」

「…君なら…別にいい。」

少し寂しそうに言うリライヴは腰を下ろす。

何かあるとは思ってたが…夢とは言え出会い頭に母親ぶつ飛ばす程とは…

「取りあえずどうする？」

疲れたように手を上げるリライヴ。

どうする…か、普通ならとっとと脱出方法考える所だが…

「今取り込まれてんだよな？だったらはやてを探したい。」

「はやてを？何でまた。」

そう言えばリライヴは管制人格とかに付いて知らないんだっけ？いや、シグナム達から聞いてるかも…

「まったく…全部話せつて言うのに…」

話して見れば早いって事で手っ取り早く聞いてみたが、全く知らなかった。

シグナム達じゃしょうがないか、あくまでも主が一番で脅されてただけみたいなもんだしな。

「そうなる早くイノセントを見つけないと。さすがに技師は本職じゃないからはやての意識にアクセスするならデバイスがいる。」

「アレ？デバイスなくしたのか？」

『私はいますか？』

俺は起動中のナギハを見せる。合わせて声を掛けてくれるナギハ。リライヴは数瞬硬直した後、少し困ったように辺りを見回した。

「…あの女が成長してる私を娘と呼んだ以上、この世界に来た『登場人物』はこの世界には居ないはず。」

「つまりこの世界のどっかにイノセントがある訳だな。」

なら話が早い。そう思った俺に対してリライヴは苦笑しながら立ち上がり、扉らしき場所へ向かう。

扉脇にあるボタンを押したりライヴ。すると、扉が消失するように開く。

リライブは静かに外を指す。

軽く嫌な予感を感じつつ顔を出して見ると…

空中に張り巡らされた幾つもの半透明なホールの中を車が飛び交って居た。

見上げれば城のような物が浮いて居て、見下ろせば遙か遠くに地面が見える。

SFもビックリな超科学世界だなおい。

この中から…デバイス一個を探す？

「リライブ…もうちょっと何とかならなかったのか？」

「私に言わないでよ…」

道理で何か滅入ってるとは思ってたんだが…

これは面倒だなあ。

S i d e 高町なのは

「あ…くっっ…」

地上に向かって吹き飛ばされた私の回りから蔓のようなものが幾つ
も伸びて来て、私の全身に絡み付いた。

まるで身体を引き千切ろうとしているみたいなのは、どうやって
も外せそうになかった。

それだけなら何とか耐えられたんだけど…

「ブラッディダガー…」

静かに呟いた闇の書さんから幾つも赤いクナイが飛んで来る。

防げない。それがわかると同時に私を縛る蔓が切れた。

『フラッシュムーブ。』

高速移動魔法で離脱する。ある程度の距離で止まった私が見たのは、
自分が元いた位置を包む爆煙だった。

さすがに直撃はまずかったし、どうにかなってよかった。

「ありがとうございますフレアさん。」

「いや、遅くなって済まない。」

私の横には、フレアさんがいた。

私が捕まっていた蔓を斬ってくれたみたい。

フレアさんがシューティングスターで受けた怪我は綺麗に治っている。

コーノ君はすずかちゃんとアリサちゃんの避難をさせたりしてたから怪我を治してもらうのに時間がかかったんだろ。

「現状は？」

真剣に聞いて来るフレアさん。

主にお兄ちゃんのせいでかなり情けない状況だけに説明するのが嫌だったけど、そうも言っていられないので素直に答える。

話を聞いたフレアさんは目を閉じて頭を抑えた。

「あの馬鹿……」

普段表情をあまり変えないフレアさんが何かに疲れたような表情を浮かべている。

本当何やってるのかお兄ちゃんは……

「奴等の事だ、無事ならば放っておいてもどうにかするだろうが……長いこと放っておける余裕もない。」

「方法はありません。」

と……手を考えているとレイジングハートから声を掛けられる。

『エクセリオンモードを起動して下さい。』

「えっ！？だ、ダメだよ！！あれはフレーム強化するまで使ったら」

止めようとした私の目の前に、遮るようにフレアさんの手が差し出された。

フルドライブ。フェイトちゃんのソニックフォームと同じだけど、レイジングハートの場合私の戦闘スタイルのせいもあって今の強度で使ったら壊れる可能性があるってエイミーさんに止められている。

「完全破壊でなければ修復は可能だ、だがお前達まで戦闘不能になれば生け捕りなどと言ってはいられないが？」

『ではそれ以外の作戦案を提示して下さい。』

「あ……」

そこまで言われてようやく気付く。

手なんてないんだ。リライヴちゃんまで来て捌かれた相手に二人でどうにかなる都合のいい方法がある筈がない。

レイジングハートが全てをかけてくれるなら、私の全てで答えるだけ。

「レイジングハート・エクセリオンモード！ドライブー！」

『イグニッション。』

杖の形から少し変わって大きな槍のような先端になる。

「お前は下がれ、私が前に」

「広域型の闇の書さんに遠距離戦は勝てません！零距離最大出力砲撃がスターライトブレイカーで決めます！！」

言い切った私を暫く見たフレアさんは、静かに闇の書さんに視線を移し…

「味方を巻き込むなよ。」

それだけ言って飛んで行った。

…なんだか最近皆に怖い子扱いされてる気がするけど、挫けないで頑張ろう。うん。

S I D E O U T

「さて…何言ってもこの世界からデバイス一個探し出すしかない訳だが…心当たりは？」

世界の事を知って居るリライブ本人に聞くしかない。だが、当のりライブは首を横に振った。

「そもそも今この夢の中にないんだ、だってまだ管理局来てないし。」

「

「へ？管理外世界？」

言われて辺りを見回して見れば何処を見ても魔法陣がない。魔力も感じないから誰一人魔法を使っていないんだろう。アレ？じゃああの浮いてる城は？

「城や車は反重力装置で浮いてる。」

「うわぁ超科学!？」

本局ですら見た事ない技術をサラリと上げるリライヴ。

…恐ろしいなおい。

「…ある筈のないものを展開している以上私の意識が関わってるんだと思う。」

「夢って事か？んじゃ起きればいいんじゃないのか？」

「簡単に言わないで。こうやって普通に話してるのに寝てるんだからどうやって起きればいいのかよ。」

言われて思う。確かにさっきの怒り様で起きられないんだから自力で起きるのはキツいだろうな。

打開策を考えていると、リライヴは何かを諦めたように頭を振った。

「…私がイノセントと出会う所を夢に映して見る。」

「出来るのか？」

「深く瞑想すれば多分…映してるのは心情風景だし。じゃなかったら上半身吹き飛んだ遺体があって誰も来ないなんてありえない。」

お前がやったんだろうが。

内心でそう思いつつも言うのはためらわれた。

尋常じゃないくらいの過敏反応。しかも、あの母親の笑顔を思い出

す限りでは幸せな夢の中にいる筈なのに…

「そうなるとお前の過去を覗く事になるんだが…」

「そうだね、しかも上手くタイミングを合わせられるかわからないからいくつも見る事になるかも。」

「いいのか？」

絶対ろくな事じゃない昔話をこんな形で見ていいのか疑問に思う。が、リライヴは溜息を吐いた後、凄く空恐ろしい笑顔で俺を見た。

「そうしなかつたらこの中からデバイス一個探す事になるんだけど、もちろん私の心配してくれた優しいヒーローさんは一人で全部見て来てくれるよね？」

…あ、なるほど…この中を一人で…

俺は空から地面まで立体的に広がる町並みを見回して頬を張る。

「わかった！やってやる！！」

「え？」

『さすがマスター、万人の予想を素で軽く上回りますね。』

そつと決まれば時間が惜しい。身体強化全開で

「ちよつ…ちよつと待って！冗談だから！待ってってば！！待て馬鹿あつ！！！！」

駆け出した俺はバインドで拘束されて頭をグーで叩かれた。

「なのはといい速人といい、どうしても予想の斜め上を突っ走るのかな…」

「戦闘中は便利だぜ？」

呆れた様に呟くリライブに自信満々に答えを返す。

リライブは俺を真っ直ぐに見ると、悲しげな笑みを浮かべた。

「…君になら…いい。」

「へ？」

「君になら過去を見せてもいい。」

リライブはそう言って頷く。

…相当覚悟がある過去なんだな。

「うし、それじゃ頑張っ行って来い。」

「気持ち良く送り出してくれるね全く。」

リライブはそう言って座り込むと、瞑想をするように目を閉じた。

S i d e 八神はやて

…何の冗談かと思った。

なのはちゃんとフェイトちゃんが笑いながら動かなくなったザフィ
ーラとヴィータを見てて、病気が治らないって私を笑う。

そんな事はもう分かった。とつくの昔に諦めてた。

けど、時々いなくなってた皆が実は私の為に頑張ってた事を知って、
それを無駄って言い切った二人が悲しくて、残ってたヴィータとザ
フィーラが消えた時…

こんなの…出来が悪い夢だと本気でそう思った。

そして今…何か暖かい闇の中でまどろんでいる。

あー…意識が重たくてなんにも考えられん…

鈍い頭でどうにか思考を巡らせようとしているうちになんだか寝て
しまってもいいような気がして…

幸せそうな景色が見えた。

一つはフェイトちゃん。家族に囲まれて楽しそうに食事している。
もう一つはリライヴちゃん。お母さんに起こされて…

起こしたお母さんの身体を消し飛ばした。

……え？

「主…ゆっくりとお休みください…幸せな夢の中で、心静かに…」

声をかけられてまた意識が沈んでいく。

頭が重くて何にも考えられないけど…一つだけ分かる事がある。

…コレ…幸せや無いやる絶対…

そうは思ったもののまた抵抗できずに意識が落ちて…

夢の続きが始まった。

S I D E
O U T

第十八話・夢の中で『幻想』（後書き）

吹き飛ばしたら消えるほうが綺麗な気はしましたが、心温まる場面でもないのでスプラッターにしました。

第十九話・夢の中で『真実』

第十九話・夢の中で『真実』

S i d e ～ リライヴ

意識を落とす…深く深く…何も考えられなくなる位まで…
全てを夢に変えるために、過去だけを頭に叩き出す。

子供の頃…魔法と出会う前…

「なるほど…その子を売ると言うのですね。」

「はい…どうかお買い上げ願えないでしょうか？」

この世界には奴隷制度があった。

基本的に城に住む王の趣味なのだが、お金のない人や罪を犯した人が、王の趣味に当てはまる女性を売る制度。

基本的に自身の身売りが一般的なのだが、親権があれば子供を売る事もできた。

私はそうして、母親に売り渡された。

いい値を貰えたのか、カードを手に意気揚々と引き上げる母。

私はその日から汚され続けた。

皮肉な事に発展した科学の全てを使える王の下では、多少身体が壊れても関係なかった。

言う事を聞かなければ死なない程度の電流が首輪から流される上、自殺なんて出来るはずもない。
怪我位じゃ医療判があっさり治してしまうから。

心が壊れそうだったが、無反応だと激痛で起こされる。
怯えながら従い続けるしかなかった。

王が仕事の間はその小間使いをやらされていた。

そんな日々を送っていたある日…

時空管理局の一団が姿を見せた。

「魔法だかなんだか知らないけど…困るんだよねえそんな事言われ
てもさ。次元航行装置は結構な開発費をかけて製作した僕らの夢な
んだからさあ。外部から来て使用をやめる？何様だよ君達。」

「ですが環境汚染の危険性が高いテクノロジーが多過ぎます。それ
に我々がこの世界に来たのもこの世界からの化学兵器の流出が判明
したからなのです。」

「んー…確かに外から来た連中に盗まれてくのは気分悪いねえ…で
も、そつちで決めた法律はそつちでカバーしなよ。それとも何？死
にたくなければ我々につけ？」

「そんな事は…」

「何だ残念、そんな事言う組織なら正義の味方として来訪して殲滅してあげたのに。ま、それが嫌なら不干渉が妥当じゃない？」

「ならばせめて対魔導師用の監視員在住の許可を…」

「冗談じゃない、科学無しでレポートするような連中がいたんじやそれこそ情報持ち出し放題だよ。これからは魔導師と思われる奴がいたら即刻処刑するようにするから来ないように徹底してよね。こっちだって技術持つてかれない訳じゃないんだから。」

あくまで客側の管理局の代表さんが不利な会話が続く。

私はそんな中、飲み物を注いで回っていた。

「ところで彼女は…」

と、来ている局員で一番偉い人と思われるおじさんが私を見てそう問いかけた。

「うん？ああ、僕のペットさ。なんだったら使ってみるかい？」

心底楽しい事を思いついたかのように手を広げる王。

「ふざけるな！人を何だと思っている！！」

王の言葉に反応した若い女の人が立ち上がって叫ぶ。

助けてくれるつもりなのだろうか？

そんな希望を抱いて女の人を見て…

「やめないか空尉！」

「しかし！」

「そちらがどんな世界か知らないけど、おじさんのが分かってるね。ここではOKなのさ。とはいえ、そちらの法に触れる話を出したの
は悪かったね。」

王がそう言つと、女の人は私を見ながら座りなおす。

「さて、管理世界と言つものについて教えてくれてありがとう皆さん。極力不干渉に努めようと思つので…違法魔導師とか言つのがこないよう頑張ってくださいね。」

最後にそう締めくくつて、解散になった。

…結局、管理局の人達は私を見ただけで、救ってくれはしなかった。

数日後…

「それが無人世界で見つかった機械かい？」

「おそらくは。先日来訪した管理局の方々の装備と同じ反応です。」

「おやおや…たまたまとは言え無人世界で見つかるなんて、管理局とやらも管理が甘いなあ…」

王はそう言つて手にしたデバイスを玩んだ後、私に渡した。

「転移装置使つてもいいけど何が起こるかわからないものは出来るだけ人手で運ばないとね、よろしく。」

私はそのデバイスを手に歩き出す。

「…力…か。」

助けて欲しかった、でも誰も助けてくれなかった。

御伽噺の王子様なんて結局夢物語に過ぎなくて…もしいても、こんな所で穢れた私なんかのために来てくれる筈もなくて…

『…力が必要ですか？』

「え？」

不意に、頭の中に声が響いた。

『貴女は素晴らしい力を持っている。もし必要なら私が貴女の力になりましょう。』

「私の…力…」

家族に売られ、王子様も助けに来てくれなかった。
何処かから来た力を持った人達は、私を横目に去っていった。

…力があるのなら…助けてくれたって良かったじゃない…

管理局が去った日、久しぶりにそう思って泣いた。

…力があるのなら…助けて…見せる。

同じ境遇にあるのは私だけじゃない。私がここにいて、力を持って
いるのなら…!!

「…お願い。」

『了解しましたマスター。私の名はイノセント、名と共に叫んでく
ださい。セットアップと。』

私は手にしたデバイスを力いっぱい握り締める。

私は逃げない…逃げてたまるか…!!

「イノセント!!セットアップ…!!」

叫んだ瞬間、私の姿が変わる。

ごてごてとした装飾に塗れた重たい人形服から白一色の服に。

力が溢れる様に出てきていた。

戦った事なんてなかったけど、場所柄戦闘訓練は見たこともあるし、イノセントから魔法戦闘の情報が逐一受け取れる。

何より…

「何だこの反応は!?!」

「お前達が…お前達が…お前達が!お前達があああっ!!!!!!!!!!」

あんな王も、それを当たり前としているこいつらも許せなかった。

私はエネルギー路を破壊するために、杖上にしたイノセントを振り上げて…

「そこまでだ、もういいから起きろ。」

二対の剣を腰に下げた男の子に振り上げたイノセントを捕まっていた。

S I D E O U T

一回り幼くなったりライブの腕を掴んで鼻先を指で弾く。

「っ…速人何を」

「その通り、ご存知高町速人さ。そしてコレはいくらか昔の終わった夢。もうデバイス持ってんだからさっさと起きろ。」

「あ…っ!？」

一瞬俯いたりライブの身体が光り、サイズが元に戻っていく。同時に景色も元のドーム上の家になった。

…戻ってきた…か。

「よ、ちゃんと正気に戻ってるか？」

「…無理、しなくていいよ。」

元の姿に戻ったりライブは、何処か冷めた反応を返してきた。

「無理？何で？」

「私穢れてるんだよ！？それだけじゃない！あの後私が何をしたか、君が想像つかない筈が無い！！そんな私にヒーローを目指してる君が何でそんな優しくできるんだ！！」

思い出したものが辛かったのか、リライブは涙を流していた。
と言ってもなあ…

「とりあえず、穢れてなかったぞ。綺麗だった。」

「っ…こ、この馬鹿っ！男なんてやっぱ皆そんなのな訳！？」

「少しは元気になったか？ちなみに男は殆どそうだと思うぜ。綺麗な可愛い女の子に心惹かれられない男がいる筈が…男好き？」

いないと断言しようとして少し迷う。

そう言えばフレアも興味ないとか言ってたし…そんな馬鹿な…俺だけ異常なのか？

いや、違う！！どう見ても堅物にしか見えない兄さんだってっさり恋人作っただんだ！！普通だ！本能だ！多分…

本気で考え込んでいると、リライブから溜息が聞こえてきた。

「褒めてくれたとこだけ素直に聞いておく。とりあえず今ははやくてにアクセスしないとね。内部から異物が弄くるうとする訳だから多分防衛機能が働くと思う…守りはよろしくね。」

「OK。」

リライブは言いつつ魔法陣を展開する。

俺は承諾してそれを見守った。

「イノセント、お願い。間違っても防衛プログラムに侵食されたりしないですよ?」

『マスターなら大丈夫でしょう?』

「簡単に言ってくれるね…本職じゃないって言うのに。」

そうは言うものの、その辺の簡単な機会の扱いすら、魔法の扱いより遙かに知識が要りそうな世界で普通に暮らしてたりライヴなら大丈夫だろう。

魔力だけじゃなくてこんなところでも魔法に強い理由があったんだな…

呑気に感想を抱いていると、いきなり幾つもの化物が現れた。

体内の異常を駆逐するため抗体ってどこか。何か俺達がウイルスみたいだな…

「少しは回避とかもするけど…あんまりこっちに通さないですよ?」

そんな要らない心配をするライヴ。

夢の中で出てくる防衛プログラムなら死ぬも何もない。

俺の本来の戦闘スタイルを何だと思っているのか。そこまで考えて…

ライヴには話していない事を思い出した。

「あ…悪いライヴ。そっか、それであいつ等殺した事知られたら嫌われると思ってたのか。」

「っ…い、いきなり何を…」

自分から殺したと言わなかったリライブに対してあえて明言する。
ま、これくらいシヨックあったほうがわかりやすいだろうしな。

「俺元最強の暗殺者。生け捕りにするならともかく殺していいなら
普通に負けねえよ。」

「は…？」

意外な声を背に、俺は久しぶりに暗殺者としての全開で眼前の化物
の群れに飛び込んだ。

S i d e 〱 フ ェ イ ト 〱 テ ス タ ロ ッ サ

暖かい…夢だった。

母さんが生きている筈も無ければ、アリシアと共に私が並んだ事だ
って無い。

アリシアはまだ眠ったままだ、起きるまでちゃんと私が待っていな
いといけない。

「ごめん…だから、私はここにはいられない。」

雨の中、寄り添うアリシアの願いを私は断ち切った。
アリシアは少し固まった後、ポケットからバルディッシュを取り出した。

「…強いね、フェイトは…こんな幸せな夢の中なのに自分から出られるなんて。」

「私は…そんなに強くないよ。本当に強い友達が待ってる、それだけなんだ。」

私の答えに頷いたアリシアは、バルディッシュを私の手に乗せて空を見上げた。

「そうだよね…私もいい加減に起きてお礼を言わないとね、速人さんに。」

「え…アリシア…君は…」

驚いた私の顔を指差すアリシア。

「アリシアお姉ちゃん。はい復唱！」

「う…アリシア…お姉ちゃん。」

少し恥ずかしかったけどちよつと怒っていたアリシアに申し訳なかったから素直にそう答えた。お姉ちゃんはニツコリと微笑む。

「私はフェイトの中にいた一部。それは起きられないよ、全部いんだもん。私の一部を使って、私の記憶を渡して、全部完璧って事にはならなかったけど、全部失敗って訳でもなかった。だから私は半端にここにいる。」

「…戻るの？」

「フェイトが自分を見つけて、夢を振り切って進もうって言うのに、

お姉ちゃんが寝てるわけにも行かないでしょ？」

涙を流しながら胸を張るアリシア。

アリシアは母さんをずっと一人で待ってたんだ。

私みたいに待ってる友達も、アリシアにとってはまだいない。

…強いな、お姉ちゃんは。

「…分かった、待ってるから。絶対待ってるから。」

「うん…それじゃあまた…」

光になって解けていくアリシアの姿。

…約束を嘘にしないためにも、私もこの夢から覚めないと。

S I D E O U T

第十九話・夢の中で『真実』（後書き）

管理局アンチを突っ走るつもりは無いんですが、組織や法の限界と言う事でこういう事もあるだろうなあ…と。

後、速人が簡単に流してるのは昔話だからです。今同じ手管で暴れまわってたらさすがにとめます。

アリシアもちゃんと復活させ…人数多っ！！

第二十話・目覚める夜天

第二十話・目覚める夜天

Side フレアライト

「…気合一つで勝てると思うのか？」

「膨大な魔力に蒐集、転生を重ねた豊富な知識。普通に考えればただの魔導師二人で勝てる筈も無い。だが…」

私は振るわれる拳を手を取った。

瞬間、闇の書の表情がわずかに歪む。

「…貴様も」

「強大な魔導師の戦い『しか』知らぬお前に、武芸者は相手が悪かったな。」

軽く腕を引いて向きを変え、槍をふるって羽を切り裂いた。修復は簡単だろうか…

「シュート!!」

なのはから放たれた膨大な数のシューターが全方位から襲い掛かる。私は少しだけ間を広げ、着弾を待つ。あれだけの数を片翼ではかわせない、全方位防御を張るはず。

予測通り着弾した射撃を防ぐ闇の書。

「狙い通りだ!」

「っ!!」

私は全力で振り下ろした一閃にて残っていた片翼を防御ごと斬り落とした。

その後に柄でなのはの前に弾き飛ばす。

与えなければならぬのは魔力ダメージ、ならば彼女に任せるのが賢明だ。

「レイジングハート!!エクセリオンバスター!!!!」

「っ!!」

体制を整えさせる事無く接近した彼女は、宣言通り零距离砲撃を叩き込んだ。

桜色の光に視界を奪われた後、離れてくるのが見える。

「ありがとうございましたフレアさん、付き合ってくれて。」

「いらん心配だ。民間人が取り込まれている以上闇の書も無闇に破壊できる状態じゃないからな。」

あの馬鹿も一応は民間人に該当する。
心配するほどの雑魚ではないが…さすがに今書ごと破壊すれば死ぬ
だろう。

魔力の残滓が空気に溶けていき…

平然と浮かぶ闇の書の姿があった。

ご丁寧に魔力羽まで修復されている。

「ち…あれで駄目か。ならばスターライトブレイカーしかあるまい。
拘束は得意ではないが…」

「お願いします…レイジングハート、もう少し頑張ってください。
」
『了解です。』

私達は再び構えて中に舞う闇の書と向かい合った。

S i d e 八神はやて

…ぼけた頭はもう完全に覚めていた。
それくらいにリライヴちゃんの夢が重くて仕方なかった。

「主…どうされました？」

少し心配そうな声が聞こえる。夢の中で何度か会った…会ったたびに

忘れていた娘。

この娘がこんな残酷な夢を見せているのだろうか…そんな筈が無いと思う自分とそうかもしれないと思う自分にはさまれながらどうにか出来ないか考えて…

『はやて！管制人格！聞こえる！？』

「っ…白い魔導師ですか！？何故貴女の声がここに…」

『取り込まれた内部世界からハッキング中！っってそんな事はどうでもいい！！はやて！！』

名指して呼ばれてさすがに答えられない訳には行かない。

「聞こえとるよ、でもなんでリライブちゃんが…っってそれは後やゆつてたな。何？」

『面倒だから簡潔に言う！夜天の書を直して！具体的には面倒起こしてる呪い部分を切り捨てて！！』

「っ…無理だと言っている！そんな事…出来たらこんなに繰り返したりは」

『こつちからも足掻いてみるけど、基本的に全権を握ってるのははやてなんだ！だから後は任せたよ！！』

言うなり声が途切れて、意識が鮮明になってきた。

私にかかった力をとめてくれていているんだろう。

「聞いてたな？それじゃ頑張ろ。」

「この暴走は自分でもどうにも出来ません…もう…」

目を伏せた彼女に手を伸ばす。

夢の中だからなのか、足は自然に動いてくれた。

「…どうにもならん…私もずっとそう思って生きてきた。寂しくて悲しくて…辛かった。だから少しはシグナム達やあなたの気持ちも分かる。」

諦めていた、ずっと。このまま自由にならなくて、やがて終わってしまうんだって、その現実には抵抗は無かった。

けど…今は違う。

家族が出来た、友達が出来た。皆私に幸せをくれて、今まだとめようと頑張ってくれてる。

「名前をあげる。闇の書とか、呪いの魔導書とか、私が言わせへん。」

「無理です…もはや同化と言っている状態の呪いはもう切り離すと言った話では…」

「そりゃ簡単にはやらせてくれんしきつと貴女や私だけじゃ無理や。けど…家族や友達がまっとるのに、何時までも諦めてられんやろ。」

「ですが…」

見た目物凄く大人の女性にしか見えんのに、ボロボロと大粒の涙を流して諦めを言い続ける。余程悲しかったんだと思う。だけど…

「今貴女のマスターは私や。ちゃんとと言う事聞かなあかんよ。」

今までが今までだったわけやし、とびつきり素敵な名前を送ってあげたい…

「祝福の風…リインフォース。これが、貴女の名前…」

「あ…あ…」

動きが止まる。…リライヴちゃんがバックアップしてくれてるから、

暴走状態のプログラムからこっちは完全に護られてる。

コレなら…切り離せる！

S i d e ～ リ ラ イ ヴ

はやてへの伝言が終わり、私は書への干渉を続けていた。と言つのも、防衛プログラムと言つが別に外からの攻撃に限った話じゃ無く、当然内部で自身に害を成す異物を排除しようとする為、少しでもその妨害をこっちに集中させる事ができるから。

だから…その証拠に…

速人が積んだ化物の死骸は既に百を超えていた。

シグナムですら十体相手に出来るかどうかと言ったサイズの化物を、速人はすれ違いざまの一撃で殺す。

硬い殻の隙間を縫い、丈夫な皮膚をバターでも斬るかのように裂いて、片っ端から致命の一撃を振るう。

目で見えない位置から飛び出して急所を裂く。触覚を裂いて感覚を断つ。

それを考える様子も狙う様子も見せずに連続で繰り返している。

彼が始めに告げていた事がここまで見せられてようやく現実だと実感していた。

「最強の暗殺者…」

生き物の殺し方について彼ほど察しのいい人間はおそらく稀だろう。どうやってかは知らないが、知らない筈の化物含めて初見で急所を認識している。

次から次へとでてくる化物を死骸に変えていく速人。

しばらくして…巨竜が現れた。

あれの相手は速人の攻撃力じゃ無理だ。

今までの相手は殻の隙間や皮膚の薄い部分をつく事で一撃で倒してきた。

けど、竜種は金属より硬い皮膚で全身が覆われている。いくら速人でも隙がなきゃ攻撃を通す事なんて出来ない。

竜が放ったブレスを避ける速人。

私ができるしかないか…そう思ってブレスの終わりを待って…

竜の口内に逆手の刀を突き入れる速人の姿を見た。

角度から言って間違いなく頭に突き刺さっているだろうそれを口が動く前に腕ごと引き抜いた速人は、落ちていく竜に目もくれず降りて来た。

次元が違う。

何しろ私は速人の攻撃力じゃ竜種は『倒せない』と諦めていた。事殺す事に関して次元が違いすぎる…

敵が出てくる気配が無くなって、速人は私の前まで来て刀をしまつ。

俯いて膝に手を置いて動かない速人。

「速人…どうした…っ!？」

違和感を感じて様子を伺うと何故か大量の汗を流していた。

呼吸も荒いと言うよりは今にも途絶えそうに苦しそうなものになっている。

さっきまで汗一つ描いていなかったのに何で…

「あー気にするな…魔法とは別の力使ったから普通にヘトヘトなだけ。」

「別の力って…」

人間が魔力以外に持つてる通常的能力であんな真似ができる筈がない。

「っ…まさか…脳内麻薬!？」

だとしても異常ではあるが、一応人のまま常人を超える力を発揮する方法としては使える。

だが、決して体そのものが丈夫になる類のものじゃない、使い続ければ…

「他にもあるが正解…やってるのは気配遮断と動作強化。ナギハに見てもらったところ、さっきの状態だと半仮死状態…四分の一死んでいる状態らしいな。まあ心拍数とかは落ちてるし、あながち間違いないかも。」

「っ、ば、馬鹿な!そんな事すれば…」

無酸素運動どころの騒ぎじゃない。

けど納得できる事もあった。

フェイトどころか魔導師全般でも速いとはいえないスピードを、視覚に頼らない魔物でさえ捉える事ができていなかった。

これが速人の本来の戦闘スタイル…

「お、俺の事はともかく…はやての方はどうなった？」

「え、ああ…はやては起こしてきたし闇の妨害もこっちに集中させたからそろそろ切り離せるはず。そのタイミングで脱出しよう。」

「そっか…何とかなっただかあ…」

座り込んだ速人は私を見て微笑んだ。

「サンキューリライブ。」

…本当に、さっきの話をまるで気にしていないようないつも通りの
笑み。

でもそれも分かる。だって…あんな技術を身につけるのに一体どれ
だけの経験を…

殺しを積みばいいのか。

速人はそれをやってきたんだ。幸不幸どころの騒ぎじゃない、死ぬか生きるか。

死人を出すのに尊敬も何も無い。けど…
そんな世界にいたはずなのにヒーローになる事を選んだ事が、本当に凄いなと思った。

S i d e 八神はやて

「我等、夜天の主の下に集いし騎士。」

「主ある限り、我等の魂尽きる事無し。」

「この身に命ある限り、我等は御身の下にあり。」

「我等が主、夜天の王、八神はやての名の下に。」

リインに抱えられた状態でちよつとかつこ悪かったけど、そんな事はお構い無しに迫ってくるヴィータ。

ああ…本当に戻ってきたんやなあ…

皆の顔を眺めていると本当に頑張ってたよかつたと思う。
って言っても戦ったのはちゃん達と違ってそんなにたいした

事はできてないけど。

「なのはちゃん、フェイトちゃん、ありがとう。それからえっと…」

傍にいたなのはちゃんとフェイトちゃんにお礼を言っつて、他の知らない人に目を向ける。

「アルフ、フェイトの使い魔さ。」

「ユーノ」スクライア、よろしく。」

「フレアだ。」

「クロノ」ハラウオンだ。これ以上の自己紹介は問題が片付いてからにさせてもらおう。」

最後に名乗った黒い服の男の子が色々とバツサリ切ってしまった。さすがに状況はわかつとるからノンビリ話す気は無いけど、それでも聞いとかなあかんがある。

「リライヴちゃんと…速人君は？」

聞いたとたん皆の表情が曇った。そんな中でクロノ君が私に向かって静かに口を開く。

「まずそのことについて君達に聞きたいんだが、まだ取り込んでいるわけじゃないのか？」

「はい、夜天の書内に異物の反応はありません。」

クロノ君の質問にすぐに答えてくれるリイン。

けど今の質問が出てくるって事は、リライヴちゃん達がどこにいるか皆も知らんって事？

「こちらの現状を説明させてもらおう。君達が分離させたあの暴走体は、15分もすれば本格的な活動を始める。そうなれば周囲を喰らい無限に被害を拡大させていく。そうなる前に破壊、封印しなければならぬ。」

言いつつクロノ君が指差した方向には、見てすぐ分かる位暴走体つて感じの子の姿があった。下手な家より大きいんじゃないだろうか？

「問題点は二つ、アルカンシエルという砲撃を使用すれば完全に消失する事が可能だが、それを地表に打てば地球…少なくとも日本に關してはかなりの被害が出る事。もう一つは…君の聞いた二人が暴走体の中にいる可能性が高い事だ。」

「な…っ！..!」

ヴィータから悲鳴に近い声が漏れる。

私は助かったけど、状況はまだまだ絶望的なままだった。

けど…もう諦めん。

今の私にできる事が多いとは思えんけど、それでも諦めるつもりは無かった。

S I D E O U T

第二十話・目覚める夜天（後書き）

原作だとなのはにきつちりぶっ飛ばしてもらってから分離してますが、こっちはサポート込みで早めに復活してます。

第二十一話・それが夢想だと知りながら

第二十一話・それが夢想だと知りながら

S i d e 〉 高町なのは

私は必死でどうにか速人お兄ちゃんとリライヴちゃんを助けられな
いか考えていた。

はやてちゃんが助かって、守護騎士の皆も戻ってこれた。フェイト
ちゃんも脱出したから同じタイミングで出て来たと思ったのに…二
人はよりにもよって闇の書本体の中にいる。

このままじゃ闇の書の本体がとめられない。

だけど…

「…防衛プログラムの暴走限界が近付いたら、速人ごとでも星ごと
でもアルカンシエルを撃つ。」

クロノ君の声に思考を止められた。

お兄ちゃんごとく…撃つ？

「そんな…！」

思わずクロノ君の肩を掴むと、クロノ君は私の手を取って首を横に振った。

「放つて置けば地球が滅ぶ、それは避けなければならぬだろう？」
「でも…！」

静かに告げるクロノ君。

わかるけど…嫌だった。速人お兄ちゃんが死んじやうなんてと、静かに私の手を握る人がいた。

「フェイトちゃん…」

「まだ諦めるわけじゃない、そうだよねクロノ。」
「ああ。」

フェイトちゃん言葉に頷くクロノ君。見ればその手が不自然な位硬く握られていた。

…そうだ、フェイトちゃんの裁判とかとっても頑張ってくれたクロノ君が、そんなの認めたいわけがない。

だけど、そういう状況だつて覚悟が必要だから言ってくれただけなんだ。慌てる場合じゃない。

「なのはは私を、速人は母さんとアリシアを救ってくれた。今度は私の番。必ず助けよう。」

「フェイトちゃん…っ…!」

感激してフェイトちゃんに抱き付いてしまっ。

必ず助ける…助けてみせる。

私一人じゃないんだからきつと出来るはず。

改めて覚悟を決めると、エイミーさんからの通信が入った。

「イチャイチャしてるとこ悪いけどあんまり時間は無いよなのはちゃん！何とか策を考えてね!!」

「あ、はい!!」

イチャイチャしてるとか言われて少し恥ずかしかったけど、時間が無いからすぐに頭を切り換える。

「アレ？何これノイズ？」

「どうしたエイミー？」

「わかんないけど…なんかちょっとまずいかも。そっちで何か見えない？」

闇の書の闇を見ると、その前に三つの魔法陣が展開していた。

浮かび上がった魔法陣から姿を現したのは、私とフェイトちゃんとはやてちゃん…と似た、違う女の子達だった。

私とフェイトちゃんのバリアジャケットがまったく同じデザインな

んだけど、色が違う。

何より眼が、凍りつくように冷たかった。

「あれは…」

「彼女達はおそらく、闇の守護騎士プログラム。」

「はあ！？残骸にんなもん積んでる訳ねーだろ！！」

リインフォースさんの説明を切り捨てるヴィータちゃん。

でもこうして彼女達が現れた訳を一番知ってる筈なのははやてちゃん
とリインフォースさん以外にいない。

「残骸だからだ。防衛プログラムだからな、守護の機能を真似たの
だろう。自身の中に組み込んだ者を元に守護騎士とする。」

だからきつと正しいんだろう。

私は彼女達と本体を見比べる。

あんまり時間は無い。どうすれば…

「それよりどうする？ノンビリと相手をしている暇は」

「私とクロノ執務官で本体の外装を破る。そうすれば彼らも出てこ
れるだろう。」

私と同じ事を考えてたシグナムさんの言葉をとめるフレアさん。
ヴィータちゃんが鋭い目つきでフレアさんを睨む。

「テメーら二人じゃ四層の複合障壁なんて破れるわけねーだろ。」

「黙れ罪人。障壁を破るのは私だけで十分だ。硬く薄いものを破る

のは得意分野なのでな。特に障壁は穴があく事も無く抜いた場所から碎け散る。」

とりあえずお兄ちゃん達が出られれば他の対処もあるはず。だったら…

「あの娘は私が引き受けます。ひきつけるのは一人で大丈夫ですから、二人を早く助けてあげてください。」

「それじゃあ私はあの娘かな。」

私に続くようにしてフェイトちゃんも自分と同じ姿をした娘を見る。

「うーん…なら私はあの娘…って言いたいけど、戦闘やと完全に足手まといやしなあ…」

悔しそうにするはやてちゃんだけど、コレばかりはしょうがない。何にもしてない状態で混ざってもきつと危ない。

「広域方に他のメンバーを巻き込ませないのは至難の業だ、守護騎士全員で当たってくれ。フレアなら障壁は破れるし、僕も切り札を受け取ってる。使い魔二人も一緒ならば本体相手でもそう遅れを取らないさ。」

「使い魔って言うな！」

「にやはは…」

方針は決まった。

動かない私達を警戒したまま同じく動かなかった三人にそれぞれ飛んでいく私とフェイトちゃんと守護騎士の皆さん。

シューターを撃って離れると、意外にも素直についてきてくれた。

本体から少し離れて向かい合う。

「それにしても…自分の偽者なんてやりにくいね。」

誰にでもなく呟いたつもりだったんだけど…

「間違いとはいえませんが、少々心外ですね。貴女も『私のオリジナル』呼ばれて見ますか？」

目の前の私の姿をした女の子が淡々と答えた。
気持ちなんてまるで見えない声だったけど、話自体は偽者の否定だった。

「…そうだね、ごめん。」

「とはいえ、元より名前など無い身ですからかまいません。それよりも始めましょうか。」

鏡あわせみたいに構えあう私達。

「我が銘は星光の殲滅者、始めましょう。私の魔導と貴女の魔導、どちらが上か…」

「全力全開…手加減なしで!!」

お互いにデバイスを構えて向かい合い…

「デイベインバスター!!」
「ブラストファイアー!!」

砲撃魔法をぶつけあった。

Side〜フェイト〓テストロツサ

「よし!最初はキミだな!!」

自分の姿をした青い少女。

何と言うか、物凄く元気だ。

「でも何でさつきかかってこなかったの?」

話してる時間が長かったから襲いかかられるかと思ったけど、特にそんな様子もなかったのを聞いてみる。
すると、彼女は私を真っ直ぐ見て言い切った。

「それじゃかつこよくないじゃないか!!!!」

思わず頭が真っ白になってしまった。

この娘本当にあの闇の書の闇の防衛プログラムなのだろうか？

「ボクは強いんだぞ！とつてもとーつても！名乗りもしないで余所向いてる奴に攻撃するなんてセコい事する訳ないじゃないか！！」

なんだか…悪い娘に見えない。

けど自分の姿はやめて欲しい。正直恥ずかしい。

「我が銘は雷神の襲撃者！さあ！我が太刀を恐れぬのなら正々堂々かかってこーい！！」

言いつつ彼女は通常形態のバルディッシュ…に良く似たデバイスを振り上げる。

「あの…その形態だと斧だと思っただけど…」

「いいの！太刀の方がカッコいいだろ！！さあキミも名乗れ！！」

自分と同じ姿で言ってる事が恥ずかしかったり、全然悪い娘に見えないのに闇の書の闇の防衛プログラムだったり、いろいろ複雑な気持ちだけで…

「時空管理局囑託魔導師、フェイトII テスタロッサとバルディッシュ・アサルト。行きます！！」

姉さんとの約束があるから、負ける訳にはいかない。

私は空を駆けて彼女と斬り結んだ。

Side ヴォイタ

「あたしらはこいつか。」

「分を弁えよ塵芥が。闇統べる王たる我に貴様ごときが許可もなく口を開くな。」

はやての姿をしたそいつは、何ていうかかなりムカつく奴だった。
：あの傍迷惑な暴走体の作った連中だ、潰しちまってもいいよな。

「偉そうな事言ってるじゃねーよ出来損ないの暴走体が。そんなに闇が好きなら闇に帰りやがれ。」

「口を開くなと言ったぞ塵芥！王たる我に言葉を紡ぐのが許されるのは貴様等の主である小鴉のみと知れ。」

そう言っただけインフォースに抱えられたはやてを指す偽はやて。

こいつ好き放題言いやがって…

「さて…小鴉よ。貴様ら纏めて我に下る気はないか？雑兵よりは使える貴様らならばそれなりの待遇を考えてやってもいいか？」

思いつき両手を広げて嫌味な笑みを浮かべてはやてを見る偽はやて。

どんな返事をするのかと思っていたら…

「世界の半分を…ってか？引っ込め塵芥。」

はやてはアイツの真似をした。
大物ぶつてた偽者が思いつきり表情を歪める。

「その決定権があるんはお前やなくてあっちゃろ、待遇も何もないわ。」

はやては言いつつ未だに障壁の中にいる闇の書の暴走体を指差す。
…そりゃそうか。はやての姿で王とか言うから思わず納得しかけたけど、こいつあたしらの…守護騎士のパクリなんだっけ。
だったら主のはやてとの交渉権なんてハナからねえな。

「皆、任せてええか？」

「はやてのフリしてるだけで重罪だ、キツチリ潰しとくから任せてはやて。」

はやてに答えを返すと、強大な魔力を感じる。

「おのれ…ほざいたな小鴉！！」

「その小鴉の偽者の癖に威張るのは少し自信過剰過ぎや。」

それを最後にリインフォースははやてと共に離れる。

後に残ったのは偽者だけ。

「…あくまで抵抗するか塵芥。いいだろう！王の力の前に絶望しながら散るがいい！！」

未だに王だなんだと叫ぶ偽者。

守護騎士システムの残骸から生まれたくせにとことん偉そうだなこの馬鹿。

「それ以上はやての顔で喋るんじゃねーよデッドコピーが。」

「言っても聞くまい。叩き斬った方が早い。」

「そうね、引き付ける必要も無いわ。」

「これ以上主を汚す前に葬るとしよう。」

以心伝心って言うのか、これ以上ないくらいに心がまとまった瞬間だった。

これ以上このはやてのデッドコピーを見ていたくない。

「…のっ！消し飛べえっ！！」

流石にキレたのか、偽者は砲撃を放ってきた。

さっさと倒すか。こんな奴百害あって一理なしだ。

S I D E O U T

「いや、欲張るもんじゃないなまったく。ははははは！」

真っ暗な空間を一通り見渡した後、とりあえず笑ってみた。
リライヴの姿だけは見えるし地面の感覚もあるなんか妙な空間だ。
まあ無かった所で魔法は使えるみたいだから問題は無いが。

「笑い事じゃない！！何が『内部から完全に破壊した方がよくないか』だ！！確かに元を断てば外部への影響も全部収まるけど、そう
そう何度も上手くいくはずないでしょ！！」

と、リライヴに説教される。

結構涼しい顔してる事が多いコイツがよく怒るもんだ。

「ハア…とにかく脱出しよう。大体破壊するなら管理局の戦艦の砲
撃の方がいいよ。艦首砲のほうガスがに一介の魔導師より攻撃力
あると思うし。」

「艦首砲って…そんなもん地上に撃つ気か？」

だとしたらシャレにならない。現代兵器じゃあるまいし、少なくとも
もここら一帯の地形が変わるだろう。

と、考え込んでいるとリライヴから溜息が聞こえてきた。

「そんなの宇宙で撃てばいいでしょ？広い上に生命の無い宇宙なら何の問題も無い。」

「へ？いや宇宙でって…転移魔法？暴走体ってそんなもん素直に通じる相手なのか？」

そんなにホイホイ上手くいくなら戦闘中に使う魔法ってむしろ転移魔法のほうがはやりそんな気がするが…
敵の転移なんて自由に出来るもんなのか？

「確かに無条件で簡単に出来るわけじゃないし、転移って言っても移動時間はあるし、開始、終了時の間が大きいから戦闘中に安易に使えるものじゃない。けど魔力ダメージ与えたりして昏倒させたり、そもそもまともな意思の無いもの相手なら普通に使えるよ。」

合点がいった。それなら確かに宇宙で破壊するのが理想的だ。

って事は、俺達がここにいたら撃てないか…クロノたちが『断腸の思い』で決断して打ち抜いてくれて家族を泣かすかの二択になる訳か。

さっさと脱出しないとまずいなこれは。

「外の状況って分かるか？」

「まあ一応。闇の書が守護騎士もどきを作ってそれと戦闘中みたい。」

「は？」

守護騎士もどきとか言われても意味が分からなかった。

リライヴもどう説明していいか考えているようだったが、現状を考えたのか説明を諦めた。

「この暴走体にリンクしてるのはとフェイトとはやての偽者が戦ってるって感じでいいよ。暴走体が消えれば自然消滅するからさっさと脱出して破壊するのが妥当かな？」

あの三人の偽者と言うのがどうにも要領を得なかったが、とりあえずこのままだと…

グイータ達と同じ様な子が三人消える事になるって事だけは理解できた。

「なあ、何とか切り離せないか？そのリンクとか言うの。」

俺の提案の意味を租借するように数瞬間を置いたリライブは、呆けたような力のない表情で俺を見た。

「ちょっと…言ってる意味分かってる？暴走体…闇の書の闇は病気のウイルスみたいなものだよ？病気を治すのにウイルスを別枠で保管して護る医者なんて聞いた事ないよ。ヒーローって言うけど速人

はといったどこまで救う気なの？」

「未来があつて幸福を感じる何かがあるなら、それがプログラムだろうとクローンだろうと関係ない。」

リライヴの表情に影が差す。

…分かつてる、綺麗な夢ではあるが所詮は夢想だと。

端的に言えば闇の書事件に振り回されてる今この瞬間、何の罪も無い人が事件事故で死んでいるかもしれないんだ。

『全てを救う』なんて絶対に届かない夢物語。

だけど、ハイそうですかと諦められるなら、そもそも今こんな場所にいない。だから…

「大体今生まれたんだつたら守護騎士より罪状ないんだぞ？交戦中だから公務執行妨害があるだろうがそれで殺されるのかよ。」

救いに疑問を持つ事そのものを笑い飛ばして見せる。

目を丸くして固まったりリライヴは、唐突に大笑いした。

「何かおかしいんだよ、お前だつて管理局に敵対してまで救い手やつてる大馬鹿じゃねえか。それだけ強けりゃどうとでも生きられる癖に。」

「そうだね、ホント馬鹿ばかり。でも…うん。速人の言う通りだ。罪状もないのに殺されるなんて変だね。」

リライブははやてにアクセスしていた時と同じように魔法陣を展開する。

「今度は完全な暴走体だから、さっきより数多いよ？って言うか、私がつついてる間無限に」

「分かってるって。時間ないから早めに頼む。」

リライブが瞳を閉じた瞬間、周囲が歪んでさっきまでいなかったような化物まで現れる。

完全気配遮断やらなきゃ、兄さんとかとの訓練は8時間とかでもぶっ通しでやれるんだが…正直使わないと間違はなく食い殺されるだろうからな。

「ま、そのくらいの無茶は当然か。ヒーローだからな！」

『そうですね、それにマスターなら必ずなれます。』

「お、嬉しい事言ってくれるな。それじゃあ第二幕…行くぞ。」

心静かに敵の群れを眺め、一瞬の躊躇もせずに飛び込んだ。

第二十一話・それが夢想だと知りながら（後書き）

御三方出しちゃいました（汗）

名は無いとか言って名乗ってる星光さんですが、こっちは名じゃなくてシグナムの『烈火の将』等と同様の物としてます。
でも銘…か？

第二十二話・残された時間の中で

第二十二話・残された時間の中で

「は…はっ…」

『マスター、もう気配遮断は意味を成していません。通常の代謝と呼吸で動くべきです。』

「はあっ！…はあ…っそ！…」

一斉に喰らいついてくる獣の群れに二閃の風翔斬を放ち一度距離を取る。

呼吸器系を整えるのはいいんだが…

「っ…ぐ…くそ…」

下手に循環がいきなり良くなるせいで身体のダメージがより理解できる。

つまり、全身から痛みやら痺れやら苦しみやらが一気になだれ込んでくる。

敵にとってはそんな事がまったものでもないので、唐突に気配が明瞭になった俺に対して餌でも貰ったかのように飛び掛ってくる。

「っの…やかましいんだよ！…」

食いついてくるワームにカウンター気味の一闪を振るいその身体を
両断する。

今いいの喰らったら間違いなくそのまま意識が切れる。

今まで一発も喰らってないとはいえ、それと重なった疲労とは別問
題だ。

「さてと…あんまり頼るのも良くないと思うが、何か魔法系で便
利なのないか？」

正直そろそろこのままだとやばい。

気配遮断が使えない俺なんて遠当てが使えて空を走れるだけの半
人前剣士に過ぎない上、疲労困憊じゃそのうち何かミスる。

『ありますよ。』

「嘘！あんの！？」

学校で（授業そっちのけで）魔力制御トレーニングしてたけどそんな
便利なもの聞いた覚えが無い。

…って言うかそう言えば、純粋な剣技の精度が落ちるからってナギ
ハが魔法関係引き受けてくれてたんだった。教える訳無いか。

『ただ…魔法の制御が必要になってくるので高度な業は使えなくな
ると思いますか…』

「OK問題なし。」

ここまで疲れてて普通の業なんて使いこなせない。
けど、魔法で使用するのは魔力だし、俺の意識がつながってるうち
はどうにかなる…等。

『では魔法の情報を伝えますので上手く制御してください。』
「了解！」

素人補助用の機能なので本来戦闘中に使うはずも無いが、俺は魔法
関係素人だし使えるものは使えるんだから問題ない。

「エア…ガイスト!!」

魔法を発動させると、風が身体を包み込む。

リライヴのバーストモードみたいなもんか？

『出力は大して変わりませんが、大半の斬撃に風の刃が付与します
ので攻撃力は上がっています。飛行も出来ませんが戦闘機動は練習無
しだと少々難があるかと。』
「いや、十分使えそうだ。」

風翔斬は空気を刃状に磨ぐイメージを放って使ったのが最初で…高
速移動したかったら…

「音速風『エアソニック』!!」

俺はブレスを放とうとして飛んでいる飛竜に向かい…『飛ぶ』。
飛行魔法など使えない俺は飛行する事は出来ない。
なので…

竜巻を背中に乗せる感覚で、集束させた風に吹き飛ばしてもらった。

エアガイスト自体の効果として、空気抵抗を限りなく緩和してくれるため、自力じゃ不可能な領域の速度でも問題なく飛べて…

べじゅって止まるじゅっ

すれ違いざまに飛竜の片翼の骨を切って飛べなくしたが、高く飛びすぎて残っていた連中がリライヴに向かう。

「く…もう一回っ!!」

逆に地上に向かって高速移動する。

先頭にいたワームを両断した俺は、その肉塊をクッションに背中から突っ込んだ。

…どろどろするが何でかは考えないようにしよう。

「通すと…思うなよ!!」

俺はナギハを握り締めて、再度化物の群れに突撃した。

Side 高町なのは

「っ…」

「遅いですね。」

私と同種の魔法を使う筈なのに物凄く接近してくる星光ちゃん。デバイス同士がぶつかり合う音が響く。

確かに運動オンチで格闘戦なんて諦めたけど…

「接近戦でやれる事は残ってるんだから!！」

『デバイスバスター・インパルス。』

近接専用砲撃魔法。

格闘が下手だから身に着けたそれは、どんな体制でも掌さえ相手に向けられれば放つ事ができる。

けど…障壁とぶつかった感触がしたと思ったら、背後に魔力を感じた。

「私は貴女の情報を得ていますが、連携ならともかく奇策で使ったところあたりはしません。」

高速移動で回避された!?

気づいた時には遅く…

「ブラストファイアー・インパクト。」
「あああああつー!!」

物理破壊の衝撃。

私に出来たのは即座に張れるけど弱い障壁を、魔法の直撃と同時にバーストさせる事でダメージを緩和させることだけだった。

それどころか、星光ちゃんは吹き飛ばされてよろめく私を二重のバインドで拘束する。

「私は『理』を司る者です、闇の書からの力の供給があり出力でも上回っている今の私に、理も力も劣る貴女では勝機はありません。」

砲撃の発射態勢に入っている星光ちゃん。

だめ…避けられない!

「ブラストファイアー!」

拘束されたままの私に向かって来る光の柱。

どうにかバインドを解こうとしていた私は…

何かに吹き飛ばされた。

そのまま海に落ちる私。何とか浮上して私を吹き飛ばした人を探す。

「フ、フレアさん!？」

「お前達それぞれの能力をベースに、膨大な記憶からの経験値と暴走体から供給される魔力。お前一人ではどうにもならないだろう。」

「でも…」

相手が私の姿だから、ここで人に頼って多人数で戦うのは何か違うと、そう思っていたけど…

「本題を勘違いするな、アレを放置する気か。」

フレアさんが指差した場所には、暴走体を引き付けて抑えてくれているユーノ君とアルフさんの姿があった。

「対一なんて、こんな状況で言う事じゃない。」

「わかりました、お願いしますフレアさん。」

「ああ、行くぞ。」

構え直す私とフレアさんの前で、同じくデバイスを握り直す星光ちゃん。

「この身の魔導が何処まで通じるか…これで本格的に試せそうですね。」

相変わらず揺れない表情のまま、静かにそう言った。

Side「フェイト」テストロツサ

「遅いつ！」

「くうっ！！」

大剣の形態のデバイスを手に切りかかって来る雷刃の襲撃者。

とにかく真正面から突っ込んで来て戦法も何もないんだけど、背後を取るにも向こうの方が速くて、絡め手を使おうにもそんな暇は殆どない。

何度かあったチャンスにバインドとかを使っては見たけど、勘なのか戦闘経験の名残なのか、かなりの速さで躲された。

この娘…強い。

「電刃衝！！」

「プラズマランサー、ファイア！！」

同数の射撃魔法を撃ち合うが、幾つか貫通された。彼女の方が基礎能力は上なんだ、同種の魔法の撃ち合いは無駄に終わる。

「光翼斬！！」

ハーケンセイバーと同種の刃が、鎌状になったデバイスから放たれる。

「サンダースマツシャー！！」

砲撃魔法を放って刃ごと飲み込む。

と、直線上にいた筈の彼女はアツサリ砲撃を躲す。

っ…技直後にあんなデタラメな動きっ…

砲撃の真っ最中で動けない私に迫って来る彼女。

まずい…やられる！

「ブレイズキャノン。」

青い砲撃が彼女の影を飲み込んだ。

今のは…

「大丈夫か、フェイト。」

「クロノ！」

模擬戦で何度も見た、クロノの砲撃魔法だった。

でも、クロノはフレアと一緒に本体に向かってたんじゃ…

「本体は！？」

「あつちには使い魔二名が引き付けてくれてる。どのみちりライヴが提案したプランにはあの本体の修復能力を上回る攻撃が必要だ、少なくともなのはとフェイトの手が開いてくれないと本体への攻撃の手が足りない。」

見ればアルフとユーノが本体相手に防御魔法とバインドを使って立ち回っていた。

暴走しているから作戦とかは無いけれど、出力は高いから大変そう
だ。

早く…速人を助けないと。

「二人掛り！？ずるいぞ！正義の味方の癖に！！」

「生憎だが僕たちはそれほど綺麗な存在じゃない。時には護るべきものすら護り切れない普通の人間さ。だから、敵にまで正々堂々何て甘い事は言っていられない。」

クロノは言いながらデバイス、デュランダルを構える。

クロノがとても優しい事はよく知ってる。難しい顔や真面目な表情ばかりだから分かり難いけど。

護るべきものを護る為に…

「ごめん、私も…全力で行く。」

「むー…よし！そこまで言うなら来いっ！」

少し不機嫌な表情をしていた彼女だったが、何かを思いついたように笑ってデバイスを構える。

「…もしかして、二人纏めて相手にして勝ったほうがカッコいいから？」

「な、なんだって！！エスパーだったのか君は！？」

思いつきり間違った方に驚く彼女。

思い付きだった予想だけど当たりだった。

うう…何か本当に戦い辛い…

S i d e 〉 シグナム

「得意の剣はどうした！？その鉄槌は飾りか！？何も出来ないまま退場するか！！？」

戦闘開始からしばらく経つが、私達は未だに主の偽者に接近する事ができていなかった。

と言うのも、膨大な魔力を利用して接近しようとする道を次から次へと広範囲に塗りつぶしていくのだ。

幾つもの魔法陣から放たれる広範囲魔法で。

「魔法陣の複数展開、射撃。今回は塵芥なりに使えるものを用意してくれたらしいな。お陰で掃除が楽に出来る。それに、こんなものもあるしな。」

言うなり、無数の光弾が偽者の周りに生成される。

「やべえ…これはっ…」

「シューティングスター！！！」

全方位に容赦なく放たれる魔力弾。私はシュランゲフォームで付近の弾を片っ端から打ち落とす。

だが…

「バースト！！！」

「な、ぐああっ！！！」

魔力弾が一斉に爆発した。

咄嗟にパンツァーガイストを展開したため即死は免れたものの、全方位から来る余波に包まれ、かなりのダメージを受けた。

ヴィータ達の様子を確認しようと思回すと、ヴィータもダメージは受けたものの凌いだらしく、問題はなさそうだった。だが…

「すまん…不覚を取った…」

ザフィーラが気絶したシャマルを抱えていた。

片腕が折れたか深手か…使い物にならないらしく、だらりと垂れ下がっている。

「下がっている、ここは私とヴィータが引き受ける。」

「そうしとけ、こんな奴すぐにぶっ飛ばしてやるよ。」

ザフィーラが戦線を離脱するのを見届けて、私はヴィータに念話を送る。

『…埒が明かん。どちらかがつぶれるのを覚悟で突撃し、奴を討つ。無事なほうはすぐに』

『それはあかんよ、二人とも。』

唐突に、主はやてから念話が届く。

「…何のつもりだ？自力で飛行も出来ん小鳥が。」

「は、はやて！？何でこっちに」

「私は戦闘技術ないけど、折角出来る娘がおるんやから頑張ってもらわんと。こんな状況やし、四の五の言うんはなしや。」

驚くヴィータにかまわず私とヴィータの間まで来るリインフォースに抱えられた主はやて。

私は連れて来たリインフォースを睨むが…

直後、二人は途方もないことをしでかした。

「な…につ!？」

儼然とした態度をとり続けていたあの偽者が狼狽する。

そこには、リインフォースだけの姿があった。

だが、闇の書を切り離し疲弊した力のない先までの状態と違い、明らかに全快の…それまでと異なる色のリインフォースが。

「融合機主体のユニゾンだと…小鳥、貴様正気か？」

『私も出来ることはやらんとな。それに…無駄打ちしとった広範囲魔法が相殺されたらする事ないやろ。踏ん反りかえつとるだけの横着者には。』

「な、何だとつ!?!」

激昂する偽者だったが、主の声はそこで途絶えた。姿がない以上文句も出てこないらしく齒軋りして我々を睨みつけてくる。

…何の威厳もないな。

「そう言う事だ。将、ヴィータ、危険は承知だが手伝わせてもらおう。」

「…前出んじゃないぞ、オメーがダメージ受けたらはやてにも行くんだからな。」

「ああ、善処しよう。」

言いつつ距離を取って広域魔法を展開するリインフォース。

…主にここまでさせて、負けるわけには行かん。

「是が非でも勝たせてもらつぞ。塵芥に負けることになるが詫びは言わん、早々に散れ。」

「ほざけ!!!」

S I D E O U T

第二十二話・残された時間の中で（後書き）

速人はなのは達より明らかに低い魔力なのでそんなに長時間今回の状態では戦闘できません。

ただし、数式を知識として、自然を感覚（山などでの修行）で理解しているので変換資質から派生する風の扱いは割と上手いです。

エアガイスト

魔法の為漢字なし。魔力の風を纏う。

効果は、攻撃に風の刃や風圧を上乗せする、空気抵抗を緩和し動作を補助する、纏っている風の乱れから攻撃を感知する、の三つが主音速風『エアソニック』

ウインドムーブとは別物。瞬間的に加速する。停止方法は自力が逆噴射と言う制御面倒で不便な業。しかも、目的の位置で丁度止まる程度に加減すると今度は速度がでない。

自分でやっというてなんだが…王様強いなあ。

第二十三話・夜の終わり

第二十三話・夜の終わり

S i d e 〉高町なのは

「パイロシューター。」
「アクセルシューター！」

星光ちゃんの放ったシューターに当たらないようにシューターを操作する。

近付いて来ていた星光ちゃんのシューターはフレアさんの槍で消される。

私が相殺出来ればよかったんだけど、本体から力の供給がある上に私よりも強い星光ちゃんと撃ち合うと幾つか消し切れない。

下手に残ってもフレアさんが近付けないから、攻撃を通すために敢えて相殺させずに撃ったんだけど…

「無駄です。」

綺麗に障壁に防がれた。

まったく難なく防いだ様子を見ると、砲撃の直撃かフレアさんの槍じゃないと通らないかもしれない。

瞬間、バインドで拘束された。

「っ！」

「ブラストファイアー!!!」

砲撃魔法が迫って来る中、バインドが破壊されるのを感じた瞬間に息が詰まる。

態勢を整えて何が起こったのか確認すると、すぐに状況はわかった。

「すみませんフレアさん。」

「いいから構えろ。」

私とは反対側で砲撃を避けていたフレアさん。

バインドを破壊して蹴り飛ばしてくれたんだろう。

「やはり二人相手は少々厳しいですね。時間が経てば暴走が始まるでしょうが、出来る事ならそれまでに殺しきりたいのですが…」

静かに物騒な事を言う星光ちゃん。

魔法戦を、全力をぶつけ合うのを楽しんでいるのはシグナムさんやフェイトちゃんみたいだけど、大本のせいなのかどうしても話が破

壊に向かうみたい。

「悪いけど…ここで殺されちゃう訳にはいかないんだ。」

「わかっています、さあ続けましょう。」

再びシューターを生成する星光ちゃん。

私も合わせようとして…

『砲撃を撃て。』

そう一言だけ念話が来たと思ったら、フレアさんがいきなり突撃した。

「パイロシューター！」

「あ…」

一瞬反応が遅れたと思ったその瞬間、星光ちゃんからシューターが放たれた。

完全に避けられるタイミングじゃないそれを目の前に、フレアさんは『加速』した。

鈍い炸裂音とともに舞う赤い飛沫。

けど、フレアさんは止まらずに星光ちゃんの前まで辿り着いた。

障壁を展開する星光ちゃんに対して、フレアさんは何も言わずにグレイブを振り抜く。

私の防御は高い方だから、普通の攻撃なら防げると思っけど…

フレアさんの槍は防げない。

「っ!？」

先端が触れた瞬間にまるで何もなかったかのように掻き消える障壁。何とか躲した星光ちゃんのリボンが宙を舞う。

砲撃を撃てって言うてはいたけど、巻き込めって意味じゃない筈。なら…チャージして機を待つ。

「シャドウムーブ。」

星光ちゃんが闇に溶けるように高速移動に入る。

捨て身で近付いたフレアさんからあっさり距離を取る星光ちゃん。だけど…高速移動魔法には始めと終わりに停滞時間がある!!

「デイベイン…バスター!!!」

「く…!」

狙っていたからチャージは十分、後は当てるだけ。

私が元なら、フェイトちゃん程得意じゃない高速移動の終わり。

避けようのないタイミングで放った砲撃は、星光ちゃんを飲み込んだ。

Side 〽 フェイト 〽 テスタロッサ

「はっ！」

「っ、このー！」

速度を生かして擦れ違う瞬間に一閃。

防いだ彼女は私に向かって来ようとする。

けど…

「スナイプシューター！」

「うわっ！ま、また！？」

クロノのシューターがその進行を妨害する。

彼女も暴走体から生まれた以上、経験値となる情報量は私よりはるかに上の筈。

けど…幼稚だから必ず隙が出来る。

ってクロノは言っていた。

本当ならむしろ焦らなきゃ行けないのは速人が捕まってる私達の方なのに…

「なんで二人掛かりの癖にそんなちまちまと！！合体技とかないの！？」

「子供の遊びじゃない。そういう事は速人と余所でやってくれ。」

「子供だっけ？言ったな！！『力』を司るこのボクを馬鹿にした事…後悔させてやる！！電刃衝！！！」

六つの魔力弾が私とクロノに向かって三つずつ飛んで来る。

それ自体は普通に躲せたけど…

「くっ!?!」

クロノにバインドがかかる。

幼稚とか言ってたのになんで!?

「捕らえたぞ、まずは君からだ!雷刃滅殺…!」

大剣状になったデバイスを振り上げる雷刃の襲撃者。

名前は妙だけど、間違いなくジェットザンバー。

フォトンランサー・ファランクスシフトを除けば間違いなく最強の攻撃。

間に合うかわからないけど助けようと思った瞬間…

念話が聞こえた。

S i d e } クロノ || ハラウオン

「極光斬!!!」

振り下ろされる一撃に対してどうにかバインドの解除が間に合った
僕は、全力で防御魔法を展開する。

さすがに半端じゃない威力で、終わる頃には僕は完全に戦闘不能と
言った様相になっていた。

バリアジャケットも僕の身体もボロボロだったが、デュランダルは
無傷だった。

このデバイスの性能がなければ僕は今頃墜ちていたかも知れないな。

「くっそー、まだ落ちないのか！ってうわっ！！」

僕を見て悔しがっていた彼女は金色のバインドに拘束される。

「ごめん、けど時間がないから。」

「な、なんで!?!」

うろたえる彼女の背後で、フェイトはバルディッシュを振り上げた。

…二対一で一人相手に必殺の一撃なんて隙が出来るだけ。

だからフェイトには彼女を落としてもらう事にした。

拘束されて動けない彼女に向かって、バルディッシュを振り上げた
まま、フェイトは空を駆けた。

「穿て…ブラッディダガー。」

「小賢しい！アロンダイト！！」

リインフォースが放ったダガーを飲み込む砲撃魔法。けど、さっきまでと違ってこれなら近付ける！！

「ラケーテン…ハンマーツ！！」

「ち…いっ！！」

偽はやてが張った障壁に、アイゼンがぶち当たる。

硬えが…鉄壁ってわけでもねーのか、最初襲った時の高町な…なんとかと同程度。

つまりこれなら…

「ぶち抜けええっ！！」

ぶっ壊す事が出来る。

障壁を抜いたアイゼンは、偽はやての甲冑を掠める。

「塵芥が！！」

「ぐ…」

振り抜いたところで頭を捕まれる。

「デイベインバスター・インパルス!!」

躲しようのないタイミングで放たれたゼロ距離砲撃は、アタシの左肩を打ち抜いた。

頭を捕まれてた筈…と偽はやてを見てみると、腕が裂けていた。

シグナムの空牙が…

助かったのはいいが、高速移動でも使ったのかまた距離を取っている。

「大丈夫かヴィータ？」

「問題ねー。って言いてーけど左腕はもう使い物にならねーな。」

「融合機主体のユニゾンにどんな悪影響があるかも分からん。長引かせられん以上次で決めるぞ。」

シグナムの言葉に頷いて、リインフォースを見る。

アイツと偽はやてが打ち合ってる隙に突撃する他にないから、アイツか偽はやてが動かないとあたしすらも動けない。

「デアボリックエミツション。」

リインフォースによって展開される巨大な闇の球体。

それを見た偽はやてが…笑った。

「塵芥なぞ相手にせんでも…貴様が消えれば終わりだろう小鳥!!」

偽はやての背中に広がる、巨大な魔法陣。

まずい…高範囲攻撃のデアボリックエミツションを撃ちぬく気だ…!

『ヴィータ、奴がアレを撃つた隙に止めをさせ。主は私が。』
『っ…そ！しくじったらぶっ飛ばすじゃすまねーぞ！！』

念話で言うなり飛び立つシグナム。あたしは魔法の発動を待つ。

「消し飛べ！！エクスカリバー！！！」

禍々しい光を称えた砲撃が、デアボリックエミッションを消し飛ばした。

今しかねえ！！

「ラケーテン…ハンマー！！！」

「何だと…っ！？」

魔法を放っている真っ最中の偽はやての元へ、あたしはアイゼンを手突撃した。

S I D E
O U T

黄金色の閃光が青い少女に、

赤い閃光が白い少女に、

それぞれ伸びて行くのが見える。

喰らえば文字通り消滅するだろう攻撃を躊躇いなく振るうつもり
の二人。

それを視認した段階で、俺はすぐさま限定解除する。

通常的身體能力を無理やり引き出すための脳内麻薬などの自力調整
もちろん一瞬でやって負荷がないはずがないが、コレで最後だろ
うから気にする事もない。

「二連、風翔斬『ウィンドスラッシャー』!!」

納めた両の刀を連続で抜き放ち、二閃の風の刃を放つ。

放たれた風の刃は、それぞれ光と少女の間を抜け、光が一瞬停滞す
る。

「ぶっつ…間髪…!!」

俺は刀をしまつてその場の全員に聞こえるように大声で言い切つた。

「速人！自力で出られたの！？でもなんで」

「そうだよ！何でとめやがつた！」

フェイトとヴィータそれぞれから非難の声が届く。

何でって本当にこいつらは…

「んなもん三人になんの罪も無いからに決まつてるだろうが。」

「は…あ！？」

俺の言葉に目をむくヴィータ。

ま、この辺はクロノかフレアに聞かなきゃ分からないがな。

「クロノ、管理局法に詳しいわけじゃないから聞くが、三人の罪状
つてせいぜい公務執行妨害と傷害罪位だろ？実際に人襲つて魔力ま
で奪つて回つてたヴィータ達より罪状軽いんじゃないかねえの？」

「…ふつ。貴様、どこまでも馬鹿だな。」

皆が揃いも揃って呆然とする中、全身を血に染めたフレアが楽しそうに笑う。

それに対して、冷たい声が聞こえてきた。

「黙れ下郎めが。」

「大体本体壊されたらリンクしてるボク達だって消えるんだぞ!？」

何でか高笑いが似合いそうな雰囲気のはやての姿をした娘と、物凄く元気になったフェイトの姿をした娘が俺に文句を投げかける。そんな中で、魔力の残滓の中から姿を見せたなのはの姿をした娘が自分の身体の異変に気づく。

「これは…リンクが…貴方はまさか」

「とりあえず捕まっておいて。後から速人が何とかしてくれるから。」

「っ!？」

不可視のバインドが、なのは似の娘を拘束する。俺の後から脱出したリライブだった。

…魔法制御関係あんま詳しくないからリライブに頼りきりだったな。

「く…我はそう簡単に」

「リインフォース、三人の戦闘能力を奪って。薄いリンクがあるでしよ?」

「…ああ。」

抵抗しようと魔法陣を展開したはやて似の娘だったが、リインフォースが働きかけると魔法陣が消える。

完全にリインフォースとのリンクが切断されている状態で暴走体を破壊した場合、媒体がない以上消滅するしかないが、どうやらそうはなっていないかったらしく生成した暴走体が消えた今、薄いが残っていた関係を使用してその力を封じたわけだ。

「何…っ!？」

「な、なんで!?!力がでない!」

原因が分かかっていない二人だったが、クロノとフレアがきっちり無傷で拘束してくれたので置いておこう。フレアはともかくクロノは無害な相手には優しいから信用できる。

「後は…あれだな。」

ユーノとアルフがひきつけている本体を見る。
アイツを宇宙へ転送して砲撃…っ。

そう言えばアレを消せるだけの砲撃搭載してるか聞いてなかったな。

「…ここまでだ、アルカンシエルを放つ前にアースラに転送する。」

「そんな!」

「まともに動けるのがなのはとフェイトだけじゃもうどうしようもない。そもそも後数分しか残っていない。」

聞いてみようと思ったクロノはなのはと喧嘩中だった。

クロノとフレアは全身スタボロ、シグナムとヴィータはそれぞれ腕を負傷しているようだった。

シグナムの傍にいるリインフォースは、はやてを抱えて力なく浮かんでいる。

リライブが数に入っていないのは犯罪者だからだろうな。

「執務官、その砲撃って宇宙に暴走体を転移させてからじゃ無理なの？」

「君は僕たちによく普通に話しかけられるな…確かにその方法なら被害は出ないが、いくらあの二人でもあんな巨大なものを宇宙まで転送する事は不可能だ。核となる部分を露出させてからなら可能だが、そんな事を出来る戦力も時間も無い。」

犯罪者の身で呑気に話しかけてきたリライブ相手に呆れたクロノだったが、状況が状況だけに素直に説明する。
リライブの方はそれを聞いて頷くと、町に向かって飛び立っていった。

「っ！ま、待て！！」

「焦らないで。私が本体を両断する。危ないから皆直線状から外れて。」

逃げるのかと焦るクロノだったが、俺達全員に向かって念話が届く。クロノは知らないが、リライブが切り捨てられそうな町を見捨てて逃げるわけ無いって。

「それとなのは、フェイト。後一回大きいの撃てる？真つ二つにはできるけどどれだけ隙間が出来るかわからないから、開いたところに砲撃を叩き込んで隙間を広げて欲しいんだけど。」

「出来る！出来るよ！クロノ君、お願いやらせて！！」

「私も大丈夫！クロノ、お願い！」

リライブの声に元気になったのはとフェイトがクロノに向かって許可をことう。

クロノは軽く息を吐いて開いたモニターを見る。

「現在敵対中の犯罪者の力まで借りるのは非常に遺憾だが、そんな事を言っている場合でもないな。艦長、許可を。」

「ええ。ただしそれが最後よ。時間はもう無いのだから。」

許可がでたらしく、なのはとフェイトはそれぞれ丁度いい射程に移動し、他のメンバーは離れる。

「肩を貸そう、お前もそろそろ限界だろう?」

「へ?あ、ああ…フレアか。」

と、フレアは俺の状態に気づいていたのか、いつの間にか傍にいた。あ、こんな近づかれるまで接近に気づかないようじゃもうやばいな。

「大方あの全力状態で戦い通したのだろうか?意図的に代謝を落としたりした状態での全力越えの戦闘など長時間続ければどうなるかなど自分が一番分かっているだろうに。」

フレアの言うとおり、限界なんて当に通り越していた。全力ではなく、全力越え。

脳内麻薬の分泌で強制的に身体能力を引き上げているのだから限界程度ではすまない。

オマケに今回は限界迎えた状態から魔力を使った戦闘に切り替えて、魔力まですっからかん。

本当ヒーローって苦労するな。けど…

「あー…やっぱ俺馬鹿なんだろうな。死にそうな位ばててんのに何か嬉しいし。」

これが俺の本音だった。
なるほど、子供が夢見る訳だ。かっこいい、強い、そんな事は当然
として…

全てが救える光景って、本当に綺麗だ。

地球規模で見ても日本の一部だけ、更には次元世界まであるとなっ
ては本当に悲劇の一欠けらでしかないのだろう。それを全てという
のも大げさかもしれないが…
それでも本当に綺麗だ。心から素直にそう思えた。

「これだけ大きな事件で第一級搜索指定ロストロギア相手に本当に
犠牲者を一人も出さなかつたんだ、誇つていい、ゆっくり休め。」
珍しく優しいフレアの声を子守唄に、俺の意識はゆっくりと落ちて
いった。

Side〜リライヴ

「あれ？民間人？」

『そのようですね。』

道路に下りると駆け寄ってくる綺麗な金髪の女の子が見えた。

「あ、あの…なのはと一緒に戦っている方…ですか？」

どうやら、なのはの知り合いで巻き込まれたみたい。でも完全に魔法行使不可能な一般人。

しかも少しはなれたところを見れば、紫色の髪の少女が地面に腰掛けていた。

まったく、こんな娘達まで巻き込むなんて、油断しすぎだ管理局。

「ちょっと離れてて。危ないし時間が無いから。」

「あ、は、はい。」

金髪の少女が紫色の髪の少女の下に向かうのを確認したところで、私は全力を解放する。

バーストモード。

全身に魔力を纏った状態で、それをそのまま攻撃、防御、機動に即変換させる私の全開。

そのまま圧縮刃に乗せしてもかなりの…それこそ恐らく私と互角の集束刃を持つフレア相手でも打ち勝てるほどには強い。

けど、全身に纏うために放出しているそれ全てを剣に乗せて振るえば、文字通り一撃必殺と化す。

多分、単純な威力で言ったらジュエルシードの暴走を上回ってると思う。次元に干渉しないから次元震や次元断層は起きないけど。

『なのは、フェイト、準備はいい？』

『うん！』

『いつでも。』

だから…空から地上に振るう訳には行かなかった。それこそ問答無用で星を断ち切りかねないから。

無色透明なはずの魔力刃が、あまりの密度に白く見える。

これが私の切り札…

「バースト…セイバー…!!!」

私が放った一閃は、文字通り海を割り、遙か先にいる闇の書の暴走体を両断した。

S i d e 高町なのは

リライヴちゃんが放った光は、海を二つに割りながら暴走体を真っ二つに割った。

本当に一発で斬っちゃった…と、驚いてる場合じゃない。

「行くよ、フェイトちゃん！はやてちゃん！」

「うん！」

「了解！」

私が呼んだとおり、今はやてちゃんも魔法の発射態勢に入っていた。無理はしないで欲しかったけど、こんな状況で見ているだけなんてもっと辛いつて言うのも分かるし、さっきまでと違ってちゃんとユニゾンしてるから平気って言ってた。

私やフェイトちゃんは消しちゃうつもりだった闇の書の守護騎士さ

んを救うために本当に頑張ったお兄ちゃんに、自分達のお家が護れなかつたなんて悲しい事伝えられるはずが無い。

だから…いつも通り全力全開でいく。

「スターライト…!」

「プラズマザンバー…!」

「ラゲナロク…!」

二つに分かれた部分が、闇の書の力なのか勝手に元に戻ろうとしている。

けど、それをさせる訳には行かない。

「…ブレイカー…!!…!!…!!」

ありつたけの想いと力を込めて放った三つの砲撃は、裂けた隙間に吸い込まれて炸裂した。

完全に二つに裂けた闇の書の暴走体から、緑色に光る塊が見える。

「長距離転送…!!」

「目標軌道上…!!」

ユーノ君とアルフさんの転送魔法で光る塊が空に消えていく。

しぼらくして…

アースラと通信しているクロノ君から、闇の書のコアの完全消滅を告げられた。

S I D E O U T

第二十三話・夜の終わり（後書き）

リライヴがとんでもない事に。星の切断ってそれはさすがに言いすぎです（汗）

バーストセイバー。

バーストモードを応用した一撃必殺の剣。

ソニックセイバーの要領で放つ方法と、単純に剣に凝縮させたまま振り下ろすタイプの二種類が使用可能。攻撃力がやたら高いのは一閃に凝縮されているからで、魔力が化物みたいに大きいわけではないが、それでもスターライトブレイカークラスの魔力を単独で消費するためそう何度もは撃てない。

また、さすがに瞬間的に使用できるものでもないため高機動戦闘では使い物にならない。要塞や施設の破壊に使用する。

第二部最終話・新しい未来へ

第二部最終話・新しい未来へ

Side〜リライヴ

「ま、予想通りだったけどね。」

「ちっ、つくづく出来るじゃない…!」

私は闇の書の本体を両断した直後に展開されたバインドを魔力刃で切り裂いた。

猫耳を生やした二人の女性。戦闘スタイルを見るに、恐らく…

「仮面の男の正体って所だね、犯罪者に犯罪者当てるなんてなかなか面白い事するよ管理局も。」

「アンタと同類呼ばわりされる気はない!」

格闘戦を挑んでくる猫耳さん相手に私は剣を振るうが…あんな大技を放って余裕なんてある訳がない。おまけに…まだ彼女にやられたダメージが残っている。

「あんまり時間をかけてもしょうがない、引かせてもらおうよ。」

私は元の服装に戻ると同時に胸元のビンを投稿つける。
ビン同士が空中でぶつかって砕けた瞬間……

爆発が起きる。

爆発にまぎれて海に飛び込んだ私は、そのまま転移魔法を行使して海鳴を離れた。

S i d e ー リインフォース

771

医務室にいた私達の元に、クロノ執務官が姿を見せた。

今後の話かと思っていたが、そちらは現場での事後処理がすんだ後になるらしい。

そうなる何があってきたのかと思っただが、単純に様子を見に来たわけでもなかった。

白い魔導師……リライブを捕らえようとして逃げられた、その詳細を伝えられた。

「そうか、さすがはリライブと言ったところか。」

「ああ、まったくいいようにやってくれたよ。」

将の言葉に対して、執務官が何処かすがしいように肩をすくめた。

立場がどうあれ、好ましい手段ではなかったのだろう。皆も何処となく安心したような表情を見せている。

犯罪者としてだが、主を救うために屈力してくれた者に対して、共闘終了直後に奇襲等といった行為は騎士として恥ずべき行為を行ったのだ。それで捕らえられてはやはり喜べないだろう。

執務官は用が済んだのか戻ろうとする。ダメージもあるはずだが、仕事が多いのだろう。

だが、その前にやっってもらう事がある。

「執務官、頼みがある。」

「ん？何だ？」

「私を…消滅させてくれ。」

その場にいた全員から、驚きと悲しみをたたえた表情を向けられる。だが、これは成さねばならない事なのだ。

「暴走体そのものは切り離れたが、システムそのものは私のもの。いずれそう遠くない未来に今回のような事が起こる。私と暴走の関係が切れていない事は彼女達の生存が証明済みだ、命がけて彼女達を救い出した彼には悪いが、私と彼女達は消滅するしかない。」

執務官は少しだけ表情を歪めると、騎士達を見回す。

「だが、そうなると守護騎士の彼女達も消えてしまうのではないのか？」

「そちらの心配はない。夜天の書の騎士として修復した際に既に既守護騎士システムから独立させている。消えるのは私と、彼女達

だけだ。」

私は普通に話しているつもりなのだが、周囲の雰囲気は重くなる。…無理もないか、消えるのが騎士達や主なら、私もきつと笑顔ではられない。

「主と騎士達を救ってくれて、私を無限の暴走から救ってくれた事、本当に感謝している。だから、何も後悔はない。」

「分かった。許可を取ってくるから準備をしておいてくれ。それと、はやくには？」

「伝えないでくれ。主の涙が最期と言うのは…少し寂しい。」

本当に心が軽い。

私はきつと自然な笑みを浮かべていたと思う。

S i d e 〉 高町なのは

リインフォースさんが消えなくちゃならないのはとても悲しかった。お兄ちゃんとリライヴちゃんが必死で救った三人を、勝手に消しちゃう事が許せなかった。

でも…抵抗も出来ないまま操られて、自分の大切な人を傷つける事が、どれだけ辛いかなんて私には分からない。

そんな苦痛を味わい続けたリインフォースさんが、また同じ事になるなんて、望むはずがない。

私だって、自分が誰かに操られて家族や友達を傷つけて…それを見続ける事になつたらきつと堪えられない。

「ふん：仲間が命がけで繋いだ我らの命を、世界平和のために本人が眠っている間に奪おうとは、随分下衆なまねが得意だな貴様ら。」
「分かつているが、暴走を切り離し、葬る事を選んだのは私だ。責めるなら私だけにしてくれ。」

王さんが私達を睨んで告げた言葉が胸に痛い。

今から消えようとしているリインフォースさんに庇われてる事が、かえって辛い。

フェイトちゃんも同じ気持ちなのか、今にも涙が見えそんな表情で固まっていた。

「そんな事どうでもいい！君達は平気で残るくせにボク達には消えるって言うのか！そんなのずるいじゃないか！二対一といい何で」

「やめなさい！見苦しいですよ。」

そんな二人の抗議を止めたのは、同じく消される星光ちゃん。

「私達が勝てば彼等達が消えていたのです、ならば逆もまた然り。

状況や手段はどうあれ私達は負けた。それに彼等の仲違い自体は私達には本来関係のない事柄です。」

一つも表情を変えない星光ちゃんだったけど、私とフレアさんを見て微笑む。

「決着がつく前に横槍が入りましたが…心躍る良い戦いでした。もし機会があれば、今度は決着がつくまで死合いしましょう。」

「私もその二人ではなくお前と死合えた事は幸運だった。破壊されるより苦痛もないはずだ、安らかに眠ってくれ。」

フレアさんは礼儀正しく返したけど、私はすぐに返事をするのが躊躇われた。

申し訳なかったのもあるけど、試合の言葉に危ない雰囲気を感じたから。

そろそろ儀式を始めよう。

そうリインフォースさんに促されてレイジングハートを掲げ…

「リインフォース!!」

ようとした所で、はやてちゃんの声が聞こえた。

止めたいのも分かるけど、でも駄目だ。

私だって本当はすぐにもやめたい。方法を探そうっていいたい。

だけどリインフォースさんは、きっとそれを望んでいないから。

車椅子で走ってくるはやてちゃん。

「あっ！！！」

けど、小石で跳ね上がったのかバランスが崩れた車椅子からはやてちゃんが落ちる。

うつ伏せに崩れ落ちたはやてちゃんがその顔を上げて…

風を感じると同時、私の身体は宙を舞っていた。

S I D E O U T

「にゃああああつ!!」

「わあああああつ!!」

「わぷつ!？」

なのはとフェイトがはやての横を滑って盛大に雪を巻き上げる。頭からそれを被ったはやては首を振って目を瞬かせた。

なのはを投げ飛ばしたのは俺で、フェイトを投げ飛ばしたのは…

俺が念話で呼び出したリライヴだった。もっとも届く距離にいたって事は様子を伺っていたって事だが。

「リライヴ!? 君はまだ」

「速人が呼ばなかったら別に普通に見送ってたけど、確かに命がけで助けたのを無視して消すって言うのはいただけないかな。」

クロノが即座に反応してデュランダルを手にする。

やっぱこのまま素直にはいかせてくれないか。

フレアも俺はともかくリライヴは捕らえる気満々みたいだし…

さて…どうすつか、ここを抜ければ万事解決なんだが…リライヴの手を借りる以上、素直に見逃してと言っても聞いてくれないだろうし。

『速人！目くらましをお願い！』

考えていると、唐突にユーノから念話が入る。

くーっ！ちくしょう本当にいいタイミングで来るなあ！！

「風よ！！」

俺は軽く竜巻を起こして周囲の雪を巻き上げる。視界を奪われた状態でリライヴに向かうフレアだったが、気配遮断を使用して背後から鋼線で絡めとった後適当に投げる。

リライヴの方も接近してきていたクロノを吹き飛ばしたのか、魔法陣中央へ飛ぶ。

俺もすぐに近づいて…

ユーノの転移魔法で、別世界へ飛んだ。

行く先を眩ます為に何度か転移を繰り返した後、俺達は息を吐いた。

「ははははは！ユーノのお陰で楽勝だった…なあ？」

「速人：またあの時の力を使ったの？本当無茶ばかりするね君。」

リライヴの言うとおり、完全に限界を迎えてる身体で使用するには無理があるらしい。

正直歩くのも面倒だから今は。

「で、デバイスを整備出来る所へ来て欲しいって言うから来たけど、どうするの？」

「ま、待ってくれ…私はもうこれ以上」

「迷惑かけたくないって言うのは無しね。そのヒーローさんは暴走体と戦うより貴女に死なれる方が比べ物にならない位迷惑らしいから。」

正直リライヴの言う通りだ。美人で儂げな人なんて美人揃いの俺の周辺…って言うか兄さんの周辺でもそういない。そんな女性と女の子三人が救えるって言うんなら暴走体の百や二百、軽く相手になつてやる。

…念のために言っとくけど、男の子だって救ったからな！ヒーローなんだから！

と、内心で言い訳まがいの事を済ませた後、俺は四人に向き直る。

「当然手段はあるから安心してくれリインフォース。って言いたいところけど、ちょっとおきに召さないかもな。」

「どづい事だ？」

もったいぶってる場合でもないの、俺はナギ八に取っておきを出してもらう事にする。

「これが俺のとおきにして今回のキーアイテム！その名も『宵の巻物』だあつー！」

宣言と同時に、ナギ八から二つのスクロールが飛び出す。装飾のない茶色系の様相は俺の好み。なんとなく古代の魔道書って感じがする。

「これは…デバイス？」

「そう！その通り！けど外装だけで中身は空っぽ。さて、じゃあどうしようかなーって思ったんだけど、何か凄く都合いいことに優秀な管制人格と守護騎士が三人も！これは貰うしかないね！！」

俺がそう締めくくると、合点が言ったのかリライブは額を押さえて俺を見た。

これは以前、ユーノに話した守護騎士達の救済方法。

デバイスの方はユーノがスクライアの一族に資金その他もろもろ工面して準備してくれた。

中身空だからそんなに高価にならなかったとは言え、容量は入れる予定のもの関係上かなりでかいからきつとそんなに安くもなかったはず。

本気で感謝しないとな、逃げられたのもユーノのお陰だし。

「…つまり、身体が存在できない原因なら、皆纏めて引越せばいいって？君にしては随分荒い考えだね。それをやったらはやてとのリンクが切れた状態で生きてかなきゃならない。かえって辛いんじゃない？」

「あ…」

リライヴの言葉に俯いてしまいうインフォース。俺がお気に召さないかもって言った理由はこれだ。そんな事ぐらいは承知しているが…『かえって辛い』か。

「はいここで今のリライヴの言葉に同意した奴手を上げる。元暗殺者の俺が死と死者について如何に冷たく虚しく悲しく無意味で残酷な結果だつて事を三日三晩かかってでも丁寧に教えてやる。」

口調は軽めにしたつもりだったが、俺が本気だったのが伝わったのかリインフォースとリライヴは顰めていた目を見開いて俺を見る。つと、そう言えばさつきから思いつきり放置してたな。

「お前達はどうか？抵抗あるか？」

「ない…と言えば嘘になりますが、所詮今の身も貴方の妹の虚像のようなもの。また彼女達と合間見える事ができるのなら、貴方の提案には十分に価値があります。」

「ボクだつてこのまま消えるのなんて嫌だ！」

「同感だな、我がこのような所で終わるなどありえん。」

三者三様の同意が返ってくる。

うん、これくらい単純な気持ちで受け入れてもらえれば嬉しいもんだ。

「確かにリンクは切れるし、管理局から見ればレッドカードの三人も一緒に移る以上、このデバイスに移した後はやると主従関係を結ぶ事もできない。けどな、別の寄代って言っても転生みたいなもんだろうが。それを言うつと闇の書から都合よく切り離されるように弄られたヴィータ達も別人になるぞ？戻ったら初めましてとか言った方がいいのか？俺は嫌だ。」

「理屈が通ってるのか通ってないのか、本当に滅茶苦茶だよ君は。」

リライヴは納得してくれたのか諦めたのか、苦笑してリインフォースを見ていた。

当のリインフォースは複雑な表情のまま黙り込んでいる。

「すんなり何でもいいなんて言えるとも思わないし、俺もはやてに微妙な顔されたうえでシグナム辺りに殴られそうな気はしてる。だから、一つだけ約束する。」

俺はリインフォースに向かって手を伸ばす。

「『生きてて良かった』と、必ずそう思わせてやる。これだけは約束する。だからまあ、色々不安かもしれないけど、俺と一緒に来てくれないか？」

リインフォースは未だに戸惑ったままだったが、暴走体の騎士である三人を見やった後に俺の手をとった。

そんな俺達を少し微笑ましげに見ているリライヴが次の問題を投げかけてくる。

「ラブシーン展開してるところ悪いんだけど名前はどつするの？」

「ラブシーンって何だよ。でも確かに考えないとなあ…リインフォースがどうするかは別にして三人は絶対必要だし。」

言いつつ見ると、若干予想通りではあったが不思議そうな顔をしている三人がいた。

「名前ではありませんが星光の殲滅者と呼んでもらえれば別に問題はありません。」

「ボクも別にいいよ？」

「我を呼ぶに王の銘程ふさわしいものはない。」

ま、そうだよな。普通に暮らす方法なんてまったく考えてないだろう御三方がそれがどれほど致命的なことかなど分かる筈がない。

「お前らな…病院や迷子センターでそれ呼ばれてみる？って言うか呼ぶほうにも怒られるし、殲滅者やら襲撃者やら一般人があからさまに不安になる事は避けるって。それと…リインフォースはどうする？」

こつちも問題だ。そのままはやてから貰った名前で過ごすのもアリかもしれないが、それがはやてに不義理だと言うなら新しく名前が必要だろう。

「私も…新たな名を。」

リインフォースは少しだけ寂しそうにそう言った。

捨てたくはないけど、マスター変わって同じ名は名乗れないってとこか。

S i d e } 八神はやて

速人君がいなくなつてしばらくしてから、私はリインフォースとの繋がりが消えたのを感じ取った。

泣き崩れた私をなのはちゃんとフェイトちゃんが両脇から抱きしめてくれて、シグナムは自分のコートを私達にかけてくれて、ヴィータも一緒に泣いて、ザフィーラもシャマルも寒い中待ってくれて…

そんな所に、速人君が一人で現れた。

来るかもしれないと思っていた皆の姿はなく、リライヴちゃんはそのまま逃げたのだろう。

どれだけ頑張ったんか、命がけて戦ってくれたんかはよく知ってる。だけど…

「何で…どうして…」

言わずにはいらなかった。

私の前で同じように座り込んでいたヴィータが勢いよく立ち上がって速人君の襟首を掴む。

「テメエ…っ！最期の別れのタイミングで問答無用で誘拐しておいて！何素知らぬ顔して返って来てんだよ！！」

握り拳で殴りかかろうとするヴィータ。本当は私が止めなアカンかった筈やけど、泣いてた私はまともに止める事も出来ないままそれを見ていた。

速人君は顔に向かって来る拳を避けると、いつの間にはずしたのか襟首の手も外れた状態のヴィータを抱えあげて地面に立たせる。ヴィータはそれ以上何もしないで、力なく地面をたたく。

そんな中で、速人君は懐から巻物を取り出した。

「えーと…宵の騎士システム及び騎士管制システム、起動。」

速人君が呟いた次の瞬間、四つの魔法陣が浮かび上がり…

暴走体の騎士三人と、リインフォースの姿が現れた。

「…始めまして皆様、私は宵の騎士シユテル・ザ・デストラクターと申します、以後お見知りおきを。」

「ボクは宵の騎士、レヴィ・ザ・スラッシャー！」

「ロード・デアアーチェだ、一応名乗るが気安く呼ぶな。」

暴走体の騎士三人は、それぞれまったく関係のない名を名乗る。

「宵の騎士統括、リインフォース・フレシアと申します。よろしく
お願いします。」

呆然と、本当に何が起こったのかまったくわからないまま私達は硬直していた。私だけじゃない。抱きしめてくれていた二人はもちろん、ヴィータもシグナムもシャルもザフィーラも呆然とたたずんでいる。

速人君は、四人に囲まれた状態で、両手を腰に当ててふんぞり返ると私を見る。

「すまんはやて！これが限界だった！！！」

私達が呆然とする中、なのはちゃんがゆっくりと私から離れて雪を握り締める。

黙々と、氷の塊でも作るかのように力を込めるのはちゃん。

「…連れて来れたなら…最初から皆で来てよーっ！！！！！」

言いながらなのはちゃんが全力投球した雪球が速人君の頭に直撃したのを皮切りに…

フェイトちゃんとヴィータが雪を握り投げ始める。

色々聞かなきゃならない事はあるんだけどとりあえず…

「いらん心配すな」の馬鹿ローロー……！！！！！！」

私も全力で雪球を投げる事にした。

きっと元の関係に戻る事はできないんだろう。でも、それでも生きてて、無事に来てくれた。

このままだったら、何もできないままだったら消えてた筈のラインフォースとまた話すことができる。

それがとても嬉しくて…大事な事に思えて…ありったけの感謝を込めて私は雪球を投げ続けた。

S I D E O U T

第二部最終話・新しい未来へ（後書き）

今週は二話投稿です。と、同時に第二部最終話です。事後処理的な話がありますが、これでとりあえず事件は終わりなので。

リライヴが投擲したのは液化爆薬（お手製）です。魔力反応を感知させずに目くらましや牽制になるので元の状態の服には常にこの手の装備をしています。

宵の巻物

最初闇の書に問題があつてかつ守護騎士と家族やつてる事を知った時点で速人が思いついた問題点の排除と守護騎士の生存を両立させるために所持していた巻物デバイス。割と早い段階でユーノに注文を出していて話し合いに言ったときに受け取っています。

#原作三マテの改名について

元々名の無い三人に名前をつけると言う意味でのイベントとしてあつたため、名称自体に深い意味があるわけでもなかったため、折角正規名称が出来たと言う事であわせて改名する事にしました。どうせなら馴染めた方がよいという判断ですが、抵抗ある方がいらしたらすみません。

幕間・事後処理は地獄、頑張れクロノ執務官

幕間・事後処理は地獄、頑張れクロノ執務官

「宵の巻物はただの民間企業が製造したオーダーメイドのデバイスであり、闇の書とは一切の関係を持たず、危険物として没収すると言う意見は心外である。メーカーと製造年月日は記載の通りなので確認されたし…君は管理局を馬鹿にしてるのか？」

宵の巻物について説明しろと言うから説明文書を書いて提出したと言うのに、読み終えたクロノに一蹴された。

「とことん失礼な奴だなお前。三人とも何の罪状も無いけど、リライヴと転移したのを反省してこんな書類書いてんだからもう少しいい反応してくれよ。それともあれか？著作権法か？」

俺が何か一言言う度にクロノの額がピクピクと動く。目茶苦茶堪えてるな、色々と。

「大体同一人物だとしても罪状守護騎士より軽い筈だ。思いっきり人襲って回ってた皆を無罪にしろって言ってる訳じゃないんだから問題無いと思うが？」

「ああそうさ！全く君の言う通りだよ！」

素知らぬ顔して言うと、クロノがキレた。

「確かに大した罪状も無いし罪人としては彼女達自身は確保する理由も薄い！先に反省文書かせるユーノからデバイスのメーカーを聞いてすぐに問い合わせたからロストログアでも無い事も分かっている！だが先の戦闘の映像記録もあると言っのにこのまま報告に行つては確実に危険人物扱いされて最悪逮捕命令まで出る！君はそれでいいのか！？」

「あ、心配してくれてんの？クロノ君優しい。」

「冗談を言ってる場合か！アリシアの時だつて君は」

続けて叫ぼうとするクロノの口元に人差し指を立てる。

「他の人の危機ならいざ知らず、俺が自分の危機の為に彼女達を処分すると思つのか？」

「…君は馬鹿だ。」

食つてかかつて来ていたクロノだったが、それで力無く息を吐いた。四六時中こんなだと禿げそうな気がするなあ…ご愁傷様。

「…つか闇の書事件について報告するなら別に個人の持ち物まで何か言つ必要ないんじゃないのか？バレたらお前やリンディさん巻き込むつて言つなら黙つてるとは言わないが…」

「君に頼まれたところで報告するときは報告するが、確かに個人の所有物まで報告する義務は無い。たがそれも闇の書と関係なければの話だ。」

…確かに姿形全く同じじゃ別物ですつて言つた所で無理があるか。管理局への無償奉仕も多分俺との方針の違いとか三人の管理局への嫌悪とかで上手くいかないだろうし、やり合うしか無くなつたかな？

「君と戦うのもごめんだし、宵の騎士達の助力を得た君がリライヴの味方になったりしたら管理局最後の日にすらなりかねない。出来るならやめてくれ。」

「あれ？よく考えてる事分かったな？」

気配遮断を…心を殺す事を戦闘技法の常としている俺が大して長い付き合いじゃないクロノに感づかれるとは…何かちよつと悔しい。

「僕だつてありもしない罪状を着せる趣味はない。だから出来る限りの事はするが…管理局として宵の巻物の回収が決定すれば覆す気はない。頼むからこれ以上何もしないで大人しくしてくれ…」

逮捕好きだからこんな事言ってるわけじゃない事くらい重々承知している。

しかも今回は随分無茶苦茶やったし、オマケに危険物が大本の三人まで無罪放免にしろとか…正直組織説得するにはきつい筈だ。

だが、宵の巻物はあくまでデバイス。下手に手の届かないところに持っていかれたら無理やり所有権書き換えられたり初期化されてハイさようなら何て可能性もある。

そうなればフレリアを含め四人とも御陀仏決定。クロノやリンディさんが止めようとしてくれたとしても強硬派のおっさんとかもきつといるだろうし、そう簡単に渡すわけにはいかない。

「分かってるって。三人も不満そうな顔しながらだけどアースラまで付いて来ただろ？管理局を信用してないなら俺かフレリアを信じないで付いて来れる訳がない。だからまあ警戒するなどは言わないが少しくらい認めてくれ。」

額を押さえて深く息を吐くクロノ。そうでもしないと落ち着けない

んだろう。

自分でやっといてなんだがこれだけ問題山積みになればさぞ管理する側としては胃が痛いだろう。中間管理職？も大変だなクロノ。

「知り合いから良い胃薬貰ってこようか？」

心配して言ってみたが、クロノの肩が震えだして眉間がピクピクと動き出したのを確認した俺はクロノが限界に達する前に静かに部屋を出た。

でもマジで胃薬はリンディさん辺りに渡しておこう。悪いけど頑張っつてクロノ。

クロノと話してた部屋を出て、集まってるはずの食堂へ向かう。

「よ！」

「芥！」

と、件の食堂から何かやたらとでかい声がある。つて言うかこれ間違いないく喧嘩だろう。

問題起こすなって言われたばっか何だけどなー…

「あ、主…」

「とりあえず戦闘って感じじゃないが…どうした二人とも？」

俺が顔を出すと、子犬のような表情で俺を見てくるフレリアと、睨み合っているレヴィとディアーチエの姿があった。

声をかけた俺にすぐさま反応したレヴィが駆け寄ってくる。

「ディアーチエがボクの方のお菓子を取ったんだ！なのに」

「王たる我が食すに値するものと判断したのだ。喜び勇んで献上するのが下々の者の仕事だろうが。」

二人の話で事情は一発で分かった。

あーなんかいいなあこう言うの。命の取り合いやってた娘がお菓子の取り合いで一喜一憂してくれるなんて。

と、とてつもなく微笑ましい光景で多少の喧嘩ならこのまま見てよいかとも思ったが、生憎クロノの心労増やしたり、管理局の心象を悪くする訳には行かない。折角クロノが頑張ってくれるらしいし、ここはディアーチエに謝らせるべきだろう。

「言うておくが、我は謝らんぞ。」

「流石に察しがいいな。どうしてもか？」

「そこまで謝らせたければ強制すればよいだろう。」

あごでフレリアを指すディアーチエ。

確かに管制機能を持っているフレリアに無理やり謝るように命令することはできる。

けど、それは思いつきり違う。

「お願いするのと命令とは違う。俺はそうそう家族にそんなもん使

「う気は無い。」

しばらく俺と視線を交わしていたディアーチエだったが、飽きたかのように目線を逸らした。

「甘い奴だ……」

「とはいえ……まさかお咎め無しって訳にも行かないけどな。」

「は？」

ディアーチエの傍までよつていった俺は、その頭に『徹』込みの拳を叩き込んだ。

椅子から転げ落ちて頭を抑えてごろごろとのた打ち回るディアーチエ。

呆然とするフレイアとレヴィを横目に、俺は頭を抑えているディアーチエを抱き起こした。

所々に着いた汚れを叩き落としながら話しかける。

「床転がるなって、汚れるぞ？」

「あ……い……く……き、貴様が言うなっ……!!」

「そんな痛かったか？ま、でもこれが嫌なら人の嫌がる事はしないように。楽しみにしてたもんとられるのは結構辛いぞ？俺もアニメの録画予約ミスって何度泣いた事か……」

思い出したら悲しくなってきた……まあしばらくしてDVDが出たから問題は無かったけど。

「か、仮に悪かったとして絶対ここまでの事はしておらんわ！古代ベルカの拷問並みだぞ今のは……!？」

「あれ？そんな酷かった？おかしいな、加減はしたんだが…兄さん達と訓練してる時は木刀とか蹴りで喰らうのに…」

「何故生きてる貴様！？」

何故生きてるって…酷い言われようだが、毎朝痣だらけで登校してたしやっぱ異常なんだろうな。古代ベルカの拷問と同じ位ってのも酷い話だが。

俺は立たせたディアーチエの前でもう一度手を振り上げる。

「あ…あ…う、うめ…っ！…！」

謝りかけたディアーチエがプライドなのか無理やり歯を食いしばったところで…

俺はディアーチエの頭を撫でた。

「拷問並みなのはやりすぎだったな、ごめん。痛かったろ？」
「ふ、ふん…」

ディアーチエが落ち着いたところで俺はレヴィに目を向ける。

「流石に食べたもん取り返すわけにも行かないから、家に行ったらシュークリーム奢ってやるよ。それでいいか？」

「あ、う、うん！それでいい！」

元気に返事を返してくれるレヴィ。これだけ喜んでくれると奢り甲斐もある。

「す、すみません…監督しきれずに…」

と、申し訳なさそうに謝ってくるフレリア。

二人を任せたのに喧嘩になったからか。

俺としてはこれ位なら微笑ましくもいいんだが…多分今後も修行とかで家出てる時はフレリアに任せる事になるし、もうちょっと頑張ってもらおうか。

「そだな、それじゃ第二ラウンド行ってみようか。」

「は？」

「シュテル探してくる。当てもなくさまよつからしばらくよろしく。」

「な、あ、主!？」

慌てたフレリアの声を背に、俺は食堂を出た。

S i d e 〱 クロノ 〱 ハラウオン

「まったく、彼は何をやっているんだ…」

僕は呟きつつ食堂のモニターを閉じた。

魔法戦でも始めようとすれば管制担当のフレイアが強制的に止められるらしいから喧嘩以上になる事はないはずだが、それでもこの短時間で騒ぎを起こしかけるのはいただけない。

だが、監督役として力技が過ぎるが、彼女達のいさかいを止めた速人は多少なり認めなければならぬだろう。

…家族…か。

速人が何の違和感も無く告げた台詞に心が痛む。

宵の巻物を没収、回収、処分する事になると言う事は、それがそのまま速人の言う家族を殺す事と同義になる。

速人の屁理屈だけでどうにかできるとは思えないが、それでも彼女達を死なせないためにも全力を尽くす他無い。

幸いにも資料集めが得意なフェレットが現在無償奉仕の真っ最中だし、死ぬ気で頑張ってもらおう事にしよう。そうしないと割に合わない。

今後の事を話し合おうと母さんの下へ向かい…

「中々美味ですネリンディ。何事も試してみるものです。」
「気に入ってくれて嬉しいわシユテルさん。この後は彼と一緒に暮らすつもりなのでしょう？ぜひ薦めてみてくれなにかしら？」

…シユテルと名づけられた少女といつものお茶を飲んでいる母さんの姿を見つけた。

「艦長：彼女がどういう立ち位置なのか分かっているのですか？」

「そうだったわね。折角の同士だもの、早く面倒ことから開放してあげないとね。」

「か、艦長!？」

一応忠告のつもりだったのだが、ずれた返答をされた。

シユテルも少し驚いたのか滅多に変わらない表情が少しだけ動く。

「良いのですか？」

「だって貴女無罪じゃない。今も暴れるでもなく普通に過ごしてるだけだし、文句は無いわよ。」

「そうですね…その通りになれば、管理局は嫌いですが貴女個人の願いは聞き届けましょう。」

「それは家のとつても優秀な執務官がバツチり頑張ってくれるから心配しないでいいわよ。」

言いながら硬い握手を交わす二人。

いつの間にか傍にいたエイミィが僕の肩に手を置く。

「頑張れ男の子。」

あんまりな状況に、僕は胃を抑えて肩を落とす。
こんな事なら速人に胃薬を貰っておくべきだったかもしれないな…

S I D E O U T

幕間・事後処理は地獄、頑張れクロノ執務官（後書き）

リンディさん、ちょっと軽くし過ぎた感はありますが、事件真つ最中でなく悪い事もしてない人相手なので、皺寄せがクロノに（笑）

幕間・裁判の前に

幕間・裁判の前に

「速人さん、少し無茶が過ぎるんじゃないかしら？」

「リンディさんこそ、こつちが管理外世界だつて事忘れてませんよね？唐突に病気が治るめどが立つて唐突にいなくなつて、しかも一般人ならともかく入院患者が。そんなんで周囲がホイホイ納得できる訳が無いでしょう。」

俺は今、はやてたちの裁判なんかのための出立を一日遅らせる交渉中だった。

何しろ、いきなり病院からいなくなるはしばらく戻れないわじや書類上の対応がいくら完璧にできた所で不安を残す事になるし、折角クリスマスなんだからパーティーやるくらいの時間は欲しい。

当然後者の理由など話す馬鹿はやらないが、話さなくてもリンディさん達は感づいているだろうから中々に難しい。

「うーん…確かに折角の翠屋さんのケーキがクリスマス当日にいただけないのは残念だけれど、ちよつとこの状況じゃあ…」

「ならば私の自宅を調査するといひ。事情聴取含め一日位は使えるだろう。」

悟っているとは言え本命の内容を口に出さないでくれと思つてい

と、グレナムさんが現れた。

「あれ、それまだ済んでなかったの？」

「捕まっていただけで詳しい話は何もね。で、どうかな？」

「…分かりました、そう言うことであればはやてさんの方は明日の早朝からという事にしましょう。」

これで全て上手くいった。と思っただけど…

「ただし、各地で実際に戦闘を行っていた守護騎士達は自由にする訳には行かない。こればかりは君に何を言われても許可する事は出来ないぞ。」

「む…」

そこに関しては返す言葉が無い。

で、結局許可できるのははやてが戻ることだけという事になって、それを集まっていたはやて達に伝えに行った。

「ほんなら私も残るよ。マスターの私だけ降りてノンビリって言うのは」

「いえ、地球で過ごしてきてください主はやて。」

「裁判とかになったらぜってー簡単には戻ってこれねーからな。あたし等が暴れたのにはやてまで付き合うことはねー。」

拒否しようとしたはやてだったが、シグナムとヴィータに薦められる。

「俺としても病院の先生やすずかにはある程度話しておくべきだと思う。だからちょっと交渉したんだし。それに別に長い別れって訳

でもないし、むしろこんなとこですし詰めになってる位なら土産話を拾ってくる位の感覚で下りたらどうだ？」

「そうね。私も海鳴の話は聞きたいわ。」

「主が我々のために友人と過ごす時間を裂かねばならぬ方が苦痛です。折角の機会なのでですから降りてください。」

渋い顔をしていたはやてだったが、守護騎士が満場一致で降りることを薦めた為、はやては一度降りることにした。と、なのはが少し辺りを見回した後、俺を見て問いかけてくる。

「ユーノ君は？」

「転送魔法の件で呼び出されて怒られた後、宵の巻物周辺の裁判と守護騎士の裁判どうにかするために無限書庫でひたすら情報収集。」

「クロノ…だよ。それ言ったの。」

俺の答えに苦笑するフェイト。

振った俺が言うのもなんだが、心労が一番でかいのはクロノの筈だからアイツに巻き込まれるのはしょうがない。

「どうしてユーノ君がとばかり受けてるのにお兄ちゃんは平然とここにいるの？」

「キーコーエーナーイー。」

ジト目で俺を見ての妹の問いかけを宇宙人風にスルーする。

俺の方は管理外世界の住人ってのも理由の一つだが、何より大きいのは宵の巻物だ。

下手に出頭を強要されたり受け入れたりすれば、いつ何されてもおかしくない。

宵の騎士となった四人を護るつもりなら出来るだけ管理局は避けるが吉だ。

って事情があるが、話したところで空気が重くなるだけなので軽く装う。

なのはの反応もその方が面白いし二度お得だ。

と、なのはの反応を楽しんでいると軽い威圧感を感じる。

目を向けると、シグナムが少し難しい表情で俺を見据えていた。

「高町速人…お前は自分のした事がどういう事かは分かっているのか？」

守護騎士一同が俺を見てくる。

シヤマルとヴィータは少し悲しそうに、ザフィーラとシグナムが少し厳しい視線を向けてくる。

間違いなく、リインフォース・フレイアの事だろう。

互いにいるけどリンクが無いって状態ではやてとフレイアは過ごさなきゃならない。

「これが最善の状態って言うのが申し訳ないとは思うが、他は特に

何も。」

「何だと…」

アツサリ言つとシグナムの顔が強張る。

や、気持ちちは分かるが、代案が消滅以外に無い人から何を言われても謝罪は出来ない。

死なせたくないから気張つたのに、生かしてごめんなさいと言う馬鹿はいない。

でもシグナムたちのほうが真つ当な気持ちだろうし、主人や友人の事で怒つてる人と喧嘩するのも…

「あの…シグナム、速人は…」

「ストップフェイト。クリスマス位楽しくやろうぜ。」

俺の話をすればなんで生かしたかなんてはつきり分かる事だが、死体山積みにした話なんてクリスマスにする話じゃない。ましてや大本がキリスト様の生誕祭らしいからな。

どうするか…と考えると、妙案を思いついた。

『フレア、ちよつと頼みがあるんだが。』

『鍛錬中だ、後にしろ。』

『後でいい。俺達アースラ降りるんだけど、フレアからちよつと俺周囲の関係者に俺の過去話としてくれない？』

『な！？』

思いつきり驚くフレア。そんなに過去を喋るのが珍しいのか？

『自分で話すべきじゃないのか？』

「だから、俺これから降りるんだって。それに、御法度だから話すとまずいと思って話して無かっただけで別に話すのに抵抗ないし。お前だって鉄面皮だから大丈夫だろ？」

「人を何だと思ってる…だが何故そんな事を？」

「リンフォースがリンク切れた状態で残ってるのが納得いかないらしくて、騎士として介錯してやりたそうにしてる奴がいて怒られてる。」

「なるほどな…」

フレアから若干呆れ気味な返答が帰ってくる。

別に本当に無理はしてないんだが…

「だが何故他の者にも？」

「ついであついで。…記録に残ると俺の管理世界での行動がまずい事になりそうだし、一応世間話的な位置づけで頼む。」

「どんな世間話だ？」

「承諾してくれたら兄さんに試合してくれるように頼んでもいいが？」

「分かった、任せろ。」

散々渋っていたフレアだったが、兄さんとの試合を引き合いに出したらアツサリ承諾した。

完全生身での戦闘技法については俺より遙かに上だって知ってるもんなフレアも。

業を知りたいフレアにとっては願っても無い申し出なんだろう。

承諾が取れたところで周りを見回すと…

「お兄ちゃん…念話してたでしょ。」

「え、ああ。」

…マルチタスクで無いと周囲に気を配る事ができなくなるんだった。
きつと無言で突っ立ってただろう俺を皆揃って妙な目で見ていた。

別に念話はそこまで難しい訳でもないんだからちゃんとマルチタスク…
適当運用しないとな。

アースラから降りた俺達は家に帰ることにしたが、はやてとフェイトは病院に向かった。

はやてを連れて行く人が必要になるし、何でもアリシアが起きそうな目処が立つたらしいから様子を見ておきたいとの事だ。

ついていけたら良かったが、翠屋が現在クリスマスファイバーで大忙しだからなのは手伝いにまわしたほうがいい。

俺の方は、これから一緒に暮らす四人にこっちの事を色々話しとかなきゃならない。

一応なのは達の情報持つてるから大丈夫とは思うが、色々と擦り合わせは必要になるだろう。

ちゃんと話しても今の所守ってくれそうなのがフレリアとシュテルぐらいなのが悲しいところだが…そこは連れて来た俺が気張るしか

ない。

フェイト達と別れてしばらくして、家も近くなった頃になのはが重々しい声を出す。

「あのねお兄ちゃん…」

「どした？」

言い辛そうに何か言おうとするのはに、出来るだけ静かに聞き返す。

少しだけ間を置いて、なのはは続きを話出した。

「魔法の事…皆に話そうと思うんだ。」

意を決したように告げるのは。だが…

「とんだ阿呆だな。我等を連れて魔法の話無しにどう説明をつけると言っののだ。」

「にゃ!?!」

後ろをついて来ていたディアーチェに一蹴されて面白いように顔を歪めた。

折角なので追撃しとくか。

「リンデイさんには許可取ってある。実際管理外世界とはいえ魔導師引き抜いたりするのに話す例もあるんだと。大体父さん達が感付いて無い訳無いだろ。」

「う…でもその…私がやって来た事をちゃんと話したくて…」

かなり意を決しての発言だったらしく、ボコボコに突っ込まれてと

たんに歯切れが悪くなるなのは。

けど、そう言う事ならいいタイミングだな。どのみち宵の騎士一同の説明はしないといけないし、丁度いいと言えば丁度いい。

「いいんじゃないか？」

「そ、そんな簡単に言われると…」

「馬鹿言え、キツいのは俺なんだぞ？お前が骨折したとかリンカーコア抜かれてぶっ倒れたとか言う話する訳だから…」

アレ？なんだろう？真剣抜いて稽古をついやり過ぎちゃったって感じにぶった斬ってくれる兄さんの姿が浮かぶよ？ははは…疲れてんのかな？

「私の怪我は私のせいだから…怒らないように言うから大丈夫。」

なのははそう言って笑いかけてくれる。優しいなあ…

だがなのは、悲しいかなまだ戦闘者にカウントされて無いお前と俺じゃ対応違うんだよ。

とはいえ我が妹の心遣い。ありがたく受け取って頭を撫でる。

「ボクの事子供だなんだ言ってたくせに自分だって子供っぽいじゃないか！」

「あ…」

レヴィの不満下な声を聞いたなのはは慌てて俺から離れる。

む…これが兄離れなのか？

離れたの追っても仕方ないので不評だったレヴィの頭を撫でる。

「わ！わ！」

「そんな驚かなくても…気持ち良くないか？」

「え、おお！何かあったかい！」

「だろ？別に子供っぽいと思う必要ないって。」

結構そういうこと気にするらしいが、殆ど殺人兵器と化していた俺でも美沙斗さんに助けられて頭撫でられた時に感じた温かさは覚えてる。

「なのは！これ凄いな！何かこの辺まであったかい！！」

「…うん、私もそう。」

胸を抑えて手放して褒めてくれるレヴィイに対して、なのはも少し笑顔で答えてくれた。

あ、良かった。子ども扱いとかで不評だったら悪いし。

「良ければ私もお願いできますか？」

「へ？」

予想外のシュテルの名乗り。

流石に冷めた目で見てるんだろうなーと思ってたからちょっとビツクリ。

「情報として様々な事が残っていますが、実際にどうかは試してみるまで分かりません。事実ありえない組み合わせとして登録されていたリンディの砂糖茶は悪くありませんでしたから。」

あれを飲んだのか。

なのは日本人としての深層心理が納得して無いらしく、引きつった顔でそれを見てた。

俺もいい悪いは別として組み合わせるなら端的に混ぜるよりもっと工夫とかあるだろと思って遠慮した。

食用ガエルと野良のカエル位、試行錯誤した料理か否かは違う気がする。

とはいえ、チャレンジ精神から頭撫でられるって言うのもシュテルらしい。

「分かった。それじゃ…」

目を閉じて待つシュテルの頭を撫でる。

「…特別何も無い筈なのに安心できますね。温かいという表現も分かる気がします。」

言いつつ、僅かにだが微笑むシュテル。ウケが良くて何よりだ。

「は…揃いも揃って餓鬼か貴様らは…」

「ディアーチエにはそうそうやらないから安心しろって。王様として格好保つならちよっと方向性違うもんな。」

「む…ふん、知ったような事を…」

ぼやくディアーチエだったが俺の予想が当たりなのかバツが悪そうに他所を向く。

流れで残されたフレイアを見るが…

小四の俺とシグナムとそう変わらん身長のフレイアとじゃ俺が頭撫でてても変だな。背伸びして届くって位だし。

とは言え仲間はずれも変だし…と、考え込んでいると…

頭に手を置かれた。

「私は大丈夫ですから、どうか気に病まないでください。」

当のフレイアに笑みを向けられつつ頭を撫でられていた。

…主って言ってもまだまだ子供か。

はやての事で無理してる筈だろうフレイアにも幸せを分けてやれるくらいに強くなるうと、頭から感じる温かさに身を委ねて改めて決意した。

S i d e 〱 シグナム

ライトから語られた、初めての邂逅の時いきなり豹変した高町速人の真実。

返す言葉が無かった。

確かに悪いとも何とも思わないわけだとはつきりと理解できた。殺さない事が苦しめる場合もあるなどと、言える筈も無かった。

「確かにありえねーな…はやてがやばかった時はあたしらでも思う事あったつてのに、殺意も敵意も無いまま必殺の一撃を放てるなんて。」

一番懸念すべき点はそこにある。

自動機械ですらする攻撃の際の反応。それが奴からはまったく感じられなかった。

魔力反応を殺す等の技術もそうだが、何より機械と同じかそれ以上に殺す事に対して何も思っていない者でなければ不可能だ。

仕方ないとか、戦いだとかそんな問題じゃない。

まるで作業のように…意識しなくても勝手に呼吸しているように何も考えずに殺せる。

プログラム体の我々として無理な話だ。戦乱の時代を生きた我らでも、僅かとは言え敵を倒す明確な意思を持って戦っていた。

それは最早異常以外の何者でもない。

「僕の私的な意見になるが、僕達が仕方なく非情になるのに対して彼は放って置いたらどこまでも非情になる自分と戦うために全てを救おうとしているように思える。死者を目の当たりにしてああも切り替えの早い人間は見た事がない。今回彼がその…暗殺者時代のまま事件に望んでいたならば、恐らくリーゼ達も君達も殺されているだろう。」

「初めに我々が地球に下りたときもそうだったな。私は映像記録を

見たただけだが…これほどわかりやすい物はないだろう。」

ライトは言いつつ一つの映像を流す。

それは魔法を行使していない速人によってライトが倒され、執務官が肩を貫かれる様子だった。

返り血を浴びているというのに怒るでも躊躇うでもなく完全な無表情で執務官の首に刀を添える。

「しかし…ここまで冷酷な人間が…」

ザフィーラが呟いた所で、映像の中の高町が泣き叫んでいる妹に目を向ける。

しばらく硬直した高町は、自身の額を全力で殴りつけた。

深呼吸をしてからはいつもの軽い笑顔を浮かべている。

それを見たシャマルが小さく笑った。

「きつと…大切なものが出来て変わった…変わりたいと思ったのよ。」

シャマルは映像の中で目元を拭っている高町なのはを見ている。

「そつか…ならば尚更無下には出来んな。」

何しろそれは、我々が主はやてと出会い、騎士の誇りよりも優先すべき心が芽生えたのと同様だ。

罪状については責められれば謝るほかないが、抱いた気持ちは否定されたところで変わるはずもない。

「出来れば…彼がリインフォースを幸せにする事を投げない間はあまり責めないで欲しい。破天荒で異常としか言いようは無いが、命に関しては彼から教わった事の重さを否定できないからな。」

「クロノも真摯な子に育ってくれて母さんは嬉しいわ。」

「やめてください！まったく、恥ずかしい…」

執務官の様子に軽い笑みを漏らす一同。

全てを救う事は不可能。

だが奴はそれを目指さなければ心の凍った殺戮兵器に成り下がる可能性がある。

救い手として、切り捨てた管理局と敵対した結果主はやての敵に回るならばともかく、もし夢破れて殺戮兵器になったならその時は…

悲劇を積む前に私がお前を殺してやる。

それが、戦う事しか能のない私がお前にしてやれる唯一の礼だ。

私は決意して妹に泣きつかれている速人の姿を見ていた。

S I D E O U T

幕間・裁判の前に（後書き）

シグナムの最後の誓いは本当にお礼のつもりです。
シグナムならこれくらいはするかと。

もうちょっとだけ幕間が続きます。

幕間・クリスマスパーティー

幕間・クリスマスパーティー

「それでは、月村家主催クリスマスパーティー、開催します！」
「乾杯っ！！！！！！」

次々とグラスを打ち合わせる音が聞こえる中、俺は…

「速人！ジュース持ってきてー！」
「こっちはワイン頼む！赤でな！」

給仕に勤しんでいた。

アリスから、『とりあえず散々心配賭けた罰』という事で給仕を命じられた。
忍さんが『執事服着せてみたい』という理由でノエルさんに頼んで

ノエルさんのほうも流石にこの人数の注文一人で捌くのは不可能なので承諾してくれた。

本来は忍さん周りの事やお客さんの事はメイドさんの誇りか何かで全部やるうとするんだが、こつひつきりなしにやる事がある上に調理までするとなると流石に手が回らない。

と言う訳で、料理に手を出す訳にも行かないのでひたすら注文聞いて往復してる。

とりあえず料理を作るだけ作ったら後はノエルさんが引き受けてくれるらしいのでそこまでは片っ端から出来たもの運ばなきゃならない。

のだが…

「服に皺も作らんとトレイ片手に走るとるんは凄いバランス感覚やな。あ、ウチ野菜炒め。」

「あ、俺は唐揚げ頼む。」

「それはテーブルにあるでしょうが!!」

「忍、確か十年物のア ニチンがあつたな？」

「あ、飲む？速人君、よろしくね。」

「そんなもん飲む奴がいるかー!!」

「あら知らないの？結構有名な」

「毒でしょうが！勘弁してくださいよ忍さん!!ってか俺がそのまんまノエルさんに言ったらどうする気だっただ馬鹿兄!!」

誰か、俺の身内を止めてくれ……

Side 高町なのは

「無敵のヒーローさんもあなると形無しやな。」

皆にからかわれる速人お兄ちゃんを見ながら楽しそうに笑うはやてちゃん。

守護騎士の皆の事もあるから最初は渋ってたんだけど、当の皆がいつの間にかアースラに届けられた翠屋のケーキを食べてるし、クロノ君がイギリス旅行に行ったらしく戻ってもしょうがないからって開き直る事にした見たい。

「速人お兄ちゃんの場合は常に色々台無しな気がするけど……」

「またまた……そんな心にも無い事言つて。ちよつと速人が不評だと怒るじゃない。」

「やっぱり速人の事好きなんだねなのは。」

「だ、だから！違つてば……！」

アリスちゃんどころかフェイトちゃんまで何でか少し嬉しそうにしていて、否定すればするほど誤解が酷くなる気がする。

「おおおお……凄いいっぱいだ。それも美味しい……！」

「見苦しい食い方をするな下郎が、少しは落ちつけ。」
「言ってる貴女もですが…箸を握り締めて料理を串刺しにするのはやめてください。」

どうしようか考えていると、すぐ隣から宵の騎士になった三人の声
がする。

見れば皿を抱えて料理に被り付いているレヴィちゃんと、それを横
目にしながら怒っているディアーチェちゃんと、箸を握り締めて料
理を刺している二人を見ながら溜息をついているシュテルちゃん
がいた。

「そう言えば、三人とも紹介して貰ってないわね。」

「あ、えっと…」

アリサちゃんに気づかれて思わず口ごもる。

三人とは友達になれたとは言えないから、私から紹介は出来なかつ
たんだ。

アースラにいた時に、話そうかと思ったんだけど…

ディアーチェちゃんからは『殺そうとしたくせに今更ふざけるなよ
塵芥が。』と言われて、続けてレヴィちゃんから『しかも仲間の
ずのマスターを裏切って!!』と怒鳴られて、シュテルちゃんから
『過ぎたことを言うつもりはありませんが、虫が良すぎるのは確か
ですね。』と注意された。

我儂とか話を聞いてくれないとかならともかく、私達の方が責められる位だったのに説得する事なんてできず、結局まともに取り合ってくれないままだった。

シュテルちゃんはリンデイさんとお茶飲んできたみただけど、リンデイさん達は宵の巻物をお兄ちゃんが持っていていられるように頑張ってるから、何も出来てない私とは違う。

「始めまして、私はアリサⅡバニングス。貴女達は？」

止める間も無く自己紹介するアリサちゃん。
けど…三人は完全に無視した。

アリサちゃんの眉が吊りあがる。

「ちょっと！人が名乗ってるのに無視するってどういう事よ！」

「食事中に席を立つのは感心しませんね。」

シュテルちゃんが反応してくれたと思ったら、何故かアリサちゃんを注意し出す。

「完全無視した次に言う事がそれ！？パーティーだからいいのよ！」

「む、社交界のようなものでしたか…」

言いつつ、シュテルちゃんはディアーチェちゃんとレヴィちゃんを促す。

「シュテルです、以後お見知りおきを。」

「ディアーチェだ。」

「ボクはレヴィ。」

名乗るだけ名乗ると、また食べ始めるディアーチェちゃんとレヴィちゃん。

シュテルちゃんは二人の様子を少しだけ見ると、アリサちゃんを真っ直ぐに見る。

「質問は私が受けます。何かありますか？」

無表情で淡々と喋るのが普段のシュテルちゃんんだけど、物凄く冷たい感じがする。

アリサちゃんは、私とシュテルちゃんを交互に見たあと、シュテルちゃんを怒ったまま見る。

「どー見てもなのはやフェイトの友達に見えないんだけど、どういう関係で来てるの？」

「確かに彼女達の友人ではありません。私達は…」

そこで区切った後、シュテルちゃんは少しだけ間を空けて、右手で口元を隠して左手で右腕を抱えた。少し俯き加減になったシュテルちゃんは、そのままアリサちゃんを見る。

「マスター、高町速人の従者です。」

「んなつ!!!？」

アリサちゃんが思いつきり驚いて後ずさる。

すずかちゃんも少し顔を赤くしてシュテルちゃんを見ていた。

「な、なのは！フェイト！今の本当なの!？」

「え、う、うん…」
「そうだよ。」

少し慌てた様なアリサちゃんに聞かれて頷く私とフェイトちゃん。

「じゅ、従者って具体的には何を…」

「特にどうと言う事はありませんよ。マスターがいないと生きて行けない身体と言うだけで。」
「っ!!！」

ちょっと話しすぎじゃないかと思ったけど、魔法とかの話はしてないから別に止める事でもないかなと思って見てただけど、何でかアリサちゃんとすずかちゃんの様子がおかしい。

それに、さつきから混ざっていないはやてちゃんを見ると、何故か笑いをこらえていた。

『あんな二人とも、アリサちゃんとすずかちゃん、勘違いしとるんよ。』

『勘違い?』

『どういう事?はやて。』

『速人君と三人が、お子様禁止の恋人さんみたいな関係やと思ってるんや。』

『えっ!?!?』

言われて思いだす。

何かシユテルちゃんの言い方が少し変な気がしてたけど…

アリサちゃんとすずかちゃんの様子がおかしい理由が分かった所で、速人お兄ちゃんが戻ってきて…

「ふー… やつと出揃った。さて俺も食うか。」
「なななな何してんのよ馬鹿あーっ！！！！！」
「へ？うわあああっ！！何で飛び蹴り！？」

なんだか恥ずかしくなってる間に、アリスちゃんがお兄ちゃんに蹴りかかっていた。

S I D E O U T

「アリスは面白いのですね、お陰で楽しめました。」

俺に蹴りかかるアリスを見ながら、シュテルがそう言って薄く笑う。

「だ、騙したの！？」
「特に嘘は言っていないですよ？」

怒るアリスをなんでもない風にあしらうシュテル。
コイツも兄さんみたいに人をからかうタイプか…比較的問題ない娘かと思つてたけどやっぱクセあるのな。

「とりあえずシユテル、お前何言った？」
「マスターの従者だと自己紹介しただけです。」

しれつと言うシユテル。だけど真っ赤になつてたアリサの様子から見て大体想像はついた。

「アリサ、三人とはそういう契約を結んだだけで本当に特別何かあった訳じゃないぞ。」

「アンタが言つても信じられないでしょ。女湯覗こうとしてたくせに。」

「ああ、その事が。そりゃそうだろ。」

不審がるアリサに向かって堂々と宣言して胸を張る。

「忍さんや晶さんにレンさん、姉さんがいたから向かったただけだから、対象外の子供に何かする筈がない！」
「胸張つて言う台詞かぁー！！！！」

安心させてやるつもりだったのに思いつきり脛を蹴られた。

「…とんだ正義の味方だったな。それでいいのか貴様？」

「正直で悪いか！」

「開き直るのもここまでくれば清清しいですね。」

ジト目で見てくるディアーチエに何故か笑っているシュテル。
なのも浮かない表情してるし、何でこんな四面楚歌？

「どっちが主か分からんなー。速人君らしいと言えばらしいけど。」

「もうちよつと師匠見習った方がいいんじゃないのか？」

「あ、レンさん、晶さん。」

馬鹿な事をやってると、レンさんと晶さんがやってきた。

レンさんは俺の回りにいる皆を見て回った後、嫌な笑いを浮かべながら俺の頭を肘で小突いてきた。

「しかし速人君もすみ置きんなあ…ちよう目を離れた際にこんな可愛い子三人も連れとるなんて。」

「可愛いのは認めますけど連れてるって…」

「案外速人も師匠みたくなったりしてな。」

「いや、俺は兄さんみたいに朴念仁のまま擬似ハーレム満喫するよ
うな真似はしない！」

「おい。」

ふと、俺達のやり取りを見ていたディアーチエが声をかけてくる。

そして、レンさんと晶さんを見た後、首を傾げる。

「こいつらにお前の師をやれる腕があるとは思えないが？」

「こらこら！確かに競技の修行だけど実戦でも俺や兄さんのレベル
に片足突っ込む位には」

「おいおい速人、片足なのはこっちの亀だけだろ。」

「そやなあ…どっかのおサルは専門分野でも速人君に負けた訳だし

片足すら怪しいな。」

ディアーチエが疑うので二人の事を説明しようかと思ったのだが、返って墓穴を掘ってしまったらしい。

何かいつもの展開になりそうな気がする。

恐る恐る振り返り…

「ほいつ!!」

「だあああ!!」

飛雲天砲。

両掌による突き上げを直撃して吹き飛ばす晶さん。
天井近くまで吹っ飛んだ晶さんは態勢を整えて落下しながら蹴りかかる。

…何であんな空中戦じみた動きが出来るのか。なのはは多分魔法で飛んでても同じ事出来ないぞ。

蹴りを腕で受けたレンさん。しっかり衝撃を殺している辺りは凄い。何しろ蹴り受けて一歩もずれてないんだし。

着地した晶さんとレンさんは互いに構える。

静まり返る一同。

二人の試合ってそこらの格闘技の試合よりはレベル高いからな。
そりゃいきなりあんなもん見られたら呆然とするほか無いだろう。

…見慣れてる人以外。

俺はそつとその場を離れる。

「二人とも!!」

「「あ……」

まったくようやく気づいたのか。

なのは目の前で喧嘩してただで済む訳ないのに。

下手すると開始前に止めなかったって俺まで怒られる可能性がある
のでさっさと離れる事にしたのだ。

「折角パーティーの最中なのに喧嘩するってどういう事!？」

「や、やだなあ…俺達こんなに仲いいぜ。」

「そ、そやよ。気になっとなみたみやからちよう演舞して見せた
だけや。」

完全にお怒りのなのは様を前に晶さんとレンさんは肩を組んで無理矢理笑う。

「こんな所でいきなり始める理由は？」

「ありません……」

揃ってうな垂れる我が格闘の師匠達。

悪い二人とも。説教を避けられたのは危険回避能力の違いだと思っ
てくれ。

と、内心安心していたのだが…

「で、誰が朴念仁で擬似ハーレムを形成していたと？」

「あ……」

背後からかけられた声に振り向くと…

尊敬すべきお兄様がその拳を振り上げておりました。

…回避できてねー!!

「と、徹を全力で叩き込むのは勘弁しでえっ!!!!」

頭を叩かれた衝撃で目の前に火花が散った。

な、なるほど…ディーアーチエが泣いて怯えるわけだ…

幕間・クリスマスパーティー（後書き）

少し闇の皆が軽いですが、問題の闇からは切り離されて別物になつてるので、性格がずれてる程度に軟化してます。

幕間・クリスマスプレゼント

幕間・クリスマスプレゼント

はやてと対角の位置に隠れるように静かにしているフレリアの姿を見つける。

さっき二人が話しかけてきた時に四人だと言おうとしたが肝心のフレリアの姿が無かったのが気になったから探してみた訳だ。

836

「あ、主…」

「よ。」

呼びかけつつ軽く片手をあげる。

俺は持って来た包みをフレリアに渡す。

「まだはやての傍は急か？」

無言だったが、明らかに表情の曇りようを見てると大当たりらしい。俺が元凶じゃなかったら気にするなって堂々と言えるんだが…

「裁判ついてく訳でもないんだし、今の内に話しておいたらどうだ？」

「ですが私は…」

「無理は言わないが、そこで悲痛な顔してるのが十分話す理由になると思うがな。」

「え？」

意味が分からないのか本当に不思議そうに聞いてくるフレイア。

「その顔が、リンク云々以前にはやてを大事にしてる気持ちそのものがあるって証拠だ。だったら話したほうがいいに決まってる。」

単なるリンクや主従の繋がりなら、はやての事を気にしないで今の主の俺のアドバイスを無条件で聞き入れてはやてのところに行くだろう。

立場を気にしてそれを出来てないって事は、フレイアにとってはやてとの繋がりは単なるリンクじゃないって証拠になる。

「…私がそれでよくてもある…っ！」

はやての事を主と言いかけて口を噛むフレイア。泣きながら戦ってた事と言い本当に不器用だな。

口直しか俺が渡した包みを開いて中身…翠屋のシュークリームを齧るフレリア。

「美味しい？」

「あ、ええ。とても。」

「なら良かった。生きてて良かったる？」

シュークリームをついばんだ状態で硬直するフレリア。

『生きてて良かったと、必ずそう思わせてやる。』

俺が渋るリインフォースと約束した事。

「もちろん浮かない顔してるのにこれで約束終了なんて詐欺師みたいな事する気は無い。ただ難しく考えすぎなんだって。」

「難しく…」

「美味しいものを食べて嬉しかった。はやてが好きで、今話す機会があるから話す。どっちも単にそれだけのことだろ。それにどうしても家族に戻りたかったら手が無いわけでもないし。」

「えっ？」

目を見開くフレリア。

期待させて悪いが絶対承諾しないだろうな…

「ザフィーラと結婚する。」

「ぶっ！！！」

思いっきり噴出したフレイアはそのまま咳き込む。

「もしくはグレアムさんと結婚して養子縁組かなんかではやてを…
駄目か、上下が変わる。」

「あ、主…そういう問題では…」

頭を抑えるフレイア。

普段オーバーアクションはしないフレイアにもさすがに衝撃的ダメージか。

「あ、俺の方は完全に気にしなくていいぞ。はやてを主と呼びたい
ってんなら俺は別に名前で呼んでくれても一向に構わないし。」

「主は何故…そんなに強いのですか？」

あんまり俺が普通だから疑問に思ったのか、そんな事を聞いてきた。

「んー…昔心が一回凍ってるから常人とずれてるってのもあるのかも知れないな。でもしいて言うならそのすっからかんの状態で核を知ってるから強いように見えるだけかな？」

「核…ですか？」

「そ。さっきからお前が気にしてるのは外側のどつとでも変わる部分の事ばかりじゃないか。俺はサイボーグになろうとプログラム体になろうとした事もやることも変わらない。」

言いつつ、俺はフレリアの左胸を指差す。

「称号や呼び名に執着するのは仕事位で十分だ。リンクが切れてるなら管制人格って仕事する必要すらないんだから尚更自分の気持ちで動かないと。」

「私の気持ち…」

胸元に目を落として呟くフレリア。

「いくら主従関係やからって胸つつこつするんは感心せんよ。」

「主！？あっ…」

いきなり現れたはやてに驚いて思わず口を滑らせたかのように口元を押さえるフレリア。

実はちよつと念話で呼んでおいたのだ。

『フレイアいるけど来てくれる気ある?』

と言ったら即効承諾だった。

未だにはやてと呼べない事が立場じゃなくて心が認めてる何よりの証拠だ。

リンク切った俺の台詞じゃないが、素直になれるといいな。

「それじゃ後は仲良くな。」

二人を置いて俺はその場を離れる。

俺もフレイアもいない状態であの三人放っておけないからな。

そう思って急いだんだが…

何でディアーチェとレヴィまでなのはに座らされてるんだ？

「シュテル、どういう状況だ？」

「なのはに説教されているお二人を嗤ったディアーチエがなのはの威圧感に膝を折り、学習能力が無いのかそれを笑ったレヴィが巻き込まれました。」

「うん、的確な解説ありがとう。」

ともあれさすがなのは。瞳一つで兄さんすら屈服させる（シスコンのな部分突いて）事があるだけのことはある。

「安心していいのですか？」

「え？」

「師である二人を止めなかったマスターも説教の対象ではないかと。」

冷静に告げるシュテル。

俺がその意味を理解しきった時には、なのはの視線に捕らえられていた。

兄さんには殴られるは説教の煽りは受けるは…なんで俺こんな目に？

S i d e 〱 リインフォース・フレイア

私と主は会場から少し離れた位置に来ていた。

「ふふ…最初ちゃんとリインを連れてきてくれた時は素直に喜んでたけど、そんな簡単な事や無いな。」

少し無理をしたように笑う主。

「…すみません、このような形で残る事は主を苦しめる事になると知りつつ…私は…」

「こらー!」

本当に申し訳なくて目を伏せたが、主はそんな私に怒る。

「いなくなっとなら泣き叫んどったわ、滅多な事言うもんや無い。」

「

言われて、涙を流しながら車椅子でかけてきた主の姿を思い出す。

消えた方がよかったなどと思うのは、主にとっても間違いだったよ
うだ。

「速人君、これが限界だったって謝った。命がけで戦って、手配されるかもしれんのにクロノ君と交渉までして…そのずっと手前ではたばたやとった私やリインが、喜びこそすれ文句なんて言っていない筈無い。」

「そう…ですね。」

私は…きつと不満だったのだろう。

無理して残されたこの状況が、主や私に楔のように違和感を残し続けるから。

仮に消えていたとしても、今より悲しむと主が言っていると言つのに。

私は改めて主の優しさと強さに心を打たれて…

主の瞳が暗い事に気が付いた。

「主？」

「文句なんて言っていない筈無いのに…リインが戻ってこれんのがあの子等が管理局嫌がつとるせいとか、速人君が何でもっと上手く出来なかったとか、どうしても考えてまう自分がある。」

綺麗で優しい心を持った主。

その主からこんな気持ちを感じられる事になるとは思っていなかった。

「自分で何も出来んかったんに！速人君命がけで戦って皆護ってくれたんに！何でシグナム達が動いどった事すら気づかんかった阿呆がこんな事考えて！！私は…」
「泣かないでください主。」

主の瞳に浮かぶ涙を拭う。

主は悲痛な表情のまま私を真っ直ぐに見て涙を流し続ける。

「だってこんな…こんな事ばっか考えて…優しいだなんて言われる資格」

「主は優しいですよ。怒りをそのまま叩きつけるのではなく、自身の心に涙しているのですから。」

勝手に消えてしまえば、主を悲しませていた。

話さなければ、主の涙に気づく事も出来なかった。

「あまり御自分を責めないでください主。私は貴女から十分に幸せをいただけました。」

「けど…」

「主を悲しませる事になる私は、ここにいないべきではないと思っていました。ですが主は言うてくれたでしょう？私がいなくなるのは

嫌だと。私も…貴女の悲しい顔を見るのは辛いです。」

主は涙を拭くと、拭いきれない涙を見せたまま笑ってくれた。

「そやね。ザフィーラと結婚すれば嫁いで来れる訳やし。」

「あ、主…」

「冗談冗談。二人が本気ならともかくそんな無理言わんよ。」

からかわれたみたいだが、同時に笑顔が戻ってくれる。
きつと今、つられた私も笑っているのだろう。

…決めよう。

「主、私はこの新たな生を生きてみる事にします。恐らくもう元に
戻る事もないでしょう。」

「…そやね。」

これは技術的に出来るできないの話ではない。

別の生となった今、形だけ元の鞘に戻った所で、きつと付きまとう
違和感に苦しむ事になるだけだから。

だから…

「これを…受け取ってください主。」
「これを…ってそれ…」

私は主の手に剣十字の紋章を乗せる。

私がリインフォースのまま残せる物を全て詰め込んだ紋章。

渡したら今度こそそれで終わってしまう、そんな気がして渡せなかった紋章。

「リインフォースから貴女に贈れるものがこれだけでしたので…どうか受け取っていただけですか？」

「けど…そんなん渡したら…」
「彼ならば大丈夫です。能力の有無で扱いを変える様な人ではありませんから。」

渋る主だったが、彼の事を思い出したのか笑みを浮かべて紋章を受け取ってくれる。

「凄いクリスマスプレゼント貰たな…グレアムおじさんからは今の時間、皆には家族と意私の命、そしてリインからはこの紋章…大層なもん貰ってばっかや…プレゼント交換できるようなもん無いよ。」

「でしたら主、私の髪を切って頂けますか？」

私の頼みに頷いてくれる主。

未練を断つと言う意味合いを持つ儀式である事を、読書家の主は「存知だったようだ。」

一本のダガーを生成した私は、主に渡して背を向ける。

「…短い間やったけど、ありがとな。リインフォース。」

「それは私の台詞ですよ主。本当にありがとございました。」

髪を捕まれる感触がして、どれだけの時間がたったのか…

確かに断ち切れる感触を感じた。

振り返った私は主から髪束とダガーを受け取り、消す。

雪が舞うように魔力光が舞い、とけるように消えていった。

「…さて、んじゃ改めてよろしくな。フレリア。」

「はい、はやて。」

確認の意を込めて互いに呼び合い、慣れない感触に互いに苦笑した。

S i d e 高町なのは

…しっかり見るだけ見た私とフェイトちゃんは、こっそりとその場を離れた。

覗き見したかったわけじゃないんだけど、フレリアさんがふさぎこんでいたのも、はやてちゃんが無理していたのも何となく知っていたから心配だったんだ。

「きっとこれからも大きい小さいはともかくこう言う事はある筈だから、二人が元気になってくれてよかった。」

「そうだね。」

笑いあう私とフェイトちゃん。

と、その間に唐突に顔が現れた。

「にゃあああつ!?!?」

「シユ、シユテル!?!?」

いきなり現れたのはシユテルちゃんだった。

私達が慌てて離れると、間で物凄くワザとらしく肩を落とすシユテルちゃん。

「まったく大した人達ですね。覗きに殺人未遂の分際でよりによって殺そうとしていた対象が幸せそうにしているのを良かったなどと元が闇の私達でも恐れ多くて口が裂けても言えませんか。」

「う……」

返す言葉もない。

悲しかったけど、一時とはいえ消滅させるのを承諾したのは私とフイトちゃんなのだから。

「否定しないのですか？」

「……だって、あつてるから。」

悔しいけど、私に出来るだけの抗議はなかった。

そんな私を見ていたシュテルちゃんは、何故か目を伏せて微笑んだ。

「……貴女達は御人好しですね。私が元闇と言うだけで十分全否定する理由になるでしょう。」

「ならないよ。シュテルちゃん意地悪だけど間違った事は言わないし。」

「そうだね。特に真面目な時は。」

シュテルちゃんは私とフイトちゃんを見る。

笑みは消えていたけど、何故か喜んでいるような気がした。

「マスターと同じ温かさに免じて今回は無かった事にしましょう。ですが覚えて置いてください。貴女達が組織の正義にしたがって動いてゆけばいずれ今回のようにマスターと敵対する事になるでしょう。その時にまだ組織に準じると言うのであれば…この身の魔導の全てを以って貴女達を殲滅します。」

それは宣誓。

私は緊張しなきゃならないはずのその言葉が、とても嬉しかった。だって、速人お兄ちゃんの事がどうでもいいならこんな事言いに来る筈が無いから。

「敵対なんかしないよ…絶対。」

「お兄ちゃんが無茶するなら危ない事になる前に止めるつもり。」

フェイトちゃんに続くように自分の気持ち伝える。

しばらく私達を見ていたシュテルちゃんは、手を差し出してきた。

「いいでしょう、なのは。フェイト。その誓いが破られぬ間は私も破壊に走る事はしません。…確か、名前を呼べば良いのですよね。」

それは、私の記憶。

友達になるための初めの一步。

「あ…うん！うんっ！！よろしくねシュテルちゃん！！」
「ま、待ちなさいなのは。片手を両手で握って振り回しては腕が痛いです。」

「じゃあ私はこっち。よろしくシュテル。」

「何でフェイトまで真似るんですか。まったく…」

文句は言ってるけど振り払ったりはしないシュテルちゃん。

誓いを護ってる間の事だし、無条件で喜んじゃいけないのは分かってるけど…それでも嬉しかった。

ディアーチエちゃんには気難しそうだけど、宵の騎士の皆とも何とか名前で呼んでくれるようになるといいなあ…

S I D E O U T

幕間・クリスマスプレゼント（後書き）

リインフォースの関係での問題はこれでひとまず終了です。

後、いきなり友人関係構築したシュテルですが、

- ・ 速人の敵に回らないようにする根回し
 - ・ 模擬戦の相手確保
 - ・ 未経験の体験
- の三つが主です。

シュテルが目立つんですが、残る宵の騎士二人にも出番は作りたい
と思っています。

第三部開始前・それぞれの道（前書き）

空白期です。

各人の進路に関わる話になる予定です。

第三部開始前・それぞれの道

第三部開始前・それぞれの道

パーティーが終わった後、俺達はそれなりの関係者に魔法の事を話した。

俺の師匠でよく世話になってる昴さんにレンさん、アリシアの関係で手伝ってもらった神咲さんとフィリス先生、なのはの友達で既に関わってる久遠とアリサとすずか、俺んちの家族である父さん母さん兄さん、美由紀姉さんに忍さん。

とは言え、久遠（崇り狐、変身可能）がいる為別になんでもないイベントに過ぎず、アツサリ認知された。

って言うかむしろ、暴露後に久遠の変身を見た魔導師勢（フェイトは見た事あつたらしい）が目を点にした。

変身後、目を輝かせたレヴィに迫られて逃げ回る久遠を見ているのは本当に楽しかった。

さすがにクロノ達に直接見せると立场上局への報告がらみで心労が余計に増えるのが簡単に予測できたので黙っておくよう釘を刺しておいた。

さすがが少しだけ表情を翳らせていたのを見ると、自分も夜の一族の話をしたかったんだろうが、あれは一族の掟があるから下手に話せない。

で、そんな秘密を暴露した割りに一切何も変わらない閉幕を迎えた訳なんだが…

俺はその前になのはとフェイトとはやてをつれて神社に来ていた。

ついでこようとしていた宵の騎士達だったが、管理局の話をするので聞いてもしようがないと言う事でフレリアに任せて帰ってもらった。

「やー今日は楽しかった。ありがとな速人君。」

「クロノもイギリス旅行楽しんでる頃だしやっぱ事件解決したら宴会だよな。」

「は、速人…クロノはグレアムさんの家に行ったんじゃない…」

躊躇いがちに突っ込むフェイト。

事実はその通りで、この後戻ったらはやて、守護騎士の裁判と宵の騎士についての対応についての会議があるはず。

あまりに惨いので軽く忘れてやりたかったんだが、アイツの心労並じゃないな。

やっぱ胃薬貰つといてよかった、後でクロノに届けておいて貰おう。

「さて、管理局の話だが…とりあえず、三人とも入るつもりだな？」
真面目な話に切り替えたのが分かったのか頷く三人。

「私は元闇の書の主として罪を背負って皆の役に立つために働くつもりや。」

「私は執務官を目指そうと思ってる。クロノでも試験に落ちてるくらいだから難しいのは分かってるけど、私も悲しい事件を解決する力になれるなら、そうして行きたいから。」

「私は教導隊かな？飛べるようになって空が気に入ったし、後はフイトちゃんと同じ。こういう事件が少しでも無事に終わるなら私も力になりたいから。」

三人がそれぞれに答えを返す。
やっぱそうか…

む…隊とか官とか、10に満たない小学生女子の夢かそれ？
まあこの三人にそんな事言ってもしょうがないんだろうな。

「取りあえずなのは、お前は家族全員の承諾が得られなかったら却下な。駄々こねようが家出しようが叩き伏せてでも連れて帰る。」
「なんで…って言いたいけど、未成年だから？」
「それもあるが、戦闘があるからだ。今回程度に首突っ込むだけならともかく、こういうのに家族が関わるのは結構怖いしな。お前だつて分かってるだろ？」

大怪我した父さんを知っているのはは暗い表情で頷く。
家の全員から承諾されるってことは戦う者と待つ者両方に承諾されるって事だ、そうなればさすがにいいだろう。

「速人は…管理局に入るつもりは無いの？」

「ああ。入る訳には行かない。」

少しだけ躊躇いがちに尋ねて来るフェイトにきっぱりと答えると、余計にその表情が曇る。

「その訳と、注意事項を話しておこうと思ってな。」

俺に集中する一同。

硬すぎる気もするが…ま、楽しい話じゃないしこれ位の雰囲気の方がいいか。

「まず一つ目、組織に入るなら望んでも無い悲劇の引き金を自分の手で引かなきゃいけない。」

「それって…どういう事？」

疑問符を浮かべ首を傾げるフェイト。

「例えば今回の事件、一歩間違えば地上をアルカンシエルで砲撃し

なきやいけなかつたかもしれない。その指示を出すのはリンディさん。ここで問題、リンディさんは日本吹っ飛ばして手を叩いて喜ぶような人？」

「そんな筈ないよ。」

なのはの言葉に頷く二人。

「そう、でも最悪撃たなきやならない。んじゃ第二問。別に犠牲者が出ない方法があればそれをとる事が出来るかどうか。」

「そんな方法があるならやるよ。」

「はずれ。そうとは限らないんだなこれが。」

俺の答えに驚く一同。

無理もない。普通に考えたら誰だって取ると思う。

「二つ程とれない可能性がある。一つは確率。お前が対一でリライヴに勝てば皆無事、負ければ地球が消し飛ぶ。あらかじめ諦めて降参すれば滅ぶのは日本だけ。さてどうする？」

「あ……」

何かに気付いたように俯くフェイト。

「そ、努力挑戦言つてらんないんだよ。そんな時は『大人の都合』で降参になる。ま、時と場合によるがな。」

「そんな……」

弱々しい声をあげるなのは。悲しい事を減らす為に入ろうとしてるこいつらにはキツイ話だろうな。

「もう一つは法律。その状況で100%子供が助けられるロストロ

ギアがあるとする。でも勝手に使うと違法なので使えません。とか。

「そんな事ない！命より決まりのが大事だなんて！！」

声を荒げるフェイト。

勿論それはそうなんだが、この場合なんでその法律があるのかわかって所が問題になってくる。

「例えだが…その場で一回だけなら使っても問題ない物を管理局が持ってたとする。で、使った後他に同じような状況になった時に『どうして家の子には使えないの！？』ってなる訳だ。ロストロギアを管理する以上救えるから使いましょって訳にはいかないだろう。もし鼻肩に見えたりすれば暴動が起きたり鎮圧したりで被害はかえって増えるしな。」

フェイトは目に見えて頭を下げてしまった。無理もないが。

「んで…だ。さっき言った通りリンディさんは勿論、クロノもエイミーさんもいい人、優しい心の持ち主だ。だが、今説明したような悲劇を上司が出したら、嫌とは言えないんだ。たとえばお前らがまだやれるとか思ってもな。」

言葉もない。

泣かないだけまっして程に意気消沈している。

だが、これだけは説明しとかないといけない、何よりなのはには。

「嫌なのを無理矢理やる。つまりは心を殺して被害や悲劇を容認する事になる。そして、これを俺が絶対にやる訳には行かないから迷惑にしかならない俺は管理局に入れないんだ。」

「あ……」

何かに気づいたような声を上げるのは。
そう言えば、暗殺者云々の話はフェイトにもしたけど、俺の本気の説明はした事無かったな。

スイッチを切り替える。

別に脳内麻薬や心拍数の調整をしなくても、単純に心だけを殺しきることも可能。

俺は無言でフェイトの首に手をかけた。

「あ…は、速人？」

対象の急所に指を立てるように首を掴む。
このまま力を込めれば対象の殺害…

俺は目を閉じて頭を大きく揺さぶった。

つぶねー：たんに見せるだけで行き過ぎたらシャレにならん。
最近は調整可能になってきたとは言えまだ安易には使えないな。

「あー、はやてには言っ
てなかったが俺元暗殺者で、シグナム倒した時とかに使ってる今の完全気配遮断は、心拍数の低下や気配の排除、何より心の完全封殺で成り立ってる。」

「心の…封殺？」

「やめて！」

叫ぶなのは。聞きたい話じゃないよな。何しろ犬とは言え殺害現場
見てる訳だし。

俺はなのはの背に回って耳を塞いでやる。

「皆が学校でノートとる時と同じ位何も感じないで殺せるって事だ。」

「何も感じないで…って…」

信じられないと言った目で俺を見るフエイトとはやて。

そりゃそうだ。正気の沙汰じゃない。

一般人なら花を摘むのに躊躇いを感じるような人までいるのに、戦
闘者の兄さんでも躊躇わないよう覚悟する程度が限界だろう。間違
っても何も感じないなんてありえない。

そろそろいいかとなのはの耳を塞いだ手を離す。

「俺の事は今は置いておいて…だ。嫌な酷い命令を我慢して飲み込んでるうちに、知らず知らずの内に押さえ込んだ心が凍っていつて、酷い事をするのを躊躇わなくなる可能性がある。なのは言わなくてもわかっているとと思うが、怖いだろ？」

頷くフェイトとはやて。

「なので、救うって思って入った管理局で、いつの間にか戦闘兵器に成り下がらないようにちゃんと日頃から気をつけましょう。ってのが一つ。かと言って我慢しないで命令違反しても隊列乱れたりして被害がでかくなる可能性もあるからな、クロノは中々いい位置で折り合いつけてると思うぞ。あれだけ散々文句言ってたけど、全部上手くいくよう法の範囲内で足掻いてる訳だし。」

笑顔で締めくくったのだが、どうにも二人の緊張が解けないわなのはは泣き崩れているわでグダグダだな…
内容が内容だけにしようがないが。

「怖かったら俺に二度と会わなくてもいいからこの話だけ聞いておいてくれ。俺としては、皆が驚く異常者の仲間入りして欲しくなくて話してるんだから、怖いと思ってくれて気をつけてくれるならそれでいいから。」

フェイトとはやては戸惑いの表情を引き締めてはっきりと頷く。
なのはも涙を拭いて俺に向き直った。

心強くて何よりだ。

「もう一つは、必ず悪人がいるって事だ。」

こっちも随分飛んだ話だが、今までが今までだけに誰も何も言わなかった。

「人手不足でスカウトされただけの呑気な奴もいるだろうし、真っ当にやるつもりで入ってさつき見たいな暗い事情に遇った時に歪む奴、デカイ組織ならスパイが入り込んでるだろうし最悪元から権力の悪用目当ての人間だっているかもしれない。その全てを防ぐなんて仙人でも出来ないさ。悪人が百人に一人位としても何人が悪人になるか…」

実際今回もグレアムさんがギリギリ…って言うか組織的にはアウトな対処を取っている。

あれは根っこにあるのがクライドさんへの後悔と悲劇の連鎖を悼みすぎた結果だからまだましな方だが、極端に言えば管理局に潜伏して闇の書の暴走、世界の崩壊を狙うようなトンデモ野郎がいてもおかしくないって話だ。

「そう言うのが上司にいて、知らない間に悪事に荷担する事になったり、逆に指示した通りに動かない部下に悪事を働かれたりな。人の意思を読み切るなんて同じ人間には出来ないし、出来るからってしていい類いの事でもないしな。以上二つ、これだけ覚えておいてくれればいい。」

締めたつもりなのだが重い空気が一向に晴れない。

うーん…救う気で管理局に入るつもりの方には酷すぎたかな？
実際問題間違ってるわけではないんだが。

「あー…別に管理局がろくでもないって言うてる訳じゃないぞ？情報網が広ければ広い範囲で活動出来るし、力量や情報が足りてれば今回みたいにかなりうまくやれる。ただ全部が全部優しい活動にはならないって覚えておいて欲しかっただけだ。後、だからと言って心を殺して『これ位は現実ですから』って感じで冷めすぎて俺みたいにならないように。」

暗い表情だったが、三人ともしつかり頷いてくれた。

その後、はやてが車椅子をこいで俺に近づいてくる。

「速人君、しゃがんでくれる？」

「え？はいはい。」

何でかいきなりしゃがめと言われたが、特に断る理由も無いのではやてに目線を合わせるようにしゃがむ。

瞬間、平手打ちが飛んできた。

パチンと乾いた音が響いて少し顔が横にそれる。

「『怖かったら俺に二度と会わなくてもいいから』？怖い訳無いやろ！」

はやては断定するように言い切った。

…虚勢張ってくれるはやてには悪いが無理してるのが分かる。筋肉は萎縮してたし今もまだ緊張が残ってる。

それでも、はやては言葉を続ける。

「私と家族の命の恩人で、その怖い自分とずっと戦つとる速人君を

怖がるはず無いやる！なのにあんな悲しい事言ったらあかん！！」

「いやでも普通に考えて怖」

「怖ないったら怖ない！心の凍った暗殺者さんが怖くても、半人前ヒーローなんか怖ない！！」

振り払うように言い切った後、真っ直ぐに俺を見たはやては笑顔だった。

「半端なネガティブヒーローなんて半人前で十分や！レッテルに怯えとるくらいなら、思い出さなくらいにすっかりヒーローさんになつてみせんか！！」

全部言い切った後、緊張も虚勢も消えていた。

「…そうだね、大体普通に考えてなんて速人らしくないし。」

同じく笑顔で失礼な事言ってくれるフェイト。

「私家族だよ？二度と会わないなんて言わないで。」

迷いも躊躇いもなくいつてくれるのは。

…すごい小学生。

世間一般の方々から見たら、痣だらけで学校行つた時とかそれだけで十分異常なのに、段違い所か桁違いの異常を前にまだ笑顔を見せてくれるなんて。

「ありがとな、皆。」

無理をさせてごめん。

それと…無理してまで俺から逃げる事を選ばないでくれて本当にありがとう。

冷え切った世界から拾い上げられて始めて出会う事が出来た温かい世界。

これを、まだ知らない人やなくしてしまった人に届けるために…

少なくとも、冷たいレツテルはさっさと剥がさないとな。

第三部開始前・それぞれの道（後書き）

と言うわけで、最後のは今回の部での速人の課題です。

お叱り役は凄惨な光景を見たのはではなく、前回でちょっと前に進んだはやてに。

第一話・なのはの魔導師就職前試験（前書き）

注）試験終了まで恭也がなのはに少しきつくなっています。

第一話・なのはの魔導師就職前試験

第一話・なのはの魔導師就職前試験

S i d e 〉 高町なのは

クリスマスも終わって落ち着いた次の日の夜。

管理局に入りたいと言った私は少し緊張して答えを待っていた。

今周りには速人お兄ちゃんと宵の騎士の皆以外の全員が揃っていた。お母さん、お父さん、お姉ちゃん、恭也お兄ちゃん：忍お姉ちゃん。忍お姉ちゃんはたまたま遊びに来てただけ、恭也お兄ちゃんの恋人さんだからって事で一緒に。

「本気みたいだからね…身体に気をつけて何があつたかこまめに報告するなら良いわよ。」

「母さんは理解があるなあ…父さんもいいぞ。真剣なのは分かった以上、お前の道に文句を言つつもりはない。」

お母さんとお父さんから認めて貰える。

安心は出来ないけど素直に嬉しい。

私だって速人お兄ちゃんに言われるまでもなく皆に認めて貰うつもりだった。

管理局でどうかは置いておいて、地球じゃまだ未成年。

覚悟は充分あるつもりだけど、だからって何もかも勝手に押し通すのはよくない。

「心配は心配だけど…父さんと母さんがいいなら私もいいよ。私もまだ未成年だし、なのはぐらいから修行してたしね。」

「私も賛成。なのはちゃんなら心配ないもん、速人君と違って。頑張ったのもよく分かるしね。」

美由紀お姉ちゃんと忍お姉ちゃんもそう言って認めてくれる。

ただ…なのはより心配されてる速人お兄ちゃんって一体…って、ちょっと複雑な気分になって…

「恭ちゃんどうしたの？」

美由紀お姉ちゃんの声で後一人…恭もお兄ちゃんが黙ったままなのに気がついた。

「ほう…恭也、俺や母さんですら認めたと…いうのに何かあるのか？」

「ああ、少しな。」

少し焦った。認めて貰えなかったら管理局には入れない。
速人お兄ちゃんが全力で止めるって言った以上、無理して入っても
酷い事になるだけだから。

「兄として…高町恭也としては特に言う事はない。何処か抜けてる
愚妹よりは出来た仕事をするだろうしな。」

「恭ちゃんが酷い…」

いつも通りちよつと意地悪な恭もお兄ちゃんが美由紀お姉ちゃんを
からかう。

だけど…

「だが御神不破流の剣士としては、運良く拾った力を振るう事を楽
しんでいるような子供に『護る仕事』をやらせる気がしない。」

そう言ったお兄ちゃんは、今まで見た事がないくらい重かった。
普通に喋ってるだけで、恐いとかでもないんだけど…

「た、楽しんでるって…それはお兄ちゃんが訓練して上達するのが嬉しいのと同じだと思っの。ふざけて魔法を使った事はないよ？」
「それでもお前はすぐ側にあつた護る力を磨く事はしなかつた。」

御神の剣士にならなかつたって事だと思っけど…私運動音痴だし…

「護りたい気持ちがあ先に来て、魔法のほうが自分にあつてはいるから趣旨換えするといふならば話は分かる。だがなのは場合は力が先だ。それに、美由紀もそうだが、俺ですらまだ仕事にするかは考えている位だ。ただの仕事ならともかく、護ると言っなら冗談じゃ済ませられない。」

考えを見透かされたような恭もお兄ちゃんの言葉に何も返せなくなる。

お兄ちゃんは海鳴の地図を取り出して、特に何も無い所に丸をつけた。

「…どうしても言うならば、明日の夜この廃ビルに來い。その一時限り、不破恭也としてお前の前に立ち、見極める。」

空気が重い。

恭もお兄ちゃんが本当に真剣になつたらそれだけでここまで空気が変わるなんて思っていなかった。

「随分大きな口利くようになったじゃないか恭也。」

そんな空気の中で一人だけ意にも介さないように明るい声を出すお父さん。

と、お兄ちゃんはお父さんに視線を移す。

「仮に俺がなのはの歳に香港国際警防隊に入りたいつて言ったら父さんどうした？」

「全力でぶっ飛ばしてた。」

笑顔で言い切るお父さん。お兄ちゃんは私に視線を戻す。

「聞いている通りだ。むしろ試験の機会があるだけ良かったと思え。」
「…うん、わかった。」

恭也お兄ちゃんのほうが経験はずっと長い。
たんに年上だからって訳じゃなくて、気づいた時から刀を持って今までの今まで毎日修行を続けて、当たったら死んじゃうそれを振るう事の意味をずっと考えてる筈。

言葉を重ねても、真剣だと言っても、それだけじゃ届かない。

恭也お兄ちゃんの積んできた本気に、私の本気を見せる。

そうしないと、絶対に伝わらないし納得してもらえないから。

「貴女は朝早いんですね。」

「ふえ？あ、シュテルちゃん。」

魔法の鍛練をするのにいつも通りの時間に起きた私は、同じく起きていたシュテルちゃんと鉢あわせた。

…シュテルちゃん、元星光の殲滅者。

闇の書の闇が守護騎士システムと蒐集行使の能力を中途半端に使って作ったプログラム…だった。

今は宵の騎士となって、所有者で命の恩人の速人お兄ちゃんをマスターにしている。

それはいいんだけど…問題が二つ。

一つは、蒐集された私の情報から作られたから、私と殆ど同じ姿である事。

もう一つは…恭也お兄ちゃん見たいに人をからかうのが好きな事。

…お風呂から身体のおちこちを調べているような声が聞こえたのは気のせいだと思いたい。

「しかしマスターはやはり変わった人ですね、プログラム体である私達に部屋を譲るとは。」

「速人お兄ちゃんだからね、それくらいはすると思うよ。」

ちなみにマスターの威厳より皆を優先した速人お兄ちゃんはソファで寝た。もういない所を見ると、私より先に鍛練に出たみたい。

「なのはは魔法の鍛練ですか？私で良ければ付き合いますが。」

「あ、うん。ありがとう。」

ユーノ君は守護騎士の皆の裁判で資料が必要だからってクロノ君に連れて行かれたから、魔法の鍛練が一人じゃないのが嬉しい。

速人お兄ちゃんは時々付き合ってくれるけど…シューターだけだと速人お兄ちゃんが魔法強化無しでもまったく当たらないからやる度にへこむ。

さすがにお兄ちゃん程デタラメじゃないと思うから、素直に嬉しくて…

「制御が大変なのは分かりますがわざわざ唸る必要は無いと思います。音は位置を悟らせるきっかけになりますから。缶をくずかごに落とす時ですがわざわざ掛け声を上げるのは最後の一手を相手に悟らせる上、やはり声を上げつつでは精度が誤差程度ですが変わってしまいますので出来るなら最後まで制御に集中するべきかと。一撃ごとの」

「ごめんシュテルちゃん…もう許して…」

覚え切れない数の指摘を笑うでも怒るでもない表情で話され続けるのがとても辛いつて、今日初めて知って後悔した。

帰り道、折角だからシュテルちゃんにも話を聞いてみる事にした。

「恭也と試合ですか？いくら何でも無茶でしょう。」

「やっぱり…シュテルちゃんもそう思うよね。」

シュテルちゃんなら臍負無しで見えてくれると思ったからだけど、シュテルちゃんから見ても無茶みたい。

「確かに彼の鍛え方は並外れたものでしたが、それでも人間の範疇です。身体強化だけで運動の苦手な貴女でも彼の力に迫る程でしょう。バリアジャケットがあれば並の攻撃は通りませんし。」

「そうだよね…」

それにバリアジャケットで防ぎ切れなくてもレイジングハート経由でプロテクションを張ればそれだけで全部防げると思うし、『とおし』もレイジングハートに衝撃が伝わるだけで終わる筈。

昔はそれでレイジングハート落としてユーノ君に助けられたりしたけど、今そんな致命的なミスはしない。

「闇が元の私は管理局に入る事を薦める気もありませんが、勝ちたければ油断だけはしない事です。非殺傷設定もあるので、遠慮はしなくても良いでしょう。私から言えるのはこれくらいですね。」

「うん、ありがとう。」

「なのは、メールの話もう少し詳しく聞かせてくれないかな？ 恭也さんと試合って言ってたけど…」

お昼休み、屋上にいつものメンバーが集まった私達。で、物凄く心配されていた私はお弁当を広げる間も無くフェイトちゃんに詰め寄られた。

「詳しくって言うても本当にそれだけなんだけど…私が剣の修行し

なかったのに魔法で戦いたって言ったのが認められないって。」

「ジェラシー？」

「アリサちゃん…恭也さんがそんな事でなのはちゃんを止めるとは思えないけど…」

「わ、わかつてるわよ！！」

アリサちゃんの思わぬ返答に苦笑する私達。

誤解を解くために恭也お兄ちゃんの話の本題だと思ふ事を話す事にする。

「魔法の力がいきなり手に入ったから使ってるんだったら、守る仕事は任せられないって…」

「そんな事ないよ、なのはは絶対頑張ってる！」

「はいはいお熱いのはわかったから身を乗り出さないの！あの恭也さんがそれ位わかってない訳ないでしょ？」

アリサちゃんに止められて座り直すフェイトちゃん。

それを確認した所でアリサちゃんは私を見た。

「ちよっと話は変わるけど…実際恭也さんに勝てるの？」

ここでアリサちゃんは私やシュテルちゃんとは別の意見を出す。

「や、空飛べてすつごい光を撃てるのは知ってるのよ。けど…あの恭也よ？」

「そうだね…お姉ちゃんがノリで作った銃とか爆弾とかある防衛システムを無傷で潜り抜けたし…刀で試合したら速人君も一勝もしてないんですよ？」

…思いつきりおかしな表情になっているアリサちゃんとすずかちゃんの話す恭也お兄ちゃんの逸話に呆然とするフェイトちゃん。他に聞いている話だと…

「えっと…確か速人お兄ちゃんを助けた、現役最強の完成された御神の剣士って言われてた美沙斗さんって人とも戦う事になっちゃったみたいけど、勝っちゃったみたい…」

「完成された御神の剣士って…武装中隊を全滅させられるって言うてた…そんな人に勝っちゃったの？」

呆然と聞いて来るフェイトちゃんに頷く。

…改めて思うけど、恭也お兄ちゃんは本当に人間なの？

「で、でもさすがに魔導師には勝てないと思うけど…」

「…もしかしたら…戦うのが目的じゃないのかも。」

ふと、すずかちゃんが漏らした呟きが気になって、どういう意味か聞いてみる。

「たとえば…途中で誰かから助けてって連絡が入って自分の用事と誰かの助けどっちを優先するかとか…」

「単純に畏とかどう？忍さんが協力すれば凄いのできそうだし。」

すずかちゃんの話には少し納得出来た。

速人お兄ちゃんもそうだけど、筆記用具は必ず金属製にするとか日常生活でも気を抜かない様になっているって聞いた。

試験はビルだからって考えるだけじゃダメなのかもしれない。

「ありがとうすずかちゃん、アリサちゃん。必ず認めてもらうから

待っててねフェイトちゃん。」
「うん、待ってる。」

…ここからは終わるまで絶対に油断しない。誓って私は残りの時間を過ごした。

晩ご飯も終わって、私はシュテルちゃんと一緒にビルに向かっていった。

卑怯な気がしたけど結界張らないと戦闘をみせる訳にはいかないし、ユーノ君がはやてちゃんのお家の裁判に付き合ってるから、シュテルちゃんに結界張って貰いたくて付いて来て貰ってる。

「そもそも結界張らずに訓練するのは問題だと思つのですが…」
「う…」

痛いところを突くシュテルちゃん。

…シュテルちゃんには絶対に口で勝てない気がする。

そんな事を思いながらビルに向かって歩いてみると、一人の人影があった。

「速人お兄ちゃん？」

私はお昼の話を思い出しながら少し警戒する。

速人お兄ちゃんもあんまり良く思っていないみたいだから止めに来てもおかしくない。

けど…

「勝ちたいか？」

速人お兄ちゃんは全く予想外の言葉を投げ掛けて来た。

「え？」

「勝ちたいなら…少しだけ忠告しておこうと思ってな。」

お兄ちゃんは私を見ていつもと違う物凄く真面目な表情を見せる。
忠告って…どういふ事だろう？

「いいか、相手を人間だと思ふな。今のお前が地上で一対一を張れる相手じゃない。闇の書の方が可愛いくらいだ。」

「ど、どういふ事！？恭也お兄ちゃんが凄いのを知ってるけどいくらなんでも」

「お前は知らない。」

一日ずっと恭也お兄ちゃんの事を考えてたって言うても言い過ぎじゃない。なのにアツサリ流された。

「どういふ事なのですか？なのはが恭也の実力を知らないというのはさすがに」

「俺が今まで一勝もした事がない訓練相手は高町恭也だ。で…だ。お前がこれからやるのは御神不破流の剣士との戦闘だ。普段人をお前が好きな兄さんだが、不破の名を冗談で名乗る訳がない。」

間違はなく本気で来る。そしてそれを見た事があるのは…美沙斗さんくらいだろう。」

お兄ちゃんはそこまで言うと言つて神社に向かって歩き出す。

…いつもの夜の訓練をするつもりなんだろう。

「勝ち目があるなんて思つてたら絶対負けるぜ。リライブに挑んでるいつも以上の格上に挑むつもりでやるんだな。何しろ不破って…」

一度止まって、振り返つた速人お兄ちゃんは、自分の首に親指を当てて、

「要人暗殺なんかを担当してた、『殺し名』だからな。」

「っ!？」

言いながら首を切るかのように親指を動かした。

「御神の剣もその傾向らしいが裏の不破はもつと根が深い、前の俺に近い『殺す剣』だ。二度と魔法を使えない身体になりたくなくなつたらマジで真剣にやるんだな。」

手を振りながらそう言つと、お兄ちゃんは振り返りもしないで見えなくなつた。

殺す剣…私はお兄ちゃんのそれをよく知ってる。
別に殺さなかったって、速人お兄ちゃんがクロノ君を木に縫い付けた
ように加減だつて出来るはず。
だから…私が戦うに値しないって思われたら、二度と戦えないよう
にされるかもしれない。

「ちょっと…覚悟決めないとね。」

私は言いながら強く手を握る。

『エクセリオンモードで行きますか？』

「さ、さすがにそれは…」

本気で言ってるレイジングハートがちょっとだけ怖くて苦笑いした。
折角気持ちを入れ直したのに…

S I D E O U T

第一話・なのはの魔導師就職前試験（後書き）

話し合いのときに速人が外れていたのは訓練を名目にした意図的な行動です。

全員から許可ができる事が自分が許す条件なのにその場において問いかけられても正直に答えられないので。

第二話・不屈の心

第二話・不屈の心

S i d e 〉 高町なのは

シユテルちゃんにビルを結界で包んで貰う。これで魔法を使っても大丈夫…

「行こう、レイジングハート。」

『了解しました。』

ビルの中に入る。

『生命反応は一階からです。』

レイジングハートのいう通りに進んで行くと、廊下に構える事もなく立っている恭也お兄ちゃんの姿が見えた。

「…なのは、考え直す気はないか？」

「お兄ちゃんが認めてくれるための条件がこの試合で勝つ事なら…
私はいつも通り全力全開で戦う。」

予想通りだったのか、私の答えに目を伏せる恭もお兄ちゃん。

「……………わかった、その覚悟が本物なら…見せてみる。」

お兄ちゃんが宣言すると同時にシューターを…

「ひ…っ…!!」

お兄ちゃんが目を開いた瞬間何も考えられなくなった。

怖い？

…違う、死ぬ！殺される！！

全身が逃げようとしていた。震えて少しも動けなかった。それどころか今すぐにも膝が折れて立てなくなりそうで…

『マスター。』

「っ！？」

レイジングハートからの呼び掛けにどうにか意識を取り戻す。

お兄ちゃんは相変わらず立っているだけ。だけなのに気を抜いたらそれだけで意識を失いそうな何かを叩き付けられていた。

相変わらず身体が強張ってマルチタスクどころじゃない。

けど…それでも…負けられない！

「アクセルシューター、シュート！！」

五個のシューターを放つ。

今、これ以上は制御出来ないと思うし、この狭い廊下で避けられるとは思えない。

特に誘導性も無いままお兄ちゃんに向かっていったシューターは…

いつの間にか私の前まで来ていたお兄ちゃんに当たる事無くビルの壁を崩して消えた。

何が起きたのか分からなかった。確かにまだ身体はこわばってるけど、目は閉じてなかったはずなのに…

「あ…あ…」

お兄ちゃんがゆっくりと刀に手を掛ける。

「プ、プロテクション!!!」

慌てて障壁を張った私が最後に聞いたのは…

「薙旋。」

技の名前らしい単語だった。

Side 高町恭也

なのはが展開した桜色の障壁は、薙旋の三撃目で砕けて消えた。

抜刀始動の四連撃である薙旋の残る一撃を受けたなのは、壁に背を預けて滑る様に崩れ落ちた。

胸元に出来た刀傷から流れた血がなのはの着る服を赤く染めていく。

防護服らしいからもう少し持ち堪えてくれると思ったが…やり過ぎたな。

骨までは斬らない様に調整はしたが、重傷は重傷だ、早めに手当てするべきだろう。

…本当ならここまでするべきじゃないのかもしれないが、実戦ならこの程度じゃ済まない。

確かにこの歳で戦闘者の殺気を叩き付けられて震える足で立っているのは評価出来なくも無いが…敵にも、守るべき者にもこちらの事情など関係ない以上、やはり早すぎる。

せめて小学校を卒業するまでは、速人にでも戦闘訓練を任せるべきか。

考えながらなのは抱えるべく手を伸ばし…

「プロテクション。」

桜色の光に遮られた。

「バリアバースト。」

「く…っ…!!」

続けられた言葉に嫌な予感がした瞬間…

『神速』に入る。

緩やかな世界の中で後退する。

が、さすがに間に合わず目の前で障壁が爆発し、後退の最中の俺は急激に加速する。

先刻避けた光球が当たって崩れた壁を背にようやく止まる。

煙の中で動く気配がするのを感じる。

意識が飛んで尚戦う事を選ぶのか…

なのはは『いい子』だ。真面目で優しく、甘え下手で手がからない。

だからこそ、怖い事でも我慢で出来るかもしれない。

命の危険が怖くないと言うのは人間として終わっているが、ただ我慢するのもまた違う。

恐怖や危機の中で、その怖さを、緊張ではなく集中力や意志力に変えていく、それが出来るだけの下地が出来ているのが戦闘者だ。

魔導師の性質、マルチタスクは聞いていたから研ぎ澄まされた殺気に慣れていないのは分かっていたが、技術や出力と戦闘者としての資質は別物だ。

それが一番の気がかりだったのだが…

生命の本能は死に怯える様にできている。意識が無い…薄い状態で戦いを選ぶのは、本能を超えるだけのものが身についていると言っ事。

「ここまで出来るほど強い願いなら、仕方がないか。」

認めるしかない。

真面目なだけの子供じゃなく、本物の戦士として。

S i d e 〉 高町なのは

…痛い。

良くわからないけど私は立っていた。

何で…こんな事してるんだっけ？

理由は良く思い出せなかった。
けど、このままじゃ大切な何かを失う事と…

簡単に諦めちゃいけないって事だけは思い出せた。

「不屈の心は…この胸に。」

『長距離砲撃モード、スタンバイ。』

…私の始まりの魔法で私の得意技。

『「デイバイン……………バスター！！」』

私はただ真っ直ぐに魔法を放ち、そのまま意識を失った。

S i d e へ 高町恭也

神速で窓に飛び込む。
割れた硝子の破片で切れたのか身体が痛むが気にしている場合では
無かった。

直後、ビルの壁を突き破って桜色の光が飛び出して来た。

…魔力ダメージとか言っていたが、アレに当たっても死なないのだから？

とてもそうは思えない光の柱を眺めつつ、少し淋しく思う。

家の妹は随分遠い世界に踏み込んでしまったんだな…

「無事ですよですね恭也。」

「ああ…だがなのはが怪我をしている。連れて来るから待っていてくれ。」

様子を見に来てくれたらしいシュテルに待つて貰い、なのはを抱えて来る。

シュテルはなのはの傷を見て意外そうな表情を見せた。

「重傷ですね。恭也がこれを…」

「どんな状態でも落ち着いていられるか見たかっただけなんだが、思ったより防護服が脆くてな。」

気にしているようだったから答えると、何か納得するように頷くシュテル。

「マスターが貴方を『人間だと思ふな』と言っていたので何事かと思いましたが、漸く納得できました。」

「確かに御神の剣士は何処に行っても化け物扱いされると父さんから聞いてはいるが、生身でビルを倒壊させられる人間に言われるのは心外だな。」

否定してはみたものの、単に倒壊させるだけならば時間をかけて柱を徹で切断すれば出来る気がする。

…やはり化け物扱いは変わらないようだな。

翌日、なのはに重傷を負わせた事が原因で父さんと母さんに散々説教を受けた挙句、フレイアさんの魔法では治りきらなかったなのはを診てもらう為に病院へ赴き、神速の多用による過負荷に怒ったフリリス先生の激痛付きマッサージを受ける事になった。

…と言うか父よ、貴方元戦闘者の癖にそんな甘くていいのか。

S I D E O U T

見舞いが終わった後、俺はなのはの話を思い出していた。

「シューターを避けられた…か。」

意図的に隙間を埋めるように五個のシューターを放ったのに避けられた。

しかも高速はフェイトで見慣れている筈なのはが何が起こったのかわからなかった。

いくら兄さんが化物並とは言え、魔法も無しでそんな真似ができる訳がない。

あるとすれば…

あの時の美沙斗さんか。

俺が負けたとき、美沙斗さんが何をしたのか全く分からなかった。

死角の取り合いと言う点においてなら、昔の俺でも御神の剣士に十分通じるはず。間違っても正面にいる相手に何をされたか分からないなんてありえない。

でも、現実それが出来る。美沙斗さんも兄さんも…下手したら姉さんも。

…まだ全てを見せきっていない兄さんにすら届いてない。
分かってはいた事だけど、ホント俺まだ半人前なんだな。

第二話・不屈の心（後書き）

自分でやっててなんですが：恭也強っ！！
もつともビルだから出来た話で、広い空間だった場合さすがに手が
できませんが。

刀で真っ向からプロテクション破壊してますが、普段のなのはが張
ったものならさすがに壊せません。へり沈めるような砲撃すら防ぎ
ますから。
ですが、今回はまともに魔法が扱えない状態だったため破られまし
た。

気についての『作中での』意味合い

身体に作用することはしますがどちらかと言うと精神的な意味合い
の方が強いいため、なんかでたり飛ばしたりとか、空飛んだりとかは
しません。

ただし、打撃等は多少変わってきます。

動作的には同じでも、気持ちが入っているかないかで変わってく
る違いで、戦闘者が意図的に使っているのはその強化版です。

あと、今回なのはを怯えさせたようなものは簡単に言うと威圧です。
子供が泣くのと頑固親父（笑）の怒鳴り声は、音量が同じでも怖い
のは頑固親父だけと言った違いの、頑固親父の強化版です。

生きてるものは誰でも持っています、意図的に使えるのは自然の
中とか生身での殴り合い斬り合いを繰り返してきたような達人だけ
です。

ちなみに魔導師は理論、魔法制御、マルチタスクが原因で、たとえSSSとかの凄腕でも気関係の対応は大して出来ません。

上記はこの小説での設定で、実際とは異なる可能性が高いですの
で鵜呑みにはしないでください。

第三話・アリシアの家出

第三話・アリシアの家出

S i d e 〱 フ ェ イ ト 〱 テ ス タ ロ ッ サ

私は、病院に入院したなのはのお見舞いに来ていた。

フレリアの魔法で多少なり治した後だったから、縫うとかはしなくても良かったみたいだけど、結構痛そうな傷だった。

でも、一応恭也さんにも認めて貰えたって話をしてくれたたなのははとても嬉しそうだった。

「それにしても、一日だけ入院なんて…」

「あ、うん…バリアジャケットがあまり役に立たなくて。」

信じられない。

なのはのバリアジャケットは防御力を考慮して組まれている。高機動型の私のジャケットより防御力が高いはずなのに…

「本当に凄いね…私も模擬戦やつてもらえるかな？」

「…あ、あんまりお勧めしないよ？何でかよく分からないけど物凄

く怖かったから。」

私は興味があつたんだけど、かなり強い意志を持つてるのはが言いよどんでいる。

そんなに怖いのだろうか？

「レイジングハートに聞いたたら、あの時の私、初めて魔法使った時よりもどうしようもなかったって。」

「そ、それは…凄いな。」

なのはがふざけて魔法使う筈が無い以上、そんな状態になるほどなのはを怯えさせたと言う事になる。

なのはだつて激戦を潜り抜けてきてるのに…

「でも良かった。後は合宿に行く事になるけど、管理局には勤められるって。」

「合宿？」

「うん。お兄ちゃん達の合宿。運動苦手だから少し不安だけど、戦う仕事につくならそんな事言つてられないし。」

速人達の合宿、なのはも行くと言つたら魔導師が行ってもいいのだろうか？

一回盗み見ただけのあの鍛錬に…

「ついて行ってもいいかな？」

「え？うーん…恭也お兄ちゃんに聞いてみるね。」
「ありがとう。」

恭也さんに許可を取るとなると念話で聞く訳にも行かない。
決まったら教えてくれると言う事で、お見舞いは終了になった。
元々回復魔法も使ってたからもう退院できるみたい。

「それじゃまた後で。」

「うん。」

なのはが管理局に入れるようになって、あの速人達の訓練について
行けるかも知れない。

アリシア…お姉ちゃんももう退院していて、

そんな事もあって…少し、浮かれすぎていた罰だったのか…

「何で…」

「え？」

「何で管理局に入るの!？」

お姉ちゃんに怒鳴られた。

帰ってきてるのはが管理局に入れるようになったから、一緒に行けると話したら、お姉ちゃんが怒った。

訳が分からなかった。

お姉ちゃんは管理局での活動が全部は優しい活動にならないって言う速人の言葉を知らない筈だし、何でこんなに怒るのか分からない。

ただ、本当に怒っている事だけはわかった。

「だっておかしいよ！お母さんが事故に巻き込まれたのだって管理局のお仕事してたせいだし、私とかお母さんとか助けてくれた速人を危ない人扱いするんだよ！？何でそんな人達の手伝いなんか！！」「じ、事故は事故だから仕方無いよ。それに速人だって少し間違えたら危ないから」

そこまで言った所で、聞き慣れた鞭のような破裂音がした。

頬が熱い。

叩かれたと分かったのは、その熱さを感じてからだった。

「毎日毎日起きてられない位夜遅くに帰って来てたのに、そんな無茶させられて仕方無いってなに！？速人が少し手を差し延べてくれなかったら私も死んでたんだよ！？なのに速人が悪いの！？私が生きてるのが悪いって言うてるのと同じじゃない！！」

痛かった。

母さんに叩かれた時と違って、裏切られたんじゃないやなくて裏切ってしまったんだって、お姉ちゃんの瞳に湛えた涙を見て思ってしまったから。

「フェイトの馬鹿！！大っ嫌い！！！」

「あ……」

力無く崩れ落ちた私は、泣きながら背を向けて部屋を飛び出したお姉ちゃんを見送る事しか出来なかった。

Side↳アリシア⇨テストロッサ

家を飛び出して、訳も分からないまま町に出る。

どこをどう進んでいるかも分からないまま家を離れて…

「うわっ！」

「あっ！ご、ごめんなさい！！！」

前を見ていなかったせいで人にぶつかってしまっ。転んじやった私はそのまま謝った。

「俺は大丈夫だ。ってアレ？フェイトちゃん？」

私があつかつた人は振り返って手をさしのべてくれた。
フェイトの知り合いだったみたい。

「私、フェイトのお姉ちゃんのアリシア。テストロッサです。」

「お姉…へえ…そっか。」

微妙な反応をするお兄さん。

うう…小さいのは長い間ポッドで眠ってたせいだもん。

「お兄さん信用してないでしょ。」

「してるって。それじゃ俺が女だって言ってる信じるか？」

言われて良く見てみる。

…心なしか胸が本当に少し膨らんでる気がする。

「…冗談？」

「だよな。俺も何で男に生まれなかったのか疑問に思ってる。」

サッパリ言うお兄さん。…ひょっとして、本当に女の人なのかな？

「家に行く道分かる？良かったら案内…どうかした？」

目に見えて表情が変わっちゃったみたいで不思議がられる。

何でもないって言うてもリンディさんに連絡行っちゃうだろうし…

「家出…して来たんです。」

「え？」

「はいー。取りあえず今日は家の方泊まってって貰います。迷惑な
んか無いですよー、速人君とちごておとなしいですし。」

私はお兄さん…じゃなかった晶さんのお家に連れて来て貰った。同
居しているレンさんが電話で連絡してくれる。

「で、何で家出なんかしたんだ？」

晶さんが責めるでも無く聞いて来る。
理由なんてフェイトが知ってるから隠してもしょうがない。

私は、管理局に速人さんが悪い目で見られてる事、そんな速人さん
がいなきゃ私は生きていなかった事、なのにフェイトがそんな管理
局に付くって言うてる事を説明した。

「…私、速人さんがいなきゃ生きてないのに…何であんな事言う管
理局なんか就職するなんて…」

「あー…なるほどな…」

晶さんが困ったように頭を掻く。

隣りに座ったレンさんが、ちょっとだけ怒ったように息を吐いた。

「何や大体想像付いたけど…あのアホ警察さんに睨まれるような事までしとんか。」

「アホって！だから速人がいなかったら私は」

「落ち着いて。俺達これでもアイツとはそれなりに付き合いあるからどういふ奴かは知ってるつもりだ。」

つい身を乗り出した私を止める晶さん。

私が座り直したのを見ると晶さんはレンさんを睨む。

「恩人をよく知らない人に馬鹿にされたら嫌だろ？普段のノリはやめとけよ。」

「う…言うやないかおサルの癖に。」

「何か言ったかミドリガメ？」

睨み合う二人。

何でか笑ってるのにちよつと怖い。

「あ、あの…」

「あ。」

恐る恐る声を掛けると、二人は睨み合うのをやめて私に向き直った。

「コホン！えーと…つまりアリシアちゃんは速人君を傷つけるような事言う警察…管理局や、その味方しようしとるフェイトちゃんが許せへんと？」

「えつと…うん。」

レンさんが少しだけ違う言い方で聞き直して来たけど、間違いじゃ

ないから頷く。

けど、レンさんは何故か首を横に振った。

「それやと速人君に悪い事しとるんはアリシアちゃんやな。」

「え、な、何で!？」

私は速人さんの事馬鹿になんてしてない。むしろとっても感謝してる。

間違っても悪い事したつもりはない。

「速人は自分が悪い事したの分かってるし、管理局に怒られるの気にしてないからな、多分。嘘だと思うなら聞いてみるか？仕事だから当然だって言うと思うぜ。」

命懸けで私を助けてくれるくらいだから、それ位優しくてもおかしくない。

けど私が悪い事してるって…

「速人君が何で頑張ったか分かるか？」

聞かれて少し考えてみるが、分からなかったので首を横に振る。

「フエイトちゃんやアリシアちゃんに、幸せに生きて欲しかったからや。やのにアリシアちゃん、喧嘩して飛び出して来て泣いたる?しかも当の速人君の事で。」

「あ…」

言われてようやく分かった。
レンさんの言う通りに速人さんが思っているなら私の方が速人さんを裏切ってる事になる。

「二人が喧嘩したって聞いたらアイツきつと傷：つかないな。二人を引っ張ってなけなしの小遣いはたいて遊園地にでも連れてきそう
だ。」

「せやなあ…何なら速人君にゆーて見よか？遊園地行きたいやろ。」

…何か二人にはどうなるか想像ついてるみたいだけど、私とフェイトが仲直りする為にまたいろいろするのは分かった。
ちよっと楽しそうだけど、私のせいで速人さんに無茶させたくない。

「速人さんに迷惑かけたくないから…」

「何や、タダは貴重なんよ？」

「テメーは一々発想ががめついんだよ。」

私の答えに意外そうに答えるレンさんと、そんなレンさんに呆れる晶さん。

「がめついて何やコラ！アンタがアホやから無駄遣いしまくってるだけやるが！」

「10円20円違うのに大騒ぎする必要ねーだろ！！」

「そこに気いつけるかつけんかが明暗を分けんのや！！！！」

睨み合う二人。

当たり前前に喧嘩するのはちよっとどうかと思うけど、何でか仲良さそう。

…仲いい…か。フエイト叩いちゃったな…

謝らないといけない。速人さんが管理局の事気にしてないなら、フエイトと速人さんに酷い事してるだけで何の意味もない。でも…お母さんにアレだけ叩かれて、凄く嫌な筈なのにあんな事して許してくれるかな…

「でりゃあ!!」

「うわあ! やったなおサル!!」

考え過ぎていたせいか、ようやく目の前が騒がしい事に気がついた私は目を向けて…

耳が壊れそうな大きな音の後、レンさんの掌と晶さんの拳がそれぞれ相手のお腹に当たっているのを見た。

「う…ぐぐ…あかん…クロスカウンターになってもーた…」

「な、何だよだらしねえな…俺はまだピンピンしてるぜ…」

プルプルと震えて言う二人。

「だ、大丈夫？」

「ん? ああ平気平気。どんガメとは鍛え方が違うからな。」

「パワー馬鹿のおサルに言われとうないわ。ウチも直撃は外したから何も問題ないよ。」

かなり鈍い音だったから心配したんだけどあっさり言う二人。

：なんだろう、はたいた事心配してる自分が馬鹿みたいに思えて来た。

大騒ぎした割にアツサリした二人のおかげで、不安がサツパリ無くなっちゃった。

心配する位なら早めに謝ろう。

「一人で家を飛び出してお二人にも迷惑かけて、何をしたか分かってるの？」

「はい…」

次の日、家に戻った私はリンディさんに次元通信越しに思いつきり怒られた。

「退院したばかりなんだから、あまり心配かけないで。」

「はい、ごめんなさい。」

優しい笑顔を見せてくれたリンディさんに、私は素直に謝った。

あの二人もそうだったけど、意見が違っても仲いいものは仲いいんだ。

速人さんがいなきゃ生きてないのとリンディさんが私を心配してくれるの、両方本当でもおかしくは無い。

「速人さんの問題が落ち着いてないからまだ戻れないけど、終わったらアースラススタッフは休暇が貰えるから、その時はゆっくりしましよう。」

そう言ってリンディさんはモニターを閉じた。

私も映像を消して、意を決してフェイトの部屋をノックする。

「アリシア…」

「う…」

入るなりアルフに睨まれる。

フェイトが大事でしょうがないって感じだから無理も無いか。

「アルフ、ダメだよ…」

「けどさあ…」

アルフを止めて私の前に立つフェイト。

私は真っ直ぐフェイトを見て…

「「うめ」」

頭に鈍い衝撃があった。

謝ろうと頭を下げた筈なのに、頭が痛い。

目を閉じてたから何が起こったかもよく分からない。アルフに叩かれたんだらうか？

「フエ、フェイト！大丈夫かい！？」

「う…うん…お姉ちゃんは？」

「い…痛い…」

痛い額を抑えて目を開けると、何故かフェイトも額を抑えていた。

ひょっとして互いに頭をぶつけたのかな？うわ、恥ずかしい。

と、少し横道にそれた事を考えていると、フェイトがお辞儀していた。

「その…ごめんなさいお姉ちゃん。管理局だけじゃ私もお姉ちゃんも助かってないのは分かってる。なのに…」

「ち、違うのフェイト！ごめん！！」

フェイトが暗い顔で私を見ていた訳気付いた私は、急いでフェイトを止めて謝る。

「速人さんを悪く言うのは納得出来て無いけど…フェイトの夢に文句を言った私が悪かったの！しかも私だけ叩いたし！！だからごめん！！！」

「そんなことないよ。私だって大事な人の事悪く言われたら悲しいから。それにお姉ちゃんも速人の話を聞いて無いし。」

謝る私を許してくれるどころか、悪くないとさえ言ってくれるフェイト。

…こないだ娘叩くなんてどうかしてたな私。

「速人さんの話って？」

「管理局に誘ったけど断られたんだ。組織の仕事だから、無闇に命令に逆らうと足並みが乱れて被害が大きくなる、いざと言う時にでも見捨てられない自分は管理局には入れないって。」

気になって聞いてみたはいいけど、余計に自分が間違ってたって分かっただけだった。

フェイトを止めなかったなら、速人さんは管理局の事悪く思ってる訳じゃないんだから。

別に居場所が違ってても、意見が違ってても敵とかそんな事考えなくてもいいなら…

「でもフェイト、これだけは言っておくね。」

「え、何？」

フェイトと一緒になれると思ってたけど、フェイトが管理局に入るならしょうがない。

「私は、速人さん専用のデバイスマスターになるから。」

フェイトは呆然と目を見開いた後、そっか、とだけ呟いて苦笑した。

S I D E O U T

第三話・アリシアの家出（後書き）

アリシアはなのはがごたごたしてた間に戻ってきてるのでちょっと急展開に（汗）

にしてもいきなり（本格的に）登場した割に一話丸々持っていくとは…アリシア、恐ろしい娘（笑）

第四話・レヴィの新必殺技！（前編）

第四話・レヴィの新必殺技！（前編）

「ルベライト。」

「あっ！！」

シュテルのバインドによって拘束されるのは。

怪我が治ったなのはの慣らしと言う事で、なのはがシュテルと模擬戦を行っているのだ。

闇の補助がない為魔力値はなのはと大差無くなったようだが、知識量と理の特性はそのまま為、戦術レベルはシュテルの方が上のようだ。

「ブラストファイヤー！」

「っ！レイジングハート！」

『ジャケットパージ。』

と、なのはは何をトチ狂ったのかバリアジャケットを消す。バインドも吹き飛んだがさすがに致命的な気がするんだが…

が、なんとなのはは再生成もしないままプロテクションを展開する。

…確かにそれなら間に合うが、真っ裸で空中にいるのはさすがにど

うかと思う。

普段なら衝撃を抑えてくれるジャケットがない為、防御魔法を張った手が裂けて傷が出来ているようだが、無視したなのはは砲撃の終了を待たずにシューターをシュテルに叩き込んだ。

…シュテルは戦術的にかなり優秀なんだが、意地張ったりしないからな。

もう少し負けん気あれば面白いんだが。

自分の格好に気付いたなのはが慌ててジャケットを生成するのを横目に、落ちるシュテルを受け止めた。

「…負けました。」

「アレで勝ったと喜んだら、いろんな意味で間違ってるから気にするな。」

なのはを見て見れば何かディアーチエに詰め寄ってる。大方恥知らずとか言われたんだろうな。

「よーし！次はボクだ！！さあ！誰が相手だ！？」

レヴィが自身のデバイス…バルニフィカスを頭上でグルグル回す。なのはの慣らしで来たのに何でレヴィが張り切ってるんだか。

「…それじゃ私もリベンジ。」

だが、フェイトが何故か楽しげに名乗り出た。アイツ、バトルマニアか。

「フェイトちゃん頑張つて!!」

なのはの声援に笑みを返す事で答えるフェイト。
俺は軽くシュテルをつついて声援を促す。

「宵の騎士として無様に負ける事がないように。」

「何で！自分が負けたくせに!!」

「負ける気なのですか？」

「ボクは勝つ!!!!」

シュテルから放たれたのは挑発だった。

単純なレヴィはアツサリ乗せられる。

ま、士気が上がったならいいか。

俺はディアーチェとシュテルの間に座り、構えるフェイトとレヴィを見る。

「それじゃ構えて…始め!!」

俺の合図を聞いた瞬間、高速移動するレヴィ。

…が、フェイトの『目の前』でバルニフィカスを振りかぶったレヴィは、フェイトが準備していた射撃魔法を直撃して落ちて行く。

「何でえええ!?!」

…レヴィ、それはこっちのセリフだ。

何処の世界に開始直後に無計画で真正面に飛び込む馬鹿がいる。

牽制のつもりで準備していたのだろう。プラズマランサーを全弾直撃させて終わったフェイトの方もむしろ呆然としている。

…呆れてるのだろうか？

おまけに…

「何で真面目にやらないの!?!」

試合終了後、レヴィはなのはに説教されていた。

秀囲気に呑まれたのか負けたのがショックなのか、いつもの元気がないレヴィ。

「や、やったよ…」

「真面目にやっつてどうして目の前に高速移動魔法で現れるの!?!普通

の飛行と違ってどうしても始めと終わりに間が出来るんだからやられに行っただけじゃない!!」

思いつきり落ち込んだレヴィが、ちらちらと俺に目を向けて来る。念話で助けてと言わない辺り、どうにかして欲しいけど泣き付くのは嫌なんだろう。

「それで?どうして正面に行ったの?アレだけ速いんだから背後と
か行けるよね?」

「だ、だって…」

言い淀むレヴィ。

目茶苦茶マズい理由なんだろうレヴィはなのはに怯え…

意を決したように強く地面を踏み鳴らした。

「そんなのかつこよくないじゃないか!?!」

言い切った。

凄え。

お怒りモードのなのは相手にあんな真っ直ぐ啖呵きれるとは。

「レヴィー!!」

なのはに本気で火がつく前に声を掛ける。

割と真面目な一喝になのはも含めて全員の視線が俺に移る。

「お前には足りないものがある!それは」

静まる一同。

俺は満足するまでためて…

自信満々に言い切った。

「必殺技だあつ!!!」

緊張感が霧散した。

が、ただ一人未だに本気のレヴィーが目を輝かせて手を叩く。

「そ、そうだったのか!!」

「って違う！違うよレヴィちゃん！！」

フリーズから立ち直ったなのはがいち早く割り込む。だが時既に遅く、俺はレヴィを連れて家に向かって駆け出した。

「暗くならないうちに帰れよー！！」

「お、お兄ちゃんの馬鹿ああ！！！！」

なのはの怒りの声を背に、俺は結界を出た。

テレビにやたら服装に合わないメカベルトを装備した男が写る。

掛け声と共にベルトを操作すると、男の姿が消えて、フルアーマーになった。

「おお！変身した！？」

「これはレヴィも出来てるから大丈夫だ。」

バリアジャケットのセットアップもそんな感じだし。

問題はここから。

「必殺技は？」

「そうそこだ。今普通に戦ってるだろ？」

ゴテゴテの怪生物と殴る蹴るの乱戦を行うフルアーマー。

「初手から大技行く必要は無い。見てろ、ここだ。」

段々弱ってよろける怪人に大して、やたらと光る足で蹴りかかるフルアーマー。

怪人が光った後に爆発して粉のように散っていった。

「おおおお!!」

目を輝かせるレヴィ。

そうまで喜んでくれるなら嬉しい限りだ。

だが、レヴィはふと首を傾げる。

「ボク持つてるよ必殺技。それに最初から使って無いし。」

「でも一撃で決めようとしただろ？雑魚以外にアレは無理がある。

ちなみに必殺技ってどんなんだ？」

「雷刃滅殺極光斬!!」

知らなかったので聞いてみると、なんだか凄そうな名前が帰って来た。

「ネーミングセンスはなかなかだ。やっぱり技の名前はかっこよくな
いとな。」

「本当？かっこいい!？」

何か相当嬉しかったらしい。

なのはもそうだが、この手の事に超淡泊だからなあ…

って違う。

「じゃなくて、どんな技なんだ？」

「えっと…グルツとやってピカツとなってドーンって撃つ。」

動きを交えた説明。

撃つって事は放出系か。魔導師放出系好きだな。

「だとしたらマズいな。」

「何で？」

「レヴィは高速型だろ？合う奴を身に着けないと。」

俺はレヴィと共に外に出る。

「バルニフィカスを持って構えて。」

「うん。」

素直に構えたレヴィに俺はナギハを手に斬りかかる。

「え？わ！わ！」

「取りあえず魔法は使わないように。」

「ええ！？」

連続でバルニフィカスを叩いてレヴィの手から弾き飛ばす。

俺はそこで…

「雷刃！滅殺！！」

レヴィのモーションを真似て振りかぶる。

呆然とそれを眺めるレヴィ。

「極光斬！！！」

「うわっ！と…」

大振りを辛うじてだが回避するレヴィ。

「と、まあこんな感じで簡単に回避される。バインドでもかけないと使えないだろ？」

「そうだよ。だからバインドとか使わないと撃たない。やっぱり問題無いんじゃない？」

「ふっふっふ…そんなお前に見せてやろう。コンボの恐ろしさと言うものを。」

再度バルニフィカスを握り直したレヴィに連続で斬りかかる。

「わ！わ！わっ！！！」

頃合を見計らって左の徹を叩き込む。そしてバルニフィカスを手放した瞬間に溜めを作り…

踏み込むと同時に右の切先をレヴィの喉元に突き付けた。

「避けられたか？」

軽く首を横に振って否定するレヴィ。
だが、表情が浮かない。

「今の必殺技？」

どうやら威力に疑問があるらしい。

俺はレヴィに障壁を張らせて構え、踏み込むと同時に突きを一闪。

障壁を貫いたナギハはレヴィのジャケットを軽く裂いた。

「銃刺突『ガンブレード』、破壊力は見ての通りだ。」

「お…おおおお！凄いい！！」

なのはの障壁だと破れないんだが、高機動型のレヴィの障壁ならどうにかなったな。

「とまあこんな感じの相性があるんだ。俺みたいな連続攻撃をするかはともかく、高機動のレヴィは高機動の技を作った方がいいと思うぞ。」

「で、それを最後に当てればいいんだね！よし！！」

張り切るレヴィと共に新魔法の開発に勤しむ俺を、なのはや宵の騎士一同は複雑そうに見ていた。

その夜、鍛練から戻って来て寝ようとソファに行くと、ディアーチエの姿があった。

「何故止めない？」

ディアーチエは俺を真っ直ぐに見据えてそう聞いて来た。

「レヴィの事か？」

「貴様なら分かっている筈だ、性能頼りの戦いを一回り弱体化した今の身でやれば危険な事くらい。」

ディアーチエの言う通り、注意した方が良かったんだろう。その方が安全で確実だ。

「そうだな、今のまんまだと危なっかしいよな。にしても……」

嬉しくなった俺は、不思議そうに表情を歪めるディアーチエに思ったまま告げる。

「お前何気に家族思いなんだな。」
「な……」

「一向に馴染む気見えないから心配だったんだけど……いやあ良かった、何よりだ。」

「だ、黙れ！我がそんな……ええい！はぐらかすな……！」

何か意地張って否定しようとしたディアーチエだったが、話を優先して振り切った。

「確かに戦術的には問題だし危なっかしいけど…ああいうの好きなんだよね俺。」

「趣味で戦わせるつもりか。」

呆れるディアーチエに対して返す言葉もない。

「ふざけてるつもりはないけど否定は出来ないな。」

「ならば一体何のつもりだ？」

聞き返して来るディアーチエ。

納得出来るまで聞くつもりなんだな。

「前代未聞の不可能ごとって、どんな奴ならできると思う？」

「いきなりなんだ…前代未聞の天才じゃないのか？」

「確かに天才も当てはまるが…ようは不可能だと思っただい奴だ。」

少し考えを巡らせたディアーチエは、気付いたのか眼を細める。

「…まさか、アイツが馬鹿だから不可能を考えないと思ったとか言うんじゃないだろうな。」

「そついう事だ。」

何でも無いように返す俺を見ながら頭を押さえるディアーチエ。

怒りを押さえるタイプとも思えないし、大方呆れているんだろう。

「それにアイツああいうのが気に入ってるみたいだし、気に入ってるなら文句つけないしな。普通に生活するのに邪魔なディアー

チエの王様気質にも文句言っていないだろ？」

「む…」

自分の事を出されて唸るディアーチエ。

言った所で聞く気も無いだろうが、取りあえず文句すら言っていないのは事実だから納得する他無いんだろう。

「ま、安心しろって。お前らの主はこの俺なんだぜ？危険なんか全部取っ払ってやるよ。」

自信満々に言い切ると、ディアーチエは鼻で笑う。

「レヴィを手本にする必要などない、貴様も充分大馬鹿だ。」

ディアーチエは理解している。

俺が宣言した事の難度も、俺がその難度を理解した上でこのセリフを言った事も。

だから…

「サンキュー。」

「馬鹿よばわりされて礼を言うな。」

悪態を吐いた割に、ディアーチエは笑顔だった。

難しいのは分かっているがどうにか有言実行と行かないとな。

第四話・レヴィの新必殺技！（前編）（後書き）

バリアジャケットは、元に戻る時にはノータイムって言うのはさすがにないかと思っただのでこんな感じに。後、確実性を通すシユテルに気合（無茶）勝ちして欲しかったので。

速人が必殺技と力強く言ったのはレヴィの気をひくためとなのはからにげる為（笑）で、実際には色々言うつもりでした。

第五話・レヴィの新必殺技！（後編）

第五話・レヴィの新必殺技！（後編）

Side ｝ フェイト ｝ テスタロッサ

良く分からないまま終わった勝負の次の日…

「さあ今度こそ本当の勝負だ！！」

結界を張った丘の上で自信満々に指差して来るレヴィ。

私はこのまま模擬戦やっても良かったんだけど…

なのはの眼が怖い。

危なっかしいレヴィを心配してるんだろう。

正直私も昨日のままなら危ないとは思いついこのままやってもいいの

か…

「そう警戒しないでやって見ろって。俺が無策で戦わせると思うか？」

「速人お兄ちゃんの作戦って言う方が危ない気がするんだけど。」

楽しそうな速人を冷めた目で見るなのは。

なのは色々言っけど速人の事一番信頼してる。

筈なのに、あれだけ素直で優しいなのはが速人の扱いだけ微妙。

「喧嘩は良くないよなのは。」

勿体ない気がしたからちよっと止めて見た。

「そっだぞなのは。照れるのは分かるがいつも通り俺を称えていいんだぞ。」

だけど…胸を張って堂々と言ってくれた速人のセリフのお陰で、空気が凍り付いた。

速人がこんな感じだからなのはからの扱いが良くないんだろうか？

「ボクを無視するな！！」

「あ、ご、ごめん！」

すっかり置いてきぼりにしてしまっていたレヴィに怒られて謝る。

結局なのはが納得しないままだったけど、レヴィと模擬戦する事にした。

瞬間、レヴィが高速移動に入る。
しかも私目掛けて。

前回と同じ危ない展開に少し怒るつもりでプラズマランサーを…

「っああっ!!」

放とうと思った瞬間、全身に痺れが走ってプラズマランサーが消えた。

「見たか新技！走破・雷鳴陣だ!!」

「く…っ！ああっ!!」

真正面じゃなく私の斜め前に移動していたレヴィは、大剣形態のデバイスを振りかぶる。

私は痺れの残る体でバルディッシュを構え、大剣の一閃をまともに受けてそのまま吹き飛ばされた。

何とか体勢を立て直す私の前で、レヴィは凄く満足げにポーズを取っていた。

高速移動魔法と攻撃は同時には出来ない。

ただでさえ移動中は抵抗緩和とか使わないと全身がバラバラになる速度が出るのに、そんな状態で攻撃動作を行えば絶対に身体が砕ける。

射撃魔法を使うにしたって高速移動中の経路自体は移動前に決めておくのが普通だし、あんな速さで動いてる最中に射撃のタイミングなんて取れる訳がない。

なのに…どうやったんだろう？

「…凄いね。」

「当たり前だ！力を司るボクと最強のマスターで考えた技だぞ！！」
胸を張って言い切るレヴィ。
速人は信頼されてるんだね。

「でも…負けないよ。」

「ボクだって！！」

互いに告げて、私達は斬り結んだ。

Side 高町なのは

「お兄ちゃん…どんな無茶させたの？」

高速移動魔法の最中に攻撃なんて危な過ぎる。

内容によっては止めないと思って聞くと、お兄ちゃんは首を横に振った。

「魔力消費は多めだが、別に無茶はさせて無いぞ。ただ単に雷撒きながら移動しただけだ。」

「雷撒きながら…あっ…!!」

何をさせたのかようやく分かった。

武器を構えて移動中に攻撃すれば反動で間違い無く身体が壊れるし、移動中に射撃なんか出来ない。

だから移動中に電気に変換した魔力を撒いて移動範囲をそのまま攻撃範囲に変えたんだ。

「お前大方、『付焼き刃で技術的に洗練されて無いものなんて危なくて意味が無い』って思ったんだろ。」

言われて頷く。確かにそう思ったけど…それはお兄ちゃんだって同じ筈だ。

剣の練習毎日毎日基礎から繰り返してる筈だし。

「極める剣と違って、新魔法って言うのは新しい道具と同義だ。欠陥があっても、ないとあるとじゃあった方がいい場合が多い。」

少し言いたい事が分かった。

車とかで考えると、今の方が昔と違って凄く性能がいいけど、歩くと不便な昔の車と比べれば、昔の車の方が遠くへ行くのに凄く便利だ。

「もちろんアレも、方向や放出時間を絞る事で魔力消費を削減したり威力を上げたり出来るには違いないし、余計な事してる分発動に手間がかかるのも確かだ。だけど…便利だぞ。」

自身たつぷりに笑うお兄ちゃん。

私だって分かっている。だって今実際に目の前で見たんだから。

「でも…それと危ないのは別だよ。」

「仕事じゃないし固い事言うなって。」

口調は軽かったけど、少しだけ何も言えない空気を感じた私は黙り込む。

お兄ちゃんは危ないのを分かった上で無茶をする事を選んで、だから管理局に入れないって言うてたくらいだから、レヴィちゃんがやりたくてやってる事に文句を言いたくないんだ。

けど、レヴィちゃんの戦いが危ない事に変わりはなく、どうするか決め兼ねてた私は複雑な気分ですでぶつかると二人を眺めていた。

「電刃衝！」

「ファイア！」

ボクの放った魔力弾とフェイトの放った魔力弾がぶつかってはじける。

その後すぐに真っ直ぐにフェイトの元に飛ばうとすると、フェイトの方も真っ直ぐに向かって来た。

「えい。」

「なっ!?!」

デバイスを振っても当たらないくらいで止まってフェイトの前にバインドを使う。

フェイトはバインドにかかる前に止まった。

「光翼斬！」

「く…っ!?!」

フェイトはボクが放った円形の魔力刃を防ぐと、魔力刃と障壁がぶつかって二つとも砕けた。

フェイトは固い方じゃないから少しは効いてる筈。
ならここは…追撃だ！

「はあああっ!?!」

ボクは構えた鎌を全力で振り抜いて…

何かにつつかえた。

気が付くと目の前にフェイトの顔があつて、ボクの鎌はデバイスで止められていた。

「うわあああ!!!」

蹴り飛ばされたボクは急いで体勢を整えると、フェイトがシューターを作っているのが見える。

ボクもあわせて魔力弾を作つて…

「プラズマランサー…ファイア!!!」

「電…刃衝!!!」

撃ち合った。

ぶつかつて碎ける魔力弾を見ながら、現状を振り返る。

…マスターの言つてた通りだ。

マスターはボクとフェイトが失敗しないで戦つたら同じくらいで疲れるって言つてた。

そして、そうなつた時が…

必殺技のチャンスだ。

戦闘の終わりに怪人に叩き込まれた必殺技。
そろそろ…いい筈。

「ボクは絶対負けない！バルニフィカス！！」

カートリッジをロードしてバルニフィカスを剣の形に変える。

フェイトはそんなボクを見ながら笑った。

「私も負けないよ。」

そう言ったフェイトのデバイスが、二つの剣になる。

マスターみたいだ…

「格好だけ真似したってマスターみたいにコンボも知らないフェイトに負けないからな！！」

「コン…？っ！！」

首を傾げたフェイトだったけど、ボクが接近するとすぐに反応した。

ボクの剣とフェイトの剣がぶつかってバチバチと雷の弾けるような

音が鳴って、フェイトが揺れる。

何度か離れて斬ってを繰り返していると、フェイトが揺れなくなつて来る。ボクはそんなフェイトの様子を見ながらその時を待った。

目を基本によくフェイトの様子を見ていれば、必ず変わる。それが必殺技を出すタイミング。

マスターにはいっぱい教えて貰って助けて貰った。

後は…ボクがマスターを信じるだけ！！

何回か普通に斬り合っている…

フェイトの目が変わった。

今だっ！！

「雷神・疾風脚！！！」

「な…」

これが、ボクがマスターから貰った必殺技。

バルニフィカスに込めていた魔力も一緒に右足に集めての蹴りは、フェイトのお腹に当たる。

「うあああああつ！！！」

森に吹き飛んで行ったフェイト。

「見たか！これがボクの必殺技だ！！！」

森の中に消えて行くフェイトを見ながら、ボクはバルニフィカスを振り上げて堂々と叫んだ。

よーし…凄いぞ強いぞカッコいい！！

S I D E O U T

「う、うわぁ…」

驚くのはを見ながらニヤけそうになる頬を無理やり平常に保つ。

武器を振るうには必ず多少なりとも減速しなければならず、飛行速度を維持したまま攻撃するには体当たりしかない。

だが体当たりなんて面が広くて攻撃力の少ない事をするくらいなら、『丁度画面でやってる攻撃』を借りればいい。

そう言う訳で加速しながらノンブレーキで全力で魔力を込めた蹴り

を放つ事にした。
高速移動と攻撃が両立出来て、攻撃にしたってほとんど紫電一閃と同じ。

必殺に近い威力はあるんだが…

「ですがこの勝負、フェイトの勝利ですね。」

静かに告げるシュテルに頷くのは。

シュテルの言う通りで、フェイトは蹴りが当たる直前に防御魔法を展開していた。

障壁自体は抜いたものの、直撃じゃない以上まだやれるだろう。

完全に展開されていなかったからかレヴィは気付かずに満足げにしている。

それにしてもあの一瞬に気付くとは…魔法戦なら見切れないものが無くなりつつあるな、なのはも。

そして…俺達の予想通りレヴィはバインドに捕らえられ、その周囲に複数の魔法陣が瞬く。

まだ無理があった…か。とはいえ健闘したし、まためげずに頑張ればいいか。

Side「フェイト」テストロッサ

「ごめん、レヴィ。無茶ばかりするから心のどこかで勝って当然だ
って思ってた。でも…強かったよ。」
「勝手に昔話にするな！ボクは強いんだ！！」

レヴィの返事に苦笑いしつつ、魔法の準備を整える。

「アルカス・クルタス・エイギアス…疾風なりし天神、今導きのも
と撃ちかかれ…バルエル・ザルエル・ブラウゼル…」

強固な防御を破るとか、射程があるとかならプラスマザンバーブレ
イカーのほうが効果的だけど、対人で大きなダメージを与えるなら、
こっちの方が強い。

「フォトンランサー・ファランクスシフト…ファイア！！！」

掛け声と共に一斉掃射が始まり、レヴィの姿が魔力の残滓に飲み込
まれていった。

S i d e ～レヴィ

一応防御はしたけど、飛ぶどころか意識まで墜ちそうな位に魔力ダメージを受けて私の身体はゆっくりと落ちていく。

…あれだけマスターに色々して貰って、また負け

「…けて…か。」

マスターに見せてもらった人たちは、誰も諦めてなかった。

それに

マスターだって、諦めなかったからボク達はここにいられるんじゃないか！！

「負けてたまるか！バルニフィカス！！」

無理矢理身体に力を込めて意識を戻す。さすがに魔力は戻らないけど、そっちは全部のカートリッジをロードして、無理矢理高める。

「雷刃！滅殺！！」

高めた魔力を使って最後の一撃を撃つためにボクはバルニフィカスを振り上げた。

S I D E O U T

「…最早『模擬戦』の域を超えていますね、これは。」

静かに告げるシュテルの言葉に内心頷くものの、俺は同時に嬉しかった。

何しろシューター喰らっただけで叫ぶ元気もあるような頃合に終わった前回と違って見事に立ち直ってくれたから。

「けど…あのまま撃つても当たらないよ。いくらフェイトちゃんも疲れきってるからってやっぱり無茶してみよ…ひゃ？」

何か言ってるなのは頬を引っ張りつつその目を覗き込む。

こいつは模擬戦での無茶がどうこうと言う台詞を吐いていい立場だ
と思っっているのだろうか？

「お前：前回何したっけ？公開着替」

「わ、悪かったからもう言わないで欲しいの！」

わたわたと頬を赤く染めた状態で俺を止めるなのは。

そうこうしている間にレヴィの準備は終わったようだ。

準備中何もしなかったところを見ると、消耗しているところに必殺
技を受けた後にフランクスシフト撃ったフェイトにはもう余裕が
無いんだろう。確実にかわす事を優先しているようだ。

しかし、それでも一つ気がかりな事がある。

剣振り上げてから少し経ったが：ここまで発動に時間かかるのだろ
うか？

疑問を抱いた瞬間、レヴィの姿が消えた。

「な、ああああっ！！」

驚いたフェイトが直後、雷に打たれたように硬直する。

走破・雷鳴陣。

しかも止まった時に自分の前方にだけ放つように調整して魔力消費
を抑えたある改良版だった。

硬直しているフェイトの前にいるレヴィは…

「極光『剣』!!!!」

魔力を溜めた剣を使って直接フェイトを斬った。

終わったと思っただが、何故かあまり派手な現象が起きない。それなりに魔力を引き上げていたはずなのだが…

そんな俺の疑問は、すぐに解消される。

フェイトの胸元に魔力溜りのような塊があった。

間違いなくレヴィの魔力だが、何であんな形に？

「この力で…ボクは飛ぶ!!!!」

言いながらまわしていたデバイスを止めてポーズをとったレヴィ。

直後、フェイトの胸元にあった魔力溜りが弾け、雷鳴が鳴り響いた。

「あああああああつ!!!!」

雷を受けて叫ぶフェイトを背景にポーズをとるレヴィ。

間違いなく、俺が見せた特撮の真似だ。

確かに参考にさせる気で見せたがまさかここまでやるとは…

でも、思えばこの技コンボになってるし、レヴィは俺が見せたの素直に護ってくれたんだろう。

まさか決めポーズまで含めて何もかもと言うのは予想外だった…

「や…やったあ！マスター！見てたボク…」

光が収まって大喜びしながら俺を見るレヴィ。

だが、話している最中にその身体が崩れ落ちる。

フェイトはなのはに任せて俺は落ちてくるレヴィを抱きとめた。

「ボク…強くてかつこいい…」

意識がおちた状態で寝言のように呟くレヴィ。

よく見ればバリアジャケットはかなりボロボロだった。本当に頑張っ
って持ちこたえたんだろう。

「ああ…本当いいものを見せてもらった。かつこよかったぜレヴィ。」

幸せそうに眠るレヴィの頭を撫でながら、ここまで信用してくれた
ことに心を動かされた俺は、もっと真っ直ぐに頑張ろうと素直にそ
う思った。

第五話・レヴィの新必殺技！（後編）（後書き）

レヴィ奮闘期（笑）

オリジナル技持たせたのは、生まれ変わってまでまだ大本とおんなじことしか出来ないコピー戦法と言うのはどうだろう？と言う発想からです。

とは言え大本が同じなのでまるきり違うのも変なので、格闘ゲームのアナザータイプのような違いにできればと考えてます。

走破・雷鳴陣

高速移動時に変換した雷を撒きながら移動する。

回避はほぼ不可能だが、魔法始動を見切って障壁の全方位展開を行えば防げる程度の威力しか基本的には出ない。

調整しただいが、基本的に移動中に変換した魔力をばら撒く為、魔力消費も砲撃並みに多く、使いどころには注意が必要。

雷神・疾風脚

派手な名前だがようは魔力込みの蹴り。ただし、通常飛行とはいえず高機動の勢いを丸々攻撃力に使用しているためそれなりの威力があり、また、飛行中に姿勢を変えるぐらいしか作業が無い為武器を振りかぶったりしない分気づき辛い。

雷『神』は、一応刃は発生させてないのでこれでいいかな？という意図の為誤字じゃないです。

雷刃滅殺極光剣

『高機動なのに撃つてどうする』という速人の方針にのっとなって、

『じゃあ直接斬ればいい』と単純に考えた結果生み出された技だが、強砲撃用の魔力を込めた斬撃を直接つけたら喰らった方は馬鹿にならない。

第六話・年明けは波乱と共に！開催、御神式強化合宿！！

第六話・年明けは波乱と共に！開催、御神式強化合宿！！

年明けも程々に堪能したところで、母さんを除く高町家一同は、フ
イト、クロノと共に沖繩の無人島に来ていた。

もちろん遊びではない。管理局に4月に入るつもりなら春休みまで
修行を待てないから時期を早めたのだ。

そう　なのはが管理局に入るための最後の関門、御神の強化合宿の…

なのだが…

「お前ら早いな…」

さっさと走っていると、前方で延びているのはとフェイト、二人
を見ているクロノの姿があった。

島の外周を走ると言うだけの話なのに随分くたばるのが早い。

流石と言うべきか、二人をの様子をみていたクロノは一定のリズム

で呼吸を整えると俺を見る。

「いきなりオーバーワークが過ぎるだろう、強化なしでのマラソンなんて。」

「走ったくらいで何言ってるんだよ。ほら起きろ、あんまりサボっていると入局禁止になるぞ。」

そう言うと、寝転がっていたなのは身を起こす。

なのはが立ち上がった所で続くようにフェイトも立ち上がる。

そこなくちやな。

で、走り出そうとした所で、後方から父さんの気配を感じる。

魔法による治療のおかげで根っこに残っていた大怪我のダメージが抜けた父さんが、『息子に負けてられるか！俺も行くぞ！！』と意気込んで付いて来たのだが、ブランク込みでは並のトレーニングならともかく兄さん達と同じ修行は無理があるので俺達の引率も兼ねて魔導師組と鍛練する事にしたのだ。

「はあ…はあ…しかし俺が言うのも何だが、俺達の訓練って無茶苦茶だったんだな…」

息を荒げつつ告げる父さん。

そりゃ分かるが…今実感する事なのか？

「そう思うなら止めてください。彼女達が身体を壊すだけで」

「ああ違うんだよクロノ君。」

だが、なのは達の心配をするクロノの言葉を父さんはアッサリ否定

する。

「昔は血を吐く位が当たり前だったからな。ちゃんと加減されてる今が安全だと思っつてな。」

そこまで聞いて、俺は漸く今『この程度』でさっきの言葉が出てきた訳に納得した。

と同時に少し怒る。と言うのも…

「そう言うのは俺や兄さんがやる領域だろ？魔導師で一般でないとはいえ職員なんだ。誰がやっても問題ないレベルじゃないと。」

そう言うのは誰も彼もが出来る訓練じゃないからだ。

こんな話を聞いてなのはが『そつちでやりたい』何て言い出したらどうする気だ。

「そう言えば速人も本職だったな。」

「俺の場合は薬も使ってたけどな。暗殺者として完成させるのが目的だったから身体が壊れるようなヤバイ薬は打たれなかつたけど異物には違いないから身体が痛い痛い。その状態で訓練とか本馬鹿だったな。」

兄さんとの訓練の方が昔より怪我が多いと言うのも奇妙な話だが、正直それ以外はずっと楽だ。

走るだけの前段階でへばられても困る。

意を察してくれたからかは分からないが、なのはとフェイトは揃って走り出した。

クロノはコメントに詰まったように俺と父さんを見た後、二人の後を追った。

「それじゃ、俺達も行くぞ速人。」
「了解！」

再び駆け出した父さんに追従する形で走り出した俺は、すぐになのは達を抜いて先へ先へと進んで行った。

「はあ…はあっ…」

荒れた呼吸を整えると、側でへたりこんでいるのはとフェイトに目を向けた。

クロノは息こそ切れているがバテるといった感じは無い。

「ふー…かなり疲れたみたいだな。」

「ま…まだやれるよ…」

「無理すんな。その足で走っても足ダメにするだけだ。」

流石に関節、骨格の単位で壊したら洒落にならない。

足が冷えないように二人にジャージを穿かせ、平らな地面に二人を連れて行く。

「よし…んじやなのはは腹筋と背筋。フェイトは足を押さえてやっててくれ。」

「えっ…と…交代でやるんだよね？」

自分だけ楽だからか、フェイトが念を押すように聞いて来る。

「いや、フェイトはやらない方がいい。やるにしても体育と同じくらいにしておけ。」

「そんな…何で？」

不思議というか、なのはだけにやらせるのがそんなに嫌なのか真っ直ぐに俺を見ながら聞いて来るフェイト。

別に隠すほどの事じゃないから話してもいいが。

「スタイルが違うからさ。なのは前に砲撃強過ぎて腕折ったろ。骨格の補強をするのに筋力があるんだよ。対してフェイトは高速戦闘だろ？筋肉は重いから無闇に付けてもスピードが下がる。1、2キロ増えた所で直進には影響はそれほどないだろうが、方向転換や加減速にかかる負荷は結構増すんだ。」

言いつつ俺はナギハをフェイトに持たせて、左右に腕を振らせる。何も無い手との違いを感じて貰ったところでナギハを返して貰った。

「訓練時間も休憩も限られてるし、何か質問があっても出来れば食事時とか帰りにしてくれ。」

フェイトが頷いてくれたのを確認して、俺は父さんを見る。

木刀を四本持っている所を見ると、どうやら俺と考えは同じらしい。

「俺は父さんと仕合ってくるから、休み休みでいいからなのは足以外の筋トレやっつけよ。後一応言っとくが…覗こうとして妙な気配がしたらウツカリ斬っちゃうかもしれないからおとなしくしとけよ。」

全員頷いたのを確認した俺は、父さんから短刀サイズの木刀を二本

受け取ってなのは達から離れ、森の中を進む。

しばらくして

「っ!!」

音も無く背後から木刀が振るわれた。

咄嗟に前に跳躍。

背中をかすめる感触を感じつつ反転。

「っせええい!!」

視界に納めたからか氣勢を隠す事無く振るわれる木刀。俺は右の打ち下ろしを右の柄で払って左で胴を凧いだ。空を切ったところで下がって構え直し向かい合う。

「ほお…横合いから柄で殴るとはな。真剣ならモノによってはタイミング次第で折れてたぞ。」

「父さんこそ、ブランクなかったら最初の一撃で終わってたぞ。」

「よく言う、完璧に気付いてたくせに。」

競技じゃない以上奇襲が何だ奇策がどうだ言うのはなし。ただ…目の前の敵対者を打ち抜くのみ。

これぐらいが普通な俺達は特に驚くでも無く構えて向かい合い…

切り結んだ。

徹で打ち込んだのに普通に打って来た父さんに押されてバランスを崩す。

っそ！さすがに体格差があり過ぎるか！！

兄さんもそうだが正拳突きが急所攻撃（笑）になるような身長差だ。おまけに兄さんより力が強い気がする。

打ち合っても仕方ない…なら！！

「ふっ！」

上は頭で下は足首まで広く右の五指鋼線を振るう。
飛んでも下がっても避け切れまい！

「よ…っど。」

「なっ…！！」

確かに避けられなかったが、切り払われた。

木刀で切断は出来ないが、打ち下ろされた木刀に軌道を変えられて、鋼線が父さんをつらえる事はなかった。

いや、確かに兄さんも真剣でやった時に切断したけど、焼きそばじゃないんだから木刀一本で絡めとるとか勘弁してくれよ。

と、呑気に思う間もなく、絡め取られた鋼線ごと右腕を引かれ、前に崩れる。

それと同時に父さんが距離を詰めながら左の木刀を振るう。

鞘こそないもののこの射程…虎切か！

腰あたりから放たれた左の一閃を同じ左の木刀で防ぐも、体格差がよるける。

足が使えない所にトドメとばかりに木刀を振り上げた父さんは

「う…」

「俺の勝ち…だな。」

鳩尾に突き付けられた俺の木刀の先端を見ながら硬直したあと深く息を吐いた。

「しかしギリギリか…ブランク明けじゃないのかよ。」

実際問題としてかなり際どかったため、正直驚いた。

最後決めに来ないで一手一手確実に詰めて来られたら負けてたかもしれない。

褒めた…と言うと上から目線もいいところだが、本当に驚いたから言っただつもりだった。

だが父さんは不満だったのか、眉を顰めて腕を組む。

「これでも美沙斗さんよりも強かったんだぞ？…さすがに静馬には

勝てなかったが。」

完成された御神の剣士と言うだけで十二分に脅威だが、その中でも当然上下はある。

美沙斗さんの旦那さん…静馬さんはその中でも最強とすら言われる程の使い手だったらしい。

さすがに勝てなかったとは言いが、要は比肩するだけの実力があつたという事に他ならない。オマケに美沙斗さんよりは上だったと堂々と明言した。

ブランクがあつたからって、俺が楽勝になるほどには実力落ちたりしない訳か。

まったく…皆して異常にも程がある。

「お前…皆化物だとかそんな事思つたら。」

「う…」

気配遮断とかの一環として心中を悟られるなんてもつてのほかなのだが、アツサリ悟られる。

もしかして俺、スイッチ入ってないと滅茶苦茶分かりやすいんだろ
うか？

割と死活問題なので思い悩んでいると、呆れたように息を吐く音が
聞こえた。

「お前自分もそこに入れてるか？まだ拙いとはいえ小学生で既に『
貫』に手をかけてるのは明らかに異常だぞ？」

肩を落とした状態で俺を見て告げる父さん。

確かにそれはそうかもしれないが…

「俺は出生が異常だから。あ、いや、卑屈になってるわけじゃないけど、暗殺技使うには相手の気配や仕草に死ぬほど聴かないと…と言つか聴くない奴から死んでったから…」

貫は相手の防御を抜く技で、相手の動作を細部まで見切る必要がある。

つまり、素振りがどうだ、型がこうだと言う前に、既に貫の訓練に近い事からやっていたようなものだから出来るのだ。

実際、教わってから使えるようになるまでの時間は徹の方が長かったし。

「さてと、もう休憩は十分でしょ？父さん。」

「当然だ。」

確認しあったところで構え、俺と父さんは再び木刀を打ち合わせた。

その後、俺達は何度かの仕合を終えて、なのは達の元へ戻る。

いくらか際どい仕合もあったが何とか全勝で終える事が出来た。

一本も取れなかったのは予想外だったのか、父さんは若干落ち込んでいた。

傍目には分からない…分からないように振舞っているつもりなのか、乾いた笑いが余計に痛々しい。

うーん、ブランク明けで勝負になる事の方が凄いと思うんだが…

「お、やって…ないな。」

なのは達が見える所まででたはいいのだが…腹筋をやるうとしていたなのはが完全に起き上がれずにおなかを押さえて寝転ぶ姿が見えた。

「あ、速人。」

「はあ…あ…お兄ちゃん？」

すぐに声をかけて来たフェイトと、ばてた状態で首だけ動かして声をかけてくるなのは。

辺りを見回すがクロノの姿は無かった。

「クロノはどうした？」

「なのはだけ頑張るのも違うから走ってくるって。私は、なのはを見ててって。」

「そっか。」

フェイトが教えてくれた答えに思わず笑みがこぼれる。

普通に考えたらただの無意味なオーバーワークだろうに。参考程度には信用してくれたのかな。

ともあれなのはの様子を確認するために軽くおなかを押してみる。予想通り顔を顰めるなのは。それなりに使えてるみたいだな。

「よし、それじゃそろそろ昼に行こうか。多分兄さん達も切り上げ

てテントにいるだろうし。」

「え…にや!？」

俺は言いつつなのはを背負う。

身体を起こすのも億劫な状態で歩かせるのもどうかと思うし、午後だつてこのままお休みと言う訳じゃない。

「お、何だ速人。そういうのは父さんの役目だろ。」

と、よつてきた父さんが妙な事を言い出す。

未だに一緒に風呂入ろうとするし、この父さんじゃなければちよつと警戒するかもな。

…最も、未だにできたてほやほやのバカップルよろしくな父さんと母さんみてれば何も無いことはわかるが。

「やだね。兄の役得でもいい訳だし。なのははどっちがいい？」

「え、えと…オンプされるのは決定なの？」

「当然。」

自信満々に言い切ると、なのはから小さく唸るような声が聞こえてきて、肩から回された腕に僅かに力が込められた。

俺が父さんに向かって勝ち誇った笑みを浮かべると、父さんは少しがっかりしたように肩を落としてテントへ向かった。

俺はなのはを背負ったまま、父さんを追って歩き出した。

テントにつくと、持ち込んだプレートの上で魚やら貝やらが焼けていた。

「お、いい感じに出来てるな。」

「殆どボクが取ったんだ、マスター。」

俺の姿に気づいたレヴィが駆け寄ってきて楽しげに言う。
対してシュテルが若干疲れたような表情を見せていた。
レヴィの頭を撫でつつ、シュテルに対して念話を送る。

「何があった？」

「…さすがマスター、表情には出ないと思ったのですが。」

思ったとおり疲れた反応が返ってきて、シュテルは何があったかを語りだした。

話によると、確かに殆どレヴィが調達してきたのだが、海中で出力考慮しないで飛び回ったり、変換資質が電気なのに射撃魔法撃ったりして調達したため、魚群や海流に被害が出ないように押さええて回っていたらしい。

強すぎるのも考えものだな。にしても…

「サンキューシュテル。正直そんなところまで考慮してくれるとは思わなかった。でも何でレヴィに直接言わなかったんだ？」

「変換資質は言ったらすぐ聞いてくれましたが、海流の話なんて説

明を事細かに聞いてくれるわけも無かったもので。』

あー…なんか納得。

壊すのは簡単だけど直すのは難しいからなあ、まして海流の影響修正なんてそう簡単でもなかったらろう。

改めてシュテルに礼を告げた後、ディアーチェの姿を探す。

当のディアーチェは、ハンモックに揺られて眠っていた。

「いつもの王様病。」

レヴィは若干むくれたように言う。

王様病とは中々面白い事をいう。

俺はディアーチェに近づいていつて揺り起こす。

「昼飯だぞ、食うだろ。」

「む…そうか。」

ハンモックから降りたディアーチェは悠然と魚群の踊る鉄板に向かって歩く。

『そんなに警戒してやるな。大体クロノとつくに気づいてるぞ。』

『な！』

魔力反応を隠蔽したサーチャーを操作してクロノを追っていた事を悟られていたのが意外だったのか、念話どころか表情まで変わる。

恐らくリライブの置き土産に当たる魔法を行使しているのだろうが、完全にモノにしているわけでもないためクロノも気づいていた。

警戒する理由は間違いなく裁判等の事後処理に当たっていたはずのクロノの戻りが早すぎる上、こんな訓練について来れるだけの休みが振られたから。

大方休みと言うのは名目で、宵の騎士達の実態調査といった所だろ
う。

人手不足の管理局が執務官フリーにしておく余裕あるわけないし。

『でもお前本当に家族思いなのな。レヴィに言わないのか?』

『やかましいわ! 大体功績自慢など下々のものが名を売る為にする
ものだ! 我が語る事などない!!』

さすがに表情には出なかったが照れてるところが容易に想像できた
ため、思わず笑ってしまふ。

「どうしたのマスター?」

「いや、なんでもない。」

そう長くかからないうちに兄さん達とクロノも戻ってきたので、俺
達はそこで昼食を食べる事にした。

第六話・年明けは波乱と共に！開催、御神式強化合宿！！（後書き）

と言うわけで我らが父君士郎様出陣の回（笑）

御神で最強と言われていた静馬さんの評価が『士郎よりも強い』との事だったので元々の士郎も『完成』していたのは当然として、かなりの域にいた筈なのでこのようになりました。

貫の習得時期についてですが、美由紀が高校入学時なのでそれより5年は速い計算に。

修行開始時期の差異などもあるとは言え、速人は充分異常レベルかと。

第七話・雷神対劍聖

第七話・雷神対劍聖

「あれは大丈夫なのか？」

ディアーチエが指差した先では、一挙手一投足に痛みが走るのか、関節が錆びたロボットののような動きで魚を嚙るのはの姿があつた。うーん、さすがにバテたみたいだな。

「飛ばし過ぎじゃないのか？まだ初日だろう。」

兄さんがその声を掛けて来る。

無茶して怪我した足の事があるから気にするのも無理は無いかもしれないが…

「兄さんは気にし過ぎだ。極端にオーバーにしてる訳じゃないし、一つ二つの限界位上回っておかないと。」

「限界を上回っては危険なのではないでしょうか？」

フレイアが少し心配そうに問いかけてくる。

ベルカの知識から引いても異常なのだろうか？あるいは戦時は訓練で限界超すような真似してる余裕が無かったのかもかもしれない。

「普段から上回りっ放しだとさすがに無理が出るだろうけど、この訓練ってそういうものじゃないし。」

そもそも魔導師の訓練とはやる事が別物なんだし、科学的根拠に乗っ取ったトレーニングならジムで機械動かしてた方が余程効率いい。無茶と呼ばれるだけのメニューをこなす事自体にも意味はあるんだ。

「辛いと思うのは慣れるまでだから、頑張れなのは。」
「う、うん。」

励ます姉さんだったが、トレーニングに一日二日で慣れる訳もなく一週間程で帰ると言うのに…

何となく感づいているのかなのはも愛想笑いを返している。

「慣れた頃には帰りの飛行機だろうがな。」

だが、この手の意地悪が好きなお兄さんがそんな粗を見逃す訳もなく、ばっさりと希望を切った兄さんを、姉さんは恨めしげに見て、なのは乾いた笑みを浮かべていた。

と、談笑している側に転移魔法の反応が表れる。

特に害もないだろうと言う事で光に包まれた魔法陣を眺める。

「お、フレア。どうしてここに？」

中から現れたのは予想通り知った顔…フレアだった。

「休暇を申請してきたから約束を果たしてもらおうと思ってお前の家に行ったら、此方に来ていと言う事で追ってきた。」

事情を説明すると、フレアは兄さん達にお辞儀をした後に俺を見る。約束という兄さんと試合させてやるって言った件だろう。まだこっちの確約も取れてないと言うのにわざわざ休暇申請してまで来るとは…

…と、思い返しているとフレアに睨まれていることに気が付いた。

「クロノや彼女達は良くて、俺には見せる訳にはいかないと言うのか？」

「へっ？」

「お前達の鍛練だ。」

あまり愚痴のような事は言わないフレアはそれ以上続けなかったが、なんか悔しそうだった。

フレアはクロノ達と違って武芸にいち早く興味を持って魔法外の鍛練として別枠で続けてきたし、純粹魔導師組みがこっちの鍛練に来ていた事が悔しいのか。

それにしても…そんなにハマったか。魔導師としては異端になるんだがな。

初めに教えたのも俺な訳だし、仲を取り持つのも俺の仕事だな。

「あー…兄さん、フレアをそっちの訓練に混ぜてやってくれないか？」

「何？」

兄さんはフレアを改めて注意深く見る。

魔導師としてではないフレアの実力を測ろうとしてるんだろう。

「槍使いで技量は俺の一個か二個下。けど魔導師としても異端の戦い方してたからか下地は出来てるし、長物相手の訓練にもなる筈だ。」

しばらくフレアを見ている兄さん。
だが、やがて笑みを見せてくれた。

「確かに槍を扱う知り合いは身近にいないからな。いい機会だ、よろしく頼む。」

フレアは兄さんに向かい合うと…

「ありがとうございます。」

お礼を告げつつ深く頭を下げた。

にしても兄さんとフレアの仕合か…一仕合位見てみたい所だが…

「あ、あの…」

おずおずと言った感じで手を上げるフェイト。

なんか言いにくそうだが…

「私、恭也さんと試合してみたいです。」

「俺と？」

驚いた事に兄さんと戦ってみたいと言い出すフェイト。

「その…前から速人の戦い方に興味があつて…なのはと戦ったって話も聞いてて…ホントは秘密で魔導師に見せられないんじゃないか

って思ってたんですけど、その…フレアさんが一緒でもいいなら…」
消え入りそうな声で告げるフェイト。

なるほど。前ついて来た時に止めたから遠慮してたのか。
道理でおっかなびっくりって感じで聞いてくる。

確かにホイホイ見せるものでもないが、フェイトはなのはの親友だしフレアに見せていいならどっちも同じ管理局員だ、問題ないだろう。

「いいんじゃないか？兄さん。魔法の事知っても記憶消したりしない訳だし、こっちだって少しくらいは。大体俺も戦ってるわけだし。」

「ならお前が試合を引き受ければいいだろう。」

フェイトの援護しようとして墓穴を掘った。

確かにそう言われればそうなんだが…

「あ、あの…なのはが入院するような怪我を生身で負わせたんですよ？速人は身体強化とか使えるし、もし魔力をまったく使わないで普通に戦ってそんな事ができるなら…見てみたいんです。」

「とは言え飛ばればどうしようもない身なんだがな。」

少し困惑した様子で呟く兄さん。

だが事実、なのはとやる時ビルで戦うって呼び出したのもその一環だろう。

御神の剣は戦いに強くあるための物じゃない。最終的に勝てるなら…護れるなら、勝負になる前に『背後からグサリ』でもいいんだ。そういう意味では、環境、状況が公平な状態で向かい合って模擬戦なんて魔導師相手にやれば普通どうにもならないだろう。

「飛行、バインド、砲撃抜きでやればいいんじゃないか？射撃魔法ぐらいならどうにかできるだろうし。」

「随分簡単に言うなお前は。性能次第でどうにかなるのは確かだが…」

「大体魔導師はこの世界に来れるんだぞ？違法魔導師が管理局の目をくぐって襲ってきた時の為に仕合くらいやつても損は無いと思うけど。」

滅多にあることじゃないだろうが、可能性が無い訳でもない。特に、わざわざ進入してくるような奴がいるならこの世界の『異能』目当てのはず。

知り合いを考えれば放置する訳にも行かない。

「分かった、昼食後にやろう。ただ、記録を取るのには遠慮してくれないか？」

いいつつクロノを見る兄さん。

お役所仕事じゃ逐一記録を残してるかもしれないと危惧したんだろう。

だが、クロノのほうは意外そんな表情を見せる。

「見せてもらえるのですか？」

何かと思えば見せてもらえる事自体が驚きだったようだ。

兄さんは静かに頷いてフェイトを見る。

「同員だからというなら彼女もそうなんだろう？今更だな。」

こうして、唐突にフェイトと兄さんの仕合が決定した。

魔導師相手に普通にやっつて勝負になるとも思えないし、やると言うのなら本気でやっつけてくれる筈だ。

こりゃ楽しみだな。

Side ｝ フェイト Ⅱ テスタロッサ

昼食後少しだけ食後の休みを取って、私は恭也さんの試合の為に森に来ていた。

バルディッシュを構えて恭也さんと向かい合う。

普通にしているだけのはずなのに、何でだか身体が硬かった。

命がかかった戦いも、本物の騎士であるシグナムとの戦いも経験しているのに、そのどちらとも違う。

なのはが言っていた本気の『重さ』はこんなものじゃないのだろうけど、本気じゃない今でさえ身体がこわばるなんて…

「…いきます。」

「ああ、いつでも。」

私は地を駆け、全力でバルディッシュを振り下ろし

「ぐっ!？」

脇腹から伝わった衝撃に呼吸を止められてその場に崩れ落ちた。恭也さんはそんな私の斜め前に立っていて、バルディッシュは恭也さんの足を掠める様な位置に当たっていた。

何をされたのかもよく分からなかった。

私だつてなのはや速人に見せられてから、踏み込みながら防いだり避けたりする技術は知っている。

だけど、当たるかと思つたバルディッシュが空を切つたのが見える前に息が詰まつたから正直何があつたのかよく分からない。

「勝負あり…か？」

「フェイト! 何で砲撃とバインドと空戦以外許可されてると思つてる! 思いつきりやつても大丈夫だ!」

心の何処かで甘く見ていたのかもしれない。

魔導師に生身の人間が立ち会える筈がないって、無意識にでもそう思っていたんだ。

シグナム達守護騎士の皆も、クロノも、リライヴも、強いのは分かつた。

ちゃんと認識できていた。

なのに…分からなかった。

恭也さんには何をされたのか分からなかったんだ。
刀だったら私はもう真つ二つになっているんだろつ。

「…済みませんでした、もう一回お願いします。」
「分かった。」

もう…慢心しない。

今できる手を全て使ってこの凄い人に勝ってみせる。

「いきますー！」

私は宣言すると同時に距離を取り、単発の魔力弾を生成する。
複数発生成する余裕は無いから。

「ファイア！」

単発での魔力弾。少しでも態勢が崩れてくれれば…

と思っていた私は、まだ甘かったらしい。

低い姿勢になりながらかわして同時に加速する恭也さん。

要はクラウチングスタートとかと原理は同じなんだろうけど…身の
こなしが早すぎる！！

けど走ってきたなら方向は急に変えられないはず。

私はブリッツアクションを使って背後を取ってバルディッシュを振
りかぶ

「っ！」

る前に左肩に痛みが走る。

気にする間も無く背後を取ったはずの恭也さんは半回転して私の姿を捉えつつ、左の木刀を一閃。

「くっ！」

何とか防いだ私はもう一回ブリッツアクションを使って…距離を取った。

高速移動を攻める為に使えない事に悔しさを感じながら左肩を見ると、針が刺さっていた。

振り向きながら投げて当てたのだろうか？投擲まで凄腕だ…

普通にかけてくる恭也さんは、かなり速かったけどそれでも普通の人間の領域だった。さっきまで押されてた人の速さとは思えない。

「プラズマランサー…ファイア！！」

複数生成した魔力弾を放つ。

地面を走っている以上、これなら数発位当たるはず…と思ったんだけど、恭也さんは木に向かって跳躍して、そのまま木を足場代わりに飛んできた。

だから考えが甘いって…速人だって壁走り出来たじゃないか！！

「ターン!!」

反転して恭也さんに迫る魔力弾。

予想していたのか、恭也さんは横に飛んでかわす。

いくらなんでも着地すれば隙が出来るはず!

私は再度ブリッツアクションを使って恭也さんの背後に移動する。

そして…

「ここまでだな。」

「え…」

『背後から』首筋に当てられた木刀の感触に、私は思わずバルディッシュを取り落とした。

ありえない。

こんな事があっていい筈がない。

今までの超人的な身のこなしなら、凄いと素直に思うことが出来た。着地の隙を殺して反応してくるならまだ理解できる。

けどブリッツアクションの…動作加速の状態で背後をとった筈だったのになんで私の背中から木刀が伸びているのか…

生身でブリッツアクションより速く動いて背後を取ったとしたらもう人間じゃ…

「ふう…」

「恭ちゃん、使う必要あったの？」

「埒があかなかったからな。さすがに魔法相手に普通には勝てない。何ならお前が見本を見せてくれてもいいんだぞ？」

「う…」

恭也さんと美由紀さんはそれが何なのか分かっているようで、そんな言葉を交わした後私達を置いて自分達の修行に戻っていった。

S I D E O U T

「…ありえない。」

隣で見ていたクロノが、白昼夢でも見たかのように呆然と呟いた。なのはも言葉が無いようで、フレアは真剣な表情で何かを考えてつつ、兄さん達を追って離れた。

驚くのも無理は無い。あんなもの俺ですら理解不能なんだから。

やった事は単純だ。ブリッツアクションを使ったフェイトの死角に滑り込んでそのまま背後を取った。

だが…速すぎる。

フェイトより速いとは言わないが、それでも一介の人間に出せていい速度、出来ていい身のこなしじゃない。第一初速から最高速近い速度で動くななんて真似が人間にできる筈がない。

それに何よりあねは…

俺が負けた、美沙斗さんの姿に重なって見えた。

恐らく奥義。それも姉さんの口ぶりからするとかなりのとっておきなんだろう。

「…ククロノ、ここでの事は」
「分かっている。第一報告できるものか、高速移動魔法を使用したAAAの魔導師の背後を取った管理外世界の人間が存在するなど…」

ククロノからの答えは割と予想外だったが、同時に納得も出来た。魔導師として面子も何もあった話じゃないし、話したところで失笑を買うのがオチだ。

信用されたとしても欲の皮突っ張った連中や変態研究者のせいで混

乱を招くだけだ。

「サンキュー。」

「礼を言われる事じゃない。」

アツサリしたクロノの反応に、俺はかえって感心した。

普段は身内に振り回されてる感があるが…コイツ人間出来てるなあ。

第七話・雷神対剣聖（後書き）

…素で超人だなあKYOA鬼一様（汗）

魔導師に勝てない理由が『空を飛べないから』なんて生身の人間のレベルじゃないですね。

もともと一個中隊を二刀と投擲武装だけで殲滅可能な御神の剣士を生身の人間に入れていいならの話ですが。

『作中の』神速について

ブリツツアクション使用のフェイトから背後とってますが高速移動魔法より速いわけではないです。

ただ神速の方が高速移動魔法より使い勝手はいいです。で、軽く特徴を。

高速移動魔法

- ・魔法なので速度は問答無用で人外レベル
- ・魔力光等による軌跡が残る
- ・魔法発動、停止時の反動緩和等の為、開始終了にタイムラグがあり
- ・移動中攻撃が出来ない

神速

- ・速度は人をギリギリ外れる位（って外れてるのか）
- ・発動タイムラグは皆無
- ・魔力等の反応なし
- ・発動中の認識能力強化
- ・発動中攻撃自由自在

高速移動魔法欠点だらけのように見えますが、むしろこれくらいじゃないと『一、二戦しか魔法戦経験のないなのはがフェイトの鎌避けられるはずがない。（温泉参照）』かと。

第八話・速人の魔法戦カリキュラム

第八話・速人の魔法戦カリキュラム

感慨深いものを見せられた後だったが、いつまでも呆けていては修行にならない。

俺は魔導師組と宵の騎士達を連れて、ひとつ離れた島に来ていた。フレリアに結界を張って貰ったため、この中で何がどうなるかと周囲の人や今修行中の兄さん達が物音なんかを気にする必要がない。

「なのはは魔法戦の練習な。」

「え？いいの？」

「当然だろ？お前は魔導師なんだから。」

午前中が肉体トレーニングで魔法の修行はやれないと思っていたのか、笑顔を見せるのは。

御神の訓練と言ったって剣振る訳じゃないんだから魔導師が魔法戦やらない訳がない。

ただ…御神の訓練のペースでやるだけだ。

「一対一で模擬戦十連戦。シュテルとレヴィが交互に付き合ってくれるそうだ。」

「じゅ!？」

言い切ることもなく引きつった顔で固まるのは。

「嫌なら嫌で誘導弾制御六時間とかでも」

言い終わる前にブンブンと音がなりそうな位に横に振るなのは。普段は朝だけできついのにやれる筈も無いと言う所だろう。

承諾したなのはは疲れた足取りで離れていく。

残ったフェイトとクロノは苦い表情でなのはを見送る。

さて次はフェイトだが…

「取り合えず剣の基本型を一通り見せるから、それをやるか。」

「わかった。」

「って訳でクロノ、少し自主練でもしててくれ。」

クロノが頷くのを確認したところで、俺はフェイト共にその場を離れる。

ある程度障害物の少ない空間を探したところでナギハを抜いて構える。

「さてフェイト、さっき言った剣の基本型だけどな、地上でやらないといけないわけがあるんだ。」

「速人はわざわざ魔法陣の上走るくらいだもんね。どんな理由？」

問いかけてきたフェイトの前で、俺は思いっきり握り手に力を込めてナギハを振り下ろす。残身も何もないそれをみたフェイトが、どう返していいか困ったように表情を曇らせる。

「えつと…違うよね？」

「ああ。今のは極端すぎる例だが、何も知らない奴に全力で振れと言うと多分こうなる。だけど、本来こんなんじゃないやなくて足まで含めて全部を上手く使わないといけないんだ。」

俺はフェイトに説明をしながら用意した的を取り出す。

糸で吊るした青竹。

コイツが一番分かりやすいからな。

「で、魔導師勢の上手い奴らは大抵それより一個上、全身の力を上手く使ってるレベル。で、その上が全身の力を一点に集約させるレベル。この辺は結構珍しくなるな。そして…」

吊るした青竹に向かって全力で踏み込んで、一閃。

両断された青竹は、剣閃に沿う様に落ちた。

うーん…やっぱり斬るのが限界か。

「さっきの説明全部に加えて、全ての力を攻撃時の一時…もっと言えば命中時の一時のみに集中させる。それができればもっと上手くいくんだけどな…」

「今ので上手く言っていないの？」

意外だったのかフェイトが戸惑ったように返す中、兄さんが上の竹を落とさずに切断できる事を教えると、フェイトは目を丸くして固まった。無理も無いが。

「いきなり無理なのは分かってるけど、意識するかしないかは大分違うからな。出来るなら地上では俺が今やった感じ以上を目指してみてくれ。」

「分かった。」

それなりに見れたものだったのか、フェイトは素直に頷いてくれた。踏み込みを使った斬り方を打ち下ろしから突きまで全部で9個見せる。

真剣に見ていてくれたようで、特にやり直す必要も無く二刀形態にしたバルディッシュで大体さまになりそうな形で再現してくれた。

後は、これを繰り返してもらえばいいだろう。

「一つにつき百回、左右別々に。」

「うん、分かった。」

全部で1800回になるんだが、分かってないのか辛いのが想定済みなのか、特に驚く様子もなく頷くフェイトを確認して、俺はクロノの元へと戻った。

そして…

「魔法戦教えてくれ。」

誘導弾制御をやめて俺を見たクロノに対してそう頼むと、意外だったのか驚くクロノ。
確かに剣使えって言われればそうなんだが、そう簡単にいかない訳がある。

「闇の暴走体の中にいた時、疲れ過ぎたせいでいつも通りの戦闘が出来なくなっただ。辛うじて凌いだけど初めて使った魔法でまともにもやり合える訳も無くて死ぬ程苦戦したんだ。対少数強敵や潜入調査とかならともかく、数が多かったり時間が長引くと厄介だ。」
「それほど疲れた状態で魔法戦をやっていたのか？」

改めて驚くクロノ。だが…

「魔法戦と呼吸止めて戦うのどっちが辛いと思う？」

「それが本当なら呼吸を止める方が遥かに辛いが…君はそんな戦いをしていたのか。」

正確に言えば違うんだが、代謝を下げて動くわけだから下手するとそれよりキツイ。

が、丁寧に説明しても怒らせたり心配かけたりするだけなので、濁して置いておく。

「教えてって言っても戦って魔導師視点から問題点あげるだけではないんだが、駄目か？」

「なるほどな…僕の方が君から戦い方を教わる位に実力差があるのに何を言い出すのかと思っただらそういう事か。」

察しの早いクロノは納得して頷いた。

そもそも戦い方が違う上俺の方が実力上なんだ、クロノにわざわざ戦闘法を教わる必要は無い。

それでも頼んだのは、魔導師の視点から問題点を知りたかったからだ。

クロノは頷くとデバイス…S2Uを構える。

「あれ？デュランダルは？」

「普段から使う気は無い。それに僕はこれでもものは達より魔法戦技能は高いつもりなんだが。」

わざわざ古いデバイスを使用するクロノに不思議に思っ
て問い掛けると僅かばかり呆れたようにそんな回答が返
つて来た。

要約すると、『魔法戦素人の君に全力でやる気は
ない』って所か。

「舐めたなクロノ、後悔させてやるぜ！行くぞナギハ
！！」

『はい、マスター！！』

抜いたナギハを両の手に握り締め、俺は宙を舞った。

S i d e 〱 クロノ 〱 ハラウオン

速人との模擬戦が開始してすぐ、僕は速人がわざわざ魔法陣の上を走る訳だと感じた。

「つち！！」

視認が困難な細い鋼線を振るう速人。だが、いつものように生きていない。

右手から振るわれるそれを避けた所で左手がナギハに添えられている事に気付いた僕は、少し直線上を外す。

「く…そっ…！」

僕が動いたかどうかというタイミングで、速人は高速移動魔法を使う。

確かに反応は速いが、普段なら正面を外したくらいで魔力刃を放つのをやめる事などない。

それに、なのはのそれより僅かに遅い機動で背後を取ろうとした所で、フェイト相手でもどうとでもなる僕には大した意味はない。

「ブレイクインパルス。」

「が…っ…！」

打ち込んだ近距離攻撃は、速人の身体に吸い込まれてその意識を断ち切った。

「ここまでかな…ん？」

墜落する前にバインドで止めようとしたのだが、頭から落ちていった速人は半回転して空中で『着地』する。

飛んで来るかと思ったが、速人はそこから僕に向かって手招きした。どうやら今のは勝利と認めてくれたようだ。

しかし、魔法戦で力量がこうまで変わるとは…

「っ…!?」

と、少し考えながら速人の前に着くと、首にナギハの刃が添えられていた。

いくら気が抜けていたとは言え、拳動すら見切れなかった…

「くそ…こんなに差があるのか。」

しかし、僕が悔やむ前にナギハをしまった速人は、歯がゆそうに俯いた。

差…というのは魔法戦と足場ありでの戦闘の事だろう。

何しろダメージを受けて墜落した直後にこの動きだ。生半可な魔法戦とは訳が違う。

「君はへんなことを考えないで普通に戦った方がいいんじゃないのか？」

「いや、駄目だ。」

僕の提案は即座に切り捨てられる。

しかし、彼もかなりの訓練を積んでいる身だ。生半可に戦うのは危険なのは分かっているはずなんだが…

「強敵少数相手にならそれでいいんだ。けど、広範囲多数の敵相手に防衛戦とかだと正直絶対抜かれるからな。」

が、返って来た速人の台詞は確かに理にかなっていた。

速人の剣がいくら優れていても、間合いは剣の長さでは限りがあるし、闇の暴走体のようなサイズの大きい敵相手に剣の長さの傷をつけてもかすり傷で済んでしまう。

移動もさすがに魔法陣を駆けるより飛行したほうが速い。速人は風を使えるから尚更だ。

体力切れもそうだが、何より別の方向性の力が必要だからこんな事を頼んだのか。

「そういう事ならとことん付き合おう。どうせ君の事だ、なのはにだけ十戦もやらせておいて自分はこれで終わらせるつもりは無いんだろう?」

「当然、サンキュークロノ。」

少し呆れて言ったつもりだったが、何も気にせず笑顔を見せた速人はそのまま距離を取った。

さて…かなり力量が落ちるとはいえ、狙いやタイミングは速人個人のそのままだ。

僕のほうも真剣に勉強させてもらう事にしよう。

S I D E O U T

「はっ!」

俺が放った一閃は空を切る。

避けたクロノが放ったシューターを高速移動魔法で迂回回避して、再度一閃。

今度はデバイスで受け止めた。

「っ！なんで回を追う毎に鋭くなるんだ君の動きは！疲れとか無いのか!？」

俺を弾き飛ばしながら砲撃魔法の準備に入ろうとするクロノに向かって飛針を投擲するが、これもかわされた。

「鋭くなってるって!？そりゃ光荣だ!!」

再度接近して放った一撃もまた避けられた。

追撃をかけようとしたが、鎖状のバインドが迫ってきたためその迎撃に手を裂く事になった。

もう何度目か覚えていない空戦で、俺は何となく察していた。

連撃は結構無理がある。

シグナム達がやたらと大きなモーシヨンで振るっていた剣を思い出しつつクロノに吹っ飛ばされて何度か。

ようは飛行の勢いを重力や地面代わりに上手く使えばそれなりに威力のつた一撃を振るえることが分かった。

ただ…それで二撃目は振れないんだ。

まさか体当たりのように相手を押しっぱなしで振り続けるわけにも行かず、その上全身を上手く使わないといけないため中々小振りに出来ない。

近接で連撃を行うには、空戦はあまりに不便だ。

「風翔斬!!」

「く…っ!!」

足場が無い状態では鋭さが落ちるため発生速度も弾速も落ちるため、クロノ相手では中距離でもアツサリ防がれる。

ええい！大降りの練習してるようなものなんだ！だったら…

「コイツで…どうだああっ!!!!」

「な…」

俺は指を揃えた状態で伸ばし、五指鋼線に魔力を纏わせながら振りぬいた。

青緑の魔力光に包まれた線が、まるで長い剣でも振るかのようあたりの枝葉を切り裂きながらクロノに迫る。

だが、思いつきり目立つため線上を外されてアツサリかわされ…

「今のは驚いたな、まったく…次から次へと新技を編み出さないでくれ。」

「お、俺の勝手だろうが…」

バインドで拘束された上で砲撃に撃ちぬかれた俺は、どうにかクロノに顔をむけて文句を言った。

くそ…単純魔法戦じゃどうあがいても勝てん…

そんな無茶し通しの訓練も過ぎ、夕食の時間：

「…死屍累々とはよく言ったものだな。」

兄さんがそんな言葉を漏らしたが、無理も無かった。

比較的元気なフレイアと姉さんが食事の準備をする中、なのははロボロでへたり込み、フェイトは腕を落としてぐったりとしていて、フレアは兄さん達にやられたのか顔にいくつか湿布を張っていた。

俺の方は、クロノが加減してくれたからか魔力ダメージ以外にたいしたダメージもなく、普段の戦闘方法ですらそれなりに戦える俺が魔法戦だけで体力使い切るわけもなかったため、少し魔力切れで眠い位で他はたいした事は無かった。

「さすがに今日は此処までだろう。」

「そうだな。初日だし。」

やがて並んだ食事には手をつけたものの、そこでダウンしたフェイトとなのはを、俺とクロノで寝袋につめて寝かせてやった。

「互いに兄だしな、これくらいは。」

「そうだな。」

疲れきってはいる物の可愛い寝顔を眺めつつ、兄としてクロノと笑みを交わした。

第八話・速人の魔法戦カリキュラム（後書き）

御神の訓練ペース。

彼等、普通にやらせると八時間ぶっ通しで鍛錬したりするらしい人種ですから、そんなのと同列で模擬戦やらされるのははさすがに涙目でしょうね（汗）

第九話・修行、無事(?) 終了

第九話・修行、無事(?) 終了

夕食後、俺は姉さんと打ち合っていた。

互いにクリーンヒットは一撃も無く、いい勝負に見えるだろうが…

多分姉さんもアレ使えるんだよなあ…

兄さんがフェイト相手に背後を取った高速移動。
アレを姉さんも使えるとなると手加減されて互角って事になる。

「っはあっ!!」

「っ…」

徹を受けた姉さんはよろけるように僅かに後退し…

見た事のない構えをとった。
いや、この構え何処かで…

考えた瞬間、とられていた筈の距離が完全に詰められていた。

この射程、虎切並だ！！

「らあっ！！」

額に向かう突きを回避し切れないと判断した俺は、左腕を使った斜め受けて突き出される木刀を弾く。

額脇を掠め焼けるような痛みが走るが無視して右の木刀を姉さんの鳩尾に突き付ける。

一息の間をおいて、俺と姉さんは互いに木刀を下げた。

「まさか腕で弾くなんて思わなかったよ。」

「刀だったら腕ごと頭に穴が開いてたさ。それより今のは？」

いつもと違う上かなりの性能で、何より見覚えがあった。

これは…

「御神流・裏、『射抜』。御神の母さんに教わった奥義だよ。」

「やっぱり。」

予想通りの答えが姉さんから返って来た。

速度以外は瓜二つだったからな。

「腕、大丈夫？」

「痛い。骨まではいってないと思うけど…」

木刀を弾いた左腕は、皮が剥けて強張っていた。筋肉にダメージがあるみたいでつつたみたいになっている。

「今日はここまでにしておいた方がいいよ。」

姉さんは少し低い声でそう言った。

訓練中の怪我が慣れっこだとはいえ、心配はしてくれているんだろう。

「初日で潰れてもしょうがないか。わかった、そうするよ。」

怪我の消毒などもあるいろいろやっていたら時間もそれなりになるだろう。

今日は仕方無いと判断した俺は、姉さんの忠告に素直に従って戻る事にした。

テントに戻るうとした所で、魔力を感じた。

クロノとフレアが模擬戦をやっているはず方向からだ。

あいつらもいい加減に戻るだろうし折角だから一緒に戻ろうかと思っ
って向かってみる。

すると…

「まさか…負けるとは。」

クロノがフレア相手に槍を突きつけられていた。

やってたのは魔法戦のはずだ、フレアの奴もそろそろ対一戦闘じゃ魔導師に負けなくなってきたのかもな。

「よっ、凄いなフレア。クロノに勝てればもう魔導師には負けないんじゃないか？」

「あらゆる事を同時にこなすマルチタスクを主としている魔導師相手だ、お前達と違ってよく見える。」

返って来たコメントには同感だった。だが、それはそういう事が分かる位に成長しつつあると言う事だ。

一年に満たない期間で管理局でも一握りの執務官であるクロノの攻撃に『よく見える』と言えればたいしたものだろう。

実際には俺達の域での技量は魔導師には皆無に近いんだが、一年目の人間相手にそれは言うまい。

「ところでお前達と違ってって言ってたけど…昼の兄さん達との修行は…」

切り出して、すぐに悟った。

俺の問いかけが終わる前に、普段はあるのかどうかも怪しいフレアの表情が目に見えて歪んだからだ。

おそらく、手も足も出なかったのだろう。

「気を落とすな。あの人たちは魔力強化使っても勝て」
「勝てなかった。」

『勝てるかどうか分からない』と言おうとした矢先にフレアから漏れた眩きに、空気が凍った。

…まだ子供で身体能力に限りがある俺が魔力強化施すのと違って、コイツの身体強化なら軽く肉食獣クラスのパワーとスピードが得られるはずだ。

それで尚及ばなかったと？

「なんて言うかその…頑張ろうか。」
「そうだな。」

俺とフレアは乾いた笑みを浮かべながら互いに見合わせた。

二日目・なのはは筋肉痛、フェイトは豆の痛みによる苦痛に顔を歪めながら初日同様のメニュー。魔導師であるはずのフレアが『最初はそんなものだ』とアツサリ言い切ったことに触発されたのか、一切疑問をもたれなかった。何よりだ。

三日目・見かねたクロノが俺に二人の訓練を止めるように言い出したが、自分達が寝た後もまだ仕合やってる兄さん達をみて断念。

四日目・疲労を抜くのに期間が必要なため、休み明けすぐに仕事のクロノは此処から訓練のサポートに回る。(主にレヴィの)監督役が増えたとフレリアが喜んでいた。

五日目・全体的にそろそろ口数も目に見えて少なくなってきた。兄さん達は訓練中と言う事もあって元々口数が少なかったが、さすがに疲労が見える。ただ、俺自身そろそろ様子を伺う余裕がなくなってきた。

六日目：

「はっ！」

右の斬撃を棍で受けるフレア。だが、受けた棍が真つ二つに折れた。脇腹に左の木刀を一閃。

うずくまったフレアの前で、俺は一息吐いた。

「真つ向から受けるからだ。体力を消耗した時や体に力が入らない時にはますます技が役に立つ、何しろそれしか使えないからな。さ、ここら辺が正念場だぜ。」

「く…なるほどな…限界までつめるのにはそういう意味があるのか…」

明らかに苦しそうなフレア。だが、俺も人の事は言ってられないくらいには疲弊していた。

正直此処まで来ると人前だろうがなんだろうがぶっ倒れてすやすや眠れる気がする。

と、背後から肩をつつかれる。

慌てて飛びのきつつ振り返ると、父さんが笑顔で木刀を握っていた。

「徹！」

「っ！！」

真つ向から受けたら先のフレアのように破壊されるため、打ち下ろしの一撃を横薙ぎに払う。

「貫！！」

「が…っ！！」

瞬間、鳩尾に衝撃が来た。

鳩尾を押さえてうつむいていると、なだめるように頭を叩かれる。

「講釈してる場合か速人？お前が俺から背後とられて気づかず、その上二手で防御抜かれるようじゃ致命的だぞ。」

「く…っぞ…」

倒れるのを避けて顔を上げる。

どこにそんな体力あるんだよ！ブランク明けの筈なのに！！

徹はともかく貫に使う集中力は並じゃない。何しろ相手の動きも感じ取れる状態でなければ扱えないんだ。

疲労困憊の筈のこの時期によくもまあ普通に…

考えている間もなく、フレアが新しい棍を手に俺の前に立っていた。

「どうした？体力切れか？」

「…まだまだ！」

両手で頬を張って木刀を握りなおす。

此処からだ、集中していくぞ。

昼を以って訓練を終わりにした俺達は、ばててズタボロのまま飛行機に乗るわけにもいかないの、最低限身支度だけ整えて帰りの飛行機に乗り込んだ。

直接転移できたフレアだけはそのまま仕事に戻り、クロノも空港に着いたところで無限書庫に向かうと言う。

ユーノに話がてら情報を（恐らく宵の騎士関連のを）纏めるらしい。

フェイトとなのはは…正直よくやった。

普通に考えたらオーバーワークの域だ、間違っても余裕があるはずが無い。

時々やってる俺達はともかく二人はよくついてきたもんだ。

そして、さすがに俺も限界だった。

「ふー…」

部屋に戻るとすぐに寢床に身を投げる。

体の痛みで眠れないのが普通だが、その手のことは慣れているから特に問題ない。

それよりも横になった状態で思い返すと、短期間なのに皆随分色々あったように思う。

兄さんと姉さんにとってはいつもどおりの訓練だったが、父さんは

成長する俺達と違って元々持っていたものを取り戻す形で強くなつていったため、最終的に序盤と見違えるほどになった。と言うより、父さんにも勝てなくなつたんじゃないだろうか俺…

フェイトは楽に…と言うとへんな言い方だが、力まずに武器を捌けるようになった。

一撃一撃であればちゃんと身のこなしと連動した振り方が出来ている。

後半は疲労でボロボロだから、その辺が出来ないとまともに振るう事も出来ないはずだが、ちゃんと振るえていた。

なのはは疲弊しきつた状態での模擬戦を繰り返したからか、六日目の十戦目で何発か当てたらしい。さすがにまともに勝てなかったらしいが、当てるだけでも十二分に凄いだろう。

俺は…

「貫徹…か。」

フレアとの仕合で使った対魔導師用の技法。

貫でもフィールド系障壁に阻まれて、徹でもバリアジャケットのせいで決定的なダメージにならない。

だったら同時にこなせば？と言う端的な発想から使ってみたのだが…

難しかった。

何しろ徹はいつでもどんな態勢でも成せるものでもないし、貫は逆に相手の防御や見切りを見切って攻撃する技。隙を縫うように攻撃する以上、それ以上別の技法を使うとなるとかなり難がある。

だが、魔導師相手ならどうにかいけそうだった。

フレア相手の成功率もあまり高くは無いがクロノなら決まったし、貫を磨けばもう少し生きてくるだろう。

体が動くようになったらまた急がしいぞー…

そう思いながら、俺は眠りに付いた。

…とても…大事な事を忘れたまま。

S i d e 〉 高町なのは

いつもの早朝トレーニングの時間に目を覚ましはしたものの、体中が痛かった上に二、三日休むように言われていて、レイジングハートもしっかり聞いていたから出るに出られずゆっくりしている事にした。

フェイトちゃんにメールでもと打って見ると、フェイトちゃんもバルディッシュに止められたらしい。

手が血だらけで痛そうだったし、無理も無いと思うけど。

それで、朝になって…

「なのはー、速人をそろそろ起こしてあげて。多分寝てるはずだから。」

「はいー！」

下から聞こえてくるお姉ちゃんに返事をして速人お兄ちゃんの部屋に向かう。

二回ノックをするけど、反応が無い。

直接起こさないと駄目だね、疲れてるはずだし。

ノックもしてあったので、あまり躊躇わずにドアを開ける。

「お兄ちゃん、起きないと学校」

そこまで言って、私はピタリと硬直した。

お兄ちゃんの両脇で、お兄ちゃんを抱え込むようにシュテルちゃんとレヴィちゃんが眠っていたから。

「な…なっ…」

何で三人一緒に寝ているのかとか、まんま私やフェイトちゃんの姿をした二人がお兄ちゃんを抱え込んでいるこの状況とかに頭がぐるぐる回っておかしくなりそうだった。

寝返りしようとしたのか顔を傾けたお兄ちゃん。シュテルちゃんを目の前にする形になって…

見ていられなかった私は慌てて三人に被さった布団を引っぺがした。

「寒い…あ、なのは。どうしたのですか？此処はマスターの」

「そのお兄ちゃんの部屋でどーして三人が一緒に寝てるの!!!？」

「マスターが部屋で眠ってしまつて寝るところが足りなくなつたからですが？」

そうだった。お兄ちゃんはそれでソファで寝るようになったんだっただけ…

「それにマスターは女性が好きなようなので、密着して寝る事になつても特に問題ないかと…どうしたのですかなのは？何処か怒っているように見受けられるのですが。」

納得いかなかった。特にそんな理由なら、普段からお兄ちゃんの言動がおかしいのが原因だと思う。

「ん…あれ？朝？」

お兄ちゃんは目を覚ましたのか、身体を起こそうとして自分にしがみついているレヴィちゃんを見る。その後反対側のシュテルちゃんを見る。

「あれ？何でこんなオイシイ状況なんだ？」

…怒るのはやめておいたほうがいいのはわかっていたけど、ちょっと我慢できなかった。

私は近くにあった雑誌を両手でもって振り上げる。

「あ、なのは。…ちよ、ちょっとまで！？俺も何がなんだかわか」

私に気づいて慌てているお兄ちゃんに向かって、雑誌の面を思いっきり振り下ろした。

後からシュテルちゃんに『なのはが隣で寝たかったのですか？』と聞かれたことが、何より痛かったかもしれない。

S I D E O U T

第九話・修行、無事(?)・終了(後書き)

日ごとに違う内容をこなすのが修行と言うわけでもないので一気に終了しました。

これでも充分大変そうなのに、血を吐くほどだった御神の修行や、そんな御神の人たちですらやらなかったであろう恭也の『倒れるまで修行、起きたらまた修行』ってどんな所業何でしょうかね(汗)。

貫徹

防御を貫き、衝撃を徹すを同時にこなす。恭也達はやらない。

特性の違いによる制約で両立させるのは大変なもの、速人は魔導師相手にならどうか成功させられそうな兆しにある。

第十話・暗雲（前書き）

今回は一年ほど飛びます。

第十話・暗雲

第十話・暗雲

闇の書事件が一年過去の話となりかける頃、俺はリビングでアリシアを待っていた。

アリシアがデバイスマスターの資格を取るための勉強が進んでいると言う事で、素人の俺がやるより遙かにマシと言う事でメンテナンスを頼んだ。

それを持ったアリシアが今日、家に来る予定なのだ。

「それにしても良かったですね。管理局下で行動しないと技師の知り合いは不可欠ですから。」

「だな。独学でメンテナンスやるにはちょっと手間があるし、何よりナギハはともかく宵の巻物はホイホイ誰にでも見せられないから

な。」

さすがに、『俺のためのデバイスマスターになる』と聞いたときにはビツクリしたが。

俺は恐らく大人しくしてないから管理局に入った方がいいとは薦めてみたが、アリシアが引かなかつたから頼む事にした。

チャイムがなつて殆ど間も無く、トテトテと駆けてくる足音が聞こえる。

「速人！ナギハのメンテナンス終わったよ！」

嬉々としてナギハを手にしたアリシアがやって来た。

俺はアリシアをソファに座らせて、手にしていたナギハを受け取る。

「よ、ナギハ。調子はどうだ？」

『中々いいですよ。さすがに局の人に頼んだ時ほどじゃないですけど、マスターがメンテナンスを自力でやるよりは大分良好です。』

「言ってくれるな、その通りだけど。」

俺は即座にナギハを展開、装備してみる。

抜刀、違和感なし。

空中歩行用魔法陣、違和感なし。

改造したわけじゃないからバランスとかは変わってなくて当然かもしれないが、それでもこれは結構凄いなと思う。

「うん、違和感なし。サンキューアリシア。正直勉強してるにしてもまだ早いんじゃないかと思ってたが、そんな事まったく無かったな。」

「ホント！？やったあ！」

喜ぶアリシアの横で、シュテルが息を吐いた。

「マスターの力となるつもりなら材料次第で何でもできる位の腕はいると思います。メンテナンスで手放して喜ばないでください。」

「むー…でも一歩前進には違いないよ。」

「それはそうですね。」

素直に認めたシュテルの言葉にようやく上手くいった実感が沸いたのか、改めて笑みを見せる。

シュテルは酷評だが、俺は大分助かった。

と、アリシアは少しあたりを見回して俺を見る。

「恭也さん達は？」

「兄さん達なら香港で修行中。」

「そっか。ってあれ？修行なら何でついて行かなかったの？」

アリシアも俺が兄さん達と一緒に修行をやっている事は知っている。だから当然と言えば当然の疑問だった。

俺としてはついていけたほうが良かったんだが…

「対銃火器武装隊よりの訓練なんだけどな…さすがに子供は混ぜられないって。」

俺は思い出した経緯に溜息を漏らしつつ苦笑する。

「速人の方が大抵の大人より強いのに。」

アリシアが拗ねた様に呟くが、無理もない対応だ。

むしろなのはぐらいの人間を戦わせる管理局の様な組織はこちらでは犯罪組織ぐらいだ。

「確かに兄さん達と比べたら見劣りするからな。それに…」

「それに？」

俺の語尾をなぞるアリシアにむかって、両手を腰に当ててふんり返る。

「小学生にたたまれたら部隊の人達立ち直れないだろうしな！ははははは！…！」

思いつきり笑い飛ばしてやると、シュテルが冷たい視線を向けて来た。

「自信過剰が過ぎますよマスター。恭也達より先人の美沙斗がいる部隊なのでしょう？」

「あー…まあな。」

それを言われると痛い。

美沙斗さんもまだ兄さん達より強いと自負する腕前だ。

いずれ抜かれるとは言っていたけど、あの二人より強い時点で既に『異常以上』だ。

「けど火器武装の兵ぐらいなら何とかなるのはホントだぜ？」

「人間の台詞じゃないよ…」

人聞きの悪い台詞の発生源に目を向ければ、我が妹君がいた。こんな年で既に仕事とはご苦労なもんだ。

「お前に言われたくないぞ破壊魔。」

「私は魔法使つてだからいいの！」

魔法を使うと破壊魔になってもいいらしい。

ああ…うちの末っ子はいつからこんな凶暴になつたんだ。

「ってそれはいいや。それよりどうなつたんだよ、皆行けるのか？」

「あ、えつと…はやてちゃんと守護騎士の皆、それにユーノ君は大丈夫だつて。フェイトちゃんとクロノ君は仕事休めないみたい。」

少しだけ残念そうなのは。

フェイトが来れない訳だし無理もないが。

アリシアも落ち込んでいるかと思つてみたが、楽しそうに腕を組んでいた。

「しょうがない、フェイトのためにおねーちゃんが一肌」

「デバイスでの撮影は駄目だよ。」

「えー…」

が、言い切る前になのはにぶつた切られてむくれるアリシア。フラッシュなしで映像記録を取るのが当たり前のデバイスなら盗撮など訳ないだろうが、民間人としてもヒーローとしてもよろしくない。

「駄目だぞアリシア。無闇に迷惑かけるのは俺の方針じゃない。」

「はい。」

「なのはの話は聞く気もないの!？」

俺が止めるとアッサリ笑顔で了承するアリシア。

なのははリライヴといいアリシアといいあんまり素直に話を聞かれないため少しむくれている。

二人とも管理局にいい印象が無いから当然と言えば当然なのだが。

「そういう汚れ役は私達が引き受けます、アリシアはマスターの隣で真つ当に動いて下さい。」

と、それまで見ていただけだったシュテルが唐突にそんな事を言い出した。

汚れ役って…だからそんなのにいられても困るんだっての。

「いやだから」

「現代は情報戦ですから。舞台のローアングルから更衣室にシャワールームまで、綺麗に映像記録を取ってきましょう。」

「駄目だと思っただけど確かに現代は情報必須だな。いやよく言ってくれたシュテル。フェレットに扮した変人に見咎められない為にも俺がキチンと見張りを」

『エクセリオンモード。』

言い切る前に不吉な機械音声が聞こえ、視線を移す。
冷めた目で笑顔を浮かべた悪魔がいかつい槍のように変形した杖を
手にしていた。

「お、お兄ちゃんは室内で砲撃は駄目だと思っなあ…。」

少しずつ寄って来るのはから距離を取る。

と言っても室内で動ける距離には限りがあつて…

「大丈夫。悪魔から授かった魔力でただ思いつきりぶん殴るだけだから。」

『ええ問題ありません。』

寒い笑顔のなのはにシククロするようなレイジングハート。
こいつら気が合い過ぎだろ！！つかぶん殴るって！？

「何処でそんな言葉遣い覚え」

「グイータちゃん。」

あ、なるほど。

と素直に思ってる場合じゃなかったのだろう。

いつの間にか目の前になのは顔があった。

「せーのっ！…！」

振り抜かれたデバイスを直撃した俺は一回転してぶっ倒れた。

Side 八神はやて

お昼休み、いつもの屋上で、なのはちゃんは少しご機嫌ななめな様子で昨日の話をしている。

と言うかシユテル絶対確信犯やろ、相変わらずからかうの好きなんやなあ。

「本当、信じられない！ヒーロー名乗る人の台詞じゃないの！」

「は、速人らしいね…」

むくれるなのはちゃんの話に苦笑するフェイトちゃん。

「速人君の場合ノリでそう言う台詞が出とる可能性あるからなあ。私としては楽しそうでええんやけど。」

「良くないわよ！あれは一回痛い目見るまで治らないわね…」

しみじみと言うアリサちゃん。

私は痛い目見てもやめんと思うけど…言ったらなのはちゃん余計落

ち込みそうやし黙つとこら。

「でも久しぶりだよな。ゆっくりして行けたらいいんだけど…」

「遊んでる訳じゃないんだから無理でしょ。ま、お土産くらいは渡せるかもしれないし用意しときましょ。」

いつもより少し楽しそうに見えるすずかちゃんにアリサちゃん。

知り合いに合える訳やし、何よりその知り合いがあんなとんでも有名人ならそれは嬉しいのも当然やな。

初対面の私も今から待ち遠しい位やし。

私は、お願いやから今回ばっかりは急な仕事入りませんように。と、皆と話しつつ祈っていた。

S I D E O U T

「…マジ？」

「俺は冗談でこんな話をしない。」

電話から返って来た兄さんの声はあくまで真面目なものだった。

「お前の事だ、現地で様子がおかしければ勝手に動くと思って伝え
た。」

「で、俺におとなしくしてろって言うのか？」

「そのつもりはない。」

半人前は動くなという話かと思ったが、そうではないらしい。

「もし仕掛けてくるなら、もう下見や準備に回っている奴もいるだ
ろう。」

「調べろって？」

来ているかどうか分からない相手を探すと言うのはかなり無理が
ある。

「ああ。だが軽くでいい。今からお前の事がバレれば人質でも取ら
れかねない。」

知り合い大半魔導師なのに人質にとられる心配する必要があるのかと
も思うが、下手に魔法使う訳にもいかないし母さんやアリシアみた
いに完全に戦闘能力無い人もいる。
確かにバレない方がいいだろう。

「了解。俺達が知り合いだったって不運を呪って貰う事にしますか。
」

「ああ。だが気をつける、魔法を使わないのであればお前よりも腕
の立つ相手もいるはずだ。」

「身内にも三人いるしな。」

俺の返しに答えはなく、電話はそこで切れた。

それにしても…遺産目当ての脅迫か…

フィアッセさんも大変だな。

俺は手にしたコンサートのチケットを眺めつつ、コンサートに来るだろうメンバーを思い返す。

八神家の5名様になのはとユーノと家の宵の騎士四人。

魔導師組はそんなものだが…
魔法を使用しないと言う制限付きでは、恐らく警官レベルにすら手が出ないだろう。

晶師匠とレン師匠もかなり腕は立つけど、銃持ち相手じゃ厳しいはずだ。

そして、なのはがどうするかは知らんが…

客席が爆破されて人が吹き飛ばうが、

とられた人質が次から次へと頭を打ちぬかれようが、

崩れた建物に胴が潰される人間が出ようが、

カーチェイスに巻き込まれてヒキガエルみたいに潰れる人間が出ようが…

管理局としては『管理外』世界で魔法を使った活動は出来ない筈だ。

それは勿論、俺や宵の騎士の皆の魔法使用も同様だ。

「…ま、相手も魔法使いじゃないんだ、何とかなるだろ。」

と言うよりも何とかするしかない。

人の所の遺産探り当てる位の相手なら、それなりの組織のはずだ。会場を巻き込まれたら死人が山ほど出る。

それに、兄さん達に任せたら下手をすると相手の方が殺される。

全てが上手くいくように願うなら、俺が気張らないといけない。

「はーやれやれ、どうやらすぐにお前の力が要りそうだ。今回は魔法抜きだけだな。」

『安心してください。並みの金属なら打ち合っても折れる事はありません。』

「後は俺の腕次第か、面白い話だなまったく。」

俺は胸元のナギハを見ながら、今度のコンサートが災厄にさせないと誓った。

S i d e 〱 フィアツセ 〱 クリステラ

私はきつと、我侭なんだろう。

修行で香港にいた土郎達を呼び出してまで、コンサートを開くなんて。

狙いは私で、スクールの皆も危険に巻き込む事になるのに。

だけど…

それでも私はママから受け継いだスクールの思いを継いで、少しでも歌を届けていきたい。

その上で、どうか誰も傷つき倒れたりしないようになって…

でも、不安はあまり無い。

護る事に、本当に真摯な想いを積んでいる大切な人たちが、傍にいてくれるから。

S
I
D
E

O
U
T

第十話・暗雲（後書き）

とらハ3混じりにも関わらず初登場の人気投票NO1歌姫さん。

とは言え、海鳴いない上に戦闘する訳じゃないので仕方ない部分はあるのですが（汗）

ちなみに士郎は回復したのでちゃんと修行しなおして恭也に届いたり届かなかったりしてます。

∴化物が増（以下略）

第十一話・さまざまな不安

第十一話・さまざまな不安

特に異常なし…か。さすがにこの人だらけの中怪しい奴探すも何もないよなあ…

頼まれた調査は、早速暗礁に乗り上げていた。

無駄なの前提で、何か見つければ儲け物程度の気分で回っている以上無理も無いだろう。
何しろ、俺の事を勘ぐられて家を知られることのほうが問題なのだから。

「あら速人君、どうしたのこんな所一人で。」

「あ、忍さん。」

知った声に振り返ると、忍さんの姿があった。

「もしかして…ヒマなの？」

「へ？」

「だって、修行でもなさそうだし誰もいない上に買い物でもないの
にこんなところぶらついてるなんて初めてみたもの。」

確かに、人目について修行に不便で遊び相手も荷物も無くこんな町
中にいれば…

「ヒマそうに見える?」

「それか恭也関係。」

笑顔でさらりと言つ忍さん。

直接的に調べていると言わない辺り、殆ど察した上で伏せてくれた
のだろう。

要は、『私でもおかしく見えるから今はやめておけ。』って事だろ
う。

「と言うわけで、暇なら付き合わない?」

「兄さんに言っちゃいますよー。」

「あー、そういうこと言うなら止めよっかな?折角奢りで回ってあ
げようと思ったのに。」

「すみませんでした!ぜひ同伴させてください!」

殆ど修行に費やして店の手伝いが有事の時だけの俺は、普段から物
凄いい金欠なんだ。奢ってもらえるとあれば全力で継り付いてみせる!

それを分かっている忍さんは、満足げに俺の頭を叩いていた。

うう…格好つかないなまったく…

『あなたとは、本当は戦いたくなかったって言うたら……信じた？』

.....
ありえねえ。

格闘ゲームのモニターに映るのはノーダメージの忍さんの持ちキャラ「ナハト」。

ええノーダメージですよ。まったく手が出ませんでしたよ。
何だこれは？人間業か！？

「いえーい！どう？」

笑顔でVサインを翳してくれる忍さんに、俺は何も返せず乾いた笑みを浮かべていた。

そしてふと思う。
もしかしてクロノ達が俺と初めて戦った時、こんな気分だったのだろうか？と。

ゲーセンでいくらか遊んだ後、たい焼きを買ってベンチに座っていた。

「んー…久々に遊び倒したわね。」

気持ちいい声が右隣から聞こえてくる。相当楽しんだんだろう。俺はおごりで貰ったチーズたい焼きを齧りつつ、横目で忍さんを見る。

一瞬、その笑顔が翳った。

「どうしたの？おねーさんに見惚れた？」

俺が見ていることに気づいて笑みを見せてくれる忍さん。俺はそれに合わせるように笑う。

「心配ですか？兄さんの事。」

「…やっぱり分かる？」

問いかけると、少しの間をおいて忍さんは息を吐いた。

「そりゃね。恭也は強いけど…無敵とか絶対とかって無いし、命掛けの仕事についてるんだから…やっぱり心配だよ。」

確かにそうだろう。

戦ってる以上絶対安全って事は無いし、不安なのも仕方ない。

御神の剣士を知らない人なら。

忍さんも一度量産イレイン相手にした時に知ってる筈なんだけどな…

「大丈夫です、絶対に。断言します。」

少し驚いた風に俺を見る忍さん。

気休めを言わないと思っていたのだろう。

もつとも、実際に気休めではないが。

「忍さんがもしヘリや戦闘機による空襲や絨緞爆撃の可能性まで心配してるならさすがに胸を張って断言は出来ませんが、それ以外なら…戦車位までならどうにか出来るはずですよ。」

「せ、戦車？」

意外だったのか面食らったように固まる忍さん。

俺はたい焼きを齧ってなんでもないように続けた。

「美沙斗さんに救われた時の戦いから、俺は御神の剣士とずっと過ごしてきました。だから断言できます。あれは人間離れじゃない、戦闘者の中でも上位に入るくらいの異常だ。」

いくら戦闘者であっても、幼少から訓練で通して来た人種でも、それが『繰り返し返されてきた家系』と言つのはそう無い。生き物が進化の過程で、徐々にその姿をより環境に適した形に変えてきたように、兄さん達は『戦闘者として徐々に進化してきた家系』だ。

その最新にして最後の四人。そのうちの三人がいるのに、一体これ以上何がある。

それでも心配と言うなら、通学中に転んで死んでしまつかもしれないとか最早そういうレベルの話になってくるが、誰だってそんな心配はしないだろう。

だから言い切る。

「俺も戦闘者の一人です、絶対大丈夫ですから安心してください。」
断言すると、忍さんは柔らかい笑みを見せてくれた。
一人で会場付近を歩いてたのも、きつと少し心配になってたからなんだろう。

安心してもらえて何より…

あ。

「どうしたの？速人君。」

表情に出たのだろう俺に対して、忍さんは不思議そうに問いかけてきた。

あれだけ断言していて今更思いついたことがあったとなっては気になるのだろう。

少し後ろめたいので視線を逸らしてたい焼きを齧る。

「いや…怪我とかじゃないんだけど…」

「ふんふん。」

「告白されたりとかしないかなーと…フィアッセさんいるし、スクールの人たちって皆女…の…」

言ってる最中、異様な空気を感じて俺は忍さんを見た。

笑顔だった。

ただし、なのはの『ソレ』が可愛く見えるくらいに底冷えするような目だった。

「速人君？」

名前を呼ばれたただけだ！落ち着け俺！

だが、それ以上指が一つも動かなかった。

「何か言った？」

俺は全力で首を横に振った。

「そう、ならいいんだけど。」

それだけだった。これ以上は何もなかった。

辛うじて難は逃れたものの…

もう二度とこの手の話題を女子に振るまいと、俺は固く誓っていた。

Side 〉 高町なのは

夜、寝る前にと速人お兄ちゃんとの模擬戦。

私は首にナギハを突きつけられて動けなくなっていた。

「グイータちゃんやフェイトちゃん、クロノ君と違って『勝つか負けるか分からない』位になってきているのに、速人お兄ちゃんには未だに勝てない。」

「単純魔法戦なら負けないのに……」
「自慢にならないっての。俺の魔法戦は雑魚殲滅用だからな。」

物凄くあっさりした様子で言い切る速人お兄ちゃん。

管理局に入ってそろそろ一年になるのに、お兄ちゃんとの距離は全然埋まっていない気がしていた。

それは……いろいろな意味で。

お兄ちゃんは恭也お兄ちゃん達とフィアッセさんのボディガードをする事にしたみただけ……緊張も何も無いいつも通りの表情をしている。

「あの……私にも手伝える事」

「ない。」

言い切る前に止められる。

「言っただろう？命よりも決まりを優先しなきゃならない事だってある、それが組織だって。魔法のないお前なら俺のクラスメイトでも倒せるぞ。」

返す言葉も無かった。

管理局に入ったのに管理外世界で魔法を…ただの事件に使うわけには行かない。さすがに自分が危険に巻き込まれかけた時などの対応についてまでは厳しく言われることは無いけど、それでもその世界にある筈の無い力を振るう事は許可されていなかった。

だけど…だからって大切な人が危険に巻き込まれるのを目の前に何も出来ないなんてそんなの…

ポン…と、軽い音と共に頭に柔らかい感触があった。

「心配するな、誰がやると思ってる。」

速人お兄ちゃんはそう言って笑う。
けど…

「魔法…使うの?」

聞きたくない気持ちはあったけど、聞かなきゃいけない。

速人お兄ちゃんと敵対するなんて考えてもいなかったけど、もし管理外世界で魔法を使いたい放題使って反省する事もなかったらきつと…

出来るなら、『使わない』と約束して欲しい。

「誰かが危険になれば命優先で使うだろうな。」

けど、ソレが無理だってことは分かっていた。

もし規則を守るつもりがあるなら私達と一緒に管理局に入ってもおかしくない。

シュテルちゃんにはお兄ちゃんが無茶する前に止めるつもりだと大見得を切ったのに、こんなにアツサリ危険な状態になるなんて…

「けど、そっちも心配しなくてOK!!」

「え?」

どちらも選べない私の前で速人お兄ちゃんは胸を張る。

「フェイト、魔法使ったって兄さんに負けたじゃん。大概は生身でどうにかできるから気にしないでいいぞ。クロノ達に迷惑かけてるのは趣味じゃないんだからな。」

そこまで言うと、速人お兄ちゃんは真っ直ぐに私の目を見る。
これ以上無い位優しく温かい笑みを浮かべて。

「俺達を信じる。」

ただその一言に、不安が薄らいでいくのを感じる。

いつか、私も…不安に襲われてる人に笑顔を上げられるくらいに強

くなれたらいいな。

S i d e } フ ェ イ ト Ⅱ T Ⅱ ハ ラ ウ オ ン

私は今回コンサートに行けない原因にして悩みの種である事件の調査中だった。

質量兵器の裏取引をしている裏の武器商人の解体。

ソレが、今回の目的だった。
根が深いためとてもじゃないけれど執務官補佐が外れられるほどの
余裕が無かったのだ。

今は構成員の人を捕まえてクロノが事情聴取を行っている最中だったんだけど…

「フェイト、いい知らせと悪い知らせがある。」

クロノが複雑な表情を浮かべて、ブリッジに入ってくる。

「いい知らせは…事件が速く片付きそうだ。コンサートに間に合うかは…ギリギリかな。向こうのスケジュールに少し間があるのならファイアツセさんには会う事が出来ると思う。」

となると、有益な情報が手に入ったんだろう。

構成員を捕まえても末端の人だと切り捨てられて終わるから、こういう調査は大変なんだけど、今回の人が当たりだったみたいだ。

けど、有益な情報が入って悪い知らせって…

「悪い知らせの方なんだが…彼等は完全自立駆動の機械型傀儡兵をよりにもよって管理外世界に売り出していた。」

「なんて事を…」

管理世界はそれなりの交流もあって当然技術もある程度の格差はあってもどうにかなるレベルにおさまっている。でも、管理外世界となるとそういうわけにも行かない。

「取引があった世界は…第97管理外世界、地球。」

声を出す事もできなかった。

地球に…アレが？

現在の地球上の兵装で対処できるレベルをどう考えても大幅に上回っている。

更にその傀儡兵は人間より一回り大きいサイズのもので、どこにでも使える…

仮に襲われた人が銃火気を持っていても、地球の武装じゃまともに効果があるものは殆ど無い。

「僕達は組織の解体、殲滅が先だ。調査は専門の人員に頼む事になる。」

「っ！！！！」

泣きそうだった。

今すぐにも地球に飛んで、探し出したい気分だった。

もし海鳴だったら…皆ただじゃすまない。

魔力反応の一切出ないあの傀儡兵に奇襲でもされたらいくらののは

達でもひとたまりも無い。

けど…

「分かってる。」

「フェイト…」

「組織…だから。私は速人に言われて、それでも選んだから。だから、大丈夫。」

途切れ途切れになりつつ言うと、お兄ちゃんは私の肩に手を置く。

「焦らないように本気で片付けて…早く地球に戻ろう。」

「うん。」

どうか…何ごともなく終わりますように…
願っても仕方ないとは分かっていたけれど、願わずにはいられなかった。

S I D E O U T

第十一話・さまざまな不安（後書き）

問題の同時発生。

行動制限で何もできないと言うのは歯がゆいでしょうが、そこは受け入れてるので堪えました。

御神の皆様が戦車がどうにかなると言うのは一応考えてみました。

？ 神速で接近

？ 主砲砲身を『徹』で歪ませる等で撃てなくする。

？ 捕まりつつ切れそうな部分を『徹』で切断。あるいは砲口に投擲を行い弾を誘爆させる

機銃のような装備が無ければサイズ次第ではいけそうな気が…恐ろしい一族。

第十二話・誰が為の剣

第十二話・誰が為の剣

「あ、マスター！恭也達だよ！！」

リビングで楽しげにはしゃぎながらテレビを指差すレヴィ。

画面にはフィアッセンさんを囲うようにしている兄さん達の姿が時折映っていた。

おーやってるやってる。

「見ていていいのか貴様は。合流する予定なのだろう？」

「そろそろ出るぞ、心配してくれてありがとな。」

「っふん！一々前向きなのは分かったからとつと行け！！」

追い払うかのように手を振るディアーチエ。
照れてる照れてる。

「マスター、分かっているとは思いますが、いざとなれば魔法も使
用して下さい。」

「元々死人が出そうなら遠慮する気はないさ。」

シュテルの心配は俺の事だろうが、俺はそれ以前に誰かがやばそう
なら使える手は全て使つつもりだった。
管理局の皆には悪いが命優先だ。

「それに…御神の剣士3人にヒーローまで参加して、悲劇なんか起
きるかよ。」

笑顔で宣言すると、シュテルはそれ以上何も言わなかった。内心呆
れてるんだろうが、気にしない気にしない。

「主。」

「フレリア、どうかしたのか？」

出ようとした俺に近付いて来たフレリアが俺の手を取って魔法を使
う。

軽い疲労回復程度の微弱な回復魔法。

「はやてから頂いた祝福の風の銘、どうか主の祝福となりますよう
…」

祈るように手を握るフレイア。

祈る程心配しなくていいとも思ったが、止める気になれなかった。

少しして、手を放すフレイア。

「最高だ…後は任せる！」

暖かさの残る手で親指を立て、家を出た。

見えない手に支えられているような感じがする。
負ける気がしない、どんな奴が相手だとしても。

Side ｝ エリス Ⅱ マクガールン

「車に乗るのも大変だね。」

群衆を掻き分けるように空港を抜けて車に着くと、美由紀がくたびれたような声を出す。

「頼りにするつもりなんだ、これでへばらないでくれよ。」

「それは大丈夫。」

一応言っでは見たが、頼もしい返事が返って来た。

「俺より弱いがこの二人もかなり腕の立つ剣士だ、そんな心配はいらんさ。」

「待て、俺の方が勝率高いだろう。」

士郎さんと恭也が睨み合う。…護衛がこんな調子で大丈夫なのだろうか？

少しして会場に着いた為、車から降りる。

現地にもう一人協力者がいるという話だが…

二刀を腰にした子供が立っていた。

「フリーズ！」

すぐさま声を掛けて銃を抜くが、その子供は身構えもせず歩いて来た。

「待つてくれエリス、その愚弟が現地協力者だ。」
「な……」

警戒する私に恭也が放った一言は、私を硬直させるに十分な台詞だった。

驚き戸惑う私の前で、その子供は片手を出してくる。

「高町速人、剣士見習い。趣味はヒーロー探求、特技は暗殺だけど廃業したから暗……殺さない程度に動きを止める。よろしくエリスさん。」

「ま、待て！？今聞き捨てならない台詞が……」

私の前で差し出した腕を所在無さげに上下させる子供：高町速人。

『こんな子供が何故協力者だ』とか、『暗殺って一体なんだ』とか、気が動転していたが……

私は渋々その手を取った。

明らかに子供の仕草な筈なのだが、よく分からないまま安心感を与えてくる恭也と同じ空気を少し感じてしまったから。

握手していた手を離すと、フィアッセに向かう速人。
フィアッセの方も速人に微笑みかけて握手を交わす。

「速人、わざわざありがとう。ガードよろしくね。」

「軽く百人力の兄さんには及ばないが、五十人力ぐらいはやってみ

せるから任せとけ！！」

自分を指差して胸を張る速人。

どう見ても子供だ。力を謳う辺りは特に。

なのに…何故かそれを告げる気になれなかった。

Side 月村すずか

私は…どうしてこんな生まれ方をしたんだろう。

何にも気にせず明るく過ごせる友達がいると、時々よけいにそう考
えてしまう。

例えば今のよう…待ち合わせに行こうとしていただけなのに捕ま
ってしまった時とか。

「…私達をどうする気？」

「使い道は色々あるさ。抱ける位リアルな戦闘人形に盛りのある吸血鬼何てなあ…」

車を運転しながら嫌な笑い方をする誘拐犯。その意味を私は既に知っていた。

夜の一族には発情期がある。

保健で身体の仕組みを教わるのと同時に、私は色々とお姉ちゃんに教えて貰っていた。

正直知りたくなかったけれど。

しかもそれを知ってる人に捕まるなんて…
私は後ろ手に拘束された状態でどうにかできないか考える。

ポケットに携帯電話が入っていた。

私はストラップを引っ張ってどうにか携帯電話を取り出して、履歴からなのはちゃんに電話をかける。

「お姉ちゃん…私達どうなるの？」

「心配しないで…きっと大丈夫だから…」

私は特に聞く気も無かったけど不自然にならないように声をかける。いつ繋がるか分からないけれど、こっちの状況を知ってもらうためだ。

「そんなに心配しなくても大丈夫さお二人さん。何しろ死ぬほど気持ちよくなるだけなんだから。酷い事なんて何も無い…ってね。」

卑下た嗤い方をするその人に、否応無く不快感を煽られる。

「でも残念ね。よりもよって私達を誘拐するなんて。」

お姉ちゃんも私が携帯をかけている事に気づいたのか、明確なキーワードを漏らす。

誘拐犯は楽しそうに笑う。

「何がおかしいの？」

「確かに、優秀な暗殺者が知り合いにいるものな、君達は。」
戦士とかじゃなくて暗殺者と言った所に違和感を感じる。
お姉ちゃんもそうだったのか、少し表情が翳った。

「けどなあ…人間が勝てる訳ねえさ！あんた達自慢の機械人形もアツサリ五体ばらされたつてのに、まだただの人間に期待してるのか！？とんだお笑い種だ！！」

「ノエルさんは人形なんかじゃない。」

「名前をつけて人形遊びは子供の内に卒業しておくべきだなお嬢ちゃん。」

言っでは見たけど、無駄だった。

人ですら誘拐するくらいなんだから当然と言えば当然だけど…

「そうさ、今度こそ上手いく…今度こそなあ…」

信号で止まると振り返る誘拐犯。私は慌てて携帯を切った。

案の定取り上げられた携帯を見ながら、誘拐犯は笑う。

「なるほど急に喋りだすと思ったら…残念だったなあお嬢ちゃん。車両に電波妨害かかっているから意味無いんだよねえ。」

笑いながら私の携帯電話を助手席の床に放る誘拐犯。

「いけない娘にはお仕置きをしなきゃならないかな？」

「すずかに手を出さないで、私が代わりになるから。」

「お姉ちゃん！」

私は結局、何も出来なかったばかりかお姉ちゃんに負担をかけてしまっただけだった。
私は自分の情けなさに俯いて…

『電波』妨害？

現地協力者となるに当たって管理局の人と連絡を取る都合上、携帯電話も当然異界から連絡を取れるような技術が使われている。

…諦めるには…まだ早い。

祈る事しか出来ない身だけど、信じて待つことにした。

S I D E O U T

会議中になのはから念話が届く。
やけに焦っているので何事かと思ったら、すずかが誘拐されたとか
言い出した。

『はあ！？何でそんな事になった！！』

『わかんないの！でも待ち合わせに来てないと思ったら電話がかか
つてきて、出ただけけど変事が無くて、代わりに誘拐とか大丈夫と
か声がして、知らない男の人の声もして、急に切れて…』

この手の大騒ぎになる様な悪戯は忍さんもしないし、すずかとなの
はは論外。

むしろ誘拐されるに当たる理由がある。

『私…魔法…使えないから…どうしよう…』

今にも泣きそうなのを持ち前の強さで堪えている声がする。

…まったく、俺に連絡しておいてどうしようも何もないだろうが。

『答えは簡単だ、お前は普通にコンサートを心待ちして楽しめ。』

『でも！』

『俺達を信じる。』

目いっぱい自信を持って宣言すると、なのははようやく落ち着いてくれた。
不安が拭えたわけでは無いだろうが、少なくとも俺や兄さん達の実力は信じてくれているようだ。

なら当然、その期待に答えるまでだ。

「兄さん、ちょっと来てくれ。話がある。」

俺はいぶかしむ兄さんを連れて、警備の話し合いを抜けた。

兄さんになのはから聞いた話を伝えて、すずかの携帯の位置を探れる魔力探知機を渡す。

「行ってくれ、こっちは俺達でどうにかする。」

なのはに自信満々に言った手前俺が行かないのもどうかと思うが、忍さんを助けに行くなら兄さんが行くほかない。

と、そう思っていたのだが…

「駄目だ。」

俺が促すと、兄さんは否定の意を返して来た。

「俺はファイアツセのガードでここにいる、守ると約束した者を放り出して私事に走る事は出来ない。」

「じゃあ忍さんほつとくのかよ。」

「だからお前に頼みたい。お前は防衛より追跡、奇襲の方が得意だろ？それにSPの人達にまだ信用されきっていないお前の方が動いても士気に影響が出ない。」

あくまでも淡々と語る兄さん。

そうだな…確かに効率的だ。

「ふざけんな。」

吐き捨てるように言うと、兄さんの目が少し細くなる。

「仕事大事もいい加減にしろよ、兄さんが行かなきゃ誰が行くつてんだよ。」

「何？」

「御神の剣は大切なものを護る為にあるって言ったのは兄さんだろう、忍さんどうでもいいのかよ。」

痺れるような空気を…威圧感を感じる。

すぐにでも駆け付けたいのを私情だと判断して堪えて受当な選択肢を考えたんだろう。

「護るのは遊びじゃない、お前の勝手な理想を押し付け」

「忍さんを！兄さんが護らなかつたら！！一体誰が護るって言うんだよ！！！！」

殴られて、首が横に逸れる。が倒れてはやらない。

「分かるよ、行きたいの我慢してるのくらい。だけど、自分を抑え込んだ剣が何処まで役に立つんだよ！それに、ガードの仕事は誰でも出来るけど！忍さんが待ってるのは兄さんじゃないのかよ！！自信無いのか！？」

兄さんの言いたい事も分かるは分かるから、あくまでうつたえかける形になる。

だが火に油を注ぐ形になり兄さんは余計かたくなに…

「そこまでだ。」

なる前に、父さんが間に入った。
やっぱり俺が止められるかと思っただが…父さんは兄さんに向き直った。

「恭也、いいからさっさと行って来い。」

「父さん？」

「惚れた女を助けるのに理由はいらん、男だろ。」

俺みたいにグダグダとした内容ではなく、断言するような台詞。

「俺を誰だと思ってる、ここは任せろ。ほら！」

言いながら兄さんの背中を平手で叩く父さん。兄さんは少しだけぐらついで、俺と父さんを見る。

「…ファイアツセは頼む。」

「合点承知！！」

笑みを交わしあうのは一瞬。兄さんは常人を遙かに上回る速度で駆け出した。

と、会議場から姉さんが出てくる。

「人海戦術はSPの人がとるから私達は怪しい人の発見と撃退だつて。恭ちゃんは何？」

「一悶着あつて片付けに行った。」

それだけで何となく察してくれたのか、姉さんはそれ以上聞いて来なかった。

にしても…

「珍しく父さんがかつこよかった。」

何というか『漢』って感じだった。

だが、当の父さんはオーバー気味に胸を張る。

「馬鹿野郎、俺はいつでも格好いいだろう。」

普段からこういう台詞が出てくるから、大人気ないんだよなあ…

俺は苦笑交じりにそんな感想を抱いていた。

第十二話・誰が為の剣（後書き）

拘束までしておいて携帯電話も抜かない誘拐犯（汗）

調子に乗っていると細かい事に気づかない事はあるので色々と気を
つけましようという事で…

いろんな作品で長い理由や細かい理由での戦いが増えてきてる気が
しますが、今回の土郎みたいな単純なものも中々いいと思っております。
こういうの、芯がぶれないので。

第十三話・総てを護る為に

第十三話・総てを護る為に

Side) エリス「マクガーレン

ファイアッセのガードについて廊下を移動中、それは起きた。

金髪の女性が袋に包まれていた長剣を手に駆けてくる。

「フリーズ!!」

私が放った銃弾は、『消えた』女性に回避されていた。

どっどっど...

私はあたりに意識を払い…

「そこっ！！」

フィアッセの背後に迫る影に向かって銃を連射。
だが、影はそれを跳躍して回避した。

速すぎる…動きが人間のものじゃない！

着地した女性はコートからナイフを投げ、それは一直線にフィアッセに向かう。

まず…間に合わない！！

最悪の光景を想像した私の目に…

投げられたナイフを掴む手が見えた。

「はいそこまで。」

「速人…」

フィアツセの前に速人が立っていた。

いつ来たのかも分からなかった、つまりそれは…

彼もまた、私達の理解の及ばない領域にいる事を意味している。

速人は掴んだナイフを無造作に床に放り投げる。と、少しの血が後
をなぞった。

素手で掴んだのか…

「手は大丈夫なのか？」

「掴んだだけじゃ深くは切れないもんです、投擲用みたいですね。」

事も無げに言い切ると、速人は腰の剣を抜いた。

「フィアツセさんを連れて行ってください、コイツは俺が引き受け
ます。」

「っ…」

無茶だと言いかけて口を閉ざす。

彼に『無茶』ならば私達には『無理』だ。

悔しいが…この10を過ぎた程度の少年は、私達より遙かに強い。

しかし、それでも一人で残る必要は無いと思ったのだが…

「誘拐が目的の筈なのに殺しに来たコイツはおそらく別口で、本命がまだいる筈です。」

そう言われては返す言葉が無かった。

私達の目的は、あくまでフィアッセとその周辺のガードなのだから。

「手伝いは余程暇になったらでいいですよ。」
「…すまない！」

あくまで軽い速人を信じて、私はフィアッセを連れてその場を離れた。

S I D E O U T

「ちて…芝居はもういいだろ、『お兄さん』。」

告げると、女性の人影は長い金髪を掴んで外し、ロングコートを脱ぐ。

中から現れたのは、紫色の髪をした白い服装の男だった。胸元に下げた十字架が神父の様にも映らせる。

もっとも…

異様な殺気と手にした剣のせいであつたかそんな雰囲気は無かつたが。

「御神…か？それにしては子供過ぎるが…」

いきなり御神と言出す男。

裏の世界の上滅びた御神の名を知ってる他所の戦闘者か…厄介極まらないな。

「半分あたりだ、見習いだよ。」

「そうか…本物がどこにいるか吐けば見逃してやってもいいが？」

圧倒的に上から目線の男を鼻で笑つ。

「馬鹿言つてんじゃねえよ。裏の世界で機密漏洩するくらいなら自

害してでも情報を漏らさないってのは鉄則だろ？」

言い終わると男は軽く息を吐いて…

駆けた。

尋常じゃない速さで迫る男の打ち下ろしをかわして左脇腹を狙った右の突きを放つ。

男はそれを難なくかわして横薙ぎに剣を振るう。

俺はそれを左の刀で受けて…

受けきれない事を悟って咄嗟に後方に跳躍して威力を流した。

地面を滑るように着地した後ナギハを構え直すと、男は笑みを見せる。

「見習い…ね。少しは楽しめそうじゃないか。」

「バトルマニアかよ、俺相手に負けても後悔すんなよ。」

道理で御神の剣士に会いたがる訳だと、今更ながらに納得した。

だが実力は本物だ。

はつきり言っつて俺より数段上、兄さんと同等かも知れない。
物取り程度にこんな奴までけしかけるなんて…

とは言え、泣き言は言っつてられない。

兄さんに…大切なものを護るために忍さんの下に向かわせたように、俺にだっつて此処に残つた理由がある。

俺はヒーローを目指してるから…親しい云々以前に、総てを護るつもりでいる。

だから此処に、無関係な人たちが巻き込まれかねないこの場所に残つた。

だっつて言っつのに…コイツ一人に負けていられるか！

少しばかり引けた気持ちを切り替えて、再度男と切り結んだ。

S i d e 〉高町士郎

地下駐車場には、悲鳴が響き渡っていた。
と言っても、その全てが俺の所業なのだが。

「があ…っ！」

次々と倒れる武装した男達。
と言ってもまあ無理も無い話だが。

まず、神速を捕らえられるのは同質の戦闘者、それもかなり上位か、
薬物による強化でも施されていないならば不可能。
まして、まったく障害物の無いところならともかく、止まっている
車や柱の陰を利用して間を置く事もできる現状で、銃持つてる程度
の連中に負ける事は無い。

車の陰から身を躍らせた俺は、鋼糸で固まっていた二人を括り、『徹』で肺を強打し気絶させる。と、視界の端に銃を構えている相手が見えたので飛針を投げると同時に跳躍。手の甲に刺さった針の痛み硬直している男に接近して一閃。

残り後は…一人か。

俺は芸も無く銃を構えている男に対して接近して、腕を絡め取って肘を折る。

悪気は無いが、痛み悶えている男の首に手刀を入れて気絶させた。

「ふう…まあブランクがあるとは言え完成した御神の剣士に十数人で挑んだ馬鹿さ加減を呪ってくれ。」

本気でやれば100前後でも相手に出来る俺達相手にこの人数は無謀としか言いようが無い。

もつとも…ブランクのせいもあって神速を多用するのが何気に辛かったが。

「それにしても…やっぱり全員拘束しておかないとまずいよな…」

俺は頭を抑えつつ、全体を見やる。

多少なり斬りつけたりもしたが、基本的に致命を負った者はそうい

ない筈だ。

殺してしまったても問題は無かったというか、本来そうすべきだったのだろうが…

速人の馬鹿がうつったのか？

下っ端で足しにもならんだろうが『龍』かその関係者だろうし美沙斗に情報をくれてやれる。
何より特に殺さなくても余裕持ってやれた訳だから気にする事もない。

とりあえず手近な奴から鋼糸で縛りつつ、夢物語を抱く前の速人を出し出す。

あれは、恐らく暗殺者として完全で、完璧に正しい姿勢。
敵に対して何の感慨も殺意も敵意も抱かず、ただ作業のように命を刈る。

だが同時に、戦闘者に囲まれて育った俺でも見た事が無いほど、人として大事なものがなくなっていた。

…ま、そんな人間止めた状態から抱いた記念すべき夢なんだし、親として少しくらい付き合っつてやるのも悪くない…か。

「あ、そうだ。手が空いてる人がいたら手伝ってもらおうか。」

どうせ戦闘員が必要ななら俺が戦った方がいい訳だし、他の人にこいつらの事後処理頼んだ方が無難だろう。

俺は思いつつ無線通信機を手を取った。

S I D E
O U T

「はあぁっ…！」

振るわれる剣閃。

大振りの一撃には間違いないのだが、魔導師と違ってこの距離で戦い続けるためのものになっている。

俺は間一髪で身をかわして…

触れていない筈の床が裂けたのを見た。

ちょっと待て、金属音は間違いなくしなかった。

真空刃か？

つまるどころ、紙一重で『下がって』避けたらばっさり切られる事になる。

ただでさえ長剣で間合い長いのに何てヤローだ！！

「っそ！！」

斬りかかるが、アツサリ受けられる。

返す刃が向かってきて…

俺は二刀を交差させてその一撃を受け止めた。

「止めたか…子供にしては楽しめる。」
「言ってる！」

袖に仕込んだ針を使って投弾丸を放つ。
身をひねるだけでかわした男は一気に駆けて来た。

苦も無く長剣を振るう男。
だけど、こっちはいちいちあんなもの受けてたら命が幾つあっても
足りない。

横薙ぎの一閃を俺は屈んで避ける。と、同時に刀よりも長い鋼線を
振るう。
足を取る為に振るった鋼線を男は跳躍でかわす。

よし…これで隙が…

「終わりだ。」

瞬間、天井に突きの態勢で足をかけている男の姿が映る。

隙が出来るどころか攻撃態勢かよ！！

回避が間にあわない！！

天井を蹴って迫る男の突きを俺は…

右手で逸らした。

俺の右肩を掠めた剣が地面に深々と突き刺さるが、軽やかに着地した男はそのまま横薙ぎの一閃に切り替えてくる。

バク転でかわした俺に対して振り下ろされる一撃。

徹を打ち合わせたが、それでもはじかれて膝を突いた。

つぶねー！レン師匠の流し方覚えてなかったらやられてた！！

晶師匠の重い突きを片手で捌くレン師匠。

小柄な身体で力いらずで扱うそれは絶対使えろと思って習っておいたけど…

こんな間一髪で命を繋げるとは、心底感謝だな。

「中国拳法…それもものにしてるみたいだね、面白い。」

「使えるものは何でも使う。って言うのが、戦闘者の心得だろ。」

とは言え、生き繋いだけじゃしょうがない。

あんまり怪我をさせたくは無いんだが、はっきり言って加減なんかできる相手じゃない。

俺はナギハを納めてただ静かに立ち上がった。

「抜刀術：ようやく本気か。」

「最初からいっぱいっばいだっての。」

「日本固有の奥義…剣を『鞘に収めて』放つ技。見せてもらっよ。」

コイツは強い。見せるも何もこれで決めなきゃまずい相手だ。

静かに構え、時を待つ。

打ち下ろしの一閃が迫る。

当たるか否か、その一瞬に…俺は左の刀を抜き放つ。

逆手に握った左の横薙ぎで、打ち下ろしの行く先を逸らす。

貫…つた!!

我流奥義・聖十字『クリスクロス』。

残った右の一閃で丸見えの右腕を斬り落とす！！

縦の一閃を以って十字を描く為に放たれた右の剣閃は…

左手に握られた短剣によって止められていた。

長剣で防ぐ間もかわす間も無かった。だから左手に仕込んだ暗器で

止めた。言ってしまったえばそれだけだが…

反応が速過ぎる。

全力でバックステップを行い距離をとる。

そんな俺の胴を斬りおとすかのように右手によって握られた長剣が振るわれた。

数瞬遅れていたら体がバツサリ切裂かれていただろう一撃を紙一重で避けて…

着地と共に胸元から鮮血が舞った。

「っ…」

真空刃を考慮してなかった。

幸い致命と言うほど深い傷では無かったが…

俺はナギハをしまいながら男を見る。

男は短剣を仕舞い両手で長剣を握って俺を見ていた。

右腕が僅かに裂けているが、ただのかすり傷で行動に何の支障もないだろう。

これはかなりまずいかもな…

「…傷を負うのは久しぶりだ、中々楽しめるじゃないか。」

男は笑っていた。

怒りでも手傷を負った俺を嘲笑うのでもなく、純粹に物凄く楽しそうに笑っていた。

コイツ…本気で重度のバトルマニアだなあ…

「見習いでこれかあ…やっぱり楽しそうだなあ御神は…ふふふ…ははははは！」

楽しそうに笑う男を前に、俺は今から俺が打てる手を考えていた。

第十三話・総てを護る為に（後書き）

状況が状況だけになのは達魔導師組が出せない（汗）
もう少しだけお待ち下さい。

ちなみに（まだ名前出てないので）男ですが、ホントに強いです。
どれ位かと言うと原作で神速凌げる位。
神速、描写的には消えてるって言うのに…

第十四話・決着

第十四話・決着

S i d e 〉高町士郎

「寝てる間に連れ出された？」

『ごめん…』

美由紀に通信が繋がったはよかったが、肝心のフィアッセ嬢がさらわれていた。

しかも眠っている間にと言う事らしい。

「どついつ事だ？」

『それが…霧に包まれて気づいたら眠ってて…』

薬品なのかとも思ったが、そんな一瞬で昏倒させられるような都合のいいものかと思いつかない。

新開発したものと言うなら霧を吸った全員が死ぬものでも作りそうだし、そもそも薬品関係をそう簡単に持ち込めるはずも無い。

『可能性程度なんだけど…』

「何だ？」

『魔導師…なんじゃないかな…って。霧に包まれる前に光も見えたし。』

慎重につむいだ美由紀の言葉が本当であるならばつじつまは合う。

確かにもし魔導師だとすれば抵抗もせずに一瞬で眠りについた理由にはなるだろう。

『なのは達に言う？』

「確証がまったく無いのに此方の事件に関わって後で面倒な事になるとまずい。とりあえずはフィアッセ嬢を探すぞ。それに…」

少し間を置いて、続ける。

「屋内なら魔導師相手でもどうにかできるだろ。」

『そうだね…分かった。』

そうと決まれば急がなければ…

『あ、と。そうだ。速人が凄腕と戦ってるみたいなんだけど…』

「ほっとけ。」

『早っ！…いいの？』

「余程やばい相手なら逃げてくるだろ。それに余裕があるならともかく、今はフィアッセ嬢が先だ。」

そこまで言って通信を切る。

神速が使えないとは言え剣士としての腕前は俺達に迫る域にいる速

人が楽に勝てない相手となると、御神と同等の戦闘者と言う事になる。

美由紀に心配させない手前言い切ったが、少し不安はあった。

フィアッセ嬢は何かするから、死ぬなよ速人…

S i d e ー グリフ

本当に久しぶりに傷を負った。

それがこんな子供で、しかも御神の見習いだと言う。

本物はもっと楽しめるとなると、待ち遠しくて仕方が無い。

でも同時に、目の前の子供が次に何をするのかも少し楽しみだった。

殺す気が感じられないが、同時に人を傷つける事に躊躇いを感じない。

戦闘者なら敵は殺す。

殺しを避けるものは傷つける事を躊躇う。

普通はそういうものなのだが…面白い奴だ。

と、壁を蹴り跳躍した彼は空中で蛍光灯を外して投げつけてくる。

「これでも…くらえ!!」

受ければ割れて軽く爆発する。ガラス片で目でもやられたら事だから僕はそれを避けた。

と、柵を超えた彼の姿が見える。

落ちるかと思つたが、彼は手すりを掴むと、姿を消した。

下から着地音がした事を考えると、下の階に下りたのだろう。

…逃げた？

少し興が削げたけど、それならそれで御神を探すだけだ。

別に構わないと思ひ直して…

違和感を感じた。

逃げたのなら、着地音だけしか聞こえなかったのは何故だ…

瞬間、血の匂いと僅かな風を感じて、僕は背後に向かって剣を振りぬく。

彼はそこにいた。

僕の右膝を彼の左手の刀が貫いて、僕の剣が彼の胴に向かっていく。

片手で僕の斬撃を防ぐ事はできない。僕の…勝ちだ。

S I D E O U T

俺を吹き飛ばした男はそのまま姿勢を崩して倒れこんだ。

一方で俺も男の斬撃を止めきれずに壁に叩きつけられ、脇腹から血を流していた。

やったことは単純で、下の階に下りた段階で完全気配遮断を使って戻ってきて背後を取った、ただそれだけの事だ。

けどまさか気づかれるとはな。御神と同等クラスの戦闘者ならそれも無理は無いが…

俺はあらかじめ立てておいた鞘を見る。

デバイスなのに罅が入っていた。どういう威力だこいつ…

気づかれた時、片手で防ぎきれない以上足しにはなるだろうと思って縦にしておいた鞘が、本気で生命線になるとは思わなかった。

脇腹に食い込んだ部分もあるため多少切れてはいたが、両断されなかつただけでも御の字だろう。

「まだ…もつと…もつとだ…」

気づけば、男は長剣を杖代わりに立っていた。左手にしまっていた短剣を握っている。

俺はナギハを鞘に収めて…右の鞘が壊れていて入らないので地面に刺して立てて、男に近づく。

嬉しそうに笑った男は左手の短剣を振り上げて…

俺は残っていた左足を払って男を転ばせた。

「ぐ…もつとだ…もつと」

「んの…馬鹿！…！」

まだ何か言ってる男の耳元で怒鳴りつつ、その身体を鋼線で拘束していく。

手足共に使えなくしたところで俺はそいつと向かい合った。

この状況で子供みたいな強請り方をすると言う事は、恐らく…

昔の俺と同じ様な環境で育って、何も知らないままその道を極めてそれ以外好きとか嫌いとかも考えた事無いような生活し続けて来たんだろつ。

大人と子供の差は肉体と経験。だから子供っぽく見える強請り方を
するこいつは『普通の事を普通に経験していない』と言う事実には
ならない。

父さんとか兄さんなら言い訳無用と言い切るのかもしいれないが…俺には言えたものじゃなかった。

殺すのが当たり前なんて思ってた時期がある俺に、『説教』なんてお門違いもいい所だ。

「お前名前は？」

「……グリフ。」

怒鳴られた経験が無かったのか、さっきよりはまともになった目で俺を見据えるグリフ。

「お前がこのまま裁判受けて刑務所出て、それまで誰も殺さなかつたら…お前が戦いたがってた御神の剣士と戦わせてやるよ。」

「何？」

御神の剣士と戦えると聞いて目の色を変えるグリフ。
本気でバトルマニアだなコイツ…

「約束する。お前は守れるか？」

しばらく間があった。

落ち着かないのが見て取れるほど目を血走らせていたグリフは、やがて諦めたように息を吐いた。

「お前の名前は？」

「速人。」

そう言えば俺のほうも名乗ってなかったな…と今更ながらに思いな

から答える。

グリフは俺を見ながら笑みを見せた。

「覚えておくぞ速人。もし違えたらその時は…」

「無い。少なくとも俺からは。お前はどうか？」

「覚えておくと言った。その約束、僕も守ろう。」

それを聞いて俺は笑みを返す。

とりあえず…一件終了…か。

S i d e 〉 高町美由紀

「くっ…まさかこんな時に呑気に眠ってしまうとは…」

「仕方ないですよ、とにかく今はフィアッセを追わないと。」

階段を数段飛ばしで駆け下りながら、悔やむエリスさんを励ます。

…本当は仕方ないも何もないのだけど、もし相手が魔導師なら一般の人は本当に仕方ないですんでしまっただけだと思っ。

何しろ、この世界の技術じゃないんだから。

とは言え、フィアッセが連れて行かれた事自体はそうそう軽く言っ

わけにも行かないため、私ははやる気持ちを抑えながら駆けていた。
やがて、階段も終わり開いた扉に差し掛かると…

発砲された。

辛うじて回避した私は刀に手をかけるが…

「ストップだ、そこまでだよサムライガール。」

妙な呼ばれ方に一瞬戸惑ってしまったが、私は動きを止める。
左手に銃を手にしていた男は、右手にスイッチを持っていた。

「このスイッチは軽いからね…打たれても斬られても、スイッチを
押すくらいの事は出来る。コイツの威力の程は…エリス、君はよく
知っているだろう?」

隣でエリスさんが悲痛な表情を浮かべる。
男の話とエリスさんの様子から見て、父さんが負傷した時の爆弾と
同質の起爆装置の類で間違いない。

そしてフィアッセは、もう一人の男に捕まっつていて、なのは達のデ
バイスのような妙な杖を持っていた。

やっぱり魔導師…

一足で飛び込もうにもフィアッセを抱えた魔導師が直線上にいても出来ない。

やがて、魔導師は手にした杖を振り上げる。

「もう少し眠っててもらおうか。」

そう言ったフィアッセを抱える魔導師は詠唱を開始する。

このまま無策に動いて爆弾のスイッチを入れられたらたまらない。でもこのままじゃ何も出来ない…

考えている私の前で…

スイッチを手にした男の手が宙を舞っていた。

動くなら今しかないと判断した私は、刀を抜いて神速に入る。

御神流・裏 奥義乃参

『射抜』

杖を手にしている手首を貫くと、杖を手放す魔導師。

詠唱が止まったのを確認したところで肺に向かって全力で『徹』の拳を叩き込む。

特殊な防護服だろうし、これ位やらないと利かないだろう。鈍い音がして、魔導師は前のめりに崩れ落ちていった。

同じように、片腕を切り落とされた男も、切り落とした張本人である父さんの手で昏倒させられていた。

「これで…片付いたかな？」
「そうだな。」

大きく息を吐く父さん。
今ここで位しか戦っていない私と違って神速を多用したんだろう。
さすがに疲れて見える。

「コイツの対応は速人に聞いたほうがいいだろう。アイツの応援に
…」

父さんが今後の流れを話す中、通信が入る。

『こっちはきつちり片付いたぜ！手伝いいるか！？』

速人からの通信は、ひとまずの戦闘終了を意味するものだった。
ボデイガードとしてはこれで終わりではないけれど、私達はひとま
ず笑みを交わした。

S I D E O U T

第十四話・決着（後書き）

と言うわけで、今回で襲撃事件は半分片付きました。
次回は恭也側となります。

ちなみに速人、もし魔法知らずに戦っていたら今回負けてます。
デバイスの鞘だから持ちこたえたのであって、普通の刀の鉄鞘だっ
たら…

恐るべし戦闘者（汗）

第十五話・大切なものの為に…

第十五話・大切なものの為に…

姉さん達もとつくに片付いていたようで、今はSPの人たちを爆弾の解除に当たらせているところらしい。

だが、そんな事よりも余程重大な事があった。

「魔導師!？」

『うん…って大声で…聞かれてないよね?』

「それは大丈夫だけど…」

なんだってそんなものが敵にいる?

今重要なのはそこだった。

とは言え、起こして尋問するには姉さんや父さんじゃ無理がある。

デバイスの補助なしで大きなことが出来る奴はそういないとは言え、縛ろうが何しようが攻撃可能なのだから下手に起こせば何があるか分かったものじゃない。

『なのは達に言っちゃった方がいいのかな?』

「あーそうだな、そうし…」

言いかけて、止まる。

忍さんの誘拐とコンサートの襲撃、何でほぼ同時に起こったんだ?

たまたまって可能性も無いとは言い切れないが、コンサートの襲撃はともかく誘拐とかならむしろもっと賑わいの少ない時を狙った方がいい筈だ。

街中これだけ大騒ぎで、なのは達と一緒にコンサートに来る予定まで立っていたのに、そんなタイミングで誘拐する理由は…

コンサートでも事件が起こることを知っていて、人員が分かれる事を狙う位しか…

「悪い、俺すぐに兄さんのところに向かうから後頼んでいい?」

『どっしたの急に?』

「向こうにも魔導師組がいる可能性がある。」

これは本当に可能性でしかないが、もし二つに繋がりがあれば、少なくともいてもおかしくは無い。

「俺なら飛んでいけばすぐだし、可能性とは言えそう言うのがあるって理由があれば魔法使用位許可されるだろ。俺の杞憂だとしても

現地で普通の手伝いは出来るし。」

『うん…分かった。じゃあこっちはなのは達に任せればいいかな?』

「適当なタイミングでそうしてくれ。」

『クスツ…了解。』

暗に「コンサートは聞かせてやってくれ」と意味を込めると、察し
てくれたのか軽い笑いが聞こえ、それを最後に通信が切れる。

さて…と。

『不可視飛行なんて芸当出来るんですか?』

「さあ?とりあえず音だけは消して飛ばうと思う。」

『クロノ達に怒られますよ。』

「違法魔導師がこっちで犯罪やってる時点で向ここの怠慢だ、俺が
怒られる義理は無いさ。」

ナギハと呑気に会話してる場合でもないので、外に出た俺は出来る
だけ見つからないように考慮しながら空を駆けた。

待ってるよ、兄さん。

Side 〳 月村忍

車は船着場の駐車場に止まる。
私とすずかはそこで降ろされる。

正直、このモヤシ男一人なら全力で行けばどうにかなる自信はあった。

夜の一族は血を使用した特殊能力の他に高い身体能力を持つから。
だけど…男が使っている機械兵器はどうにもならなさそうだった。

「後ろのバラした人形を運び出せ。」
『了解。』

男の命令で、私達の後ろの席から降りた謎の機械兵器がトランクを開けて、五体をばらされたノエルが入った袋を持ち上げる。

右腕から伸びるブレード、左右の腰にかけられた妙な銃、飛行用のバーニアを背中に搭載した、『明らかにこの世界の科学を逸脱した機体』。

銃も明らかに小型マシンガンといったサイズなのに、放たれるのは光の塊で、着弾地点の跡を見る限りだと単発で人間が死ぬだろう事は、ノエルが倒された戦いでわかった。

これがなんなのかは分からないけれど、一つ言える事がある。

この機械は、人間じゃどうしようもない。

だから…

「ん？なんだあれは…」

その姿を見た時悲しかった。
けど少し嬉しかった。

どうしていいか分からない気持ちに振り回されながら、私は彼を見る。

「忍を…放せ。」

闇に溶けるような黒衣に身を包んだ恭也が、二刀を手に私達の前に立っていた。

S i d e 〉 高町恭也

探知機の反応が船着場へ向かうのを讀んだ俺は、法定速度に触れつつ車をとばした。

現地に着くと、ちょうど忍とすずかが降りた所だった。そしてその後ろに正体不明の機械が、一人一人入りそうな大きさの袋を担いでいた。

ノエルさんの姿が無い所を見ると恐らく…

「忍を…放せ。」

俺は出来るだけ冷静になる様に努めて告げる。
男はそれを聞いて笑う。

「出来る様だがなあ…だったら尚更コイツから逃げるのが無駄って

分かるだろ。それを…放せ？馬鹿か。」

言いながら背後の機械を指す男。

見た事もない材質や技術で作られたのであろうその機体が、ノエルさんを『無傷』で倒したとなると…

かなり厳しい相手なのは間違いない。

「駄目恭也逃げて！この機体ノエルでも」

「逃がす訳ないだろうが…殺せ。」

男の命令で銃を手にした機械兵器は、即座に俺に狙いをつける。射線上を外し接近を試み…

既に俺に二発目の照準が合っていた。

神速。

けたたましい破壊音を背に、俺は辛うじて建物の影に身を隠す。
だが、ただの銃弾と違い連射されれば普通に貫通する。

どうするか…

考えている暇も無い。

俺は機械兵器の前に躍り出て飛針を投げる。

モニターになっていそうな頭部に向かっていったそれは、障壁を展開する事で防がれる。

障壁越しには撃てないはずと、膜場の光が残っている間に接近して斬りつけるが…

刃が全く通らなかった。

近接距離でよく見れば、へこみの様な光沢があった。

いくらノエルさんでもこんな相手に距離をつめられたとは思えない。となると当たったのは恐らく、炸薬式カートリッジを使用したロケットパンチだろう。

アレを直撃してこの程度のダメージでは装甲部分は徹でも切断出来ない。

右腕が振りかぶられ、一閃される。

嫌な予感がした俺は、受け止めずに神速で避ける。

躲した刃は、深々と地面を裂いていた。

刀で受ければ刀ごと斬られていたかもしれない。

「…はあ…っ…」

再び遮蔽物に身を隠すと、肩で息をしている事に気がついた。

神速を短時間に連発しすぎたか…

このまま戦闘を続ければ敗北は必至。だが、だからと言って攻めても効かない。

手を考えつつ、すぐに隠れられる位置から様子を伺うと…

忍に金的を蹴り上げられた男の姿が見えた。

前のめりにうずくまって声も上げずに身悶える男を見ると、さすがに少し背筋が寒い。

だが、当の忍はそんな事は意にも介さず、俺を狙っている機体を見ている。

「ここまでやっても私に狙いが変わらないって事は貴方を眠らせちゃえば逃げ放題って事かしら。」

確かに忍に狙いが変わる事もなく機械兵器は俺に狙いをつけている。男の身を守るよう命令されていないのか、命令が一つずつしか通らないのか分からないが…

だが、新たに命令できないわけじゃなかった。

「っ…ガキの足を撃ちぬけっ!!!」

瞬間、こちらから狙いを外した機械兵器は、俺から見えない位置に向かって銃を放つ。

「すずか！！！」

忍の悲痛な叫びが聞こえ…

俺は後先を考えるのをやめた。

迷いは捨て、ただ眼前の敵を討つ事だけを意識する。

意識を神速の世界よりも深く深く沈めていき…

駆けた。

其を極めた剣士の前では、全てが零になる。

間合いも距離も…武器の差も。

故に其は奥義の『極み』…

小太刀二刀御神流斬式・奥義の極み

『閃』

刹那、右の抜刀が機体の腕の付根に吸い込まれる。
関節による装甲劣化部分を正確に捉えた一撃は、申し訳程度に守っていた装甲を裂いて亀裂を作っていた。

「っはあっ！！！」

続けて神速の状態で左を抜いて亀裂に全力で突きを放つ。

メキメキと嫌な感触が手に伝わり、左の刀が深々と機体に突き刺さる。

刀を引き抜くと、開いた穴から爆発音とともに煙が漏れた。

音が消える。

やがて動かなくなった機械兵器がその身を傾け始め…

「ひっ…」

その身が倒れる盛大な金属音と共に、静寂は終わりを告げた。

「ひいいいいいつ!!!!」

船に向かって逃げ出す男。

逃がす訳には行かないと追おうとするが、身体が重い。

「待つて恭也！先にすすかを！！」

忍の声に視線を移すと、両足が千切れたすすかの姿があった。
長時間放っておけば失血死しかねない。

身体の重さを振り切って忍とすすかの元まで行く。

「飲ませればいいのか？」

「そうだけど…」

気を失っているすすかには当然首を噛む力などない。

戦闘に使った刀ではどんな菌に感染するか分かったものでは無い為、ナイフを取り出した俺は手首を裂いて、意識を失ったすすかの口に血を注ぎ込んだ。

「恭也…」

「貧血になるくらいの量が必要なんだろう？もし危なくなれば後は頼む。」

いいつつ俺はすすかの足を見る。

それは幻想的な光景だった。

傷口の周囲に噴き出す赤い霧が集まった部分から徐々に千切れた足を繋げ始める。

足が繋がったところで、忍に手首を啜えられた。

「忍？」

声を掛けたが反応されず、代わりに手首の痛みが引いて行く。

最後傷口を舐められると、きれいに塞がっていた。

「助かった、ありがとう。」

素直に礼を言っただけだったのだが…

忍は泣いていた。

「馬鹿…っ。ガード放り出して…」

「気になって仕方なかったからな。遅くなって済まない。」

胸にすがりついて来る忍を力の入らない腕を動かして抱き締める。

速人には謝る必要があるかも知れないな。今、つくづく間に合っ
てよかったと思ってる。

「連絡しよう。リンディさんあたりに連絡すれば…」

この機体の処分も任せられるかもしれない。

そう続ける筈だった俺の言葉はそこで途切れた。

止まっている船から出て来る、停止させた筈の機体の姿に息を飲んだ為。

それも、後に続くように同じ機体が姿を見せ…

全部で四機、その姿を見せた。

俺は手にした刀を見る。

『閃』を叩き込んだ右の刀も、機体内部に突き入れた左の刀も、鞘に納める事も出来ない程傷んでいて、とてもあの機体相手の戦闘が出来る状態では無かった。

第一刀を手にする俺も、神速の多用に『閃』の使用、すずかに多量の血を与えた事による貧血と、刀同様戦える状態では無い。いや、逃げる事すらままならないといった所だろう。

「化物が…これだけいればどうにかなるだろ。」

どうにかなる所かもう打つ手が無い。

…仕方無いか。

「忍、何とか引きつけるから逃げてくれ。」

「恭也！」

「すまない、今の俺にアイツらをとめるのは無理だ。だから…」
「ずっと一緒だって言ったじゃない！」

閃を連発できる人間など聞いたことも無い。

にも拘らず、俺にもっと力があればと思ってしまうのは剣士としての性なのだろうか？

俺は二刀を手に立ち上がる。

「なあに…その二人は死にはしないさ、安心して」

男が言いつつその手を振り上げ…

まばゆい光と共に、突風が巻き起こり、雷鳴が響き渡る。

「高町速人、ただいま参上！待たせたな皆！！」
「遅くなってごめんなさい。」

晴れた視界の中心に、真紅のマントを纏った速人と黒いマントを纏ったフェイトの姿があった。

…まったく、ギリギリに現れる所まで真似しなくてもいいだろう。

ヒーローを目指している愚弟のあまりのタイミングのよさに苦笑しつつ、肩の力を抜いた。

S I D E O U T

第十五話・大切なものの為に…（後書き）

対人で地上近接の技においてはともかく、こういう単純に全身防御力高いとか、サイズが大きくて多少刺しても掠り傷にしかならない相手に関してはいくら何でも生身の剣士には厳しい…と言った感が出てれば幸いです。

実際傀儡兵レベルなら優秀な魔導師なら一蹴できますし。

『閃』は…もう銃が避けられるとか言うレベルですらないです。

以下は例です。

- 1：通常剣技では上回っている筈の美沙斗さんの射抜を前に美由紀が後の先をとる。
- 2：銃の引き金に手をかけた男を明らかに剣の間合い外から昏倒させる
- 3：爆弾のスイッチに指を構えた、それなりに戦闘能力の高い相手に2より遠い距離からスイッチを奪った拳句に峰打ちを叩き込む

指すら動かせないとなると人間の反応レベル上回る速度で接近から攻撃までやってることになるので、斬れる相手で射程内なら魔導師だろうと何だろうと負けない事に…そりゃ誰も人間扱いしないよ御

神の皆さん(苦笑)

第十六話・漏れた秘め事

第十六話・漏れた秘め事

S i d e } フ ェ イ ト Ⅱ T Ⅱ ハ ラ ウ オ ン

転送に先立って映し出された現地…地球の映像に、私は…ブリッジのクルーは硬直した。

両足を失ったすずかが、恭也さんの手から流れる血を飲んでいた。

吸血鬼。

地球では魔法と同じファンタジーで、魔法が科学になっている管理世界でも普通は聞かない。

思い出すのは、闇の書の暴走体との戦い。

あの時ずずかは私の首を…

「彼女達だけモニターから外して、それから箝口令も敷きます。今の話は外部に出さないように。」

母さんの指示に我に返る。

そうだ…今気にする事はそこじゃない。

あまり間をおかずに、4機の機体が船から出てくる。

「クロノ、フェイト、転送準備が出来次第現場へ飛んで。民間人の安全確保を最優先。」

「はい！」

「了解！」

今は皆を助けるのが先だ。

私は困惑を振り切って地球へ飛んだ。

「僕は三人を安全な場所へ連れて行く、フェイトは人型を頼む。」
「分かった。」

クロノの指示通り、転移直後にすぐか達と傀儡兵の間に入る。
同時に、風を感じて隣りに視線を移すと、速人がいつもの調子で名乗っていた。

こんな状況でも相変わらずの速人に少し感心する。

「フェイトは右から、俺左からで早い者勝ち。それでいいか？」

あっさりと言う速人。

元々管理局の不始末なのに…

「ごめん…手伝わせて…」

「問題ないない。んで、それでいい？」

「あ、うん。」

あくまで明るい速人に頷き返す。

とにかく今は目の前の敵に集中しないと…

「く、くそっ！迎撃だ！奴等を殺せ！！」

白衣の人の命令に従って動き出す傀儡兵。

私は速人の割振りの通りに右にブリッツアクションで移動する。

『プラズマランサー。』

「ファイア！！」

溜め無しで放った高速魔力弾は、一番右にいた…今私の前にいる傀儡兵に直撃した。

けど、装甲を抜ききれずに罅だけが入る。

…固い。なら！！

鎌を展開した私は、接近して振り抜く。

思ったより素早く動かれて回避され、後ろにいた傀儡兵に銃を撃たれる。

『ソニックムーブ。』

左へ高速移動で回避した後、私はバルディッシュを振り上げる。

「ハーケン…セイバー！！」

バルディッシュから放たれた刃は傀儡兵に吸い込まれて、傀儡兵は爆発した。

さっき回避されたもう一機が撃って来る銃を、ブリッツアクションにて回避しつつ接近。

横薙ぎに振るった鎌は、今度こそ傀儡兵を両断した。

確かに普通の筋力やどれだけ鍛えようが素材が鉄な刀で、全身異界金属のコイツの相手は無理がある。

「つと…エネルギー弾か、兄さんよくこんな物避けたな。」

生身の兄さんと魔力強化を行った俺なら、パワーはともかく、スピードは明らかに俺に分がある筈だ。その俺でも回避は結構大変な銃をよく避ける。

恐らくあのデタラメ高速移動の恩恵なんだろうが…

でも…ま、魔導師ならどうにでも出来るし、ましてや俺の敵じゃないな。

「鋼糸刃『ストリングスライサー』！」

指を揃えて伸ばした指鋼線に風の魔力を付加させて、近接攻撃としては広範囲に振るわれる刃を、受け持った左から二体に向けて振るう。

クロノとの魔法戦訓練の時に思いついたもので、魔導師としての利便性に長けた範囲攻撃ではあるのだが…

吹き飛んだだけであまりダメージが無かった。

なるほど…兄さんでも無理なわけだ…けど！

「斬れるだけの装備と身体能力があるなら話は別なんだよ！」

倒れている内の一体に飛び掛った俺はそのまま足の付け根の関節部に『徹』を叩き込む。

そして、片足を失って立てなくなった傀儡兵の両腕と残る片足の関節を切断して、背中のブースターを破壊する。

胴体残ってる奴がいたほうが検分しやすいからであって、遊んでいく訳ではない。

が、やってるうちにもう一体が起き上がってきた。
銃を構えられる前にと接近して一閃。

だが…右腕の甲につけられたブレードで防がれた。

「っておい、まさか機械に受けられるとは思わなかったぞ。プログレラム的に。」

振り初めに軌道予測でもしているのだろうか？無駄に性能のいいAIだ。

オマケに反撃まで仕掛けてきたその馬鹿機械に対して、ちょっとだけ意地が湧く。

魔法世界の科学兵器に『業』なんて扱えるものか。

「貫き徹す!!」

防ぐつもりで構えていただろう傀儡兵のブレードをすり抜けるように向かっていった一閃は、傀儡兵の首を斬って落とした。

回転しながら低く跳躍して、回転と共に切断した首の穴に、逆手に握った刀を突き立てる。

爆発前にその胴体を蹴って跳躍。

「終了!。身体強化もあるし負ける訳無いけどな。」

無い首から煙を噴出した傀儡兵が倒れるのを確認したところで、フェイト側がどうなってるかが気になって視線を移す。

心配するまでも無くしつかり片付いていた。魔導師としての利点が強い戦いはやっぱり俺の方が劣るらしい。

とりあえず、逃げようとしている白衣の男を指鋼線で捕らえて近づく。

「フェイト、先にこっちで話があるから後で引き渡すな。」

「え、速人?」

さすがに困惑した声を上げるフェイトだったが、夜の一族の事は管理局には話せない。

あらかたコイツから聞かなきゃならないことを聞いた上で忍さんに

も扱いを相談しなきゃならない。

「ひ…」

「誘拐までしておいて怯えるなつて…大体話聞いたりしなきゃならないだけで酷い仕打ちをする気は…」

無いから安心しろと告げようとしたのだが…それが出来ずに硬直した。

男に、見覚えがあったから。

コイツが原因つてことは…

「速人、それが簡単に出来ない事位わかっているだろう？無茶苦茶言わないでくれ。」

思考に捉われていた所でクロノに止められる。

確かに管理局としては管理世界のものを扱っていたこいつの事情聴取を俺たちにされるのがまずい事も十分分かってはいるのだが…

「悪いクロノ、今回は冗談でもなんでもなく見逃してくれないか？」「今回『も』の間違いだろう。それに毎度君が無理を押し通しているだけで、許可した覚えは殆どない。」

クロノはデバイスを構える。

くそ…理由を言おうにもそれを話せないから別々に分かれて話を聞く必要があるって言うのに…

「…戦る気か？」

「君がその無茶を押し通す気ならな。」

俺は縛った白衣の男を見る。

連れてかれてコイツにーから十まで喋られたらそれこそ色々終わりだ。

まだアースラの皆にすずか達の事が漏れていないうちにかたをつけないといけない。

「クロノ…どうしても言うなら俺も本気で行くぞ。」

納めたナギハに手をかけると、クロノの傍にいたフェイトの表情に影が差す。

俺が管理局と…クロノと交戦するのをよく思っていないんだろう。

そして…

『速人…ひよっとしてすずかの事で何かあるの？』

俺とクロノの交戦を止めると言う点においては、念話で届いたフェイトのその一言で叶った。悲しげな表情と声音を隠さない念話に、俺は構えを解いて頭を抑える。

正直聞きたくないが、聞かなきゃならない。

「…フェイト、正直に言ってくれ。何を見た？」

冗談ですまないのだから割と真剣に問いかけると、フェイトは途端表情をこわばらせてちらちらとクロノに視線を送る。

クロノは少し息を吐くと、デバイスを降ろして話を始めた。

「転送前に現地の状況を確認した時に、両足の切れたさすが恭也さんの血を飲んでいた所を見た。プライバシーに関わる事だから見なかった事にするつもりだったんだが…」

答えは最悪のものだった。

現地の状況見ないで転移するわけにも行かないし、足がちぎれた状態で放置する訳にも行かないが…

よりもよって何でその二つのタイミングが被る。

「…クロノ、リンディさんに降りて忍さん達の所に来て貰えるか？
話がある。」

『すぐに向かうわ。エイミー、此処の処理をお願いね。』

直接リンディさんからの通信が届き、俺達は先にクロノが避難させた兄さん達の下へ行く。

「忍さん、大丈夫？」

「私は…それよりも恭也が…」

忍さんは問題ないようだったが、忍さんは浮かない表情で兄さんを見る。

視線を追うように兄さんを見ると、普段からは想像も出来ない位感じられる覇気が薄い。

ばてた所で献血まがい真似をしたんだから色々ボロボロなんだろう。

「兄さんは大丈夫だろ、化物だから。」

「治ったら覚えてよ速人…」

「生身であんなもの倒すのが化物じゃなかったら何なんだっての。」

そう言っつて肩を竦めてやると、兄さんは苦笑する。

ま、そんな反応が出来る余裕があるなら大丈夫か。

「それはそうと…話があるんだ。」

言い辛かったのだが、言わずに放置しておくわけにも行かない。
意を決して告げる。

「…クロノ達にすずかが血を飲むところを見られてた。」
「あ…」

皆が息を呑む中、すずかだけが掠れる様な悲しげな声を上げる。

「ごめん、シャレにならない事態なのは分かってるつもりだからどつかで話さなきゃならないのはわかってる。今リンディさんに降りて来て貰うから…」

謝る中、なんかふらついてくる。

「…速人、防護服から元に戻れ。」

「へ？な、何で？」

「いいから戻れ。」

有無を言わさぬ兄さんのいいように俺は諦めて元に戻る。

胸元がパツクリと裂け、右脇腹も裂けた服装に。

…致命傷じゃないからってさすがに手当てなしですっ飛んできて戦闘続行は無茶があったのか、未だに血が止まっていなかった。

「き、君は何をやってるんだ!？」

「いやぁ…ちょっと本物とやりあう事になっちゃってさぁ…その後慌ててこっちにすっ飛んできたから治療してなかったんだよな。」

「馬鹿者、さっさと治療しろ。」

兄さんの台詞に全員に同意され、俺は目を逸らす。

「そうは言うけどな…魔法関係で受けた傷じゃないから治癒魔法頼るのもまずいだろ?」

「君は本気で馬鹿だな…」

呆れたようなクロノは、言いつつデバイスを俺の傷口に翳す。出血が治まって、痛みが少し引く。

「必修で扱える程度の簡素な回復魔法だ、後で専門医に診て貰ってくれ。」

「そうだな、とりあえず今は話が優先だ。」

どうするべきか、決めるのは忍さんになると思い、忍さんに視線を移す。

忍さんは深く息を吐き…

「とりあえず…私の家に来てもらっわね…」

何処か疲れたような重い声で、そう告げた。

第十六話・漏れた秘め事（後書き）

エネルギー弾とか言ってたのはガジェットやら訓練用機材が撃つてたような光だと考えてもらえれば。ようは一般的（兵器なのに？）な射撃武装を想定してます。

状況泥沼化してきたなあ（汗）

第十七話・出生と罪過の重さ

第十七話・出生と罪過の重さ

取りあえず人目を避ける為に忍さんの家に移動する。

しばらくして忍さんの家に着くと、広い部屋で机を囲んで座る。

忍さんは、夜の一族についての説明を始めた。

曰く…身体能力が常人より高く、特殊能力を持ち…
鉄分のバランスが悪い為、完全栄養食である血を欲する。

「私達についてはこんな所かしら。」

スパツと切るように話を終わらせた忍さんは、全員を見渡す。異能や異種に慣れているのか、魔導師の皆には特に驚きといったものはなかった。

ただ…フェイトだけがその話を聞いて表情をますます曇らせた。

「ごめんすずか…無茶させて…」

フェイトの消え入りそうな声とともに、すずかの顔に影が差す。何かあったんだろうか？

「血に関しての力があるからって、ただでさえ辛い筈なのに、私に力をくれて…」

…どうやらあったらしい。

忍さんが驚いたようにすずかを見ている所を見ると、どうやら忍さんに何も言わずに何かしていたらしく、すずかは泣きそうに…いや、泣いていた。

「ごめん…なさい…ばらしちゃいけないの分かったのに…私達の為に命懸けで戦ってるのはちゃんとフェイトちゃんを放って置けなくて…」

「すずか…」

すずかは泣きながら話を続けた。
話によると、闇の書事件の時になのはとフェイトに力の一端を見せていたらしい。

フェイトが闇の書事件の時フレリア相手にすずかの名前出して怒ったのはそういう訳だったのか。

「ばれたら誓いを立てるかどうかの選択をしなきゃいけないくて…でもそのためには全部話さなきゃいけないくて…それが怖くて私…ごめん…ごめんなさいお姉ちゃん…」

本当に恐かったんだろ？すずかは珍しく乱れて泣いていた。

元暗殺者だと平気で明かす俺には分からないが、本当に辛いんだろ？うな…

フェイトは、すずかが黙っていた事をばらしてしまった事に表情を歪めて俯いて…

何か、決意したように顔を上げた。

「私…クローンなんだ。」

「え…」

泣いていたすずかが、驚いたのか呼吸ごと止まる。

「一時期死んだかと思われてたアリシアを蘇らせようとして生まれただクローンで、アリシアになりきれなかった人形。本当の母さんにとって、私はそういう生まれなんだ。」

クロノとリンディさんがフェイトの言い様に目を細めるが、ここまでは落ち込んだようでもなく静かにはつきりと語っていたため、止める事はしないで続きを待つ。

「私だつて…これを話せと言われたら怖いから、秘密を話せない気持ちは分かる。なのに…」

肩を震わせながらフェイトは続ける。

「それなのにすずかは、魔導師である事さえ隠していた私が、何をしているのかもよく分からない筈だったのに！そんな私にあんな…自分の秘密を明かすような方法で力をくれて…」

だんだんと悲痛な叫びになって、悲しくなる。

「お礼言わなきゃって、謝らなきゃってずっと思ってた…こんな事になるまで自分の事は隠し続けて来たのに…」

「フェイトちゃん…」

顔を上げたフェイトは、真っ直ぐすずかを見る。

「助けてくれてありがとうがとすずか、私は…すずかの事本当に凄いと
思ってる。」

ようは、すずかの不安の種を和らげたかったんだろう。

誓いの事もあるしそう簡単にはいかないが、それでもすずかは落ち着いていた。

まったく、上手くないよな。

生まれなんて二人には一切悪い所の無いものでこんなに悲しげな空気になられたら、俺なんか生きてる資格すら危ういって言うのに。

何しろ…

「あー…半分獣の子供と試験管の中で生まれた子供と犯罪者。どれが悪い奴だと思っ？」

聞くまでも無く犯罪者だ。

唐突に妙な事を聞いたからか、皆の視線が痛い。

「意地が悪いぞ速人。」

俺が何を言いたいのか察した兄さんが釘を刺すような視線を送ってくる。

「それは兄さんにだけは言われたくないんだが…まあとにかく、さっきの三択だと当然犯罪者が悪い奴だ。」

「私も元犯罪者なんだけど…」

フェイトが落ち込んでしまう。

ちよっと例をミスったか…

「で、何一つ一切悪くない生まれが特殊なだけの二人にそんなに悲痛な顔されてると、俺は首でも吊ればいいのかって話になってくるんだが。何しろ元人殺しな訳で。」
「な…」

このカミングアウトは、すずかと忍さんには初だったので、思いっきり驚かれた。

「すずか、今俺がそんなだつて知って、痛い目見て悲痛な顔して、苦しんでたほうがいいと思うか？」

「そんな事…無いよ。」

「そっか、ありがとう。」

いきなりで少し躊躇いがちではあったが、すずかははっきりと否定してくれた。

子供だから救われた程度で、殺した数的には十二分に死刑でまったくおかしくないんだが…

「まあいきなり何も気にしないようになれ何て言っただって無理があるとは思うけど…明らかに問題外の俺でも助けられたんだから、そんなに悲しまないで欲しいな…と。」

俺ほど開き直るのは無理があるかもしれないが、だからと言って悪くも無ければ責める気もない事に悲しまれ続けるのは見ているほうも辛いだろう。

無理して我慢して欲しいとは思わないが、出来るならそついう事を重荷に感じて欲しくはない。

「速人君、一体何をしてたの？」

忍さんが、少し厳しめの視線を向けてくる。

人殺しを無条件に信じる方がどうかしてるし、むしろ自然な対応だ。

「今の本題とずれて来るから後日してもらえませんか？」

答えようとしたところで、気を使ってくれたのかクロノがそう言い出した。

ありがたい話だが…

「いや、話させてくれ。実は今回の件に絡んでくる…というより、そいつ俺が昔殺し損ねた奴なんだ。」

俺は縛つてある男を指して告げる。

俺の暗殺者としての話が具体性を帯びてきたせいか、兄さん以外の表情が眼に見えて翳った。

とりあえず、忍さんとすずかが知らない暗殺者育成施設出身という生い立ちを説明する。

「んで、美沙斗さんに救出された俺は、唯一の美沙斗さんの親戚になる父さんのいる高町家に預けられたんだ。」

俺の出生を聞いた忍さんからは、既に警戒の視線は消えていた。すずかに至っては悲しんでさえくれてている。

「けど俺はこの時、『奪う敵は殺さなきゃ殺される』って観念を持つてて…実際俺を助けてくれた美沙斗さんも施設の大半の人間斬り殺してたし、戦闘者としては持つべき意識だつて疑問すらもってなかった。」

一般人には…どころか、非殺傷設定が当たり前となっている魔導師から見ても、目を伏せ、耳を塞ぎたくなるような内容だ。

「そんな事考えてたから『敵』の存在は常に疑つてかかつて…俺は忍さん達の誘拐を画策していた一団がいる事を知つて…計画発動前に乗り込んで皆殺しにした。」

淡々と告げた内容に息を呑むフェイトとすずか。
無理も無いけどな。

「一人…確実に殺してなかった奴がいてさ。逃げようとしてる所を背中から斬ったけど、それまでの戦闘で疲れてて急所を外して…でも深い傷ではあつたし海に落ちたから死んだかと思つてただけだ…」

言いつつ椅子に縛っている男を見る。

何か思いつきり頭がおかしくなつてなければ、殆ど間違いなくあの

時逃がした男だった。

「あ…あ…」

一方男の方も、俺があこの時の殺戮者だと知って、殺して回ってた現場を思い出したのか、ガタガタと震えだす男。

俺は片手で頭を抑えつつ男を見る。

「あ…トラウマなのは分かるけどさ、そんなに怖いなら誘拐騒ぎまで起こすなよ。大丈夫だって、普通に裁かれるだけで俺は何もしないから。」

今の俺には誰かを殺す気は無いし、どうせ管理世界と夜の一族の掟で記憶の大半飛ぶ事になるのだから別に怖がる事はない。

「とにかく…そう言う訳で今回は俺のせいだ、ごめん。」

敵側が遠慮するはずが無い。なぜなら敵だから。

だから、手段はどれあれ守りきれなかった事については俺のせいという他ない。

「という事は…速人君随分昔から私達の事知ってたのね。でもどうやって…」

「暗殺技法、完全気配遮断。常人所か戦闘者にすら感知されなくなる、俺だけが使える技法。音は勿論それ以外の気配でも達人が感知できなくなるこれを使って、あらかじめ高町家やその親類に害あるものが傍にないか暇を見つけては調べてたんだ。」

忍さんの疑問に答えると、納得されるどころか驚かれた。

確かに兄さん達でも扱う事のない戦闘者の中でも恐らく俺だけしか

使えない技法ではあるけど。

「それと忍さん、誓いだけど…管理局の人達には無理だ。」

「そう言えばさっきすずかも誓いと言っていたな。どういう事ですか？」

クロノの問い掛けに、夜の一族の誓いについて話す忍さん。

ずっと一緒にいて一族と共にその秘密を守って行くと誓いを立てるか、それが重ければまじないで忘れるかと言う選択をするというものなのだが…

予想通りと言うべきか、話を聞いたクロノとフェイトは重く口を閉ざす。

「忍さん、管理世界には魔法やレアスキルって異能があるんだ。たとえ上手い事矛盾無く記憶操作しても病院の検査で普通に引っ掛かる。」

確認を取る意を込めてクロノに視線をやると、クロノは頷く事で答えてくれた。

「かと言って異世界飛び回って仕事やってる皆には秘密を守る方とはもかくずつと一緒に言うのは無理があるだろ。しかも見たっただけならブリッジの全く知らない人にも何人かいるんだろ？全員信用出来るの？」

どうしたって無理な話だった。

唯一方法があるとすれば、アースラごと全滅させて、どっかの犯罪者のせいに仕立て上げるくらいだが…

誰がそんな事するものか。

そうになると…手が無い。

どうにか両立出来ないかとは思うが、下手に記憶操作すると、地球に危険な奴がいるって事でかえってマークされて調査されるだろう。

「と言う事は君達もその誓いを？」

「え、あー…」

俺はクロノの問いかけに目を逸らす。

「速人、時間に余裕があるわけじゃないんだ、早く答えろ。」

兄さんにせかされて、黙っている訳にも行かず…

「…忍さん達に喧嘩売って突っぱねた。」

要約するところ言う事なのだが、それだけだと伝わらないので詳しく話す。

「皆知つての通り俺はヒーローやるつもりでいる。そうするといつ海鳴出るかも分からないし、かと言って俺の無茶苦茶に忍さんなりすずかなりをつき合わせるつもりも無い。だから一緒にいるって言うのは承諾できなかつたんだ。」

これだけなら、忘れる事になる。だけど…

「かと言って、今回の件は勿論の事、友人と義理の姉にごたごたあるのが分かかって全て忘れるなんて選択肢は毛頭無かった。だから、誰にも話さない事、何かあったら協力する事は誓えるけど…」

忍さんを見ると、少し呆れたように肩をすくめる。

「『ずっと一緒にいる事も誓わないと駄目だつて言うなら、捕まえてみな。』って。そう言つて逃げたの。当然私と恭也は探したけど、数日単位で見つからなくて…一騒動あつて、助けに来てくれた後だったから、このまま行方不明なんかになられたらと思うと私達が悪い気がしてきて…」

「この馬鹿はそんなタイミングで戻ってきて、『とりあえず数日は一緒じゃなくても黙つてたけど、後どれ位やれば信用してくれる?』とか言い出したんだ。」

全員、なんとも言えない様な苦笑を向けてくれる。

いやだつて、一緒でなくてもばらさないし秘密を守るって事を信用して貰うのが一番手っ取り早いと思つたんだししょうがないと思つんだが…

「これで許可してくれなかったら数ヶ月、数年も試してみようと思つてただけど…」

「さすがに私達も10に満たない子供に数ヶ月、数年単位で行方不明になられても困るし…」

忍さんは心底困り果てたようにそう言った。

実際、子供というだけでなく、秘密を知ってる人が数ヶ月、数年単位で離れてる事も問題になる。
とりあえず、そんな無茶苦茶の結果保護観察処分的な感じで放置されてる状況だ。

一応前例にはなるのだが、だからと言って管理局にそれを真似るというのも無理な話で…

「箱口令はしいておきました。地球外絡みで問題が起これば出来る限り協力したいと思います。それで済ませては貰えないかしら？」

リンディさんが静かにそう告げる。

黙ってるから無条件で見逃してくれ…雑に言つとそんな所だ。

忍さんから見て簡単に承諾出来る筈も無いが、だからと言って他に選択肢も無い。

「…とりあえず今の所は。具体的に決まったらその時はまた話をさせて貰います。」

「ええ。」

結局即答出来る内容でも無く、後日と言う事になった。

「後は気がかりというコイツと、コンサート会場か。」

「そう言えば何故お前は魔法を使って俺達の所まで来たんだ？あの傀儡兵というのがいる事は知らなかったはずだが。」

兄さんの質問に、リンディさんとクロノの視線が厳しくなる。

俺はそんな二人を制するように手を振った。

「責められても困る。一つはコンサート会場の襲撃と忍さん達の誘拐犯…コイツに繋がりがあったと判断したから。で、もう一つは、コンサート会場の襲撃犯に、魔導師がいたからだ。」

「なっ!?!」

派手に反応するクロノ。

無理も無い話だが、だからと言って違法魔導師がホイホイ来る度にそんな反応で済ませられるとちょっとへこむ。

転移魔法を世界中常時監視する訳にも行かないのも分かるが…何とかしてくれマジで。

「父さんと姉さんが片付けてくれたから今伸びてはやて一行かなのはかの預かりになってると思うけど。」

「そういう話は先にっ…」

怒鳴りかけたクロノは、むしろ管理外世界が被害者側であることを悟り口を閉ざす。

「これ以上は全部事情聴取なんかが終わってからになるわね。クロノ、フェイトと一緒にその違法魔導師を引き取って来て。フェイトはそこで今日は終わり。私とクロノは彼と違法魔導師の事情聴取をして、まとまったら再度報告します。…それでいいかしら?」

方針を告げた後、リンディさんが忍さんに確認を取る。

「はい、後その…」

「事情聴取は私とクロノ執務官だけで行っわ。そこは徹底します。」

「…はい、それでお願ひします。」

一通り片付いた筈なのに、むしろ問題が増えた。

今回は俺の昔の失敗も絡んでる訳で、尚更気張らないといけない。

混乱する状況の中、俺は一人握りしめる手に力を込めた。

第十七話・出生と罪過の重さ（後書き）

速人が出生話しただけで忍が罪状咎める事がなかったのは、戦闘者についてそういうものだって言う理解があるからです。
何しろ恭也の婚約者。

御神の人間だって、と言うか夜の一族自体下手すると状況次第じゃ死人出して普通にしてる可能性あるくらいなので、快樂殺人者や単なる悪党じゃなければそこまで問い詰めないかと。

第十八話・明暗二つ（前書き）

旧話で既に説明してありますが、正式な呼称の公開に伴い3マテ（宵の騎士）の名称を改定してあります。

第十八話・明暗二つ

第十八話・明暗二つ

「すまなかった。」

「ごめん！」

俺は兄さんと並んで頭を下げていた。

勿論、言うまでも無くフィアッセさんに。

何しろ揃って護衛放り出して抜け出したんだ。一回引き受けた以上さすがに堂々とはしていられなかった。

話が一段楽した後、魔導師を引き渡さなきゃならないし、フェイトも折角だから会わせたいと言う事で、すぐにコンサート会場へ向かった。

忍さんは、色々とやる事があるので屋敷に残って、リンディさんは忍さんの内から直接アースラへ。

そして、クロノに魔導師を連れて行って貰った後…残ったメンバーで、ファイアッセさんの部屋に集まっているわけだ。

謝った俺達に対して、ファイアッセさんは首を横に振る。

「忍とすずか、無事だったんでしょ？ならいいよ。恭也も速人も無事でよかった。」

「そこは当然！この俺無敵のスーパーヒーロー速どつ！？」

笑みを返してくれたファイアッセさんに答えるように胸を張って言いかけていた台詞は、兄さんが俺の胸元の傷跡をはたいた事で止まった。

クロノの治療で出血は止まったし傷自体も塞がってはいるものの、専門ではないためか痛みも傷跡もまだ残っている。

「馬鹿者が、無敵を嘯くならこの程度で呻くな。」

「や、喧しいこの馬鹿兄！他にやり方あるだろ！！大体戦闘者相手に無傷なんて兄さん達でも無理だろうが！！」

「俺は人間離れは自称しているが無敵と言った覚えは…」

俺の抗議に対してアツサリ人間離れと答えた上に覚えは無いと言わずに止まる兄さん。

…おい、自分で無敵名乗った覚えがあるくせにこんなえげつない真似しやがったのか？

ファイアッセさんは相変わらずな俺達の様子に笑みを漏らすと、少し後ろにつくようにならんでいたフェイトに視線を移す。

「貴女がフェイトね。なのはからよく話は聞いてるわ。始めまして。

「あ、は、始めまして。フェイト＝Ｔ＝ハラウオンです。」

緊張しているのかどもるフェイト。
と、丁度そこになのは達が姿を見せた。

「ごめんフィアッセ、明日には出るし顔見せ位と思って皆連れてきたんだけど…」

「気にしないで美由紀。連れてきてくれてありがとう。」

コンサートの後だし疲れもある筈なのに、笑顔でそう答えてくれるフィアッセさん。

と、俺とすずか達を見比べるように視線を動かしたアリサが、肩を落とす。

「まったく！自称ヒーローなら折角のコンサート、間に合わせてみなさいよ！」

「うぐ…返す言葉もない…」

相手に本職がいたりとか魔導師がいたりとかでこたごたしてたのは間違いないのだが、何があっても守るのが仕事の俺としては本当に面目なかった。

今回はすずか達のが局に漏れるは、それが昔の俺の失敗のせいだわ、しかもコンサートには間に合わないわ…散々だな。

プレシアさんみたいに死んだ人がいない分ましといえましなのだが…まだまだ修行が足りないな。

と、一人内心で反省していると、何故かすずかとフェイトがアリサを少し咎める様に見ていた。

「駄目だよアリサちゃん、速人君本当に頑張ってくれたんだから。」
「私も未熟だからだけど、誰一人酷い事にならずに終わる事件ってあんまり無いんだ。皆：敵の人たちも無事なのって本当すごい事なんだよ？」
「う…。」

二人に怒られてバツが悪くなったのか、アリサは視線を逸らす。
うーん：これでもアリサが言うように不満なんだが、まあ普通に見たら欲張りなんだろうな。

「けど良かったの？魔法の話聞いちゃって。」

フィアッセさんが首を傾げながらフェイトに聞く。
フェイトは頷いて返した。

「誰にも言わないで貰えれば大丈夫です。それに、転送魔法陣を設置させて貰えるんですよね。」

普通に転移できなくも無いが、専用の設備を用意した方が都合がいらいしい。

当然と言えば当然ではあるが。

舗装した道路と砂漠を走る際、どちらが便利かなと言つまでもない。
ようはそつという事なんだろう。

フィアッセさんは微笑んで頷く。

「使っていない場所とか見つけづらい場所なら色々あるし、大丈夫だよ。」

「それなら大丈夫です、それに、今回みたいな事がまたあったら危険ですから。」

「あの魔導師さん…どうしてわざわざ管理外世界の地球に来て悪い事してたんだろう…」

フェイトの返答を聞いたなのはが俯いて搾り出すように呟く。

顔だけは見たらしいが気絶していたため話は聞けなかったらしい。

「その辺はクロノ達が教えてくれるだろ。今くらい楽しもうぜ。シユテル、アレあるんだろ。」

「はい、用意してあります。」

シユテルは言いつつ、ルシフェリオンを取り出す。

『プットアウト。』

機械音声の後、見慣れた翠屋の箱が飛び出した。

「マスターがなけなしの小遣いを全て使い切って用意した翠屋のシユークリームです、堪能してください。」

「って言わなくてもいい情報まで言うな!…」

シユテルの言葉に苦笑するフィアッセさん。

「あんまりお小遣い貰えてないの?」

「店の手伝いより修行優先してて…どうしてもやばそうな時意外手伝ってないから…」

なのは達は局で給料が既に出てるし、正直俺一番貧乏人なのだ。

とは言え、折角フィアッセさんが戻ってくるなら寄ってる暇が無い

までも翠屋の味位は堪能していつてくれればと考えて…
その場で食うなら他の皆の分もないと食べづらいだろっし、かと言
つて長期保存が利くような代物でもない。

結果、その場で皆で食べられる数を用意して…破産と相成った。

まあ、皆喜んでくれれば俺としては文句は無いのだが。

「ありがとう速人。でも無理しなくていいよ？」

「いや、実は修行ばかりであまり入用じゃないからこつこついう時に
使えれば無理は無いんだ。気にしないで食べてよフィアッセさん。」

「それじゃあいただきます。」

喜んで箱から一つシュークリームを取り出すフィアッセさん。

「ボクも食べていいんだよね？」

「ん？ああ、いいぜ。」

物凄く気になっていたらしいレイヴィは、俺が承諾すると飛びつくよ
うにシュークリームを食べ始め、それをきっかけに皆が一つ一つ手
にとつてシュークリームを消化していった。

「でも、本当にありがとう。」

シュークリームを食べ終えた場合に、フィアッセさんがそう口を開
く。

「父さんと美由紀はともかく、俺と速人は肝心なところで放り出したのだが……」

「修行切り上げてきてくれて、日本まで守ってくれたじゃない。速人君だって、物凄く大変だったみたいだし。」

浮かない表情の兄さんに対して綺麗な目を向けるフィアッセさん。

「エリスにもいっぱい無茶させちゃったし、恭也たちの誰か一人でもいなかったら、きつとこのコンサートは出来なかったから。やっぱり、ありがとう……だよ。」

そうまで喜んでくれるなら、俺としても……恐らく兄さんも、本望だろう。

「ま、そう言うならまたなんかあったら頼ってくれよ。子供なりに力を貸すぜ。」

「ああ。俺も美由紀も、いつでも呼んでくれ。」

「私達の二刀は、その為にあるから……ね。」

やっぱり嬉しかったのか、兄さんと姉さんも俺に続くように守ると誓う。

俺達の答えに、フィアッセさんも笑顔で頷いてくれる。

「うん、これからもよろしくね。」

とりあえず、フィアッセさんのほうについては大団円ってところかな？

「ところで兄さん、父さんを仲間はずれにしたのはワザと？」

「……………ああ。」

すっごい間の後に答えを返す兄さん。

…割と本気で忘れてやがったな。ひっでえ。

で、もう一つ。

ある程度予想していた事ではあったのだが…

こっちはあまり、よろしくない空気だった。

「貴方は自分が何をしたかわかってるの!？」

開口一番、さくらさんの口から漏れたのはそんな怒声だった。

兄さん達は今頃フィアッセさんの見送りに出ていて、俺は朝から忍さんに呼び出されて、屋敷の傍の森にいた。

もっと正確に言えば、忍さんを通してさくらさんに。

綺堂さくらさん。

忍さんが親戚の中で一番信賴している人。

ただこの人、夜の一族としての生まれのせいかわからないが、何と
言うかその…敵対者やらそれに連なるものやら、初対面の相手やら
に対しての警戒心が半端じゃない。

「主語なくそれだけ言われてもちよつと…」

「とぼけないで！今回のこと…貴方の勝手が原因なんでしょう！？」

まあつまり…だ、無茶苦茶やりすぎた俺は思いつきり睨まれてる訳
だ。

問答無用でぶつ飛ばされたり、力を使ったりしてこない辺りはまだ
抑えてくれているようだが、それもいつまで続くかわからない。

何しろ俺は、ただでさえ誓いを半端な状態までしか約束していない
身だ。本気で潰しにこられても何もおかしくはない。

「そう…だね。ごめん弱くて。」

「全然分かって無いじゃない、強ければ良かったって言うつもり？」

謝ったんだけど、余計にさくらさんの視線が陰しいものになる。

失敗したことに怒ってるんじゃないかな…悪いけど今の所謝れな
い。

「もしそれ以前…家に進入して夜の一族のことを知っていたことや、
誰にも言わずに一人で襲撃をかけた事を怒ってるなら…悪いけど謝
れませんか。」

静かに、さくらさんの瞳の色に揺らぎが起こる。

本気になりかけてる…ってことかな？

「放っておけば、忍さん達が奴らに攫われていたかも知れない、調べて知らなかったら、それに対処一つ出来なかった。兄さん達に手を借りようにも、バラしちゃいけない話が絡む。だから俺一人で行ったんだ。謝って俺の間違いだったと言っのなら、他に最善策が必要だけど…思いつかないから謝れない。だから…弱くてごめん。」

「勝手な事を…」

睨まれるのも分かる。

何しろ無茶やってる自覚はあるんだから。

「…無理矢理忘れさせるしか、私達に関わらないようにする方法はないのかしら？」

「それも無理ですね、気配遮断に気づけなければアツサリ調べ直して元の木阿弥です。」

これに関しては仮に素直に記憶操作を受けてもそうなる自覚があった。

違和感なく記憶操作した所で、兄さん達の周囲にいる限り間違いなく調べ直すだろう。

第一、脳内麻薬と言う形ではあるが、ある程度意識的に自分の頭を操作できる俺に暗示関係の能力が正しくかかるとも思えない。

そうなるか…

「…どうするしか…ないのね。」

告げたさくらさんから、耳と尻尾が生える。

「普段綺麗ですけど、それは可愛いですね。…言われなれてます？」
「…随分余裕なのね、人間の子供がこの状況で。」

まあ冗談でそんな姿になる訳もない。

捕まえて血を吸われて、後は殺されるか逆らえない程度に重傷負わされるか、それとも本気で殺されるか…そんな所だろう。

「俺は種族的には一応人類ですけど、少し変わってるだけのすずかと違って『バケモノ』ですから。まともに育ってないって意味と、戦闘能力で。」

「『少し変わってるだけ』？人に生まれているくせに何をそんな簡単に…」

「そう言うなら…人に生まれたせいで、気にするなって言っても説得力がないからすずか達を気楽にさせてあげられない、俺の気持ちだつて分からないでしょう？」

お互い様と言つたつもりだつたんだが、かえってさくらさんの瞳が鋭くなる。

屁理屈にしか聞こえてないんだろうな…無理もないが。

とは言え、これで怒られては俺も説得のしようがない。

瞬間、さくらさんが駆けけた。

爪で薙いだのか、辛うじてかわしたが服が僅かに裂ける。

速え…

さすがに技とかはないけど、突進力だけなら兄さんと同等位の速度あるんじゃないか？

修行とかしてるわけでもないだろうに…

「抵抗…しないつもり？」

通り過ぎた位置から振り返ったさくらさんは、俺を見ながらそう言っ
つて来た。

「悪党相手や仕合ならまだしも、義理の姉妹の親戚。家族同然じゃないですか。へまして二人を巻き込んだのだって本意じゃないのに、そんな大事な人に力なんて振るいませんよ。」

「っ、そう…」

戸惑いを見せたのも一瞬、さくらさんは再度襲い掛かってきた。

幸い、『ごういうこと』に慣れてないからか、魔導師勢よりも見やすいのは間違いないが、魔力による強化もしないまま、素手で獣を相手にするようなものだから身体能力だけで大分厳しい。

腕や足が衣服や皮膚を掠めるように通り過ぎる。

一回捕まったらそれでアウトだ、さすがにずっと受けに回るのも厳しい。

「何でそんなに意地になるの？さっきから何度も私を取り押さえる事が出来た筈なのに。」

「マスターがそういう方だからです。貴女達融通の利かない愚かな一族のように。」

いきなり背後からかけられた声に慌てて振り返るさくらさん。

そこには、相変わらず表情を見せないシュテルと、少し怒ったレヴィとディアーチエの姿があった。

魔法で物音殺しながら来てみたいだし、魔法を知らないと感じづるのは難しいだろう。

さくらさんはシュテルの挑発めいた言葉に乗らずに、俺を見る。

「彼女達にも勝手に漏らしたの？」

「すずかに聞いたんだよ！マスターは何もしてない！」

問い詰められそうになっていた俺を庇うように力強く言い切るレヴィ。

なのはにも見られていたと言っていたから説明するような話は昨日の内から出てはいたが、なんで同席してるんだか…

俺が漏らしたわけじゃないと知ると、さくらさんは三人に向き直る。

「それで…貴女達は」

「黙れ塵芥。」

初対面で聞くにはあまりに酷いディアーチエの台詞に、さくらさん

の怒りが煽られる。

「まったく、親戚塵扱いか勘弁してくれよディアーチエ……」

「何ですって……」

「黙れと言った。塵芥の分際で私の家族に手を出そうなどと……思い上がりも程ほどにしる。」

珍しく真面目に怒っているように見えるディアーチエ。

俺が怪我してる事はいつもの事だが……何かあったのか？

その答えは、すぐにシュテルから示された。

「すずかは、涙しながら事実を語っていました。誓いの話まで含めて。」

さくらさんが動かなくなる。

「一族の決まりごとか何かは知りませんが、家族の事でマスターに八つ当たりしていた割に、貴女がマスターに強要しようとしている思想の強制変化や誓いの強制の方が、その家族を涙させているのです。……愚かとしか言いようがありませんね。」

淡々としている分かえって痛いシュテルの言葉を受けて、さくらさんの表情に影が刺していく。

「まあ……そちらの決まりごとは勝手にもめてくれて結構ですが。私自身は彼女の友人と言う訳でもありませんし。ただ……」

「その男は我らの家族だ。貴様の一族大事がどうだか知らんが、それを強要しようとする手を出して……よもやただで済むとは思っていま

いな？」

魔力を溜め始めるディアーチエ。

俺はそんなディアーチエに近づいて…

「徹。」

「っあああつ！！」

無茶やってるディアーチエの頭を軽く叩いた。

「お前なあ…さくらさんは、俺の義姉の大切な親戚なの！ちよつと説教されてたからって無茶苦茶するな！」

「こ、この似非英雄が！貴様と言う奴は毎回毎回…日ごと月ごとにそんなデタラメやらんと気が済まんのか！？」

返す言葉がないくらいディアーチエの指摘のほうが的確ではあるのだが、とは言えやっぱり家族である事は間違いないのだ。

それをよりによって魔法でぶっ飛ばそう何て、止めるに決まってる。

「許して…なんて言えたものでもないんですけど、俺にも家族はいます。それに…誓いを受けられない位大事な決め事も。なので…その…」

見逃してもらえるとありがたい。

のだが、今回すずかが大怪我するのはそれでかなりばれるはしかもそれが昔とは言え俺の失敗のせいだわで、とてもじゃないがいえない。

「……今日は、もういいわ。」

ふと聞こえた声に視線を移すと、さくらさんは元通り人の姿に戻っていた。

「すずかの事…教えてくれてありがとう。少し…話してみるわ。色々…」

言いつつ、少しだけ笑みを返して、さくらさんは屋敷に向かって歩き出した。

それにしても…

「家族か…中々嬉しい事言っじゃないか。ディアーチエまで。」
「な…」

照れるディアーチエの罵詈雑言を聞き流しながら思う。

誓い…といってもそれを知らない側に『させてきた』決まり事。
歪みが出るのも当然で…

明らかに失敗ではあるのだが、もうすずかが色々と気にしなくてもいいようにかわってくれたらいいなと、漠然と考えていた。

第十八話・明暗二つ（後書き）

初登場さくらさん。

親しい人にはともかくそうでない人には反応キツイ方なので、これだけ大事になると速人もただじゃ許されないかと。

第十九話・爪痕は心の中に

第十九話・爪痕は心の中に

結局、魔法の話をさくらさんにもした上で、今後アースラの誰かが夜の一族の話を漏らすようなら同様に魔法についても公開すると言うような形で落ち着いた。

脅しあいみたいですよっげえ微妙な状態だが、無条件で信用するとか言うのはさすがにさくらさんには軽すぎるか。

後、今回コンサート会場襲撃に来ていた魔導師は、自動傀儡兵をあ
の馬鹿に売り渡した張本人でもあったらしい。

何でも、魔力もなければ派手な魔法も使えない身で裏家業についているのに限界を感じて、ならばいっそ、魔法発動を探知されにくい自分の長所を生かした場所で働こうと言う事らしかった。

それでどこに行くか、という事で…

二度も魔法関連で事件が起こってる上に突如現れた天才子供魔導師のなのはの出身世界、第97管理外世界、地球に目をつけたという事らしい。

いくら天才魔導師だろうと、プロフィール…出身地位なら雑誌レベルにすら掲載されるし、事件にしたって終わった事件の概要は、歴史なんかには記録される話になってくるから、機密レベルでもなければ大筋位は簡単に知る事ができる。

そんな情報を集めて、裏で捌いた傀儡兵を以って、今回結託しようとしていたあいつ等に力を貸す事に下らしい。

管理世界に夜の一族の情報を売り渡すまでは行っていなかったのは幸いだっただ。

あのまま誘拐されていたらそれもありえたかもしれないとなると、ぞつとしないもんだ。

「つと、ここまでだな。」

「ふ…やはり私の負けか。」

俺はシグナムの首に突きつけたナギハを下げ、鞘に収める。

さくらさんとの問答を終え、事件の結果を聞いたのが昨日の事にな

った現在、暇ならばとなのはがよく練習に使う丘に呼び出されて練習試合の最中だったのだ。

だが、結果は歴然。何しろ余計な事を考える余裕があるほどに。

それと言うのも、今回魔法戦や空戦ではなく、身体能力も通常の状態で、バリアジャケット…シグナムたちは騎士服だったか？も展開しない状態で…

簡単に言うと、いつも俺や兄さん達が普通にやってる訓練方法での仕合だったのだ。

無理もない結果だ。

「しかし…手を抜いたな速人。」

「いや、まあ…って言うか、初手から本気で行ったら今回のお前の目的果たせなかったと思うぞ？」

俺の返しにシグナムが僅かに眉を動かす。

推察ではあったけど、どうやら当たってたみたいだな。

「俺や兄さん達の『業』を知る事、それと自分達の剣との性質、目的の違いを知る事、習得できるかどうか知る事…こんな所だろ？」

「言わずとも承知済みという事か。私もベルカの騎士である以上自

身の剣以外を習得する気もないが、あのリライブがあれほど絶賛し、その程度の魔力値で私をたやすく破ったものについて知っておきたく……いや、知る必要があると判断して来たのだ。」

だからなのか、それほど暇でもないはずの守護騎士が揃い踏みだった。

「で、収穫はあったか？」

「正直シグナムが弱え事しか分からなかったけどな。」

浮かない表情のヴィータに聞いてみたが、完全に藪蛇だった。シグナムの眉が思いつきり吊りあがる。

「ヴィータ……どうやらレヴァンティンの錆になりたいらしいな。」

「やってみる、返り討ちだ。」

「止める二人とも。頼んで速人を呼び出したのは我々だ、無駄に時間を使わせるな。」

言い争いですまなくなる前にザフィーラが止めてくれた。うーん、渋い。

止め役って普段静かだから目立たないけど、実際ありがたいよなあ。

「でもヴィータの言い方もそこまで間違っただけじゃないんだよな。」

「何？」

「ああ待った。シグナムが弱いって方じゃなくて、分からなかったって方な。」

勘違いされかけて慌てて止めると、皆に何を言ってるのか分からないと言った表情をされた。

「皆作り物の生まれだろ？って待った待った。偏見で行ったわけじゃないからそんな冷めないでくれ。」

説明しようかと思っただけから空気が異様に冷めたため慌てて全身を使っただけで済ませようとする。

だから、俺以外は普通嫌がるんだから気をつけないと駄目なんだよな…

「変な意味じゃなくて、竜の皮膚は硬いとか、ワームは穴倉が好きとかそういう『特性』の話がしたかっただけなんだ。」

「特性って言うても…私達は殆ど人体と変わらないわよ？」

シヤマルさんが当然出てくるだろう疑問を投げかけてくる。

だが、その『殆ど』の部分を放置する違いが問題なんだ。

「その殆どが肝なんだ。皆の場合成長する時、戦闘方法って『習得』する事になるだろ？」

「そりゃ誰だってそうだよ。」

「いや、俺達の業は…特に本物は文字通り『体得』が必要になる場合がある。」

「文字通り？」

首を傾げるヴィータ。

無理もない。専門書が出たり生きる為に必須の技術じゃなくなった戦闘は、武道やスポーツと言う形で残ってはいるけど、きつとその人たちじゃ『徹』ですら再現できない。

発祥の地の人でも理解できないものを、外から来た上に知るための機能が備わっていない身では理解できないのも無理はないだろう。

「馬鹿みたいに何万と同じ型を繰り返して、それを使って何回も戦

闘をやつて、考えるよりも早く技が出るようにする。他にも、そもそも理論になつてないから感覚を掴むしかないとか。けどさ、成長とかない皆の場合…体が治るって『元に戻る』って事だろ？」

「成程：それで我々が使えないのか。」

先に合点がいったのか、シグナムが少し悔しそうに呟きを漏らした。俺はそれに頷いて続ける。

「俺は守護騎士がどういう風に出来てるのかは分からないけど、作った人間が理解できていない機能は再現出来ていない筈だ。やつてる俺達だつて紙に纏めるとか資料にしろとか言われてもし辛い事を再現できる科学者がいる筈がない。だから、作られた皆には業を習得するのは難しいと思う。」

正しい気配の感じ方とか言われても、説明しづらければデータや理論には絶対出来ない。

そんなものを科学で作れる訳がない。

不可能と知つた皆の表情が少しばかり浮かないものになる。

近接主体のベルカの騎士がその近接戦で負けて、オマケにその技法が習得不能と言われればやるせないのも無理はないか。

「でもあんまり気にしなくていいと思うぞ。」

「何故だ？」

と言うか、正直まつたく気にする必要は無いと思うのだが、シグナムには不思議がられた。

「魔導師には今言つた領域で戦える奴いないから。魔法つてそもそ

も頭で構成するものだし、殆どの奴が扱うマルチタスクが邪魔して極めるって領域まで行かないんだよ。」

理由を説明すると、理解半分不思議半分といった感じで頷く皆。

「だから問題があるとすれば、俺に勝てないくらいだから気にしなくてもいいと思うぜ。」

「ふ…言ってくれ…。」

軽い笑みを最後に、シグナムは丘の出口に向かう。

「世話になったな、今度時間をとって食事でも奢らせてもらおう。フレイア達宵の騎士も連れてきてくれ。」

「了解。楽しみにしてるよ。」

シグナムに続くように、皆一声ずつかけて丘を降りていく。

俺は少し空を見上げる。

管理外世界の魔導師の活動に気づけなかった。

それは思ったよりも、魔法を扱う皆には衝撃だったらしく、宵の騎士の皆ですら訓練や情報収集を始めている。

フェイトやはやても仕事後に訓練しているようだし、元々一番訓練時間の長いのが更に根をつめている。

…兄さんは、やりすぎで膝を壊した。

幸いにして、フィリス先生や神咲さんのお陰で完治したが、昔は姉さんを完成させるのが限界だと言っていた。

なのは達はまだ任務についているし、止めたほうが『安全』なのは確かなのだが…

「リライヴも…敵に回すんだよなあ…」

それを考えると、とめると言う発想が薄らぐ。

命の危機を彷徨う領域での鍛錬や戦闘。それは確かに危険ではあるのだが…

兄さんが、美沙斗さんと同域に辿り着いた最年少なのは、間違いなくその膝を壊した訓練のお陰だ。

実際、姉さんと修行仲間ではなく師弟なのだ、姉さんも十分人間の領域を外れているのだ。

そして、リライブは恐らく同じ事やって生き残ってる魔導師で、恐らくなのはも他の誰も、戦うとなれば引かないだろう。

普通の訓練じゃ、それどころか同じ事しても差を維持するだけで絶対勝てない。

俺がやるから引つ込めと言つならそもそも管理局に入れてないし。

「普通に止めても『大丈夫』で終わるし…無理に止めるなら局に入る前…だよな。」

一応忠告だけはしておく事にして、様子を見るしかない。

俺は変わった空気に少し不安を感じながら、祈るようにしばらく空を見ていた。

S i d e 高町なのは

本来静まり返るはずの夜の丘に、缶を打ち上げる音が響いていた。

光の弾に打たれ宙を舞う缶が、やがてくずかごに向かって飛んでいく。

「ふ……うつ……」

五つの缶のうち、三つがくずかごに治まったのを確認して、私は息を吐いた。

2、300回繰り返すのは一つでも疲れる練習だけど、三つのシューターで五つの缶を打ち上げるとなると本当に大変だ。

シューターの数の方が少ないと、一つ一つを速く制御しなければならぬのは勿論、どの角度へ打ち上げるか、どの順番で打ち上げるかまで最良の判断が出来なきゃならない。

呼吸を整えるのに、お兄ちゃん達に教わったやり方を使う。

リンカーコアを意識しながら、自分と周囲の魔力を感じ取るように、出来るだけ深く一定のリズムになるように息をする。

次第に、とりあえずの疲れが落ち着いていく。

『中々良好ですが、少々急ぎ気味ではないですか？』

落ち着いたところで、レイジングハートにそう指摘された。

確かに、今日は普段より長めに練習した。

いつもやってるフェイトちゃんとはやてちゃんとの夜間練習の後の自主練、どう考えても焦っているようにしか見えない。

それと言つのも…

『魔導師に気づく事が出来なかったからですか？』

「…うん、そう…」

レイジングハートの問いかけに、私は頷きながら答えた。

今回、私は本当に無力だった。

地球の事件に手を出せない事は分かっていたから、本当にそれだけなら、仕方ないって…あんまり言いたくはないけど、仕方ないって言う事は出来た。

でも…魔導師がいて、魔法を使っていて、それでも気づけなくて『仕方ない』なんて言える訳がなかった。

クロノ君の話だと今回の違法魔導師は、人に気づかれぬ魔法の扱いが得意なかわりに大きな効果を及ぼす魔法が殆ど使えないって話だった。

だけど…魔法を扱っているのに、気づく方法がないなんて事はない。ない。

「変に悔やんでもどうしようもないのは分かるけど…せめて同じ事にならないように強くなっておきたいんだ。」

『分かりました、では互いに精進しましょう。』

レイジングハートから返って来た声は、いつもと変わらない機械音
声の筈なのに、何故かとても温かった。

昨日より今日、今日より明日、少しずつでも前に進んで行こう。
また、同じ事にならないように…

S I D E O U T

「…で、無茶なのが分かっていてお前まで修行量を増やしてどうす
る。」

「いや、量を増やすと休めないから兄さんや姉さんとの戦闘時間を
増やしたいんだよ。やっぱり実戦形式のがいいし。」

結論として、どれだけやばい状態になってもカバーできる戦力にな
る事を選んだ俺は、兄さんにそれを頼んで睨まれていた。

膝壊した経験から無茶を止めたいのは分かるんだが…

「どうしても駄目なら…俺が一人で何とか修行するしかないけど、監督がいないほうが無茶すると思うなあ…駄目？」

「どんな脅迫だこの馬鹿者が。」

呆れるように息を吐いた兄さんは、鋭い視線で俺を見据える。

「そこまで言うのであれば本気でやるぞ、ついて来れるか？」

「這ってでもついてくさ、俺だって元々本気なんだ。」

元々全てを救うと言う無茶な理想のための力なのだから、無茶が出るのは当然。なのはがやりきると言うのなら、俺はその上を行くまでだ。

誓って兄さん達と二刀を手に、夜の森へ向かった。

第十九話・爪痕は心の中に（後書き）

元々のペースですら墜ちたなのはが…（汗）
強く生きてください（笑）

第二十話・配る心の在処

第二十話・配る心の在処

空を駆けるなのはとヴィータの姿を眺めつつ、ほぼ無傷である事を確認した俺は軽く息を吐いた。

この分なら俺の出番はないかな…

この頃調子が悪そうなのはだが、どうやら事も無げに任務を終えたらしい。

ヴィータもいることだし、無用な心配だったか？

と、ことの終わりが一番油断しやすく狙われやすいのはどうやらどこも同じなようで…

視認できない機械が動いているのを感じた。

高速移動魔法で接近すれば間に合う距離だ。
俺は割って入ろうと飛行して魔法を使い…

発動直前に妙な空間に包まれ、落ちる。

「っち！」

体制を整えて着地…

しよつとしたところで、何かにとらえられた。

「が…っ！…！」

右腕を捻った状態で胸から地面にたたきつけられる。

少なくとも、周囲にこんな真似の出来る奴はいなかった。
フェイト並の速度の奴でもいたのか？
それも…

魔法じゃなく、機械で。

「何者だ貴様、こんな所で何をしている？」

「それじゃあ話せませんわよトーレ姉様。」

後からついてきたのか、間延びした声が聞こえてくる。

「心配は無用だよお姉さん。何のよう…っ…」

背中を踏まれ、軽口をたたく余裕がなくなる。

「貴様の話は聞いていない、質問に答えろ！」

「あらあら…どうせなら、あれとお仲間が聞いたらどうです？」

相変わらず鋭い声と間延びした声で話す二人の女性の声。
俺は腕を捻られた状態で体を起こされる。

「答えろ、貴様は奴らの仲間か！？」

背中からする鋭い声。

俺はわざわざ起こされたからなのは達の様子を確認しようと思っ…

墜ちて行くなのはの姿を見た。

かなり遠目なので細かくはわからないが、なのはは墜ちていき、ヴ
イータはそれを追って降りていく。

間に合わなかった。

理解した俺の頭が急激に冷えていく。

魔法は使えないようだが、内的強化とデバイス強度は特に問題ない。
そこまで認識した時点で、俺は思考を断ち切った。

逆手に左の刀を手に反転。

拘束されていた右腕を折るが、捕らえていた対象の両目を一閃で切断。

折れた腕をつかんでいた手が放れたところで徹込みの上段蹴りを対象の側頭部に直撃させる。

対象が崩れ落ちるのを確認したところで、もう一人いるはずの対象が不可視化しているのを確認。

不可視化したまま逃走を試みる対象に対し…

模倣・『射抜』

対象の右肩を貫く。

刀を抜くと対象が前方に倒れ込んだ為、首に跳び蹴りを放つ。

身じろぎする程度になった。次は…

違う。

次はない、次は必要ない。

目的は殺す事じゃない止める事だ。

戻れ…

戻れっ！！！！

頭を押さえながら深く深呼吸。
徐々に心拍数などが戻ってきて…

「あたたたたた…」

折れた腕が痛くなって肩を押さえる。

くそー…自分でやつといてなんだがマジで容赦ないな、敵にも自分にも。

腕の痛みと倒れ伏せる二人の女性を見ながらそんな場違いな感想を抱いたいと、眼鏡をかけた女性がよろよろと起き上がる。

「こ…殺す気でしたわね…」

「半分機械のお前等がその程度で死ぬ訳ないだろ。」

「な…」

驚く眼鏡の女性。

遠目なら兎も角俺がこの距離でわからないはずもない。

魔導師や機械位しか戦闘技法がない管理世界じゃ俺のような戦闘者の事を分らないのも無理もないが。

「まあいいや、とりあえず管理局に突き出すが、文句は言うなよ。

治して貰うようには言って」

「ライドインパルス！！！」

刹那、二人の姿が消えた。

人間の視認限界か…俺でもほとんど見えなかった事を考えると、あまりとらえられる奴はいないだろう。

しかし片腕で二人を押さえておく訳にもいかなかったとは言え、あっさり逃げられるとは…

まあ…いいや。今はとりあえずなのはだ。

「頼むから死んでくれるなよ…」

願ったところで結果が変わるわけでもないが、願わずにはいられなかった。

俺はなのはとヴィータを回収しに来た管理局の一团と共に病院まで転移する。

集中治療室に運ばれる姿を見送った後、結果を待つ為一室でヴィータと並んで座る。

「じゅめん…」

ヴィータが静かに謝ってきた。

「何が？ヴィータの計らいがなかったら俺ついてこれなかったんだけど。むしろ感謝してるぜ。」

犯罪者であるリライブと犯罪者予備軍にあたる危険人物の俺は、局関連での事件解決に関わった記録を消されている。

おまけになのはと兄妹である事も伏せているため、それ程局の人に知られていないのだ。

俺が好き勝手やってるのは事実だし功績も特にいらなから気にしてはいないが、こういう時はやはり不便だ。

「そうじゃねえだろ！あたしが側にいたんだよ！今日に限らず普段から！ずっと！！なのに…不調にも何にも気づけなかった…」

掠れていくヴィータの声。

ん…

「ヴィータ達は騎士だったか？結構甘いんだな。」

「どづいう…意味だよっ…」

涙目を細めるヴィータ。

納得がいかないという部分と今回の反省で緋い交ぜになってうまく答えられないんだろう。

どういうも何も、騎士にしては甘いとそのままの意味なのだが…別に馬鹿にしたつもりはない。

こんな時まで辛口でも嫌なだけだ。

とは言え、ヴィータに気負われるのは俺としては本意じゃない。

俺は優しく続けた。

「他の局員はどうか知らないが、なのはは戦闘者の俺や兄さん達が戦うことを許可してるんだ。たとえ味方に裏切られて背中から刺されたんだとしても、読み切れなかったなのはのせいだ。少なくともヴィータが謝る必要は全くないよ。」

言いつつヴィータの頭を撫でると、思いっきり払われた。

「子供扱いすんなよ！」

シユテルでも大丈夫だったから問題ないかと思っただが、どうやら気に入られなかったらしい。

人間と言っただけで確実に年下になるヴィータにはちょっと問題だったか。

「感謝してるんだよ。昔は敵ですらあったなののために、本気で泣いてくれてるんだから。」

別に取り繕う事もない本音だったのだが…ヴィータが勢いよく立ち上がる。

「何でそんな気の抜けた事言ってられんだよ！なのはが心配じゃねえのか！！」

「いつ…いつ…」

怒ったヴィータに両腕を捕まれる。

さすがに耐えられなくて顔をしかめると、ヴィータはゆっくり手を離して掴んでいた俺の右腕を見る。

「…おい…何なんだよそれ…」

恐る恐るといった感じでポケットに収めていた右腕を出すヴィータ。ゆっくり力を加えると、曲がるはずのない部分が歪む。

あーあ…ばれたか。

「折れてんじゃねえか！！何で言わねえんだよ！！」

「だってそしたら俺の治療終わるまでなのは治療結果聞けないじゃん！！」

「変に平静保つんじゃねえこの馬鹿野郎！！！！いいから医務室行く

ぞ！！」

左腕を引っ張られて立たされる。

「こんなんほつときゃくつづくのに…」

「んなわけねーだろ馬鹿が！！」

俺はそのまま引きずられるように部屋を連れ出された。

覚悟や責任の話がどうであれ、俺だって気にはなってるんだよ…

治療を受けた俺は、別室でヴィータに遠目から様子を伺っていた事、移動魔法を使おうとして失敗して墜ちたところを二人の女性に捕まった事、倒して逃げられた事を伝えた。

「お前がやられかけたって事は…相当の相手だよな…」

「いや、実力そのものはそこまでは。フェイトと同クラスか僅かに上か位だな。」

納得しかけたヴィータが、フェイトも十分一流クラスだと首を振る。対なら魔導師にはほぼ確実に負けない俺とか、異常に強いリライヴのせいで感覚麻痺してたんだろっか？

「けどよ、それ位ならお前がやばくなる訳ねーだろ。」

「それなんだがな…魔法が使えなかったんだ。」

「…そっぴい移動魔法使おうとして墜ちたとか言ってたな、どういう事なんだ？」

どういふも何もこの手の技術に明るい訳じゃない俺はそれほどたいした説明が出来ない。

『武装実体化、身体強化までは問題ないようでした。』

「空中でいきなりそんな状態にされて魔法陣展開による歩行も出来ないまま、着地前に視認範囲外から超高速で接近されたんだ。さすがにちよつとな…」

「そりゃ…確かに無理か。」

頬を引きつらせながら同意するヴィータ。だが、何かに気づいたように真面目な表情に戻す。

「でも魔法が使えないとなると何でそいつらは高速移動なんて出来たんだ？」

ヴィータの疑問に、まだ伝えていない事を思い出す。

「ああ、言ってなかったか。逃げた女性は半分機械…多分人を改造した状態で、使ってた力も魔力は感じられなかったから別物のエネ

ルギーだと思う。」

「お前そういう事は普通…いや、そーいやお前この手の『変わってる』系の話は本気で気にしねえタイプだったな。」

呆れ混じりに呟くヴィータ。

確かにヴィータの言うとおり、生まれや体の材料なんか別にまったく気にしてはいないんだが、それでも戦力を把握する材料としては気にしなければならぬ部分だ。
言い忘れなくてよかった。

必要な説明をした後、資料を残すために書類データを打ち込んでいくヴィータ。

「…ごめん、速人。」

そんな作業中に、ヴィータが沈んだ声で謝ってきた。

「無理もないとは思うが、なのはの事なら気にするなって」

「そうじゃねえ！」

出来るだけ優しく伝えようとしていると、思いっきり叫んだヴィータの声に断ち切られた。

「さっき、なのはの心配してねえのかって言った事だ…骨折れてんの我慢してまで容態聞こうとしてたつてのに…」

「俺関係ならもっと問題ないぞ。大概は気にしないから。」

明るく告げると、それ以上ヴィータは何も言わなかった。

ヴィータは違ったと思って謝ってきたみたいだが、実際は当たらずとも遠からず…って所だ。

確かに、骨折我慢して容態知りたかったのは確かだが…

本気で心配しているなら、道中で何かしらミスしているはずだ。

それを、冷静に的確に判断した上で行動していたから、つかまれるまでではなかったんだ。

そんな余裕のある人間が、人の心配なんてしているのだろうか？

やっぱり、俺はまだ心のない殺し手のままなのかもしれないな…

少し浮かんできた念を、首を横に振る事で振り払う。

事実そうだととしても、受け入れない事を選んだんだ。だと言っのに弱気でどうする。

静かな部屋の中で、俺は改めて決意を固めていた。

第二十話・配る心の在処（後書き）

今回からは、例の事件となのはと速人の課題です。

模倣・『射抜』

使用許可を貰っていないまま、しかし深めに心を殺した状態に入つた為、単なる手段の一つとして見様見真似で扱った射抜。最低限の礼儀か、奥義じゃなく模倣扱いにしてはいるが、性能は美由紀のそれとさほど変わらない。

第二十一話・亀裂から零れた涙

第二十一話・亀裂から零れた涙

S i d e ｝ ヴィータ

なのはが目を覚ましたって連絡を受けたあたしは、すっ飛んで病院に向かう。

「走るなヴィータ。」

「シグナム……」

急いでいたから呼び止められて睨んでしまう。

が、それでシグナムが怯むわけもなく、淡々と言葉を続ける。

「なのはは少なくとも回復しているんだ、飛び込む必要もないだろ

う。」

「む……」

それはそうだけど、気になるものは気になる。

「慌てる前になんと声をかけるかでも考えておいたらどうだ？あのなのはの事だ、お前が戸惑えばかえって励まされるかもしれない。」

「う……」

十分にあり得る話だったから、あたしは逸る気を押さえてなんて声をかけるか考えた。

んで結局：あたしは何も思いつかないまま病院についた。

「あ、ヴィータ、シグナム。なのはちゃんのお見舞い？」

病室が見える位置までくると、ちょうどシャマルがなのはの病室から出てきた。

ダメージが酷かったなのはの治療のため、癒やしが本領のシャマルは一時的に病院預かりになっている。

「二人とも、時間はあるの？」

「今日の仕事は片づいたからな。どうかしたのか？」

シグナムの答えを聞いたシャマルは、病室を見る。

「今速人君が来ててね、折角だから少しくらい兄妹水入らずで過ごさせてあげよっかな…って。」

アイツの名前を聞いて、その状況を思い出す。

皆救うために命懸けで奔走した速人は、それでも『要注意人物』扱いになっている。

二つの事件解決の功績も、危険人物の活躍は犯罪者を増長させる理由になると言うことで、一般には完全に無かったことになっている。

仕事があるとはいえ、あたし達よりアイツの方が遙かに来づらい以上、二人きりになれるならそんな時間もあつた方がいい。

あたしは、考えている間に向けられたシグナムのアイコンタクトに頷く。

「では先に容態から聞いておくか。なのはから許可は出ているか？」

「ええ。立ち話も何だから部屋に行きましょう。」

そうして、あたしらは空き部屋に向かうシャマルに続いて、その場を離れた。

「とりあえず…命に別状はないわ。もう落ち着いてきてるし、今以上悪化することはないわ。」

冒頭から、素直に喜べねえ話だった。

勿論生きてることは嬉しいけど、それが『とりあえず』なのが、間違いない何かあるってことを意味してるから。

「ただ…今回の怪我だけじゃないのよ、なのはちゃんのダメージ。」
「どう言うことだよ、それ…」

訳が分からなくて何か酷いことになってるんじゃないかと怖くなる。

そしてそれは、予想通りだった。

「なのはちゃん、砲撃使うでしょ？まだ整い切れてない子供の身体で、ただでさえ高い魔力をミッド式にあわせ切れてないカートリッジシステムで増幅させながら、しかも管理局でも一握りしかないような魔導師が就く仕事をこなしてきたから…それまでの負担が一気に現れちゃって…」

「けど…アイツちゃんと毎日魔力回復してたし、身体の疲れだつて…」

シヤマルは軽く首を横に振る。

「私達は…守護騎士システムだから。負荷が身体に残って貯まって

いくつて言うのがあまり想像できないかもしれないけど…そう言う
わかりやすく見える疲れとかとは違うのよ。」

シヤマルが告げた言葉に、あたしは黙り込むしかなかった。

何しろあたし達は、何度か死んでは蘇っては繰り返してきたような
もんだ。

まともな人間の『疲れがたまる』何て現象が正しく理解出来るわけ
ない。

「実際どうなの？なのはの具合は。」

「…全身に痺れがあるって。特に足は殆ど動かせないみたい。」

「っ…」

はやての姿を思いだしたあたしは思わず歯を食いしばる。

あれだけの深手だ、何があってもおかしくねえ。

速人の奴は気にするなって言うてやがったけど、やっぱりそう言う
訳にもいかねえ。

責任なんてとりようもねえけど、出来るだけの事はしようと誓って…

「それと…この先もう二度と、魔法が使えないかもしれない。」

そんな誓いすら頭から消し飛ばす程、衝撃的な事実を聞かされた。

「冗談…だろ…」

いきなり聞かされた最悪の事実には、あたしは正気ではいらなくなつた。

「あいつが…どれだけ魔法が好きか知ってたんだろ？どれだけ頑張つて来たか知ってたんだろ？」

子供所か、優秀程度の魔導師なら、あたしらベルカの騎士が負けるわけがねえ。

たとえ魔力だけあつたつて、負けるはずがねえんだ。

そんなあたし等が本気の時に負けて、それからもずっと認められる位の活躍をし続けて来たのはが…よりもよって魔法を使えなくなる何て…っ！！

本当に思わず、シャマルにしがみついていた。

「あたしに出来る事ならなんだってする！だから何とか」
「グイータ！！」

シグナムの一喝にシャマルの服から手を離す。

「私ですら惜しいと思えるのだ、気持ちには分かんないが…本当に辛いのはなのはだろう、情けない顔をするな。それに、まだ確実に治らないと決まったわけではないのだろう？」

「ええ、私達も最善は尽くすわ。信じて…くれる？」

ステレオで声をかけられてうな垂れる。

分かってる…八つ当たりになくなってねえ事くらい。

「く…っそお…ちきしょう…」

あたしは両手を握り締めて俯いていた。

どれくらいそうしていたか分からないくらい時間がたって…

「そろそろ行きましようか。」

「ああ…」

シャマルの取り繕った声に続いて、あたしは絞り出すように返事を返した。

S i d e 〉高町なのは

お見舞いに来てくれた速人お兄ちゃんは、何を言うこともなく私を見ていた。

「心配かけちゃってごめんね。こんな状態じゃ家の手伝いだって出来ないし…」

足がほとんど動いてくれない今、本当に出来ることが少ない。ほとんどの時間を修行に割いているはずのお兄ちゃんがわざわざ来てくれた以上、本当に心配をかけたんだろう。

「思ったより余裕なんだな、魔法使えなくなるって言うのに。」

「まだ…そう決まった訳じゃないよ。リハビリも何もしてないんだから。それに、空に戻りたいし。」

怒っていると言うよりは少し冷めた声を返してくるお兄ちゃん。

私は強がって返したけど…正直余裕じゃなかった。

本当は遠い夢の話だったはずの魔法を失う事は、この二年の内に耐え切れないほど辛い事になっていた。

けど、お兄ちゃんからもレイジングハートからも忠告は受けていたし、自業自得だからあんまり泣き言は言えない。

せめて前向きにと思って返したんだけど、お兄ちゃんは首を横に振る。

「やめとけやめとけ。不調を黙って自爆するよつなアホがいても何の役にも立たないから。」

胸が痛む。

言われても仕方ないんだけど、やっぱり辛い。

…なんでこんな事を言うのか、そう考えて一つ思い当たる事があった。

管理局を止めさせる。

元々、私が戦うのを望んでいたわけじゃないはず。私が決めたら動かないから、無理矢理とめる気が無くて見過ごしたただけだ。そんな私に、これを機に管理局を辞めさせたいんだろう。でもなきや、甘えてる子を更にもてはやす位の駄々甘なお兄ちゃんがわざわざ酷い言い方する筈がない。

「ま、思いつきで始めたお遊戯の結末としては妥当だろ。だいたい向いてないんだよ、力を振るうなんて。」

さすがに、ちょっと黙ってられなかった。

「思いつきなんかじゃないよ。」

「じゃあ本気で真剣にまじめにやってもこの程度なんだろう？」

「っ……」

けど、お兄ちゃんは冷めた息を吐いて、肩をすくめるように一蹴する。

こんな失敗した身でそう言われたら言い返せなかった。

「元々許可が精々だ、戦って欲しかった訳じゃない。コレでやめとけ。お前だつて死ぬより一人で留守番してる方がましだろ？これ以上迷惑」

「何で……」

別に自分から心配してくれとか応援してくれとか頼む気はないけれど、わざわざ来て何でこんなに言われたい放題言われ続けなきゃいけないのか。

そろそろ我慢できなかった。

「何でお兄ちゃんにそこまで言われなきゃいけないの？一回失敗しただけで。」

「だけってまた軽いな、死んだらどうする気だよ。取り返しなんて」
「その取り返しつかない事を散々やってきた癖にヒーロー気取りのお兄ちゃんにそこまで言われる理由無いよ！！速人お兄ちゃんがいつ無茶やめたつて言うの！？」

気が付けば、思いつきり叫んでいた。

自分の出す声に身体が痛むけど、それさえ気にせずまくし立てる。

「出でつて……出でつてよ……！！」

二回言うと、お兄ちゃんは背を向けて病室を出る。足音もなく扉をでたお兄ちゃんの姿が閉まる扉に隠れて見えなくなる。

そうなつてから、さっきまで間髪いれずに私をなじつて来ていたお兄ちゃんが何も言い返して来なかった事に疑問を感じて…

物凄く残酷な事を言ったことに気が付いた。

夢を得た理由がそのまま叶わない原因になるなんて、残酷じゃなきゃ何なのか。

傷つけた…なんてものじゃない。
たとえどんなに喧嘩したとしても言っちゃいけないことを言ってしまった。

「っ…っえ…」

しばらくは我慢しなきゃと思ったけど、もうだめだった。
私は抑えきれない声を上げて泣いた。

S I D E O U T

病室の外に出ると、ヴィータとシャル先生とシグナムがいた。

…やれやれ、睨まれてるなあ。

シグナムはあまり分からないが、ヴィータとシャル先生のそれは明らかに厳しい視線だった。

指一つで指し示された別室に向かって、まるで連行されるかのように連れて行かれ…

ヴィータに服を捕まれ、壁に背をおしつけられた。

「何でダメエがなのは泣かせてほしい出て来てんだよ!!」

割とまじめに怒っているらしいヴィータに、本気でなのはを心配してくれていることが少し嬉しくなる。

泣かせて出てきた俺の台詞でもないが。

「いやまあ…出て行って言われたし。」

「何言ったらそうなるんだよ！アイツが泣くなんて！！」

怒鳴りかかってくるヴィータの手を服から外す。

はたく訳にも行かないから拘束を抜けるための技法で。

が、あしらわれたとでも思ったのか、余計に怒りを表したヴィータは拳を握る。

「く…このっ！」

「止めるヴィータ。」

憤るヴィータを制するように立ち位置を変えて俺の前に立つシグナム。

どこか真剣に俺を見るシグナムから、少しばかり嫌な空気を感じる。

「俺を殺す気なら、避けられないくらいの範囲攻撃がオススメだぜ。」

「覚えがない…と言ったところで貴様には無駄か。」

シグナムの肯定に、シャマル先生とついさっきまで怒鳴っていたヴィータまでもが硬直する。

「出来れば勘弁して欲しいんだけどな。何でそうなった？」

シグナムは答えない。

けど、どうも必ず殺すって感じじゃない。

探るような仕方なくと言うような…

まあ、いいか。気配読んだ位で心まで読めるわけでもないし、何もないと信じよう。

「何でもないならそろそろいくぜ、俺もちょっとやることがあるんだよ。」

なのはの様子を確認できたし、その体調も分かった。これ以上ここにいる必要も意味もない。

「待てよ！何でなのはを泣かすような真似したか言えってんだよ！」

どうしても訳が必要らしいヴィータが部屋を出ようとする俺にまだ問いかけてくる。

「中学にすら満たない女の子が泣いた事に、今の状態以上の理由がそんなに必要なのか？」

「その辺のガキならともかくあいつが簡単に泣くもんかよ！何しやがった！！」

俺の問いに返されたヴィータの答えは、酷く的確なものだった。

俺は目を閉じて医療器具につながれたなのはの姿を思い返す。

「そつだな、泣かないよなあいつ…」

呟くようにそれだけ言い残して、今度こそ部屋を出た。

第二十一話・亀裂から零れた涙（後書き）

速人の事件参加記録の消去については、歴史書とか一般に触れ回るのが避ける程度の情報統制です。

規模の大小こそあれこれくらいの事は組織ならどこでもやっているかと。

次回から少しなのは主体の話になります。

第二十二話・リハビリ開始

第二十二話・リハビリ開始

Side 高町なのは

直接的な怪我が塞がって落ち着いた頃、リハビリを始める事になった。

のはいんだけど…思っていたよりも酷かった。

「つつっ…」

身体を支えきれずに平行棒から崩れ落ちた私は痛みに顔を顰める。

「なのはちゃん！大丈夫！？」

「は、はい…」

どうにか返事を返したけど、痛みと言うよりはショックがあった。自分の身体が思うようにならないって言うのは思った以上に辛い。車椅子でもいつも笑顔だったはやてちゃんに改めて感心する。

「ただ、いくら治るか分からないとは言え初日から上手くないかない程度でめげてられない。」

「もう一回…お願いします。」

「なのはちゃん…あまり無理は…」

「はい。今度はもっと慎重に行きます。」

勿論いきなり上手くは行かないのは分かっている。

けど、慣らすにしてもしっかり確実にやっていかないといつまでも治らない。

当然、無理は出来ないけど、まだ大丈夫。

平行棒に立たせてもらった私は、腕の力を抜かないように気を配りつつ少しずつ足を動かした。

「ふう……」

今日は休む事になった私はベットで息を吐いていた。

いきなり治るものじゃないのは分かってはいるけど、それでもこうして歩けないと言う状態を体験すると、やっぱり落ち込んでしまう。

私は軽く首を横に振る。

病は気からって言葉もあるし、皆に暗い顔を見せたらただでさえ迷惑かけてるのに余計に不安に巻き込んでしまう。

落ち込んではいられない、しっかり休んでまたリハビリに専念しないと。

そんな決意をする中、びっくりする人が病院に姿を見せた。

「こんにちは、なのはちゃん。」

「フィリス先生!？」

魔法関係に関わっていない筈のフィリス先生が、管理世界の病院にどうして来れたのか不思議で、思いつきり驚いた。

そんな私の様子がおかしかったのか、微笑むフィリス先生。

「リンディさんが色々してくれたみたいで。手が空いたらお母さん達も来るはずよ。」

フィリス先生の言葉に少し嬉しく、同時に悲しくなる。

やっぱり速人お兄ちゃんの言うようにいろんなところで迷惑になっている。

少ししてシャマル先生も来て、手にしている紙の束をフィリス先生に渡す。

「それじゃあすみませんけどよろしく願いします。」

「魔法に明るくない私に出来るのはこれ位ですから。」

しばらくして、資料を側の台に置いたフィリス先生は、私の身体に手を伸ばす。

「それじゃあちよつと我慢してね、なのはちゃん。」

「えっ…あ、はい。」

女の子でも可愛いと思える位の笑顔でフィリス先生にそう言われ、治療なんだろうと何となく納得した私は反射的に答えて…

身体中から鳴り響く鈍い音につられるように何回も短い悲鳴をあげる羽目になった。

「はい。後は包帯を巻けば終わりです。」

「は、はい……」

あくまで治療だからここまで痛いとは思わなかった。

でも、よく考えたらあの恭也お兄ちゃんですら病院に行くのは気が進まないんだ、これくらいの事はあってもおかしくなかったのかも……

「でも本当に無茶したのね、魔法の事はよく知らないけれどあちこち傷んでいるもの。」

包帯を巻かれながら、傷んだのはたった今じゃないのかとちょっと聞きたくなった。

魔法戦より痛い何てどんな治療なの。

「はい。取りあえずコレで身体に出来ることはやれたかな。」

けど、包帯を巻き終わった所でそれが間違いだって気がついた。

身体にあった妙な重さや痺れが引いている。

それに動かそうとするだけで痛かった部分も楽になっている。

「魔法のことは分からないけど、身体は大丈夫だと思うわ。きっと正常になると思う。」

「本当ですか？」

魔法だけの影響で歩けなかったはやてちゃんを思うと安心は出来ないけど、ちよつと嬉しくなった。

フィリス先生にはバレちゃったのか笑顔をより明るいものにする。

「足腰を中心に鍛えられてるのが良かったのね、速人君達に感謝しないよね。」

いきなり出た名前に、胸が痛む。

すぐに返事を返せなかったけど、表情にだけは出さないように堪える。

「え、えつと…さっきの整体と包帯の巻き方を教わってもいいですか？」

「あ、いいですよ。私もそんなにこまめに来られるわけじゃないですから。」

「それじゃあなのはちゃんはずっくり休んでね。急に無理してもリハビリにならないから。」

急かすようにフィリス先生の手を引いて出て行くシャマル先生。

病室が静かになったところで、私は胸を押さえて思い出す。

『その取り返しつかない事を散々やってきた癖にヒーロー気取りのお兄ちゃんにそこまで言われる理由無いよ!!』

あれは…何があっても言っちゃいけない言葉だった。

私を守るために野良犬さんを殺した速人お兄ちゃんに怯えて、そんな私に謝ったお兄ちゃんは、それ以来何一つ殺していない。

私や管理局の人とは違う『本物』のお兄ちゃんは全てが守れないことを私よりずっと前に身を以って分かってて、それでも…まるで自分の身を削るように全てを守るために力を尽くして…

そんな速人お兄ちゃんを、よりもよってその原因になった私が否定した。

自分の全てだったプレシアさんに捨てられて崩れ落ちたフェイトちゃんの姿を思い出す。

…私は、あれと同じ事をお兄ちゃんにやったんだ。
しかも見舞いに来てくれていた。

「つく…泣いても仕方ない…仕方ないの…」

今更泣いてもどうにも出来ない。

私は強く目を閉じたまま悲しさを堪えていた。

「お姉ちゃん、恭也お兄ちゃん。」

フィリス先生が帰って間もなく、二人が来てくれた。

「具合：どう？」

「フィリス先生が来て、治して貰ったから結構良くなったよ。」

少し不安そうに聞いてくるお姉ちゃんに明るく返す。

「歩けるかどうかも：魔法が使えるようになるかも分からないんだつたな。」

「：うん。」

ちゃんとリハビリをこなして治すつもりではいるけど、絶対に治るとは限らない。

恭也お兄ちゃんは余り顔に出ないから分かりにくいけど、少し怒っているように見えた。

「無理を重ねればこうなる、止めたはずだぞ俺は。」

「恭ちゃん…」

一度恭也お兄ちゃんも、右膝を怪我していた。

お父さんの怪我と同時に師匠がいなくなったお姉ちゃんの為に、お兄ちゃんが師匠になるだけの実力を身につけた。

その無茶な訓練の結果、お兄ちゃんは右膝を痛めて、剣士として大成する可能性を失いかけて、私生活もままならなくなった。

治療のおかげで今は治っているけど、そんな体験をした恭也お兄ちゃんも怒るのは当然だった。

「…ごめんね、心配かけて。」

「なのは気にしないでゆっくり身体を治して行けばいいよ。」

お姉ちゃんは気遣っていつてくれたんだと思うけど、私は首を横に振る。

「そんな訳には行かないよ、ただでさえ管理局は人手不足なのに…私でもエースなんて呼ばれる位なんだから、早くちゃんと治さないと。」

自慢したいわけじゃない。

実際ライブちゃんには手も足も出ないし、速人お兄ちゃんにも勝てない。

けどそんな私でも一握りの実力者に入るくらい、管理局は人手不足なんだ。

「だったら尚更だ。ちゃんと治すなら早くは行かない。リハビリまで無茶をする気か？」

「それは…」

そう言われると、返す言葉がなかった。

「…うん、これ以上迷惑かけられないもんね。焦らないように頑張るよ。」

また無茶して今度こそ大事になったらいけない。

改めて反省した上で返事をしたんだけど、恭也お兄ちゃんには何でか余計に不安な表情をされた。

「そう言えば、速人は来てないの？一回だけ行ったって話は聞いたけど…」

名前は出るとは思っていたけど、不意打ちだと取り繕うことも出来なくて俯いてしまう。

「…何かあったのか？」

「ちよつと…だけ。」

速人お兄ちゃんとも一緒にいるはずの恭也お兄ちゃん達に隠しても仕方無い。

私は出来るだけ気持ちを落ち着けて、話すことにした。

「速人お兄ちゃん…許可はしたけど戦わせたいわけじゃないからって、管理局やめないかって言ってきたの。」

「そつか…速人の気持ちも分からなくはないけど、決めたなのはがまだ続けたいんだから、あんまりよくないよね。私だって剣を捨てろって言われたらちよつとムツとくるし。」

お姉ちゃんが返してくれた言葉は、私と同じ気持ちだった。

けどお兄ちゃんは少し様子が違って、難しい顔で何かを考えている。

やっぱり、恭也お兄ちゃんも私を戦わせたくないのかな…

「…速人はなんと言った？」

「恭ちゃん聞いてなかったの？」

真剣な表情で私に問いかけてくるお兄ちゃんは、割って入ったお姉ちゃんの額を小突く。

…内容まで細かく話すと告げ口みたいになりそうで嫌だったんだけど、実際にあつたこと言うわけだからしょうがない。

「無茶して墜ちる人がいても迷惑だ、一人で留守番してても死んじやうよりいいって。」

「うわ酷い言い様…」

すぐにそう反応したお姉ちゃんと違って、恭もお兄ちゃんは何かを考えるように目を閉じる。

少しだけそうしていたお兄ちゃんは、腕時計を確認してから私に視線を移す。

世界間を自由に移動できるわけでもないし、転移担当の人がいないと帰れないお兄ちゃん達は地球に帰るタイミングを決められているんだろう。

「そろそろ帰るが…無理はするなよ、なのは。」

「うん、ごめんね。」

「それじゃあまたね、なのは。」

先に出たお兄ちゃんに続くように笑顔で手を振って部屋を出るお姉ちゃん。

私も手を振り返し…

扉が閉まるとまた一人になる。

一人になると…取り繕う必要がなくなるから、色々考えてしまう。

管理局を辞めさせる為に色々と言ってきた速人お兄ちゃんに、最後まで難しい顔をしていた恭もお兄ちゃん。

私、戦わない方がいいのかな…

人に自分の道を決められるような事はしてきてないけど、どうしても浮かんでしまう考えを、私は首を振って振り払う。

けど、お父さんが怪我したときの事も知っているのに、今の今まで私が管理局にいる事に対しての家族の気持ちを考えていなかった事に今更気が付いたという事実には、私は戦わない方がいいのかという考えを消し去る事ができなかった。

それから、幾つかの月日が経った。

フェイトちゃんもユーノ君も、仕事の時以外は殆どと言っていいほど病院に来てくれたし、はやてちゃんたちも結構様子を見に来てくれた。

魔法を知っている人たちは皆来られるようにしてくれたみたいで、アリサちゃんやすすかちゃんも顔を見せてくれた。

ただ…喧嘩して以来速人お兄ちゃんだけは来てくれていなかった。

そんな中、たまたま皆がいない時間が重なった今、私は病院の庭にあるベンチで深く息を吐いた。

整体を受けながらの治療に、足は少し使えるようになってきていた。

だけど…

「っ…」

シューターを精製しようとして走った激痛に胸を押さえる。

魔法が、未だにこの有様だった。

このまま…治らないのかな…

足が治ってきていることが余計に魔法が使えない事を示している気がして、悲しくなってくる。

何で治ってきてるのが身体で、魔法が使えないままなのか。

こんな事なら身体じゃなくてリンカーコアの鍛えかたでも教えてくれれば…

「違う…速人お兄ちゃんのせいじゃない…」

浮かんできた考えを振り払うように首を振る。
過剰な訓練と仕事を大丈夫でも無い癖に大丈夫と言ってやってきた
のが原因…つまりは自業自得。

なのに、人のせいにしようなんて虫が良すぎる。

「っ…」

それでも、魔法が使えないまま終わってしまったのは悲しくて…
私は胸を押さえて泣きたくなるのを堪えていた。

S I D E O U T

第二十二話・リハビリ開始（後書き）

事前に鍛えていたため補強があつた身体は早く治つて、逆に地球の魔導師に気づけなかつた為度を増していた魔法訓練の影響で魔力の治りは悪くなっています。

出てもないのに名前だけは出ずっぱりとは恐るべき主人公（笑）

第二十三話・真意

第二十三話・真意

S i d e 〉 高町なのは

レイジングハートこそ一緒にいたけど、一人静かにベンチにいたはずの私の耳に、唐突に静寂を破る音が聞こえてきた。

「きゃっ!」

「にゃ!？」

悲鳴に続くように誰かが倒れたような音。

誰もいないと思っていたからいきなり聞こえた声と音にびっくりする。

慌てて声のした方を見ると…

前のめりに倒れている女性の姿があった。

その少し前に、紫色の髪が落ちている。

「いたた…うう…外でも転ぶことになるなんて…」

痛そうな転びかたから立ち上がったその人は…

「那美さん？」

「あはは…格好悪いところ見られ…」

いつもくーちゃんと一緒に神社の巫女さん、神咲那美さんだった。

と、那美さんは落ちている髪に気がついて、慌てて拾うとはたいてからそれを被る。

「は、はじめまして、ファリンです。」

問。

…物凄い今更感にツッコミを入れることすら忘れて硬直していた私。

「え、えっと…はじめまして、ファリンさん…」

取りあえず合わせてみたけど、なんだかとても痛々しい。

被った髪の間隙から元の亜麻色の髪が見えるのが特に。

「レイジングハート、鏡出してくれる？」

『プットアウト。』

レイジングハートから受け取った鏡を那…ファリンさんに見せる。

ファリンさんは鏡に映った自分の髪の様子に気がついて、慌てて直し始める。

少しして、大体整ったところでファリンさんは私の隣に座った。

「…コホン！体調はどうですか？なのはちゃん。」

ちよつとわざとらしい咳払いに続くように体調を聞いてくるファリンさん。

…魔法のことを話しても仕方ないし、心配かけるのも悪いよね。

「大分治ってきてますよ。もうちよつと頑張れば杖無くても歩けそうです。」

ファリンさんは私の答えを聞くと、少しだけ瞳を細めた。

「魔法は…使えるようになりそうですか？」

直接聞かれるとは思っていなかったから少し動揺する。

「魔法は今すぐはちよつと…足が治ったら本格的にリハビリ…です

ね。」

「そうですね… 久遠も遊びたがってましたから、集中もできると思うしぜひ神社にも顔を出してくださいね。」

治らないかもしれないことは伏せて返すと、別名名乗っている意味が全くないお誘いをしてくれた。

ファリンさんはベンチを立つと、私の前で屈んで胸に手を当ててくる。

「きつとよくなります。その時は… なのはちゃんの元気な姿を待っていた人達に、もう少し素直になってあげて下さいね。」

どういう意味か聞く前に、触れられた胸から暖かさが伝わってくる。

…そう言えば… アリシアちゃん治すときにも那美さんに用事が…

私は今更気がついた。

私を治すためにわざわざ来てくれたんだ。それも、本来管理世界に進んでみせるべきじゃない力を使って。

なのに何で変な格好と演技で来たのか何て失礼なこと考えていた。

触れられた手から伝わる暖かさが消えると立ち上がる那美さん。

来たときと同じ道を帰ろうとする那美さんに、私は慌てて立ち上がるようにする。

けど、足も完全に治った訳じゃないからうまくいかず、杖を使って立ち上がる。

「あ、あのっ！！！」

何をどうしたらいいかも分からないまま声をかける。
すると那美さんは振り返って…

笑顔で口元に人差し指をたてた。

…そつだ。

わざわざ隠しているのに、私はいったい何を言うつもりなのか。

それ以上何もいえないまま、那美さんは去っていった。

「あの…レイジングハート、今の…」

『エラーが発生しました、再起動します。』

記録を残しておいたらまずいと思ってレイジングハートに問いかけると、なんだか不安になる音声が聞こえて来た。

『すみませんマスター。5分間程のメモリーが消失しているのですが、心当たりはありますか？』

だけど、続いて聞こえてきた音声は、レイジングハートが気を使ってくれた事を示す内容だった。

「うん、気にしなくていいよ。」

『……分かりました。マスターの為になるのなら。』

…きっと、メモリーを消す前も同じことを思っつて躊躇いなく実行してくれたレイジングハートに、私は改めて感謝した。

那美さんの『おまじない』の後、私の魔力は少しずつ、けど確実に回復していった。

病院の人やはやてちゃん達にはごまかすのが大変だったけど、私だけの事じゃないから下手にはらす訳にも行かなくて、頑張ってくださいました。

そして…

「退院おめでとう…!!…!!…!!」

営業終了後の翠屋の中に、何重かも分からない程の祝いの声とクラッカーの音が響き渡った。

「あーでも本当良かったわ、なのはがちゃんと治ってくれて。」
「にははは…心配かけてごめんねお母さん。」

お母さんに抱きつかれた状態で頬ずりされる。

大勢見ている中だからちよっと恥ずかしかったけど、すごく心配かけたって事でもあるから大人しくされるがままになる。

「だが、本当に感知して何よりだ。いずれお前とも仕合って見たかったしな。」

「あ、ありがとうございます、シグナムさん。」

シグナムさんにそう笑いかけられて思わずたじろいでしまう。

…シグナムさんとやると十中八九模擬戦から『模擬』が抜けそうな気がする。

と、フェイトちゃんが私の手を引きながら小さく首を横に振る。

「駄目ですよシグナム、なのはは治ったとはいえ病み上がりなんですから。」

そう言ったフェイトちゃんに視線を移したシグナムさんは、意地悪く頬を吊り上げる。

「そうだな、執務官試験にすら身が入らない位に心配していたんだからそろそろ安心したいだろうしな。」

「あう…」

何かに刺されたようにビクリと身を震わせたフェイトちゃんは、そのまま肩を落として動かなくなった。

私が入院中に、フェイトちゃんは執務官試験を受けて、落ちていた。

かなり勉強していたし、普通なら受かってもおかしくなかったんだ

けど…

私が心配かけたせいで色々調子悪かったみたい。

次の試験の時にはできる限り手伝おうと思う。

「でも良かったな、なのはちゃん。家でも心配でしようがなかった子がいたし無事完治してくれて何よりや。」

はやてちゃんにそう言われて、ヴィータちゃんの姿を探すと、ヴィータちゃんは私から目を逸らして料理に手を伸ばしていた。

「ホンマに素直じゃないなあ…」

「そうだね。」

そんなヴィータちゃんの様子がおかしくて、同時にやっぱり申し訳なく思う。

物凄く…泣かせてしまったから。

「でもなのは、アンタもよ！学校じゃへらへら笑ってばかりだし、入院して完治に影響出るくらい疲れてるなんて全然気づけなかったんだから！不意打ち喰らった気分だったわよ！！」

「出来てなのはちゃんの家の手伝いとか位だけど、もう少し頼って欲しいな。」

「そうだね、ありがとうアリサちゃん、すずかちゃん。」

無理をしすぎた結果については今回で十分身にしてみた。

これ以上皆に心配かけたくないし、私だって二人がいきなり倒れたとか聞かされたらと思うと平気な顔はしていられないから、気をつけようと思う。

「くうん…」

「くーちゃんもごめんね、心配かけて。」

足元に来たくーちゃんを胸に抱き寄せる。

神咲さんを見ると、静かに笑いかけてくれた。

こうして見ると、本当にいろいろな人に迷惑かけたんだと、改めて自覚する。

それに…

「あの…お兄ちゃん達…は？」

悪いことをしたという事も。

アレから、お兄ちゃん達は一度も病院に来る事はなかった。

そして、今もこの場に居なくて…

「なのは…恭也達は修行で…」

「気にしないでお母さん。私が怒らせちゃったんだから、避けられるのかもしれないし。だから、アレからのお兄ちゃん達の様子だけ教えてくれないかな…って。」

あまり戦いを薦めたがっていなかったお兄ちゃん達が、こんな怪我をしてまだ管理局に戻るつもりでいる私を見限っても仕方ない。

だからせめて、怒らせてしまった皆の様子を知りたくて…

「そんな事…ないですよ。」

唐突に、フィリス先生からそんな言葉が放たれた。

「避けてはいたのかもしれないですけど、怒ってなんていませんでしたよ？速人君は。だって私になのはちゃんを診るように頼み込んできたのも、なのはちゃんの病院に行っても問題ないようにリンデイさんに口添えしたのも、速人君なんですから。」

「え…」

信じられない事実には驚いてクロノ君を見ると、肩をすくめた後に頷いた。

「当の速人から口止めされていたけどね。」

「そんな訳あるかよ！」

クロノ君の声を遮るように、ヴィータちゃんの声が響く。

そんなヴィータちゃんに対して頷いたフィリス先生は、続きを話し

始めた。

「あんな怪我で入院して、魔法まで使えなくなるって聞いて辛くない訳がない。だから、もし治るまで傍にいてって言われたら、修行そっちのけでもずつと病院に泊り込むつもりもあつたつて。なのに、病院に行つてすぐ謝られて…」

「あ…」

速人お兄ちゃんが見舞いに来た時、確かに私は謝つてた。

「どうせ友達の前でも、笑顔で『迷惑かけてごめんなさい』つて言うんだろつて考えたら、許せなくなつたから、本音を引きずりだす為になのはちゃんを怒らせたんだつて。管理局にいたら迷惑になるつて意味の悪口を、沢山言われたんじゃないかな？」

心当たりがありすぎた私は、寂しさや不安が薄れていくのを感じる。

何度も聞いた事だ。

心を凍らせるなつて、その結果は俺みたいなものだつて、そんなものが幸せでもいいものでもある筈がないつて。

「本当は、なのはちゃんがいい子に振舞う必要がないように損な役を引き受け続けるつもりだったみたいだから、黙っているように頼まれてたけど、当のなのはちゃんが誤解したまま悲しんでるのもよくないからね。」

フィリス先生が全部を話し終えたところで、頬を流れる冷たさに気づく。

取り返しのつかない事を言って、嫌われたって思ってた。けど、そんな事ばかり考えていた私の我慢を取り除くのが目的だったなんて…

「嬉しい…のに…何で…」

泣いている事に気が付いた私に、フェイトちゃんからハンカチが差し出される。

「良かったねなのは。」

私はそれを受け取ると、静かに頷いた。本当に良かったって心底そう思ってた…

「そういう事なら迎えにいこか。もうなのはちゃん避けとつても無駄何やし。」

「え!?!」

はやてちゃんの提案に反応したフィリス先生の様子がおかしくて、少し嫌な予感がした。

「帰っていない。」

「え?」

「恭也たちは修行に出て一度も帰っていないんだ。それなりに大掛かりな修行になっているはずだしな。」

お父さんがアツサリといった台詞に、不安が戻る。

帰ってないって…もう半年近くなるのにそんな期間一体何を…

「その場にいたのにお前を守りきれなかったと、かなり後悔していたようだったからな。それなりに無茶をしているんだろうが…」

「それが分かっててどうして!!」

「速人や恭也がなのは止めたか？」

無茶の結果は知っているはずのお父さんが止めなかったことに怒ると、静かに返された言葉に反論出来なくなる。

お母さんが、そんなお父さんの隣にで涼しげな笑みを浮かべる。

「待つ側が心配なのはお母さんも分かるけど、信じてあげて。」

何一つ文句をいう事も出来なくなった私は、結局不安を我慢する事になった。

…速人お兄ちゃんの馬鹿。

悪気はまったくないのはわかっていたけど、そう思わずにはいられなかった。

S I D E O U T

第二十三話・真意（後書き）

那美さんの変装がフアリンな件について。

知ってる人は知ってるとは思いますが、とら八三時、ルート次第で那美さんは月村家で『メイド』になります。（原因は恭也と同じなのに恭也は主人待遇。）
その辺含めて色々見て原作引継ぎの名残と見て問題なさそうと判断した為こんな形で出しましたが、混ぜるなど言う方がいたらすみません。

一方行方不明の主人公一行ですが、半年間学校は放置です。武者修行名目で恭也も学校行ってなかった時期があるので御神の家で本気で修行すると決めたらそれ位は許可降りるはずという事で。
次回から、速人の修行編になります。

第二十四話・先の見えない修行（前書き）

今回からは少し時を戻った速人側の話になります。

第二十四話・先の見えない修行

第二十四話・先の見えない修行

「おおおおっ！！！」

深い森の中、俺は迫り来るゴーレムを片っ端から斬り裂いていた。

父さんに教えてもらった、御神の剣士が古くから修行に使っていた森林。

俺はそこで、ディアーチエに出現してもらったゴーレム相手に戦闘訓練を続けていた。

桁外れの魔力を使用して、次から次へと形成されるゴーレムを片っ端から斬り裂いていく。

ゴーレムの生成は、ディアーチエが自分で働かずに魔力を供給する事で動く手駒を作るという事でいかにも王っぽい魔法という事で習得したらしい。

もつとも、得意分野が大魔力広範囲攻撃であるディアーチエにとっては畑違いだったため、アリシアに専用のデバイスを用意してもらう必要があったが…

魔力量は桁外れの為、使えるようになると数が酷い事になった。

数百のゴーレムを解体した所で、唐突に静かになった。

不思議に思っていると、おぼつかない足取りでディアーチエが姿を見せる。

「いい加減にしろ…私ももう限界だ…」

「あ、そうなのか？」

荒れた呼吸をそのままに返すと、ディアーチエは手近な木に背を預けて頷く。

「と言うか貴様がおかしいんだ…小鳥を大本に生まれた私の魔力が尽きかけるまで戦闘が続けられると言うのは異常以外の何物でもないぞ…」

「常人の枠内に収められても困るけどな。ま、いいや。長々とつき合わせて悪かったな。」

俺はディアーチエの肩を軽く叩くと川に向かって歩き出す。

「おい！まだ続ける気が貴様！？無茶をしても身体を壊すだけだぞ！！！」

「問題ない、瞑想するだけだ。さすがにどっかの誰かみたいに関節壊したらやっつてられないからな。」

態度は横柄ではあるもののそれなりに身内を気遣うディアーチエに心配かけないように言う事は言った上で、俺はその場を離れた。

川まで来たところで、座るのに手ごろな岩を探す。

それなりの大きさの岩を見つけたところで、岩の上で手足を組む。そのまま俺は、自然の息吹の中に深く意識を沈めていった。

S i d e } リンフォース・フレイア

なのはの見舞いから一月程経った今、さすがに私は不安に刈られていた。

主の鍛錬量は、それだけ異常なものだったから。

恭也達が行っている鍛錬は既に管理世界でも異常なほどで、管理局員でさえやらないような時間とメニューをこなしていた。

全てを魔法抜きで体現するとなればそれだけの密度が必要なのは私にも理解は出来るのだが…

今主がこなしている修行は、それすら上回っていた。

以前、止めなければまずいと思ったときには…

「兄さんは膝壊すまで鍛錬してた時、倒れるまで鍛錬、起きたら鍛錬って感じでやってたんだって。さすがにそれはやってないから大丈夫だろ。」

と、一蹴された。

しかし…身体の様子を伺って軽く（完全回復を毎回施すと自然治癒能力が失われるため）回復魔法をかけたリ、身体を動かさない瞑想を行ったりと、時々で身体を回復させているとは言え、それでもあの修行量では保たない筈…

「またいつもの病気ですか？いい加減しつこいですよ。」
「な…」

そんな心配をしている私の耳に届いたのは、シュテルの冷めた声だった。

「主が心配ではないのか？」
「心配してどうにかなる方ではないでしょうマスターは。それに、一月ずっと暗い顔で落ち着きなくされていればさすがにうつとおしいです。」
「シュテル…酷い…」

確かに、同じテントで常に不安がっついては見ていて気分はよくないかもしれないが、それにしてもシュテルに言われると酷く痛い。

「マスターなら大丈夫だよ。」

「レヴィ…簡単に言うが…」
「だったら試してみる？」

呑気に告げたレヴィは立ち上がると、小石を拾う。
恐らく、瞑想中の主に投げしてみるつもりなのだろう。

「いいんじゃないですか？もしマスターが何も出来なければ、それを理由に休ませればいいと思いますし。」

「だが、主に石を投げると言うのは…」

「大丈夫大丈夫！マスターならバツチリ斬ってくれるって！」

結局、心配していて疎まれているのは私だったため強く止める事もできず、私達は主が瞑想を行っている場所まで来た。

背後から、大体50メートルほどの距離までつめたところで、私達は足を止めた。

これ以上近づけば、どれだけ忍ばせても足音で気づかれるから。

『それじゃボクが投げるよ。』

一人元気なレヴィが、意気揚々と石を手にした腕を振りかぶる。
普通に投げるならともかく、魔力で身体能力を強化していればこの位の距離であれば余裕で届く。

石は風をきって主へ向かっていき…

唐突に振り返りながら立ち上がった主は、そのまま右手を振り上げる。

硬い何かが高速で川原にぶつかる音と共に、レヴィのすぐ傍の地面に何かがぶつかったような跡が出来ていた。

先に石を投げたはずのレヴィのほうが、石を投げつけた態勢のまま呆然としていた。

瞑想中に石を握っていたとは思えない。

となれば、反転しながらレヴィの投げた石をとったのだろう。

…背後からの投石なのに…なんて出鱈目な動きだ。

主は特に驚いた様子もなく歩いてくる。

「え、えーっと…マスター…元気？」

レヴィは目の前まで来た主から一歩後ずさりながら声をかける。

「怒っていないからそんな怖がるなって。いや、足元に投げた俺も俺だけ。」

主はそんなレヴィの様子に苦笑する。

あれだけ張り詰めた空気で異常な訓練密度なのに、主からは怒りも焦燥感もまったく感じられない。

「すみませんマスター。マスターの訓練密度に不安を訴えたフレイアがマスターの状態を確認したいと。」

「ふーん…。」

シユテルがさらりと私の名前を出す。

主が横目で見て来る中、私はどうしていいかわからず顔を顰めた。

常に冷静でこういう悪戯めいた意地悪をする部分は恭也と似ている。

「ま、俺に無理があるかどうかは、そこで見てる二人に聞く事にするさ。それならフレイアも文句ないだろ？」

「え？」

主が言いながら指した森の中から、見知った顔の二人…

「とりあえず、意識が鈍るほどの無理はしていないみたいだな。」

「久しぶりだね、速人。」

恭也と美由紀が、それぞれに二刀を下げて立っていた。

SIDE OUT

わざわざ様子を見に来てくれた皆だったが、もし兄さん達と修行するなら余計に心配を掛け兼ねないのでテント周りに戻してもらおう。

何しろ生身で抜き身の剣を振り回すわけだし。

「んで？様子でも見に来てくれたのか？」

さすがに兄さん達が俺に付き合っただけだろと此処に長期滞在するはずが無いから少し覗きに來ただけだろうとふんで聞いて…

瞬間、俺は地面に倒れていた。

頬が熱を持っている感覚を覚えた所で、殴られたことを理解した。

「恭ちゃん！いきなり殴るなんて！！」

「黙っている。」

姉さんの抗議の声を耳に立ち上がる。

悪戯やホラで人をからかうのが好きな兄さんだが、力は冗談で振るうほど横暴じゃない。

「何故、なのはトラウマを掘り返すような真似をした。」

兄さんから投げかけられた質問で、ようやく合点が行った。なのはから俺が話した事を聞き出したんだと。

見舞いに言った時に、迷惑と連発したり、一人で留守番何て妙な言い方したのはトラウマを掘り返す事が目的だった。

でもなければ、魔法使えなくなって家に戻るだけでアリサやすすか、久遠といった友達もいれば父さんも入院していない今、独りぼっちで留守番なんて事はそうそうあり得ない。

しかし…

「殴ってから理由聞くのかよ。」

順序おかしくないかと思って文句を付けたが、兄さんはまだマジだった。

「お前がただなのは追い詰めるとは思っていない。だが、どんな理由でもただ許すつもりはなかったから取り敢えず殴った。」

取り敢えずと言うことは答えによってはまだボコボコにされるんだろう。

なのはのトラウマを抉ったんだから当然と言えば当然か。

「泣かないからだ。」

「何？」

「泣かないから泣かせた。膝怪我したとき兄さんですらやさぐれてたんだろ？あれだけ鍛えてたものをなくしたんだ、何言われても出

来るだけの事をしようと思ってた。」

俺は肩を竦めながら両手を上げる。

「それが第一声で謝られたんだぜ？心を閉ざすなってあれだけ言ったのに。頭に來たし、普段ならともかくこんな時にすら頼る気にならない程俺が信用無いことに情けなくなってるさ。俺が悪い側になれば遠慮しないと思って怒らせてみた。」

全部話すと、兄さんは軽く息を吐いた。

「どうして俺達に言わなかった？」

「トラウマの元凶に話してもどうにもならないだろ。」

「む…」

俺の返しに表情を歪める兄さん。

側にいた姉さんも、何が原因かを察して表情を曇らせている。

「大体就職出来る年齢でもないのに戦闘がある管理局に入るのを許可するくらいの自己責任方針の結果なんだから、相談できるわけ無いだろ。」

俺自身そんな家にいるから学校休んで修行に來れる訳だし文句はないのだが、それでも今からなのは我慢以外をさせる何てのは無理だろう。

どこまでも事実だけ突きつけるなら戦う者が負けた理由は負けた奴が悪い以外には無く、なのはに戦いを許可したのはそれが当たり前前の戦闘者なんだから。

だがそれは、『弱いものいじめは弱いやつが悪い』ぐらいの極論だ。

俺はそういつやり方が嫌だからヒーロー目指してるんだし、なのにも任務でないとき位我慢して欲しくなかったんだが…

「危険があることを承知済みで任せた結果だ、確かに今更何を出来るものでもないのだからな。」

自分でも納得せざるを得なかったのか、そういつて同意する兄さん。

まあ、今は暇なときは張り付くように顔を出している友達もいるし、独りぼっちにはならないだろう。

「…ならばせめて、もう一つの『自主性に任せた問題』は片付けておくか。」

話も終わったことだし修業に戻ろうかとした所で、兄さんからそんな声が聞こえてきて振り返る。

なのはこの事でないのなら、自主性に任せて黙って見ていた子供って…

刹那、兄さんから目にも映らない程の速さの剣閃が放たれた。

「…」

辛うじて見切って防ぎ、距離をとって構える。

全身の疲労がたたっている今、全力戦闘が出来る時間は余りに短い
が…

嫌になるほど繰り返した基本型に瞑想のお陰で、『感じる』事に関
しては少しマシになってきている。

常人なら軽く硬直する程の剣気と共に放たれる剣閃を、片っ端から
防ぐ。

徹を打ち合って一歩ずつ距離が空くと、兄さんは飛針を投擲してき
た。

「ふっ！」

回し受けの要領で左手を使い飛針を弾き落とす。
距離を詰める兄さんにあわせて右の刀を振るい…

刀を弾き飛ばされた。

「ぐっ！」

蹴りを喰らった俺は地面を転がったあと片膝をついた状態から駆け
出そうとして…

兄さんが刀を納めたのを見て、駆け出すのを止めて立ち上がる。

「意識や集中力が鈍らない状態で肉体と神経を酷使してきたのか、反応は悪くないがやはり身体に疲れが出ているな。」

兄さんの言うとおり、打ち合わせてアツサリ刀を弾かれるほど身体に力が入っていない。

「今日はもう休め。」

「今は身体を鍛えてるわけじゃないんだから別に」

「明日：お前を試す。」

いきなり休めと言われて結局口出しに来たのかと思っただが、そんな軽い雰囲気ではなく、試すという事は…

「お前には決定的に足りないものがある。その足りないものと…お前の本当の望みが何なのか、よく考えておけ。」

「俺の…本当の望み？」

聞き返した俺に答える事無く、兄さんは先に森を出る。

「大丈夫？」

「ああ、まあ…」

心配して声をかけてくれた姉さんに返事を返すが、俺は兄さんに言われた言葉が引っかかっていた。

兄さんにテレパシーなんて使える訳は当然ないし、俺はヒーローになるつもりだとは知っているはずだ。

「心配してくれるのはありがたいけど、ちょっと一人にしておいてくれ姉さん。少し考えてみる。」

「そっか…分かった。それじゃシュテルたちにもそう伝えておくね。」

微笑み返してテントへ向かう姉さん。

俺は弾き飛ばされたままになっていた刀を鞘に収め、木々に覆われた空を見上げる。

俺の望みはヒーローになる…救い手として完全を目指す事。

だが、兄さんはそのことを知っている。にも拘らず本当の望みを考えろと言った。

俺に…別の望みがあると言いたいのか？

一蹴するのは簡単な事だけど、何故か簡単にそうする事が出来なかった。

第二十四話・先の見えない修行（後書き）

ゴーレム生成について。

精度、質はともかく、やるだけなら習得できるんじゃないかなと思
ってやらせてます。

第二十五話・己が剣に乗せる答え

第二十五話・己が剣に乗せる答え

原点は、なのはを救う為に野良犬を惨殺した時。
アレから俺は、ヒーローを目指すようになった。

兄さんの言いようにずっと引っかかるものを感じる。
けど、何度考えても、それが俺の望みであるとしか思えない。

もう一つ、決定的に足りないものと言っていたが…

身体能力、戦闘能力、技量、身長…

考えるのが嫌に成程思いついたため止めた。

しかし、決定的というくらいだからこつこついつものじゃない気がするんだが…

結局、どれだけ考えても兄さんの言う答えにたどり着く事はなく…

朝を…迎えた。

森の一角、比較的平らな地面がある場所で、俺は兄さんと対峙していた。

「本当の望みは見つかったか？」

「やっぱりヒーローになる事が俺の本当の望みだと思う。兄さんは違うと言いたいんだろうが…」

兄さんは答えない。
俺は答えを続ける。

「俺は…もう何も思わずに殺してきた日々を繰り返すのが嫌だったから」

「違う。」

俺の答えを一蹴する兄さん。

否定された筈なのに、怒りがわいてこない。
言い返したいのに、言葉が出てこない。

「思い出せ、お前が今の夢物語に到達した本当の理由を。」
「本当の…理由…」

言われて思い出す。

俺は、温かさを知ってから、既に人を殺してる。

暗殺者としての全力で、月村の敵の命を刈り取った。
それは俺のアタリマエ 『だった』。

そうじゃなくなったのは…

どうして

そう言つて…自分に襲い掛かってきた野良犬を抱くのはの涙を見
てから。

「思い出したか？」

血に濡れた手を笑顔で差し出して…護れてよかったと思つていた少
女が泣いている事に気づいた俺は…

これじゃ駄目だつて、そう思つたんだ。

ヒーローになると言つるのはようは『手段』。本当の目的とは別で…

「お前が今抱いている正体不明の焦りはそれが原因だ。だと言つ
の張りぼてのように掻き集めた夢物語にまだしがみつく気か？」

なのはが倒れてしまった今、まだ全てを護る事に固執して、今まで通りでいるつもりなのか、兄さんはそう聞いているんだろう。

「ああ。」

俺は迷い無く言い切った。

俺の答えに目を伏せる兄さん。

「なのはの限界は、自身が墜ちる程度で済んだ。だが、お前の理想はあまりにも高く無謀で…崩れ落ちた時の反動が大き過ぎる。」

言いたい事はわかる。

もし俺が失敗したその時は、無茶を通した分だけ被害が大きくなる。

端的に言つと、全てを救おうとするものの敗北は、全ての滅びを意味するのだから。

「だから……ここまでだ。」

二刀を鞘に収める兄さん。

肌を感じる威圧感が兄さんが本気である事を伝えてくる。

…最悪殺す事になつても、俺の未来を立つ気なんだろう。

何しろ全部ではないとは言え御神の剣を教わっている身だ、なのはのように放置しておいて俺が怪我するだけなら良いが、護る為の力を好き勝手振るわれて災厄にでもなられたらたまつたものじゃない筈だ。

本気で来ると言つなら間違いなく、例の速度での雑旋の筈。

見切れた事のない速度。

捌ききれた事のない雑旋。

必死確定。

そう言っただけでまったく問題ないこの現状を前にして俺は…

笑った。

「先に聞いてくが、この状況で俺が勝つのは『不可能』だな？兄さん。」

「魔法でも使わない限りはな。」

当の本人から同意を得た。

つまり…

「と言う事は…この状況で魔法無しで勝ったら、不可能を可能にするヒーローとしての『可能性』を認めてくれるな。」

「呆れた奴だ…この状況でそんな妄言を吐けるとはな。」

返ってきたのはそれだけだった。

もう言葉を交わす空気はなく、目の前にはただ生命体ならば逃げ出す他選択肢の無い尋常じゃない威を湛えた剣士の姿があった。

死ぬ。

身体がそれを分かっていた。理解していた。
俺だってそれなりに修行を積んできた身だ、戦えばどうなるか位感覚で分かる。

けど、それが嫌だとは思わない。

建前上、死ぬのは嫌だけど、それでも心が感じられない。

だけど…そんな俺にも、たった一つ見つかった『本物の気持ち』がある。

誰も…泣かせたくない。

だから…

「これで…終わりだ。」

こんな所で死ぬ訳には行かない。

「はあああああっ！…！！！」

念じて俺はナギハを抜いた。

一閃。

逆手に握った右手のナギハから衝撃が伝わる。

だが…兄さんは既に右に納めた刀を放とうとしていた。

繋ぎが速すぎるがそんな事はやる前から分かっていた事だから無視して左を抜く。

左逆手のナギハと兄さんの抜き放った刀が甲高い音を立て、間が空くかどうかも怪しい位の速さで兄さんから三撃目が放たれる。

左による刺突。

俺の方は元々二閃で終わりの技、続けて刀を振るう余裕なんて無い。

だから…

ナギハを手放した右腕で、兄さんの刀を逸らした。

切っ先ならば骨ごと切られるだけで意味はない。だが、鏝元にはそこまでの切断力は無い。

だから、骨で刀を受け流す。

大怪我だろうが関係ない、左に握った一撃が先に届けばいい！

衝撃を感じた瞬間、俺はよろめいて崩れ落ちる。

「っく…」

背後に一回転して着地するが…

散々だった。

右手は切断されないまでも骨は折ったようだし、左の一撃は先に届く所かナギ八をはじめとばされて胸元が一字に裂けていた。奥義の筈の一撃に徹を織り交ぜたのか？滅茶苦茶にも程がある。

勝てない…

一瞬だけそう浮かびそうになったのを振り払う。

理論で言うなら不可能な事が望みなんだ、いちいち止まってられるか！

その一念だけで構え…

兄さんが刀を納めた。

「護った筈のなのは傷つける事になったから、殺さずに戦う事にしたのだと思っていたのだが…なのはが倒れた今まだ全てを救う事為に足掻くと言うのなら違うのだろう？お前は何故その道を選ぶ。」

今になってその質問が出ることに若干苦笑しつつ、俺は真っ直ぐ兄さんに向かい合う。

「きつかけはそれだけだったし、なのはを護れなかった事にも十分嫌気が差してるよ。でもさ…それだけじゃないんだよ。」

なのはの親友になったフェイトやはやてだったり、俺の道に付き合ってくれと言ったアリシアだったり、主となった宵の騎士の皆だったり。

俺が好き勝手に殺す暗殺者のままなら、なのはや家族を護る為に容赦なく消していただろう。

勿論趣旨変えだつてありだろうし、普通はきつと折り合いをつける。

けど折り合いで…死んでいい命を決めるなんて嫌だと思ったから、夢物語を成就するヒーローになろうと思ったんだ。

「確かになのはは気がかりだけど、それだけじゃ…無事なのがなのはだけじゃ、なのはの身体だけじゃ意味ないんだよ。俺があの時ヒーローになろうと思ったのは、そういう理由さ。で、よくよく考えた結果、どこまで護ればいいのか考えて…どこまでも何も、切つて捨てるのにも何も無いって結論に至った。」

左拳を硬く握り、胸の前に置く。

「どこまでも…一欠けらでも多くの幸福を生み出し、守り抜く可能性に全てを賭ける。それが俺の答えだ。」

俺の答えに肩をすくめる兄さん。

「欲張りな奴だ。」

「知ってる。さ、続きだ。」

絶望的状况なのは百も承知。
でも、ここで引くわけには行かない。

霞んで来た視界を無視して構え…

「少し寝ている。」

耳元から聞こえたそんな声を最後に、俺の意識は断ち切れた。

S i d e 〉 高町恭也

速人を抱えてテントへの道を歩く中で、俺は先の戦いを…その中で
感じた気を思い返しえた。

剣気を感じたのは初めてだったのだ。

速人は、常に気配を殺すように生活していたし、それが心底なじんでいた。完全に気配を絶たなくても人ならば発するはずの気配がいづらか消失していた。

剣の鍛錬の時も、意図的に気配を絶つような真似はせず正面から切りあっていて、声も出してはいたのだが…

剣気は感じた事がなかった。

近接戦の達人…それでなくても最悪ただの暴漢などですら、攻撃的意識を感じる事ができる。

無論、そんな意識して操るようなものじゃない殺気や剣気を、意図的に使える者は俺達のような戦闘者の中でも極僅かに過ぎないのだが…

普通ある程度鍛錬が出来ている者であれば、構えただけで自然に纏い、放つものだ。

現に表舞台上位の赤星や晶もそれ位は出来ている。

だが、速人からはこれらの気をまったく感じた事がなかった。

自分なりの信念が出来ていれば、そんな事はありえない。だからこそ、ヒーローになると言うのが上辺だけの回答だと当たりをつけた訳だが…

「まさかこの土壇場で剣気を身に着けるとはな。」

呆れ半分に思い返す。

本来なら一撃目すら捉えられなかった筈だった。未知の者にとっては神速はそれだけの奥義なのだから。

だが、上辺だけの答えのままならば感じるはずのなかった剣気を叩きつけられ、軽く居竦んでしまったせいで、極度の集中状態でなければ維持できない神速が解けてしまった。

普通の敵なら気の向け合いは緊張感を高める材料ともなるのだが…
普段気を感じない速人からの剣気だったため、完全に中られた。

速人本人からすれば結局負けたからヒーロー失格なのだろうか…

少しだけ俺も、この呆れた馬鹿野郎の夢物語を見てみたくなった。

S
I
D
E

O
U
T

第二十五話・己が剣に乗せる答え（後書き）

この修行は次回で最後になります。

第二十六話・神速

第二十六話・神速

俺はぼやけた意識をゆっくりと覚醒させる。

確か…修行をしていた筈だ…のんびりはしてられない。

順々に記憶を手繰り寄せ…

「っ!？」

兄さんに負けた事を思い出した。

確か、負けたら御神の剣で悲劇を起こさないために俺の戦闘能力を奪うはず…

「ってあれ？なんともない…って！」

全身を動かしつつ確認していくと、右腕で軽く痛みが走る。

…そーいや骨で刀逸らしたんだっけ。よく腕使えてるな俺。

自分でやっておいて呆れつつ、俺はテントを出る。

「気が付いたか。」

「二日も眠ってるなんて、やっぱり疲れが溜まってたんだよ。」

淡々とした兄さんに、少し呆れぎみの姉さんが、手近な岩に腰掛けて魚を頬張っていた。

と、兄さんは火にかけてあった魚を手にとると、俺に向かって投げる。

「つと。」

手に取った俺は、今更かなり空腹な事に気が付いた。

そりゃ寝てる人間に何か食わせるわけにも行かないし当然か。

「あ！マスター起きたんだ！」

「お、レヴィ！心配かけたな。」

「してないよ。マスターなら大丈夫だし！」

森から現れたレヴィが、中々に嬉しい事を言ってくれる。

だがそれよりも気になったのは…

「一人でさつさと行かないでくださいレヴィ。これだけの質量に拘束魔法ならまだしも浮遊魔法をかけるのはそれなりに大変なんですから。」

レヴィに続くようにして現れた、全然大変そうじゃないシュテルが浮かせている熊だった。

…食用か？でかすぎるだろう。

「貴様が食いきれなければ我らで食すから心配するな。」

一緒に居たのか、続けて現れるディアーチエとフレイア。

右腕自体は回復魔法で回復したんだろうが、血も肉も足りないからこのタイミングで貰えれば丁度いいのはいい。

それに、基本的に俺の魔力量じゃ全開まで行かない宵の騎士の皆は基本的に人体と同じように食事から魔力を生成する機構を持っている。

此処のところゴーレムの生成やらシューターの生成やら回復魔法やらで結構無茶させた皆には丁度いい栄養源か。

「すみません主、骨や体表面は回復魔法で治せましたが、神経系まではさすがに」

「あー気にすんなフレイア。むしろ悪かったな、無茶して。」

「まったくだ、腕の骨で刀を受け流すなんて真似をする馬鹿はお前位だぞ。」

手間をかけたフレイアに謝ったのに便乗する兄さん。

あー言いたい事は分かる。今、無茶して墜ちたばっかの妹とか居る訳だし。だが…

「あれが無茶なら兄さんとやりあう事自体が無茶だったの。」

「ホントだよね、恭ちゃん自分が人外って自覚がないから。」

「お前ら人を何だと思ってる…」

心底呆れて言っっちゃった嫌味に同意する姉さん。

兄さんはそんな俺達の反応に顔を顰めた。

こんな感じで談笑しつつ、俺達はフレイアが作ってくれた熊鍋を食べた。

総出で熊鍋を空にした後、俺は兄さんと姉さんと共に宵の騎士の皆の元から離れていた。

足を止めたところで向かい合つと、腰に挿した刀を鞘ごと手にする兄さん。

「御神不破…決して砕けぬ護り神。俺達はこの剣を、護るべき誰かの前に立ってそうあるべくこの二刀を振るっている。」

刀を見ながら告げた兄さんは、手にしていた刀を腰に戻した後、俺を見据えてきた。

「全てを護るのは不可能事。理解はしていると思うが…それでもお前は、一欠けらの幸福まで諦めずに守り抜くと言ったな。」

「ああ。」

「俺達が教えた御神の業を以って、その生き方を最後まで貫き通すと…今此処で誓えるか？」

言っただけなら、簡単な話。『は』と『い』を連続で発音するだけの話。誰でも出来る。

そのはずだが、今は口を開く事すら躊躇われた。

決して砕けぬ護り神。

宣言と同時に失敗しているに等しい『全てを護る』と言う行為に嘆く事も引く事もせず、ただひたすらに自らの剣を護る為に振るい続

ける誓い。

当然、簡単に返事を出来るものではないが…

躊躇ったところで変わる答えじゃない！！

「誓う。ナギ八なら覚えててくれるし嘘はつけない。」

俺の答えに、兄さんは頷きだけ返す。

「ならばもう一つ…力を手に入れる為に命を賭けられるか？」
「ああ。」

二つ目の問いに即答すると、姉さんが僅かに顔を顰める。

「…即答だな。お前が死ぬ事で不幸になる者もいる事を分かっているのか？」

「分かってるさ。」

それが、死ぬわけには行かない理由なのだから。

俺は、死そのものを怖がるだけのまともな心を持ってない。そんな事を思うのにはあまりに殺しすぎた。

にも拘らず、心の底から死ぬわけには行かないと思えたのは、泣かせる人がでてしまうから。

けど…

「関係ないさ、命を賭けるだけで死ぬ訳じゃない。」

「何？」

「賭けつて、勝った場合は賭けたものは戦利品と一緒に戻ってくるもんだろ？賭けるだけならいくらでも賭けてやるさ。その上で、賭けに負けるつもりはない。」

自信満々に言い切つてやると、兄さんはしばらく固まって…

「ふ…ははははは…」

唐突に腹を抑えながら笑い出した。

「何だよ、笑うような事言つたか？」

「ああ、大した馬鹿野郎だなお前は。」

「恭ちゃん…別に可笑しい話じゃないと思うよ？」

俺がむくれて姉さんが不安そうにする中、一人楽しそうな兄さん。

しばらくして笑いをおさめると、兄さんは腰の刀に手をかける。

試験の続きのつもりかは分からないが、さっき誓ったばかりでいきなり『勝てません』なんてさじを投げる訳にはいかない。

俺もナギ八に手をかけて…

兄さんの姿が消えた。

勘だけで抜刀するが、いつの間にか俺の首に兄さんの刀が突きつけられていた。

「瞑想による精神統一に肉体限界下での基礎鍛錬と、精神力に注目して鍛えていたのはいい傾向だ。だが、実際の戦闘者との訓練無しの独力で『この領域』にたどり着くのはいくらお前でも厳しいだろう。」

兄さんは刀を納めつつそう告げた。

この領域、何度か見た…そして今使った常人が辿り付けない速度領域の事だろう。

「普通にやっていたのでは二十歳で修得しても早い領域だ、一撃でも受け損なったり一瞬でも気が緩んだらただじゃすまない可能性もある。それでも力が要るといふのなら…」

言葉を止めた兄さんは、姉さんを指す。

「美由紀と交替で見せてやる、お前が辿り付くまでいくらでもな。」

姉さんが頷いたのを確認した所で、兄さんは俺の目を見据えてくる。

どっする？

言葉にするまでもなく、眼がそう問いかけてきていた。

今まで、御神の剣を部外に近い俺が本格的に教わるのは気が引けていた。

先の誓いように矛盾した護り手として戦った拳句、取り返しのつかない失敗をして御る剣を凶剣にしなくなかったから。

でも、矛盾も悲劇の可能性も考慮したうえで、俺に此処までお膳立てをしてくれた以上、御神の名を理由に断るのは違う。

後は…俺が必要としている力かどうか、ただそれだけ。

「お願いします。」

だからこそ、断ると言う選択肢はもうなかった。

なのは達魔導師と『勝負』して勝てない人かもしれない。
それでも、この人達は俺が知る中で誰よりも護り手として『強い』
人だ。

そんな人の力の一端を受け取れるのなら、命懸けになったって十二分にお釣りが来る。

兄さんは俺の答えに笑みを返してくれた。

「俺と美由紀は二人で交替になるが、通常戦闘と違いこれを使うと桁外れに体力を消耗するから悪く思っなよ。」
「ああ！」

辿り付く場所が見えた俺は、迷う事無く力強く答えを返した。

訓練は熾烈を極めた。

まず、絶対条件として戦闘中は『貫』を主とすると言う条件があった。

貫は、相手の防御や見切りを此方が見切り、防御をすり抜ける様に攻撃する技法。

通常時ならまだしも、問題となる速度領域に至っては見切るどころか身体の動きが霞んで、剣閃に至っては真面目に見えない。

しかも魔導師ならまだしもそんなものを扱う最強クラスの戦闘者相手に貫なんてまともに使えるわけがないのだが…

例の速度域に辿り付くにあたっては、元々貫を主として扱っていると見えてくるものなのだという。

今出来ないのは当たり前だが、完全に貫が決まるという事は同じ…少なくとも近い域に辿り付いた事を意味する。

初めの内は、何が起こっているかすらろくにわからなかったため何
度も昏倒させられた。

辛うじて致命傷だけは避けた怪我を負って回復魔法の世話になる事
も度々あった。

何度も倒れながらそんな事を3ヶ月ほど繰り返し…

「はあ…はあ…」

「ふ」

閃光のような剣閃を凌ぎ、それより遅い剣閃を繰り出す。こっちがやっとの思いで捌いているのに対して当たり前のように俺の斬撃は届かない。

生死の境を歩くような殺気に満ちた戦闘訓練を通して、掴みかけていたものが形になってきていた。

と、空気が変わる。兄さんの動きがいつもの超高速移動に…

ならなかった変わりに、世界がモノクロになっていた。

緩やかに流れる世界。いや、世界はほぼ止まって見えて、その中ではかなりの速さで…それでもゆっくりと兄さんが動くのが見える。俺自身の動きも緩やかになっていたが…

掴んだ。

俺は確信を持ってモノクロの世界の中で峰撃ちの居合いを放つ。世界に色が戻ったとき…

「が…っ！！」

脇腹を強い衝撃が襲った。何が起こったのかわからないまま膝をつく。

「…その様子だと『神速』に辿り着いたようだな。」

「…し…く？」

息が詰まって殆ど喋れないが、いつの間にか俺の脇に立っていた兄さんに目を向けると頷いていた。

「世界が緩やかに見えた筈だ。その状態になる事を神速に入ると言っている。」

兄さんはそこで言葉を区切り、息を吐く。

「極めれば今俺がやったように神速の二段掛け等も使えるようになる。ようやく辿り着いただけのお前が俺に峰撃ちなど…十年早い。」
「は…はは…」

人間が生身で魔法も無しに攻撃も自由自在なブリッツアクションがますような化物ステータスになって『入り口』扱いですか…

「兄さん…やっぱり化物だわ。」

「真人間止めてファンタジーの住人になった奴に言われたくないな。」

目の前にいる筈の兄さんが遙かかなたにいるように感じ、俺は呆れ混じりに笑みを浮かべた。

辿りついて思った事は、『こんな物よく使ってやがるなこの化物共』
と言う感想に他ならなかった。

息切れは強打を受けたせいかと思っていたら、全身が1、2時間走
った後のように疲れていた。

一回使っただけでそれも実際の秒数にして2、3秒の話だ。

道理で便利なのに普段の訓練で使わないわけだと納得した。こんな

物使っていたら基本の型の訓練なんてろくに出来やしない。

だと言つのに、そこからは…』自分の意思で自由に発動の可否を決められる事』が主題となった。

戦闘中に極限まで集中すると『勝手になっている』では困る。何しろ常時維持できるものでもないのだから。兄さん達と調整できずにやっているとなれば神速の終わりを狙って神速に入られて倒される事になっていた。

半端じゃない疲労の中、神経をすり減らす毎日。

だからと言って投げるつもりもなく…

「あ…」

「っっっ…!」

神速使用による全力の仕合で初めて姉さんから一本とった所で、二人からの修行は終了となった。

第二十六話・神速（後書き）

大方予想は出来ていたかと思いますが：神速修得と相成りました。
これで速人少年も散々言ってる人外の仲間入り（笑）

決して砕けぬ護り神

不破が決して砕けないとの意味だと知ったときから暖めてたフレ
ズですが、原作で発言があったわけではないのであしからず（汗）

第三部最終話・同じ想いの下それぞれの空へ

第三部最終話・同じ想いの下それぞれの空へ

傍にあるのが川だけで風呂にもはいれず身体を拭くぐらいしかできなかった等の理由でとにかくポロポロの様相を呈していた俺達は、とりあえず近くの宿で一泊してから服を買いなおして帰ることにした。

と言うのも、修行に散々回復魔法やら何やら使ってもらっておいて今更ではあるが、魔法を使って帰ると言うのは避けておくことにしたからである。へまして人に見つかったりしてクロノの胃に負荷かけたくないし。

そんなわけで止まった宿で、俺達は夕食をつついていた。

「しかし中学入学年度から半年も経たない様な歳で神速に辿り付くとは…お前は本当にデタラメな奴だな。」

「そりゃそうだよ、マスターは天下無敵のスーパーヒーローなんだから。」

軽く呆れている兄さんに躊躇いもなく決まり文句を口にするレヴィ。いつもならノリノリで答える所なのだが…

「もつとも、恭也相手には全敗ですが。」

「ボロ雑巾にならない日がない位だったしな。」

「お、お前らもうちょっと容赦とかないのかよ…」

シユテルやデイアーチエの言うとおりの理由で、兄さん達相手だとこの有様のため言い辛いものがある。

犯罪者のリライヴだって此処までコケにはしてこないだろうと考えたと、身内が一番辛辣なんじゃないだろうか？

そんな俺達の様子に軽く笑った姉さんは、その表情を落ち着けると俺を見据える。

「しつこくなるけどもう一回言っておくよ。神速は確かに他流派にもない対人最強に近い『奥義』ではあるけど、それを扱っているのはあくまで私達剣士。剣士としての力量が低ければ結局のところ意味を成さないんだから頼りすぎて基礎を怠ったりしないようにね。」

姉さんからの話は何度か言われている事だが、俺は改めて頷いた。

相手より上の領域で動作可能というのは、将棋を例にすれば二手連続で駒を動かす事ができる特別ルールを貰っているようなものだ。

それで勝てても、頼りきりでは基本的な技量は上がるどころかむしろ落ちて行くだろう。

「分かってるって。というか当の基礎力で上回ってるから神速使い始めて日の浅い俺が姉さんに勝ったんじゃないの？」

「うぐっ…」

実際自由に発動できるようになったとは言え、年齢と体格的な限界

で連続発動限界数が、慣れの問題で一回の持続時間が共に兄さんにも姉さんにも劣る。

にも拘らず俺が一本とったとなると…

ジト目で見つめると、姉さんは俺から顔を逸らす。

が、隣に座っている兄さんに肩を叩かれた姉さんは、錆びたロボットのようになんか兄さんに首を向ける。

「何だったらこれからもう半年位神速なしの条件で実戦訓練でもやっついていくか？」

「か、勘弁してよ恭ちゃん…もう普段の山籠りと桁違いにくたくたなんだから…」

あまり見れない笑みがむしろ恐ろしいものを感じさせる兄さん。実際今までの修行も一般人から見れば拷問より惨い内容だったし、実現すればほぼ死刑宣告に近い。

兄さんは割りとは本気で怯える姉さんに対して、肩を竦め…

「冗談だ、そんな事したら俺ももたない。」

アッサリとそう言って終わらせた。

「嘘だろ？」

「嘘だよね？」

「嘘だね。」

「嘘ですね。」

「嘘だな。」

「や、止めないか揃って…」

俺が問いかけたのを皮切りに、まるで練習していたかのようにテンポよく全員が繋げていき、気が引けたのかフレイアが他の宵の騎士三人を手で制していた。

兄さんもこの反応が予想外だったのか顔を顰める。

「だからお前らは本当に俺を何だと思ってる…」

兄さんの問いかけに『人間だ』と返すものは一人も居なかった。

俺も少しは悪いとは思うのだが：俺も姉さんも人の範疇外の戦闘能力なのに一本も取れない兄さんはマジで人外としかいいようがないんだよなあ…

そうして、俺達は身なりを整えたり身体を休めたりして一泊を終えて帰る。

が…家まで来た所で誰も居ない事に気づく。

「皆して家にいないのか？店の方に居るのかな？」

「半年近く家を空けていた人間の台詞じゃないな。」

「うるさい同類。」

茶化す兄さんと睨みあいつつ、翠屋へ向かう。漏れる明かりと中からのどんちゃん騒ぎが俺の予想が当たっていた事を示していた。

だが…

「どうせ友達の前でも、笑顔で『迷惑かけてごめんなさい』って言うんだろって考えたら、許せなくなつたから、本音を引きずりだす為なのはちゃんを怒らせたんだって。管理局にいたら迷惑になるって意味の悪口を、沢山言われたんじゃないかな？」

室内から聞こえる声に、俺は足を止めた。

「マスター、どうしたの？」

周囲の状況を探る能力の一環として聴覚も鍛えていたため、俺と…聞こえてて兄さんと姉さんしか聞き取れていないはずだから、レヴィが不思議に思うのも無理はないのだが…

「本当は、なのはちゃんがいい子に振舞う必要がないように損な役を引き受け続けるつもりだったみたいだから、黙っているように頼

まれてたけど、当のなのはちゃんが誤解したまま悲しんでるのもよくないからね。」

室内では、フィリス先生の説明が続いていた。

ちなみに、この説明は俺が万一修行でへまして御陀仏して、誤解させっぱなしになった時になのはに対してフォローが居るならという事で伝えておいたのだが…

俺無事で先にこんな独白されてると恥ずいだけなんですけど…

「嬉しい…のに…何で…」

「良かったねなのは。」

なのはの泣き声とフェイトの優しい声が聞こえる。

うっわあ状況が容易に想像できる…

此処に行けと？本人登場？俺は芸能人じゃないんだぞ？

「そういう事なら迎えにいこか。もうなのはちゃん避けとつても無駄何やし。」

「え!？」

はやての意気揚々とした声に、このままここには巻き込まれる事が確定した。

俺は振り返って家に向かって歩き出す。

「あ、あれ？マスター？」

「どうしたのですか？」

「お、俺は祭りって体調じゃないからちょっと今日は休ませて貰うわ。ベットはあけとくから…」

いそいそと逃げ出そうとした俺は、首根っこをつかまれる。振り返ると、兄さんと姉さんが楽しそうな笑みを浮かべていた。

や、やっぱり聞こえてやがった……

「…なのはの為に何でもするつもりはあるんだろう？なのはは喜ぶと思うが？」

「まあ隠してた役ばらされてこんな空気になってるところに放りこまれるのが恥ずかしいのは分かるけど…自業自得って事で。」

「お、鬼…悪魔…」

その辺の一般人ならまだしも、兄さんと姉さんの二人に捕まって引きずられてどうにかできる訳もなく、離れようとした扉にだんだんと近づいていって…

「だから、止めるってマジで嫌だこんな空気に投げ出されても困」

「諦める。」

「息合いですぎだああ！！！！」

半場手遅れなのは分かっていたが思いつきり叫んでしまった。これで逃げられる訳もなく…

二人によって無情にも扉は開け放たれ、俺は投げ込まれた。

涙を拭っているのはの前に、前のめりに落下する俺。

静寂の後…

「お、お兄ちゃん…」

なのはがおずおずと呼びかけてきた。

「ま、まあ…その…」

今更取り繕うも何もあったものじゃない。

俺は立ち上がったのはの頭を撫でる。

「退院おめでとう、この様子だと魔法も大丈夫みたいだな。」
「っ…」

俺の服を握って身体を寄せるのは。

やっぱり色々ストレスだったんだろうな…と、寄ってきたのはを素直に迎え…

男の急所にナニカが直撃した。

「連絡なしで半年近くも失踪して今更おめでとうもなにもないの！
！！」

どうやらなのはの膝蹴りだったらしい。

打ち方もなにもなかったが：場所が場所だけにさすがに効いた俺は膝を折る。

「お、お前な：修行明けの死に掛けにこれはさすがにないだろ…」

普段と違ってろくにダメージが隠せていない俺の様子にさすがに心配になったのかなのはの表情に一瞬影が差す。

が…

「おいおい何を言ってる？昨日宿で露天風呂から海鮮盛りまできちり堪能したじゃないか。」

兄さんの呆れたような一言によって室内の気温が一、二度下がったように空気が冷えた。

当然なのは表情も一瞬で冷める。

に、兄さんこの状況楽しんでやがる…鬼め…

「へえ…さすがヒーローさん…やる事が豪華ね。」

「そーかあ…飲み食いして温泉まで浸かった帰りに『修行明け』かあ…」

アリスとはやてが白けた声で呟きつつ俺を見る。

いや確かに泊まったけど！一日で受けたダメージ今日まで半年ほど引きずってた奴だって居るって言うのに俺はその一晩で半年分のダメージ回復させるって言うのか！？

「けど…連絡くらいするべきだったと思うよ？」

「そうだよ、士郎さんに半年間見てないって言われた時には本当にビックリしたんだから。」

良心とも言えるすずかとフェイトにすらこんな注意を受ける始末。

ああ…俺に味方は？

「すずかちゃんとフェイトちゃんの言う通りだよ！本当に…心配したんだよ…」

と、目元を拭いながら告げるのは。

…そりゃこない妹泣かせてれば俺に味方なんて居る訳ないな。

軽く肩を竦めつつ思う。

本音を見るためとは言え、悪役引き受けたんだからきっちり最後まで痛い目見ておかないとな。

「悪かったな心配かけて。それに、変に弄ったりしてさ。」

「違…私も…ごめんなさい…私言っちゃ行けない事…」

「俺は狙って言わせたんだから自業自得だよ、気にしてないから。」

再度なのはの傍に寄り、その頭を撫でる。

安心させるようにゆっくりと…

「速人、そのままキスしたりしないよね？」

「にゃ!?!」

「はい!?!」

いきなりかけられた声の発生源に顔を向ければ、少しむくれたアリシアの姿があった。

フェイトが慌ててアリシアに詰め寄る。

「お、お姉ちゃん!邪魔しちゃ駄目だよ!」

「だって…色々やってる私でもあそこまでいい思いしたことないのに…やっぱり兄妹には勝てないのかなあ…」

なんか状況的に間違ったコメントじゃないでしょうかアリシアさん!?!

少なくとも俺は幼女趣味じゃないですよ!?!いやそれだと見た目幼

女のアリシアも落選しちゃうんだけど…

と、そんなアリシアの両脇に立ってその肩に手を乗せる二つの人影があった。

晶師匠とレン師匠、また何か余計な事言う気じゃ…

「いやあ兄妹やからって競争勝てるとは限らんしなあ、そんな氣い落とさんでええよ。」

「そうそう、一緒に居る時間が長ければいいって物でもないし。」

と、思ったが意外と普通にアドバイスしていたようだった。

身内に例でもあったのだろうか？

「なあ兄さん、師匠たち何であんなアドバイス出来ってえっ！」

「黙れ。」

兄さんに聞いて見ようとして殴られる。

そこで思い当たる兄妹が一つ…

姉さんを見ると、俯いて遠い目をしていた。

…ああ、触れない。触れたら絶対ろくな事にならない。

励ましたい所ではあったが下手な事言つと事態を悪化させそうだった

たので聞かなかった事にして全部忘れる事にした。

だって…忍さんと兄さんにいい笑顔を向けられてる二人のようになりたくないし。

夜、退院祝いの騒ぎも一通り落ち着いた頃、俺はシグナムとヴィー
タによって公園まで連れ出された。

公園には、意外な事にフレアの姿もあった。

「一体どういう組み合わせだよこれ。」

「単刀直入に聞こう。」

俺の問いかけも意味を成さずに、シグナムが鋭く言い切る。

「また殺し手に戻るつもりなのか？」

「へ？」

予想もしていなかった質問に、思いつきり疑問符を口にしてしまった。

そう言えば、病院から出る前シグナムに軽い殺意を向けられてたけど…ひよっとしてこれが原因か？

「あー…正直そのつもりはまったくないんだけど…三人揃って兄さんと同じクチか？」

「何？」

これだけ言っても伝わる筈もなく、眉を顰めるシグナム。

「いや、兄さんにはある程度折り合いをつけるようにならないと、無茶の反動で被害が大きくなるって言われてさ。管理局的にも無茶してるからそれで首でも取りに来たのかと。」

軽く告げると、シグナムは何かに悩むように腕を組む。

そんな中、気だるげに両腕を頭の後ろに回したヴィータが軽く息を吐く。

「もういいんじゃないか？シグナムの行き過ぎた勘違いだったって事で。」

「ヴィータ…お前がレヴァンティンの錆になりたいか？」

シグナムとしては本気で心配だったからなのだろう。ヴィータに軽く扱われて怒ったらしくレヴァンティンに手をかける。

「止めて貰おうか、局員同士で喧嘩されても困る。」

「む…」

「わーってるよ。」

そんな二人を、フレアは静かに諫めた。
常にこんなテンションのフレアの前で馬鹿騒ぎに近い真似ができる訳もなく、シグナムはレヴァンティンから手を離す。

「お前の予想とは逆だ。もし殺し手に戻るつもりだったのであれば止めるつもりでここにいた。」

「お前ももしやばかったら俺を殺す気だったのか？俺一応無辜の民だぜ。」

「散々前科持ちな上出頭もしてない奴がよく言う。」

軽口を叩いた俺を鼻で笑うフレア。

けどその表情は…見た事ない程に澄んだ笑みだった。

「だが…今までの調子であれば私個人で止めはしない。局員として敵対する事はあるだろうが、せいぜい宵の騎士含めて全て護りきれよう鍛えておくんだな。」

「ああ。そっちこそ手が足りなきゃ内容次第ではいつでも呼んでくれていいんだぜ。管理局には頑張ってもらわないと俺も困る。」

俺は拳を突き出す。フレアは何となく察してか、俺の拳に自身のそれを打ち合わせた。

「私は局に戻るぞシグナム、もう騒ぐ必要もないだろう。」

「ああ…面倒に巻き込んですまないなライト。」

「ベルカの騎士がプライドより確実性を優先して私を呼んだのだ、讚えこそすれ文句を言うつもりはない。」

そんなやり取りを最後に、フレアは公園から転移した。

「相変わらず嫌な奴…」

「遠慮と配慮って文字が辞書から抜けてるからなアイツ。けど悪口言ってた訳でもないんだしいんじゃないか？」

「なのはの見舞いにも来なかつたんだぞアイツ。」

むすつとしてるヴィータ。どうやらそれがご立腹の一番の原因らしい。

「局に入った時点で護るものじゃなくて戦力なんだろ。友人増やす気もないだろうアイツがいちいち見舞いなんて行かないって。」

「ったく…本当にむかつく奴だ…」

悪態をつきつつ、踵を返すシグナムの後に続くヴィータ。

「後は久しぶりに兄妹水入らずで過ごすといい。」

「身体壊さねーうちに帰れよ。」

そんな事を言いつつ二人が去って言った後…

「シグナムさんたちにもばれちゃってたか…」

なのはが恐る恐ると言った感じで、遊具の影から姿を見せた。今の話を聞いていたらしく浮かない表情なのは。

「気にするなよ、もう何も無いんだし。それともお前は俺が勝手に戦うのが嫌で浮かない顔してるのか？」

「それも…あるよ。」

殺る殺らないの話に表情を曇らせていただけかと思ったら、どつちやら違ったらしい。

「シユテルちゃんに、管理局がお兄ちゃんの敵になって私が局員として動いた時には全力で戦うって言われてるし…そんな事にならないように頑張るつもりだったのに…」

「今は頑張る気力がないのか？」

過去形になっている事に突っ込むと、なのはは力なく首を横に振る。

「だけど…頑張った結果がこんな事になって、身体も心もフォロ―されっぱなしで、その前の事件の時だって管理外世界って枠に邪魔されて何も出来なくて…護る為に、力になる為に管理局に入ったのに…本当に、こんな筈じゃない事ばかりだった。」

友人が誘拐された挙句何も出来なかったなんて事もあった位だし、なのはとしては大手を振って喜べる事はなかっただろう。

「お兄ちゃんが誰かの…ううん、皆の為に身を削って戦ってるのは知ってるのに、このままだと私いつかシユテルちゃんが言うようにそんなお兄ちゃんとむっ!？」

悲痛な顔で続けるなのはの口を指で塞ぐ。

まったく…この馬鹿は。

「その配慮は俺の担当。お前は局員になったんだから俺の方は気にしないでいいの。両立できるように気を使うのは俺であってお前じゃない。」

「でも…」

浮かない顔をするなのはの肩に手を乗せる。

「あまり心配するな。今の所お前の目指してる役職が、一番の可能性を秘めてるんだぞ。」

「え？」

いきなり役職の話を持ち出されたからか戸惑うなのは。そんななのはに自分の自慢でもするように続ける。

「もし人手が充分なら、他方に助けを差し伸べられる。お前がもし上手く人手を鍛えきる事ができたら、局内のあらゆる場所に救いの手を伸ばす事に繋がるし、その中に一人でも教官志望の人間が居ればネズミ講よろしく新しい人が成長する。それはきつと、ただ一人の力を大きく超えた救いになる筈だ。」

なのはの肩から手を離し、その瞳を真っ直ぐに見据える。

「お前のやり方は正道だし本来危険なのは俺のほうだ、お前が俺を止めたがるのは分かる。けど…俺は今のまま進む。これ以上『仕方なく』奪う事が、捨てる事が無いように。」

「速人お兄ちゃん…」

搾り出すように俺を呼んだのはは…その瞳に力を宿す。

「私も、自分の決めた居場所で…空で皆を護る為に戦う。だけど…信じて…いいんだよね？お兄ちゃんと戦ったりしなくて済むって。」

「勿論。」

こんなはずじゃない事ばかりで、何の確証もない俺の言葉を信じるのが難しいんだろうけど、なのははそれでも頷いた。

俺はそんなのはと手を繋ぐ。

「とりあえず今日位は一緒にいいだろ。」
「…うん。」

違う場所、違う生き方、違う戦いをするに決めた俺達は、今は共に同じ道を帰る。

数多の未来を『護る』と言う同じ想いを胸に。

第三部最終話・同じ想いの下それぞれの空へ（後書き）

と言つ訳で空白期たる第三部終了となりました。

例によっていくつかの話を挟んだ後S t sに移る事になります。

外話・白い堕天使（前書き）

今回は同時期のリライヴの話となる為、外話となっています。
原作陣は出番が無いためあらかじめご了承ください。

外話・白い墮天使

外話・白い墮天使

S i d e 〱 ? ? ?

私は、その日を忘れない。

「貴様…平民の分際でよくも…」
「う、うめんなさい…」

ドジで失敗だらけなのは今更だったから、自分だけが被害を被る失敗なら頑張ればいいって片付けられた。

「ただ、よりにもよって兵士の方にぶつかってしまった拳句、鎧に傷までつけてしまうなんて…」

「まあまあ…責任位はとってくれるでしょ。」

「何…ああ、成程な…」

「ぶつかった人と一緒にいる兵士の人が笑いながら言う台詞に、私がぶつかってしまった兵士が同意する。」

「君だって悪気はないんでしょ？ だったら失敗分の誠意位見せてくれるよね…」

「そうだな…よりにもよって装備に傷をつけたんだ、それ位は当然だな。」

「っ…」

「笑いながら二人が近づいてきて…」

「そこまでだ。とかよく通る声で言うと、ヒーローと間違えられそうだけど…とりあえず止めてもらおうかな。」

「とても明るい声で、そんな言葉が聞こえてきた。私と兵士の二人はすぐに声の方に視線を移すと…」

黒いローブで全身を包み込んだ小柄な子が、静かに私達を見つめていた。

S I D E O U T

私にとっては、人の住む管理外世界に隠れるのはそう珍しい事ではなかった。

転移魔法を見られたりすれば現地の局員が聞き込みした時にはれやすくなつてはしまつし、管理外世界で魔法を使わずに過ごすとなると並の魔導師ではかえって危険になる。

そういう訳で、普通違法魔導師としては人気の無い世界に隠れた方が安全ではあるのだが…

ようは、生身で管理外世界のトラブルに対応できるだけの実力があれば、転移魔法に気をつけるだけで管理局の調査はほぼ困難になる。

と言う事で、私は管理外世界もいくらか転々としていた。

と言っても、そこまで魔法なしでの技量に自信があった訳じゃない。何しろ初めて速人と会ったときなんかは何で武器をしまった状態が構えなのかまったく理解できなかった位なのだから。

だけど、だからこそ私はこういう世界を回る事を選んだ。

初めのうちは魔力による強化をしても、小規模な大会に優勝する事すらできなかったし、山籠りしていた人に勝負を挑んだら何をされたかも分からないうちに倒された。

けどそうこうしているうちに、少しずつ魔導師の戦いと違うものが見えてきた。

今ならきつと、以前あった時のフレアとか言う局員位であれば、技だけで戦っても勝てると思う。…向こうも成長しているだろうから意味はないけど。

だから、今回管理局の追っ手を撒いてこの管理外世界に来たのも至って普通の事だった。

で、逃げ隠れるのが目的だから当然目立たない方がいいんだけど…

「何者だお前…」

「君も混ぜて欲しいのかな？」

どうも私は、嫌な思い出のお陰でこの手の相手に大人しくしてられる性分ではないみたいだ。

「悪いのが頭なのか性格なのか両方なのかは知らないけど、私は『止めてもらう』と言った筈だよ。」

「頭の悪さを貴様に言われる義理はない。戦争中の国にそんな怪しげな格好で兵士の前に堂々と出てくるとは。」

少し呆れて告げた私の台詞に対して返って来たのは、ぐうの音も出ないほどの確な返答だった。

そうなんだよなあ…まったく、とことん馬鹿だと自分でも思う。

「やれやれ…また仕事か。」

「ぼやくな。」

腰の剣を抜く兵士達。

コンビネーションはそれなりにやっているのか、掛け声ひとつなく同時にかけてきて…

剣が中ほどから真つ二つに斬れた。

「「な…」」

「別に力自慢なんてする気もないし、虐めなんて論外だけど…貴方達みたいな男にだけは容赦する気はない。大人しく消えないのなら

…」

鉄が一般のこの世界の武装で、オマケに日本刀のような洗練された武器でもない量産剣なら、ナイフ形態とは言えデバイスで切断できないほどの強度はない。

おおっぴらに全身を見せる気もないので通り過ぎざま一閃して両断しただけだが、十分脅しにはなるだろう。

そう考えつつ私はイノセントを振り上げ…

ようとした腕に、倒れていた女の子がしがみ付いていた。目を硬く閉じてふるふると首を横に振る少女。

…怪我させるな…って所だろうか？

「っ…おおおおっ！！！」

斬れた状態の剣を手に掛け声と共に迫ってくる兵士。

っ…彼女を振り回す訳にも行かないし…

回避しながらしがみ付いている娘を抱える。

左肩を軽く切られたけど、どうにか傷自体は浅く済んだ。

「ああもっ！この御人好し！！！」

「くっ…逃がすか！！！」

強化した身体能力で走れば鎧つけてる兵士相手なら女の子一人抱えてても簡単に撒ける。

とは言え…管理世界では一組織相手に立ち回る私が、生身だと随分情けない有様だなあ…

何とか逃げおおせた私は、彼女を家まで連れて行って、そのまま家の中に連れ込まれた。

「あう…ごめんなさい私のせいで…」

「気にしなくてもいいよ、助けたって言っても私怨みみたいなものだし。」

と言うか、頼まれてもないのに首突っ込んだ拳句、庇った娘に止められたのだから余計なお世話と言われても否定できない。

まあ、否定する気もなければだからといって止めて大人しくしてる気もないからこんな事になってるんだけど。

「私怨…ですか？知り合いじゃなかったみたいですけど…」

聞き返されてしまっただけから、失敗したと自覚する。

どうごまかそうかと考えて…

私より余程異常な経歴をさらりと言った少年を思い出し、止めた。

ばれて戦力的に困る事は何もないし、別に好評が欲しい訳でもない。

「昔あの手の男に捕まってね、ああいうのにだけは容赦したくないんだ。」

「あ…その…ごめんなさい…」

答えると、彼女は申し訳なさそうに顔を伏せる。聞いてて心地いい話でもないし当然か。

「けど貴女も御人好しだよ。襲ってきた男を庇う為に正体不明の黒服にしがみ付くなんて。」

「しょ、正体不明なんて！私を助けてくれたじゃないですか！」

意外すぎる熱の入れようで否定する少女。

それだけで信用できる辺り充分御人好しか、能天気だと思うけど…

ま、いいか。

あまり色々言つて御人好しの反対になられても嫌だし。

「…あの人たちだって、私達の国を護るために命懸けで戦っているんです。そんな人の邪魔になる事をしてしまって、なのに私が助けられて兵士の方達が傷つくなんて…」

「我慢できなかったから庇った…と。」

言葉を続けてあげると、彼女は静かに頷いた。

この世界は、水を汲むにも途方もない苦勞が居る砂漠の国。
今戦争中の隣国は比較的豊かなオアシスを保有しているが、それでも二国をまかないきれぬものでもない。

つまり、今この国の兵士は自国を救う為に命懸けの戦場に出ている
訳で…

だからといってよくもまあ庇ったりするものだな。

「皆傷つくだけの戦争なんて…無くなればいいのに…」

呟いた彼女は、何かに気づいたように慌てて顔の前で手を振る。

「な、何言ってるんでしょね私！それでもしないと国の皆が困るから戦いなんてやってるのに！」

わたたと慌てる彼女。

別に慌てること無いのに、何で慌ててるんだらう？

「皆が困るのと戦争が嫌なのは関係ないと思うんだけど？」

聞き返すと、少しだけ驚いた彼女は俯いてしまう。

「……………私達の国の人を護るための戦いを否定するなんて、倫理の為に死んでやれって言うのと同じだって、そう言われた事があるんです。何の解決策も持ってない私に、それを否定する事は出来ませ

んでした。…甘いんですよね、結局。」

少しだけ冷めたように言葉を紡ぐ彼女は、言いつつ私の前に半分のパンとグラスに注いだ水を置く。

こんな物、人にやるほどの余裕が今のこの国にある筈がない…
彼女を見ると、苦笑しながら首を横に振った。

「気にしないでください、助けていただいたお礼ですから。」

……本当に、呆れた娘だ。

今この国の惨状でこんなものを出すなんて、身を切って他者に施す位の行いだ。

ただ甘いだけでできる事じゃない。

私はお礼を告げて固いパンを齧って水を飲む。
すぐに片付いた食事の後、私は席を立った。

「あ、もう発たれるんですか？」

「いや、その前に…ちよつとお礼をね。イノセント、シュークリーム出してもらえる？」

『プットアウト。』

私はイノセントに出してもらったシュークリームを彼女に手渡す。

「え？え？」

「まあまあ、いいから食べてみて。」

半信半疑と言った感じでシュークリームを齧った彼女は、瞳を見開いた。

「こ、これ御菓子…」

さすがに食べた事はなかったのか、思いつきり驚いている。

「こ、こんなもの受け取れ」

「食べかけ返されてもね。それに、結構好きなんだけどこんなものって言ってくれる訳？」

慌てて返そうとする彼女を封殺する。

言葉に詰まった彼女は、結局再びシュークリームをついばむ。

「どう？おいしい？」

「は、はい…」

萎縮するほどの代物だったのか、おっかなびっくりシュークリームをついばむ彼女を見ると、なんだか可笑しくなってくる。

「知り合いにね、君みたいな馬鹿がいるんだ。」

「ば、馬鹿…ですか？」

「そう。実現不可能な誇大妄想掲げて、その為に粉骨碎身しているような大馬鹿野郎。」

いきなり馬鹿呼ばわりされて戸惑う彼女の前で私は続ける。

「けどそいつはある程度掲げた誇大妄想に近づいている。今の君みたいだね。」

「え？」

「君は無力な甘い人間なんて意味はないって思ってるのかもしいないけど、ちゃんと救えているんだよ。もしもあの時君が私を止めていなかったら…あの人たち、今頃解体されていたはずだから。」

本気で告げたのが分かったのか、彼女は息を呑む。

「でも…それは貴女が優しいから止まってくれただけで…」

「自分の力で止めた訳じゃない…」と。そこまで言うなら私も空気が水がないと生きていけないから他所の力に頼りっぱなしになるね。」

「そ、そんなこと…」

ない。とは続けられずに口ごもる彼女。

でも、やっぱり自信ないんだろう。こんな情勢の世界だ、色々言っても綺麗事と一蹴されて終わるのがオチだろう。

…だったら。

「叶えてあげる。」

「え？」

「『誰も傷つかずに戦争がなくなればいい』…それが貴女の願い事でしょ？」

誰も叶えてくれない。そこは彼女にとってはさして重要でもないはずだから言わなかった。

だが、彼女は目を伏せる。

「そんなの…綺麗事ですよ。」

「ぶっ…あ、ああごめん…悪気はないから許して。」

落ち込むほどに綺麗事と言われたか納得せざるを得ないほど衝撃的な目にあっただのは分からないけど、あんまりにも予想通りの反応に思わず笑ってしまった。

私は笑みを隠さずにイノセントを取り出す。

「イノセント、セットアップ。」

瞬間、全身を包む衣装がこの世界の旅人を装う様相から、全身純白で桜色の首輪をしたバリアジャケットになる。

彼女は、現状が上手く理解できないのかパチパチと瞬きをしている。

「けど…私にその願い事知られちゃったのはまずかったかも知れないね。」

「な、何で…ですか？」

理解が追いつかないままに問いかけてくる彼女に、私も笑みのまま返す。

「私、違う世界から来た犯罪者…所詮悪者だから。」

他の人にはナイショにという意味を込めて口元に人差し指を立て、私は彼女の家を出た。

『…やる気ですか？』

「そうだよ。貴方は自分のマスターの誓いも忘れたの？」

イノセントからの何処か不安げな音声には当たり前のように答える。

どうあっても叶えて貰えない切なる願い、誰一人聞き入れてくれない助けを望む声。

それらの為に、私は自分の力を使うと決めている。

この世界の問題は、管理局ならアツサリ解決できるだろう。

魔法技術で川を引いてもいいし、転送魔法を利用して水や資材を送れるようにしてもいい。

ただ…『管理外世界』と言うだけで、彼女の願いは叶わない。

とは言え私も、殺し合いを先導、享受している人の為に管理局に見つかる危険を冒すつもりはなかった。私自身雲隠れする為に管理外世界に居るのだし、徴兵でもされてなければ理由はどうあれ戦争や

つてるメンバーも、物資を平気で収める人も全員殺し合いを推奨してる人達なのだから。

でも彼女は、綺麗な願い事を抱いていて何の力もない為にその願いを封じられている人だ。

私が叶える願いとして、これほど当てはまるものもそうない。

『分かっているとは思いますが…マスターの計画、条件は最悪ですよ？』

「『私にとって』でしょ？戦争をこれ以上被害なく終わらせるには次の戦端が開く前に片付けなきゃいけない。」

速効でなければいくらか手はあるが、ちまちま魔法を使用していれば管理局に見咎められてそれまでだし、何よりそんな事をしている間に何回戦端が開かれるか分かったものじゃない。

だったら…一手で決めるしかない。

ワイドエリアサーチを行い、両軍の兵士が次にぶつかりそうな位置を探す。

「…つちゃあ…また都合いいのが悪いのか…」

数分も立たないうちに両軍がぶつかりかねない一角を見つけた私は、その地に向かって飛翔した。

「止まれ！」

私が上空から拡声魔法を使用して叫ぶと、地上の両軍は上から声が出たことを不思議に思ったのか私を見上げ、姿を見たものから硬直する。

衝突しそうな両軍の間で、私は『巨大な白い翼』を背に空に浮かんでいた。

言うまでもないが、魔法で構成した見た目だけの翼である。

「人の子等よ、我は貴様等の戦を見ていた。他者を犯し奪い合うのは弱肉強食の理の避けられぬのだろう。だが…この戦が、この奪い合いが、真に必要な物だと貴様等はそう言い出す気か？」

「まったく…犯罪者が神様のフリなんて世も末だな。」

内心で悪態を吐きながら表面上は出来るだけ無表情で偉そうな物言いを続ける。

「世界の支配者を気取り、己が生きる道を他者を蹂躪する事にしか見出せないと言っているのであれば……」

そこで言葉と拡声魔法を切る。

ここだ。ここで失敗すれば、ただの無意味な脅迫になる。いくら神っぽいものの強大な力が恐くたって生きるためならまた戦うだろう。そうなれば、彼女との約束は守れない。

「加減はしない…いけるね？イノセント。」

『…了解しました。』

少しでも不満がありそうな間はあったものの、それでも了承が返って来た。

バーストモードを展開、全放出魔力を魔力剣に集束させる。

後先考えてたら絶対に届かない、乗せられるだけの魔力を乗せる！

「バースト…セイバー!!!」

本来無色のはずの私の魔力が、白い刃と化して放たれ…

両軍の間の砂漠を両断した。

裂けた大地に砂が流れていき、裂け目の傍にいた人達は慌てて離れていく。

地平線の彼方まで裂けていく大地を確認した上で、私は息が乱れるのを無理矢理堪え、一回だけ深く息を吐く。

へ口へ口な様を見せたら神聖っぽさが薄れるから。

再度拡声魔法を発動した私は、全体に向かって叫ぶ。

「己が生きる道を他者を蹂躪する事にしか見出せないと言うのであれば……この裁きの刃、次は貴様等に直に降り注ぐと思え！」

宣言と共に、両軍から悲鳴が上がりそれぞれの国へ散っていく。

いくら管理局の対応が遅い世界とは言え、バーストモードまで使えばさすがに魔力を感知されているだろう。

私もすぐにでも転移魔法でこの世界を去らなければいけなかったのだが……

『マスター、転移を』

「まだ……成功してるか確認して、出来てなかったら完成させていかない……」

けれど、私の心配は杞憂に終わる。

亀裂から、水が流れてきていた。

私がやりたかった事は二つ、超常現象的な一撃を見せて神を連想させ、怯えさせる事で戦端を閉ざす事と…すぐに来れる位置に川を引く事。

海までの距離を考えるととても常人のやる事ではなかったけど、どうにか届いた。

おまけに、少なかった隙間は濁流に押される形で広がっている。

海水だからそのままは使えないとは言え、近場に水分を採取できる場があればあとは知恵で解決できるだろう。

確認が済んだ段階で戦艦の転移反応を感じる。

ち…やっぱり簡単には逃げられないか。

「…ごめん、馬鹿なマスターで。」

『今更です、お気になさらず。』

「傷つくなあ。」

本当になんでもないことのように間髪入れずに返してきたイノセントに苦笑しつつ、私は戦闘に備えて別世界に転移した。

転移先もトレースされていたらしく、結界に捕まった。

「管理外世界での無断魔法使用他の容疑で逮捕する！抵抗せずに降伏しろ！！」

一回り見渡せば、大体百人ぐらいの魔導師に囲まれていた。
ふん…ようやく本気か？いちいち対応が遅い…

「寝ぼけたことを…」

「何？」

「管理局が本気で当たれば、私一人で出来る事なんて簡単だったはずだ。それを法が理由で見殺しに出来る癖に法を破った張本人である私は逮捕程度ですませる気か。」

私はイノセントから魔力剣を展開する。

「私は悪だと言われて否定はしない。正義と秩序の管理局らしく…潰しに来い！！」

堂々と言い切ると、私に警告を行った隊長格らしき男がその手を拳げ…

「放て！！」

彼の号令と共に、四方八方から射撃魔法が放たれた。
っち！困んで一斉射撃とは大したシンプルイズベストだ！

だけど…この道を選んだときから一人の戦いになることくらい分かってたんだ！

「イノセント！レイブラスター4つ！！」
『プットアウト。』

どうにか射砲撃を回避しつつ、かわしきれない誘導弾はフィールド
防御で止める。

絶対売れない難易度だなこのシューティング。

長時間やってられないので四方にレイブラスターを投げる。

シューターや砲撃に当たったレイブラスターは…

洒落にならない光を放ち爆発した。

自作強化閃光弾、レイブラスター。

生身で受ければ確実に目を破壊する光。

光量が強すぎるため、バリアジャケットがないと死にかねないほど
の熱量を放つ。

だが、フィールド防御に鏡、黒色等の持つ光を通さない性質を加え
るだけで簡単に防げる。

何しろバリアジャケットさえ来てればまず死なない程度の熱量なの
だから。

つまり…広範囲攻撃にもかかわらず少量の魔力で自分には無害化で
きる、独り身の私には便利な武装だ。

私は光の熱を感じながら包囲の一角に迫り、そこにいた数人を斬撃

による魔力ダメージで昏倒させる。
そして切り崩した一角を飛ぶ。

取り敢えず包囲は抜けたか…

「つく…逃がすな！」

男の号令で、即座に私の後を追う形で飛翔する局員達。

単に今結界を破って転移を使って逃げたところで、様子をつかがってるだろうバックアップに捕まるだけだ。

だから…もとより逃げるつもりで包囲を抜けた訳じゃない！！

私は振り返り、左手の『指先』を媒体に五つの魔法陣を展開する。

「ストレートバスター・ファイブ…」

「いかん！回避し」

「墜ちろおっ！！」

『ファイア。』

男が何か言っていたが、無視して砲撃を放つ。

5つの砲撃は、包囲を抜けた私を追うことで直線になりつつあった魔導師達を飲み込んだ。

五発撃つ分制御が難解な為、スパイラルバスターは使えない。だが、そもそも五発の砲撃と言う時点で高威力だ。現に、未だに浮いてる連中は最初の1/3程度だった。

出来るだけ仲間をかばおうとしたのか、騒がしかった隊長らしき男は防御魔法を展開する態勢のまま固まっっていて、落ち始めた段階で局員に支えられていた。

成る程、換えの利かない指揮官としてはどうかとも思っけど、仲間思いのいい隊長さんだ。

『マスター、もう戦闘続行は不可能です。』
「っと、それもそうか。」

イノセントの声にふらついて、ようやく自分の状態を自覚する。

かなりの魔力を使用するバーストセイバーから転移魔法での逃走、魔力ダメージを与える局員達の射砲撃を（回避もしたとは言え）フィールド防御で耐え、なのはデイベインバスター級の砲撃を5発同時に放ったんだ。

さすがにこれ以上…魔法戦闘は無理か。

「イノセント、モードリリース。」
『マスター、転移座標をトレースされるのを警戒するのは分かりませんが引くべきです。』

私はイノセントを無視して短剣を抜く。

麻痺と眠気を伴う神経毒を血中に直接なが仕込むための短剣だが…

非殺傷なんて便利なものはなく、急所でも斬るつもりなら…

『マスター!』

イノセントから強めに呼びかけられる。

「心配しないの。私が誰だか…忘れた訳じゃないよね?」

こんな所で終わるつもりはないし、法が説得か、理由は分からないけれど…

私を諦めた管理局に負けて終わるつもりはもつとない。

私は短刀を手に視覚を取り戻しつつある局員達に向かって飛翔した。

ある人は切って麻痺させ、ある人は液体窒素弾を投擲し凍結させて、デバイス本体に殴られて片腕が折れて、蹴りを直撃させて胃を潰し、麻酔銃をバリアジャケットに遮られ、シューターを喰らってよろけて、配慮する余裕もなくなってきた、バリアジャケットの隙間に小型爆弾投げ込んで、直撃して多量の血を流す味方に怯えた残りを切った。

全滅を確認した所で私は眼下に広がる森に落ちていく。

結界だけは魔法を使わなきゃ破壊できない。

私は結界の境目まで行き、イノセントを取り出した。

魔力刃を展開して結界を破壊した後、転移魔法を使ってその場を離れた。

「ふう…とりあえず大丈夫みたいだね。」

『そのようですね。』

洞窟内で息を吐くと、私は身体のを抜いた。

ここは局員と交戦していた世界で、私自身は転移していなかった。

転移魔法一回がギリギリの魔力では、次の転移座標を追われて逃げ切れないのがオチ。

だから、私は自分と同程度の質量の水を異世界の海へ転送したのだ。

局員がすっかり転移座標を追って、かつ作戦に気づかれていなければ早々見つかる事もないだろう。

何しろ洞窟自体は手を加えていない自然のものだし、入り口がやたらと狭い。

仮にこの世界へも調査のための要員を裂いているとしても、余程重点的に捜索しなければ見つからないだろう。

何より…調査しようにも百人ほど片付けた事だし。

「本当に、備えあれば憂いなし…だね。」

片腕が折れているため小型電灯を啜えて真つ暗な洞窟の一角に隠しておいた包みを取り出す。

緊急時に対応できるように幾つかの世界の見つかりにくい場所にこうついた小包をおいてあり、転移魔法の行使可能距離内で丁度いいこの世界で戦ったわけだ。

『その備えも今回でほぼ使い切りでしたが。』

「…デバイスって言うより小姑みたいだよイノセント。」

『私以外、貴女に説教なんてする人物は一人しかいませんから。』

イノセントの言葉に自嘲気味に息を吐く。

父親の顔を知らなくて、母親に売られて、都合よく誰かが助けに来てくれる事もなく、管理局の話は一切聴く気無い未だ一人で戦ってる私に説教なんてするのは確かに一人しか…

「ってイノセント、まるで私にお説教する人がいるみたいじゃ」

『何処かのヒーローに死んだ方がマシという考え方を矯正されませんでしたか？』

言い切れず、言葉を止められた。

はは…ホント予想外だよ…一緒に居る訳でも無いのに私の人生にまで食い込んで。

君は今どうしているんだろうね？救える筈の人を探してがむしゃらに手を伸ばしているのか、それとも力を身に着ける為に修行でもしているんだろうか？

私は今こうして戦っている。

それが誰かの幸せに繋がるなら、いつかまた肩を並べられるのだろうか？

それとも私が平和や幸せを脅かす者とされて、戦う事になるんだろうか？

どちらでも、構わない。

ただどうか…夢破れていない君と再会出来ますように…

S i d e 〱 ？ ？ ？

戦争は、突然現れた天使様の裁きによって本当にアツサリと終了した。

裂けた大地に水が流れ、川が出来たのだ。

見たことも無い生物達が生息する川のお陰で食料も手に入るようになった。

両国共に水の不足から開放された私達は、そのままでは使う事のできない水の加工技術を模索するため、両国から研究者を集めて共同研究機関が作られた。

そんな中、私は…小さな教会を開いていた。

「しすたー！きょうもおはなしきかせて！」

「おはなしー！！」

「分かりました。」

せがまれた私は今日も『白い堕天使』の話語る。

「しすたー、だてんしつてなあに？」

「神様の言う事を聞かなかった天使様の事ですよ。」

「えー！てんしさまわるくないよー！」

堕天使の意味は子供達には不評だったみたいで、皆から不満気な声
が上がる。

「神様は、私達を助けるつもりはなかったんですよ。自分達のこと
は自分達でやらないと、皆も怒られるでしょう？」

子供達が難しい事を聞いたように首を捻る中、一人の女の子が手を
上げる。

「じゃあなんでてんしさまはわたしたちをたすけてくれたの？」

純粹で素朴な疑問。

私が告げていた自身への否定を笑い飛ばした彼女が何で、私の願
いを叶えると言ってくれたのか…

「きつと、我慢…出来なかつたんでしょ。」

細かい事は聞いていない以上憶測になるけれど…

私が諦めていた綺麗事を否定する事が、彼女がとても楽しそうに告げたとある馬鹿さんをも否定しているようで、我慢できなかったんだと思う。

「あーだからわるいんだ！こいつもがまんしないできのうおそなえものつまみぐいしてたし！」

「ば、ばらすなよおー！！」

「ふふ…」

微笑ましい言い合いを眺めつつ思う。

こんな事が出来るようになったのも全部、彼女の力のお陰だ。

彼女が我慢していたならきっと、この世界は未だに続いている殺し合いと物資の搾取によって疲弊していただろう。

それが本当に悪者のする事なのか、違う世界に居る私には分からない。

だけど…私は、その日を忘れない。

とても綺麗な笑顔を見せてくれた、強くて優しい白い堕天使に出会った事を…

S
I
D
E

O
U
T

外話・白い墮天使（後書き）

今回は普段と色々違うので一つ一つ解説と言う名の言い訳を（笑）

名前が出て無いよ：

全員モブ…と言うよりもこの世界の出来事自体が逸れた話になるため全員分の名前を出して、後に二度と使われないというのもどうかと考えた結果、ために全員名前がでない形式でやってみよう。という事で今回殆ど名前が出ていません。

国家間の確執が異変一つで終わる訳が…：

恒久的にと言うのは無理がありますが、昔から神聖なものについては実際に存在すら確認できていなくても、宗教戦争などの心に影響のある強大な力となっているので、戦闘理由がなくなり畏怖が植えつけられればしばらくはおさまるか…：
他の異常部分は…物語補正という事で（汗）

通常以上に強力な閃光弾なんて受けて局員一同目治るの？：

バリアジャケットは一応着てない部分にも防御効果を發揮しているので、無理して光を直視するような馬鹿な真似をしていなければ、発達している技術も相まって治せるかと。

ただ、リライヴは敵対中の局員に対してそこまで遠慮は無いです。

『他人守ろうとする上、大小はあれど権力者なんだから自分位守れるよね？』位には。

幕間・燻る残り火

幕間・燻る残り火

S i d e 御神美沙斗

「な、何だこいがあっ！」

「ぐあっ！！！」

銃声が響く中、私は室内の敵を片っ端から斬って捨てていった。地下室まで用意している組織にしては雇っている護衛は大したでもなく、多少出来のいいのもいたが対一であれば一瞬で片付けられるレベルの相手がせいぜいだった。

加減のできない相手であれば確実に息の根まで止める必要があるが、この程度なら戦闘不能に調整することも出来るし何よりではある。もっとも…確実に生き繋げるかどうかは知らないが。まあ売春から兵器や薬の密売まで行っている組織の護衛についているような連中にそこまで気を使ってやる義理は無い。

室内を片付けたところで廊下に出ると、長い廊下にいくつもの扉があった。

…何処かが裏口になっていれば重要なものだけもって脱出している可能性が高い。

一つ一つ見ている暇もないので『心』で周囲を探る。

明らかに人の数が多い部屋があった。

迷わずその部屋の扉を…

鞘突きで放った射抜で吹き飛ばした。

「ぐあつ！！」

歪んだ扉の先から潰れた声が聞こえてくると同時に机の下の男に銃口が向けられ、放たれると同時に神速で飛び込んだ。

木製の机を下の男ごと蹴り潰し、掃除用具入れから飛び出してきた男を鋼糸で拘束、手刀で昏倒させた。

男が飛び出してきた掃除用具入れを倒すと、隠し通路があった。

一手であたりが引けるとは幸先がいい…

通路を駆けていくと、階段付近で固まっている集団が見えた。

あれが主犯か…

武装持ちの護衛を片付けて、主犯核の連中を拘束する。何か騒いでいるが所詮罵詈雑言なので聞く耳は持たない。

階段上部を覆う鉄板を徹で切断して表へ出て、通信機を動かす。

『首尾はどうかね？』

「隠し通路から脱出しようとしていた者たちを確保しました。内部に確認しきれしていない別室があるため確保はお願いします。」

『了解した。』

鋼糸で縛りつけた連中を待機部隊に任せ、私は内部の殲滅へと戻った。

「残敵の掃討は完了…だね。」

全部屋の確認が済んだところで、私は息を吐いた。

今回、丁度人手が少ない時に発見の報があつた密売組織の確保、殲滅にあたり、私一人での突入となつた。

無論、少ないとは言え多少の人手はあつたのだが、彼等に突入を任せた場合外部の警戒…先の隠し通路からの脱出などに対応する為の『数』が居なくなる。

ただ内部を片付けるだけであれば私一人で事足りるため、今回このような手段をとる事になつたのだ。

蓋を開けてみれば、内部は通信妨害までかかっていたため部隊で入つても連携が取り辛かつた事を考えるとかえってよかつたのかもしれない。

全体の指揮も執らなければならぬため、早々に戻ろうとして…

「これは…」

散乱していた資料の一つを手にして、齒噛みした。

S I D E O U T

修行から戻った8月中頃から一週間程たったある日、俺と兄さんは月村家を襲撃したころつきを片付けて鋼糸で縛っていた。

「しっかしなんだったんだこいつら？」

「さあな…手練でも無いようだが…」

昨日兄さんに美沙斗さんから『月村の人達の様子を見て欲しい』との連絡があったため、兄さんは忍さんに、俺はすずかにそれぞれついて過ごす事になったのだが…

翌日である今日、家でマツタリ過ごしている所にいきなり襲撃を受ける事になったのである。

最も、おおっぴらに車で乗りつけた拳銃武器が金属バットや改造工アガンというとても残念な連中だったのだが。

「気を抜くな速人。むしろこの程度の相手が襲撃してきた事が問題なんだ。」

「分かってるよ。」

兄さんの注意の通り、この程度の連中が夜の一族の情報を持っているとも思えないし、情報も持ってなくて襲撃するならむしろ大企業の一人名であるアリサの方だろう。

「このまま法的な処置を…とは行かないんだ、知っている事は洗いざらい吐いて貰う。」

「っち…ガキが恐くてやくざがやってられるかよ。」

兄さんに問い詰められた縛られている男の一人がそう言って兄さんを見据える。

十人で乗り込んできてそのガキに返り討ちにあった時点でもうどうしようもないだろうが…この手の連中は現代草食男子と違って変な方向でプライド高いからなあ…

俺はこいつらよりよっぽど常人外れた生活のお陰で指つめる程度じや済まない拷問方法にも心当たりはあるが、ヒーローとして絶対にやるつもりは無い。

「なあ…名前出した方が早くないか？」

「何の…いや、駄目だ。俺達は所属してるわけじゃないんだから。」

香港国際警防と言えば、知っているやくざ連中なら裸足で逃げ出すだろう。当然、敵に回すなんて真似を一介の暴力団が出来る筈も無い。

一応名前を伏せて兄さんに聞いては見たが、兄さんからは予想通りの答えが返って来た。

「ま、いいか。必要なら明日まで捕らえて置けばいい訳だし。」

「そついう事だ。」

現地での事後処理、引継ぎが終わり次第休暇を使ってこつちに来ると美沙斗さんから話があり、それが明日になるという話だったので、それまで拘束しておけばいいだけだ。

「んじゃ俺はノエルさんに部屋手配して貰って来る。」

「…待て、忍に許可を」

「おいおい兄さん半分家主だろ？ 寧ろ居るんだしさ。捕らえて置けばいいって許可したじゃないか。」

以前の事件の後すぐに子供が出来たらしく、今では月村性で大半こ
つちで過ごしている。

半年近くも俺の修行に付き合わせたせいもあるのか、未だに主の様
相に慣れていない兄さんに肩を竦める。

「と、言う訳だから衣食住は心配しなくていいよ。」

「ちっ……」

子供に畳まれた拳気まで使われたのが納得いかなかったのか、兄
さんに問い詰められていた隊長らしい人は顔を逸らして舌打ちした。

「でも本当に凄いね速人君、恭也さんと比べても見劣りしなかつた
よ。」

「そりゃそうだろ。兄さんは勿論俺だって本気じゃなかったし。」

「言っちゃ何だけどさ…本当モンスターよね。アンタも恭也さんも
」

部屋に戻ると、窓から様子を伺っていたはずかと遊びに来ていたア
リサに褒められて呆れられた。

俺は軽く肩を竦める。

「兄さんと一緒にするなよ。そんな化物な俺も姉さんも一本取れて
無いんだから。」

「アンタの場合それに加えて魔法まで使えるんでしょ？」

「魔法運用の能力『だけ』で見ればなのは達の半分も無いけどな。」
「それでよくなのはに全勝できてるわねアンタ…」

なのはからどんな風に話されたのか分からないが、俺が話せば話すほどアリサの反応が冷たくなっていった。

って言うか、ナギ八貫う前の二戦目で負けてるんだが…なのは的にはアレを勝利とカウントしたくないのだろうか？

「でもどうすんのよ？忍さんは恭也さんとくつついててもいいけどアンタがすずかにベツタリしてるのは別の意味で危ないと思うんだけど？」

ジト目を向けてくるアリサに向かって俺は腰に手を当て胸を張る。

「邪推にも程があるぞ、俺は何もしない。せいぜい部屋に聞き耳立てるくらいだ。」

「すずか、護衛変えたほうがいいわ絶対。」

「あ、あはは…」

俺が堂々と宣言した台詞に、過剰反応するアリサに苦笑するすずかでも、同じ部屋にでも居ない限りそれ位しないと危ないのは事実なんだよなあ…襲う側にモラルなんて元々無い訳で、何も装備できない風呂とか個室に隔離されるトイレとか絶対狙われるだろうし…無論、そんな事が出来るのは、道中の警備を抜けるだけの俺や兄さんクラスの戦闘者だけではあるのだが。

「アリサも気をつけろよ？金目当てじゃないかはまだ決まって無いんだから。」

「わかつてる。護衛の人と一緒に鮫島に迎えに来てもらう事になってるから。」

それならとりあえず少々の事なら大丈夫だろう。

日常的に警戒態勢で無いと危ないって言うのも大変だな。

「いい？ すすか。何かされたら恭也さんは無理でも私が忍さんにちやんと相談してよね。」

「大丈夫だよ、多分。」

「すすかまで多分かよ！？ 信用無いなあ俺…。」

笑みを見せながら語る二人。

その会話の内容はともかく、張り詰めた空気が無い事が俺や兄さんを信用してくれていると感じられて少し嬉しかった。

とりあえずは美沙斗さんが来るまで、きっちりこの場を護ろう。

Side 〱 月村すすか

「ま、まさか寝る時まで一緒とは思わなかったよ…。」

夜も更けた頃、速人君は私の部屋にいた。

お姉ちゃんの『私と雫は恭也が見てくれるから、速人君はすすかをよろしくね。』との鶴の一声により、ここでの見張りが決定したのだ。

言うほどは疑ってないけど、速人君は温泉とかで色々まずい所があ

ったから少しだけ心配になる。

「一応大きさはあるけど…ベッド一つしかないんだ。狭くなっちゃうけど」

「あ、俺は椅子にいるからいいよ。」

並んで眠る位はしょうが無いと思っていたんだけど、速人君は近くの椅子に腰掛けた。

「速人君：寝ないで護衛してくれるつもりなの？」

「一応寝るよ。ただ、浅くだけだね。寝てても何かあれば起きて動ける程度に寝るつもり。」

事も無げに言った速人君は、本当に椅子から動くつもりは無いみたいだった。

「速人君って、普段言ってるより真面目だよな。」

「何だよ急に。」

「こんな状況なら事故扱いで少し位何かあるかなって思ってたから。」

がっくりとオーバーに俯く速人君。

「護衛中に襲い掛かったら最早護衛じゃ無いだろ…」

「でもお姉ちゃん達は」

「言っつな、俺が悪かった。」

お姉ちゃんの護衛についてそのまま一緒になった恭也さんに護衛じゃないと言ったも同じになってしまっ為か、速人君は私が言い切る前に謝ってきた。

もつとも、二人は恋人…今となつては夫婦だけれど。

「初めはハリボテみたいなものだったんだよ。」

「ハリボテ？」

「暗殺者として育てられたつてのは言つたろ？その時は正直何もなかった。相手が裸だとしても見る箇所はどこに武装を仕込んでいるか、どんな戦闘スタイルか…そういう所だった。」

皮膚の内側にも仕込んでいる人が居ると聞いて、さすがに痛々しくなる。

が、当の速人君は顔色一つ変えずに続けた。

「そんなんで一般家庭入つたわけだけど…すずかなら服の感想聞いて、『その服装では武器を隠しにくいと思います』とか返されたらどう思う？」

「確かにそれは…コメントに困るね…」

想像して、速人君がそんな台詞を言う事に違和感を感じなかった事にどう返していいか少し困る。

「だろ？で、ヒーロー目指す折に『英雄色を好む』つて知って、あえて意図的に騒ぐようにして目を向けてたら…ま、今では普通に気になつてしょうがなく…」

「うーん…確かに武器の話をされても困るけど…」

変わった先も大きく間違つている気がしてやっぱりコメントに困る。

「ま、そういう訳で。ヒーロー目指した結果の副産物みたいな物だから、護衛中位は安心してくれていいよ。」

事も無げに昔の事を話した速人君はそう言っただけで笑う。

きっと、今そんな話をしたのは少し速人君が…男の人が傍に居る状態で眠る事が心配だった私を安心させるため。

不安が消えた私は、深い眠りについた。

S I D E O U T

翌日…美沙斗さんから告げられた事実は、とんでもないものだった。

「彼女達二人…月村忍さんと月村すずかちゃんの情報が、出鱈目に
出回っている。」

出回っているのはある種予想がっていたが、出鱈目といったところ
が引つかかる。

「彼女達の血を飲むと不老不死になれるとか、実は淫魔の一種だ
とか、魔法が使えるとか…そう言った情報が出回っているんだ。」

「…それ、裏の情報屋がやり取りするにはあまりにいい加減だよな。
素人集団か？」

第一、特定組織のみに渡されている訳でもなく出回っているのだから裏の世界に入りたてのド素人か、真似事をしようとした奴が半端になげたか殺されたか、そんなレベルだ。

こんないい加減な情報で襲われたのだとしたら迷惑にもほどがある。

「確かにこれだけならば誰も動きはしないだろう。だが、以前海鳴で港周辺が丸々異能力で破壊されただろう？恭也と速人が止めたと言っていた…」

…魔導師に提供された機械を使って襲ってきた男が逃げようとした港だ。

エネルギー弾、熱光線銃なんて近未来的代物はこの世界には無い。異能力という扱いで処理されていたのか…

「海鳴近辺に住んでいる事は発覚している。同時期にそんな騒ぎがあったと聞けば信憑性が高くなる。更に情報提供者はHGS患者だと言っ話まである。」

「はい？」

もう滅茶苦茶だった。

HGS患者とさえ言えば超簡単に言えば超能力を持つてる人。転移や浮遊が出来るが、基本的に病院や施設にいる筈で早々うつっている訳も無い。

「あの…何でそうなったんですか？」

「何でもあちこちに現れた情報提供者が、ありえないほどの広範囲を短時間で移動している事からそう推測されたいが…」

一つだけその『超能力』を起こせて自由に動けた存在に心当たりがある。

「ちなみに美沙斗さん…その情報提供者って…」

「昨日調べては見たんだが…済まない、まだ見つかっていない。機械の杖を持った男という所までは分かっているんだが…」

……ほぼ確定だった。

コンサートでの事件でひっ捕らえた後この世界から消えた上、分かっている範囲の関係者の記憶と痕跡を異界の技術で弄繰り回してあるんだ。いくら香港警防と言えど所在が掴める訳が無い。永遠に。いい加減なレベルの情報屋に情報を渡していた理由も、魔法のない世界での活動に慣れていないから当たりやすい連中から回っていたのだろう。

…事前に情報を撒いたとすると、捕らえた二人を売るつもりだったのだろうか？

何にしても…

「管理しろよ管理局ー！！」

頭を抑えて叫んだ俺の言葉の意味を知らない美沙斗さんだけが、ただ一人首を傾げていた。

漏れちゃいけないはずの二人の情報が広く浅く漏れた拳句、香港警防に魔法がらみの事件に関わるきっかけが出来るとか、正直もう俺の対処できる領域じゃない。

恐らく多用していただろう転移魔法に一回も気付かなかった事に嘆きつつ、この馬鹿げた事態をどう收拾したものかと頭を抱えた。

まあ地球は『管理外』世界だし、星の数ほどあるだろう何処かの世界の一つで魔法使われてすぐ分かるなら、闇の書事件もP・T事件も一瞬で解決に向かっていただろうから無茶は無茶なのだろうが：

とにかくクロノだけは絶対巻き込もうと心に決めた。

幕間・燻る残り火（後書き）

…と言う訳でまだ全部片付いていませんでした。
対処は次回になります。

犯罪者が転移魔法多用していた：

原作でも普通になのは、フェイトの戦闘回数済むまで来なくて、海鳴近辺のはやての家に帰れる距離に蒐集で疲れきった状態で転移してきているはずの守護騎士四人の転移座標を海鳴在中で感知できなかったことを考えると、この手の犯罪者が居ても簡単には気づけな
いだろうという事で今回のような事になってます。

速人は叫んでもますが、犯罪って片付けるのはともかく未然に防ぐのはかなり難しいはずなので作者は管理局を甘く見ているわけでは
ありません（汗）

幕間・旅立ちの日

幕間・旅立ちの日

どう考えても管理世界の話もせざるを得ない状況だと判断したため、クロノに連絡を取ったところ、仕事に片がついたら来るとの知らせを受けた。

かつてにベラベラと管理世界の話をも局員ですらない俺からする訳にもいかなかったので、それまではノンビリする事となった。

美沙斗さんと直接会うのも久々だし、ゆっくり話すのもいいだろうという事で、俺は美沙斗さんと一緒に紅茶を飲んでいた。

「それにしても…強くなったみたいだね。」

「え？いやあ…それほどでもありますけど。」

美沙斗さんに褒められつつ、俺は胸を張って笑う。

「自信を持つのはいいけど」

「過信は禁物でしょ？勿論分かってますけど、姉さんから一本とつた身で強くないとは言えませんしね。」

先の台詞だけだと自惚れに近いが、これが俺の本音だった。

兄さんや美沙斗さんは勿論、二人に追従する姉さんや怪我を治してブランクを取り戻した父さんも、異能力無しでは全『生命体』の内
で最強に近い部類だ。

その内の姉さんから、一本とはいえ神速まで解禁した状態で勝利し

たんだ。下手にまだまだなどと下手に出てはそんな皆の格を下げかねない。

「…もしかして、全力の美由紀から一本とったのかい？」

「教わった『歩法』までは使いました。これより上の禁じ手があったなら全力とは言えませんがね。」

名前は誰に聞かれてるのか分からないから出さなかったが、歩法と
言うだけで充分伝わったのだろう。

美沙斗さんは俺を見て呆然としていた。

「驚いたな…もう辿りついたのか。身体は大丈夫かい？」

「壊れてる場所は無いですよ。修行内容がきつかったんで見た目が
荒れちゃいましたけど。」

幸い長袖襟あり長ズボンでいれば問題は無いが、足から首まで刀傷
やら倒れたときに刺さった木片や石の傷なんかが多数ある上に魔法
で完治までさせると身体の回復能力が落ちるからと言う理由で致命
傷以外は自然治癒に任せてきたから傷跡だらけになってしまった。

兄さんや父さんも似たようなものだし俺も別に気にしてはいないが、
さすがに公共の風呂なんかは避けたほうがいい状態だ。

「まだ若いんだから、多少なり見た目も気にした方がいいと思うよ。」

苦笑しつつそう忠告する美沙斗さんだったが、顔の僅かな笑みを見る
限りでは安心してくれたのだろう。

「君はまだ、いつか告げたようにヒーローになるつもりでいるのか
いっ？」

「ですね。その為に身に着けた力ですから。」

迷いなく即答すると、目を伏せた美沙斗さん。

「なら…私も止めるかい？」

そのまま静かに出された問いかけに、俺は答えを返す事ができなかった。

美沙斗さんは、真つ当なやりかたを以って龍というテロ組織を潰すと決めている。

それに限った話ではないが、最凶とも呼ばれる香港国際警防に居るとなれば当然敵を…

答えあぐねている俺の前で、美沙斗さんは軽く微笑んだ。

「少し…意地の悪い質問だったかな？」

「いえ…」

無論、追い詰めるための質問で無い事ぐらい承知している。

だが、そんな普通の問いかけにすら答える事が出来ない程、俺の目指す先は…

「君のことだ、理解していないとも思わないけれど…君の目指す先はこんな事を考え、答えを出せずに終わる事が殆どになってしまうだろう。」

「…そうですね。」

荒唐無稽なのは肯定せざるを得ない。
けどそれは今に始まった話じゃない。

「もし君が今の道に限界を感じて、それでも日向の人々を護りたい
と思ったら、香港国際警防に来るといい。」

恐らくは、妥協案を提供してくれたのであろう美沙斗さんの優しさに嬉しくなるが、俺は肩を竦めて首を横に振った。

「折角のお誘いですけど、兄さんから修行つけてもらったときにこの道をどこまでも進むって約束してるんで。」

「そうか。」

静かに声を返した美沙斗さんは、やっぱり何処か優しげだった。
俺はともかく、兄さんの事は信用してるんだろっな、きっと。

仕事を終えて出向いたクロノにこっちの現状を伝えると、さすがに美沙斗さんに説明する許可は出た。

そんなわけで、追っている杖を持った男については捕まえる事は不可能だと異界の概要とともに説明することになった。

「異世界に…魔導師に…時空管理局か…非常識には慣れているつもりだったが…」

いい加減異常にも慣れていているだろう美沙斗さんも、さすがに驚いているようだった。

無理も無い話だが。

「で、実際問題としてだけ…撒かれた情報を駆逐するにはどれ位かかる？」

「…私達が本気であたればさほど時間はかからないが…本気で動いた事をより暗部の連中に知られた場合、かえって何かあると判断されかねない。」

美沙斗さんの想定するケースは最悪のものだった。

未だ殲滅し切れていない龍の面子に漏れでもしたら、あつという間に事態は最悪の方向に向かっていくだろう。

平和ボケも含まれていたとは言え、御神本家の大半を爆破テロ仕掛けて殲滅するような裏のプロだ。

いくら夜の一族が異種族だからといってもそう上手い事凌げる相手ではない。

「じゃあ管理局の方で何とかできるか？」

「こちらと同じだ。下手に管理外世界で本気で活動すれば上層部に睨まれたり犯罪者に知れたりでかえって状況が悪くなりかねないだろう。」

クロノが静かに返した答えも、ある程度予想がつくものだった。

だがそうなるよ…

「漏れていた情報はあくまでも二人のものだった。関係するものが無い場合はこちらで管理して噂の自然消滅を待つのが妥当ではあるんだけど…」

言いつつ美沙斗さんは忍さんとすずかを見る。

兄さんならともかく、二人が香港国際警防の監視下にずっと押し込められっぱなしと言うのもきつっただろう。

「つまり、沈静化するまで人に見つからない場所に居ればいい…」と」

そこまで言っただけ俺はクロノを見る。

どっちの返答も大体予想は出来ていたから、もうこれしか手は無いんじゃないかと思っていた。

結局予想通りの返答しかなかったため、クロノに視線を映した訳だが…

「…ちょっと待て、君は本気で言っているのか？」

「日本で働いている訳でもないミッド籍の人間に国籍持たせてるんだから、逆だつて別に不思議な事じゃないだろ？」

「ぐ…っ…」

視線だけで察したクロノが渋い顔をするが、何一つ不思議で無い当たり前のように説明してやると、返す言葉もなくなったクロノが歯噛みする。

「速人君…ひよっとして私とすずかに異世界に住めって言うてるの？」

「そうですね。」

「私嫌よ、恭也や零、ノエルと離れるのは。」

言いつつ忍さんは兄さんの服のすそを掴む。

「ノエルさんは質量兵器廠禁の関係で武装を多少外さないとまずいけど…別に豪邸に住ませるとまで言わなければ多少は頑張ってくれるだろクロノ。でないときくらさんキレるぞ。」

「それは…」

思い出してもらおう意味も込めてクロノに問いかけると、渋い顔をす
る。

以前の騒動時にアースラ組員が外に漏らした場合魔法関係の話を漏
らす。と言った脅しあいの様相を呈している。

無論、アースラ乗組員が漏らした訳では無いのだが、誠意も何もな
く犯罪者が勝手に漏らしたなんて言い訳をすれば、一族側からは縁
を切った分家が勝手に喋ったとか言う形で話を漏らされかねない。

それだけでなくもさくらさんには前回はギリギリ何とかよつやっとの
思いで怒りを静めてもらったのだ。

実は魔導師に漏らされた情報についてカバーしきれてませんでした
なんて今更言ったら…

正直、俺は想像もしたく無い。

「確かにこつちにもそれなりに人脈とかあるだろうけど、いつ誰に
襲撃されるか分からない状態ですと居る事になってもその方がい
い？」

「う…」

忍さんは何処か悲しそうに兄さんを見る。

勿論、そうなればなつたで兄さんは何が何でも、どんな連中が出てきても護ろうとするだろう。

だが、長い期間まったく隙なしと言つのがどれだけ難しいかという事は、御神の剣士の親族ですらテロに対応できなかった事が示している。

ボディーガードの真つ最中にまさか修行する訳にもいかないし、それはそれで長期間続けば腕が鈍る原因にもなりかねない。

「どうしても嫌だ無理だと管理局や忍さん達が言つなら…全部どうにか済ませる方法は俺が考える。」

「何？」

「なのは達が護れると信じた管理局にとって、魔導師の管理外世界襲来を防ぐどころかその被害を受けた人の引越し一つが無理な事だと言つのなら…俺一人で、世界中に氾濫してる情報源と、それを持つているかもしれないまずい連中を捌いてやるって言ってるんだよ。」

魔導師の来襲が防ぎきれないと言つのはまだいい。

人海戦術なんて常時監視なんかに使えるものでも無いし、そこまで対応しろとは言わないが…護衛しろと言ってる訳でもない引越しに渋るようであればさすがにちよつと怒る。

だから怒っていることを示しつつ嫌味な言い方をしてみたが、クロノは言い返してくることも無く静かに俯いた。

「分かった、こちらは出来る限りサポートさせてもらう。彼女達によければになるが…」

クロノがそう言っただけで視線を移した先では、忍さんの手を引いたすがすがしく頷いていた。

「速人君は…私達が残りたかったって言ったなら無理でも本当に一人で飛び回るし、恭也さんだってきつと、いつでも気を張ってなきゃ行けなくてもずっと護ろうとするよ？そんなの…嫌だよ…」

「すずか…」

人と違うという事を背負ったばかりか、それで力になるところか足かせや重荷として、認めて受け入れてくれる親類に迷惑にしかならないと言っただけなのだろう。

「此方でも出来る限り騒ぎにならないよう沈静化を試みたいと思う。終わり次第、速人君にでも伝えればいいのか？」

「いや、俺も兄さん達に同伴するから。」

「何だと!？」

俺と一緒に引越す事が意外だったのか、思いつきで驚くクロノ。だが、これも承諾してもらっただけじゃない。

「魔導師襲撃があつて避難するのに、護衛一人なすつてのは酷だろ？かと言つて局員常に巻き込むわけにも行かないだろ。俺と宵の騎士皆が同居すれば護衛になるからな。」

「はあ…なんだか君に毎回踊らされてる気がするんだが…」

「だったらしっかりしてくれ。そもそもその毎日が『事件が起こる度』何だから。」

ぐつぐつの音も出なくなったクロノは、ただ頭を抑えて深く溜息を吐いた。

Side 月村恭也

引越しが決まり、一時的には言え籍も消す事になるためごく近い関係者のみに連絡をつけた俺は…全ての終わりに赤星に呼び出されて森に来ていた。

「…どうしたんだ？」

「一度でいい、お前の『本気』で勝負してくれ。」

問いかけた俺に、真っ直ぐな視線を向ける赤星。

「勿論、無闇に振るうものでもなければ、試合として使うものでない業なのは俺も知っている。だが…一度も親友の本気を知らないまま別れる事になるのは…な。無理なのは分かっているけど、一度だけ高町…っと、今は月村恭也だったな。その『本気』を受けたいんだ。」

一応、剣道ですらないルールで戦いに近い試合はやっているものの、それでもルールがある道場で練り広げていたものだ。

確かに、俺は赤星と『本気』では戦っていない。

修行をしてきた美由紀や速人とも違う、ただ仕合って来た友人。

「…分かった。」

「ありがとう。」

静かにそれだけ交わすと、後は合図もなく互いに戦闘態勢になる。赤星が木刀を構え、踏み込みに入った瞬間：

神速に入る。

躊躇う事無く緩やかな世界の中であいた赤星の胸に一閃を叩き込んだ。

「：分かつてはいたけど、本当に強いんだな。」

「これは：奥義だ。本気になると言ったとはいえ、必要もなく勝てる相手に見せるものじゃない。」

相も変わらず使っただけで軽く息を切らす神速の後、切れた息のまま告げた答えに満足したのか、仰向けに倒れている赤星は小さく笑みを見せて目を閉じた。

Side 月村すずか

「そっか：すずかもいつちやうのね。」

「うん…」

アリサちゃんに管理世界に引越す事を伝えると、少しだけいつもの明るさが感じられなくなった声が返って来た。

なのはちゃんやフェイトちゃん、はやてちゃんはいずれ管理局にお勤めする関係できっとミッドチルダに引越すだろうとは思っていた。

私も居なくなると、アリサちゃんだけがこっちに残る事になる。

「ま、せいぜい勉強とかはしとくことね。戻ってきた時に働き口がなかったらすずかの出来次第ではすぐにいい役職当ててあげられるようにしておくから。」

「ふふ…そうだね。アリサちゃんにおいていられないように頑張るよ。」

今一人離れる私も寂しいから、アリサちゃんだっけと寂しいはずなのに、普段の様子を崩さないようにする強さを持つてるのは本当に凄いと思う。

「…ちゃんと、帰ってきなさいよ？忘れてたりしたら承知しないんだから。」

「ふふ…アリサちゃんはきっと誰も忘れないと思うよ。」

「へえ…言うようになったわねずかも。」

折角だから、明るいままの方がいい。お別れなんて雰囲気よりも、お出かけ位が丁度いい。

「じゃあ…またね。」

「しっかりやりなさいよ。折角速人も行くんだから上手く使ってあげなさい。」

「あはは…」

挨拶を済ませてあくまでも明るいまま離れた。

だからきつと…少し視界が滲んでいるのは気のせいだと思う。

S I D E O U T

「そういう訳で一足先に管理世界に移り住む事になったが…面倒だから帰らないとかいって寄るのは止めとけよ？今はまだ家に帰ってこれるんだから。」

「分かってるよ。って言うか、局内じゃ兄妹関係知られて無いんだから入り浸ってたら騒ぎになるってば。」

子供の内から両親に会える機会を無理矢理削る事もあるまいと忠告したが、なのはの返しの方がもつともだった。

そっか…管理世界に移り住むとなると色々隠す事も出てくるのか。俺も高町姓名乗らない方が妥当か。

「避難するのは分かるけど、いつでも帰ってきなさいね。速人は家の家族なんだから。」

「それより俺のように素晴らしい奥さんを探して自立して来い。」
「揃って間逆だなあ。」

こっちのごたごたが片付けば戻るのに支障は無いし、そもそも俺は特にこっちにきたらまずい理由が無いから戻ってこれるのだが。

「ま、それじゃ行ってくる。」

別段重苦しく言う事も無いため、軽く手を振って俺は家を出た。

世界が変わってもやる事は変わらない。
思い描いた夢物語のヒーローを目指す。

『行きましょう、マスター。』

「ああ。」

決意を新たにする意を汲み取ってくれたのか、ナギハからの音声は
何処か力強かった。

幕間・旅立ちの日（後書き）

と言う訳で、いざ管理世界へ。

って…Sts関係ない方まで巻き込んでるし（汗）

ただ『管理世界に引越したい』だとなのは達みたいに管理局がフオローする理由が無いのでこんな形に。

そしてアリサが本編出ないとかそんな次元じゃないほど寂しい状態に…

最終部開始前・始まりの災禍

最終部開始前・始まりの災禍

なのはとフェイトがはやてのところ遊びに集まると言う事で、フレリア達が呼ばれていたため、折角だから軽く営業活動でもと来ていた空港で、火災が起きた。

局員に避難命令出される前にと出来る限り近場の人を護っている中で、泣き声が聞こえた。

「お人形が無いの！」

「そんなのは新しいのを買えばいいから！」

「ダメ！アレは…あのお人形はダメなのっ！！！」

結界から出ようとしている女の子から、そんな悲鳴が聞こえてきた。この炎だ、人形一つが残る可能性はあまり無いだろう。だから…

「君が探してるお人形がどんなのか教えてくれる？」

鎮火するまで待つてはいられない。

俺は結界内で泣いている女の子から人形の特徴と通ってきた方向を聞いて駆け出した。

『局員に気づかれます、凧形態での搜索を。』

「分かってる。あの人達に見せたらまずいから物陰まで行ったらな。」

言いつつ物陰に飛び込んだ俺は、即座に凧形態をとる。

ほぼ全ての探查系に引っかかる事無い素材を駆使して出来うる最善の形で装備を整えた服装。

上下共に黒い服に黒い靴に黒い手袋、オマケに顔を覆う覆面。

全身防護に顔隠し、更には毛髪などが現場に残る事を避ける意味も含まれている。

魔力で構成するバリアジャケットをフルに活用すればどうしたところで反応が漏れるため、これは基本的に科学素材で作成された服を展開する形となっている。

これが、俺の為にアリシアが作り上げてくれた隠密活動用形態である。

『しかし…普通人命より優先しますか？』

「馬鹿言え、両方取るんだよ。」

『…そうでしたね。』

俺も馬鹿だとは思うが、自身のデバイスに呆れられると少しむっとくる。

だが口論している場合ではないので、俺は即座に気配遮断を行う。

今回は思考を殺す必要が無いので代謝の低下のみ。

中毒症状を避けるため呼吸量を減らした状態で活動するためである。

炎を纏った瓦礫が降り注ぐ中、俺はひたすら少女が来たらしい方向を駆ける。

と、煤けた人形が転がっているのが見えて…

人形に瓦礫が降り注いだ。

「…つぶねー…間一髪…」

神速を使ってどうにか人形を回収する事が出来た俺は、地面に倒れこんで荒い息を吐いていた。

『マスター、代謝が戻っていますよ。』

神速を扱うには極度の集中力が必要になるため、気配遮断等と併用が出来ないのである。

だが、ナギハの忠告は当然織り込み済みだ。

「だから倒れこんだんだ。中毒起こす空気は比重が軽いからな。」

とはいえ、代謝もそのままにいつまでも火災の中で呼吸しては肺から焼ける。

早急に呼吸を整えた俺は、外からの馬鹿でかい魔力を感じる。

これは…はやてだな。

『この区画への氷結魔法かと予測されます。直撃は危険です。』
「…って言うても何処へ…」

魔法発動まで時間も無い中で、俺は適度に隠れられそうな場所を探し…

辺りを圧倒的な冷気が埋め尽くした。

Side 八神はやて

「この区域もこれで大丈夫です！」

「了解。」

大規模な火災に足りない人員。

通常なら犠牲者すら出ていておかしくない事態の中、誰も被害を出さずに済んでいるのは、たまたま遊びに来ていたなのはちゃんとフイトちゃんの協力と…

『見知らぬ民間魔導師』の協力のお陰に他ならなかった。

勿論、あまりそういう人に好き勝手されるわけにはいかないんやけど…

「この火災にその人数で対応しようと言うのであれば聞けません。私は貴方達の面子の為に人を焼き殺す趣味は無いので。」

とまで言われ、しかもなのはちゃん達と同等の魔力値で拳句救助の指揮には従うとまで言われては、ろくに人手の無い今、協力を断るわけにも行かなかった。

「（とはいえ…あんまり目立つとまずいと思うんやけどなあ…シユテルちゃんも。」

現在局員に見知らぬ民間魔導師として扱われているのは、他ならぬ宵の騎士の内の二人…シユテルちゃんとレヴィちゃんだった。変身魔法でも使っておけばいいものを、全身を覆い隠すようなローブを身に纏っているその姿は何処からどう見ても怪しかった。

とは言え、シユテルちゃんは下手な局員はおるか、なのはちゃんよりも制御系が上手い位の魔導師であり、レヴィちゃんも、建物内部に突入させると危ないからと言う理由でなのはちゃんやフェイトちゃんや建物から救助した人を救助隊まで連れて行くという安全な作業をしている。

ちなみにそのシユテルちゃんは、燃料等爆発の危険があるものへの障壁の展開を行っている。

お陰で他の局員が凍結可能区域を探す作業に回せたり、なのはちゃんやフェイトちゃんが建物から救助隊まで往復する時間を短縮できた。

おかげで既に救助の大部分が済んだ上、かなりの範囲を氷結できた。

「遅くなってすまない！現地の諸君と、臨時協力のエース達に感謝する！後はこちらに任せてくれ！」

そんな頃合になって、ようやく航空魔導師隊が来た。

「了解しました！引き続き協力を続けますので、指示をお願いします！」

…言いたい事は…あるにはある。

けど、一刻も早く救助に向かう気概があったはずの局員も、『お上のごたごた』でこれだけかかったのだろうと考えると、口を噤む他なかった。

S I D E O U T

「…あつぶねー…氷漬けになるかと思った。」

直撃の方向で向かってきた氷結魔法を凌ぐため、近くにあったトイレの個室に飛び込んだ。

だが、着弾した箇所から広がってきたのか壁から扉から次々凍結していくため、個室に入っただけでは足りず、ナギハを床に突き立てた上で柄に立つと言った曲芸じみた真似をすることになった。

さすがにデバイスまでは凍らなかったので助かった。この服耐冷仕様が聞いて無いし。

『…トイレの床に突き立てられるとは思いませんでした。』

「熱消毒されてるだろ、多分。」

と言つよりそんな事気にするデバイスってどうなんだ？

魔法制御をほぼナギハ任せにしてきた影響で人間らしくなったのだ

るうか？

「さて、局員がばたばたしてる間に逃げるとするか。捕まって詰問はごめんだからな。」

『人形取りに火災現場に飛び込んだとは言えませぬね。』

「…だから、お前本当にデバイスかったの。」

呆れたナギハの愚痴を聞き流しつつ、降りても凍らない事を確認した上で俺は凍って開かない扉を切断した。

…小用のトイレが無い。

トイレを出てみればきっちりプレートに女性用の文字が刻まれていた。

「いや、この状況でそんな事で怒られないとは思っけど…これってまずいのかなあ？」

『まずい事なら他に山ほどしているでしょう。』

「それはそうだけどな…」

なのはのお説教に若干恐怖しつつ、俺は凍りついた建物を脱出した。ま、まあばれない…よな？

脱出した後、救助隊の下へ向かう。
どうやら殆ど片付いた上に航空隊もついたようで、さすがに俺が何の情報も無いまま突入する段階は過ぎた。

さすがに全身黒尽くめの男が侵入しては怪しまれるどころではすまないなので、私服に戻りデバイスを待機状態にする。

そんなに衰弱した様子もなかったし検査位は受けただろうが病院にまでは搬送されていないと思うんだが…

当たりをつけてそれらしき場所を探すと、丁度帰り支度をしている母娘を見つけた。

「や、奥さん、お嬢さん。」

「貴方は…」

「お兄ちゃん？」

俺は首を傾げる女の子に、人形をそつと差し出す。

所々煤けたり溶けたりしてはいるが、とりあえずは元の形は留めていた。

「これであつてる…かな？」

女の子は人形を大慌てで手に取ると、服をずらして中を見る。

途端、目を輝かせて大事そうに人形を抱きしめた。

「これは…」

「えっと、出来れば黙ってて貰えますか？局員さんにはれるとちよつと…ダメですかね？」

「い、いえ！とんでもない！！」

どっちかと言うと世間一般的には褒められた話でも無いので頼み込む形で軽く頭を下げると、お母さんは激しく首を左右に振った。

「お兄ちゃん、ありがとう！」

「痛んでてごめんな、もうちょっと早く見つけれたら良かったんだけど。」

「ううん、見つかってよかった！」

本当に大事そうに人形を抱える女の子。

そんな彼女を見ながらお母さんはいとおしげな笑みを浮かべた。

「この娘の同じ学校の男の子からの誕生日プレゼントなんです。」

「へえ、恋人ですか？それは確かに代えがききませんね。見つかってよかった。」

「本当にありがとうございます…何かお礼が出来ればいいのですが…」

少し申し訳なさそうなお母さんに、俺はポケットから一つの券を取り出して渡す。

券には、『洋菓子店エメラルドスイーツ・割引券』と描かれていた。

「親類がやってる店なんです、もしよければ一回顔出してあげてください。位置的にあんまり良くないんですが、味は自信があるそうなんです。」

「あ…はい。ぜひとも覗きます。」

「それじゃああまり長居して局の方に捕まってもアレなので俺はこの辺で。」

「ありがとうお兄ちゃん！」

俺は笑顔の母娘に笑顔を返してその場を去った。

合流地点に向かいつつ、人形を手にした女の子の笑顔を思い出す。

「あの笑顔見ただけで今回は充分だな。」

『そうですね。』

俺の感想に素直な反応を返すナギハ。

うーむ、何はともあれ俺のデバイスなんだなあこいつも。

「ふん…まったく、貴様と言う奴は…何処まで無茶をすれば気が済むのだ。」

「あ、ディアーチエ。そつちの首尾はどうだ？」

合流地点に着くと、片手を腰に当てたディアーチエがいた。

会うなり悪態をつくディアーチエの方がどうなったかをたずねると、少し苦い顔をする。

「何かいたはいたらしいが、逃げられた。調査用に使っていた人形が何体か壊された。」

はき捨てるように告げるディアーチエ。

そんなディアーチエに頼んでいたのは、この災害の犯人探した。

居なければ居ないで構わないし、事故の方が犯人が居るより平和で

よかったのだが…

人形が破壊されたとなると、何か怪しい動きをしていた奴がいるのは間違いないだろう。

「局に見つかって無いだろうな？俺等が主犯だとか思われたら説明とか面倒だぞ？」

「敵が逃げたから残骸も回収してきた。恐らくは大丈夫だろうが、広域捜査をアレだけの局員に見つからずにと言うのは少し無理があるだろう。」

ディアーチエの返答にはさすがに同感だった。

俺どころか通常の局員レベルの隠密行動すら出来ないだろう人形を多数操っていたのだ。

オマケにディアーチエの魔力がいくらあると専用デバイスが用意してあると、本来専門分野でもないのに上手い事行くはずも無い。

局員が火災に集中してただろうと願うほか無いが…

「お疲れ様でしたマスター。」

「ただいまマスター！」

「お、シュテル、レヴィ。サンキュー。」

駆け寄ってくるレヴィと静かに歩いてくるシュテルそれぞれに声をかけられる。

二人ともロープは既に脱いでデバイスにしまっているようで、今はバリアジャケットの様相を成している。

「でも納得いかないなあ…ボクが突入したほうが少なくともその辺の人たちよりは早く助けられたと思うんだけど…」

「仕方ないでしょう、正式に免許があるわけでも無いんですから。」

安全な場所で橋渡しをやっていたせいかな不満げなレヴィをなだめるシユテル。

実際、後先考えず飛び回った挙句救助される人の容態なんかを考慮できないだろうレヴィが中まで行って拾ってくるというのはちよつと危険が過ぎるだろう。

「ところで、ディアーチエはともかくマスターは本当に行かないのですか？」

「ん、ああ。…むしろ俺は今回こっちにいなかったことにして欲しい。」

「また無茶したもんねーマスター。」

久しぶりに集まると言う事ではやてのところに呼ばれている『お友達』のシユテルとレヴィ。

ニコニコと笑顔お見せるレヴィに言われると何気に気まずいものがあるが、それ以外にももう一つ理由がある。

局員から見て色々危ない俺はなのはとの兄妹関係を伏せている。長期休暇や年末なんかに実家で会う分には構わないだろうが、なんでもない日に直接会いに行ったりして下手なゴシップにでも見つかったらシャレにならない。

「フレイアは先に行ってるんだろ？三人で楽しんでくるといい。」

「うん。」

素直に頷くレヴィに対して、少し考えるような仕草をするシユテル。

「なのは『で』楽しんでも？」

「友達に使う台詞じゃないぞー。あんまりからかいすぎるなよ。」

兄さんと同じで人をからかって遊ぶ傾向があるシユテルが真顔で告げた台詞に、俺は軽く肩を竦めた。

Side 高町なのは

「やっぱりなあ…」

「んー？」

どこか期待外れと言うようなはやてちゃんの呟きに、私は目を開け…

「仕事着半脱ぎで寝転んで…中年のおばさんの集まりですか此処は？」

「…っ！？」

扉が開くと共に聞こえてきた冷めた声とそのあんまりな内容に跳ね起きる。

フエイトちゃんとはやてちゃんも同様だった。

声の発生源に目を向けると、既に私服に着替えていたシユテルちゃんの姿があった。

黒のゴスロリがやけに似合う。

「首都航空魔導師に活躍が横取りされていた件ですか？」

「そ、そうやけどとりあえずさっきの発言について」

「大して重要な話でも無いし事実でしょう？」

どうやら私達に弁解する間をくれる気は無いみたいだ。

さすがにこんな歳で中年のおばさんなんて言われては立ち直れない

が、仕事着半脱ぎで寝転んでいたのは事実なので何も言い返せない。諦めたのかはやてちゃんは咳払い一つした後、真面目な表情で私達を見た。

「そつや。今回の件もやけど、ミッドチルダ地上の管理局部隊は行動が遅すぎる。拳向上でこんな縄張り争いやつとって…」

「組織はそんなものでしょう。」

「そんなもので済ませたくないんや、だから…私、自分の部隊を持ちたいんよ。」

はやてちゃんは真剣な面持ちのまま続ける。

「少数精鋭のエキスパート部隊。それで、戦果を挙げていたら、上のほうも少しは変わるかも知れへん。」

「腹黒い連中の鼻つまみ者になりそうですけどね。」

「シユテルちゃん、最後まで聞こうよ。」

冷めたシユテルちゃんの言う事も分からないではなかったけれど、今ははやてちゃんの話の話を聞きたかった。

「でな、私がもしそんな部隊を作る事になったら…フェイトちゃん、なのはちゃん、協力してくれへんかな？」

はやてちゃんが言い切った後、顔を見合わせる私とフェイトちゃんと、はやてちゃんは慌てて手を上げる。

「今シユテルちゃんが言ったようなこともあるし、二人の都合とか、進路とかあるんはわかるんやけど…でも…」

「はやてちゃん、何を水臭い。」

「小学三年生からの付き合いじゃない。」

少し申し訳なさそうなのはやてちゃんの心配をバツサリ切って捨てるくらいの気で言い切る。

「あの頃はまだしつかりパジャマ位着ていたんですけどね…いつの間にものぐさおばさんになったんでしょうか。」

「うぐ…」

が、シュテルちゃんのつつこみで台無しにされてしまった。

当のシュテルちゃんは自分のデバイス、ルシフェリオンを眺めつつ溜息を吐く。

「マスターはともかく、こんなみつともない姿恭也が見たら怒りますよ？」

「見たらって見せる訳…」

と、言いかけてシュテルちゃんの手に行っているルシフェリオンを見る。

…まさか…映ってる？

「ちよっ…だ、ダメ！シュテルちゃんそれ貸して！」

「何ですか？人のデバイス取るうとしないでください。」

「絶対わかってやってるでしょ！？」

慌てて起き上がってデバイスを取ろうとするが、未だに運動オンチの私では多少体力がついた程度でシュテルちゃんを捕まえられないわけもなく簡単にあしらわれる。

「縄張り争いに精を出す連中より人命救う為に躍起になる人が出世

した方がマスターとしても嬉しいでしょう。局外の私達にも出来る事があれば言ってください。」

「シュテルちゃん！軽く無視しないでよ！！」

軽く私をあしらいつつ、はやてちゃんにそう返すシュテルちゃん。

「おおきに…ありがとうございます。」

はやてちゃんがそんな私達を見ながらお礼を告げたところで部屋の扉が開かれる。

「おっはよー！フレイアとすずかがご飯作ったから呼んできてって…」

入ってきたのはレヴィちゃんだった。

と、レヴィちゃんは言い切らずにシュテルちゃんとそれを追いかけていた私を見る。

「下着姿で飛び回るなんてはしたないってマスターが言ってたぞ、なのは。だからボクはちゃんと着替えてる。」

両手を腰に当てて、得意げに胸を張るレヴィちゃん。

と、シュテルちゃんは目を伏せた後ルシフェリオンを操作する。

「レヴィに常識を指摘されるとは…あまりにも可哀想なので今回は見なかったことにしておきます。」

…正直シュテルちゃんにからかわれたことよりもダメージが大きかった。

馬鹿にされたレヴィちゃんがシュテルちゃんに抗議しつつ去る姿を

見送った後、私はフェイトちゃんに泣きついた。

休暇だったのに災害が起きるし、本当に厄日だ…

S I D E
O U T

最終部開始前・始まりの災禍（後書き）

と、言う訳でついにStrikers…って本編時間入ってませんが（笑）

速人が気づかれずに凍らされかけたのは要救助者リストにおらず且つ代謝低下のせいで生体反応に引つかからなかったため、決して速人を無視して氷結魔法撃つたわけではないのであしからず。

第一話・開幕直後の大問題

第一話・開幕直後の大問題

「ありがとうございます。」

フレイアの優しい声を背に、店を出る客。

それでここ…我が家の一階に位置する『洋菓子店エメラルドスイーツ』は静かになった。

「しかし…暇な店なあ。」

あくまで洋菓子店であるため席数こそ少ないものの、一応席もあり、店内飲食も可能となっているにも拘らず、店内は静まり返っていた。祝日は休みの少女達が多少やってくるのだが、それ以外ではあまり人が来ない。

休みにはそれなりに来るは来るのだが、赤字と黒字の境目を彷徨っている成績では、到底生活の足しに出来るだけの資金源とはなっていないかった。

「すみません主、私の力量不足で…」

「あ、いやいや。問題なのは位置だろ。」

申し訳なさそうにするフレイアに対して俺は手を振って否定する。

一般人が容易に近寄らないような位置にある、管理局の敷地に一番近い土地にある一軒家が、この世界に来た際に提供された場所だっ

た。

学校にも一般オフィスにも縁が無く、たまたま通りすぎるような場所ですらないこんな場所で商売をするとなると、正直ここの菓子だけが目当てで来るような客しか来ない。

恐らくは俺と宵の騎士の見張りが目的なんだろうが…正直商売には辛いだろう。

「フレイアは充分すぎるほど良くやってるって。母さんほどじゃないにしてもその母さんにべた惚れの父さんが褒めてくれたる？」

「ですが結局翠屋を名乗る許可はいただけっていませんし…」

「そりゃ数年じゃ無理だ。むしろそんな簡単に追いつかれたら母さん泣くぞ。」

本人は恐れ多いと思っていたらしいが、折角なので俺が翠屋名乗らせてくれないかと聞いてみたのだ。

が、どうしても母さんを納得させる域にいかなかったため断られたのだ。

何であれ本職は厳しい。

しかし、単に洋菓子店を自分で持つ分の腕については充分とお墨付きは出ているので、こうして洋菓子店そのものは出来ている。

「ただいま。」

「ただいま！」

と、呑気に話しているところに兄さんと雫が修行から帰って来た。

異界だからか保護されているからか自然が多いミッドでは、多少都市部を離れれば容易に剣の修行が可能で、俺も兄さんも助かっている。

そして…雫も。

兄さんになつている雫は当然の如く兄さんが扱う御神の剣技にも惹かれ、見様見真似で木刀を手に振りはじめ、最近では基礎鍛錬のみとは言え兄さんについていつている。

…すずかもおしとやかな文系のクセにフェイト相手にドッジボールで一本取るほどの超人だし、足りてる身体能力を修行で更に鍛えたせいか、体力では俺や兄さんに迫るほどになっている。
未恐ろしいなおい。

一緒に風呂場へ向かう兄さんと雫。

父さんもなのはと入ろうとしてたが、兄さんまで駄々甘だったことは、正直今でも驚きだ。

「あー、やっぱり見てない。」

「アリシア。どうかしたのか？」

と、家一番の『稼ぎ頭』となっているアリシアが姿を見せた。

アリシアはポッドで長く眠っていたのが原因かろくに成長せず、未だに中学一年相当の少女体型だ。

中学卒業と共に家の人に挑戦状叩きつけるくらいの勢いで俺のところに行くの大見得切ったあたり、本当に子供っぽいのかも分からないが。

基本部屋から出てくるのは外出時くらいのアリシアが店舗部分に姿を見せることは無いんだけど…

振り返っている間にアリシアはテレビのチャンネルを切り替え…

見覚えのあるキャラクターが映っていた。

「ふふん、とうとうCMまで出来たのよ。自分でやっておいてなんだけど本当ビックリだよ。」

テレビには、『ダークフェンサー2・迫り来る闇』と、ありそうな名前が書かれていた。

「って2！？いつの間にな…」

「人気だったからね。今回は全部自分で作る必要なかったから早く済んだんだよ。」

腰に手を添えて胸を張るアリシア。

ダークフェンサーは元々、アリシアが暇つぶしで作った、海鳴の身内をモチーフにしたキャラクターを即興の設定に組み込んだ格闘ゲームだったのだが、それをこちらで売った所評判が良かったのだ。ゲームセンターやグッズからの利益が稼ぎになって思っていたのだが…まさか、2の製作までやっていたとは知らなかった。

「ちゃんと許可取ったんだろっな？」

「速人以外の皆にはちゃんと許可取ったよ。ビックリさせたかったから黙ってたんだ。」

「あ…こりゃ確かに驚いた。」

誇らしげにしているアリシアの頭を撫でる。

と、アリシアは何故か表情を歪める。

「嬉しくて驚いてくれたなら…もっと違うご褒美がいいなあ。もう大人なんだし…」

言いつつ俺の顔に手を伸ばしてくるアリシア。

多分キスしようとしているんだろ。それと言つのも、好かれていいのかこういう事をされる事が多いのだ。

定番となっているそれを軽くかわして何気なくテレビに視線を戻す。

「続いては、未だに続く白い堕天使と呼称されている謎の魔導師、リライブについての特集です。」

たまたま、そんなニュースが入った。

「あ、またやつてるんだ。」

「珍しいケースの犯罪者ではあるからな。」

ニュースの映像には、リライブによって破壊された施設のいくつかが映っている。

管理局施設が無いあたりは、管理局側から緘口令でも敷かれているのか、情報操作でもあったのか：

局総出であたつても大して隠れても居ない犯罪者を10年近くも捕らえられていないと言つるのは局的には伏せておきたい情報でもあるのだろう。

「彼女は徹底的に民間施設を破壊しつくしたかと思えば、犯罪組織を潰したりもしているというその不明慮な行動で有名ですが、専門家の方々はどのような見解をお持ちなのでしょう？」

「非合法的依頼の請負人と言つのが現時点でもっとも有力な説になります。しかし、誰の利益になるわけでもないような行動も多数見られる為、安易に確定させる訳にも行かない状態です。」

管理世界では魔法が見られても捕まらなければいいからなのか、時折災害救助にすら姿を見せる事もあるリライブ。

アイツの戦いの意味なんて、一般人がどんな考えても分かる訳無いよな…

「ねえ速人。彼女は止めなくてもいいの？たしかにそんなに犠牲者を進んで出してるとって訳じゃないけど…」

「放っておいていいとは言わないけど、まあそのうち止める事になるさ。管理局から依頼扱いで頼まれるくらいまでは俺から止めには行かない。」

正義…なんてものじゃない。

ただ、『真つ当なルールに従ったが為に見捨てられた自分』と同じ者を見捨てないが為に戦っている。

そういう人たちの障害となっているものにあまり容赦をしないだけで、誰かを傷つける事を目的にはしていないんだ。しかも、非殺傷にも気を使っている。

進んで…何が何でも言うほどには止めたく無い。

「管理局と言えば、今日だよ。はやての新部隊。」

「そうだな。もっとも集中させてる戦力を考えたら到底俺が呼ばれる必要は無いだろうし、あんまり関係はなさそうだけど。」

言つててあんまり目立つ事ないなあと自覚して寂しくなる。

…いかにいかに。目立つ事が目的じゃないんだから。

「主のほうはどうなのですか？依頼等は…」

「うぐっ…」

「あーあ、フレイア地雷踏んだ。」

「えーあ！その…すみません…」

フレリアの切り出した通り、フレリアを除く宵の騎士三人と俺は、フリーの魔導師として依頼があれば動いているのだが…

今まさに目立てないとか考えていた所だったので、フレリアの質問は耳に痛かった。

魔導師が活躍する場所であるミッドで、人手が足りないなどの依頼は大抵普通に魔導師が必要となる事が多い。

よって、単体戦力としては役に立つ俺ではあるが、小出しに来る依頼にそんなものが必要な依頼はあまり無い。

企業スパイなんかもその気になればいくらでも出来るのだが、そういう相手方を不幸にしかねないような依頼については基本的に受けない事になっているため、俺の能力が使えるのはせいぜい管理局の依頼かボディーガード位なのだが…

管理局はそうそう民間魔導師に頼らないし、ボディーガードが必要になるような事がほいほい起こる筈も無ければ、必要な人は有名所を探して依頼する。

その為俺がこなすような依頼は来ないのだ。

「仕方ないよ。それに、ヒーローさんが忙しい世界って言うのも結構危なさそうだけど。」

「あ、すずか。」

「夕食にするから呼んできて欲しいってノエルさんに。」

「了解。」

すずかに呼ばれ、俺達は店から家の中に戻る。

この時はまだ、すずかの言うように俺が忙しくなるとは知らなかった。

S i d e 高町なのは

機動六課設立から暫くの後、初出撃の日を迎えた今日…

出てきたガジェットドローンも特に問題なく掃討出来ていたし、リアレール内に向かった四人も新人とは言えガジェット相手に一瞬でやられるような実力じゃない。

危なくなればフォローできる距離にいるし、そこまでの不安はなかった筈だった。

レリックが格納されていると予測される区画が唐突に爆発した。

「っ!？」

一瞬、最悪の事態が頭をよぎる。

が、次に感じた魔力によつて、どうにか最悪の事態だけは起こっていないだろう事が分かった。

もつとも…だからと言って喜べる要素はまったくなかったけど。

「久しぶりだね…なのは、フェイト。」

「リライヴ…ちゃん…」

爆発した車両から姿を見せたのは、レリックを手にしたりライヴちゃんだった。

フェイトちゃんも驚いていたようだったけど、思い直してすぐに構える。

彼女は広域次元犯罪者…今も尚罪を重ねる私達の止めるべき対象。

「無駄話に付き合う気が無いあたりは昔と違って局員らしいよ。」
「リライヴ…まさかこんな事件にまで協力してるなんて思わなかったよ。」

フェイトちゃんは少し悲しみを帯びた低い声でバルディッシュを振りかぶる。

当のリライヴちゃんは軽く肩を竦めると、杖状にしたデバイスを翳して…

「シュート！」

見えない魔力弾を四方に放つリライヴちゃん。

ただ透明なだけならもう既に打ち落とす位出来る！

どうにか見切ろうと思っていたのだが…放たれた魔力弾は私とフェイトちゃんを避け、残っていたガジェットを爆散させた。

「部下の人たちのしちゃったお詫び。どうせ二人ならガジェットくらい軽く片付いただろうし。」

「そんな事を気にするくらいなら大人しく捕まっただけだ。」

あい変わらずへんなところを気にするリライヴちゃんを睨みつける

が、まるで気にした様子も無い。
リミッターがかかった状態じゃいくらなんでも無理がある。しかも
どうせ情報は収集されていると見たほうがいい。
ここで切り札全て切る訳にも…

「ああ、リミッター解除してまで私と戦う気なら止めておいたほうが
いいよ。再申請面倒なんでしょ？二人じゃ勝てないから。」

「っ…言ってくれるね。」

「それじゃ、私はこれで失礼するね。」

と、本当になんでもないように去ろうとするリライヴちゃん。

「逃がさない！」

高速移動…恐らくはソニックムーブで先回りしたフェイトちゃんが
バルディッシュを振り上げ…私は背を向けたリライヴちゃんに背後
からシューターを撃つ。

計三十二個のシューターはリライヴちゃんに向かっていき…

リライヴちゃんは『何か』を振るう事でシューターを防いだ。

魔力の残滓に包まれて姿が確認できなくなって、その中から何かが
投げられる。

完全に意識を絶たれたフェイトちゃんだった。

「フェイトちゃん…！」

急いで抱きとめると、私の魔力を感じる。

フェイトちゃんを振り回して私のシューターを防いだみたい。いつの間にか姿を消しているリライブちゃん。

「っ…」

リミッターもあるとは言え、完全にあしらわれたことに情けなくなつた私は、ただ硬く口を閉ざしていた。

レリックは持ち出され、こっちの魔導師は私以外完全に昏倒させられると言つ最悪の状態になつた今回の事後処理を終えた夜…

「最悪やな…まさか最強の魔導師とまで噂されとるリライブが今回の件に関わつとるなんて。」

はやてちゃんのもとに来た私とフェイトちゃんは、苦い表情で吐かれたはやてちゃんの台詞に同意する形で頷いた。

「少なくともリミッターついたまま…ううん、切り札まで全て何もかも使つても一対一でどうにかなる相手じゃないよ、リライブは。」
「わかつとる。しかも魔力に頼つとる訳でもないんは四人の倒され

方で判明しとるし。」

はやてちゃんが言う通り、リライブちゃんは魔力に頼って戦っている訳じゃない。

何しろ中の四人が倒されてレリックが回収されるまで気づけなかった原因は、『魔法を使用しないで四人を倒したから』なのだ。

急所攻撃による昏倒。

まるで何処かのヒーローもどきのような技を使っている以上、ただ魔力値に優れただけでない事は明白。

魔力でも技量でも勝てなければ、どう勝つかなんて殆ど見えてこない。

「下手に目をつけられたりしたら嫌やからあんまり使いとうなかつたんやけど…」

「手があるの？」

渋い表情のはやてちゃんだけど、対処できるなら知っておきたい。この際裏技でも何でも知ったことじゃなかった。

「とある民間の魔導師さんとろくに出世できてない管理局の鼻つまみ者さんの力を借りるほか無いかなー」と。

「…結局…そうなるんだね。」

フェイトちゃんが、少しだけ悲しげに呟いた。

速人お兄ちゃんの手を借りるのが悔しいのだろう。

正直、私も情けなくて悔しいのはあるんだけど…

ただの事件ならともかく、今回の機動六課の設立が許されたのには何か訳があるはずなのだ。

そこまではまだ聞かせてもらって無いけど、折角戦力を集めたところでそれで太刀打ちできない一人が相手にいたのでは話にならない。

「これから手を回してみようと思うんやけど…なのはちゃん」

「大丈夫、分かってるよ。」

宵の騎士の皆の事といい、結構危ない橋を渡っている速人お兄ちゃんの功績とか私との兄妹関係については伏せられている。

こっちでも特に高町は名乗っていないみたいだし、わざわざばらすような事はしないほうがいい。

「なのは…大丈夫？」

「もー…子供じゃないんだから大丈夫だよ。大体、仮に全部喋っても出来るだけ頼りたくないし。」

別に嫌ってるからと言うわけじゃないけど、やっぱり管理局の事でお兄ちゃんの手を借りるのは出来るだけ避けたい。

本心で言っていると分かってくれたのか、フェイトちゃんもはやてちゃんも苦笑しつつではあるけど頷いてくれた。

「それじゃ…何とかしてみるわ。今日は二人はゆっくり休んでな。」

「了解。」

周囲の説得とか、はやてちゃんの負担が増えるのは間違い無いけど…今の私に出来る事は、フォワードの皆を強くする事。体調不良で失敗でもしたら目も当てられない。

軽く覚えた悔しさを堪え、今日は休む事にした。
もう一度と、今日のようなことが無いように…

S I D E O U T

第一話・開幕直後の大問題（後書き）

引越しに際して状況がかなり変わっているため状況説明主体になつてしまいました（汗）

そして本編で主題になっているストライカー候補の方々は台詞も無いまま蹴散らされる破目に…フォワードの皆様ごめんなさい。

第二話・前途多難

第二話・前途多難

S i d e 八神はやて

『本気か？』

通信越しに聞こえてきた声は、第一声から冷たかった。

「そんな即効冷たい事言わんでやクロノ君。」

『そうは言うが…ただでさえ色々ギリギリの手段で戦力を集めているのに、戦力が足りないので人手が欲しい等と言われても…』

「局内部で人を寄越すのがまずいならせめて速人君のほうだけでも」

『僕としてはそちらを最も避けて欲しいんだがな。』

クロノ君は肩を落としてそう口にした。

…やっぱり速人君を管理局の事件に関わらせるのは好まないんやろ
う。

大体、私だってこんなんホントは嫌や。

「何があっても対応できるようにせんとアカンのはわかつとるし、
フォワードの皆を信用しとらんようでこんな事頼むのは嫌何やけど
…」
『…確かにあのリライヴがこの件に関わっているとすると、正直ど
んな手を使っても手が足りないのは分かっている。』

モニター越しにクロノ君も硬い表情をしている。

リライヴ：通称白い墮天使は、現在確認されている中で最強の魔導師と噂されている。

罪状としては民間、管理局問わずで多数の施設襲撃、ロストロギアの盗難及び無断使用、管理外世界での魔法行使が数知れず、犯罪歴がP・T事件への協力からで、10年もの間動いている違法魔導師。その間、概算ではあるが1000人以上の管理局魔導師を戦闘不能にしている…

と、ここまでは完全に危険な凶悪犯罪者なのだが…

その間、直接リライヴが出した局員の死者は0、後遺症が残る程の怪我を負わされたのも数える程度。

死者も出してはいるものの、凶悪な密輸犯や人身売買などを行っている組織の人間で、それも意図的に殺しているわけでも無い程度の数。

局が追っていた犯罪組織が壊滅させられて証拠品と共に組織の人員が局員の施設に転移魔法で送られてきた事すらあった。

管理外世界で魔法を使う場合大概が救済活動か戦闘停止と言う、犯罪者にふさわしくない活動ばかりが主だったものなのだ。

そのため現状、何をしだすか分からないが悪意が見えない犯罪者と

して大変扱い辛いものとなっている。

何しろ犯罪、災害、事件は彼女だけではないのだ。

しかも大概は誰かに災厄をもたらす事件で、彼女ほど優しくない。オマケに当の彼女を捕らえようにもB、Cランク魔導師では百や二百がいた所で障害にもならず、AAAクラスが三人でかかっても互角以上というのは十年前に既に判明している。

別件が凶悪な事が大半で、いつ何処に現れるか分からない彼女一人の為に常に何処にでも向かえる準備をエース複数にさせる余裕などある訳が無い。

『今回彼女がレリック絡みで動いているとすると、目的と出現傾向が絞れる事になる。融通を利かせるなら今しか無い…とも言えるか』

「そういう意味でも頼めんか？私はこれでもダメなら後はもう管理局総出で白い墮天使逮捕のみに集中でもせんと無理やと思う。」

速人君は単体戦闘において魔導師がまずたどり着けないほどの戦闘技術の持ち主で、今頼んでいるフレア一等空尉も魔力集束刃の使い手で告ぐ戦闘技術の持ち主。

魔導師としてはなのはちゃんやフェイトちゃんのほうが当然優秀ではあるけど、『対一戦闘における戦闘能力』にのみ絞って見た場合、魔導師で速人君やフレア空尉に勝てる人を探すんは無理に近い。

この二人に協力してもらってまだ倒せん相手なら、もう全戦力投入するくらいしか手が思いつかん。

クロノ君もそれを分かっているのか、神妙な面持ちのまま頷いた。

『仕方ない…手は回してみる、すぐには行かないかもしれないが』

…』

「おおきに。それまでの手は何とかこつちで考える。」

それを最後に通信を切り、息をつく。

…不安要素はまだある。

リライブと交戦して優勢に持ち込んだ一戦は、記録上P・T事件の時の庭園内での速人君とフレア空尉のコンビによる連続近接戦のみ。いくら二人の力なら近接戦で優位に立てると言っても、今の彼女の魔力で全力で距離を取る戦法をとられた場合、空では追いつけないだろう。

隊長陣で動きを制限しようにも、リミッターを解除しないと相手にもされない程戦力に差があるし、第一彼女一人を止めるのに新人以外の全戦力を当てるには新人の力量は心もとない。

「泣き言を言うとの暇は無い、必ず止めるんや…」

たとえ、相手がリライブであっても…

『…力があるのなら…助けにくれたって良かったじゃない…』

「っ…」

夢の中に映っていた、母に売られて道具として使われ続けた少女。ひとりだった私は実はグラムさんに支えられていたし、過去の罪を清算しようとしている今も沢山の人に支えてもらっている。

けれど、自分と同じ規則に見捨てられた人間を出さないために戦っているリライブちゃんは、八つ当たりのな管理局への報復に走りしている訳でも無いのに未だに独りで

「っ！考えたらアカンな…」

頭を振って、湧き上がる気持ちを抑え込む。
人それぞれ思惑があるのは当たり前で、私等が逮捕するのは悪い人
やなく罪人。

そういう点で、リライブは間違いなく罪人や。

闇の書の主の私と同じように…償っていかなアカンのや…

S I D E O U T

「と、言う訳で明日から暫く機動六課に居候する事になった。」

家の皆を食卓に集めたところで、はやてからの依頼で機動六課に出
向く事になったと伝える。

と、すぐさまにレヴィが不満げな声を漏らす。

「通うんじゃないの?」

「万全を期す為には、基本的に行動を共にして欲しいらしい。敵が
いつ出てくるかわからないし、どっか移動するのに勤務地に通常回
線使ってホイホイ連絡取るような真似もして無いだろ。」

俺の回答に兄さんが頷く。これくらいの備えは当然だ。

「何人で向かうのですか?」

「いや、俺一人だ。」

「「ええっ!?!」」

シユテルの質問に答えると、同行する気だったのかレヴィとアリシアが驚きと共に立ち上がる。

「二人ともお行儀悪いよ。」

「雫の方が大人じゃまずいんじゃないのか？」

立ち上がった二人を注意する雫。

俺が笑って問いかけると二人は座って俯いてしまった。

「立場的には俺一人でも拙い位なんだ。大体一回死んだ事になってるアリシアは元よりプチなのは、プチフェイト、プチはやてなお前等三人が管理局内テクテク歩いてたら皆何事かと思うぞ。」

特に事情を知らずに三人の子供時代を知っている人は正気を疑うだろう。

何しろ身体的にほぼまんまコピーなんだから。

「フレイアに誰か一人はついててくれ。兄さんやノエルさんでもいいから。」

「ああ。」

「かしこまりました。」

宵の巻物本体をあちこちに持ち歩くわけにも行かず、どの道統括という事で問題が起こればまずいフレイアが持って（理屈は知らないが同化するような形で）いる。

逆に言えば、フレイアになんかあったら巻物本体そのものまでやばい為、奇襲一撃でさようならとなっては困る。

何しろ、今のフレイアはBランク魔導師一人と互角に渡り合う力が

あるかどうかという程度なのだ。

「こっちはこっちでしっかりした大人もいるんだから、速人君は向
ここの事だけ考えてなさい。」

「なのはちゃん達の様子とか色々聞かせてね。」

「了解。」

笑顔で送り出してくれる気である忍さんとすずかに俺も笑顔で返す。

リライブ絡みの案件となると手加減なんてしてる余裕は無いな、体
壊すかもしれないが…

まあ、やってみるか。

Side↳ティアナイラストー

自室に戻ったあたしとスバルは、すぐに着替えに入る。

「明日来る外部の人ってどんな人なんだろうね？男の人って言うて
ただ…」

「そんなの明日になればわかるでしょ。」

呑気なスバルの問いかけを切って着替えを続ける。

「ティア、やっぱり機嫌悪い？」

少しだけ悲しげに呟くスバル。

無視して寝てやるうかとも思ったけど…今更何を隠したって無駄なのは分かってる。

「…当然でしょ。あたし達はこの仕事のプロなのよ？他所から来る奴がどんな奴で、どれだけ出来るのか知らないけど、そのあたし達が不足だからって同じ局員ならともかく外部から引っ張ってくるのよ？平然としてられないわよ…」

そう、まるであたし達が役立たずだと言われているようで…

「そういうあなたはどうなのよ。憧れのなのはさんも軽く見られるのよ？」

あたし達だけの事ならともかく、なのはさんに憧れて管理局に入つて、事ある毎に目を輝かせてなのはさんの話をするスバルにとつても気分のいい話じゃないと思っただけ…
当のスバルは聞き返すと難しいことを考えるような顔をした。

「うーん…そう言えばそうなのかもしれないけど、なのはさん達のほうがなんていうか、『悔しいけど仕方ない』って感じだったから。」

スバルの言う通り悔しそうではあるものの何処か今回の事について認めているような部分があった。

そういう姿勢は管理局員としてどうなのかと問い詰めたかったが、あたしだって子供じゃない。

現代、古代ベルカ、先史のミッドまで含めて最強かも分からないとまで言われている程デタラメな魔導師、白い墮天使リライヴ相手に手段なんて選んでいられないこと位理解は出来ている。

「それに、外部の人ならリミッターとかに引つかからないし。」

保有制限の話を持ち出すスバル。

「書類仕事苦手だったり頭弱そうな喋り方したりするくせに座学の成績いいし、結構鋭いのよね。」

スバルは、握った拳を軽く打ち合わせる。

「そのリミッターがかかっているって言っても、あのフェイト隊長が一瞬でやられちゃうような人相手に今のあたし達でどうすればいいのかって感じだし。今は…白い堕天使の相手が無理でもせめて他の事に対応できるように、強くなるって思ってる。」

「いつもそうだったけど、変なところで弱気になるくせに普段はとことん前向きなのよね…」

「もう寝るわ。訓練きついんだからしっかり休みなさい。」

「…うん。」

ぐだぐだと悩んでいても仕方ない、あたしは…立ち止まっていられないんだ…

S I D E O U T

「失礼しまーす。依頼主の八神はやてさんはどちらでしょうか?」

出来るだけ明るく元気にと思っただけにこやかに挨拶をしたのだが、何

故か局員の方々に睨まれた。
むう…バリアジャケット以外の仕事着だと思つて黒の上下で来たのがまずかつたんだらうか？
スーツは動くの面倒だしなあ…

「念には念をと思い出迎えに来て見れば…随分怪しい格好で来てくれたものだな。」

「あ、シグナム…空尉でしたっけ？」
「雇い主近隣の情報位覚えておいて貰わねば困るな。」

冷たい注意をした後、シグナムは傍の局員に事情を説明して、俺を案内してくれた。

「久しぶりだな。」
「お前店にも来ないもんなあ…オフシフトなら間に合つんじゃないのかよ。」

素性を伏せている関係上、歩きながら念話で会話する。
表情に出せないから迂闊に笑い話も出来ないが、まったく身内の会話が出来ないよりはましだ。

「別にそこまで菓子を好んでいる訳でも無いしな。」
「フレイアは別人だから合いに来る気も無いっつか？」
「そうまでは言わんが、こちらはお前と違って忙しいのだ。」
「なんで知つてんだよ…」

シグナムまで俺の依頼が無いことを知っていたのか、やけに「お前と違って」を強調される。
兄さんといひシュテルといひ…静かで真面目な奴は人をからかうのが好きなのか？

部隊長の部屋に入ると、椅子に座っていたはやてが立ち上がる。その脇にラインが飛んできて並ぶ。背後で扉が閉まる音が聞こえ…

「久しぶり速人君、元気しとった？」

「お久しぶりです！速人さん！」

「おいおい、普通に喋っていいのかよ。」

「勿論表向きはアカンよ。けど、知つとる人だけしかおらん時くらいはええやろ。ここ密室やし。」

結構軽いはやての対応に肩を竦める。

「なら表では敬語にしようとした方がいいのかな？『八神部隊長閣下』とか。」

「速人君…絶対なめとるやろ？」

「いや、自分で似合わねーと思っただけ。」

苦笑するはやてに対して同じく苦笑を返す。

が、そんな事やっていると隣に立つシグナムに睨まれた。

「あまりふざけているとただ働きにさせるぞ。」

「そうですよ！真面目にやっってください！」

「了解。シグナム空尉もライン曹長も怒ってるし本題入ってくれ。」

はやてにしても長話している余裕があるはずも無いのでさっさと話を進めることにする。

「せやな。と言ってもIDカード渡す位やけど。前線ではなのはちやんかフェイトちゃんの指示に従ってな。」

「俺前線メンバー扱いなんだ。つておい、IDカードがあるなら何で」

「郵送は出来んやろ。」

玄関で捕まった俺としてはさっさと貰っておきたかったが、たしかに郵送で送られても困る。そもそも連絡着てすぐ来た訳だし。

「リライヴへの対抗策で呼ばれたんだろ？普段どうすりゃいいのさ。寝てる？」

「給料ドロボーか！使い方はなのはちゃんに任せてあるから、戦闘訓練の敵役から雑用まで色々頑張れ。」

やっぱりそう楽なものでもなかったらしい。しかし、使い方と来たか。

妹に使われるというのも中々情けない話だなあ…

「さて…と。私はちょっと外に用事があるから途中まで一緒にいこか。」

「廊下ですぐ素性ばらすような事言つなよ。」

「お前がな。」

そんな軽い茶化しあいを最後に俺達は部屋を出た。

シグナムと別れ、メカニツクのシャーリーと合流し、道中に施設説明を受けつつ表まで行くと、ジープが置いてあった。

…これいつから置いてあったんだろつか？

部隊長の手間を減らす為だろうとは言え、結構凄い待遇だな。

「お、来たみたいやで。」

はやてが視線を移した先に、なのはを先頭にした七人と一匹が歩い

てくる。

竜て…ファンタジーだなあ。

『とりあえず知らん人らしく敬礼、自己紹介。』

『はいはい。』

俺の姿に気づいた途端に笑みを失うのはとヴィータ。

つて失礼な奴等だ。俺手伝いで来たのに。

「本日より機動六課に協力する事になりました速人と申します。管理局きつてのエースである皆様から見れば、フリーの魔導師となるといささか頼りなく感じるかも知れませんが…しばらくよろしくお願ひします。」

敬礼しつつも軽く笑顔で挨拶する。

「テメー嫌味か…」

「へ？」

ヴィータに睨まれつつ告げられた意外な台詞に全員の様子を伺ってみると、なのはは目を細め、フェイトは苦笑いして、後ろにいる橙の髪の少女にも睨まれている。

振り返るとはやては額を抑えて首を横に振った。

あれ？フリーの魔導師ってそんなに好評無いだろうしと思って謙遜してみたつもりだったのに、初日から睨まれてるし…

どうやら俺は相当に礼儀とかと無縁の生き物らしかった。

こんなんでこの先大丈夫なんだろうか？

第二話・前途多難（後書き）

初っ端から印象悪い速人。そりゃ力不足で呼ばれたのにエースだとか持ち上げられたらねえ…

外部の力をまったく借りないという事は無いでしょうが、警察が格闘大会の優勝者に町の警備を頼むような「誰が専門家だ？」と突っ込まれそうな事態がすんなりまかり通るのも問題と思ったので、クロノに洩らせてます。

ちなみに、はやてはリライブの夢の話も誰にも漏らしていません。

第三話・力

第三話・力

「はあああつ!!」

「っ…」

苛烈極まりないシグナムの剣を俺はどうか避け続ける。

一発でも当たれば初日から医務室送りか冥界送りだろう容赦の無い剣閃。

大振りメインなのは変わらないが、心なしか昔より斬撃が鋭くなっている気がする。

気や呼吸を感じ取る関係を除いた部分はどうやら体得できてきているらしい。

糸で吊るした青竹、刀で斬れたりしてな。

ただ速いとかただ強いだけではないその剣を紙一重で凌ぐ。

「あ。」

「はあつ!!」

下がるうとして背中に壁の感触を感じたところで問答無用に横薙ぎの一閃が向かって来る。

垂直に跳躍した後壁を蹴って剣を振りぬいたシグナムの背後に立ち…

『終了です。』

ナギハから時間が来た事を伝えられ、俺は深く息を吐いた。

「見事だ、本当に一撃も捕らえられないとは思わなかった。」
「そりゃどうも。」

シグナムが剣をしまう音が聞こえ、俺は目隠しを解いた。

視覚の届かない範囲を探る『心』を使った、暗所戦闘技法。

電気も無いような時代からある古流の生き残りである御神は、暗殺剣でもある。

月明かりも無い日はほぼ光は無く、そんな中でまさかランプ片手に暗殺に行くわけにもいかない。

そんなときの技法なのだが…電気等の技術の発達と共にそこまでやる必要がなくなつたのと、幼少から始めて神速に辿り付くのすら20そこらで早いと言われるような難度の技術が多いため、静馬さんでも戦闘までは出来なかつたらしい。

一応昔やっていたようで御神の書物には載っていたが、今の所対人戦闘が出来る領域に辿り着いたのは、別口でも暗殺者として育てていた俺と、師匠役無しの完全な独力で神速に辿り付いた程の兄さんの二人だけである。

完璧にこなせれば、何となくしか分からない時と異なり完全に死角

を無くせるため、神速に慣れた後にこの修行を始めたのだ。

ちなみに、今シグナムが付き合ってくれていたのは、勝ったほうの修行に付き合うと言う条件で模擬戦を行い、俺が勝ったためである。そうでもしなければ、『目隠ししている相手に魔力を使わず剣を振れ』なんて無茶に付き合ってくれる筈も無い。

「さすがに開始直後は半信半疑だったが、成程な。」
「途中からまったく躊躇い無く殺す気で来たものな…。」

その方が修行にはなるとは言え、さすがにひやひやしたが、
が、当のシグナムは軽く不思議そうにする。

「紫電一閃もシュランゲフォルムも使って無いだろう？」
「おいコラ、魔力使っなくなって前提が消えてるだろうが。」

避けやすくなるだろう紫電一閃はともかく、目隠しで回避限定の最中にシュランゲフォルムなんて使われたら絶対に死ぬ。
分かっているのかいないのか、小さく笑みを浮かべるシグナム。

「ではもう一戦と」
「ああ、待った。この辺にしておきたいんだが。」

意気揚々と再びデバイスに手をかけようとするシグナムを制する。
と、シグナムは不満げな表情を浮かべる。

「何故だ？もう体力が切れた訳でもあるまい。」
「切れるまでやってもまずいだろ。それに俺はともかくそっちは交代部隊のリーダーもあるんだろ？」

「む…。」

実際いい加減に休まないとまずかったのか、シグナムは表情を歪める。

「俺は俺で適当にやるから。隊長さんの指揮下のもとでね。」

「…あまりいじめてやるなよ。」

「分かってるって。」

普段どう思われているのか問い詰めてみたくなる台詞を残したシグナムと別れ、なのはを探す必要は無かった。

「あーあ…」

模擬戦なのか、人が宙を舞ったり建物に突っ込んだり桜色の爆発に飲み込まれたりしていた。

抵抗が抵抗になっておらず、喰らってはばたばたと倒れている。

教導…なんだろうなあ、なのは流の。

非殺傷とか無いから叩きのめされていたとは言え一応加減と言うものがある兄さん達との訓練と違って、まるで容赦が無い。

俺こっちの訓練に混ぜられなくて良かった。普通に戦っていいならともかく魔導師としての空戦機動でこんなとやったら俺だっさい的だし。

全員が完璧に伸された所で、笛の音が鳴り響いた。

新人達の訓練が終わり、解散した頃合を見計らってなのはに声をかける。

「なのは、ちょっといいか？」

こんな物凄く砕けた話しかたをしているのは、昼の一件で俺が下手に演技しないほうがいいという話になったからである。

『あーもう礼儀はええ！無礼な魔導師って事でやっつけ！慇懃無礼よりマシやる！』

とのはやての一喝によって、やりやすい形で昔からの関係のみ伏せるようにする事になったのだ。

「何？速人さん。」

と言う訳で、現在なのはからは『普段通りの口調かつ名前呼び』という大変レアな呼び方をされている。

心なしか事務的感が強いのは怒っているんだろう。

それが、俺の公共性の無さかりライヴにアツサリ負けた自分には知らないが。

間違っても甘えたいのを我慢してる…なんてことはあなのはに限ってあるはずが無いし。

「エリオとキャラコが使ってた回避訓練道具使わせて欲しいんだけど。」

「回避トレーニング？いいけど…」

言いつつ苦い顔をするなのは。

施設を利用するのが問題なんだろうか？

「施設の使い方がかんねーだろ。オメー一人訓練する間誰か見張らせとくほど暇じゃねーんだよ。」

「あ、なるほど。」

そりゃそうだ。

確かに長時間使うとなると此処に突っ立っててもらうのも悪い。

「十分位ですむんだけど…」

「へ？」

「はあ？」

なのはからは不思議そうな、ヴィータからは意味があるのかと言いたそうな声が返って来る。

「…まあいいかな。見れば分かる事だし。」

が、結局なのははそう言っただけで機材を動かしてくれなかった。

しかし…見るのか。

ま、俺もリライブ相手じゃ使わずにはすまないだろうとは思っし、見せてもしょうがないか。

見せるのには少し抵抗があったが、訓練は訓練でやらなければならぬし、身内同然の相手だから構わないと思っし、俺は展開された機材の中心に向かった。

Side 高町なのは

お兄ちゃんは機材の中央に立ったところでナギハを二刀とも抜いて周囲を確認する。

「…よし、初めてくれ。」

お兄ちゃんの合図を聞いて機材を動かすと、宙に置かれた機材から光弾が発射され始めた。

短い間隔で発射される光弾を、片足分動かすだけで回避し、酒切れのないものを切り落としていく。

「ん？おい、射撃命中してる事になってんぞ？」

「あ、本当だ。基本的に回避トレーニングだから設定を調整して無かったな。」

デバイスで斬ったものや掠めた光弾が命中扱いでカウントされている。

始めたのに止めるのもどうかと思うし、何よりフォワードの皆と違って別に正確なデータを取っておく必要は無い。

「別に記録取る必要も無いわけだし、このままでいいよ。」

「それもそうだな。にしても…」

目を細めて攻撃を捌き続けるお兄ちゃんを眺めるヴィータちゃん。

「相変わらずとんでもねえ野郎だな…デバイスで払ってるほうはともかく、普通狙ってバリアジャケット掠めるような距離で避けねえ

よ。」

完全に回避する事を前提にしている為、お兄ちゃんの身体を皮一枚掠める程度に通過した光弾も命中回数にカウントされていく。

誘導弾、爆発弾があり、何より防御魔法を展開するか高速機動で攻撃が当たる位置そのものから外れる事で攻撃に対応する私達魔導師から見ても、絶対にありえない避け方。

それを平然と繰り返すお兄ちゃんを私とヴィータちゃんは並んで眺め続け…

「そろそろだね。」

「ああ…」

お兄ちゃんから頼まれていた、2分毎に十秒ほど射撃の速度を最速にして欲しいと言う設定通りにはしてある。

フェイトちゃんでもブリッツアクションやソニックムーブで照準が合わせられないくらいの速度で射撃の雨を避けることは出来る。

けど、中で防御魔法なしで凌ぐなんて考えた魔導師は誰一人としていない。

訓練弾だけど、大丈夫なんだろうか…

少し心配する中で、それは始まった。

数えるのも馬鹿馬鹿しくなるほどの射撃の雨。あっという間に巻き上がった土ぼこりがお兄ちゃんの姿を覆い隠す。

カウント回数が加速度的に増していく。

「お、おい…止めなくていいのかこれ？いくらアイツでも…」

心配そうなヴィータちゃんの声につられて少し私も心配になる。

魔導師が魔法を使っていれば無事か位分かるんだけど、お兄ちゃんの場合魔法関係は強化くらいしか使わないから分からない。

十秒が過ぎて射撃の速度が通常に戻る。

暫くすると、まったく問題なく動いているお兄ちゃんの姿があった。

「一発も当たってねーんじゃねえのか？アイツ…」

「…だろうね。」

先の中に入ってシューターで向かって来る攻撃を凌ぎきれと言われ
たら私だって出来ない。

だからこそ呼ばれたのだとはいえ、こんな事を当たり前にやっての
けるお兄ちゃんに、悔しくなった。

S i d e 〽 キ ャ ロ 〓 ル 〓 ル シ エ

訓練でくたくたになって帰ろうとしていたところで、訓練場が使わ
れているのをみたスバルさんが、なのはさんたちのもとへ向かう。
私も疲れはあったけど、気になったのでついに行くことにした。

「お前ら休まなくていいのかよ。」

「少し気になったもので…今訓練されていたのは？」

「ああ…昼会ったフリーの魔導師だよ。」

砂煙の中から姿を現したのは、両手にデバイスを持ったフリーの魔導師…速人さんだった。

「はあ…つと。あ、前線の少女少女。」

「普通にフォワードって言えねーのかテメーは。」

剣を鞘にしまった速人さんは、デバイスをもとのネックレスに戻して首にかける。

出ていた機材は、私とエリオ君が使っていた回避トレーニングの機材だった。

「訓練なさっているんですね。少し見ていつでもいいですか？」

気になるのか、ティアナさんがそう問いかける。

速人さんは首を横に振った。

「残念ながら今日は終了。」

「ええ!？」

アツサリと言い切る速人さんに驚いたスバルさんの声が響く。

私達がさっきまで使っていたから、二十分も絶っていないと思うけど…それで終わりなんだろうか？

「あの…白い墮天使、リライブと渡り合う為に呼ばれたんですね？こんなに簡単に疲れる体力で大丈夫なんですか？」

「余力残しておかないとまずいしな。シグナムと半日斬り合ってるだけで十分疲れるって言うのに…」

簡単に言う速人さん。

白い墮天使リライブ。

魔法を使わないで私とエリオ君を一瞬で倒して、なのはさんとフェイトさんも簡単に破った魔導師。

そんな人と戦う為に連れて来られたのに、恐くないんだろうか？

少し…気になった。

考えている間に話は終わったのか、エリオくんを手を引かれて寮への道を歩き出す。

そう言えば…エリオ君、同じ部屋だって言ってたっけ。

「あの…エリオ君…」

「何？」

私は、エリオ君に速人さんと話せるよう取り持って貰う事にした。

休憩用のスペースで待っていると、速人さんが歩いてくるのが見えた。
立ち上がってお辞儀をしようとする。

「ああいいよそう言うの。俺ただの民間人なんだし、気楽でいいよ気楽で。」

「は、はい…」

すつごく軽く言う速人さん。だけど、フェイトさんやなのはさんより強い殆ど知らない人と言っただけであまり気楽には出来ない。そんな私の前に、速人さんは缶ジュースを置いた。

「好み側からなかったんで適当に買ったんだけど飲める？」

「あ、は、はい。ありがとうございます。」

奢ってくれたらしいジュースを開いて少し飲む。

と、速人さんは私の前じゃなくて隣に座る。

「面談じゃないんだし肩を並べて話そう。それで、何が聞きたいんだ？」

凄く明るく問いかけてくれる速人さん。

フェイトさんと同じで、出来る限り優しく問いかけてくれているのが分かった私は、人がいないうちに話を済ませる為に口を開いた。

「…恐く…無いんですか？」

「何が？」

「白い堕天使と戦うの…物凄く強いんですよ？」

少しだけ間を置いて、速人さんは軽く振り返る。

「恐く無いな。キャラはガジェットや白い堕天使が恐いのか？」

「そういう訳じゃ…無いんですけど…」

私は少し躊躇ったけど、自分の事を話すことにした。

危険な竜召喚の力を持っているけど制御できない事が原因で追い出され、未だに扱えていない事。

「なのはさんに前回の出撃前に励まして貰ったんですけど…自分の力が誰かを傷つけるんじゃないかって思うとやっぱり恐くて…」

「暴走するから怖い…ねえ？」

少し不思議そうに首を傾げる速人さん。

「んじゃ試してみたら？」

「え？」

「だから、竜召喚。試してみたら？つて。」

本当に簡単な事のように言う速人さん。

「竜くらいあの隊長たちならどうにかできるんじゃないの？だから、広い安全なところで試してみればいいと思うぜ。もし隊長たちが断るようなら俺が付き合っつてやるよ。」

そこまで言うと速人さんは私の隣にいたフリードを見る。

「お前も主人の為ならちよつと失敗して魔力ダメージでぶっ倒される位我慢できるよな？」

「キユ…」

速人さんの台詞に少し恐がるフリードだったが、踏みとどまって頷いた。

「フリード…」

「お友達はこう言ってるぞキャロ。主人なんだろ？信じてやれよ。」

言いつつ、速人さんはデバイスを展開すると、剣を抜く。

「こいつは人を殺せる。でも、犯罪者を止める為にも使える。その気になれば……」

と、何処から取り出した果物に剣の刃を当て、果物を回し始めた。

「とまあこんな感じに果物の下ごしらえも出来る。」

皮をむいた後デバイスを元に戻した速人さんは、皮をむいた果物を私に渡して、私の目を見る。

「力や道具は使い手の意思によってその姿を変える。『竜召喚は危険な力』って思ってる間はそのままでけど、キャラはどんな力にしたいんだ？」

「あ……」

初出撃の前になのはさんに言われた言葉を思い出す。

『キャラの魔法は皆を守ってあげられる、優しくて強い力なんだから……ね。』

…なのはさんは、そう思ってくれていた。

私が怯えているだけの、危険な力にしていた竜召喚の力を。

私は、フリードを見つめて呟く。

「皆を守ってあげられる、優しくて強い力……」

「そりゃまたどっかの誰かが言いそうな台詞だな。」

「え？」

聞かれていたのかと顔を上げると、速人さんは相変わらずの笑みで、

私の頭を撫でる。

「んじゃ、そう出来るまで頑張ってみる?」

「……はいっ!」

次の日、なのはさんに相談した私はフリードの制御を成功させることが出来た。

同時に、本当になのはさんたち隊長達は、それくらいじゃどうにもならないと身をもって思い知らされた。

今まで不自由させてきた分、フリードと一緒に目いっぱい頑張っていこうと思った。

S I D E O U T

第三話・力（後書き）

目隠し戦闘って話によっては修得できて一人前的な話もありますけど、今作中では暗所戦闘訓練だけをやっているか戦闘者の更に一部しか修得できない、相下に難度の高い技法としています。

ただ目隠しで人数当てる位ならともかく（それでも普通出来ない）、攻撃軌道完全に見切るなんてもう人と別の器官が身体にある生き物としては思えないので。

リライブにのされて出番一つ無かった初出撃の影響で竜魂召喚を今後に影響出さない為にここで修得させました。

同時登場人数が少ないですが（汗）
各々焦点を合わせる話は予定しています。

第四話・行方知れずの戦闘狂

第四話・行方知れずの戦闘狂

「海鳴への出張任務!？」

いきなりはやてからもたらされた無理難題に、俺は思わず声を荒げた。

何でも現在のところ正体不明のロストロギアが海鳴にあり、動ける部隊が他に無い上にロストロギアが万が一レリック絡みであれば機動六課の担当になり、当然リライブが出現する可能性もあるので俺も行かないといけないわけだが…

「…普通についてつたらばれるよな？」

「せやな。」

当たり前だがとりあえず聞いておく。

と、当然ながらアツサリとはやては頷いた。

海鳴近辺で提供されている転送ポートと言えば、神社近辺の森の中にアリサ持ちの別荘、それに今は神咲さんが管理を引き受けてくれている。

次元世界の事情を話せる人に事情を説明しておく位は出来るだろうが、海鳴で堂々と一緒に歩いていると町の人々が普通に俺となのはを一緒に話しかけてくるだろう。

そうなれば、フォワード陣に普通にばれる。

「俺はまあばれたところで困る事も特に無いが、管理局的には…ま
ずいのかな？」

「せやなあ…」

なのはの兄妹で戦闘力もあり、管理局に協力までしてる割に当の局
には入ってない。

こんな違和感バリバリの経歴に加えて半犯罪者のな行動の結果も残
っている俺のことを局員に教えるのも問題はあるだろう。

変な噂になってもなのはがやりづらくなるだろうしな…しかも、単
体戦限定とはいえ俺のほうが強い訳だし。

「何考えとるか分かりやすい顔してええんか？忍者もどきの癖に。」
「忍者もどきってなあ…」

妙な呼ばれ方に肩を竦める。

まあ暗殺者と呼ばれるよりは余程マシではあるが。

「んじゃ俺は別行動するわ。もしリライブやレリックを感知したら
念話で呼べる位置にいるよ。」

「んー…悪いな。」

海鳴近辺にいれば問題は無いだろうという事ではやてのほうもそれ
で承諾してくれた。

ま、俺は俺でやることあるし、別に構わないと言えば構わないんだ

がな。

そんな訳で別行動で海鳴に降りてきた俺は、リスティさんに連絡をつける。

リスティ槇原さんは、警察関係の仕事についている女性で、フィリス先生の姉でもある。

『珍しいな、君から連絡が来るなんて。食事でも奢ってくれるのかい？』

「そんな余裕は俺にはありません。」

病院内でタバコを吸うわたかりに走るわと中々滅茶苦茶なこの人は、そのくせ警官という中々に滅茶苦茶な人だ。と言つか世間話を呑気にする為に電話したわけじゃない。

「アイツ…見つかりました？」

『いや、未だにまったく足取りが掴めていない。』

予想通りとは言えあまり聞きたくは無かった返答が返って来た。リスティさんのほうでもまったく分かって無いとなると、かなり面倒な事になっている事は間違いない。

「そうですね…」

『香港の方には確認したのかい？』

向こうと言うのは美沙斗さん…香港警防の方だろう。

「いえ、近いほうに先に確認しておこうかと。」

『そうかい。』

アッサリとした返答が帰ってくるが、冗談も混じっていないのは珍しい。

『それでもダメなら…』

「ええ、わかってます。」

お礼を最後に携帯を切る。

くそ…出来るなら見つかっていて欲しかったが…

リストエイさんに問い合わせたのは、グリフの行方だった。

俺が命懸けで止めた本物の戦闘者。

俺が神速の修行をしている間に、グリフは脱走していた。

御神と戦わせてやるって約束したっていうのに何だっけって脱走なんかしやがったんだか分からないが、リストエイさんの方でも、香港警防

でもまったく現在地も足取りもつかめないと…

「管理世界…にいるのか？」

そうだとすれば、転移手段の存在しないアイツは必ず誰かの補助があったはずだ。

何でもかんでも管理世界がらみだって判断するのも軽いと思って外してはいたが…

武器を取り上げられている上に脱走、逃走までしたと言っのに脱走後の足取りの一切が不明というのは…

やはりどう考えても異常が過ぎる。

結局、美沙斗さんに連絡を取ってみたが結果は同じだった。
俺は改めて携帯を閉じて息を吐く。

『覚えておくと言った。その約束、僕も守ろう。』

まったく、あの馬鹿野郎…一年そこらで脱走なんかかましやがって…
見つけたら絶対ぶつとばしてやる。

7年前：

「…何者だ？」

奪った警棒を捨て、建物の影に感じる気配に向かって声をかける。物陰から妙な全身スーツを着た長身の女が姿を見せた。

「同じ生身の人間だと言うのに魔力も装備も無いまま見事なものだな。」

「貴様のような機械人形じゃないが、僕をただの見張りと同じ人間だと思っるのはとんだ検討違いだよ。」

少し驚いたのか軽く目を動かす女。だが、それ以上の反応は無かった。

「貴様はこの後どうする気だ？脱走自体は出来たとはいえこのままではすぐに捕まるだろう。」

「答える必要が無いな。それを聞いてどうする？」

「いい避難方法を知っている。」

あくまで表情を変えずに言い切った女。

確かに鍛錬こそしていたとはいえ、戦闘訓練を殆ど出来ていない分の勘を取り戻すあるし、武器も無い。

このまま行方を追われれば逃げ切る事は難しいだろう。

この女が何を考えているのか分からないが…

「条件は？」

「大した事ではない。が、悠長に話している暇も無いのでな、出来るならこれ以上の話は移動してからにしたいのだが？」

…まあ、いい。

どうせこのまま逃げた所で危険も大して変わらない。

「いいだろう、ついていこう。」

「交渉成立…だな。掴まれ。」

手を差し出してくる女。

意図は分からなかったが僕はその手を取り…

この世界から消えた。

廃墟と化した様相の都市で、僕は女の条件を聞いた。その条件は思っていたより単純なものだった。

「戦闘方法を知りたい…だつて？」

「ああ、貴様もセンサーや魔法を使わずに私を戦闘機人と見抜いた。何故そんな事が出来たのかを聞きたい。」

どう見ても戦闘用に改造されているくせにそんな事が分からないのか？

少し拍子抜けした。

「どうと言われてもね…見た目だけは人間のようだが、機械が使われていいることくらい分かる。」

見た目、確かに人に似せて作ってあるようだが、動くのを見ていれば違和感を感じ取れる。

「気が遠くなるほど人の殺し方を学んできたからだろう。感じ取っているだけだからどういいう技術を使っているのかと問われても返す言葉は無い。」

「感じ取る…か。成程、データや機能に頼ってはいは扱えないと言う事だな。」

「サイボーグにしては理解が早いな。」

疑問を口に出すと、女は軽く目を伏せた。

「こちらの事を貴様が知る必要は無い。」

僕との取引内容はあの場から逃がす代わりに戦闘方法を教えると言うもの。

確かにこの女の技術の話は僕が知る必要は無い。

だが…気になる事はある。

「戦闘用の筈で理解できる能力もあるのに、今更そんな事を僕を連れ出してまで聞く理由は何だ？」

「だから答える必要は」

「地球の戦闘者に負けたのか？」

少し勘ではあったがどうやらあたりだったようで、女の表情が一瞬険しいものになる。

…そうか、戦闘者と交戦する可能性があるのか。

「お前の主人に会わせてもらおう。」

「何だと？」

「必要なら戦闘データも取れる、その方がお前達にとっても都合がいいだろう？」

暫くの間を置いて、女は握り拳を振りぬいた。

速い…が、拙い。

潜り込む様に避けてカウンターで掌底をあごに叩き込む。

倒れた女は跳ね起き、僕は隠し持っていた拳銃を取り出した。

「質量兵器とは言えそんなちゃんなものなど…」

銃を見て意にも介していない女に向かって、僕は…

銃を投げた。

「な、くっ!!」

慣れていない武器などそのまま使っても仕方ない。

ならば、発砲に耐えられる金属で出来ている重さを投擲物として利用した方がいい。

鼻を捉えるように投げた銃をかわす女に詰め寄り、その顔を掴む。

「が…っ!!」

後頭部を地面に叩き付けた。

これだけで脳震盪位は引き起こしているだろうが…サイボーグ相手となると心許無い。

「ぐ…」

女の左足の腿を全力で踏み砕く…つもりだったのだが、骨格が金属だった為か、足が妙な曲がり方をしただけで止まってしまった。

抵抗できる力を取り戻す前に片足位は完全に潰しておこう。

そう思い、同一箇所をもう二度踏みぬいたところで、妙な映像が何も無い眼前に…宙に表示された。

『その辺にしておいて貰えないかね？異界の戦士君。』

「…お前がこの女の主か？」

モニターには、白衣の男が写っていた。

…成程、裏の人間だ。

一目で分かるほどに目が欲望に取り付かれて歪んでいた。

『ISを使っていない地上戦闘とは言えただの生身でトーレを動かすとはね。それで、私に何のようだい？』

「その前に確認したい事は二つ。この女が負けたという戦闘者とまた敵対する可能性があるか否か。それと、貴様は武器を作る事が可能か。」

『トーレが負けた相手は目的は不明だけど、敵なのは間違いない。装備はそれなりに作れるつもりだよ。』

問題は無いと思ったが確認事項を挙げておくと、笑みそのまま答えを返してくる白衣の男。

…理想的だな。

「僕を…雇わないか？」

あれから7年、ナンバーズとやらの訓練に付き合い、かつ空いた時間を修行に裂いた結果、それなりの勘は取り戻せていた。

そして今…

断続的に金属の甲高い音が響く中、僕は眼前の相手に全力で剣を振るっていた。

打ち下ろしが敵の髪を掠める。

と、振り切ったところで敵は迷わず踏み込んできた。

ギリギリで身をかわした僕に追撃となる二撃目が間髪入れずに向かって来る。

燕返し…再現しているとは…

剣で防ぐ間も無いため、僕は暗器の短剣で二撃目を受けた。

止めきれずに脇腹に食い込んだ痛みを無視して股を蹴り上げる。

少し身体が持ち上がって尻餅をついた所でその眼前に剣の切っ先を突きつけた。

「また私の負けだね。」

僕が剣を鞘にしまうと、目の前の女……リライヴは溜息を吐きつつ立ち上がった。

二年前から、レリックを集める事のみ協力する事になった、この世界では噂の魔導師。

僕としては魔導師として強い連中にはさほど興味は無かったのだが、この女はあろう事か僕に魔法なしでの試合を挑んできた。

さすがに負けることは無かったが、それなりに驚かされる事となった。

何でも、魔力が切れた状態でも戦わなければならぬ事があるらしく、その為の備えとして純粋な戦闘者である僕と修行したかったのだとか。

以来、定期的に試合を行う事となり、かなりの修行になっている。

「はあーいお疲れ様ですグリフさん、リライヴさん。それにしてもまあーた負けちゃいましたねえリライヴさん。」

「また出た嫌味メガネ。」

「そんなに怒つちや嫌ですわリライヴさん。ひよつとしてストレス溜まってるんじゃないんですか？大事なところ足蹴にされて腰が砕ける位」

「そういう品の無い話は命が惜しかったら私の前でしない方がいいって言わなかったっけ？」

「き、聞き覚えありましたからこの鼻先の剣をしまっして下さいな。」

馬鹿をやりだした二人を放って訓練室を出る。

「ふ…ふふふ…そろそろ…いいかも知れないな…」

一度や二度位は同位の戦闘者との戦闘をはさんで勳を完全な物にしておきたい所だが、そもそもそれが稀少だからこそ御神との殺し合いがこれほど待ち遠しいのだ。

スカリエツティの計画が片付く頃には、地球へ戻り、御神を探そう。

楽しみだ…どっちがより上手に斬って殺せるか…

Sideㄱアリサㄱバニングス

なのは達が帰り、私は一人家路についた。

そう…一人。

勿論大学にも友人はいる。

告白はそれなりにされているけどどうも気乗りしなかったり、そもそも論外だったりで断っているが、それは別にどうでもいい。

ただ…なのは達と会ったり、連絡を取ったりすると、嫌でも実感す

る事がある。

私だけが、『この世界』に残っている…と。

魔法と関係なかったはずかまで、巻き込まれ、その身を狙われるようになったからと言って地球を離れてしまっている。
なのは達も、私の事を忘れてたりそんざいに扱ったりする訳ではないけど…

『私の帰る場所は…私達の部隊、機動六課やからな。』

はやての言葉が嫌に胸に残る。

帰る『場所』が、ただ一人私だけ違うようで…

止めよう。

友人と再会できたんだから今日はいい日なんだ。
いちいち暗い事考えるのはよそう！

「ふう…」

私は部屋に戻ると窮屈な衣服をぱつと脱いで…

「ちょ！待て！」

「えっ！？」

下着だけになったところで、クローゼットの中から男の影が飛び出してきた。

影は倒れそうになったのを支えた為か、床に膝と手を突いて四つんばいのような格好になって私を見上げる。

影の正体は、部隊の裏事の関係上同伴でできていなかったらしい馬鹿男、高町速人その人だった。

どう動いたらそうなるのかはねるように直立した速人は、目の前でブンブンと手を振る。

「や、待て。待とう。決して着替えを覗く為にここに隠れていたんじゃないんだ。ただちよつとサプライズ性を持たせたかったから脅かそうと思っただけで部屋に入って扉も閉まったかどうかって夕イミングで早脱ぎしだすなんて夢にも」

「遺言は…それで終わりかこの馬鹿男！！！」

これでも高いつもりのも身体能力を駆使して全力で脛を蹴ると、速人は蹴られた部分を押さえて蹲った。

「こ、この馬鹿はあ…自分の歳考えなさいよ！今やったら冗談で済むわけ無いでしょうがこの色魔！！！」

「だ、だから狙ったんじゃないんだって…」
「それにつけても不法侵入でしょうが!!」

空いているもう片方の脛を踵で斜めに踏むように蹴ると、両足を抱えて床に転がった。

つて、こんな事してる場合じゃない、着替えないと。

さっさとクローゼットから寝間着を取り出して着替えると、いつの間にか速人が立ち上がっていた。

「はは…それにしても元気でよかった。」

「はあ？何よそれ。意味わかんない。」

いきなり何を言い出すのかと思って返して…

何となく、コイツの意図が分かってしまった。

なのは達の誰かから念話か何かで私の様子を聞いた上で、わざわざこんな馬鹿な真似をしたのだろう。
昔っからシュテルに巻き込まれるのも含めて全力で突っ込み入れてたから…

…変わらない物もある…か。

何となく許す気になってしまった私は、速人から顔を逸らして呟く。

「ったく、なのは達に聞いたけどアンタは別行動なんでしょ？泊ま
つてく？」

「え？一緒に寝るのはまずくないか？」

…前言撤回、やっぱりこの馬鹿徹底的に伸しておこう。

「別室に決まってんでしようがこのヘンタイヒーロー！何だったら
アルフが昔愛用してたお部屋もあるけど！？」

「さすがにそれは勘弁してくれ！」

手近な所にあつた辞書を振り回して速人を追いかけまわした。

暗い気分は吹き飛んだけど、やっぱりコイツ絶対どっかで痛い目見る
べきだ。

S I D E O U T

第四話・行方知れずの戦闘狂（後書き）

という訳でグリフ脱走してました。

7年経ってまだ聞くって言つのも長すぎるんだろつか（汗）

そしてトーレ度々ごめん。相手と戦闘の内容が悪かっただけで（一戦目主人公、二戦目地上で戦闘者）決して弱いとは思って無いからね！！

アリスだけ残されてるのでこの辺りの禍根についてはやりたかったですけど、ほぼ同じ展開になる部分は避けるという方針の結果、こんな妙なタイミングになってしまいました…精進します。

リライヴが燕返しを使っているのは昔から知ってた上で練習した為。

初登場リステイさん。とら八関係なのでちょっと説明を。

リステイ楨原

フィリス先生の姉にて大本。

HGS患者でPケースと呼ばれる高い能力の持ち主。

警備主任とかやってるあたり凄いのだろうが病院内でタバコを吸って見たりフィリス先生にたかったりと中々滅茶苦茶な方。

第五話・ホテルアグスタ

第五話・ホテルアグスタ

次の勤務が、ホテルアグスタで行われるオークションの警備に決まった段階で、俺は一足先に現地に入った。

ヴィータとシグナムも先に現地で警備につくらしく、一緒にホテルアグスタまで来ていた。

俺の方と言うと、一応戦力にはカウントされているものの、正規の局員でも無いのに目立つところうるうろしてたら不審者扱いされかねないので、目立たないところで大人しくしていると指示を受けた。

なので…現在駐車場を目立たないようにうるついていた。

ロストロギアの運搬にも使われるから、見つかったら大目玉は間違いないだろうが…

今展開している風形態なら魔力反応探知される事も無いし、完全気配遮断をやれば生命反応すら隠蔽できる。見つかる事は無いだろう。

と、見知った姿を見かけた俺は、周囲に誰もいない事を確認して念話を使う。

『よ、シユテル。』
『マスターも来ていたのですか。』

シユテルはいきなりの念話に驚く事も無く対応する。

周囲をうかがって俺を探すような真似すらしない。うーん冷静だな。

『仕事だよな？何してるんだ？』

『私物の護衛です。これだけ騒がしい場所だと不安があるという事でしたので。』

『私物って…』

サラリと言つてのけたシユテル。

だが、こんな所で護衛する必要があるような『私物』って…

『…違法…ロストロギアとかじゃないよな？』

『知りません。』

『つておいつ！』

即答したシユテルに念話だと言つのに突っ込みを入れてしまった。

『冗談じゃなくな、ここ六課の人集まるんだぞ？詰問されてやばいのだったら』

『個人のプライバシーがありますので、ただの護衛依頼で積荷を見せるなどと言えません。フリーの魔導師は別に関所や監視員では無いので調査権限などというものもありませんし。』

知った上で知らん振りするのではなく、本気でそつという理由で護衛物に関しては何も聞いていないのだろう。

俺に嘘つく理由も無いし、まったく迷い無い返答だったし。

『専用の権限を持っている方が開示するように言っただけなら大人しく検査させます。それで問題ないでしょう。』

『…それもそうだな。なのは達も来るから気をつけるよ。』

別に悪い事をしている訳でもないが、もし中身が『当たり前』で依頼人が管理局にとっ捕まったりしたら、報酬はパーになる。

ただ働きになりたくなければ下手に詰問されるような真似はしないほうがいい。

ま、レヴィならともかくシュテル相手にこんな念押し必要ないだろうが。

『んじゃ、俺はそろそろ戻るわ。明日くたばらない程度に仮眠もとつときたいし。』

『それではまた。』

結局いつも通り最後までマイペースなシュテルに肩を竦めつつ、俺は帰路につく。

それにしても、アテが外れたな…

裏取引でもしてる連中がいるのなら人気の無い、かつ物資のやり取りが簡単に済むこういうところで交渉ごとなりやってるかと思っただが、シュテルが堂々と突っ立っててしかも護衛の魔導師だつて言うのだから、当然そんなのがいる所で密談なんて行つ馬鹿はいないだろう。

第一、やばい事してる奴がいたらいたでシュテルが通報して終了な

ので、俺がわざわざ隠れて張る理由が無いのだ。
拍子抜けしたな…っていかんいかん。悪い事してる人がいないほうがいいんだから残念がつてどうする。

とりあえず、明日メンバーが揃うまでに何か無いとも限らないし、
適当に休みつつ警戒しておくか。

S i d e 〱 ジェイル 〱 スカリエッティ

「ふむ…やはりオークションの品には取り立てていいものはなさそうだね。」

『管理局が認可しているものですから。引き続き、裏の品についての情報整理を進めます。』

「頼んだよーノ。」

ロストロギアのオークション会場となっているホテル・アグスタ。
しかし、例によってオークションで直接扱っている品には大した物はなかった。

私を『犯罪者』とする管理局の許可が下りている物だ、無理も無い。
密輸品にでも面白そうな物でもあればよいのだが…

と、背後から聞こえてきた足音に振り返る。

「戦闘はあるのか？」

「…グリフか。密輸品にめぼしい物が見つければそうなる。」

本当に珍しい外の人間の内の一人、グリフがそこにいた。

私の答えに歩みを止めたグリフは、少し何か考えるように間を置いて切り出した。

「まだナンバーズを出す訳にもいかないだろうか？良ければ僕が出ようか？」

「いいのかい？」

確かにまだ此方が直接姿を見せるのは早い。

手が借りられればそれに越した事は無いのだが…

「対面戦闘以外もこなせるか、一通り実際に試しておきたいからね。」

「成程、では遠慮しない事にしよう。ルーテシア達が側にいるから合流しておいてくれ。何かあれば一緒に頼むことにするよ。」

静かな笑みを浮かべたグリフは、背を向けて去っていった。

始め、トーレが『自分を生身で倒した少年について知る必要がある』と判断して、調査に赴いた地球から彼を連れて来た時は、正直それほど気にもしていなかった。

何しろトーレとクアットロを倒した少年も、その後トーレを倒したグリフも、身体能力が少し高いだけの普通の人間なのだ。

特別高い魔力がある訳でもなく、多少薬品などは使っているようだが強化改造されている訳でもない。

『生命操作技術』の完成を目指している私としては、特別興味の引かれる存在ではなかった。

とは言うものの、トーレの身が危険だったから話をしてみたが…
彼からの要求は『武器、修行施設、寝食の提供』という大したものでもなかったので、暫く置いておく事にした。

…結果は、予想以上のものだった。

ナンバーズの戦闘訓練に付き合う事になった彼を、どうにか討とうと試行錯誤を繰り返すトーレは、私の想像以上のペースで才覚を發揮させていく事になった。

彼自身に興味は無くとも、彼が持つ生命体としての強さは、娘達にはとても有意義な物だ。

機械としてのさまざまな『機能』と生命体が持つ『感覚』を共に扱う事こそ戦闘機人の理想的完成形。

私は機能を用意する事はできても、生きた感覚は掴んでもらう他無い。
い。

その点で、彼は大いに助けになってくれた。

私の娘達が彼を超えるまで、彼にはこのまま頑張って貰えるといいんだが…

ともかく…まずは明日だ。

SIDE OUT

オークション当日、俺は森で待機していた。

中で事が起こる確率はそれほど無い上に、正規の局員がこつた返しているところに俺みたいな立場のがいる必要も無い訳で、むしろ外で何かあった時にすぐに対応できるようにしておくと言う事でここにいることになった。

屋内から外に出るまでの分単位も無い時間でも、ガジェットはともかくリライヴが出張った場合、一瞬でシャマル先生が討たれて指揮監視の機能停止…なんて事も十分可能だろう。

『前線各員へ、状況は広域防御戦です。ロングアーチ1の総合回線と合わせて私、シャマルが現場指揮を行います。』

シャマル先生後衛だから指揮とか出来るのか。

『スターズ3、了解！』

『ライトニングf、了解！』

『スターズ4、了解！』

前線三人の元気のいい返事が聞こえてくる。
つと、俺も返事は返しておかないとな。

『こつちも了解。リライヴが来た時は指示を待たずに対応してもいいか?』

『お願い。』

アイツへの対応で呼ばれている以上、出てきたら即座に移りたいが、そのこと知らずに動かされると防衛網にあっさり穴が開くことになりかねない。

向こうも分かっているのかすぐに許可をくれた。

少しして、森のあちこちで爆発が起こる。

先行しているのは副隊長二人とザフィーラらしいが、さすがに仕事
が速い。

こつちも戦闘だと基本一機ずつ落とす事になる俺よりあいつ等の方
が役に立つからな…

俺やフォワード陣はあいつ等が取りこぼした場合に対応するのが仕事
だが、この分だと回ってこなさそうだな。

S i d e 〱 ゼスト

『ごきげんよう、騎士ゼスト、ルーテシア、リライヴ、グリフ。』
『ごきげんよう。』

出現したモニターに、スカリエッツィの姿が映る。

『グリフから聞いていると思うけど…レリックはなさそうだが、実験材料として興味深い骨董が一つあるんだ。少し協力してはくれないかね？』

「断る。レリックが絡まぬ限り、互いに不可侵を守ると決めたはずだ。」

別にこの男に協力する義理は無い。必要意外の事で関わるつもりも、まして使われるつもりも無い。

向こうもそれ位は承知しているのか、すぐに俺から視線を外す。

『リライヴ、君はどうか？』

「聞くまでも無い。裸の女性を室内プラネタリウムにしているような奴に私が協力すると思う？」

『これは失礼、少しは配慮しようか。』

普段より冷たい声で、リライヴは協力依頼を一蹴した。

欠片も配慮など見せない態度のまま、ルーテシアに視線を移す。

『ルーテシアはどうだい？頼まれてくれないかな？』

「いいよ。」

『やさしいなあ、ありがとう。今度は非、お茶とお菓子でも奢らせしてくれ。』

芝居がかった礼を返すスカリエッツィは、傍の木に背を預けたまま動かないグリフを見る。

『ルーテシアのデバイス、アスクレピオスに…私が欲しい物のデータを送ったよ。君も協力してくれるんだろっ？』

「ああ。」

『よろしく頼むよ。』

グリフは閉じた目を開く事も無く返事だけを返した。だが、スカリエツティのほうはそれでよかったのか、満足げに頷いた。

「じゃあ、ごきげんようドクター。」

『ああ、ごきげんよう。吉報を待っているよ。』

ルーテシアの言葉を最後に通信が切れる。

「本当にやるの？」

リライヴが少し浮かない表情でルーテシアに問いかける。

正直、今回は俺もあまり薦めたくは無い。

ルーテシアの探し物に関係なく、奴の為にやるが増えるだけなのだから。

だが、当のルーテシアは小さく頷いた。

「ゼストやアギトやリライヴはドクターを嫌うけど、私はドクターの事そんなに嫌いじゃないから。」

「そうか。」

俺が短く返した返事に驚いたのか、リライヴが一步俺に詰め寄る。

「そうか…って渋い返事返してるけど本当にいいの？」

リライブが訝しげに俺に問いかけてくる。
犯罪行為に加担する事に何の躊躇いも抵抗も見せないルーテシアの
反応に関して問いかけているのだろう。
だが…

「説得力があるまい。」

「それは…そうなんだけどね…」

次元規模の犯罪者であるリライブと、レリック強奪に関わっている
俺が、安易に犯罪を行うななどと言ってもまるで意味が無い。
ルーテシアがスカリエッティの事を嫌っていないと言うのであれば、
止めようが無いのだ。

「僕は先行して付近の警備を叩いておく。別ルートから進入してく
れば片方が途中で見つかったもそちらに引き付けられるだろう。」

「ん。」

グリフは、ルーテシアが頷いたのを確認すると同時に、この場を去
った。

スカリエッティもだが、奴も信用ならない。

卓越した戦闘技術は持つが、騎士ではなく殺し屋と言ったほうが似
合う雰囲気を持ち主。

『リライブ。』

『何？』

異端とも呼べる状況で、ただ一人…まるで天使のように、瞳に歪ん
だ物を宿す事無くこの場にいるリライブ。

俺は…そんな彼女に頼らざるを得なかった。

動いているだけの死者に過ぎない俺は長い命ではなく、しかしルーテシアは護らねばならない。

殆ど信用のおける者が傍にいない現状では、信用できる人間かつ実力者であるリライブに、後を託すしかなかった。

『もしもの時は、頼む。』

『わかつてる。』

召喚を始めるルーテシアを前に、聞こえる事の無いよう念話で頼む俺が死者に戻った後の話も含めて頼んだつもりだが、知ってか知らずか、念話にしては力強い返事が返って来た。

仮にも元管理局員が、犯罪者に成り下がった拳句に広域次元犯罪者を頼り、頼み事とは…

少し失望はあったが、所詮死んだ身と改めて割り切る事にした。

『無理かもしれないけど…』

『何だ？』

唐突に返って来たリライブからの念話。

言葉を濁すリライブを促し…

『信じてくれていいよ。あんなのばかりで私も犯罪者だから、説得力は無いんだけどね。』

『ああ…善処しよう。』

わざわざ必要も無い念押しまでして、俺の答えに笑みを返すリライ

ヴ。
優しさを感じるそれが何処か懐かしく、俺は久しぶりに少しだけ落ち着けた。

S I D E O U T

「転送魔法？」

シグナム達をすっ飛ばしてフォワード陣の前に現れたらしいガジエツト達。

中間にいた俺も当然抜かれた形になる。
急いで戻らないとまずいかと思ったが…

『速人さんは敵召喚士の搜索、確保をお願いします。』
『あ、了解。』

念話で飛んできたシャマル先生の指示に従い、虫が発生しているらしい位置データを受け取って、凧形態で駆け出した。

『フォワードの皆は大丈夫なのか？』

『ライン曹長も援護につきますし、ヴィータ副隊長も引き返してきていますから。』

『成程ね、了解。』

フォワードメンバーを信じると言った類の台詞が一言もなかったのは俺相手だからか自分もそこまで信じて無いからか。いずれにしてもちよつと可哀想にも感じた。

確かに隊長陣との実力差はデカイが、俺が倒せるって意味ではなのは達でも大して変わり無いし、個々の技量もその辺の警備や武装局員より高い位なんだがな。

とか考えつつ走っていたのだが…

唐突に、強大な魔力を感知した。

間違えよつの無い、馴染みすらある魔力。

『速人君！ 搜索中止！ リライブが出現したからそちらの対処を！！』
『了解！！』

俺はすぐさま通常の戦闘形態である薙刃形態になる。

見た目的には顔を隠すか赤いマントかの違いである昔からの戦闘形

態だが、機能は大幅に違う。何しろこちらは普通に魔力構成のバリ
アジャケットなのだ。

さて…久しぶりの再会にはなるんだが…そうも言っていられないな。

「ここで止めるぞ、ナギハ。」

『はい。』

よりもよって、広域次元犯罪者に助力なんかし出したあの馬鹿を
これ以上放置しておけない。俺が居座るだけでもはやてやクロノに
も無理させてるだろうし、登場早々悪いがここで決める。

白い墮天使の名そのままに全身を純白のバリアジャケットで覆い空
を舞うリライヴ。

懐かしさを振り切って彼女を止めると誓い、俺は空に向かって駆け
出した。

第五話・ホテルアグスタ（後書き）

今回スカリエツティ側が多いなあ（苦笑）

素材としては魔力も大して無い普通の人間な筈のグリフをただアジトにおいておく訳もなく、興味を引かれる事は無いだろうという事で今回のような形で居座る事になってます。
∴とても師には見えないんですがねグリフは。強いけど色々おかしいので。

次回は戦闘に入ります。

第六話・墜ちる風

第六話・墜ちる風

S i d e 〱 リライヴ

「はい残念。」

「ぐ…っ！」

魔力剣でレヴァンティンを切断しつつ打撃を叩き込む。

シグナムの身体が丸の字に折れ…

崩れ落ちずに持ち堪え、後退する。

…呆れた精神力だなホント。

能力限定されてる状態で勝負になる訳無い事位分かってるだろうに、意識とんでもおかしくない一撃を無理して堪えるなんて。

「犯罪者に…情けをかけられた攻撃で打ち倒され…おめおめと引き下がるものか。」

「…シグナムの中では私って片っ端から殺して回るのが普通になっ

てる訳？」

打撃で済ませたのは別に情けをかけるとかじゃなくて、極力殺したりとかする気が無いだけなんだけど。

シグナム的に譲れないプライドとかあるんだろうか？騎士って言うてたし…

「まあいいや。素直に引いてくれる？本命が来たからさ。」

下から気配を感じて、私はスカートを抑えつつシグナム含めて二人とも視界に入るように移動する。

どうやら、私の嫌な予感は当たったらしい。

召喚士を探そうと試みる魔導師が一人もおらず、誰かが向かって来る気配がまるで無い。

だからこそ、気配無しで行動可能かつ管理局に関わってそうな役一名を思い出した私は、もし予想が当たりなら二、三人倒されたら姿を見せるだろうと思って出てきたのだ。

そして、何の気配も感じなかった森の中から突如現れた姿が、私の予想が当たっていたことを示していた。

空なのに飛行じゃなく歩行。

もう大人に分類されるだろうに相変わらずな赤いマント。

腰に下げた二つの小太刀。

何処までも懐かしい姿のまま、大きくなった高町速人の姿があった。

S I D E O U T

なのは達より色々と一回り小さいが、それでも昔と違い子供ではなくなったりライブ。けどそれ以外はそのままで変わりなかった。

全身純白のバリアジャケットも。淡い桜色の首輪も。

犯罪者と呼ばれるにはあまりにも澄んだ瞳と優しい微笑みも。

「久しぶりだね。」

「そうだな。」

普通に答えたつもりだったが、ライブは少し目を伏せる。

「怒ってる…みたいだね。」

何となくおかしさを感じ取ったのか、そんな呟きが返って来た。

俺は軽く肩を竦める。

「変わったわけじゃないんだろ…さすがに今回ののは無いだろ。」

スカリエツティは普通に傍迷惑な類の犯罪者である。

間違ってもこいつが協力するような相手じゃない。

本人もそれが分かっているのか、少しだけ目を逸らして頷いた。

「…でもまあ、私がやることは結局変わらないから。そろそろ始めようか。」

リライヴはそれだけ言うと、デバイスを構えた。

「シグナム。」

「分かっている、後は頼む。」

受けたのはただの拳一撃だが、リライヴの規格外な魔力で強化された一撃をリミッターをかけた状態のバリアジャケットで直撃したのだ。

ただでさえ打撃は、線を切断される刃の一閃と違い、ダメージが面で潰れるように来る。

一度診て貰わないと内臓も骨も危ないだろう。とてもじゃないが戦闘を続けられる筈も無い。

ので、下がって欲しかったのだが…シグナムは一人前衛をこなしているザフィーラの元へ向かっていった。

さすがにガジェットに遅れはとらないだろうが、頑張るよなアイツも…

『さすがに一人は厳しいやろ、限定解除してなのはちゃんとフェイトちゃんをそっちに』

『いや、いい。』

はやてからの念話に対して簡潔に答え、リライヴに意識を戻す。

回数にかなりの制限がある限定解除をこんな所で使わせるのも悪い。まだ何も相手の事が分かってないような状況なのだから。

それに…今この場で決める分には十分勝機がある。

「屋内ならともかく、この空戦機動の距離で速人の魔力じゃ私に追いつくのは無理だよ。それでも…やる？」

「いや。」

「ま、そう言つと…え？」

俺が首を横に振ると、意外だったからか驚きを隠さず声に出すリライヴ。

「た、戦わないの？それならそれで」

「ああ違う、そっちじゃない。」

困惑を隠さず、少し怒ったように俺を見据えるリライヴ。

「空戦機動の距離とか言ってたが…そこは俺の間合いだ。」

「…っ！！」

俺の答えを聞いて間もない内にリライヴの目が完全に戦闘用に切り替わる。

そこまで確認した所で…

神速に入る。

緩やかなモノクロの世界の中、リライヴに迫る。

初めの二、三步は完全に気づかれず、リライヴが気づいた時には既に一足刀の距離までつめていた。

俺の左の一閃をリライヴが魔力剣で受けた所で、すぐさま右を真一文字に振るう。

手ごたえを感じたところで、リライヴの左足が振り上げられてきているのが見えた。

急所狙いの足の脛を左の刀の柄で受ける。

最後、右の突きでリライヴの右肩を貫こうとして…

リライヴのバリアジャケットが弾けとんだ。

ジャケットパーズの勢いに飲まれ吹き飛ばされると同時に神速が切れる。

態勢を立て直してリライヴを見ると、初めより多めに距離を取った状態で腹部を押さえているリライヴの姿があった。

行動不能にするには浅かったらしい。

殺さず止めるなら峰打ちでどこかしらの身体機能を一時停止させる方が無難か…

「じよ…冗談じゃない…君もう人間じゃないでしょ？」

再展開した為切り口が塞がったバリアジャケットの上から、腹部の傷口を押さえるリライヴ。

余程神速が予想外だったのか、いつもより若干余裕がなさそうに見える。

しかし…人間じゃない…ねえ。

「それは俺も言いたい。デタラメだなその魔力刃。」

俺は先に打ち込んだ左のナギハを見る。

打ち込んだ部分から先がすっぱりと切断されていた。

正直俺の魔力値は、リミッターかけた状態なのは達と変わらないかそれより低い位だから、リライヴの剣を防げるとは考えてなかったが…

防がれただけで切断されるとはさすがに思ってた。

『修復…完了。』

が、鋼線を使って斬られた先端を回収していたお陰もあってか、俺にはさっぱり原理不明なデバイスの自己修復能力によってナギハは元の形を取り戻した。

コアさえダメージなければ魔力は使うものの修復可能なんだよな。デバイスって便利だ。

けど、修復できるからと言って油断は出来ない。

空中歩行魔法陣の展開にも少量とは言え魔力を使っている訳だし、何より神速を織り交ぜる程度で済むならともかく、乱発して長時間の戦闘などできる訳が無い。

最悪切り札を切ってもここで片をつけ…

S i d e ー ヴ ィ ー タ

「ちきしょー…邪魔しやがって…」

シグナムがリライブに襲撃されたせいで、シグナムが相手にしていたガジェットがフリーになった。

背後からミサイルとか光弾をバカバカ打たれたせいで多少なり相手にしなきゃならず少し時間を食った。

まあリインもいるし、今のあいつ等でも時間稼ぎくれーなら十分で
きると思うが…

『ティアナ！4発ロードなんて無茶だよ！それじゃティアナもクロスマイラージユも…』

『撃てます！！』

何となく…嫌な予感のする念話が届いた。

それから間もなく、ガジェット群を撃ち貫いていく魔力弾の中から…一発が、ガジェットを引き付ける為に宙を駆けていたスバルに向かうのが見えた。

直撃コースだった。

くそ…っ！間に合わねえ！！

最悪を予感した次の瞬間…

風の刃が、スバルに向かう魔力弾を両断した。

そんな筈が無い。アイツがさっきいた場所からここまでどれだけの距離があると…

そう思いつつ、風の刃を扱う人間はこの場にただ一人しかいない事も知っていた。あたしは隣から感じた風に顔を向ける。

あたしの横に、ついさっきまでリライブと戦っていた筈の速人が、刀を振りぬいた態勢で止まっていた。

まず真つ先に、無茶して味方撃ちかけたティアナを怒鳴りつけてやるのかと思って、次に速人がここにいると言う事はあのリライブがフリーだと言う事に気が付いた。

速人を返す方が先決だ。

「わりい、こっちはもう大丈夫だ。オメーはリライブの相手に…」

そこまで言つて、速人の様子がおかしいことに気が付いた。

何も聞こえていないかのように微動だにしないなんて、いくら速人でもおかしい。

ふざけた奴だが戦闘中に笑わせる事はあっても不安を煽るような冗談は…

速人は唐突に、血を吐き出して崩れ落ちた。

「っ！お、おい！！」

慌てて身体を支え、手放しそうになるデバイスを鞘に収めてやる。
が、そうこうしている間に、あたしの肩口に生温かい感触が伝わってくる。

雪の日、力を失っていく身体を抱きとめていた嫌な記憶が蘇り…

唐突に、速人が暖かい光に包まれた。
救援でも来たのかと思つて顔を上げると…

リライブが、杖状になったデバイスを翳していた。

「っ！て、てめえっ！」

睨みつけるが、速人を抱えたままでデバイスが構えられない。
リライブはそんなあたしを相手にせず、杖状のデバイスを使って魔法を使い続ける。

光が治まると、速人は口から血を吐き出す事はなくなっていた。

コイツ…何のつもりだ…

リライブは速人を悲しげに見つめながら、静かに口を開く。

「護り手は本来、命に代えても負けることは許されない。なのに…
自分達のミスで死に掛けた仲間を、貴方達が護らなきゃならない筈
の民間人に命懸けで救われるって一体どういう事？」

「あ…」

ティアナの掠れた声が届く。

呑気に話してないですぐにでも叩きのめして捕らえなきゃならない
相手ではあるが、速人を抱えたままという事もあって何も出来ずに
いた。

「今日は…彼に免じて引く事にする。」

リライブは、あたし達など眼中に無いかのように背を向ける。

「こんな事犯罪者の私が言う台詞じゃないのは分かってるけど…失望したよ、時空管理局。」

怒りではなく、本当に悲しそうに呟いたりライヴは、リミッターがかかったままのあたしじゃ到底追いつけない速度で飛んでいった。

…まだ…戦闘中だ。いつまでも滅入っている訳には行かない。

「スバル、速人をシャマルのどこまで慎重に連れて行け。それが終わったらオメーら二人纏めてすっこんでろ。後は…あたしがやる。」

吐き出した血で赤みが混ざった速人の服と、あたしの目を見たスバルは、開きかけた口を閉ざして速人を引き受け、ゆっくりとウイングロードを戻っていった。

「…くそ…っ!!」

あたしはアイゼンを目一杯：ガジェット相手には入りすぎなくらいの力を込めて握り、残っていたガジェットに向かって行った。

「敵…ですね。」

仕掛けていたサーチャーが空気の動きを感知したことで、私は反応があったサーチャーを仕掛けていた方向へ視線を移した。ステルス能力を持っているようだが、マスターの提案を受け空気振動などからも情報を得られるよう調整した為、見えなくても問題はない。

「パイロシューター。」

屋内で高威力の魔法を乱用する訳にも行かないので、対象のみを狙えるよう数個のシューターを操作し、何も見えない空間を塞ぐように飛ばす。

シューターの一つが甲高い音を立て消滅し、同時に見えなかった襲撃者の姿が現れた。

黒い鎧だけの様な姿で、人型ではあるものの、どう見ても人以外の種のような種。

最も…何が相手でも関係はありませんが。

「警備中の局員を呼び出して拘束してもらっても良いのですが、私の仕事は荷物の警備のみ。引くと言つのであればこれ以上交戦する気はありませんが、どうしますか？」

一応警告はしてみたものの、止まる気配はなかった。
臨戦態勢に入った襲撃者に対して私も構え…

背後から、ナニ力突き刺された。

貫通はしていない為短剣の類と判断したものの、だからと言って何の慰めにもならない。

「っ…」

振り返る間は無いと判断した私は、手だけを背後に向ける。
零距离速射砲撃魔法、プラストファイアー・インパクト。なのはの魔法を元に形成されたそれを放ち、間を稼ごうと考えたのだが…

魔法構築前に、向けた手を曲げられた。

あらぬ方向に曲げられ、折れた感触と激痛が伝わってくる。

振り向く間も無く突き飛ばされた私の眼前に、先の黒い襲撃者が腕を振り上げているのが見えて…

殴られたのを理解すると同時に、私は意識を失った。

S i d e 〱 グリフ

警備の女が倒れたところで、僕はナイフをしまった。

「見えないくらいで安心しないで欲しいんだけど。」

ガリユーと言っらしい虫は、かしくまった様子で僕に頭を下げる。喋らないが此方の話は理解できているらしい。

「後は局員が来なければ戦闘要員は付近にいないだろう。積荷は任せよ。」

引き上げる僕は、倒れている女に目を向ける。

一応急所は外したとは言え、バリアジャケットを抜く為に全力で刺し貫いたからこのまま放置しては結局死ぬかもしれない。

「早めに済ませてくれ。これを警備が見つけれられる位置においていく。」

僕がそう言った直後、ガリユーはトラックの扉を思いっきり破壊する。

此方はわざわざ声を忍ばせていると言うのに…忍ぶ気まったく無いんだらうか？

「誰かいるんですか、ここは危険ですよ。」

案の定、警備員の足音が聞こえてくる。

破壊音を耳にした筈なのに徒歩で近づいてくるとは…幼稚な警備だな。

だが、こうなった以上別に女を動かす必要は無い。

僕は見つかる前に足音を忍ばせつつ駆け出した。

今回上手くはいったものの、この警備の質の悪さでは僕の技量が問題なかったのかどうか判断する材料には辛い。
もう少し難度の高い仕事を引き受ける事にしよう。
行き同様楽な帰り道を駆けつつ、僕はそんな感想を抱いていた。

SIDE OUT

第六話・墜ちる風（後書き）

リライブ取り逃がすの二回目な上協力者にミスのフォローされた拳
句倒れられる…

六課が割と悲惨な事になってすみません（汗）

ちなみに、作中ではリライブ関連については何処の誰が対応しても
対処できていないので局内で槍玉に挙げられる原因にはなりにくく
なっています。

でもないと『トカゲの尻尾きり』になってるよなあコレ…

速人がスバル救出に使ったモノについては後に説明したいと思いま
す。

第七話・届く想いと届かぬ想い

第七話・届く想いと届かぬ想い

「右上腕骨、左腓骨、左脛骨の完全骨折、不全骨折多数…内臓損傷、脳震盪、内出血多数…」

次々と傷名を読み上げていくシヤマル先生。

あーあ、予想はしてたが酷いなこりゃ。

「なんて無茶するんですかっ!!!」

『つい…ね。本当ごめん、今回はさすがに反省した。』

声は聞こえているものの、俺の方は口を動かすのも億劫なので念話で返す。

第一、全身包帯ぐるぐる巻きのミイラ状態なので喋っても身体に響くし。

「バリアジャケットの性能が関節補強に特化してなかったら二度と戦えない身体になっていたかもしれないんですよ!？」

『だよなあ…』

実際、それを見越してバリアジャケットとしての防御機能を放置し、関節等の壊れたら回復が絶望的な箇所の補強に重点を置くように構成してもらったのだ。

アリシア様々である。

が、当然本気で心配してくれているシヤマル先生に『こうなる前提でした』なんて言える訳もなく、適当な咳きを念話で返す。

「幸い多数あるとは言え治らない怪我はありませんから、治るまでは大人しくしてくださいくださいね！いいですね！？」

『了解。つてか動けないわこれは。』

喋る事すらろくに出来ない現状、大人しくも何もなかった。

俺このままへりに乗せられて六課に戻されるんだろうか？

情けないことこの上ないなこりゃ…

『そっぴやスバルは無事ですよね？ここまでやって弾は斬れてたけど斬れた破片が当たってましたなんて言われたらちよつと切ないんですけど…』

「シグナムが多少怪我してたけど、貴方以外に危険な状態の人はいないわ。スバルもちゃんと元気よ。」

『そりゃ良かった。』

シヤマル先生にしてみれば良くは無いらうが、あの状況じゃ仕方ない。

ただの神速で間に合うとも思えなかったし。

何にしても無事ならよかった。動けるようになるまで時間があるだろうし一休みするか…

問題はいろいろあったが、とりあえず守れて安心した俺はゆっくりと眠りについた。

S i d e 高町なのは

フォワードのメンバーにやることを指示したはいいのだが、相変わらず意気消沈していて返事すら返さなかったティアナ。

落ち込むのは分かるんだけど…それがここまで露骨に見えるって言うのも困る。

とは言え色々言っても仕方が無いし、自力で問題から答えまでたどり着いたほうが先に進む時にも困らないから本当に危なくなるまでは言つつもりは無いが。

とりあえず散歩と称して人気の無い場所までつれてくる。

衆人環視の中で説教じみた事を言われるなんて、誰だって嫌だろう。

ティアナは…きつと特に。

「失敗しちゃったみたいだね。」

「すみません…一発…逸れちゃって…」

これでもかと言う程に沈んでいるティアナ。

「私は現場にいなかったし、ヴィータ副隊長に叱られて、もうちゃんと反省してると思うから。改めて叱ったりはしないけど…」

事情を知っている身として納得は出来る。反省もしているんだろう。

「ティアナは時々、少し一生懸命すぎるんだよね。それでちょっと、やんちゃしちゃうんだ。でもね…」

言葉を紡ぎつつティアナの肩に手を置き、視線を合わせる。

『失敗した事』をこの上なく反省しているからこそ、ティアナは見えないものがある。

それを理解してもらおう為に…本気で言葉を紡ぐ。

「ティアナは一人で戦ってる訳じゃないんだよ。集団戦での私やティアナのポジションは、前後左右、全部が味方なんだから。その意味と、今回のミスの理由…ちゃんと考えて、同じ事を二度と繰り返さないって…約束できる？」

「はい。」

反省しているからか、返事は小さいものだった。けど、ちゃんと私の目を見て答えてくれた。

教え子の事…ちゃんと信じないとね。

未だに何処かこわばっているティアナを安心させる為に笑みを見せる。

「なら…私からはそれだけ。約束したからね。」

「…はい。」

相変わらず力の戻らない返事を最後に、ティアナは皆の元へ戻っていった。

前後左右、全部が味方。

ティアナは今恐らく、『味方を撃たない様に周囲の事を考えて』と思っているだろう。

けど、逆に言うところ前後左右全部が味方なのだから、『自身が対処しなくてもいい箇所』と言う物がある筈なのだ。

その上で最適な効率、安全かつ確実に射撃を行っていければ、ひよっとすると今のフォワードの皆でもヴィータちゃんの到着前に全機撃破出来たかもしれない。

無茶をして欲しい訳ではないけど、前向きに考えるのであればそういう選択肢があった筈。

今回ティアナはエリオとキャロを下がらせて、自身の負担を無理矢理増やした拳句、自分の力で撃つことに拘った結果こんな事になった訳だけ…

同じ事は、速人お兄ちゃんにだって言える。

そもそも、余程の緊急事態がなければ出ないとはいえ一応私達は余剰戦力ではあったのだ。

当然能力限定つきでリライヴちゃん相手に何が出来るわけでも無いけど、今回ははやてちゃんが解除を許可してくれる予定だった。

どうせあのお兄ちゃんのことだから、『こんな早くに限定解除使わせるのも可哀想だろう、俺が片付ければ問題ない』とか考えていたんだろう。

拳句、明らかに自分の担当じゃない位置に首突っ込む為に命懸けの技使って重体。

もっと…頼ってくればいいのに…

力不足で局外部のお兄ちゃんを引きずり出した拳句抱く感想ではないことはわかっていたけど、無理した結果倒れたお兄ちゃんを思い

出すと、どうしてもそんな思いが浮かんできて…

お前が言うな。と言われる所を想像したせいで、余計にイライラして来た。

「気分…変えよう。」

深く息を吐いた後軽く頭を振って歩き出した。

ユ一ノ君がいるらしいし、折角だから少し話しておこう。

S i d e 〱 シヤマル

「でも本当にビックリしたわ。」

「すみません。」

速人さんとは別室で休むシユテルちゃんの様子を見に来た私は、もう既に問題なさそうなシユテルちゃんの様子に一安心出来た。

速人さんに無用な心配事を増やさない為わざわざ部屋を分けたのはいいけど、二人同時に様子を見ることが出来ないから少し心配だったのだけど…これなら大丈夫だろう。

「さてと、それじゃあ少しお話聞かせて貰おうかしら。何で貴女が護衛してたものは盗まれた形跡があったのに、オークションは滞りなく行われたのかしら？」

「知りません。」

痛いところをついた筈なのに、まったく動じないシュテルちゃんにアツサリ切り替えされた。

「知らないって…密輸品だったからでしょう？」

「オークションに出す予定の無い私物だったのでしよう。それが何であるかは護衛の任を受けた際にわざわざ確認していません。」

「確認して無いつてそんないい加減な」

「私は公的機関の人間ではないので他者のプライバシーを侵す権利は無いので。」

「うう…」

淡々と、まったく乱れる様子を見せないシュテルちゃんの様子に、此方が悪い事を聞いているような気がしてくる。

私ははやてちゃんに通信を繋ぐ。

『お、シャマルどしたん？』

モニターに、アコース査察官と向かい合って座るはやてちゃんの姿が映る。

情け無い理由で邪魔する事になって本当に申し訳ないんだけど…

「すみません…この子から事情聴取なんて私にはちょっと荷が重いです…」

『そうか？聞いたこと素直に答えてくれるとおもっんやけど…』

はやてちゃんは不思議そうに聞き返してきて…唐突に何かに気づいたような表情を見せた。

『シヤマル、別に密輸品護衛しとつたから捕まえるとかは考えんてええよ。』

「え？」

問題発言をされた気がして思わず聞き返す。

が、はやてちゃんは笑顔のまま続ける。

『一般の雇われ魔導師が私物守ってくれって言われて私物全部見せる何て言えるはずも無いし、仕方ないやろ。』

はやてちゃんにまでシュテルちゃんと同じ事を言われてはぐうの音も出ない。

『それより欲しいんは襲撃犯の情報とかや。大丈夫やろ？』

「は、はい。」

『なら頼むな。』

それを最後に通信が切れる。

改めてシュテルちゃんに向き直ると、これ見よがしに溜息を吐かれた。

「私が言うのも何ですが、はやては大丈夫なんですか？」

「色々あつて多少神経太くはなったのよ…上のいさかいつて醜いものが多いから…」

シュテルちゃんは、何処に納得したかは分からないが私の返しに頷

いた。

「そろそろ本題に入りましょう。襲撃者の情報でよいでしょうか？」

「あ、ええ。お願い。」

本題を促すシュテルちゃんに頷いて、私は話を纏める準備をした。

Side ヽ ユーノ＝スクライア

アコース査察官が戻るまでの間の護衛役を請け負ってくれたなのはと一緒、僕はある場所に来ていた。

「…酷い…みたいだね。」

「うん…」

なのはと並んで向けている視線の先には、ベッドに横たわって静かな寝息をたてている速人の姿があった。

僕を守る事も任にしてくれていたなのは達。

そんな中、前線でのリライブと戦ってくれた拳句、無茶のせいで眠っている友人の様子が気にならない筈がなかったから、人払いをした上で見舞いに来ただけ…

酷い怪我ならいくらでもしてきた速人だけど、人が来て喋っているのにまったく反応を見せない様子なんてそう簡単に見られるものじゃない。

相当の無理をした事は想像に難くない。

「…もういいや、出よう。ここで話してても速人が休めないし。」
「うん。」

結局一切反応を返す事のなかった速人を背に、僕となのはは部屋を出た。

「ごめん、わざわざ人払いまでしてくれたのに。」

「あ、ユーノ君は気にしなくていいよ。そもそもそんな事しなきゃいけないのお兄ちゃんのせいなんだし。」

手間をかけた筈だから謝ったけど、なのはは笑顔で許してくれた。

「部隊の調子はどう？」

「白い堕天使以外についてはおおむね順調。」

「リライヴか？」

彼女相手なら仕方ない。

管理局員が考えたらまずい台詞だという事は十分に分かった上で、それでもそう思ってしまう。彼女には、それだけの強さがあつた。

正義を名乗れないのに悪事を喜ぶ事もなく、笑顔で僕達と話せる位だから一人が好きなら訳でも無いはずなのに味方もいない状態で、最低でも十年間。

大儀がなくて仲間もいなくて永い時間…信念を維持するにはあまりにも辛い要素が揃い踏みしているのに、それでも尚…狂う事もなく真摯な瞳のまま戦い続けている。

ある意味、魔力よりも技術よりも強大な強さ。

と、僕の不安を感じたのか、なのはが笑みを向けてくれる。

「大丈夫、私だって何もしてこなかった訳じゃないし。今度こそ、必ず彼女を止めるから…」

「なのは…」

笑顔で…けど、本気の瞳で、握った自分の手に力を込めて告げるなのは。

まるで…自分を戒めるかのように。

なのははずっと強かった。

フェイト相手の時も力量差に逃げないで、リライヴ相手にすら真っ直ぐ向き合って戦う事から逃げず、今だって不安要素ばかりのこの状況で折れないように強くあるうとしている。

1521

でも僕は知っている。その強さの影に心の傷がある事を。

傷ついて墜ちたなのはから速人が引きずり出したなのは心の傷、迷惑をかける事を恐れているからこそ被っていた強さ。

「ユ、ユーノ君？」

僕はなのはの手を両手で包み込むように握る。

恥ずかしいからか引こうとしたのは。けど、なのはの目を真っ直ぐに見つめる僕から何かを感じてくれたのか、なのはは居住まいを正して僕の言葉を待った。

「なのはに…無茶をしないでと言っても意味が無いことは分かっている、大丈夫と聞いても大丈夫と返って来る事も知ってる。」

「う…」

否定できないのか拗ねられたのか、なのははちょっと困ったように僕を見る。

そんななのはの手を握ったままで、僕は祈るように続ける。

「だからせめて、僕も呼んで欲しい。頼って欲しい。いつでもいい、どんな些細な事でも構わない。変な心配をして進むと決めてるなのはを止めようとする気は無いけれど、進む為の力にはなりたいたいから。」

「ユーノ君…」

出来るなら、傷を恐れて隠す事無くその傷を癒す事ができるように僕一人勝手に祈るなんて思上がりかもしれないと、そんな不安もあつたけど、祈らずにはいられなかった。

伝えたい事は伝えられた。そう思った僕はゆっくりとなのはの手を離す。

途端、物凄く恥ずかしい事言ってた気がしてきた。

「ま、まあなのはを護るなんて偉そうな事は言えないけどさ。司書

で学々なインドア全開の僕じゃ。だから本当に力になるくらいだとは思っけど…」

なのはは慌てて言い訳めいた事を口走る僕に少し驚いたかと思うと…僕の手を、さっきまで僕がしていたように両手で包み込んだ。

ぼ、僕はなのはにこんなことしてたのか！？

思わずやってしまったとは言え、やられるととてつもなく緊張する。

「護って…くれてるよ。」

なのはは、ゆっくり言い聞かせるようにそう言い切った。

「ユーノ君に貰ったレイジングハートも、教わった魔法も、沢山付き合ってくれた練習の成果も、全部私を支えてくれてる。」

「なのは…」

「私は一人じゃない、だから大丈夫って笑顔で言えるんだよ。信じて、ね？」

嬉しかった。

魔力値ではまったく及ばず、戦闘関連は速人がいるから、僕が役に立ってる部分なんてどれくらいあるのかってどうしても思ってしまうから。

と、手を離れたなのはは何かを思いついたように表情を変える。

「でも…折角些細な事でも力になってくれるって言ってくれたし、

クロノ君がユーノ君に頼んでる位お世話になるのかな。」

「アイツは嫌がらせかと思うくらい仕事振ってくるからね…正直なのはでも同じ位の作業を探す方が大変かもよ。」

なのはから笑顔で告げられた嬉しい言葉の余韻に浸りつつ、残った時間を何気ない会話で過ごした。

Side↳ティアナ「ランスタ」

あたしはスバルと一緒に速人さんの見舞いをするため医務室に向かっていた。

助けてもらったスバルが初めてに行きたいと言い出して、それについていく事にしたんだけど…

「ごめんねティア、付き合いませちゃって。」

「私のミスが原因なのよ、付き合いも何も無いわよ…」

あたしの返しにスバルは少し悲しそうに、それでも笑みを見せる。

ミスの結果なのだ、逃げる訳には行かない。けど…

一人で…自分から来れたかどうか正直分からない。付き合せてるのはむしろあたしの方…

隣を歩くスバルに、いつも背中を押されている気がしてもどかしくなる。

暫く無言で歩いていたらあたし達は、そのまま医務室についた。

「失礼します。」

扉を開くと、ディスプレイと向かい合っていたシャマル先生があたし達の方を振り返った。

「あら？二人とも。速人さんのお見舞い？」

「はい。あの、速人さんは…」

スバルが言い切る前に、シャマル先生は表情を曇らせる。

「内臓も痛めていてね…あまり話すことも出来ないから」

『念話で失礼するよ。あ、耳は聞こえてるから普通に喋ってくれていいぜ。』

深刻な表情で説明するシャマル先生の雰囲気は台無しにするような陽気な念話が届く。

途端、シャマル先生が勢いよく振り返り、全身を包帯で覆った人が横になっているベッドを見る。そのままの向きで深く息を吐くシャマル先生。

振り返られたせいで顔が見えないけど…間違いなくものすごく怒ってる。

雰囲気だけでそう感じ取ったあたしとスバルはただ動かずに様子を見守るしかなかった。

「…速人さん、何で起きてるんですか？」

『目が覚めたところで動けないからまったく意味無いんだけどさ、まったく動けないのに覚めてるんじゃないや寝ようにも眠れないでしょ？』

「はあ…」

心底呆れたと言わんばかりの溜息を吐くシヤマル先生。
あたしが言うのもなんだが…確かにこんなのが患者じゃ溜息も吐き
たくなる。

「あ、あの…助けに来てくれてありがとうございます。」

「ご迷惑おかけして済みませんでした。」

スバルが礼を告げるのに続けて謝る。

『いや悪いな、心配かけて。本当はもつと軽く助けられれば良かったんだけど、便利な魔法使えなくてさ。』

が、当の速人さんが何故か謝ってきた。

そんな事を謝られてはミスして仲間を撃ちかけた私はどうなる。と思つたものの、今の私が口に出せる訳もなく、黙っている事しか出来なかつた。

「そろそろ速人さんには眠って貰わないといけないし、二人も今日は任務で疲れてるでしょう？もう休んだ方がいいわ。」

「あ、はい。」

「失礼しました。」

シヤマル先生に促され、一礼を最後に医務室を出る。

「スバル、先帰っててくれる？あたしちょっと練習して来るから。」

医務室を少し離れた所でそう切り出すと、スバルは身体ごと私の方に向けて拳を握る。

「練習？なら付き合っよ。」

思ったとおりの台詞を吐いて来るスバルを横目に、あたしは外へ向かう。

「帰って休んでなさい。悪いけど…一人でやりたいから。」

「…うん。」

スバルはそれ以上無理は言わずに引き下がる。
なんだかんだで腐れ縁が続いてきた仲だから、それなりに感じる物があったんだろう。

…こんなミスするようじゃ話にならない。
強くなるんだ…もっと、もっと…

S I D E O U T

第七話・届く想いと届かぬ想い（後書き）

本編では三話ほぼ丸々がティアナの為にあるこの辺。しかも主人公
ダウン中。

混沌としてるなあ（汗）

ライトニングの皆様、もう少しお待ちください（謝）

第八話・兄妹

第八話・兄妹

「よ…っと。ふむ…」

ベッドから降りた俺は、軽く身体を動かしてみる。

折れて包帯を巻かれたままになっている箇所はさすがに痛むが、歩き回る程度なら出来そうだった。

関節のダメージが薄かったのが幸いな。

が…さすがに神速を使うのはまだ様子を見たほうがよさそうだな…

と、身体の状態を確認していると、外から人の気配を感じる。

シヤマル先生じゃないな…誰だ？

「無様だな。」

「ってお前か。会ってすぐいきなりだなおい。」

扉を開いて現れたのは、フレアだった。

久々の再会にはなるが、会って早々こんな事言い出す奴はフレアくらいだ。見た目も極端に変わっている訳でもないし、さすがに判らない事はなかった。

「それよりもお前…戦えるのか？」

「聞いてないのか？後遺症の残る形で怪我して無いから問題なく治るって。」

「聞いている。」

此方に来る事になっていたのであれば、事前に資料なり何なりから得られるだけ情報を得ているだろうと思っていたので、フレアにしては妙な質問だと思ったのだが…

アツサリ聞いていると返されては何でそんな事を聞かれたのかまったく分からない。

「リライヴと戦うだけの戦闘能力があるのかと聞いているんだ。」

「お前舐めてるだろ。あるいは事前情報足りて無いぞ。俺前回リライヴ相手に無傷で先制とつたんだぞ。」

俺の答えに目を伏せるフレア。

「速人、魔導師や子供ならともかく、私相手には素直に答える。お前の技法はリライヴ相手に初見で無くなっても通用する物なのか？」

ついで放たれたフレアからの指摘には、俺が口を噤む他なかった。

結論だけ言えば、通じる可能性は五分以下といった所だろう。

神速自体には、弱点と言った弱点はない。

体力消費が馬鹿にならないが、神速そのものは魔法を使うとか道具を使うとかではなく、単純に使用者の能力そのものを極限まで引き

出すものだ。技後の隙とかそういう問題は無い。だが、それでもリライヴ相手に完全な優位を維持できるかと言われるれば不安はある。

神速に対応する場合、発動と同時に全方位防御と高速移動魔法による離脱を行えば凌ぐ位は出来るだろう。

『切り札』なら、それもさせないくらいの自信はあるが…同時に今回のような有様になる。

一回見せている上にあのリライヴが相手なのだ、確実に決まる保証もなくリスクだけ高い切り札は下手に切れない。

「やれやれ…さすがに聡いな。だが取り越し苦労だよ、俺を誰だと思ってる?」

「その馬鹿な返答も相変わらずらしいな。」

俺の返しを一蹴するフレア。

お前の方も相変わらず冷めてやがるなまったく…

聞くことは十分だったのか、踵を返すフレア。

「出来るだけ一人で戦うな、私はリミッターはかかっているし、隊長陣もリミッターを外せばお前が近づく隙を作る位の事は出来るだろう。」

「了解、サンキュー。」

部屋を出ようとするフレアに続くように歩き出す。

「…いいのか?」

「リハビリだよ。」

いつまでも寝てるつもりもなかったので、軽く外でも歩いて回って

こよつかと思つて続いたのだが…

扉が開かれると、シャルル先生が笑顔で立っていた。

うーん、いい笑顔だ。なんか底冷えさえするような…

「速人さん、治るまで動かないように言いませんでしたか？」

笑顔だ、笑顔なのだが…明らかに怒っているシャルル先生。

こつこつという類の女性陣は何度か見てるからよく分かる。

フレアは俺達の事など気にした様子もなくすれ違つように部屋を出る。

「ははは…えーと、失礼!!」

「あ、ちよつと!!」

フレアが通る際に出来た隙間目掛けて、無事な右足を使い低空跳躍。左足から着地するとまずい事になりかねないので着地も右足で行い衝撃を殺した後で、問題にならない程度の早足でその場を去った。

完治と言う訳でもないが、回復魔法のお陰もあつて大体治つていると言つのにまったく動かず寝てはられない。シャルル先生には悪いがちよつと見逃してもらおう。

「はあ…」

夜風が心地よくて思わず息を漏らす。

と、森の中から光が見えた。少しばかり湧いた好奇心から覗いて見る事にする。

ティアナとスバルが妙な練習をしていた。
射撃型のティアナがスバルと近接戦の練習？

「あれ？もう治ったのか？」

と、離れて様子を伺っていたらしいヴァイスに小さく呼びかけられた。

「いや、シャマル先生をすり抜けてリハビリに。」

「そりやまずいんじゃないか？」

呆れたように肩を竦めるヴァイス。

「某ヘリパイロット、女性局員の夜の戯れを覗き見。って表現の方がまずいと思うけど？」

「勘弁してくれ…冗談でも漏れたら何されるか分かったもんじゃないからね。」

結果を想像したのか顔を引きつらせるヴァイス。
人のこと言えた義理でも無いだろうにまったく…

「なのは隊長ティアナに格闘戦のメニューなんて組んで無いよな？」
「ちよくちよく様子見てんだけど、独自にバリエーションを増やすつもりらしいな。」
「へー…」

この覗きの常習らしく、現状の解説をしてくれるヴァイス。

要するに付け焼刃を増やそうって所か。

単体じゃ通じないだろうが、ちらつかせてメインを狙うならそういう選択肢もあっていいか。

なのはだって誘導弾やら砲撃やら『極める』ってレベルに行くよりは制御できる弾数増やしたりする方に重点置いてたしな。

けど…そんな事よりも問題がある。

「ちょっととめてくる。」

「ま、頑張れ。」

諦めているのか止める気が無いのかヒラヒラと手を振って見送るヴァイスを背に、俺はクロスレンジの練習をやっている二人に近づいた。

…一回くらいなら、使えるか。

「っ！」

「うわっ！」

高射程抜刀術、虎切。

二人の間の空間を斬る様にそれを振るうと、何が起こったのかわか

らない二人は慌てて飛びずさった。

「よ。見舞い以来だな。」

「は、速人さん！？身体はもういいんですか？」

「ドクターストップはかかったまんま。だけど動かないと身体がなまるんでリハビリかねて脱走中。戻るのには恐いが見逃してはくれたからまだ大丈夫だと思うよ。」

「そ、そうですか…ははは…」

質問に軽く答えてやると、スバルは乾いた笑い声を出す。

一方で、険しい表情を浮かべる相方、ティアナ「ランスター」。

「いきなり何て危ない邪魔するんですか！」

「悪い悪い。どれ位反応できるか見てみたくてついな。」

結果から言えば、スバルは若干、ティアナは結構全快時より鈍かったように思う。

それでも並の魔導師相手なら問題にならないくらいの腕はありそうだが…

「…邪魔しないでくれます？」

「そりゃ無理だ。止めに来たんだからな。」

途端にティアナの眉がっすりあがる。

面識無い人間がこんな事言ってもこうなるよな…

けどいい加減にまずい。疲労がかさみすぎている。

それに訓練続けてもこの状態じゃ錬度が上がらないし。

「局員ですらない他人の貴方に何でそこまで突っ込まれなきゃいけ

ないんですか!？」

「ご尤も。」

「何だが、納得する訳にも行かない。」

「ティードゥランスターなら嫌だから…かな。」

「ビクリと一瞬震えて硬直するティアナ。」

「兄を…ご存知なんですか？」

「知り合いじゃ無いぞ。ただ一悶着あったお陰で知ってる程度だ。」

斜めに両断された下半身とIDカードのみが残っていて、あまりの惨状に騒ぎになった事に加えて、上官の問題発言。名前から一通り知るのに困る相手じゃなかった。

「ならなんでそんな事言えるんですか。」

知り合いだった訳でも無いのにあんな台詞を吐いたからか、ティアナの瞳に僅かに怒りが戻ってくる。

「兄だからだよ、俺にも妹がいるんだ。」

「そんな人くらい何処にでも…」

「まあまあそう言わずに話位聞いてくれって。」

浮かない表情はされたものの、ティアナはスバルとアイコンタクトをとって、揃ってうなずいた。

「俺の妹さ、戦闘どころか運動オンチでその辺で背中触ったら転ぶような奴だったのに、魔法が使えるって分かったと勝手に俺の手伝

いするとか言い出してさ。歯も立たない位に差がある相手に一人で向かっていったり無茶ばっかしやがるの。」

そこまで言っただげさに肩を竦める。

「何年も積んできた領域に数日でたどり着けるわけ無いって言うのに、届かない事をまるで恥とも思うかのように無茶してさ。滅茶苦茶心配でもどかさかったんだが…重なるんで止めたいと思ったんだよ。兄が妹心配するのは、余程仲がこじれてなければ普通だと思っぞ？だから、ティードさんが嫌がってるんじゃないかと…ね。」

黙って話を聞いていたティアナは、少し間を置いて息を吐く。

「明日まではこのペースで続けます。けど、そこで一区切りつきますからちゃんと休めます。安心してください。」

「そっか…」

もう既に休みが間に合っただけ無いは思っただが、これ以上の無理強いは出来ない。

わざわざ他人と言いつつ相手の話を聞いて、安心してとまで言うてくれた事がむしろ彼女相手だと珍しいような気がする。プライド高いみたいだし。

「何も出来ずに見ているだけ…って言うのが嫌だったんだと思いますよ。その上知らないところで死なれたりしたら、堪えられたものじゃないですから。」

「へ？」

唐突にティアナが告げた台詞に間の抜けた声を出す俺。

そんな俺の目を見ながら、ティアナは静かに告げた。

「他人ですが、妹側からの代弁です。」
「それ、あたしもそうだと思います。」

今回の負傷でもやっぱり心配はかけてるだろう俺が、ティアナに何か言えた立場な訳がない。

スバルにまで重ねられた俺は、苦笑しつつ礼を告げてその場を去るしかなかった。

余談だが、この後なのはの所にも顔出してみようかと思った所でシヤマル先生に旅の鏡で取り寄せされた拳句、ベッドに縛り付けられた。

これ、患者と言うより拷問対象のそれな気がするんだが…

Side ｝ ティアナ ｝ ランスタール

クロスシフトA、Bとも、あたし達のどちらか一方がメイン、もう一方がサブとなる形で組んであった。

単騎でどうあがいてもあたし達の今の力ではさん達隊長陣に届く筈もなく、今までは何一つ出来なかった。

…足りない？作らなかつただけだ、覚えなかつただけだ。
敵がこっちの手札が揃うのをノンビリ待ってくれるはずも無い。

だから組み上げた。新しい陣形、クロスシフトCを。

一方の力で足りないのなら、二人で同時に全力で攻撃を仕掛ければいい。

だが、同時攻撃となると密着しているスバルを巻き込む射撃は使えない。だからこそ…

刃を展開したクロスミラージユを手に宙を舞う。

スバルの攻撃は、なのはさんに届かないまでも片手間にあしらえるほど軽い物でもない。

今あたしの刃に手を割けばスバルの一撃が、このままスバルに集中すればあたしの一撃が入る。

これで届く…今度こそ…!!

S i d e 〉 高町なのは

「おかしいな…二人とも…どうしちゃったのかな？」

無手でティアナの刃を掴む。

何に驚いたのか、二人は呆然と動かなくなっていた。

「頑張ってるのは分かるけど…模擬戦は、喧嘩じゃないんだよ。」

ああ…本当によく分かる。

こんな短期間で新しいシフトを…しかも、私に伏せて組み上げたんだ。

日中ずっと訓練しているのに、それと別にこんなものまで使えるようにするのに、一体どれだけ無理を押ししてきたんだろう。

私を…倒す為に。

「練習の時だけ言う事聞いてるフリで、本番でこんな危険な無茶するんなら…練習の意味…無いじゃない。」

全く信じられていなかったのだろうか？

不安があるならあるで、せめてそれを伝えられる程にも。

「ちゃんとさ…練習通りやろうよ。」

不満…ではないと思う。

もしそうなら、森での約束の時あんな真摯な瞳で答えてはくれなかつただろう。

「ねえ…私の言ってる事…私の訓練…そんなに間違ってる？」

問いかげに目を逸らして跳躍したティアナは、新たに修得した砲撃魔法の照準を私に向ける。近接魔力刃に加えて砲撃魔法も修得したらしい。

それで…理解した。

朝から晩まで、同じ型を何度も何度も…それこそ飽きて尚繰り返しきたお兄ちゃん達を見てきている私と違い、ただひたすらに同じ技を繰り返し返す事…錬度を上げることよりも、新技術を修得するほうに意識が向いているんだ。

「あたしは！もう誰も傷つけたくないから！亡くしたくないから！だから…強くなりたいんです！！」

ティアナ自身は台詞の意味を理解していないだろうけど、決定的な台詞だった。

貴女の訓練では強くなれないから考えたのだ…と。

激昂を自覚する。

ただ、私の訓練を否定された事ではなく…

『もう誰も傷つけないから！亡くしたくないから！』

似たような事を思っただけに死に物狂いになった結果を思い出して。

傷の痛み、使えなくなる魔法、無力になった自分の為にずっと傍にいてくれた皆に山ほどかけた迷惑…
次の悲劇を無くす為に、あり得ないほど早い歳での奥義修得に命を懸けた兄。

無理を押しした結果がその自分の望んでいない結果に…スバルを亡くしかけ、お兄ちゃんを傷つけた自覚が無いのかと、本気で怒鳴りそうになる。が…

頭を冷やす。

思う様言いたい放題言うのは子供のする事だ。

まして私は上官で教官、命令長で強く言った事は本人の意思に関わらず大概聞かざるを得なくなる。

そんな無理強いしても、理解にも納得にも繋がらない。だから…

「少し…頭冷やそうか。」

無理をし続けているティアナと、認めて支える事だけがパートナーだとしても勘違いしているスバル。

この二人に現状必要と思われる『作業』を行う為、私情を押し殺し

S
I
D
E

O
U
T

た_ろ

第八話・兄妹（後書き）

気がつけば100話到達！！

長ければいいという物ではないですが、続けてきたんだなあ…と実感しました。

その100個目のラストが処刑シーン（笑）。何て偶然だ。

第九話・秘めた過去とすれ違い

第九話・秘めた過去とすれ違い

モニター越しに眺める事となった、クロスファイアによる射砲撃の連射という凄惨な撃墜から暫くして、ティアナを抱えたスバルが姿を見せた。

幽霊のように力無い足取りでティアナをつれて医務室に来たスバルは、そのままティアナの身体をそっと俺の隣のベッドに寝かせる。

「モニターで見てたけど、その体調にしてはマシな結果だと思うぞ。」

「え？」

「え？じゃ無いだろ。コンビのお前が彼女の全力があつた程度かどうかなんて一番良く知ってるだろ。クロスファイアの映像見てみたらどうだ？」

瞬間、ビクリと肩を震わせるスバル。

俺は序盤でティアナが放った物について言っただつたのだが、その後なのは放った連撃のほうを思い出したらしい。

…あの処刑シーンは思い出たくも無いか。気持ちは分かるぞうん。フェイトもきつと昔のスターライトブレイカーを思い出して首を縦に振ってくれるだろう。

スバルは憧れてたらしいし、そんな人の印象がアレのままじゃちょっと可哀想だな…

「これだけ完璧に意識断ち切られてれば疲れが抜けるまでは寝てる理由になる。」

ティアナを指して告げてやると、スバルは伏せていた目を少し開いてティアナに視線を移した。

「ボロボロに説教されても、寝不足疲労が溜まってても、意識があったらティアナ悩むか何かで休まないだろ。ま、あの恐ろしい教官様がそこまで考えてやったかどうかは知らないけどな。」

余程大切なのか、ティアナの寝顔を見つめて動かないスバル。暫くして、一礼を最後に医務室を去って行った。

「…止めたかったですか？」

「え？」

「気楽なまま話そうとして、あまり出来て無いですよ？」

医療担当だからか、人の違いに敏感らしいシヤマル先生。

確かに、身体に害が出なければやりたい放題出来ると思わないようにはフェイトを打ち抜いた時に言っているし、それ以前に泣いている子が撃たれそうになってれば俺は止めにはいる。やりすぎと怒っているとされたのだろう。

「あの場にいれば止めたけど。内容が『無茶をした』って意味では同じ事二回目、しかも教官の方針に相談一つなく逆らった拳句、直

撃したら死にかなない設定での魔法攻撃。これだけやってまだ見捨てられて無い分大分寛大な処置だろ、組織的には。」

そう、見捨てられていないのだ。

別に兄妹でよく知っているとかさういう意味ではなく、『模擬戦での撃墜扱い』だった事がそれを示している。

これだけ揃えば普通解雇：少なくとも転属させられるだろう。

だが、中止にせず模擬戦として続行。しかも倒すだけなら自身の砲撃でやりようなどいくらでもあったのに、あえて二種のクロスファアを使用しての技巧披露。

こんな面倒ごとときつちりこなしている以上付き合いきれないとも思っただろうし、見捨てるつもりも無い筈だ。

「一から十まで話しておけばこんな事にはなつて無いだろうけど、いわく付きの昔話を必ず生徒に語る先生なんて会った事無いし。教え子の一人相手であれば順当な結果でしょ？」

「冷静…なのね。」

「アイツが私情で八つ当たりして走った訳じゃない事は見てましたから。」

俺は言いつつ横になって眼を閉じた。

そう…よく見ていた。間違いなく私情に走っていない。

だからこそ、シャル先生が心配したような苛立ちが残っている。目を閉じ、光を絶たれた暗闇になると、嫌でもさっきの模擬戦の映像を思い出す。

全てを押し殺したなのはの瞳を…

Side 高町なのは

「なのは…無茶しすぎだよ…」

物凄く悲しそうに告げるフェイトちゃん。

フェイトちゃんは基本的に優しいから、怒るにしてもやりすぎに見えただろう。

「ダメだよフェイトちゃん、ティアナが無茶するのこれで二度目だし」

「違うよ！そうじゃなくて…」

けど、私が言い切る前にフェイトちゃんは首を横に振った。

やりすぎだと言つつもりじゃなかったんだろうか？

だとしたら一体何を…

「なのは、本気の速人と同じ瞳をしてたよ。」

噛み砕いて、理解するのに暫くかかった。

本気の…暗殺者としてのお兄ちゃん。

感情を殺してまるで作業のように人を殺す事が出来

「っ！」

息を飲んで固まった。

握った掌に感じられる汗の感触がいやに冷たく、震えそうになる。

一番…なつちやいけないものに、私が自分から踏み込んだ？

疑問系にするまでもなく、しっかりと記憶していた。

ティアナの無茶を止めなかったスバルには、その結果がどうなるかを見せる為、傍にいて倒しやすかったがあえて何も出来ない状態にしてティアナだけを撃ち抜いた事。

付け焼刃を増やしてきたティアナには、自身の技法を使いこなす事だけでも戦術の幅が広げられる事を教える為、二種類のクロスファリアを叩き込んだ事。

それらを…何を思う事もなく『作業のように』こなしていたと言う事実。

少し自分が恐くなったところで、フェイトちゃんが私の手をとって

くれた。

「二人に怒る必要があったのも、かと言って言いたい放題怒鳴りつける訳には行かなかったのも分かるよ。だけど今くらい…友達だけという時位は無理しないで欲しいな。」

「フェイトちゃん…」

「私に位本音で話してくれると嬉しい。それが愚痴でも罵詈雑言でもちゃんと聞くから。」

心配してくれているのが伝わってきて嬉しかったけど、最後の物言いに苦笑いしてしまう。

「愚痴はともかく…罵詈雑言はいただけじゃないなあ。大切な教え子の陰口なんて言うような自分になっちゃったら、それこそ楽になんてなれそうも無いよ。」

「そ、それもそうだね…ごめん。」

軽く言っただつもりだったんだけど、悪い事をしたかのように肩を落とすフェイトちゃん。

本気で気にしてくれてる訳だし…ちょっと位話聞いてもらおう。

「近親憎悪…って奴なのかな。」

「え？」

「今のティアナ、分かると言えば分かるんだ。私だって魔法を知ったとき、もう戦えるお兄ちゃんが傍にいて、競い合う事になったフェイトちゃんは専門の教育を受けた一流の魔導師で、私だけ魔力が多いだけの子供だったから。」

私の独白に頷いたフェイトちゃんは、何処か遠くを見るように空を見上げる。

「その後、三人がかりでも当たり前前に渡り合っリライブが出てきて、すずかを魔導師の事件に巻き込んで…ほんと、すぐにでも強くなりたかったよね。」

「けどその結果は…」

無理がたたって墜ちた挙句再起不能になりかけた。

だからこそ、今のティアナを許せる筈もなく本気で怒りが湧いたんだけど…

「けど、よく考えたら分かる筈無いんだよね。私だって、墜ちるまで何の疑問も持ってなかったんだから。」

「なのは…」

出来るなら、答えを貰うばかりではいけない。

けど、道しるべも何も無いまま進んだ結果が私と同じだって言うのに…私が怒るもなにも無いんだよね…

「明日にでもちゃんと話してみる。ひよっとしたら、昔話もしなきゃいけないかもしれないけど…」

「私は全然大丈夫だよ。後で、はやくにも聞いてみよう。」

頷きあつ私とフェイトちゃん。

直後…アラートが鳴り響いた。

『おや、これは珍しい。君から連絡をくれるとは嬉しいじゃないか。』

ルーテシアが映し出したモニターに、スカリエッティの姿が映る。

『ゼストとアギトはどうしたね?』

「今別行動。」

簡潔に告げたルーテシアが向けた視線の先結構な距離に、ガジエツトの影が見える。

距離があるから良くはわからないが、かなりの速度で海上を飛び回っている。

「遠くの空に、ドクターの玩具が飛んでるみたいだけど。」

『じきに綺麗な花火が見えるはずだよ。』

壊される前提で飛ばしているらしい。

機体の動作テストと…管理局戦力調査か。

一般魔導師ならともかく、なのは達が相手ではそれも無理は無い。

「レリック?」

『だったら、君に真っ先に報告しているさ。私の玩具の動作テストなんだよ、破壊されるまでのデータが欲しくてね。』

予想通り動作テストらしい。

けど…あの程度じゃ目新しい戦力を引きずり出す事はできないだろ

う。

私が出ればそれこそなのは遠程度なら全力をつぎ込んできても負けない自信はあるが…コイツにデータを渡す為に戦ってやる義理は無い。

「壊されちゃうの?」

「ハハ…私はあんな鉄屑に、直接戦力は期待して無いんだよ。私の作品達がより輝く為に、デコイとして使うガラクタさ。」

「ねえ。」

人体改造なんて趣味の悪い事を作品呼ばわりしているコイツの話をわざわざ聞いているつもりは無い。

と、それまで悦に入って語っていたスカリエッティは、そこで初めて私に視線を合わせる。

「君が話しかけてくれるとは思わなかったよ。で、何かな?」

「動作テストならあの辺飛んで局員に落とされるくらいで十分だよね。一応念押ししておくけど、市街地なんか飛んでいたら…うっかり貴方ごとガラクタにしかねないから気をつけてね。」

私の台詞に対して大げさに手を上げるスカリエッティ。

「それは恐いねえ…では市街地にロストロギアが無いことを祈っておくとしよう。」

「笑顔でよく言う。」

警告がちつとも警告にならない。

仮に市街地にロストロギアがあつてすつ飛んでいったとしても、オートだから責めるなど言われて終わる気がする。

「…レリックじゃないなら私には関係ないけど。でも…頑張ってる
ドクター。」

『ああ…ありがとう、やさしいルーテシア。』

「じゃあ…ごきげんよう。」

特に聞きたくも無い会話を横に、遠くを舞う機影を眺め続ける。

私に隠し技を晒す事を躊躇う事も…恐らく思考の端にすらいれず、
自爆しかけた新米を助ける為に命をかけた速人。

彼は…まだ戦えるのだろうか？

今回の相手では怪我が治っていたところで出てはこないだろうけど、
気になってしまう。

と、ローブを引っ張られる感触。

視線を下に向けると、ルーテシアがそこにいた。

「…気になるなら行って来てもいいよ。私もドクターの頼み、レリ
ックと関係なくても聞いたから。」

「ルーテシア…」

スカリエツティは気に食わないが、一つだけ同意できる。

この子…優しい娘だ。

「大丈夫、廃品回収班になんて興味ないから。」

「…そう。」

笑顔で答えると、ローブから手を離れたルーテシアはそれ以上何も
言わなかった。

S i d e 高町なのは

海上に出現し、旋回飛行を繰り返しているガジェットを撃墜する為、出撃命令が出た。

相手の目的が此方の戦力調査と判断した私達は、念のため今までに見せている技術と戦力のみを使用して迎撃を行う事にした。

場所が海上なので航空戦力しか使えない為、フォワードの皆には待機していてもらう事になったのだが…

「ティアナは出動待機から外れところか。」

「っ…」

今のティアナを万が一にでも動かすわけには行かなかった。

心身ともにボロボロ。なのに待機から外れると聞いて見て分かるほどの驚愕を見せた今のティアナが出ればどうなるかなんて分かりきっている。

無理を押ししても戦って、下手をすれば私の二の舞。

「その方がいいな、そうしとけ。」

「今夜は、体調も魔力もベストじゃないだろうし…」

「言う事を聞かない奴は…使えないって事ですか。」

深い話はちゃんと時間をとってするつもりだったから、あくまで体調面だけの問題にしておきたかったんだけど…ティアナは自分から

問い詰めてきた。

使えない。

ティアナが最も否定しなきゃいけない、ティアナの兄が押された烙印。

「自分で言ってる分からない？当たり前的事だよ、ソレ。」

一瞬抵抗はあったが、すぐにそう返した。ティアナが使えないとは一言も言っていないから。

フオーしてあげるほど甘いつもりは無いけど、思っても無い事は言えない。

けど、そこまで察してくれるだけの余裕なんて今のティアナにある筈も無く…

「現場での指示や命令は聞いてます。教導だって、ちゃんとサボらずやっています。」

ティアナからの訴えが続く中、ヴィータちゃんが止めようと進み出る。

私はそれを制した。

「それ以外の場所での努力まで、教えられた通りじゃないとダメなんですか？」

聞かなきゃならない…できるなら、こんな事になる前に話して欲し

かった本心。

語ってくれると言つのなら、止めるつもりはなかった。

「私は…なのはさん達みたいにエリートじゃないし、スバルやエリオみたいな才能も、キャロみたいなレアスキルも無い。少し位無茶したって…」

どれだけ思いつめているのか体裁もなく進み出てきて訴えかけてくるティアナ。

が…唐突にその姿が消えた。

「が…っは…っ…」

「フレア空尉！」

無造作に、まるで捨てるように襟首を掴んで背後に放り投げたのは、本当につい最近六課に来られるようになったフレアさんだった。背中を打ちつけたのか、息苦しそうに倒れているティアナの様子を振り返る事すらなく、フレアさんは私を睨んでいた。

「こんな馬鹿と遊んでいてガジェットが何処かに移動して被害を出すような事があってみる、いくらお前でもただでは済まさん。」
「っ…」

教え子を馬鹿呼ばわりされた怒りと任務優先という痛い指摘が混ざって言葉が詰まる。

何より…無辜の民に被害が及ぶ可能性があれば、フレアさんが本気

でない筈が無い。

今これ以上を望めば本当にただでは済まされないだろう。

ヴィータちゃんに手を引かれ、私はへりに乗り…

「ティアナ！思いつめちゃってるみたいだけど、戻ってきたらゆっくり話そう！」

完全に乗り込む前にそれだけ告げた。

「なのは…その、大丈夫？」

飛び立ったへりの中、フェイトちゃんに心配そうに聞かれ、頷き返す。

「あんなに思いつめてたんだな…って。」

こなしてきた無茶の量に、成果にこだわりすぎる傾向。

今更ではあるけど、改めて本気で思い悩んできたんだと思い知った。

私は評価に思い悩む気持ちは私にはそこまで強く分からないから、無茶してでも強くなりたいって気持ちが同じだっただけで分かった気になってたのかもしれない。

「ほっときゃいいんだよあんな馬鹿。」

「ヴィータちゃん…」

真つ先にティアナの無茶を気にかけて何かあったのか聞きに来たヴィータちゃんが心配していない訳が無い。
けど、ヴィータちゃんは気にする様子もなく続ける。

「自分がどれだけ恵まれてるのかも分かって無いクセにあんな台詞が吐ける馬鹿なんか気にするだけ無駄だ。」

そっけなく言い放ったヴィータちゃんの台詞を聞いて、フェイトちゃん小さく笑う。

「ヴィータはなのはが一番心配なんだよね。」

「なっ…ばっ…何でそうなんだよ!」

うろたえるヴィータちゃん。

その様子が、フェイトちゃんの指摘が当たっている事を示している。

「ありがとうヴィータちゃん。」

「うっせえ!!」

私がお礼を言うと、ヴィータちゃんは赤い頬のまま目を逸らした。

Side↳スバル⇨ナカジマ

あんまりだと…そう思った。

努力すれば必ず叶う、とまでは言わない。

今のティアの抗議がこの場にふさわしい物じゃない事も分かってる。

でも、頑張ったんだ。

本気で考えて、きつい練習して、それでもティアが言っていたように任務や訓練をサボってた訳じゃない。

その結果が実らないどころか、こんな槍玉に挙げられて…

「何故こんな奴を使っている？」

拳句、いきなり外部から来た人にこんな事まで言われるなんて、どうしても納得できない。

フレア空尉はあたし達など目にも映っていないかのようにシグナム副隊長に問いかけ、シグナム副隊長は眉一つ動かさずにフレア空尉を見返していた。

「お前が口出しする事じゃない。」

「確かにそうだが、前線で背後から撃たれては致命だからな。」

瞬間、支えているティアの身体がビクリと震えた。

ホテルアグスタでの誤射…

あれから、失敗を取り返す為に、このままじゃダメだって努力してきたのに…

よりもよって、今そんな事言う必要があるのか！！

「私は白い墮天使への対策で呼ばれている身だ。一瞬の隙も作りたくは無いが、敵以外にまで気を配るとなると」

「何で…そこまで言われなきゃいけませんか？」

あたしは立ち上がっていた。

「失敗して…今のままの自分じゃダメだって頑張つて…それが間違
いだったから負けたって言うだけなら分かります。でも…これじゃ
あまるで頑張る事そのものがダメみたいじゃないですか!!」

言ってしまったから、上官への物言いじゃないと気づく。
でも止める事は出来なかった。

振り返ったフレア空尉は、あたしと眼を合わせる。

「結果がお前達にとって不満なものであれば、ダメだったんだろう。」

「な…」

何の迷いもなく返したフレア空尉に言葉が詰まる。

そんなあたし達の耳に、信じられない追撃が飛び込んできた。

「ティードゥランスターの無駄死にを誇るような勘違いをしている
からそうなる。」

一瞬…頭が真っ白になった。

無駄死に…だって？恥じる事が無いと思っ込んでいる…だって？

ふざけるな!!!

上司とか関係なしに全力で拳を振るいそうになる。

が、その瞬間、炸裂音が響き渡った。

何が起こったのかと視線を向けると…

「その口を閉じる。」

フレア空尉の顔面へ迫っていったらしいシグナム副隊長の拳が、空尉の手によって止められていた。音からして、多分全力。

色々と驚いたあたしは、結局動けずに立ち尽くしていた。

「聞いてきたのは彼女だ、それにいい機会でもある。」

「何…」

フレア空尉は、あたし達…フォワードの四人を視界に納めるように向きを変える。

「やってよかったで済むのは一般人の特権だ。護り手の敗北は護られている者の死につながる、何とかしようとしたとか強くなるうとしたなどといった話はどうでもいい。誤射と敗北、それがお前達の結果だ。」

「そんな…」

あたしは何も言い返せなかった。

死に繋がる。それはあたしを助けに来た速人さんが変わりに重体になつて思い知っているから…

「護り手に言い訳は無い。結果が出てしまえば言い訳する対象は亡くなるのだから。」

誰一人、返せる言葉もなく沈黙が流れ…

ポキン…と、骨が折れたような音がした。

「責…様っ…!!」

「腕外れちゃったなあ…言い訳できない護り手のフレアさん。」

肩を抑えて大きく飛びのいたフレア空尉の後ろには、意地悪な笑みを浮かべてフレア空尉を見ている速人さんの姿があった。

S I D E O U T

第九話・秘めた過去とすれ違い（後書き）

と言う訳で、なのはが私情を殺した段階で前回を終わらせたため、実は既に処刑終了済みという（汗）分かり辛くなつてすみません。

この方針でやった理由について少し駄文を。

- ・普通に墜とすただけだと毎回通常の模擬戦でやってるので何の違いも無く戒めにならない。
- ・模擬戦中止にした場合、最悪の展開として質問にまともに回答できないほど錯乱中のティアナが中止を割り切らず攻撃して、経歴上最悪な記録が残りがねない。
- ・民間の教師ならともかく、戦闘行動があるような組織なら『ちよつと恐い教官』ならこの程度普通にある（はず？）。

後は本人がやるつもりが無いだけで組織等に理解がある速人（だから局入りして無いけど手伝ってはいる）に作中で抱かせた感想が理由になる…かなと。

とはいえ、作者も書くにあたっての見直し中『よく見てなさい。』と言ったあたりでまともに見てられなかったんですが（汗）あれは恐いわやっぱ。

ちなみにいらんちよつかい出した拳句格好つかない結果になったフレアが、隊長陣が思ってることはまったく関係ない部分に突っ込んでるのは仕様です。

第十話・語り過ぎた英雄譚

第十話・語り過ぎた英雄譚

肩の骨が外れた右腕を押さえながら跳躍するフレア。
うーん、我ながら見事な技だな。もう怪我也大体いい感じか。

「ほら、ここ笑うとこだぞ？」言った傍から自分がやられてんじや
ん馬鹿』って。」

呆然としているフォワードの皆を見ながらフレアを指差す。と、再度関節から音がした。

…自力ではめたのか、そんな技も覚えたんだな。

「貴様の接近に気づける人間など」

「あれえ？言い訳無用だった気がするんですけどねえ？」

「ぐ…っ…」

完全気配遮断を使って接近した為当然気づける訳が無いのだが、そこは有言実行に基づいて失敗した自分が悪いという事で放置。

フレアの忠告も理解できないではないが、だからと言ってフォワードが全員フレアみたいのになっただらきつとなのははやるせない気持ちになるだろうし、指揮するはやてに至っては胃に穴が開くだろう。少し黙ってて貰う為に格好つかなくなるようちよっかい出した訳だ

が、狙い通りフレアはそれ以上何も言う事は無かった。

「お前がいつまでもそこで甘ったれてるから話がややこしくなる。目障りだ、さっさと部屋にもどれ。」

と、俺とフレアをスルーしたシグナムがティアナを見下ろして一蹴する。

ここまでボロボロにされてるのにまだ追い討ちかけるかコイツ。

「で、『甘えてすみません。猛省してよりいっそう厳しい訓練に励みます。』って言ったらどうする気だ？」

「何…」

目を吊り上げるシグナム。

けどしょうがない。何が甘えなのかによっては十分にありえる発言、発想だ。

「不安に負けている事を甘えとしているのか、答えを貰おうとしている事を甘えとしているのか、色々視点を変えれば違ってくるが…その答えを自力で考えさせる方針を教官様が取った結果がこれなんだから、『間違えた、貴様は沈め。』は惨い気がするぞ。」

「社員でもない貴様は黙っている。」

まともな反論が思いつかなかったのか、言えば全てが終わるだろう台詞を持ち出すシグナム。無理も無いが。

昔話を気軽にする気が無ければ努力を止める理由なんて簡潔に説明するのは難しい話ではあるし、命令は絶対だの一言で話を終わらせることも出来るが、自力で何かを見出そうとする事を止めて指示に従うだけの人形にする気は隊長陣には無いだろう。

だからこんな状態になっているとも言えるが。

「やれやれ…じゃあ伝言。何でもシャーリーさんがこのすれ違いをどうにかする為のいいものを見せてくれるらしいよ。」

シグナムが一瞬何かを言いかけて、ティアナに視線を移した後諦めたのか結局何も言わなかった。

この状況で見せる物に察しがついて、止めようと思ったんだろう。ティアナを見かねて止めないあたり、なんだかんだ言いつつ優しいんだよなシグナムも。

「子供の世話は管轄外だ、後は好きに」

「出勤待機の関係もあってロビーでやるつもりなのに仕事サボるのか？」

一人ロビーへ向かおうとしたフレアの背に問いかける。

フレアは一瞬足を止めたが、黙ってそのまま歩いていった。

あんなんだから実力あって真面目なくせに未だになのはと同じ一等空尉なんだよな…

前に出たいだろうあいつは昇進に興味は無いんだろうけど、チーム組むの躊躇うよなあれは。

「よし、それじゃ景気よく…は無理だろうが、気分切り替えていこうぜ。」

「お前が仕切るな。」

今の際限なく沈んでいる空気をどうにかしようと思ってくしていたのだが、シグナムに一蹴された。

俺は雇われのオマケで向こうは指揮を任されている副隊長なんだか

ら当然と言えば当然なんだが…こつという重いのはどうも苦手だな。

S i d e 〱 スバル 〱 ナカジマ

空気を読まない速人さんの意気揚々とした先導の下、ロビーに着いたあたし達が見たものは、とても明るい気分で見えられるものじやなかった。

戦闘に何の縁もなく、専門の教育を受けた訳でも無いのに魔法戦を繰り広げる事になったなのはさん。

9歳から戦っていた話も噂じゃなく本当で、砲撃に対しての適正が高かった為、迷う事無く射砲撃魔法を極めようとした。身体へ負荷が高差なんて知る術もなく。

ミッド式デバイスに対してのカートリッジシステム何て、ろくに実験も済んでない危険物も、相対する強敵に対応する為迷う事無く採用。

なのはさんの生まれ故郷である地球が、管理外世界にも関わらず魔導師に襲撃、事件を起こされ…友人をそれに巻き込んだ事もあってただでさえハードスケジュールだった訓練を更に水増し。

その結果は…見るに堪えないものだった。

魔法を使うどころか動く事すらままなら無いのはさんの姿を見せられ、初めて全部分かった。

止める筈だ、あたしもティアも。

本気で怒るはずだ、なのはさんは優しいから。

こんな事…誰一人にだって繰り返して欲しい筈が無いから…

「…あれ？」

「どうしたのシャーリー？」

「いえ、ちよつと…」

沈黙の中、唐突にキーを勢いよく操作しだすシャーリーさん。

「事件と関係ないデータファイルが紛れ込んでいるようなんですけど…あれ？ムービー？」

「ちょ、シャーリー！それは気にしないでいいの…！」

同席していたシャマル先生が慌ててシャーリーさんを止めるが、それまで映っていたなのはさんの画像が消え…

『スーパーヒーロー高町速人！満を持しての登場だあっ！！』
『は、恥ずかしいからやめてっば！！』

二つの剣を腰に下げ、真紅のマントに黒い服という、何処かで見た服装の少年が、速人と…あたしの聞き間違いじゃなかったら、『高町』速人と…なのはさんと同じファミリネームを名乗っていた。しかも、なのはさんがそんな少年に両手でしがみついて服を引っ張っている。

「ちょっと待てこら！何でこんなアツサリ再生できる位置に俺の情報残ってたんだよ！！」

「私を知るか！大体貴様が馬鹿正直にフルネームを名乗っているからこうなるんだろう！！」

「なのはがこんな小動物みたいにしがみついている映像じゃ関係あるのバレバレだつての！大体なんだよさっきの日常映像集！どっから持って来た！」

「なのはとテストロッサのデバイスから収拾した物だろう！」

「盗撮容疑である馬鹿逮捕して海鳴つれて帰る！」
「止めんか！！」

速人さんとシグナム副隊長が画面を指差しながらとても親しそうに言い争っている。

暫くしてそれも落ち着いていた頃、速人さんがわざとらしい咳払いを一つ。

「あー、ばれた訳だし素直に名乗らせてもらおう。本名、高町速人。あの鬼教官高町なのはの兄をやってる。悪いなティアナ、アイツ色々下手だからさ。」

バツが悪そうに告げる速人さん。

ついさっきまでなのはさんの過去、教導の意味について知って涙していたと言うのに、いきなりの驚愕の事実判明に全部持っていかれってしまった。

改めて思う。速人さん、本当に空気読まなさ過ぎると...

S I D E O U T

そもそも個人の過去が絡んでくる資料になる為、ホイホイ閲覧できるようにになっている物でもなく、俺は別にはやてのようにレアスキル持ちとか言うわけでも無いため、仕分けして隠しておく程度で済ませていたらしい。

が、シャーリーさんが、保存使用容量がおかしいことに気づいてしまい、ウイルスでも入ったのかとちょっと確認した所、隠しておいた元のイメージが見つかり…

何で再生するかなシャーリーさん。

待機中であつたが念話ではやてにだけ事情を説明、この場に居るシャーリーさんとフォワードメンバーにだけ、何故俺のことを伏せているかを説明する事となつた。

管理局と敵対し、交渉にあつた経験がある事。

局員の追跡から逃亡し、リライブの力を借りて救つた人がいる事。

その時リライブの逃亡を見送つた事。

協力者にて保護対象でもあるが、同時に危険因子でもある事。

加えて、管理局員でもないのが好き勝手して誰か助けても捕まつてないなんて状態が、その辺の一般人に漏れて適当な真似でもされれば余計な問題が多々発生する事や、ある種広告塔にすらなりつつある言わずと知れたエースの親類がそんなのだと漏れるとイメージ的

によくないなど、大小さまざまな理由を大まかに説明した。

情報改竄にはなる訳で素直に受け入れられないかとも思っていたが、空港火災の時になのは達が主体で救済活動を行っていた事が伏せられている事を知っている皆は、理由がある分マシだと受け入れてくれた。

「でも誰かを助けられたんですよ。それで危険因子ってどうしてなんですか？」

扱いが不当だと思ってくれたのが、エリオがそんな問いを投げかけてくれて、キャロが小さく頷く。

「P・T事件の時、速人は件のプレシアIIテストロッサを救出する為に虚数空間へ飛び込んだ。」

シグナムが言うと、モニターに写っている映像が虚数空間で鋼線使っただけで下がっている俺の映像になる。

魔法が使えない空間と言う事は知っていたのか、全員がありえない物を見るかのような目でその映像を見ていた。

「この時速人を助ける為だけにライト空尉が右手に大怪我を負った。敵で信用も出来ないリライヴの協力がなければ全員が無事助かったかどうかも分からん。そしてリライヴを逃がしたと言ったが、奴が今どれだけの問題になっているかはお前達もよく知っているだろう。」

「あ…」

「危険因子、と言うのはそういう事だ。悪意がなければ問題も無い等と簡単にすまないのは、努力で破滅に向かったのを見たお前達なら理解できるな。」

沈黙が降りた。

うーん、まさか俺の話で重い空気になるとはな…もつとやばい昔話は別にあるのに。

「はいはいそこまで。俺は扱いに不満は無いから俺の心配は不要だし、放置してる事に納得行かないのなら後ではやてとか上に掛け合つて逮捕許可貰ってからかかって来い。さて…ティアナ。」

声をかけると、相変わらず意気消沈した覇気の無い瞳を向けるティアナ。

いいとこなしで説教ばっかだったもんなあ…無理も無いか。

「少しくらい無茶したって…と言う事だったが、アレが本気の台詞ならなのは達の心配はとんだ見当違いだ。ただ同時に、お前は俺と同類って事になる。」

「っ…」

管理局にとつての危険因子。

執務官志望で兄の汚名を雪ぎたいティアナにとって許せる事態では無いだろう。

「仮に訓練に関してだけ、任務では無茶をせず強くなる為だけに命を懸けると言うのなら…それが本当に本気なら…強くなれるかもしれない訓練はある。」

言いつつ、俺は服を脱ぎ、上半身を晒した。

「な、何して…えっ…」

驚いたシャーリーさんの声が途中で止まる。
無理も無い…何しろ全身傷だらけなのだから。

「何で『かもしれない』かってまあ…見たら分かる通り失敗したら下手すると本当に死ぬんでね。」

「こ、これ訓練で出来た傷なんですか!？」

「全部とは言わないけど…実戦中にこんな傷だらけになったら治療してる余裕無いって。俺となのはの出身世界に魔法が無いのは知ってるだろ?」

驚いたらしいスバルの問いかけに簡単に答えると、悲しげだったなのはの話の時と異なり緊張感の入り混じった沈黙が生まれる。
いつまでも裸でいる趣味も無いので適当に着替えつつ続ける。

「強くなるって、『足りない能力を補おうとする力』が働く事が基本なんだ。毎回容赦なくなのはにぶちのめされてると思うが、痛いし仲間はやられるし、どうにかしたいと思うだろ?それを考えるとここはただの手取り足取りより余程いい環境だ。」

そこまで言っただけ俺は人差し指を立てる。

「ここで問題。痛い苦しいよりも、能力が足りてないと困る事は何でしょうか?」

答える声はなかった。

だが、ここまで行けば答えなんて死ぬことだと判り切っているだろう。

修行と言うといろんな要素が絡んでくるためそれほど単純な話でも無いが、これも要素の一つではある。

とは言え、いくら強くなれる可能性があると言っても、教え子が死ぬかもしれない訓練などなのはにできる筈も無い。と言うか局で出来るかそんなもの。

「そういう訳でさティアナ、管理局員としては最高水準の環境の筈だから、無茶してもって言うのが物の弾みに出た言葉なら…もうちよっと信用してやってくれるか？アイツも…アイツが選んだお前自身も。」

「選ん…だ？」

「何で疑問系だよ、志願じゃないんだろ？」

呆けるように呟いたティアナに苦笑する。

「あの馬鹿不安を使命感で塗りつぶせるような堅物だから、自分が見込んだ子が無力に怯えてるなんて気づいても無いだろうけど…」
「ティアナは決して無力な凡人なんかじゃない。って続けるかな、私なら。」

俺の背後から、噂の教導官様がそんな事を言いながら現れた。

さすがに長話が過ぎたらしい、もう片付いたのか。

「さてと、危ない外部の人の偉そうな話は置いておいて…」

「酷いなおい！」

「ちよっと黙っててくれる？」

一応フォローのつもりだったので突っ込んだが、ピシヤリと切り捨

てられた俺は黙って頷くほかなかった。
晶師匠やレン師匠にすら説教かますなのはにそう簡単には逆らいま
せん、はい。

「ティアナ…ちょっと、二人で話そう？」

「…はい。」

合わせる顔が無いのか、俯いたまま返事をするティアナを連れ、な
のは外に向かっていった。

少しの間を置いて席を立つ、残ったフォワードとシャーリーさん。

「一応忠告はしておくが、覗きは止めとけよ。」

少し歩みを止めた四人だったが、結局心配だったのかつけて行って
しまった。

事が済んだからかシグナムとシャマル先生とフレアもこの場を去っ
て行き…

「速人の台詞じゃないよね？それ。」

「うぐ…」

なのはと一緒に来てこの場に残っていたフェイトの一言に、俺は唸
るしかなかった。

「あ…フェイトは見に行かなくていいのか？」

「覗きはよく無いもんね。」

「そうだな、うん。で、何があって俺こんな責め苦にあってる訳？」

いい加減ごまかすのも無理と悟って聞いてみる。

「アリサが」

「着替え覗かれたって言ったんだな？それ冤罪だから！！」

三文字で真相が分かってしまった。

アリサの奴、詳細説明しないであった事だけ文句長で言いやがったな。

…いやまあ、見たといえば見たけど。でもわざとじゃないんだ、決して。

「でも速人、前にもお風呂覗こうとしてたって…」

「いつの話だー！いや興味はあるけどさー！！」

多分今だと発言だけで未遂でも捕まると思う。

が、結局本心が漏れてる俺に少し呆れたように肩を落とした後、フエイトは小さく笑う。

俺の話がフォワードに漏れた事自体はいい事では無いだろうが、無理しなくて済む部分もあると言えばあるので少しスッキリしたのだろう。

間を置いて、フエイトは息を吐いた。

「少し…心配だけだね。」

「ん？」

「二人とも、今回は色々あったから。」

フエイトが心配そうに漏らす。結構思いつきりこじれてたからな。

「問題ないって。ティアナが俺やフレアと同種の人間ならともかく、

頑張ってる魔導師だからな。危険性をちゃんと認識できた以上、無理は押し通さないだろ。」

安心させるつもりで言ったのだが、フェイトは不安そうな瞳のまま、俺を見つめてきた。

「速人は…問題あるからね。本当に心配したんだよ？吐血して重体なんて…」

「あー…」

その点に関しては申し訳ないと言いたいようが無い。

俺も出来る事なら怪我なく使いたいのだが…世の中そう上手くはいかないんだ。

「なのはも…まさか速人と同じ眼をすると思わなかったし…無理しすぎだよ。ちゃんと話をしてくれたのはよかったけど…」

「話？」

「うん。無理して我慢しないで私に位本音で話して…あ、内容は言わないからね。陰で喋ったらなのはに怒られるかもしれないし。」

慌てるフェイトだったが、俺にしてみれば吉報だった。

そっか…愚痴とかでも言えるようにはなってるのか…

無心の裁きをやった事は、そんなものに慣れないように怒るとかないと思っただけど、ちゃんとガス抜きできてるならいいか。

「フェイト。」

「何？」

「俺は管理局に四六時中いる訳じゃないからさ。お前も忙しい身で

いつも一緒でも無いだろうけど、嫌じゃなければアイツが無敵の工
―スでなくてもいい場所になってやっててくれ。アイツ仲間は…戦
友は沢山いるけど、この役を頼めるのは数人しかいないんだ。」

フェイトは、俺の頼みに笑みを見せて頷く。

「私でいいのなら、その役はずっとやって行きたい位だよ。でも…
なのはと同じ事は速人にも言えるんだよ？一人で無茶し続けてるっ
て言うのは。」

フェイトは勿論、誰も聞かない。倒れるような何をしたのかと。

多分、それが本来は広めるべき物じゃない技…奥義に係するもの
だと知っているから。

「…判った、兄さんに何処まで説明してもいいか聞いてみる。さす
がに借り物に近いから、俺の独断で喋るのみな。」

「それは嬉しいけど…使わない、とは言ってくれないんだね、やっ
ぱり。」

何処か諦めたように告げるフェイト。と言うか実際諦められている
のだろう。

10年近く前から一緒なんだから、もう判ってるか。

使えば救える人がいればまた躊躇いなく使う…と。

「…済みませんでした。」

人気の無いところまで来た所で、あたしはいたたまれなくなって先導するなのはさんに向かって謝った。

と、振り返ったなのはさんは、真剣な表情で私の目を見据えてくる。眼をそらしたかったけど、今のあたしはそれすら出来なかった。

「何についてどうして謝ってるのか…聞かせてもらっていいかな？」

説教ではなく問いかけ。

思えば、フレア空尉には投げ捨てられすらしたあたしの物言いを、なのはさんはただ真っ向から聞いてくれていた。

「無茶してでもとか…あんな偉そうな事言っておきながら、なのはさんが倒れていたのを見て、恐くなってました。無茶する事の意味も分かってなくて、あんな可能性を受け入れるだけの覚悟もありませんでした。」

少しの間。

あたしのお話を聞いて一切表情を変えないのはさんが、何を考えているのか怖くなって…

唐突に、なのはさんは笑みを見せた。

「あの人の真似するのが覚悟だなんて思ってたらやだよ？忘れちゃっていいからねあんな危険な人。」

「え？あ、は、はい…」

仲が悪いのだろうか？

なのはさんにしてはえらく酷い言い様に戸惑いつつ、危険な事をするなと言う念押しなのだと思い頷き返す。

「じゃあ、射撃をおざなりにして遠近用の魔法を修得した事は？」

「……済みません。」

何を言えた立場でも無いので謝る。

なのはさんはそんなあたしを見ながら肩を竦めた。

「納得できて無いでしょ。このまま延々と同じ射撃練習だけ繰り返しても単独行動が多くなる執務官にはなれないもんね。」

見抜かれていたのか今見抜かれたのか、なのはさんの指摘に言葉を詰まらせる。

結局全て…自分の為。

戦えるとの証明も、戦力強化といって覚えた近接、砲撃魔法も、なのはさんに勝ちたかったのも全部。

怒られて当然だ。

初めからチームで動く前提で教わっているのにこんな…

「間違っではないんだよね。」

一瞬、何を言われたのか理解できなかった。

本当に間違っただけというように、普段どおりの笑みと共になのは、
さんはそう告げた。

「クロスミラージユ、貸してくれる？」

「あ、はい。」

言われるがままクロスミラージユをなのはさんに渡す。と、何かを
呟いた後、私に返してきた。

「命令してみて、モード2って。」

なのはさんの言葉を恐る恐る繰り返すように告げると、クロスミラ
ージユは形態を変え…

大きく…洗練された刃を展開した。

あたしが即興で使えるようにした刃と違い、手元をカバーしたり、
近接戦闘において扱うべき要素をこれでもかと言っただけ完璧に揃え
た刃。

「これ…」

「元々執務官志望って聞いてたから用意はしてたんだ…って、今言っても遅かったかもしれないけど。」

何処か遠くを見るように夜空を見上げるのはさん。

「不安になって怒ってて、後から全部知らされたこと…私もあるんだ。気持ちは嬉しかったけど、自分が情けなくて辛くなって…そんな事があったのに、同じ事繰り返しちゃった。ごめんね…」

なのはさんは…全部分かった。将来の事まで含めて色々と考えてくれていた。

大体初めから言うてはいたんだ、『デバイスも一緒に強くなる』って。

何も気づかないまま暴走してただけだった。

なのに…謝られた。

もう体裁も何もなかった。

後悔や申し訳なさんかが後から後から責め立てて来て、あたしはなのはさんに泣きついて謝り続ける事しかできなかった。

強く…ならないと。

今まで見たいな外面ばかりのいい加減な強さじゃなくて、この人の教え子だと胸を張って名乗れるように：自分自身から強くならないと。

S i d e 〉 高町なのは

完全に解散して部屋へ戻ろうとした所で、待ち伏せている人影があった。

「速人：お兄ちゃん。何の用？」

「分かってるだろ？目を閉じて齒を食いしばね。」

静かに告げられた一言で、用事が分かってしまった。

昼の模擬戦で我慢すぎた：心を殺した事に怒ってるんだろう。

私自身、あれになってしまったのかと思うと未だに寒気がする。大体、正しい教育プランだけ淡々と実行するだけなら全部機械任せでも構わないんだ。あんな風になる位なら、まだヴィータちゃんみたいに怒りを…心を寄せた方がきつといい。

…それを、先人のお兄ちゃんに怒られるのにはちょっと納得がいかなかったけど、本気で殴るつもりなら私が多少魔法を駆使した所で抵抗にならない。

私は覚悟して目を閉じ…

「えい。」

「にゃ!?!」

「あ、まだ出たのなその台詞。」

予想外のデコピンに額を抑える。

つい出てしまった今の歳からするとありえない反応に恥ずかしくなってくる。

…って言うか、デコピンが異常に痛い。普通に指まで強いんだろう。痛みを堪えつつお兄ちゃんを見ると、肩を竦めて苦笑いしていた。

「ちょっと放置しとけないかとも思ったんだけど、フェイトに本音で話したんだろ?だから今回はスルーしとく。あんまり溜め込みすぎるなよ?」

「分かってる。私だってあんな風になりたくないから。」

いつか告げた約束。

一時とは言え、破った拳句に望まない形で動いてしまった自分を戒めつつ、改めて思う。

今回、かなり無理して我慢した結果こんな事になったけど…

それが当たり前になってしまいうくらい嫌な事を…殺しを続けてきたお兄ちゃんは、ヒーローになるって明るい目的こそあるけど、その過程で起こる苦痛がどれだけでも平然と我慢してしまうだろう。

スバルを助けて倒れたように。

それじゃあ…結局暗殺者に戻らなくても、我慢し続けているのは変わらない。

お兄ちゃんだって…我慢しすぎだよ。

呟くことすらしなかった言葉は届くはずもなかった。

S I D E O U T

第十話・語り過ぎた英雄譚（後書き）

この事態がどう收拾つくのか？と言うのが題になると……って言うか
題にしなきゃならないこのタイミングで速人の正体暴露。

感動巨編の後にCM入れられる位に酷い横槍だなあ（苦笑）

結局シャーリーが昔話しちゃってるのはシグナムとシャマルが止めて
無いので、まあいいかなと（軽）。二人も一応関係者ではあるし。

あまり冷めた話を目指して無いので色々とノリで突っ込ませて終了
してます。

『流した？』とか『軽っ！？』とか感じた場合は上記が理由だと思
って見てやってください。

幕間・出張！エメラルドスイーツ！

幕間・出張！エメラルドスイーツ！

Side 八神はやて

人が来ないようにした状態で、私はシャーリーと向かい合っていた。

「んー…なのはちゃんから聞いたった分の過去を話したんはともかく…正体不明のムービー再生はさすがに不用意すぎるな。」

「はい…本当にすみませんでした…」

さすがのシャーリーも今回は落ち込んでいる。

保存容量にまで気が付いてウイルスならと対応しようとしてくれたのは優秀な部分含めて嬉しいけど、ムービーだったからってそのまま再生せんでもええやろ…

「けど、なんかペナルティつけるにしてもなあ…このムービー、本来無い事になつとる奴やから、まさか『正体不明のムービー再生しました』何て書類作るわけにもいかんし。」

ま、詰まる所部隊としてはどうしようもないな。

「今度からは本当気をつけてな？」

「は、はい！」

背筋を伸ばして敬礼するシャーリー。

私はそんなシャーリーを前に、前屈みで頬杖をつくといった思いつきり姿勢を崩した状態を取る。

「ところで、ちょっと友達と一緒に食べたいスイーツがあるんやけど…奢ってくれんかなあ？」

「……………是非奢らせていただきます。」

要は命令でなければいい訳で、『お願い』聞いて貰うくらいはええやろ。

…腹黒狸って思わんように。

S I D E O U T

処刑事件の翌日午後、雨降って地固まると言った状況で皆のテンションが高くなっていたと言うのに、前線メンバーはなぜだか広めの一室に集められた。

しかもはやてが堂々と鎮座している。大丈夫なのか機動六課？

「訓練予定もあつたとは思うけど、折角シャーリーが奢ってくれる言うからここは皆堪能して貰おうと思って集まつたんや。悪

いけどつきおつてな。」

はやての一言と集まったメンバーで、アツサリ疑問は氷解した。
ああ…隠してるものを部隊の失態として処理できないからこんな形になったのか。

道理でシャマル先生とかリインまでいると思った。

しかし…よくフレアまでいるな。

『参加自由やとフォワードの皆い辛いやろ？速人君の事知つとるメンバーは強制や。』

『成程ね…』

視線を移した俺に気づいたのか、念話で事情を教えてくれるはやて。

ついでと言っては何だが、こういうの趣味じゃないあいつにとって
はいい罰にもなる。

問題発言したばっかだしな、真意はともかく。

さて…結構財布に痛い目見せられてるだろうし、逆に言つとそれだけ豪華な物だろう。

稼ぎ頭が見た目中学生のアリシアという余裕があっても贅沢するのが情けなくなる状況ではろくな事もできて無いし、多少いいものなら見ておいて損は…

「エメラルドスイーツです、ご注文の品お届けにまいりました。」

「つておいっ！…！」

思わず立ち上がったしまった。

何も知らない皆は不思議そうに俺を見ている。
けど、ホイホイ管理局来ていい筈が…

「迎えにはザフィーラについてって貰たし、そんな心配せんでもええよ。」

「すみません主…あ、並べてしまっってよろしいでしょうか？」

「ええよ。」

俺が啞然とする中、はやてとフレリアが短いやり取りを交わすと…

後から、全身をローブに包んだ子供サイズの誰かがぞろぞろと長方形の箱を両手に持って入ってきた。

何の儀式だー！！

身を隠すのに何かあったら解ける変身魔法ではなく、窮屈に着込めば着たままでも活動可能なローブにしているのは俺の提案だが、今それをやられるとさすがに不自然極まりなかった。

しかも…四人いる。

「それ脱いでええよ、元々そのつもりもあつた訳やし。」

「そうですね、では失礼します。」

はやての指示の元、一斉にローブを脱ぎだす四人。中にはおなじみ宵の騎士三人と、アリシアが…

デИАーチエを除き、メイド服姿で居た。

もうだめだ、何から突っ込んだらいいか分からん。

と、そんな時…

「ど、どういう…事なんですか？」

エリオが、何かを恐れるような表情で立ち上がった。

…あ、そう言えばエリオの出生ってフェイトと同じなんだっけか。

幼いとは言え色以外なのは、フェイト、はやてそっくりの三人に加えて、スタイル以外フェイト似のアリシアまでいるんだ。

万が一同じなら考えたら穏やかじゃないだろう。

「皆については話すから、とりあえず落ち着いてなエリオ。」

「あ…す、すみません…」

いくら落ち着かなかろうと、部隊長にたしなめられては大人しくならざるを得ないのだろう。不安げな表情のまま座りなおすエリオ。

「話の前にケーキ分けとこか。お茶片手に軽く進めてこ。あ、皆も適当に座ってくれてええよ。ケーキも多めに頼んだしな。」

「そ、そうですね…」

明るいはやての横で苦笑するシャーリーさん。

…確かに、人数分近い数のホールケーキなんて多め以外の何者でもない。

ただ、前線メンバーや家の宵の騎士の三人は魔力の生成にも栄養が必要だし、その気になればと言うか、誰かが飽きて放り出した時はレヴィ辺りが全部食いだすだろう。

腐らせる事は無いわけだしいいか。買わされたシャーリーさんにはご愁傷様と言つところ。

『何もかもは話さないよな？』

『闇の書に関してはレアスキルで出せる情報限られとるからな。触らん程度にや。』

全部話すと必然的にはやての情報まで漏れる事になるのだが、さすがにそれは分かっているらしい。

はやては、かいつまんだ簡単な説明を始めた。

アリシアについてはフェイトの姉で、俺に助けられて以来一緒に居るとだけ説明。

宵の騎士については、なのは達を模して生み出され敵対していたが、リライヴの助けを借りて救った事と、出生と能力の高さから局の内、外問わずに狙われる可能性があつて危険な事を説明した。

「だつて言うのに、お前等よくもまあ管理局にホイホイ来れたもんだな…」

若干呆れていたのだが、ディアーチェがこれでもかと言うほど不満げに俺を見てくる。

…あれ？俺何かした？

「貴様が一度も様子見にも帰つてこないからだろうが。」

「ほつらよ、ひゅへるはへあつへるひ。」

「レヴィ、飲み込んでから喋りなさい。と言うより喋るのが困難に

なるような量口に入れないでください。」

どうやら帰ってこなかったのが不満らしい。

そんなに長い事留守にした訳でも無いし、肝心のリライヴがいつ出てくるか分からないって理由でここにいるのに簡単に帰れないんだが…

「まあ速人が簡単に帰れないのは分かってるよ。だ・か・ら、折角部隊長様じきじきに呼んでくれた訳だし堂々と顔見に来ようと思つて。」

「それに主は時間があつたとして気遣つて顔を出してくれるか疑問ですし。」

アリシアはともかく、随分酷い言い様だなフレイア。
兄さんじゃあるまいし。

「えっと…シユテルちゃん…でいいかな？」

「呼び捨てでも構いませんが…見た目通りの年齢では無いので子供扱いは少し困ります。」

スバルがシユテルに声をかける。

もう説明自体は終わったし、こうなつた以上仲良く越した事は無い。皆もそのつもりなのか誰も止めず…

「じゃあ…シユテル。なのはさんの身体ってどんな感じ？」

「つんぐー！！！！」

切り出されたのは、ある意味とんでもない質問だった。口にしていたケーキを盛大に噴出しかけたなのはプライドかそれを無理して堪えるが、今度は息を詰まらせたらしい。

多少熱いだろう紅茶を煽るのは。そんなのはの背中をフェイトがさすっていた。

「だ、大丈夫なのは！？」

「えほっ…けほっ…ご、ごめんフェイトちゃん…なんとか…」

「テメエなんて事聞いてやがる！！」

「やるなスバル。フォワードで初めてなのはここまで苦しめたぞ。」

「

「え？え？」

なのはの反応やヴィータの怒声の意味が分からないのか困惑しているスバル。

と、シユテルは至極真面目な顔のまま…

「残念ですがマスターの妹に当たる容姿だからか経験はありません。他の男性と交わるつもりは特に」

「オメーも真面目に答えてんじゃねー！！！！」

答え始めたシュテルが言い切る前にヴィータが思いつきり叫んだ。
無理も無い。

そして、シュテルにそこまで言われて自分の質問がとんでもない意図で解釈されていると悟ったスバルは、これ以上ない程赤面して手と首をブンブンと振り出した。

「ちち、違ってます！すみません！そんなつもりじゃなくて！！」
「運動能力ですか？低いですね、残念なほどに。」

「な、何を次から次へととんでもない話をしてるの！！」

これ以上下手な事を暴露される前になのはが慌ててシュテルを止める。

素直に質問に答えている体を取っているが、大方スバルの聞きたい事を大体察した上で遊んでいるんだろう。

しかし…誤解させてからかう事はあっても直接的な嘘はあまり言わないシュテルだが…残念とか言ってたのマジなのだろうか？

だとするとアリアシアだけ警戒していればいいと言うものでもなくなってくるんだが…ああ家が怖い。

と、落ち着いたところでスバルが質問を詳しく切り出した。

「なのはさんって凄い強いけど、戦闘スタイルとかも一緒なんですよ？使ってる…って言うつと変だけど、どんな感じなのかな…って。」

「そう言う事ですか。」

今理解したように呟くシュテル。

同時に、まわりも変な意図がなかったことがわかって落ち着いたよっだ。

「素晴らしい魔力と技法だと思いますよ。運動能力が壊滅的に低いので近接戦闘に難がありますが、視力や体力が低いと言う訳でも無いので私としては重宝しています。」

「悪かったね…運動できなくて…」

連続で言われてかなのはが軽く拗ねる。

そんななのはを他所に、スバルの問いかけは続く。

「違和感とかないの？」

「なのはのコピーを作って乗り移ったわけではなく、これは『私』の身体ですから。」

「あ…ごめん…」

失礼な質問だったと思ったのか謝るスバル。

だが、別にシュテルは表情を変えない。

「貴女方は同じ管理局員ですが、違う思いを持った違う人物です。私は私ですが、私かなのはのコピーであるのも事実ですから間違いではありません。その程度の事ですから気にする必要はありませんよ。」

当たり前のように告げるシュテル。

だが、それに表情を変える二人がいた。

フェイトとエリオ。

クローンとして生まれて自分が何なのかと想っていたであろう二人は、アッサリ言っただけのシュテルに感心したようだった。

「ただ元になつただけの話だ。我を見れば分かるだろう？この王たる気質溢れる我とその小鳥では比較にならぬ程の差がある事くらい。」

物凄く偉そうに喋るディアーチエ。

だが、皆から返つて来たのは沈黙だけだった。

と言つか、シュテルの割り切ったいい感じがあつという間に台無しになつたようで普段より温度差が酷い。

雰囲気ぶち壊しだな。らしいと言えばらしいので俺はいいんだが、皆冷めてるなあ。

レヴィが何かどうでもよさそうにひらひらと手を振る。

「気にしないでいいよ、いつもの王様病だから。」

「何だと貴様！ええい塵芥共が！黙つてないで何とか言え！！」

「こらこら。お前のそれに耐性あるのは身内だけだから気をつけるつて言つたろ？」

「貴様もか！我を病人みたいにたしなめるな！！」

慣れてる俺達以外の反応は冷めたもので、一人空回りするディアーチエ。

何と言うか、少し可哀想にすらなつてくるなあ…

「あの…王つてどういふ事なんですか？」

「出番だぞ解説。」

おずおずと質問を切り出したキャラ口だったが、ディアーチエはシュ

テルを一瞥してそう告げるとそれきり何も言わなかった。

「属性や在り方…といった所でしようか。なのはが不屈と呼ばれるのと似たような物です。私は『理』で…」

「ボクは『力』だ！」

「それでダイアーチェさんが『王』何ですね。」

シユテルの説明に続いて名乗るレヴィ。

そこまで話した所で分かつたらしいキャロから、確認の意を込めて放たれた質問にシユテルは小さく頷く。

「自由度高すぎる駄々甘の主さんが止めないからこんな状態のままなんだけどね。」

「まあそう言うなって。」

なのはが俺のせいだと視線をくれるが、俺は軽く流した。

実際ダイアーチェは、細剣の扱いとか乗馬とか踊りとか笛とか、貴族の嗜み的な事の修得には真面目に取り組んでいる。

一般に受けが悪いから禁止…なんて、それこそ暴君だろう。

「さてと、仕事もあるしこれくらいでお開きにしとこか。」

「えー、私とフレイア質問なかつただけど。」

急に切られたアリシアが拗ねるが、本来こんな事してる時間じゃない。

大体ケーキも食べ終えてるしいい加減お開きにしてもいいだろう。

「はは。帰りにザフィーラに送って貰えばこの部屋と速人君は暫く使ってくれてええから勘弁してな。」

「俺も使われるのな、マスターなのに。」

軽く肩を竦めると、皆から笑いが零れた。

Side↳ラインフォースⅡツヴァイ

「お姉ちゃん達を呼んだのはどうしてですか？」

戻る途中、はやてちゃんにそう聞いてみる。

はやてちゃんは軽く肩を竦めた後、少し寂しげに笑う。

「戦力強化狙い…やと思った？」

「そんな事は…ただ、流れだけで呼ぶには少し無理がある気がします。」

「ラインは優秀やなあ。」

褒められたんだけど、私は理由を話して欲しかった。

分かっているのか、はやてちゃんは説明を始めてくれた。

「あの子等を管理局に従わせるなんてのは不可能やし、そこまで露骨な事や無いけど…あの子達は強い、それも飛びつきりに。そして、速人君の方針を受け入れておる以上、局だけの問題ならともかく町に被害でも出そうになれば間違いなく動く。」

それは何となく私も分かった。

きつと純粹な意味で誰かを助けたいと思うほどに優しくは無いけど、速人さんの事は認めている。

「そんな時にフォワードの皆とばったり会って、押し問答繰り返されたらたまらんからな。速人君の事知れたならついでに入るし、知らんまま敵対する位なら教えとこ思つて。」

「成程…」

ちよつと不思議に思つた程度の私と違つて、はやてちゃんは色々と考えていたみたい。

「それに…逆もある。彼女達が狙われる可能性も否定できん以上、それがもし管理局の決定で無いのなら知り合いが多いほうが助けやすい。二度も…死なせはせん。」

「はやてちゃん…」

「これだけ暗躍しとると胡散臭い事極まりないけどな。いつかバチ当たるかもしれんな。」

はやてちゃんはそう言つて笑つ。

関係ないくらいの中から重ねられた闇の書の罪を全部背負つと決めているはやてちゃんは、時々こんな悲しそうな笑みを漏らす。

だから、私も頑張らないといけない。

祝福の風の名を受け継いだリインフォースとして、力と繋がりを失つてしまつたお姉ちゃんの変わりに。

何より…八神家の一人として、はやてちゃんの幸せを願っている身として…

S
I
D
E

O
U
T

幕間・出張！エメラルドスイーツ！（後書き）

少々横道に逸れたので幕間扱いに。2話投稿するんでご容赦ください（汗）

シャーリーさんの完全スルーはまずいかなと言つ事でこんな形に。後これで接点も出来るので、宵の騎士も放置はせずに済むので。

幕間・交わらざる黒き槍

幕間・交わらざる黒き槍

S i d e 〱 エリオ 〱 モンデュアル

それは…午前の訓練終わった時の事だった。

昼食に向かおうとした僕達四人は、唐突に襲撃を受け…地面に転がっていた。

「フレア空尉！何を…」

幸い…と言うか、加減してくれたのか、多少痛かったけど怪我らしい怪我はなかったからすぐに起き上がる。
デバイスを起動させた状態で立っていて、なのはさんの声に怒りが混じっているのがこの襲撃の犯人がフレア空尉であることを示していた。

「終了時そのものには危険が伴う。」

空尉はなのはさんと向かい合い、僕達には見向きもしない。

「お前が墜ちた時も任務の帰りだったな。教育中の身で私を倒せとは言わないが、反応すら出来ない程度だとお前の二の舞になりかねない。いいのかそれで？」

「っ…」

「警告はした。これ以上の横槍は入れない、後は好きにするといい。」

「

本当に、それだけだったと言わんばかりに去っていく空尉。

さすがに優しい人とは思えない。

けど僕は、何故か彼が悪い人だとは、どうしても思えなかった。

根拠はまだ無い。だから、少し気になった。

「っざけてるわね本当あいつ！頭おかしいわよ！！」

「ティ、ティアちよつとまずいって…」

まるでコップをお酒のように煽ってテーブルに力強く置くティアナさん。

「本気で人の事ゴミか何かと思ってんのよ、でなきやあんなふざけた事できないわよ。」

スバルさんに宥められ、声を抑えるティアナさん。
けど、やっぱり不機嫌なのはそのままだった。

「でも…空尉の言う事も間違っでは無いと思います。勝てないならともかく、反応すら出来なかったのは…」

「エリオ…アンタあいつの肩持つ訳？」

ティアナさんが珍しく本気で厳しい眼で僕の事を見ている。

『ティードゥランスターの無駄死にを誇るような勘違いをしているからそうなる。』

フレア空尉が言い捨てた、ティアナさんの誓いを踏みにじる一言。…間違っていないなんて、簡単に言うのは軽率だった。

「すみません。」

「…そんな顔しないで、悪いのはあいつでアンタに怒ってる訳じゃないんだから。」

謝ると、ティアナさんは顔を逸らした。

少しの間を置いて、両手で自分の頬を強く叩くティアナさん。

「あーもうやめやめ！こんな調子で訓練行ったらろくな事にならないのはつい最近知ったばかりなんだから、あんな奴の事忘れよう！」

「フレアの事か？」

折角痛そうな思いをして切り替えようとしたティアナさんの後ろから、速人さんが顔を覗かせた。

「速人さん、折角」

「でもすぐそこにいるぞ？」

スバルさんの抗議を断ち切るように速人さんが指差した先、死角になつて見えなかった所からフレア空尉が立ち上がった。

距離的に、間違いなく聞こえていた。

いろいろな意味で緊張が走る中、フレア空尉は僕達に視線すら向ける事無く去っていった。

し…心臓が悪い…さすがにビックリした…

「悪い、脅かしたみたいだな。アイツは隊長達でもあんな感じだから特別お前達が目に入ってない訳じゃない、気にすんな。」

速人さんはそう言って慰めてくるが、正直それもどうかと思う。フェイトさんが眼中に無いような扱いされてたらさすがに僕も怒るかもしれない。

「そうだ、気分転換にいい話を。頼んでおいたいいもんが届いたからさ、午後一で見られると思うぞ。」

「いいもの…ですか？」

「ああ、特にティアナは見とく価値はあると思う。」

楽しそうな速人さん。それなりの自身があるものなんだろう。

中身の話は聞いても伏せられたまま午後を迎えた。

「先に言っておくけど、これから見せる物は速人さんの情報と同じで伏せておいてね。」

なのはさんからの念押しに僕達がそろって返事を返した後、その映像が映し出された。

金色の髪を束ねたスーツの女性が、二丁の銃を腰に立っていた。女性の前には六つの缶が適当な高さで位置に置かれている。

ティアナさんにとってはひょっとすると修得できる物かもしれないから見ておく価値があると言ったんだろう、どんな凄い技術が見られるんだろうか？

そんな事を考えていた僕は、何でこんな物を見せられるのか分かっていなかった。

一発の銃声の後、全ての缶が吹き飛んでいた。

質量兵器の資料で聞いた事のある銃声と違い、まるで『何回もの爆発が同時に』起きたような音。

「見事な物だな…」

シグナム副隊長が感嘆の声を漏らす中、僕は何が起きたのかすら理解できていなかった。

「単純に抜いて狙って撃つだけの、銃使いなら誰でもやる基本も基本。今のは左右の銃で三発ずつ撃つて的に当てただけだ。」

「嘘…銃声一発しかしなかったのに…」

速人さんの解説を聞いたティアナさんが呆然と漏らす。

多分、同じ銃使いだからそれがどんな常識はずれな事が実感できるんだろう。

「勿論真似をしろ、何て言うつもりは無いよ。けど、強くなりたい子は皆凄い技術とか変わった技に目が行きやすいから、いい機会だし見てもらおうと思って。」

なのはさんにそう言われ、さっき考えた事が恥ずかしくなった。

基本の大切さを教える…その為にわざわざこんな映像資料を用意してくれたんだろう。

「砲撃魔導師のエースオブエースとか呼ばれちゃってる私だけど、まだ上は見えるんだ。自信はあったほうがいいし、応用技術とかも身に着けるな何て言うつもりは無いけど…極めるってそう簡単じゃないことは覚えておいてね。」

「…はいつ…」

強く答える。

今ある技術をより確実な物に。そんな段階の僕達にとっては、まるで別世界の出来事。

「だけどいつか…」

「不可能だ。」

ティアナさんの呟きに、フレア空尉から静かな否定が飛んできた。ティアナさんは不機嫌を隠しきれずに空尉を睨む。

「…邪魔をしたな。」

空尉はなのはさんにそれだけ告げて去ってしまった。

「フレアの性格が悪い理由？」

「そ、そこまでは言っただけですけど…」

夕方の練習が終わったお風呂の中で、速人さんに気になった事を聞いてみた。

「本人と話してみれば？言いたい事も言っただけだと思っただろ。取り合
うかどうかはともかく、任務中とかじゃなければ対応するだろ。」

「そうです…よね…」

何となく、悪い人じゃないとは思っているんだけど…どうも取り合
ってもらえそうな気がしない。

だから聞きやすい速人さんに聞いてみたんだけど…ある種当然の反
応が返って来た。

「何を聞いたらいいかわからないって言うなら、一つだけいいもの
がある。」

「え？」

耳を近づけるよう言われて囁かれた言葉のトンでもない内容に、風
呂の中だって言うのに体が寒くなってくるような気がした。

結局、一つ教えてくれただけの速人さんに聞く事も出来ず、フレア
空尉を探す。

『言いたい事も言っていないと思うぞ。』

と、速人さんは言っていたが、言われるまでもなくそうするつもり
だった。

折角苦心して頑張ってきたティアナさんのわだかまりもなくなって
来ているのに、また全部壊されてしまうような事になったら絶対に
よくない。これは局員としても言わなきゃいけないと思うことだし、

平時に問いかけるだけなら悪い事じゃないだろう。

森の中、デバイスを振るっている空尉の姿を見つけた。

無茶な訓練はよく無いとも言われているし、もう勤務も済んでいる時間だって言うのにこんなことしているのはよくないはず…だけど、僕は止める事ができなかった。

身震いするほどの速さと正確さで振るわれた槍は、一振り毎に宙を舞う木の葉を的確に捕らえる。

眼で見えたわけじゃない。舞っていた木の葉が途中で二つになったからわかるだけだ。

少しして、動きを止めたフレア空尉は…

「何か用か？」

僕のほうも見ずにそう言った後、振り返る。

何で…分かったんだろう？

「あの…聞きたい事があって…」

「なんだ？」

静かに喋っているだけだ、恐がるな。スバルさんだつてティアナさんを見かねて立ち上がった。

僕だって、これ以上皆がぎすぎすするのを見たい訳じゃない、聞くことは聞かないと。

「何で…あんな挑発じみた、皆さんを傷つけるような言い方で話すんですか？」

あくまで質問の体を崩さないように問いかける。
言った…言ってしまった。もう後戻りは出来ない。

恐さを噛み潰すように堪え、空尉の答えを待つ。

「誤解だ。」

「は？」

「別段気遣ってもいないが、挑発や虐めに興味は無い。」

本当に、いつもの口調で何でも無い様にそう言った。

「な、なら何で不可能だとかそんな酷い事を言うんですか！やって
も無いのに諦めろって言うんですか!？」

「アレは速人と同じ…命を賭け、唯一つを神経をすり減らして鍛錬
した者が辿り付く場所だ。先に彼女は高町空尉と和解したばかりだ
ろう。」

信じられないと憤る僕に返された言葉に、冷や水を浴びせられたよ
うな気分になされた。

何であんな事を言ったのかは分かったけど…

「初めからそう言ってくれれば」

「別段気遣ってもいない、それだけだ。」

つまり、本当にただ忠告していただけ。

警告こそするものの、隊長陣の皆ほど面倒見がいい訳でもなければ、

結果どうなるかにはさほど興味が無いんだ。

昼前に襲われたのも、本当にそのままただの警告だったんだろう。

酷いと思うのがただの誤解：だとするなら。

「ティーダさんは『役立たず』：…でしたか？」

速人さんから聞いてみると言われた、この言葉にもきつと意味がある筈。

フレア空尉は軽く息を吐いた後に告げる。

「執務官志望のエリートで若くしてAAランクの魔導師を役立たずだと思ふ者などただの馬鹿だ。そんな『他の事件に当たれば今後どれだけの役に立ったかも分からない』有望戦力が、命掛けで成すべきこと一つ成せず失われたんだ、ただでさえ人手不足の管理局でこれほどの『無駄』はあるまい。」

ティーダさんは結構高評価で認められているらしかった。

思った通り、悪い人ではなかった。だけど…何と言うかこの人『酷い』。

真面目で実力もあり護る事に真摯な割に扱いに困る人、と速人さんは言っていたが、まさにその通りだった。

「教官でもない以上波風を立てないようにはしよう。保護者も心配しているようだし早く戻って休むといい。」

「フ、フレア！言わなくても…」

保護者と言われて振り返ると、木の陰からフェイトさんが姿を見せ

た。
思わず振り返ったけど、フェイトさんを気遣うなら気づいてても言わないだろう。

予想通り…悪い、悪意のある人じゃなかったのだけど……

誤解を解くか放っておくか、僕は迷いながら自分の部屋へ戻った。

S I D E O U T

「お……」

深夜、森の中で、俺の刀とフレアの槍の先端が、共に互いの首に添えられていた。

「初引き分け…か、やるじゃんフレア。」

「白々しい事を言う。」

素直に褒めたつもりだったのだが、フレアは納得がいていないようだ。

神速使って無いのが不満だとも言うのかコイツは…槍が剣より有利とは言え初なんだから喜ばばいいのに。

「それよりエリオは貴様の差し金だろう?」

「え？ああ、質問に行つた事？」
「あまり面倒ごとを吹き込むな。」

どうやら俺が風呂で事前に教えた質問を試してみたらしい。そして、俺が吹き込んだと悟つたと…

「バーカ、問い詰めに行つたのはこれ以上仲間内の空気を悪くしたくないってエリオ自身が思ったからだよ。俺は理解不能なお前に聞くことを参考までに教えただけだ。」

「理解も何も事実を告げていたつもりなのだがな。」

「笑顔だつて怒ってるやついるんだぜ？そんな仏頂面してたら誰だつて誤解するつての。」

オマケに誤解とかその辺どうでもいいしコイツ。

初めて会つた時もストーカーかと思うほどずっとついてまわられて、実は剣技について知りたかつただけなんて分かりづらい奴だ、まとも理解するのは困難だ。

「大体お前前線の子供組はどうでもいいんじゃないのか？」

「ああ、あの程度では別に何処で殺されてもそれほど支障は出まい。」

サラリと言い切つた。

情も何もあつたもんじゃないな。戦闘行動を行う者がどうなつても自己責任だと割り切ってるんだらう。なのはの見舞いにも来なかつたくらいだし。

「だつたらそもそも手も口も出さずにほっとけばいいのに。」

「だが、この部隊の隊長陣で誰が死んでも能力を削ぐ事無く普通に戦えるのはシグナムくらいだらう。それに、彼等が危機にでも陥れ

ば、絶対に見捨てない馬鹿もいるしな。」

…驚いた。

「この隊長陣くらいまで実力ある前提ではあるが、そんな所までコイツが氣遣うとは。」

「全ては咎人を速やかに止め、無辜の民を護り抜く為だ。止める方はともかく、護るほうはお前も本意だろう？頼らせてもらうぞ。」

「任せとけ、何と言っても俺は」

「ヒーローだからな。」

いつも通り、自信満々に告げようとした所で、笑みを浮かべたフレアに遮られた。

全く、こんなフレアを問い詰めに来たエリオと言い、変わった奴が多い所だ。

ま、楽しいからいいけど。

Side 八神はやて

「何処の世界に昼休みを宣言されて汗拭って帰つとる子等背後から叩き伏せる奴がおるんやこのアホ!!!」

「犯罪者なら攻撃行動など状況関係なくやると思われます。」

「局内で360度警戒しながらデスクワークやっとなる人間が何処に

おる！同じような事やる！！」

時間が出来た私はとんでもない事をしてくれたフレア空尉を呼び出した。

本来ならもつと色々いいたいし、対処もしたいのだが…

「あーこんな事なら横槍入れるなんて許可するんや無かった…」

後悔しても後の祭りではあるのだが、私自身が許可したせいだからこれ以上言うに言えなかった。

元々フレア空尉に、『前線の生存率を上げられる可能性があるのですが、一応ただの白い墮天使対策における協力者ですので訓練参加許可をいただけますか？』と聞かれ、生存率を上げると言われて飛びついた結果こんな事になってしまったわけだ。

「はあ…こんなん許可してなのはちゃんも怒つとるやろつなあ…」

「それは大丈夫でしょう、許可が出ている事は話していませんから。」

「…は？」

あっさり言っつてのけたフレア空尉。その内容に、私は耳を疑った。

話して無い？

じゃあ何？他所の人がいきなり許可も何も無く襲い掛かった事になつとるんか？

「隊内で長に不信感を抱かせる位ならば外部で問題が片付けばこの場を去る人間のせいの方がよいでしょう。幸い私は初めから印象が悪いので独断と判断されているかと。リライヴが片付けばそれで私の出向は終わりですし。」

なんやろ？怒りとか通り越したのか頭が重くなってきた。

悪気は全く無いんやこの人。

腹黒狸の巣窟で仕事する事もある私には何となく分かる。濁った眼も、嫌な笑みもない。

分かるんやけど…あーもー！！

「まだ何か？」

「いや…もうええ、頼むから大人しくしとってくれ。」

「分かりました。」

本当に一瞬の躊躇いもなく返答すると、敬礼一つ返して去っていった。

フレア・ライト一等空尉、最強クラスの近接戦闘能力をもつ、真面目で民間人にとても優しい…なのに局員で一番扱い辛い人物。

リンディさんとクロノ君…P・T事件の時も闇の書事件の時もこんなん任されとったんか…

頼むから制御方法教えてくれ…と、願わずにはいらなかった。

S I D E
O U T

幕間・交わらざる黒き槍（後書き）

フレアのフォロー回：なのに余計酷い気が（汗）

エリオに立ち回ってもらったのは槍使いと言っ接点と、悪意が無い等の感覚的なものは大人より気付きやすい（んじゃ無いかな？）という理由からです。

ティアナを投げた時は『任務妨害』について怒っていましたが、それ以外のときは別段悪意では動いていません。

悪い人：ではないけど、性質の悪い人。

上記の理由から誤解を解いても意味が薄い為、エリオにはわざわざ嫌な人の話をするのかと悩んでもらってます。

第十一話・足りない手札

第十一話・足りない手札

『兵器運用の強化は、進化する世界の平和を護る為である！』

朝食を貪りつつ、流れてくる演説に耳を傾ける。

レジアスのおっさんはりきってんなあ…

『首都防衛の手は未だ足りん。地上戦力においても我々の要請が通りさえすれば地上の犯罪も発生率で20%、検挙率においては35%以上の増加を、初年度から見込む事が出来る！』

「このおっさんはまだこんな事言ってるのな。」

「レジアス中將は、古くから武闘派だからな。」

傍の席から聞こえてきた辛辣な反応に眼を向けると、冷めた表情でモニターを見つめる知り合い達がいた。

確かにどっから出た数字だよとか、そんな都合よく行くかとかあるんだらうけど…

「気持ちは分かるんだけどなあ…」

「意外だな、奴は罪人を潰す力を求めているんだぞ？」

合席しているフレアが、俺の呟きに答える。

コイツ周辺だけ空いてるから座っただけなんだが、まさか答えが返ってくるとは思ってもいかなかった。

「大規模事件は海で起こるからって戦力骨抜きにされてんだろ？全事件の被害総数はその方が減るだろうけど、逆に言うとな少ない被害をずっと自分の担当する場所で見せられてた訳だろうしさ。」

要は、毎日何も出来ない状態で目の前で一人殺されるか、他所で二人殺されるかどちらかを選べ。と言った状況だ。

関係無い人からすれば二人より一人のほうが被害少なくていいだろうが、そんな理由で毎日死者を見せられる方はたまったものじゃない。まして根がいい人なら尚更だ。

「確か唯一のオーバーSも失ってたよな？」

「ああ。だが、全事件の被害総数が減るのであれば問題ない選択肢だ。それに、予算や装備でどうにかできると言うのであればリライヴのような者など生まれはしない。」

言い切ったフレアにとっては、もしさっきの二択で自分が何も出来ない者になるとしてもそれで被害が減れば構わず、中将の話は単なる暴走なんだろう。

コイツを中将と会わせない様にしておこう、多分中将ストレスで死ぬ。

とはいえフレアの話通り、海…次元世界担当から人材や予算を引っ張ってきて地上を護れば、解決しないとシャレにもならない大事件に回せる戦力が減り、両立させようとすれば徴収が厳しくなり、管理局を認めていないが故に一人で戦っているリライヴのような反発が増える。

「あちらを立てればこちらが立たず…か。」

「何もかも立てたいお前としては納得がいかないか？」

「よくお分かりで。」

でなければヒーローなんて言える筈も無いとこまで落ち込んでる身だ、ある種当然だと分かってはいるが、だからと言って納得する気は無い。

「そついやスバルたちは？」

「教官の気まぐれで一日休暇だそつだ。」

「…お前よく知ってたな。」

「そつ思つなら聞くな。」

見当たらないので聞いてみたが、よく考えたらフレアに聞くのって思いつきり人選ミスなんだよな。
なのは達の集まっているテーブルに顔を出す。

「フォワードメンバー何処行つたんだ？」

「一日休みだから午前中は一緒にエメラルドスイツに行くつて言つてたよ。」

「へー、そつなん…は？」

休みの行動だ、もう少し平和で何事も無い返答が帰ってくるのかと思つたら、なんか信じられない答えが返つて来た。

「好奇心のある年代だ、根掘り葉掘り聞かれて困るような話を知られてる運の悪さを呪うんだな。」

「シグナム副隊長…」

意地悪い笑みと共に告げたシグナムをなのはが恨めしげに見る中、俺は一人額を抑えていた。変なことになってなきやいいけど…

Side↳スバル⇨ナカジマ

「アンタ妙に機嫌いいわねえ…休みもらえて嬉しいのは分かるけど。」

「だってなのはさんの親戚のお店にいけるんだよ？それにスイーツ美味しかったし。」

町の思いつきり端の方に、そのお店はあった。立地条件が悪いつて言ってたけど、これは確かに通りすがりで来る場所じゃないなあ…

「ディアーチエさんとか…店員なんでしょうか？」

「それは無いでしょ、あの態度で勤まるわけ無いし。」

不安げなエリオにさっぱりとしたティアのコメント。

これだけ聞くと失礼ではあるんだけど…王様名乗ってたあれじゃさすがに無理があるつて言うのはあたしも思う。

とりあえず入ろうと店のドアを開く。

「いらっしゃいませ…おや？君達は…」

「えへへ…お休みになったからきちやいました。」
「ゆっくりしていつてくれ、見たとおりなんだ。」

店内に少しある座席には、誰も座っていなかった。

「場所が場所で、買いに来てくれても座ってノンビリしていく人はあまりいないんだ。」

苦笑いしながらそう言ったフレイアさんに薦められるまま、あたし達はテーブルを一つ占領した。

「珍しいお客さんみたいだね。」
「すずか。」

メニューを眺めていると、店の奥から紫色の長い髪をした女性が出てきた。

「月村すずかです。なのはちゃん達とは幼馴染なんだ。昔話位ならできるから聞いてね。」
「いいんですか!？」

願っても無いことだったけど、言われるとなんだか無断で探ってるみたいでなんだかまずい気もする。

気がかりを察してくれたのか、すずかさんは小さく笑う。

「なのはちゃんから連絡があってね。『シユテルちゃんに変なこと言われる位なら』って。」
「あ、あはは…成程…」

私の質問に返されたとんでもない答えを思い出して背中が寒くなる。

手回しされていたのには驚いたけど、かえって安心して話が聞けそうでよかった。

キャラが店内を見回した後、質問を切り出す。

「ここって普段シユテルさん達が働いてるんですか？」

「ん、うん。後は普段はお義兄さんが飲み物を入れたりしてるんだけど…今日はちょっと外してるんだ。」

楽しそうに告げるすずかさん。

「親子水入らずでお出かけなんだ。仲いいからお姉ちゃんとお義兄さん。」

「へえ、いいですねそういうの。」

Side 月村恭也

「こうやって三人で出かけるのもいいわね、恭也。」

「ああ…」

普通はこういう時、両親で子供を挟んで歩く物なのだろうが…何故か俺が忍と雫に挟まれる形で手を繋いで歩いていた。

『兄さんの女殺しって雫にも利くんだな…』

以前こんなふざけた事を言っていた速人はとりあえず叩き伏せておいたが…この有様では否定できない。

「雫はどう？」

「私はお父様と修行してる方がいいんだけど…でも、お母さんからお父様とってはかりじゃ悪いから。」

「恭也、雫って本当に優しいわね。」

俺と繋いだ手をそのままに前に回りこむように移動した忍は、雫の頭を嬉しそうに撫でる。

異世界とは言え、日常は変わり無…

「さてと、次は…」

「待て、静かに。」

それだけで、忍も雫も何もピタリと動きを止めた。

何かを擦る様な…こんな場所でする筈の無い音がした。付近にコンテナを運んでいるような者も見当たらない。しかも地下…か？

「気のせいかも知れんが念のために調べてくる。5分経って連絡一つなければ速人に伝えてくれ。」

静かに頷く忍。

「何かあつたら私は…基本逃げる、最悪でお母さんを逃がす事だけに専念する…でいい？」

「ああ…絶対に無理はするな。」

「はい。」

雫は真剣に問いかけ、返事を返してきた。

まだ子供。普通の大人よりは強いが、それだけだ。

だが、見栄や手柄には走らないようにとは散々に言ってきたし、雫自身そんな方針を誇ってくれているようだから、無茶苦茶な事はしないだろう。

俺は近くのマンホールを探して、人目を避けて飛び込んだ。

それだけで、すぐに分かった。

こんなところに、絶対にいる筈の無い少女が、足元もおぼつかないまま鎖に繋がれた箱を引きずって歩いていた。

しかもこの箱は…速人から聞いている、今扱っている危険物…

「速人には俺から連絡する。とりあえずもつすこし待っていてくれ。」

┌

先に忍たちに連絡した後、俺はすぐに速人に連絡を繋いだ。

S I D E O U T

兄さんから入った連絡は、ちょっと…と言うか大分まずい物だった。

「あー…話聞かれると思うけどどうする？」

『出来るなら知り合い相手にしてもらいたい所だな、拘束されたらたまらん。』

「了解。」

軽い感じで終わらせたからか、傍にいたなのはが笑顔でこっちを見ている。

「誰からだつたの？」

「兄さんから。レリックのケースを繋がれた女の子を見つけたから対応してくれって。」

「ふー…ん!？」

普通に言つてやると、面白いように表情を変えるなのは。

「あえて映像通信にしてないんでな、映せと言われても無理だ。場所はサイドアベニューF23の路地裏だそうだ。」

「軽い!はやてちゃん、聞いた？」

『ああ、なのはちゃんはフォワードの皆に指示を。安全確実に保護するよ、レリックも、その女の子もや!』

なのはに怒鳴られ、はやてが動く、途端に慌しくなる。

…鎖で繋がれた女の子…か。

自由なはずなのに未だに首輪が外せていない娘を思い出した。レリックがあつたならあいつも来るはずだ…ネタバレした状態でど

れだけ通じるか分かった物じゃないが、やるしかない。

「にしても…見つけたのはたまたまその場にいた民間人か…」

「それは…」

何気なく呟いた一言を聞き逃さなかったフェイトの表情に影が差す。俺は慌てて手を振った。

「責めるつもりは無いけど、こうなるとますます朝の話が…な。ま、いいや。今は動こう。」

「そうだね。」

こんなタイミングで話し込んでいると、どっかの誰かに投げ捨てられかねない。

フェイトもそれ以上何も聞かず、頷いてくれた。

人手、資金…力不足。

それも…ただ人がいたただけならともかく、町の下にレリックの反応があっても気付けないほどに。

勿論、監視員が街中うろついてる様な物騒な町がいいかというところという訳でもないが。

本当のおっさん苦労してんだな…

六課的にはあまりいい立場の相手じゃないんだが、同情せざるを得なかった。

S i d e 〱 キ ャ ロ 〱 ル 〱 ル シ エ

位置的には町にいる分隊長達よりも近い私達も、女の子の保護されている場所に向かうことになった。けど、ヘリで来る隊長達と違って手早い移動手段が無かった。

「お仕事で急ぎ？送るわよ。どうせこうなったら恭也さん達も出歩いてられないし。迎えついでに。」

と、アリシアさんが車のキーを持って出てきてくれた。徒歩よりは早いけど、民間人を勝手に巻き込むのは…

「どの道貴女達が乗らなくても行くわよ？恭也さん達迎えに行かないといけないし。」

「…分かりました、お願いします。」

結局、最優先することは別にあつたのでお願いする事にした。全員が乗り込むと、シートベルトをしっかりとかける。

「急いだ方がいいでしょ。非常車両用のランプとか持ってる？」

「え？あ、はい。クロスミラージユ。」
『プットアウト。』

アリシアさんの言う通り、いつがジェットが出だすかも分からない現状で一般の人を長い間放っておくわけにも行かない以上急いだ方がいい。

これなら少なくとも長い時間待たされたりはしなくなる。

「さて」と。紙コップから水を零さなくなるまでやった修行の成果を見せる時ね。待っててねフェイト。今すぐお姉ちゃんが大切なお仲間届けるから。」

動き出す前の車内で呟かれたアリシアさんの言葉の意味が分かったのは、車が走り出してすぐだった。

もう……ガジェットなんて恐くない、車が嫌だ。

S I D E O U T

シヤマル先生と、局を離れていなかった前線メンバーを乗せたヘリは、現場目指して飛んでいく。

「しかし何者何すかねえ？子供を保護するのはともかく、子供が

持つてるのがレリックだつて分かる一般人つて。」

ヴァイスが呑気に呟いた言葉に、誰一人答えを返せなかった。何しろ、ここにいるメンバーはヴァイス以外全員その正体を知っているのだから。

『ちょっと、恭也お兄ちゃんに無茶させないでよ。』

『馬鹿。目立つ為に戦うとかは無いけど、やばい事になってたら手を貸すだろ。今回だつて女の子の救出な訳だし。』

『でも心配だよ…いくら恭也さんでも魔法が使えないんじゃない？』

『直接斬るしか無いもんなあ…戦闘になってたら大変だな、相手が。』

『恭也お兄ちゃんの心配は？』

『いると思うか？地上ならリライブでも倒すぞ。』

『それはさすがに嘘…だよな？』

ヴァイスの問いかけをスルーしつつ念話で密談する俺達知り合い組。

「そろそろ着きますから無視しないでくださいよ！」

「つとごめん。」

少し不満げに声をかけられ、ようやくなのはが答えを返した。

実際には、無視と言うか答えるに答えられない状況だったただけなのだが…

悪いねヴァイス、俺と身内が色々面倒で。

現地には兄さんと…何故かこれ以上無い程に覇気を失ったフォワードの四人がいた。

「皆どうしたの？」

「す、すみません。」

なのはに声をかけられてようやく姿勢を正す四人。休暇を貰って潰された影響…と言う事もないだろうし。

一体何が…

「俺はもういいですか？」

「あ、はい。すぐに避難してください。」

他人行儀に言葉を交わす兄さんとなのは。

今は通信も繋がってるし下手な事は言えないしな、結局話したのがフォワードだけじゃ面倒だ。

考えていると、兄さんが向かう先に車が見えた。

…ああ、そう言う事が、アレに乗ってきたのか。

大方非常用のランプでも借りて好き放題走ってきたんだろうな、急がなきゃならないって理由で全力で。

「皆は、こつちで現場調査何だけど…」

「私も地下捜査に着く事になった。」

珍しく言いよんだなのはに続いて、一つも表情を変えないままフ

レアがそう言った。

不信感を隠せないのか思わずレアを見る四人。
あんな車に乗せられた次はレアみたいなやりにくい奴の同伴、大
変だな皆。

「危険があれば手を貸せる程度の位置にはいるつもりだが基本は別
行動だ、気にするな。」

「なあ、やっぱり俺が下にいたほうが」

「レリックの封印処理が出来るのか？」

言い切る前に、バツサリと切られた。

俺としては空戦よりは地下戦のほうが圧倒的に戦いやすいのだが、
どうやらそういう訳にも行かないらしい。

「反応は廃棄都市区画からだ、対リライブで必要があれば天井に穴
を開けて出てくる。それもお前には出来まい。」

ぐぐの音も出ない。

一つの反論もできない中、レアはさっさと開いたマンホールに飛
び込んだ。

「…いいのはやてちゃん？あれ。」

『ええんや、頼むからほっといてやって。』

「う、うん。」

あまりよくない対応に対して疑念を抱いたのはがはやてに通信で
問いかけるが、泣き声にも似た悲痛な声を返す幼馴染にこれ以上の
催促はさすがのなのも出来なかったようだ。

レアからすれば通信でも連絡は取れるし、呑気に会話する位なら

迅速な行動を…なんだろうが、本当に扱い辛い奴だ。

「隊長二人とヴィータ副隊長、リイン曹長で海上のガジェットを撃破。速人君は念のためヘリに乗っ取って、リライヴが出てきたら対応。」

「了解。」

ヴィータも教官としてどっかに呼ばれてたはずだが、どうやら戻ってこれるらしい。

これだけ戦力が揃うなら余程大事でも無い限りはどうにかなるだろう。

「じゃあ速人君…に任せると危ないから、なのはちゃん、この娘をヘリまで抱いてって貰える？」

「はい。」

「前フリ要らないでしょ！ってか信用してよ！！！」

俺の訴えを流して、シャル先生は機材を持ち、なのはは女の子を抱き上げる。

いくらなんでもこんな小さい子に…って言うかキャロでも何もしな
いって言うの！

「少なくともスバルやティアナくらいじゃないと？」

「そうそう…ってあれ？」

心を読んだかのようなフェイトの呟きに頷くと、フェイトまでもが
無言で去っていく。

「いや、別に二人ならなにかするって訳じゃ…少しは聞けよ！無視
して歩くな！！！」

へりまででは一緒のはずなのに、何か俺だけ輪から外された。
今回俺何もしてないよね？何でこうなる。

S i d e ー リライヴ

レリック絡みとなれば出ない訳にも行かない。
けど…

「私の作戦はご不満ですかあ？」

「貴女が不満。」

「ひつどあい、そんなつれない事言わないで下さいな。」

このヘンタイメガネが考えた作戦にそって動くって言うのがどうにも気に食わない。

「そんなに気にしなくても、リライヴなら一人で全部やれちゃうんじゃないの？魔法使ったら無敵じゃん。」

「愚か者。」

呑気に告げたセインの言葉を一蹴するトーレ。

「無敵など無い。人の身の客人である彼女を使い倒すなどと考えて

いる暇があれば自分の腕を磨け。」
「ごめんトーレ姉。」

謝って地面にもぐっていくセイソ。能力の特性を考えて地下の警戒についてくれるらしい。レリックがあると言う事で既にルーテシアが向かってしまっている以上、見ててくれるならありがたい。

「申し訳ありません、騒がせました。」

「いいけど…本当随分律儀だよ、自分で言うのもなんだけど信用されて無いでしょ？」

「…今は、客人で協力者ですから。」

さすがに信用されているという訳でもないが、その辺は分かった上で立場を見て対応してくれているらしい。律儀なトーレを指しつつクアットロを横目で見る。

「見習ったら？貴女より随分参謀っぽい性格だよ？」

「勿論、姉さま達は尊敬してますわよ。」

殴りたくなる笑顔で返してくるクアットロ。

尊敬という言葉がこれほど似合わない奴も珍しい。スカリエッティが言った方がまだ…いや、同類か。

「けど大丈夫ですか？いくら簡単に倒してるって言っても向こうも一回も全力は出して無いんでしょう？不安があるんですけどしたらお嬢様についてもらってもいいんですけど。」

クアットロにしては珍しく人の心配…という訳では無いだろう。

私の相手は恐らく隊長陣になると予測されている今、それを速人が

出る前に片付けられるのか…作戦上の心配だ。

「簡単に倒せる…かは分からないけど、少なくとも絶対負けないし、問題ないよ。」

「言い切りますね、それほど自身があるんですか？」

「片翼の鳥に負けるほど、墮天使は弱くない…って事。」

不思議な顔をする一同。

けど、これは戦闘機人の皆の方が分かっているはずだ。

機械としての能力と生命体の感覚の融合を目的としているのだから。

能力、道具は魔導師の場合魔法で扱っている、道具そのものを扱う能力にも長けている。

けど…速人のような戦闘能力…戦う為に必要な感覚が魔導師にはまるで足りていない。

まさに『片方欠けている』んだ。

並大抵の相手なら、創意工夫でどうにかできるのかもしれないけど…生憎、私はそんな鳥に負けるつもりは無い。

速人は…逆が欠けている。

いくら当てられても効かなかつたら、先が読めても追いつけなければ意味が無い。

この間のデタラメな速さには驚いたけど、それでも防御魔法を駆使

すれば防げてしまう。

過信は禁物だけど、それでも負ける要素が見つからなかった。

S I D E
O U T

第十一話・足りない手札（後書き）

原作でも『たまたま休暇で通りかかったエリオが音で気がついて』保護してましたが、レリックってガジェットですら反応を感知して何処からともなく現れることが出来るような代物のはずなんですよ。

ね。
エリオいなかったらどうする気だったんだ（苦笑）

その辺を濃くする為になんちゃって一般人の鬼様に出張ってもらいました。出番も出来るし（笑）

第十二話・動き始めた敵の影（前編）

第十二話・動き始めた敵の影（前編）

S i d e ｝ ティアナ ｝ ランスタール

正直認めたくないんだけど、どうしてあんな奴が使われているのかよく分かった。

目の前の残骸で。

レリックに向かっていているはずのフレア空尉が通ったらしい場所に、いくつものガジェットの残骸が転がっていた。しかも殆ど全てが一撃で破壊されているようで、周囲もあまり傷ついていないとなるとさほど攻撃もさせずに片付けた事になる。未だに背中も見えず、この惨状を作り出すだけの戦闘音すら聞く事すらなかったって…どんなデタラメよあいつ…

「…下手するとギンガさんと合流するまでに全部終わっちゃっつかもね。皆！周辺警戒は緩めないように迅速に行くわよ！！」
「了解！！」

無力を嘆くのは後だ。

焦らずに今できる事を素早く片付ける。フォワードの現場リーダーとして。

と、先へ進もうとすると壁の一部が爆発する。

咄嗟に警戒態勢をとるあたし達の前に現れたのは…

「あら、皆速いわね。」

「ギンガさん！？」

現れたのはギンガさんだった。

ギンガ「ナカジマさん。歳と階級が二つ上のスバルの姉でシューティングアーツの師でもあるらしい。」

「私のほうはいくらかガジェットが片付いていたから結構素通りできたけど、皆は大変だったんじゃない？」

「え？」

ギンガさんの問いかけに、あたし達のほうが首を傾げる事になる。

地下担当はあたし達とギンガさんとフレア空尉の筈。

と言う事は…あの人はレリックからそれた方向にいる事になる。

一体何をやってるのかあの人は！人には散々任務優先みたいな事言っ
つておいて…

「…ロングアーチが把握してるはずです、あたし達はそのままリックに向かいますよ。」
「了解。」

少し見直しかけてたつて言うのに全く…

と、そこまで考えて、自分が『期待を裏切られた』と思っている事に気が付いた。

…馬鹿馬鹿しい、あたしは一体何の根拠があつてあの無茶苦茶な人に期待していたんだ。
無かつた事と忘れる事にして、改めてリックに向かって進む事にした。

S i d e 〽 フレア = ライト

ただの予感ならば、新人にリックを任せることなどせずに直接自分で向かっていた。
だが、それが予想であるならば、少なくとも放置は出来なかつた。

戦闘者がいる可能性。

無論、魔導師が闊歩するこの世界で速人のような技巧を磨いている人間など皆無に近い。

だからこそ、ただの予感であればそんなもの信じる訳がなかったのだが…

事前にシャルマル医師から聞いたシュテルの倒され方がどうにも引っかかっていた。

視覚操作にすら気付いて反応した彼女が背後から襲われ、翳した手を『まるで人体構造でも理解しているかのように』簡単に折られていたのだ。

当のシュテルとシャルマル医師によって、無闇に心配かけまいと速人には伝えられていないようだが、もし当たりならば、地に足をつけた状態で勝てる魔導師などほぼいない。

そう…丁度こんな上下左右に壁があるような狭い場所で遭遇すれば、ひとたまりも無いだろう。

だからこそ魔力がなければ、気付かれずに生身で攻めるならばどうするかを考えて、通り過ぎた場所…既に敵を倒してきた道から出てきたりすれば、予想外に当たるのではないだろうか？

そう判断し、レリックに直接向かわず、少し逸れた道で回りこめそうな場所を探し…

「っ！」

曲がり角から飛び出してきた影の攻撃を捌いて壁を背にする。

次の瞬間、顔面に向かって短剣が投げ放たれた。

咄嗟に防御魔法を展開して防ぐ。が、影は既に次の動作に入っていた。

左足の尖端、余程防御を広く展開しなければはみ出す部位。そこに向かって正確無比な投擲が放たれた。

咄嗟に足を上げ、背にしている壁につけ…

「はっ！！」

壁を地面代わりに蹴り、そのままの勢いで槍を振りぬいた。

完全に間合いを見切ってバックステップを行う影。暗い中、ようやくゆっくりとその姿を認識する事ができた。

紫色の髪をした、神父を連想させるような服装の男だった。

「成程：変わった魔導師もいるんだね…」

先の足への投擲の際、顔面への投擲に対して防御魔法を展開する為に翳した手を使って、投擲の動作を隠すように投げてきた。

こんな事を当たり前にしてくる奴が、いくら威力と命中精度がいいからといっても重量武器を振り回すだけで高ランクに届くような管理世界の人間な訳が無い。

間違いなく…当たりだった。

恐らく今、ロングアーチは私が一般人と長話をしているように感じられているだろう。何しろ魔力もろくに無い人間と相対しているのだから。

「何者か…などは問わない。貴様だけは最悪殺してでも止める。」
「へえ…いいのかい？非殺傷で魔法を振り回す管理局の人間がそんな事を言つて。」

「私の命や地位一つで貴様が止められるのなら十分だ、貴様は危険すぎる。」

相対して相手の实力を感じる事など戦闘者であれば当たり前に出るなければならぬ事で、それが出来ているからこそ分かる…分かりたくも無い事がある。

眼前の男は…最悪速人よりも強い。

私の言葉を聞いた男は、命を取ると言っているのに笑つて嘲るでも罵るでもなく、心から楽しそうに。

「いいよ…やろう。まともに剣を使う相手すらいなくて困っていたんだ。」

瞬間、男の背に8本の剣が展開され、私目掛けて放たれた。グレイブを旋回させる事で、向かってきた7本全てを叩き斬る。

「…ふう、だからこんな玩具のような機能はいらないと言つんだ。それにしても金属を容易く切断するのはさすが魔導師だね。」

男は残った一本の剣を手にしていた。

男が告げた通り、私が勝てる可能性があるとしたら、問答無用の性能差だけだ。

通常の戦技だけでは絶対に向こうが格上。だが、防御しても切断さ

れるとなれば有利なのは私。

後は…賭けに近い。

「余興は終わりだ…始めよう。」

男は剣を私は槍を手に構え…

金属を打ち合わせる甲高い音が、地下に響き渡った。

Side 〉高町なのは

普通に空戦をして、少しガジェットが数を減らしてきた頃…ガジェットの数が、突然爆発的に増大した。ロングアーチのほうも騒ぎになって、状況把握の為に全体防御のオーダープロテクションを展開する。

次の瞬間、強大な魔力による砲撃が放たれた。

「状況変化に対応している間に殲滅…許可が出ないと全力も出せない馬鹿なんてこれで簡単に済む。」

そんな声が聞こえてきた方向には、予想した通りの人がいた。

「…とか言ってたけど、さすがにそこまで簡単にはいかないね。」
「分かってたなら作戦ミスだって教えてあげたらよかつたんじゃない？リライヴ。」

魔力の残滓が晴れていく中、私とフェイトちゃんは限定解除した状態でそこにいた。

彼女は私がプロテクションに切り替えて凌いだのが当たり前であるように一つの動揺もしていなかった。

『リライヴと当たる事になったら迷わず限定解除していい。』

今回、はやてちゃんからはそう指示を受けていた。

保護しなきゃならない女の子含めて今回嫌な事態だと誰もが感じていた。

そんな中、お兄ちゃんもフレア空尉もつかない間に主力である私達が倒されたのでは最悪の展開になりかねない。

だからこそ、そんな指示を貰っていた訳だけど…

「あまり長い間私に気を逸らしていると、ガジェットが危ないよ？
どうするの？」

限定解除した所で、一瞬だって気を逸らせる相手じゃない。かと言つてこのまま彼女と向き合っていたらガジェットを素通りさせてしまつ。

だから…

「フェイトちゃん、ガジェットの相手をお願い。」

「なのは!？」

「…正気?一人で私の相手をする気?」

これしか手は無い。

少なくともお兄ちゃんが来るまでは私一人で凌ぎきる。

「大丈夫、任せて。」

「っ…分かった、無理だと思つたらすぐ来るからね!」

結局心配したまま、それでも信じてくれたのか離れるフェイトちゃん。

「相変わらず…馬鹿だね。」

眩くりライヴに対して、私はレイジングハートを向ける。

「アクセセルシューター…シュート!!」

最大数の32個を以つて、全方位から覆うようにシューターを放つ。リライヴは躊躇う事もなく、直進しながら旋回運動と共に振るつた魔力刃で自身に当たる軌道のシューターだけを切り払う。

あっという間に距離を詰められた私はレイジングハートを翳しプロテクションを展開する。

「無駄だよ!!」

リライヴの言葉通り、私を覆うように展開されていたプロテクションは彼女の集束刃にあっけなく切り裂かれ、そのまま私の身体に向かって…

「な…」

刃が触れるか否かの寸前で、私の左手が彼女の剣を掴んでいた。

魔力刃だけの部分ではなく、根元の短剣部分を掴んでいる為、仮に展開中の刃を消しても逃げられない。

簡単な話、リライヴの剣が高密度の魔力刃なら、私も小さく強い障壁を張れば防げる。

昔ヴィータちゃんの一撃を似たやり方で防いだ事もあったし、相変わらず運動は苦手だけれど、それでもシューターを狙った物に当てられるように、物の軌道に手を挟む位の事は出来るようになったんだ。だからこそティアナの刃も掴めた。

高密度のプロテクションを展開する為に魔力を集中させすぎている左手の指先から血が噴出す。

痛みはあった、けど無視した。

私の身内は誰も彼もそういう物を平気で使っているんだから！！

「いつまでも管理局を…『高町』なのは舐めるなっ！！！！」

完全にレイジングハートを手放した右手を向ける。その手には十分すぎるほど溜められた砲撃魔法。

「デイベインバスター・インパルス！！！！」

リライブの胸元に翳した掌から放たれた近接砲撃によって起きた爆発が、私と彼女を纏めて包み込んだ。

Side 八神はやて

二人まとめて爆発に飲まれた光景を眺めつつ思う。

さすがなのはちゃん、えげつないなあ…と。

さすがの使い方を間違えとる気もするが、あのリライブ相手に一矢報いたんはさすがとって問題ないやろ。

フェイトちゃんの限定解除でガジェットの手が足りている上、なのはちゃんが近場でリライブと交戦中である以上、私が限定解除して広域殲滅…という真似は出来ない。

「ヴィータはヘリの護衛、リインはフォワード陣と合流してケースの確保を。」

「了解！」

後は…さすがにあれだけでは終わらんやろっリライヴ相手に、なのはちゃんが一人で速人君の到着まで持ち堪えられるかやな…

にしても…高町を舐めるな…か。

二刀を手に、魔導師や異界兵器相手ですら遅れを取らず全てを守り抜いて見せた、あの速人君が先人と讃える剣士達。

獲物こそ魔法になつとるなのはちゃんやけど…魂はしっかり継がれるんやなあ…

そんな事を考えながら、姿を現した幼馴染の強い意志が込められた瞳に、これ以上ない程の頼もしさを感じていた。

Side 高町なのは

身体を捻って直撃を回避したのか、リライヴのバリアジャケットは右胸の前が大きく破けていた。

オマケに着弾前に左手を蹴り上げられたせいで手を離してしまった。と言うか、鈍痛が引かない。…骨が少しいかれたのかも。

自立飛行で近くに浮いていたレイジングハートを右手で掴み、左手が動く事を確かめてから両手で握って構える。

と、リライヴは左手で開いた胸元を隠しながら私を睨んでいた。

「…いくら戦闘中だからってさ、局員がセクハラはまずいんじゃない？」

「嫌なら投降して。」

「それ脅迫だよ。」

苦笑しながらデバイスを翳すリライヴ。

無色の魔力光は相変わらず見辛いけど…無数の魔力弾が生成されている。

「シューティングスター!!!」

「くっ…」

いきなり放たれる魔力弾の雨を、プロテクションで防ぐ。

魔力消費も大きい筈なのに一体何を…

考えている私の前で、彼女はバリアジャケットを再構成していた。

まさか…再構成の時間を稼ぐ為だけに？

少し信じられなかった。

恥ずかしいのは分かるけど、戦闘に油断なく、魔力に頼るだけでなく科学武装や体術まで使ってきた彼女が、そんな事だけの為に魔法の無駄撃ちをするなんて…

「…何で驚いてるの？私、猥褻罪だけは殺されてもごめんんだけど。まさか『犯罪者を捕まえられるなら脱いでもいい』とか言わないよね？」

「言わないよ!!!」

けど、そんな風に聞き返されれば納得する他無かった。確かに私だって、それで犯罪者が捕らえられそうだとしても嫌だ。

「ならいいや。長話しても速人が来るまでの時間稼ぎにしかならな
いから続き…行こうか。」

告げた次の瞬間、再びリライブが接近してきた。

放出にかけてはレイジングハートも私もそれなりに自信を持っているし、高出力にも耐えられるとは思う。

だけど、彼女やフレア空尉がやっているような、一定量の魔力を密度を上げることで超高性能をたたき出すやり方は、大分無理があるみたいだ。

現に一回使っただけで血を流している私の左手は、何回も繰り返せば使い物にならなくなりそうだった。

けど…まだ他にも手はある。

「そうそう何度も防げると！な…」

カムフラージュバインド。

プロテクションに『擬態した』四つのチェーンバインド用魔法陣に、直接攻撃を加えるほどに接近させて絡め捕る。

「こんな物…っ！」

「一瞬で十分だよ！」

一瞬動けなくなったりライブに向けて、迷いなくショートバスター

を放つ。

仕留める、なんて贅沢な事は考えて無い。

けど、お兄ちゃんが来るまでに使える手全部使って削り倒す。

つもりで放つただけど…

「何…」

向かっていった砲撃は、リライヴを避けるように『縦に裂けた』。

魔力光が無色の彼女が障壁を展開しても見づらくて形状が分からないのはいいんだけど、フィールド、バリア、プロテクションのどれにも該当しない特異な形状に少し驚く。

「砲撃魔法を屋根状の防御幕で流す防御壁。なのはの砲撃はいちいち受けてたらきりが無いからね。」

リライヴは告げながらシューターを放つ。

相変わらず一個の高性能シューターに、同種のシューターを放って相殺した。

ここまでは互角…に見えるかもしれない。

けど実際、追い込まれているのは私のほうだ。

彼女は特別新しい事はしていない。

防御は確かにもの珍しいものの、あれは単に効率よくダメージを受けずに消費魔力を抑える為に作っただけのもので、戦い方に変化がある訳じゃない。

そんな彼女相手に初見になる行動を連続して行っているのに、未だに互角のような戦いをしているんだ、いつまでも時間が稼げるはずが…

思考する間もあまり無いまま、また急接近してくるリライヴ。後何
回対処でき

「慣れすぎたみたいだね。」

背後から聞こえて来た声に、背筋が凍った。

彼女は高速移動魔法の扱いだってフェイトちゃんと同等なんだ！

今更思い出した所で遅かった。

魔力ダメージによる激痛と共に間違いなくここでダウンする事になる。

筈だったのに、一向に痛みが襲ってこなかった。

「…ワンパターンな登場はよくないんじゃない？ヒーローさん。」
「便利なんだよ。」

慣れ親しんだ声に目を向けると、丁度刀を納めているお兄ちゃんの姿があった。

…待たせすぎだよ馬鹿。

S
I
D
E

O
U
T

第十二話・動き始めた敵の影（前編）（後書き）

前編後編なので二話投降します。

なのはが似たやり方でヴィータの攻撃を防いだと言っていたのは、この作中でヴィータの攻撃を受けた後に受けた箇所ピンポイントに合わせて小さくした時のことなんです…さすがに覚えがある人はいないかな（汗）

カムフラージュバインド

近接攻防中に攻撃を防いだ魔法陣からチェーンバインドを放つなんて真似ができるならこれくらいはあってもいいかと言う事で。余計なことしてる分強度は低いです。

第十三話・動き始めた敵の影（後編）

第十三話・動き始めた敵の影（後編）

S i d e 〱 エリオ 〱 モンデュアル

途中いくらか出てきたガジェットは問題なく片付けられた。
レリックを見つけてキャロが駆け出し…

音が聞こえた。

断続的に何かを蹴るような音が迫ってくる。

「ストラーダ!!」

迫る音とキャロの間に割り込み一閃を振るう。

手ごたえはあった…けど…

「っ…」

「エリオ君!？」

僕のほうも何かに斬られていた。

奇襲に反応できてもこれじゃ未熟としか言えないな。

けどこれでいい、僕は一人じゃないんだから。

「はあああつ!!！」

迷彩が解けた全身が黒い甲冑のような襲撃者相手に、ギンガさんが拳を振るう。

彼の爪とギンガさんの拳は、互角だった。

競り合い、二人がはじかれたところで、僕とキャラロに向かってダガーが飛来する。

「ちっ!!！」

ティアナさんの射撃が向かって来る複数のダガーとぶつかり…爆発した。

「炸裂タイプ!?!まず…視界が…」

「危ないっ!!！」

僕を押しつけて前に出たキャラロは、プロテクションを展開する。

視界を覆われた中、魔力波が迫ってきた。

結構高い強度を持つはずのキャラロのプロテクションが簡単にひび割れ、僕とキャラロはまとめて吹き飛ばされた。

「ぐ!っ…!」

背中から壁に叩きつけられたけど、キヤロを抱えるのだけは間に合った。

少し安心して様子を見てみると、キヤロは気を失っていた。

僕自身スピードタイプで防御力が高い訳でも無いし、咄嗟に庇ってくれなかったらまとめて倒されていたかもしれない。

キヤロの優しさをありがたく思いながら、ようやく事態に気付いた。

キヤロが持っていたレリックのケースが無い。

晴れた視界の先に、紫色の長い髪をした女の子がケースを抱えていた。

あの娘が…さっきの魔力波を撃つたとすると、単純放出だけであれだけの威力を叩き出すんじゃ格差がありすぎる。

『時間を稼ぐわよ。連絡つかない馬鹿空尉はともかく、ライン曹長と合流すれば単純に戦力が増えるし、見つかったる訳じゃないから奇襲もかけられる筈。』

『任せるです!?!』

ティアナさんからの指令に続いて届いた念話は、当のライン曹長からのものだった。

サイズを利用してきたのか通風孔から現れたライン曹長が、その手を女の子に向け…

「させるかよあつ!」

「な、新手!?!」

魔法発動前に飛来した火炎弾を防いで距離を取るリイン曹長。
奇襲のつもりで飛び出て逆に奇襲を受けた筈なのに凌ぐなんて…や
っぱり凄いなリイン曹長も。

「アギト。」

「おう！念のため様子伺つといて正解だったな。さあ、このあたし
…烈火の劍精、アギト様が相手になってやるぜ！お前等纏めて…か
かって来やがれ！！」

ただでさえあの娘一人でかなりの強さなのに、新たに現れた彼女も
かなり強いようだった。

『フレア空尉とは連絡がつかないですし…ああもうあの人はこんな
時に何やってるですか！』

同感だったけど、嘆いてばかりもいられない。

僕を庇って倒れたキャロの代わり…と言う訳じゃないけど、動ける
僕達でこの状況を打開しなきゃいけないんだ。

Side フレア=ライト

「ぐ…っ！」

私は振り下ろされた剣を受けて、防御姿勢のまま壁に叩きつけられ
た。

感じてこがせいぜいの魔力量、しかも強化を使っているのかも分からない。
そんな程度だと言うのに、振るわれた一撃をその場で受けきる事ができなかった。

しかも、受けたデバイスに罅が入っている。

瞬時に修復した私の目の前に、既に攻撃態勢に入っている男がいて…

「はあっ！」

即座に振るった槍をくぐるように避けた男は、足を斬りにかかる。
跳躍しつつ横に回避したが、また壁に詰まった。

「…これで終わりか？」

…到底技量では勝ち目は無い。

何しろ、私の槍の尖端が触ればたとえ剣本体であっても破壊する事が可能だと言うのに、攻防を繰り返す中そんな事すら出来ていないのだ。

多用こそするもののフェイトよりは慣れていない高速移動で背後を取った所で、停止制御の一瞬で斬り殺されるだろう。打つ手はもう…

私は両腕を下げ、男と正対した。

「それじゃあ…遠慮なく。」

向かって来る死の一閃。アレを受ければ間違いなく死ぬだろう。だが…構わない。

元々、命と引き換えでも構わない相手だと悟っていたのだから。

だからこそ打つ手はもう『一つしか』ない。

剣を振るう段階に入った所で、デバイスを握る手に力を込める。避けることは既に不可能だが…奴もまた、ここから攻撃を変える事は出来ない。

フィールド防御を全開に、ただ即死だけはしないよう願う。

剣が体を通った所で、私は突きに入った。

剣を振るったが為に開いている心の臓、狙いはただそれだけ。

私は即死でなければ構わない、代わりになんとしてもコイツだけはここで…!!

鮮血が舞う中、私は膝を折った。

「まさか、こんな真似をするとはね。ふふふ…楽しいじゃないか。」
「く…っ…」

私の一閃は、男の左腕に突き刺さっていた。

攻撃直後にも拘らず体を逸らして直撃を回避するなど…出鱈目にも程がある。

私では、相打ちすら望めないと言っのか…

「このまま終わらせるには惜しいな…」

「まだだ…」

深手ではある。だが、さすがに魔法もなしに振るった剣でフィールド防御越しだったからかまだ動ける。

「これ以上…速人だけに任せる訳には行かない…なんとしてでも貴様だけはここで…」

私は立ち上がって構えた。

「速人…だって？」

が、当の男は構えもせずその名を噛み締めるように呟いた。
まさか…知り合いだとしても言うのか？

暫く動かなかつた男だったが、唐突に笑い出す。

まるで、無垢な子供のような、本当に楽しそうな笑い声だった。
だからこそ異質だった。戦闘中に血塗られた剣を手に、心底楽しそ
うに笑うなど…

「速人に伝えておいてくれ、『待っている』…とね。」
「ま、待て…ぐ…っ…！」

去っていく男を追おうとしたが、傷の痛みで足を止める。

どの道…このまま奴とは戦えんか…

戦闘に邪魔になりそうな機能の一切を封鎖しておいたグレイブを通
常通りに機能させ、簡易回復魔法を適当にかける。

専門ではないが必修で扱える基礎程度であれば扱える、気休めには…

『救援要請が入っています。』

どうやら呑気に傷を治している暇も無いようだった。
まあいい、どうせ私の力量ではこの傷は治せない、出血を抑えるく
らいの事は出来た以上長居は無用だ。

慣れない治療の手を止め、すぐさま移動を開始した。
このままリックまで奪われる訳には行かない、急がねば。

Side↳エリオ＝モンデュアル

「お、おいルールー！それ本気で撃つのかよ！」

「死なない。多分……」

黒い襲撃者：ガリユーとアギトの二人を前衛に、女の子はいつの間
にか無数の魔力弾が浮かんでいた。

数十ではすまないその異常な数の魔力弾を前に、スバルさんとギン
ガさんが前に出る。

「スバル！障壁全力展開！」

「うん！！」

発動は避けられない。

強固な障壁を展開可能な前衛である二人が凌いでくれるつもりなの
だろう。

「シューティングスター。」

宣言と同時に、紫色の魔力弾が視界を埋め尽くすように向かってき
た。

「ちょ…ちよつとこの数…」
「嘘でしょ…っ…!」

本当に、数十じゃすまなかった。

見える光弾分の数じゃなく、もつと…展開している光弾から連続で撃っているのか、新たに作っては撃ちを繰り返しているのかはわからないけど、まるで光の壁のように魔力弾が放たれている。二人の障壁がひび割れて行き…

どうにか砕ける前に魔力弾の雨が収まった。

どれほど防御に力を尽くしたのか、二人とも荒い息を吐いて膝を折る。

「これ以上撃たせ」

「ティアナさん!!」

「え、ああああっ!!!!」

いつの間にか迷彩を再展開していたガリユーの接近に気付いた僕が動くより先に、ティアナさんが吹き飛ばされて壁にたたきつけられた。

「くっ…でやああああっ!!」

ストラダーを振り上げ接近。

ガリユーの爪と数度切り結んだ所で、お腹を蹴り上げられた。

「ぐ…っ…」

体が持ち上がった後、膝をつく。

くそ…止めて置くことも満足にできないのか!?

闘士はあっても、息が詰まって動けない。

そんな僕の前で彼の爪が振り上げられ…

『よく保たせた。』

心待ちにしていた声が、念話で届いた。

飛来した黒い影が振るった一閃がガリユートの爪と交差し、その爪を『切断』する。

そのままガリユートの右肩を突きで貫いて、引き抜きながら蹴り飛ばした。

吹き飛んだガリユートは柱にぶつかり、崩れ落ちた柱に飲まれる。

一切の容赦が無い。

僕達との戦いの間殆ど表情を変えなかった女の子が、眼に見えて怯えていた。

「ガ、ガリユート…戻って。」

「逃がさん。」

「スターレンゲホイル!!!」

一瞬の間も無く追撃に出ようとしたフレア空尉の前に、光弾が叩きつけられる。

轟音と閃光が、あたりを包み込んだ。

光が収まった後には、彼女達は姿を消していた。

「そう遠くへは行っていない筈だ、すぐに…」

言いつつ、唐突に体を揺らした空尉が槍を地面に突き立てる。

その足元に…血がポタポタと垂れていた。

背を見せている空尉。だけど、それでもただ事じゃないのは分かる。

「フ、フレア空尉、振り返ってください。」

「気にするな、かすり傷」

「空尉!!!」

リン曹長の悲痛な声に、ゆっくりと振り返るフレア空尉。

左肩から右脇腹に向かって眼に見える斬撃の傷跡が刻まれていた。

「な、何戦ってるですか！早くもど」

「6対3でレリックを持ち出されるメンバーだけに任せてなどおけない。」

「っ……」

槍を杖代わりに立っていた空尉は、突き立てた槍を引き抜いて無理矢理自分の足で立つ。

僕達とは、覚悟も実力も違う。それは分かったけど……

「アレが敵の手に渡る事は」

「空尉！！！！」

僕は、力の限り叫んでいた。

「レリック一つより貴方が倒れる事の方が被害が大きいです！！ ideologiesさんを讃え無駄死にとまで言った貴方がこれ以上の無理をしないで下さい！！！！」

空尉の力は道中に倒されていたガジェットを見て十分に分かっている。

そんな彼を、今すぐ民間人に被害が及ぼうとしている訳でも無いのに、これ以上無理に戦わせて死なせる訳には行かない。

空尉は少しの間を置いて告げる。

「どの道シヤマル医師の安全が確保され、彼女の元まで行かねば治療できません。」

「だからってその傷で」

「分かっている。」

言い切る前に僕を制した空尉は、その場に座り込んで、バリアジャケツトを大きく開く。

深く痛々しい傷がよりはつきりと見えるようになったにも拘らず、相変わらずの口調のままリイン曹長に声をかけた。

「リイン曹長、傷口の凍結を頼みたい。」

「そ、そんなの応急処置にも」

「止血になればいい。」

リイン曹長は、一瞬躊躇うも結局放置も出来ないし傷口に向かって氷結魔法をかけ始める。

『エリオ、さっきの兄さんを讃えてってどういう事が、後できっちり聞かせてもらおうからね。』

『あ、は、はい…』

ティアナさんからの念話に、思わず口走ってしまった事を思い出す。真意を聞いたとは言え、フレア空尉の話をして空気が悪くなると思っ黙っていたけど、結局話す事になってしまっようだ。

少し失敗したかな…と考えると、突然周囲が震えだした。

「大型召喚の気配があります。多分それが原因で…」
「キャロ。」

眼を覚ましたキャラがゆつくりと起き上がる。
喜びたかったけど、告げられた内容はとても喜んではいけないものだった。

「脱出する、道は作るからお前達は続け。」

立ち上がったフレア空尉は、足元に魔法陣を展開する。

天井を見上げた空尉は突きの構えを取り…

「ブレイク…ブースト!!!」

天井に向かって飛翔しつつ、突きを放つ。

その全身が、展開した魔法陣から放たれた砲撃に飲み込まれた。

自分ごと砲撃魔法と化したフレア空尉は、上層の障害物を名前の通りに破壊しながら突き進んでいく。

「応急処置にもなっていないのになんて無茶するですか！ああもう！」

放置できなかったのか、ライン曹長も続くように飛んでいく。

僕達はスバルさんとギンガさんの展開したウイングロードを駆けて脱出を図る。

「キャラ、大型の召喚虫がいるのですが、任せて大丈夫ですか？」

『はい、任せてください。』

この揺れの原因となると長い間放置しておく訳にも行かない。

僕はキャラを抱え、ストラードを構える。

「エ、エリオ君？」

「スピードだけがとりえだから。急がないとまずいし、すぐに外まで連れて行く！ストライダー！！」

宣言と共に、ブースターを使って急加速する僕とキャロ。外まで来た所で、安全そうなビルにキャロを降ろす。

「錬鉄召喚！アルケミックチェーン！！」

地面から幾本もの鎖が延びて、巨大な召喚虫を拘束する。危険がなさそうだと確認した所で、先に出た空尉達の姿を探す。

リン曹長の方はアギトを捕らえていて、フレア空尉は女の子を地面に組み伏せていた。

とりあえずこれでこっちは一段落着いたみたいだ。

空尉から受けたような奇襲が無いとも限らないしまだ警戒はしておくべきけど、とりあえずすぐに対応しなきゃならない物が片付いた事には安心する。

「放して…」

「断る。」

『…見てるだけだとどっちが悪いか分かったもんじゃないわね。』

コンクリートに顔をつけられた状態で動けなくされている女の子の上にいるフレア空尉。

空尉の事だから甘いの一言で終わらされそうな気がするけど、テイアナさんからの念話には同感だった。

「ワンパターンな登場はよくないんじゃない？ヒーローさん。」
「便利なんだよ。」

風翔斬でリライヴの斬撃を逸らした俺は、辛口のコメントに苦笑しつつナギハを納める。

「それにしても悪かったな、嫌だったろ？」

なのはに脱がされて、と直接は言わずに謝る。

経歴を考えれば局員生中継で肌を晒すなんて真似、リライヴにとっては怒りを煽る所じゃすまないだろう。

事実、俺が何の事を言っているのか悟っただけでなく、一瞬でその表情を曇らせるリライヴ。

「…君が気にする事じゃないよ。」

「そっか。」

だが、敵対中である上戦闘中の事故だ。リライヴが言ってるように俺が気にするほうがおかしいんだろっな。

敵対する者として、現状に対処する為なのはに視線を向ける。

「さて…なのは、いけるか？」

「牽制位は簡単に。」

「十分だ。」

構える俺達を見ながら、リライヴが小さく笑みを見せた。

「何だよ？」

「仲いいって言うのもそうだけど…やっぱり似合ってるって思ってるね。」

少しだけ、寂しそうに呟くリライヴ。

闇の書の中で見た、笑顔で俺を起こしてくれたリライヴの母親の幻。あれが深層心理から来ていた願いならあいつが本当に望んでいるのはこんな戦いじゃなくて…

止めだ、今はまだ早い。

少なくとも、今は止めないといけない。

振り切って攻めに出ようとして…

「…もし望むのなら、投降して。」

局員であるはずなのはのほう言葉を選択したため、留まった。

フェイトの時もそうだったけど、なのはは寂しさに気付きやすい。リライヴの場合笑顔で悪人扱いすればいいとか言い切るような奴だったから気付いてなかったのかもしれないが、今はつきりと引つかかる物を感じたんだろう。

「人助けもしている事は局も知っているし、リライヴちゃんの力を局員として振るってくれるならどれだけ」

「それは無理だよ。」

昔通りの呼び方。

立場度外視で語りかけていた時には、リライブもそう呼んでいた。恐らくこの一度だけ、会話にすたくなつたんだろう。

だが…告げられた内容があまりによくなかった。

リライブは首を横に振ってなのはの提案を拒絶する。

そんな事が出来るなら当の昔にやっている。むしろその辺にいるだろ。逆恨みで敵対しているような連中と違い、必要がなければ手を出さないようにしているだけ良識があるくらいなんだ。

未だに傷が癒えていない事は、イメージから構成されたであろうバリアジャケットに桜色の首輪が残っている事が示している。そんなリライブが、自身を見捨てた局員の協力者になるなどある筈が無い。

「やっぱり…止めるしかないんだね。」

「出来るのなら…ね。」

デバイスを構えるのはとリライブ。

俺も切り込む為に抜刀の態勢をとり…

唐突に、強大なエネルギーを感知する。

「これは……」

「どうし……っ！」

エネルギー反応に気付いた俺に続くようになるのはもその表情を歪める。

距離は遠いが、大分大きな反応だった。

「まさか……あの馬鹿……っ！！！」

リライヴが慌てたように呟いた直後、砲撃の轟音が鳴り響いた。

「……ガジェットも大体片付いたし、私はこの砲撃の実行犯を捕らえる。」

フェイトから何かを堪えるような念話が届く中、砲撃の閃光が一直線にへりに向かい……

へりが爆発に吞まれた。

オーバーSの物理破壊砲撃…ヘリ所か要塞に籠ってたところで安易に安心できない。
あんな物直撃してたら…

さすがに肝を冷やしていたのだが、続いて聞こえて来た声が不安を断ち切った。

『……さ…せる訳ねーだろちきしょうが!』
「ヴィータちゃん!」

小さな体を大の字にして浮かぶヴィータ。その後ろに、ヘリは無事飛んでいた。
ヴィータのほうも、致命傷といった感じではない。

サンキュー、ヴィータ。

きつと、あの日以来失いたくないと強く思っていたのだろうヴィータに内心で礼を告げ、今相対しているリライヴを見据える。

「お前の事だ、何かあるのは想像つくんだけどさ…本気でこんなやり方で満足なのか？」
「っ…」

答えず、ただ硬くデバイスを握り締めるリライヴ。
犯罪者扱いは変わらないのに三対一でも非殺傷で戦うような馬鹿が、こんな事する連中と組んで満足できているわけが無い。

だからと言ってリライブが、抱えている『何か』をすぐに捨てられる訳も無い。

反論できないが、反省もする訳にはいかない…か。

『…今日はもう攻めない、仲間だけ助けて引く事にする。』

リライブからそんな念話が届いた直後…

「シューティングスター！！」

無数の魔力弾が、俺となのはを纏めて飲み込むように放たれた。迫る魔力弾の雨を、俺は切り払い、なのははプロテクションで凌ぐ。そんな事をしている間に、リライブは高速移動魔法で俺達から離れていった。

『なのは、俺は一応リライブを追う。お前はフェイトの援護を。』

『一応って…本当甘いよお兄ちゃん。』

周りに漏れないようになのはにだけ念話で告げる。大してなのはは、大方予想していたのか諦めたように念話で返し、フェイトの援護に向かった。

甘い…よなあ、止めないとまずいのに。

でもあいつなりの譲歩だし、何よりあいつが甘くないのなら当に入りが墜ちていておかしくない。

優しい犯罪者を非情に捕らえる…と言うのは、局員ならまだしも俺

はやるつもりはなかった。どっちが悪いか分かったもんじゃないし。

第十三話・動き始めた敵の影（後編）（後書き）

ルーテシアのシューティングスターはリライブに教わったもので、アギトの心配は、非殺傷にしてなかった訳ではなく気を失ったところに建物が崩れてきたりしたら巻き込まれる為です。なのはの砲撃を見る限り周囲へのダメージは別物っぽいので。

とうとうグリフに速人の事が知れました。って、過去のトーレ等の戦闘映像とか見てなかったんかい（苦笑）

ブレイクブースト

基本的に障害物を無視して直進する為の魔法。アブソリュートランサーの要領で、全身を砲撃魔法と共に放つ。

フレアはなのはと異なり砲撃魔法を突きの補助として扱う事を主としているため、面で迫ってくる炸裂威力の高い砲撃ではなく、貫通力に特化した仕様となっている。

原作のヴィータ突入の穴が開かなかったので、先陣を切ったフレアが使用しましたが、ノーダメージと言う訳には行かない為ラインが怒ってます。

第十四話・誓い故に示された危機

第十四話・誓い故に示された危機

S i d e ｝ キヤロルルシエ

驚異的な…普段見ているフェイトさんよりもはるかに速い速度で、彼女は私達の前に現れた。

白い墮天使、リライヴ。

私達が初出撃の時、魔法一つ使わせる事ができずに敗北した最強の魔導師。

「はっ！！」

彼女が動く前にフレア空尉が飛び出した。

一閃。大怪我を負っているとはいえ、そんな状態でも私達が苦戦していたガリユ一の爪さえ一撃で切り裂いたそれと、彼女の剣が打ち合わされ…

空尉の槍が切断された。

「そんな体で…」

剣を振るった勢いもそのままに空尉に近づいた彼女がその手を振るうと、軽い音がした後フレア空尉が意識を失った。

墜ちていく空尉に浮遊の魔法をかけてゆっくりと地面に降ろすリライヴ。

私達は、そんな彼女相手に身構えた。

勝てないまでも、時間位は稼がないと。

「…ごめん。」

「え？」

小さく、謝る声があった。

どういうことか確認する間もなく彼女が腕を振るうと、私達が立っていた場所…道路そのものが切断される。

崩れ落ちる足場に対応している間に、拘束していた女の子とアギトを奪われた。

「させません！フリジット」

構えるリイン曹長。けど、唐突に見えない何かに弾き飛ばされた。たったそれだけで、リイン曹長は意識を絶たれて墜ちていく。

慌ててスバルさんが受け止めに入る中、向かって来る速人さんのほうを見た彼女は、二人を連れて別方向へ飛び去った。

傍まで来た速人さんはそのまま地面に降りて、デバイスを手に飛び

去るリライヴを眺める。

「あれはさすがに追えないな…ま、とりあえず保護、回収対象は全部護りきれた訳だしいい…かな？」

言いつつ、速人さんはいきなりデバイスを投げる。

投げられたデバイスはエリオ君が立っている傍の崩れた床に突き刺さった。

速人さんは、驚いて離れるエリオ君を見て笑いながらデバイスに向かって歩いていく。

「お、脅かさないでください！」

「いや悪い悪い、そんなに驚くとは。」

軽い調子で言った速人さんは、刺さっていたデバイスを納めると倒れているフレア空尉に視線を移す。

「大体片付いたし、早いとこシャルマル先生に診せてやらないとな。」

「そうですね…私が運びます。スバル、貴女はライン曹長を。」

「わかった。」

スバルさんとギンガさんが意識を失った二人を抱え、エリオ君がレリックを持ってティアナさんがエリオ君についてこの場を離れる。

そんな光景を見ながら、私は少し止まっていた。

「どうした？」

変に思ったのか声をかけてくれる速人さん。

気にかけてくれた事、それ自体は嬉しかったんだけど…

「あ…すみません、何でもありません。」

今はノンビリ話している場合じゃないと思いなおす。単なる気がかりなら尚更だ。

そう思つて話を終わらせ…

『仕事中に喋つてたら何処かの空尉に怒られるもんな。後にしようか。』

そんな私に、念話と共にウインクをしてみせる速人さん。

気になった事がばれてしまつている事が少し恥ずかしかつたけど、気にかけてくれる事は嬉しかつた。

Side Story

ドクターの言う当たりと予想される少女を奪還する事ができなかつたのは、中を氣遣つて全力を出さなかつたとは言え、イナーメスカノンの一撃を凌ぎきつた騎士を評価する他無いと言えよう。

相手の全力…切り札程度は隠しているかもしれんが、実力の一端を引き出す事はできた。

後はもう一つ…新人集団が確保しているレリックを回収できれば言う事はなかつたのだが…

「どつと言う事だ！」

レリックを…必要があればお嬢様の救助も任としていたセインが手ぶらで帰って来たのだ。

怒声をあげた私に対して、セインは静かに左手を差し出す。差し出された腕は、軽く切れて出血していた。

この程度の怪我で引いたと言っのか…

私が怒鳴る前に、デイエチがセインの傷を眺めながら問いかける。

「どうしたのその怪我？」

「デーパーダイバーの真つ最中につけられたんだよ。」

「何？」

さすがに驚かざるを得なかった。

グリフでも大体は把握できているようだが、完全に見えない位置となると攻撃を命中させるのは容易い事ではない。

ましてデーパーダイバーは無機物に潜る能力。風や匂いに違和感を感じる訳もないと言っのに…

だがそうになると、セインが引いたのも仕方ない事となる。

直接戦闘を行うタイプの能力ではないのだ、敵に気付かれていて呑気に付近をうろついている訳にも行かない。

「さすがに肝が冷えたっけ言っか…もう人間じゃないよアレ。」

「速人は特別だ。」

合流待ちだったグリフが、呆れたように呟くセインに続くように呟いた。

滅多な事でダメージを負う事の無い彼が、左腕から血を流していた。

「お嬢、治療を」

「転送が先でいい、見つかると面倒だろう。」

傷をまるで気にする事無く転送を促すグリフ。

お嬢はそれに頷き、転送魔法を使う。

アジトまで戻った所で、グリフに話を聞く事にした。

「特別とは、どういう事ですか？」

「僕が全力で殺し合いに挑んだ中で最後に負けた相手なのさ。」

驚いた。

傷を負う所か、彼が負けた事がある相手とは。

しかし、思えば警察署にいたと言う事は捕縛されたと言う事。武装もなく警察署を脱走できる彼が捕まっているなら、倒した人間がないと説明がつかない。

「その中でも特に気配に特化している。戦闘中に僕から背後を取れるくらいにね……」

「貴方から背後を……」

私がISを使ってようやくできる芸当だ。それも取った所で背後にいる事に気付かれては何の意味も無い。

「対策に思い悩む必要は無い。」

思案している事に気付いたのか、彼はそう声をかけてきた。治った腕を動かした後、お嬢の頭を柔らかく撫でる彼を問いただすつもりで見据える。

「どういう事ですか？」

「彼は僕の獲物だ、誰に譲るつもりも無い。」

そう言った彼の顔は、今までに見た事の無いものだった。

まるで、研究中のドクターのような…。しかしそれだけでなく、私ですら寒気を感じるような狂気を孕んだ声。

今まで彼が何を目的に強くなり、戦っているのか理解できなかったが…

戦う為に強くなり、生きているのだと今更ながらに悟った。

…まるで戦闘機人だな、戦う為に必要な物以外が何も無い。

だが、それならば尚更私が師事するに値する。

戦う為に作られた者として、いつか彼を越えてみせよう。

S I D E O U T

大怪我を負って尚傷口を凍結させてまで戦闘続行したフレアのダメージは、結構深刻な物だった。

とはいえ、内臓までは切断されていなかったのが幸いしたのか、広くぱっくりと斬られていたものの命に別状はなかったようだ。

酷い怪我で戦った為失血死寸前だったらしいが、それはあの馬鹿の自業自得だ。

なのはとフェイトが追った砲撃犯は、唐突に姿を消し逃走したらしい。

ガジェットの機影を作り出した幻術使いが傍についていたらしく、追跡の真つ最中に姿を消されてそのまま見失ったと言う事だった。

はやてのような広域魔法使いがいれば周囲を食いつぶす事で消えていようがいまいが捕らえる事が出来たんだろうが、はやては二回しか限定解除が出来ないそうで、そんなものはさすがに簡単には使えないだろう。

結果だけを見れば、あの娘もレリックも回収できたことだし、悪いというほど悪い結果でもなかったはずなのだが…

「何で俺こんな所に呼び出し喰らってる訳？」

何故か俺は、部隊長 + 分隊長のお二方に収集をかけられていた。

他に話が漏れないよう徹底した一室にて、はやてが重い口を開く。

「決まっとるやろ。局の勤務中に知り得た情報を外部の人間に漏らして巻き込んだんや。大事にしたら六課自体を巻き込みかねんとは言え、放置しとけるほど軽くもない。先に弁明位あれば聞いところ思ってたな。」

どうやら、兄さんから『レリックを見つけた』と連絡が来た事につ

いての話のようだ。

はやての視線は鋭い。

部隊長だもんな、問題が起これば本気にならざるを得ないか。

とは言え…問題が起こればなので今本気なのは検討違いもいい所なのだが。

「放置も何もなあ…別に勤務中に知った情報を漏らしても無いし、外部の人間巻き込んで無いただけど。」

「どついつ事や？」

嘘を言っていない事は感じてくれたのか、素直に聞き返してくるはやて。

「俺が何でここに来てるか知ってるだろ？フリーの雇われ魔導師だ。当然情報収集には気を配るし、仲間同士では契約でも無い限りは情報共有する。当の昔に家族全員レリックについては知ってたぞ。」

呆然とする一同。

いやそんな驚かれても…情報収集って基本中の基本じゃないか？

「と言うか、兄さんがレリックの事知らなかったら、『鎖につながられてるなんて可哀想だ』って箱放置してあの娘だけ地上の一般局員に保護してもらおう、なんて展開すらありえたんぞ？巻き込んだと言つかむしる安全に済んだ位なんだが…」

誰一人としてぐうの音も出ない。

兄さんの方も何かを引き摺るような音がした…なんてあいまいな状態で通報なんて出来ないだろうし、妥当な結果だろう。

「邪魔はしていないつもりだ。」
「恭也お兄ちゃん。」

部屋に入ってきた兄さんに複雑な表情をするのは、
事情聴取で呼び出されたらしい。

「いくら一般人でも正当防衛や人助け位は許されるだろう？」
「ええ、それはまあ…」

だが、そんな兄さんに問いかけられたはやてのほうは口を噤む事になつた。

まさか武装許可が無いから殴られても抵抗するなとか、ボロボロで歩いてる子供を見なかつたフリして通り過ぎろとは言えないだろう。

「話は分かりました、後は速人君に聞く事にします。わざわざ呼びたててすみません。」

「気にしないでくれ、お陰で堂々となのはの顔を見に来れた訳だしな。」

「お兄ちゃん…」

相変わらず女殺しな笑みをなのはに向ける兄さん。

おいおい…娘に加えて妹まで落とす気か？これだから天然朴念仁は…

「何だ？」

「いや、なんでもない。」

軽く呆れているのすら感づかれたらしい。こんなところで勘よくてもしょうがないだろうに。

「あ、兄さん待った。」

用は済んだとばかりに帰ろうとする兄さんを呼び止める。

「実は…切り札使っちゃってさ。ぶっ倒れたから説明が欲しいって事になっただけど…」

「本当にあれを実戦で使ったのか？…つくづく馬鹿な奴だな。」

兄さんは僅かに眼を伏せ首を振る。

スバルを助け、倒れる事になった切り札。その原理を説明する必要があると言う事は、まだ使うかもしれないと言う事に他ならない。その辺も悟った上で呆れているんだろう。

対して機を見て話すとは言ってあった三人は、真面目な表情に戻る。

「フェイト、君の背後を取った時の事を覚えているか？」

「あ…はい。まさかブリッツアクションを使った直後に背後を取られるなんて思ってもいませんでしたから。」

「うえ！？そんなんりライブでも無理やない？」

驚きと共に思い出したのだろう情景をそのまま語るフェイト。

なのはの最終試験をかねた修行についてこなかったはやては知らなかったため、驚愕を隠せなかったようだ。

「あれは端的に言うとう使用者の能力を引き上げる物なのだが、速人の言う切り札とはそれを更に強化したものなんだ。」

「魔力で身体能力引き上げられるだろ？それを併用して上限を無理矢理上げた物なんだ。ちなみに、俺は『歩法・神風』って呼んでる。」

「縁起でもないし冗談になって無いよ、それ。」

全ては語っていない兄さんの説明に付け加える形で告げた名前に、
なのはが怒りを伴った視線を向けてくる。

極端に歴史の成績がよくななくても、戦争中に飛行機で突撃した部隊
を神風と呼んでいた事位は知っていたらしい。

俺はこれしかないって思ってたつけた名前なんだが…

本当は、神速中の自分まで含めてスローになるあのモノクロの世界
で通常通りの動きが出来るくらいまで魔力で身体動作を無理矢理強
化する技なのだ。

まさに神の風と呼ぶにはふさわしいと思ったし、使って体ボロボロ
になってああ二重の意味でピッタリだとも思ってたんだが…ってまあ、
なのはからすればそもそもそんな技使う前提にするなど言いたいん
だろうな。

「兄さんから元の奥義を教わった当初は空中歩行魔法陣すら併用で
きなかったんだ、色々他に思考を裂いてできるものじゃないからな
とは言え空中戦もあるのにそれだとまずいつて事で、ほぼナギ八任
せの空中歩行と強く意識しなくても出来る強化だけはどうか併用
できるようにしたんだよ。」

「神風はその副産物…って訳やね。」

はやての繋ぎに頷く事で答える。

二段掛けは未だに出来ないが、魔法と併用する関係もあつて神速に
慣れないと行けなかった俺は、今では一番長く多く普通の神速を使
えると思う。

それでも一日分単位行けばやりすぎな位なんだがな。ったくとんで
もない奥義だ。

「ってアレ？スバル助けた時に使ったのって風翔斬だよな？」

「ああ。移動は神風でやって、射程距離まで行った所で切って使ったんだよ。」

「そっか。」

簡単に言っただけだと皆素直に納得して…くれない人が一人いた。

「速人：それって高速移動の停止制御無のまま攻撃行動に移ったのと同じだよな？」

速さに慣れてるフェイトからの静かな指摘。

それがどういう事かようやく認識したなのはやはり改めて厳しい視線を向けてくる。

高速移動から反動吸収する事もなく急停止すれば、中身がどうなるか等説明するまでも無い。

あー…こんな状態で皆を安心させるには…

「そ、そこまで無茶やっても死なないんだから実戦でもちゃんと使っただけな。」

「使用禁止！！！！！！」

和ませようと明るく言ってみたつもりだったが、隊長陣満場一致で使用禁止と相成った。

知った事かと思えば命令違反扱いで少なくとも報酬は出ないだろう。

修得苦労したんだけどなあ…酷いな皆して。

兄さんを帰した後、色々厄介な話で多数の報告書を書かなければならない局員の皆は即座に仕事に戻り、基本ただの戦力として雇われている他所者の俺はそんなに書くものも無いため、重傷を負ったフレアの様子を見に行く事にした。

それに、リライブ以外があいつに重傷を負わせたと言うのはどうにも気になる。

「ぐ……」

「動かないでください！紙一重で内臓こそ避けているものの本当に深手なんですよ！？」

と、医務室からシャマル先生の怒声が聞こえて来た。

あーあ、きつとあの馬鹿また無茶してやがるな。

「失礼します。」

「あ、速人さん！」

医務室に入った俺を見るなり、シャマル先生はまるで救いの手でも見たかのように安堵の声を上げた。

「フレア空尉が貴方に話があるって聞かないんです、休まないと危ないのに……」

「速……人……」

無理して身体を起こそうとするフレアに溜息を漏らす。

『念話でいいだろ、頭大丈夫か？』

『お前に…伝えなければならぬ事がある…』

割と余裕が無いだろう今のフレアにこれ以上無茶はさせられない。
しかも割と重要な用件のようだし、ここは静かに聞いて

『敵に…地球の戦闘者がいる。』

思考に割って入るように届いたフレアからの念話は、到底静かに聞いていられるような内容じゃなかった。
呆けている間にもフレアからの説明は続く。

『剣を扱う、神父のような服装の紫色の髪の男だ。』

そんな奴一人しかいない。まして今のフレアを倒す程となると尚更。

『それと…そいつから伝言がある。』

『何て？』

『待っている…だそうだ。』

俺は知らず拳を握っていた。

落ち着く為に深く息を吐く。

『分かった、ゆっくり休んでくれ。』

『早めに回復する…すまないがそれまで頼む…』

そこまで言っただけで倒れたフレアは、目を閉じて静かに寝息を立て始めた。

「あの…どうかしたんですか？」

「え？」

「珍しく張り詰めているようですから…」

不安げなシャマル先生にそう問いかけられた。

確かに、普段無い位にはマジになってたかもしれない。

地下とは言え、今のフレアがここまでやられて捕獲も出来ず、昔相対した時点で兄さんと互角じゃないかとすら感じられたあのグリフが来ているとすれば、並大抵の事じゃ勝てないだろう。

広域殲滅でも出来ればいいが、今回のように町の下から来られればそんな事出来るはずも無いし、その上リライブまで敵にいるとなると呑気にはしてられない。

「珍しくってまた酷いな。それじゃ普段ふざけてるみたいじゃないか。」

が、悟られて緊張感が伝染するのもあれなので、苦笑しつつすっぱけて医務室を出た。

…待っている…か。

上等だよ。俺だってあれから何もしてこなかった訳じゃない、約束破って脱獄何てしてかしたお前相手に御神の奥義披露するのも尺だが、俺以外相手に出来ないだろうし…

責任持って叩き潰してやる。

誓いつつ待機状態のナギハを撫でた俺は、取り合えずこの話をせざるを得ないはやての下に向かう事にした。

グリフの話を伝えると、はやては眉をひそめた。

「そんなやばい奴なんか？」

「冷静に戦力分析するなら業版リライブって所だ、兄さんなら技量ではまず負けないと思うが、フレアがアッサリやられたとなると俺でもどうなるかは分からない。」

肩をすくめて答えてやると、はやては両の手を組んで俯いて額を乗せた。

そりゃ頭も痛くなるわな。

リライヴ一人ですら歴代魔導師最強とか言われてんのに、その対策に呼ばれた俺が得意距離で斬りあってどうなるか分からない奴がまだいるんだから。

「…任せてええか？」

「勿論。ただリライヴと同時に来たらフレアがリライヴの相手して無いとなのはでもそこまで保たないだろ？」

「わかっとする、対応策は考える必要があるな。報告ありがとな。後はこっちでやつとくから修行なり身体を休めるなりしといてな。」

そう言つて深く息をつくはやて。

現状戦力でリライヴとグリフ含めた広域次元犯罪者の一団を止めなければいけない。

管理局の規定をはるかに上回る戦力を保有して尚、シヤレにならない難度の任務を扱わなきゃならないはやてとしては、味方の風当たりも含めて頭の痛い内容しかない筈。

「ナギハ。」

『セットアップ。』

俺は待機状態のナギハを展開して、二刀を抜く。

屋内で、しかも部隊長の前でデバイスを起動させるなんてその辺の人に見つかったら大目玉じゃすまないだろう行為にはやてが眼を見開く。

俺はそんなはやての目の前で、二刀で十字を作る。

「機動六課にはこの二刀が…決して砕けぬ護り神がついてる。状況的に頭痛いだろうが、不安は捨ててかかるくらいで構わない。自由に進んでくれ、そんな皆を必ず護る。」

この誓いを、ナギハを手にしないまま口だけでも意味が無い。俺の本気を表すそれを見たはやては…

「必ず言うには不安やけどな。恭也さんには未だに勝てんのやろ？」
「うぐっ…」

軽い笑みと共にこの上ないほどに面目を潰してくれた。

「こ、これでも結構真面目にやったつもりなんだぜ？出鼻挫いてくれるなよ。」

「真面目に、部隊長を前に、訓練でも何でも無いのにデバイス抜いた訳か。」

笑みを浮かべながら告げるはやてに返す言葉もなくうな垂れる。

怒られている訳ではなくからかわれているのはわかってはいるのだが、反論の余地が無いので正直辛い。

「大体速人君が真面目なんてそれこそ異常事態やろ。どうせやったらいつもみたいに関係に言ってくればええのに。」

「あー、はいはい！何だよ皆して！俺がマジだとそんなに变かちくしょうー！！」

色々と台無しになったので俺はさっさとナギハを待機状態に戻し、はやてに背を向ける。

「ま、でも…ありがとな。心配してくれて。」

背中越しに告げられた礼に、俺は片手を上げて返す。

いつもみたいに…か。

あのグリフを相手に余裕なんてある筈も無いが、やってみせるしかない。

ヒーローなら、この程度の苦難たちどころに切り抜けて見せるだろうから。

Side 八神はやて

速人君が去った部屋の中で、私はついさっき聞いた台詞を思い出す。

「不安は捨ててかかるくらいで構わない…か。」

口にして、逆に体が重くなるような気がした。

どんな状況でも笑って任せろと言うあの速人君が、あれほど真剣に誓いなんて立てる。

それが、あの速人君がそこまでしなければならぬ相手という不安を作り出した。

言われるまでもなく、あのフレア空尉と切り結んで勝利するなんて真似を平然とやってのけた相手がどれだけの実力者なのか等、分か

りきっていた。

広域殲滅が躊躇いなく使えるような場所に出てきてくれればそれに越した事は無いが、相手だってそんな不用意な真似はしないだろう。

「まったく…本当ヒーロー失格やな、人の不安わざわざ煽るか普通？」

悪態を吐いては見るが、それが場違いな事であるのも同時に理解していた。

二刀を以つての護る誓い。

あの誓いは、速人君にとつて何より神聖な物。

そんなものまで持ち出されて、文句など言える訳も無い。

あの誓いに応えんとな…

いくら速人君と言っても、件のグリフとリライブを同時に相手取る事などできない。

しかも、上手く接触せんと速人君が出会う前に他のメンバーが全滅する可能性もある。

そして、采配に気を配るのは私の仕事だ。

必ず応えないといけない、機動六課の部隊長として。友人として。

何より、同じ総てを護りたい者として…

知らず握り締めていた手が、やけに熱く感じた。

S
I
D
E

O
U
T

第十四話・誓い故に示された危機（後書き）

ようやく切り札の詳細。事件一個挟んだ後で（汗）

歩法・神風

通常の神速中、動作そのものも速くはなるものの、身体能力と知覚能力の上限に差があるためか自分の動きも緩やかである。

その領域で普段の感覚で動かす為に動作を強化する。

ただし、強度が上がっていないので秒に満たない時間でも肉離れ、骨折などを引き起こす。

第十五話・墜ちた天使の逸れた願い

第十五話・墜ちた天使の逸れた願い

Side〜リライブ

彼女達と出会ったのは、とある研究所を襲撃した時の事だった。

強大な魔力反応を感知した私は眉を顰める。

「オーバース？違法研究者にしては大した奴を雇ってた…って事かな？」

事情はともあれ、野放しにしておける訳も無いので顔を出す事にした私は、魔力反応があった場所に向かって進む。

爆炎の中で見つけた人影は、掌に収まるほどの少女を抱えていた。優しく…その身を労わる様に。

「ふうん…どうやらこの連中と同類頂…って訳ではないみたいだね。」

「貴様は…白い墮天使か。」

「その名前も有名になっちゃったね。」

無骨な男性と傍らにいる少女に見据えられ、私は苦笑する。

爆炎に包まれる施設から、そこらに倒れてる研究員を転移魔法で外へ運ぶ。

「とりあえず脱出しようか、随分派手にやってくれたみたいだしね。」

それだけ告げて、私は外へ出た。

表に転がっている連中を拘束してその場に放置する。後は騒ぎを聞きつけた局員が来て、相応の扱いをするだろう。

拘束した連中を置いて、私は離れた所に感じた転移反応を追う。

ついた所に、さっき会った無骨な男と少女がいた。

「ま、当然の対処だとは思いつけど。ちょっと話ぐらいしてかない？」

「広域次元犯罪者と話す事など無い。」

「それはお互い様でしょ？それに…戦うよりはお得な話だと思うんだけど。」

特に構えずに告げる。

私は基本魔力を伏せているが、今までの所業はニュースで特集組まれる位には騒ぎになってる私の実力は知っているだろうし、仮に私に勝てる自身があったとしてもこんな所で戦えば管理局に捕捉される。

そんな事は向こうも百も承知なのだろう。異物である私に対してデ
バイス一つ抜かずにただ警戒するだけに留めている。

「此方から質問させてもらう、構わないな？」

「うん、いいよ。」

話に応じてくれる事になった彼等と幾らかの情報を交換した私は…

「うつつ…くつそー…やな夢だ…」

傍から聞こえて来たアギトの声に浅い眠りから覚める。

夢…か。

私にとっては通過点、この10年ずっとそうしてきた事の一つ
に過ぎない始まり。

軽いとは言わないけど、もっと強く残っている記憶は他にある。

なのに、今どうしてこんな夢を見たのか…

『お前の事だ、何かあるのは想像つくんだけどさ…本気でこんなや
り方で満足なのか？』

きつと、あの胸に刺さる問いのせいだ。

管理局に…ルールに縛られて救いきれない人達に悪人扱いされても、何一つ痛い事は無かった。

なのは達のような真っ直ぐな娘と敵対するのに抵抗がなかったと言えは嘘にはなるけど、望む場所に辿り付く為に競い合うのが争いである以上躊躇う気はなかった。

けど…無垢な少女が眠る場所をあんな砲撃で撃てるような人達と同類だと言う事實は、到底私が満足できる物じゃない。

私はどうすれば

「…止めだ。」

小さく呟いて、頭を振る。

この身の力に立てた誓い、届かぬ願いを叶える、ただその為だけに進むと決めている。

完全に満足できる答えなどただの欲張りだ、であれば捨てられない物の為にただ前へ。

軽く握った自分の拳を眺め、揺らがないよう心に決めようとして…

こんな誓いじゃ速人には負けそうだな…と思ってしまった。

現実を承知であちこちに手を伸ばし続けている彼に比べ、握っている自分の拳があまりに小さい気がしてならない。

全く、頭を抱える破目になる原因は全部君じゃないか、何処がヒーローだ。

「意地悪。」

八つ当たり気味なのは分かっていたが、言わずにはいられなかった。

S i d e 〱 キ ャ ロ 〱 ル 〱 ル シ エ

速人さんのお話は、事件のその日は報告書とかもあって忙しくて、次の日の朝食を一緒にとりながらになった。

「成程ね…去り際に謝っていったあいつがあちこちで無茶苦茶やっている犯罪者と被らない…と。」

「はい…」

分からなかった。何で白い堕天使とまで呼ばれるあの人が、あれだけ躊躇いなく戦える程に敵対しているのに謝って来るなんて。

「何でもなにもあいつ御人好しだな。へりごと打ち落とすなんて真似する作戦にほいほい参加してたのが申し訳なかったんだろ。」

「人がいいなら、犯罪何て簡単に出来ないんじゃないですか？」

私の疑問に、速人さんは笑みを見せる。

「そこには落とし穴があつてな。キャロは赤信号は渡らないな？」

「え？あ、はい。」

いきなりの問いかけに頷いて応える。

車がある所では当たり前前の事だし、局員として働くならもっと複雑なルールがついて回る。

それ位の事を守らない筈が無い。

「じゃ、道路の真ん中でおじいさんが倒れている所に車が向かっていたとしても…赤信号を渡らず黙って見てるか？」

「そんな事は無いです！助けます！」

そんな状況で何もしないなんてありえない。

自信を持って答えると、速人さんは指を立てる。

「それがあいつだ。ルールを守ってる連中つて言うのはあいつにとつては『そんな状況でも信号を守って動かない連中』の事を指す。」

「そ、そんな事！」

「勿論ただの例え話だけど…質量兵器を使わないと護れない人がいる…とか言う状況ならどうだ？」

まるでフェイトさん達まで含めて馬鹿にされたような気がして声を抑えられなかったけど、続けられた説明に言葉が返せなくなった。

質量兵器。管理局が危険だと使用を禁じている、スイッチ一つで子供でも使えて、町一つでも滅ぼす物さえあると言つ。

「必要があれば何だつてやる。質量兵器を使い、非殺傷設定を切つても戦う。その戦いでどれだけ数の非難を浴びても。そういう

馬鹿なんだよ、アイツは。」

悪い人に見えない犯罪者。

フェイトさんでさえなのはさんと戦っていた時があるくらいなんだ、
リライヴがそんな人でも不思議じゃない。

と、少し疑問が湧いた。

「速人さんは…」

「ん？」

「速人さんはどうなんですか？」

管理局に入らないのは無茶を通すためだと自分で言っていた。
なら速人さんだってリライヴと同じ…

突然、速人さんは空になったカップを放り投げる。

宙を舞ったカップが床に触れ…

る前に、再び宙を舞った。

持ち手に向かつてきらきらと光る何かが、速人さんの指から伸びて
いる。

手元に戻ってきたカップを置いた速人さんは、とても楽しそうに笑
みを見せて…

「これで救えば、赤信号もお構いなし…ってね。」

「あ…」

それだけで実感できた。

速人さんは、ずっとそうして来たんだ。リライブと管理局の間位の位置を、まるで綱渡りでもするかのようにな。

「けど、大好きなフェイトさんを困らせたくなくなかったら真似しちゃダメだぞ。」

「は、はい……」

人差し指を口元に立てる速人さん。

軽い言い方だったけど、今の私にはどう頑張っても真似できそうに無いほど難しい道だと分かる。

普段からこんな調子だから見え辛いけど、この人が本当に強い人なんだってよく分かった。

S I D E O U T

フェイトに寄り添われて燃え尽きているはやてを見つけた俺は、傍に寄ってみた。
傍にいるフェイトも明らかに暗い面持ちで、通夜でも見ているようだった。

「どうしたんだ？」

「あ、速人…実は……」

フェイトが言いかけた所ではやてが椅子に頭を乗せるように背を反

らす。

乾いた笑い声を出すはやては、完っ全に燃え尽きているようだ。そんなはやてに代わるように、フェイトが説明を始めてくれた。

「機動六課査察の動きが地上本部にあるみたいなんだ。ただの部隊編成自体、普通の部隊じゃ考えられない位の異常を抱えてるから。」

「初戦は全滅、二戦目で借りとする民間魔導師が重体、つい最近リライヴ対策の名目で合同出事件にあたってるとるフレア空尉がまるで関係ないところで重傷。こんなにごまかせ言っんや。はははははは…。」

力ないはやての補足に、フェイトは肩を落とした。

絵を描け、と言われたら俺は今のはやてには間違いなく色を塗らない。

部隊回すつてのも大変なんだな…

「フレアは管理局にしてみれば『いつも通り』だし、リライヴ絡みの事件ってあいつの桁外れな戦闘力のせいであんまり問題にならないんじゃないのか？」

「そこにかかるしかないけど、地上本部は厳しいから…」

フェイトが暗い面持ちで呟く。

地上本部…レジアス中将が相手となると、そう簡単には見逃して貰えないだろう。

「問題なのはレジアス中将だよな？手はなくもないぜ。」

「何やて!？」

跳ね起きるはやて。

ビククリしたんだろうな、無理も無いが。

「けど裏技だ、お試し部隊の存続に使うのは軽すぎるんじゃないか？」

いい話だと思っていたのか、はやてが苦しそうに表情を歪めた。裏技なんて言われてほいほい使いたくはない筈。

「…せやな、どうせ非公式の話もある訳やし、速人君がおっても問題ないか。」

何処か諦めたような口調のはやてが、キーを操作する。

「これから聖王教会に報告に行くんよ、なのはちゃんと一緒に」「うええええええええええん！！！！！！」

言いかけたはやての言葉を遮るように、モニターから泣き声が聞こえて来た。

なのはにしがみついている少女が泣き叫んでいた。

「あー、こら。泣かない、泣かないで。」

「兄さんやお前じゃあるまいしそんなんで泣き止むか馬鹿。」

男の子なら砂場に飛び込み雪に埋まり、女の子なら可愛い人形に名前をつけて、そんな歳から戦闘訓練してきた奴には子供の相手は荷が重かつたらしい。

悲しい時は泣くものだ、俺はむしろあの娘が羨ましい。

そんな俺の内心を知るはずも無く、モニター越しに呆れた俺に頭にくきたらしいなのは、最近にしては珍しく怒っているのが分かり易

目で俺を睨んできた。

『いきなり通信越しに偉そうに』

『ひぐっ！』

『あ、ご、ごめん怒鳴ったりして。』

モニターに怒鳴りかかりそうになったなのはに緊張した女の子が、変な呼吸と共に泣き声を止め、なのはにこれ以上ない程力いっぱいしがみつく。

怯えさせたのが分かったのか、なのはは慌てて女の子に視線を戻して宥め始めた。

慣れないと大変そうだな、ホント。

「しかし見事だったな、保母さんとか向いてるんじゃないか？」
「そんな事ないよ。ただちよっとなれてるだけで。」

へりの中、今回の功労者たるフェイトは俺の褒め言葉に照れたような反応を返す。
何しろあっという間に少女：ヴィヴィオを宥めてなのはを離させたのだ。

「あれはフェイトにしか無理だろうな。女性が三人いるのに情けない……」

「速人君は中身エリオより年下の少年やしな。」
「褒め言葉だな！」

はやての返しに自信満々にそう答えると、なのはとはやてから呆れたような視線が向けられた。

「でも本当にいいの？速人お兄ちゃんがいて。協力して貰ってるとは言っても六課自体に関しては本当に部外者なのに。」

「六課の為に裏技使って貰うんならそれ位はな。それに速人君、もし六課解体されたらどうする？」

不安げにはやてに問いかけるのは。だが、はやては何かを確信しているように俺に問いを投げかけてきた。

「リライヴはともかく、スカリエッティのほうは放置できないし依頼が出なければ自力で動くけど？」

「…ごめんはやてちゃん、身内が困る人で。」

答えると、何故かなのはが頭を下げた。

管理局が扱う事件に民間人が勝手に動くなって事か？分からなくも無いが、今このタイミングで管理局に六課以外の対応策なんて撃てないだろうに放置しろとでも

「速人、単独でどうにかしようなんて無茶な事考えたら駄目だよ。」
「あ、俺の心配か。」

フェイトの言葉に気付いたことを確認の意味も込めて口にすると、三人は揃って頷いた。

全く、気にしなくてもいい事を。

「高町なのは、一等空尉であります。」

「フェイトⅡⅠⅡハラウオン執務官です。」

「フリーの魔導師速人、よろしく。」

片手を腰に、笑顔で明るく挨拶。

敬礼をしていた二人と傍にいたはやてが俺を睨んできた。

無礼な魔導師って事になってるからフランクに行ってみたんだが、何かおかしかっただろうか？

「初めまして。聖王教会教会騎士団騎士、カリムⅡグラシアと申します。お噂は何っていますよ高町速人さん。」

「あれ？俺の事知ってるの？」

わざわざ苗字を告げてくれるカリムさん。

意外に思って聞いてみると、笑みを返してくれた。

「私達は個人的にも友人だから、いつも通りで平気ですよ。」
「と言う事だが、聞かなかつた事にして外れてくれないか？」

折角の明るい声を台無しにする台詞に目をやると、クロノが俺を見据えていた。

「久々だつて言うのに酷いな。」

「君が言えた台詞じゃないだろう。」

相変わらずのクロノに怒られつつ椅子に座る。
なのは達ももう体裁を整えるのを止めたのか、無駄に畏まる事もなく席に着く。

「さて、昨日の動きについてのまとめと、改めて…機動六課設立の裏表について。それから…今後の話や。」

こうして、はやての仕切りと共に話が始まった。

簡単にまとめると、カリムさんの予言能力に、管理局地上本部の壊滅と管理局システムの崩壊が予言され、その対策として機動六課は設立されたらしい。

古代ベルカの解釈が難しい言語で現れる予言の為、よく当たる占い程度の中率らしいが、三提督も非公式ではあるが協力の約束を取り付けている程となるとそれなりに警戒してるんだろう。

「へえ、大変だな。」

納得したつもりだったのだが、何故か一斉に見られた。

「は、速人、そんな他人事みたいに……」

「他人事なんだろう？君にとっては。」

俺を咎めようとしたフェイトに対し、呆れつつも何処か納得した様子の子のクロノ。

そんなクロノの指摘に、軽く肩を竦める。

「そこまでは言わないさ、妹の職場だし。けど管理人がどうなろうと住んでる人には些細な問題だろ？」

住んでるマンションのオーナーが亡くなって息子さんに代わりました。と言われても正直大騒ぎにはならないだろう。

管理局に問題が出れば指導者に問題が発生するわけだから多少ごたごたはするだろうが、余程嫌がらせめいた決まりでも作られなければ、頭が変わっても大騒ぎする事じゃない。

「普通はな。だが今回その管理人に打って変わろうとしているのは広域次元犯罪者、ジェイル」スカリエツィである可能性が高い。

君はそれでも他人事で済ませられるのか？」

「そこは問題だな。」

返された問いは確かに大問題だ。

敵対象である局員はともかく、子供相手に砲撃かますような連中に世界を乗っ取られたらろくな事にならないだろう。

「たださ、皆して本当に時空管理局員って自覚あるのか？」

「何？」

「一人の異能力者が持つてる一つの能力で示された問題すら解決出来ないとなると、幾つあるかも分からない時空に、いくらあるかも分からない能力者や物品を管理するなんて出来ないだろうが。」

逆に言うと、そんな多岐にわたる問題を解決する組織が、一人の一人能力位超えられない訳が無い。つまり、真面目にやれば騒ぐ必要も無いはずだ。

「こんなんで心配する必要があるなら例え今乗り切った所でどっかで必ず大問題起こす。もし本当にこの予言だけで戦慄する位の実力しか無いならいつそ今の内に崩壊した方が後の為かもしれないぞ。」

「そして、予言を解決できる自信があるなら顰め面並べている必要も無い…か。君らしいといえ君らしい気もするが、簡単に言ってくれるな。」

軽口の裏を察したクロノが見事に俺の本心を告げる。

無論、俺は解決できると思ってる。故に真面目にやる必要こそあれど、そこまで心配はしていない。

一同もそれを察してくれたのか、なのはを除いて苦笑いを返してくれた。

「まあそうキツイ事言わんといて速人君。一人に振り回されるって意味では未だにリライヴ一人捕まえられとらん位やし、神経質な位が普通なんや。」

笑みをそのままに告げられたはやての何気ない一言。だが、眼に見えてなのはが表情を曇らせた。

「クロノ君、未だに彼女の目的とか過去とか分からないままなの？」
「残念ながらな。人助け…が目的のようにも思えるが、それにしては被害を出す事も多い。かと言って金の為だけに依頼を遂行するよ
うな人間じゃない事は彼女が『白い墮天使』と呼ばれるようになった
一件で分かっている。」

目的を絞れないからこそその神出鬼没。

管理局が未だにリライブを捕まえられないのはその辺りも関わって
いる。

「選んで救っているにしては管理、管理外問わずで救われている人
がいるし、何処かの馬鹿と違ってヒーロー気取りと言う訳でも無い
しな。」

俺を一瞥して告げるクロノ。

ユーノのこと散々使い魔呼ばわりしたりと結構兄さんっぽいところ
で弄ってくるからな…忍さんと組んで示し合わせたような嘘をさも
事実のように語る兄さんほど酷くは無いが。

「はやてちゃんは何か知らない？家に来てたこともあるって聞いた
けど。」

「何も聞いてへんよ。自分のことなんて殆ど喋らんかったし。」

なのはの問いかけにさも当たり前のように返すはやてだが…違和感
を覚えた。

はやては闇の書事件について殆ど何も知らないままだったことに責
任を感じているらしく、事ある毎に無理な決意が見えるのだが…そ
れが何で今の返答で出る？

知っててごまかすにしても、あのリライブが泣きながら話すような
過去をはやてに教えてるとは思えないんだが…

「ともかく、今日はこの辺までやな。局員だけで話したほうがええ関係ない内容は止めといたほうがええし。」
「そうですね、さすがに協力していただいてる六課の話以外を簡単に漏らす訳には行きませんね。」

俺が同席している今、黒い話は出来ないだろう。

管理局そのものの危機となればそれなりの大事だし、俺はここまで聞ければ十分だ。

後はレジアス中将か…気は引けるが何とかするしかない。

Side 高町なのは

『君たちも感づいたかもしれないが、はやては何処かりライブに対しての反応がおかしい。様子を見ておいてくれないか？同じ女性で幼馴染の二人のほうが、はやても話しやすいだろうし、こんな綱渡りの部隊を任されている彼女に無理をさせておきたくないからね。』

帰り際、クロノ君から私とフェイトちゃんに届けられた念話。

勿論私もフェイトちゃんもすぐに了承したけど…同時にちよっと悩んでいた。

はやてちゃんは、私達にも秘密で色々する事が多い。
今回のことだつてもし何か知つて話さない事を選んだなら、聞いて答えてくれるかどうか…

『なのは、私に考えがあるんだけど。任せてくれるかな？』
『ん、分かった。』

フェイトちゃんからの念話に素直に答える。

いい手が何も思いつかない私としては正直それしかなかった。

昔話を振るフェイトちゃんに合わせて、懐かしい話をしながら帰る。
お兄ちゃんとも別れて三人になつた所で…

「リニスの事覚えてる？」

「フェイトちゃんの家教師やる？覚えてるよ。」

フェイトちゃんから告げられた聞き覚えの無い名前に、はやてちゃんがすぐに答える。

確かに家庭教師の人の話は何度か出てたけど、名前を聞いたのは初めてのような…

「やつぱり見てたんだねはやて、闇の書の中にいた時の夢。」

一瞬硬直するはやてちゃん。

どういう事かと思つてフェイトちゃんに視線を移すと、フェイトちゃんは闇の書に取り込まれた後の事を説明してくれた。

アリシアちゃんがいて、優しいままのプレシアさんがいて、そんな中と一緒にいる、フェイトちゃんにとってこれ以上ない程に幸せな

夢。

その夢の中に、家庭教師だったりニスさんも出てきていたと言う事だった。

リニスさんの名前を知っている…というより今の過剰反応は、明らかにフェイトちゃんの夢を知っている事を意味していて、あの時リライブも闇の書に…

「……あーあ…やってもうたなあ…」

はやてちゃんが諦めたように呟いた。

やっぱり、はやてちゃんはリライブの事を知ってたみたい。

「聞かせて…くれる？」

静かに頷いたはやてちゃんから、リライブの話が語られた。

最悪、と言っている位に嫌な話だった。

自分のお母さんに売られて、道具として男の人に扱われ続け、傷ついたりすれば使いやすいうちに修理される。

身を守る一番の方法が、『使い勝手のいい道具であり続ける事』。

普通…壊れる。

私だってそんな状況に放りこまれば、今でさえどんなに気を強く持ったって必ず保つなんて保障は無いし、まして彼女の場合体が出来上がってすらいらない時期の話。

そんな中現れた管理局は…希望をちらつかせて去って行ってしまった。

「…あの子、私達と同じにはならないって決めとる。だから犯罪者や管理外世界の人を救ってまわつとるんや。」

プレシアさんの願いを叶えようとしたのも、闇の書の主のはやてちゃんを助けようとしたのも、管理外世界で魔法を使ったのも全部当てはまる。

管理世界で行われた単純な人助けは、管理局の手が遅かったから見かねてと言った所だろう。

「犯罪者の理由なんて言い訳も同然なのはわかつとるし、それで迷惑かけとる人もいる以上捕まえなアカン。せやけど…こんな話触れ回られて事件の記録に残るなんて…あんまりやんか…」

裁判にでもなつたときに知れていけば情報として持ち出されるだろうし、無断で誰も彼も知る事が出来るような状態にはしないだろうとはいえ、局の高官や白い墮天使対策を任される部隊の長ぐらいには知れ渡るだろう。

第一、何処でどんな人がどんな理由で助けを求めるとも分かった物じゃないのに、話した所で動向把握に繋がらない以上、ただ秘密をばらすだけになってしまう。

『…何で驚いてるの？私、猥褻罪だけは殺されてもごめんなんだけど。』

冗談めいた口調で告げられた言葉。けどこれは比喩でもなんでもない真実なんだ。

本当に殺されるよりも嫌な過去を触れ回る。

それも、一時は自分の命を救おうとさえしてくれていた人の。

そんな事が、はやてちゃんに出来る筈も無かった。

それ以上何を言う事も出来ずに帰り道を進む中、私は自分の気持ちに不思議な物を感じていた。

あまりリライヴちゃんに引け目を感じない。

あんな話を聞いて尚犯罪者だからと冷徹に対処できるのは、フレア

さんだけで十分だ。

現に私もフェイトちゃんを規則度外視で助けに行ったりしてるし、今だって命令に従うとは言え内容次第で不快感位覚える。

なのに引け目を感じないのはどうしてなのか、思い当たる事を考えて…

「ああ、そっか。」

彼女の大間違いに気が付いて、ようやく納得が出来た。

「どうしたのなの？」

「リライヴちゃんを止めるのに悪い気がしなかったんだけど、その理由が分かったんだ。」

隣を歩くフェイトちゃんは、ずっと暗い表情のままだった。

フェイトちゃんは優しいから、自分よりも苦しい境遇に放りこまれた彼女の事を悲しんでいたんだろう。

私の反応が意外だったのか、心配するように私を見るフェイトちゃんに、続きを話す。

「管理局と同じにならないって、規則に救われない人だけ『選んで救う』って…規則に沿って選んで救ってる私達と同じなんだ。やってることは同じで場所だけ違うって言うか…」

フェイトちゃんが、彼女の話を終えてから初めて暗い表情を消した。そのあと、何を思いついたのか苦笑いするフェイトちゃん。

「教えて他の事勧める？何もかも問答無用で救ってまわるヒーローさんの真似とか。」

「それも困ったものだよね。」

私とフェイトちゃんは、互いに肩を竦める。

お兄ちゃんは勿論、リライヴちゃんも悪い人じゃない。それでも、随分困った人たちだと、お兄ちゃんにいたっては味方ですらあるのにそんな事を思わずにはいられない。

止めさせてもらうよりリライヴちゃん、自分の目指す場所さえ間違えているんじゃないかあまりに虚しすぎるから…

S I D E O U T

第十五話・墜ちた天使の逸れた願い（後書き）

ほぼ丸々一話リライブについて。

毎回これくらい焦点絞れば…（汗）

なのは達は結局リライブの本音や行動に変なところがなくても、ただ犯罪者というだけで普通に対応するとは思いますが、『悲しい願いを撃ち抜く力』と銘打ってるの位なので気付きを持たせました。故にリライブちゃんと昔呼びで止めると宣言させてます。

第十六話・明暗の中で動く者

第十六話・明暗の中で動く者

「あたたたた…なんでえ？」

全身ロボロのスバルが俺の前で転がっている。
何でこんな事になっているのかと言つと…

「スバルを借りたい？」

俺の頼みに、なのはが訝しげな表情を見せる。

「勿論本人の希望も確認した上で構わないが、少しばかり予感があるな。」

なのはは厳しい視線で真っ直ぐに俺を見据えてくる。

「小手先の技巧ならともかく、フレアさんやお兄ちゃんほど『使える』ようになるのには途方も無い時間と密度の訓練が必要でしょ？ 魔導師としての戦い方で基礎を埋めてる今いきなりお兄ちゃんの方針に切り替えても効果が薄いよ。」

戦闘者側の訓練にも理解があるのはとしては、ちゃんと考えた上でそれでも意味が無いと思ったんだろう。事実、俺もその辺の魔導師なら数日や数ヶ月訓練するだけならなのはに任せっぱなしの方が効率いいと思う。管理世界では基本、敵も魔導師や武装使いだし。

「スバルの名前や技の型、何か思う所は無いか？」

「思う所もなにも、スバルのご先祖は地球出身だって聞いてるけど

…」

「それさっさと見えよ!!!」

思わせぶりな問いかけをして、かえって恥をかいてしまった。

あーもー、周知の事実だったんかい。

「魔導師用に色々弄くられてるものの、基本的にあれは『こつち側』の物だ。スバルが使えるなら選択肢を増やす意味はあると思う。」

なのはも相手に戦闘者がいる事は知っている。

加えて、余程規格外な事でもしない限り、人として相対すれば魔導師では手も足も出ないことも。

「…分かった、一応薦めてみる。」

そうして、スバルが祖先の原型を学ぶと聞いてか二つ返事で飛びついてきたため、組み手と相成ったわけだ。

で、何でもいいから格闘攻撃を一撃当ててみるという事で距離を詰めて殴り合い…にもならず、当てただけとは言えカウンター交じりの打撃を何度も受けたスバルは地面に転がる事になっていたのだ。

思い返している間に呼吸も整ってきたので、再度構える。

「よし、それじゃもう一回。」

「はい！」

リボルバーナックルを構えて、突進姿勢をとるスバル。

「うおおおおっ！！！！」

大した魔力も無い俺が真正面から受ければ例えデバイスで受けても危ない渾身の一撃…

「それはもつとまずいな。」

切って落とすように腕を落とすと、突進の勢いをそのままに回転したスバルは背中から地面に落ちた。

余裕で捌けるとはいえ、こんな一撃直撃したら死んでるんだが。魔導師って恐いな、全く。

S i d e 〱 スバル 〱 ナカジマ

「また見事にやられたわね…」

速人さんに、あたしの使っている格闘術、『シューティングアーツ』のルーツになる物を教えてもらえると聞いて、なのはさんに薦められた事もあって訓練を受けてみたけど…

一発当ててみる。と言われ、それすらこなせないまま終わってしまった。

と言うか汗ひとつ掻かせる事ができなかった。

一方あたしは、転ばされたりなんだりで見かけが物凄い酷い有様になっていた。

「白い墮天使対策って言う位だから強いとは思ってたけど…」

何も出来ないとは、正直思ってたかった。

六課に来てからハードな訓練をずっとこなしてきたし、しかも訓練をつけてくれたのがなのはさん達。

だっていうのに、あんな風にあしらわれっぱなしだとさすがにちょっと凹む。

「何にしても、さっさとモノにして来なさい。」

「…うん。」

強くなるって決めて鍛えたシューティングアーツ。
今はまだ見えないけれど、先があるならきつとたどり着いてみせる。

昼の訓練は通常通りなのはさんの訓練に混ぜられて、夕食後に呼び出される。

訓練場は森で展開されていた。

「身体は動くか？」

「はい！」

出撃はいつあっても大丈夫な程度に絞られるのが常だから、疲れてはいるけどキチンと戦える。

「朝はいきなり振ったが、そもそも何が狙いの訓練なのかも分からないままだとキツイよな。と言う訳で今度は俺が攻撃するから防ぎ切ってみる。」

「はい！」

実演してもらえたらこれ以上無い位いい機会だ。

今まで通り喰らったら痛い目にあうだろうけど、体験させられた方が印象に残る。

絶対に覚えて、必ずものにしてみせる。

と、意気込んで始まった防御訓練だったんだけど…弱かった。

フォームや動きは凄い綺麗だし、全く途切れる事も無いんだけど…
軽い。

受けても全く揺らがないし、こんなんじゃ防御崩すなんてどうやって
たつてできっこない気がする。

振るわれる右拳の軌道を左腕で塞ぎ…

「ぶっ!!」

鼻先を小突かれた。

大して痛くもなかったから、よろけつつも態勢を整えたあたしは再び
構えようとして…

アレ…今何を受けた？

多分右拳。それは分かるんだけど…防いだはずだ。

避けられる態勢で防ぐつもりで構えたのに『軌道を見誤る』何てク
ロスレンジ担当としては致命にも程がある。あれだけ鍛えてもらっ
たし、いくらなんでもそんな簡単なミスする筈が…

「これが、なのは達隊長陣がリライヴと戦いにならず、俺やフレア
があいつの対策として呼ばれる理由の一つ…見切りだ。」

「見切りって…」

何となく分かる気もするけど、隊長達が出来ていないとは思えない。

「強力な防護服、広範囲に及ぶ防御幕、超高速移動、それらを塗り
つぶしぶち破る為の攻撃…魔導師の戦闘はこんな大味な物になっ
てるから俺達とは精度が桁違いなんだ。この距離ですつと斬りあい、
殴り合いやってると言えば想像つくだろ？」

腕を伸ばして手の甲をあたしの頬に当てる速人さん。

少し考えて…とても恐い事だと気が付いた。

どんなになのはさんの砲撃魔法が速いと言っても発射までに一秒前
後、着弾までで考えると距離にもよるが倍位の時間がある。シュー
ターなんかも同様だ。

対して、この距離で両手にナイフを持ってその一、二秒で振れる回
数は、一般人でも倍以上だろう。

魔導師ならバリアジャケットがあるからそんな程度では死なないけ
ど、速人さんの世界にそんなものは無い。

つまり…当たったら致命的な攻撃をこの距離で絶え間なく交え続ける
だけの見切りが必須だと言う事。

「今俺が使ったのは俺が修行してたとこの業だから少し特殊ではあ
るが、同レベルの力量を持つ相手なら防ぐ事はできる。つまり…」

「今のを防ぐか速人さんに一撃当てられれば、近づいた事になる…
ですね。」

「防ぐのはともかく、当てる方はそうそう上手くいかないだろうが
な。フレアでも数年がかりの話だ。」

すごい物を受けてやる気になっていたのに、数年がかりと言われて
少し驚く。

難しいのも、命懸けで修行してきたとも聞いているけど、すぐに力
が必要になる今そんなにかかったら…

あたしが不安を抱く中、速人さんは微笑みかけてくる。

「まあヴィータに対一で勝てる位になればとりあえずましだろ。そ
れくらいなら早めに何とかなるさ。」

「うえええ！！？」

そんな笑みから告げられた言葉は、いい加減に驚きなれてきたはず
のあたしがまた驚くのには十分だった。

確かにそこまでいければ物凄く役に立つけど…ヴィータ副隊長と一
対一で勝つほうが速人さんに一撃当てるより簡単なんだろうか？

「重く大型の武器は破壊力こそあるものの、攻撃の型が限られ、連
撃に向かない。シグナム位の身長があれば武器の振れない距離で蹴
りを駆使して凌ぐ事もできるだろうが、リーチが皆無にあいつには
無理だ。第一、お前も格闘で負ける気は無いだろ？」

即答したかったけど、隊長戦なんかの光景を…あの出鱈目な強さを
思い出すと、ひよっとしてデバイス無いくらいじゃどうにもならな
いかも知れないと思う。

と、気になった事があるから確認することにした。

「あ、あの…でもそれってヴィータ副隊長を倒す為に使えるって意味ですよね？」

以前、ティアとなのはさんを倒す為に練習したクロスシフトC。

誰かに勝ったからそれでいいとか強いとか、そういう問題じゃない事はよく知っているし、反省もした。

そうになると、ヴィータ副隊長専用の戦闘法じゃ意味が…

「馬鹿、見切りは誰相手でも近接戦闘をするなら必須だよ。その中であいつのが一番見やすいつてだけの話だ。それに、見やすいつたつて隊長陣の中での話だ。楽じゃないぜ、鉄槌の騎士を超えるのは

「はい。」

身にしみて分かっていた事なので頷くと、速人さんは笑顔で構える。

「なら頑張ってくか。」

「はい！」

練習を再開したあたしは、その後も暫くよく分からないままに叩かれ続けた。

やっぱり難しい…でも諦めないぞ…！

S I D E O U T

翌日、俺はレジアス中將に内密の呼び出しを受けて、六課を抜け出して面会に来ていた。

「や、レジアスさん。」

「貴様」

「礼儀なんていいだろ？公式で明るい話って訳じゃないし。」

怒りかけた案内役をしてくれた副官のオーリスさんだったが、それをサラリと押しとどめると、中將の方も話を優先したかったのか片手で彼女を制した。

「で？またなんでこんなところに呼び出したんですか？」

「一体何処でどうやってこんな物入手した。」

中將は机の上に置かれた一枚の写真を指差す。そこにはある火災の消化作業を行うリライヴの姿が映っていた。

公式記事で地上部隊によって鎮火されたと報道された物である。

査察の前にオーリスさんにこれを渡して、『お互い様と言う事にしてくれない？』と持ちかけたのだ。

「現場で普通に。俺これでも探りとか得意だからさ。」

あっさり答えると、眉を顰める中將。

「こんな物で脅迫のつもりか？」

「違う違う。オーリスさんちゃんと伝えてくれたの？俺は『お互い様』にしてくれて言ったんだぜ？」

「何が違うと言うのだ。」

どちらにしろ脅迫だって言いたいらしい。
まあ言っちゃうとそうなるのかもれないけど…

「俺はもとより、六課自体にも貴方の邪魔をする気がない。って言う点で脅迫とは違うつもりなんだけどな。実際、こういう情報操作っていらぬ誤解を避ける為にやっといたほうがいいこともあるし。」

「若造が知った風な口を。それとも自身の手柄を隠されたことへの皮肉か？高町速人。」

「あ、やっぱ知ってたのか。なら話が早くていいな。」

どうやらさすがに中将ともなれば伏せられているはずの情報なんてものも結構知れているらしい。

けど、それなら俺が地球での幾つかの事件の関わりを伏せる事に関して二つ返事で頷いたことも知ってる筈だから、話が楽だ。

「で…結論としてはどう？六課見逃しておいてくれる？リライブに振り回されてるって点では対して変わらないし…さ。」

あくまで笑顔で語る俺を見ながら、恐らくは何かを読み取るうとしているのだろう中将。

暫くそうしていたが、面白くなさそうに顔を逸らした。

「チツ…好きにしろ。」

「ありがとう。」

結局、見逃してくれるようだ。

素直に礼を言ったつもりだったのだが、あくまで面白くなさそうだった。

「迷惑ついでにもう一つおせっかいを。予言を信じてないって話だったけど、それでも対策をしたほうがいいんじゃないかと。」

「貴様：内政干渉までする気か？」

「善良な一般市民にそんな大仰な事が出来るか。」

やっぱり余計なお世話だったらしく、思いっきり睨まれる。

軽く肩を竦め、話を続ける。

「敵を知り、己を知れば百戦危うからず。故郷の諺って奴なんだが、レアスキルや他所の口出しをを嫌うのはともかく、その効果に関しては自覚あるんじゃないのか？」

強力な魔導師や高等なスキルの保持者をことごとく奪われて来たからこそ怒りを覚えているはずの中将が、そのスキルが信用に値しない物だなんて思ってる筈が無い。

「それに：教会やら本局に軽く嫌がらせも出来るしな。」

「何？」

六課を庇っているはずの俺がこんな事を言い出したのが不思議だったのか、怪訝な顔をする中将。オーリスさんも少し驚いているようだった。

「もし対策して何も起きなければ、『地上の戦力を無意味に借り出すとはどういうつもりだ』とかこれでもかかって位言っただけ、ことが起きた時に中将の対策だけで片がつくなら『貴様は邪魔だ、地上を舐めるな』と大々的な功績に挙げられる。」

前者は本当に嫌がらせレベルの話なので高い効果ではないが、後者

は結構な宣伝になるだろう。
言ったら怒らせそうだから言わなかったが、仮にしくじるにしても
それでも無策より対策あったほうが心象はいいだろう。

「…何故だ？」

「え？」

「貴様は八神はやての回し者だろう？効果の有無はともかく何故そんな事を言う。」

まさかそんな事を聞かれるとは思ってなかった。

第一この話だつて見方を変えれば本局からのさりげない対策催促と思われても不思議では無いのに。違っけど。

「何でつてまあ…対策取ってくれたほうが安全だし、本局がとか教会がとかは俺どうでもいいんだよ。平和と幸せが護られればな。」

そこで区切つて真っ直ぐに中将を見る。

「噂のはやて達は幼馴染だ、そのために本気で動いてるのはよく知ってる。でも中将だつて戦力骨抜きにされながら尚この場を護り続けてきた人だ。讚えこそすれ邪魔なんてする気は無いんだ。これ位のことは何処の大人もやってるし、いちいち騒がないよ。」

こっちでも持つてあるリライブの写真をひらひらと見せながらつげ、背を向けた。

部屋を出るのにあわせてオーリスさんがついてくる。

見送り位するのが普通なのかな？こんな話しに来た奴なんか丁重に扱いたくないだろうに。

エレベーターを下る中、オーリスさんが口を開く。

「貴方は何処まで…」

冷静で、聞こえやすい声で話す彼女にしては珍しくかすれたような問いかけ。

「…失礼、忘れてください。」

「了解。」

結局、続きを言うのを止めたオーリスさんとは、それ以上の言葉を交わす事無く別れた。

聞かれれば答えづらい質問にはなるだろうから止めてくれてよかった。

Side 〱 高町美由希

「…という事だから、グリフに関しての搜索は完全に打ち切っ
ていみたいだよ。」

『そうか…分かった。他方には私から上手く伝えておくよ。』

「うん、分かった。」

異界から届いた、脱走した戦闘者グリフを発見したっていう連絡を御神の母さんに伝える。

『相手をするのはやっぱり…』

「今の所、速人の予定だよ。私達と修行した事もある人が重傷を負わされたって。」

『何とかなるのかい？』

静かに出された問いに、私はすぐに答えを返せなかった。

捕まえた際に見た事はあるけど…捕らえてあるのに背中に寒い物を感じた。

速人が言うには、恭ちゃんと同等に感じたらしい。速人もあれから強くはなっているけど、恭ちゃんに届いているとは…

「大丈夫だよ。」

それでも、言い切った。

「速人は自分で言うようなヒーローをちゃんとやれてるし。あの恭ちゃんに神速を教えるのもいいと思わせる位に。」

『…それは、信用できそうだね。』

電話越しに聞こえる母さんの声が、少し柔らかくなった気がした。

『それじゃあ、また。』

「うん、またね母さん。」

電話を切って、夜の空を見上げる。

この世界からずっと遠い、空すら繋がっていない世界で戦っている
だろう弟を想う。

真つ暗な闇の底から引き上げられて私達の所に来たのに、綺麗事と
さえ言われかねないほどに綺麗な場所を目指してあがき続けている
速人。

事件一つを解決するだけで叶う願いでは無いけれど、それでも…

「皆を…護れるといいね…」

祈らずにはいられなかった。

どれほどの物を賭して叶えようとしているかを知っている身として…

S I D E O U T

第十六話・明暗の中で動く者（後書き）

スバル始動。でも数年単位でグリフと修行できてるナンバーズの面々と違つて間に合うかどうか（汗）

リライヴの活動横取り写真だけで見逃す中將が軽いように見えるかもしれませんが、内心の読めない速人の手札がこれですまない可能性を深読みした為です。

第十七話・戦闘能力とは

第十七話・戦闘能力とは

「何の騒ぎだこれ？」

「あ、速人さん。」

何処かのライブ会場のような声が聞こえた方に顔を出すと、スバルとアルトさんを筆頭に大騒ぎが起こっていた。

少しだけ離れた位置から様子を伺っていたティアナに声をかけると、少し呆れたように説明してくれた。

「いや…ヴィヴィオがなのはさんとフェイト隊長どっちが強いのかって。」

「そこから雑談してたらこんな状態に…」

「成程ね。」

確かにギャラリーが騒ぐにはいいネタではある。アイドル…というと語弊はあるが、局の象徴のような美形で最強クラスの魔導師がごろごろ集まっているんだ、本人達にしてみれば競走馬扱いのようでもいい気はしないだろうが、外野にそれは関係ない。と言っか有名税のような物だろうな…

「ちなみに、速人さんは誰だと思えます？六課で一番強いのって。」

エリオが興味津々と言った表情で聞いてくる。
賭けや騒ぎはともかく、そういうのにはやっぱり憧れあるんだろう。

「俺。」

分かりきっている答えではあるので悩む間も無く即答。

…したのだが、なんか三人の反応が良くない。

「あー…やっぱり尊敬できる隊長さんたちから選ばないと気分悪い？」

「い、いえその…あんまりにも自然に言い切るのでもちょっと驚いただけです。」

「ふーん…」

俺に悪いと思ったのか焦ったようにそう返すティアナ。

とは言え正直そんな事は聞いてないってのが本音だろう。騒ぎの中心になってる表にも名前出て無いしな。

「ま、隊長陣四人の中で誰が最強か…って話になったら…」
「…なったら？」

案の定と言うべきか、このフリに思いつきり食いつく三人。
期待させて悪いが、あんまり面白い話じゃない。

「当人達の誰に聞いてもまともな答えは返ってこないだろうな。」
「え？」

困惑する三人をおいて、俺はその場を離れた。

こればかりはしょうがない、何しろこの論争自体あいつらにとっ
ては無意味なんだから。

Side ㄱ ティアナ ㄱ ランスタ ㄱ

「で、速人さんの言うとおり全滅だったって訳ね……」

「はい……」

「いや、あたしも何だけどね。」

あたしは部隊長に話を聞いてみたが、直接戦ったらキャラと戦って
も危ないとすら言われただけで終わってしまった。

エリオはヴィータ副隊長に誰が強いかと聞いて、状況によると返さ
れたそうだ。

キャラも特に収穫なしで、スバルはなのはさんから問題を貰ってき
た。

「自分より強い相手に勝つためには、自分の方が相手より強くない
といけない……って、言葉遊びじゃ無いわよね？」

「う、うん…なのはさんがそんな事すると思えないし。」

完全に矛盾しているように思える話。

その矛盾と意味を考えろって事らしいけど…

「揃って何を考え込んでるんだ？」

「あ、速人さん。」

結局速人さんの予想通りだったことを伝え、なのはさんから出された問題を告げる。

「アイツが問題として出したなら、考えて答えを持ってくることを期待してるんだろっな、頑張れよ。」

「はい。あ、でも一つだけいいですか？」

当然答えを貰う気はなかったけど、気になることはあったので呼び止める。

「どうして皆からまともな答えが返ってこないことが分かってたんですか？」

「あ、それは僕も気になります。」

「ああ、それか。」

あたし達が興味を隠さずに聞く中、速人さんはまるでなんでもないことのように簡単に答える。

「意味無いからだよ、『私が一番強いんだー』とかが。」

「意味が無い…ですか？」

局の任務をこなすなら強いに越したことは無いはず。意味が無いと

いづのはどういふことなのか、それだけではさっぱり分からない。

「バインドや防御、結界形成なんかがとてつもなく出来る変身魔法を使って女湯に潜り込むような奴でもなのは達と同等に重用されるって事さ。直接戦ったら雑魚一体にも勝てない戦闘能力でも救う守る捕らえるのに役に立てば、最強何か目指さなくてもいいんだよ。」

「は、はあ……」

やけに具体的な話だった。って言うか普通に犯罪者だ。

この人が普通に話すってことは特に止めたりする必要が無いって事だろう。むしろ深く聞いたほうが面倒な事になる気がする。ここは流しておこう。

けど分かった事もあった。

「キャラが竜召喚なしだと私達の中で一番弱いけど、いないとかない困るのと同じって事ですね。」

「そういう事だ。それに、誰にも負けない位強くても使い辛いと意味無いしな。たとえば…一瞬で超強力な攻撃が発動できるものの、効果範囲が星一つほどで物理破壊、しかも調整できない…とか。」

あたしの例えに補足する形で出された例は、確かにいくら強くても意味が無いものだった。

「午後は出向研修だっけ？まあ頑張つて。」

「はい。」

去っていく速人さんの姿が見えなくなった頃合を見て、スバルを見る。

「あの訓練してる所とか見た事無いけど、実際強いのか？」

いくらリライブとの戦いに全力をつぎ込む必要があるとは言え、普段から訓練してる様子が無いって言うのはさすがに強いのか疑ってしまう。

けど、一瞬で変わったスバルの表情が、あたしの質問が無意味だったと悟らせた。

「未だにクリーンヒットなし、それどころかガードすらして貰えない。」

「「ええっ!?!」」

「う…っそ…」

しよぼんと告げるスバルだったけど、どう返していいか分からなかった。

正直、なのはさん達でも難しい芸当の筈、それを一試合とか模擬戦一回とかじゃなくて訓練開始から今までずっと続けていると言うのか。

いくらリライブ対策できたとは言え、自分で一番強いなんて言い切るのはいすぎじゃないかと思っていたけど、本当にとんでもない人だ。

「そんなに速いの？」

「そうじゃないんだけど…速人さんは見切りが違っって言った。

魔法が無いから回避も防御も便利な物はなくて、一撃でも当たったら危険な物をこの距離で扱うからだって。」

スバルが腕を伸ばしてあたしの前に拳を翳す。

確かに一撃でアウトの状態でこの距離で攻防繰り返すとすると神経使う所の話じゃないわね…

「あ、じゃあその見切りを上手くするって言うのはどうですか？隊長たちより魔力も魔法も使えない速人さんが最強って言える位なんですか…らああ!？」

「実戦経験半年未満のあたしらがホイホイ隊長たちより上手い事やれるようになるわけ無いでしょうが!」

簡単に言つてのけたエリオにうめぼしをかけながら、それでも確かに引つかかる物を感じていた。

エリオが言う通り、魔力値が低い以上パワーもスピードも隊長たちより低いはずの速人さんが、勝つための手段を持っている。

けどまさか、なのはさんだってあたし達に『そんなもの数年単位で見につけられるわけが無いから諦める』何て言つつもりはない筈。

「おお、お前ら。」

と、ヴィータ副隊長が通りかかり、エリオの頭から手を離す。

「108行きだがちと先行してくれ。訓練開始時間にはあたしも入ってるからな。」

「……はいっ。」「」「」

とりあえず今の所は後回しになりそうだった。

S I D E O U T

「しっかし逃げてるよなあ。」
「何が？」

俺の呟きを聞き取ったなのはが、少し不機嫌そうに俺を見る。
逃げてるなんて聞き心地のいい台詞では無いししょうがない。特に
コイツは。

「お前がフワードに放りこんだ問題だよ。相手のタイプが何だろ
うが、地形がどこだろうが、最後立ってた奴が勝者で強者。組織の
戦力としては意味ある問いだけど、単なる闘士にとっては侮辱もい
い所だぜ。」

「組織として意味があるならいいよ。単なる闘士になって欲しい訳
じゃないし。」

呆れ混じりに告げる俺に対して返されたなのはの返答も尤もな物だ
った。

さつきそう話して来たばかりではあるし。ただ…

「お前だって俺に負けて『弱いけど勝っちゃったあ』とか言われた
らむかつくだろう？」

「それは…そんな事無いよ。」

一瞬同意しかけたのはだったが、何を思い出したのか慌てて首を
横に振る。

「嘘だろ？最早嫌味じゃねえか。」

「まあ……そう…ただ…」

珍しく歯切れの悪い返答をするのは。

「なんかあったのか？」

「この問題出してくれた先生が」

「わかった、俺が悪かった。すみません、ごめんなさい。」

恐らく意味合い的に同じ事言っただろう。

何しろなのはとフェイトは訓練当初からAAAの化物だった訳だし、そんな事言われるには十分すぎる。

しかも、恩師に向かって『腹立つ嫌味を言う人』何て言えるはずも無い。

速効で平謝りした俺を見ながら小さく笑うのは。

「でも確かに、お兄ちゃんにそれ言われたら物凄く腹立つと思うけど。」

苦笑交じりに告げたなのに対して胸を張って答える。

「言わないさ、俺強いから。」

少しの間を置いて、軽く小突かれた。

自信満々に告げてても結局怒るんかい、どうしろと。

忙しいなのはと別れ、その背を見ながら思う。

一番役に立ってるのは、きつとお前だろうと。

誰一人欠けてもまずいのは分かるし、部隊の旗印になっているのはやてだ。

だけど…なのはは前線の旗印のような物になっている、特にフォワードにとって。

しかもこの部隊、前線が強くないと意味が無いものだ。

戦闘では強いものの、あくまで俺は外部の人間で露払い。問題は無いんだが…

理想通りに進めている妹が、少しばかり羨ましかった。

何かのテストをしていたらしい敵の出現によって急遽出勤となったが、フォワード陣がアツサリとガジェット群を片付けたお陰でそう問題もなく片がついた。

で、代表らしいスバルが、なのはの問いかけに対して答えを持ってきた。

自分より総合力で強い相手に勝つためには、自分が持っている相手より強い部分で戦う。

と言うのが前線で出した答えらしい。

答えを聞いたなのは少し嬉しそうだが…

「いいのか？」

「…何が？」

問いかけると、水を差されたと思ったのかなのはの表情に少し影が差す。

スバルも自信はあったのか、少し不思議そうに俺を見た。

「今の当たりだと、なのはが射砲撃、フェイトが速度、はやてが魔力値、シグナムが剣技、ヴィータが破壊力で互角かそれ以下のリライヴには六課の誰一人勝てない事になるぞ？」

「え！あ…！」

失敗したと思ったのか、慌てたスバルが俺となのはを交互に見る。実際問題として勝てない訳だが、だからと言って事件が起きた時一人だったら『無理ですすみません諦めます』と言う訳には行かないだろう。

「ギンガはスバルの師匠らしいが、同じ格闘技法の先輩で恐らく全能力上回ってるだろうギンガと試合する事になったら投げるか？」

「それは無い…です。」

答えながらしばむスバル。

なのはは睨むように俺を見ていた。思いっきり水差した訳だし無理も無い。

「そこまで言うならお兄ちゃんにも答えはあるの？」

「自分より強い相手…には勝てないさ。運でどうにかなる域を超え

るとな。」

「う、運…ですか？」

不満げな二人。

色々考えた末に運なんて言われればそりゃ真面目に答えると言いたくなるだろう。

「とりあえずスバル、じゃんけんしようぜ。」

「え、あ、はい。」

唐突に持ちかけたじゃんけん、素直に答えるスバル。

同時に手を出し…スバルのグーに対して俺はパー。

「負け…ですね。」

「さて、スバルが勝つまでやるぞ。」

「は、はい。」

同時に出してどっちが有利な物を出せるか。そんな勝負だから普通勝ったり負けたりと繰り返すはずなのだが…

「スバル、もういいから。お兄ちゃんも。」

「はい…」

スバルが十回ほど連続で負けた所でののが止めた。

ただのじゃんけんとは言え負け続けで軽く落ち込んでいるスバルに問いを出してみる。

「さっきスバルが言った、相手より強い部分で戦う。確かにそれで勝てるが…どうやって？」

「え？えっと…」

言葉に詰まるスバル。それもそうだろう。

スバルは前衛だが、まさか誰が相手でも突撃する…なんて答える訳には行かないだろうし。

なのはも悟ったのか、軽く息を吐いて答えた。

「つまり、『相手に勝てる手段を当てられる能力』が強さだって言いたいんだね？今お兄ちゃんがやったように。」
「え、ええ！？狙って出してたんですか！？」

察しのいいなのはが告げた言葉に対して、思い切り驚くスバル。

「勝ったり負けたりがあるのは運。けど、たとえばパーにチヨキを出しても勝てない程の差があったり、今みたいに一回も勝てる選択肢を当てられないほどに差があると絶対に勝てない。リライブを未だに捕らえられて無いのはアイツがやりやすい選択肢を選ぶ能力があるからだ。」

最も、戦闘の場合は選択肢が3つじゃすまないから全部を確実に予測するなんて神業できる人間はそうそういないが、多数ある選択肢から『有利なほう』を当てるだけなら結構な確立で出来る。

全能力が高水準のリライブに度々優勢な選択肢を取られては勝ち目が無いも同然なのは無理も無い。

「スバル、お前に急遽俺と訓練させたのは、シューティングアーツの関係だけじゃない。」

そこまで言って、なのはに目配せする。

「リライブにそれが出来るなら、一緒に行動している敵にも教わっ

てるような人がいるかもしれない。だから、出来るだけ知っておいて貰いたかったんだ。そうは言っても、形あるものじゃないから掴むのに時間がかかるし、外部の人に訓練までさせたくなかったんだけど…」

「言ってる場合じゃないだろ？俺の心配なら無用だし。」

今更遠慮してるのか、それとも教導官は自分なのに外部の俺に振ることに納得して無いのか分からないが、本当に言ってる場合じゃない。

教えてるのがリライブならともかく、グリフと戦闘訓練なんかしてたらシャレにならないくらいの開きになっている筈だ。

「スバルだけちょっときつくなっちゃうかもしれないけど…頑張っ
てね。」

「はいっ!!」

元気のいい返事を最後にスバルが部屋を去り、静かになった部屋に残った俺となのは。

「お前的には、俺の答えは満足か？」

静かな問いかけ。

なのはは少しの間を置いて、呟くように答えた。

「届かないと言われて満足できる訳無いけど…否定も出来ないよ。」
「そっか。」

無理も無い。

散々一対一で戦おうとしてきたことを思い返せば、否定しなかっただけましだろう。

俺も部屋を出ようと扉に足を向け…

「けど、もし高度な見切りが今言ったみたいなものなら…お兄ちゃんはグリフに勝てるの？」

背中越しにかけられた声に足を止める。

同等の戦闘者、詰まる所…魔導師相手のように簡単に読む事は出来ない。

「フレアがあっさりやられたとなると簡単にはいかないだろうが…」
顔だけ振り返り、立てた親指で自分の顔を指差す。

「任せとけ、俺はヒーローだ。」

安心して欲しかったのだが、何故肩を落とされた。失礼な奴だ。

S i d e 〉 高町なのは

一人帰路を歩きながら、先のお兄ちゃんの話进行を思い返す。

今までも何となく分かってはいたけど、お兄ちゃんにとっては私達の戦いは見やすく分かりやすいものなんだ。

でもなければ、魔力も並の普通の人間の身で、余裕ある戦いなんて出来るはずが無い。

けど…もしそれが、魔導師との戦いで優位に立てる要因だと言うのなら…

同質の相手と戦って、勝てるんだろうか？

例え同じ地球の戦闘者でも、並の相手なら速人お兄ちゃんはきっと負けない。

でも、話で聞いているグリフは…恭也お兄ちゃんと同等の可能性すらある相手だって言う。

見切りが同等なら自力と運で結果が変わり、相手の方が上ならそれだけ危険。

恭也お兄ちゃんを師として修行してきた、まだ超えられてるわけじゃないだろう速人お兄ちゃんが、確実に勝てるなんて言い切れるはず無いのに。

きつと、『何を使っても』どうにかするつもりなんだろうけど…

「ホントいつつも通り馬鹿なんだから…分かって無いよ…何も…」

傷つくのは痛い。

でも、倒れられたほうが、失う方が、寂しい方が…もっと辛い。

そして…

「ただいま、ヴィヴィオ。」

「ママ！」

家に入るなり駆け寄ってきたヴィヴィオを優しく抱きとめる。

私も…同じ。

前線を退く気が無い我侭も、躊躇いなく使つつもり『切り札』も、きつと皆を傷つける。

何より、同じ戦い手として生きている他の皆はともかく、このあどけない笑顔を見せる少女に、私と同じ思いをさせたくない。

お父さんとは少し違うけど、戦い続ける私は、いつかきつとこの娘を悲しませる。

ただでさえ仕事ばかりで家を離れっぱなしなんだ。共働きの家もあるだろうけど、それとは訳が違う。

「ママ？」

「ん、なあに？」

「しょんぼり…してる?」

純粹だからか、考えるとかじやなくて素直に変化を感じ取るヴィヴィオ。

私はそんなヴィヴィオの頭をゆっくりと撫でた。

「なんでもないよ。ちょっとお仕事が大変なだけだから。」

…この娘を、不安にさせたくない。

せめてこの娘を受け入れて、幸せにしてくれる人が見つかるまで…
もっと強くならないと。

S I D E O U T

第十七話・戦闘能力とは（後書き）

何で題が強さになってないかと言うと、単に『強い人』って言うとは別物の気がするからです。

とらハ3及びリリなので一番強い人ってどっちにしても土郎さんが酷い事になってるのに、恭也やらなのはやらを送り出せる桃子さんな気がしてます。

第十八話・拳士姉妹

第十八話・拳士姉妹

S i d e 〱 スバル 〱 ナカジマ

「あ…」

「はい終了。」

始まって以来、速人さんとは組み手のようなものを繰り返しているけど、未だに一度も当てられていない。

速人さん曰く、『防御力皆無の俺が当たったらそのまま負けなんだから隊長たちより強い俺にあたるわけ無いだろう』との事で、前よりも長い間続くようになっただけで十分と言う事みたい。

だけど、一向に当たらないのはさすがに悔しい。
それに…

「…これ、セクハラじゃないですか？」

あたしの左胸に触れて止められている速人さんの掌を見ながら思う。何でも、ペナルティ的な嫌な要素があったほうが失敗したくなくていいという事らしいけど、さすがにこれは…

他の部分だと普通に打撃が入るのに、胸だけこんな所で止められる。当の速人さんが顔色一つ変えないから今まで言わなかったんだけど…

「と言っても、ここはちょっとなあ…」

言いつつ辺りを見回した速人さんは手近な板を二枚重ね、拳を振り下ろす。

「え…」

二枚目の板だけが割れ、一枚目の板が残っていた。

「これを…普通に打ち込んだ方がいいか？」

言われて触れられた左胸を触ってみる。心臓部の音が伝わってきて…

一気に青ざめた。

「す、済みませんでした!!」

「普通に打ち込んででも危ない箇所ではあるし、どうしても嫌なら触れずに寸止めでいいんだけど…」

「い、いえ！大丈夫です！」

『あ、失敗した』って感じだと危機感が煽れないという話は事前に聞いている。

だから失敗した時には後遺症が残らない程度に痛い目にあっている。

前に鳩尾に一撃入ったときには痛苦しくてどうにかなるかと思った。

顎に入ると大抵立ってる事もできなくなる。

何回も喰らって体が勝手に警戒するようになっていった。
で、他のところに隙ができるから今度はそこにも対応して…

そんなボコボコにやられ続けた結果、結構保つようになってい
るんだとすると、時間が無い今、呑気にしてもらおうわけにもいかない。

「そっか？それじゃ続けるか。」

「はいっ！」

思えば、胸のところだけ大して痛くも無いから警戒が薄かったの
かもしれない。

文句を言う暇があるのなら本気で警戒するべきだ。

そうして再度拳を交え…

「っ……あ……」

「心臓ばかり警戒すればそうなるよな…」

見事に鳩尾に拳がめり込んだお陰で、暫く悶え苦しむ事になっ
た。
っ……先が長いよお…

Side↳ギンガ⇨ナカジマ

機動六課へ出向する事となった私は、なのはさん達の案内についていく途中、信じられない物を見た。

壁に背中を預け、座り込んで寝ている人がいたのだ。

「あ、あの……」

「ん？ああ……そうだね、一応紹介しておこうか。シグナム副隊長、お願いします。」

隊長たちが皆当たり前に素通りしようとしていたので声をかけると、なのはさんがシグナム副隊長に声をかける。

頷き一っただけ返したシグナム副隊長は、レヴァンティンを抜いて……

寝ている人に向かって思い切り振り下ろした。

驚く声を上げる間も無く、惨劇が頭をよぎり……

「おいおい…これはさすがに手荒じゃないのか？」

「朝っぱらから怠けているからだ、給料引くぞ貴様。」

「休むのも仕事だろ？」

ついさつきまで寝ていた人は、いつどうやって気付いたのか、声もかけずに振り下ろされた剣を避け、シグナム副隊長の眼前で拳を止めていた。

何が起こったのかさっぱり理解できない。

ところが、隊長たちは誰一人として驚く事もなく、シグナム副隊長は普通にデバイスをしまつて何事もなかったかのようになった。

「速人だ。ギンガだよな？よろしく。」

「はい。」

速人…と言うと、何度かスバルから聞いた、リライブ対策に呼ばれた人だ。

色々と型破りでとんでもない人らしいけど、一度は命すら救われたとか。

もう少し真面目で立派な人を想像していたんだけど…いきなり訓練場で寝ているところを見る破目になるとは思わなかった。

「全く…休むにしてもこんな往来で寝る必要がどこにある。もう少し体裁をだな…」

「そんなもんシグナムだって無いだろうが！副隊長でフェイトとタメ口のクセに！」

「む…」

物凄く普通に隊長達と会話してる速人さん。

明らかに知り合いのようだけど…一体何者なんだろうか？

「ごめんね、スバルの訓練やらせてるのが不安でしょ？でも腕は信用できるから。」

「いえ。スバルからの連絡でも凄腕とは聞いてます。」

「そっか、なら良かった。」

笑顔のなのはさんが締めくくったところで、再び歩き出す。

「さて…俺は見学してるから頑張つて。」

訓練場に着く前にそう言つて私達から離れる速人さん。

勿論体力だけが全てじゃないけど、朝から寝てた事といい訓練に参加しない事といい、大丈夫なんだろうか？

そんな私の若干の不安と共に始まった朝練でなのはさんに、スバルとの模擬戦を持ちかけられた。

調子を見て欲しいとの事だったけど、それは私としても望むところだ。

なのはさん達に鍛えられたスバルがどう変わっているのか、気になるっつてはいた。

そして…

「はあああああつー！！」

走行中の攻防、スバルが展開したプロテクションを破った私は、そ

のまま決めの一撃を放ち…

「え？」

攻撃を『流された』。

私の腕を払った左手にしっかりと腕がつかまれている、それと同時に右腕に『溜め』が作られている。

「リボルバー…キャノン…！」

「っ…！」

片手でスバルの渾身の一撃を受ける破目になった私は、当然受けきれずに思いつき吹き飛ばされた。

何だろう、今のは？

不思議には思ったけど、考え込んでいる暇は無い。

『ウインググロッド。』

追撃に来るスバルが追いつく前に態勢を整える為空に逃れた。

「まったく…危なっかしくてしょうがねーな。」

プロテクションも使わずギンガの一撃を流したスバルを眺めながら
そう漏らすヴィータ。

「力量が伴わないうちはやばいと思ったら防ぐようには言っている
から大丈夫だろ。防ぐほうもちゃんと教えてるんだろ？教官。」

「当然だよ。でもスバルも随分早くやってのけたね、今のちよつと
はダメージ通った筈だよ。」

「あれでちよつとなんだな…」

森を粉塵を巻き上げながら吹っ飛ばされてちよつとのダメージで済
むのか：今のが吹き飛ばす為の技だと言う事を差し引いても結構恐
ろしい話だ。

でも、溜めやモーションが大きい技で、フェイントの選択肢も少な
い技相手ならどうにかああいっ真似も出来るようになってるな。

一方で細かな攻防ではなのは達から教わったのだろう部分展開のプ
ロテクションで対応している。

「この分ならそろそろヴィータも危ないんじゃないか？」

「はっ、あたしが何の対策も考えてねー見てーじゃねーか。舐めて
んのか？」

「いや、対策もなにも重量武器そのものの弱点だしな。シグナムみ
たいに格闘複合で対応すればどうにかなるかもしれないけど…」

悪態つくヴィータの体を…小学生と見紛うそのサイズを改めて眺め…
身体的特徴に直接触れるのは悪いと聞いた事があるのを思い出し、
どう言っただものかと考える。

「えーと…無理だろ？」

「るせーよ！素直に言えよ低いつて！！変に気使いやがってくそー
！！」

「まあまあヴィータちゃん抑えて。」

少し目を離している間に、ウイングロードを使用した交差しては距離を取る形から、並走しながらの連続攻防に切り替わっていた。
断続的に続く衝撃音、あの中から選んで捌くのは今のスバルにはまだ無理だろう。

そうなると当然…

「勝負あったな。」

「うん。」

ギンガの拳が、スバルの眼前で止められていた。
俺とやっつてるときなんかは殆ど攻勢に移れないし、普通の乱戦つて
所で自力の差が出たんだろう。やっぱりお姉さんは違う。

「ギンガもなかなか出来るみたいだし、これは久々にやっておこう
かな。」

「隊長戦か？惨いなオイ。あれは一般人が見たらどう見てもただの
新人イジメだぞ？」

楽しそうに告げる妹に軽く呆れる。

「そう言うな。第一お前の幼少期ほど酷い事にはなつて無いだろう。」
「う…」

だが、そんな俺に返されたシグナムの言葉には、何も言い返せなかった。

何度か真面目にポッコボコにされた状態で登校したりもしたし、正直それに比べたらまあ良心的なんだろう。

光の柱に飲み込まれて絶叫が聞こえて来たり、吹っ飛ばされて突っ込んだ場所ごと瓦礫になったりしても…良心的…かなあ？

戻ってきたギンガは、案の定信じられない事を聞いたとばかりに呆然と立ち尽くしていた。

そりゃ兵士Aと勇者位の格差がある広告塔相手にはほぼ対等の条件で試合とか呆れるに決まってるよな…

善戦したものの、結局全員完璧にのされて終わった模擬戦を眺めつつ、やっぱりあいつらも十二分に規格外なんだな…と改めて思い知った。

Side 〱 ギンガ 〱 ナカジマ

「速人さんと手合わせしてみたい？」

「はい。」

訓練再会前に、なのはさんにそう頼み込んでみた。

初めのスバルの一撃、明らかに防ぐよりも際どいものだったけど、同時に私もかなり危なかった。乱戦に持ち込めたからどうにかなられたけど、下手をすると最初の一撃だけで終わっていたかもしれない。あれを教えたのが速人さんだというのなら、私自身で確かめてみたい気持ちはあった。

勿論捜査協力の身分だし、断られたらそれまでなんだけど…

「分かった、後で聞いてみるね。今はちょっと待ってくれる？」

「分かりました。」

焦る事でもない。なのはさんが聞いてくれるというのなら今は待つ。う。

そう思った所で…

「俺は別にいいぞ。」

唐突に速人さんが姿を見せた。

「あ、あれ？今修行中じゃ？」

「フレアと交代した。俺はアレ使いこなす方もやっとか無いといけない関係であんまり体力使えないんだ。」

速人さんの言葉を聞いたなのはさんが表情を曇らせる。

そして、それよりも気がかりな事があった。

「あの…体力使わないで手合わせなんて…」

「シグナムの相手までならどうにかなる。」

事も無げに告げる速人さん。

この人が強いのは分かるけど…さすがに言いすぎだと思った。

「…分かりました、お願いします。」

「ん、じゃあ場所はギンガが決めてくれ。」

笑顔で言う速人さん。

本当に一体どれほどの自信があるんだろうか？

そうして、朝スバルとの模擬戦をやった辺りまで移動する。

「よし、いつでもいいぞ。」

デバイスさえ起動しないままに告げる速人さん。

「あ、これはスバルとやるときいつもだから気にするな。」

「…分かりました、いきます！」

自分で大丈夫と言っているんだ、過信でも確信でも、私が遠慮する理由はない。

拳にありったけの力を込めて、全力で地を駆けた。

「ギン姉、大丈夫？」

「ありがとスバル。心配してくれて…」

触れるか触れないか位の寸止めの連続、鼻をつままれたりまでして舐められてると思って躍起になったものの、結局一撃も入れられなかった。

と言うかおかしい。私だつてスバルとやってる時万一当たつたら危険だから早めに止めるのに…あんな皮一枚程度の距離で止めるなんて動いてる対戦相手にやる技じゃない。

「あんな人とクロスレンジの鍛錬してれば朝みたいなのも領けるわ。」

「もつと頑張らないといけないけどね。あたしもまだ一撃入れられて無いし。」

「話通り…と言うか想像以上に凄い人ね。」

本当にスバルからの手紙通り、滅茶苦茶で凄い人だ。

「でもあんな凄い人なら局外部の人とは言えそれなりに有名でもおかしくないのに…一体何者なのかしらね。」

「そ、そうだね…あはは…」

何気ない私の問いに苦笑するスバル。

あ…スバルは知ってるんだ…

「…聞かないけど、もうちょっと隠し事も上手にならないとね。」

「うう…」

へこんでしまったスバルの肩を軽く叩く。

こんな感じではあるけど、スバルは本当に信じられないくらいに強くなっている。

私も頑張らないと。

S I D E O U T

少しだけ聞こえてしまった姉妹の会話が盗み聞きにならないうちに離れフレアと交代した俺は、笑いたくなくなった。凄いい人が、俺がそんな風に呼ばれるなら…

「この人は一体何なんだろうな。」

「ただの剣士だ。」

「嘘吐け!!!」

連敗記録が増えた俺は、アッサリとのたまった兄さんに向かって全力で突っ込んだ。百歩譲って同意できるのは剣士だけだ。間違ってもただのなんてつけていい人間じゃない。

「だが、やはり直接の技量自体はフレアとお前の差が埋まってきているな。」

兄さんからの指摘に口を噤む。

神速と魔法…と言ってもほぼデバイス任せの空中歩行魔法陣展開と身体強化を併用する為に神速を連日使ってきた代わりに、神速で馬鹿みたいに消費した体力の帳尻あわせを基礎鍛錬から削る事になっている。

無論その辺の人よりは鍛えているが、膝へのダメージなどを考慮す

ると今朝眠ることになったように休む時間が多めに必要になる。
鈍りこそさせてないものの、技量を挙げるという意味では不便な状
況だ。

「とは言え、神速が空中で使えないとリライヴなんて相手に出来る
訳無いからな。」

「それで、今のままグリフと戦うつもりか？」

兄さんの指摘に肩を竦める。

やれやれ、似たような事何人にも聞かれるな。

「じゃあ代わりに相手してみる？兄さんなら一撃で終わらせられる
でしょ。」

「絶命させる気でいけばな。」

「却下、俺がやる。大丈夫だから手を出すな。」

冗談半分に振ってみたら割りときつい返答が返って来た。いくらあ
いつ相手でも俺は死人出す気は無い。

「と言うか兄さんまで随分心配するな？刑務所在中期間がブランク
になってるあいつと、その間身体的にも技巧的にも成長してる俺と
でどうしてそんなに」

「搜索含め、地球から届いた資料と捕まっている奴を見た印象から
の推測にはなるが、今のお前が全力で言っても五分がせいぜいだろ
う。」

わざわざ不安を払拭する内容を選んで話したと言つのに、わざわざ
リアルな話をしてくれる兄さん。

絶対負ける…とか言わないところが逆に生々しくて恐いなオイ。

「それに、お前が戦闘で勝てない理由はまだある。」
「何だつて？」

冗談ではないのだろう。

真剣な表情のままの兄さんの言葉を、俺は心して待つ。

「奴は」

S i d e 〱 スバル 〱 ナカジマ

なのはさん指揮による通常の訓練が終わった後、あたしは少しだけ速人さんとの訓練がある。

ギン姉が来たからと言ってそれが変わる訳でもなく、でもギン姉が今から混じっても仕方ないから見学だけしていくと言うことだった。

速人さんはちょっと同員におおっぴらに出来ない訓練をするという事で離れていたけど、少ししたら戻って来る。

「でもスバル大丈夫？あんなにキツイ訓練の後に更に別でなんて。」

「大丈夫。朝元気な時に磨くのと、訓練終わりのくたくたな状態でも神経を維持する能力を磨く二つがいるから、朝晩短時間ではさむのが丁度いいんだって。」

「そっか。」

そんな風に話していると、速人さんが歩いてくるのが見えた。

でも何か、いつもの軽い感じが見えない。あたしの姿を見ながら気

楽に手を振ったりもしないし。

「悪い、待たせたか？」

「いえ、大丈夫です。」

「サンキユ。お？ギンガは見学か？ちょっと見た目にまずいと思うんだが…」

「スバルから聞いていたので大丈夫です、少し心配ですけどね。」

どうせ見られるとなると分かっってしまう事だから、急所に問答無用で攻撃を叩き込まれる事は話しておいた。

ギン姉との試合はダメージになら無い様に止めていたみたいだけど、あたしの場合は身体で覚える必要がある練習だから。

でも、やっぱりどこか違う気がする。

「あの…何かあったんですか？いつも手を振ったりしてくるのに。」

「ん？ああ、別に何でも…あったと言えばあったな。」

否定しようとして、何かを思い出したように肩を落とす速人さん。

「ちょっと師匠に鍛えて貰おうと仕合って惨敗してきた。」

「ええ！？速人さんが惨敗！？」

「その前にフレアとやってたから連戦近い筈なんだけどな…ノードメージってホント化物だよアレ。」

フレアさんと言えば、昔から速人さんと同じような訓練をしてきているから、魔導師の域は外れているはずの槍使いだ。

大怪我している状態でエリオやティアがどうにもならなかったガリユーって人？を一瞬で戦闘不能にした実力は目の当たりにしている。

そんなフレアさんと速人さん相手に連戦でノーダメージって…

さすがの速人さんも、連戦の相手にノーダメージで負けるなんて戦績じゃ落ち込むのも無理は無いか。

「上には上がいるって事で、一緒に頑張るとするか。」

「はいっ!!」

本当に速人さんの言う通りで、あたしはギン姉に及んで無いし、ギン姉だってなのはさん達隊長陣とはまだまだ差がある。

そんな隊長達でもリライヴや速人さんには勝てず、速人さんが及ばない師匠がいると言う。

先は見えないくらい長いけど、精一杯頑張ろう。

S I D E O U T

第十八話・拳士姉妹（後書き）

速効色々出来るとスバルだけ飛びぬけるので、現状では大振り等の見やすい物のみ対処可能と言う状態です。

出来る事は増えてるものの、ナンバーズの鍛錬にグリフが混ざっているととなるとこれでも帳尻あうかどうか（汗）…後発組相手なら何か？

恭也最強はデフォです（笑）

と、冗談は置いておいて…恭也は魔法が使えるわけでもない上、次元世界に出張る原因になった兵器相手に自力で忍を守りきれなかったと言う事もあって気を抜かずに修行繰り返し返ってきているので、魔法と神速の併用訓練を挟んでいる速人とは基本部分の開きが出来てます。

その結果、魔法関係皆無だと手も足もでなくなると言うだけです。無双じゃない…が、閃使うと地上で対した人間相手には必勝（汗）やっぱり無双かこれ？

ギンガ合流したしもう少しで…頑張っで進めます。

第十九話・『普通』と『幸せ』

第十九話・『普通』と『幸せ』

「うーん……」

「どうしたんですか？」

昼食を食べながらなのはのテーブルを見る。

なのはとフェイトにはさまれる形で苦手な野菜に涙目になるヴィヴィオ。

そんなヴィヴィオを宥めつつ、あくまで野菜を食べさせようとする二人。

俺の見ているものが分かったのか、問いかけたスバルが納得するよ
うに頷いた。

「ああ、ヴィヴィオですか。もうすっかり懐いちゃってますよね。」

「大体あんな感じですからね。」

楽しそうなスバルに続くようにティアナが微笑ましい物を見るよ
うに告げる。

「でも何で唸ってるんですか？」

「凄い絵になるだろ？それこそ違和感感じないくらいピッタリと。」
「ですね。」

ここまでで俺の懸念が分からないのか、スバルもティアナも不思議そうにしている。

「『結婚？何それおいしいの？』とか言われたらと思うと頭が痛い。」

それまでもとても微笑ましげにしていたスバルとティアナがピタリと硬直した。

俺にしてみればその前兆のような光景で、正直見れば見るほど寂しくなってくる。

「父さんに『なのははフェイトと親子三人、家族で仲良く暮らします』とか手紙送るの俺嫌だぞ？友達同士で親役やってる生活に疑問がないとなるとさすがに…なあ？いつそ一緒に暮らすなら暮らすで結婚式でも開けばま…ば？」

「ストップ！ストップ速人さん！！ここ食堂ですから！！何より二人に聞こえたら洒落にならないですから！！！」

割と真面目に落ち込んでいるとスバルに口をふさがれた。

魔力云々無しでも単純に滅茶苦茶力が強い。焦ってるのか加減も無いし…あ、今顎の骨からミシッって音が…

「アンタもいつまでもパニックってないで放しなさい！速人さん死ぬわよ！？」

「へ？ああっ！すみません！」

ティアナの叫びで漸くスバルに解放される。

…口ふさがれて息じゃなくて骨がやばいとか、そうそう経験できないだろうな。

「悪いティアナ、助かった。」

「いえ…ですが実際気をつけたほうがいいですよ？ファンクラブとかあるような人達ですから迂闊なことを言うといつ背後から刺され…ませんか、速人さんなら。」

忠告をするつもりだったらしいティアナだったが、無意味だと思っただのか途中で言葉を切りかえる。そのへんの人に襲われてどうこうなる心配は無いな、確かに。

「なあエリオ、キャラ。フェイトの子供役として現状何とかしてくる気ないか？」

要は二人で両親っぽくヴィヴィオにかかりきりだからこんな状況になるわけで、フェイトが二人の対応に移ればまだマシになるかもしれないと思って聞いてみたのだが…

「そんな！僕達もう子供じゃないんですよ！？」

「そうです！」

結構真面目に怒られた。

背伸びしたいのか？子供じゃないなんて子供の台詞だろうに。

「いや、スバルやティアナも正直まだ子供で通るし、なのはやフェイトすら大人かと聞かれれば首を捻るぞ俺は。お前等が子供じゃないと言っるのは言いすぎだろう。」

「ってあたし達もですか。」

「何よりお前等に大人になられると俺が繰上げでおっさん扱いされかねない。お前等はそれでも子供じゃないと言い張る気か!!」

大げさに身を乗り出して告げると二人が怯んだ。

だが、名前を出されたスバルとティアナが特に反論しなかった為か、顔を見合わせて困るエリオとキャロ。

と、背後からハリセンのような物で頭を叩かれる。

景気のいい音に振り返ると、なのはが呆れたように立っていた。

「妙な事言って二人を困らせない。」

「他人事みたいに言ってるがな、こいつらが子供じゃない頃にはお前だっっておばさんになるんだぞ!?!いいのかそれで!!」

ハリセンを肩にリズムを取っていたなのはが一切動かなくなる。

暫く硬直していたかと思うと、ハリセンを自分のテーブルに置いたなのははレイジングハートを手にする。

「ハリセンじゃ足りないなら…フラッシュインパクトでもいいんだけど?」

『打撃は久しぶりですね。』

「済みませんでした!!!」

掌でレイジングハートを転がすようにしながら笑顔で告げるなのはに俺は速効で土下座に入った。

逆らえるかこんな恐いの。ってかレイジングハートまで生き活きてるし。

「力関係が分かりやすいです。」

「なのはが説教態勢に入ったときに言い返せたことねーからなあいつ。」

「ある意味速人らしいとも言えるがな。」

外野で守護騎士チームがうるさかったが、そこまで言うならお前等が殴られてみると言いたい。

下手な時には兄さん相手にすら我を通してきたなのはの説教なんて抜けられてたまるか。

目立つからやめると言われて立ち上がる。

「ま、ちゃんと考えないといけないとは思ってるんだけどね。」

「何が？」

席に戻る前、殆ど呟くように漏らしたなのはの声を聞き逃さなかった俺は、何のことが分からずに聞き返す。

「何でもないよ。」

結局なのははそうとだけ言って自分の席に戻ってしまった。

やり取りを見ていたフェイトも何か感じているようだが、コイツがなんでもない何て意味深に言った時は絶対に何でもなくない。昔ほどバレバレの有様ではなくなったものの、台詞と言い違和感と言い、何かあるのは間違いない。

とは言え、今の俺にはまだなのはが何を伏せているのかまでは分らなかった。

S i d e 〉 高町なのは

陽だまりの中、教会でシスターシャツハと肩を並べて楽しそうにしているヴィヴィオを少し離れて眺める。

「はい、うさぎさんが消えました。…というのは冗談で実はこっちに。」

「わああ……!!」

お兄ちゃんが次から次へとヴィヴィオの前で早業を披露する。

うさぎのぬいぐるみが消えたり出たり、花が出てきたり色が変わったりと結構本格的に手品師のようだ。

魔導師としての才覚があるからかお兄ちゃんが魔法を使っていない事も分かるようで、ヴィヴィオは眼を輝かせて食いついている。

一体いつの間に手品なんか…戦闘訓練以外の日常生活ほぼ放置で育ってきたはずなのに…

「ママ!おじさん凄い!!」

『たく…こんな純真な娘に親の兄は伯父さんだなんて知識を教えた奴誰だ?妹にさえ舐められる位の少年の心の持ち主なのに。』

『は、速人…それはそれで自慢にならないと思う…』

フェイトちゃん同様お兄ちゃんからのしょうもない念話に呆れつつも、それを顔に出さないように笑顔でヴィヴィオに頷く。

私にもお兄ちゃんが何をしているのかよく分からない。ヴィヴィオじゃないけど本当に凄い技なんだ。

『一体いつの間にこんな手品を身につけたの？』

『暗器を飾りに変えたただけだ。暗殺術も使いよう…なんてな。』

ああ…袖に針とか懐にナイフとか普通に使う技術を磨いてたんだっけ。

それこそジャグリングとかだって朝飯前の筈。

シグナムさんとかは、魔法や剣技を宴会芸に披露しろとでも言われれば間違いなく怒るだろう。私もそこまで気分のいい話じゃない。

けど、お兄ちゃんは普通は忌むべき力とすら思うだろう暗器…暗殺の為の技巧を『道具』に、ヴィヴィオを笑顔に見せている。

火薬を材料に人を殺す兵器を作る人もいれば、笑顔と思い出の為に火花を作る人もいる、お兄ちゃんにとってはそれだけの事なんだろう。

私に魔法であんな事ができるだろうか？

プライドや魔法の危険性、言い訳はいろいろできるけど…

結果は出ている。

力を笑顔を作る為に使っているお兄ちゃんと、見ているだけの私。

少し情けなくなつた私は軽く眼を伏せた。

「本当に良く懐かれています。」

隣に立つシスターシャツハの声に、顔を上げた私はヴィヴィオを見る。

彼女の言う通り、ヴィヴィオは手品に惹かれながらも私に度々顔を向けていた。

俯いたところを見られたのか不思議そうなヴィヴィオに、笑顔で手を振る。

「このままご自分の娘さんに？」

「受け入れ先は探しています。あの子を必要としてくれて、受け入れられる…温かい家庭を。」

「あの子は嫌がりませんでしょうか。」

少し残念そうにも聞こえる声で言うシスターシャツハ。

けど…私は…

「幸せにしてあげられる自信がありません。」

「どうして？」

「私はいつも自分のことばかりで、優しい母親になれる資格も、たぶん…ありません。」

フェイトちゃんほどの気付きも優しさも無い私。

エリオとキャロを引き取ったフェイトちゃんと一緒に何か調べたり手伝ったりだつてできたはずだったのにそれも無いまま、今ヴィヴィオのことで四苦八苦している私はどれだけフェイトちゃんに助けられたかわからない。

こんな有様で、人の人生や幸せを背負える訳が無い。何より…

「それになにより、私は空の人間ですから。」

これが…一番恐い。
私を支えになると言う事は、私が傷つけば支えが傷つく事になる。
ただでさえきつと、普通に任務に出ているだけで一人ぼっちにして
しまう事が多くなる私が、お父さんと同じ様なことになれば…

瞬間、背筋に寒気が走った。

一瞬、だけど間違えようの無い感覚。恭もお兄ちゃんと相對した時
のあの…

「縁起でも…どうされました？」

「いえ…何でもありません。」

こんな所でそんなものを扱えるのは一人しかいない。
分かっていながら、恐くて目を向けることができなかった。
さっきの感覚そのものじゃなくて、あの駄々甘の速人お兄ちゃんに
そんなものを使わせるほど怒らせてしまったことが。

「ママ。」

と、悲しげな表情を隠さずに歩いてくるヴィヴィオ。
ひょっとして、ヴィヴィオもさっきのを感じて恐くなったのだろうか？

だとしたら本当に出来るだけ安心させてあげないと。

「ん？ヴィヴィオ、どうしたの？」

目線を合わせて、できるだけ優しく声をかける。

「ママ…しょんぼりしてたから。」

「あはは、ほんと？」

胸を打たれるヴィヴィオの言葉。何とか動揺を笑顔で押し隠す。

「うん。」

と、背伸びして手を伸ばしたヴィヴィオが私の頭を撫でた。

「ママ、いい子。」

感極まって泣いてしまいそうになる。
安心させる…どころの話じゃない。私の為にわざわざ様子を見に来て励ましてくれているんだ。

「ヴィヴィオは優しいね。」

でも、こんな時に涙なんて見せられない。

嬉しくても泣くものだなんて分からないと思うし、だとしたら余計に心配かけてしまう。

「平気だよ。ヴィヴィオが元気で笑顔でいてくれたら、なのはママもいつだって笑顔で元気だから。」

抱えあげてそう言うと、ヴィヴィオは少しの間を置いて、一杯の笑顔を浮かべて見せた。
合わせて笑う私。

他のしがらみを総て忘れた私達の笑い声は、暫く続いた。

S I D E O U T

教会から帰ってすぐ、ヴィヴィオを部屋に置いてこさせてなのは人目のつかない所に呼び出した。

「…何？お兄ちゃん。」

「歯を食いしばれ。」

さすがに察していたのか、明らかに表情に影を落としたなのは頬を、強化なしでは言え割と本気で殴り飛ばす。

鍛えてはいるからか姿勢は崩れたものの踏みとどまったのははすぐに顔を上げるが、俺はそんなのはの襟首を掴んで目の前まで引き寄せた。

「お前：自分が何を言ったか分かってんのか？」

「怒ると思つてたけど…現実何が起こるかなんてわからないし。胸を張つていつでもどこでも大丈夫。何て言えないよ。」

俺が甘いだけで、現実をちゃんと見ている自分に怒るのは筋違いだとも思っているらしい。

この馬鹿：つくづく分かつて無いな。

「…あれから一回だけでもいい、ちゃんと本気でヴィータの事見たのか？」

「え？」

そこで初めてなのはの表情に困惑が浮かぶ。

結構怒つていたので理解を待つ余裕が無いまま俺は続けた。

「あの馬鹿どれだけくそ真面目にやってきたか想像出来ないか？システム体のアイツはどんな頑張った所で魔力値も身体能力も上げられない。強くなるには情報量を増やして戦術や戦略を組むなり、魔法そのものの効率化を図ったりするしか方法は無いんだ。そんなアイツが、よりよってアドバンテージの一つになつてる魔力値を封じられた状態でオーバーSの砲撃を凌いだんだぞ？」

「確かにヴィータちゃんは凄いし頑張つてるとも思つけど、何で今そんな」

「分からないか、本気で？ふざけんなよ…」

襟首を掴んでいる手が力の入れすぎでぶるぶると震える。

「泣いてたんだ、お前の不調に傍にいなながら気付けなかったって、護れなかったって。今度は、もう二度と、そんな風にここまで来た

から、あいつはあれだけの真似ができたんだ。反対に心配が過ぎて試験に落ちたやつもいたけどな。お前は迷惑だ何だと心配してたけど、早い話悲しかっただけなんだよ、誰も彼も。」

「うん……」

「うん、じゃないだろ！」

分かっているつもりか頷いて見せたなのには対して本気で頭にくる。

「もう二度と、今度は絶対に、そう思ってやってるあいつ等を前に、『人間死ぬ時は死ぬからしょうがない』何て台詞を吐けるのかお前は！！」

「っ！……！！」

ヴィヴィオの事しか、自分を頼るしかないあの娘の事しかまるで頭になかったから知らないが、とんでもない侮辱だ。言われて漸くその事に気が付いたのか、口を硬く閉ざして目を見開くのは。

「大体、護りきったとか、やるだけはやっただって死んでいたり、自分の為に血に染まる人間がいることそのものが悲しい事だって、お前が俺に教えてくれたんじゃないか！！」

「あ………」

それまでは辛うじて俺を見ていたのはだったが、とうとう顔を逸らして力なく地面に視線を移してしまった。

誰を殺してでも関係ないと思っていた頃に見た涙、どうしてとの問いかけ、それが今の俺の始まり。

魔導師関係の事件でも前に出っ放しだったり無茶したりで怒られたり心配されたりした事も山ほどある。

だから俺は、『神風』使ったり色々は無茶をしておきながら言うのもあれだが、死んでやるつもりは全く無い。

俺が死んだら宵の騎士四人はマスターを失い休眠状態になるし、俺が預かる事になってるから危険なもの見逃してもらえてる宵の巻物も管理局に接收され、下手したら中身ごと完全に消去される。

だって言うのに、なのはの台詞を聞いてると、まるで『自分がいつ死んでも大丈夫なように』ヴィヴィオの母親になる事を拒絶しているように思える。

どんな保険だ、ふざけてる。

襟首を掴んでいた手を離すと、なのははよろけた後に俯いてしまふ。さすがに、これ以上怒鳴る気にはなれなかった。

「大方父さんが怪我してた関係なんだろうけど、じゃあお前暫く家離れるからって理由だけで母親に連れ出されて、どこの誰かも知らん人を新しい母親と紹介されて笑顔で暮らせるか？ヴィヴィオは間違いないお前を慕ってる、思う所があるのはともかくお前がやろうとしてるのは要はそういう事だって」

「分からないよ。」

俯いたままなのはから、静かに、でも確かな声が聞こえた。

「局の仕事は結構命懸けだし、痛いのも別に好きって訳じゃないけど、それでもあの寂しさに比べたらずっとマシだって思えるの。そ

んな寂しさを味わった原因が、家が『普通』じゃなかったからだっ
て言うなら、今の私がヴィヴィオを引き取れる訳無いじゃない！」
「お前……」

久々に涙を見せたなのは。それだけ本気で葛藤があると言う事。

確かに、いくら家で忙しいとは言え兄さんと姉さんも居た以上、父
さんが倒れた穴埋めとしてとして二人が剣を極めに走る事が無けれ
ば、まだなのはの傍には誰かがいられただろう。

自分は『耐えられた』けど、あの娘をそんな辛い目に『遭わせる』
のは、例え可能性でも耐えられないと言う事か。

「お兄ちゃんだって言ってたじゃない！友達と二人で母親役やって
る状態に疑問が無い何ておかしいって！」

「それは」

「結局どう転んだって私には普通の母親なんて無理だよ……！」

泣きながら叫んだのははそのまま走り去ってしまった。

走って追いつけない訳では無いが、いたたまれなくて逃げ出したの
だろうなのはをこれ以上追いかける気になれなかった。

「みつともない所………と言うか、友人としては頭にくる場面見せ
たか？」

聞こえるように通る声で告げると、少し離れた木の陰からフェイト
が姿を見せた。

ヴィヴィオを置いて呼び出されたのはが心配でつけてきて様子を
伺っていた……と言った所か。

「なのはも心配だけど、速人が怒る理由も分かるから。シグナムにも、エリオとキヤロの生きる意味の多くを占めているのが私だって忘れるなって言われてるし。」

「シグナムの奴…そんないい事言えるんだったら一番忘れてる奴に会う度にも言ってるやればいいのに…」

さすがにフェイトはなのはほどの危険はないと思う。

なのはの方にはあの二人ほどわかりやすい人は居ないからかも知れないが、出来ればなのはがあんな事を言う前に注意しといて欲しかった。

のだが、フェイトは何故か少し呆れた表情で俺を見る。

「そう言ったら、きっと速人が毎日言われると思うよ。」

「うぐ、容赦ないなフェイト。やっぱなのはを殴ったの怒ってる？」

「そうじゃなくて、自分を大事にしてる人が特攻用戦闘機部隊から名前を取った技なんて使わないよ。なのはより余程危ないよ？」

なのはに怒りつつ、薄々自分でも思ってたので耳に痛い。

「それにしても…そんなに普通って大事か？結構一般度外視でも幸せな人知ってるけど、普通じゃなきゃ幸せになれないって、そういう人全部名指しで馬鹿にしてる気がするんだが…」

クローンのフェイトは今幸せだろうし、はやてだって一般的とは何もかもかけ離れてる家族だけど、守護騎士の皆がいて幸せな筈だ。ボディーガードの剣士なんて明らかに一般からかけ離れてる役職の父さんと結婚した母さんだって超が付くほど幸せに浸ってるし。あの万年バカップルには幸せ『そう』何て予想形式で言う必要が無いくらいだ。しかも結婚に関しては選べるって言うのに。

大半に関わってるのはにあんな事言われたら皆どう返せばいいんだ？

フェイトも何となく察してか、笑みを浮かべつつも少し困ったように告げる。

「仕方ないよ、トラウマとか固定観念ってやっぱり簡単にはいかない物だし。それに、速人だって私となのはが親役やってることおかしいとか言ってたでしょ？」

「あー…」

なのはの最後の話が聞こえてたのか、朝聞いてたのかは知らないが、フェイトも知っていたようだ。

「あれ…さ、ただ兄さんも父さんもなのはの花嫁姿が永遠に見れなくなる事を心配しただけなんだ。」

あまりに重い捉え方をされたためバツが悪く、明後日の方向を眺めながら呟くように言う。

フェイトもなんて言っていていいか分からないのか言葉が帰ってこない。

どちらの物が、暫くの間乾いた笑い声だけが響く。

それも収まった頃に、俺は軽く息を吐いた。

「…やっぱ、生まれてから今の今まで一瞬だって普通だった事の無い俺に、なのはが気にしてる普通を分かってやるのは難しいのかな？」

「そんな事無いよ。」

軽く自嘲気味に呟くと、フェイトが少し悲しげに否定する。
「気持ちは嬉しいんだが…」

「物心付いた頃には殺しが常識で、救われてもまだ護る為には躊躇わず、朝から晩まで殆どを修行に費やした拳句、今目指してるのはヒーロー。普通の要素がどこにある？」

「それは…」

答えようがないフェイト。どこにも普通の要素なんて無いんだから当然だ。

同員になってるほうがまだ普通な位だ。戦闘もあるとは言え職業なんだから。

「そんなんだから普通について説得力を持って語るのはちょっと無理だよな。だからせいぜい俺に自信を持って言えるのは…」

お手上げといった感じで両手を挙げてそこで区切る。

「別に普通でなくたって十二分に幸せになれるって事くらいだ。」

「あ…そうだね。」

自分を指して告げた内容に、それまで悲しげだったフェイトが明るい反応を返す。

そう、だから正直何が普通云々を気にする理由が全く理解できない。全異常の俺が幸せ堪能出来てるんだから変なこと気にしなきゃいいのに。

とは言え、俺には分からないと泣いていたなのは相手にそんな事言ったら、まるで理解できませんと肯定する事にもなる。どうしたもののやら…

「毎回であれなんだけど…色々任せてもいいか？」

優しく、なのはに近く幼馴染で親友で対等、オマケに同性なフェイトには、俺よりなのはにしてやれる事が多い。

フェイト自身、なのはの事は心配してくれてるから喜んで引き受けてくれるが、結構頼りっぱなしで兄としてはなんか情けない。

そして、当然と言うべきかフェイトは笑顔で頷いてくれる。

「うん、速人は幸せだって事も伝えておくよ。」

「それだけ言つと俺がお気楽人間みたい何だが…」

冗談交じりに肩を竦めたつもりだったのだが、フェイトのほうは首を傾げる。

「違うの？」

「あ、言つたなコラ！！」

小走りで追いかける俺から逃げながら笑顔で手を振るフェイト。

まさかフェイトにからかわれるとは思わなかったな、ちよつとビツクリだ。

しかし、兄さん姉さん…二人の剣は間違いなく凄いものだけど…払った犠牲が未だに続く末の妹のトラウマってのは護る剣士としてどうなんだ？

これは改めて文句の一つでも言つてやらなきゃならないかと考えながら、寮に戻る道を歩き出した。

S i d e 高町なのは

半ば八つ当たり気味に泣き叫んだ後そのまま逃げ出すなんて情け無い姿を晒してしまった。

ヴィヴィオの事しか頭に無いまま、言っではいけない台詞を言った。

お兄ちゃんの指摘は、痛いくらいに正しかった。

自分の事だからあんな台詞が言えたけど、教え子に：たとえばスバル達に向けて、『どんなに頑張っても死ぬ時は死ぬから家族を悲しませないように考えとこうね。』何て言える訳が無い。

「っ…」

殴られた頬の熱さから、頬そのものよりも胸が痛む。

お兄ちゃんはヴィータちゃんの事を言っていたけど、当のお兄ちゃんのほうがきつとずっと傷ついたはずだ。

恩を着せるなんて考え自体がまるで無いお兄ちゃんだから自分の事は言わなかったけど、私が墜ちた時命懸けの修行を半年もの間ぶっ通しで続けた拳句、そこから更に神風なんて洒落になってないものまで使えるようにしたお兄ちゃんを、誰よりも裏切る台詞だったと思う。

お兄ちゃんがそうまでして、何を悲しんでどうする為に頑張ったのかなんて、考えるまでも無く分かっているんだから。

だけど…

そんな事を、言われないと分からない位自分の事で一杯一杯の私が、母親なんてやれるのか？

そこに行き着いたら結局首を縦に振れない私は、最後ヴィヴィオの話を出されて逃げ出す事しか出来なかった。

「あ…」

落ち込んだままで家に着いてしまう。

…もしヴィヴィオが起きてたりでもすれば、絶対に心配かけてしまう。

完全に体裁を整えるのは無理かもしれないけど、出来るだけ目元を擦ったり、頬を撫でたりしてから扉を開ける。

「あ、お帰りママー！」

「ただいま。」

寝ていたらと思って声はかけずに扉を開けたんだけど、結局起きてたヴィヴィオが駆け寄ってくる。笑顔で答えた筈んだけど、さすがに殴られた跡をごまかしきれぬ訳も無く、笑顔で駆け寄ってきたヴィヴィオが私の顔を見て不思議そうにする。

「ママ…ほっぺ赤いよ？」

「にはは…ちよつと怒られちゃって。」

素直に答える事にする。変な事を言ってもきつと何となくで察してしまうから。

かがんで目線をあわせる。

怒られたって内容じゃやっぱり喜べないのか、少し浮かない顔のヴィヴィオ。

やっぱり直接過ぎたかなと思いはじめたところで…

ヴィヴィオが唐突に笑顔を見せた。

いきなりどうしたのかと少し不思議に思っ…

「ヴィヴィオ、笑顔で元気だよ。なのはママ元気でした？」

「っ…」

教会で私が元気になれると言った、ヴィヴィオからの精一杯の贈り物。

さっきからボロボロで緩んでいた涙腺が、ヴィヴィオの胸を打つ一言でアツサリ決壊した。

「なのはママ、痛いのか？」

そっと手を伸ばして涙を流す私の頬を撫でてくれるヴィヴィオ。

私は小さく首を横に振った。

「嬉しくてもね、すっごく嬉しいと泣いちゃうんだよ。ありがとうヴィヴィオ、すっごく元気になった。」

「えへへー。」

私はヴィヴィオを抱きかかえてベッドに向かう。

小さな体の重さと温かさを胸いっぱい感じながら思っ。

やっぱり…どうしても私、この娘を悲しませたくないよ…

胸を張って告げられる答えは、まだ出せそうになかった。

S I D E
O U T

第十九話・『普通』と『幸せ』（後書き）

本編では回想シーンで時期がよく分からなかったのですが教会のシーンここに持ってきてきました（苦笑）

リリなののはを『恭也化』と言ってるような話も見受けられましたが、トラウマの差分があるからかヴィヴィオ関連では躊躇いがちに見えるのはさん。ちなみに恭也は割とサクッと子供作ってます（笑）

特に教会でのあれは誰かしら突っ込みいれないとダメかと。そんな事まで警戒してたら一般人と結婚してる局員とかどうすんだのは（汗）。

とは言え、家の人は仮に話聞いても注意なんて出来る訳も無い（トラウマの元凶）し、周囲からは英雄視、対等で近いフェイトは説教って傾向の人じゃない。

スルーされてもしょうがない部分になっちゃいますよねそりゃ…この配置自体アコースさんの言ってた強い人の孤独化の一環なんですよっか？

第二十話・蠢く闇に吞まれる墮天使

第二十話・蠢く闇に吞まれる墮天使

S i d e } リライブ

グリフとの鍛錬を行う為に顔を出したスカリエッツィのアジトで、私はスカリエッツィにナンバーズの訓練相手を頼まれた。

データを取られるのは好みじゃないし、実験に付き合っただけやるほどの義理は無いんだけど…

困った事に私は、ナンバーズの皆自体はあんまり嫌いじゃなかった。

殆どがルーテシアと同じで、スカリエッツィの…生みの親の手伝いをする事に疑問や躊躇いが少ないだけなんだ。

NO5のチンクはゼストの命を奪って以来、治せる筈の目を治さなかつたり、NO3のトーレは、とにかく姉妹に敵しいものの、NO7のセツテとの会話を聞く限りそれなりに姉妹も気にはしている。と、個性豊かな子達。

明らかに悪事を楽しんでる様子すら感じられるクアットロと、人体実験を躊躇わない所か目的にしてるスカリエッツィぐらいしか、単に嫌いな人は居ない。

そんな理由もあつて私は、戦闘訓練に付き合うことにした。

「おおおおつー!!」

気合と共に突っ込んでくるNO5ノーヴェ。

エアライナーと呼ばれる、局の新人が使っている空中走行帯を展開する事で空戦近い先頭が可能で、蹴り主体の格闘系。

突進からの渾身の蹴り。脚部武装にブースターも組み込まれているそれは、当たれば強力無比な一撃ではあるんだけど…

「はい。」

「つてええええつ!!!」

蹴りのタイミングで近づいて、向かって来る足の脛に掌底を置いておくと、見事に直撃したノーヴェは痛さでのた打ち回りながらエアライナーから落下した。

堪えて途中で体制を整える辺りはさすがかな？それに、やっては見ただが私も手が痛い。

「相手と状況によつては止めた方がいいかなそれは。脛当ても用意してもいいけど、今の威力をカバーするだけの防具は重くなるだろうし。」

解説中に射撃が飛んでくる。

直後、爆音が響いた。

「油断大敵っスね。完全に直撃」

「しても向こうのディフェンス役は崩せないだろうし、高速型なら

こんなことになってるかもね。」

「あ…」

爆音に包まれて一息吐いていたNO11ウエンディの肩を背後から叩く。

防御魔法で受けてから、煙に飲まれる前に高速移動魔法を使った。彼女達が相手にする予定の前衛にこんな馬鹿なことは出来ないだろうけど、一人が防いで一人が回りこむ位ならできる可能性は十二分にある。教官らしいなのは自身の方針を見ても、こういうチームの相乗効果狙いが好きみたいだし。

チームなんて居ない私には無理な相談だけど…

ノーヴェだけのた打ち回る事になるのも不公平な気がしたのできっちり射撃魔法で伸しておく。

「貴様等…二人掛りでデバイスすら使っていない人間相手にこれかたるんでぞ。」

様子を見ていたトーレからの厳しい叱責。

そうは言うけどねトーレ、AA満たない新人担当レベルの力量が二人いた所でののはとフェイトの代わりは程遠いし。私その二人にも勝てるんだけど…

「や、トーレ姉。リライブは人間って表現するのどうかと思うよ？」

NO6セインが、少し引きつった笑みで私が口に出さずにいた事を告げる。

まあ墮天使なんて呼ばれるのが当たり前になっちゃった今更、化物扱いされても否定しないけどさ…一応人間だからね？こんな所に一

応何てつけるの嫌だけど！

「経験や強化レベルの差もあるとは言え、お前達も戦機だ。ドクタ
ーが作り上げた『力』を見せてやる。リライヴ、連戦で済みません
が付き合っただけですか？」

「うん、いいよ。」

戦機として誇り高く、自身を磨く事に際限を知らず、忠義に厚く客
人への礼儀も備える。

ベルカ式の優れた魔導師を騎士と呼ぶけど、なんかトーレに物凄く
似合いそうだ。

ま、ちよっと先生にするには厳しすぎる気もするけど。

「所で、私デバイスは使用禁止だよね？」

ルールが続いているのかと思って聞いてみただけだったんだけど、
少しだけ眉が動くトーレ。怒らせたかな？

「…使わせて見せます。」

怒りかどうかは分からないけど、火をつけた事は間違い無いようだ
った。

これは…さっきまでと同じと言うわけにはいかないな。

「っ…」

最高速での移動中は完全に視認速度を超えているトーレ。しかも通常の戦闘機動も信じられないくらいに速く、上手い。

空戦機動でこれほど速さに特化して、かつこの速度を制御しきる人はそう居ないだろう。

成程…デバイスを使わせる…か。

確かに使わないと危ないんだけど…デバイスを使わせて見せると意気込んでいる彼女相手に、とりあえず楽になるからデバイス使おう。って言うのはちょっと違う気がする。

私は空戦をやめて地上に降りる。

こうすればトーレの選択肢から、下からの攻撃を奪う事ができる。

後は…

「シューティングスター・アラウンド!!」

全方位弾幕射撃魔法。

これだけでしとめられるほど甘くは無いだろうけど…

「この程度!!」

潜りぬけ、あるいは切り払いで回避させる事で、飛び回れないようにはできる。

後は今の内に距離を詰めて、トーレの加速前に決める。

「っ、はっ!!」

胸を両断するような右腕のインパルスブレードでの横薙ぎ。

私はその右腕を、左腕で下から上に向かって掴みあげ、空いた脇腹に右手を翳す。

「ストレートバスター。」

零距离から放たれた直射砲撃に押される形で吹っ飛んでいったトールは…

そのまま壁にめり込んだ。

「えげつねえ…」

「トール姉大丈夫っすかあ!？」

観戦していたノーヴェとウエンディの声を聞きながら、粉塵に包まれて姿の見えないトールの居るはずの壁を見る。

…やりすぎたかな？

Side 〱 ジェイル 〱 スカリエッティ

「あらら…トール姉様までデバイスも使わないで倒しちゃうなんて、

本当たいした化物ですわね。」

モニターで試合の様子を眺めている私の横で、クアットロがつまらなそうに呟く。

「ふふふ…本当に素晴らしい力じゃないか。局の特殊部隊に居る『彼女達』もそれぞれ高いポテンシャルを持っているが、彼女は総てにおいて秀でている。しかも能力を持て余しても居ない。」

全能力が高いとは言え、魔法制御をデバイスなしに行えば当然能力は落ちる。

そんな状態でトーレの速度と張り合っても互角に届かず、防ぐ為の剣も無い。

だが彼女は自分の能力を過信せずに、自身の持つ技能を生かし、相手の最大能力を使えない状態に持ち込んで戦うという才覚を以ってトーレを破って見せた。

これを機械的にインプットされた計算式だけで再現するには限界がある。

だからこそ、素材として生命を使用することにこだわっているのだが…

「グリフのお陰で特にトーレも随分その才覚を身につけた筈なんだが、それすら容易く破ってしまうとはね。」

全く、敬意なんて縁の無いものだと思っていたんだが、彼女にはそれを払ってもいい気がするよ。

何しろ、生命特有の才覚はともかく、私が作り上げた機能すら、彼女の全力は上回るのだから。

手を加える部分が見つからないと言う事は、私の作り出す事ができ

る力の総てを彼女が上回っていると云う事。さすがにこれには驚く他無い。

「とは言え…そろそろ危険でもあるね。」

犯罪者として追われてはいるが、彼女の本質は局員に近いものだ。レリックの収集程度であれば問題なく動いてくれるようだが、さすがにこれ以上の作戦に大人しくしていきれるとは思えない。局員に手を貸すかはわからないが、ルーテシアを連れ去る位のことはいやらない上、本気の彼女はこれにまだデバイスと幾つ持っているかも分からない化学武装まで使ってくる。

大事な作戦を前に、全戦力を投入してもどうにかなるかわからない彼女と正面から渡り合うのは避けなければならない。

「では、お嬢様を呼んでおきましょうか？」

「そうだね、頼むよクアットロ。これを機に問題は全て片付けておかないとね。」

カードは揃った、そろそろ彼女には退場してもらおう事にしよう。

S i d e 〱 リライヴ

模擬戦の翌日、スカリエツティに呼び出された部屋に向かっている途中で面白い人に出会った。

「あれ？君は…」

「リライヴさんですよ、初めまして。」

今まで動いている所を見た事が無かった、ずっとポッドに入っていた青年だった。

ポッド自体は見た事があるため知ってはいたが、彼が言っとおり初めて話す。

詳しい事は知らないけど、何でも昔瀕死のところをグリフが拾ってきたらしい。

「あ、俺の事はアムネジアって呼んでください。」

「…文句言ってもいいんじゃない？その名前。」

彼は脳のダメージが深刻だった為、生き繋いだものの殆どの記憶を失っているらしい。

だからって記憶欠損障害なんてものをそのまま名前にするのはどうかと思う。

ガジェットも管理局が呼び出した名前を採用したらしいし、いい加減にも程がある。

本人も少しどうかとは思っていたのか、苦笑いするアムネジア。

「病院何て行かないから多分困る事も無いでしょうし、命の恩人がくれた名前ですから。」

「真面目だね全く…」

十中八九と言うかほぼ間違いなく、スカリエッティにとっては実験に丁度いいからついでに直してみた…程度だろうに。

「これから訓練？」

「はい。さすがに何もしないで手伝いに出る訳にも行きませんから。」

手にした銃を軽く見せながら答えるアムネジア。
命を救われたんだから、軽々しくでは無いんだろうけど……そんな簡単に犯罪者に加わっちゃっていいのかな？

「それより、リライヴさんは用事はいいんですか？」

「あ……っと。それもそうだね。それじゃ頑張つて。」

「ありがとうございます。」

正直スカリエッツィの用事に急ぐ気はあまりしないんだけど、彼の手前それを言うのとはばかられた。
気持ちよく別れた以上ノンビリしてても仕方ない、さっさと用を済ませてしまおう。

案の定と言っかなんと言っか、呼び出したくせにまだスカリエッツィ当人が来ていなかった。話した分早足で来たのに損した気分だ。
殺風景な部屋の中で少し待つと、スカリエッツィが姿を見せた。

「ごきげんよう、リライヴ。」

「前置きはいいよ。で、何の用？」

芝居がかったスカリエッツィの反応を適当に流して本題を聞く事にする。

当のスカリエッツィは、軽く肩を竦めて本題に入った。

「そろそろ次の作戦に移る訳だが…」

大仰に手を翳すスカリエッティ。

「その前に、実験につきあってももらえないかな？」

「断る。今更何を聞いているの？」

私の返答に、額を抑えるスカリエッティ。

「そう…確かに君の協力が決まった際、ルーテシアの母親が目覚めるまでのレリック収集の協力で、その後は敵対はしないが手伝わない。と、取り決めた。」

「そつだよ、なのに何で今更」

「だが…」

相変わらずオーバーに私の言葉を遮るスカリエッティ。

「前回…タイプゼロを含む前線の子供達から、レリックも回収できたのではないか？君の腕なら。」

「手荷物片手に相手に出来るほど、速人は甘くない。」

「引きつけるだけでもセインにチャンスが作れたはずだ。手を抜いたんだろ？へりへの砲撃を見て。」

…っち、分かり切ってることを今更。

「君は我々が犯罪者であることなど言うまでもなく理解してくれている筈だったから、あの程度は普通にあると受け入れてくれていたのではないのか？」

「兵器でもないへりにオーバーS砲撃を撃ち込むのがあの程度だっ

て言いたいのか…」

怒りを隠さずに告げると、肩を竦めるスカリエツティ。

「局員が殺されるのはただの力不足だと言っていたじゃないか。それに、一緒にいた子は特別でね、あの程度じゃ死なないのさ。」

否定できない指摘に口を噛む。

局員に関しては確かにそう言っているし、ガジェットが破壊されたことを考えれば女の子の方もただ者じゃない。

「…仮にそれが本当だとして、どうして私が実験台になってやる必要があるの？」

「信用問題だよ。最後の最後で管理局に付かれてはたまらないからね。君が嫌がる、『裸体で男性に身を任せる』状態を我慢してまで疑いをはらす気があるのなら…信用するには十分じゃないか。」

激昂を自覚する。

おそらく表情に出たのだろう、変化に気づいたスカリエツティは首を横に振る。

「もちろん君の心配するようなことはないよ。もしあれば…今頃ウーノ辺りが大変なことになっている。」

「名指ししてる辺り危険としか思えないんだけどね。」

「コレは手厳しい。」

何がおかしいのか笑いながら告げるスカリエツティ。全く悪いと思っ
てないだろうその態度に怒りがわいてくるものの、あくまで頭は
落ち着けておく。

「それで…どうかな？」

「断る。そんなふざけた条件のむわけないでしょ？私は貴方達の玩具じゃない。」

分かっていたのでだろう私の返答を聞いたスカリエッティは、軽く息を吐く。

「仕方無いね。」

そう言つて、スカリエッティが片手をあげた瞬間…

「っ！？これは…」

全身を包む嫌な感じ。

AMF…それも半端じゃなく強力だ。

魔法発動の障害何てレベルじゃない、戦闘所か飛行も出来ないくらいだ。

部屋唯一となる出入口から、トーレとセツテが入ってくる。

「少し大人しくして貰おう。トーレ、セツテ、丁重に頼むよ。」

「はい。」

「了解しました。」

歩いてよってくる二人。

稼働して日の浅いセツテはともかく、戦闘機人としては最高の戦闘能力を持つ上グリフとの訓練に従事してきたトーレは魔法なしでどうにか出来る相手じゃない。

シアに近づいたなんてね。」

「な…私がいつそんな」

「どの口で言っている貴様!!」

抗議しようとした矢先、歩み寄ってきていたトーレがインパルスブレードを展開しながら怒鳴る。

AMF中和しつつ構えている魔力刃。…確かにどの口でってなるな、これは。

弁解は無理。それに、中和フィールドの範囲が自分の周囲のみで、展開に自身の魔力を消費する。

いつまでもこの部屋でやりあうのは得策じゃない。とりあえず部屋だけでも出

「君も残念だろう？なあ…ルーテシア。」

「な…」

思考中、大仰に告げるスカリエッティ。直後、開かれた扉の先にはルーテシアが立っていた。

「待つてルーテシア！これは」

「ドクターは作戦に関係ない所で休んでもらうだけって…ちゃんとして丁重にって言ってたのに…どうしてそんなものまで…」

怒りと言うよりは悲しげに問いかけてくるルーテシア。

完全に嵌められた。

恐らくスカリエッティは、私が逆らうと想定していたのだろう。

いくら魔法を封じたからと言って、トーレ達がまともに武装も展開

しないで近づいてくるのには違和感あったのに…

さすがにAMFCは想定外だったようだけど、むしろ付け入る理由が増えてしまった。

今更気付いてももう遅い。何しろルーテシアは別にスカリエッティ達の事を嫌っているわけじゃないんだから。この状況で私が何を言っても説得力が無い。

「ダメですよお嬢様、お嬢様は騙されてたんですから。質問なんてしたらまた都合のいい事を適当に喋るに決まっています。」

ルーテシアの背に立つようにして現れたクアットロが、これ以上無いくらいに楽しそうに嫌味を言う。

楽しそう…って言うか、楽しんでるんだろっな。コイツこっこの好きそうだし。まったく趣味悪い！！

「く…言いたい放題…っ！！」

「お嬢様をたぶらかしてやりたい放題していた貴女に言われたくありません。と言う訳でお嬢様、ああいう人は…さっさと潰しちゃいましょう。」

言葉を濁す事無くクアットロが言い切ったと同時に、ルーテシアのデバイスからガリユーが飛び出してきた。

こっとなつたらいつそ全滅させてルーテシアのお母さんは管理局に任せ…

『下手な事はしないほうが懸命だよ。ルーテシアの事が大事なら…ね。』

る訳にもいかなかった。

念話なら話が漏れないとはいえ当人を目の前に脅しなんてつくづく

やってくれる。

とは言え、大人しく捕まるわけにもいかない。なら…

「ちよつとごめん！」

取り合えず逃げる事にした。

いくらなんでも、『逃げたから』なんて理由でルーテシアに下手な事をするほどスカリエツティも間抜けじゃないだろう。その瞬間に私を縛る理由がなくなるのだから。

ガリユーを向かって来るトーレとセツテに投げつつ、入り口に向かって高速移動を行う。

部屋の入り口に立っていたルーテシアを転ばせながら驚いているクアットロの鼻に軽く掌底を叩き込む。

部屋を出てしまえば後は外まで一気に

「え…」

何かにぶつかるような感触を感じて首を下げる。

グリフが、私の腹部を貫いていた。

彼が剣を引き抜くと、支えを失った私はそのまま通路に倒れ伏した。

Side ジェイル スカリエッティ

「いい所にきてくれたよグリフ。」

「此方も試し斬りに向かう途中だったのでね、手間が省けた。一撃と言つのはつまらないが、彼女相手に問題なく使えるのなら十分だ。」

そう言つて、血のついた剣を満足げに眺めるグリフ。

彼からの要望で、余計な機能の無い、強度と切れ味のある剣を作る事になっていたのだが、どうやら満足してくれたようだ。

作るのにこれほどつまらないものも無いのだが、今回彼女を確保できたのはグリフのお陰だ。十分に成果はあつたと見て

「っあああああああっ!!!」

刹那、リライヴの全身から強大な魔力が放たれる。

本来無色透明なはずの彼女の魔力光が白にさえ見えるほど強力な魔力。

その一瞬で、彼女は忽然と姿を消していた。魔力を辿れば、トールでも追いつけない速度で既にアジトの出口へ向かっていた。

「即死しないように気を配る必要があったとは言え、手ごたえはあったんだけどね…」

「構わないさ。あの怪我でここまでやってのける彼女の強さに一本とられたと言う事にしておこう。」

少し失敗をしたかのように告げるグリフだったが、私は彼を責める気になれなかった。

倒れていた時間は僅かだというのに床に残る血溜りが傷の深さを示しているし、彼が居なければそもそも止める事自体が出来なかったのだ。

予定は少し外れたが、これで舞台は整った。さあ…祭りの始まりだ。

Side〜リライブ

数箇所の世界間転移の後に来た光も差さない洞窟の中で、蝙蝠の羽音が聞こえてくる。

これで局にもスカリエツティ達にもつかまれてないはず…

「っあ…はあ…」

血を流しすぎたせいか意識が朦朧とするが、どうにか繋ぎとめた上で簡易結界を張る。

さすがに、小さな毒虫や吸血生命体なんかに寝ている最中に殺されるなんて情けない事態はごめんだ。

そこまでやって漸く落ち着けた私は、適当に地面に身体を預けた。

回復魔法も兼任しているし、とりあえずはこれで問題ないだろう。

『マスター。自身を犯罪者と理解し正義を名乗らない程度はよいのですが、本物が貴女ほど優しく真つ当ではない事は意識した方がよいかと。』

「…だね。プレシアの時もはやて達の時も、相手に不利益な行動さえ取らなきゃ問題なくやれてたから、念押しで排除されるとはちょっと予想外だったな。」

イノセントからの耳が痛い指摘に肯定の意を示す。

確かにへりの事は気分良くはなかったけど、私が望んでる事はそういう事なんだって納得する事にしたっていうのに、その矢先、次の作戦前に排除されるとは。

最悪の時ルーテシアを救うのに用意しておいたAMFCも裏目に出た感じになっちゃったし、全く上手くいかないな…これじゃゼストに申し訳が立たない。

「とりあえず休む。何かあったら起こして。」

『了解しました。』

幸い打撃と違って潰された箇所は無いし、斬られた傷と失血さえどうにかなれば大丈夫なはずだから、少し休んだらどう動くか考えよう。

…結局また一人か。

目を開けても闇の広がる洞窟に溶け込むように意識が落ちていく中、少し頬を冷たいものがつついた気がした。

S I D E
O U T

第二十話・蠢く闇に呑まれる墮天使（後書き）

主役完全放置の回（笑）

なのは達は勿論のこと、それぞれ理由があるとはいえまだ未熟な新人時代のフォワードまで物欲しそうに眺めていたスカリエツティが、リライブに手を出さないわけが無い。と言う訳でこうなりました。

リライブ、AMFC何てネーミングセンスでよくもまあ人の事を言えたもんだな（笑）

第二十一話・予言の幕開け

第二十一話・予言の幕開け

へりの見送りを終えた今、俺は割とどうしようもない窮地に立たされていた。

「うーっ……」

ヴィヴィオに睨まれているのだ。

本人は真剣なのだろうが可愛くて仕方が無い顔で……ってそんな事はどうでもいいんだが、威嚇でもするかのように唸って睨まれてるとどうにも対応し辛い。

何よりこんな外に長い事出しておきたくも無いんだが、ヴィヴィオは俺の前から全く動こうとしない。アイナさんが声をかけても、ここで動かんって感じで軽く足を開いての仁王立ち。

『フェイター！！』

『うっ、うめん……』

決定的なトドメを刺してくれたフェイトに向かってやけくそ気味に

念話で叫ぶ。

事の発端は、なのはが『俺に対して』様子が変わった事に、ヴィヴィオが気付いたところからだった。

で、俺じゃなくてもう一人のママであるフェイトに聞きに行つて、フェイトがさらつとなのはが俺に怒られたと答えてしまったのだ。何があつたのかなんて詳しく説明してもさすがにヴィヴィオに分かるわけも無いし、そもそもベラベラと喋るような事でも無いから簡潔に答えるようにしていたらしいが、つい前日に涙と殴られた痕を残して部屋に帰つたはずなのはを真つ先に見たヴィヴィオが、なのはママの敵だと悟つてか睨んできているのだ。

「なのはママは悪い子じゃない。」

「いや…うん、まあそれは俺もそう思う。」

「じゃあ怒つちやダメ!！」

悪い子じゃないから怒るな。うん真つ当だ。真つ当すぎる。

まさかなのはがヴィヴィオの母親になるのを渋っているなんて理由をそのまま伝えられる筈も無く、どうしたものかと。

『さ、こんな感じの平和極まりない日常を守るためにも、早いとこ仕事片付けようか。』

『はい。交替部隊には私から指示を』

『華麗にスルーするな!しかも流す気ならわざわざこっちにまで念話送ってくるな!嫌がらせか!!』

心底楽しそうにさつさと離れていく我等が狸部隊長。

聞くまでも無くからかつてるんだろつが、言わずにはいられなかつた。

答えるまでどうあつても動きそうに無いヴィヴィオ。…仕方ない、気は進まないが真面目に答えるか。

「怒らない…ってのは約束できないな。」

正直に告げると、俺を見るヴィヴィオの瞳が潤んだ。

そんなヴィヴィオに目線を合わせるようにしゃがみ込んで、その頭に掌を乗せる。

「けどな、なのはママの事が好きで大事だからなんだ。ヴィヴィオもなのはママに怒られたりするだろ？」

「…ホント？」

「本当。」

笑顔で、けど真面目に答えると、少しだけ間を置いてヴィヴィオは頷いてくれた。

「でも、あんまり怒っちゃダメ。」

頷いてはくれたもののやっぱり心配なんだろうヴィヴィオは念押ししてくる。

まあ、その心配はいらないんだが。

「それは大丈夫。何しろ俺がなのはに怒られる事の方が多いい位だから。」

「おじさん悪い子！！」

安心させるつもりで告げたのだが、何故かヴィヴィオに怒られた。フェイトとシグナムが軽く笑いを吹き出すのが聞こえるなか、俺は

頭を抑えた。

立場無いなあ…俺。

S i d e 〱 ヴ ィ ー タ

公開意見陳述会を前に、あたしは苛立ちを抱えていた。

朝からなのは様子が…具体的に言つと速人への態度がおかしかった。

様子を伺いつつもどこか避けているようで、速人の話が話題に上がつてもすぐに済ませようとしている。

自慢じゃねーがカウンセラーでも何でもねーあたしとしては、こういうのに特別敏感とも思つてねーんだが、そんなあたしが違和感を感じる位だから、きつと何かあつたんだろう。

だから、なのはより分かりやすいフェイトの表情もどこか暗かったから、何か知ってるだろうと思つて聞いただしてみた。

「ちょっと、速人に怒られたんだ。」

フェイトはそうとだけ答えてくれた。細かい話は本人に聞くわけでも無いのに出来ないと言った所だろうが、あたしとしてはそれだけで十分だった。

あの万年駄々甘馬鹿男が怒る理由なんて、我慢や無理のしすぎだと言っ位しかねえ。

狭いへりの中、当然傍で話していれば聞こえてくる会話。

そんな中、なのははお決まりにもなりつつある、『受け入れ先は探している』という台詞を告げる。幸せになって欲しいと。

「まるで自分には無理だとも言っていてえ見てーだな。」
「っ!？」

あまり他人様の家庭内の話にまで口を挟むべきじゃねーのは分かってたけど、本当につい口にしてしまった。殆ど独り言みたいに呟いたつもりだったんだが、横目で様子を伺っていたなのは一瞬はつきりと分かる動揺を示す。

速人が怒り、なのはが心配する事なんて二人をそれなりに知ってれば誰だって想像つく話。

いつ何が起こるか分からない仕事だから、とでも言ったんだろ。昔墜ちてることも考えて。

傍にいながら何も出来ず、何も気付けずにあんな光景見てるしか出来なかった。

そのせいで今なのは不安を与えてるとなると、信用が無いままだと証明しているようで、なのはにも、騎士の癖に仲間も守りきれなかった自分自身にも苛立ちが募る。

けど、そんな結果を出した身としては下手な口出しなどできる訳もなく、それ以上は言わなかった。

「そんな事無いですよ。」

「「そうですよ!!!」」

「と言うか、既になのはさんと一緒に居るのが幸せで仕方ない感じになってると思います。」

「う、うええ!?!」

だが、そこまで暗い話には考えが至らない教え子四人に、特にフェイトに保護してもらって幸せだと断言できるからかエリオとキャロからはすさまじい力で反論をかぶせられるのは。

立場的に部下まで含めて全員に批判される事なんてそうそう無いからか、教え子を相手に困った様子で小さくなっている。

「家族は一緒に居られると幸せなんですよ。ずっとヴィヴィオと一緒に居たいなら、もうなのはさんも家族だと思ってるんですよ、きつと。」

「そう…なのかなあ…」

「はいです！」

本当に幸せそうに告げるリイン。

ま、常識的に見たら異色極まりない組み合わせで家族やって幸せなあなたしら八神家の一員に、あれだけ満面の笑みで告げられたらなのはとしても否定できねーだろ。

後は…なのはが安心できるまで、あたしが空で守ればいい。

昔の事はどうにもできねーけど、これから先はどうにでも出来るんだから。

S I D E O U T

翌早朝フェイト達と共に現地入りした俺は、当然ながら隊長達と違って施設内に入れず、かと言って外を見回っても空からグリフが来るわけも無いので、地下でノンビリする事となった。と言つのも、傍にギンガがついてくれているのだ。

「って、だからって俺だけノンビリしてるってのも…」

「八神部隊長から、勝算が薄い相手と交戦する予定と聞いています。さすがに敵襲を伝えること位は出来ますので少しでも神経を温存しておいてください。」

『体力を』と言わずに神経というギンガ。どうやら何となくでは察しているらしい。

『神速』どころか『貫』ですら、並じゃない集中力や感覚がいる。

見切りとはそういうものだ。
ほんの少しだつて頭がクリアな状態で戦闘に入れるのなら、それに越した事はない。

察した上で気を使ってくれているのであれば、ありがたく受け取っておく事にしよう。

「とは言え寝不足で訳でも無いし、少し話さないか？」
「では、警備の片手間程度に。」

断られるかとも思ったが、少し呆れた様子ではあるものの付き合ってくれるようだ。

「んじやさ、何で警備員大概杖装備なんだ？」
「杖…ですか？」

いきなり振られた話題が意外だったのか、不思議そうに聞き返される。

けど、今回の警備の上では割と重要だ。
直接叩ける近代ベルカ式だつて一応出てきているだろうにああも杖持ちばかり見かけるのは少しおかしい気がする。

「ああ。AMF破る射撃となるとAAクラス以上の技巧が必要になつてくるだろ？その辺に並んでた量産魔導師軍団全員が修得してるとはとても思えないんだが…」
「量産つて…失礼ですよ。」

少し怒られたが、割と重要な問題だと察してくれてはいるんだろう。少しの間を置いて答えが返ってきた。

「スバル達と違って古参の方々も多いでしょうし、そういった方であれば多重弾核なり何かしらのAMF対策はあると思います。レジアス中將は以前から対AMFの案を出してらっしゃいますし。テイアナがB以前でも修得していたように、対策として一技術に専念すれば覚えられなくは無いですから。」

確かにここの警備は地上部隊と六課で殆どを占めている。

警備で中に入るのにデバイスすら持っていけないのは達のことを考えると、とことん地上戦力以外の余計なのを混ぜたくないんだろう。

以前から気にかけていたレジアスさんが何の用意もしてないわけが無い。とは思いたいけど…答えたギンガの口調から察するに『そう思いたい』と言った程度の話な気がする。

「…今からでも上の面子に確認したい位予想情報だな。」

「それは…はい。教官もエースもとにかく数が不足しているので、地上部隊がどういった訓練メニューを組んでいるかまでは…」

「おいおい…もし無策だったらどうするんだ？」

ギンガの返答に少し嫌な予感を抱く。

長距離転送とAMFのコンボが使える事は既にアグスタで披露してもらってる。

警備の人数は揃ってるように見えるが、アレをここでやられたら実際に戦闘可能なのは六課のメンバー以外では余程優秀な奴だけと言う事になる。

恐らくエース級のいない地上部隊では部隊行動前提だろうから、同時に攻撃可能な人数が多い射砲撃に傾倒したんだろうが…今回はやはりそれだけだとまずい。

ここに来て何となく感じてた嫌な予感が、話してたせいか具体的に

なっていました。

「ち…失念してたな。」

「…こう言っただけですが。」

今からでもはやてにでも誰にでも伝えて引かせた方がいいかと思えていると、ギンガから声をかけられる。

「仮に対策を打っていて皆さんがガジェットと互角に戦えるだけの魔導師だったとしても、戦闘機人相手ではまとめて倒されてしまうかと。」

ギンガの指摘は虚しいが当たりだった。

ガジェットと互角。つまり、スバル達位の実力があれば十数人いても蹴散らせる程度と言う事。

「要は、あれか。元々俺達だけで相手にする位の気でいないとだめだから気にするな…と。」

「はい…警備の皆さんに悪いとは思いますが…」

「いや、適材適所だな。避難誘導や状況確認なんかには魔力があるうとなかるうと人員は必要だし、戦闘は全力で引き受ければいいって事か。」

静かに頷くギンガ。

やれやれ…これはグリフに会っても時間かけてられないか？

「ですが、余計なのは私達で引き受けるので貴方はくれぐれも焦らないでくださいね。」

と、考えた傍からまるで分かっていたかのようにギンガから念押し

を受ける。

「…なあ、あつてからそこまで日は長く無いと思うんだが、そんなに分かりやすいか？」

「良くも悪くもとにかく皆を守ろうとしていると伺ってますし、『警備の魔導師の方々の心配』までするような人ならそれが真実だつてすぐ分かりますよ。あまり無茶しないでくださいね。」

軽く笑みを漏らしながら答えてくれるギンガ。

どこまで聞いたかは知らないが、俺の事を聞いた上で気遣ってくれたから休んでいると言ってくれたのだろう。

…やっぱ『神風』はやりすぎだったかな？

S i d e 〱 エリオ 〱 モンデュアル

無言。

それが僕達の現状だった。

シグナム副隊長はこの場を離れていて、スターズはヴィータ副隊長と共に哨戒中。

で、僕とキャラは…フレア空尉に付き従って警備を行う事になっていた。

緊張なんて物じゃない。下手に私語でも放てばどうなるか分かった物じゃない。フリードですら鳴き声一つ上げない今、キャラもかなり緊張しているんだろう。

何も無い六課内での油断にすら怖いフレア空尉の前で、任務中に油断でもしたら…

暫くそんな時間が続き…唐突にフレア空尉が立ち止まった。僕とキャラが硬直する中、フレア空尉は振り返る。

何があつたのかと姿勢を崩さず固まっている中…

「萎縮する位なら楽にしてくれて構わない、周辺警戒は私がする。その調子では必要以上に疲れるだろう。」

「あ…す、すみません…」

速人さんと同質の修行をしているらしいフレアさんは、背後を見てもいないのに僕達の緊張を察したらしく、声をかけてくれた。

…そうだよね、フレア空尉は味方なんだ。味方に疲れて任務が出来ないなんて本末転倒だ。

再び歩き出した空尉に、一呼吸して体を少し楽にした後ついていく。

「お前達は他の警備よりはるかに戦力になる、変なところで消耗するな。」

と、空尉から思いもしなかった評価を受けた。

「は、はい。」

人の心情とかを気にして無い…と言う事は、空尉から見たお世辞でもなんでもない評価だから、喜ぶべきなんだろうけど…当の他の警備の人のいる中を回っていると言うのにこんな事を子供の僕達に堂々と言うあたりはちょっとどうかと思う。

『に、睨まれてる…よね？』

『そうだね…』

キヤロからの念話に同意しながら、警備のついでに周囲の人の表情を伺う。

僕らはともかく、フレア空尉は完全に睨まれていた。

このまま何か喋られたらまずい…

「あの…フレア空尉はどうして管理局に入ったんですか？」

もうこの際怒られても何でもいいから方向性を逸らそうと思って問いかけてみる。

けど、答えは無かった。

あのまま色々言われるよりはましだったと思うし、さすがに雑談に付き合ってくれるほどは甘く無いだろう。答えが無くても仕方ないと思う…

「父が管理局員だった。」

唐突に、答えが告げられた。

「じゃ、じゃあお父さんに憧れて？」

「汚職事件を起こして逮捕され、賠償は家族である母と私に回された。元が病弱だった母は以降増えた仕事に悩殺され息を引き取った。」

「明るい話が聞けたのかと思つた矢先に地雷を踏んだことを知らされた。」

真逆の間違いに怒らせてしまったかとも思つたけど、空尉は続きを語ってくれた。

「父は本来守るべきだった母を私事で死に追いやつた。だから、私は無辜の民を守る事にのみ全力を尽くす。」

そこまで言つて、前を歩いていった空尉は再び僕達を振り返つた。

「お前達はフェイトの力になる為に六課に来たのだろうか？」

「はい。」

「えっ!？」

さすがにそれをそのまま言うわけにはいかない理由。だから直接的には伏せているけど、この人相手に取り繕つても無駄だと思つた僕は、本気で頷く。

僕とフレア空尉を見比べて戸惑うキャロの手をそつと握る。

「…はい。」

と、キャラも少し置いて頷いた。

「高町一尉等を見ていて、最近理由に私事があっても、それが各々の力になるのなら良いかとも思い始めている。」

怒られるとすら思っていたから意外だった、でも嬉しかった。

なのはさん達をちゃんと見て、感じてくれている物があることが。

「だが…真なる部分が私事に無いことは間違えるな。どんな理由にせよ他者の為に命懸けの場で戦うことが出来ないのなら、辞めて民として普通に暮らせばいいだけだ。別に戦えと言っている訳じゃない、お前達が自分で戦わなければならない場所に来ているんだと言っているだけだからな。」

「…はい！」

フェイトさんが戦えと言った訳じゃない。僕もキャラも、自分でここにいる。

フェイトさんの力になりたいのも本当だけど、管理局が…六課が、何の為に作られたのか。

平和や秩序を…皆を守る為。

話したくも無かった筈の話をわざわざしてくれた上で伝えてくれた大事な事。ちゃんと覚えておこう。

話は終わりとばかりに背を向ける空尉。

「それと、力も気概も無い割に評価に不満を持つような連中の機嫌

取りなど必要ない。」

「え？あ……」

最後それだけ言って歩き始めた空尉について歩き出す。

いきなり何のことかと思っただけ、僕がこの話を振ったきっかけを思い出す。

言われてみれば、周囲には誰の姿も見えない。

『尊敬：したほうがいいのかなあ？』

キャロからの念話に、僕はまともに答えられなかった。

ついさつきまでは物凄い嬉しかったんだけど、最後の一言だけで台無しになった気がする。

硬すぎる理由とか色々分かったけど……やっぱりこの人酷い。

ただ、とりあえずこの後の警備は緊張が過ぎることもなく普通に出来たから、話せてよかったとは思っ。

S i d e 〱 ゼスト

「まったく……リライヴの奴無茶しやがって……」

アギトが不満を隠さずにぼやく。

スカリエツティからの説明ではAMF技術を盗み知る為に我々に近づいていたので排除した。という事だったが、正直その可能性は無いだろう。

本当にその気ならば、ガジェット一機でも無傷でくすねてどこかに籠った方が解析などもしやすいし、彼女の実力ならばわざわざ取り入らずともそれ位は容易い。

アギトもリライブが裏切ったとは思っていないようで、重傷を負って逃げたという彼女の心配をしている。

「仕方があるまい、彼女は俺やルーテシアとは違う。」

「そりゃ！…そう…だけど…」

スカリエツティの手が施されていないと言う意味で、彼女は我々とは違う。

その上、綺麗過ぎる。何かしら闇を抱えているのは間違い無い筈だと言うのに、それで尚あの純粋さ。

根から歪んだ悪意に食い潰されるのは無理も無い事だ。

「だがスカリエツティからの手出しが無いという意味ではお前も」

「そっから先は無しだぜ旦那。リライブも来てくれてみたいだけどさ、アタシの恩人はやっぱ旦那とルールだからな。」

俺の言葉を止めたアギトが、開いていた資料に映るレジアスの顔を覗き込む。

「旦那の目的は、このヒゲ親父だろ？そこまではあたしが付いて行く。旦那の事、守ってあげるよ。」

出来るなら死人に引きずられて欲しくは無いのだが、協力してくれ

る気であるアギトにそれを言うのも無粋。

「…お前の自由だ、好きにしろ。」

「するともさ。」

俺に残された時は短い、ここで全てを終わらせる事が出来ればいいが…

S i d e ー グリフ

開かれているモニターからそれぞれに声が聞こえる。

スカリエツティは随分と楽しそうだが、今は僕も同意したい気分だ。

「準備が出来たまさにこの時になって、まさかこの世界で見つかるとは思わなかったよ速人…」

牢屋暮らしの間に落ちた体力と勘を取り戻し、僕が全力で振るえる剣も手に入った。

後はトーレが敗北したと言う戦闘者との交戦を試しとして地球に戻って速人を探そうと思っていた、丁度そこで見つかるとは思わなかった。

『グリフ…君のほうも大丈夫かな？』

「ああ…此方も準備は出来ている。」

あくまでも目立つのは主賓であるスカリエッツィの『研究成果』。
僕はただ…速人との戦いを譲ってもらえれば構わない。

ガジェットの転送がすんで、局に動きが出れば速人も見つかるはず。
そこにルーテシアに直接送ってもらえれば構わない。

向こうも僕の事を警戒しているはずだから、さすがに速人が空中に
いるという事態にはならないだろう。

『さあ…始めよう!!』

スカリエッツィの号令と共に他の戦闘機人が動き出す中、僕は手に
した剣越しに、僕に打ち勝って見せた彼の姿を思い出す。しかも本
物の御神はそれ以上という。

「楽しみだよ…速人。」

惨劇が幕を開ける中、僕はただ一人との再会を思い描いて剣を握る
手に力を込めた。

S I D E O U T

第二十一話・予言の幕開け（後書き）

事件的には進んだ…様な気もしますが、戦闘は次回に持ち越しになります。

第二十二話・惨劇の中で

第二十二話・惨劇の中で

「ハッキングから遠隔召喚、管制を麻痺させて浮き足立ったところに砲撃…用意周到な上見事な連撃だな…」

一分もしない間に同時に騒ぎが起こり、戦力の大半を封じられた。

騒ぎが起きてすぐ、中のメンバーとの連絡がつかなくなった。

完全に通信が絶たれたらしい。

何でも麻痺製のガス弾が撃たれたらしいが…殲滅が目的なら、初めからオーバーSで砲撃を打ち込むなり、麻痺じゃなくて毒性にすればいい。ましてガスの類ならば、吸うのを待たずに着弾時の爆発で引火させて施設内に火をまわす事だってできる。

それをやらなかったとなると、殺しに来るだろうグリフが内部に潜り込む可能性は薄い。

空からオーバーSの反応が接近しているらしいが、それはまるで関係ないし。

「アイツが会場内にいる可能性は薄そうだが、俺は周囲を回りつつ見かけた奴を片付ける！」

「アタシはラインと近づいてきてる奴をやる！！ガジェット相手に

出来る奴は少ねえから出来るだけ片付けといてくれ!!」
『了解!』

外にいて唯一無事だった隊長格のヴィータに話をつけて、その辺を歩き回る。

が、一向にガジェットらしい気配が無い。

あんな駆動音も隠し切れない鉄の塊が閉鎖空間で動き回ってれば分らないはずが無いんだが…

「お?」

「あつちやー…こりやまずいつスねえ…」

で、何故か戦闘機人のほうが見つかった。

赤い長髪を束ねた娘と短髪の二人組だが…こいつらこんな所で何やってるんだ?

まあ襲撃犯なのは武装を見れば間違いないし、さっさと捕らえるか。

「話は後で聞くから今は寝ておいてくれよ。」

「舐めんじゃ…ねえよっ!!」

と、急加速から蹴りかかってくる短髪の少女。気が短い奴だな。

前髪に掠める程度に蹴りを避けた俺は、足を振りぬいた態勢の少女の脇腹に峰打ちを叩き込む。

「ぐ…き、くかつ!」

「おっど。」

さすがに頑丈だからか、スーツが防御効果でも持つてるのか、普通に峰打ち打っただけじゃ効果が薄いようで、蹴り上げてきたのが下がつてかわす。

そこまでやって、額を抑えた。

「ローラーシューズ止めない？」

掠めた際に前髪が数本、物凄い勢いで抜けたようで地味に痛い。物によってはぎりぎり避けられない方がいいかもな…

「うるせえよ！」

「はいはいノーヴェ、作戦忘れてないっすよね？コイツはグリフさんに任せる。」

興奮気味の短髪少女：ノーヴェをたしなめる長髪の少女。

その背後に、紫色の魔法陣が展開されていた。

…成程、どう会っても俺と確実に当たるように準備してたって訳か。出来るなら先手を取れないかと凧形態：から味方に誤解を受けると言われて覆面を取った状態で動いていたんだが…俺を見つけたらそこに転送じゃ意味なかったな。

「分かった。ここは見逃すからさっさと離れとけ。」

「ざけんな、グリフが来たら三対一になるってわかつ…」

甘く見ているかのような俺の発言に怒ったらしいノーヴェの抗議は、グリフが完全に姿を現したところで止まった。

尋常じゃない程の密度の『気』。

ようはただの『殺意』と『闘志』の向け合いなのだが…生命や生存本能そのものの中てられる。飲まれれば弱い奴ならぶっ倒れて失禁してたりもするだろう。

息を呑んで震える程度で済んでいる二人は十分マシな方だ。

無言で去っていく二人をそれ以上気にする余裕も無く、グリフだけを見据える。

が…

「…待っていたよ。」

唐突に、グリフからの殺気が消えた。

「何が待ってたただ、脱獄なんてしやがって。しかも異界で世紀の大犯罪者の一味かよ、絶対馬鹿だろお前。」

長話をする訳にもいかないが、聞きたいことも言いたい事も山ほどある。

何で約束破って脱走なんかしでかしたのか、そんなにどうでも良かったのか…とか。

そんな俺にかけられた言葉は、予想もしていなかった物だった。

「決まっているだろう？早く御神と斬り合いたかったからさ。」
「は？」

何を聞いているのか、と言った感じで首を傾げるグリフ。
だがすぐに、嬉しさを隠せないかのように笑いながらグリフは続ける。

「約束通りに裁判を受け、刑務所を誰一人殺さずに出られるだけの力量を取り戻す為に右膝がある程度治るのを待って…こうして約束通り、誰一人殺さずに再会する事が出来た。」

「え？あれ？」

とても嬉しそうに話すグリフに、なんかとてつもなく嫌な予感がしてきた。

俺…ひよっとして、『刑期を終えて』…って言って無い？

予感が当たりである事を示すように、グリフは笑みを隠さずに続け

る。

「約束を守る気など無いのかもしれないとも思ってはいたが、楽な奇襲に走らないあたりちゃんと守ってくれるんだろう？今はダメだ、何て都合のいい事は言い出さないよね。」

「ちょ、ちよつといいか。俺が言った約束の内容まんま復唱してもらっていい？」

念を押してくるグリフに確認の為聞いてみると、気持ちよく頷いて…

「『お前がこのまま裁判受けて刑務所出て、それまで誰も殺さなかつたら…お前が戦いたがってた御神の剣士と戦わせてやるよ。』だろっ？心待ちにしていたんだ、一字一句間違つて無いけどね？」

聞き覚えのある台詞をまんま復唱してくれた。

うん、裁判は刑務所入る前に受けて、刑務所力づくで出て、重傷こそ沢山いたけど誰も殺してない。

……頭痛い。

フレアが『綺麗に紙一重で内臓避けて』斬られてた時から少しばかり違和感があったんだよね…あの重傷加減してたのか、化物め。

はあ…しょうがないな。

相変わらず狂気を宿した瞳ではあるが、同時に待ち遠しいプレゼントを目の前にした子供のようなグリフの視線に覚悟を決める。

俺は神速に入り、グリフに斬りかかった。

尋常じゃない加速と身のこなしでの斬撃に、反応して防いで見せたグリフだったが、頬を浅く斬った。

約束破った奇襲…『じゃない』。

「あれから7年だ、俺も一応奥義までは貰ってきた。俺が『御神』じゃ不足か？グリフ。」

この証明に、これほどふさわしい物は他にない。
勿論、グリフが御神の奥義まで知ってる訳がないのだが、それでも理解できたんだろう。今見せた神速の異常さが。

頬を伝う血を指で掬ったグリフは、暫くその血を眺め…

「最高だ。」

その一言だけ告げて笑う。

直後、前例がない程の殺意を以って、グリフが剣を振りかぶった。

Side フレア＝ライト

「戦闘機人だな、弁明はあるか？」

空に待機していた戦闘要員と思われる戦闘機人の二人を見つけた私は、その前に躍り出た。

「無い。」

「時空管理局、フレアⅡライト一等空尉。お前達を連行する。」

既に戦闘中であればともかく、待機していただだけの相手だと口上が必要になる為告げることだけ告げておく。

後は投降の意志が無ければすぐに叩けるのだが、聞くまでも無い。

二人は臨戦態勢に入って私を見据えていた。

「セツテ、お前は航空戦力を頼む。いけるな？」

「了解。」

言葉を酌み交わした二人の内、セツテと呼ばれた二対のブーメランを手にした戦闘機人が飛来する此方の増援に向かう。

私はそれを無視して残った戦闘機人に接近、グレイブを一閃した。

対して彼女が右腕の刃を振るうと、グレイブが中ほどから両断された。

尖端を外して斬れる腕はあるか…追撃に出ずに下がった事といい、

業や感覚の訓練もしているようだな。

私は、左の逆手で手にしていたグレイブの尖端部分を魔力を通して修復する。

武器を破壊したと追撃に出るようならこれで貫いたのだがな。グリフ辺りと修練を積んでいると言う速人の予想は当たりだったか。

「味方はいいのか？」

と、戦闘機人が示したほうに僅かに視線を向けると、戦闘の光が見えた。

恐らく、先に離れたセツテとやらに墜とされているのだろうか…

「ガジェット相手に逃亡したり、部隊総出で一人に墜とされているような奴等の面倒など見れるか。」

施設を守る為に警備についているはずの連中が悲鳴を上げて逃げ回るなどと言うあまりにお粗末なものを見た後で、使えるかどうかも分からん部隊の救援になど時間を裂く気は無かった。そんな事をしている暇があるのならば、戦闘機人の数を減らした方が余程状況を好転させられる。

離れる気は無いと悟ったか、戦闘機人は高速移動に入る。

首だけ返して背後を見て、腕を振り上げている戦闘機人の姿を確認した私は、振り返らずに懐に潜り込むように後退する。

「何!？」

「はっ!?!」

振り下ろされる腕を左手で掴み、海面に向かって全力で投げる。

『スタツブバスター。』

投げの勢いが止まらないうちに砲撃魔法による追撃。黒い光に呑まれた戦闘機人はそのまま海面に衝突して水柱を上げた。

直後、背後に向かって一閃。

距離を取って回避した戦闘機人は、私を睨むように見据えていた。

つくづく機動性が高いらしい。少なくとも海面には触れた筈だといふのに殆ど間も無く背後に回るとは。だが…

「っ…」

戦闘機人のスーツの腹部は僅かだが裂けていた。

僅かな傷ではあるが、高度な技量の者同士の場合は僅かな差がそのまま戦力の差を示す。

どうやら、グリフや速人程倒せない相手では無いようだ。

とは言え相手は戦闘用に作られた生命体、どんな隠し玉があるかは分からない。

警戒をそのままに構えた私は、再度眼前の戦闘機人と切り結んだ。

Side↳スバル⇩ナカジマ

なのはさん達の下へ向かう途中、いきなり射撃が飛んできた。
何とかプロテクションで防ぐ事は出来たけど…

人影が飛び掛ってきた。

空中から着地を待たずにブースターで加速された蹴りを放つ人影。
射撃に意識をそらされ回避は間に合わなかった。

交差させた腕に感じる衝撃。あたしは成す術も無く壁に叩きつけられ…

「うおおおおおっ！！！！」

反動で加速した。

『止める必要が無いときは吹っ飛ばされてもいい。』

速人さんとの攻防の修行の片手間に、魔導師には無い戦い方について色々と聞かせてもらったものの一つ。

固定した紙は殴るまでもなく破けたけど、糸で吊るしただけの紙は全力で殴っても拳を覆うように張り付くだけで破れなかった。踏ん張ると言うのは詰まる所固定の意味を持ってて、普通は姿勢を崩さない為に堪えるけど、ダメージを全部受け止めている事になるって事だった。

速人さんはコレであたしの拳をバリアジャケットなしで受けて、アザと、吹っ飛んで地面を転がった時の擦り傷だけで済ませてみせた。ジャケットなしであたしの拳をまともに受けたら骨折じゃすまない。…って言うか多分死ぬから、相当ダメージを減らしてる事になる。

さすがに聞いたただけですぐそこまでの事はできないけど、抵抗しないで攻撃の勢いに乗るように跳躍する位は出来た。それだけでも軽減は出来るらしい。

すぐ後ろが壁だったけど、壁に叩きつけられる衝撃と、叩きつけるほど吹き飛ばす勢いを生み出す蹴りのダメージなら、間違いなく後者を軽減した方がいい。

お陰で、どうにかダウンしないで動けたわけだけど…

「なに！？っ！！」

あたしの反撃を受けた、短髪の子は防御姿勢のまま少し滑っていつて止まる。

何とか反撃に持っていったとはいえ、さすがにダメージを受けた直後じゃあまり重い一撃は打てなかったか…

「くそ…旧式の癖に…」

「偏見は良くないっスよ、ノーヴェ。リライブだって人間なのに滅茶苦茶だったじゃないっスか。」

構えなおした娘をノーヴェと呼ぶ、もう一人の女の子が姿を見せた。最初の射撃は彼女が撃つたのか。

「ま、こっちはこれでOKっスからさっさと片付けるっスよ。」

「ティア！」

『こっちは』と言う彼女に嫌な感じを受けて様子を伺って見ると、皆が光弾に囲まれていた。

全方位となるとさすがに防ぐにもまずい。完全に制圧され…

『任せなさい。』

一番信頼しているパートナーからの念話で、ただ一言だけが届く。二丁の銃を手にたたずむ姿はどこかで見たような静けさを持っている…

瞬間、ティアが動き出した。

かなり細かな射撃音が響き、次から次へと光弾が撃ち落される。

「こいつ、動くなっスよ！」

近くの数個の光弾を打ち落とした所で、残りが殺到する。
ティアはそれを、片足を軸にしたがらの回避で避けつつ狙いをつけ
た光弾を打ち落としていく。

回避と狙いをつける動作が一緒になってるそれは、いつか見せても
らった地球の射撃使いが使っていたものの一つ。

『ま、連射も精度もあの人がほどじゃないけど、これくらいはね。』

全ての光弾を撃ち落したティアは、油断無くクロスミラージユを髪
を束ねた女の子に向ける。

狙って撃って当てる。ただそれだけの基礎も、極めるとそれそのも
のが必殺の特殊技能になる。

自分に特別な物が無いって気にしてたティアにとって、普通で辿り
付ける異常な領域は憧れで光明だったんだ。

きつと同室のあたしも知らないところで、疲れが残らないように、
でも毎日繰り返して積んできたんだ。やっぱりティアは凄いや。

「アレを抜けるって…マジっすか？」

「このグズ、仕留めとけよ。」

驚きつつも構えなおす戦闘機人の二人。

『今の目的はあくまで隊長達との合流、あしらって撤退するわよ。』
『了解！』』

敵を倒すことは手段であって目的じゃない。

あれだけの事が出来てまだ冷静なティアの判断に、あたし達は信頼

を持って強く答えた。

Side↳ゼスト

「ゼストつつつたか？何たくらんだか目的を言えよ。納得できる内容なら、管理局はちゃんと話を聞く！！」

「若いな。」

眼前の騎士の訴えを一言で片付ける。

俺もかつてはそんな事を思っていた。

今となってはそれに素直に賛同できるものでもないが…

「だが、いい騎士だ。」

小さな、だが真っ直ぐな眼をした騎士。

彼女のような騎士が増えてくれるのならあるいは…

『旦那！褒めてる場合かよ！』

アギトの声に意識を切り替える。確かにそんな余裕は無い。この身がいつまで持つかも分からん以上、出来るならここで目的を果たさねば。

だが…

『くっそーあいつ等、融合相性もいいんだろっが錬度も高え…しっ
かりあわせてくる。』

融合には相性がある。

いくらアギトが優秀といっても、こればかりはどっする事もできん
いたずらに時間をかければ戦力が復活する、突破するならそろそろ
決めなければ。

「アギト、融合を解除しろ。俺がフルドライブで、一撃で墜とす。」

『冗談！フルドライブなんか使ったら、旦那の身体は…もうリライ
ヴだっていないんだぞ！？』

壊れかけの体にリライブが処置を施してくれたお陰で、どうにか最
近ダメージの進行が少なく済んではいたが、彼女が失踪した今とな
ってはそれも出来ない。

今の俺が幾度も使える力では無いが…

「終わらんさ、成すべき事を…終えるまではな。」

ここで決めればそれで済む。その程度であれば問題も無い。

『ふっ…ざけんな！！旦那の事はアタシが守るって言ったろ！！』

だが、内のアギトの叫びが、それを許さぬと全霊で告げていた。

「昔前、リライブと知り合い、初めて処置を終えた後のことを思い出す。」

「一人で死んだつもりになってたら、何処からヒーローがやってきて怒られるよ。」

「…何だそれは？」

処置が終わり、目的を成すまでの間だけ持てば構わないと告げた俺に対して、リライブが呆れ気味に呟いた言葉の意味が分からず聞き返す。

「ごめんごめん。ただ…貴方は今ここにいて、二人にとっては生きてる大切な人なんだって話。ちなみにこれを否定したら私も本気で怒るからね、素材が生身じゃない知り合い何て結構いるんだから。」

「覚えておこう。」

出来るなら死人に引つ張られて欲しくは無いと思っていた私にとっては聞き流すべき話だったのだが…

『旦那の命は削らせねえ！アタシが必ず…旦那の道を通してやる！！猛れ！炎熱！烈火刃！！』

アギトの渾身の力を込めた炎の刃。

流しては…おけんな。

力だけでなく、どれだけの意思が込められた炎なのか分かってしま
う。

間違いなく眼前の騎士にも勝てるだけの力ではあるが…本部の防御
が復帰してしまえばレジアスの元に辿り付くのは…

いや、間に合わせてみせる。

誓いを新たに、眼前の若い騎士と再び斬り結んだ。

S i d e ヽ ヲ ア イ ス

主力が地上本部にいる中で六課は襲撃を受けていた。

戦力が守護騎士のお二人しか残っておらず、交替部隊の大半も倒さ
れてその辺に転がっている。

そんな中、六課内部に進入してくるガジェット群を、俺は拾ったデ
バイスで迎撃していた。

「ふう… ったく、昔の話なんだがなあ…」

バックヤードスタッフもいる中、ろくに戦闘能力が無い六課を動き
回るガジェットと落ちているデバイスを見かけたら、いつの間にか
迎撃に入っていた。

『アウトレンジショットの達人で、優秀な狙撃手だったって…』

ティアナの奴に掘り返された話を思い出して頭を振る。

持ち上げられて感化されたか？ガキじゃねえってのに。

後輩相手に情け無い話だが、昔話まで掘り返してきたアイツに文句の一つも言っただけかと思いつつ、再度デバイスを構える。

炎の先に人影が映り…局員の服装じゃ無いと確認できたところで狙撃を放つ。

余程勘が良くなければこっちの先制に気付く事はできない。
綺麗に向かって行った俺の狙撃弾は…

早撃ちで打ち落とされた。

当然、一発で決められなければこっちの存在に気付かれる。

「ち…だがまだ…」

普通、気付かれてから撃つのは狙撃手の仕事じゃないんだが、後ろがバックヤードスタッフとなると、俺がやるしかない。

気付いて向かって来る人影に対して、タイミングを待つ。

姿が完全に視認出来るところまで来て…

「お前」

「止まれ。抵抗しなければ危害は加えない。」

完全に現れたその姿に驚いた一瞬で、銃を突きつけられていた。

S i d e ｝ フ ェ イ ト Ⅱ T Ⅱ ハ ラ ウ オ ン

デバイスは受け取れたものの、六課襲撃の報を受けると同時にギンガの安否が分からなくなったため、スターズとライトニングで分散する事になった。

ライトニングは六課に向かう事になり、その途中に信じ難い光景が目に入った。

フレア空尉が押されている。

相手は二名の戦闘機人らしいけど、空尉も速人に近い戦闘技術を体得している。

なのに2対1位で普通の相手に手間取るなんて…

「…エリオ、キャロ、先に行つて。」

「分かりました、気をつけて。」

「えっ?」

完全空戦はできない二人がこんな相手との戦闘に巻き込まれたらそう簡単には抜けられない。

それに、二人には悪いけど…あのフレア空尉が手間取る相手ともなれば正直まだ早い。

「いくよ、バルディッシュ。」

『ソニックムーブ。』

攻撃行動に移ろうとしていた、桜色の髪をなびかせ巨大なブーメランを手にした戦闘機人の前に移動する。

「はあっ!」

奇襲にはなつたと思つたけど、簡単に防がれる。

これは…そう簡単にはいかないな。

「貴女は…」

私の乱入で、戦闘が止まる。仕切りなおしとばかりに並びなおす戦闘機人二人に対するように、私はフレア空尉と並んで構える。

「あの二人はいいのか？」

「貴方が苦戦する程の相手を放置出来ませんから。」

並んで睨み合うのも一瞬、四つの閃光が空を駆けた。

S I D E
O U T

第二十二話・惨劇の中で（後書き）

増援に来てた筈の航空戦力の方たちは悲鳴すらなくセッター人によって退場となりました。って…六課の前線と一般局員どれだけ差があるんだろうか（汗）

第二十三話・暗殺者二人

第二十三話・暗殺者二人

S i d e 〱 ヴィータ

「はあ…はあ…」

リインとユニゾンを行ってまで交戦しているのに、目の前の男は融合機との相性が悪いくせにあたしと互角に張り合っている。こっちもリミッターに振り回されるとは言え、向こうはまだ余裕がある所を見ると普通に全力で遣り合えたとしても勝てると言い切れねえ。何て奴だ…

けど…こっちは一人じゃねえ。

「む…」

向かってきてるシグナムに気付いたらしい男が融合を解く。このまま止めできれば…

『ヴィータちゃん！上！！』

リンにかけられた注意通りに視線をやると、「冗談じゃすまないレベルの巨大な火球が展開されていた。

この距離での大技なんて…間に合わせるかよ!!

止めに入ろうと向かった瞬間…

「な…」

殆ど一瞬で、男が割って入ってきた。

長槍で、アイゼンを抑えるどころか罅入らせる。

コイツ…ここまでやるのかよっ!?

さっきまでとは桁外れの魔力と力によってそのまま吹き飛ばそうとしてくる男。

受けきれねえ…なら!!

「つらめっ!!」

「むっ…」

押される前に逆回転に力の向きを変えてアイゼンを振りぬく。下がって回避されたが、どうにか弾き飛ばされずに済んだ。

こっちだつて技巧使いにいつまでもふりまわされてばかりじゃいらねーからつて身に着けた抜け方の一つ。

あたしの本来の分野である潰し合いで押し負けて使う事になるとは思わなかったけど…

姿勢を整えた頃には、既に男は遠くへ飛び去っていた。

…シグナムが向かってなけりゃ、追撃でやられてたか。

「くそっ…」

『グイータちゃん…』

「分かってる、動かねーとな。」

情けなくなつて歯噛みしたが、リインに声をかけられて頭を切り替える。

状況が不透明で人手も足りずあちこち騒ぎになつてる現状をさつさと沈静化しなきゃならねえ。

『グイータ、大丈夫か？』

『アイゼンが損傷したがそれくれーだ、ガジェットくらいはどうにでもなる。』

『デバイスが損傷したなら無理をするな。私が動くからお前は混乱している部隊の統率に回れ。』

『ああ。』

リインとの融合を解除したあたしは、通信で入った現状を振り返る。

「リインは六課に向かえ、襲撃を受けたなら消火の手もいる筈だ。」

「了解です！」

リインと別れ、まだ慌しい本部周辺に降りる。

「アイゼン、わりい。もうちょっと頑張ってくれよ！」

『了解。』

罅の入ったアイゼンを握る手に力を込めて、あたしは周囲をうろつくガジェットに苦戦する局員達の下へ向かった。

S I D E O U T

「っ…」

グリフの斬撃に体ごとはいじかれ地面を滑っていった俺は、止まったところで手に痺れを感じつつ構えなおした。

神速使えば速度では勝てるけど、懐に入るタイミングで剣を振るわれると防がなきゃならず、防いたら斬撃が重過ぎて距離が元に戻る。オマケに受けるとナギハに罅が入る。その度に修復しなきゃならず、魔力消費が馬鹿にならない。

「ったく、フレアまでアツサリ倒すわけだ…さすが『先輩』。」
「知っていたのか。」

愚痴気味に言ったのだがそんな意図が伝わる訳も無く、グリフは面白い話を聞いたとばかりに笑みを浮かべるだけだった。

ついこの間、兄さんから聞かされた話。そこでグリフの正体を知った。

「奴は お前と同じ計画で育成された暗殺者だ。」
「は？」

俺が育成されていた場所での計画。よくよく考えれば予算組んで行く訳だから何かしら目的はあったはずなのだ。当時は生き残るのが精一杯だったし、救われて嬉しかったで済んでしまったからそこまで気にしてなかったけど…
何でもグリフの行方を調査する過程で洗った過去の経歴から辿って行って、辿りついた話らしい。

「それが、何で俺が勝てない理由になるんだよ？」
「一度目…つまりグリフは、高い戦闘能力を以って敵対勢力を殲滅する事を目的として育成されている。」

それだけで兄さんの言おうとしている事が分かった。
俺は気配を絶って気付かれない内に対象を殺害する技術を中心に育成された。

同じ場所と同じ訓練を受けていれば、最も素養の高い者が残るのが普通。そうなる俺が確実に高いと言える素養はあくまで気配遮断。直接戦闘の素養は間違いなくグリフのほうが上だろう。

しかも二度目の俺が戦闘主体じゃなくなった理由が、『強くなりすぎた上殺し合いに酔ったグリフが施設の護衛含めた全戦力を壊滅させて脱走した』からという、とんでもない理由だった。

単騎での施設壊滅って、俺が助けられた時の美沙斗さんと同じ事は出来るって事になる。

強い訳だ…

「しっかしなんだよ美沙斗さんもリステイさんも。兄さんには教えて俺には何にも言ってくれないなんて。」

知らない内に仲間はずれを喰らっていた気分で少し寂しくなる。が、そんな俺を前に兄さんは軽く肩を竦める。

「お前がそう返す馬鹿者だと知らなければ、誰だって伝えたくは無いだろう。これから交戦しようとしている相手が嫌な過去に関わってる上に実力が上だという話など。」

どうやら、要はいつもの気にして無い部分への配慮だったらしい。

「そんなわざわざ伏せられている話を何で話してくれたんだ？」

「ヒーローとやらは99%無理な事でも1%の可能性にかけてやってみせるらしいからな。半分以下だろうとは言えそこまでは悪く無い条件だ、お前なら気にしないだろ。」

…ああ、成程。つまり兄さんは全部知った上で気にせず勝って見せると言ってる訳か。

全く滅茶苦茶難度が高い事をサラリと言いやがって…嬉しい限りだ。

「楽しそうだな。」

かすり傷程度とは言え一応斬撃も届いていると言つのに、傷を負わせることができる相手と会えたことを喜ぶかのように斬りつければ斬り付けるほど頬を吊り上げるグリフ。

「ああ…楽しいさ。奇襲とは言え一度は負けた相手、しかも今度は御神の業まで持ってきてくれた。楽しくて仕方ない。」

「そっか…でも悪いな、長い事遊んでる時間も無いんだ。」

俺は二刀を抜いた状態で構える。

俺の神速の連続使用時間を全力で伸ばせば大体十秒ちょっと。こればかりは兄さんも出来ない芸当。

一撃の重さで打ち負けるなら、とにかく追い切れない手数斬りかか
るしかない。

幸いこっちは二刀、斬り結んで片腕ごとはじかれてももう一刀を必ず届かせてみせる。

「悪いなナギハ、無茶させて。」

『いつもの事です。』

「あらら…そりゃ失礼。」

本気で切り結ぶとなると、間違いなくまた罅が入る。って言うか下手すると折れるだろうナギハに謝っておいたのだが、言われてみればリライヴ戦から何から何まで結構無傷で済んでない。魔力が低いとデバイスもいい迷惑だな。

「んじゃ…行く…かつ…！」

ここで決めないといい加減一日の使用限界に触れる。
必ず届かせて見せると誓い、何度目かも分からない神速に入る。

受けに回ったグリフは、剣の角度を僅かに変えるだけの最小の動きで俺の連撃を防いでいくが、二刀で神速を用いての連撃に浅い傷は避けられず、斬りつけた箇所が増えていく。

右の打ち下ろしを『徹』にして硬直時間を作り、左の一撃で防御を『貫』く。

そう決めて右を振りかぶった瞬間…グリフの剣閃が奔った。
凶悪なまでの一撃に右を腕ごととはじかれる。

けど、これで左が届…

視界の左端に、振りぬかれたはずのグリフの剣が映った。

弧を描いて斬撃に入っている!?

咄嗟に攻撃に入っていた左の刀で受け…

S i d e } スバル〃ナカジマ

ギン姉と通信が繋がらなくなって、あたしは全速力でギン姉のいる
筈のポイントへ向かっていた。

ティアから先行しすぎだと注意は入ったけど、躊躇してはいられない。
い。

あたしが先行してるって言うなら、ギン姉は孤立しているんだ。あ
たし一人でも先にたどり着けるなら、間に合うならなのはさんとテ
ィアが来るまでの時間稼ぎは出来る!

とにかく間に合わなきゃ話にならないと全速力で向かっている最中、
曲がり道から断続的な金属音が聞こえて来た。

さすがに様子を確認してからじゃないとこの速度では入れない。この狭い通路じゃ交戦中の味方をひき殺してしまう事になりかねないから。

歯噛みしながら急停止可能な速度に抑えて道を覗く。

通路の先には、防いだ剣ごと斬り裂かれて鮮血を舞わせながら膝をつく速人さんの姿があった。

「名前をつける必要こそ感じないが、隠し技が君だけのものだと思うのは早計だったね。これで終わりだ。」

重傷を負っているはずの速人さんを眺めながら、つまらなそうに剣を振り上げる男。

こいつは…こいつらはこんな風に何も感じないままこんな事を…

「ふざ…けるなああああつ！！！」

グリフとは戦うなって指示とか、使ったら壊してしまうからって封印してた力とか、全部が消し飛んだ。

すぐにコイツをどけて、ギン姉の所へ行く！！

あたしはかつて無いくらいに全力を込めて拳を握り、眼前の敵に向かって突撃した。

「どけええええっ！！」

割って入るようにつっ込んだあたしの拳を下がって回避したグリフ。斜めから入ったため、壁に叩きつけられた拳は、壁を微塵に粉碎した。

振動破碎。

外部装甲や防御所か、共振を利用して内部骨格等まで完全に破壊する壊す為の力。

当然壁にめり込んで止まるなんて事も無い。右が届かなきゃ左を叩きつけるまで！！

回避した先に向かって左拳を握って再び突撃：した所で、何かに横に弾き飛ばされた。

「邪魔！を……」

壁に叩きつけられたあたしが見たのは…

さっきまであたしがいた場所で、折れた二つの剣を交差させて斬撃を受け止めている速人さんの姿だった。

デバイスすら叩き斬るその重さのせいか、受けきれずに斬撃が左肩に食い込んでいる。

「っ！」

食い込んだ剣がそのままだというのにバックステップで距離を取った速人さんが振るった手から、多量の何かが投げられた。グリフは追撃にせず、いつの間にか足に刺さっていた針を抜く。

「あ…あ…」

また庇われて、しかもただでさえ酷い怪我だった速人さんに余計に傷を増やしてしまった。

正面から見れるようになった速人さんは、いつかのフレアさんのように胸から広くを斬り裂かれていた。

だって言うのに、速人さんは笑みを見せる。

「いらない心配をかけたなスバル。急いでるんだろ？こいつは抑えるからさっさと行け。」

「で…でも…」

「それと、頭は冷やしとかないとどっかの隊長に撃ち落されるぜ。」

「え？っ…」

茶化して言う速人さんは、右腕をつつく動作をする。
何をしているのかと思つた瞬間、右腕から激痛が響いてきた。

思わず視線を移すと、二の腕辺りが半分ほど切断されていた。

最初避けられたときに既に斬られていたんだ。そんな事にも気付いてなかった。

ティアが墜とされた時の事を思い出す。

無茶して暴走したら危ないって…知ってたのに、よりもよって実戦の真つ最中に…

唐突に、鈍い音が周囲に響く位の勢いで剣を突き刺すグリフ。

身震いするような感覚を感じると同時に、グリフが私を睨んできた。

「女…こんな邪魔をしておいてただで済むと思うなよ…」

「余所見するなよ…お前の相手は俺だろ!!」

あんな怪我をしておきながら、いつもと変わらない動きでグリフに向かつて駆ける速人さん。

なのに…

「遅い。」

「っ…!!」

アッサリと捉えられ、辛うじて防いだものの弾き飛ばされて床を転がる。

「さっきまでの速さを出す事もできないか…ここまでだな。」

「そういうことですね。」

呟いたグリフに続くように、天井の中から戦闘機人が姿を見せた。

「セイン？」

「任務完了です。勝てそうだったんで邪魔する気は無かったですけど、噂のエースオブエースが向かってるんですすがに引きまじょう。んじゃそう言う事で。」

止めようと思ったものの、避けるといわれていた相手と交戦した結果また助けられた事を思い出して手も出せず、新たに現れた戦闘機人に連れられて床に消えていくグリフ達を見送る事しか出来なかった。

少しの間呆然として…

『任務完了です。』

さっきの戦闘機人が言っていたことを思い出すと同時、ギン姉が孤立している事を思い出した。

「っ！すみません速人さん！手当てはなのはさんに！」

返事も待てずに駆ける。

少し進んだ先に広いスペースが見えて…

周囲には、戦闘の痕と血溜りだけが残っていた。

『データ照合：ギンガⅡナカジマのDNAと一致しました。』

マツハキヤリバーに頼んだ血痕の検索の結果判明したのは、手遅れだったという事実。

「ギン姉えええええええええええつ!!!」

膝をついたあたしは、空も映らない天井を仰いで叫んだ。

S I D E O U T

取り急ぎナギハを再度修復した俺は、後から来たのはに応急処置を受けながら状況を聞いた。

「六課の襲撃とギンガの安否確認…」

「ごめん、そういう訳だからあまり手当てに時間かけられないけど…」

手早く処置を進めていくのは。

治療関係はあんまり自力でやらなかったからな…まあ魔法もなしでの応急手当てなんてこの世界でそこまで意味があるとは思えないが。

「問題ない、一日二日で死ぬ事は無いだろ。」

「放っておいて治らない怪我なんて十分問題だよ。」

それにしても、派手な襲撃をした割にはトドメも指さずに任務完了って結構アツサリしてるな。

目立つ地上本部の方が足止めで、地上にとってはオマケの六課への襲撃が本命のような…

生体操作技術者の…本命。

「…ヴィヴィオ。」

「え?」

呟いた名に、なのはの手が止まる。瞬間立ち上がった俺は、全速力で駆け出した。

くそ…まずい、マジでまずい!!

あの娘が乗っていたヘリごと砲撃した位だから大して重要視されて無いかと思ってた!

なのはの話じゃもう六課は応援が無いとやばい状態らしいし、もしギンガがそれで状況不明なら救援に向かったフェイトやエリオだつて…

「させるか!!」

外に出た俺は、最大速度飛行をこなす荒業を使う。

『マスター、その怪我では…』

「言つてられるかよ!!!」

風の流れを集め、受ける事で体を吹き飛ばす移動方法。

俺の魔力量じゃいくら変換資質があつても瞬間出力は大して上がらないが、流れを作つて徐々に加速させる事は出来る。

問題といえば加速がゆっくりな為戦闘機動にはとても使えない事と普通飛行している魔導師が空気抵抗の影響なんかを受けないように軽減しているのに対して、風を受けて進まなきゃならない為もろに衝撃を受ける事になる位で、低い魔力でもかなりの最大速度を出せるこの移動方法は結構重要なものだ。特に今みたいな状況じゃ。

間に合え…っ！！！！

S i d e 〉 アムネジア

かなり優秀な狙撃手らしく、あと少し反応が遅ければ打ち倒されていた。

とは言えこの距離での早撃ちなら負ける事は無い、それよりも聞くことを聞かないと。

「他の人員はどこにいる？用が済んだら脱出するから気絶して炎に呑まれるよりは早く話したほうが」

「昔っからそうだけどよ…優秀だが…詰めが甘えっ！！」

まずい。と思つて昏倒させようとしたが既に遅かった。

身を隠していた遮蔽物を蹴り飛ばした男。大してダメージこそ無かつたものの、さすがに態勢は崩され、その一瞬でデバイスが向けられていた。

ガジェットを落とすだけの狙撃弾をこの間合いで受ければさすがにもたない。
男から狙撃弾が放たれ…間に飛んできたものがそれを変わりに受けた。

これは…インゼクト。

「ち、なっ…」

「ルーテシア！すまない、助かった。」

後から来ていたルーテシアが見かねて助けてくれたらしい。
態勢を整え男に視線をやると、何故かルーテシアを見て震えていた。

「邪魔…」

と言うより、ルーテシアから感じられる魔力がそうさせているのかもしれない。何しろただの魔力波だけで並以上の相手まで倒してしまっくらいだから。

そう丁度今みたいな感じで魔力を…

って、大した防御手段も無い狙撃手にあの魔力波は危険が過ぎる！

慌てて割って入った俺は、当身を叩き込んだ後、後頭部を殴って男を昏倒させた。

これで暫く眠ってくれるだろう…間に合ってよかった。

「それはやりすぎだよ、女の子一人連れてくだけなんだから」
「リライヴみたいな事言うのね。」

この調子で戦闘能力ももたない人たちまでこんな炎の中に寝かせる訳にも行かないから、止めておこうと思っただけだ……
何処か悲しげに呟くルーテシアに、俺は言葉を飲み込む。

「貴方も…裏切るの？」

「そんな事はない！」

力強く答える。

リライヴが裏切ったってなんとも無いように言ってるつもりで、傷ついている様子を隠せてなかった彼女にこれ以上不安を抱かせたくなかったし、何より俺自身裏切るつもりなんて無かったから。

けど、これ以上下手な事言つとまた不安にさせてしまうかもしれないし…

「…分かった、また俺が先行するから。危なくなったら頼む。」

「いいよ。」

要は、加減が利かないルーテシアに任せないで俺が全部やりきればいい。

主力は不在だし、護衛二人は外でオットーとデイドが相手をしてくれている。残り位どうにでも出来るはずだ。

って、意気込んだままでは良かったんだけど……

「割と…アツサリ見つかったね。」

どうやら、さっきの狙撃手が最後の砦だったらしい。後は女の子や一般人が集まっているだけだったから、出来るだけ怪我させないように梅雨払いだけして目的の娘を拾ってきた。

「帰ろう、ドクターが待ってる。」

「ああ。」

誘拐めいていて少し後味は悪いけど、ドクターが言うには局のほう为王様を無理矢理玉座から引きずり降ろした結果らしいし、攫われていた娘を連れ戻すだけなんだから気にすることも無い。

少し言い聞かせるようにして、邪気の無い顔で眠る女の子を抱きかえて僕達は施設から脱出した。

後は帰るだけ。これ以上被害を出す事もないわけだし…

「うおおおおおっ！！！」

唐突に聞こえた声に視線を移すと、かなりの高速で飛来する少年の姿が見えた。

ルーテシアの乗るガジェットから、ガリユーが迎撃にでるが、弾か

見た所まともな空戦能力があるわけでも無いのに…突進用の出力だけで無理矢理浮いてるのか？何て無茶苦茶な。

「ガリユード下がって！」

彼は全力で行かなきゃならない実力者だ、悪いけど…この一撃で沈めさせてもらう。

「クロスファイア…シュート！！」

「な…」

対一戦闘には少しばかり度が過ぎる気もするが、先の狙撃手の事も考えれば油断は出来ない。

展開した多数の魔力弾を少年を包囲するように放つ。

あんな奇特な飛行で包囲弾をかわし切れる筈が無いと思っていたんだけど…

「でやあああつー！！」

少年は回転しながら包囲弾に向けて突撃、飛来する弾幕のいくつかを切り裂いてガリユードに向かって加速した。

数発は掠めたけど、戦闘不能は避けた。何て少年だ…

「だったら…」

『もう結構ですよアムネジア。』

次を撃とうと思った矢先、少年の背後に姿を見せたディードが二つの剣を振り下ろした。

警戒ついでに周囲をうかがうと、竜に乗った少女がオットーによっ

て拘束されて墜ちるのが見えた。

「ありがとう。これ以上追ってが来たら厄介だ、早く離れよう。」
「そうですね。」

改めて現場を去りつつ思う。

どう見ても空中主体じゃない少年が、あの射撃を切り抜けた。

それだけの腕の使い手が集まってる特殊部隊って事は、どこまで俺の射撃が通用するか……

これで終わりとも思えない、次までに出来る限りの戦法を思い出し
たり、馴染ませたりしておかないと。

S I D E O U T

第二十三話・暗殺者二人（後書き）

色々やってるので補足？を。

・グリフの出生

わざわざテロの標的にされるくらい危険視されてる御神の戦闘力を欲しがる（再現したがる）連中なんていくらでもいるんじゃないかと言う所からこんなもアリかなと。

・デバイスによるDNA照合

簡単な、工作上必要そうな機能って基本搭載されてるか。詳しい検査が必要な事であれば分かるんじゃないかな？って事で。

もう少し襲撃が続きます。

第二十四話・二重の限界

第二十四話・二重の限界

Side フェイト T ハラウオン

「はあっ!!」

「っ!!」

長身の戦闘機人の蹴りを受けた私は大きく飛ばされる。

取り急ぎ態勢を整え追撃に備える私を無視して、長身の戦闘機人は私から離れる。

彼女の行く先を目で追うと、二対のブーメランを手にしたもう一人の戦闘機人の少女に攻勢に出ていたフレア空尉を止めるように、長身の戦闘機人が攻めかかっていた。

空の戦局はこんな調子で、とにかく荒れていた。

速度では私と長身の戦闘機人が有利で、斬り合いではフレア空尉が

一番腕がいい。
けど、私単独では長身の女性に全体的に圧されてしまう。
かと言って彼女が私にかかりきりになれば、フリーになったフレア
空尉がもう一人の戦闘機人の少女を墜としにかかる。そんな乱戦が
続いていた。

空尉でも二対一では不利が過ぎるので、すぐに手伝いに向かう。
と、私が追いつく前にフレア空尉から距離を取る戦闘機人二人。

向こうが態勢を整えるのであれば此方もと言う事で、フレア空尉と
肩を並べて構える。

が、距離を取った戦闘機人の二人は武器を下ろした。

いきなり何を…

唐突に交戦を止めた二人に疑問を抱くが、長身の戦闘機人はそんな
私の様子を気にすることも無く、いきなり語り始める。

「我々は本来、貴女と戦う必要はありません。協力していただけま
せんか？ドクターもそれを望んでおられます。」

戦闘機人は、私だけを見て言っていた。

「ふざけるな！誰がスカリエッティのような最悪の犯罪者に協力な
ど！…！」

正気で言っているのかと憤る私を前に、二人の戦闘機人は何故か悲しげに目を伏せる。

「悲しい事を言わないでください。ドクターは、貴女やあの少年の産みの親のような物ですよ?」

あくまで訴えかけるような長身の戦闘機人。

彼女が言い切る前に、もう一人の少女が少し前に進み出る。

「それに…リライブから聞いています、貴女は犯罪であってもそれが親なら協力できるのでしょう?」

なのに何を怒る?と言わんばかりに首を傾げる少女。悪気は無いようだったけど、私の中で何かキレた。

「ですからドクターにも」

「黙れ!!!!!!」

続けようとする彼女に対してカートリッジを問答無用でロードし、一気に迫ろうと構え…

横から頬を叩かれた。

「っ…フ、フレア空尉？」

「人形風情の言葉に踊らされるな、素人かお前は。」

少し呆れたような空尉。

そんな空尉の言葉が勘に触ったのか、今度はさっきまで諭すように語っていた二人がその表情に怒りを宿す。

「彼女も同類だ、言葉には気をつけたほうがいい。」

「っ…」

長身の女性が告げた言葉は、私の胸に深く突き刺さる。

作られた身。

そついう意味では私も結局彼女達と変わらず、犯罪を犯していた親に協力していたという意味でも変わらない。

私に彼女達を責める資格何て…

「魂が無い。」

空尉はその一言で、私の思考も彼女達の怒りも断ち切った。

「お前達は高性能だが…それだけだ。意思も願いも感じない。母親を想っていたフェイト…テストロツサと生産されて起動しているだけの貴様等では訳が違つ。」

「フレア…空尉…」

思いがけない人から送られた温かい言葉に、胸に湧いた黒い気持ち
が霧散していくのを感じる。

「戦局を優勢にする為に味方を見捨てた人間に魂などと…」

「当然だ。」

思いもしない、でも空尉ならやっていそうな話を告げられ困惑する
中、当の空尉は迷い無くデバイスを構える。

「無辜の民を守り、災厄を止める為に。それが私の一念だ。」

それ以上の問答は無意味とばかりに戦闘態勢に入る空尉。その横で
私は選んでここにいて示すように静かに構えた。

意図が通じたのか、長身の女性は少しだけ残念そうに肩を落とす。

「もし、貴方の魂と言うのがそれであるならば、貴方が真つ先にそ
の槍を向けるのは我々なのですか？」

「何？」

そんな私達を前に、新たに問いを投げかけてくる女性。

予想もできなかったはずの問いに、空尉が珍しく反応を示す。

「全てが終わつた後、機会があればまた…」

そこまで告げると、視認限界に触れる程の速さで去っていく二人。

あれは…追えないか。

「あの…空尉、先程はありが」

「不要だ、他に行く。」

「あ…」

暴走しかけた私を止めてくれた事、思いがあるから人形じゃないと言外に告げてくれたことにどうしてもお礼を言いたかったんだけど、空尉は一切待たずに飛んでいってしまった。

空尉が自分で言っていたように、ただこの災厄を止める為に全力を尽くしているんだろう。

なら…お礼を言う暇があるなら動く。それがきつと何より空尉への返礼になる筈だ。

私は先行したエリオとキャロに追いつくため、全速力で六課に向かう事にした。

S i d e } キヤロ || ル || ルシエ

ヴォルテールを召喚した私は、ガジェットを焼くヴォルテールをよそに炎に吞まれた六課を眺めていた。

フェイトさんに恩返しがしたくて、力になりたくて来た六課。スバ

ルさんとティアナさんのようなパートナーに憧れて、エリオ君とそんな関係に近づけたように感じて、訓練は大変でいるんなことがあった場所。

そんな思い出の場所が、ボロボロに壊されて焼かれていく。

エリオ君が必死で助けようとしたヴィヴィオも攫われてしまって、私は何も出来ないまま墜とされて…

一気にガジェット群を飲み込むほどの炎を放つヴォルテール。こんな力があっても、何一つ戻らない。泣きながら眺めている事しか…

「…え？」

突然、妙な方向から頬を撫でる風。

空を見ると、『何か』が風に乗って飛んでいくのが見えた。風に、エリオ君やフェイトさんの電撃のような魔力を感じる。

「速人…さん？」

変換資質だけでも珍しいのに風なんて速人さんぐらいしか知らない。でも、もう戦闘機人たちの姿は見えなくすらなっているのに、明らかに深追い…

誰一人見捨てる気が無い。

危険因子と言われても選んできた、速人さんの願い。
ただそのままに動いているだけなんだ。

『キャロの魔法は皆を守ってあげられる、優しくて強い力なんだから…ね。』

『んじゃ、そう出来るまで頑張ってみる？』

…私は、この問いに何て答えた？

「っ…」

視界を妨げる涙を拭う。 まだ…まだ出来る事はある。

「フリード、怪我した人を安全なところへ運ばないと…もう少し、頑張つて。」

私は私の答えのままに。

フリードが答えるように鳴いてくれたと同時に、私は炎に包まれた六課に向かっていた。

S I D E O U T

ただひたすらに流れを加速だけにつき込んで、風を受けて空を飛ばされ続ける。

最大速度にもなると呼吸自体出来なくなるが、どうせ数分なら無呼吸でも耐えられるので無視して加速を続けると、いくつかの光が飛んでいるのを見つけた。

見つけた…間に合ったか？

急停止出来るものでも無いので加速だけを中止する。残った勢いに圧されながら減速しつつ近づいていき…

光を放つガジェット群を通り過ぎ、前方の空中にいつも通り着地した。

「貴様は…」

警戒するトーレを無視してヴィヴィオの姿を探す。

少し遅れて飛来するガジェットの一機に、前回の事件の時に現れた召喚士と共に乗っているヴィヴィオの姿が見つかった。

間に合った…後はこいつらを片付けるだけだ。

『結局どう転んだって私には普通の母親なんて無理だよ!!』

ヴィヴィオの幸せのため、護り手を…いつ倒れるか分からない仕事を捨てられない自分の傍にいてはいけないと悩んで泣いていたのは。

兄さんと戦っても、墜とされて魔法を使えないと言われても、本気で想っていた教え子に罵声を向けられても泣かなかったアイツが、それ以上に苦悩していたトラウマと…何よりもヴィヴィオの母親になれない事を泣くほど悲しんでいる。

ヴィヴィオの方だって、転んで痛がっても起き上がるまで放置されるようなのは相手になついている位なんだ。
名目でなく心で繋がってる事なんて目に見えてる。

終わらせてたまるか。

「ヴィヴィオは……返してもらおう!!」

「AMFを展開しろ！コイツの魔力ではAMF内の魔法行使など出来まい！」

跳躍の瞬間AMFが展開されるが、知った事じゃない。

俺は指鋼線を傍のガジェットに巻きつけて腕を引く。

鋼線を引いた力でガジェットに飛び乗った俺に向かって、トーレと

先に交戦したノーヴェとか言う格闘系の少女が接近してくる。

神速。残り十秒内でけりをつける！！

寄って来た二人の攻撃が届く前に軽く斬り伏せて、トーレを足場に跳躍。

射撃体勢に入っていたヴィヴィオの傍の男の肺に徹を叩き込む。

後一回の跳躍でヴィヴィオの場所まで届く。

再度跳躍した所で、ガリユーとか言うらしい黒い虫が飛来してきた。爪を伸ばした腕を突き出してくるガリユーの腕を取って引き寄せ、その頭を足場に…

瞬間、視界が弾けた。

「あ…がつ…」

頭に電撃でも流したかのように、視界が点滅し頭痛が走る。

神速の使用限界？

それしか原因は浮かばない。まさか身体じゃなく頭にくるなんて…
跳躍し損ねた俺はガリユーから足を滑らせる。

まだまだ：AMF内だからって足場数回作る位！！

全力で魔力を通して足場の生成を行う。
グリフもないってのに神速使えないくらいで…

跳躍しようとした瞬間、何かを踏み抜いた感触があった。

『申し訳ありません、魔力限界ですマスター。』

身体の奥底から意識を引き抜かれるような感覚の中、最後にナギハからそんな声が聞こえて来た気がした。

跳躍用に使っているらしい足場の強度が足りなかったのか、踏み抜くと同時に落下していく男を見ながら、私は戦慄を感じていた。

何をされたのかも分からないうちに斬りつけられ、アムネジアも一撃で呼吸困難に貶められた。

この男の魔力値では普通にやったのでは不可能なほどの飛行速度で我々に追いついてきて、明らかな重傷で我々に突撃。

しかも…狂気でも怒りでもなく、正気だった。少なくとも瞳を見る限りでは。

正気だからこそその異常。

完全に多勢に無勢で将の役割を担うだけの戦闘機人である我々も終結していると言つのに単騎で現れるなんて真似を、正気でやる人間などどうかしていると思えない。

途中この男に異常が出なければ、合流の遅れているセインとグリフ以外の全戦力が揃っていると言つのに、これだけの人数差でも全滅させられたかも知れない。

この男…危険すぎる！

「く……っ！チンクー！」

「分かっている！IS、ランブルデトネイター……！」

生かしておけない。

チンクも悟ってくれたか、一切の容赦なくISを放つ。

多数の金属ナイフが男に殺到した直後、盛大な爆音が響き渡った。

「……やったのか？」

深めに斬られた腿を押さえながらノーヴェが呟く。

だが、私は残る爆煙の中ではなく、我々が通り過ぎた空を振り返った。

ローブを着た何者かが、意識の無い男を抱えていた。

着弾までの一瞬で男を回収して見せたか……私の全力に迫る速さだ。しかしあのローブ……確か空港火災の時にも動いていたな。深くまで被っているせいで顔も視認出来ない。一体何者だ？

「……たぞ。」

「何？」

かすかに聞こえて来たのは少女の声。
ローブの少女は大事そうに少し強く男を抱え…

「ボクは！！本気で怒ったぞ！！！」

叫んだ後、襲撃した特殊部隊施設があった方向へ向かって飛んでいった。

この速さ…やはり私でも簡単には追いつけないか…

「これはまた立派な負け犬の遠吠えですねえ。」

クアットロが嘲笑うように告げたが、私は嫌な予感を覚えていた。

ローブの魔導師は空港火災時に確認できているだけで二人、それもどちらもオーバース級。

あの男ももし全快するようであれば…

私は次々と浮かぶ不穏な予感を振り払うように頭を振った。

不要な不安など抱くべきではない。何が敵になろうとも破ってみせる、我等は戦機なのだから。

S i d e 〉高町なのは

オーバーS級の反応があったという『名目』で部隊を離れた私は、反応があつた人気の無い場所に向かつていた。

感じた魔力はレヴィちゃんの物だから、別に誰が行ってもさして問題は無いんだけど…

いきなり飛び去つたお兄ちゃんが、敵の逃げていった方向に飛んでいったと聞いている。

混乱しているせいでそれ以上の事が分からなかったけど、今わざわざ現れたのがレヴィちゃんだと言うのなら、何もしないで去る理由なんて誰かを運んだ位しか思いつかない。

勢いよく去る前、お兄ちゃんは確かにヴィヴィオの名を口にした。

嫌な予感が…殆ど確信に近いものが付きまとう。

付きまとうリミッターがもどかしくなる位に気ばかりが焦る中、とにかく速くと願い全力で飛ぶ。

喧騒が遠く聞こえるその場所に、一人の人影が横たわっていた。

「速人：お兄ちゃん？」

応急処置など無駄であったかのように酷くなっている怪我、欠片も感じられないほど小さな魔力、鞘に納めることも出来なかったらしく手元に落ちたナギハ。

そんな状態で、仰向けのまま死んだように何の反応も無いお兄ちゃんの姿があった。

見ても始まらない。

とにかく医療班に引き渡そうと思ってその身体を抱え…

「……ない。」

「っ！！！！」

殆ど聞き取れない程小さな、かすれた声。だけど確かに聞こえた。

すまない…っで。

意識が無いはずなのに呟かれている言葉。

ああ…そっか。ヴィヴィオ…攫われたんだ…

受け入れるしかなかった。

いつも言うんだ、護りきれなかった時とか…それどころか、二箇所
の犯罪者と戦って、コンサートに間に合わなかったことに悪かった
と言っ位の人だから。

その魔力値で追いつける筈が無いとか、一人で撤退した全戦力相手
なんて戦力差がありすぎるとか、重傷だったとか、そんな理由がい
くらあってもお兄ちゃんは護れなかった事を謝る。

出来ない事と知ってる上でヒーローを目指すって決めているから。

そんなお兄ちゃんが、無茶をしたこと何て謝る筈が無い。だったら
謝っている理由なんて、何かを護れなかった事位しかない。

「っ…っ…」

うわごとのように、本当に小さな声で謝り続けるお兄ちゃんを胸に
抱え、堪え切れない声をかみ殺した私はすぐに飛び立った。

私には…まだやらなきゃいけない事がある。そういう場所を選んだ
んだから…

S
I
D
E

O
U
T

第二十四話・二重の限界（後書き）

と言う訳で結局全面敗退と相成りました。チンクの負傷すらないとなるとスカリエツティ側相当おいしい一件になっちゃったなあ（汗）

例によって色々やっているため説明的なものを。

・神速の使用限界が頭に

知覚強化みたいなものなんで身体が持ち堪えてかつ限界まで使えばこっちがおかしくなっても無理は無いかな…と言う事で。

しかもこの前にグリフとの戦闘中の神速乱発、風による移動中の無呼吸状態、満身創痍と来て…って言うかむしろよく頭痛で済んでるな。

・魔力限界

普段は制御こそナギハに任せているとは言え、空中走るのに生成してる足場にも魔力を使っているので移動で限界迎えました。

痛みや体力の消耗には慣れていても、ブラックアウトには耐えられずそのまま意識を失った形です。

第二十五話・傷ついた翼

第二十五話・傷ついた翼

S i d e 八神はやて

「このアホ…事件のたびに死に掛けると気がすまんのか？」

斬撃の怪我、無視して半端な応急処置のみでの無茶な飛行によって傷が開いたせいで失血、限界まで絞った魔力によるブラックアウト、神経系を異常に酷使した反応まであるらしい。
何でこんな状態になるまで単騎突撃かましとるんや…レヴィちゃんがおらんかったら本気でやばかったらしいし。

にしても…速人君でも勝てんかった…か。

スバルから聞いた話だと、デバイスごと斬り裂かれたらしい。
いくら速人君の魔力が高くないって言っても、大した斬撃や。しかも、ただの大振りなら速人君はまず当たらん、度が過ぎるほどタイミングがいいのか、何か特別な技でも使ったのか…

「いずれにせよ、ここまでやな。」

これだけの大事にリライヴを使ってこんかったって事は、へりを撃ち墜とそうとした件で逃げたか何かしたんだろう。

そうでなかったとしても、どの道この怪我では参戦させる訳にも行かない。何しろ局員でも無いんだから。

拘束具でもかけて謹慎させとこう。犯罪者って訳でも無いけど放置しといたら脱走しかねんしな。

そうとなれば準備もいる、さっさと指示を出そうと病室を離れ…

『ごめん。』

「っ！」

病室を離れて少しした所で、そんな念話が届き、慌てて病室に戻ると、風が吹き込んだ。

開いた窓から入る風にカーテンが揺れ、速人君の姿がなくなっていた。

「はあ…本当しようがないな…」

絶対大人しくしとる訳が無いとは思ってたけど、まさかあの怪我で初日で意識取り戻すなんて。

次間違いないでくるだろうと思うと、頭の痛い話だった。

なのはちゃんどれだけ泣かす気なんやろうな…あのアホ…

S I D E O U T

人気の無い森の中、俺はユーノに回復魔法をかけてもらいつつ現状を説明した。

「つまり…完璧に負けた挙句、手伝いの真つ最中に正規の手続きも無いまま脱走してきた…と。」

淡々と告げるユーノ。俺はそれを無言で聞いているしか出来なかった。

全く何の反論も出来ないな、情けない話だ。暫く黙っていると、ユーノは溜息を吐く。

「余裕無いね…らしくない。」

「正直…余裕は無い。」

絶対になのはを泣かせているし、ヴィヴィオだって今頃どうなっているか分からない。

この状況で余裕を気取るのはさすがに無理がある。

「もう諦めたの？」

「まさか！だったら病院のベッドでゆっくりしてたさ。ただ…それでも今傷ついているだろう人が多すぎるのに変わりはない。」

今回自体が既に失態だと告げると、また呆れるユーノ。

「傷つくって心配するなら大人しくしてなよ、君が抜け出した事は間違いないのは達の心労を増すのに一役買ってるよ。」
「うぐ…」

つくづく正しい指摘だった。

とは言え、あのまま寝てたら最後出れずに後日話を聞いて終わりって感じになりそうだったし、何より今する事がある。

「僕もやる事があるからそんなに出て来れないとは思っけど…あんまり無茶しないでよ？こんな森の中で倒れたらそれこそ誰も気付けないからね。」

「分かってる。治療サンキュー、ユーノ。」

さすがにシャマル先生ほどではないが、サポート全般に凄い才を持つてるユーノは当然回復魔法も結構出来る。

身内はフレアが少し出来る位で、シユテルも応急処置レベルだし、後の二人に至っては回復魔法なんて論外。かすり傷なら忍さんやすずかに舐めてもらえば治るが、さすがにこつもバツサリ斬られてるとそれも難しいだろう。と言うか、治ったとしても中々頼むには抵抗ある話だし。

そんな訳で無理してきてもらったんだが…治療関係もつて探すなりしておいたほうがいいかな？

「ああ、それと…本番に動ける程度にしておきなよ？」

去り際にそんな事を告げてユーノがいなくなる。

少しして、一つの木の影からフレアが顔を出した。

「私も気付かれていたか？」

「お前がいた事は気付いて無いと思うけど、俺のやりそうな事がわかったんだろ？頼りになる友人だよ、ホント。」

背中を預けていた木を離れて立ち上がり、ナギハを抜いてフレアと向かい合う。

「その怪我でどうする気だ？まさか今更単なる戦闘訓練の為に呼んだ訳でもあるまい。」

「ああ、ちよつとやりたい事があってな。」

疑惑雑じりのフレアに対して手っ取り早く不毛な心配だと証明する為に斬りかかる。

フレアは辛うじて捌いたものの、斬撃の軌道を見て顔色を変えた。

前にナギハを降ろした俺は、驚くフレアに笑いかける。

「ちよつと遠慮してた物を完全に使えるようにしておきたくてな。

何、おさらいみたいな物だからそう手間じゃないだろ。」

「そう言う事か。」

納得が行ったらしいフレアが構え直し、再び斬撃を交えた。

正直、本当に少しでも拾える物は拾っておかないと。

神速の使い過ぎのせいだ鈍痛が頭に残ってるし、リンカーコアのほうも暫く完全回復はしないだろう。別に身体のだこがぶっ壊れる感じは無いから暫くすれば治るだろうが…敵の動きが速ければ回復前に次があることも考えられる。

どうせ攻撃直撃する訳には行かないんだし、傷はあってもなくても関係ないが…神速がろくに使えなかったりそもそも空中にいられな

かったりしたらかなり戦力が落ちる。

このまま…終わらせる訳には行かない。

Side ㄱ ティアナ ㄱ 란 스타 ㄱ

シグナム副隊長が仕事を変わってくれて、スバルの様子を見に行くように薦められたあたしは、病院に来た。

んだけど、スバル達のところに行く前にヴァイス陸曹に顔を出すよと言われた私は、ヴァイス陸曹の病室へ向かっていた。

正直少し予想外だったのでスバル達用の差し入れしか持って来て無いのは失敗したかな？何て少し場違いな事を考えつつも陸曹の病室に入る。

「よう、わざわざ呼び出して悪いな。」

「いえ。お加減はどうですか？」

「手抜きされたお陰で大した怪我はしてねえ、後頭部をやられたんで少し頭が痛いかな。」

そう言って笑うヴァイス陸曹は、何処か浮かない様子を隠しきれないようだった。

…無理も無い、こんな事になってしまつてシャーリーさんの悲痛な

声も廊下まで聞こえていたくらいなんだ、誰だって平気な顔していつも通りというわけには行かないだろう。

「お前もさっさとスバル達んとこ行きたいだろうしとつとと本題に入るが…心して聞けよ？」

「はい。」

珍しく…という失礼だけど、かなり真面目な話だったようなので答えるように頷く。

わざわざあたしを直接呼んで話すことなんだ、それだけあたしにとつては重い話には違いない。

「敵に…ティードがいた。」

ヴァイス陸曹が告げた一言は、真剣に聞くつもりでいたあたしの心構えを丸ごと吹き飛ばすほどに衝撃的なものだった。

「まさか、そんなはず…」

「普通に言ったら冗談にしか聞こえねえか。実際向こうも俺の事を知ってる訳でも無いようだったし、それで死人と同一人物だなんて

確証が薄すぎらあな。」

理解が追いつかないあたしを前に、ヴァイス陸曹は次々と確証が薄い理由を返す。

それは逆に、これだけ確証が薄い理由が揃っていてもまだ尚こんなことを伝える位の何かがあることを示していた。

「けど…多重弾殻狙撃を気付いてない所から撃たれて、それに反応した拳銃速射で撃ち落すなんて真似が出来る奴を、俺はアイツとなのはさんのほかに知らない。妙なところで詰めが甘いのもくそ真面目なところもそっくりで、しかもアイツ、エリオにクロスファイアを使ったらしい。」

何処か懐かしむように告げるヴァイス陸曹。

兄が得意としていたのは、高速精密射撃だった。中距離で最速の反応と命中精度を以って射撃を行う、あたしがずっと追って来たスタイル。

さすがに一度見た地球のビデオに映っていたあの人ほど出鱈目ではなかったけど、目を閉じればいつでも思い出せる兄の射撃、弾速と反応はなのはさん以上だったんじゃないかとすら思う。

「記憶は無いんだろうが、動揺を誘うのが目的で似せて作ったなら記録情報は植えつけないはずだ。となるとまるつきり俺に反応しなかったのもおかしいし、洗脳されている人間のような反応じゃなかった。」

証拠があるわけじゃないけど、可能性のレベルでなら十分に高い。まして…

「ヴァイス陸曹は…兄をご存知だったんですか？」

これが真実なら。

「お前の言う通り、昔コイツをやった関係でちよつとな。」

そう言つて、指で銃を形作るヴァイス陸曹。事件前に失礼と分かつていてした質問も流されたし、身勝手に聞き出していい話でも無いんだろう。

ただ、そうなる少し気になることがある。

「何でわざわざ呼び出してこの話を？」

自分の話したくも無い頃の話も関わってくるはずの事を、わざわざ呼び出して聞かせてくれた理由が分からない。

だから聞いたんだけど、ヴァイス陸曹は呆れたように首を横に振つた後にあたしを横目で見てきた。

「お前スバルを励ますつもりじゃないのか？んで、クロスファイアを似た顔に打たれたエリオだつてこの事を大体は知ってる。急に話題に出てミイラ取りがミイラになったらどうすんだ。」

「あ……」

わざわざ前もつて話を聞かせてくれたのにはそんな訳もあつたんだ。

「俺からの話はここで終わりだ。あんまりゆっくりもしてられないだろうが、顔出す前にちつとは落ち着いとけよ。」

「はい、ありがとうございます。」

兄さんが生きている？

想像もしないいきなりの事態に確かに混乱があるし、まだ相對して

無いから実感が沸かないけれど、もしそれが本当なら…

止めるんだ、必ず。

何一つ責めを負う必要の無いはずの兄さんに着せられた汚名を拭う為に、あたしはここに来た。

だと言っのに、これ以上こんな事件でその力を振わせる訳には行かない。

S i d e 八神はやて

この期に及んで未だ捜査協力を行う気が無い、明らかに何かを伏せている体の地上本部に確信に近い嫌なものを感じて、オーリスさんへ事情聴取を行う為顔を出したのだが…

「随分な物言いですね、民間人まで引きずり出した拳句に負傷させた部隊の長が。」

「っ…」

あらかたの予測を語った段階で、何の否定も出来ない事実を返された。

リライヴの異常な戦力が知れ渡ってる関係で次元…本局や教会、海

にとつては多少彼女が関わった案件の失態は責めに挙げられ無いようになつていゝるとは言え、地上にとつては関係もなく、前回査問を回避されたのは速人君が裏技を使ったから。
確かに人の揚げ足だけ取るにはあまりに無様な有様だ。

「貴女は…闇の書の罪を恐らく否定しない。この場で言及しようとなつて大々的に明るみに出そうと、全てを被り受け入れるつもりなのでしょう。が…懇意で伏せられている貴女の元家族の事実まで引きずり出す覚悟がありますか？」

「それは…」

間違い無く危険因子である闇の書本体の管制人格だったフレリアと闇の書の闇から生み出された宵の騎士の三人。
事実の全てをとると彼女達も速人君も纏めて巻き込む事になる。

「別にできなくても構いません。しかし、彼が言うには『お互い様にして欲しい』との事ですが…自分に関わる全てを開く覚悟が無いまま中将だけ罪人に『仕立て上げよう』と言うのは、あまりにも勝手が過ぎるように思います。」

仕立て上げる…か。

確かに、証拠も礼状も無いままの追求にこつ返されてはこれ以上は、あまりにも状況が悪すぎる。

「これ以上追求すると言うのであれば、この緊急事態が収まった場合にでも礼状なり何なりを持ってきて下さい。我々も今は地上を護る為に全力を注がなければいけませんので。」

今回はこれ以上は無理だと悟り、去つて行くオーリスさんの背を眺めながら齒噛みする。

と、途中でオーリスさんが振り向いた。

「一民間人からの意見ですが…平和と幸せを護るのなら、陸だろうと本局だろうと関係ないそうですよ。貴女もこんなところで暗躍せず、そちらに尽力してはいかがですか？」

「随分速人君に影響されたようですね？」

「一民間人とか言っているが、そんな事を言ったのは間違いなく速人君だろう。」

何も出来ずに終わるのも嫌だったので、気になった点で聞けることは聞いておこうと思って聞いてみると、鉄面皮だったオーリスさんの硬い表情から少し力が抜けたように見えた。

「…忘れた物を、思い出させるような瞳をしていましたから。」

結局返してくれたのはその一言だけだったけれど、それだけで何となく悟った。

裏技…詳細は聞いて無いけど大方脅迫まがいの何かなんだろうそれを、普通に綺麗な瞳でやってのけたんだろう。普通の人にとっては黒い事でも、『子供の死体作り』に比べれば大した事でも無い。

けどオーリスさん…今の言い方や速人君に会うまでその『忘れた物』は忘れたまんまやったって事になるけど、それでええんか？

中將がこの事件に関わっている場合手遅れだと言うのに、今更思い出したオーリスさんに少し虚しさを感じつつ、帰り道へと足を向けた。

S i d e 〱 フ ェ イ ト 〱 T 〱 ハ ラ ウ オ ン

「なのは？」

「フェイトちゃん…」

何をするでもなく夜空を眺めていたなのはに背中から声をかける。それで初めて気付いたように、なのはは力なく振り返った。

「どうしたの、こんな所で。ヴィヴィオの事…考えてた？」

ヴィヴィオの名前を聞いて明らかに表情を歪めたなのはは、顔を背けて再び夜空を見上げた。

「フェイトちゃんも聞いてたよね…『私は空の人間』だって言った事。」

自嘲気味なのはの呟き。

空を見上げながらそんな事を言われたらさすがに不安になる。

「なのは、それは…」

「心配しないで、むしろ逆だから。」

どういう意味かと問いたただそうとした所で、なのはに制される。

「また墜ちるかも知れない…現実何が起こるかわからないから母親と慕ってくれるヴィヴィオを傷つけたくなくて、ずっと引き取るの

を流ってたんだから…そんな私が、ヴィヴィオが攫われた事にどう
こう思うなんておかしいんだよね。かもしれない悲劇の一つが起こ
っただけなんだから。」

「なのは…」

淡々となのはがそこまで話してくれて漸く、何でああも悲しそうに
あの言葉を言ったのか分かった。

私は空を見上げるのはを後ろからそつと抱きしめる。

エースと祭り上げられるにはあまりに不釣り合いな小さな肩から、震
えが伝わって来た。

「理屈ではそうだって分かっているのに…全然ダメなの。ヴィヴィオ
が今頃寂しい、苦しい思いをしているんじゃないかって考えただけで
どうにかなりそうなほど苦しいの。自分の怪我ならあれだけ残酷な
理屈を平然と言えたくせに…」

私の腕を引き剥がすようにして振り返ったなのはは、私の両肩を掴
んで俯く。

「私…今更こんな事…ごめん Fayetteちゃん、Vitaちゃん、皆
…」

「大丈夫、大丈夫だよ…」

縋り付いて泣いているのはをもう一度抱きしめる。

『アイツが無敵のエースでなくてもいい場所になってやっててくれ。』

速人が頼み、私が望んだ事を思い出す。

空戦でオーバースの魔導師なんて本当に稀少で規格外。しかも二度も大事件を納めた実績もあるなのはに向けられる目は、自然そういうものになる。更に、なのはは人一倍『迷惑をかける事』を嫌っている。

そして…なのはは強いけど、女の子だ。純正の戦士である恭也さんほど戦いだけに生きてはいないし、速人のように壊れてもいない。

なのはが一番今悲しんでいるのはヴィヴィオの事の筈なんだ、失言がどうとか気にして私達に謝る必要なんて無い。

「出る理由ははやてが何とかしてくれる、今は他の隊員もいない。何より私は、なのはの支えになりたくてここにいるんだから…素直に泣いていいんだよなのは。」

「っ…うん…っ!」

無理しないでと伝えるように、優しくゆっくりと言葉を紡ぐ。

と、頷いて返してくれたなのはは、私の胸に顔を埋めて言葉になりきれない声を上げて泣き続けた。

ヴィヴィオの名前を呼ぶ中で、時折速人に謝る声が混じる。

…速人の馬鹿、なのはの事泣かせてばかりじゃない。

あんな怪我なのに病院を抜けて、まず大人しくはして無いだろう速人の事を考えると、さすがにちょっとだけ怒りたくなってきた。

「っ…う…」

夜の闇につつまれ殆ど何も見えなくなった森の中。不意に襲ってきた頭痛に、ナギハを振るう手を止め額を抑えて木に背中を預ける。

こりゃ、誰かに呪詛でも送られてるかな？

怒られる心当たりが多すぎる自分に少しばかり呆れつつ頭痛が治まるのを待って…

「ふう…っ…!!」

痛みが引いた所で、木の背後から首筋に短剣を添えられている事に気が付いた。

前方へ踏み出しつつ旋回して、背を預けていた木を見る。

「や、久しぶり。」

「何だ、リライブか…」

そこにいたのは、全身を隠すような黒いローブから顔だけ出したりライブだった。

短剣状のデバイスを待機状態に戻しつつ軽い挨拶をしてくるリライブに、やばい連中じゃないと知って息を吐いた。

「む…なんだとはご挨拶だね、局と一緒に捕まえるんじゃないかった

の？」

「そのつもりだが…今はお前の相手は『二次』だからな。見ての通りの体調だからさすがにそんな余分に体力裂いてられないんだよ。」

むくれるリライヴの抗議を無視して肩を竦めつつ答える。

「参考までに私より先に片付ける用事を教えてくれない？」

「攫われたなのはの娘と隊員の救出が一、馬鹿科学者叩きのめして局に差し出すのが二。で、お前は文字通り二の次だ。」

「成程、確かに文字通りだね。…ってなのはの娘！？あの娘いつの間…」

聞いてきたから素直に答えてやると、少しの間を置いて妙なところで驚くりライヴ。

「ちなみに養子な？いつだったかへりごと撃たれかけた子。」

「だよね…ビックリした。」

念を押して伝えておくと、胸をなでおろすリライヴ。

それにしても、その『子供何ていないはず』みたいな驚き方は何なんだと問い詰めたい。まるでなのはが結婚できそうに無いみたいじゃないか。まあ、俺も少しは嫌な予感はあるけど…

「逸れた話題は置いておくとして…お前の現状でも」

「脅迫受けて逃走中の身でね、あんまり向こうの皆が不利になる話はないんだ。」

「…律儀な奴。」

こんな森の奥で俺一人相手に話した所で情報ソースがリライヴだっ

てスカリエツティたちに知られる確率なんてそう高いものでも無いだろうに。

「前回の騒ぎの少し前に詰問受けて、グリフにやられた怪我を治しつつ潜伏中だったんだけど…速人が負けるようじゃ私も斬られる訳だ。」

「ぐっ…」

楽しそうに告げられたりライブの台詞に、大見得切ってアツサリ負けた事を思い出して額を抑える。

そんな俺の様子を見ていたりライブの表情から、唐突に笑みが消える。

「大丈夫なの？私が脅かせる位に接近しても気付けないほどの体調不良なんて普通じゃないよ？」

「おいおい…二の次とは言え交戦予定の相手の心配なんて」

「茶化さないで。本気でそう思ってるなら…これ以上聞かないけど…」

流そうとした俺の言葉を切ったりライブは、最後少し悲しそうに目を伏せた。

何でかは分からないけど本気で心配されてるようで悪い気がした俺は、胸を張って答える。

「ま、問題ない。ゆっくり寝れば治るさ。」

「こんな森の奥で言う台詞じゃないよ…」

心配かけまいと笑顔で答えた事を察したらしいりライブが苦笑しながら肩を竦める。

「お前はどつするんだよ。脅されてるから動かないのか？」
「最高評議会。」

コイツがこのまま黙って大人しくしている訳が無いと思って聞いてみると、思っても無い方面の名前を持ち出された。

「それって確か…管理局設立前から動いてる局の裏方だよな？」

「スカリエッティのクライアント。レジアス中将に表を任せてたみたいだけど…」

「あ…レジアスさんやっぱ関わってたか…」

思っても見ないタイミングでのネタバレに頭を抑える。

戦闘機人や人造魔導師を戦力にしたかつたんだろ…地上で戦力増やそうと思ったら方法も限られるし、幾らか妙な情報改ざんもしていたからあたりだろうとは思ってたけど…

「ああまで派手に動いた以上、ただのスポンサーの敵に回ってもスカリエッティの邪魔にはならないだろうし、とりあえず連中を表舞台に引きずり出す…つもりで今日こっちに来た所だったんだ。」

「成程ね。でも大丈夫なのか？脅迫を受けて逃亡するようなお間抜けさんが潜入捜査なんて。」

「う…」

ニヤニヤしながらの俺の突っ込みに、意気込んでいたリライブが目を逸らす。

「…ま、何にしても気をつけるよ。管理局の中核を本気で敵に回すって事は今ん所複数世界を敵に回すのと同義なんだからな。」

「裏方を表に引きずり出すだけだよ、暴れる訳じゃないんだから大丈夫。」

握った拳同士を軽く打ち合わせると、ロープを被りなおしたリライヴは森の闇に消えていった。
しかし、全く表舞台に出てこない管理局の中核が主犯か…こりゃ俺のほうも手を打っておいたほうがよさそうだな。

S i d e ～リライヴ

『つくづく変わった人ですね、彼は。』
「そうだね。まさか罵声の一つもない所か心配されるなんて思わなかったよ。」

派手な飛行では目に付きやすいからと言う理由で、イノセントと話しながら森を歩く。

『二の次とは言え…敵に回るのは嫌ですか？』
「んー…でもしょうがないよ。救えればそれで終わり…って訳には行かない一団に協力してたんだし。」

それ以外にも色々やってるし、被害も出てると言えば出てる。速人が止めに回るのも無理は無い。

『しょうがない、と言う事は暗に敵に回るのは嫌だと言っているよ
うなものですよ？』

と、自分で納得しようとしていたところにイノセントから冷や水を浴びせるかのような指摘を受けた私は足を止めた。

「…確かに嫌だけどさ。結構懂れてるし、改めて一人になってやっぱり少し寂しいしね。」

『でしたら』

「でも。」

恐らく投降なり共闘なりを薦めようとしているのだろうイノセントの言葉を断ち切る。

「管理局に協力してやる気も無いし、頭を下げる気なんてもっと無い。」

『…そうですか。』

断言すると、機械音声の癖に何処か残念そうな返答を返すイノセント。

デバイスとして『機能』するだけならここまで感情豊かに喋る必要も無いだろうに、一人でうろついている私の為にか妙に色々と身に着けているイノセント。

そんな相棒を前に暗いままと言うのもごめんだったので笑顔を作って言葉を続ける。

「速人に『もう無闇に動かないからどうかどうか』って頼んだら、きっと頑張ってくれるとは思うけど…それはそれで…ね。」

『似合いませんね。』

「そつちに突っ込むんだ、酷いなあ。」

情けないと言うつもりで言ったのに、似合わないと返された。

どうせ助けられるお姫様役なんて似合わないのはわかってるけど、

断言しなくてもいいのに...

S
I
D
E

O
U
T

第二十五話・傷ついた翼（後書き）

と言う訳でティータ生きてました。ご都合極まりないなあ（汗）

一応八話の『斜めに両断された下半身とIDカードのみが残って』
って所から複線だったりしたんですが…

そして速人は局の依頼的には途中退場扱いで今回の案件の報酬（以下略）

第二十六話・動き出す暖かな宵闇

第二十六話・動き出す暖かな宵闇

「本部は必要で六課の施設は暫く使えない上、移動が自由なほうが都合がいい…」と言う訳で、今後機動六課は本部をアースラに置くみたいだよ。」

「サンキュー、ユーノ。いや助かったぜ。」

治療を兼ねて六課の現状を伝えてくれたユーノに感謝したんだが、当のユーノは疲れた様子で肩を落とした。

「気分転換名目でこんな所まで来て、しかも皆アツサリ許してくれるから…なんか後ろめたいなあ…」

「そう暗い顔するなって、いい事あるさ。」

「君が言うなよ!..!」

励ますつもりでユーノの肩に手を置いて明るく言っていると、ご尤もな返事が返って来た。

調べもので無限書庫引っ掻き回してるだろうユーノに治療まで頼んでるんだ、正直悪い気はしてる。

「ま、良いけどね。友人の手伝いに来てるのは僕の『矜持』だし。」

「あ…」

ユーノと出会ってまもなく起こったP・T事件で話した事。

未だに覚えててくれたのか…しかもそれでこんな森にまで来てくれるとは。

少し感動してる俺を他所に、ユーノは続ける。

「それに、君はまだなのは達の力になるつもりなんだろう？ だったら尚更さ。期待してるよ、ヒーロー。」

「ああ、任せとけ。」

わざわざ出向いてここまでしてくれた友人に最大限の感謝を込めて、笑顔で力強く引き受けた。

S i d e 〱 シグナム

アースラの訓練場で、エリオに訓練を頼まれて相手をしているのだが…私はその出来に感心していた。

「でやあっ…！」

「む…！」

私の打ち降ろしを回避しながら、横薙ぎに振るわれたエリオの槍を後方へ跳ぶ事でかわす。

体軀を回転させながら回避と攻撃を同時にやってのけたエリオ。しかも第二形態にしたストラダーの側面ブースターを使用して重さまで加えてくる。

下がった私に向かって突きでの追撃を加えようとしているようだが、ブースターを使って回転した為か少し態勢を整えるのに間が出来る。

「はあっ！」

「っ！」

整うのを待つほど甘くない私は間髪入れずに斬りこんだが、エリオはそれを辛うじてとは言えデバイスで受けて見せる。

子供ゆえの軽さのせいで押し負けこそしたものの、デバイスを手放す事も無く構えているエリオ。

すさまじい成長だな、もう空戦でなければいい勝負をする。

「時間だな。」

「ありがとうございます。」

肩で息をしながらも、しっかりとした返事に若干の余裕を見せるエリオ。

「先程の回転はフレアの物か？」

「あ、はい。」

気になったので問いかけてみると、エリオは汗を拭いながら答えた。距離を離さないまま回避したうえ、攻撃もかねる動作など行う人間はフレアか速人ぐらいのものだ。

扱って見せたのは素晴らしいが…紙一重、首の皮一枚などと言う表現が用いられる程の接近戦を行う世界の技術だ、こんな模擬戦をテストアロツサが見れば卒倒ものだろうな。

「模擬戦や戦闘記録から使えそうな動作をいくつか覚えて慣らしては見たんですけど…やっぱりまだダメですね。回転が強すぎて突きに繋がられませんでした。」

「フレアから直接習ったのではないのか？」
「同じ槍使いとして細かく聞きたいって頼んだんですが…突撃用の僕の槍とは用途も扱い方もまるで別物だってあんまり話は聞けなかつたんです。」

習わずに覚えた理由を聞いてみると、少し残念そうに告げるエリオ。私達が『クロスレンジ』と一括りにする範囲の技巧だけでどれだけの種類があるかも分からんような世界だ、どっぷりはまっっているらしいフレアの返しとしては妥当なのだろうな。

「私も人に教えると言う柄ではないし、技巧と言う意味では奴の変わりにはならんかしれんが…」
「変わりだなんてとんでもないです！フレア空尉には変換資質もありませんし、色々盗ませてもらってます。」

生意気な事を言うとも思ったが、実際既に見たものを試合で扱って見せるところまでできている。
私とてニアスの空戦魔導師だ、その私を相手にああも扱って見せるのだから驚くほかあるまい。

「今更だが、休んでもおけ。」
「はいっ！」

元気のいい返事を背に訓練室を後にすると、表にテストロッサが待っていた。

新たな拠点となった戦艦アイスラの通路を、現状をテストロッサに伝えながら歩く。

「え！それじゃあ空尉とシグナム両方と訓練してるんですか？」

「そのようだな。私は他の仕事もあるし、フレアは度々ここを外すから、ペースとしては丁度いいつもりでいるんだろうが…」

フレアのほうは予想外だったのか、テストロッサは少し不安そうに訓練室を見る。

「あまり不安そうにしてやるな。極端に疲弊しているようでもなかったし、何より成果は出ている。私も一撃入れられるところだったからな。」

訓練中着ていなかった上着をめくって、少し裂けた内側の服を見せると、テストロッサは改めて驚きを見せる。

「凄い…シグナムに一撃入れるなんて…」

「もらってはいない、旋回時の一撃が掠めただけだ。」

「そうですね、それでも凄いですけど。」

思わず強く否定してしまった私を見ながら笑うテストロッサ。

むう…つい熱が入ってしまった…いかな、この調子ではまたテストロッサと張り合っていた時のようにシャルあたりには笑われてしまう。

「ところで…なのはのほうはどうだ？ヴィヴィオの誘拐といいあの馬鹿の失踪といい、無視するには負担が多いが。」

「大丈夫ですよ、なのはは強いですから。ガス抜きさえちゃんと出来ていれば問題ないです。速人が動くのは…もう恒例行事みたいな

物ですし。」

無理をするのが得意だから表面上様子がわからない事に不安を抱いて一応確認を取ってみたが、暗にガス抜きはしたと告げるテスト口ツサの返答に安心する。

「それならばいい。子供にかまけるのもいいが、嫁の面倒もしっかり見てやれよ。」

「な！何ですか嫁って！？なのはに聞かれたら怒られますよ！」

とりあえず先に楽しみに笑われた分は返した私は、慌てるテスト口ツサの抗議を聞き流す。

お前にからかう側は十年早い。

S i d e 〉 アムネジア

アインヘリアル襲撃の任を受けた俺達は、三基全てを破壊する為三隊に別れる事になった。

オットーとデイド、ウエンディにノーヴェエが三号機を、トーレとセツテとチンクが二号機を担当することになった。

そして俺は、クアットロ、セイン、ディエチと共に一号機の担当に回され…

「遅い。」

片っ端から目に映る魔導師を昏倒させていった。

クアット口の視覚操作で俺の姿を誤認しているせいかな、護衛にしている魔導師達は全く俺を捉えられずに次から次へと倒れていく。こういう雑魚掃除には連射か広域攻撃がいいから高速射撃が得意分野の俺にはやりやすいな。

「いやあ…楽でいいねえ。後もあるんだから飛ばしすぎないほうがいいんじゃない？」

直接戦闘タイプではないとは言え、それでもかなりの身体能力を誇るセインが気楽に局員を昏倒させつつ笑う。

武装はともかく、皆は動作データは共有できるからな。最前線張るタイプのトーレやノーヴェなんかと殆ど同じ経験を持つてると変わらない。

「ちゃんとした戦闘機人の皆と違って半端な身だしな、役に立つなら手抜きはできないさ。それに、クアット口的能力が無かったらこつも飛ばせないし。」

「あら。褒めても何も出ないわよ？」

一気にデータを増やしている皆に対して、俺は身体の部品を作る際に組み込んだだけになる為、動作共有までは上手いかなかった。

生身が残っていた上半身はともかく、やっぱり繋ぎ目や足の動きにどうしても少し違和感を感じる。そんな身で手抜きなんてしたら危なすぎる。

『撃つから射線から離れててよ。』

あらかた片付いたのを見計らってか、チャージに入っていたらしい
デイエチから連絡が入る。

オーバーS砲撃なんて防げる魔導師がそうそういる訳も無く、まし
てや今は殆どの局員が寝ている。

デイエチのイナームスカノンから放たれた砲撃はアインヘリアルに
着弾して爆発した。

「任務完了だな、報告しよう。」

「ホント真面目だねアムネジアって…」

セインに少し呆れられつつ、俺は通信を繋いだ。

堅苦しくなきゃ真面目で悪い事も無いだろ。…多分。

Side 八神はやて

アインヘリアルが潰され、活動する戦闘機人の中にギンガの姿が映
る。

歯噛みしながら全域に流されている映像を見つめる私達を嘲笑うか
のように、スカリエッティが語りに入った。

『さあ…いよいよ復活の時だ。私のスポンサー諸氏、そしてこんな
世界を作り出した管理局の諸君、偽善の平和を謳う聖王教会の諸君
も…見えるかい？これこそが、君達が忌諱しながらも求めていた絶
対の力。』

大地が揺れて裂けて行く中、眠りから覚めるように一隻の船が空に浮かぶ。

『旧暦の時代：一度は世界を席捲し、そして破壊した。古代ベルカの悪夢の英知。』

浮かび上がった船は、何処か神聖さを感じさせるような彩と、圧倒的な強大さを感じさせるものだった。
あれが：聖地より帰った船：か。

『見えるかい？待ち望んだ主を得て、古代の技術と英知の結晶は、今その力を発揮する。』

『ママ…』

「っ…」

無理矢理中枢として扱われているらしいヴィヴィオの姿が映し出され、ヴィヴィオはママと呟きながら苦しんでいた。

一番キツイのはなのはちゃんや、私はきっちり頭動かせるようにしとかんと。

『さあ！ここから夢の始まりだ！！！！』

これ以上ない程に楽しげに笑うスカリエッティ。私は止めなければならぬ船を頭に叩き込むように睨み…

『演説はもういいな塵芥。』
『は？』

唐突に、割り入るように入ってきた新たな映像と、その中心に浮かぶ見覚えしかないローブ姿に凍りついた。
呆けた顔が映つているところを見ると、スカリエツティですら想定していなかったらしい。

『玩具一つで機嫌が取れる安い者に王など務まらん。王は我一人で十分だ！！！』
「だあああつ！何やつとんのやこのアホオ！！！」

格好でもつけたつもりか大見得を切ってローブを脱ぎ去り、その幼い頃の私とほぼ変わらない姿を晒すディアーチエ。
私は冷静にと齒軋りしながら堪えていたのも忘れて思いっきり叫んでいた。

S i d e ー デイアーチエ

「ま、待ちなさい！貴女こんな所で何を」

「黙れ下郎。人形と鉄屑しか戦力の無い科学者一人相手にこんな物が浮かぶまでに対処の一つも出来ん役立たずの治安維持組織など一言として発する権利など無いわ。」

「なっ…」

飛行が出来ないのか男に抱えられながら叫んでいる女の抗議を無視して巨大船：やかましい女を抱えている男が言うには『聖王のゆりかご』と言つらしいその船を眺める。

こんな玩具に子供一人乗せただけで張り合われるとは…スカリエツティとやらの算段が甘いのか管理局の無能が過ぎるのか…全く、どちらにせよ関わりたくも無いな。

「本来どうでもいい連中同士の争い事など放っておくのだが…貴様はやりすぎた。」

告げつつ、魔法陣を横一列に展開していく。

「よりもよつて我の家族を殺しかけ、しかも親戚の一人娘まで攫つていく始末。防げなかつた役立たず共もそうだが、主犯の貴様等は到底許してはおけん。」

語っている間に、総数36の魔法陣が揃う。

これだけあれば十分だろう。

「まずはその玩具、闇に喰われて絶望するがいい！」

全魔法陣からの魔法発動の準備が整ったところで、エルシニアクロイツを振り上げる。

「アロンドイト・フアランクスシフト！消し飛べ塵芥！！！」

多数の魔法陣から放たれた砲撃が雨のように船に降り注ぎ、着弾と同時に炸裂。瞬く間に船を魔力光が飲み込んだ。

「な…なんて魔法…」

「いや凄いな…はやてでもここまでやれば無理が出るはずなんだけど…」

「ふん、小鴉ごときと一緒にするな。それよりも失せろ、巻き添えを食うぞ。」

傍で感嘆を漏らす局員らしき二人に一応警告だけしておく。

当然と言うべきか感心するべきか、あれだけ撃つても見た目を罅だらけのみすばらしい物に変えるのが手一杯だったようで、上昇速度が変わる様子が見られない。

よって『次』も撃たねばならない。

巻き込まれなくてはさっさと逃げておかなければならないので一応忠告したのだが、あろう事か男は女を抱えたまま近づいてきた。

「待つて、いくらなんでもこれ以上は危険が過ぎる。君は魔力を使いきったら」

「要らん世話だ。」

「そんな筈ありません！今の一撃で青ざめているでは無いですか！」

余計なところにはだけは気付く女が叫ぶとおり、先の一撃で保有魔力

の大半を使いきった上、高出力を放った負荷で身体が悲鳴をあげている。

だが…魔力に関しては策がある。それに…

身体に関しては、宿主の似非英雄のほうに余程無理をしている。だと言つのに、我がこの程度で根を上げる等という事はあつてはならない。

「貴様等の知つた事ではないわ！引つ込んでいろ！！」

故に騒がしい雑兵の言葉を断ち切つた我は、再度魔法陣の展開に入つた。

S i d e } リインフォース・フレイア

リンクによって繋がっている騎士たちの様子に想いを馳せつつ私は…

「はむ…っ。これで、30個…」

机に向かつてひたすらにケーキを食べ続けていた。

私は、騎士達が闇の暴走体から力を受け取っていた機能と同等の機能を使い、魔力をディアーチエに送り続けていた。

それだけではBがせいぜいの私の魔力量では一瞬で枯渇する為、吸

収効率のいい栄養剤で点滴を行いつつケーキを食べ続けている。

「大変な機能貰っちゃったねフレリア。ケーキ食べ放題で太らないなんて羨ましいとも思ってたけど…ホールで30個も行くとさすがに見てられなくなってくるよ。」

隣に座って見ていたアリシアが苦笑混じりに感想を漏らす。

私自身それには同意だった。さすがにこうも連続で食べ続けていると舌が馬鹿になりそうな気がしてくる。

実際には夜天の騎士達と違い完全なプログラム体の私達はそうそう体質が狂うことなどありえないのだが、それでも頭の中からおかしくなりそうなほどに甘い。

けど…

「力の無い今の私が…はやてや夜天の騎士達、主や宵の騎士達の役に立つ方法があると言うだけで、私は十分です。」

「そっか。」

辛いと言えば前線のほうがはるかに辛いはずなんだ。

しかも、貸せる力があるならいくらでも貸したいだろう事もすずかも、おとなしくしているしか無い現状を寂しげに納得しているのに、手伝える手がある以上喜ぶべきことだ。

「あーもう！それはそれで羨ましい！私が速人の役に立つにはデバイス見るしかないのに！メンテナンスに顔出す位してくれればいいのにいー！」

パタパタと足を振りながらむくれるアリシア。

こう言っではいるけど、昨日までずっと宵の巻物のシステム見直し

や騎士達のデバイスの調整、整備を行っていた彼女が、力になれていないはずが無い。特に、調整だけで済むデバイスのほうはともかく、この魔力リンクは、機能を使った戦闘を思いついてから使い方の確認、調整を繰り返した為相当大変だったはずだ。

『魔力生成遅いぞ！何をやっている！？』

『乱発は負荷が大きすぎる、はやて達がつくまであしらえればいいんだ、あまり無茶は』

『ちっ…まあいい！追いつかないなら休んでいる！子供の寢床一つや二つ、我一人でも潰してみせる！！』

最初から最後まで罵声しか無いディアーチエからの通信。態度自体はいつもあんな調子だが、彼女は結構家族を気遣っている。今だつて休んでいると言っただし。

ただ…それで本当に休むとディアーチエのほうが無茶をやめないだろうから、やっぱり私だけ手を抜く訳にはいかないんだが。

私は改めて、傍らでアリシアが切り分けてくれたケーキに手を伸ばした。

S i d e 〱 セ ッ テ

『外で空戦に特化しているのはお前だけだ。空戦の主体となるが頼むぞ。』

私はドクターの護衛に向かったトーレの言葉を思い出し、空を駆ける。

外に残ったのは、ノーヴェとウエンディとオットーとディード、それからルーテシアとアムネジアと13番。トーレとチンクとセインはドクターの護衛に向かい、クアットロとデイエチはゆりかごを離れたウーノに代わってゆりかごへ向かっていた。

「やっぱり来るっすよねえ？あいつら。」

「どつつてことねえよ、来るなら来る出全部ぶっ飛ばすだけだ。」

ドクターも遊び場と言っていたし、ノーヴェとウエンディの言い様も分かると言えば分かる。戦闘機人はただ戦う為の全てを詰め込まれたものだ、生まれながらにしてただの人間が及ぶはずもない。唯一相手にいるもう一機のタイプゼロも、戦闘機人とは言えドクターの改良も無い旧式。

だが…それでも油断が過ぎるように感じる。

トーレも戦機力を承知で自身と自負を持ってはいたが、戦機の中でも最強の戦闘能力を誇りながらも一切の油断が無い。それと比べるよ…

『お前はあまりに対応が機械過ぎる、少しは考える事も覚えていけ。』

トーレから受けた忠告に従うなら、今『感じた』問題には、私が対処できるようにしておくべきだ。

そういう意味でも警戒をしておこうと改めた所で…

「何か来る、オーバーS級が二人？局にしては早すぎる、これは…」
「天破・雷神槌！！」

オットーが警戒を指示した瞬間、雷撃が雨のように降り注いだ。

比較的速く動ける私は完全回避した上で現れた襲撃者に飛び掛るが、影に到達する前に私の眼前を砲撃が通過していった。

一瞬でも気付くのが遅れたら飲み込まれていたかもしれないその砲撃を避けた私は、少なからずダメージこそ受けたものの、問題なく動いている他のメンバーから突出しない為一度下がった。

「宵の騎士が力の象徴、レヴィーザスラッシャー。ただいま参上
！！」

「不本意ながら同じく宵の騎士にて理の象徴、シユテルザデス
トラクターです。」

現れた二人の魔導師は、データで見た昔のフェイトお嬢様と高町なのはに酷似した姿の少女達だった。

声からすると、以前速人と言う男を救出して逃げたローブの魔導師がレヴィと名乗った少女なのだろう。

「何だデメエら！局員でもねえ癖に」
「うるさい！！！！！！」

いきなりの襲撃者に文句を言い出したノーヴェの言葉を完全に断ち切るような、どこから出るのかと思うほどの音量のレヴィの叫びが響く。

「言った筈だよ、ボクは本気で怒ったって。マスターがきつと望まないから酷い目にはあわせたくないけど…」

レヴィは手にしてたデバイスを魔力刃を展開した鎌状に変形させると、それを一薙ぎした。

「これ以上は何もさせない！怪我をしたくなかったら武器を捨てて帰れ！！」

大見得を切ったレヴィに対して、デイドが呆れたように頭を振る。

「甘く見られたものですね…オーバーS級を軽視するつもりはありませんが、2対8の戦力差をどう扱うつもりですか？」

「逃げます。」

「ええ！？」

呆れるデイドに対してシュテルの返答は、味方である筈のレヴィにすら衝撃を与えるほどの物だった。

私達も驚く中、シュテルは話を続ける。

「いくら2対8でも魔力差があるので逃げるだけならそう難しくはありません。かと言って貴女達は私達を無視すれば、後程相対するだろう局員と再度現れた私達に挟撃を受けます。そして、先行組と我々の相手の二手に分かれれば戦力分散。しかもオーバーS級2人を相手に出来るだけ裂かなければならない。この状況を作っただけで既にチエックメイトなんですよ。…と言う訳ですから、怒るのは構いませんが勝手に突撃しないで下さいねレヴィ。」

手の内を語って追い詰められるとはさすがに予想しなかった私は、理の象徴といったシュテルの手管に驚いた。

しかも、ここでどういう手をとるか考えている時間も彼女たちにとっては時間稼ぎとなる。それも『何の消耗も無く』だ。

混乱が落ち着いたり各地のガジェットが鎮圧されたりするほど、局の防御は硬くなる。ここで時間を使う訳には行かない。

『オットー、私が一人でレヴィを抑える。シュテルのほうだけどうにかする手を考えて二手に分かれるべきだ。』

指揮役も担っているオットーに考えを伝える。

『：二手に分かれるのは賛成だけど、大丈夫なのかい？仮にもオーバース級だよ？』

『トーレから此方での空戦を任されている、戦機として必ず。』

侮る訳ではないが、見た目所か中身まで幼い魔導師相手に尻込みするようでは、戦機の名が廢る。

『分かった、ならシュテルをノーヴェとディエチと僕の三人で相手にする。残りの皆は先行して。』

『了解！』

オットーの指示に対してアムネジア一人のみの返事が聞こえて来たところで、私はレヴィに飛び掛った。

Side 高町なのは

ディアーチエちゃんが全局生放送状態で親戚の娘とか言うから、私がヴィヴィオをあずかっていた事を知っている人たちには関係性を伏せる事もろくに出来ず、各方面の事情を知らない人達に『説明は事態が収拾するまで待って』としか言えず、はやてちゃんと揃って頭を抑えることになっていた。最もその姿だけで十分に問題なのだけだ。

しかもシュテルちゃんとレヴィちゃんがもう既に戦闘機人と交戦中らしい。

こうなるとフォワードの皆に会わせておいたのは良かったと思う。この混沌とした状況で正体不明の相手に頭を悩ませるのはどうかと思うし。しかもあの子達、絶対事情聴取逃げる。

私とはやてちゃんは、色々後にすることにした。今はゆりかごを止めるのが先だ。

そして、私達六課はアースラから出撃して、三手に別れる事になった。

フォワードの四人は地上で戦闘機人とガジェットの相手。

アコース査察官達が発見したスカリエッティのアジトへの突入はフエイトちゃんと、閉鎖空間と言う事でグリフの存在を危惧してフレア空尉が割り当てられる事になった。

シグナム副隊長はゼスト等の想定外対応に回る為に地上に残り…

私とヴィータ副隊長が、ゆりかご突入組となった。

これで堂々とヴィヴィオを助けに行ける、本当はやてちゃんには感謝しないと。

出撃に際して別れる前に、スバルが少し暗い表情で一人残っていた。先に行っていると外してくれたヴィータちゃんがいなくなったところで、スバルに歩み寄る。

ギンガの事もあるし、心配なのだろうと思ったんだけど…

「なのはさん！」

「ん？」

「大丈夫ですから、きつと！ギン姉も…ヴィヴィオも…！」

決意の表情を新たに力強く発せられたスバルの言葉は、私がかげようとしていた、私にとってあまりにも予想外の一言だった。

少しだけ硬直した私は…

「あはははははっ…！！！」

出撃前なのも思わず忘れて大笑いしてしまった。

ハツとしたスバルは顔を真っ赤にして目の前でわたわたと慌てたように手を振る。

「あああのそのえつとごめんなさい違うんです失礼でしたえつとその」

「いいよスバル、そんな慌てなくて。」

この娘は、変な所で自信なかったり弱気だったりするくせに、時折とんでもなく前向きで、それこそあの意地と誇りでがんじがらめだったティアナが心惹かれてしまうくらいに『強さ』を見せる。

どんな時でも大丈夫だと思わせる、フォワードの皆が辿り付くと思

った勇氣と力の象徴であるストライカーの強さ。

まさかこの土壇場で、そんな強さで私の背を押してくれるとは思わなかった。

「ありがとう、スバル。ちゃんとヴィヴィオつれて戻ってくるから、地上はお願いね。」

「はいっ!!」

へりに向かうスバルと別れて先に離れたヴィータ副隊長の後を追う。すぐにその姿が見つかった…

「10年早えつての。」

「あ、聞こえてたんだ。」

不機嫌そうなヴィータちゃんの呟きに苦笑した。

Side↳ティアナ「ランスター

頬を染めて少し落ち込んだ、情け無い顔でへりに乗り込んだスバル。

「10年早いわよ。」

「あえ!?!聞こえてた!?!」

忠告のつもりで告げておくと、スバルが思いつきり驚く。

「そりゃあれだけでかい声で叫べばね。」
「ああ… やっぱりまずかったのかなあ…」

身の程知らずと思われかねない台詞を大々的に叫んだ事に今頃頭を抱え込むスバル。

「何だつてあんな事言ったのよ？」

「ただでさえヴィヴィオ攫われてるのに、怪我してる家族… 速人さんまでいなくなっちゃって… 戦闘はともかく、気持ちの上で平気なはずが無いことでもなのはさんは平気なように笑うのは大怪我の時の映像とか速人さんの話とかで知ってたし… だから… その…」

「どうにかしようとおれこれ考えて、ついいつも通りあたし相手みたいな何の根拠も無いくせにやけに自信満々な台詞が出ちゃった…」

だんだんと尻すぼみになりながら話すスバル。言いよどんだ辺りから残りを補足すると、スバルは肯定するように小さく頷いた。

「ま、相手を考えずにそんな事思うのもどうかと思うけど…」

「あう、やっぱり？」

やっちゃった感を漂わせてるあたり自覚はあるのだろうスバルが、あたしの指摘に改めて肩を落とす。

そんなスバルを横目に、アコース査察官との話を思い出す。

強い力や立場を持つ者の重圧と寂しさ。色々とあるが、友人としても接して欲しいとの話。

スバルは気付いて無いかもしれないけど、あの馬鹿発言の後に聞こえて来たなのはさんの声からは、怒りも憤りも感じなかった。

「けどあんたはそれでいいと思うわよ。あたしも…」

何度も助けられてるから。と、続けようとしたんだけど…

言い切る前にきらきらとした瞳を向けてきたスバルを見て言葉を切った。

「ありがとティア。」

「っさい。緊張感無いのよアンタは。」

少し恥ずかしくなったのを隠すようにスバルから顔を逸らし、少しの間を置いて俯いた。

あたしも他人事じゃない。

兄さんが敵だと言うなら…止めなきゃならないんだ。

訓練校から今まで…特になのはさんの訓練を受けてから、随分力はついたと思う。

けど、ランスターの弾丸はどんな敵とでも戦っていけるって、証明するつもりで『磨いている力』で、本物に勝てるのか…

眺めていたクロスミラージュを握っている手に、そっと手が重ねられた。

いつの間にか、スバルがすぐ隣にいた。

「あたしもギン姉を助けてみせるから、ティアだってきつと大丈夫。ティア強いもん。」

何一つ曇りないいつもの瞳であたしを見つめるスバルに、一瞬心を奪われた。

いくらなのはさん相手でも届かない訳が無い。

一人で全部やりきる気でいた私の心にすら、いつの間にか届いているんだから。

…最も、思っても絶対言わないけど。

何も解決していないはずなのに、いつの間にか不安は消えていた。

S I D E O U T

人目につかない森の中で、俺は身支度を整えた。

『実体武器での完全装備ですか…』

「まあな。今回魔力余分に使えなさそうだし。」

普段はデバイス同様魔力で修復したり作ったり容易な装備を使っているのだが、今回ばかりはそれじゃやってられない。

全快といえる状態でも無いし、敵も中々出鱈目だ。

要領オーバーしない限りいくら装備を詰めても重さが増えないのは魔法技術の恐ろしいところだが、それでも各形態でどのように装備を展開するかの情報は設定しておかなきゃならない。

準備は完全。ちょっと怖いと言えば、少しの消耗も惜しかったから神速を使えるか試してない事位だが…ま、頭痛も無いし何とかなるか。

しかし…顔出さなかった俺も悪いが見事にやってくれたな皆して。

ディアーチエの罵声に一瞬でスカリエツティの顔色が変わった時は驚いたが、後の事を考えるとちょっと頭が痛い。

まあリライヴの事も考えるといろいろ後腐れなくなってくれてた方が都合いいと言えば都合いいし、今はこの件終わらせることだけ考えるか。

「頼むぜナギハ！」

『了解ですマスター。』

人気の無い森の中で凧形態をとった俺は、気配を悟らせないままに駆け出した。

第二十六話・動き出す暖かな宵闇（後書き）

フアランクスについて調べたところなんか密集陣形と出たので…横列でも使っているのかな？と（汗）無理が過ぎたらすみません。

後戦力が原作と変わってくるため配置が少しぶれています。

二話投降します。

第二十七話・エンカウント

第二十七話・エンカウント

Side 八神はやて

ゆりかごとやらに追いついたところで私達が見たものは、局員に近距離を固めてもらいつつ中範囲程度の魔法を連発しているディアーチエの姿だった。

「ディアーチエちゃん！大丈夫！？」

「ふん：やつと来たか小鴉共、思いの他盾共が足掻いたお陰かガジェットは減らせたが…」

真っ先に声をかけたなのはちゃんに悪態吐いてゆりかごを見るディアーチエ。

視線を移せば、ゆりかごから新たに無数のガジェットが出撃するのが見えた。

「見ての通りだ、いくら叩いても出てくる。最早あの中で製造されていると言われても驚かんぞ我は。」

「分かった。中へはヴィータ副隊長となのは隊長に行ってもらおうからアンタはもう下がとつてええ。魔力をどう確保しとるんか知らんけど、体はもう限界やろ。」

この短時間でどれだけの無理をしてきたのか、傍目に分かるほどに衰弱していた。

肩で息して弱弱い魔力と閉じそうな瞳を無理矢理張っている姿は正直見ていられん。

けど、ディアーチエは鼻息一つ返して杖を構える。

その後、デバイスから幾つかのぬいぐるみを取り出した。

「この状況でよく遊べるなお前…」

「黙れ塵芥！軽く持ち運びやすい人型がこんな物しかなかったただけだ！」

呆れるヴィータに怒鳴りつつも取り出したぬいぐるみをゆりかごに向けて飛ばすディアーチエ。

ガジェット of 攻撃を回避しながら複数のぬいぐるみを操作するのは中々やけど、一体なんで今そんな事を…

「おい、雑兵を下がらせろ、巻き添えを食つぞ。」

「何を…っ！全員ゆりかごから離れる…！！」

いきなり何を言い出すのかと思いつつ左手に手にしている本が開いているページを見て、私は即座に退避命令を出した。

「あの馬鹿は、親戚の為なら殺しにかかってきても笑顔で対応するような奴だからな、貴様の子供だろう？必ず連れて帰って来い。」

「言われなくてもそのつもりだけど、一体何を…」

独り言のように話すディアーチエの言葉に、相変わらず名前で呼ばないからか少しばかり不機嫌に答えるのはちゃん。

だけど、答えを聞いたディアーチエは、一瞬笑顔で私達を振り返った。

「…それでいい、後は任せたぞなのは！！！」

「え？」

「お前…」

初めて名前を呼ばれたのはちゃんが困惑を、ヴィータが感心を見せたときには、人形は既にゆりかごの横っ腹に接近していた。

私は、ディアーチエがこれからすることが分かっていて、言葉で止められない事も分かっていて、目を閉じ歯を食いしばる。

だって、開かれているページは、私がよく使うデアボリックエミッションそのものだったのだから。

本来は、術者を起点にして発生させる広域魔法。なら、わざわざ複数の人形を接近させた理由は…

「デアボリック・エミッション・ドールズシフト！！！」

起点を人形に変えるくらいしか、理由が無かった。

複数の人形を起点に広範囲を食いつぶす闇が発生する。

単発であればなのはちゃんがかつて防御魔法で防いだが、丁度重なる箇所ゆりかごの外装が来るように調整されたそれは、付近のガジェットを飲み込みつつどんどん巨大化していく。

全てが収まると、ゆりかごの側面に大穴が開いて、通路がむき出しになっていた。

広域攻撃の為、周囲のガジェットの大半も巻き込まれて一直線に道

が開けている。

けど、そんな事より…

「ディアーチエー!!」

消費魔力とその結果のほうの問題だった。

魔力光を漏らしながら半透明に薄れたディアーチエを慌てて抱きしめる。

肉体ではないディアーチエが、消耗しきったところであんなものを撃ってただで済むはずが無い。それを承知であんな馬鹿なものを…

「ふん…見くびるな…」

抱きしめているディアーチエから漏れた声に、慌ててその姿を良く見直すと、半透明ではなくなっていた。

気のせい…な筈はない。消耗しているのは明らかで、本当にやっとの事で言葉を紡いでいるのだから。

「我は少し休むぞ小鴉…後は貴様等で何とか…」

言い終わるか否かのタイミングで光に包まれたディアーチエは、バリアジャケットから黒を貴重とした私服になっていた。デバイスも待機状態になっているところを見ると少しでも消耗を抑える為に全機能を切っただけらしい。

「なのは隊長、ヴィータ副隊長、空域の安全確保は私と航空魔導師
隊で引き受ける。突入頼む。」

「了解。」

力強い返事が返ってきた直後、二人は空いている空を一直線に翔けて開いた穴からゆりかごに突入した。

「君、彼女を安全で休める所まで、丁重につれてったげてくれんか？」

「はっ！！」

傍にいた局員の一人に声をかけてディアーチエを預けると、これ以上ない程に折り目正しい敬礼と力強い返事の後に、とても丁寧な彼女の身体を抱えてくれた。

口調こそ粗暴なディアーチエだけど、心打たれるものがあつたらしい。

…ま、私もそうやからな。

「おし！人々の安全と財産を護る管理局員として、民間人にここま
で気張らせて敵が多いとか嘆いとれん！気合入れていくよ！！！」

未だに次から次へと湧いてくるガジェットから地上を護る為の号令をかけると、声と言うより衝撃と化した力強い返事が空中に響き渡った。

矛盾をかかえ、禁忌に手を出し、そうしてただの肉塊に変わり果てた愚かな最高評議会の三つの『脳』。その一つを踏み潰した私は、もう用がなくなったこの場を去り、次の任務に向かう為に踵を返し…

「間に合わなかったか…」

「何？」

二つの剣を腰に装備した黒尽くめの男の姿に一瞬硬直した。

よく見た所、軽く息を切らしているようで割と急いでここまで来たらしいことが伺えるが…

魔力も感じられない外部の人間がどうしてここまで来られる？

「一応忠告だけしておく。俺は魔導師じゃないから手が抜けない、五体満足で居なければ素直に投降してくれ。」

少し思考に時間をとられた私の神経を逆なでするような台詞をのたまう男。

私はそこで、男の正体を考える事をやめた。

急がなければゼストとレジアスが生きたまま接触してしまう、それは少々まずい。

「私は優しいから…一瞬で殺してあげます。」

脳が入っていたケースを割った伸縮自在の爪、ピアッシングネイルを装備した右腕を振りかぶり、一気に男に接近する。

心臓を抉り取る気で右腕を突き出し…

「え？」

男の姿が消え、腕から離れて落ちていく肘から先が目に入った所で意識が消えた。

Side 月村恭也

戦闘用に生み出されたと聞いていたので油断は出来ないと判断したが、さすがに殺す訳にも行かなかったので、『閃』で武装を腕ごと切り落とした後に後頭部に『徹』を叩き込んだ。

倒れた戦闘機人の女性の右腕に止血を施した上でアリシアから受け取っていた携帯拘束具を使って拘束する。

人に見つからない事を優先して動いていた為、彼女がカプセルを破壊している所を見つけたときには既に間に合う距離じゃなかった。破壊されたカプセルの元まで行くと、付近に色を失った脳が転がっていた。

無情な光景に軽く目を伏せる。

人の身を捨てて世界を護ってきたのか…

今はもう語る事も無くなった三つの脳に、俺は黙禱を捧げた。
この偉人を、責め立てる気にはどうしてもなれなかったから。

私欲に駆られた訳ではない事など、この姿を見れば分かる。

クローンを作ったり、不死を求めて人の身体を乗っ取るうとするものだが、日の目を見ることの無い脳だけを、恐らく自分達で志願して取り出して今までを過ごして来たはずだ。

膝一つで大騒ぎした身としては、ついていけないほどの話だ。
そうまでしたと言うのに、この後諸悪の根源として葬られる事になるだろうと考えると虚しいものだ。

「それで…君はいつまでそこで隠れているつもりだ？」

振り返って声をかけると、俺が入ってきた入り口から、黒いローブから顔だけ出した女性が姿を見せた。

S i d e ー リライヴ

やっとの事で辿り付くことが出来た最高評議会の居場所まで来た所で、中から聞こえて来た戦闘音。

見つかつて局員でもいたら厄介だから、身を潜めて様子だけ伺おうとしていたんだけどアツサリと気付かれた。

仕方なしに姿を見せると、今の私が言えた義理でも無いけど上から下まで黒い服装で、二刀を腰に差した怪しい男性が立っていた。

「貴方は…」

「旧姓、高町恭也。速人の剣の師で兄でもある…と言ったほうが、君には分かりやすいかな？リライヴ。」

予想通り、と言つか信じられない相手と向き合っていると初めて知った。

速人の…決して高いとはいえない魔力値でなのは達と肩を並べ、幾度か私を斬った事すらある技量の持ち主であるあの速人の剣の『師』。

私からすればもう偉人のレベルだ。

とは言え、万一捕らえに来るとどうなるかわかった物じゃない為全力で身構え…

「そう警戒しないでくれ。手伝いにきたつもりだし、俺は一応ただの人間だからな。君のような大魔導師相手に出来ることは何も無いさ。」

恭也さんは構えもせずに笑顔でそう言った。

あまりの敵意のなさに呆れる一方で、何を馬鹿なことを言うのかと思っただ。

傍に倒れているのは服装からして明らかに戦闘機人。彼女達はバツ

クスのクアットロとかでさえ並の局員なら複数人相手に出来るだけの戦闘能力を持っているって言うのに、魔力も火器も使わずにその一人を拘束してのけた人がただの人間な訳が無い。

とは言え、戦う気はなさそうだったのでとりあえず警戒を解いて近づく。

遠目に見えていた割れたポッドの下まで来ると、幾つかの脳が転がっていた。

「すまない、間に合わなかった。」

「いえ…私も今来た身ですから…」

それにしても、脳だけになってまで生き永らえた拳句、利用しようとしていたスカリエッティに殺される何て、自業自得もいい所だ。幸いにして施設そのものは破壊されていないようだし、『普通の局員』が来る前にデータを消しにかかるような工員が動く可能性を考えて出来るだけの情報を写しにかかる。

イノセントを機器に接続して作業を開始し…

「それで、君はこの後どうする気だ？」

「え？」

少し経った所で恭也さんから放たれた問いに、私は硬直した。

Side アムネジア

「例の四人が来るっスね。」

「つい最近加わった俺に、洗脳に近い彼女までいる俺達と、ずっとチームで動いてきた向こうの四人とでまともに組みでぶつかるのは避けたほうがいい。」

「ホント真面目っスねアムネジア…ま、組でぶつかるのを避けるのは賛成っスけど。」

へりから降りるデータで見た四人の姿を見た俺は、対処を考える事にした。

気楽なウエンディは勿論、ルーテシアも作戦を立てるって柄じゃないし、13番めの彼女は論外だ。俺が考えるしかない。

「ルーテシア、白天王を出せば向こうの四人の内対処出来るのはあの召喚士だけ。護衛らしい槍騎士もついてくると思うけど、ガリユ」と一緒に相手できるか？」

「大丈夫、負けない。」

ルーテシアから珍しく強気になっているのが分かる返答が返って来た。結構対抗意識あるみたいだな…まあルーテシアはオーバース級だし、AA二人くらいならそこまで心配は要らないだろう。

「けどそれ普通に四人ともお嬢様に向かわねえっスか？」

「俺達が出っ込む気で素通りしようとするれば向こうも放置は出来なはずだ。彼女もいるしな。彼女は向こうのタイプゼロの娘より強

いんだろ？」

「データ上も戦跡もこっちのほうが上っスね。ドクターが各部の見直しもやってるから装備的にも負ける要素は無い筈っスよ。」

ウエンディに確認を取ると、予想通りの返答が返された。

「なら大丈夫だ、後は俺とウエンディの二人掛りで指揮官のあの娘を倒す。その後で残りに別れて叩けばいい。」

「急造にしちゃ文句ない出来っスね。そいじゃお嬢様、ちやちやっとお願ひします。」

「分かった。」

作戦が決まったところでルーテシアが少しはなれてビルの一つに陣取る。

少しの間を置いて、白い巨体はその姿を現した。

「これは…壮観だな…」

「見る場合じゃないっスよ。」

「っと、すまないウエンディ。」

ひよっとするとあれだけで四人とも軽く殲滅しかねないほどの力を持つていそくなその巨体を横目に、俺達は再び駆け出した。

Side 〱 ティアナ 〱 ランスタ 〱

とんでもない化物を召喚してくれた向こうの召喚士に頭が痛くなる。が、いつまでも悩んでいる暇は無い。こうしている間にもギンガさ

んを含めた三人がどんどん進行してきているのだ。かと言って、あ
のでかぶつは間違いなく普通の局員じゃ相手にもならない。なるこ
したら…

「私が行きます！」

「駄目、他の召喚虫もいるのよ？キャロー一人じゃ危険すぎるわ。」

「でも…」

悲しげに訴えてくるキャロ。

私も分かってはいる、あのでかいのを放置しておく訳には行かない
と。けど…

この状況、間違いなくそれを利用した罠だ。まんまと相手の掌に乗
って戦うとなると分が悪すぎる。

「エリオ、キャロについて一緒に行つて。」

「けどそしたらティアナさん達が3対2に」

「信用しなさい。それでも六課前からのベストコンビなんだから。」

エリオとキャロの不安を一蹴すると、二人は小さく頷いてフリード
に乗って飛び立っていった。

「にへへ…ベストコンビ。」

「っさい！二人が不安がってたから言っただけよ！気味悪い笑い方
すんなー！」

滅多に口にしない事を言ってしまったからか、ただでさえ恥ずかし
いと言うのに隣のスバルがとてつもなく嬉しそうな顔するから余計
にしまらなくなってしまった。

…まあ、嘘を吐いた訳ではないし、しかもそれをスバルも分かつて

いるからこんな嬉しそうなんだろっけど。

「集中、来るわよ！」

「応っ！」

向ってくる三つの影を見据え…

その中に混じる、忘れられない姿を目にした所で強く歯を食いしばった。

S i d e ｝フエイト Ⅱ T Ⅱハラウオン

スカリエッティのアジトへ突入した私とフレア空尉。

道中でシスターシャツハとも合流し、事前調査していただいた経路からスカリエッティがいると思われる場所へ一直線に向かっているのだが…

「先行が過ぎます！あまり無茶をなさらないで下さい！」

シスターが横で警告するように、たった一人でガジェット群に突っ込んでいくフレア空尉。

私はそれを、ただ眺めている事しかできなかった。

原因は、移動中に話した作戦にある。

「私が先行するからお前は温存しておけ。」
「どうしてですか？」

いきなり空尉から持ち出された話は、口を挟まずにはいられない話だった。

一緒に来たのに戦うのは空尉に任せるなんて…

「お前個人の能力がトーレに届いていない、内部空間やガジェットにはAMFが働いているからデバイスそのものを武器に技量でも戦える私のほうが魔力刃を構成して魔導師として戦うお前より消耗が少ない等幾らか理由はあるが、最大の理由はグリフの倒し方にある。」

そこで言葉を切った空尉。

グリフ：速人ですら斬り合いで負けた凶戦士。まず間違いなく室内であるアジトにいるだろうと言う事で空尉が此方に来る事になった。空尉は勝算があるという話だったけれど、その具体的な内容となると真剣に聞いておかなければならない。

「倒し方…ですか？」

「ああ。具体的に言えば、私が奴と切り結んでいる間に避けよう防ぎようの無い高出力広域殲滅で私ごと倒してもらおう事になる。」
「なっ!?!？」

完全な自爆覚悟の突撃だった。

「そ、そんな馬鹿なこと」

「技量では絶対に敵わん。二人掛りでどうにかなるかも怪しいし、

そもそも奴が一人でいる保障も無い。であれば、私に出来るのは足止め位だ。」

出来ないと言う前に言葉を封殺される。

「その際は戦闘不能にならざるをえない。ならば後が残っていた場合にお前の消耗が少ないほうが安全かつ確実という事だ。」

「で、でも！」

理屈はわかる。でも味方ごと撃つなんてそんな馬鹿な真似：

「お前がやらないというのなら、グリフ一人に私もお前も殺され、後続のほかの局員も何人殺されるかわからない。しかも、ゆりかごは止められてもスカリエツィを捕らえられずに終わる可能性すら出てくる。非殺傷で撃てるお前の攻撃で倒れたほうが、あれとまともに交戦するよりも安全なんだ。人命が大事だというなら撃て、賭けに出るなら好きにしろ。」

「っ…」

それ以上空尉は何も言わなかった。怒る事すらなかった。

そして来たアジトで、私は結局空尉に先陣を任せている。撃つというなら本当に躊躇えない。

タイミングを外せば空尉だけに当たってしまうかもしれないし、時間を稼ぐにしてもグリフのほうが強いと判断しての戦い方なのだから、そう長くはもたない筈。

周囲のガジェットがあらかた片付いたが、空尉は肩で息をしていた。いくら言っても聞かない空尉にシスターが私を見る。

「フェイト執務官からも」

「いえ、フレア空尉は大丈夫です。」

「そんなはず」

単騎で私達に出番が回らないほどの速度で敵機を葬っているというのに大丈夫な訳が無い。

シスターの言いたい事は分かるけど…

フレア空尉は、数度の深呼吸でアツサリと呼吸を整えた。

「八時間通して戦えるただの人間もいる、魔力だけ節約すればこの程度大した問題ではない。」

「あ…」

空尉はそれだけ告げて再び先行し、私は呆然と手を伸ばすシスターの傍に近づく。

「魔法使用が前提の私達はAMF下での消耗が激しいですが。彼はほぼ身体強化のみで高い戦闘能力を出せるので、温存の為です。戦闘機人が出たら、そのときは…」

「…分かりました。」

今はこれで納得してもらおうしか…納得するしか無い。

私達は見失わないよう先行した空尉の後を追った。

S i d e 高町なのは

突入した私とヴィータちゃんは、内部状況がよく分からないまま調査班からの情報を待つ間、道を作る為に中でガジェットと交戦していた。

けど…やたらとヴィータちゃんが先行してハイペースで戦っていた。

『あれから一回だけでもいい、ちゃんと本気でヴィータの事見たのか？』

今更になって、嫌になる程実感する。本当に…思いつきり裏切ってたんだなって。

次のガジェット群が見えて、ヴィータちゃんがそこに突撃しようとしたところで、私は抜き打ち砲撃でその群れを破壊した。

「おい！」

「ごめんヴィータちゃん、見てるだけは嫌なの。無茶するのが自分なら大丈夫って…何にも気にしないでやってきたくせに今さらこんな事言うのは我侂だって分かってるけど…」

不機嫌そうに振り返ったヴィータちゃんに、申し訳なくて俯いたままそう返す。

内部全域にAMFが張り巡らされているこの状態で戦えば消耗が大きいのは分かっているけど、だからこそ余計に見ているだけは嫌だった。

「半分にしよう？ヴィータちゃんが飛ばすなら私も飛ばすから。」
「おめえそりゃ提案じゃなくて脅迫だろうが…」

不機嫌この上ない事をあらわすように眉根を顰めるヴィータちゃん。本当に今更だから私は苦笑位しか浮かべられなかつたけど、少ししてヴィータちゃんは何かを振り切るように頭をガシガシと掻き乱す。

「…ま、表で何もしなくても良かった分消耗も少ねーし、多少の我侷は聞いてやる。」

「ありが」

「ただ！」

お礼を言い切る前にグラーファイゼンを鼻先に突きつけられる。

「動かねえ炉を潰すだけのあたしと違って、オメーはぜってーにヴィヴィオの所で戦わなきゃならねえんだから、そのこと考えてペース配分しとけよ！」

「…うん。」

ヴィータちゃんの指摘に、私は静かに頷いた。

絶対にこんなところに繋がれてるなんて望んでない筈のヴィヴィオが、この船を動かすだけの力があって抜け出す事が出来ない。間違はなく操られてる。

そして、多分辿り付いたら聖王と呼ばれただけの力を操られたまま向けてくる事に…

覚悟を固め、散策を再開してガジェットを適度に蹴散らしていると、連絡が届いた。

待ち望んだ、駆動炉とヴィヴィオの居場所。けど、それらは間逆の方向にあった。

「こりゃ、二手に分かれるべきだな。」

「…分かった、気をつけてねヴィータちゃん。」

「言つたる？動かねえ炉を潰すだけだ。んで、潰すのは得意分野だ。速効でぶっ壊して援護に行つてやるよ。」

不安は口にしなかった。

私が言えたものでも無いし、私だつて信じてくれたほうが嬉しいから。騎士のヴィータちゃんなら尚更心配なんてされたく無い筈だ。

二手に別れ、ヴィヴィオの元へ向かつて進む。

特に何事もなく進んで…

「つ…あ…」

ある通路を曲がる前に、硬直して地面に降りた。

『マスター？』

デバイスであるレイジングハートにはまるで分からないこの感覚。魔力とかデータに残せる物じゃないこれは…

「っ！ダイバインバスター！！」

通路に飛び込むと同時に、通路全部を塗りつぶすほどの強大な範囲砲撃を、節約とかは一切考えずに放つ。

砲撃が収まって通路が見えるようになったけど、そこには何の姿もなく…

「AMFとやらのお陰で消耗が激しいんだろう？こんな物を撃つていいのか？」

「っ！！」

通路の少し先に見える十字路の影から、グリフが姿を見せた。

「最も、ここで死ぬ以上関係の無い話か。」

「く…来たら撃つ！！！！」

グリフが迫ってきて十字路に飛び込めなくなった瞬間に再度先の砲撃を撃てるように構えておく。

本当なら私が進まなきゃならない事も気にしている余裕は無かった。

殺す事、命を絶つ事を理解した上で、死を作る者だけが持つ気である殺気。

何も知らない局員とかがイライラしているだけの人を指して殺気立つてるとか言うけれど、本当はそういうものじゃない。

それどころか、いくら修行していても実戦に出ているも、真っ当に局員をやるような、誰も殺すつもりが無い人には決して身につかな

い物で…

生命としての本質を潰すような気質でもある。

だから、全身の筋肉が緊張して冷や汗が頬を伝う今でも、歯の根もあっている状態で立って思考が働いているだけで十分だとすら思った。

何しろ昔恭也お兄ちゃんにコレを向けられた時には本当に真っ白になったから。

「なら…近づかないさ。」

「え？」

一瞬、どういう事が分からなかった。

その一瞬で、どこからか現れた8つの剣がグリフの背中に浮いていた。その尖端の全てが私の方向に向いて…

「っ！プロテクション！！」

一斉に飛来する剣をプロテクションで受ける。結構な衝撃を感じたもののどうにか堪えきり…

その一瞬で彼は接近していた。

彼が手にしている剣を踏み込みと共に振り下ろすと、プロテクションが抜かれ、私は思いつき後方に飛んだ。壁の感触を背中に感じ、悠然と歩み寄ってくるグリフを見る。

シューター、仕留めきれずに斬られる。砲撃、チャージすら間に合わない。ジャケットパージ、再構成の間何て無い。

詰められた状況にそれでも諦めたくなくて考えを巡らせ…整う事無く、剣が振り下ろされた。

思わず目を閉じてしまった私が聞いたのは、金属同士がぶつかるような甲高い衝撃音。

ゆっくりと開いた私の瞳に映ったのは…

ふわりとなびいた真紅のマントだった。

S I D E O U T

第二十七話・エンカウント（後書き）

ディアーチエに盾扱いされた局員sですが、どうしてもタメがいる系統の魔法が多いディアーチエが落ちずに戦えてたので今回は健闘してます。見えない所で（汗）

・デアボリック・エミッション・ドールズシフト

作中でディアーチエが使えるようになったゴーレム操作を利用した魔法の一つ。

いろんな場所に人形を配置しておいて使って各地を飲み込んだり、単発ならなのはの防御でも防げるそれを幾つも重ねて威力をあげたり出来る。

が、広域魔法の複数同時使用という馬鹿げた魔力行使の負担は当然洒落にならない。

第二十八話・風纏う英雄（前書き）

注）時系列的にはズレますが、各地での戦いを「グループ（？）」ずつ進めています。

第二十八話・風纏う英雄

第二十八話・風纏う英雄

なのはに剣を振り下ろそうとしているグリフの姿を見つけた俺は、神速で割って入った。

やれやれ… ヴィヴィオ救出の手伝いとコイツとの決着天秤にかけてゆりかごを選んだって言うのに、まさかコイツがゆりかごにいてくれるとはな。

一粒で二度美味しいとはこのことか？

「交差させて受ければどうにか… デバイスも壊されないみたいだな！」

ナギハを交差させグリフの一撃を受けていた両の腕に力を込めて押し返すと、グリフは距離を取って構えなおした。対して俺は、ナギハを鞘に収めてなのはを見る。ふうっ… ちょっとだけヒヤッとしたぜ。神速使えなかったらやばかったからな。

「お、お兄ちゃん…」

「待たせたな！ 天下無敵のスーパーヒーロー、高町速人ただいま参上！ ってね。」

事態に頭がついてこないのか、殺気に飲まれてたのか、呆けているのはの前できっちり決めポーズつきで格好つけてやると、漸くなのはの瞳に力が戻った。

「ば、馬鹿！通信繋がってるし記録も取ってるのになんで苗字」

「それ今更だろ？ディアーチェが親戚の娘とか言っちゃったし。それにお前もついさっきうわごとみたいに『お兄ちゃん』って言うってたぞ？可愛い可愛い。」

「あ、頭撫でてる場合じゃないの！！！」

一応グリフの事は警戒しつつ、別に視界に入れなくても動きは分かるので気にせずなのはの頭を撫でる。と、完全に調子を取り戻したなのはが頬を染めて怒った。

うん、問題ないな。

「ま、コイツは俺に任せて先に行っとけ。ヴィヴィオ、助けに行くんだろ？」

「でも」

「俺の心配よりヴィヴィオへの言い訳でも考えとけ。」

俺の指摘に顔を曇らせるのは。

その辺何も無いまま普通に仕事で出撃したのかこの馬鹿…らしいと言えはらしいが、なんだかなあ。

「母親になれるとかなれないとか考えてるかもしれないけど、別にお前が何かに変わる訳じゃないんだ。母親になろうが何しようが高町なのは高町なのは。お前そのままに本音を伝えてつれてくればいい。」

言うだけ言って、軽くなのはの背中を叩く。

「全部片付いたら旅行にでも行こうぜ。当然、ヴィヴィオもつれてな。」

「…うん。」

飛び立つなのはを、グリフを警戒しつつ見送る。

けど、当のグリフは何処か冷めた様子で俺を見ているだけだった。

「なんだよ？まさか今更出てくるなんて…とか言っつもりじゃ」「そつだ。」

念のため聞いたことが当たってしまった。

むう…実力が伯仲していれば結果どうなるかなんて毎回分からはずなのに、相当軽く見られてるのか俺？

ま、前回の戦いそのまんま受け取られてたらしょつがないとも思っけど。

俺は納めたナギハに手をかけ…

「風翔斬『ウインドスラツシャー』。」

居合いから風の刃を放つ。

全く警戒せずに立っていたグリフは、勘か何か判らないが辛うじて

横に避け、服を僅かに裂くにとどまる。
グリフはさつきまでの退屈そうな瞳を見開いて、裂けた自分の服を見つめていた。

「今のは…」

「奥義までは拾ってきたと言ったけど、『御神の剣士』としては皆伝も受けてない最弱の身なんだ。ただ…」

刀を鞘に納め、なびいた真紅のマントを軽く弾く。

「今日の俺はヒーローだ、そうそう負けてはやらないぜ。」

静寂。暫くそれだけが残り…

グリフの冷めた表情が一変して、殺意と狂気を孕んだ笑みとなった。

S i d e 〽グリフ

ゆりかこの事を知る前、僕はスカリエッティに呼び出された。

「どつしたんだい？随分とつまらなそうじゃないか。」

用件だけを告げられると思っていた僕に、スカリエッティはそんな問いを投げかける。

その指摘は、僕にも理由が分からないままに的を得ていた。

「珍しく君に傷をつけられるだけの相手だったんだろう。それでも弱かったのかい？」

「そんな事は無い。」

そう…弱い訳が無い。

捨て身で来たいつかの局員を除けば速人ほど出来る相手とやれる機会はそう無いのだから、本当ならつまらないと言つのもおかしい。

「きつと、漸く戦えた御神でも全力を出すに至らなかったからだ。」

「加減したと？」

不思議そうに聞いてくるスカリエッティ相手に首を横に振る。

「科学者の貴様は失敗しても死にはしないが、『出来てしまう』事やって全力だと思わないだろう？僕は、勝ってしまった。」

「成程：それならば確かに気持ちは分かる。それはとてもつまらないね。」

何処か自分でもまとまらないままに浮かんだ答えを返すと、スカリエッティは納得がいったように頷いた。

その後で、とても楽しそうに笑みを見せる。

「それは丁度いい。グリフ、君がよければこのままゆりかごに…私達の新たな家に来てくれないか？」

「何？」

それは意外な提案だった。

彼は自身で作り上げた物だけを傍においておくつもりだと思ってい

たから。

「私は当初興味がなかったんだが、君が来てからトーレは特にならずに抜けて力をつけていった。未だに飛行しなければ君に勝てないがね。戦闘機人に機能と感覚の融合を求めていた私としては、この結果は無視できない物だったのだよ。」

「それで貴様の作品製造に協力しろ…と？」

何の利点があるのかと言う意味も込めて睨みつつ問いかけると、スカリエツティは相変わらず楽しげに頷いた。

「報酬は…君を超える作品が完成した時。君を私の作品が殺せたなら、君にとつても満足いく結果だろう？」

「…良いだろう。ただし此方は速人との約束はもう果たしている。本気で殺しあう気ならば、それなりの代償も覚悟しておけ。」

そうして僕は、恐らく局の主力が飛び込んで来る上、全域AMF環境下という関係でゆりかご内を頼まれ、魔法を制限された魔導師を迎撃すると言う内容につまらなさを感じつつエースオブエースとやらと対峙し、今に至る訳だが…

「くくく…駄目だよ速人。君らしいとは思っけど、出し惜しみなんかつまらない。」

「そりゃ悪かった。前は御神の剣士と戦わせてやるって約束だったからな。」

まさか、前回御神で扱っている以外の技を封じて戦っていたとは。道理でつまらなかった訳だ、手加減されたまま終わってしまったのだから。

「今度は本気だろ？僕も今度は確実に…殺しに行くよ。」

「俺は約束を守る。家族旅行が先に予定に入ってるんでな、殺されるつもりはない。」

どこまでも『らしい』速人。

僕の望む殺し合いとは違うけれど…今回は楽しくなりそうだ。

S I D E O U T

近づいてくるかと思ったグリフは、手を振り上げる。

周囲に散乱していた剣が、意思でもあるかのように浮き上がり…

クン…と、グリフが手首一つ曲げた瞬間、それらが一斉に俺に向かって飛来した。

小太刀二刀御神流・裏…

「『花菱』。」

迫り来る雑多な剣を連撃で切り払う。

その間に距離を詰めてきたグリフが、手にした剣を横一線に振るい…

「『雷徹』！！」

真つ向から撃ち合わせる形で、二刀にて『徹』を重ねる。

俺は衝撃で弾かれ壁に背を叩きつけられ、グリフは尻餅をついた勢いのまま後転して立ち上がる。

よーし…さすがに徹を重ねれば力負けはしないか。って言うかここまでやってアイツの一撃と互角の重さか…知ってたけど出鱈目だな。

「今のは…いや、先の連撃も…」

「御神の技さ。習ったのは前回も使った高速移動と基本型くらいだったんで使うのは渋ってたんだが、そうも言ってもらえないからな。」

覚えるだけなら散々やった仕合で十分見せてもらっている御神の奥義。

実際に使わないままいきなりグリフ相手に使用というのはあまりに無謀が過ぎるので、型のおさらい及び戦闘での使いどころを身につける為に、森でフレアと訓練していたのだ。

「と言う訳で…今の俺は遠慮をする気が無いから、好き勝手にやるぜ！」

二刀を鞘に収めた状態から、左で風翔斬を放つ。

回避したグリフに対して、俺は既に回避地点に踏み込んで右の抜刀体制に入っていた。

「風追斬『ウインドホーミング』！」

風翔斬で崩した相手を虎切で追撃する。

どちらも高速で射程があり、虎切にいたっては抜刀術の一つ。

大分防ぎにくいはずなのだが、コレだけでしとめられるほど甘いはずもなく抜刀は剣によって防がれる。

そのまま弾き飛ばそうとする力を感じた俺は、流れに逆らわずに回転し、回転の勢いをそのままに懐に潜り込んで鳩尾に肘鉄を叩き込む。

「ぐっ…」

よろけたグリフに向かって右の刀を

「がっ！」

振りぬこうとしたところで蹴りを喰らって地面を転がる。体制を立て直し片膝立ちになった俺は…

自分の周囲に浮かぶ8本の剣を目の当たりにした。

射出される前に神速に入り、全部を無視して低空姿勢のまま駆ける。

折角使ったのだから攻め手に回ろうと思ったのだが、そんな俺に向かってグリフは既に剣を振り下ろして来ていた。

こっちからの攻撃が間に合うどころか回避が間に合うかすら怪しいタイミングで振り下ろされた剣の横っ腹を、右手の柄で殴って剣の軌道を逸らしてそのまま通り過ぎる。

「うち…やっぱり神速ですら足りないか…」

「なのはを助けに入ったときに、神速を使うと引いていた頭痛がぶり返すことが分かっていたのでできれば使いたくなかったが、そんな事言ってられる相手じゃない。」

「さーてどうしたもんか…」

「くくく…いいよ速人。君らしいし、強い。さっきの一撃は確実に抜かれたよ。もっとだ！もっとやろう！！」

「考えている俺を前に、本当に楽しそうに笑うグリフ。今までにないくらいにテンションが高い気がする。」

「最初は前座扱い、二回目は呆れられた身としてはそこまで喜んでくれると光栄だよ。だが…」

「俺は二刀を鞘に納めて立つ。」

「この馬鹿でかい船どうにかしなきゃならないんでな、お前一人にこれ以上時間をかけてられない。次で終わらせるぞ。」

「出来れば使いたくはなかったんだけど、こいつ相手に温存も何も無いし…」

「何より、コレほどまでに楽しんでくれていると言っのに手抜きなんてしたくなかった。」

『神風』からの抜刀術で、一撃で決める。

俺は一呼吸を全身に巡らせ、覚悟を決めた。

S i d e ぐりフ

二刀を納めたままでの無行の位。

刀を持つていても素人目には隙があるように見えるような異質な構えだと言うのに、納めていれば普通自殺行為にも見える。

だが…速人に限っては違った。

普通右一択の抜刀術が左右どちらでも行え、速人の場合は通常以外に逆手まである。

最速の一撃必殺が四択という、無敵に近い構え。

頬がつりあがっていくのが分かる。完全に自然体の速人からはどれが来るのかは全く読めない。しかもこうなつてはもう速人にかわされ床に突き刺さった8つの『剣の翼』は使えない。

今速人から意識を逸らし、操作しようなんて考えればその瞬間に斬

られて終わる。

楽しい！楽しすぎる！

まともに破れる気がしない、勘でも捌けるかどうかわからない。
そんな相手に会う為に御神を探して、その前に出会った後輩によつて僕の願いは叶えられた。

一瞬にも永遠にも感じられる、どれだけ経ったかも分からない時間。

唐突に、速人の姿が『消えた』。

S I D E O U T

モノクロの世界で、負荷の全てを無視して全力で放った右の一閃は…

グリフが手にする剣の柄にぶつかり、甲高い音を響かせた。

刀身で受ける事すら間に合わないと判断した為か、左手を離して右手だけ剣を手に行っている。

離れた左手には暗器らしいナイフが握られ、俺の顔面に向かって突き出される。

終わ…れるかつ…!!

足を動かす間はなく身体だけで近づく。
頬と耳が裂ける感触を感じながら、腰に溜めた左拳を握り…

「紫電一閃つ…!!」

風を纏った拳を、止められている右の刀を押し込むように打ち込んで、グリフの身体ごと吹き飛ばした。
壁に叩きつけられたグリフ。だが、この程度でアイツが止まる訳がない。

振りぬいた右の刀を以って、追撃の構えを取る。

御神流・裏…奥義乃参『射抜』

壁を背に、剣を握る手に力を込めようとしていたグリフの右肩の関節を貫く。

俺の放った一撃は、グリフの身体を壁に縫い付けるかのように深くと突き刺さり、力をなくしたグリフの手から剣が零れ落ちた。

「は…あ…はあっ…」

突き刺さったナギハをそのままに数歩下がった俺は、そのまま崩れ落ちた。

S i d e ぐりフ

「ふ…ふふ…」

貫かれた肩から伝わる痛みと血の匂いを感じながら、身体から力を抜いて壁に背を預ける。

「君は確かに『剣士』じゃないな…心地いい風だった。」

「お前こそホント大したもんだよ。あの居合い、防がれると思ってなかったからな。」

感心しつつ、自由になっている僕の足を拘束し始める速人。その様子を僕は何処か他人事のように眺めていた。

魔法や格闘まで節操なく、しかもまるで型にはまらず扱う。

魔力の性質を変える資質を変換資質と言っらしいが、何で速人が風なのか少し分かった気がした。

何者も縛れず止められず、時に凧となりてその存在を隠す。

「風纏う英雄…か。」

「何だそのかつこいフレーズ。貰うぞ？」

「好きにすればいい。」

何が楽しいのか、感じたままを口にしただけの評を聞いた速人は嬉しそうに僕の右肩の付け根を縛り、突き刺さった刀を引き抜いた。

「長時間放置はやばいな…：局員に連絡して拾ってもらってから大人しくしとけよ？」

「ああ。」

僕の答えを聞いた速人が意外そうな表情をする。

「少しも変わってないのかと思ったけど、もっともつととかゴネてた7年前よりは落ち着いてるじゃないか。」

「何？」

そして、言われて初めて自分が妙に落ち着いていることに気が付い

た。

「出来れば殺し合いは勘弁して欲しいんだけど…お前が大人しく刑期を全うして、刑期を全うして！出てこれたなら、またやってもいい。事件に関わらなきゃ今度は兄さんと違って取り持ってもいい。あ、ちなみに兄さんは俺が知る限り最強の剣士だぜ。」

先の戦いが、あるいはそれ以上がまた出来る。
そんな速人の提案に心臓が鳴るのを感じ…

死という結果よりも、自身の限界まで引き出した力を交わす事を楽しんでるのだと自覚した。

だから腕の使えない今を推して戦いを続ける事に、それほどの意味を感じなかったんだ。

ただ殺し合いだけやっていた時には、終わっていない事が納得行かなかったが、次がある事がこれほど楽しみだと思わなかった。

「約束しよう。」

次を失いたくなくて思わず口をついて出た言葉。

僕が自分で驚いた程で、速人もそうだったのかあっけに取られたように僕を見る。

「OK、約束だ。」

速人は満面の笑みでそれだけ言うと、姿を見せた局員に声をかけられる前に去って行った。

…済まないねスカリエッティ、間違いなくお前の負けだ。

速人は約束を破らないらしいからな。

S I D E O U T

「っ…う…」

酷く頭が痛い、居合いを放つ際に踏み込んだ右足が痛い、居合いを放った右手が受けられたせいはまだ軽くしびれている。

斬られた頬よりも自身の技のダメージのほうが深刻って言うのも妙な話だな…

「まあいい。一番やばいのをどうにかできたんだ、後は…一人だけかな？」

楽できるかと思っただけど、厄介な『二の次』が残っているのを思い出して頭を抑える。

…それも今はいいか、二の次なんだし。

俺は凧形態に装備を換えて代謝を鎮めていく。

これも十分負荷は大きい筈だが…神速がどれだけ異常なのかよく分かるな。此方は随分楽だ。

俺は気配を殺し、残り一手を打つ為に動き出した。

第二十八話・風纏う英雄（後書き）

御神の技を魔法との連携に組み込んで技名までつける好き勝手をやりきってようやく勝利。って神風もなんです（汗）。

・雷徹

原作正体不明（笑）。名前から『徹』系列の技と判断したのと、使用場面で金属パーツ使ってるはずの自動人形が吹っ飛んだらしいところから徹を重ねるものとして扱いました。違って調べきれてなかっただけでしたらすみません（汗）

今回も二話投降します。

第二十九話・願い踏み出す妹達

第二十九話・願い踏み出す妹達

S i d e 〱 ティアナ 〱 ランスタール

前に戦ったウエンディとか言う戦闘機人とギンガさん、それから…
アムネジアと呼ばれている兄さんの姿をした男の三人と相對する。

「引く気が無いなら…押し通らせてもらおう！」

アムネジアが宣言すると同時、手もかけていなかった銃を一瞬で抜いて、あたしとスバル目掛けて射撃を放つ。

「くー！」

射撃でどうにか迎撃することに成功したものの、向こうは一丁の銃での連射なのに対してこっちは一丁。どう考えても向こうのほうが上だと思いきらされる。

「チャージ完了っす。」

「まず…っ…！」

ウェンデイが手にした盾にもなる大きな砲口から、砲撃が放たれる。当然咄嗟に相殺できるものでもないため回避せざるを得なくなる。砲撃の狙いは、あたしとスバルの丁度中間。爆煙に包まれ何も見えなくなり…

「うあつ！」

「スバル！！！」

スバルの悲鳴が聞こえた。

今ここで更に分断されたら…

「人の心配してる場合じゃないっすよ？四人揃って漸く一人前の新人さん。」

煙が晴れると、アムネジアとウェンデイの二人だけが残っていた。スバルの様子を伺う為軽く周囲に視線を巡らせると、ギンガさんと交戦状態に入っていた。

対一でも互角に行くかどうかわからないのはスバルも一緒か…こつちを手伝おうとしてるみたいだけど、ギンガさん相手にそこまで余裕は無い筈。

『スバル、そつちはそつちで集中して！こつちはこつちで何とかする！』

合流を狙うのは不可能と判断して念話を送る。

と、ウェンデイが楽しそうに口笛を吹いた。

「大きく出たっすね。」

「馬鹿ばらすな！」

呑気な事を口にするウェンディを咎めるアムネジア。
念話が聞かれてる!?

「そんなカリカリしなくても…どーせすぐ片付くつスよ。」
「全く…油断するな。」

近づいてくる二人を前に、あたしはクロスミラージュを構えた。

こんな所で…諦めるもんか。

S i d e 〱 スバル 〱 ナカジマ

「っ!」

ギン姉の蹴りを防いで吹き飛ばされたあたしは、ビルに背中から叩きつけられる。

追撃に来たギン姉に向かって右拳を突き出すが、かわされて右のボディーブローが叩き込まれた。

「っ…」

部分展開したプロテクションで防いだものの、左拳が既に振りかぶられていて…

「があっ！！！」

横から顔面を殴られたあたしは、窓ガラスを突き破ってビルの中に転がっていった。

どうにか態勢を整え、少し視界が揺らいでいる事を自覚する。軽く頭が揺れたらしい。

早くギン姉を助けて皆の援護に行かないといけないのに…

ずっと付き纏われている『嫌な感じ』に急かされているように、ビルの外に向かってウイングロードを使って駆け、一気にギン姉に接近する。

左手を『溜めずに素早く』ギン姉の顔面に向かって伸ばす。

ダメージはともかく、視界を奪える為連撃に使える手。

「あ…」

だったんだけど、ギン姉の顔の前に張られた障壁にあっけなく止められた。隙間があるため、視界を塞ぐ事もできてない。

一度速人さんにやられた手だったんだけど、狙いが分からない時に唐突にかつ素早く放り込むからこそできる話で、今やる手じゃなかった。

蹴りを脇腹に喰らって声をあげる間も無く吹き飛ばされ、態勢を整えようと思っている最中に既に後ろまでウイングロードを伝って回りこんでいるギン姉に再度吹き飛ばされた。

「く……う……」

何かに背中からめり込んだようだけど、それが何かを判断する間も無かった。

『自分の攻撃を相手に当てるのではなく、相手に当たる場所に自分の攻撃を置いておく。』

「え？」

マツハキヤリバーから発せられた声。この話は、速人さんから聞いた……

『そのためには視る事が必要不可欠。ちゃんと視ていますか？』

見る……じゃなくて視る。見たままの行動、攻撃に反応するんじゃない、呼吸とか目線とか、あるいはそれよりもっと深くまで。

そんなに簡単に出来る話じゃないけど……少なくとも焦ってたら視えるものも視えない。

「……ごめん、もうちょっと付き合って。」

『何処までも。』

「ありがとう。」

構え直したあたしは、再度ギン姉に向かって行った。

Side↳ティアナ＝ランスター

どうにか距離を取ったあたしは、幻術と共に射撃体勢を取る。

「馬鹿の一つ覚え…っスね！」

「っ!？」

展開した幻術を見渡したウエンデイがあたしを見極めて射撃を放ってきた。

もう通じなくなってる!？そんなに日も絶ってないのに…

「そこだ!!!」

跳躍後退したあたしに向かって放たれるアムネジアの射撃。
逃げてもらえないから撃ち落して…

「え？」

直後現れた一回り小さな弾丸を受けて地面を転がった。

全く同軌道の連射でサイズ調整して視覚から弾丸を隠すなんて…出鱈目すぎる…

「っ…んのおっ!!!」

横に走りながら乱射。

狙い自体は甘めだが、平射することで弾幕にすれば何発かは当たる。

「おっと。」

あたしの射撃じゃウエンデイが持つ盾にもなるらしい射撃武器を破

壊できず、アムネジアを庇うように前に出たウェンディに全て防がれた。

けど別にいい、狙いはビルに飛び込むことなんだから。傍にあったビルに飛び込んで直接見つからないように身を隠す。

「ふう…」

これで少なくとも真正面から二人相手に射撃の撃ち合いする必要がなくなった。

遮蔽物なんかも使えばだだっ広い場所で戦うよりはましだ。

どうせ熱源感知やらで位置もばれてるだろうし魔力弾を展開、姿を見せるのを待つ。

そして、アムネジアの姿が見えたところで…

「クロスファイア…シュート！」

あたしが放った得意技は、重ねて放たれた射撃によって相殺されたギリ…と、自分でも気付かない間に食いしばっていたらしい歯から不快な音が漏れる。

「驚いたな…軌道も性能もかなり近い。前回からそんなに日も経つ

てないのにもう」

「何馬鹿言ってるのよ…」

何かが頬を伝う感触がしたが、構ってもいられなかった。

素っ頓狂なコメントをする目の前の男を全力で睨む。

「あたしがどれだけ憧れたと…どれだけ貴方を目指してきたと思ってるんです…なのに！貴方はそんな所で何やってるんですか兄さん！……！」

「え…」

答えを求めたアムネジアと名乗っている兄さんは呆けた顔で固まるだけだった。

傍にいたウエンディが面白そうにあたしと兄さんを見比べる。

「へえ！？そりやまた面白いっすね！まあ残念な事に記憶喪失なんっすけど…」

戦闘中は散々小馬鹿にしてきたウエンディだったけど、今回は茶々入れてこなかった。

それを少し不思議に思いつつ、彼女の告げた、予想出来ていた『記憶喪失』という真実に歯噛みする。

そんな中、兄さんは申し訳なさそうに目を伏せた。

「すまない、何でも脳へのダメージが原因らしいから、忘れてるんじゃないくて記憶が壊れてるんだ。幸い覚えている日常行動から戦闘スタイルまでは扱っているうちに思い出せたんだが、昔の記憶とかは…」

「それはあのスカリエッティの診断でしょう！？いいからとっと戻ってきて検査受けてください！こっちには医療専門の人だって」

「それは出来ない。」

あたしの訴えは、記憶に関して謝る時と違い真っ直ぐに向けられた瞳と強い意志を孕んだ言葉によって断ち切られる。

「俺は命の恩人とその家族の力になると誓った。君の様子から察するに、君の兄は少なくとも家族を裏切ったりする人間じゃないんだろ？ だったら…俺が他人だろうと、本当に君の兄だろうと…」

そこまで告げた兄さんは、改めて銃を構えなおす。

「覚悟を決めてくれ。」

「っ…」

どうしたって説得は無理だ。何でそんな真面目にこんな事になってるのよ…

「どうしても嫌ならアンタがこっちに来たらどうっすか？」

「お、おい！」

「あたしすらも産みの親のドクター手伝ってる訳っすけど、まあ家族なら心配っすよやっぱり。お嬢様もリライブが裏切ったときは随分落ち込んで」

「だから内情をばらすなって…」

気楽に語るウエンディと、内情を語られ呆れる兄さん。…成程、それで馬鹿にしたりせずあたしと兄さんを見比べてたのか。

一度銃を降ろした兄さんは、少し警戒しつつも問いかけるような目を向けてくる。

あたしは一呼吸して…

「家族だから止めるのよ。覚えときなさい、常識知らず。」

「コイツ…捕獲対象でもないってのに人が折角」

「いやいい、大丈夫だウエンディ。俺は…ちゃんと撃てるぞ。」

不機嫌そうなウエンディを他所に、どこかあたしの答えを分かっていたらしい兄さんが再び銃を構える。

…そうだ、兄さんの汚名を雪ぐ為にあたしはここにいる。

だって言うのに、『汚名挽回』になったらそれこそ洒落にならない。何も覚えていない上で恩人に尽くしているだけの兄さんに、これ以上の罪状を着せる訳にも行かない…ここで止めてみせる。

S i d e 〱 スバル 〱 ナカジマ

木々よりも静かな心で、感覚全てでギン姉を感じ取る。

速人さんのように、誰相手でも予知能力でもあるかのような紙一重の見切りを決めるなんて真似はできないけど…そんなあたしでも分

かる事位はある。

まして…憧れの一人で、なのはさんと違い型まで同じギン姉相手なら、尚更。

「くっ…」

攻防の最中振るわれたギン姉の左腕。あたしはプロテクションを展開してそれを防ぎ…

「リボルバー…ギムレット。」

プロテクションに触れていたギン姉の左手が、突如回転し始めた。ドリルのようになったそれはあたしのプロテクションを破り…

「何…やってるの?」

あたしはいたたまれなくなって、向かってきていたギン姉の手を右手で握り締めていた。

本物のドリルなら中途にも刃があるから持てないけど、手が回っているだけだから側面からなら掴むことができた。全力で握って回転がいきなり止まったせいか、むき出しになっている部品から嫌な音が漏れる。

無表情のまま右手を振りかぶるギン姉。

あたしは顔面に向かって来るそれを、特に障壁を張る事もなく待つて…内側から左腕を立てて無造作に受ける。

顔面に届くこともなくギン姉の腕が止まり、止めた衝撃で僅かに姿勢を崩したギン姉。

あたしは左足を少し前に出し…

「っ…おおっ！！」

全力で踏み込むと同時に立てた左腕を振りぬいて、ギン姉の顎を打ち上げた。

派手にとんだギン姉は、一回転して展開したウインググロードに乗ったものの、顎から頭にダメージが行ったのか少しぐらつく。

さつきからずつとあった『嫌な感じ』の訳は、落ち着いてギン姉に目を向けて、すぐに分かってきた。

全くあたしを『視て』くれてないんだ。

ギン姉が出向してきた時にやった模擬戦、結局あたしが負けたその試合の最後、止められた拳。

あれは、あたしの意識の外の物だった。

気が付いたら置かれていたそれは、速人さんとの訓練の時によく受けていた防御を抜けてくる攻撃に似ていて、相手に関係なく急所に正確な一撃を放り込む事だけに集中するって言ってたギン姉の目指す形だと、速人さんが原型といって披露してくれてあたしが全然出来ないアレに近いことがギン姉には出来るのかと改めて惚れ惚れとした位だ。

当然、視て無いと出来る訳がない。

けど今は…

あたしの左手が動くのに合わせて、ギン姉がカウンター狙いの右拳を振るってくる。

「それさっきも見た。」

左手はフェイントで動かした為それほど勢いもついていなかったからギン姉の右拳を受け止める為に使い、開いた鳩尾に向かって右拳を打ち込む。

左手でガードするギン姉に、あたしは左足で後ろ回し蹴りを放り込んだ。

記憶と経験と反応はあたしの憧れたギン姉のものだから、他の誰より知っている自信がある。でも、本当ならギン姉も見て来た筈のあ

たしに対して、機械的な予測と行動パターンしかしてこない。

もっと簡単に言うなら…

「ギン姉は…そんなに弱くない!!」

吹っ飛んで態勢を整えてる真つ最中のギン姉の元に向かってウイングロードを伸ばす。

突進から放った右拳はギン姉の張った防御に防がれる。

またドリル状になったギン姉の左手を、胴を半回転させる事でかわすと同時に左フックを部分展開されている防御膜を避けるようなギン姉の顎に打ち込み、間髪いれずに右のアツパーを繋げる。

脳を揺らす為の連撃。動作制御は勿論、魔法のための演算も行う脳を揺らせば、相手の射程でも重い攻撃を受ける事はほぼない。だからこそあえて吹き飛ばすような魔法は使わなかったあたしの攻撃は、ギン姉を軽く浮かせるだけにとどめる。最後の1撃に繋げる為に、大きく右腕を振りかぶった私は…

「一撃必倒！ディバインバスターツ!!!」

始まりにして最大の魔法を、ギン姉目掛けて全力で叩き込む。

魔力砲撃にのまれたギン姉はウイングロードをはずれて吹っ飛んで、傍の道路に転がった。

Side(ティアナ)ランスター

「あんま時間かけてらんねえんっすよね。あんな話の後にアムネジアにやらせるのも悪いし、あたしがきっちり殺してやるっすよ！」
「っ…」

あんな馬鹿でかいボードを持ちながら、高い身体能力と射撃を駆使して追ってくるウエンディから、あたしはビルの中を上へ上へと逃げ続けていた。

「ここまでだ。」

「え!?!」

と、最上階へ行くための階段から、兄さんが降りてくる。

「下がってていいって言ったのに…」

「俺は逃げないさ。単に彼女が上を目指していたのが分かったからな、飛んで先回りさせて貰った。コレで鬼ごっこも終わりだ。」

気を使っていたらしいウエンディが少しバツが悪そうに咳く中、兄さんが銃をあたしに向ける。

ビルの中での挟み撃ち。しかも飛び出すにしても空戦適正のないあたしは落ちている最中に撃たれる。

ウエンディの方はともかく、兄さんは射撃で完全にあたしの上にいる。少なくとも、直線状に並べて撃たせたところでミスショットな

んで馬鹿なことは間違いない。

ここが限界…か。

あたしは全身の力を抜いて…

『すみません、お願いします！』

『応！』

「何!？」

念話を送った後、両手に持つクロスミラージュをダガーモードに変化させ、兄さんに向かって駆けた。

Side ヲ ヴァイス

あの馬鹿に加減されたお陰で結構早く治った俺を待っていたのは…

「ラグナ…」

未だ向き合えていない、俺が失明させた妹だった。

その顔をまともに見れずに目線を逸らす俺に歩み寄ってきたラグナは、握った手を突き出して開く。

「っ!?!」

開かれたラグナの掌の上には、ストームレイダーがあった。

「お見舞いに行くって言ったら、届けてって。」

「あ、ああ……」

ラグナの手からストームレイダーを受け取ろうと手を伸ばし……その手が小刻みに震えている事に、手を見て初めて気がつく。

ラグナは一瞬目を伏せ、傍の棚の上にストームレイダーを置く。

「あの事故から……私とお兄ちゃん、なんだか上手く話せなくなっちゃったけど……また昔みたいに戻れたら……あ、眼帯ももうしなくてよくなるんだよ。傷も消えたんだ。」

言いながら、ラグナは左眼を覆う眼帯を外す。

綺麗になった、『何処も見えていない』瞳を見た途端に胸が重くなる。

「それで……その……また昔みたいに話せないかな……って。」

沈黙。

気休めすら言う事が出来ない俺の前に、ラグナは眼帯をしなおして背を向けた。

「ごめんね、急にこんな事だけ言われても困るよね。その……待ってるから。」

「あ…」

何かを振り切るように出て行くラグナ。後を追うようにのろのろと病室を出た俺は、去っていったラグナの背中に向かって伸ばした手を下ろす。

「あの…ヴァイス陸曹…」

「っ!?!?」

と、入り口の影にいて見えなかったティアナに声をかけられる。慌てて振り向くと、ティアナは見舞い品らしい袋を手にして俯いていた。

「聞いてたのか？」

「すみません…退院祝いを届けようと思って来たのですが、先客がいらしたようなので…その…」

申し訳なさそうに俯くティアナ。
…懺悔が必要なのは俺のほうだ。

廊下で喋っててもいい類の話にはなりそうになかったから病室に戻る。

「大体察したと思うが…アイツの眼は俺が撃った。俺が妹から…光を奪ったんだ…」

背を向けたままそこまで告げて、振り返る。ティアナはそんな俺の顔を静かに見ている。

後輩相手に情けねえ話だが、アイツの妹で俺の話の気にかけてくれたコイツにこれ以上隠すことも出来ねえ。

「言つたる？エースなんかじゃねえつて。ビビッて身内を撃つた拳
句、未だに逃げてる情けねえ男だよ俺は。優秀なエースなんかじゃ
ねえし、お前さん達が向かつてる『勇氣と力の象徴』であるストラ
イカーに至つては真逆だ。妹がデバイス持つてきただけだつてのに、
それをまともに受け取る事すら出来ねえ。」

狙撃手としての昔話に憧れてくれたらしいが、俺から伝えられるこ
とはねえ。それも含めて伝える為に言い切つたが、ティアナは首を
横に振つた。

「逃げてたら…ヘリとはいえ未だにストームレイダーを扱えません
し、局員も続けてませんよ。デバイスも仕事も変えられるんですか
ら。」

後輩に励まされてら、ホント情けねえ…

「ただ…一ついいですか？」

「何だよ？」

「妹さんとは…あの娘とはちゃんと、仲直りして上げて下さい。」

情けなくて顔を見ていなかった俺は、ティアナの入り込んだ台詞に
少しだけ頭に血が上るのを感じる。

「俺だつて」

言い訳じみた事を叫びそうになりながらティアナの顔を見た俺は、
そのまま硬直する事になった。

ティアナは硬く目を閉じて震えていた。

「ストラーダに残ってた記録、ちゃんと見ました。顔も、クロスフアイアも、魔力光も兄さんの物でした…憧れで、たった一人の家族だったから、見間違える訳がない…っ！」

頬を伝う涙を気にも留めず、ティアナは続ける。

「六課の皆でやれば、きっと全部止められるとは思ってます。でも…記憶がないって…あってこんなこと、兄さんがするはずないってそれも分かっているから！例え止められても兄さんはあたしをも二度と妹と見てくれない…『誰だ？』って言われた時の事を考えると…どうしようもなく辛いです。だから…取り返しがつくうちに勇気を出したあの娘には」

俺はそこまでで、ティアナの頭を抱えて止めた。

震えて逃げ出したい中向かおうとしてるのは、いや、向かって未だに立ってるって意味では俺に先輩面なんて出来やしねえ。

それでも、コイツが言ったような逃げたい中逃げずにいた勇気が俺にもまだ残ってるのなら…

『馬鹿。妹泣かすような奴、ぶっ飛ばすに決まってるんだろ？』

事故より前の幼いラグナとの約束すっぱかして泣かれた事を話した時、シスコン極めてるティータの奴に割とマジで殴られた事を思い出す。

妹を泣かした馬鹿野郎をぶっ飛ばす為にも、こんな所でくすぶつてられねえ。

俺は力一杯握り締めた拳を紐解いて、ラグナが運んでくれたストームレイダーを手を取った。

そして今…俺はヘリの中でティアナからの念話に大見得切って答えを返し、狙撃銃となったストームレイダーを構える。

人騒がせな馬鹿野郎め…後でティアナに土下座でもしやがれ！

内心で悪態一つ吐いた俺は、そのまま意識を研ぎ澄ませて…狙撃を始めた。

S i d e } アムネジア

ティアナが二つの大きなダガーを手に接近してくる中、念話を聞いたのか慌てたウエンディに向かって、窓から何かが飛び込んできた。

この射撃…特殊部隊襲撃の時の！

銃から展開した魔力刃を使ってダガーを受け止めつつ弾丸の出所に視線をやれば、こっちの射程外に浮かんだヘリから、次から次へと魔力弾が発射されていた。

この距離を誘導なしで揺れるへりから狙撃で連射！？化物かあの狙撃手は！！

「くっ…砲撃なら！」

「よせウエンデイ！」

溜めれば届くとばかりに外に向けてボードを構えるウエンデイ。並の相手ならそれでよかったのだろうけど…

予想通り、寸分の狂いもなく飛来した狙撃弾がライディングボードの砲口に吸い込まれ、爆発した。

「く…っそっ！！」

吹き飛んで壁に叩きつけられるウエンデイを助け、この状況を抜けるため、競り合いから少し離れた俺は…

「ソードバレット！！」

展開したままの刃を『発射』した。

ティアナに着弾するも、防がれているのも見た俺は、その間を利用して脇を抜け、ウエンデイを抱えてビルの外に飛び出した。

「っ…この程度…っ！！」

出た瞬間、遠目に見えるへりから次から次へと飛来する魔力弾。

俺はそれを射程に入った弾から射撃で撃ち落しつつ降下する。

彼女がビルの上方向かって逃げたのは、廃ビルに囲まれた地上を

避けて狙撃を撃たせる為だったのか…

今改めて見ると、戦闘していたのは周囲で一番高いビルだった。それまで外を逃げていたのに唐突にビルに逃げた理由について全く考えなかった俺の失策だ。

とは言えとりあえず地上に降りる事が出来…

「ここまでです。その娘は局で保護しますから、投降してください。

」

同じく降りてきていたらしいティアナが、数体の幻影と共にそう言った。

S i d e ー ティアナ「ランスター

上で決められるかと思ったのに、まさか近距離戦用に展開した刃をそのまま射撃に使った上、貫通炸裂効果まで持たせて来るとは思わなかった。

執務官志望で汎用性も取り入れなければならぬ中あの刃も弾丸だったあたり、つくづく射撃型なんだと少し嬉しくも思う。

とはいえそんな事も言ってもらえない、コレで決める。

幻影で周囲を囲んだ上で全員デバイスを構えている。ウエンディが寝ている今、そうそう抜けられない筈。

けど、やっぱり兄さんは諦めなかった。

抱えたウエンディを離し…

「はあああああつ！！」

「っ！？」

高速で次から次へと幻影を撃ち始めた。

幻影に射撃をさせるものの、兄さんは幻影の弾を貫通させながら幻影本体を纏めて撃ち抜いていく。

速いし上手い。とても今のあたしでは射撃で敵わない。

幻影射撃を捨てたあたしは、ダガーを展開して駆ける。

けど、兄さんがあたしに照準をつける方が速く…

「コレも幻影！？」

兄さんが放った弾丸を跳躍して回避したあたしは、一緒に走らせた像だけの幻影を打ち抜いたせいであたしの姿を見失った兄さん上から斬りかかった。

障壁も張れずに魔力刃を直撃した兄さんは、そのまま意識を失った。

戦闘機人の拘束も終え、寝ているとは言え放置は出来ない上、二人抱える訳にも行かずに待つことになった。

未練がましいのを承知で、記憶を失ってそれでも心根と技はそのままの兄さんの頭を膝に乗せ、その寝顔を見ていると…兄さんがうっすらと眼を開いた。

本当は警戒しなきゃいけないそれを、どうしても警戒できずに眺め…

「テイ…ア？」

「え…っ？」

呟かれた、知るはずの無い愛称に眼を見開く。

ゆっくりと手を伸ばした兄さんは、その顔を覗き込んでいるあたしの頭を撫でた。

「大丈夫…お兄ちゃんが守ってやるから…だから泣くな…」

「っ…う…」

完全に記憶が戻ったなら名乗らない筈の、本当に懐かしい『お兄ちゃん』という一人称。
でもずっと…そんな頃からずっと一緒にいたから…記憶の片隅に位は引っかかってくれていたんだ…

あたしはスバルと合流するまで、兄さんの暖かさを噛み締めていた。

S I D E O U T

第二十九話・願い踏み出す妹達（後書き）

『實』が使える関係で修行に関わった速人がやたらスバルの話に出ざるを得ませんでした（汗）さすが主人公？

ティアナは戦闘こそ違ってますが、ビル選び、狙撃可能な外部から見える位置と考えながら移動してるんでちゃんとやらせられたかと。

題の妹達、何気にかんばってるのは3人の回でした（笑）

第三十話・貫き通す『力』紐解く『理』

第三十話・貫き通す『力』紐解く『理』

S i d e 〱 セ ッ テ

「電刃衝!!」

レヴィの放つ複数の直射魔力弾に向かって、二つのブーメランプレードを投擲して突撃。

投擲した二つがいくつかの魔力弾を掻き消しレヴィに向かっていき、突撃した私は手にした残り二つのブレードを以って残りを捌いて突き進む。

「くっそー! うわっ!」

鎌を振るって先に投げたブレードを弾いたレヴィだったが、振りぬいたところに追いついた私が振るった一撃がレヴィを捉える。

「走破・雷鳴陣!!」

高速移動魔法に入ったらしいレヴィの姿が一瞬消える。

目の前に現れ振りかぶっていた鎌を振り下ろしてきたレヴィ。私はその一撃を手に持つ二つのブレードで受けた。

トーレヤフェイトお嬢様クラスの速さだが…脳がないにも程がある。

「な、何で痺れてないんだよ!？」

驚いたらしいレヴィが不満げに口にした言葉に、先の高速移動の終わりに走った雷撃が、錯覚ではなかった事を知る。

高速移動と攻撃を繋げるのは中々だが、理論上オーバースの接触雷撃すら防げるこのスーツを前には愚策だったようだ。

「耐電仕様だ。」

「うあっ!！」

鎌を受けたブレードをそのままにレヴィを蹴り飛ばし、態勢を整える前に両手のブレードを投擲する。

「また!?!この…っ!！」

投擲したブレードを弾き飛ばすレヴィ。私が動いていないから隙が出来ても大丈夫と判断したのかどうか知らないが、だとすれば甘い。

空いた掌から砲撃を放つ。一直線に向かっていった光はレヴィに当たって爆発した。

「はあ…く、くっそお…」

晴れた爆煙の中から、防御魔法が間に合っていたらしいレヴィが掌を翳した態勢で私を睨みつけていた。

先の高速移動といい、魔法そのものの性能や錬度は高い。さすが才

「バーS級と言った所か。」

だが、肝心の戦いが出来てない。

見たままに反応してその場で対応しているだけの子供。

「弱い。」

「な……」

「どうやったかは知らないがフェイトお嬢様の力を使いこの程度か、見苦しい。」

抱いたままの感想を告げる。

ドクターの研究成果を流用した子供が遊んでいるだけのように見えて正直不愉快極まりない。

レヴィは肩を震わせたかと思うと、カートリッジをロードする。

デバイスが、大剣へと姿を変えた。

「好き勝手言うなブーメラン女!!」

「私はセツテ、ドクターの手によって生まれた戦機だ!」

苛立つ呼称を訂正した私は、空を舞いレヴィと切り結んだ。

S i d e シュテル

「無駄だよ。」

牽制に放ったパイロシュータが後衛の使う妙な誘導光線に掻き消される。

しかも貫通した上に此方に迫ってきた。

障壁で光線を防いだ私は、此方に向かってくる赤髪の戦機を捕捉する。

「シャドウムーブ。」

高速移動で赤髪の戦機の背後に離脱した私は、砲撃に入ろうとして…背後上方で双剣を振り上げる三人目の戦機の姿を見て中止、振り下ろされる剣を防御する。

「やりますね…ですが。」

「いつまでも逃がすかよっ！！！」

双剣の戦機が感心する中、すぐさま方向転換した赤髪の戦機が迫ってくる。

回避は…難しい。

「レポーションフィールド。」

展開したフィールド防御越しに、接近してきた赤髪の少女の蹴りが

入る。

対打撃フィールドとしては相当な衝撃緩和が出来ると言つのに、気持ち悪くなる程の衝撃を受ける。

フットパーツのブースターによる加速蹴りですか…移動時の加速も可能ですし中々考えましたね。

反発によつて距離を取る効果も持つフィールドの加速も含め、一気に小さくなつた二人に向けてデバイスを構え…

「っ！」

いつの間にかまた向かつてきていた五発の誘導光線。全方位を取り囲むように向かつてきた光線を全て防ぐ為に全方位障壁を張る。

レーザーのように障壁に張り付いて各所から力を加えてくる光線は、障壁と共に爆発を起こした。

「距離を取らせてはだめですよノーヴェ姉様。彼女、今の距離からでも撃つて来ますよ？」

「分かつてらあ！さっきの防御なんか妙な感触だったが…」

防いでいる間に接近してきたらしい三人の戦機。

一人に砲撃を撃つても残りに追いつかれて墜とされる距離まで詰められている。

やはり…楽には行きませぬね。

「衝撃を緩和して反発力で距離を取ってるね。挟み撃ちにするかデイドの剣なら問題ないよ。最も…防御の種類がアレだけならだけぶ。」

「オットーのレイストームでの全方位攻撃も凌ぎきるほどです、障壁の強度もかなりの物でしょう。」

冷静な指揮官らしいオットーと、デイドと言うらしい双剣使いの二人を他所に、格闘装備で空路を走ってくるノーヴェが進み出る。

「要は挟んでデイドが当てりゃいいんだろ？動き回るのはあたしがやる、お前は狙え。」

「どの道急がないといけない、ノーヴェ姉様の案で行こう。」
「了解。」

再度戦闘態勢に入る3人。

「っ…っらああああっ！！」

先陣を切ったのは、宣言通りノーヴェだった。が…速い。さっきまでの戦闘ではまだ最大速度で走っていなかったらしい。

「パイロシューター。」

私は誘導弾を展開して弾幕を張る。

「んな豆鉄砲いちいち避けてられっかよ！！」

「な…」

だがあるう事か、進路も変えず光線の援護もないまま突撃を続けるノーヴェ。そしてそのまま、障壁だけでシューターを抜けてきた。

無茶をしますね…

誘導弾制御をしていた私に避ける間はなく、そもそも近接戦は不得手のためノーヴェが放ってきた拳を障壁で受ける事になってしまう。

二本の誘導光線が迫ってきたため、高速移動でその場を離脱し…

「悪いけど、トーレ姉様ほど速くないしね。」

移動終了で止まっている私に、残っていた三本の光線が迫ってきていた。

誘導弾は貫通され、砲撃では複数を消しきれないと言う厄介な数と威力の光線。

その為、向かってきた光線を結局障壁で防ぐ事になる。

2049

「捉えました。」

「っ、しまっ…」

残っていたデイドにまた背後を取られ、双剣が振り下ろされる。直撃した私は道路に叩きつけられた。

「く…」

普通のフィールド防御を全開にして受けた為致命ではないものの、

それなりに痛い。
起き上がった私を、降りてきたノーヴェとデードが挟む。オット
ーは空に待機していた。

と、そんな状況で、私の視界の隅を何か横切って叩きつけられた。
横切った時自体は正確に見えなかったが、感じられる魔力で誰が落
ちたのかは分かる。

「レヴィ…」

「はっ！こつちを叩いて援護に回ろうと思ってたのに向こうは一人
で十分な位弱いんだな。」

「最も、此方ももうすぐ終わりですが…」

前後から聞こえてくる罵声に、私は溜息を吐いた。

「勘違いしているようなので教えておきますが…」

私は黙ってレヴィが落ちたらしい、土埃が巻き上がっている場所を
指差す。

「私もレヴィも同じ宵の騎士。性質に違いはあれど戦力としての差
はありませんし、彼女と私の試合の戦跡は…ほぼ五分です。」

説明が終わった直後、土埃を吹き飛ばす勢いでレヴィが空へと舞い
上がった。

「高速型の割にしぶとい…」

ボクを見ながら嫌そうな顔をするセツテだけど…正直嫌なのはボクの方だ。

一人相手に『普通に』戦えないんだから。

「だが、そんな稚拙な戦い方で」

「知ってるよ。」

「何？」

危ないとか単純とか、散々に言われてきたんだ。それに、シュテルと戦ってれば嫌でも分かる。色々考えた方が確実だって。

でも…きつとそれは違う。

「あれだけ強いマスターが、ボクの事をいつも楽しそうに、時々羨ましそうに見るんだ。」

「…それだけ考えなしの出鱈目でいいなら楽だろうしな。」

「そうだよ。」

ボクが頷いた事が不思議だったのか少し驚いているのを見ると、セツテは悪口のもりで言ったみたいだ。

「ディアーチェはずっと王様病で、シュテルはいつつも落ち着いてて、ボクはずっと…凄くて強くてかっこいいのを目指してる。」

それはきつと…ボク達がボク達のままではいられないように皆やマスタ
ーが望んだ結果。

「考えるのはシュテルがいる。だからボクは…初めから目指した飛
び方で飛ぶって決めてるんだ！！変身！宵闇乃建御雷神！！」

瞬間、装甲が全部消えて手足に羽が着く。

服装で変わる見た目はそれくらいだけど、加減しない全開で行く前
提だから魔力光が漏れ出るみたいにボクの周りで小さく光る。
凄い疲れるけど、映像で見た時にかっこいいからボクは気に入って
る。

「…正気か？」

「本気だ！！」

フェイトのソニックフォームが余計に悪化した、アリシアが出来れ
ば使うの止めて欲しいって言ってた形態。

セツテも、見ただけで危ないのが分かったのか変な顔をした。

この形態はそもそも長い間出来るものじゃない。だからボクから攻
める。それに…

ボクは雷神の襲撃者。ボクから出なきや、襲撃にならない。

「い…つくぞおおっ！…！」

「はあっ！」

普通の飛行で受ける衝撃まで半端じゃないこの形態で、ボクはただ真っ直ぐにセツテに向かって飛ぶ。

投げられたブーメランが一瞬で大きくなったけど、僕はそれも無視して体だけ少し動かして真っ直ぐ飛んだ。

身体に少し当たったみたいだけど、直撃はしてないから骨とか平気。だからまだ大丈夫！

「な…くっ！？」

いつの間にか投げたはずのブーメランをまた持つてるセツテ。けど、それを構える前にボクはセツテの腕を掴んでいた。

「何を…」

「言っておくけど…痛いからな！」

ただ適当に腕を掴んだだけのボクを不思議がるセツテに念押しだけして、ボクは覚悟を決める。

高速移動、終点『ビルの壁』

どう動いたかも分からないほどの速さで、セツテと一緒に動き出したボクは…

次に感じた衝撃で、一瞬頭が真っ白になった。

「あ…うえ…」

一回試した時に本当に大騒動になるほど危なかったから時よりは考えて、終点自体は壁の中じゃなくて触れる程度にしておいたけど、それでも充分酷かった。口の中がまずい。きっと血が上がってきてる。

けど…まだ寝るには早い。

生身で防御の低いボクでも耐えられる衝撃で済んでるんだ、セツテは壁にめり込んでるとは言ってもまだ動けるはず。

「雷神！滅殺！」

数える余裕も無いままカートリッジをロードして、巨大化した光の剣を振り上げて…

「極光剣！！！」

振り下ろした。

ビル一つ丸ごと完全に叩ききったボクは…

「この力で…ボクは飛ぶ！！！」

力の全てをセツテのところまで炸裂させて、崩れ落ちるビルに背を向けて剣を掲げた。

よし！決まった！！

「ってわあ！死なせちゃったらマスターに怒られる！！」

背中からビルが崩れる音が聞こえてきて、まだ戻ってなかった全開状態の速さのままに崩れるビルに巻き込まれないようにセツテを連れ出す。

非殺傷だから死なないって言っても、高速移動でめり込んだ時のダメージはあるだろうし、そんな状態で意識もなのまま崩れる瓦礫に巻き込まれたらいくらセツテでも危ない。

どうにか助けたセツテが無事なのを確かめて、ボクは一息吐いた。

S i d e } シュテル

「っ…コイツ等あっ！！」

魔力斬撃でビル一つ崩落するのを確認したノーヴェエが飛び出し、乗じて背後でも動く気配を感じる。

「ルベライト起動。」

「なっ！？」

設置しておいた多数のバインドを同時に起動させ、三人を拘束する。三人を確実に同時に拘束できるタイミングを狙ったせいで少し遅れてしまいましたね…現実性が薄れるならもう少し早く動けたのです

が。

「馬鹿な…向かって来るノーヴェ姉様とデイドはともかく、僕までまとめて拘束するなんて…」

「くそ…切れねえっ！」

信じられないといった様子を隠す事無く現状を考えるオットーに、拘束された四肢を動かそうと足掻くノーヴェ。
彼女達の様子を眺めながら次の準備を終わらせる。

「私は理を象徴する星光の殲滅者。読みで多数を相手にする事はそれほど不得手でもありません。」

展開した魔法陣は十二。一人四つですが、充分でしょう。

「ブラスト…シューター！」

砲撃級の幅を持つ球体魔力弾。単発でも十分な攻撃力を持ち、操作も効く。

多段放射するには砲撃だとあまりにも消費魔力が大きいと判断した為、取り回しも考えて作った魔法のため、それほどは勞せず高い効果を出せる。

巨大な魔力弾は、バインドに拘束された三人を悲鳴ごと飲み込む爆発を引き起こした。

墜落したオットー含めて三人ともを拘束する。

「まさか…三人がかりでこうも綺麗に負けるなんて…」

予想していなかったとばかり呟きを漏らすオットー。

ですが仕方ありません。私に勝てるのは、私の理を上回る事が出来る者か…

理を外れる馬鹿だけなのですから。

歩くのも辛そうな身体で何をする気なのか、此方に向かってきているレヴィの姿に肩を竦め、迎えに飛び立った。

S i d d e ~ レヴィ

早く…行かないと…シュテルはあんなの三人も同時に相手にしてるんだから…

「ぐ…つう…」

頭が痛くてふらついて、近くの何かに寄りかかる。

「全く…またあの無茶な魔法を使ったのですか？」

「あ…」

いつも聞いている、シュテルの声。

俯いていた顔を上げてみれば、ボクが寄りかかったのはシュテルだった。

「少し大人しくしていなさい、私でも気分を楽にするくらいは出来ます。」

言うなり、回復魔法の光がボクを包み込む。

揺れたせいかわかった頭とか、気持ちの悪い感覚がゆっくり薄らいでいく。

楽になって少し余裕が出てきたボクは、シュテルをよく見てみる。

大した怪我もしていないみたいだ。

三人相手にしたのに…

「シュテルは強いね。」

「貴女が相手をした彼女はオーバーSと戦える実力がありませんし…」

少し羨ましくなったボクを慰めてくれているのかなと思って複雑な

気分になつていと…

「…私は戦い方で、貴女のようにマスターに嬉しそうにされたことはありません。少し貴女が羨ましいです。」

顔を逸らしたシュテルが、そんな事を言った。

「…ずるいや。」

「何ですかいきなり？とにかく少し休みなさい。」

ボクの気持ちがあわかった上で慰める為に言ったのか、知らないで言ったのかまでは分からないけど…そんな言い方されたら羨ましいなんて言えない。

言った者勝ちなシュテルを少しずるいと思いつつ目を閉じた。

S i d e 〱 シュテル

少し離れた場所に拘束した戦闘機人を纏めた後、回復魔法陣の中で眠るレヴィを見ていると、意外なメンバーと顔を遭わせることになった。

「貴女達は、機動六課の前線メンバーですね？」

確か…スバルとティアナだったか。

並走する形でやってきた二人は、少しだけ笑みを見せる。

「シユテル！倒れてた戦闘機人は」

「私とレヴィで倒しました。」

「4対2…一人S近い空戦出来る娘もいたのに…凄いわね。」

感心するティアナ。そのS級なのは私達もですし、普通といえば普通ですが。

「レヴィ怪我してるの？だったら避難したほうが」

「誤解の無いよう告げておきますが。」

心配そうに近づいてくるスバルの言葉を断ち切る形で声をかける。

「私は管理局に協力しているつもりはありません。戦闘も撤退も此方は勝手にやらせて貰うのでそのつもりで。」

「そんな勝手な」

「この一件、主犯格が管理局上層部らしいのですが、それでも『指示に従え』と言いますか？」

管理局としては何処かの魔導師に好き勝手にやられては面目が立たないのは分かる。

が、説得出来たものではない現状を理解したのか、怒りを見せたティアナが意気消沈する。

「あの…じゃあ何で？」

「町には隣人とお得意様とマスターが救った命があります、守るのは当然でしょう？他はすでにディーアーチェが告げた通りですね。」

「…そっか。」

心配そうに聞いてきたスバルに答えを返すと、笑みを見せたスバル

はティアナの袖を引いた。

「ス、スバル？」

「大丈夫だよ。捕まえなきゃいけないなら八神部隊長がもうきつと言ってる。それでも不安なら捕まえるか聞いてみれば？」

「…分かったわよ。」

渋々と言った感じではやてに通信を繋ぐティアナ。

「あの娘達を止めて…助けてくれてありがとう。」

「殺戮と破壊は…マスターが望みませんから、それだけです。」

「それでも、ありがとう。」

手をとって目を見つめて礼を言って来るスバルに、本気で話しかけてくるときのなのと同じ類のやり辛さを感じた私は目を逸らす。と、通信が終わったティアナが此方に目を向けた。

「…八神部隊長から伝言があります。」

「何でしょう？」

「『後から絶対色々言わせて貰う。』と…」

引きつった笑顔で言うティアナ。

局の失態を考えれば言いたい事があるのはむしろ此方の方が…この一件が仮に上手く収まったも、伏せた私達の事情説明他色々が主にはやてに襲い掛かることになる考えると、これ以上責める気にはなれない。

「分かりました、覚えておきます。」

「そうしてあげて下さい…行くわよスバル。」

「あ、うん。じゃあ、気をつけて！」

こんな職の割に明るい二人が去っていくのを見届けた所で、私はレヴィを抱えあげる。

「とは言え…一端レヴィを安全な場所へ連れて行かないとこれ以上は」

「大丈夫だよ。」

急に目を見開いたと思ったら、はねるように私の腕から降りて地面に立つレヴィ。

「ディアーチエの魔力が安定したからボクの方に流れてきてる。管理局にはAMF相手に戦える魔導師少ないんでしょ？怪我する人が出ない様に頑張らないと。」

「それはそうですが…貴女ダメージは」

「根性!!!」

曇る事を知らない瞳で堂々宣言するレヴィ。

…計算で動く私には絶対言えない台詞がやはり少し羨ましくなる。

「…分かりました。後はガジェット位です、無理をしなければ減らすくらいは容易いでしょう。」

「よし！行こう！…宵闇乃」

「それは止めなさい。」

いきなり馬鹿をやるうとするレヴィを窘めつつ、私達は防衛ラインに向かって飛び立った。

S
I
D
E

O
U
T

第三十話・貫き通す『力』紐解く『理』（後書き）

障害物への高速移動で：フェイト並の速度となると視認速度オーバーなので確実に死ねますね（汗）
勿論、一回使っているので魔法そのものの反動吸収性質（これないとそもそもソニックムーブすら不可能なはず）や壁までの距離などは調整しています。

今回も二話投降します。

・宵闇乃建御雷神

変身とか言いながら大層な名前だが、単なるフォームの一つ。
装甲皆無で動作制御用の魔力羽を手足に纏った状態。手甲がない分フェイトのソニックより酷い紙防御の上、ブラスターほどではないが魔力出力常時全開の上全リソースが速度と言う気違い設計。そこまでやったお陰か、戦闘時間こそ短時間ながらソニックのフェイトと同等以上の速度を叩き出す上、攻撃力も高い。

名前は速人が全技漢字で統一してるレヴィの為にただかつこよく仕上げた（笑）

起源等はほぼスルー。

・レポーションフィールド

対打撃用衝撃緩和反発フィールド防御。ソフトに打撃を受けて、思いつきり吹き飛ばされる事で強打系から距離を稼ぐ事を目的としている。

・ブラストシューター

砲撃より消費が軽く、射撃と違い直撃一撃で戦闘不能を期待できる

上誘導可能。

第三十一話・望むは優しく温かい手

第三十一話・望むは優しく温かい手

S i d e 〱 キヤロ 〱 ル 〱 ルシエ

ヴォルテールが巨大な白い召喚虫と、エリオ君がガリユーと、フリードが何体もいる地雷王と戦っている状態で、私はどうにか召喚士の女の子と向かい合う事ができた。

「私…アルザスの竜召喚士、キヤロ 〱 ル 〱 ルシエ。貴女の名前は？」
「ルーテシア 〱 アルピーノ。」

状況が酷かったけど、とりあえず落ち着いて話しかけると、静かにだけどちゃんと答えてくれた。

よかった…話が通じる。
答えてくれるならこれ以上傷つけあいたくなかった私はどうにか説得したいと思っていた。

「どうしてこんな酷い事をするの？」
「ドクターは私の探し物を手伝ってくれるから…私もドクターのお願いを聞いてあげてる。」

質問に返って来た答えは、信じられない物だった。

お願いを聞いてあげるって…そんな事で他の人をどれだけ…

「そんな…そんな事の為に」

「私にとっては大事な事…母さんが起きるのに必要なんだから。」

「違う！探し物の事じゃなくて！！」

思わず叫んでしまった私は、軽く頭を振る。

叫んだり怒鳴ったりしたら警戒しちゃう。私はただ暴れるのを止めたいだけなんだから、ルーちゃんの邪魔をしたい訳じゃない。

「探し物の事もお母さんの事も、絶対私達が手伝う！だから…もうこんな事止めて！」

私の訴えを聞いたルーちゃんは…

手を前に出して、周りの小さな召喚虫を数匹飛ばしてきた。

「っ！」

『ブーステッドプロテクション。』

咄嗟に張った防御魔法でどうにか防ぐと、私の横にエリオ君が降りてきた。

「ルーちゃん！」

「いい加減な事…言わないで。」

ルーちゃんは私を恐い目で見てた。それまで話を聞いてくれてたときは全然しなかった目で。

「いい加減なんかじゃないよ！私は本当に」

「ドクターは管理局に使わせてもらえない技術で母さんを起こすって言った。リライブもそれで手伝ってくれた。」

「あ…」

ルーちゃんの話から出たリライブさんの名前に、速人さんとの話を思い出す。

『質量兵器を使わないと護れない人がいる…とか言う状況ならどうだ？』

管理局が止めてる方法でも誰かを助けようとするから今リライブさんは次元犯罪者として手配されてるって。

「リライブが一生懸命助けた人、管理局が助けた事になってた事もあった。ゼストが疑って、リライブが騙されて追われてる貴方達…私を助けてくれるなんて絶対に無い。」

「そんな…っ!？」

今まで聞いた事のなかった話を聞かされた私は、直後考えている余裕がなくなる。

浮いている羽虫型の召喚虫をはるかに超える数の魔力弾。

ギンガさんとスバルさんが二人掛りで受けた、最悪の殲滅魔法。

「シューティングスター！」

ルーちゃんの宣言と共に、視界を埋め尽くすほどの魔力弾が雨のように向かって来る。

「く…サンダーレイジ！！」

「エリオ君！？」

私の前に出たエリオ君は、フォームを変えたストラダを振るって雷撃を放つ。

傍にあるものに伝染する範囲雷撃は、沢山ある魔力弾に伝わって沢山途中で止められたけど…

元々あのリライブさんが使う魔法。それだけで防げる訳もなくて…

「ブーステッドプロテクション！」

さっきも使った私最大の防御魔法で残りを受け…魔力爆発に吞まれた。

Side 〽 エリオ 〽 モンデュアル

完全に受けに回ったら絶対に耐えられないと思って咄嗟に攻撃に回ったけど、キャロがいなかったらそれでも駄目だった。
と言っより、僕が消してキャロが防いでまだ防ぎきる事が出来なかった。

何て魔法なんだ…

「リライヴはドクターを嫌っていなくなった…ゼストももうすぐいなくなっちゃっ、アギトは騎士を探してるからきつと一緒に居られない。母さんが起きなきゃ私はずっと一人…そんなの…嫌だっ…」

彼女…ルーテシアにとっても消耗の激しい魔法なのか、肩で息をしながら話す。

途中までガリユと戦ってたから、キャロがどんな話をしたのかまで詳しくは聞いて無いけど…降りてから聞いた話が全部本当なら、確かに僕達は彼女のお母さんを起こしてあげることが出来ないかもしれない。

それに…局員が信用できないのも分かる。ルーテシアが言ったような状況を散々見せられて、今更僕たちだけ特別違うなんて口で言うて信じられる訳が無い。

このまま…戦って止めるのか？
犯罪者を問答無用で即刻止めるフレア空尉のように。

僕は…

「えっ…」

「エリオ君！？」

ストラータを床に突き刺して、手を離した。
ルーテシアとキャロの驚く声も無理は無い。交戦中敵の目の前で武器を手放すなんて馬鹿げてる。

けど…違う。

僕は、彼女の『敵』になりたい訳じゃない。

ルーテシアに向かって歩き出した僕を見て、ガリユーが構える。

「ルーテシア…君のお母さんの事、君が聞かされている方法で起こ

してあげられるって約束は、僕には出来ない。」
「っ！」

言い切った僕に向かってルーテシアが周囲に浮かぶ羽虫の一匹を放つ。

頭を掠めて、血が流れてくる。

僕はそれでも武器を手にしないまま歩を進めた。

理由なんて一つだけ、誰一人信用できなくて暴れていた僕に手を差し伸べてくれた人は…

僕がどんな力を振るっても、見捨てたりしなかったから。

「けど…僕はずっと一緒にいるって約束する。」

「え…」

「お母さんの事も…絶対助けられるとは言えないかもしれないけど、起こしてあげる方法を探す事は出来る。だから…」

歩を進め、手を伸ばせば握手を交わせる距離までついた。

「もう誰かを傷つけるのは止めるんだ。寂しくて苦しんだ君なら、皆それを嫌がる事も分かるだろ？一人で耐えられないのなら…僕も一緒に受け止める。僕はエリオッモンドユアル、友達になろうルーテシア。」

「わ、私も一緒にいる！絶対、約束する！だから…ルーちゃん…」

デバイスを待機状態にするのが手一杯で手放せないからか、ガリユーに見張られながら後ろのほうからするキャロの声。

召喚虫の戦いも止まっていた。

僕は笑顔で手を伸ばす。

ルーテシアもゆっくりと手を伸ばして…

『駄目ですよお嬢様？都合いい事ばかり言う人はリライヴみたいに居なくなっちゃうのが関の山。敵はぶち殺して通るものですよ、こんな風に…ねっ。』

「あ…」

いきなり現れたモニターに映った戦闘機人がキーを叩くと、ルーテシアの身体がはねる。

「あ…うあああああっ！！！！！」

「ルー！！！」

絶叫を上げるルーテシア。

周囲に浮かぶ羽虫が一斉に輝いて…

「しまっ…」

操られまでするのは想定外だった。

デバイスも無いままソニックムーブも間に合わず、羽虫の全てが僕目掛けて発射され…

僕の眼前で見えない壁に当たるかのように爆発した。

直後、周囲の色が変わり…

「ルーテシアを信じてくれてありがとう。」

空からの声に見上げれば、白い墮天使リライブがそこにいた。

この後どうするつもりか？

恭也さんにそう問われた私は、すぐに返せる答えを持っていなかった。

「君は救う人がいるんだろう？そういう戦いをしていると速人から聞いているし、俺もそう見ていた。」

「それは…はい。」

恭也さんの問いに頷き答える。

「ですが…脅されている身なので下手に私が動けば」

「ならば上手く動くべきだ。違うか？」

アツサリと言い切られてそれ以上を返す事も出来なかった。

「組織や法、立場に縛られずに動いているんだろ？そんな君が肝心な時に縛られているようじゃ意味が無いと思つてな。お節介であるならこれ以上は言わないが。」

「いえ…その通りです。」

暗部潰しなんて正直本当は私の目的でもなんでもない。

今更そんな事を言われて気付くなんて馬鹿げてるにもほどがある。

部屋を去ろうとする恭也さん。

「あの…なんで見逃して助言までしてくれるんですか？私はなのは

達の」

「買いかぶりすぎだよ、俺が君に見逃されたんだ。」

私の問いに振り返った恭也さんは苦笑する。

けど、仮に本当に勝てなかったとしても、必要があれば彼は戦う人だ。そう感じた私は、だからこそ余計に見逃される理由が分からなかった。

少し見つめあい、恭也さんが折れた。

「俺は護ると決めたものを護る為に必要ならこの二刀を以って敵を殺せる。必要があれば管理局の言う通りにしないって言う点では俺も君と変わらない。君を捕まえるなんて言うなら俺も捕まる身分さ。今こんな所にも忍び込んでるしな。」

簡単に…最後こそ軽く言っただけに見せた恭也さんだったが、殺せると言った時には私に向けられたものでも無いのに一瞬身震いした。

本気で、人を斬り殺せる。

速人から殺しについて聞いたときにはまるで何も感じなかったけど（それはそれで恐ろしい事だけど）…彼は殺すって事が、命を奪うって事がどういう事か分かった上で、事故でも暴走でもなく意思と覚悟で人を斬れるんだ。

ある意味恐ろしい人だ。人殺しなんて狂った犯罪者位しかいない上、魔導師は非殺傷が効くこの世界で彼のような人はほぼ居ないだろう。

さすがあの速人の師匠…と言うべきなのかな？

「それに、君は速人の家族の命の恩人だし、ウチの実家のシュークリームをよく堪能してくれるお得意様だ。無碍な事はしないさ。」
「へ？ええ！？」

私は数瞬呆けた後、恭也さんが何を言っているのか気が付いた。暇と余裕があれば、地球へ転移して翠屋でシュークリームを買っていた私。
魔法技術があれば割と長期保存が出来るし、美味しいから気に入っていたんだけど…

まさか、近場に済んでるはずの同員ですら気付いて無いのに一般人が知ってるとは思わなかった。

「何で気付いてて…」
「実家の警察関係に知り合いがいるが、君が犯罪者と聞いた事は無いからな。」

どうして見逃したのかと思って聞いてみれば、何処かずれた答えが返ってきた。
私の反応が面白かったのか、上手くいったと思ったからなのか分からないけど、とても楽しそうに笑う恭也さん。

ああ…さすが速人の師匠。変な所で変だ。

「ありがとうございます。」

「礼を言われるような事はして無いさ。」

手はある、覚悟も決まった。

ゼストも永く持たない今、私がルーテシアから離れて一体誰があの娘を助けるんだ。

「どうあっても叶えて貰えない切なる願い、誰一人聞き入れてくれない助けを望む声。それらの為に…いくよ、イノセント。」

『了解しました。』

こうして、恭也さんと別れて局暗部から抜け出した私は、そのままルーテシアの傍まで魔力を抑えて接近して、一気に高速移動で姿を見せた。

結構熱いエリオとか言う少年の言葉に、局にルーテシアを任せても大丈夫だと感じつつ、暴走させられたルーテシアの攻撃から彼を護る。

よし…次が無いうちに…

「AMFC起動、封時結界展開60秒。」

外部から結界内部への干渉を絶つ。

コレで少なくとも電波や魔力波を送ってこれ以上遠隔操作をされる

事は無い。
けど…

「リライヴ…裏切り者…殺してっ!!」

ルーテシアの叫びに反応した地雷王とガリユーが飛んで来て、白天王が腹部の球体をこっちに向ける。

どうやら暴走自体は干渉が済んでいれば続くらしい。

しかし、コレはまた随分張り切って殺しに来てるなあ…ガリユーなんか内武装が暴走して身体突き破ってるし。

「悪いね、構ってる時間は無いんだ。」

向かってきたガリユーと地雷王を斬り伏せ、直後飛んできた白天王の馬鹿げた砲撃を高速移動で回避する。

「ストレートバスター・ファイフス…ちょっと引っ込んでて白天王!!」

指を媒介に放つ五つの砲撃は、白天王の頭に直撃してその巨体をひっくり返した。

「す、凄い…」

傍で見てたキャラ口って娘が感心する。ま、彼女には悪いけどAAの娘が召喚できる竜と互角の相手位一撃で止められないとね。

…白天王でか過ぎて倒れた拍子にビルが崩れたけど、コレこのまま

封時結界解いたら外の崩れて無いビルが体内にめり込んで死んじやうとか無いよね？

ま、まあ今はいいや。ルーテシアが先だ。

「嫌あ！離して!!！」

「ごめん、ちよつと待って。」

A M F Cを働かせながら魔力結合を解除されないように結界を維持するのは大分大変だ。

しかも普通は自分の周囲に限定して消耗を抑えるA M F Cを結界範囲で展開しているから余計に辛い。

正直張りなおす余裕は無いからさっさと見るもの見ないといけない。

機械探知…無。異能探知…召喚制御以外に洗脳系が発動中。肉体異常…レリックク内包中。

外部から命に害を加えそうな機構は見当たらない。どうやら私はまたはめられたらしい。

それともここは、機密保持とか言って捕まった奴を殺すような機能を搭載してなかったスカリエッティの良心に感謝するべきなのか…それはそれでやだな。

「あ、あの…何を」

「ごめん、ちょっと今は黙ってて。」

いきなり現れて不審極まりない私が気になったのか声をかけてきたエリオを制して、作業を済ませてしまう。

まず妙な洗脳式を破壊して、魔力蒐集と同要領でレリックを引っこ抜く。
放り投げたそれにイノセントを一閃。絶ち斬って砕けた所で結界が消えた。

暴走の済んだルーテシアをそっと抱きしめる。

「リライ…ヴ？」

「ごめん、遅れた。けどちゃんと友達は護ったよ。ほら。」

「あ…」

示した先にいる、エリオとキャロ。

二人の姿を見たルーテシアが申し訳なさそうに目を伏せた。

「謝るのも後でいいよ。無理矢理力を使わされて疲れてるでしょ？
お休み。」

ゆっくりとしなだれかかってくるルーテシア。

それと同時に、召喚されていた召喚虫は全部その姿を消した。

眠ったルーテシアをお姫様抱っこの形で抱え上げ、傍にいた飛竜に近づく。

「熱い告白だったね。」

「「こゝ、告白!？」」

冗談で言った台詞に真っ赤になって反応する二人。少しおかしくな
って笑ってしまふ。

「それは冗談として…ルーテシアの事、頼める？」

「あ、はい。」

素直に返事をしてくれるキャロ。私はその言葉に安心してルーテシ
アを飛竜に預け…

何かを引き抜く音がした。

視線を移すと、エリオが地面に刺していたデバイスを抜いて、私を
見ていた。

「エリオ…君？」

「このまま…同行して頂けますか？ルーテシアと一緒に。」

何をするのかと不安げなキャロに対して、聞いてきた割に返答も分
かっているように落ち着いているエリオ。
私はそんな二人に笑みを返す。

「断らせてもらつよ。」

「っ……」

私の答えに悲しげな顔をするキャロ。

こっちとしてはさっさと逃げたほうが楽と言えば楽んだけど……ルーテシアを安全な場所に運んでもらうほうを優先して欲しいしなあ……

「町の安全が確定するまでガジエットの相手位は付き合つよ。それとも……ルーテシアの安全と被害拡大防止より私と戦うのを優先する？」

『マスター！？ここは敵地の中心みたいなものですよ！？』

私の答えが気に食わなかったのかイノセントから焦ったような声でせいされる。

「そうは言つても……ここで堂々と『逃げる』って言い切つたら二人とも手を振って見送る訳には行かないでしょ。ルーテシアを安全なところまでつれてって貰わないと。」

イノセントからは返答はなかった。多分もう好きにしてくれって事だろう。

「分かりました。」

「エリオ君、あ……」

少し悲しそうに承諾したエリオが、キャロの手を取って飛竜に乗る。

「よし……じゃ、軽く行ってみようか！」

約束破つてとつと逃げ出すのが犯罪者の正しいやり方なんだろうけど、好みじゃない。

私は暴れているガジェットを指して飛び立った。

S i d e 〱 キヤロ 〱 ル 〱 ルシエ

「エリオ君…どうしてリライヴさんにはいきなり？」

ルーちゃんには危険なのを分かった上で手を伸ばしたのに、リライヴさんにはいきなり戦闘態勢になった理由が分からなくて、少し悲しいまま聞いてみる。

「…なのはさんやフェイトさんが、ずっと昔から知ってる人、戦ってる人なんだ。あの二人が説得できるのに諦める所なんて想像できる？」

「それは…出来ないけど…」

そんな事ある筈が無い。

エリオ君は頷いた後、話を続ける。

「あの人は何も分からないまままで戦ってる訳じゃない、考えて選ぶであそこにいる。きっと僕たちの…いや、管理局の説得は届かない。」

「

「あ……」

速人さんからリライブさんがそう言う人だと聞いていた私が、エリオ君より気付く……ううん、受け入れるのが遅かったから私だけこんな事で……

「でも、話で済むならそれがいいと思うよ。逆がフレア空尉だと思うと……ね。」

「あ、あはは……」

苦笑いしながら言うエリオ君。

空尉には失礼だと分かっていたけど、エリオ君が説得に入った理由がとつても分かりやすいと思ってしまう私は、乾いた笑い声を返すしか出来なかった。

S I D E O U T

第三十一話・望むは優しく温かい手（後書き）

エリオの武器手放しについては、フェイトには暴走真っ向から受け止められて尚優しく止められて、その上フレアみたいなのが近場にいればここまで漢見せてもいいかな…と。

『お話』 Ⅱ 『全力全開』 じゃなくても…駄目ですかね（汗）結局洗脳されちゃってますし…

第三十二話・戦うべき今

第三十二話・戦うべき今

S i d e 〱 フ ェ イ ト 〱 T 〱 ハ ラ ウ オ ン

「はあああつ!!!!」

前方で戦っているフレア空尉を通り過ぎる形で、ソニックムーブで敵ガジェット群に飛び込んだ私は、ザンバーを使って一気に周囲のガジェットを薙ぎ払った。

「フェイト……」

振り返ると、少し睨むような表情の空尉。

私はそんなフレア空尉に笑顔で今さっき入った連絡を伝える。

「速人がゆりかごでグリフと戦ってるそうです。もう一人で無茶する必要はありませんよ。」

「来ていないと思ったら……あの馬鹿め……」

少し顔を伏せた空尉は、小さくだけど確かな笑みを浮かべながらそ

う眩く。

と、グリフの事とか全く伝えてなかったシスターがいきなり飛び込んだ私と空尉を怪訝な表情で見比べる。

「あ、す、すみませんシスター。その、実は…シスター!!」

説明をしておこうかと思った矢先、地面から手が伸びている事に気付く。

手がシスターの足を掴んで地面に引き込み、上部からガジェットが落ちてくる。

あれでは動けず潰される!!

私よりシスターの傍にいたフレア空尉が落下するガジェットを破壊しようとして槍を構え…

「はあああつ!!!」

それが振るわれるより前にシスターが地面を破壊した。

…なんて豪快な。

『シスター、大丈夫ですか!?!』

『こちらは大丈夫です、戦闘機人を補足しました。彼女を捕らえてすぐに合流します。』

『了解。』

心配する私が答えを返す前に、フレア空尉が一言で返して話を終わらせてしまった。

「空尉！」

「いつ何処から出てくるか分からん相手をシスターが見張ってくれるのなら好都合だ。それより此方も来るぞ。」

詰め寄る私を通り過ぎて槍を構える空尉。慌てて振り返ると、二機の戦闘機人が此方に歩いてきていた。

「フェイトお嬢様…此方にいらしたのは帰還ですか？それとも反逆ですか？」

「どっちも違う、犯罪者の逮捕…それだけだ。」

一人はトーレ、もう一人は眼帯をした少女だった。

「私達のスポンサーの言葉とは思えないな。」

「っ…」

眼帯の少女が告げた言葉に眉を顰める。

「局員だろうとそれ以外だろうと…無辜の民に害をなすならば、排除するだけだ。」

言い切ったフレア空尉が駆けると同時に、戦闘が始まった。

空尉はトーレとぶつかる。私はその脇を抜けて眼帯の少女に向かう。少女が何処からか放つナイフを避けつつ接近し…

「はあああつー!!」

ザンバーを全力で振り下ろした。

「くっ…」

少女が金色の防御幕を展開し、直撃したザンバーと大きな衝撃音を響かせる。

破れない…なんて硬さだ…

「はっ…バルディッシュ!」

『ソニックムーブ。』

防御幕を破ろうと力を込めている間にナイフに包囲されていた。間一髪高速移動で抜け出すと、私がいた場所を多数のナイフが通り過ぎる。

彼女も出来る…

「はあああっ!!」

「っ!!」

と、唐突に接近してきたトーレがその手の刃を振るう。

手甲で受けとめはしたが、次いで放たれた蹴りによって吹き飛ばされた私は、地面を転がった。

「すまない。」

珍しくフレア空尉から入る謝罪の念話。

無理がかさんだ今の空尉に、高速戦闘タイプのトーレの足止めは難しいのか…

「やあ、フエイト!! テスタロツサ執務官。」

「ジェイル!! スカリエツティ!?!」

態勢を整えたところで、スカリエツティが表示されたモニターが映る。

「私の作品はどうだい? 中々堪能してくれているようじゃないか。」

「作品だと…人の命を何だと!!」

「大事にしているつもりだがね。グリフが連れて来た死に掛けの局員や迎撃したゼストを作り直して動けるようにしてあげたのは私だよ?。」

「戯言を! 重罪人が!!」

モニターに叫んだ私の様子を見て、スカリエツティは肩を竦める。

直後、地面から生えた糸が私に絡みついた。

「挑発に乗るな。」

私をたしなめながら飛び込んできたフレア空尉が、私に絡みついた糸を根から払う。

次いで眼帯の少女が放ったナイフを弾き飛ばす空尉。

「IS発動、ランブルデトネーター。」

嫌な予感を受ける眼帯の少女の一言の後、今の一撃で散ったナイフとさつき私が回避して散ったナイフの全てに光が取り巻く。

高速移動で…！？

「しまっ…」

新たに足に巻き付いた一本の糸を見た瞬間、爆音と爆発で全ての感覚が途絶えた。

感覚が戻ってきて始めに感じたのは、全身を包む温かさだった。
あまり痛みを感じない事に疑問を抱きつつも目を開いて…

「あ…え？」

目の前にフレア空尉の顔があった。
男の人とここまで近づいたことがなかったから少しビックリして…

空尉の背中に回した手から、ぬるりとした嫌な感触が伝わってきて
慌てて飛び起きた。

「フ、フレア！っ！？」

全身の様子を確認する為に離れて立ち上がった私は、糸の檻に閉じ込められた。

離れたお陰で全身が見えるようになったフレア空尉の姿は、背中と右肩が焼け爛れた酷いものだった。

私を…庇ったんだ…

「命懸けで君を庇ったと言うのに、肝心の君が動揺しきって拘束されるとは…報われない、人の命を何だと思ってるんだい？フェイト
「テストロツサ執務官。」

「スカリ…エツティ…」

耳障りの悪い声に視線を移せば、いつの間にも姿を見せたのか、気味の悪い手袋をつけた指を玩んで嗤うスカリエツティの姿があった。許しがたい犯罪者に言われた否定も出来ない台詞に、私はデバイスを握り締めて歯を食いしばる。

「プロジェクトF最初の完成形である君は、是非無傷で欲しかった所だ。AMF下でコレだけの戦闘が出来る君達二人相手にはそれも難しいと思っていたが…彼に感謝しなくてはね。」

「黙れ…」

「そう憤ることも無い。私は君の父親のようなものだからね。」

「黙れ犯罪者が！っ…」

糸を薙ぎ払おうとした所で更に湧いて出た糸によって身体とデバイスも拘束される。

そんな私を見ながら、スカリエツティは溜息を吐く。

「可笑しな話だ。管理外世界というだけで奴隷にされていた子供一人救えなかった君達が、私一人相手だと重罪人とは。」

見下した目で告げたスカリエッツィの台詞。一瞬その意味を考えはやてから聞いたリライヴの過去を思い出す。

「貴様が何故その話を…」

「人を奴隷扱いする者は逮捕しないのかい？…それもそうか。君たちが言う重罪人とは、君たちの失敗の結果の後始末の事なのだからでなければ…元凶が彼女を逮捕しようなどと面白い事は言えまい。結構な事じゃないか！」

楽しそうに嗤うスカリエッツィが、その手を大きく広げる。

「私の技術を批難しながら、その結果である君やタイプゼロの二人、君が育てた子供は自分の都合のいいように操り、使われる。君が名乗る正義の組織は所詮そんな揺らぎだらけのものさ、だからこそ…」

「っ…母さん？」

言葉を切ったスカリエッツィが、プレシア母さんの映像を映し出す。一つはアリシアと並ぶ優しい顔、もう一つは疲れ切って濁った目をした顔。

「君もこうなる。引き取ったFの遺産と竜召喚士を自分の手足として使っている君も、プレシアと何一つ変わらない。だからいい加減、その脆い正義に縋るのは止めたまえ。」

身体から力が抜けるのを感じる。

スカリエッツィの技術と力とあり方を批難しながら、その技術と力を使い、引き取った二人を結局戦わせている。

それ以上見ていることが出来なくなった私は目を閉じ…

「知った事か。」

聞きなれた静かな声が聞こえた瞬間、私の全身にまとわりついた糸が切れた。

S i d e } フレア＝ライト

フェイトを解放した私は伝わる痛みからダメージを感じる。
… 幸い足と左腕は動くようだ。コレならば充分戦える。

私が立ち上がったのが意外だったのか、トーレが目の色を変える。

「貴様！まだ…」

「局員より鍛錬を積んでいる犯罪者もいる、私よりも貴様の姉妹の方が仲間想いのようだしな。」

「フレア空尉…っ…」

私に目を向けたフェイトが表情を歪めるのを流して、私はグレイブ

をスカリエツティに向ける。

「だが、そんな事は関係ない。私は貴様等を止める、例えそれが正義でなくてもだ。」

「傲慢だね。」

「私の目的は無辜の民を守る事、貴様の説得でも、貴様に讃えられる事でもない。」

何が正しかったのかなど、後世の人間が適当に語ればいい。

過去の英雄は所詮殺し合いの先導だし、この後戦乱が訪れれば戦わなかったものが臆病者と罵られる時代が来るかもしれない。

「あの二人を使っているか否かが不安ならば後で話を聞けばいい、奴の話も牢で聞ける。フェイト、お前は今ここへ何をしにきた？」

もう答えの出ているはずの問い。犯罪者の逮捕と、フェイトはそう言っていた。

それに：なのはの訓練に耐えて来たあの二人は既に使われている戦闘機人よりもしっかりと立っている。特にエリオの方は疎まれている私に逐一自分から関わってくるほどに。

都合のいいように使っているなど、それを言われて認めるなど、あの二人にとって侮辱以外の何物でもない。

「お礼は後ほど、今は…」

「それでいい。」

別に礼等不要だが、彼女がそれを聞くとお思えない。今戦闘態勢になればそれでいい。

「トーレは任せる。」

「はい！」

一言で十分伝わったのか、切り札を切るフェイト。黄金色の光に包まれたフェイトは…閃光と共に「消えた」。

断続的な衝撃音が響く中、私は地を駆けける。目指すは眼帯の少女。

ナイフと赤い糸が私の進行を妨げるように出現する。足を止めてそれらを払った私は、技の構えを取る。

弾いたナイフを光が取り巻き…

「ランブルデトネーター。」

爆発音を耳にする前に動く。

普通に駆けたのでは絶対に間に合わない距離。

だが、だからこそフェイトの一撃を防いだ防御魔法を展開する前に攻撃を当てられる。

一歩で長距離を埋める技術。

そしてそれを含んだ、長距離刺突奥義…

「がっ…な…に…」

『射抜』

獲物は槍で借物の技だが、お陰で眼帯の少女を貫く事が出来た。

「はあああつー!」

貫いた少女を、横薙ぎの要領で体を捻りスカリエツティ目掛けて投げ
げる。

少女を妙な手袋で受け止めたスカリエツティに向かって飛び掛り、
空中から打ち下ろしの一撃を頭に叩き込む。
綺麗に直撃したスカリエツティは、ぐらりとその身体を傾けて…

「くっ…オーバーデトネーション!」

意識は断てていなかったのか、眼帯の少女が叫んだ瞬間、私を包囲
する形でナイフが展開される。

これは…回避は不可能か。

S i d e } フ ェ イ ト 〓 T 〓 ハ ラ ウ オ ン

聞こえて来た爆発音に嫌な予感を感じつつも無視する。

あの人が命懸け出まで私を庇って助けた理由なんてただ一つ。

道中で消耗した彼ではここの全員を捕らえきれないから。

振り回されて意気消沈した拳句捕まって、庇われ傷ついた彼を気にかけてまた捕まって、まだ尚助けて任せてくれた。

味方を見捨てる事も選択肢に入れられる彼がそこまでしてくれた理由なんて、彼が私をまだ信じてくれているか、彼自身の力ではもう現状をどうしようもないかの二つ位しかない。

だから…これ以上グダグダと止まってはいられない!!

「はあああつー!!」

「おおおおつー!!」

昔即興で追加した二刀の進化系、ライオットザンバー・ステインガ
ーを手に高速移動と全力飛行を繰り返し幾度も斬り結ぶ。

距離を取って着地した私とトーレは、互いに荒い息を吐いていた。

「…見事です。」

「何？」

唐突に、トーレから送られた賛辞に困惑する。

「彼が我々に『魂が無い』と言った理由が少し分かった気がします。
確かに我等戦闘機人に、貴女のようなブレは無い。だが…」

再度構え直すトーレ。

「戦機として…負けるつもりは無い。」

彼女の眼光と宣誓を受けた私は、背中に伝う冷たい衝撃のようなも

のを感じる。

恭也さんと相對した時に比べれば小さな、それでも心無きものが持ち得るはずの無い気。

「：貴女にも魂位ありますよ。事件が終われば、きっといくらでも進めます。」

人形なんて状態、本人次第でいくらでも変わる。

戦闘中にも拘らず感じられたその感覚に少しの嬉しさを覚えて、私も構え直した。

「終わらせはしない。」

「終わらせてみせます。」

瞬間、互いに消失するほどの勢いで駆け、斬り結ぶ。

けど、実感があつた。

私の方が速度は上だけど、彼女は私の速さに慣れて来ている。加えて戦闘が長期になれば、私は消耗して彼女は益々慣れる。

だから、一手で決める必要があつた。

ソニックムーブで死角に入った私は一刀を振るう。

当然それだけでは防がれる。その上、技量では彼女を上回ることが出来ない。

ならば…力で押し切るしかない。

「はあああああっ！！！！」

「何っ！？」

振るった一刀にもう一刀を融合、そのまま大剣へと変化させる。
ライオットザンバー・カラミティ、大剣で全てを薙ぎ払う一撃を放つ為の形態。

「戦闘機人を…人間が…力任せに押し切れるとでも！！！！」

「押し…切る！！！！」

加えられる力は五分。空で均衡を維持した私達だったが…

受けているトーレのブレードが砕けた。

AAAで都市一つ壊滅させる戦闘が可能とも言われている。高速戦用に開発されたのだらう彼女の刃が、オーバース級の力を用いての全力衝突に耐えられなかったようだ。

装備もなく大剣を受けられるはずもなく、私が振りぬいた剣は、そのまま彼女を吹き飛ばした。

「はあ…はあっ…」

着地した私はフルドライブを解いて、魔力の節約に入る。

AMF濃度にもよるけど…まだ援護くらいは出来る余裕は残っていた。

それもコレも全て…

「フレア空尉!!」

ずっと前に出続けた彼のお陰。

最後聞こえた爆発は恐らくあの少女のナイフが爆発した音。それで戦闘が終わったと言う事は…

嫌な予想こそあったが、今度は警戒を解かず、慎重に空尉の姿を探して周囲を見渡す。

戦闘に集中しすぎて少し離れていたらしく、遠目に立つ人影が見えた。

先程までのボロボロの様相から局の制服に戻っている空尉が、槍を杖代わりに辛うじてと言った様相で立っていた。

バリアジャケットのリアクターパージまで…完全に最終手段なのに…

「フ、フレア！大丈夫！？」

慌ててフレアに駆け寄ると同時に、施設が振動する。

「これは…」

「自爆装置だろう。」

「くくく…その通り。」

フレアに続くように発せられた声に目を向ければ、デバイスをつけた手ごと貫かれたらしいスカリエッティが力なく笑っていた。

「クアットロがここを用済みと判断して処分に入った。」

「何を…貴方も巻き込まれ」

「戦闘機人全員に私のクローンを仕込んである、別に私が無事である必要は無いのさ。」

自分が死ぬかもしれないと言うのに心底楽しそうに笑うスカリエッティ。

…狂ってる。

「予測の範疇だ…」

「フレア！休んで無いと怪我が」

「問題ない、お前は施設の爆破を止める。道中にいた眠っている人も死なせることになるぞ。」

フレアの言葉に、水槽に浮かぶ人たちの姿を思い出す。
…こんな事まで予測した上で前衛を引き受けてたのか、本当に頭が
下がる。

「…分かりました、必ず。」

「頼む。」

誰一人死なせるつもりは無い、無駄な命なんかじゃないんだ。

S I D E O U T

第三十二話・戦つべき今（後書き）

シグナムふつとばすゼストを対で倒したチンクには大分活躍して貰いました。

ランブルデトネイターを知らなかったのはチンクがスバルと交戦してない為です。

フレアが味方を庇った！？と思ったら最終的にはやっぱり彼な回（笑）

フラグっぽい気もするけど…彼に限っては無いかなあ（汗）

ちなみに、射抜は試合をやってる関係で知ってるものを模倣しただけです。

また二話投降します。

第三十三話・血を超え繋がる家族

第三十三話・血を超え繋がる家族

S i d e 〱 クアットロ

グリフが殺してくれるかと思ったあの白い悪魔は、いきなり現れた黒尽くめが割り込んできたせいで僅かな三文芝居の後に先に進んでしまった。

あの二人が兄妹だったとは…まあそれでも男の方は少し腕がいいだけで大した素体では無いのだけなど。

それよりも気になるのは…

「高町なのは…何故今ああも力を抜いて動ける？」

高町速人が現れてからの三文芝居から、妙に力が抜けている。

デイエチちゃんも砲撃を溜めて待ち構えていた所では、放たれた砲撃を一度通路に下がることで回避、しかも目測で隙間から誘導弾を放り込んでデイエチちゃんの砲撃が収まる前に片付けてしまった。

オーバーS級の真価を見せていると言えばそれで済む話にも思える

が…

「ま、いいわ。あの娘を前に落ち着いていられるとも思えないし。」
それよりも警戒を最大にしておかなければならない。

以前リライヴ相手に多対一の模擬戦をやったときに広域索敵、長距離砲撃のコンボで撃ち落された事を考慮するなら、もし此方の位置が判明すればあの悪魔の砲撃なら同様のことが可能かもしれない。

予定外の乱入者のせいでゆりかこのダメージも地上の戦局もよくは無い。が、このゆりかごさえ予定位置まで運べればそれで事は済む。

「せいぜい踊ってもらいましょうか、エースさん。」

これが片付け後は駆動炉に向かっているあのちびを止めて終わり。それだけだ、何の問題も無い。

Side 〱 高町なのは

『お前そのままに本音を伝えてつれてくればいい。』

私そのままに…か。

お兄ちゃんから耳にたこが出来るほど聞いた、心を凍らせるなって

意味の言葉。

母親をやる資格がどうこうと、色々考えて、色々尻込みして、ヴィオが慕ってくれていたって事実には逐一理屈を引っ張って否定して…

そのくせいなくなったら、フェイトちゃんに泣きつくほど辛かった。

…きつと、自分そのままに全部さらけ出して、その拳句にヴィオに逃げられる事に怯えてたんだ。まるで告白を尻込みする子供みたい。

自分で浮かべた例えが妙にはまって思わず笑ってしまう。

玉座の間に辿りついた私を待っていたのは、とても王の扱いとは思えない完全に拘束されたヴィオと、幻術を扱う戦闘機人クアットロ。

「いらつしゃーい、お待ちしました。」

「大規模騒乱罪の現行犯で貴女を逮捕します、すぐに騒乱の停止と」「子供を無視して開口一番定型句ですかぁ？自分は愛しいお兄ちゃんといちゃついてたくせに。ねえ？」

笑いながらヴィオに手を伸ばすクアットロに問答無用でシューターを放り込む。

直撃したクアットロはアツサリぶれて消えた。

幻か。そんな事だろうとは思ったけど…

『怖い怖い。こおんな悪魔は…聖なる王様に退治してもらわなければならない。』

浮かび上がったモニターに表示されたクアットロが性質の悪い笑みと共にそう告げると、ヴィヴィオの体が跳ね、得体の知らない力が流れ込む。

「ママ！やだ！ママ！ママ！」

「ヴィヴィオ！くっ…！」

悲鳴を上げるヴィヴィオから噴き出した虹色の魔力が周囲を突風のように埋め尽くす。

その力の波に押されてまるで進むことも出来ないうちに浮かび上がったヴィヴィオは…

「うあああああああつ！！」

絶叫と共に、変身した。

成熟した身体、長い髪をサイドで結って、どこか私の衣装を思わせる防護服を身に纏っている。

あんまり当たってほしくはなかったけど、ウィータちゃんに言われた予想が当たっちゃったな…

「貴女は…私のママを…どこかに攫った…」

「ヴィヴィオ、違うよ！私だよ、なのはママだよー！」
「っ……」

一瞬たじろぐヴィヴィオ。

けど、何かを振り払うように腕を振るう。

「違うー！ー！」

「っ……」

「うそつき。貴女なんか…ママじゃない。」

ヴィヴィオに真っ向から告げられる否定の言葉は、洗脳なのは分か
ってるけど、結構来るものがあった。

「ヴィヴィオのママを…返してー！」

それに、私が名乗った時たじろいだって事は、洗脳って言うても完
全に脳を書き換えるものじゃなくて『付け入る隙』をつつくもの。

そんなものがあるのは…私のせいだ。

「あああああああつー！ー！」

拳を硬く握り向かって来るヴィヴィオ。私はそれを、右手に持った
レイジングハートを使って斜めに張った防御幕で流す。

「デイベインバスター・インパルス。」
「え……」

姿勢の崩れたヴィヴィオに向かって左手で放った零距离砲撃は、ヴィヴィオを壁まで吹き飛ばした。

S i d e ヽ ヴィヴィオ

あの人から受けた一撃に抱いたのは困惑だった。

『何である人が私を攻撃するのか分からない。』

一瞬抱いた疑問を振り払う。あれはママを攫った敵、攻撃してくるのは当たり前…

「ヴィヴィオ…ごめんね、不安だったよね。ずっと私の事見てくれてたもん、肝心な所で避けてたの分かつちゃってたよね。」

「う…ああ！っ!？」

潰そうと飛び出そうとしてすぐ、手足を拘束される。

その後すぐに複数の魔力弾が撃たれた。

これは…セイクリッドクラスター？

放った魔力弾を爆散させて小型弾をばら撒く魔法だけど、こんな…

「効かない！」

私が撃つならともかく、AMF下である人が撃った小型弾なんて威力が出る筈が無く、『聖王の鎧』がある私には簡単に防げてしまう。

こんな時間稼ぎにしか…時間稼ぎ？

「エクセリオンバスター・フォースバースト！」

「え？あ？っ！！」

直後、ただでさえ凶悪なあの人の砲撃が4発同時に飛んできた。

「プ、プロテクション！！」

出鱈目な衝撃をどうにかプロテクションで受け止め…

「あ、あ、あああああっ！？」

プロテクションごと押されて壁にくっついて爆発した。

「あ…え？」

自分で、息が上がっていて疲れてるのが分かる。

何これ…どっになってるの？

私は聖王…ゆりかごもあって殆ど無尽蔵に近い力を扱えて、それだけでなくも聖王の鎧で殆どダメージは通らない筈なのに…

「…ヴィヴィオ、ごめん。もう逃げないよ。私らしく、全部見せる。うるさい人に振り回されてるから今は答えは聞かないけど…ずっと戦ってはっかりだった私でいいなら、また一緒に暮らそう。今はとりあえず…」

あの人はよく分からないことを言いながら、とても楽しそうに笑って…

「魔法戦、教えてあげる。気兼ねしないで全力でかかっておいで、ヴィヴィオ。」

直後、私は売ってはいけない人に喧嘩を売ってしまったのだと悟らされた。

思い出すのは、ちょっとだけ見た訓練風景。
この人や、もう一人の速い人に撃たれて斬られて吹き飛ばされて地面を転がって、ボロボロで地面に転がってるのに起きろって言われて起きて吹き

「あ…うわああああつ！！！！！！」

なんか聞こえて来てた声の事は頭から消えた。
やらなきゃ…私がやられる。あの見てた光景のように。

S i d e 〱 ヴ ィ ー タ

周囲のガジェットを蹴散らした所でロングアーチになのはの状況を聞いたら『ヴィヴィオ相手に教導中』と引きつった声で返ってきた。

「は、はは…可哀想になヴィヴィオ…」

洗脳されてるだろうヴィヴィオ相手に交戦する事になったら本気で戦えるのか、そもそも戦って大丈夫なのか心配になったが、完全に杞憂だったらしい。

しかし…腹立つもん思い出させてくれたもんだ。

串刺しだけは避けた脇腹の傷を押さえながら周囲のガジェットの残骸を見やる。

そこにあっただのは、かつてなのは襲ったステルス搭載機だった。

ホント、消耗してたらやばかったな。

こうなると外で一切戦わなくてよかったのはディアーチエのお陰だから、アレに感謝する事になるんだが…

「…すっげえむかつくなソレも。」

大威張りでふんぞり返るあいつの姿が簡単に浮かんだあたしは、その腹立つ姿を頭を振って消し去った。

「…と、ノンビリしてる場合じゃねえか、さっさと駆動炉ぶっ壊さねえとな。」

あたしは残る一仕事を片付ける為に再び歩き出した。

S i d e 高町なのは

戦い始めすぐの一撃で分かった事がある。それは…

聖王の力だろうと豊富な保有魔法だろうと、あくまで扱っているのがヴィヴィオだと言う事。
扱っただけの体力と戦闘経験が圧倒的に足りなさ過ぎる。

「はあああつ!!！」

「視野が狭い!!！」

無作為に突撃してきたヴィヴィオの周囲に放った誘導弾をぶつける。
魔力爆発にのまれたヴィヴィオは…

「効くもんか！」

「でも一瞬見えない! ACSフルドライブ!!！」

そのまま進んできて、レイジングハートの尖端を体のだ真ん中で受ける事になった。

突進中に魔法を構築、壁への激突と同時にバインドをかけて…

「デイバイン…バスター!!!」

砲撃を放つ。

魔力砲撃はヴィヴィオに直撃して爆発し…

お返しとばかりにヴィヴィオから砲撃魔法が飛んできた。

『フラッシュムーブ。』

「そんな適当に撃つても当たらないよ！」

砲撃で一気に晴れた視界の中、間合いを詰める。

ヴィヴィオの右に接した私は再びデイバインバスター・インパルス
を撃つ為左手を伸ばし…

「っ！だあっ！！」

「あ…」

伸ばした左腕の内側からヴィヴィオの右腕が姿を覗かせていた。
避けられない…当たる。

無視して全力で放ったデイベインバスター・インパルスと魔力打撃が引き起こした激しい衝撃で、私とヴィヴィオは互いに吹き飛んだ。

「はあ…はあっ…」

「っ…」

腹立つから聞き流してたクアットロが言った聖王の鎧とかいう能力の影響か、振動や魔法使用による疲れは見えるものの、あれだけやっても体にはほぼダメージが無いようだった。

お陰でこっちもあんまり気兼ねなく戦えるんだけど、どうやら今の拳で肋骨を少しやったらしい。

折れては無いようだけど…

「わ、笑うな…」

「え？」

ヴィヴィオが、私を睨んでもりながら言った言葉に、自覚しないまま笑顔だった事に気が付いた。

「ああごめん、嬉しくって。今のカウンターよかったよ、相打ち覚悟はいただけないけど。」

「っ、うるさいっ！…」

一瞬頬を赤くして、ブンブンと頭を振るヴィヴィオ。
とは言え…喜んでばかりもいられない。さすがに向こうは無敵、こ
っちは一発で瀕死の差はちょっと敵すぎる。

「しょうがないね…ブラスター2、リミットリリース！」

宣言と同時に、ブラスターシステムが起動する。
限界を超えて出力を引き上げる自己ブースト。負担は当然大きく、
使えば使うだけ体に負荷が来る。
かわりに、今出せる出力は上がる訳だけど。

「え…えっ？」

目を見開いて後退りするヴィヴィオ。

「あんまり驚かない。一定以上の相手は大概切り札の一つや二つ持
つて当然。コレでも今のヴィヴィオの魔力値は出てないし。さ、
やるよー！」

後退りしてたヴィヴィオは踏みとどまると、手と歯にこれでもかと言
う位に力を込めて飛びかかってきた。

S i d e ｸﾞｸﾞｱｯﾄﾞ

「あの悪魔…何が『教えてあげる』よ、自分の子供相手にここまでやる普通？」

全体の戦況を見ていた私は、苦々しい思いで高町なのはと聖王の戦いを見ていた。

地上の妹達は全滅、基地は敗退して自爆装置の起動済み、現れたりライヴにルーお嬢様の洗脳が解かれ、リライヴは遊ぶかのように気楽に次から次へとガジェットを掃討中。

それでも、このままゆりかごさえ軌道上に上げれば…

瞬間、計器が異常を示す。

「駆動炉が破壊された？けど、まだまだ…」

異常を示した駆動炉に対応する為に補助動力を起動させた所で、また一つ情報が入った。

「これは…っ、あの悪魔、やっぱりやってくれてた訳ね…」

警備用に配置しておいたガジェットが、サーチャーを感知して破壊したと言う物だった。

…やはり本命は此方の攻撃だった訳ね。

折角だからこれを利用してあの悪魔の戦意を削げるだけ削いでおう。

「あはははは！お楽しみ中のところ失礼しまあす、悪魔さん。」

『くっ…』

憎憎しげにモニターを見てくる高町なのは。ふう…ちょっと溜飲が下がった。

「無駄な時間稼ぎ残念でしたあ。どうします？今からここがどこか分からないまま探して叩きに來ます？そんなの間に合つと思えます？無駄な努力ご苦労様！」

悔しそうな表情をしてくれて実に楽しい。

あのブラスターシステムは、使えば使うほど自分とデバイスの命を削るほどの代物だ。

聖王を制しながらここまで來るにしても絶対に保たない。

「後は…聖王様殺しちゃいます？」

『っ…』

そうすれば少なくともこの船は止められる。分かった上で彼女が選べない手を告げると面白いほどに表情を歪めてくれた。
あー楽しい！

「怖い顔。貴方達が違法と言った命なんですから、その悪魔じみた性格を大いに奮ってみたらどうで」

『失礼するよ。』

唐突に表示されたモニターに、ビルの一角に腰掛けるリライヴの姿が映る。

この状況を望んで無いだろつに余裕があるリライヴに少し嫌な感じを受ける。

『私との模擬戦でやられた経験はしっかり役に立ってるみたいだね。』

「裏切り者が恩の押し売りかしら？」

『いや、お節介ついでにもう一つ伝えておこうと思って。』

そんな事の為に通信を開いたのかこの天使気取りの穢れた女は。しかもここに直接繋げる訳も無いから全周波と言う事になる。局員に位置がばれて不都合なのは自分もだろつに、分からない奴。

『監視モニターで主要人物と戦局監視してるんだろつけど…一人映って無い奴がいるんじゃない？』

そんな奴がいる訳が無い。

改めて全戦局を確認する為展開中のモニターに目を向ける。

八神はやては指揮を取りつつ順次出現するガジェットの掃討中。半人前四人組みは妹達やルーお嬢様の引渡し中。

ゼストとシグナムは地上本部から出現を確認して無い。
ウィータ、高町なのはの援護へ移動中。

フェイトお嬢様は地下で施設防衛に奮闘中、フレアはそこで戦闘不能。

高町なのはは今聖王の器との交戦中…高町？

高町速人は？

『最後に一つ、後ろには気をつけたほうがいいよ。それじゃ、御武運を。』

最後まで綺麗な笑顔のまま通信を切るリライヴ。

落ち着け…ハッターだ…ここは最深部…指揮が取れなければ話にならないからと一番警備網の厚かった場所で、ガジェットも展開してある以上戦闘もなしに通れる人間が、いや、虫一匹ですら通れるはずが無い。

嫌な汗が伝うのを感じながらゆっくりと振り返り…

「おじゃまします。」

丁度顔を覆う黒い覆面を外した、あのグリフを破った高町速人が私の後ろに立っていた。

「な…な…馬鹿な…そんな馬鹿な…」

勝てる訳が無い。

第一どうやってここへ来たと言うのだ。戦闘があればさすがに分かる。

「俺さ…自分の望みを叶えることにしか執着がなくて結果酷い事を堂々と出来る奴ならいくらでも見てきたんだ。」

言い終わり、速人が一步、歩を進めた瞬間…

首が斬られた。

「は…あ？」

と思った。否、首を斬られるのが見えた。
にも拘らず、手を伸ばした首は普通に繋がっている。

「だけど、さすがに始めてだ。単に人が苦しんでるのを見るのを
楽しむ奴って言うのは…」

カツン。歩を進める音と同時に心臓が貫かれた。

「ひ…いつ…」

心臓を押さえる、異常は無い。普通に機能している。未だに一つも
傷は無い。

「ああ……ホント、ここまで救い様の無い奴は初めてだ。どうしてやるのか？」

カッン。縦に両断された。

そこまでで悟る。コイツが私の殺し方を考えながら歩いているのだと。

カッン

カッン

カッン

「あ……あ……」

彼が手にした短い剣が届く距離まで来て、私は腰から崩れ落ちていく事に初めて気付く。

剣が真つ直ぐに振り上げられる。

「こつ言つの楽しいんだろ？笑えよ。」

「あ…あああああああああつ！…！！！」

その手が動くのが見えたと同時に、私の意識は消えた。

S I D E O U T

振り下ろした峰打ちを当たる前に止め、一歩下がる。

「天罰觀面…のつもりだったんだけど、ちょっとやりすぎたかな？」

何一つ当たってもいないのにグツタリとしてしまったクアット口。
まさか峰打ちを打ち込む前に失禁して気絶するとは思わなかった。

仮にも戦闘機人だろうに…

こんな所にこれる魔導師なんている訳も無いし、彼女運び出すの俺の仕事なんだよなあ。

『シヨック死でもしてたら色々失格ですよ？』

「うぐ…反省してる…」

耳に痛いナギハの言葉に歯噛みしながら、動いている端末を適当に破壊して…

警報が鳴り響いた。

『当然ですね。』

「だよな、やってから思った。」

来た道からガジェットが動く音がする。来る時は凧形態＋気配遮断で来たから途中の倒して無いんだよなあ…しょうがない。

俺は手早く寝ているクアット口を担いで、体から落ちないように縛る。

『やっぱり連れて行くんですね。』

「当然だ。俺は人が死ぬのを喜ぶ趣味は無い！」

背負っていくとなると俺だけ気配消しても意味無いし、神速だつて使えばどうなるか分かったものじゃないし、俺はまともに攻撃当たれば死ぬ身体。

だけど、連れてかないと船ごと沈められたら死ぬ。って言うかアルカンシエルみたいなだと存在自体塵も残らないのか。

やるしかない。

「行くぞ!!」

『了解!!』

でかい荷物一つ背負った俺はガジェット群に飛び込んだ。

Side 高町なのは

リライヴちゃんの通信には驚いたけど、私よりお兄ちゃんの事を信用してくれていたのには頭が下がる。

正直、本気でどうしようかと思つてた所だ。全くあの人は…本当いつも助けてくれる。

「うっ…うっ」

「あ…ヴィヴィオ!大丈夫!？」

突然頭を抱えるヴィヴィオ。きつと洗脳が解けたからだと思った私は急いで駆け寄り…

「来ないで!」

「え?っ!」

ヴィヴィオは拳を振りかぶって振りぬいた。

間一髪防御が間に合った私は、滑っていつて構えなおす。

いきなり通信が切れたけど、まだクアットロを倒せていないんだろうか?

そんな筈無いと思うんだけど…

「…謝らなきゃいけないのは、ヴィヴィオの方。」

「え?」

「なのはさんが何処か私を避けてたって話、ちゃんと聞いてた。なのはさん、ずっとこんな戦いしてるから、何かあった時の為に気を使ってくれてたんだよね。」

なのはさんという呼び方に胸がズキリと痛むのを感じる。

『駆動炉破損、管理者不在、聖王陛下、戦意喪失。』

「これは…」

「私は…ただ守ってくれてデータ蒐集させてくれる人を探してただ

けの、ゆりかごを動かす為の生きた鍵で、ただの兵器。なのはさんとかフェイトさんをいいように利用して、こんな騒ぎに使われた……っ、避けて！」

勝手に動かされてるらしいヴィヴィオが、砲撃魔法を放ってくる。あわせてショートバスターを撃って相殺したけど、やっぱりブラスタ―使っていると負荷が大きい。

「全部作り物の偽者の命、生きたフリをした道具。何処を探してもママなんていない、今の世界にいちやいけない死んでいるはずの」「馬鹿！！！」

泣きながら叫ぶヴィヴィオのあんまりな言葉の連続に、私は本気で怒鳴っていた。

「ば、馬鹿って！ゆりかご壊すんでしょ！？こんな事してたらなのはママだつてまきこまれちゃう！そんなの」

「巻き込まれない！ヴィヴィオも一緒に帰るの！！！」

暴走は続いてたけど、ヴィヴィオ自身が嫌がつてるせいかさっきまでより更に荒い攻撃。

とは言つても、泣きながら完全に操られてるだけのヴィヴィオにさすがに攻撃なんて出来ず、防戦一方なのでちょっと厳しい。

「なのはママにはただの兵器の私と違って返る場所があるんだから！我俣ばっかり言っちゃ駄目だつてなのはママが自分で言ってたはずなのに！！！」

「帰る場所だつたらヴィヴィオにだつてある！」

「そんなものある訳」

「だって！さっきからずっと『ママ』って呼んでくれてるじゃない
！！！！」

「あ…あああっ！！」

無意識か、戻ってくれていた呼び方を指摘すると、何かを振り払うように叫ぶヴィヴィオ。

握った拳を以って全力で突進してくるヴィヴィオの手を、真っ向から受け止める。

「ねえヴィヴィオ…私もママってまだ分からないから困らせちゃうかもしれないけど、ちゃんとママでいられるように努力する。だから、本当の気持ちを聞かせて。私がママになっちゃ…駄目？」

私の問いかけに俯いたヴィヴィオが何かを呟く。そのあと、涙でぐしゃぐしゃになった顔を上げて…

「なのはママがいいっ！一緒に居たいっ！！居たいよお…助けて…」

息を吐く。

聞きたい事が聞けたからか、力が湧いてくるような気さえする。

「助けるよ…いつだって！どんな時だって！！」

答えにヴィヴィオが頷くのを確認した後、レイジングハートを構える。

「レイジングハート、ブラスター3！レストリクトロック！！」
「っ！？」

最大出力での拘束魔法が、ヴィヴィオの全身に絡みついたところで、最後の兵装を展開する。

「ブラスタービット展開：ヴィヴィオ！ちょっとだけ、我慢してね
！」
「うん…」

レイジングハートの尖端に似た、四機の魔法発動体。
必要な魔力が大きすぎてブラスターを使って無いと使用もままなら
無いこれは、私の最大の一撃を強化するためにも使える。

撃つのは最大の一撃。時の庭園のロストロギア級の駆動炉を『消滅』
すらさせた集束魔法。

「全力全開…スターライトブレイカー!!!!」

放ったビット含めて総勢五本の極大魔力砲撃は、ヴィヴィオの体を瞬く間に飲み込んで、その体内からレリックを弾き出して粉々に砕いた。

砲撃を終え、魔力爆発が収まった所で体を抱えつつ下降する。
やっぱり…ブラスター3での砲撃は負担が大きい。

「つく…レイジングハート…大丈夫？」
『損傷はありますが、軽微で済んでいます。』

どうやらレイジングハートは無事で済んでいるらしい。私の方もヴィオのカウンターで負傷した骨が折れたくらいで済んでいる。ならば…

「ヴィオ！！」

ブレイカーであけた、粉塵に包まれた巨大な穴の中心に向かってヴィオの名を呼び駆け出す。

「来ないで…」

「っ!？」

小さく聞こえた拒絶の声。理由が分からなくて不安に襲われた私が、粉塵が晴れた穴の中心に見たのは…

「一人で…立てるよ…」

瓦礫に手をつきながらよろよろと立ち上がって見せたヴィオの姿だった。

そんなヴィオの様子に大慌てで飛び出して、抱きしめた。

「ヴィヴィオ…ごめん…」
「…何で…あやまるの?」

ヴィヴィオが私のお願いを覚えててがんばってくれたのが嬉しくて、こんな時まで無理するのが当たり前だと、そんな事を思わせてしまったことが少し悲しくて、強く強く抱きしめる。

「ホントはね…無理に強くだけならなくてもいいの。優しい女の子になってくれてもいいんだ。だけど…私にはコレだけで…」

自分で選んだとは言っても、気がついたら魔法で戦うのが日常で当たり前になってて、普通の母親になれない自分に悩んで…そんな私と同じ道に進んで欲しい訳じゃない。

望むなら所か、きっと本当はお嫁さんみたいな温かいものを目指してくれたほうがいい。

だけど、それを伝えるには色々置いて来てしまった。

皆が塾や部活、ちょっとお茶目な事だと帰り道の買い食いとか友達連れ立って遊んで回ったりとかかしてる時間。

そんな事の殆どを放置して魔法と修行と戦いに明け暮れて、私は今ここにいます。

私に後悔は無いけれど、『こうあるのが』当たり前』であるように、ヴィヴィオに見せてしまっていることが悲しくて…

「っ！う…」

唐突に、優しく背中を撫でる感触。

ヴィヴィオが、精一杯手を伸ばしてゆっくりと背中に回した手を動かしていた。

大丈夫って伝えるようなその感触に、私は少しの間声にならない声と共に涙を流していた。

S I D E O U T

第三十三話・血を超え繋がる家族（後書き）

なのは教導官マジ恐っ（笑）

こうなったのも、原作の話で『恭也化』何て表現がされる位なので、少しその辺を引っ張ってみた感じですよ。

物心ついたときには剣所持してた恭也に指導してた士郎のことを考えれば、戦闘入って非殺傷あるのにほぼ攻撃なしてて事もないかなと言う事で『教導』の形で戦闘。

立ち上がったヴィヴィオに謝ったのはさすがなのはも芝生で転んだのとSLB直撃を一緒にはしないだろうと言うのと、御神本家が無事な時の美由希ですら『淑やかな娘か剣士』の選択の余地があったのに、ヴィヴィオは戦闘後に立たなきや駄目ってことはさすがに…なのはも暗殺すらある一家より厳しい筈は無いと思ったので。

第三十四話・ストライカーズ

第三十四話・ストライカーズ

S i d e 八神はやて

地上のガジェットの大半が行動を停止したところで入った緊急の連絡に、私は耳を疑った。

「クロノ君：それ本気なんか？」

「ああ：本局の方で決定した。」

握った手から嫌な音が聞こえた気がした。

決定した指示は白い墮天使、リライヴの逮捕。
それだけなら大した問題は無い。けど…

未だに降下しているガジェットや戦闘中の場所がある中で、『リライヴがガジェットを破壊してくれている事を利用して』逮捕すると言うふざけた指示だった。

動いているガジェットのことも問題やけど、止まったガジェットだって長い間放置しておけば何処のやばい奴に回収されるか分かったもんじゃないし、止まっているのと破壊したのでは大違い、いつ何が起こって起動するかわかったものじゃないと言うのに。

とは言え決定は決定、覆る事も無い。

「…ならその役、六課で引き受ける。」
『それこそ本気か？相手は』
「他の部隊は、もしウチらが逃がしそうになったら参加してくれば大丈夫やる？いくらなんでも現状ガジェット放置はやりすぎや。」
『…分かった。どの道転移防止に結界を展開する必要があるが、ガジェットが近づいたらそれも分解される。足止め役が要る上彼女と戦える戦力など本当に限られているとなれば、精鋭に任せるしかない。頼む。』

決定した瞬間、私はすぐに六課メンバー全員に通信を送る。皆がどれだけ戦えるかって心配もあるけど、少しは安心感もある。

いくらあの娘相手でも、今の六課全員捌けるとは思えんし。

後は…

「管理局機動六課部隊長、八神はやてです。応答願います。」

もう一つの気がかりである、現在ガジェットと交戦中の宵の騎士のシユテルとレヴィに通信を繋ぐ。

『…今更ですね。』

「言っな！こつちにも手順があるんや！！」

相変わらず冷めた表情のシユテルちゃんからの突っ込み思わず素が出てしまった。

『それで、何の用ですか？』

「これから、白い墮天使リライブを逮捕する事になった。」

『…これから？正気ですか？』

戦力の大半が疲弊している上、大半のガジェットが動きを止めたとはいえまだゆりかごが稼動している現状で、今直接敵対している訳でも無いリライブと戦う事に疑念を覚えない筈が無い。

『手伝って欲しいと言うのであれば断ります。』

「そうやるな…」

予想はしとったけど、シユテルちゃんからは冷めた返事が返ってきた。

宵の騎士の皆にとってリライブちゃんは命の恩人だし、好感を持って対応してくれる筈も無い。

「ただ…リライブちゃんの手助けする気やったりせんかなと思って。」
「それでもいいんですが、マスターが彼女を止めるのに協力しているのにそんな真似はしません。」
「…そっか、心配して悪かったな。」

万が一もあるから確認した訳だけど…シユテルちゃんが嘘を吐くとは思ってないし、速人君がらみであれば尚更大丈夫だ。

『首都周囲のガジェットは警戒しておきます。もういいでしょうか？』

「ご協力感謝します。」

『…お役所ですね。』

「言わんとして。」

呆れたような呟きを最後に、通信を切るシユテルちゃん。
でも…コレでもう心配は無い。

後は、あのリライブちゃんを止めるだけの戦力を揃える事。

「よし！私はゆりかごに突入する！皆ここは頼んだよ！！」

「了解しました！」

そうと決まればなのはちゃんとヴィータを速効で連れてこなアカン。私でもガジェットくらいならどうにでもなるけど、直接交戦系の能力に乏しい私があの子の前に出るなんて的になるだけだ。

突入した皆に、この上アレと一戦やらせるってのもいい気はせんけど、あの娘を止めたいのは私だけや無い筈だ。

これで最後にしてみせる。

S i d e ーリライヴ

近くに残ってたガジエットの残り一機を破壊して適当なビルに着地した所で、その異変は起きた。

「これは…結界？」

『転移と脱出防止用ですね。』

突然色が変わった世界に周囲を見渡した後、イノセントからの指摘に頭を抑える。

転移と脱出防止って…それどう考えても私対策だ。

「事態は沈静化に向かってるとは言え、まだあの船が普通に動いてる段階でコレとは…やってくれるよ管理局も。」

「すみません。けど、被害の心配していただけるなら速やかに投降

していただけませんか？」

背後から近づいてきた気配に少しだけ嫌味交じりの言葉を吐くと、投降を呼びかける声がした。

振り返ると、隣のビルで六課前線の指揮官らしい娘が銃を構えていた。

確か…ティアナとか言ったか。

「焦らない所を見ると、手柄稼ぎは止めたみたいだね。それにしても、こんなもの用意してくれた割に人が来てないけど…」

「その事で八神部隊長から伝言があります、『六課で当たる事になったから察して欲しい』と。」

答えが返ってくるとは思わなかった質問に、きつちり答えが返ってくる。

けど、それは最悪な展開を意味していた。

『脱出しましょう。』

「できないよ。はやての小狸…無茶言ってくれる。」

イノセントの提案を切る。

当然向こうも逃がすつもりは無いだろうから、結界から脱出しようとする素振りを見せたり、結界を破壊しようとするれば、他の全部隊が動くはず。

ただでさえ対AMF戦が可能な魔導師が少ないって言うのに、ゆりかごが止まった訳でも無いのに私相手に戦力を割くなんて馬鹿げてる。

最も、はやてもそれは分かっているんだろう。だから私の相手を六課

だけで引き受けたんだ。

「…貴女が大人しく捕まってくれればいい話なんですけど。」

「尚更出来ないね。町人質に犯罪者捕らえようなんて面白い事してくれる人に、何で頭下げられる？」

「被害規模を比べての結果ですよ、貴女は暴れすぎています。」

「自覚はあるけど…ね。」

ティアナからの冷静な指摘に目を伏せる。

管理局としては、町に小さな被害が出たって私を放置するよりは軽いと判断しただけの筈だ。

所詮私はただの広域次元犯罪者なんだから。

なのにはやては、ある意味で私を信じて私の相手を引き受けたんだ。状況不利だろうが乗るしかない。

「分かった、いいよ。付き合う。ただ…」

魔力刃を展開したイノセントを、真っ直ぐにティアナに向ける。

「私は貴女達自慢の隊長達の誰よりも…強いよ？」

「上等…」

静かに構えるティアナ。

さて、外の騒ぎが収まるまでなのは教え子の出来でも見せてもらうとしますか。

S i d e ｝ ティアナ ｝ ランスタール

あたしの射撃が戦闘開始の合図になった。
かなりの弾速の筈だったのだけど、リライヴは一步も動かずに弾を切り裂いたばかりか、魔力刃を放ってくる。

速…っ！？しかも見づらい。

受けられる訳もなくて後方跳躍で回避する。単発の魔力刃だと言うのにあたしが立っていたビルが深々と切り裂かれていた。
透明の魔力光と言いデタラメすぎるでしょこの…っ！？

「もう終わり？」

着地所かまだ跳躍の勢いがおさまってもいない空中。目の前に剣を構えたりライヴの姿があった。

『っ！…今っ！…！』

「でやあああつ!!」
「うおおおおつ!!」

念話を合図に、それまで潜んでいたエリオとスバルが挟撃をかける形で飛び出す。あたしに向かっていたリライヴはその場で動きを止め…

一瞬動いたかと思ったらエリオが弾き飛ばされ、スバルが拳を突き出した態勢のまま頭を鷲づかみにされて持ち上げられていた。

遠目で見てるのに、何をしたのか殆ど分からなかった…何て奴なの!?

「アイアンクロー、何てね。」
「あだだだだだ!」

どうやらそのまま力を加えられてるらしいスバルが結構痛そうな声を漏らす。

…アレは痛いわ。

「っのぉ!!」
「おっと。」

持ち上げられた不安定な態勢から、ウイングロードを使った蹴りを放つスバル。

けど、簡単に下がってかわしたりライヴは、上がったスバルの足を

掴んで押した。

「うわぁ！」

ひっくり返ったスバルはそのままウイングロードを外れて落ちて行き…

「クロスファイア…シュート！」

「フリード！ブラストレイ！」

彼女が馬鹿やってる間に準備した射撃と、キャロに乗せたフリードが吐く火炎砲撃が、彼女に向かって一斉に放たれた。

さすがに防がせるくらいは出来ると思ったのだけど、クロスファイアは途中で見えない何かに次から次へと掻き消され見向きもされず、フリードが放った火炎は、手にした剣で簡単に消してしまった。

「っ！」

クロスファイアを消した現象の正体、彼女の無色の魔力光による超高性能誘導弾。あたしに迫ってきてくれたお陰でどうにか見えたそれを、ダガーで切り払う。

近距離装備で相殺がギリギリって…どんな硬度と貫通力よ…

「ヴォルテール！！！」

苛立っている間に、キャロの傍に立っていた巨大な黒竜が、防ぎようも無い炎を放っていた。

それはリライヴのいたビル含めてかなりの広範囲を焼き払う。

「うわ、すごぉお……」

「決まっ…た？」

隣に来ていたスバルと共に、燃え盛る炎を眺める。

「ティアナさん！後ろ！！」

「っ！？」

エリオの叫びを聞いたあたしとスバルは、慌てて振り返る。

「や。」

「く…っ…」

いつの間にか、あたしとスバルが立つビルの一つ後ろに立っていたリライヴが、挨拶でもするかのように片手を上げて声をかけてくる。

コイツ…遊んでる…

本気で私達を全滅させてその後六課の人員が誰も来なければ、そのまま他の戦力もリライヴの捕縛に向かう。それを避けるための時間稼ぎ。

それで…遊ばれてまだ尚防御魔法の一つすら使わせる事が出来てない。

「いい感じ。なのは達なら結構互角の勝負できるんじゃない？勿論4対1でだけど。」

「っ…馬鹿にして…！」

あたしはダガーモードの二刀を手に、リライヴに飛び掛る。アッサリかわされ、ダガーを振るう前に腕をつかまれたあたしは、思いっきり放り投げられた。

「ティア！」

「短気なのは相変わらず…か。基本後衛なんだから私と接近戦なんてやってどうなる訳も無いのに。」

どうにか空中で体制を整えたあたしは、着地して態勢を整える。

狙い通りだ。

『全員聞いて、クロスシフトCで行くわ。』
『『『ええっ！！？』』』

表情を変えずに送った念話に返された反応は、ある意味で想像通りのものだった。

それはそうだろう、トラウマもののフォーメーションなんて今使うものじゃない。

けど、自棄でもなんでもなく、考えた末の最良の一手だった。

怒った『フリ』をしてダガーで突撃してみたが、予想通り倒されなかった。

元々彼女なら致命的な攻撃はしてこないと確信して、その上で魔力ダメージでの昏倒をさせられるかどうかの確認のつもりだったんだけど、あれだけおいしい餌にすら食いつかなかった所を見ると、やはり時間稼ぎで今すぐどここうするつもりは無いはずだ。だからこそ、少々の無理がきく。

それに、クロスシフトCは元々『絶対的な強敵を撃破する』為に考

えたシフト。この状況で切るのにこれ以上のカードは無い。

全部話す時間なんて当然無いからどうにか一言で皆を説得できないか考えて…丁度いい一言を思い出す。

『大丈夫よ、頭は冷えてるから。』

『『『…了解。』』』

あんまり思い出さなくなかったけど、説得力はあったらしい。苦笑
交じりに皆から了解の返答が返ってきた。

…とはいっても勿論四人がかりだからそのままという訳でもないし、
何より彼女にまともに効きそうなのはヴォルテールの一撃位だ。タ
イミングとかは考えないといけない。

でもそれも手はある、後は…出来るかどうか…

いや、きっと出来る。今のあたし達なら。

S i d e 〱 スバル 〱 ナカジマ

あたしは手にしたブリッツキャリバー…その中にある筈のリボルバ
ーナックルを見つめる。

ギン姉と二つに分けた、あたし一人には過ぎた力。

だけど…今は！！

「マツハキャリバー…お願い。」

ブリッツキャリバーに入っていたナックルを左手に装備する。

その重さと本来の力を確かめ…最後の切り札を切った。

「ギア…エクセリオン！！！」

かつてなのはさんが未完成のまま使用した、ACS搭載のフルドラ
イブ。

デバイスから大きく広がる青い翼がその性能の全てを引き出して
いる事を示している。

「うおおおおおっ！！！」

限界まで引き出した力を以ってウイングロードを駆ける。

接近する透明な魔力弾を感じたあたしは、集中防御で受けて乗り切
る。

「ちゃんと防御魔法も鍛えてあるのか…けど、力任せに突破した所
で！」

タイミングを合わせて振り下ろされるリライブの見辛い透明の剣。

あたしはその魔力刃を左拳で殴って逸らす。

速度が速くて全速力で止まらないで出来る攻防が一回一度だけになるけど、防御魔法は勿論、反転含めた基本軌道だって何回も練習したんだ。

だから…何度だって当たってやる!!

再度突撃しようとしたあたしに向かって剣を振りかぶっているリライヴ。

やば…魔力刃飛ばされたら弾と違って防ぎきれないかも…

「こっちだリライヴ!」

「っ!」

咄嗟にティアの声がしたほうを向いて、位置を確認した所で剣を振るうリライヴ。

ビルの上に立つ砲撃態勢のティアに向かって魔力刃が…砲撃態勢?

「幻影?」

いつかのファントムブレイザーの態勢だったから絶対違うと思ったけど、やっぱり幻影だったらしい。

と思ったら、同じビルの物陰からティアが飛び出してきた。

同じビルにいて幻影を出しておいて声だけ出して物陰に隠れたのか、やっぱりティアは凄いや。

「おおおおおっ!!」

「っ!!」

ティアに視線を移している間に距離を詰めたあたしの打撃を、振り返る事もなく左手で発生させた障壁で受け止めるリライヴ。狙い通り！

「もう詰めて来てたか…ん？…なるほど。」

噛むシールドブレイクによって防御を破れないまでも弾かれる事を防止する攻撃。

当然噛んでいるのはシールドだから、近距離攻防自体が危ないリライヴ相手だと返される可能性はあるけど、丁度ティアが上から飛び掛ってくる所だった。

これならいくらなんでも今防御は外してこないはず。

ただ…右手にデバイスをもっているからティアの方が迎撃される可能性がある。

事実リライヴはタイミングを計っていて…

「でやあああつ！！！！」

「なっ！？」

「エリオ！？」

ティアだと思っていた幻影から、エリオが加速して飛び出してきた。攻撃タイミングをずらされたリライヴが、それでも何とか剣でエリオの攻撃を捌く。

「紫電一閃！！」

「っ…重いね！」

下降の勢いそのままウイングロードに着地したエリオが、カートリッジで増幅した魔力を込めた一撃に繋げる。
帯電した槍を片手で持った剣で受け止めるリライヴ。

『着弾と同時に散開！キャロは狙って！！』

『了解！』

どうやらあたしだけ知らないままエリオとキャロの二人にも動きを指示してたらしい。着弾したら散開って事はどこからティアの弾丸が飛んでくるはず。

合図を待っている、あたしの身体を掠めるようにティアの放った弾丸が飛んできた。ギリギリで通っていったそれは、リライヴの障壁に当たる。

魔力爆発に軽く吞まれながら、あたしは思いっきり後方に飛んだ。
丁度着地する当たりのビルに、ティアが立っているのが見えた直後…

今度こそヴォルテールの炎が、リライヴを飲み込んだ。

S i d e ｝ ティアナ ｝ ランスタール

音声データを送ったエリオのデバイスを使った二重のフェイント、同時攻撃役をスバルとエリオに任せて、シフトの動きを知らないエリオはあたしの幻影を着せつつ誘導する。二人が離れるまでの間に逃げられないようにあたしの射撃で時間を稼ぎ、トドメにヴォルテールの最大出力の火炎砲撃。

キャロには全力でブーストかけて貰わないと…って言うかかけて貰ってもあたし達じゃ勝負にもならないリライヴ相手に決められる最大の一撃。

リライヴがあたし達を『殲滅』する気なら危険すぎて使えなかった手だけど…どうにか決まってくれたわね。

「悪いわねスバル、ブラインド代わりにして。」

少しでも見づらいほうがいいと思ってスバルの身体に軌道を隠すように撃つただけど、無断だったから少し悪かったかもしれない。そう思っただけで謝っただけで…

「大丈夫、かすりもして無いもん。ティア本当に凄いよ。」

「ま、射撃型だからね…」

完全に杞憂だったらしく、笑顔のスバルに褒められてしまった。

照れ隠しを返している間に、キャロとエリオが、フリードリヒに乗って共に合流する。

「あ、あの…リライヴさん大丈夫なんでしょうか…」
「あ…」

来るなり不安そうに漏らすキャロ。スバルも必死だったからか今気付いたと言わんばかりの声を漏らす。

火炎砲撃の為、直撃爆発終了。と言うほど簡単じゃない。
ブレスのように長時間放たれていた火炎は、リライヴがいた周囲丸ごと炎で飲み込んでしまっていて、中心の様子はとても確認できない。

とても人間に放っていい攻撃じゃない。けど…

「あの人なら大丈夫よ。」

多分完全に止める事はできて無いと思ったあたりは、キャロを安心させる為にもそう断言した。
とは言え長時間放置しておいてもまずい。そろそろ炎を解除して貰うべきか…

刹那、炎が中心から塗り替えられるように広範囲にわたって消され、光が瞬いたと思った瞬間、離れた場所にいたヴォルテールが倒れていった。

嘘だ…そんな筈が無い…

呆然と頭に浮かぶ否定の言葉を塗りつぶすような光景を、あたしの…あたし達の眼は既に見ていた。

倒れていくヴォルテールの前に浮かぶ、小さな人影。ゆっくりとあたし達を振り返ったその背中に、一瞬白い翼が見えた気がした。

白い…墮天使…

誰がつけた呼称なのか知らないが、ピッタリだ。

透明なはずの魔力光の残滓か、異名から見てしまった幻覚なのか知らないが、本当にあるはずのない翼が見えたのだ。

むしろゆっくりとした速度で近づいてくるリライブ。細かな所まで見えるようになってきたあたしは、さっきまで必死で否定していた考えが事実だった事を知る。

天使は無傷だった。炎に吞まれたはずなのに煤けてすらいなかった。

「正直驚いたよ。さっきヴォルテールを倒したのは私の本気、アレを見せたのは敬意だと思ってくれていいよ。本当に凄かった。」

笑みを浮かべて言うリライブに、あたしは悟ってしまった。

どう足掻いても今のあたし達では届かないと。

本来なら絶望するはずの事実が、何故だかストーンと胸に落ちたように受け入れられた。

これはきつと、本当に天使と人間位の差があっってしまうから。

例えば、野生動物に身体能力で勝てないことを恥じる人がいない様に。

例えば、生身でヘリヤ車と競争しようとする人間がいない様に。

そんな差の相手から、悪意も何もない綺麗な笑みで褒められたのだ。

抵抗と言う言葉が虚しくなったあたしの手から勝手に力が抜けてい

つて…

「ギア…エクセリオン!!!!!!」

スバルの叫びが、クロスミラージユを取り落としそうにすらなっていたあたしの手には僅かに力を取り戻させた。

「…まだ…戦える。まだ走れるよね…マツハキャリバー。」

「はい、相棒。」

並んで立っていたスバルが一步進み出る。

「あたし達はいつだって！諦める事なんて教わってない！！」

スバルは一つの気後れも無い魂の叫びと共に構える。

そんなスバルの様子を見たりライヴは、小さく笑った。

「なるほど、君がこのメンバーにとっての『なのは役』なんだね。」

「へ？」

唐突な彼女のコメントにスバルは意味が分からないのか妙な声を漏らす。

けどあたしは、何となく彼女の言いたい事が分かってしまった。

皆に力や希望を与え、中核となるような存在。

強さだけならなのはさんも副隊長達やフェイトさんと大差は無いし、部隊の長は八神部隊長だ。そう言うのとは違う『何か』。

なのはさんはそれを持っている。そして、スバルも。

あたしはいつの間にか力を取り戻し、自然体のまま構えていた。手もなく魔力も殆ど使い果たしたって言うのに、自棄でもなく戦える気がしてくる。

エリオとキャラも同様らしく、戦闘態勢を自然に取っている。

「過去形にしてごめん、君たちは凄いチームだね。さあ…続けよう。」

リライヴが告げると同時に、スバルが真っ先に飛び出す。

「デイバイン…バスター!!!!」

突撃から一気に最大の一撃を放つスバルに続いて、あたし達はそれぞれに飛び出した。

S i d e 〽 リライヴ

意外にも強かった物で放置も出来ず、全員叩きのめしてしまった私は、立っているビルの壁に背を預けて軽く息を吐いた。

『しかし、マスターの絶望を誘う嫌味も通じませんでしたね。』
「は？」

イノセントの妙なコメントに首を傾げる。

『…マスター、4人がかりで全力で来た相手を、敵が無傷で褒め称える何て真似をしておいてその自覚が無い…とか？』
「え？いやだつて…あ…」

無傷とか妙な事を言うイノセントに自分の服装を見直すと、確かに見た目は無傷だった。

炎の奔流自体はプロテクションで防がなきゃ耐えられない勢いで、一面展開のプロテクションだけだと、周囲の熱と下から上ってくる炎が防げないのでフィールド防御も使う必要があった。
その両方を全力展開した後、バーストモードでヴォルテールに接近、放出魔力による強制動作を使った瞬間三連斬撃なんて真似をした。

つまる所、魔力も体力もかなり消費させられたのだ。だから本当素直に驚いたんだけど…

『デバイスに心境の忠告をされる人間と言うのはどうかと思うんで

すが。』

「う…」

『無駄に戦闘を長引かせない為に戦意を削ぐ目的でワザとやっているものかとはかり思っていたのですが…無自覚とは恐ろしい。』

イノセントからつつくように放たれる言葉責めに、私は胸と額を抑えて俯く。

自分でやると決めて、その結果もちゃんと覚悟していることについてはこんな事無いけど、やる気もなく悪い事してたとなると良心が痛い。

何が良心だ、犯罪者だろ。と言われればそれまでだけど…意図しているかして無いかは、戦争で敵を殺すのと、ドッキリ目的で仕掛けた悪戯のシヨックで心臓麻痺起こされて死なせる位には意味が違ってくる。

しかも、当の四人はもう昏倒させちゃってるから謝ろうにも謝れないし…

「それにしても、やけに絡んでくるね？」

言葉通り、普段よりも絡んでくるイノセントに疑問を抱く。

戦闘中…でも無いけど、一区切りついた程度の状況でこんなに饒舌なのも珍しい。

『私は貴女のデバイスですから。』

ただ一言、それだけ返してそれ以上を語らなくなったイノセント。

…本当、デバイスなのか疑いたくなるな。
虫の知らせか何か知らないけど、こんな別れ際にやり残しを片付けるような事をしだすなんて。

こんな所で捕まる気は無いんだけどね。

「やれやれ…局の魔導師も六課のメンバーもガジェットその他と交戦して消耗してる訳だし、まだ切り札も使ってない。妙な心配しなくたって大丈夫だよ。」

いらぬ心配だと告げて、空に舞い上がる。
新しく結界に入った魔導師がこっちに向かって来るのを感じたから、近づいてくる人影を正面で見られるように浮かぶ。

…捕まってあげるつもりは無い。

改めて意思を固めた私は、手にしたイノセントから魔力刃を展開した。

S I D E O U T

第三十四話・ストライカーズ（後書き）

前回は綺麗さっぱり片付いて後は脱出だけで大団円：ではなかった回でした。

手加減付きでやられちゃってますが…AAA三人相手に出来る娘な
んで、褒めたげてください（苦笑）

某自由様のように心を抉る台詞になつてることに気付かなかつたり
ライヴですが、『鍛えてるけど弱い時代』とかを経験してないと悪
気無くてもこうなっちゃうかと（汗）

彼女の場合、初戦から『敗北⇨捕縛OR死亡』の状況ばかりなの
で。

一二話投降します。

第三十五話・誓い抱く騎士

第三十五話・誓い抱く騎士

S i d e 〱 ゼスト

かつて、俺と俺の部隊を全滅させた戦闘機人事件。

俺の目的は、その事件の指示が、友であるレジアスのものによるのか問いただす事、そしてかつて語り合った正義が今どうなっているのかを確認する事だった。

融合していた騎士を破って、目的であったレジアスの元に辿りついた私を待っていた真実は、俺の勘違いという虚しい物だった。

どうにか引き離れたかった施設を勝手に嗅ぎつけ突撃した俺たちを、防衛名目で戦闘機人達が迎撃したに過ぎず、レジアスはすべてが終わった後でその結果を知らされたようだ。

スカリエッティのようなものとまで繋がってあくまでも力や地位を求めてきたのは、かつて語り合った時のように「登り詰めようとし

た結果』だと言う。

レジラスは言い分けは一切語らず謝っていたが、後悔の念とかつてのレジラスを感じた俺は、ただの勘違いだと納得する事が出来た。

何と愚かな事だ。守らねばならぬ地上の騒乱に関わってまで出した問いの結果がただの勘違いとは。

そして既に手遅れ。スカリエッティとの繋がりも暴かれた今、葉を煽ってまで築き上げた今の権力もレジラスはもう持つ事は叶わず、死者である俺の身体ももう長くは無い。

足止めを引き受けてくれていたアギト共にやってきた先に戦った騎士は、元々話を聞くのが目的だと特に止める事もなく全てを語らせてくれた。

全てを語った後、レジラスは天を仰ぎ力なく笑う。

「守ればいい…全くその通りだ。それだけのはずだったのだ。」

「そしてこの一件がその結果…と言う事ですね。」

レジラスの力ない呟きが続くように、唐突に入り口から聞こえて来た声に俺達は振り返る。

入り口には、上下とも黒で統一された服という、明らかな異装の騎士がいた。

S i d e 〱 レジラス〱 ゲイズ

「恭也…何故ここに？」

「済まないシグナム、レジアス中將に少し用事があったな。」

突然現れた黒い服の剣士は、話の途中からいた機動六課の騎士と知り合いのようだった。

どう見ても局員では無いようだが…

「罪状が確定した彼に用事も何もない。それに不法侵入だぞ？悪いが同行して貰う事に…」

騎士の話に割って入るように開かれた通信音。

八神はやての声で届けられた指令は、『機動六課』での白い墮天使、リライヴの逮捕と言う指令だった。

急務となる指令を受けた騎士は、ゼストに視線を移す。

「同行願います。」

ゼストとの話も、儂の地位もコレで終わり。

真相を語った今同行すべきは儂も同じと席を立とうとして…

ゼストが騎士から視線を外し、儂を真っ直ぐに見た。

「レジアス。俺の最期の戦い、せめて今一度お前と語り合った正義の為に使いたい。俺は…どうすればいい？」

「っ！？」

こんな俺を前に槍を翳して告げるゼスト。

やつれた身体、死んだ筈なのに今ここにいる不釣り合いな現状、間違
いなく無理がある。

ゼストが言うように、もう戦えるのは残り僅かなのだろう。

地上を…ミッドを守って欲しい。

素直にそう言えば、ゼストは残っているガジェットへと向かうだろ
う。
だから…

「地上を…次元世界を混乱させ続ける次元犯罪者、白い墮天使リラ
イヴの逮捕に協力してやってくれ。」

「…それでいいのか？」

「ああ、頼む…」

机に張り付くほど下げた顔から、久しく覚えのなかった涙が流れて
いる。

儂が死なせたと言っても過言では無い友が、それでも尚、その最期
の戦いを儂の為にと言ってくれた。大の男だが、涙するには十分す
ぎるほどだった。

曇っていた霧が晴れたような気分だったせいか、八神はやてが白い
墮天使を自分の部隊だけで引き受けた理由も他の部隊をガジェット
の対処に回す為と察しが着いた。

であれば、戦力に乏しいのは間違いなく白い墮天使を相手にする機
動六課の方だ。

以前なら手柄の独り占めとでも疑っていたらろうに…
守ればいい…全くその通りだ。

だが、そう易々と襲撃者の起用など騎士がするはずも無いと、顔を上げて頼み込む為に騎士に視線を移す。

「闇の書事件の最後、私も戦わせて頂きました。無粋な真似はしません。」
「っ……………」

危険要素と嘲った闇の書の騎士の許しが胸に刺さる。
無言で頭を下げ、再び顔を上げたときには既にゼストもあの騎士もいなくなっていた。
ゼストの傍にいた融合機も共について行ったらしく、残っているのは儂とオーリスと…

「それで…今の儂に用とは何だ？」

恭也と呼ばれた、黒服の剣士だけだった。

S i d e 〱 ゼスト

「…礼を言う、シグナム。」

「本当ありがとな、旦那の願いを聞いてくれて。」

最期の戦いの場をくれた騎士、シグナムと並走しながら礼を告げる。アギトも礼を言うが、つくづく融合機の鏡のようなその答えに同時に罪悪感を覚える。

俺の願いの為に力を借り、借りた力すら生かしきってやれない。その上…

「出来るなら…その礼はこの一件が終わった後に聞かせていただきたいのですが。」

シグナムの告げた言葉を実現するだけの余命もなく、アギトとルーテシアを残して朽ちる事になるから。

「だ、旦那！そこで黙らないでくれよ！」

答えを返さなかった事で、これが『最後』ではなく『最期』だと察したのか、アギトが不安を払拭するかのように声を荒げる。

「大丈夫だつて！アタシがきっちり力になるからリライヴ一人位旦那の限界まで戦わなくたって」

「アギト、その事だが…今回は融合はいい。」

俺の言葉を聞いたアギトが硬直する。

融合相性の事もあるが、今はそれだけでは無い。

「俺の力で…アイツと交わした約束を成したい。私欲に過ぎんが…

頼む。」

つくづく融合機泣かせな話だと承知した上で告げた言葉に、少し悲しそうに表情を歪めたアギトは、静かに頷いてくれた。

結界に突入して色が変わる。

その中心地から、少し懐かしい強大な魔力を感じた。

「シグナム。」

「何でしょう?」

戦いになる前に伝えるべき事を伝えなければならない。

「アギトを頼む。死人の俺にはロードは務まらなかった。」

「そんな事ねえよ! 旦那は…旦那はっ!」

必死で訴えかけてくるアギトの声に答える間も無く、浮かびあがっているリライヴと交戦距離まで来る。

「3人とも、久しぶりだね。」

気負いもなく告げたりリライヴは、相変わらぬ涼しい笑みと共に俺たちを見ていた。

S i d e } リライヴ

ここでオーバーS級二人とか正直やってられないと愚痴でも言いたい気分だ。

しかも元から体調が危険なゼストはともかく、シグナムは殆ど消耗して無いようだし。

「大人しく同行してくれる気は無いか？」

「お断り。」

笑顔で返すと、シグナムは静かに構えた。ゼストは既にその槍を私に向けている。

「何だよ…何でだよリライヴ！」

そんな中、アギトが一人叫ぶ。

こう訴えかけてくる人を逐一突っぱねるのは少しだけ悲しい。さっさと割り切って戦ってくれるシグナムみたいな人の方が私にとっては楽だ。

「ずっと独りで戦って…そんなに管理局が憎いのかよ！」

アギトの訴えに対して首を横に振って否定する。

上の全部が全部悪かったり、本当に存在が許せないなら私は真っ先に管理局を潰しにかかっている。

「ただ：同じになりたくないだけ。黙つても誰かがやってくれるならいいんだけど：局にしたがつて大人しくしてたら、望み自体が法に触れる人はどんな理由があつても救われないからね。」

私の答えを聞いたアギトが目を伏せ、代わりにシグナムが口を開く。

「それが：闇の書事件の折に蒐集に付き合つてくれた理由か？」

「まあね。はやての為じゃなくて幻滅した？」

答えはなくカートリッジをロードするシグナム。

レヴァンティンから上がった炎が答えなのだと思い…

「幻滅はしないが：覚悟は決まった。10年の歳月を経ても不変の信念など、誰が崩せる訳もあるまい。」

思い違いだつたと知らされ、私は笑みを漏らした。

信念か：古代ベルカの生き証人にそこまで上等な言葉を用意して貰えたのはちょっと嬉しいかな。

直後、私とシグナムは互いに加速し、斬り結んだ。

透明の魔力刃と炎を纏ったシグナムの剣が競り合う。
レヴァンティンが壊せない…さすがに威力も落ちてくるか。

「さすがに消耗しているようだな。」

「あの子達強かったからね。」

競り合いから剣を流し、開いた胴に膝蹴りを叩き込む。

くの字に曲がったシグナムの後頭部を掴んだ私は、そのまま適当に放った。

こっちは魔法なしの業に関してもやる必要があったからね。出力で互角でもそうそう…

「はあっ!！」

「ってちよ…くっ!！」

シグナムが離れたのを見計らってか、間髪いれずに吹っ飛んでくるゼスト。

何か狙おうにも間に合わず、突進からの渾身の一撃をまともに受け止める事に…

止まらなかった。

思いつきり吹き飛ばされながらもどうにかデバイスの刃そのものは受けずに済んだ私は、吹き飛んだ先で態勢を整える。

フルドライブ…死ぬ気なのゼスト？

確かに活動限界を引き伸ばそうにも限度があるけど…少し悲しい。

「こつちだりライヴ！受ける…轟炎！！」

えらい大技の名前に視線を移せば、太陽かと思う程の巨大火球が投げられる所だった。

本来ユニゾン中に二人分の魔力と制御で放つ魔法のはずだけど…ああもう！皆して無茶苦茶する！！

「スパイラルバスター！！」

あの手の球体は大抵、雪達磨のように核に外がつく形で制御する。だから、ど真ん中に穴を開ければ、穴がそのままになるか…

爆発四散する。

結構出鱈目なサイズだった火球は、大爆発と共に炎の雨に変わった。雨のように降り注ぐ火の粉に軽く腕で顔を隠す。

無視するには少し熱く、防御魔法を使うのは少しもつたいない火の雨の中…

「火の粉全部無視して突っ込んでくるとか、烈火の将とは言ってもやりすぎでしょ!?!」

「貴様相手に…過ぎた手などない!!!」

言葉通り、シグナムが炎を無視して燃え盛る剣を手に突っ込んだ。た。

ええい…こんなものいつまでも戦ってられるほど魔力に余裕は無いって言うのに。

何度か切り結んだ後距離を取ると、またもカートリッジをロードするシグナム。

シュランゲフォームか…炎の雨が残ってるけど丁度いいな。

複雑怪奇な軌道の長い連結刃。その軌道から絡まりそうなほど近づいてる部分もある。

「イノセント、フリーズボム。」

プットアウトされた爆弾を連結刃の中心に向かって放り投げる。

爆発と共に、瞬く間に周囲を冷気が満たした。

絶対零度の薬品を散布する科学装備の一つ。分解されて蠢いていた連結刃は、瞬く間に凍り付いて動かなくなる。

爆発範囲を見誤ったせいでシグナム本人も幾らか凍ってるのはちょっと悪かったけど…

「さて、それじゃ退場してもらおうか！」

「がっ…」

チャンスはチャンスなので動かなくなった連結刃を元の形態に戻している間に斬り付けた。

まともに入った魔力ダメージによって落ちていくシグナム。

周囲の温度が下がったお陰で炎の雨が消えて、ゼストが一気に迫ってくる。

「まともを受けてられるかっ！！」

下手すると重さと威力でヴィータすら上回りかねないゼストのフルドライブを受け流して、通り過ぎた所に砲撃を…

「させるか！ブレネンクリューガー！！」

放つ前に、アギトから火炎弾が放たれる。

直射のそれを剣で適当に払い、返す刃でソニックセイバーを放った。

遠当て魔力刃を直撃したアギトが落ちていくのを横目に、戻ってきたゼストと向かい合う。

見た所、もう長持ちしないな…あんな身体でフルドライブなんて自殺行為だ。

「…どうしても続けるの？」

「ああ…友との最期の約束だ。」

「そっか。」

答えを聞いた私は、納得するしかなかった。

そんなものをゼストのような騎士が裏切る筈が無い。

一か八かにはなるけど魔力ダメージで無力化するしかないか。健康体の人間と違ってそれすら危ないけど…

「お前こそ…もういいのではないか？」

「え？」

ゼストから会話を持ちかけられるとは思ってもなかった私は、その意外な内容に首を傾げる。

「独りで戦っていては、いつの間にか道を外れている事にも気付けない。お前に友は」

「いないよ。それに、結果を求める人ならともかく、在り方に外れも何も無いよ。」

「…そうか。」

珍しく語りかけるゼストの言葉が終わる前に断ち切る。
外れ云々の話をするなら初めから正道なんて外れているんだ、悪いけど止まるつもりは無い。

「ならば…これで終わりにさせてもらおう。」

構え直すゼスト。

私も剣を両手で握って向き合う。
互いに加速、私の魔力刃とゼストの槍がぶつかって…

「はあああああつ！！！！」

「っ…バーストモード！！！！」

さっき吹き飛ばされた時よりも重いゼストの一撃に、私はバーストモードを使い、全身に纏った魔力をブースターのように放出して漸くゼストと競り合う。

こんなに強かったのか彼は。

殆ど加減も出来ずに全力を込め…

私の展開する魔力刃が砕け散った。

ゼストの槍は私に当たる事無く振りぬかれ、私も勢いに流され態勢を崩す。

だが、展開中の魔力刃が破壊され短剣となったイノセントでどうにか出来る相手じゃない。

まずい…やられる…っ！

崩した態勢をどうにか整えようとして…

「え…」

柔らかく接触した感触に、呆けたような声を漏らしてしまった。ゆっくりと私の体を滑り落ちていく何かを慌ててつかみ、引き寄せ

る。

私が掴んだのは、槍を振りぬいた態勢のまま、握った槍も放さず事切れていたゼストだった。

…強い訳だ、文字通り自分の全てをかけた一撃だったんだから。

力を失ったデバイスが、光に包まれて待機状態に戻っていくのを眺めていた私の周囲に、緑色のバインドが展開される。左手でゼストをしっかり掴んで、魔力刃を失い短剣になったイノセントでバインドが閉じる前に切裂く。

「さすがリライブね…奇襲のつもりだったんだけど…」

「シャルと…ザフィーラか。」

声の方向に視線を移せば、シャルとザフィーラが並んで浮かんでいた。

「…逃げないから、せめて彼の遺体を安置させて…ううん、静かな所まで運んであげてくれないかな？」

「この状況でそんな事を…」

ゼストを放置するのが嫌で言うては見たが、睨まれてしまった。

逮捕に来てる二人がそんな事出来る筈も無い。
第一寝てるだけなら今も先に倒した六課前線の子達やシグナムたち
だって…

『私達からも頼む。』

唐突に届く念話。直後、私の目の前に炎が広がる。

「シグナム…」

収まった炎の中から現れたのは、炎の翼を纏い軽装になったシグナムだった。

S i d e } シグナム

どうにか意識を取り戻し立ち上がった私が見たものは、落ちてくるアギトの姿だった。受け止めに入ろうとして、剣を手にしていた右腕が凍り付いている事に気付く。

…腕が碎けなかっただけでも幸いか。

どうにかレヴァンティンも碎ける前にシュベルトフォームに戻す事は出来たが、手からは離れそうも無い。仕方なく空いている左手で受け止め、軽く揺する。

「う…」

「気が付いたか？」

アギトはゆっくりと身を起こす。魔力ダメージとは言えあのリライヴの攻撃を受けたのだ、この小さな身では厳しいだろう。だが、アギトは懸命に体を起こす。

「旦那の援護を…っ…」

余程ゼストの事が心配のようだ。貴方の気持ちも分からんでも無いが…ロード失格などこの絆を前に誰も思いはしない。後を引き受けて飛び立とうとした所で、念話が届く。

『すまない、俺に説得は無理だった。』

「っ…旦那!？」

こんな念話を飛ばす意味が分からず、嫌な予感がして…

直後、ゼストの魔力が信じられないほどに跳ね上がった。

量ではなく、出力。

あんな念話を送ったのは、この出力でアームドデバイス本体の一撃が通ればリライヴが間違いなく死ぬからだと悟った。

それは燃え尽きる前の蠟燭にも似ていて…彼の槍がリライヴの刃を砕いた瞬間、その灯が消えた。

「…旦那…っ!!」

硬く拳を握り俯くアギト。私はその身をゆっくりと降ろす。

「…後は私が引き受ける。アギト、お前は休んでいてくれ。」
「っ…待てよ!!」

飛び立つ前、アギトの叫びが私を止める。

戦いたい気も分かるが、これ以上は無茶だ。リライヴが非殺傷を切らないと言ってもまた空戦の高度で気絶させられては無事ではない。

「アンタだって同じだろシグナム…その腕でどうやって戦つ気だよ。」

アギトは私とその身を案じて止めた事を察しているのか、前置きもなく私の腕を差す。

確かに満足に力を振るえないかも知れないが、だからと言って…

「それでも休めねえんだろ？だから…アタシがアンタの力になってやる。」

ゆっくりと私の目線まで浮かび上がってきたアギトは、その小さな手を差し出す。

私は無言でその手を取る。言葉はいらなかった。

こうして、アギトとのユニゾンを果たしてリライヴと相対した私は、リライヴからゼストの遺体を受け取り、ザフィーラに預ける。

「シグナム、その姿は…」

「すぐに終わらせる。彼を…頼む。」

「承知した。」

不安を隠さないシャマルに断言する。

六課防衛の際に負った怪我を押して出てきた二人が、リライヴ相手に何処まで出来るものでも無いだろうし、何より返り討ちにされたときに落下の衝撃で重傷を負いかねない。

それに、負ける気がしなかった。

凍らされた腕はアギトの炎に包まれ融合した時に元に戻っていたし、何よりアギトとの融合はリインとの融合と違い、暖かく…何かの内から湧いてくるような感覚すらある。

察したザフィーラが、ゆっくりと離れていく。シャマルも不安そうにしたままではあったがザフィーラについていってくれた。

『旦那の戦いを馬鹿にするような愚痴は言わねえ…』

アギトから何かを押さえ込むような声が発せられ…

『けど！最期までアンタを止めようとして叶わなかった旦那のためにも！アンタは絶対…あたし達がぶっ飛ばす！！！！』

抑え切れなかったのだろうアギトの叫びと共に、レヴァンティンを猛る炎が包み込んだ。

私は静かに燃え盛る剣を構える。

「ただの逮捕より好きな理由だ。だけど…」

表情を変えずに告げつつ、リライヴはデバイスから魔力刃を再形成する。

「私だって倒れるつもりは…ない。」

再形成した剣を構えるリライヴ。

さて…始めるか。

「アギト、行くぞ。」

『おう！シグナム！！喰らえ…轟炎！！』

「何？」

アギト共に作り出す巨大な炎の塊。

斬り結ぶと思つたのか驚くりライヴを無視して、生成した炎の塊を放つ。

炎熱変換持ちの私と二人掛りでの生成と言う事もあり、生成も射出もアギト一人で撃つた先より早く、巨大な火炎球がリライヴの姿を覆い隠す。

「はあああつ！！！！」

高速移動で回避したらしいリライヴが、側面から飛来する。

接近してきたリライヴを迎え撃つ形で切り結んだ私は、確信を得た。

「もう限界のようだな。」

「っ…誰がつ！！」

競り合いを続ける中、アギトとの融合で増した力は勿論の事、リライヴから感じられる力が弱い。

高速移動であるサイズの球体を回避して回った所で、長距離発動する類の魔法ではない以上死角までは届かない。リライヴほどの技量

ならば僅かとは言え、停止時に隙が出来る魔法を死角を取る事も出来ないのに使う理由など、相殺を行う余裕が無い位だ。

多人数で一人に畳みかかった結果と思えばこれ以上を続けるのは剣士として苦痛ではあるが…

「先にアギトが告げた通りだ。」

カートリッジをロードし、『足に炎を纏い』蹴りを放つ。
同じく足でそれを止めようとしたリライヴだったが、止めきれずに吹き飛ばされる。

「お前は…私達が止める。」

左手に炎が巻き起こる。

『「剣閃烈火！」』

型を成さぬ、何処までも伸びる炎の剣。
アギトと同調し猛るその剣を全力で振りかぶり…

『「火龍…一閃!!!」』

リライヴ目掛けて全力で振りぬく。
態勢を整えたリライヴの姿を、辺り一面を薙ぎ払う空間爆炎が飲み込んだ。

S i d e ー リライヴ

吹き飛ばされて突っ込んだビルの中、私はよろけつつも立ち上がる。
融合機の力はその相性次第では倍からそれ以上にすらなる可能性を

秘めてる。

魔力光から変換資質まで一緒の古代ベル力騎士と真正の融合機。現代でここまで相性がいい組み合わせなんて無いって言って過言じゃない。

オーバースのなのは達と互角のシグナムの数倍って…笑えないなあ。

全快ならともかく、この状態じゃ間違いなくやられる。今の魔力じやさっきの空間爆撃を数発撃たれたら回避も防御もろくに出来ないまま倒れるしかなくなるだろう。

こっちを補足したらしいシグナムが一気に飛んでくる。

「しょうがない…切り札使うよ。」

『了解しました。』

宣言すると同時、覚悟はしていたらしいイノセントがそれを取り出す。

ジュエルシード。単体出力ですら次元震を発生させる、私がなのは

達と出会った初めての事件の遺産であり、あの件の時どさくさにまぎれて拾っておいた切り札。

短剣形態のイノセントの柄の上、十字の交差部分に当たる場所にそのジュエルシードをセットする。

願うのは『無制限の魔力』。

とてつもなく願いの制御が難しい代物だから無敵とか不死身とか妙な事は出来ないけど、消費した魔力を常に全回復させる程度は問題ない。

『マスター…身体への負荷が軽くなる訳ではないので、留意してください。』

「分かってる…ロックはしておいてね。」

『はい。』

わざわざイノセントにはめ込む形で行使するのは、戦闘中に他の事を思って発動中のジュエルシードに勘違いをされるのを避けるため、願いがジュエルシードに届かないようイノセントに止めてもらう為。

これで、一度発動すれば発動したそのまま揺らぐ事がなくなる。

「我願うは無限の魔力…」

魔法の詠唱と違って意味はなく、願いを固定する為のただの言霊。けど、自己暗示にもなるそれは願いの方向性を整えるのに有効で…

ジュエルシードが輝くと同時、私の魔力が一気に満たされた。

S I D E O U T

第三十五話・誓い抱く騎士（後書き）

融合機の下りが本当だとアギトE.N.シングナム強すぎじゃないかと。
なのに出番が（以下略）

そしてリライヴはゲージ無限のチートを導入（笑）
いくら彼女でも素で六課含む他局員全部隊がいるここは抜けられま
せん。

第三十六話・其は全てを包む風のように

第三十六話・其は全てを包む風のように

S i d e 〱 高町なのは

「はあ…く、くそ…」
「ヴィータちゃん…」

ヴィヴィオを助けてから殆ど完全と言ってもいいほど魔力が結合しなくなつたゆりかごの中、私を助けに来てくれたヴィータちゃんとはやてちゃんとリイン。

けど、私もはやてちゃんもヴィータちゃんに比べれば消耗は酷く無いのに、ガジェットと魔法なしで戦うような技術を持っていないからヴィータちゃんが先導して全部と戦っていた。

目の前で身体を引きずりながら戦うヴィータちゃんを見ていることしか出来ないのが情けなかつたけど、外に出たらリライヴちゃんの相手が残ってる上、そもそも魔法が無い私はどうする事も出来なかつた。

出口に繋がる通路に、わらわらとガジェットが姿を見せる。

「…大丈夫だ…ぜってえ皆はあたしが守る。」

ひび割れたグラーファイゼンを構えなおすヴィータちゃん。
いたたまれなくなってヴィヴィオを抱える手に力が籠って…

直後、傍のガジェットの出撃口が爆発した。

「だあああつ…いくら雑魚相手でもこれは無い、絶対無いって。」

爆発した出撃口を煙が満たす中、煙の中からよく知った声が聞こえて来た。

「お、お兄ちゃん!？」

「速人君か!？」

「おう!風纏う英雄、高町速人だぜ!」

私とはやてちゃんが歓喜の声を漏らす中、相も変わらず戦闘中とは思えない、いつも通りの声で煙の中から現れた速人お兄ちゃんは、背負っていた人を降ろす。

降ろされたのは、散々人をイラつかせてくれたクアット口だった。

一人一人背負った状態でこんな所を通って来たのか…つくづく凄すぎる。

「んーっ…やつと楽になった。お？何だ、やっぱまだ通路はガジェット結構いるな。」

「お願いです速人さん！魔力結合も効かない中でヴィータちゃん一人で戦ってたんです！助けてください！！」

「は…あたしがこの程度でどうにかなるわけねえだろ。」

リインがお兄ちゃんに泣きつく中、さっきまでと違い軽い声をもらすヴィータちゃん。

なんだかんだでヴィータちゃんもお兄ちゃんのこと信用してくれているんだと感じて少し嬉しくなる。

「あ…速人おじさん…」

「やっぱりそうなるのな…まあ訂正しないけどさ。なのはのお兄様な訳だし。」

呟くヴィヴィオの頭を軽く撫でると、向かって来るガジェットに相対するように前に出るお兄ちゃん。

「ヴィータ、休んでていいぞ。寝る子は育つし。」

「よし、ガジェットのついでにおめえもぶっ壊す。」

「ま、それはともかく…俺が先行する。壊し損ねたら後を頼む。」

気軽に言ってヴィータちゃんを通り過ぎてガジェットに向かったお

兄ちゃんは…

唐突にその姿を消した。

続いて断続的にガジェットの爆発音が響き渡った。

結構な数を数秒で沈黙させたお兄ちゃんは、何事もなかったかのように戻ってくる。

「お、お前…ここまで戦闘機人背負って来たんじゃない？」

「コレって一日の限界まで使つとフルマラソン目じゃないくらいに消耗激しいんだよ。兄さん達よりも持続時間には自身ある俺は、体力もそれだけあるぞ。」

呆けるヴィータちゃんを余所に笑って言うてのけるお兄ちゃん。その後何かに気付いたように表情を変える。

「あのさ、気持ちは分かるけど誰か抱えてやってくれない？」

「あ…」

呆れた様子でお兄ちゃんが指差した先には、降ろされたクアットロ

がそのまま放置されていた。
割と本気で流していた私とはやてちゃんが揃って声を上げた。

S i d e ｼﾞｸﾞﾅﾑ

ビル内からの反応は、ロストログアの発動を示す反応だった。
嫌な予感に従い、向かっていたビルから距離を取る。

少しの間を置いてビルから出てきたリライヴは、完全に魔力を取り戻しているようだった。

「…ロストログアまで使うか。」
「まあね。私って犯罪者な訳だし…」

力を取り戻した魔力刃を展開したデバイスを真っ直ぐに突きつけてくるリライヴ。

「そういう縛りで見捨てないように戦ってるんだ。力に取り付かれる気は無いけど、必要なら使うよ。」
「ならば…その力ごと上回るまでだ！」

レヴァンティンを構えなおす私に向かって、左の掌を突き出すリライヴ。

まずい…魔力が回復すると言う事は…

「ストレートバスター・ファイフス!!!」

五本の極大砲撃が、五つの指先から放たれた。どうにか射線上を外れた私は、リライブに向かって飛び立つ。

予想通り、先の魔力が無い状態と違って放出系を撃ちたい放題に撃てる。

さすがにそれでは距離を取られると不利が過ぎる為、全力で接近する。剣を打ち合わせると、先程までとは比べ物にならない衝撃が響き渡る。

「やっぱり全快でも壊れないか!さすがだね!」

「騎士の一撃を…甘く見るな!!!」

後退を無視して全力で剣を競り合わせ…

アギトが発生させた火炎弾が、周囲からリライブに殺到した。

直撃した火炎弾の爆発に巻き込まれないよう僅かに後退する。

効果分からないが、ロストログアは以前発動したまま。
魔力の無限回復なのだとすれば長引かせただけ私が不利になる。

「一気に決める、もう一度頼む。」
『ああ!』

内にいるアギトに声をかけると、即座に力が満ちる。
左手に形成された炎剣を…

『「火龍一閃!!」』

一閃。

火炎弾の爆煙が晴れない内に追撃で放った空間攻撃がその周囲を焼き払う。

直後、火炎の中を突っ切るようにリライヴが姿を見せた。

本来透明なはずのリライヴの魔力が白くすら見える状態で、魔力光に包まれている。

バーストモードか！！

「紫電一閃！！」

「っのお！！」

光と炎を纏った剣が激突し、巻き起こった爆発と衝撃で私は吹き飛ばされた。

「く…っ…」

「はぁ…はぁっ…」

同じく吹き飛ばされていたらしいリライブと、また若干の距離が開く。

当のリライブは、肩で息をしながら此方を見据えていた。

私とアギトも魔力の消耗が激しいが、リライブの方も体力まで無制限とはいかないらしい。

自身の持つ以上の魔力を扱う負担は、なのはを見ていればよく分かる。

周囲の魔力を取り込む集束砲は単体でそれを体現する方法で、その負荷は彼女を再起不能にしかけた。

魔力が回復した所で、体が持つかは話が別だ。

「全く…冗談キツイよ。魔力全開のバーストモードで振るった一撃

と相殺するなんて。魔法の特性をのぞいたら対一戦では管理局最強なんじゃない？」

「自分を除いたらとでも言いたげだな。自慢か？」

管理局最強と言っ言い方に引っかけりを感じた為聞き返すと、リライヴは首を横に振った。

「いざとなったら管理局『そのもの』とすらやりあう事を視野に入れてたから。思い上がりは承知だけど、一人だとそれもありえる話だし。ただ…一人で戦ってるのは自慢にならないからね。」

僅かに寂しげに呟くりライヴ。

本当に、何処までも説得など届かないだろう。一人きりで戦う事が『想定範囲』になっている。

ある意味戦乱の時代よりも重い。戦乱の最中で孤立したとしても味方の軍はどこかにいたのだから。

「長引いたらこっちもまずいし…これで終わりにさせて貰う。」

透明ゆえ感知しづらいが、無数の魔力弾が展開される。

シューティングスターか。ならば…

飛竜一閃にて貫く。

全てを掻き消すことは不可能。放たれた射撃を貫通させる心積もりで、剣を鞘に収めて構える。

「スパイラルバスター！！」

「っ！飛竜一閃！！」

だが、リライヴの左手から放たれたのは、予想外に砲撃だった。展開した魔力弾は制御を放棄した為か消えてしまう。

魔力が無制限だからと言ってアレだけの大規模魔法をフェイントに使うか！出鱈目な！！

恐れ入る程の発想に感心している間に、高速移動で距離を詰めたりライヴが剣の間合いにいる。

飛竜一閃はレヴァンティンをシュランゲフォームにして放つ技。連続刃となったレヴァンティンはまだ戻っておらず…

「っらあああっ！！！！」

バーストモードで振り下ろされた一閃を鞘で受けたが、鞘ごと切断されて意識を失った。

S i d e ーリライヴ

全身から発せられる痛みを堪えつつ、意識を失って落ちていくシグナムに浮遊魔法をかけ、ゆっくりと適当なビルに降ろす。

どうにかなった…フェイントに使うっただけなら時の庭園時代にフエイトに見せてるからひよっとすると見抜かれるかもしれないと思っただけど…

「っ…はあ…」

魔力が回復するとは言え、こつも放出、回復を繰り返しているとりんカーコアそのものも心配になって来る。

しかも、内への反動は無視したバーストモードでの急制動の連発は、内臓や脳を揺らして痛めていた。

…ま、しょうがないけどね。さっきシグナムに言った通り、一人で一組織相手に立ち回ろっつて言うなら。

いつの間に入って来ていたのか知れない局員の集団を感知した私は、

周囲を見渡す。

そりゃ、ロストロギアまで使って六課だけに任せるって訳にも行かないか。

四方八方にいる局員。結界が消えてない所を見ると、結界に接近するガジェットを止めるのに人員がそれほど必要ないと言う事でもある。もう外も結構静かになってるんだろう。

さっさと脱出したいけど…次元転移は結界出たらじゃないといけないし、ガジェットより湧いてくるこの集団を見てると溜息吐きたくなる。

「広域次元犯罪、ロストロギアの違法使用などにより逮」

迂闊に近づいてきて口上を述べる局員に不可視のシューターを叩き込む。

気絶して落ちていく彼から視線を外し、人数が少なそうな場所を探す。

『非殺傷にはしてあげるけど、他は保障できない。落下とかで死んでも責任は取れないからね!!!』

全員に届ける為あえて念話で宣言した私は、気持ち人数の少なそう

な場所に向かって突っ込んだ。

S I D E O U T

ガジェットを片付けながら出口へと向かう。

…強がって神速なんか使って見せるんじゃないかな？結構やばいかもしれない。
しかも外でアイツがジュエルシードなんて物使っていると、俺も入らないと拙いだろう。

今のなのはとフェイトにとっての全ての始まり。

はやては話で知ってるだけだが、発動を感知したなのはは思い出も相まって悲しそうに表情を歪めていた。

「お、出口だな。」

出口を確認できる所まで来て、ヴィータが膝をつく。
神速が乱発できないと悟るなりすぐに戦闘に混じって来たからな…
さすがにもつきついだろう。

「その体調じゃリライブの相手は無理や。ヴィヴィオとクアットロを頼めるか？」

「ごめんはやて…」

「大丈夫やって。ヴィータが頑張って駆動炉破壊してくれたからヴィヴィオも助けられてゆりかごも止めれたんや。」

結構微笑ましい話をしている二人だが、ゆつくりとはいっても上昇中の船にいつまでもいるのは拙い。

「さっさと行こうぜ！宇宙まで運ばれるのはごめんだぞ！」

「ああごめん！」

話していたヴィータとはやてに声をかけて出口に向かい…順次飛び降りる。

一応俺も飛行は出来るけど、飛ぶほうは全然やって無いので正直魔力消費ほか色々と効率が悪い。

と言う訳で、なのはに背中から抱きついた。

「ちよ、ちよつと！」

「まあまあ。中で戦闘しっぱなしでちよつと疲れたし、下りだからそんなに大変じゃないだろ？」

「だからって他の局員の人も！ああもう…」

結局諦めたのはは振りほどいたりせず運んでくれる。

結構な高さまで来てたらしく寒くて空気が薄い。

下を見ればかなり大規模な結界が展開されていた。降下してくるまばらなガジェットを迎撃しているが…その人数が少ない。

「た、高町一尉、お疲れ様です。」

男が親しげに抱きついてるエースオブエースという異常な状態に表情を歪めつつも、きっちり挨拶する局員。

「後ろのは気にしないで下さい。リライブはどうなってます？」

「はい。ロストログアの発動を感知したため他の部隊も放置は出来ず、現在幾つかの部隊が結界内部に突入しています。」

ゆりかご内部は今魔力リンクが完全キャンセルされる状態だ、念話で報告しようにも届かなかったか。

「ですが、手も足も出ないと予測される為、高町一尉達がおられる此方に誘導する事になりました。フェイト執務官もスカリエツィアジトの崩落を止めた為現在此方に……」

「来たみたいだぞ、ホラあれ。」

向かっていると言おうとしたのだろう局員の言葉に割り込む形になつてしまったが、尋常じゃないスピードで向かって来る黄金色の光を指差して告げる。

「お待たせなのは。外の状況は私も把握しています。貴方は引き続き散らばるガジェットの対応を。」

「はっ！」

フェイトの言葉に、礼儀正しい敬礼の後去っていく局員の男。

しかし、手も足も出ないと予測されるって……AAやAAAくらいならたまにいるはずなんだけども……ジュエルシードを制御してるのは間違いないだろうが、一体何やったらそんな馬鹿な差になるんだ？

「お待たせ。ヴィータはヴァイス君に預けてきたよ。」

『リインははやてちゃんの制御を手伝うですよ！』

リインとユニゾンしてきたらしいはやてが合流する。

出力負けはしないだろうが…はやて単体で行っても絶対撃たせてくれないよな。

結界に近づいたところでのなのは背中から降りて空中に着地する。

「とりあえず中に行くぞ、本当に他の局員が相手にならないとすると百単位で病院送りにされてる」

「っあああああああっ！…！」

かもしれない。とつなぐ前に轟音と共に結界が破壊され、中から飛び出してきた淡い光を帯びたリライヴが咆哮をあげる。

リライヴは振り返った後左手を背後から追ってくる局員の集団に向け…

「ストレートバスター・ファイブ！ワイドバースト！！」

五本の指から砲撃を扇形に放った。

一応部隊で連携しているらしい局員が、纏めて砲撃に飲み込まれて魔力爆発で昏倒させられる。

リライヴの通ってきたらしい道の下を見れば、ビルの色が変わって

いるのが分かるほどの数の人影が倒れていた。
赤が目立っていないところを見ると、こんな状況でもまだ非殺傷らしい。徹底してる奴だ。

「最初の子供は4人で戦って見せたよ！局員の大人がこれだけいて尻込みか！！」

リライヴの叫び通り、一応追っていたらしい局員達だが、目に見えて引けていた。

…そりゃ引くって、一撃で数十人落ちてるし。

むしろ蜘蛛の子を散らすように退散しないだけ勇気があると思う。
映画なんかで巨大怪人と戦わされてる戦車と違ってこんな気分なんだろうな…

しかも、結界破った一撃はバーストモードで振るっただろう事やその前から戦い通しなのも考えると、魔力の常時回復とかそんな願いなんだろう。雑兵には荷が重すぎる。

『考えがある。俺が前に出るから皆は散ってくれ。』

これ以上放置も出来ない。

なのは達の返事は待たずに俺はリライヴに近づいた。

「よ、派手にやってるな。二の次を片付けに来たぞ。」
「っ…ここで速人が、全く参るね。けどなのは達と一緒にじゃなくていいの？」

話しかける前に気付いたリライブは、俺の挨拶に苦い表情をする。

「まあな。お前こそ俺と話してていいのか？この配置、見覚えあるだろ。」

「配置？っ！」

不思議そうな声を漏らしたリライブが、当のなのは達が何処にいるのか気付く。

上方三方から囲むような位置でフルドライブで魔法準備中。
つまる所、トリプルブレイカー。

ジュエルシードの封印とリライブの無力化を同時にやらないと、リ

ライブを殺すか体力が切れるまで戦い続ける破目になりかねない為、防御しようが何しようがそれが出来るだけの一撃となると一人分では足りない。だから三人でと言う単純な答え。だが、なのは最大威力に傾倒し、はやても出力が高すぎる為簡単に打てず、フェイトは二人より基本威力が低いから増幅工程を踏まなきゃならない為、準備には20秒近くかかるらしい。会話で時間を稼いだのはその為で、気付いたリライブは既に近接戦が出来ないはやてに狙いをつけている。

神速。

リライブの移動前にその眼前に一気につめ、ナギハを一閃。まともに防げないリライブは全方位防御を展開する。

けど、このままだと防御を解除すると同時に高速移動に入られる可能性がある。

その準備が終わる前に二刀を構え、『雷徹』を放つ。
いくらリライヴの防御が硬かろうが、貫通系の斬撃二つを重ねた刃
を全方位防御で止めきれぬ筈も無い。

防御を斬り裂かれたリライヴの表情が変わる。その前に既に追撃の
態勢に入っている俺の剣は、フィールド防御越しにリライヴを斬り
付ける。

後退しようと背中を少し傾けるのが見えた瞬間背後に回りこみ、そ
の道を塞ぐ。

移動しようとする度先に回りこんで動きを止める事を優先している
が、見えてる世界が緩やかで時間が分からない。

非殺傷だから俺ごと撃って構わないとは言っている。撃たれるまで
何とか神速をもたせ

バチン。

何かのはじけるような感覚と共に視界が点滅した。

S i d e } リライヴ

数秒位人外の動きを持続した速人だったけど、唐突に声にならない声を上げて額を抑える。

何が起こったのかはわからないが…

速人が戦えないなら転移魔法を使う余裕は十分にありそうだ。

イノセントを杖の形態に変形させ、転移魔法の準備を開始する。

巻き添えを避ける為に下がったほかの局員に援護は出来ない、これで…

刹那、緑色のバインドが私を拘束した。

このタイミングでバインド！？こんなものバーストモードで一気に
…切れない！？
馬鹿な！？こんな強度のバインドがシャマルに使える訳…

『これだけを鍛えたんだ、悪いけど絶対に破らせないよ！』

届いた念話は、完全に予想外のものだった。
…ユーノ〓スクライア…っ！！

S i d e } ユーノ〓スクライア

リライヴと交戦する事になったと聞いた僕は、すぐにこの場に転移した。

今の今まで一人で地上に隠れて何もせずにしたけど、漸く役に立つ事が出来る。

とは言っても所詮バインド。どの状況で使おうかと思っていた所で、速人から念話が届いた。

『俺が止まったら後は任せる。』

たったそれだけ。しかも僕を対象を絞った念話。
僕がここに来ていると知ってた訳でも無いのに、見透かされてたみたいだ。

なのはの傷を知ったあの撃墜事故からずっと、なのはの支えになる為に作り上げたアブソリュートバインド。

無限書庫から封印拘束減衰衰弱、構成解析防御なんかの資料を調べに調べて空いた時間を使って試行錯誤を繰り返して作り上げた、ただのバインド。
砲撃特化のなのは力になる為に、放てば全てを打ち貫くなのはの砲撃を撃つ為の時間を稼ぐ為に、僕はこの一つだけを鍛える事を選んだ。

構成解析による解除なんてさせないほど途方も無い式で構成され、魔力攻撃による切断を避けるためにAMFとは違う分解式を搭載したり、力任せに引きちぎられないように僕が常時魔力を送って強化できるようにしたり…ただ一回、砲撃の時間を稼ぐ為だけに作り上げたバインド。

それでも…全力のライヴの前に少しずつ解けて行くのを感じる。

「決めたんだ…必ず支えになるって…破らせるもんかっ!!」

どれだけの時間が断ったのかも分からないまま、ついにバインドが破られる様な感触が届き…

三色の強大な光の柱が、リライヴを中心に弾けて視界を光が覆いつくした。

S i d e 〉 高町なのは

「スターライト」

「プラズマザンバー」

「ラグナロク」

「『ブレイカー！！！！！！！！！』」

ブラスターも最大の3、カートリッジも残り全弾ロード。ありったけの力を込めて、この最後の1撃を放つ。

速人お兄ちゃんが限界近い身体を押しして更に駄目押しで使った強化、ユーノ君の魔力値であのライヴちゃんを封じるだけのバインドを開発する、想像もつかない努力と時間。

その全てが、この一撃の為に使われたんだ。絶対に届かないなんてあつてたまるもんか！！

涙で歪む視界を、三種の光が着弾した魔力爆発が覆いつくした。

光が収まっていく中、降りる…と言うよりはむしろ高度を維持できなくなるように、ゆっくりと降りてライヴちゃんに近づく。

ジュエルシードの反応は収まって、封印は確実に出来たはずだ。後は…

「っ…う…」
「っ!？」

魔力の残滓の中で杖状に変化したデバイスを握っているリライヴちやんが、ゆっくりと顔を上げた。

トドメの一撃を撃つ所か、もう本当に浮いていることすら危うい私。レイジングハートも負荷でボロボロだった。

駄目だ…意識が断ててないと、どれだけ魔力が削れててもジュエルシードを再発動されて回復される。

分かっていたけど、魔力弾の一つも放てずに杖を構えなおすリライヴちやんを眺めているしかできず…

風が…吹いた。

S i d e 〱 リライヴ

一度、完全に意識を分断された。

正直魔力なんて何で浮けてるか分からない程度しか残ってない。

でも…起きるだけなら生きていれば出来た。

奴隷の時に使われた、強制的に意識を引き起こすシステム。

無間地獄を味わい続けることになるその機能は、思い出したくもない事を思い出すから昔はイノセントに搭載する気はなかったのだけど、速人の過去を知って覚悟を決めた。

使える手を全て使うと言うのなら、たかが自分のトラウマ一つや二つ、使えなくてどうするぞ。

だから、スカリエッティのアジトで刺された時も起きる事が出来た。

後はジュエルシードを発動して魔力を回復すれば…

「っ!？」

二刀を納めた速人が、私の元へ向かってきていた。

俯いた速人には、意識があるのかどうかも分からない。さつき突然止まった状況を考えれば、意識もなく来ている可能性すらある。

迫ってくる速人の攻撃を凌いでからじゃないと、ジュエルシードは発動できない。

杖のまま変化させる事も出来ないイノセントを手に、覚醒させた意識を集中する。

生身だけの修行もちゃんとした、聖十字位なら凌ぎ切ってみせる!!

初撃で防御を逸らされないよう最大限に警戒する。

先と違って見える、それでも速い速度で駆けて来る速人のリズムを感じる。

右、左、右、左、右…

左！

左逆手で放たれる剣閃を見切ってタイミングを合わせて杖で受け…

速人の一撃は、右手で握った左腰の刀だった。

逆手じゃ…ない？

呆けたのは一瞬。

左手によって放たれた一閃が、イノセントを破壊する。

宙を舞う青いジュエルシードを眺めながら終わりを感じ…

「雑旋。」

眩きと共に放たれた何処か優しい斬撃が、撫でるように体を通り過ぎた。

S I D E O U T

ジュエルシードはリライヴのデバイスから外れ、駄目押しの一撃。急所は外したとはいえ、魔力も尽きた今もう戦えないはずだ。

終わった。

落ちていくリライヴの姿にそれを感じ…

落ちて？

「リライヴちゃん…レストリ…ぐっ…!?」

魔法を使って落下するリライブを止めようとしたらしいのはから
も妙な声が聞こえ、その身体を傾けていく。

魔力の限界。

むしろ今浮けている事が不思議なのは、なのはだって同じだったん
だ。

他の面子だって全力を出し切って動けないはず。

真下のリライブと少し離れた位置にいるのは。

二人は…拾えない。

身体を冷たいものが駆け、現実を見ると叫ぶ。

「くっ！」

下に向かって跳躍して、リライヴを抱える。

その間にも加速していくのはに視線を移した俺は…

「誰が！選ぶかあああっ！……！」

左足一本で急停止した。

数階分飛び降りるに等しい衝撃を、緩和させる事もなく受けた足から嫌な音がする。

が、それも無視して右足に足場を展開した俺は…

『神風』を使った。

一瞬でいい、跳躍一回分使えばそれでいい。アレはそれだけの規格外だ。

右足に全力を込め、一気になのはとの距離が縮まるのを感じた瞬間…

頭に電流が走り視界が消えた。

まだ早い！意識は失うな！

感覚だけは残る身体に全力で意識を奮い立たせ、左手をなのはが落とすはずの位置に伸ばす。

腕にぶつかった、慣れ親しんだ感触をしっかりと掴んだ俺は…

自分の体が落ちていくのを感じて、ここからどうするのかと言っ点に至る。

何が出来るかもわからない状態でただ両腕に抱えた重さを手放さないようにしっかりと力を込め…

『毎回だけど、僕の存在忘れすぎだよね速人。』

何処か苦笑のような誰かの声と共に柔らかい感触に体が弾む。どうやら無事に済んだらしい。それを自覚した瞬間、意識がプツリと途切れた。

第三十六話・其は全てを包む風のように（後書き）

この作品の半分は、ユーノのいいところ取りで（以下略）

と言う訳で、これで最終戦終了です！

残るは…後片付け？

今日は二話投降じゃないです。後、次は土曜になるかも…

アブソリユートバインド

なのはの力になる「最大砲撃の時間稼ぎ」と言う事でそれだけの為に開発したバインド。仕事以外はこれの開発に費やした為、ユーノの魔力値でもリライブをpushさえ込める物となっている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3059k/>

なのは+ 『風纏うヒーロー（志望）』

2011年12月19日00時51分発行